人理を守れ、エミヤさん！
ロンドベル

暁〜小説投稿サイト〜 By 肥前のポチ
http://www.akatsuki-novels.com/
このPDFファイルは「暁〜小説投稿〜」で掲載中の小説を「暁〜小説投稿〜」のシス템に自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作曲者または著作権者による許可なく、引用の範囲を超越した形で転載、改変、再配布、販売することは一概に禁止します。
小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人理を守れ、エミヤさん！

【作者名】
ロンドベル

【あらすじ】
特殊な聖杯戦争でセイバーを突破し、衛宮士郎(病)が、カルデアで人理を救うため闘うお話。
成し遂げたぜ士郎くん！

『シロウ』

黄金に煌めく朝焼けを背に、淡い微笑みを湛えた少女が愛おしげ

に少年の名を呼ばれた。名を呼ばれた少年は、胸中に押し寄せた様々な感慨に声を詰まらせてしまい、何も言えずにその貴重な幻想を見詰めていた。少年のその顔を見てると、少女の脳裏に万の言葉が満ちていく。それがなんだか恥ずかしく、同時に誇らしくもあった。語り尽くせぬほどの想いがある。それは自分が彼のことを、何よりも大切に思っているという証だろうか。だけどもう時間がない。複雑怪奇な、因縁と因果が絡んだ三度の聖杯戦争。彼の今後を考えれば伝えねばならないはずで。しかし精神を病んでいる彼の耳と心には、何を言っても伝わらない。

だから、少女はたったひとつの言葉に全てを込めた。

駆け抜けてきた生涯の中でも最も愛した少年に、少女はその言葉だけを遺した。

『貴方を、愛しています』

「——シロウ」
朝陽が昇る。ふと少年が気づくと、少女の姿はもうどこにも見当たらなかった。自分と彼女の間にあった繋がりも綺麗さっぱり消え去ってしまっている。

それはつまり、全てが終わったということ。

土蔵に少女――騎士王アルトリア・ペンドラゴンを召喚してから始まった全てが、十年前の大火災から始まった悪夢のような日々が、文字通り、血を吐きながら積み上げてきた魔術と武道の研鑽の日々。

少年――衛宮士郎は、万感の思いを込めて、たった一言だけ呟いた。

「―成し遂げたぜ」

―成し遂げたぜ
ある日、気がついたら衛宮士郎になっていた。

こう聞くと余りに馬鹿馬鹿しく、絵空事じみて聞こえるが、事実として俺は、ある時全くの他人に成り代わっていたのである。

ネット小説などのサブカルチャーでよく見られる、憑依だか転生だかの不可思議極まる不思議現象。それを自身が体験することになったとはいえただったのだ。

なんで俺がこんな目にかかる。俺が憑依したせいでも元の衛宮士郎がいないでしまった。とか、自身の不幸を嘆くやら、とかもかくにも俺は他の何かに手をつけることが出来ないので余裕をなくしていた。

しかし、時間とは残酷なもので。

衛宮切嗣に引き取られ穏やかなるも忙しない日々を通る内に、
俺はいつしか現実を受け入れてしまった。何をともあれ、泣いても喚いても何が変わるかもしれない。なぜ俺は俺らしく生きていくしかあるまい。と、悪くも絶えず切れたのである。

何しろ俺は衛宮士郎である。ちょっとした油断や間違いなんかであっさり死んじゃいそな。命が軽い系の筆頭格なんだ。

その俺が、のほんと過ごしていいのか。少なくとも今の俺は、日本に数える普通の青少年などでは断じてない。この身に特大の異果のロジックから察するに、衛宮士郎が平穏な日々を送ることはずまた不可能と云っても過言ではないだろう。

何しろ俺は衛宮士郎である。ちょっとした油断や間違いなんかであっさり死んじゃいそな。命が軽い系の筆頭格なんだ。

異界の存在を見抜かれたら、一発でホルマリンでぶっ飛ばす標本コース一直線である。そんなの嫌だ。と子供みたいに僕が嘆き言ってもどうしろよ、それは別としても、衛宮士郎は衛宮切嗣の養子であるからして。

切嗣の負の遺産で、どうしようもない。人間の悪意に際限はないのだ。

それか、神父と、聖杯な姉とか。

どうかをしてしめなくても、いずれ俺はなにかの魔術を、つまらない、何かをしてしめないけど。いずれ俺はなにかの魔術を。
俺は死にたくなかった。

俺が憑依したせいで、起源や魔術属性が衛宮士郎本来のものと掛け離れたものになっているかもしれないという不安があったが、どうしようもない。結局俺が出来たことと言えば、知識にある流れを順守して、如何に無難且つ無事に生き延びられるか思案することだけだった。

俺が衛宮士郎というガワだからだろうか。魔術の鍛錬をしていた。

俺は普通に剣術に特化した投影使いを目指そうとした。しかし、なんとかか、魔術の鍛錬の時には奇妙な感じがした。

つまり俺という人格とは別に、魔術を行使するためだけの別人格が存在しているようなのだ。
俺が剣を投射しよう、何か別のものを解析、強化してみようと試みる。俺が具象的なイメージを持っていないから、その刃物を
投射元のオリジナルに込められた理念などへの共感、経験の微細な
どが行えたのである。まるで俺とは別に、本当の衛宮士郎が存在して、
強化をしてみようとした時に、俺が具象的なイメージを持っていなかった
吐き気がしたが、便利だったのは間違いない。最初こそ俺の中の
影杖（と便宜上呼称する）は練度が低く、原作冒頭の衛宮士郎レベ
ルだったが、俺が彼の到達点であるアーチャーのエミヤを知ってい
て、衛宮士郎の異能的な投影魔術の概要を知っていたためか、めき
と魔術の位階を上げていた。

不論、俺がやれば一発でミスし、死んでしまっていただろうが、
無理。俺がやれば一発でミスし、死んでしまっていただろうが、
俺が魔術を履行しているわけでは
はない以上ミスの恐れはほとんどなかった。それほどまでに、俺は
投影杖を信用、あるいは過去していたのだ。
軽率だったと後から思ったが、まあ実際に魔法回路の強度を高めることには成功したと思う。それに、何故かは知らないが、自殺紛いの魔法鍛練を積んだ結果、本来の衛宮士郎同様の凄まじい集中力を得ることができた。副次的にあの驚異的な百発百中の弓の腕を得ることも出来た。そうすれば俺はこの先生ときのこれるのか。どうすれば、どうすれば
どうすれば俺は魔法の鍛練に平行して体を鍛えつつ、あることを考えていた。

俺は衛宮士郎が生き残るための道筋を知ってているし、忘れないように記録もしている。投影杖のおかけか副作用か、他者の物真似は得意だっ
不可能ではない、と俺は判断し、実際にブラウニーのように活動して、衛宮士郎という壊れた生き方を実践できたと思う。
それとはどんでもなく、苦痛だった。演じる内に、それが本当の生き方なのか問題だ。

だが、結果として俺は間桐兄妹と仲良くなり、桜と親密になり、
慎二と決裂し、誰にも見抜かれることがなく正義の味方に憧れる少年
を投影できた。

そして、運命の夜。俺は赤い弓兵と、青い槍兵の戦いを目撃し、心臓を破壊され、遠坂に助けられ、帰り道でイリヤスフィールと出会い、槍兵の襲撃を受けで土蔵に逃げ込み、そこで騎士王を召喚した。

それはどんでもなく、苦痛だった。演じる内に、それが本当の生き方なのか問題だ。
ったものじゃない。

― 確実に適合する ―

最も難易度が低いのが、セイバーのルートだったと思う。

無論、だからといって簡単に済むはずがなく、網渡りの連続どこ

でもなかったが、それでも俺は完璧にやり遂げることが出来た。

その過程でセイバーと懇ろな関係になるという役得もあったが、ま

あ多少はそういうご褒美があっても許されるはずだ。

最強決戦を終え、セイバーが消えた瞬間。

そうして、紆余曲折を経て、俺は原作通りにことを終えることが

出来た。

俺、絶頂した。

俺は、絶頂した。ぶっちゃけ射精した。

十年単位の一大事業を成し遂げ、俺は途方もない多幸感

に包まれ脱力してしまったものである。

それから俺は、衛宮士郎を演じるのをすっぱりやめた。

俺はやり遂げたのだ。全ての地雷を回避して、地雷になりそうな
の桜を撤去完了し、もう俺が俺を偽る必要性は消えたのである。

「偽る必要性は消えている」と言っても長年のツケが回ってきたためか、無意識の内に衛宮士郎のようなマシンを演じている自覚がないために重荷だと思うこともなく。俺は何事もなく高校を卒業し、半ば飛び出るようにして冬木から旅立った。

『―そうしなければならない気がした―』

『かつつ後の後悔をやり直しているような後ろめたさが付き纏った』

『かつてはお天道に顔向けできないことをしているわけではないが。』

正直なんでこんなことをしているのか分からなかったが、別にお天道様に顔向けできないことをしているわけではないわけではない。

俺は真っ当に生きているという自負があった。
術や弓、剣を用いた戦いの鍛錬は怠らず、世界を回っていきつく外道な魔術師を打ち倒し、死徒やらなやるの裏の抗争に巻き込まれたが、まあ後悔はない。俺は自分が大好きだから、誰かを救うために世界と契約し守護者になるようなことともなく。俺は俺の人生を生きた。

そんざいある日のことだ。元にあらる女性が訪ねてきた。女性はオルガマリー・アニムスフィアと名乗り。「衛宮士郎。冬木の第五次聖杯戦争の勝者である貴方は、私のカルデアのマスター補にスカウトにきたの」そう言っって、俺につつってない衝撃を齎した。
逃げたら死ぬぞ土郎くん！

それは西暦2015年のこと。

人類の営みを永遠に存在させるため、秘密裏に設立された「人理継続保護機関フィニス・カルデア」にて恐るべき研究結果が証明された。

「2016年、人類は絶滅する」

決定して認められないことだ。霊長を自認する人類にとっては、その滅びはあってはならないことであった。原因を調査する内、魔術サイドが作り上げた近未来観測レンズ・シバは過去である西暦2004年の冬に観測不能の領域のあるものを見発見する。

有りえない事象にカルデアの者達は、これが人類史上狂い絶滅に至る理由と仮定。テスト段階ではあるものの、理論上は実行可能レベルになった霊子転移による時間遡行を敢行。その目的は2004年に行われた聖杯戦争に介入し、狂った歴史を正すことである。

--

それ西暦2015年のこと。

人類の営みを永遠に存在させるため、秘密裏に設立された「人理継続保護機関フィニス・カルデア」にて恐るべき研究結果が証明された。

「2016年、人類は絶滅する」

決定して認められないことだ。霊長を自認する人類にとっては、その滅びはあってはならないことであった。原因を調査する内、魔術サイドが作り上げた近未来観測レンズ・シバは過去である西暦2004年の冬に観測不能の領域のあるものを見発見する。

有りえない事象にカルデアの者達は、これが人類史上狂い絶滅に至る理由と仮定。テスト段階ではあるものの、理論上は実行可能レベルになった霊子転移による時間遡行を敢行。その目的は2004年に行われた聖杯戦争に介入し、狂った歴史を正すことである。

--

それ西暦2015年のこと。

人類の営みを永遠に存在させるため、秘密裏に設立された「人理継続保護機関フィニス・カルデア」にて恐るべき研究結果が証明された。

「2016年、人類は絶滅する」

決定して認められないことだ。霊長を自認する人類にとっては、その滅びはあってはならないことであった。原因を調査する内、魔術サイドが作り上げた近未来観測レンズ・シバは過去である西暦2004年の冬に観測不能の領域のあるものを見発見する。

有りえない事象にカルデアの者達は、これが人類史上狂い絶滅に至る理由と仮定。テスト段階ではあるものの、理論上は実行可能レベルになった霊子転移による時間遡行を敢行。その目的は2004年に行われた聖杯戦争に介入し、狂った歴史を正すことである。

--
残念ながら、現在28歳であるこの俺、衛宮士郎はカルデアに関することをほぼ忘れていました。それは、俺が「衛宮士郎」だからである。

俺の記憶が確かなら、2004年に行われた聖杯戦争でカルデアの前所長、即ちオルガマリー・アニメスフィアの父親が勝者となり、聖杯は彼の手に渡っていたはずだ。それに、第四次聖杯戦争以前に行われた聖杯戦争は無く、必然冬木の大火災は発生せず、●●士郎は衛宮切嗣に拾われずにいたため、木の大聖杯も生まれていなかったはずなのだ。

だから俺は、俺が「衛宮士郎」である時点で、ここがカルデアの世界ではないと断定し、カルデアの存在を綺麗さっぱり忘却し、記録自体取っていなかった。

『衛宮士郎』がいるということは、第四次聖杯戦争はあって、冬木の大火災もあったということ。そして第五次聖杯戦争はこの俺が勝者となっているし、そもそも聖杯自体破壊した。まったく聖杯は顕現するかもしれないが、それは切嗣が生前に大聖杯へ施した仕掛けによってあり得ないものになったと俺は考えている。

…まあ、あの虫の翁が何かをしたらいあり得るかもしれないと思うが、それはさておきこの時点でカルデア自体の存在が矛盾したものだと気づけるだろう。
マリーが俺をスカウトに来た。

…に、カルデアが実在し、そのマスター候補としてオルガ

「カルデアは、オルガマリーの父が聖杯を勝ち取り、恐らく

有り得ない、とは一概に断定出来ない。平行世界は無限に存在す

りがいるのがそういう世界だと考えることもできる。

だがしかし、冬木の大聖杯の基になったのは、アインツベルンの

冬の聖女である。聖杯の術式も、それを見た英雄王が「神域の天才」

と評したほどの完成度を誇る。そんなものが、他にもあったとは流

石に考え辛いが、さてーー
「ちょっと、聞いてるのかしら？ 衛宮士郎」

「言わせめ道は俺と中ま路に入り掛けていた思考をリセットしておく。今し包絡が解けていたとき、俺は思考を一旦打ち切った。袋小路を流石に伊吹の隣、発生した小突を始めたわい。とな、そんなことを突然言われても普通は事態を把握できないし、俺自身もカルデアの詳細な情報など遥か忘却の彼方だから、彼女から話を聞いておくのは大切なことだと思う。

俺は現在、ロンドンの喫茶店にいた。流石にイギリス、紅茶だけは旨い。

英霊エミヤとは違い、特に懸念以外からは恨まれていないし、外道な魔術師を独自に仕留めても、その研究結果自体は俺の保身のたために計画塔に二束三文で売り払ったりしているため、魔法協会に目をつければいたりしていない。固有結界持ちであることも今のところは隠しきれているし、平気な顔でロンドンに居座っていてもなんら困るものはなかった。

時々坂倉凛を見掛けることはあっても、特に隠悪にはならないし、小言を言われるぐらいだ。彼女も人生充実しているようだが少し何よりである。そんな具合なものだから、ロンドンを彷徨していた俺が、あっさ
俺は努めて冷静に銀髪の女--オルガマリーに対して切り返した。

「…ああ、もちろん聞いている。お前達が何者で、何を目的とし、なんのために俺に接触を図ってきたのか。聞き落としてきたいんでも」言いつつ、俺は対面に座すオルガマリーと、その両脇を固めるようにに立っている男、レフ・ライノールとロマニ・アーキマンと名乗った男たちを見据えた。

ちなみに、衛宮士郎を演じなくなった俺の口調は、激動時のような英霊エミヤに似ている。だからとうしたという話だが、俺はエミヤに影響を受けているわけではないという自意識を持っていなかった。俺は日本人離れした高身長を持っていたし、筋骨隆々としている体に相応しい体重もある。華奢な女性と向き合っていると、どのように見下ろす形になってしまうのだろうが、威圧感を与えてしまいなكر audits心配である。

ちから、とオルガマリーの両脇に立つ男達を見る。レフという男は、緑の外套に緑のシルクハットという、何か拘り物語でどんな役柄を演じていたのか覚えていないが、彼がカルデアを舞台とするようなものを感じさせる格好だった。彼がカルデアを舞台とするような視線を感じる。値踏みをするような目だ。が、魔術師とは基本的にそんな輩ばかり。余り気にすることほどでもない。
一方のロマニ・アーキマンは、なんというか線が細く芯も脆そ
な、しかし意外と頼りなそうな印象がある優男だった。
俺の探るような目に何を思ったのか、レフとロマニは曖昧に表情
を緩めた。何も言わないところを察すると、この場ではオルガマリ
を立てて黙っているらしい。しかすると、俺に対する騒乱の役
割でもあるのかもしれない。
まあ十中八九、ただの連れ添いだろうが。
時計塔のロードの一端にあるアラミスフィアに、魔術協会の藤元
のロンドンで危険を加えるほど俺もパカじゃない。というより理由
がない。彼らから視線を切り、改めてオルガマリーに向き直る。
「何が分からないの？」
「だからこそ、よく分からないな。
紅茶を口に含み、たっぷり話を呟き、素振りを見せながら言って
た。」
「ミス遠坂のことね」
「ああ」
た。俺の交友関係については調査済みだろう。プロとしてそれは当然のことである。

「今、俺たちはまだ俺がロンドンに来ていたから良かったものの、そうでもなかったらお前達が俺に接触することはずっしりしたはずだ。なぜ遠坂でなく、俺を選んだ？こう言ってはあれだが、遠坂の方が簡単なことよ。貴方を見つけたのは偶然で、私が直々に声をかけたのも偶然近くにあるのがわかったから。別に貴方を特別視して困い込みに来たわけじゃないの。「」

「俺は少し意外に思った。彼女は俺に強い価値があるわけではなかったから、そのようなのが近場にいたから声をかけるくらいはしておこう……。」

「俺の言うことは決して貴重な情報ではない。殊更に重要視しているわけではないと言え、こちらが大きな度を選ぶ前に調査してきたのだ。」

「つまり俺に声をかけたのは、たまたま使い勝手の良さそうなのが近場にいたから声をかけるぐらいしてしまうだけだ。そんな程度に考えてのことだったのか。」

「俺は少し意外に思った。彼女は俺に強い価値があるわけではなかったから、そのようなのが近場にいたから声をかけるぐらいはしておこう……。」

「今回はたまたま俺がロンドンに来ていたから良かったものの、そうでもなかったらお前達が俺に接触することはずっしりしたはずだ。なぜ遠坂でなく、俺を選んだ？こう言ってはあれだが、遠坂の方が簡単なことよ。貴方を見つけたのは偶然で、私が直々に声をかけたのも偶然近くにあるのがわかったから。別に貴方を特別視して困い込みに来たわけじゃないの。「」

「俺たちはまだ俺がロンドンに来ていたから良かったものの、そうでもなかったらお前達が俺に接触することはずっしりしたはずだ。なぜ遠坂でなく、俺を選んだ？こう言ってはあれだが、遠坂の方が簡単なことよ。貴方を見つ的形式もし、俺のいうことは決して貴重な情報ではない。殊更に重要視しているわけではないと言え、こちらが大きな度を選ぶ前に調査してきたのだ。」

「つまり俺に声をかけたのは、たまたま使い勝手の良さそうなのが近場にいたから声をかけるぐらいはしておこう……。」

「俺は少し意外に思った。彼女は俺に強い価値があるわけではなかったから、そのようなのが近場にいたから声をかけるぐらいはしておこう……。」
それと、ミス遠坂をなぜ召集しなかったのかは、言うまでもなく貴方なら分かるはずよね。
だからだろう。
「...分からなくては。遠坂がロード・エルメロイⅡ世の教え子だからだらだら集めるのだから、時計塔内の政治力学的に言うと余り間違ってはない。要は、正確にはエルメロイの派閥に属している、という形が重要なのだ。頭は回るようね。その通りよ。アニメスフィアであるこの私が、遠坂がエルメロイのところを魔術師に弱味を見せるわけにはいかないわ。だからミス遠坂に話すことはない。貴方もくれぐれもこの話を言わせたくないようになる。一応、機密事項なんだから。」
「...」
いに乗りろう。「条件はあるが」
「あら、聖杯戦争の覇者の協力が得られるのは有りがたいことだ
ど、無理なことを言われても頼けないわよ。」

「分っている」

「あら、聖杯戦争の覇者の協力が得られるのは有りがたいことだ
う。──条文はあろうが」

「あら、聖杯戦争の覇者の協力が得られるのは有りがたいことだ
う。──条文はあろうが」

大戦のない、無償で協力しないことである。

人間心理は難しいもので、ことが重要であろうほど何か対
価を支われならばならない。特に深い繋がりがあるわけでもない相手は、
そうした対価を支払うことで相手を信頼。信頼していくのである。

もし最初から見返らも求めずにいたなら、間違いなく不気味がられ、
信頼されることなくいずれ淘汰されていく羽目になる。俺としては
それは避けたかった。なぜ俺は死にたくないのだ。

死にたくないなら、カルデアで人理を守護するしかないからだ。

そう。死にたくないのである。
まず一つ。俺がカルデアに所属し、そちらの指揮系統に服従する代わりに、これが終わればアニメスフィアに俺の活動の援助をしてもらう。

目の前女の無法を嫌い、間人間を嫌う神経の細い有能な女である。

単刀直入な物言いを許容する度量はあるだろうから、すっかり要求め告げるべきだ。

「まず一つ。俺がカルデアに所属し、そちらの指揮系統に服従する代わりに、これが終わればアニメスフィアに俺の活動の援助をしてもらう。」

「貴方の活躍って…慈善事業のことかしら…ああ。そろそろ単独で動くのに限界を感じていたな。俺がロンドンに来たのは、パトロンになってくれる人間を探すためだったんだ。…世界中の、飢え苦しむ人達のために起業して、食料品を取り扱う仕事をしたいと考えている。」

「…つまり、資金の提供ね？それにに関しては、カルデアでの貴方の働き次第。全面協力をこの場で約束することは何意味ないわ。」

「当然だ。それで構わない。」

「二つ目が…いいかな？　二つ目だが…いいかな？」

言いつつ、ざっと思考を走らせる。目の前の女は無法を嫌い、話の速い人間を嫌う神経の細い有能な女である。
「ええ。言うだけ言ってみなさい。前向きに検討するぐらいはしてあげる。」

「今後は名前で呼び合おう。これから力を合わせていくんだ。貴女のような美しい人と親密になりたいと思うのは、男として当然のことだろう？」

洒落っけを見せてながらそう言うと、ロマニは苦笑し、オルガマリーは「なっ」と言葉にのまった。

「しろこもういった明け透けな言葉には弱かったらしい。

やはりこういった明け透けな言葉には有りがちな弱点を見つけて、オルガマリーの手を取って、オルガマリーの手を取って。

友好の証の握手だと言い張ると、オルガマリーは微妙に赤面しつつ応じてくれた。

そうして、俺のカルデア入りが決定したのである。」
普通に死にかける士郎くん！英霊エミヤ。

それは衛宮士郎の能力を完成させ、正義の味方として理想を体現した錬鐵の英雄。

英霊エミヤ。

それが衛宮士郎である俺が、戦闘能力の面で目指すべき到達点の一つであり——同時に決して至ってはならない破滅地点でもあった。

冬木から飛び出して以来、必死に戦い続けたエミヤ。同時期に冬木から出て海外を回ってはいるものの、慈善事業の手は間で鍛錬している俺。戦えばどちらに軍配が上がるかは明らかだった。

無論俺と同様の実戦を積み上げ、固有結界の展開も短時間ならば、無論俺とたかくの実戦を積み上げ、固有結界の展開も短時間ならば、可能性になった。戦える程度もエミヤに劣るものではないはずだし、狙撃の腕はエミヤほどではないがそれなりのものだという自負がある。

それに、俺は戦闘にばかりかまけていたわけではない。世界を見
渡しても高名な料理人とメル友だし、料理の腕はエミヤに並んでいるのではないか。こうなって、料理人とメル友だし、料理の腕はエミヤに並んでいる。

三国志で例えるなら黄忠がエミヤで、俺が夏候淵といったところだろう。一騎討ちなどでは夏候淵は黄忠に負けず、それ以外は夏候淵の方が上手なのと同じである。

戦闘経験という面でも、守護者として戦い続け戦闘記録を蓄積し続けているエミヤに敵わないが、それでも耐え凌げるまでは持っていかれるはずである。

— そんなことを考えつつ、俺は眼前的サーヴァント擬きを陽剣で干将で斬り伏せ、戦闘シュレーションをクリアした。

『...凄いな』

『...凄いな』
「よ」と言っていた。

投射した陽剣・干将を解除はせず、あらかじめ投射していた陰剣・莫耶と同じように革の鞘に納めて背中に背負う。俺の投影は異端のそれ、下手に宝具の投影など見せようものなら即座に封印指定されてしまうだろう。それゆえに、俺は干将と莫耶だけは投影したものを解除したりはせず、常に礼装だと言い張って持ち歩いていた。そう言っておけば、みだりに解析などさせずに済む。礼装は、いわば魔術師にとってはの切り札のようなもの。それを解析させることもは言えないはずだ。

額に滲んだ汗を拭い、乱れた呼気を整えつつ、一応は残心を示し、まるで実戦をこわすのだろうか。

「この程度、さほど苦戦するほどでもないな」「ほほう。英霊の出来損ないとはいえ、仮にも英霊の力の一端は再びでていたはずなんだ。流石に死徒をも単騎で屠る男は言うことを聴かない」「一戦け。今が英霊の力の一端だと？冗談も休み休み言え」

探るような気配のあるレフの物言いに不快感を感じるも、潜在的な警戒心を隠しつつ無造作に返す。カルデア戦闘服とやらを着用しているからか、魔力の目減りはまるでなく、寧ろかすてなく調子が良い。これならパーサーカー・ヘラクレスを五分間ぐらい足止めし、殺されるくらいはできるだろう。結局殺されるのに違いはないわけだが。
あ
投
め、
向
力
捷
い…
影
と
アー
実
け
ア
今…
っ
tar
い。
しん
や
常
線
は、
に
で
な
満
か
の
掻
髪
影
外
定
も
た
は
き
な
っ
の
に
ら、
シ
留
逃
山
上
ど、
影
疲
落
tar
い。
と

克
ね
る
開
犬、
ち
瞬
き
直
ら
る
翁
あ
第
っ
戦
苦
し
着
俺
れ
ま
か。
と
戦
て
に、
と
い、
に
な
か
飛
额
へ
か。
ク
額
へ
が、
拙
い。

ル
ふむ。…
そ
な
も
が

レ
の
言
葉
は、
ア
擬
日

で
り
た。
無
俺
れ
で
馬

思考ルーインから組み直すべきだと進言する。これでは英霊の
力の十分の一にも満たない。

レフの視線から外れた瞬間に、額に揺れていた汗をぺったりと止
め、呼吸を平常のものに落ち着けた。実のところ、俺は全く疲弊して
いなかった。本物の英霊、それ

身としては、あの程度の影に苦戦するなどあり得ない話だ。宝具の
影を自重せずにやれば、開戦と同時に一瞬で仕留められる自信が
ある。
本当なら味方のはずのレフや、カルデアに対して実力を隠すのは不義理と言える。あるいは不誠実のかもしれない。
しかし、俺は魔術師という人種を、遠坂凛以外欠片も信用していない。それが終わっても俺を売り、封印指定にまで持っていくこともあるまい。それまでは適当に力を抜いておくに限る。

「フォウ！」
「おっ？」

ふと、毛玉のような黒が道を飛び出してきて、俺の肩に飛び乗って頭にすがり付いてきた。咄嗟に叩き落としかけたが、害意はなよだし放っておく。

なんだ、ご機嫌だな。なにか良いことでもあったのか？

「なんだ、ご機嫌だな。なにか良いことでもあったのか？」

うぎりうぎりと頭や顎下を撫でてやると、気持ち良さそうに目を細めていった。
どうやらなつかれたらしい。俺は昔から、どうにても動物の類いに好まれる傾向にあるが、初見の奴にまでこうも踏み込まれるとは思わなかった。
わなかった。

戦闘シミュレーションを終えて、特にすることもなかった俺は、

「なんだったら菓子でも作ってやろうか。お前みたいなのでも食え
そうなのも俺のレバー・トリにはあるんだ。」

「フォウ。フォウ！フォウ！フォウ！フォウ！フォウ！フォウ！フォウ！フォウ！フォウ！フォウ！フォウ！フォウ！フォウ！」

まるでこちらの言葉が分かっているかのような反応に、怪訝な気

持つなるが、まあ可愛いらしいか、と思っておく。大方、そこそ

の術師が実験体にして、思考レベルを本来のものより強化してい

るだろう。

さっと解析したところ、特に脅威になりそうな反応もない。危険

はないと見て良いはずだ。　危険が多すぎる逆に危険じゃない

とも言う。

「フォウさん？　どこに行ったんですか、フォウさん！」

「あ、エミヤ先輩。　やあマシュ。　やあマシュ。　やあマシュ。」

こちらに気づいたらしい少女に、俺は半ば無意識に甘く微笑んで

いったしていた。
いった。女好きを自認する俺であるが、どうにも美女、美少女を見る
と物腰が柔らかなものになってしまう。
ちょっと露骨過ぎやしないか、と自分でも思うが、なぜか改める
ことの出来ないエミヤの呪いである。まあマシュも満更ではなさそう
なのでよしとしておこう。眼鏡娘の後輩属性とは、なかなか
得難いものである。なぜ先輩呼びなのかは謎だが。
「おはようございます、エミヤ先輩。今こっちに毛むくじゃらなフ
オウさんが来ませんでしたか？」
「ああ、おはようマシュー。そのフォウさんがいうのは彼のことかな。
言いつつ、いつのまにか俺の背後に戻っていた猫っぽいウサギ、
ウサギっぽい猫の首を摘まあげて、マシュの方へ差し出した。
フォウを受けとると、マシュは目を丸くして驚いていた。
「…驚きました」
「え、フォウさんがこうまで誰かに親しげなのか見たことがなく
て。…流石です、エミヤ先輩」
「…フォウー！」
「フォウー！」
「フォウー！」「フォウー！」「ああ…そうか。うん、やってるさ」
「…ん、ああ…そうだ。流石です、エミヤ先輩。何がマシュの腕の中で物言いたげに鳴いた。
「…? なにかあったんですか?」
「いやに、たった今、彼に菓子を作ってやると約束したばかりで ね……なんだったらマシュもどうだ?」
「え、あ……いいんですか?」
「いいとも。これでも菓子作りにも自信があってね。いつもマシュにも振る舞おうと思っていたんだ。」
「でしたら、その、ご相伴に与ります。」
「菓子と聞いては捨て置けなかったのか、照れたようにはなかった。」
「やはり女の子、甘いものへの誘惑には勝てないらしい。」
「うん。やっぱり後輩キャラはこうでないとな……。」
「え？」
「なんてなくそう弦いたとき、なぜか背中に悪寒が走った士郎くん。」
「……うん。やっぱり後輩キャラはこうでないとな……。」
彼女はホムンクルスか…。

え、い、いきなり何を言うんだ、士郎くんは。

個々的にホムンクルスに詳しい身でね。一目見れば、彼女…マシユキリエラートがまっとうな生きまわれるでないかと。

見たところ、ホムンクルスに近い。が、近いだけでそれそこのもので…。

昔からモノの構造を把握するの得意でね。それその人のため生み出されただシザーベビー、というのが真相に近いか？

一いちいち額に耐えつつ手伝うのは得意でね。それその人のため生み出されただシザーベビー、と。<br>

「…」
アから出たこともないんだろう。カルデアという無菌室で育った為に、マシュの体は外の世界に適応できないんじゃないか？

……マシュは、あと何年生きられる？

……もうジャナイ。

……機密ですよ。マシュ本人も知らないはずだ。言い略らして良いものじゃない。

……そうか。……俺の見立てでは、あと一年といったところだが。どうゆだ？

……う？

……！

……まいか。……俺は俺で、やれることはするさ。大人のエゴに子供を巻き込んで残らないようにしろ。そんな辛そうな顔をするんだ、お前がマシュの件に関与していないことは分かったよ。

……そめは……。

……それは……。

俺は俺で、やれるということはするさ。大人のエゴに子供を巻き込んで良い道理などない。……そうだな、とりあげず、甘いものを食べさせてあげよう。彼女の生きる世界は、決してカルデアだけに完結するものじゃないんだと、いつか証明できるようにしよう。

……そめは……。
ああ。それはとても素敵なことだと俺は思う。不可能ではない。

「…

ロマニ。俺は信じる。

俺はそう信じる。」

「…そう、だね。その通りだ。」

「…そうだ。出来ることをする、それだけだよ。」

「…そう。出来ることをする。死なないために、生きるために。」

自分の命を軽く見るところはないが、逆に固執しきることもない。それは嫌だ。だから俺は俺という人間を全うするだけである。そうしてそのためなら、俺は俺の全能力を蹟蹟いなく費やすだろう。

俺という人間、その自我、自意識だけが俺の持つアイデンティティだから。名前も体もなく、赤の他人として生きねばならなくなったあの日から、俺はいつしか俺だけのために、俺の信条だけに肩入れして生きていくと決めていた。
俺の知るアニメソング、一歌を風靡した名曲を二人で熱唱し、マシューはいつのまにか疲れ果て、俺にあてがわれた部屋のベッドで穏やかに寝息をたて始めている。

こうしてマシューとデュエットするのもはじめてではない。最初は恥ずかしがっていたし、歌声も音程を外した音痴なものだったが、数をこなす内に上達して俺よりも上手くなっていた。時には半ば連れ去る強引さでロマニやオルガリーニも参加させ、歌なんて歌わないと意地を張っていたが……まあ、あの手の女性をあやし、或いはおだえて、その気にさせるのは得意だった。いつのまにか一番本気で歌っていたのはオルガリーニで、あとからからかうと顔を真っ赤にして怒鳴ってきたものである。

マシューの寝顔を見下ろしながら、その髪を手櫛で梳く。フォウはマシューの懷で丸くなり一緒になって眠っていた。

俺のために、『幸福に生きろ』

俺のやり方でが俺のやり方だ。厳しさに意味がないのではない。厳しさよりも、可愛がることの方が個人的に有意義なのだ。
争いを嘆く人々がいるのを知ってしまった。
貧しさに喘ぐ子供がいるのを知ってしまった。

…知ってしまったら、見て見ぬふりはできない。
素知らぬ振りをして生活をまっとうするために、極めて自己中心的に、俺とい
う自分が俺らしくないと叫んでしまう。
無視できないし、してはならない。俺が俺らしく生きるため、俺
という人間をまっとうするために、俺
生きているだけなのだから。
だから、善人たち。無垢な人たち。俺のために、俺の人生のため
に救われ。俺の一方的な価値観を押し付けにやって。
俺の思う『幸福』の形で笑えるようにしてやる。
要らないならはっきり言えまい。
俺はすぐにいなくなるだろう。
俺に救われた人間は、俺という人間の生きた証になる。俺の思う『幸
福』に救われ。俺の条件を満たすために対魔・対蟲の霊器を求めてのことでもあった。

だから。どんな『俺の生きた証』を台無しにする人理焼却など認
わない。

死にたくないし、死なせるわけにはいかないのだ。

死にたくないし、死なせるわけにはいかないのだ。なによりも、
俺のために

爆音。

カドゥエ全体が揺れたかのような轟音が聴き、警告音が垂れ流され、視界が赤いランプの光で真っ赤に染まった。なんだとは思わないと不測の事態に慣れていた。ほとんど知識の磨耗した俺が、事前に防げることなどないに等しい。自分を守り、備えるのがせいぜいだった。

今日は、すべてのマスター候補の召集が完了し、特異点へのレイシフを実行する日だった。オルガマリーが、時計塔から来た連中の手綱を握るための日であり、そしてずぶずぶのド素人のマスター候補に事態を説明する日でもある。大事なプリーフィングが日程に組まれていた。オルガマリーの指揮下で服従すると契約していた俺は、諾々と彼女の求めるままにそのすべてに立ち会った。

今回発見された特異点は、衛宮士郎の故郷である冬木であった。そういう意味で、最も状況に対応しやすいだろうと目され、オルガマリーからも期待されていた。
まあ、予想は裏切っても、期待には応えるのが出来る男というも
のだ。期待通りの結果を出そうとオルガマリーに言っていた。

そうして、俺はオルガマリーがカルデアのスタッフが見守る中、
規定通りに霊子箱体というポッドの中に入り、レイシフトの時待
った。その前に、同じA班のマシュと目が合った気がして。

次の瞬間、俺の入っていたポッドは、他のポッドと同じように爆
破されていた。

普通に瀕死の重傷を負った。

視界がチカチカと明滅し、耳が麻痺してしまっている。呑呑に己
の体を解析すると。上半身と下半身がほぼ泣き別れになってい
て、内臓はしま出し。右腕が干切れていた。

奇跡的に即死せず。頃が無事で意識が残っている。目をやり痛み
に耐性をつけあってあったお陰だろう。俺は凍りついたような冷静さで、
死に瀕して体内で暴走しかけていた固有結界を制御。活用し上半身
と下半身を接続。内臓もきちっと体内に納め。右腕も応急処置的に
同じようにしてくっつけた。

即死させしなければ、どうとでもなる。

我ながら化け物じみた生き汚なさだが、これはかつて俺の中で作
動していた全て遠き理想郷が、傷を負った俺の体を修復していた手
作。
順を真似ていなくなり。
固有結界『無限の剣製』によって、体を継ぎ接ぎだらけのフランケン状態にしただけで、今にも死にそうなのには違いない。

早急にオペしてほしいがそう言っているわけではない。俺は死体に鞭をなすぎないうちに、体を継ぎ接ぎだらけのフランケン状態にし、今にも死にそうだ。

怒りを抑える。今の俺に出来ることは、かなり限られていた。
冷静さを失ってはならない。
意識のある者を探していると、一人だけ残っていた。

マシュだ。彼女も、瀕死の重体だった。
同分を解析して診断する。
雖然で瓦礫を撤去し、下半身が瓦礫に潰されてしまっている。

下半身が瓦礫に潰されてしまっている。
マシュが何を言っていたようだが、何を言っているのかまるで聞かぬ。
死なせない、と口を動かして微笑みかけた。強がりだった。
結局、生存者を見つけたことはできなかった。
カルデアスが、深紅に染まっていた。
中央隔壁が閉鎖された。閉じ込められていたか。遠く、微かに回復した聴力が、機械音声を聞き取った。
中隔壁が閉鎖され、閉じ込められたか。
遠く、微かに回復した聴力が、機械音声を聞き取った。

カルデアスデアスが、深紅に染まっていった。
中央隔壁が閉鎖された。閉じ込められていたか。遠く、微かに回復した聴力が、機械音声を聞き取った。
中隔壁が閉鎖され、閉じ込められたか。
遠く、微かに回復した聴力が、機械音声を聞き取った。

座標、西暦2004年、1月30日、日本。マスターは最終調整に入って下さい。
観測スタッフに警告。
カルデアスに変化が生じました。
システム、レイシフト、最終段階へと移行します。

近未来100年に亘り、人類の痕跡は発見できません。
人類の生存を保障できません。

レイシフト要員規定に達していません。
該当マスターを検索中。
発見しました。
番号2をマスターとして再登録します。
番号2をマスターとし再登録します。レインフォート開始まで。番号2をマスターとし再登録します。
レイシフト開始まで。
全行程クリア。ファーストオーダー実証を開始します。

「待て。生き残りは、俺たちだけなのか……？」
帰郷した士郎くん！

必死の表情で、彼はこの手を掴んでいた。

腰から下が瓦礫に押し潰され、もう幾ばくの時も残されていない。

ようなわたしを助けよう。

自分のだって、今にも死んでしまいそうなのに。自分以外に生きてる人を、懸命探していた。

わたしがまだ生きているのを見つけると、とても嬉しそうに目を輝かせた。まるで、助けられたのが自分の方であるかのような、そんな顔をして。

その様が、あまりにも綺麗だったから。もう、わたしのことなんだ。

わたらせ。まるで、助けられたのが自分の方であるかのように、そう。

わたしは、まるで生きているのを諦めても、この場で生きってほしかった。

エミヤ先輩は、血塗れの顔で、ギチギチと鋼の剣を擦り合わせた音を出しながら、それでもはっきりわかるぐらい微笑んでくれた。

きっと、わたしの声は聞こえていないだろうに。喋る余力もない。
くせに、彼はわたしを安心させようと力強くうなずき、わたしを抱き上げて歩き始めました。

「うわ。わたしは今、安堵してしまった。心を救済された。彼と接した時間は短いかどうし、なによりも色づいた鮮烈なものだったと思う。エミヤ先輩とのふれあいが、たいていのだったのか、今にしてようやくわかった。

未練だ。まだ生きていいたいと思ってしまった。だから情けなく、未練だ。まだ生きていいたいと思ってしまった。誰より大切なエミヤ先輩に縋ってしまって。…そんな駄目なわたしを、先輩は当たり前のように助けてくれようとした。

火に包まれ、熱いはずなのに。わたしを抱き締めて。辛いものから守ってくれる。そんな、庇護者のような尊い人。だけど、そんな人も、すぐに死んでしまうだろう。わたしよりも、炎に包まれ、熱いはずなのに。
死なせたくない。
この人を、死なせてはいけない。
心がこう叫んでいた。この人を守りたいと思った。そう思うこと
は、ひどく傲慢なことなのだろう。それでも、思うことは止められ
なかった。先輩の手の大きさ、わたしを守るために見せる笑顔を、わたしは
きっと忘れられない。瞳に焼き付いた光景にどこまでも救われたから。
レインボートした先で、先輩は無事ではいられないだろう。彼を助
けたい、守りたい、思いだけが膨らんでいく。
なんてこと。わたしは、無力だ。今は、それがとても口惜しい。

懐かしい景色だ。
焦土化し、尚も炎上する汚染された都市、冬木。その中心の都市部にレイシフトした俺は、奇妙な感慨を抱きそうになるのを寸で堪えた。

意識の断絶は少なくとも自覚している限りはない。状況を把握し、令呪。冬木でマスターをしていった頃と同一の形。それがあることによると、ぶと、自身の右手に懐かしい刻印の形を見ると、頃方制に眉を覇ける。まるであまり良い思い出とは言えないものの、その象徴がこの令呪だった。

自分を偽っていたあの頃。頑なに衆宮士郎を演じ、生き抜いた約十年間の闘争期間。俺は、衆宮士郎になってから、聖杯戦争を制覇するまでの時間。ずっと地獄のような戦争をしていたのだ。自分を見失わないための戦い。生命を懸けるよりも、あるいはずっと辛かったかもしれない。他人の生き方を投影した代償は、己のアイデンティティの崩壊だった。もう、あんな真似はしたくないと、心から思う。

回想に向かい、遠退きそうになった意識を繋ぎ止める。

奇しくも冬木に再来し、同じ形の令呪を持つ。それが、自分を衆宮士郎にする呪いのようにで、胸くそ悪くなっていた。

—— 唯一。あの日々の中で心が安らいだのは……。さて、いつの頃だったか。

～…いや、待て～
「…マシュ…?」 いつで腰を見た。こちらも規定。見ただけなら正常だ。

「…先輩…」

背後から、声。気づかなかったのがどうかしている。強大な魔力を作包した気配だった。自らの護衛を内面で見ている。そしマスナー、ולהータンのはマシン・サーソファント、シーガルダー。マシュ・キリエライトです、先輩。

漆黒の堅に、身の丈以上の巨大な盾。華奢な体躯にはあまりに不釣り合い。しかしこの凜とした雰囲気と完璧に調和した武装形状だった。それはマシュだった。見間違うことはあり得ない。彼女がサーヴァント化していることに対する驚きは、ああ、そういえばそうだったか、という納得によって消えていた。}

マシュが心配そうにこちらを覗き込んだ。
先輩？ 大丈夫ですか？ 傷が痛みますか？
　先輩？大丈夫ですか？行動に支障はない。ひとまずは問題な
いはずだ。それよりマシュはどうだ？ 見たところ怪我は治ってい
るようだが。
　「はい。デミ・サーヴァント化したためか、わたしに異変は見られ
ません。むしろ、そこぶる調子が良いです。それは重傷だかもしカルデアが無事なら、ロマニにメディカル・チェックして貰わないとな。
　そうですね。先輩も、きちんととした治療を受けないといけません。
　それよってマシュはどうだ？見たところここ怪我は治ってい
るよ。デミ・サーヴァント化したため、ちょっと、それでも異変は見ら
せん。むしろ、そのぶる調子が悪いのは。
　ああ。なんだとかカルデアと連絡をとらないとな。
　「ああ。なんとかカルデアと連絡をとらないとな。
　「ああ。なんとかカルデアと連絡をとらないとな。
　地獄のような赤景色。花の代わりに咲くのは炎。大気に満ちる汚
染された呪いの風。最悪の景色は、しかし慣れている。冬木で、海外を回る中で見
つけた死都で、もう見飽きてしまった。
　カルデアは無事なのか。
　カルデアは無事なのか。
　カルデアを爆破した犯人が誰かは知らないが、犯人が警戒心を持
つているカルデアを出撃させる可能性は低いはずだ。
　カルデアが無事な時点で、カルデアは壊滅していない。
　施設や観測スタッフがいないわけではないが、カルデアは壊滅していない。
　少なくとも、最悪の事態にはなっていない。
　レイシフ
　施設や観測スタッフがいないわけではないが、カルデアは壊滅していない。
　少ないが、最悪の事態にはなっていない。
　レイシフ
両目に強化の魔術を叩き込み、見晴らしの悪い周囲を見渡す。こ
んな混迷とした状況だ、まず第一に身の安全を確保しないといけな
い。すると、北の方角から骸骨―亀牙兵が群れとなってこちらを目
指しているのを見つかった。
手には黒い洋弓。狙撃の経験を積むにつれ、自身に最適なモデル
を一から作成した、宝具の射出にも耐える渾身の一作。投影するの
うとするより前に、俺は詠唱していた。
「投影開始―」
投 影 開 始
「どうだ。俺もやるんだろう―」
「そうだ。俺もやるものだろー」
目を白黒させてこちらを見るマシュに、微笑みかける。
矢絣ぎ早に矢をつがえ、十五本打ち放つ。
続く狙は一撃を果たす。その確信は、十五本の敵性体が全
て沈黙したことで証明された。
ああ、頼むから、戦闘はわたしが請け負います。～

俺とマシューの間には、霊的な繋がりがある。一組のマスターとサヴァントになった証拠だ。

俺の体が癒えつつあるのは、何かの拍子に彼女と融合したらしい。

英霊の持ち加護の力だろうか。

マシュがなぜデミ・サーヴァントになったのか。それについての疑問はある。

しかし今はそれを探しても意味はなかった。とにかく、生き残ることが先決で。それは、俺の得意分野だった。
赤い彗星なのか！

敵、三。
距離、三百。
照準、完了。

射つ。

北東の方角に新たな敵影。
竜牙兵が六、蜥蜴兵が二体。
距離、四百。
照準、完了。
射つ。

「…」
崩れ落ちた瓦礫の山、その影に敵影確認。
矢をつがえ、上空に向け角度をつけて射つ。

獣頭の戦士の脳天に落下、三体の頭蓋をそれぞれ貫通。
「その、先輩」
「…」
西の方角、距離一千に看过きぬ脅威を視認。
数は一、しかし侮れない霊格。
他の雑兵とは違う。そんながら蛮族の神のよう、異形のデーモン。
つがえた矢に強化の呪術を叩き込み、矢を短槍の如くに膨れ上がらせる。
指に全力を込める。
射ち放った矢は音速を越えた。
荒ぶる蛮神、
「…」と。頬を膨れさせ、ジト目で俺を睨むマシュをとっつき少しギョッとした。

「…どうかしたのか？」

「……先輩は、すごいです…」

「あ、ああ。ありがとう…。誓ってくれるのは嬉しいが、なぜ睨む？」

思わずそう訊ねると、マシュは何を不満に思っているのか理解した俺は、微妙に困って。

俺が最も得意とする単独戦術は狙撃だ。そして殲滅戦も同じ程度に得意である。なにせ、吸血鬼によって死都と化した場所では、全

俺が最悪得意とする単独戦術は狙撃だ。そして殲滅戦も同じ程度に得意である。なにせ、吸血鬼によって死都と化した場所では、全
衛宮士郎と言えば格上殺しといった印象が付きまとうかもしれないが、俺もそうだがその真骨頂は格下殺し、赤い彗星なのである。だからこそ英霊エミヤは守護者、アラヤの掃除屋として重宝されているのだ。

マシュ。雑魚は俺に任せて良い。弓兵が無関に敵の接近を許して戦闘能力を維持するのは困難だし、相手がサーヴァントのような高位の存在だと手に余る。そういう時は、マシュに前に出てもらうことになるだろう。誰もが、俺はマシュの露払いをしているにすぎない。

「それなら……俺にとっては、できる限りマシュには危険な目に遭ってほしくない。俺がマシュを守る。だからマシュは、俺が危ない時助けてくれたら良い。」

「先輩が危なくなる局面で、わたしが役立てるとは思えないな。それは先輩も承知しているだろう。俺の勧めは何も無駄だ。」

「やっぱに大きな盾があるんですよ。きっと護りきれるはずです。」

「頼りにするよ～」

「……わかりました。では、わたしが先輩の盾に従います。なんに大きな盾があるんですか、きっと護りきれるはずです。」
言いかん、有る様にマシュの髪を撫でた。照れたように頰を染め、俯く様は可憐である。かわいい妹、或いは娘に対するよう心境だった。こうしてマシュを愛でておくのも悪くなかったが、生憎とそんな場合ではない。悠長に構えられているほど、俺に余裕があるわけであった。ただ、マシュがいるから、安心させたくて普段通りの態度を心がけているだけだ。

「…」

演技は、得意だ。望むと望まざるとは別に、得意にならざるをえなかった。
俺は道化だ。かつて対峙した英雄王は、俺を廃作者とは呼ばず道化と呼んで蔑んだ。流石にあの英雄王まで欺くことはできないが、それ以外は俺の偽りの在り方を見抜けていなかったと思う。
だから大丈夫。マシュを安心させるために、俺は泰然として構えている。

…いかんな。特異点とはいえ冬木にいるせいか、どうにも思考頭を振る。振り切るように「行こう」とマシュに声をかけ、周囲の安全を確保できる地点を探す。
警戒は怠らず、しかしマシュのメンタルを気にかけることもやめず、歩くこと暫し。彼女と話していると現在のマシュの状態を知る運びとなった。
カルデアは今回、特異点Fの調査のため事前にサーヴァントを招喚していたこと。先程の爆破でマスター陣が死亡し、サーヴァントもまた消える運命にあったこと。しかしその直前に名も知らないサーヴァントがマシュに契約を持ちかけたという。英霊としての力と宝具を譲る代わりに、この特異点の原因を排除してほしい、と。真名も何も告げずに消えていったため、マシュは自分がどんな能力を持っているのか分かららない。

…実のところ俺は、彼女に力を託して消えていったという英霊の正体に勘づいてしまっていた。

英霊としとての力と宝具を譲り代わりに、この特異点の原因を排除し、自分はどんな能力を持っているのか分からない、と。真名は何も告げずに消えてしまったため、マシュは投影することの意義の薄い特殊な宝具——清廉にして高潔、完璧な騎士と称された彼の英霊が敢えて何も語らずに消えたということは、何か深い考えがあることなのかかもしれない。安易に真名を教えるのはマシュのためにならない。なにしろ俺はあの爆発の中俺が安否を気にしていた男。ロマニ・アーキマンその人だった。
ロマニ！
無事だったか！

思わぬ声を張り上げ、どこかから聞こえてくる声に反応する。それが聞こえたのだろう、ロマニもかじりつくような勢いで反駁してきた。

「士郎くんか！？こちらカルデア管制室だ、聞こえるかい？！」「こちら同じくAチームメンバー、衛宮士郎、特異点Fへのシフトを完了した。同伴者は同じくAチームメンバー、マシュ・キリエライト。心身ともに問題はない。それらの状況を報せてくれ！」「ロマニの焦りにあてられたのか、柄にもなく俺の声にも焦燥が染んでいた。

落ち着け、という声が聞こえる。それは常に自分を客観視する、冷徹な自分の声だった。

いつからか、焦りが強くなると、唐突に冷や水を被せられたかの如く、冷静になっている己を見つけてしまう。それは常に自分を客観視する、心身ともに問題はない。それらの状況を報せてくれ！

落着け、一つ何とか、焦りが強くなると、唐突に冷や水を被せられたかの如く、冷静になっている己を見つけてしまう。それは常に自分を客観視する、心身ともに問題はない。それらの状況を報せてくれ！
マシューも無事なのか！よかった……けど、その格好はいったいどうしたの？マシュー、無駄口を叩く暇があるのか？口頭で説明するのも手間だ。マシューの状態をチェックしろ。平行して情報の共有だ。それは今どうなっている？」
「ああ……。これは、身体能力、魔術回路、全て跳ね上がっている……まさか、カルデア六つの実験が成功していたのか……？いや、すまない。こちらの状況だったね。ぶつぶつと何事かを呟いていたロマニだったが、思い直したよう
に口振りを改め、深刻な語調で言った。
「さっきの爆破で、カルデアの施設の多くが破壊された。管制室も、実のところ半壊している。今急ピッチでダヴィンチさんとスタッフで修理している途中だ。悪いけど通信も安定していない。あと二分で通信は一旦途絶えるだろう。スタッフも七割が重傷を負うか死亡して行動がとれないと。マスターサー候補は……君たちを除いて無事な者はいない。　そうか……俺以外のAチームのマスターもか？」　
……了解した。では質問を変える。そちらからの支援は期待して良ののか？」
ディを動をいに引る所悉とし。「

目悪く置る者がと以ニ通け、独でなオルのい。麗はあがるに参で謝し、のアるカと、ルの要の魔ニあと、術も、言の通る室で

のハル、さい・なとのラデッキのし。
強化を重ねてもいた。
それでも功を奏した形になったが、人命まではどうにもならなかっ
たようだ。
瞑目し、すぐに目を開く。
「送ってくる物資と言うのなんたん？」「聖晶石だ。簡単と言うと魔力の塊で、サーヴァント召喚のための
触媒だよ。なに？」『聖晶石だ。簡単に言うと伝媒のターゲットの上でやった方がいいんだけどね、今回
は特別だ。カルデアの電力の一割を回す。どうせしばらくは使う機
会もない。無理矢理にでもサーヴァントを召喚してくれ。きみたち
に死なれたから。全て終わりだ』「待て、サーヴァントを呼べるのか？」！仮に召喚できても俺の魔
力もたないぞ！サーヴァントの召喚、維持はカルデアの英霊召喚システムが代行
してくれる。心配は要らない。通信限界時間まで間がないんだ、あ
と三十秒！マシュの盾を基点にして召喚態勢に入ってくれ！』「ええ……！簡単に言ってくれる！』
「ええ……！簡単言ってくれる！』
吐き捨て、マシュの傍に転送されてきた一つの石——金平糖のよ
うな物——を掴み上げる。素早く盾を地面に置いていたマシュを労
い、聖晶石とやらを盾の傍に設置する。
カルデアのシステムが作動し始めたのだろう、まばゆい光が巻き
起こり、莫大な魔力が集束していく。
来てる、と信じがたい思いと共に驚きを飲み込む。この感覚は識
ら、と信じがたい思いと共に驚きを飲み込む。
アサシンのサーヴァント、召喚に応じ参上した。…やれやれ、
凍りついたのは、俺だった。この、声は——
説明を、マスター。無駄口はいらない。合理的に、端的に願む。
それは、いつも見た、男との再会だった。

光の中、立ち上がったのは深紅のフードを被った、細身の男。マニとの通信が途絶えたのと同時に、サーヴァントは涸れた声を発した。

光が収まり、俺に新たな繋がりができたことを悟る、やがて、

“アサシンが召喚されると、マスターやサーヴァントは涸れた声を発した。…やれやれ、凍りついたのは、俺だった。この、声は——
説明を、マスター。無駄口はいらない。合理的に、端的に願む。
それは、いつも見た、男との再会だった。

光の中、立ち上がったのは深紅のフードを被った、細身の男。マニとの通信が途絶えたのと同時に、サーヴァントは涸れた声を発した。

アサシンのサーヴァント、召喚に応じ参上した。…やれやれ、
凍りついたのは、俺だった。この、声は——
説明を、マスター。無駄口はいらない。合理的に、端的に願む。
それは、いつも見た、男との再会だった。

光の中、立ち上がったのは深紅のフードを被った、細身の男。マニとの通信が途絶えたのと同時に、サーヴァントは涸れた声を発した。

光が収まり、俺に新たな繋がりができたことを悟る、やがて、

“アサシンが召喚されると、マスターやサーヴァントは涸れた声を発した。…やれやれ、凍りついたのは、俺だった。この、声は——
説明を、マスター。無駄口はいらない。合理的に、端的に願む。
それは、いつも見た、男との再会だった。

光の中、立ち上がったのは深紅のフードを被った、細身の男。マニとの通信が途絶えたのと同時に、サーヴァントは涸れた声を発した。

光が収まり、俺に新たな繋がりができたことを悟る、やがて、
気まずうでし郎くん

僕はね。子供の頃、正義の味方にして怪物を語る男の姿が脳裏に浮かびた。那。心の防衛機構が作動したのだろう、あらゆる感情が瞬時に凍結された。

「ーーー」

いや、頭を左右に振る。ただ、声が似ているで。

あとの男がサーヴァントになるくん、決してあり得ない。

そう思い、気を取って書いては、俺は深紅のフードを目に深く被った。殺者を正視した。
「ああ…安心した」

（ああ…何なんだ…）

「ちっ…」

一番最初の、罪の形。偽り、謀り、欺いた。

偽物の思いに、馬鹿みたいに安堵して。ひっそりと眠るように死んでいった、独りの男。

目の前のアサシンは、どうしようもなくあの男似ていた。顔なんて見えないのに、声しか聞こえないのに、その、纏っている空気があまりにも、知っているものに酷似していた。

アサシンの言葉を鸚鵡返しにして間を保たして、なんとか頭を回す。

この胸に甦った混沌とした熱情を雑念と断じ、なげなく彼の装備を観察した。

…どうすればいい、か。

…どうすればいい、か。

銃火器を装備したサーバント、それも英靈になるほどの暗殺者？
装備からして現代に近い者の違いはないが、神秘の薄れた現代に、名うたの暗殺者などが仮にいたとしても、現代は既に英霊の座に登録されるほどの功績を立てたのが極めて困難な時代だ。世界が容易く滅びの危機に陥り、些細なことで危機が回避される。それに……これは勘だが、このアサシンは正純な英雄などではないうし、淡々と任務をこなすどころの特殊部隊員の方こそや偉業と認められるというのだ。それや英霊の座に招かれるというのだろう。それらを気にしてどうする。僕は確かに大層な英雄サマなんかじゃないが、そんなものは重要じゃない。務めを果たせるか、果たせぬ死ぬか、どちらか。
その通りだが、履き違えるな。俺はマスターだ。駒の性能を把握し、それを気にしてどうする。僕は確かに大層な英雄サマなんかじゃないが、そんなものは重要じゃない。務めを果たせるか、果たせぬ死ぬか、どちらか。
－－それとも、アサシンは興味なさげに無感情に応じる。
－－見たところ、正規の英霊ではないな。お前はどここの英霊だ。
－－お前はどここの英霊だ。
－－それはあくまでビジネスライクなスタンスであり、マシュはやや安心したよ。
－－安心したよ。
辛そうだったが、実のところ俺にとってはやり易い相手だった。

印象は、兵士。最小の戦闘単位。目的のためなら何もかもを投げ出せる自己のない機械。

その印象は間違っていない。という確信があった。なぜなら俺は、そんな手合いを何人も知っている。ええとそうした者こそが、俺にとっては難敵であり、同時に心強い味方でもあったのだから。

こういった思考を絡めて確実に任務を遂行できるだろう手合いは、大きな作戦を実行するにあたり必ず一人は必要の人材である。

事が急であり、確実性を求められる場面であれば、このアサシンほど信頼して用いる兵士はいない。俺はアサシンの性質を好ましいと感じていた。無論仕事の上では、だが。

残念ながら、あんなの目は確かだ。僕は正規の英霊じゃない。守護者といえば伝わるか？

その通り。そして僕はその中でも更に格の落ちる、とある守護者の代行でしかない。本来の僕はしない暗殺者、守護者にすらならない半端者さ。こうして召喚されたのが何かの間違いだと言えるほ言いかえらば、アサシンはフードを外した。

「…守護者の代行だとい？」

「ああ。僕の真名は…」

「残念ながら、あんなの目は確かだ。僕は正規の英霊じゃない。守護者といえば伝わるか？」

「…抑止力か。」

「その通り。そして僕はその中でも更に格の落ちる、とある守護者の代行でしかない。本来の僕はしない暗殺者、守護者にすらならない半端者さ。こうして召喚されたのが何かの間違いだと言えるほ言いかえらば、アサシンはフードを外した。」
壊死しているかのような褐色の肌、色素の抜け落ちた白髪。露に

「《エミヤ》だ。」

壊死しているかのような褐色の肌、色素の抜け落ちた白髪。

「《エミヤ》だ。」

「エミヤ…？エミヤ、キリツグ…？」

慌てて体を支える。士郎の顔は、これ以上なく青ざめていた。

「エミヤ…？エミヤ、キリツグ…？」
うわ言のように呟いた士郎に、アサシンはその氷のように冷たい表情を微かに変化させた。マシュには読み取れないほどの、本当に小さな変化。

「驚いたな。僕を知ってるのか？」「驚いたな。僕を知ってるの？」「驚いたな。僕を知ってるの？」と、甲斐を震えあがらせた言葉が彼の中を駆け巡っていた。

「俺は……いや、なぜ切嗣が守護者の代行なんて……代行？」穂波のお宅に到着したとき、彼は目を瞬らせた。
俺、か…？

錬鉄の英雄、エミヤシロウ。それは、この世界線では決して生まれない存在。世界は矛盾を嫌う。世界にとって、英霊エミヤの誕生は決定事項。エミヤが生まれなければ、その穴を補填する者が必要だ。

「世界は、何者であればエミヤの代行足り得るのか。現代で、彼の戦術ドクトリに近いものを持つ人間を列挙し、その中でエミヤに縁の深い者を特定すれば…」それは、同じエミヤ以外にはあり得ない。

血の気が引いた。

士郎は、頭が真っ白になった。先輩！先輩！そう何度も呼び掛け、肩を揺する少女の声も届かなかった。

士郎―ねへん、転向をしてる。士郎――そうだ。アサシンは残酷に、真実を淡々と告げた。

動揺のあまり気が抜けてしまった士郎――しかし、アサシンは残り何を勘違いしているか知らないが、僕はあんたを知らない。あん懸命にも、真実を淡々と告げた。
たの言う衛宮切嗣と僕は別物だ。だからあんたが勝手に罪悪感を抱くこともない。指示を出せ、マスター。サーヴァントはマスターに従うモノだ。その言葉は、端的に真実だけを表している。しかし士郎からすれば、それは自分を気遣った言葉に聞こえてくるものだった。士郎は、優しきかった切嗣を知ってはいる。優しすぎて破滅した男を自分の上がらない、あの、気の抜けたような男だったのだろう。知識なんて関係ない。そんなもの、既にないに等しい。腑抜けた士郎に、アサシンはなおも辛辣だった。腑抜けた士郎に、アサシンはなおも辛辣だった。

「ああ…あんたの事情なんて知ったことじゃないし、聞きたくもない。ともかくサーヴァントとしての務めだけは果たす。…僕はそれでいいんだ。だからマスター、あんたはあんたの務めを果たせ」

「…っ！」

それは彼なりの、別の可能性の自分が持たなかったかもしれない、名前も知らない息子へと向けた不器用な優しさだった。声も、表情さえ、徹底して冷徹なままだったか、それで言葉も、声も、表情さえ、徹底して冷徹なままだったが、それでそれが彼の名前には優しさの名残があった。士郎にはそれがわかった。感じられた。…たとえそれが錯覚だったとしても、士郎にとっては救いだった。
自分に言い聞かせるように呟き、士郎はマシュに詫びた。「情けない姿を見せてしまったのだ、大人として不甲斐ない限りだった。マシュは、柔らかく微笑むだけで、それを受け入れる。何があったのかなんて知らないけれど、自分だけはきっと寄り添っているか。なぜなら、自分は先輩のデミ・サーヴァントなのだ。」

「…アサシン。アタシはこの冬木のことをどこまで覚えている？」
「覚えてる何も、来たこともない。だから土地勘なんて期待されても応えられない」
「…そうか。だが俺はこの地のことをよく知っている。そしてここの惨状の原因——聖杯戦争の当事者だったからな。そうか。それは朗報だ。しかし疑問がある。その戦争とやらは、特異点を生み出すほどものだったのか？」
「ああ。この冬木の聖杯戦争の景品。聖杯は超抜級の魔力炉心だ。充分可能だろう。街一つ滅ぼすなんて指先一つでちょいちょいのちっだからな——」

「端から見ていたマシュには、二人がなんの取り決めをしているのか、言いかえながら。アサシンと士郎は多様なハンドサインを出し合い、意思疎通に問題がないことを確認し合っていた。'

「覚えるほどの。なら、世界だって滅ぼせるだろうよ。いや、既に滅んでいるのか——」
か見当つかない。なんだか置いてけぼりにされているようで、なん
となく面白くなかった。
「繰めよう」
恐らくはマシュのために、士郎は言葉に出て話し始めた。既に
アサシンとは方針を固めたのだろう。今度、このハンドサインを教
えてもらおうと決意しながら、マシュは真剣に士郎の話しに聞き入
った。
冬木が特異点になりうる原因は聖杯以外にあり得ない。故にこれ
を回収することを第一目標とする。そうすると、聖杯をかけて争っ
て聖杯を完成させないために、冬木のサーヴァントは全て敵になるな。
そしてこれが重要だ。この特異点が修復不能なものになってしま
とある洞窟を目指して急行する。聖杯を守る某かの障害が予想される
為これは躊躇わなくていい、すぐ排除する。＝ここまでで質問は？
「アサシンさんはどうするんですか？」
マシュの気配を感じなかった。そのことに驚くマシュに、土郎は不敵に笑いながら言った。

「…カルデアとの連絡はどうしましょうか？」

うようこうさおが、こえてて勝因になるのだと聡い故に理解できてきたのだ。

「…カルデアとの連絡はどうしましょうか？」

了解しました。マシュ・キリエライト、円蔵山まで急行します。

方針を理解し、マシュは力強く声を張った。土郎は頷きを返し、
両足を強化して疾走をはじめる。

－ヴァントの最大速度には当然及ばないまで、生身の人間としては破格の足の速さだったのだ。恐らく自動車並みの足である。

でも、やっぱり。

走りながら弓を射ち、時々アサシンが強力な敵性個体を発見するなりバック・スタブを叩き込んで仕留めているのを見ると、なんとも言えない気分になった。

敵は士郎が片付け、強力な個体は士郎が気を引きつつ背後からアサシンが仕留める。それだけで、無人の野を行くが如しだが、なんというか、士郎とアサシンの息が合いすぎて、嫉妬してしまいそうになる。

……もし無事に帰れたら、わたし先輩と訓練しないと。このままじゃ、ダメです。

……もし無事に帰れたら、自分が守られる立場に立っているのをぼつりと呟いたマシューは、自分が守られる立場に立っているのを強烈に自覚し、強くなることに意欲を抱きつつあった。
突撃、隣の士郎くん！

重苦しい沈黙。呪いの火に焼かれる街並みに、かつての名残は微塵もない。

悉くが燃え散り、砕け散った残骸都市。吸血鬼により死に絶えた末期の死都よりもなお毒々しかった。

末期の死都よ。まるで微塵を彷彿とさせる街並み、かつつての名残は微塵もなない。

それも幸いだと思ったのは、一時救助する手間が省けたこと。そうで、全滅だ。比喩でなく、文字通りの意味で人間は死滅してい

それを見捨てる断が出来た時点で、」見捨てる』という当然の決断をしなくて済んだこと。これに尽きた。

さすがに、アサシンは見捨てる判断に否を唱えないだろう。むしろそんな犠牲を払ってでも特異点の修復を優先すべきだと言うのに違いない。俺もそれに全面的に同意したいところだが、生憎どこに

無駄な感傷だとアサシンは断じるだろう。くだらな私情は捨てると言うだろう。だが俺は、マシュには俺の影響を受けて、誰かを

見捨てるという判断が出る人間になってはしくなかった。くだら

ない私情と言われればその通りだが、マシュの前でだけは時に合理的に判断出来ない時がある。
俺は辺りを見渡し、胸中に独語する。視線を1時の方角、ちょと俺にだけ姿を認められる周りの死角に実体化したアサシンが、ハンドサインで敵影なし、と報告してきた。妙だ、と思う。この円蔵山付近に来るまでに、何度か雑魚と交戦することがあったが、大聖杯に着実に近づいているにも関わらず、敵がいないなるようなことがあるだろうか。ハンドサインで隠密と遊撃、および斥候を継続するように指示する。アサシンは短く了解の意思を示し、実体化を解いて周囲の環境に融かし込むように気配を遮断した。

「マシュ、何かおかしい。ここからは１」
「先輩！」

同時にマシュにも襲いかかっていた矢を、マシュは自身で処理し、防いでいた。すぐに俺の前にマシュが出る。眼球に強化を施して、矢の飛んできた方角を睨む。すると、遠くに黒く染まった人影があるのを発見した。
「サー・ヴァント...！マシュ、向かって11時、距離1200！...見えました、恐らくアーチャーのサーヴァントです！次弾装填しこちちを狙っています！あれば剣...剣を矢に見立てて...」

かっ、と俺は露骨に舌打ちしました。

冬木の聖杯の泥に汚染されているのだろう、黒く染まっているた
めか輪郭がはっきりとしないが、剣を矢にするサーヴァントなぞ
俺には覚えが一人しかない。思わず吐き捨てた。

「アイツ...下手打ちがったな...！」

いや、むざむざ聖杯の泥に呑まれるようなタマじゃない。あ
それは抜け目のない男だった、恐らく泥にのまれたのは何者かに倒さ
れた後だろう。

改めて、依然聖杯は汚染され、俺の知るものです。

一つ、やはり聖杯は汚染された、俺の知るものです。

三つ、恐らくほど全てのサーヴァントが聖杯を握り、自身の手駒として利用していること。

二つ、いずれかのサーヴァントが聖杯を握り、他のサーヴァント
を撃破して泥に取り込む、自身の手駒として利用していること。

迎撃に出てきたのがアーチャーだけということは、他のサーヴァント
は生き延びたサーヴァントを追っているものと思われる。

すなわち、結局に入っているがゆえの防備の薄さ、ということだ。
思い込め、アサシンを見る。一瞬だけ、目が合った。戦術における思考は、俺とアサシンは似ていた。俺の戦闘能力も、パターンもここに来るまでで把握してあるはず。あとは、俺がこの局面何を考えるか、察してもらえることを期待するしかない。

アーチャーがあの赤い外套の男なら、口の動き、目の動きだけでこちらの動きを察知しかねなかった。気配を溶かしていたアサシンは一瞬で、目が合った。目的の動きを察知して、円蔵山の洞窟に先行していく。名剣をつがえるなりすぐに射つ。

…っ、「一」

見送るようなことはせず、俺は黒弓を投影した。宝具ではないが、放ったのは十三。対し、遠方の高台に陣取ったアイツは三十七もの剣弾を放っていた。俺の剣弾は全て撃墜され、残った十四の剣弾が飛来してきたのを予定・莫耶でなんとかはたき落とす。

思い上がっていた。弓の腕は互角つもりでいたが、そんなことはない。奴の方が俺よりも上手だ！

今のでよくわたった、霊基という壁がある限り俺が奴に比肩するのは極めて困難だ。単純に技量が違うし経験量も段違い、それを探す
「って、おい！殺意が高過ぎやしないか……！？」
俺は、奴が次に弓につがえた剣を見て、思わず呟いていた。
故に俺はマシュに指示した。四の五の言ってる場合ではない、盾の宝具の持ち合わせに怯えた。
偽・螺旋剣。
俺はそれを視認し、威力を推定して……悟る。防げない。俺には手は抜かない、確実に殺す。そう、奴の目が語っていた。
「マシュ。令呪で補助する、宝具を解放しろ……」
「そんな……！？」
「使い方もわからないのにどうするんですか先輩！？」
「その身はサーヴァントだ、令呪を使えば体が勝手に真名解放するベく動作する。本人の意思にかかわりない。そうすれば、真名を唱えられなくても擬似的に宝具を発動できる。故に大事なのは心の

「って、おい！殺意が高過ぎやしないか……！？」
俺は、奴が次に弓につがえた剣を見て、思わず呟いていた。
故に俺はマシュに指示した。四の五の言ってる場合ではない、盾の宝具の持ち合わせに怯えた。
偽・螺旋剣。
俺はそれを視認し、威力を推定して……悟る。防げない。俺には手は抜かない、確実に殺す。そう、奴の目が語っていた。
「マシュ。令呪で補助する、宝具を解放しろ……」
「そんな……！？」
「使い方もわからないのにどうするんですか先輩！？」
「その身はサーヴァントだ、令呪を使えば体が勝手に真名解放するベく動作する。本人の意思にかかわりない。そうすれば、真名を唱えられなくても擬似的に宝具を発動できる。故に大事なのは心の
持ち様、マシュが持つ意思の力が鍵になる！

「わたしの、意思…？」

「イメージジョロ。常に想像するのは最強の自分だ。外敵などいらぬ。

騒ぎ、マシュは素直に受け入れ、目を伏せて自分に何かを問いかけた。

数瞬の間。顔をあげたマシュの目に、強い意思の光が点る。

……わたしは……守る者です。わたしが……先輩を、守ります！

……わたしは……守る者です。わたしが……先輩を、守ります！

発露したのは黄金の意思。守護の決意。体が動くとするなら、後

その輝きに、俺は目を見開いた。

あまりにまっすぐで、穢れのない尊い光。

薄汚れた俺には持ち得ない、本物の煌めきだった。

心の問題だったから、本能に身を任せよう。

自分で今呪の強制力無粋だと感じた。

自分のサーヴァントを信じられずして何がマスターか。俺は決め

た。今呪を使わないことを。

ただ、言葉にするだけだ。不出来な大人が、少女の立ち上がる姿

を応援するだけ。後押しだけが出来ることだと弁える。
宮士赤岩発…中をで旋れた。
シを、突の組をも・セ弓飛はし、ファよ幻神兵、す力削の主えをり真骨中直従なム最渾し込出名、―に撃をシに、包の能無の具、無の具、宝英展えをめし攻偽ヴァみ者は、一旋唱よ剣宝具雄だ剣。
開た。
偽録―ト、ヴァ衝のち漆!」
支発がをた。
踏み留まる。なけなしが力を振り絞り、マシュは声もなく吠えた。
爆発が途切れる。螺旋剣の残骸が地に落ちる。
マシュは、耐えきった。肩を叩いて劣り、その場にマシュがへり込むのを尻目に、俺は投影して魔力の充填を終えていた螺旋剣を黒弓につがえる。

「体は剣で出来ている」　「我が骨子は桜狂う　僕・螺旋剣！！」　

体は剣て出来ている

そう。この魂は剣ではない。だが体は、間違いなく剣なのだから。

「体は剣で出来ている」　「我が骨子は桜狂う　僕・螺旋剣！！」
者の宝具なら相性がよく防げたかも知れなかったが、カラドボルグを防ぐには全霊を振り絞らねばならなかっただろう。

「単独で射撃と防御、どちらも俺達を上回るか…」

流石、と言えば自画自賛になるだろうか。マシュの腕をとり、立たせてやって、アイアスと闘合していた投影宝具の魔力を暴発・爆発させる。

「先輩…今、宝具を投影してませんでしたか…！？」

その話は後でする。今は走れ！距離を詰める、遠距離だと分が悪い！

マシュが我が目を疑うように目を丸くして、驚っていたが、相手にしない。する暇がない。

爆発が収まり、光が消えると、弓兵は獲物の思惑を悟って舌打ちする。獲物が二人、円蔵山に入っていこうとしていたのだ。

今まで矢を射ても牽制にしかならない。足は止まらないだろう。

今から矢を射っても牽制にしかならない。足は止まらないだろう。

爆発が収まり、光が消えると、弓兵は獲物の思惑を悟って舌打ちする。獲物が二人、円蔵山に入っていこうとしていたのだ。

マシュが我が目を疑うように目を丸くして、驚いていたが、相手にしない。する暇がない。

爆発が収まり、光が消えると、弓兵は獲物の思惑を悟って舌打ちする。獲物が二人、円蔵山に入っていこうとしていたのだ。

今から矢を射っても牽制にしかならない。足は止まらないだろう。

今から矢を射っても牽制にしかならない。足は止まらないだろう。

今から矢を射っても牽制にしかならない。足は止まらないだろう。

爆発が収まり、光が消えると、弓兵は獲物の思惑を悟って舌打ちする。獲物が二人、円蔵山に入っていこうとしていたのだ。

今から矢を射っても牽制にしかならない。足は止まらないだろう。

爆発が収まり、光が消えると、弓兵は獲物の思惑を悟って舌打ちする。獲物が二人、円蔵山に入っていこうとしていたのだ。
卑の意志なのか士郎くん！

卑の意志なのか士郎くん！

黒化した弓兵の射程圏内を脱し、俺とマシュは円蔵山の洞窟に突入した。

薄暗く、大炎に呑まれた街にはない冷気が漂っている。だが、目には見えなくとも、濃密な魔力が奥の方から流れ込んでているのがはっきりとわかった。

聖杯が顕現しているのだ、とかげた冬木の聖杯を目当てにしていた俺は確信する。

ちととマシュを見る。戦うことが怖いと思う少女を、戦いに引き込ませるを得ない己の未熟を呪う。

先程のアーチャは、間違いなく英霊エルミヤだ。俺が奴ほどの戦闘技能を持っていなかったために、こうしてマシュを戦いに駆り立てざるを得ない。

霊基という壁がある。人間がサーヴァントに太刀打ちできる道理はない。そんなことはわかっている。だが理屈ではないのだ。戦いに生きた英霊エルミヤと、戦いだけに生きるつもりない俺。差が無い。

し続けている奴に勝てる訳がないのは当たり前だ。なのに、俺は自分の力を過信して、ある程度は戦えるはずだと慢心していた。
そんなはずはないのに。サーヴァントという存在を知っていたの
に。なんたる恥かさ。先程も、マシュが宝具を擬似的に展開して
いなければ、俺は死んでいただろう。
俺の戦いの能力は人間の域を出ない。固有結界とその副産物であ
る投影がなければ、到底人外に立ち向かうことはできなかった。固
有結界という特大の異能がなければ、俺は切嗣のような魔術師殺し
となり暗殺、狙撃を重視した戦法を取りていただろう。そして、そ
れはサーヴァントには通じないものだ。
俺は、確かに戦える。しかし必ずしも戦いの主軸に立つ必要はな
いのだと肝に銘じなければならな。今の俺に求められているのは
マスターとしての能力だ。強力な1マスターではない、必勝不敗の
マスターになることを求められているのである。
勝利だ。俺が掴まねばならない物はそれしかない。
この身にはただの一度も敗走はない。しかし、これからは不敗で
はなく、常勝の存在として君臨するしかなかった。それはあの英霊
エミヤにも出来なかったこと。それとも、俺は人間のまま、奴より弱
いままに成し遂げなければならないのだ。
故に——
マシュ。これから敵と交戦するにあたって、俺の出す指示に即応
できるか？
戦いは怖いだろう。
怯えはなくならないだろうか。
そんな物に触れたくない。そう思っているはずだ。
お前に戦えと命じる。俺を呪ってもいい、俺の指示に迷うな従えか。
「はい。」
即答、だった。
「戦いは怖いだろう？怯えはなくならないだろう？辛く、痛い。
恐怖はある。不安に揺れる瞳を見ればわかる。
だが、それ以上に強く輝く意思の萌芽があった。
わたしは先輩のデミ・サーヴァントですから。
それに、先輩を守りたい。その思いは本当だって、わたしは胸を張れます。
だから、迷わなくてもありません。先輩のために、わたしは戦います。
そうか、と頷く。その健気がさに報いる術を今、俺は持っていない。
あらゆる感傷を、切り捨てる。この思いを、利用する。蔑まれるかもしれませんが、嫌われるかもしれない。
それでも俺は、勝たねばならない。俺のために。
そのために。俺の戦い方を、ここにマシュに知ってもらう。

マシュが生きた世界を守る。俺のために。

その結果、マシュに嫌悪されることになるとも。俺に迷いはな
「なならいない。―勝つぞ。
勝ってカルデアに帰ろう」
「はいっ！」
気合の入った返事を、俺は更に決意を固める。
狭い通路を抜けて、拓けた空間に出た。
大聖杯は近い。肌に感じる魔力の波動がそう強くしていられる。
それって、「―ここまでだ、衛宮士郎」
俺とマシュの行く手を阻むたため、前方に弓兵のサークヴァンが実体化した。
「やはり来たか」
ぼつりと呟く。
物理的に考えれば、俺とマシュを狙撃できる高台からここに先回りしてくるのは不可能である。だが、奴はサーヴァント。霊体化し、神秘を宿さない物質を素通りできる存在。何を思ったのか、俺は俺に語りかけてきた。

どうなんだ。なんだって英霊化した自分と対峙することになる。出来の悪い鏡でも見せられている気分だ。

何を思ったのか、奴は俺に語りかけてきた。

そうなんだ。なんだって英霊化した自分と対峙することになる。出来の悪い鏡でも見せられている気分だ。

どうなんだ。なんだって英霊化した自分と対峙することになる。出来の悪い鏡でも見せられている気分だ。

どうなんだ。なんだって英霊化した自分と対峙することになる。出来の悪い鏡でも見せられている気分だ。

どうなんだ。なんだって英霊化した自分と対峙することになる。出来の悪い鏡でも見せられている気分だ。

どうなんだ。なんだって英霊化した自分と対峙することになる。出来の悪い鏡でも見せられている気分だ。
びくり、とエミヤは眉を動かした。彼の抱く願望からすれば、衛宮士郎を見逃すなんてあり得ない。仮に見逃すとしたなら、それは私情を抜きにして動かねばならない事態となかったか、巡りあがった衛宮士郎が正義の味方にならないと、英霊エミヤと別人になる判断したかになる。そして、俺とのやり取りで、エミヤは不敵に笑って見せた。俺がセイバーサーヴァントと共に戦い抜いた衛宮士郎だと悟ったのだろう。記憶の持ち越しさは普通は出来ない。つまりエミヤが俺を識っていることは、このエミヤもまた第五次聖杯戦争の記録を記憶として保持していることになる。特殊な例だった。

自分殺しがエミヤの望み。正確には、自己否定こそが行き着いた理想の結末だ。同様はしない。俺は奴とは別人だが、それを見かえて賃ようとも思うわけではない。奴が俺がエミヤにならないと知っても、ここを守る立場にある以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘は避けられないだろう。なら奴は所詮、倒すべき敵である以上は戦闘是
外はお粗末に過ぎる。なんだ先程の体たらくは。生前のオレなら、
二十七程度の剣弾などすべて持ち落ちている。
なるほど……あればまだ、本気ではなかったのか。
螺旋剣の一撃を殺す気で放ったが、それ以外は全力でなかった、と。
笑いただろうだ、英雄王の言う通り、俺は道化の才能がある
のかもしれない。
ああ、とても安心したよ。
そうか。なら、やっぱり俺達は別人だ。
それがはっきりして。
鏡合わせのような姿だ。英霊と人間、僕作と僕物、強者と弱者。
俺とエミヤは同時に干将・莫耶を投影した。
両腕をだらりと落とし、戦闘体勢に入る。
ようかよ。じゃあ、最後に一つ言わせておこう。
ぞう、オレは失望したがな。
貴様には殺す価値もないが、生憎どこを通すわけにもいかん。
ここで死ね衛宮士郎。たとえ別人であったとしても、その顔を見ていると吐き気がする。
そうだとも、最後に一つ言わせてもらおう。
ぞう、オレは失望したがな。
貴様には殺す価値もないが、生憎どこを通すわけにもいかん。
ここで死ね衛宮士郎。たとえ別人であったとしても、その顔を見ていると吐き気がする。
そうだとも、最後に一つ言わせてもらおう。
ぞう、オレは失望したがな。
貴様には殺す価値もないが、生憎どこを通すわけにもいかん。
ここで死ね衛宮士郎。たとえ別人であったとしても、その顔を見ていると吐き気がする。
そうだとも、最後に一つ言わせてもらおう。
ぞう、オレは失望したがな。
貴様には殺す価値もないが、生憎どこを通すわけにもいかん。
ここで死ね衛宮士郎。たとえ別人であったとしても、その顔を見ていると吐き気がする。
そうだとも、最後に一つ言わせてもらおう。
露骨な敵意。エミヤが悪意を抱く、唯一の相手。それが俺だ。その俺が今から吐く言葉は——きっと毒になる。

お前は、正義の味方に一度でも成れたら？

『なあ、アーチャー』『なんだ』

『お前は、正義の味方に一度でも成れたら？』

一瞬、その問いにエミヤの顔が歪む。亀裂が走ったように、動きが止まった。

それは、奴にとっての核心。エミヤを象る理想の名前。俺は精一杯得意気に見えるよう表情を操作した。

俺が、さも誇らしげに語っているように聞こえるように、声の抑揚にも注意を払う。

「答えろアーチャー。お前は正義の味方だとも？そんなものは幻想の中にしか存在しない偽りの称号だ。存在しないものになど成れるものか」

「……なに？」

「……なに？」

失望したように。

笑いを、こぼす。

エミヤの顔色が変わった。俺にとっての、正義の味方の表情が苛
立ちに染まる。
「何が言いたいね？」「お前は俺のことを弱者と言ったな？その通り、俺は強い。お前は俺のことを弱者と言った訳だが……そうか成れなかったのか。正義の味方に。それが気になってな。その如何を是非とも聞いてから……言いたいことはそれだけか」「いいや今のくは聞きたかったことだ。言いたかったのは、こうだ。エミヤに、空白が打ち込まれる。俺の告白は、奴にとってあまりにも重く、無視しがたく、流せない言葉だったのだ。俺は、更に一言、告げた。
「……黙れ」
「わかった。黙ろう。だがその前に謝罪するよアーチャー。すまなかった。そしてありがとう。悪として立ちふさがるお前を、正義の味方として倒す。分かりやすい構図だ。善悪二元論……喜べ。お前は悪として、俺の正義を証明できる」
エミヤの目から、色が消えた。
その鷹の目が、俺だけを見る。俺だけを捉える。
やれるのか、マシュは。一瞥すると少女は頷いた。揺らがない、
少年は決してブレない。戦うのは、自分のためでなく。ひとえに己
のマスターのためだから。

「マシュー！突撃！」
マシュ！キリエライト、突貫します！

了解！マシュ、キリエライト、突貫します！

マシュ！突撃！

大盾を構え、突撃するマシュ。それをアーチャーは無表情に迎え
攻撃に移る前兆。
俺は弾けるように指示を飛ばしていた。

大盾を前面に押し出し、質量で攻めるマシュ。それをアーチャーは無表情に迎え
撃った。
大盾を前面に押し出し、質量で攻めるマシュ。それをアーチャーは無表情に迎え
攻撃に移る前兆。

俺は弾けるように指示を飛ばしていた。
払い、マシューの体を横に流した。そこで、俺の投擲していた干将と莫耶が迫る。マシューに対していたような流麗な剣抜きが見る影もなく荒々しくなった。完全に力任せの一撃。俺を否定するように干将と莫耶を叩き落とし、まっしぐらに俺にぶつかったこのようにして、させじとマシューが横合いから殴りかかる。
「…！」「させ、ません…！」
マシューの膂力はアーチャーを凌駕している。まともにやれば押し負けるだろう。だが英霊エミヤとて百戦錬磨の練達。今さら自分よりも力強かにマークは押倒的に経験が足りなかった。デミ・サーヴァントとなっ盾の英霊の戦闘能力を遂にいても、それを活かせるだけの経験がないのだ。心と体の合ーしていない者に、アーチャーは決して負けることがない。それを証明するようにアーチャーは再度、マシューをあしらう。懸命に食いつくマシューを打ちのめす。強靭な盾を相手に斬撃は意味をなさない。斬るのではなく叩く、打撃する。呵責のないアーチャーの功績にマシューは再び競り負け─俺は黒弓を投影し、剣弾を放ってアーチャーの追撃を断った。
―マシュー、援護する。一心に挑み、戦いのコツを掴むんだ。胸を借りつつもりで行け。
名もない名剣を弾丸として放ちながら俺は立ち位置を調整する。

マシュアーチャーがぶつかり合い、果敢に攻めるかげる少女にアドバイスを送りながら援護した。

「攻めろな！押すだけでいい！その盾の面積と重量は立派な武器だ。防御を固め体ごとぶつかり墜てものがないが、俺は立ち位を調整する。」

「はい！はあーい！」

途端、鬱陶しくアーチャーは眉を顰めた。

素人が様々な工夫を凝らそうとするより、単純で迷いのないワンパターン攻撃の方が余程厄介なものだ。マシュの耐久はＡランク。盾の英霊の力もあり、並大抵の攻撃で怯むことはない。必然、アーチャーも威力の高い攻撃を選択しなければならない。そうすると一拍の溜めが必要になる。そのために、アーチャーはマシュを振りきれず、大技に訴え排除しようにも別の宝具を投影する素振りを見せばそれを俺が妨害した。そして頼合いを見計らい、俺は新たに干将を投影する。すると、先に俺が投擲し叩き落とされていた莫耶が引き寄せられ、アーチャーの背後から襲いかかる形になる。

「そこ…！」

「そこで…！」
マシュが吠え、空中にあるアーチャーにぶつかった。哈っ、敢えて突撃を受け吹き飛ばされたことで距離を取った。慌てて詰め込んできたマシュに向かって干将と莫耶を投じる。咄嗟に盾で防いだマシュの視界が一瞬塞がり、アーチャーは自ら踏み込んで死角に回り込まれた。干将と莫耶を投う双剣を防ぐも、己の双剣で俺の双剣を押さえ込み、ゼロ距離にまで踏み込んでアーチャーに頭突きを食らわせてしまう。更に距離を詰められたアーチャーはあろうことか双剣を手放し拳を放ってきた。わかっていても防げない堅実な拳打。こちらも双剣を捨て両腕を立て頭と胸を守り防衛に専念する。拳を防ぐ腕の骨が軋んだ。強化していてなければ一撃で砕かれていただろう。歯を食い締めて堪え忍ぶ。
コンバクトに纏められた無数の拳打、三秒間の内に防いだ数は十か八撃。ガードを崩す為の拳撃だとわかっていても、到底人間には容できない威力に俺の防御が崩される。

腕の隙間を縫った奴のアッパーカットが俺の顎に吸い込まれた。

俺は反射的に飛び下がっていた。一瞬前に俺の首があった位置を干将の刃が通過して行く。アッパーカットを当てると流れるように双剣を投影して首を狙ったのだ。

追い撃ちに来るアーチャーの剣を、なんかか双剣を投影して防ぐ。俺とアーチャーの双剣が激突し火花が散った─瞬間。

「あ、当たった…？？…？？」

「くっ……！？」

アーチャーもまた戸惑ったように動きが鈍る。どこにマシュが駆け込み、大盾でアーチャーを殴り飛ばした。

まともに入った一撃に、マシュ自身が最も戸惑っていた。

俺は血を吐き捨てる。口の中を切ってしまって驚いた。
大丈夫だと思いつつ、と思う。なんだ今の話は、と。
（知らない男がこちらに向けて泣き絆り、白髪の男が無念そうにし
ている光景）
— そんなものは知らない。
— もう少し言か。
バカな、と思う。愕然とした。
バカな、と思う。
パワんな、と思う。
怪談だ、なんて。
少し言いか……
ま也是……アーチャーの、記憶。
かつての、俺と士郎生きの記憶で……
そんなものはない。
たことのない事象がどんなと。
「これは、なんだ？」……まさか……アーチャーの、記憶。
か？
溢れる未知の記憶が、光となって逆流していく。見えたことも聞き
たことのない事象がどんなと。
前世の自分が降霊し、前世の自分の技術を習得する魔術があると
いう。アーチャーと衛宮士郎は人間としての起源を同じくする故に、
特例として互いの記憶を垣間見て、技術を盗むことが可能だった。
現に俺の知る『衛宮士郎』は、アーチャーとの対決の中で加速度
的に成長していた。それは、アーチャーの戦闘技能を文字通り吸収
していたからであり、同時にアーチャーの記憶をも見てしまってい
たからだ。
翻ること、この俺は『衛宮士郎』ではない。自分の名前が思い出す
ずとも。かつての自分が何者かわからないと。俺は俺であり、俺以
外の何者でもなかった。
だからあり得ないのだ。俺がアーチャーと——英霊エミヤと共鳴
だってこれは、エミヤシロウ同士でないとあり得ないことで。
それに記憶を垣間見ることになるなんてことは。
俺がアークチャと—

「先輩！どうかされたんですか？！まさかアーチャーが魔術を使っ
て……？……先輩！しっかりしてください、先輩！」

「マシュ、俺は、誰だ？」
「先輩は先輩です。それ以外の何者でもありません」

「貴様は……」
「衛宮士郎」なのか……？
俺は……いや、まさか、そんな……。

「先輩！どうかされたんですか？！まさかアーチャーが魔術を使っ
て……？……先輩！しっかりしてください、先輩！」

「マシュ、俺は、誰だ？」
「先輩は先輩です。それ以外の何者でもありません」

「貴様は……」
「衛宮士郎」なのか……？
俺は……いや、まさか、そんな……。

「先輩！どうかされたんですか？！まさかアーチャーが魔術を使っ
て……？……先輩！しっかりしてください、先輩！」

「マシュ、俺は、誰だ？」
「先輩は先輩です。それ以外の何者でもありません」

「貴様は……」
「衛宮士郎」なのか……？
俺は……いや、まさか、そんな……。
マシュの声は、全力で俺を肯定していた。それに、勇気付けられる。そう、俺は俺だ。感わされるな、俺は全知全能じゃない。知らないことだと思ってある。むしろ知らないことはかりだ。

今、たまたま俺の知らない現象があった。それだけだ。何も変わらない。意見を強く持って、何度も揺らぐ、ぶれるな。大人だろうが！

突如、アーチャーが激昂した。訳がわからない。何をして生きてきた！？

マシュが警戒して前に出る。マシュの認識ではこのアーチャーはエミヤシロウでも、自分のマスターに怪しき魔術を使ったかもしれない。だが、そんなことなど気にもせず、アーチャーは握り締めた拳を震わせて、激情に歪む顔を隠しもせず、歯を剥いて吠え立てた。
「答えろ、貴様はどんな生涯を辿ってきた？」

「何を突然。答える義理はないな」

「なんだあれは。そんな……そんな簡単に……貴様は……貴様が！？」

「誤乱したような有り様だった。あの、英霊エミヤがだ。」

「あらがとう、お兄さん！」

「いや、助かった。若いのによくやるねえ」

「ねえ、ねえ！ シロウ兄ちゃん！ この間話してくれたヒーローの話聞かせてくれよ！」

「助けなに来てくれたの……？ こんな、化け物の根城まで？」

「助けた、シロウさんに出会えてよかった！」

（あがり裝）

「ありがとう……」

（あがり装）

「ありがとう……」

（ありがとう）

（ありがとう）

（ありがとう）

（美味しい！ なんてこれ！ すごく美味しいよ！）

（僕たち、シロウさんに出会えてよかった！）
『ありがとう！』

「なんだ、これは…なぜ貴様の記憶には、こんなにも『笑顔』が
ある！？ これではまるで…正義の味方のようではないか！？」

頭を抱えて、入ってきた記憶に苛まれるようにアーチャーが叫ん
だ。

それは、アニメや漫画にでも出てくるような魂からの雄叫びだっ
た。血を吐くような、嫉妬に狂いそうな魂からの叫びだった。

それは、アニメやマンガにも出てきそうな、ヒーローだっ
た。

アーチャーには分からなかった。何かどうすれば、あんなことにつ
って、エミヤシロウが思い描いた、理想の姿だった。

それが、それを成しているのが、目の前の未熟な衛宮士郎。

「オレが？！ オレがか！？ 周りを不幸にし続けたのはオレのど
こが？！」

嫉妬心のはこちらの方だというのに、奴は必死に問い質してき
る。
俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。そこになじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。俺は俺のために生きている。だから、俺は俺の生き方を選んだ。那里になじむのはなにもない。
先輩！アーチャーは明らかに宝具を使おうとしています！

決然と唱えた文言は、魔力を宿さずとも世界に語りかける荘厳な響きを伴っていた。

その雰囲気だけで察したのだろう。マシュがそう訴えてくるも、俺は首を左右に振って、それを拒否した。

黙って見守る。それは、決して男の生き様を見届けるためなので黙って見守る。それは、決して男の生き様を見るためなのだ。

奴もそんな打算などお見通しなかろう。

だが、それでも、力で押し潰せると奴は考えている。そしてそれは正しい。エミヤが固有結界『無限の剣製』を発動すれば、今の俺は熟なマシュと、不出来な俺は押し負してしまおうだろう。唯一の手段は、俺も固有結界を展開して、奴と心象世界のぶつけ合い、打ち勝つことだけ。エミヤが望んでいるのはそれだろう。自分の世界で、俺の世界に勝つ。そうしてこそこの勝利だ。
詠唱が完成する。紅蓮が走る。世界が広がり、世界が侵食されていく。

見上げれば、綺色の空。無限の剣が突き立つ紅の丘。

空の中で巨大な歯車が回っている。その枯渇した威容がエミヤの心象を物語っていた。

「―固有結界、無限の剣製。やれやれ、俺には一生を掛けてもそんなに道具を貯蔵したりはできないな。

苦笑する。周囲を見渡して改めて、格の違いというものを感じ知めた。

どれだけ戦い続けて来たのか。何かかもを犠牲にして、理想のため歩み続けてきた男の結実がこれか。

盗み見た己の矮小さ、卑小さが滑稽ですらある。

どうした。見ただけで戦意を喪失したのか、衛宮士郎。

『まさか』

俺の辞書に読めるという言葉は載っていない。

試すような言葉に、俺は笑った。
そしって、勝算もなく敵の切り札の発動を許すほどおろかでなさま。

「――卑怯だと思うか？それかお前の敗因だ」

「なに？」

俺は、言った。

気配を遮断したまま、エミヤの背後まで迫っていったサーヴァントに。

「やれ、アサシン。宝具展開しろ」

エミヤは直前になって気づいた。固有時制御によって体内時間を遅延させて潜伏していった状態を解き、攻撃体制に入っただけでゆえに気配遮断が甘くいった第三者に。

「なーー」

「時クロノス・ロウズのある間に薔薇を摘め」

そういうことだと、敏捷Aランクのアサシンが、三倍の速度で奇襲を仕掛けても、これに防げることの直感を、彼は持っていなかった。
急所を狙っ弾丸の洗礼を、腕を犠牲に防いだエミヤに。
容赦なくドメのため、彼の起源を利用して作成されたナイフを投げ放つ。

心臓に直撃を食らったエミヤは、その暗殺者の面貌に、驚愕のあまり目を見開いたまま―
―固有結界を崩壊せし、物も言えぬまま滅ぼしていった。

「―お見事、暗殺者」
「そっちらこそ、我が主人」

面白味もなく、アサシンは己の戦果を誇りもなしにいた。
それでいいのか土郎くん
いつしか変質してしまった聖杯戦争。
万能の杯に満たされたるは黒い泥。
その正体の如何など、最早どうだっていい。重要なのは、この聖杯を与えるなどという甘言に乗せられて、愚かに手を取ってしまっ
た小娘の末がこれだった。
万能の杯に満たされたるは黒い泥。
それでいいのか土郎くん
-
...小娘とてなんの考えもなかったわけではない。自らに接触し
てきた者が人ならざるモノであることを見抜き、その思惑を打ち砕
くために敵えて奴の傀儡となったのだ。
そして掴んだ聖杯を、小娘は使わなかった。
ほん全てのサーヴァントを打倒して我が物とした聖杯を。手に入
ることを切望した善杯を。使わずに、何者の手にも渡らぬよう守
護していたのだ。
この変質した聖杯戦争の裏に潜むモノの思惑を薄々感じ取り、聖
杯の使用は何か致命的な事態を引き起こすと直感したがためである。
しかし、出来たことと言えぼそれだけ。聖杯は呪われていた。な
この特異点は、人類史を焼却するためのもの。即ち人間史のみならず、世界のものを焼き払う所業だったのでも、結局としも、聖杯は膨張し呪いを吐き出し、結果として世界は滅びてしまったのだ。小娘のしたことなど、所詮は徒労。滅びを遅らせるのが精々だったのだ。

でもしも、肝心のユーヴァシラムが消えないからには、死ぬことになる。それは人類史が滅びるが故の異常事態である。もしも人類史が焼くこともなく、アーサー王が英霊の座に登録されたといけない。

英霊の座の招かれることにはならないはずだったが、そのアヴァロンが無くなると、アーサー王は、アヴァロンにて眠りにとどまるということになる。アヴァロンによる死に至ったのなら、英雄は一部例外を除いて座に招かれることになる。

アーサー王は、アヴァロンにて眠りにつく定めだった故に、死しても英霊の座に招かれるということはないはずだったが、そのアヴァロンが無くなったのだから、アーサー王が英霊の座に招かれることは、ここにいたアーサー王もまた滅んだ、ということだ。
う事実も消え、アヴァロンにて眠りにつくことになるだろうが、それはまだ先の話。

否、夢物語か。

現時点のアーサー王は既に生者ではなく英霊として存在している。

故にこそ、この冬木立に在るレヴァントのアーサー王は、自分が平世界の聖杯戦争で戦い、そこで得たものの記録を共有することになったのだ。

― よもやこの私が、な……。

聖杯に侵され、黒く染まり、属性の反転した我が身ですら微笑をこぼしてしまうほどの驚きだった。

まさか平行世界で自分がこの時代に召喚され、仰いだマスターを女として愛する可能性があったなど、まさに想像の域外の出来事であったのだ。

黒い騎士王は鉄面皮を微かに崩し一瞬だけ微笑む。だが、それも本当に一瞬だけ。騎士王を監視する者も気づくことはなかった。

蛻のような病的に白い肌、色の抜けた金の髪、反転して掠れた黄色い瞳。金瞳。

その絶対悪を無感動に眺め、佇む姿は彫像のようであった。

この特異点の黒幕とも言える存在の傀儡となって以来、ただの一
度も口を開かずにいた騎士王はそれとなって漸く、氷のように
表情にぎざ波を立てる。

それは、確信だった。銅のような気配が乱れ、消えていくのをは

黒い鎧を軋ませ、この大空洞に至る入り口を振り返った。

―アーチャーが敗れたか。

赤い外装の騎士、アーチャーはこの聖杯戦争で最も手こずった相

手である。

のもが大英雄であるバーサーラーは理性無きが故に、赤い弓兵ほ

どには苦戦せず、その他の雑兵のような英霊ばかりであった。もし

もあのキャラスターが槍兵のクラスだったなら最も手強い強敵と目し

たろうが所詮はドルイド、反転して低下したが、極めて高い対魔力

を持つ騎士王が正面から戦えば敵足り得るものではない。

そんな中、英霊としての格は最も低かったであろう赤い弓兵は、

徹底してまともに戦わず、遅延戦術を選択して遠距離戦闘をこちら

に強いた。マスターを失っても、単独行動スキルがあるためか逆に

枠がなくなったとも言うように･･･魔力が尽きるまでの二日間、

黒い騎士王を相手に戦い抜いたのである。

見事である。その戦果に報いるように騎士王はアーチャーを打ち

倒した。彼の戦いぶりは、それはほどまでに見事なものだった。

そして、反転した騎士王の手駒となってからは、アレが騎士王の

許に寄せぬように、門番となって守護する者になることを選んだ。

その在り方は、騎士王をして見事と言えるものだった。円卓にも劣
そんな男が、戦闘をはじめ半刻もせずに倒されたとは、にわかには信じがたい。

一いや。あの男の持ち味は、冷徹なまでの戦闘論理にある。泥に侵され思考能力が低下すれば、案外こんなものか。

加えてあの場所は、彎曲として全に戦える戦場でもなかった。

しかし問題は、誰があの男を倒したかだ。

唯一の生き残りであるキャラスター、アイルランドの光の御子は、槍兵のクラスだったなら近距離戦でアーチャーを一蹴するだろう。

あの大英雄には矢避けの加護もある。相性の良さから騎士王が手こずったほど苦戦することもなかったはずだ。

だが、光の御子はキャラスターとして現界した故に、アーチャーの弾を凌ぐことはできても詠唱できず、攻勢に回ることができなかった。

しかも、黒化したサーヴァントに追われ、ゲリラ的に戦い続けている中でもあったはず。聖剣すらも凌いで逃げ切る辺り呆れたしぶとさだが、逆に言えばそれだけでも、単独でこちらに攻めかかることは出来ないはずだ。
は
む
む
特
抑
―
そ
・
信
え
身
来
異
で
る。
暫・
の
じ
力
積
と
に
は
が
あ
力
男
の
も
私
ず
良
の
い。
と
れ
然、
既
の
い
を
者
化
ば
働
た。
へ
り
っ
を
撃
持
ら
・
の
こ
は
力
で
道
理
は。
ち
守
明。
ち
塞
ら
く
こ
王
は
ア
て
う
羽
が
の
果
る
が
を
術
し
ず、
偉
が
ん
tた
測
に
が
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
は
杯
オー
が
の
果
る
と
る
が
を
術
し
の
自
理
は
騎
是
求
を
出
の
な
ど
び
人
ト
ラ
し
に
び
あ
ふ―
う
リ
き
な
の
に
術
が
ん
過
術
は
も
を
し
付
る
び
ア
ド
て
う
挑
打
す
は
対
合
う
ダ
レ
か
ン
の
小
を
持
た
も
で
覆
し
と
付
る
者
じ
か
ン
ド
か
ン
ア
ド
ラ
ン
ン
と
る
に
が
こ
王
ア
ド
も
で
覆
し
と
付
る
者
じ
か
ン
ド
か
ン
ア
ド
ラ
ン
ン
と
る
に
が
こ
王
ア
ド
も
で
覆
し
と
付
る
者
じ
か
ン
ド
か
ン
ア
ド
ラ
ン
ン
と
る
に
が
こ
王
ア
ド
も
で
覆
し
と
付
る
者
じ
か
ン
ド
か
ン
ア
ド
ラ
ン
ン
と
る
に
が
こ
王
ア
ド
も
で
覆
し
と
付
る
者
じ
か
ン

弓兵を倒し、先に進んだ。

何か物言いたげなマシュの頭に手を置き、今は勘弁してくれと頼んだ。

嘆息一つ。仕方ないですね、とマシュは微笑んだ。困ったような笑顔に、やっぱりマシュはいい娘だなと思う。普通、あんな卑劣な戦法を取った奴に、そんな含みのない笑みを向けられるものでない。

しかし、「勝つために仕方ないです。この特異点をなんとかしないと、人類が危ないんですから」と言われた時は、流石に閉口してしまってそうだった。無垢なマシュが、自分に影響されていくようで、なんとも言えない気持ちになったのだ。

それでも、もう心は固めている。特異点となっているのが冬木と聞いた時から、覚悟は決めていた。木と聞いた時から、覚悟は決めていた。進んだ先に、顕現した聖杯を仰ぎ見る。十年前に見て、破壊した運命を直視する。そして、その下に。いつか見た女の姿を認めて、俺は一瞬だけ瞑目した。
先輩？
どうかされましたか？

「騎にと俺先――本で入し天理ら気にま先……」

当て王て偽屈のシ視だ。苜にだて仰じせゃ自死ないく。れ落いが、でマっウェ。思たてなじない。『合口う貴くしろ同んたな癖は方たない。俺じて俺い。』を、だい悪衛のなのつれって。黒愛一らおが、けなだる目くに黒くの姿りす。

―乗り目が合った。

―騎士王だった。騎士王だっ。騎士王。

―悪く思う。俺は、お前を殺す。

―シロウ。貴方を、愛しています。
その言葉は果たしてこの身の欺瞞を見破った上でのものなのか。
彼女が愛したのは、「衛宮士郎」なのではないか。
生き残る為に「衛宮士郎」を成し遂げた達成感に、これ以上ない多幸感に包まれて、彼女を偽っていた罪悪感を忘れた俺に、今更わかる顔などあるわけがなかった。
俺は「衛宮士郎」ではない。事実がどうあれ、俺はそう信じる。
俺が「衛宮士郎」ではない証拠など何もないが、信じて生きていく決めていた。
俺はあの時の俺じゃない。最低な言葉。
俺はあの時の俺じゃない。あの思いを、否定する。
「お前が愛したのは、俺じゃない」
「セイバー」。「お前を、殺す」
呪われた大剣、赤原猟犬を弓につがえる。決意を固めるため、言葉を交わすこともせず、俺はもう一度、自分に言い聞かせるために呟いた。
「セイバー」。「お前を、殺す」
愛した女への思いを忘れ去る。

「許しは乞わない。罵ってもいい。殺そうとしてもいい。だが殺されてもやけに、屑。」

「俺に敵対するのなら、死ね」

心を固め。魂が鋼となる。

最後に、しっかり言葉に出し、俺は宣言した。

「勝ちにいく。奴を倒すぞ、マシュー。俺と、お前とでだ」

「はいっ！」

勝算はあつてアレンジア。あの日、お前と共に戦ったことを、俺は今でも覚えているんだから。
約束された修羅場の士郎くん！

一人の愚か者が、その女を愛していたのだと気づいたのは、全て

その時の俺は「衛宮士郎」の演目を終え、無事に生き延びたこと
に無上の達成感を覚えていた。

第五次聖杯戦争を勝ち抜くために無上の達成感を覚えていた。

「衛宮士郎」をやめて周囲の者に「変わったな、衛宮は」と言わ
れた。俺は変わったのではなく、他人を演じるのをやめただけの
だと、わざわざ告白するようなことはしなかった。

パイトはやめなかったが、色々なことを始めた。野球、サッカー、
水泳、陸上……将棋に囲碁に、語学に料理。思い付く限りのことに
手を出した。

何をしても楽しかった。何をしなくても充実していた——なのに
どこか物足りなかったのは何故か。
漠然と、完成したはずのパズルに、最後のピースが足りないと思っただけ。何が足りないのか。考えてもよくわからない、暫くのあいだ首を捻らなが 얼마나した。何かに足りないのかも。考えてもよくわからず、暂时のあいだ首を捻らながためた。何が足りないのかも。考えてもよくわからず、暫くのあいだ首を捻らながためた。

胸の中に空いた空白。それの正体に気づけたのは、冬木を飛び出したすや真っ先にイギリスのアーサー王の墓に足を運んでしまっていたからだ。なぜ、自分はこんなところで来ているのか。呆然と墓を眺めて、俺は漠然と、その事実は胸に落ちた。すとん、とその事実は胸に落ちた。

一目見たあの時、恋を知って。
日々を共にして思いを深めて。

『ああー』
体を重ねて情が移って。

いつしか俺は、彼女のことを心から愛し、その感情に蓋をして。

赤原を征け、緋の獵犬——

「赤原を征け、緋の獵犬——」

「魔力の充填に要するのは四十秒。黒弓につけられた魔剣が、
進る魔力が、解き放たれる寸前の獵犬を彷彿とさせた。狙った獲物に今食いつかんと欲する凶悪な欲望を垂れ流している。

単身、突撃していくマシュを視界に修めつつ、俺は食い入るようこちらを見る黒い騎士王に、これまでの全ての思いを込めた指先で応えた。

ぎり、ぎりり、ぎりりり——！
黒弓の弦に掛けられた指が。つがえられた魔剣が。俺の中にある雑念を吸い上げ、燃料として燃えている錯覚がした。

そうだ。全てを吸え、呪いの魔剣。心の中で呟く。そして行け、
俺はマシュを吹き飛ばした。一度、二度、三度。幾度も同じことを繰り返し、何を咎立ったのかセイバーへマシュに向かって頭身上の鎗撃を叩き込む。成す術なく薙ぎ払われ地面に叩き伏せられるも、受け身をとってすさま跳ね起きえたマシュだったが、眼前にまで迫っていたセイバーの姿に、ハッと身を強ばらせてしまった。ちょうど、四秒。ああ、とどこかを狙い、遂に赤原猟犬を解き放つ。解放の雄叫びをあげると、魔剣を獲物目掛けて飛翔した。音速の六倍の早さで飛来した魔剣、それと一瞬たりともちちらへの警戒を怠っていたなかった実剣手の真に、俺の魔弾を弾き返した。だが、一度失敗された程度で獲物を誘める猟犬ではない。射手が狙い続ける限り、何度でも食らいつき続ける魔剣の脅威は、並みではない。弾き返された魔弾はその切っ先を再度騎士王に向け、執念深く襲いかかっていった。それを目にしながらも手を止めない。新たに偽螺旋剣を投影する。壁際のマシュが足止めし、俺が狙撃する。セイバーの癖は知り抜いていた。必勝の機を作り出すのは不可能ではない。このままフルコンディングで食い止め、カラボルゴを射掛ける。そして二つの投影宝具をセイバーの至近距離で爆発させれば仕留められる。そこま
「偽・螺旋剣……」

「……」

「偽・螺旋剣」

無造作にエクスカリバーの撃ち終わりの隙を突き、冷徹に投射宝具を射る。
魔力の充填は不十分。本来の威力は期待できない。だがそれがどうした。セイバーがこの特異点で、アーチャーと交戦し始めているのは既知のこと。あの男の固有結界から引き出した魔剣を、セイバーに赤眾獅犬を餌とした。セイバーなら、迷わずに魔剣とマシュを同時に破壊するために魔剣を解放すると分かっていた。その上で確実に隙を作る。故のフルディング、魔力が充填されておらずとも一定の効果が見込めるカラドボルグなのだ。

音速で奔る偽・螺旋剣を、しかし騎士王には直撃させない。この投影道具は張りぼて、聖剣の一振りで砕かれる程度の代物。聖剣がぎざぎざで届かない程度の間合いを通過し、周囲の空間ごと削る虹の魔力で騎士王を絡めとるのか関の山。聖剣を防いだ体勢のまま…。疑似展開された道具を構えたままマシュが光を纏ってセイバーに突進した。

巨大な壁となってぶつかる螺旋剣も、黒い騎士王の挑戦を討たすための道具。しかし展開された盾の道具をどうこうできるものでなく、聖剣の真名解放をしようとも偽・螺旋剣の空間切削に体を巻き取られている体勢を崩しているため不可能。果たしてマシュの突撃をまともに食らったセイバーは、切り抜きしながら吹き飛んだ。

フルディングとカラドボルグ、前者が先に破壊されたパターン
時、どすれいかいらじめ指示を出していったとは、よく合わせたとマシュを誉めやりたが、まだ仕事は終わっていな。

宝具を展開したまま、体にかかる負担を強いる戦法を取らせたが、その程度の無理もせずして騎士に有効な攻撃を当てるとは無理な話だ。

俺は吹き飛んだ騎士王に向け、一瞬の躊躇もなく、淡々と無銘の剣弾を叩き込む。予測通り騎士王の反応は遅れ、無銘の剣弾は騎士王の眉間を吸い込まれていっ—「やった！」

マシュが快哉を叫ぶ。はじめ、マスターである士郎から、セイバーの真名を聞かされたい時は不安になっただが、士郎の言う通りに動いただけで面白いうのは上手くことが運んできた。さすが先輩と両手を広げ、体全体を使い賞賛の意を表する。

そこで、宝具を酷使して疲弊させたとことに対する不満はなない。マシュの中には、やるべきことをやれと誇らしめがあるけだ。
その剣は狙い過たず、士郎が放った。直撃したように見えて、マシュは勝ったのだろうと駆け寄ろうとしたが…何故か、士郎は顔色を険しく、無言で次々と騎士王へ剣弾を撃ち込む続けた。塵を残さぬとでも言うような死体に鞭打ち非道。さしものマシュも面をしかり、何をしているのかと問い掛けようとして…緊迫した士郎の顔がそれを許さなかった。

射掛けられた剣弾が次々と着弾、爆発を繰り返し、土煙が巻き起こる。それを目を細くして眺め、残心していた士郎だったが、やっとぼつりと呟いた。「…流石。」

「マシュ、カバーだ！」「マシュ、カバーだ！」
反射的にマシュは士郎の元に駆る。だが、遅かった。
「マスター！」
「うるさい！　黒い砲弾が士郎に襲いかかる。」
少女が悲鳴のような声をあげた。士郎は事前に干将と莫耶を投げ、腹に中った黒い聖剣に異変を起こした。地を踏み切る巨大な💥を地面に逃がすことに成功した。地面が陥没し弾け飛ぶように下がった士郎が、更に深く踏み込んでいた士郎を聖剣で振り下ろした。
二撃。三撃。四撃と受け流しながら後退するも、双剣が砕けた瞬間に次の影をさせと、足元で魔力をジェット噴射し、息を吐く間に与えず斬りかかる。
果してマシュは間に合わなかった。武器を無くした士郎は両手を空のまま。首に突きつけられた聖剣前に膝をつく。
二人の目が合い、一瞬見つめ合う。様々な感慨が胸中に突き、ま？口を開いたのは漆黒の騎士王だった。
「ええ。それでも、彼の戦力はかけ離れている。惜しいところでもしたが、今回は私が上回った。それだけのことです」
言った騎士王の左腕は折れていた。黒い甲冑もほとんどが破損し、全身無事箇所の方が少ない有り様だった。それでも、なお騎士王は士郎を上回っている。否、片手でも全力の士郎を制すことができた。しかし、一目で貴方だと私はわかった。

「貴方の容貌がアーチャーと同じものになっていたことには驚きが
呟きたが、士郎はちろとマシュを一瞥した。こっちに来るなと視線で制する。

だが私以外の者をサーヴァントにするとは、捨て置けることでは
ありません。しかもよりによって彼の英霊の力を持ったサーヴァントとは……

お陰さまで、相性はいいようなだな

俊がいる。穢れのない高潔な彼と、穢れをよしとしない貴方
は確かに相性はいいかもしれない。しかし、それとこれとは話は別
だ。

静かに紳士騎士王に、しかし士郎は無感情に呟いた。
刹那、士郎は挑むようにかつてのサーヴァントを睨み付ける。ぴり、と騎士王の首に悪寒が走った。背後から回転しながら飛来する双剣。背後からの奇襲に、見違えていないにも関わらず咄嗟に反応。騎士王は振り返り様に聖剣を一閃し、一撃で双剣を砕いた。だが、その隙を逃す士郎ではない。背中を蹴りつつて自身も後ろに跳び、間合いを離しながら黒弓と剣弾を投影。射掛けながら更に後退する。「馴れ合うつもりはないぞ、セイバー」「駄れ合うつもりはないぞ、セイバー」「ならば、手足を折ってでも付き合ってもらいます」「……プランBだ。畳み掛けるぞ、マシュ」「……はい。行きますよう、わたしも全力を尽くします」驚異的な回復力だった。秒刻みで全身の傷が癒えていく様は、あと数分で全快することを教えてくれた。マシュは、今度こそ士郎に駆け寄り、その盾となるべく身構えた。寄り添い合うその様を、無表情に、しかしだらたしげにセイバーは睨み。いざ、決戦となる段で。不意に第三者的声が響き渡った。
「よう、楽そうじゃねえか。オレも混ぜくれよ」それは、この戦局を動かす想定外の要素。ドルイドの衣装に身を包んだけルール神話最強の英雄、光の御子クー・フリュンが、士郎達の背後に入ってきた。

「…」
約束された修羅場の士郎くん！

「…貴方が、キャスター！…」

忌々しいに吐き捨てたセイバーの殺意が、半ば八つ当たりのように一点に集中し、聖剣の切っ先が微かに揺らした。
それは動揺というより、新たな獲物に対する威嚇行動に似ている。

黄金の瞳が殺気に彩られて凍絶に煌めき、主の鬼気に対応するように黒い聖剣が胎動する。

セイバー・フーリンは明らかにこちらを邪魔者と断じている。ドルイドのクー・フーリンは苦笑した。にやにや囚縛を感じさせる両者の間に割って入るのは、実のところ気の引けることではあった。

だがこれは変質したとはいえ聖杯戦争。その参加者であるクー・フーリンは、騎士王と同じく当事者である。にもかかわらず、異邦のマスターとそのサーヴァントに全てを任せきりにしたままというのほ…流石に無責任というものだ。

筋骨逞しい赤毛のマスター。宝具の投影という異能を振るう魔術使い。あの弓兵に酷似した…否、肌と髪の色以外、完全に一致する容貌と能力の男が、己がサーヴァントと共に慎重に立ち位置をずらす。

それは、新たに現れたクー・フーリンを警戒してのもの。当たり
前の姿勢。不用意に友好的な姿勢を示さないのは当然のことだ。赤毛のマスター、衛宮士郎は様子を窺うようにして、キャスターのサヴァンに問いかける。

「……突然の参入だが、こちらに敵対する意思は？」
それはねえから安心しない。そっちの事情は知らねえが、俺はこの戦争を終わらせるつもりでいるだけだ。

戦争を終わらせるつもりでいるだけだ。
「……なるほど、流石アイルランドの光の御子。この異常事態にあって為すべきことを心得ていると見える」
アーチャー似のマスター、世辞をくれんのは結構だが、いいのか。

意味深に問い返すキャスターに、訝しげに士郎は反駁した。

「見るからに因縁深そうな感じがするが、俺が割り込む事にはなんの恥恥もないのか、ってことだ。」
「あん？どこかで会ったか」
「何かだ」

キャスターは杖で肩を叩きつつ、眉根を寄せ出て士郎を見る。……

少し気になるが。あんたには以前、世話になったことがある。邪隠には出来ない。

しかし思い当たる筋がないのか、なんとも気ままずそうに目を逸らした。

……わっしょい。見覚えねえわ。お前さんみたいな骨太、忘れるとも思えねがー。
キャラターさん、わたしも宜しくお願いします。歴戦のサーヴァントの立ち回り、参考にさせていただきま
すね。

よう。こっちもよろしくな。盾の婊ちゃん。見てたぜ、あの聖剣を防ぎきるとは大したもんだ。俺の方こそ当てにさせてもらう。

それにやりと笑うキャラターだが、実際その力が対魔力を持つセイバーに通じるものか疑問がある。が、彼はアルトリアの光の御子。

それは騎士道精神から来る静観ではない。盾の娘はとてもかくとし、キャラターも士郎も、こちらが動く素振りを見せれば即座に対応できるように警戒を怠っていなかっただけのことだ。

彼女は、自身に対魔力があるとはいえ、決してキャラターを侮っていなかった。純粋な魔術師の英霊ならば戦の勘も薄く、恐れるのはいかなかった。クー・フーリンは歴戦の勇士。槍兵として最高位に位置し、個人の武勇で言えば間違いないアーサー王を上回る大英雄だ。
公の追撃に出ていたはずだが、
「ああ、奴等なら燃やし尽くしたぜ」
問うと、キャラターはあっさりと言い放った。
それはつまり、単独で、マスターもなく、潤沢な魔力供給のあっ
たアサシンらを始めたということ。
流石に、英雄としての格が違う。槍がないからと侮るのはやはり
危険だった。
「なんだんで、パーソナー以外で、残ったのはお前さんだけだ。
厄介なアーチャーもいなえ、心強い共闘相手がいる。俺としっかりここまでの好機を逃す理由がないわね。」
消えかけの身で、私とシロウの間に割って入る愚を犯すとは、
よほど命が要らないらしい。いいだろう、相手にって不足はない。
私に挑む蛮勇、後悔させてやる。
幣、と空気の電撃が走る。キャラターとセイバーは互いに身構
えていた。
マッシュだって気丈に振る舞っているが、戦いの経験がなかった
士郎は限界だろう。その上でキャラターは消えかけしてきた。
対し、セイバーは時を置くことに回復していく。折れていた左腕
以外、既に元通りという有り様だ。時間はセイバーの味方、長期戦
- -
はこちらに不利。……ではそれならば不利の要因を一つでも解消しなければならない。
士郎はキャスターに素早く駆け寄り、その肩に手を置いた。
「キャスター。パスを繋ぐ、受け入れてくれ。
あ？いいのかよ、魔力はそこで受け入れてくら、杯じゃねえのか？
いや、供給源は俺じゃない。カルデアという、俺のバックにある組織のシステムから流れてくる。俺の負担になることはないし、こ
れも一時限りの仮契約だ。不服はないはずだが、どうだ？
「いいぜ、お前さんなら文句はねえ。仮とはいえマスターとして認
めてる。繋げよ。
「ああ。
ああ。
肩に触れている手から、霊的な繋がりをキャスターに結ぶ。
すると、キャスターは異なる次元から流れてくる魔力を確かに感
じた。へえ、こりゃいい、と感嘆する。
予想以上に潤沢な魔力をような何かだ。不足はない。現世へ
の楔となる依り代、マスターの器にも不満はなかった。マスター運
も上向いてきたらしい、と好戦的に笑う余裕も出てきた。
それに、士郎は誰かに見せつけるように笑い、言った。
「……俺のサーヴァントはこれで二人になったわけだが、まさか卑
怯とは言わないよな、セイバー？」
びくり、と騎士王の肩が揺れる。
そしてやおらキャラスターを睨み付けると、静かに言った。
「…シロウに盾のサー・ヴァント、そこにキャラスターが加わるとなれば、流石の私も方が悪い。敗色濃厚なので認めるを得ないでしょ。ヘえ、負け腰じゃねえか聖剣使い。そんななんで俺らの相手が務まるのかい？」
「さあどうだろうな。しかしなんにしても言えるのは一つだ。盾の娘は、特別によしとしてもいい。だが貴公は赦さないぞ、光の御子。刺し違えてでも貴公だけは討つ。は…？」
「テメッ！？謀ったな？！」「伊達に女難の相持ちではないということだキャラスター。俺とマシユのため、当てにさせてもらう。ああそうかい！ちくしよう、マスター運に変動はありませんでしょかぁ！？」
「ニヒルに笑い、黒弓に剣弾をつがえる士郎は、光の御子の発する陽気さに当てられたのか先程までの悲壮感はなくなっていた。親しき者でも、因縁の深い相手であろうと、語るべきことのある...」
相手であろうと。今は、ただ勝つのみ。

決戦の直前、士郎は少し軽くなかった心で、かつての罪の証に語りかけた。

「セイヤー、なんですか？　いつか、お前を呼ぶ時が来るかもしれない。積もる話もあるが……」

己の為したことは、決して許されることではない。だが無かったことにも出来ない。なら、いつかは向き合べきで、それも今ではなかた。

セイヤーは暫し目を見開き、士郎を見てきたが、その硬質で冷たい美貌にうっすらと笑みを浮かべる。

「ああ、お前の負けず嫌い、骨身に染みて思い知っているよ。だから気持ちよく負かしてやる。——来い、セイヤー。お前の負けん気、かつキャラスターが付き合う」

「俺かよ！？」

はい。行きましょう、シロウ。そして覚悟しごキャラスター。どうにも今の私は気が荒ぶって仕方がない。後腐れのないように全てをぶつける！」

「ああもう！　わかったよかって来いや畜生めえ！　なんかこういう役回りが多いと思うのは気のせいか！？」

「セイヤー、なんですか？」

「それは、その時までお預けだ。」

「セイヤー」
くす、とマシューは微笑む。

突然起こった事件だけど、最後はどうやら後腐れなく終わそうだった。
それに、マスターの士郎の心も晴れてきた。それはとても、いいことだと思う。

決戦が始まる。しかし、そこに悲壮感はない。

①②③④
約束された修羅場の士郎くん！

一一分示あるまで待機。別命を待て。

大聖杯のある空間にまで至った時、マスターはそう言ってアサシンに潜伏を命じた。
弓兵の時のように背中を刺せとも言うのかと思いいや、どうや

ールらしい。

有効な手段であれば何度も同じことをしてもいいが、相手は伝
説の騎士王。極めてランクの高い直感スキルを持ち、奇襲などの手
段が有効になることはまずないのだという。

でれば正面戦力としては脆弱と言わざるを得ないアサシンは騎
士王に仕掛けるべきではない。手数として数えるよりも、手札とし
て伏せていた方が応用が利くため最初は自分とマシュだけできちる
当たらないとしたスタンスは正しいと判断した。ゆえにこそこアサシンは
マスターの指示に従ったのだ。

己に下された指示は待機の他に二つ。一つがマスターかデミ・サ
ヴァントの少女、どちらかが危機に陥った場合これを助けること。つまり、身代わりになると言われたのだ。
暗殺者が戦力として期待できないなら、戦力となる者のために盾を支えるのがアサシンの役割だ。

マスターは、マスターから説明された冬木の状況から推察するに、恐らくは聖杯に汚染されている生き残りのサーヴァントであると考えられた。

一瞬、足止めするかと考えたが、それはやめる。あのキャラクターは冬木の聖杯を争うサーヴァント。であれば敵対すべきはマスターではなく、セイバーである騎士王だ。物の道理に沿い、合理的に考えた。

馬を走らせるセイバーの協力者となるだろう。よほど性質の破綻したサーヴァントでもない限り、その思考を裏切ることはあるまい。

処理しつつ、アサシンはジ、とマスターからの指示を待ち続けた。

騎士王や聖杯に対する既知感、押し寄せる感情を全て範念として、やさしく、キャラクターを味方としたマスターと、盾の少女が騎士王との戦闘に移った。どうやら問題なくキャラクターを戦力に組み込まれたようだ。やはり私なりのないマスターだな、と思う。

セイバーとの因縁も、問題なく感情と切り離して処理できている。
感情的に揺れる舞っているようで、その実、極めて冷静な光をその鋭い眼光に宿していた。そして一見ふざけているようでも、騎士王からのヘイトを上手くキャストに押し付け見せた。単独戦闘能力はもとより、計算高くもまた充分なものだと品定めをする。真にマスターとしての力量を持つか、これで判断できた。彼は、恐らくマスターとしての適正が極めて高い、合理的でありながら時として非合理的な物事を考え、結果として最善を掴む。実戦経験は豊富で、硬軟併せ持った思考能力を持つが故に物腰に余裕があり、対人関係に支障を来たすこともない。話ししてみたところ思は善に傾き、余程歪んだ者でもない限り問題なく戦力として活用できる知性もある。加えて、かなりの戦う手でもあるので、アサシンはもう一つの指示を思い返し、胸中で独語した。

不慮の事態を想定し、大聖杯の真下に伏せて周囲への警戒を怠らない。

・不慮の事態を想定し、大聖杯の真下に伏せて周囲への警戒を怠らない。

・特異点という異常地帯では、常に想定外の事態が起こり得る。

名将の資質とは、そういったものへの備えを怠らないこと。

何があるか分からない一分からないということも戦場では最大級の危険であるのだ。そういったものへの備えを怠らないこと。

予想外だったから防げなかったかというのは言い訳にもならない。

未知のトラブルに対するカウンター措置を用意するのは言い訳にもならない。

未だに上の手くやるだろうとアサシンが信用できるほどに。彼なら上手くやるだろうとアサシンが信用できるほどに。
大聖杯の真下で待機か。位置も見晴らしもいい。ここからなら
マスターの戦闘も、作戦領域に侵入しようとして来る存在も見通せ
る。……唯一警戒すべきものが、最も近い位置にある聖杯の泥とは
ね。皮肉なものだ。
手に聖杯への注意を切れば、時折り溢れてくる泥に呑み込まれ
てしまう。そんな阿呆のような末路を晒すわけにはいかない。
これが人類史に関わる重大事である。この場にいる全ての者に失
敗は許されず、特異点を修復し、定礎を復元するためならこの一命
を賭す価値が充分あった。
この身を捨て駒とする用意はあった。用いるか用いないかはマスター
(さて。お手並み拝見だ、カルデアのマスターさん)
が決めることだ。そこまでは関知しない。
熱のこもらないアサシンの視線の先で、冬木最後の戦いが繰り広
げられていた。
不遜だが、俺も頭数に入れると三対一になるというのに、黒い騎士王は一歩も退くことを知らなかった。その奮迅はまさに獅子の如し。彼女の実力をよく知る俺ですから瞳をすら見ぬに値した。左腕は折れたままというのに、押されているのはむしろこちらの方。このまま両腕をセイバーが取り戻したら、きっと戦局は絶望的なものとなる。左腕は折れただままだと言えても、押さえているのはむしろこちらだ。だが、妙な気分だった。俺は黒弓に次々と矢をつがえ、目標に射ち込みながら独語する。

視界が拓け、心が澄み、頭が冷たくなる。世界が拓け、心が澄み、頭が冷たくなる。胸は熱く、自分を俯瞰する視点にブレは微塵も現れない。限界は近い。指は固く、魔力も集中力も底を突きそうだ。……なぜに何故だろうか。全くそれで、負ける気がしなかった。大言壮語で終わらない、英雄の言葉を信じずしてなんとする。マシュの動きも鋭さを増していく一方。身に宿した英霊の戦闘技の継承がもうすぐ完了するのだろう。生き生きとし始めたのが傍目にもはっきりとわかる。
射撃に徹する傍らで、時折鋭く警告を発する。セイバーの動きの癖、思考パターンを洞察し、彼女の狙いがマシュからキャスターに、キャスターからマシュに移り変わるタイミングを何度も指摘した。

セイバーの剣は基本に忠実な王道のもの。奇を衒うよりもその剛剣こそ注意せねばならない。随所で、要所で、強力な剣弾を射出してセイバーの意識をこちらに向けさせて、キャスターやマシュの援護を完璧に果たす。セイバーは俺の矢を無視できない。一度俺の矢であれ、というところまで行ったのだ。投げた剣弾は爆発させれば充分な攻撃力を発揮する。俺から目を逸らそうもならぬ、なぜならの魔力を振り絞って宝具を投影し、決定打を放つ腹積もりでいた。

それが分っているからか、壁破のマシュの守りを叩きながら、キャスターに化け物じみた魔力を乗せた卑王鉄槌を撃ち詠唱を妨害しつつ、徐々に聖剣に魔力を込めていっている。起死回生、聖剣の一撃に賭けるつもりなのか。臨界にまで達した聖剣が黒い極光の柱となって膨張している。鉄壁の防御を固めたマシュをいなしつつ、遂に左腕を癒しこよった騎士王が逆襲に走った。

俺は目を剥いた。聖剣の振り終わり、切って返す振り上げの一撃

〜約束された勝利の剣〜　〜!
は、まだ瀑布のような魔力をまとってる！

何回耐えられる、盾の娘！行くぞ、約束された勝利の剣！！

アァァーーッ！マッシュが悲鳴に近い声で吠えた。度重なる疑似宝具展開に限界を迎えたのだろう。だが、猛攻は終わらない。

「体は剣で出来ている－－－」

「～～まだまだ行くぞ、約束された勝利の剣！！」

マッシュが悲鳴、してその一瞬の拮抗の後、その全てを闇の津波に破壊され、マッシュもまた弾かれるようにして吹き飛び気を失った。
キッタァタァ！

任せえォー！

力なく倒れ伏すマッシュを気遣う余裕はない。鼻血を吹き、右肩から剣を突き出させながら吠えた。応じるのは詠唱を完了させたケルト神話最强の大英雄。影の国の門番、女王スカサハに授けられた初の十八ルーン、その全てを空に描き同時に起動した。真名を解放、渾身の言霊を込めて光の御子は唱える。

大気が燃える。音が砕け世界が染まる。ランクにしてA、対城宝具に位置する魔力爆撃。光の御子のルーン使いとしての奧義は黒い騎士王の闘魔力を貫通した。総身を灼か、莫大な熱量に包まれ騎士王の姿が消えていく。

光が奔る。大気が燃える。音が砕け世界が染まる。大神刻印——！！！善を気取り悪を語るもの、三元の彼岸問わずに焼き尽くされたア……ッ！

大オホド・デウグ・オーディン神刻印——！善を気取る悪を語るもの、二元の彼岸問わずに焼き尽くされたア……ッ！

投影、開始——

『キャアスタァア！』
俺があの日、彼女のために投影した彼女の剣。選定の剣。創痍の瀕死の姿で大神刻印の箇所から飛び出し脱出する。上位の英樹ですら燃え尽きるような光を、その対魔力と回復力、溢れんばかりの魔力放出によって耐え、辛うじて死を免れたのだ。
その胸の中心に、勝利すべき黄金の剣が突き立つ。その胸の中心に、勝利すべき黄金の剣が突き立つ。ああ……まったく。負けず嫌いも大概にしろよ……。
「……信じていた。お前なら、きっと、こちらの予想を上回る、っ」
「セイバーは、力なく微笑んだ。セイバーは、力なく微笑んだ。
 ๆ……信じていた。お前なら、きっと、こちらの予想を上回る、っ」
「ああ……まったく。負けず嫌いも大概にしろよ……。
まだ終わりではないのです。聖杯探索は、これからが始まりなのです。
でした。ああ……まったく。負けず嫌いも大概にしろよ……。
すま、そうだ、まだ、終わりじゃないのか。すま、そうだ、まだ、終わりじゃないのか。
「……そうか、まだ、終わりじゃないのか。すま、そうだ、まだ、終わりじゃないのか。
思い出したように笑い、俺はセイバーが投げて寄越した水晶体を受け取った。
「…これは？」
「見た目では分からないでしょうが、聖杯です。それは、私に勝った貴方のものだ。どうか受け取ってほしい。」
「…わかった。これで終わりじゃないのなら、セイバーともこれ最後というわけでもないだろう。…また会おう。今度は肩を並べるために。」

黒い騎士王は、ただ微笑んで、消えていった。
キャスターが嘆息する。その後、セイバーは消えていった。
「やれやれ大事の気配だな。まあ、いいさね。お前さんなら上手くやられるだろう。もしオレを喚ぶようなことがありますなら、そんならランサーで呼べよ。」
「…ああ、是非、そうさせてもらう。ついてだ、心臓を突かれた時の恨み、晴らさせて貰うかな。」

聖杯戦争が終わったのだ。ならば、後は消え去るのみ。
聖杯を押すと、キャスターの髪を数本引き抜き、投影した魔力殺しの聖衣布で包む。これで、キャスターが消えても髪は手、毛だけは保存できるだろう。
それをキャスターは微妙そうに見て、仕方無さそうに苦笑した。
「…まったく、こぎ使う気満々じゃないねえ。貧乏くじばっかだねえ。」
俺も。じゃあな、小僧。次は仮契約じゃねえ。お前の槍として戦ってやる。

俺は思わず体から力を抜いて、その場に座り込みそうになる。

だが、今座れば立ち上がるのはに相当の時間を要する気がして、なんとか立ったまま天を仰ぐ。

「やあ、衛宮士郎」
「レフ・ライノールか」

振る返ると。そこには人外の気配を放つ男の姿があって。

「マシュを起こそう。」

特異点を作り出していた原因とおぼしき聖杯を手にいれたのだ。

じきに、この特異点は修復され、定礎も復元されて何もかもがなかった。

カルデアからの連絡もまだだが、そろそろ来るだろう。後は事態の推移をロマニに説明するだけだ。

特異点は作り出していた原因とおぼしき聖杯を手にいれたのだ。
俺は、うんざりしたように溜め息を吐いた。
卑の意志は型月にて最強士郎「変身しそうだっただ。今なら殺やれと思っただ。今は満足している」

「『帰去れば帰しエルヘイン』って何するの？何でもかもって何するの？マシュ、ドクター」
カルデアの管理室にて。
特に何もなく帰還した俺が特異点Fでのあらましを語り終えると、マシュは沈痛な顔で「まさか教授が……」と俯き、ロマニは難しい顔をして黙り込んだ。

「あっ！ははははは！なんだから、なんだそれ——！！」

「それって？奴さんは最期になんで言ったんだい？」
「それでも？奴さんは最期になんで言ったんだい？」
「それでも？奴さんは最期になんて言ったんだい？」
「……つまり、何も言えなかった？捨て台詞の一つも？」

唯一、声を上げて爆笑しているのは、三年前にカルデアに召喚されていた英霊、万能の天才ことレオナルド・ダ・ヴィンチその人のみ。「管理室のモニターをばんばんと手で叩きながら、モナリザに似せた姿形の美女（に見える男）は、目に涙すら浮かべて笑い転げていた。抱腹絶倒とはこのことである。ある種、見事なまでの笑いぶりに、呆れたようにダ・ヴィンチを見遣るロマニとマシュ。眉を落として肩を竦める俺。一頻り笑い続けていたダ・ヴィンチだったが、暫くして気が済んだのかようやく笑いを収めた。

マシュは沈痛な顔で「まさか教授が……」と俯き、ロマニは難しい顔をして黙り込んだ。

「それで？奴さんは最期になんで言ったんだい？」
「それでも？奴さんは最期になんで言ったんだい？」
「それでも？奴さんは最期になんで言ったんだい？」
「……つまり、何も言えなかった？捨て台詞の一つも？」

「そっか！はははははは！なんだから、なんだそれ——！！」
流とは！　傑作だよ！"

ダ・ヴィンチはもう辛抱堪らんといった風情だった。彼の中の悪役像が気になる物言いである。

セイバーを倒した後に聖杯を確保し、聖杯戦争の終結に伴いキャスターが消滅すると、俺はマシューを起こしてカルデアへ通信を試みようとしていた。

その時だ。突如、俺の背後に現れた緑の外装の男、レフ・ライノが、俺は頼んでもいないのに勝手に自分がカルデア爆破テロの犯人と名乗り出て、しぶとく生き残った俺を罵倒し、カルデアがまだ機能していることを知っていなかったのか「どうせカルデア内の時間が2015年を過ぎたら、外の世界と同じく焼却されるだめにあるのさ！」と語ってくれた。わざわざタイムリミットを教えてくれるというおめかしだけで。

あまつさえ、何を勝ち誇っているのか、レフの言う「あのお方」なる黒幕の存在を教えてくれて、他にも特異点が発生することまで丁寧に教えてくれた。

後は、この消えてなくなる特異点と運命を共にするといい！　などと詰め寄って去っているこうとした所を、

まあ、あれた。
真に申し訳ないが、あんまりにも隙だらけだったもので。

つい、殺っちゃったわけである。

こう、アサシンに背中を刺させて。ぐさり、と心臓を一突き。まあ、なんだ。それだけだと死にそうになかったので、剣弾を都合七発叩き込んで針鼠にした。アサシンも念のため道具のナイフを撃ち込んだ後、キャリコで滅多撃ちにしていったのだ。

結果、大物を気取る小物なテロリストを、なんやかんやと仕留めただけだ。（まあ、予定調和過ぎて描写の必要性も感じないほどで、見所だったのは殺されてしまった自分を自覚し、顔を歪めたところだけだった。）

「……」

な、アサシン……！？

ロマニは難しい顔のままマッシュの状態をチェックしておきたい。

それでも仲間だったこともあり、なんとも言えない気分にさせられたのだ。

それを、彼にしては珍しくかなり真剣な面持ちで俺に問いかけてくる。
それまで、今の話だけど、僕はどこまで士郎くんを信じていたのかな？

「君。ロマニは俺が信じられないのか？」

「む。ロマニは俺が信じられないのか？」

それは、緊急時とはいえ、カルデアのトップに突然立ったされた男の責任感ゆえの問いだった。

個人的に信じられるかどうかではない。組織人として信用できるのかを見極めなたために、僕はどこまで士郎くんを信じていたのかを理解しているから、俺は疑われたぐらいでロマニに怒りの感情を抱くことはなかった。

「信じた。けど、それ以上に俺はレフ・ライフーゴが俺を信じていた。こんな問いかけを」

「やや芝居かかった俺の態度に、しかしロマニは真摯に応じる。」

感情を抱くことはなかった。

「信じたい。けど、それ以上に僕はレフ・ライフーゴが俺を信じていた。こんな問いかけを理解しているから、俺は疑われたぐらいでロマニに怒りの感情を抱くことはなかった。」

「 ERA。まあ覚悟の話ではあるからね。」

奴と俺では積み上げてきた信頼の度合いが違う。俺を信じろ！

「RECT.まあ覚悟の話ではあるからね。」

僕と俺では積み上げてきた信頼の度合いが違う。俺を信じろ！

「信じたい。けど、それ以上に僕はレフ・ライフーゴが俺を信じていた。こんな問いかけを理解しているから、俺は疑われたぐらいでロマニに怒りの感情を抱くことはなかった。」

「ERA。まあ覚悟の話ではあるからね。」
だが、俺が何かを言うより先に、ダヴィンチが意味深に笑みを浮かべながら言った。

「無駄な問答はやめときなよ、ロマニー。そうや無駄世界。カルデア最後のマスターは、我々にとって幸運なことに頭の切れる歴戦の勇士だ。これを見てみなよ、彼の経歴をまるっと纏めた資料だ。」

ダヴィンチはカルデアが収集したとおぼしき俺の過去を記した資料を懐から出し、ロマニに渡す。その用意のよさに俺は微妙な気分になった。

ロマニは医療関係の人間だったからか、詳しく俺の活動記録を把握している。その程度のよさに俺は驚く。

「…複雑なものだ。本人を前にもそんな物を持ち出されるのは、嫌そうに顔を覗める俺を尻目に、ロマニに渡す。その用意のよさに俺は微妙に嫌な気分になった。ダ・ヴィンチは言ったが、どこか安心したように。」

「…士郎くんは掛け替えに善人なんだね、やっぱり。そう改まって言うことか。ダ・ヴィンチが言ったが、そのためにはそんなことじゃないだろう。」

そうさ、ロマニ、大事なのは彼が善人かどうかじゃない。読んでて気づかないかい？ 彼は何度も外道な魔術師を狩っている。つまらないそういった人間に対する嗅覚が備わっているのみならず、魔術協

「…無駄な問答はやめときなよ、ロマニー。」
会から咎められないよう、保身を計る計算高さがあるということだろう？士郎くん。
君には自分の証言の正しさを証明する証言だそうだ。

何もかも見通したような言葉に、俺は苦笑した。まるで、頭の出来が違う。この男ほどの智者には、俺如きの浅知恵など無意味らしい。

「どうしたロマニ－？」「どうしたロマニ－？」「いや、これ、なんて『殺人貴』とか書いて－－－」
「いや、これ、なんて『殺人貴』とか書いて－－－」「いっ、これ、なんて『殺人貴』とか書いて－－－」

「－－－」「－－－」「いっ、これ、なんて『殺人貴』とか書いて－－－」
「いっ、これ、なんて『殺人貴』とか書いて－－－」

「なんもなかったはずの場所に、突如、深紅のロープを被った暗殺者が現れる。'

言って、今度こそ俺は合図を出した。
見事な気配を遮断だ。この私があなたに気づかない筈だね。

心高揚したように顔を上げたダ・ヴィンチは、しかし私を見つめて。

彼女が当面の如き驚きに目を見開く中、アサシンは肩に担
いていたものを、無造作に投げ出した。

それを、人型の化け物、人外の存在。

それは、人型の化け物、人外の存在。

レフ・ライノール。そう名乗っていた男の、魔神柱とやらへの
変身途中の遺体だった。

その名前は、ロマニが呆気に取られたように目を見開く中、アサシンは肩に担

いていたものを、無造作に投げ出した。

それは、人型の化け物、人外の存在。

これが、人型の化け物、人外の存在。

それか、これ以上ない物証だね。
俺達の戦いはこれからだ！

管制室から出た瞬間、男は膝から崩れ落ちるように倒れかかった。

「君は……なんかというか、実に馬鹿だな」
それを見て。アサシンのサーヴァントは受け止め、肩を貸しながら心なし呆れたように呟く。

「まして、切嗣」
「名前で呼ぶな。僕はアサシンだ」
「なんて呼ぶかは、俺の自由だけどな」

士郎は、口許に微かな弧を描きながら、嘆きに近い声音で応じた。

「……すまん、切嗣」
「この期に及んで調子を崩さない男に嘆息し。アサシンは利かん坊のマスターをささと医療スタッフに引き渡すことになった。

この現状、ただ一人マスターの能力、その詳細を聞きされているアサシンは、自身も固有結界を取り扱う魔術の使い手ということもある、
彼の体内で固有結界が暴走し術者の体を害していることがはっきりと分かった。

体の内側から剣に串刺しにされ、術回路もショート寸前。一般の魔法師の術回路の強度はワイヤーである。そんな馬鹿みたいに強靭な回路が焼き切れる寸前なのだ。どれほどに無理を重ねていたのか。阿呆でも分かったろうというもの。

今、マスターは控えめに言ってスタオのようにもの。ただ見てるだけの肉袋とも言える。彼が感じている痛みは、絶え間なく熱した鉄を全身に振り掛けられているようなものだろう。よく正気でいるものだ。

―いや、あるいはもう、正気ではないのか。

この男は狂っている、とアサシンは思う。だが、それでいい。狂いもせず、人類の命運は背負えかもしれない。マスターは、とくの昔に限界なんて越えてるだろうに。ただ見た情報をお互いに仲間に言うだけで、アサシン以外の目がなくならない。よく正気でいるものだ。

―ああ…ちょっと待て。

アサシン以外の目がなくならない。よく正気でいるものだ。愚かなことだと思殺者は思った。
「なんだ」
「その前に、風呂に入りたい」
「そんなもの、君が寝てる間に医療スタッフが清潔にしてくれる。死にかけの身で気にするようなことか」
「俺はこの程度じゃ死なないよ、切嗣」
「そう言われて、一瞬びっくりと足を止めた。
あたかも、このレベルの負傷は休養済みとでも言いたげな物言いである。流石のアサシンも閉口しちゃったが、マスターに言わせると思わず納得しそうになった。
「どうせ死んでなければ安い。あんたもそう思うだろう」
「確かにと思ったアサシンは、マスターと似た者同士のかもしきりはいるがマスターにはいないのである。同じ尺度で図れるものでなかった。」
「死んでなければ安い。あんたもそう思うだろう」
「俺のことは名で呼べ。君とかあんたとか、他人行儀な姿勢は好まない。」
「なった？」
「アサシン」
「なった！？」
「アサシン」
「なあ、切嗣」
「……アサシン」
「……君は、まだ僕を自分の父親に重ねて見てているのか？」

「いや、だがあんたはもう「戦友」だろう」

その言葉に、思わずアサシンはマスターの顔を凝視した。

「親子以前に、命を預け合う関係なら、もっと信頼し合うべきだ。」

「こういうのは一方通行じゃ意味がない。」

「……はあ。とんだマスターに召喚されたもんだ。わかった、マスター命令だ。大人しく従うとする。士郎——これでいいかい？」

「グッドだ。」

満足に微笑み、士郎はくったり体から力を抜いた。

「医療スタッフにマスター……士郎を引き渡しながらアサシンは思

う。」

その笑顔は、あの少女にでも見せてやるんだ、と。
ふと目を覚ますと、無機的な清潔さを保つ部屋にいた。
視線の先には染みつない白い天井。左手首には点滴を繋ぐ管が
あった。思ったように体が動かなかったので、視線だけを彷徨わせる
と、鈍った頭で自身が病室にいることを悟った。
全身には包帯。何やら薬品臭いところから察するに緊急的な手術
でもあったのかもしれない。
大袈裟な連中だ、と思う。こんな程度でどうこうなるほど柔ら
かいのか。声には出なかったが、気配はしたのだ。
まるで疲れていたのは確かだ。少しくらいなら大人しく休む
こともいいか、と曖昧に呟く。だから出なかったが、気配はしたのだ。
血の繋がりだけが全てではないのか。それ
は言いつこなしだろう。血の繋がりだけが全てではないのか。それ
は言いつこなしだろう。
あ…せんぱい…

寝惚け気味にこちらを見て、嬉しそうに俺を呼ぶ。なんだか夢見心地のようで、暫く呆としていたが、少しして意識が戻ったのだろう。

ハッとして目を一杯まで見開くと、驚き七割喜び三割といった表情で口を開く。

「どう、ど」
「……ど？」
「ドクター！先輩が目を覚ましました！ドクターー！！」

突然跳ね起き、ロマニを呼びながら病室から飛び出していった。それを見つめながら、俺は苦笑する。

クールな外見に反して天然なところもある。それがマッシュだった。

時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時に独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところも多々あるが、それで時々独特な物言いまずし、変わったところで、俺はどれぐらい寝ていたのだろう。

支給されたカルデア戦闘服を個人的に改造し、その上にいつぞや呼際な外見に反して天然なところもある。それがマッシュだった。

で、俺は今回その通り病人服姿である。

剣にかける魔力消費量より二倍かかかるが、投影できないこともない。しかし思い入れのある品なので、出来れば目を覚ますところに置いておきたいのだが……。対魔力の低い俺にとっては、外界への守りである赤い聖骸布は命綱なのだ。手元にない心もとなくなる気持ちです。
ちも分かってほしい。

そんな益体もないことを遙かたと考えていると、妙に慌ただし
い足音が聞こえてきた。

ばしゃ、と空気圧の抜ける音と共に扉がスライドする。飛び込む
ように入室してきたのは気の抜けた雰囲気のロマニである。

「士郎くん！」

ロマニは俺と目が合うと、大慌てで俺の体の調子を調べ始めた。

機械を使い、触診し、俺が健常な状態と知ると大きな声で俺に怒
鳴った。

「ほんっーっとに、君はバカだなぁ！」

「…起き抜けに失礼な奴だな」

「…士郎くん。君は、自分がどれぐらい眠り続けたか分かってる
のかい？」

「…士郎くん。君は、自分がどれぐらい眠り続けたか分かってる
のかい？」
「さあ。三日？」「一週間だ！君が寝ている間に、次の特異点も発見してある！」「バカ！このおバカ！病み上がりに無理させられるわけあるか！」「だからこそだ」「バカ！ここのおバカ！病み上がりに無理させられるわけあるか！」「だからこそだ」「君はカルデア最後のマスターなんだぞ！」「だからこそだ」「荒ぶるロマニを受け流しつつ、俺はベッドから降り立った。思っ
たより両足はしっかりとしている。これなら激しく動いても問題あ
るまい。」「あ！わたった。、次の特異点とやる事を機会に修復したた
く休む。だからそう騒ぐな」「僕は！今！休むと言ってるんだよ！」「ロマニ、頼みがある。戦力増強のためサーヴァントを喚びたい。
大至急条件を整えてくれ」「人の話を聞かないなぁ君は！」「ちょ！？安静にするんだ！医療に携わる人間として見過ごせ
ないぞ！」「あ！わたった。次の特異点とやる事機会に修復したたらゆっ
なく休む。だからそう騒ぐな」「僕は！今！休むと言ってるんだよ！」「ロマニ、頼みがある。戦力増強のためサーヴァントを喚びたい。
大至急条件を整えてくれ」「人の話を聞かないなぁ君は！」「ちょ！？安静にするんだ！医療に携わる人間として見過ごせ
ないぞ！」「あ！わたった。次の特異点とやる事機会に修復したたらゆっ
なく休む。だからそう騒ぐな」「僕は！今！休むと言ってるんだよ！」「ロマニ、頼みがある。戦力増強のためサーヴァントを喚びたい。
大至急条件を整えてくれ」「人の話を聞かないなぁ君は！」
「…ちくしょー！後で休ませるからな！縛り付けてでも休ませじょ！

マシュに頼んで押さえつけてもらって、レオナルドに
怪しきな薬を打ってもらうからな！
「わかっとる」

善は急げだ。早くしろよ、と部屋から追い出し、俺もさっさと口

マニに続いて病室から出た。

特異点が特定されているのなら一刻の猶予もない。俺は病室の外

で待っていたらしいマシュに声をかける。

「マシュ、ちょっといいか？」
先輩…。「…どうせ、休んでくださいって言っても無駄ですよ
ね」

「分かってるじゃないか。いや、中でのやり取りが聞こえたか？
まあそれはいい。俺にはマシュがいる。マシュが俺を守ってくれる
から、何も怖くはない」

「もう、調子がいいんですから」

「さしものマシュも苦笑せざるを得ない言い方だった。でも、悪い
気はしない。本当に悪い人です、と小さく口の中で呟いたのに、俺
で気づくことがなかった。マシュに頼み、俺は英霊召喚のために用意されていった部屋に向か
った。彼女の盾が召喚の基点になるとはいえ、一応マシュがいる中
で召喚した方がいい。

＝触媒は使わないんですか？＝
使わない。呼び掛けることが大事なんだ。仮に彼女が召喚できな

くっても、俺はちゃんと呼んだって言い訳になる。出てこないそっち
ちくりと言葉で刺された気がしたが、俺は気のせいということに
した。マシュに毒を吐かれたなら自殺ものである。泣きたくなるので勘弁
俺はここで来るまでにダ・ヴィンチの工房からくすねてきた呼符
をマシュの盾に設置した。

「さて」
鬼が出るか蛇が出るか。
伸るか反るかの大博打、実はあまり期待していない。

召喚が始める。光が点る。
爆発的な魔力が集束し、英霊召喚システムとカルデアの電力が
裡をあげる。

「さて」
光の中に出れたシルエットは——
苦笑して、呟く。

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——ここまで来ると腐れ縁か」

「——こ
「サーヴァント、セイバー。召喚に応じ参上しました。問います、貴方が私のマスターですか？ああ、と頷いた俺。まさか本当に来るとは思わなかったが、結果オーライという奴である。本命はランサーのクー・フーリンです、といったらどんな顔をすっか？名を呼ぶと、光の中から現れた「青い」装束の少女は微笑み。「そうだ。久しぶり、セイバー。…アルトリア」「俺達の戦いはこれからだぞ、二人とも」俺はそう心の中で一人ごちる。だから仲良しくしてください。だから仲良しくしてください。
勝てるのか、と心の中で誰かが弱音を吐いた。

俺がやらないで誰がやる。俺が勝てないなら誰が勝つ。

俺が生きでの証を残すため、世界よ、俺のために救われる。

俺が生きたんだ。そうだろう、二人とも。

決意表明。青臭いのがきっとこれでうまくいく。

セイバーが、マシュがいる。なら、俺の心に不安なんて生まれない。

俺達の戦いはこれからだ！
メタルケアの妙士郎くん！（※おおする側の模様）

何時か何処かの時間軸。
ロマニ・アーキマンは、部下的医療スタッフが疲れきった顔をし、ここカルデアがレフ・アイノールによる爆破により壊滅的な損害を被り、スタッフの過半数が死亡、マスターがたった一人きりとなってしまくが経った。世は全てこともちろん一なんてもあるわけもなく、今日も今日とて激務に沈む。

ロマニ・アーキマンは、部下的医療スタッフが疲れきった顔をし、ここカルデアがレフ・アイノールによる爆破により壊滅的な損害を被り、スタッフの過半数が死亡、マスターがたった一人きりとなってしまくが経った。世は全てこともちろん一なんてもあるわけもなく、今日も今日とて激務に沈む。

もちろん状況で気の滅入る者が居ないはずもなく、スタッフの中には絶望し自殺を試みる者まで出始めていた。

医療機関のトップであったのが、他に幹部がいないからという理由でカルデアのトップに立たされたのはロマニである。彼は士気の低いスタッフ達のメンタルをケアしなが、全体の作業の指揮を執る。
「レフ・ライノールは実にいのしい仕事をしてくれたものである。彼は分け隔てなくカルデアの破壊工作に尽力し、その被害は七割に及んでいた。戦争で言えばとっくに諦めていると言っていい。そんな状況だから、スタッフの一一人が担う仕事量は最も目な見にても殺人のなもの。医療スタッフも手触れの者がいたなら、他の部門のスタッフのメンタルをケアしつつ、その仕事を補佐して回らねばカルデアが立ち行かなくなっていた。必然タフな医療スタッフも限界を迎え、他のスタッフには見せられないと見せられた弱った姿を、自身の直指の上司であるロマニに隠して精神の不安を計っていた。

他者のメンタルをケアする側の人間が、精神的に疲弊した姿を周囲に見せられた訳がないのだ。誰が弱っている者に縛れる、寄りかかれる。ロマニの部下である医療スタッフ達は、もはやカルデアの精神的支柱となっていたと言っていい。そんな彼らは気負わざるを得ない。その重責に、自身の心の均衡が崩れ始めてしまっても無理からぬ。」
自分達なら人類史の修復という、有史以来最大の大偉業を成し遂げられると言じさせねばならないから。ロマニは目立たないが、確かにカルデアの大黒柱となっていた。

部下との談話を終え、和やかに別れたロマニは、自室に戻るとスメハードに腰を落とし、そのまま寝台が使用された形跡はない。ロマニは時計を見た。午前3時。あと2時間後には部下が起床していっもの仕事に入るだろう。それに自分で出なくてはならない。

今、横になったら起きられないだろう、と思う。だからロマニはベッドに腰かけていたのを、デスクの椅子に移って体から力抜いた。座ったままの仮眠。これなら一時間で起きられる。健康には悪いが、一晩も耐えなければならないだろう。思春期の彼と、マスターの彼より、よほど楽な仕事だった。

接命を張っているマスターの彼より、よほど楽な仕事だった。座ったままの仮眠。これなら一時間で起きられる。健康には悪いが、一晩も耐えなければならないだろう。思春期の彼と、マスターの彼より、よほど楽な仕事だった。
ま
だ元気な自分が顔張らないでどうするのです。そう自身を励
ましていると、ぱしゅ、と空気圧の抜ける音がして、扉がスライド
した。意識なくのろのろと目を向け、そこにはロマニの部屋を
訪ねてきた男〜黒塗りの改造戦闘服を纏った衛宮士郎が立ってい
た。

「よっ」

なんて言って、二つのグラスと酒瓶を持つ手を上げてくる士郎。

瞬間、ロマニの意識は覚醒した。

かっと頭に血が昇る。唾を飛ばす勢いで士郎に食っつかった。

かっと頭に血が昇る、噛む وبالと空気圧の抜け音がし、扉がスライド
した。意
識
な
く
の
ろ
の
ろ
と
目
を
向
け
る
と
、
そ
こ
に
は
ロ
マ
ニ
の
部
屋
を
訪
ね
て
き
た
男
—
杭
塗
り
の
改
造
戦
闘
服
を
纏
っ
た
衛
宮
士
郎
が
立
っ
て
い
た
。

「士郎くん！？なんでこんな所に〜！もう午前３時だぞ！？
特異点が新しく特定されたばかりなのに、どうして休んでない
んだ！君の状態は常に良好に保ってないとダメだって大はいに
ああ、はい、わかったらわかる。だから、な？落ち着けロマニ。

腕力でまるで相手にもならない。流石に精悍な戦士は体格が違う。

言われて、ロマニは自分の顔に手を這わせた。目元に出来るいる

医者の不養生とはよく言ったものだ。気づいてるかロマニ、酷い

えっと～　

顔だぞ～
隈は隠してる。顔色もななんかと。
ロマニックラスを押付けると、士郎は椅子をロマンの前まで運んでどこかと座る。そして、無作意にロマンに凸ピンを食らわせた。
「あっあぁー！」凄まじい威力に頭が吹き飛んだと思っただけ。「いきなり何をするんだけ！」ロマンは抗議したが、士郎は聞く耳を持たず。
ロマンの手にあたるグラスへ酒瓶の中身を―果実酒をなみなみと注いだ。
「……えっと？」「苺の果実酒、手作りだ。市販されない奴だぞ。飲めロマン。」まには男二人、酒を酌み交わすのも悪くないだろう。
「……」視線を手元に落とすと、そこにはなんとか也是旨そう果実酒があっただ。知らない喉を鳴らす。恐る恐る口に運んでみると、程よく甘く、アルコールが気持ちよくするすると胃の腑の中になっただ。
無骨に笑いながら、士郎も酒を口に含んだ。暂しの沈黙。ちらと果実酒は、苺もそうだが、レモンやビタミンCを多く含み、ストレスへの抵抗性と心身の疲労を回復する効果があった。更にレモンの香りには高いリラックス効果もあり、ロマニは士郎が自分のため訪ねて来たのだと遠まきながらに気がついた。士郎は飄々と肩を竦めた。「何故、勘違いだろう？あるの、こんな飲まされて気づかないわけないだろう？だから、勘違いだ。俺はセイバーから逃げてきたんだよ。」 「何故？」「俺の趣味の一つに酒作りがあってな。今日も暇を見つけて日本酒でもと用意していたら……奴が現れた……」
「奴、って……」

俺が作った酒を飲んでみたいとか言ってな。まあ奴も舌は肥えてる。味見役にはちょうどいいと思い、飲ませてみたのが運の尽きだった。奴は酒もイケる口でなかなかの卓見を示してくれたが……いつの間にか酔いが回ってしまってな。

「あー……」

ロマニの目に同情の色が浮かぶ。士郎はよく見えると憐れんでいた。暴君化した騎士王に士郎は成す術なく付き合わされ、なんだか話がおかしな方向に転びかけたところを健気な後輩の献身によって逃れることができたのだという。

己のマスターのために体を張ったマシュに、ロマニはちょっと目をあさり信じ、士郎と酒を酌み交わすことにになった。少しだけ言葉をあっさり信じ、士郎と酒を酌み交わすことになった。少しだけ頭が熱くなっただけよ、と前置きしながら。そういうわけだ。だからちょっと俺の時間潰しに付き合え。どうせ暇なんだろ。

「そうですね、暇だし付き合ってあげようかな」

「そうそう、暇なんだろ」

相槌のタイミング、空になったグラスに酒を足すタイミング、ど

相槌のタイミング、空になったグラスに酒を足すタイミング、ど
熱が入ってしまった。

「いつの間にか、ロマニは泣いていた。大粒の涙を流しながら所長のオルガミーのこと、裏切ったレフのこと、死んだ部下のこと、仕事の大変さ、理不尽な今の愚痴を全て吐き出してしまっていった。

いつも泣きながらベッドに転げ、寝入ってしまったことに、ロマニは最後まで気づかなかった。

「いや、助かったよほんと。ロマニの奴、私が何と言っても聞かないだもん。人前で倒れられたらまずいって言ったのに。」

「なんで、こんな芝居をやらせたのか。呆れた男だ。」

ロマニの部屋の外に出て、待機していた天才に士郎はそそう言う。

「お、さすがのお手前。」

「……ダ・ヴィンチ。終わったぞ。」
あーあ、大の男が泣きながら寝ちゃって。これ記憶残ってたら恥ずかしいあまり間絶するね。

ダ・ヴィンチが意味深に流し目を送ってくるのに、士郎は再度溜め息を吐くことで応じる。

「……で、ロマニの抜けた穴はどうする気だ？」

「それは天才ダ・ヴィンチちゃんにお任せあれ、ってね。さすがにサーヴァントの私は目立つからいかなくなる訳にいかない。だからシミュレータを使って言うだけ張れる。不在でも怪しまれない士郎くんにお任せするよ。ロマニの身代わりをね。

「……体格も声も何もかも、俺とロマニは似ても似つかないんだが……じゃあん。こんなこともあろうかと、立体ホロ変装装置を作ちゃったんだ。これでロマニのガロを被れてしまうのだよ。

「……体格も声も何もかも、俺とロマニは似ても似つかないんだが……じゃあん。こんなこともあろうかと、立体ホロ変装装置を作ちゃったんだ。これでロマニのガロを被れてしまうのだよ。

「……ドライもんかお前は。まあいい、ただし一日だけだぞ。俺も暇じゃないんだ。

「ドライ？……分かってる。っていうか、一日もやれるの？ボロが出ちゃわない？」

「ドライ？……分かってる。っていうか、一日もやれるの？ボロが出ちゃわない？」

「いやー、なんだかんだ士郎くんも万能だよね。私ほどじゃないけど、仕事真似は得意だからなと呟き、士郎はダ・ヴィンチの手から怪しげな腕輪の装置を奪い取る。

しかしこれが言う通りの性能を発揮するならかなり便利なのだが……」
「あ、それカルデアの中でしか使えないから」
「……シミュレーターの機能と繋いでるのか」
「その通り！すっかりそんなのをどこでも使えるようにはできな
いかね。あと私クラスの天才が二人いたら違ってくるだろうけど」
「何をバカな。お前みたいなワモノが早々ってたまるか」
「あっ、酷い！そんなこと言うのか士郎くんは」

軽口を叩き合いながら、二人はロマニの部屋から離れいく。
士郎とダ・ヴィンチはロマニの眠る部屋を一度だけ振り返り―
小さく、おやすみ、と呟いた。

ある日の小さな一幕。
そんなことあった、と彼は後に懐古した。
お腹が空きました士郎くん！

青王とのコムユ回。

……

カルデアに超級のサーヴァント『アーサー王』が召喚された。

人理修復の戦い、聖杯探索に於いて戦力は無からあっても足りるということがない。故に彼女のような強力なサーヴァントを召喚出来たことは、戦略的観点から見て実際に嬉しいことだった。

だが、残念ながら個人的にはそうでもない。実際は複雑な因縁のために、手放しに喜べるものではなかった。

……しかし俺も子供じゃない。どうだと迷い、迷惑のは信条に反する。切嗣亡き後の人間が「明日からやるよ」とか抜かすことは、冬木から出た後、知り合った人間が「明日からやるよ」とか抜かす。
この俺は、いつだって決めたことはやり遂げてきたものである。衛宮士郎に成り切ったことと決めてきたことも、今更うじうじするほど女々しくはないし、過去の己の所業から目を逸らすつもりもなく、後悔することもない。大人しく罪を清算しようなんて殊勝なお考えも考えないでな。こうするのは組織人として、唯一のマスターとして当然の配慮である。

俺は人としての道に反することなく、同時にカルデアのマスターとして責任ある態度を取ることを求められていたのだ。しかしこの人類の危機の中で、個人的な罪悪感から裁きを受け、マスターとしての役割を放棄するわけにはいかない。彼女から向けられる信頼の眼差しが痛い。邪気なく微笑む顔に見惚れてしまった。気づけば何も言えてなくて。その癖、無意識の内に彼女の姿を模で追っていた。
惚れ弱みと昔の罪悪感が絶妙にブレンドし、ほぼ完璧にイエスマンに成り掛けてる。とうかなかった。これごは困ったぞと切
嗣に相談したが、

「アレとは反りが合わない。僕とアレは会わない方がいい。これは確信だよ士郎。僕は可能な限りアレと接触することはない。

訓練しましょうと言わなければいけないのに必ずしも彼女を反転するまで酌をして、話をしましょうと言わなかったから十年で磨いた話術で彼女を笑顔にして、なんとかして僕を受け入れ甘やかして青ニート化させてしまいつつあった。

駄目人間製造機の面目躍如である。このままじゃダメだと奮起し

そんな矢先のことだ。マジコとの戦闘訓練を終え、厨房を借りて

個人的な贅沢食でもと料理していると、どこから句を嗅ぎ付けて

きたのか青いバトルドレス姿のアルトリアがやって来た。

シロウ、お腹が空きました。

― まるで餌付けされた子犬のように、見えざる尻尾をぶんぶん

と高速回転させたオウサマが食堂に現れた。
ぐっぐっと煮込まれている春キャベツの重ね煮。白菜と豚肉のミアルフィー。シンプルだが味わい深い季節のスープと、熱々の炊き立てご飯の相性は抜群だった。俺は不思議と風いちできた気持ちで、自然とアルトリアを黙殺する。いつもの俺にはできないことだ。アルトリアもちょっと調子が外れて頭の上にクッショングマークを出していた。

春キャベツの重ね煮のスープを平たい小皿によそって、味見をし。

文句のない出来映えに自画自賛する。

俺の百八ある趣味の一つである料理の腕は、メル友のフランス料理の巨匠から太鼓判を押される領域に至っていた。是非後継者に追われた時は満更でもなかったが、あれは酒の席のジョークに過ぎない。流石に本気にはしてなかった。

ままだ料料理は奥が深い。シンプルなものこそ腕と知識、腕が問われる。極めたとはいえじゃないが言えたものではないし、真の意味で極められる者は存在しないと断言できた。

食堂にいたアルトリアが「おー」……と感嘆したような声を上げる。厨房から俺の賛美食の薫りが漂ってきたのだろう。目をこれで見ると輝かせて厨房を覗き込んで来ようとしている瞬間、俺は激怒した。
「神聖な厨房に、料理する者以外が踏み込むんじゃない…！」

静かに激する俺に気圧されたように、セイバーはすごくよく引き下がっていた。

「今、俺は怒ったのか？セイバー、アルトリアに？」

静かに激す俺に気圧され、俺はその事実を咀嚼した。

「彼らが踏み込むんじゃない…！」

オママンを食べさせてあげたい衝動に駆られる。しかし、しかし、俺はぐ、耐え難い食を耐え、俺は怒った。

「すみません…私としたことが配慮に欠けていました。シロウの…」

無意識にアルトリアのいる席に。

「し、シロウ…」

「すみなせん…私としたことが配慮に欠けていました。シロウの…」

とは神聖なものであるというのだから当然のことなのでに…どうにも、シロウには甘えて貰う。
ロウなら許してくれると度し難いことを無意識に考えていました。

う。こうやって怒ったりするのはあまりないことだから・・・正直、俺も戸惑ってる。

なんだか妙な空気だった。互いに謝りあっている。俺にとって、子供達は、何故か普段の構ってちゃんと鳴りを潜め、遠巻きにしていただけだが・・・もしかすると俺の雰囲気がいつもと違うと反省せねば。

ふと、気がつくと俺は自分の賄い食をアルトリアの前に置いていた。

だものね。―どうぞ召し上がって。思えばアルトリアに振る舞うのは久しぶりだ。

感極まったようにアルトリアは俺を上目遣いに見上げ、神に祈る。

―の、シロウ・・・これは・・・

ごめんない。目が釘付けになっている。

俺は苦笑した。

延がスゴい。大袈裟な奴、と更に苦笑を深くする。・・・まあ、一食ぐらい抜いても大事ない。今回ぐらいは甘やかしてもいいかな、と思った。
アルトリアは行儀よく両手を合わせていただきますと言って、箸を器に使って食べ始めた。一口で、アルトリアの顔色が変わる。そして震える声で言った。「シロウ―貴方が私の飼だったのでですね」おいそれこそで言うのか。なんだか色々台無しにされた気分だ。

「シロウは神の一撃を極めた。私はとても誇らしい。なんか色々台無しにされた気分だ」と別に極めてない。料理に極まることがなくてない。そこは間あと、別に極めてない。料理に極まることがなくてない。本当に美味しそうに食べてくれるアルトリアは、食べている姿をじっと見ていた。少し夢中になっていったアルトリアは、食べている姿をじっと見 Dracoが、それでも箸が止まっていた。本当に美味しそうで食べられる姿に、懐かしい思いが甦る。今いちいち味を楽しみ、頬ぎながら食べる姿に、懐かしい思いが甦る。そして、なんだか昔のことだと思うかもしれません。昔の関係を偽りだと感じるのなら、新しく始めてしまってもいいのでは。と、実に手前勝手で傲慢な考えに支配されたのだ。偽物を、本物にする。まあ、そういうことは許されるのではないかだろうか。だからといって過去のことがなくなるわけではない。
俺はアルトリアに嫌われたくないし、俺は俺のエゴで罪を忘れよう。

最悪で、最低だが一人類を救うのだ。ちょっとぐらい多目に見てもらってもいいはずだ。

一瞬、見透かしたような顔で微笑んだアルトリアには気づかず。

「あ、セイバー」

「はい、なんでしよう」

「ロマニだけじゃないが、カルデア職員の負担が大きすぎる。なんて、アルトリアは、見惚れるくらい綺麗な姿勢で俺に応えた。

「あ、セイバー」

「はい、なんでしょう」

「一つ、ああ、セイバー」

「ロマニだけじゃないが、カルデア職員の負担が大きすぎる。なんて、アルトリアは、見惚れるくらい綺麗な姿勢で俺に応えた。

彼ならきっと、こんな私にも応えてくれます。円卓の中で彼ほど今のカルデアで助けるなる者はいないでしょう。」
なるほど、ありがとうと呟く。
マsynthesizeのあの盾を基点に、騎士が召喚を呼び掛けたらきっと円卓なら狙って呼び出せる。
個人的に円卓にいい印象がないので、出来るなら一人も呼びたくないなかったが、ロマニの激務を一日だけとはいえ体験した今、見過ごせない。

「シロウなら大丈夫ですよ」「シロウは鉄よりも固くて、剣よりも熱い。アグラヴェインは人嫌いですが、貴方の前では形無でしょう」「そうだ、アルトリア」「なんでしょう」「今夜、どうだ」「今、はい」「そうか？」「そうだ、アルトリア」「何を根拠に？」「…そうか？」「今夜、どうだ」「……何を根拠に？」
「酒にな、付き合いよ」

「…」

「シロウ。あまり、私を怒らせないようにがい」

「…」

「…, —」

「黙っておれ、黙っておれ」
やぱりマシュマロなのか士郎くん！

何時か何処かの時間軸。

全に馴染んでる青いバトルドレスの騎士王さん。

彼女に対してえもいえぬ敬意を霊基の奥底から感じてる、それより更深く、自身の内側より生じている強い感情の渦に、マシュは自己で戸惑っていた。

制御できない想い。騎士王が召喚されてからずっと続く心の感触。

こんな気持ちは初めてで、正直なところ持て余してしまっている。

あの人はとても物知りだから、きっと今度もこの感情の正体を教えてくれるはずだ。

...でも、流石にいつも教えられてばかりというのは情けない。

「セイバーサン...」
「はい、なんでしょ」
「セイバーサン...」
正体不明の感情を自分で分析してみると、論理的に考えてその原因はイーバーにあるようだ。マシュー自身は気づいていないが、それはともに声は固く、顔も堅い。マシュー自身は気づいていないが、それはとても友好的とは言えない表情だった。常の礼儀正しく生真面目な彼女には見られないと彼女に対し、のだろう。

しかし、どこか剣吞な顔に、セイバー・アルトリアは気を悪くした様子もなく、立って好意的で友好的な、物腰柔らかな調子で応じた。

その余裕のある態度も、マシューを苛立たせる。苛立っている今、カルデアの物資は乏しく、誰もが辛い思いをしている。食事の必要があるサヴァントだが、元々は人間なのだから、娯楽に乏しいカルデアの中で食事ぐらい楽しみたいはずだ。
先輩の父であるアサシン、強く頼りになるランサーのクー・フ
リーグ、とても厳しいけど信頼できるアグラヴェイン。彼らは文句
一つ言わない。特にアグラヴェインなんて、カルデアに召喚されて
以来、恐らくカルデアで一番働いてくれている。一度も休まずに。
サーヴァントに休養は要らないと言って、我が家のために、と。
だというのにこの騎士王と来たら……。堪え性というものがないの
かと厳しく言ってしまいたくなる。
しかし、アルトリアの余裕は壊れなかった。
その通りです。ですので私も、最初の一度だけでなく自重しています。
「俺を思い失ったのだから、何やるんだろ。」と。
「食事以外に食堂ですることなんてないはずです」
「いいえ。……ここからはシロウの姿がよく見える。私にはそれだ」
「けでいい」
ぼつりと溢れた次ぎは、マシュの物ではなかった。霊基が仕方無
い、と言ってるようで。なんだか、負けたくないなんで、何か
の勝負しているわけでもないのに思ってしまった。

アブラウェインは騎士王を見て何を思ったのか。複雑そう、苦
し、熱した鉄を飲み下すような苦渋の表情で、それでも騎士王

そうだの彼は、士郎を何処かに呼び出し、何かを話し出した。
ただその後彼は士郎を何処かに呼び出し、何かを話し出した
ようだった。その後の彼は、恐らく過去一度もないほどに酔い漬れ
ていた、士郎は顔を赤く腫らしていた。

アブラウェインは嫌そうな顔を崩さなかったが、それでもどこか
それでも言えない空気の中、士郎は調理を続け、夕食となるホタ

むすっと黙り込んで、マシュも士郎の姿を負けじと見つめる。

それからの彼は士郎をマスターとしっかり呼び、士郎はアブラウェ

エインを親しみにアックくんと呼び始めた。
アブラウェインは嫌そうな顔を崩さなかったが、それでもどこか
士郎のことを認めていた。

「…」

その後、彼が士郎をマスターと呼び出した。
これからの彼は士郎をマスターとしっかり呼び、士郎はアブラウェ

エインを親しみにアックくんと呼び始めた。
アブラウェインは嫌そうな顔を崩さなかったが、それでもどこか
士郎のことを認めていた。

「…」

この白米もある。
お待たせ。・・・アルトリアも飽きないな。見ていて何が楽しいん
何を楽しみにするかは私の勝手でしょう。それに
お待たせ。・・・アルトリアも飽きないな。見ていて何が楽しいん
何を楽しみにするかは私の勝手でしょう。それに
言いかえれば、アルトリアはマシュに慈しむような目を向けた。
マシュ？どうかしたのか？
みつりとした表情でむくれているマシュを、土郎は気軽にな
って頭を撫でた。
・・・色々な時代の様々な特異点にレイシフトして、そこで多くの
人々と触れ合う中で気づいたのだが、土郎が頭を撫でるの子供な
に反抗期が！？
そんな、バカな、うちの子に限っては有り得な
ぼつりと呟くと、土郎は驚愕したように固まった。そして「マシ
の保護対象だけである。それはつまり・・・そういうことだった。
いと思ってたのに・・・！なんて懐いている。
わたし、子供じゃないです・・・誰にも聞かせるつもりのない呟き
が聞こえたのか、びたりと止まった土郎とアルトリア。俯いたマシ
に、土郎はややあって優しく言った。
「どうしたのか？」「アツリア、悪いが少し席を外してくれ。余り聞かれたいこ
とでもなそうだ。」

アルリアは席を立ち、離れていく。そしてその姿と気配が食堂
から無くなると、士郎はもう一度、噛んで含めるように語りかけて
きた。「はい。ルリアは席を立ち、離れていく。そし
てその姿と気配が食堂に
包み込むように包容力だった。そこで
は隠ししようがない慈愛の色
があった。ルリュは溢れていく気持ちを抑えることができなかった。
醜い気持ちを、溢してしまい。
こんな汚い想いを知られ
ば、きっと嫌われてしまう。
怖いのに、止められなかった。

「わたし、は……」

「あマッシュ。何か気になることでもあったのか？」「
俺は神様じゃない。言
ってくれないと分から
ない。だから、思っ
たこと、感じたことをそのまま言っ
てほしい。」

「……わたし、は……」

「……わたし、セイバーサーサーが嫌いです」

「今まで、先輩はわたしといてくれたのに……最近はずっと、セイ
バーサーサーにばかりいて……」

「……わたし、セイバーサーが嫌いです」
「え、あ、違っ、そんな、わたしはそんな嫌いなんてい…」

「本当に？」

「あ、ぁ…」

「本当はアールリアが気に入らないじゃないか」

「う、…」

「わたし、最低です…セイバーなんに…」

「そうか。…よった」

マシュにとって、この気持ちは感じるとのなないのでも、醜いと、汚いと思ったかから、知れたくなくて。

でも、聞かれてまっつて。自分を抑えられたくなくて。

聞けたくなった、士郎に嫌われまっう。

嫌だ、それだけは、嫌だ。

戸惑い、声を上げる。

「ここれは受け売りだが…」

そう前置きして、士郎は苦笑した。

誰かを思い出すような目だっただ。

「女の子は嫉妬を手に入れて、初めて女になるそうだ。…おめでと—」
う、マシュ。お前は今、人として成長した。卑下することはない。
言って、マシュの頭を撫でようとし、手を止める。
困ったように笑みを浮かべながら、士郎は手を引込めた。
「……子供扱いはできないな。これからは、レディとして扱わない」と。
食べよう。冷めたがら味が落ちるからな。ほら、いただきます。
「……い、いただき、ます……」
「……」
促されて、マシュは赤い顔を隠しながら両手を合わせた。
それは、喜び？大人として見られたことへの。それとも
……これは、喜び。
「……これは、喜び？大人として見られたことへの。それとも
胸が苦しい。なのに、恥くんない気持ちだった。」
ぐるぐると頭の中で感情の波が渦を巻く。
それでは、マシュ・キリエライトの心に変容はない。
それでもマシュ・キリエライトの心に変容はない。
うちそう強まった意思の結晶が、少女を女にして、輝きを強いも
憔悴した顔で、ロマニ・アーキマンは言った。
「…落ち着いて聞いてほしい。君が眠る間に異常点を七つ観測したとは話したね」

首肯する。ブリーフィングで確実に聞いた。
「今回、レイシフト先に選んだのは、その中で最も揺らぎの小さなだんだろ…」

カルデアに、今回の第一異常点で、今後的目的に聖杯探索の勝手をマスターに掴んで貰うと思惑があるのだが。その選択は決して間違ってはいない。
今後、カルデア唯一のマスターが至上命題とするのは、人類史のタニャン・ポイントとなるのを歪ませる異物を特定、排除すること。
それに、おそらくそうだろうと推測されれば、とてもじゃないが時間旅行、歴…
史改変など不可能。せっかく歴史の流れを正しいものに戻しても、
聖杯が残っているものとの手阿弥とはロマニの言だった。

管制室のコフィンの前に改造戦闘服の上に赤い聖骸布『赤原礼装』を纏い、ダ・ヴィンチ謹製の射籠手である概念礼装を左腕に装着する。

まず、ダ・ヴィンチによると、英霊を維持し、魔力を供給するようにも、
概念礼装を通じてマスターに魔力を流す方向が遥かに簡単だということだったが、ここまでの効果があるとは流石に思わなかった。これなら、はず魔力切れを恐れる必要もなくなる。

カルデア職員から渡されたペットボトルに口をつけて水分を補給する。礼を短く言って返却し、コフィンに入りながらロマニに話の続きを促した。

……異常なことが起こったんだよ。
顔面蒼白だった。からからに乾いた声が、危機的状況を端的に告げている。この第一特異点の座標を予定に特定出来たんだ。それはいいことだった。

……実は君が起きて、レイシフトに向けて準備を整えている間に……
だろう？でも、それが…僕の観測した時には、人理定礎の崩壊がかなり進んだ状態になっていたんだ。…ああ、つまりだね、簡単には、簡潔に言うと、人理が崩壊する寸前なんだよっ！

喚くようにロマニは唾を散らした。その様子は乱れ近い。

他のスタッフはまだ何も知らされていないのだろう。張り詰めた雰囲気は、破裂寸前の風船を彷彿とさせる。

頭の片隅で、手足のせといで全体の作業能率が低下しているんだと悟り。時間に余裕ができたら、その問題を解決する方法を考えなければならないと思う。

ロマニは息を整えて、なんとか言った。

「カルデアは既に、第一異形点に座標を固定している。нейシフトの準備も終わっている。今更レイシフト先を変更することはない。下手をすると第一異形点を見失いかねないからだ。」
「全ての過程二階へ帰れ。」

時計のカーソル部員たちが、固い唾を呑み込む。

凄まじい圧力を、しかし負けて。

鋼のような声で、カーソルデアのマスターは応答した。

「了解。四・・・日以内に戻る。それまでに次のレジシフトの準備を」と。

士郎くん、と呼ぶ声。

「病み上がりのないのに、すまないもない。でも、それまで僕らは君に頼らなけないといけない。お願いだ、どうか無事に戻って来てくれ…」

ロマニ、と苦笑した声。

「俺を誰だと思ってる。任せろ、必ず上手くいかせてみせるさ」
今度はコフィンを使用して、正規の手順でレイシフトしたためか、特に問題なく意識は覚醒した。傍らを見ると、マシーとアルトリアがいる。召喚予定だったクーフィン見渡すと、どうやらここは、どこかの森の中らしい。木々が生い茂り、のどかな空気を醸ししていた。マシーが、緊張に張った声で言う。「さて……」

「中世か。しかもその時代となると、」

「百年戦争が事実上終結してジャンヌ・ダルクが火刑に処された年で……時代を特定しました。1431年です。先輩」
「観て、空を見上げた。
そこで、青空が広がっていて。
巨大な光の環が、ブラックホールのように横たわっていた。
それ以上に、マシェが呆気取られた声をあげる。俺は目を細めた。
カルデアからの通信が繋がった。ロマニに空を調べるように言うと、彼も驚く驚き、アメリカ大陸はその大きさだと教えてくれる。
空にアメリカ大陸サイズの光の環、か。こうまで目に見える異常があると、なんとも危機感が煽られてくる。
ハンドサインが、一方的に送られてくる。それでいい。アサシンには、レイシフトしたらすぐに周囲の索敵をするように指示していた。
ハンドサインが、一方的に送られてくる。それでいい。アサシンには、レイシフトしたらすぐに周囲の索敵をするように指示していた。
焦点は合わず、視界に映ったものを全て見る捉え方をしていると、視界が広く保て、アサシンを注視しないでもそのサインは確実に見てとれた。」
敵影なし。
武装集団あり。
脅威度『低』。
接觸済み。
情報入手済み。
南東に敵性体がある可能性『高』。
進行を提案。
南東に向かう。召喚サークルの設置は現時点では不要だ。急ぐぞ。
「……南東に仕事が早いな。俺は一人ごち、二人に対して言った。」
悲しいけど戦争なのよね士郎くん！

敵と交わす口上無く。
敵に対して容赦無く。
一切の情けなく撃滅するべし。

時間との戦いだ。必要以上に気負うことはないが、かといって余裕を持ち過ぎてもならない。
合理的に。徹底して効率を突き詰めて自分達を管理せねばならなかった。

森の中で、用を足すと言って茂みに隠れ、そこでアサシンと小声でやり取りし情報を得る。

―竜の魔女として甦ったジャンヌ・ダルク。殺害されたフランスの国王シャルル七世と撤退したイングランド。大量発生している竜種とそれを使って生きているらしい黒いジャンヌ。確認されたサーザントらしき者は現状四騎は確定―

そんなフランスは世界で最も早く自由を標榜した国家だ。もしフランス
が滅びてしまったとしても、それは時代の停滞を引き起こし、未来
はその姿を変えることになるかもしれない。
そういった意味で、アサシンと俺は竜の魔女とやらが特異点の原因がある
ことを認め、アサシンと俺は竜の魔女とやらが特異点の原因であり、
聖杯を所有している可能性の高い存在だと推測した。
圣杯を所有しているموكانниковjsonpckだろう。

強行軍で南東の方角に向かっていると、道中、この時代のフラン
ス軍とその残党を発見。接触し、情報を得るべきだというアルト
リアの意見を退ける。
なぜと問われ、俺は端的に答えた。現地の人間と関わる必要がない

アルトリアは眉を顰め、怪訝そうにした。使い魔？
自分のマスター

アルトリアは眉を顰め、怪訝そうにした。使い魔？
自分のマスター

自分達の他にサーヴァントがいる。しかしマスターはそれを知ら
せることはない。マスターの気質から考えると、そのサーヴァン
ターはいつの間にそんなことを、そこまで考え、アルトリアは察
した。

自己の他にサーヴァントがいる。しかしマスターはそれを知ら
せることはない。マスターの気質から考えると、そのサーヴァン
ターはいつの間にそんなことを、そこまで考え、アルトリアは察
した。
だっている。確認する意味がない。

間にして二時間と三十分ほど一直線に駆けた。英霊とデミ・サ－ヴァントにはどうということもない距離だが、生身の人間には厳しいのではとマシュがマスターを心配する。するとマスターは言った。

無用な気遣いだ。この程度どうというものもない。その気になってしまこと一日だって駆けているという。人の身で人外の怪物と渡り合うには一時駆けた。

英霊とデミ・サ－ヴァントにどうということもないが、生身の人間には厳しく心配する。

するとマシュは言う。

ヒトの極限に至らねばならず、そのための訓練は積んでいるんだ。

戦争の中でも最も過酷なのは行軍である。であれば如何に戦闘技術が高かろうと、足腰が弱く足の遅い者は達の軍は精強とは言えない。

軍隊で延々と走らされるのは、体力作りのためでもあるが、何より長距離の移動を步行で行なえる下地を作るためなのである。アルトリアが同意する。まさにその通りだと。足の遅い、長距離の移動がままだらならない軍など物の役にも立たない。いつの時代もそ

敵の要害を図る。丁度良い機会だ。

度良くないマスターは、戦闘体勢を取る二人を制し待機を命じた。

進撃方向に敵影。

敵性飛翔体。竜種－－あれば下級のワイヤーパーナーか。断じて十五世紀のフレンズにいていものではない。

数は九体か。こちらには気づいていないのが……。

どうしますか、とアルトリアがマスターに訊ねる。汗一つ流していないうマスターは、戦闘体勢を取る二人を制し待機を命じた。

どうかい！
射籠手に包まれた左手に黒弓を。右手に最強の魔剣グラムと、選定の剣カリバーの原典に当たる「原罪」を投射。エクスカリバーほどではないが、触れるモノを焼き払う光の渦を発生させることができる。消費した魔力はすぐにカルテアから充填されるのだ。魔術回路にかかる負荷は想定していたものより遥かに軽微。

投影した宝剣を弓につけ、ワイバーンの内の一体に投射。貫通。射線上のもう二体も易々と貫き、三体を葬った。ワイバーンがこちらに気づき向かってくる。

構わず。

エクスカリバーはならいが、触れるモノを焼き払う光の渦を今度は投射工程を一つ省き、魔力も絞った再現度五割「原罪」を投射。無造作に投射。これも貫通。鱗も肉も骨もまるで紙のよう剣弾を乱し逃げ出し、ワイバーンに向けて、通常の剣弾を放つ。都合六発。一体に対して二射、心臓部と頭部への射撃で事足りた。

弓を下ろし、マスターは適切な投射効率を割り出したことを確認。

ワイバーンに対しては道具の投影の必要はない。
感嘆したように目を瞑くサーヴァント達を促し、マスターらは一歩退いていく。

「…呆けている場合か？　行くぞ」

感嘆したように目を瞑くサーヴァント達を促し、マスターらは一歩退いていく。

相手がサーヴァントか、それと同位的存在が現れたなら、決して
今のように上手いくことはない。分不相応の魔力を手にしただけ
で増長すれば呪文取りになる。

「……うええ。敵が残っているかもしれないんです。警戒していきましょう。」

マシュとアルトリアの言葉に頷く。そして暫し沈思し、アルトリア
にこの場で待機することを命じた。

「……下策だ。だが、お前をここに残すことの意味、戦争の視点で見れ
ば分かるだろう。」
それは、確かに有効です。しかしあそこにはまだ無辜の民がいる可能性があります。

マスターの断言に、アルトリアは眉根を寄せる。

「根拠なんですか？」
「分かりていることを聞く。敵の拠点を制圧、占拠することが目的なら、あそこまで徹底して砦を破壊することはない。俺達が敵と
する連中は、相手がなんだろうと殲滅する手合だろう。そして
仮に生き残りがいたとしても意味がない。真の意味で人々を救おう
とするなら、この特異点を正しい歴史の流れに戻し、今ある悲劇
をなかったことにすらしないだろう。違うか？」
「道理です。……今は大義を優先します。マスターの命に服しまし
よう…」
「助かる。マシュは俺と来い。お前の守りが頼りだ」
「はいっ」

張り詰めていた空気が少しだけ緩んだ、ような気がした。

場違いなほど気合の入った応答に、アルトリアと顔を見合わせ
したが、それは無期な苦笑に。アルトリアを残して砦を迂回。向こう側から突入す
る。

マシュに身边の警戒を任せ、自身は遠くを警戒。砦の奥にまで行
くと、そこには…
竜を象る旗を持つ黒衣の女を発見。こちらを見て、にやりと嗤う。サー・ヴァント反応。敵、竜の魔女と断定。四騎はいると聞いていたが、五騎こここにいる。ということは、まだいるかもしれない。黒衣の男と、仮面の女は吸血鬼か。死徒の気配に似ているが、こちらはそれとは異なり更に『深い』。中性的な容貌の剣士が一騎。レイピア状の剣をすぐに解析。担い手の真名はシュヴァリエ・デオン。それにより、もう一人。十字架を象る杖を持つ女。十字架からキリスト教連の英霊と推定。女となれば、聖女の部類か。挙げられる候補は少ない。行動パターンを割り出せば真名を看破するのは容易だろう。
中性的なる容貌の剣士が一騎。レイピア状の剣をすぐに解析。担い手の真名はシュヴァリエ・デオン。それにより、もう一人。十字架を象る杖を持つ女。十字架からキリスト教連の英霊と推定。女となれば、聖女の部類か。挙げられる候補は少ない。行動パターンを割り出せば真名を看破するのは容易だろう。

男の吸血鬼は杭のような槍を持っている。グレード三世が最たる脅威である。最優先攻撃対象に指定。この場で確実に撃破する。

敵戦力評価。グレード三世が最たる脅威である。最優先攻撃対象に指定。この場で確実に撃破する。

血の伯爵婦人だろうか。

―何故？気づかれるような落ち着度はなかったはずだ。感知能力が高くいう一言だけでは片付けられない。それはだけの感知能力が悪いということ一言だけでは片付けられない。
あるなら、気配を断っているアサシンにも気づけるはず。のに
可能性としてあの発の魔女はルーラーか、それに類するエク
ストラクラスを得ていると考えられる。ジャンヌ・ダルクならばあ
り得ない話ではない。過去、聞いたことがあった。聖杯戦争を監督するためのサーティアントが存在すると。それがルーラー。調停者のサーティアントは、サーティアントの位置を把握することが可能だと言うが。...そこで
アリュエリアの位置を知られていることにも筋が通る。
でなければ、相手は常にこちらの位置を把握して戦略を練れると
いうことだ。

それは、こちらに圧倒的に不利となる情報。いつでも奇襲される
恐れがある。またこちらがレイシフトしたばかりということもあり、
手を打たれてはいないとなれば...今が最大の好機。都合が良いこ
とに敵の主力と思われるサーティアントも揃っている。

やる必要はあっても、やらない理由はない。ここを逃せば対抗策
はアサシンだけしかない。}

- オペレーター
- 令呪起動。システム作動。セイバーサーティアント、アルト
リア・ペンドログンを指定。『道具解放』し、聖剣の最大火力で皆
を駆け抜けて

気配。
咄に動いたのは聖女らしさーヴァント。宝具で対抗しようと手にしていた黒弓に投影したまま背負っていた、原罪をつがえ放つ。宝具の解放を妨害する目的で、ヴラド三世と聖女を中心に巻き込むように『原罪』で壊れた幻想を使用。有効なダメージを確認。目的達成、宝具展開阻止。

「マシュ、宝具だー！了解。宝具、偽装登録ーー展開しますーー！」

構えた盾から淡い光の壁が構築される。

進る黄金の光の奔流が、横蒼ぎにマスターごと砦を、五騎の敵サヴァント達を呑んできた。

マシュの盾と、アルトリアの聖剣の相性がいいから出来ることだ。もしブリテンの聖剣以外で、Aランク超えの対城宝具を撃たれたらマシュは耐えられない。

光の津波を遮る盾の後方で、マスターはその鷹の目でヴラド三世と思われる吸血鬼、カーミラらしき女吸血鬼、竜騎兵のデオン、聖女が聖剣の光に焼き払われたのを見届けた。

しかし、肝心の竜の魔女は回避した。空を飛んで。

決死の顔で回避した竜の魔女は、何かを喚きながら飛び去っていく。
マスターは冷徹にそれを見据え、最大攻撃力を発揮できる螺旋状の剣弾を弓につげた。

魔力充填開始。見る見る内に遠ざかっていく黒い女はまだ射程圏内。仕損じた時分のため、念を入れて命じる。

「アサシン。行け！」
瞬間、赤い影が駆けた。それが構わず、遥か上空を行く魔女に向けて、マスターは投影宝具を射出した。

「─壊れた幻想─」
カラドボルグ。空間ごと捻りきる魔剣。竜の魔女は直前で気づき、防御の構えを見せた。手応えはあった。どのみち、これで射程圏内からは離れただろう。

追撃は困難。今ので仕留められたのなら僥倖。少なくとも深傷は与えた。しばらくは動けまい。

アルトリアが合流してくるのを遠目で見守る。マッシュが指示を仰いできたのに応じる。
廃墟となっていった砦は、綺麗さぱりなくないた。人間最強の聖剣、対城宝具を受けてのだから当然だ。

無事なのは、マスターの後ろにあっ瓦礫の山だけ。火も消し飛んでいく。

マスターは言った。霊脈としは下の下だが、ここでも特に不自由はなない。

「召喚サークルをここに設置しよう。今日はここまできよ」
勝ちたいだけなんだよ士郎くん！

じくじくと肉が燃え、何か強大な力によって再生されている体。

グリテンの赤い竜と讋われた伝説の騎士王が担ったその極光で、あろうことかあのキ

パーソークたランサー、アサシン、セイバー、ライダーがお陰で死んだ。自分でも一歩遅ければ、あの忌々しい光に焼かれて脱落ちてしまっただろう。

凄まじい熱量だった。掠れただけでも死は免れなかった。咄嗟に

飛翔して完全に回避してなお、全身に重篤な火傷を負ってしまったほだ。

火に焼かれて滅んだジャンヌ・ダルクが、怨嗟によって蘇り、

しかして再び焼かれて死ぬなど断じて認められるものではない。しかも皮肉なことに、我が身を焼いた俗物達の炎とは異なり、聖剣の
それは間違いなく聖なるものなのだ。
冗談ではない。ふざけるな、と叫びたかった。
そんな余分はない。手勢を失い、圧倒的不利に陥った瞬間、魔女
だと甘かった。あのキチイは飛んで逃げられたからと大人しく
それは間違いない聖なるものなのだ。
冗談ではない。ふざけるな、と叫びたかった。
そんな余分はない。手勢を失い、圧倒的不利に陥った瞬間、魔女
だと甘かった。あのキチイは飛んで逃げられたからと大人しく
冗談ではない。ふざけるな、と叫びたかった。
アツは、気が狂ってる……！
弱味を見せたら徹底的に突いてくるだろう。そこに手加減はない。
魔剣の直撃を受け、撃墜された魔女は近くにあった森に這って行こう。完全に回避した聖剣の熱よりも、あの螺旋の矢の方がよほど魔女に深入を与えている。
魔女に深手を与えている。
容赦はない。呵責なく攻めてくる。絶対に勝てるという好機を逃すわけがない。
「……きっと、ジルね。ジルが私に何かをした。だから助かったんだわ。」
ジル・ジル・ド・レュ。今も昔も、魔女にとって最も頼りになる存在。いつも味方でいてくれた彼なら、きっと自分を助けてくれる。だから、この再生はジルのお陰なのだろう。……あとで礼でも言わせてやろう。特別に一度だけ。
一発の執念深い正義の味方様ならきっと私を追っていく。私が深手を負った、というのもあるでしようけど、それは私も私をサヴェントを四騎も失った。好機だと睨むはずよ。実際に、こちらも
……きっと、ジルね。ジルが私に何かをした。だから助かったんだわ。
危ないことに違いはないのだ。

手元にいるのはジルにパーソクしたアーチャーだけ。これは、非常に不味い。ファニールがまだいるとはいえ、ジャンヌ・ダルクの目的にはあの大光が焼き付いていた。

最強の聖剣、エクスカリバー。ファニールを屠った聖剣よりもランクは確実に上。アーサー王自身も竜殺しに比肩、或いは上回る大英雄だ。流石に竜殺しの属性まではないだろうが、あの火力を連発できるとしたら不利は否めない。早急に新たなサーヴァントを召喚しなければならないだろう。

しかし、問題は。あのキガイの追撃を振り切って、本拠地の城に戻れるかどうか。無理だ、と魔女は直感する。何も手を打たないで逃げていたらきっと追い付かれる。

そうなるべく、またあの聖剣か、あの剣弾が飛んでくるだろう。

だから、ここにいるのが自分一人だからそれを隠すことなく素直に認められた。

それは恐怖だった。誤魔化しようのない畏怖だった。
恐ろしいものを、恐ろしいと認められないのは、人間的成长の
い愚か者だ。私は違う、とジャンヌは思う。
令咒を起動。迷いなく一角を消費し、アーチャーを空間転移させ
てき、端的に命じた。
一 seri
ここに私を追って敵が来るわ。勝たなくても
長く敵の足を止めるの。私が新しくサーヴァントを召喚するための
言うだけ言って、ジャンヌは再び飛翔した。後に残されたのは、
一人の女狩人。女神アルテミスを信仰する純潔の弓使い。
アタランテ。獅子の姿の狩人は、狂化によって鈍った思考で了解
と短く告げた。
一了
だが、狩人も、そして魔女も知らなかった。
カルデアのマスターは、敢えて追撃になど打って出ておらず。魔
女を追尾する暗殺者は、狂化で鈍った狩人をまんまと素通りし
て魔女を追っていた。
夜が明けるまで影の如く追い続け、一つの城に魔女が逃げ込んだ
のを確認すると、暗殺者は得た情報を纏めた。
一了
致命傷から回復する再生能力。サーヴァントの追加召喚を可
能にする能力。聖杯の所有者はコイツで決まりだな。本拠地も
確認、伏兵も認識。任務は一先ず完了、帰投するしよう。
問題だ。ジャンヌ・ダルクはどうして百年戦争時に、連戦して連勝を出して考えたと思う？

召喚サークルを設置し、カルデア近況を報告したあと、焚き火をして暖を取り、携帯していた保存食を口に運びながら士郎が言った。

同じように焚き火の前に座り、盾を円卓代わりにしていたマシュは、顎に手を当て考えた。

「…軍の指揮が巧みだったから、ですか？」

「違う。神の声を聞くまでたの小娘だったんだぞ。文盲で、学が少ない少女に軍略の心得なんてあるわけがないだろう。」

「…ヒントは、ジャンヌ・ダルクは源義経と同じだということだ。」

マルシェ、よく考えてみてください。答えは意外と単純ですよ。
「アルトリア、シャルロック」
何か知恵を貸そうとしたアルトリアの口に、日がある内に射落とし調理した鳥の手羽先を押し込んだ。
はうっ、と声をあげ。次の瞬間には「んうー」と満足そうに食べ物に夢中になるアルトリアに苦笑しながら、士郎は再度マシュに目を向けた。
「えっと……ジャンヌ・ダルクは神の声を聞いたとされている。
何が、啓示のようなものがあって、そのお陰だったりするのでしょうか。」
「それも違う。あまり話を引っ張るのもアレだし、答えを言うと。
そもそも百年戦争と銘打っているが、常に全力で殺し合っていたわけではないことはマシュも知っているだろう。騎士は勇壮に戦い、しかし負けて捕虜になると身代金を払って解放される……まあ、温かいうちに頑張る力がある。」
「そもそもジャパン・ダルクは敵国イングランドの騎士を殺した。殺すことを躊躇わなかった。戦争はそういうものだと思っていたし、戦争を勝つことは……むしろかな。」
争のだからと戦う前の口上も述べずに軍を率いて突撃した。軍から突出して口上を述べていたイングランドの騎士に向かって、そして、殺した。

マシュー目を見開いた。

そう。源義経と同じというのはそうということだよ。彼らは当時の風習、決まりごとを無視して先手を取り続けたから勝てた。正面からの奇襲が出来たわけだから、彼らの奇襲が出来たわけだから、勝つのは簡単だったろう。

無論、それが通じるのは最初だけ。後は己の才覚、運、味方の僕に熱狂していくのもわかる。勝利は気持ちいいからな。だから、そんなやり方で勝ってしまえば、それはもう敵方から恨まれるだろう。イングランドが何をおいてもオルレアカンの乙女を異端として処刑し、とっあったのは、ジャンヌ・ダルクがそれほどに憎かったからだ。

……

ジャンヌ・ダルクが戦死になった最後の戦い。なぜジャンヌ・ダルクが敗れたのか。それはルール破りの常習犯ジャンヌ・ダルクを相手にイングランドがルールを守ることをやめたからだ。結果的に、ジャンヌ・ダルクは自分と同じことをされて負けたというわけだ。

さて。
ジャンヌ・ダルクを敵とする時、以上のことを見つけただろう。

ジャンヌ・ダルクは常識知らずだったが馬鹿じゃない。味方が有能でも、馬鹿が何度も戦争で勝てる道理はない。歴戦を経る中で軍略も学んだだろう。そんな彼女の戦術ではドクトリンは極めて単純で明快なものだ。即ち、勝てば良いのだろう。

皮肉に言う士郎に、アルトリアが一言。今、少しアーチャーに似ていましたよ。少しあルートに似た感じだ。

士郎はちょっととし、次に苦笑した。それは、誉め言葉だ。

警戒すべきは型破りの用兵だ。そして使われる戦術は単純で手堅い。シンプル故に破りがたい手段をとるだろう。次に相手からこちに仕掛けてくるとすれば、戦力の拡充を果たし、確実に勝てると思ってしまうだろう。

いや。あの時に追撃するのは上手くなかった。奴はまだ手札を残しているだろう。四騎もサーヴァントを従えていたんだ、まだいると思って良い。聖杯戦争なら七騎はいるはずだから、ジャンヌ・ダルクを含めて後二騎は最低でも控えている。加え、奴は竜の魔女だ。パイバーの大軍とサーヴァント、さらに強力な竜種がいるから、警戒するべきか、これで分かっただろう。

「ジャンヌ・ダルクは常識知らずだったが馬鹿じゃない。味方が有能でも、馬鹿が何度も戦争で勝てる道理はない。歴戦を経る中で軍略も学んだだろう。そんな彼女の戦術ではドクトリンは極めて単純で明快なものだ。即ち、勝てば良いのだろう。」皮肉に言う士郎に、アルトリアが一言。今、少しアーチャーに似ていましたよ。少しあルートに似た感じだ。

「警戒すべきは型破りの用兵だ。そして使われる戦術は単純で手堅い。シンプル故に破りがたい手段をとるだろう。次に相手からこちに仕掛けてくるとすれば、戦力の拡充を果たし、確実に勝てると思ってしまうだろう。

いや。あの時に追撃するのは上手くなかった。奴はまだ手札を残しているだろう。四騎もサーヴァントを従えていたんだ、まだいると思って良い。聖杯戦争なら七騎はいるはずだから、ジャンヌ・ダルクを含めて後二騎は最低でも控えている。加え、奴は竜の魔女だ。パイバーの大軍とサーヴァント、さらに強力な竜種がいるから、警戒するべきか、これで分かっただろう。」
そんな中で、アルトリアが上げた戦果はまさに大殊勲である。彼女のお陰で優位に立っているようなものだ。

「ということは、今するべきは情報収集ですか」「できればこちらも戦力を増やしたいところですね。シロウはどうするつもりですか」

どうするか？士郎は立ち上がり、明けていく空を見上げた。

二日目の朝、午前。士郎達はパーサンの群れに襲われているランス軍を見発見。これを助ける。

そして日が真上に来る前に、帰還したアサシンから情報を得て。

 ALLOWED "時間はやっぱり俺達の敵だな。…四日というのは撤回する。" 日で決めるぞ、マシュ、アルトリア。
酷すぎるぞ士郎くん！

足がほしい、と俺は切に思った。

乗り物という意味の足である。移動速度の遅さは如何ともし難い。何とかして短縮したいが、どうにかならないだろうか。ダ・ヴィンチえもんにでも頼んで、何か乗り物でも作って貰おうか。

い、単純にライダーがいたら良い。戦車持ちならなよした。っていうこと。賢沢は言わないから高い機動力を持つランサーがいい。それでもわざわざ俺が走らなくても、ランサーに追撃を任せて優雅に構えられる。

俺の悩みも一挙に解決なら槍兵がいよいよえ、戦車を確実に持っているだろう騎乗兵のクラスでの召喚も捨て難くなってきた。

うーん、悩む。悩むなぁ。
先輩。現実を見てください先輩。
やめろ。やってください。奇天烈でファンシーな獅子を象ったバイクなんて知らない。俺は今滅茶苦茶スマートでイカサマを吹かしてるんだぜイケメン。
せんぱー！帰っててくださーい！現実、これがああ現実なんだ！
せっぺてくださーい！昨夜。敵サーヴァント四騎を撃沈させた砦跡地で夜営をした俺達。昨夜。敵サーヴァント四騎を撃沈させた砦跡地で夜営をした俺達。
そこで、俺はかねてからダ・ヴィンチに依頼していた移動用の乗り物を転送して貰ったわけだ。
俺は諸悪の根源を睨んだ。

「……おい。弁解するなら今だ。さすがの俺は無視できないんだ。
前のセンスが死んでるのはわかっただ。頼むから達・ヴィンチに自分好みの改造をさせなよ。
自体は contato 装備で良くない。
普通で良いんだ、普通が良いんだよバ
イクは——」

「うっ。……い、いいじゃないですか獅子頭。かっこいいでしょう。
俺は昨日の夜から定期的に宝具を投影し、武器庫に貯蔵している
わけではない。だからと光り、夥しい魔力を放つ投影宝具がシュールに
見えても仕方ない。

しかしねあの。こんなはずじゃないのに……。俺が涙目になった
「あーあ。
敵サー・ヴァンと一気に片付けた誰かさんだと思ってたのに。
台無しだ。
わたしたちが…」
「ググググググ…！」「モードレッド卿もだめです！」「ちゅうえぇとか言われてるが、言うほど乳はないよーよアリバ」
「う、うわあああ！」「ドゥン・スタリオン号に縦リつくようにしてアルトリアは泣き崩れた。それを尻目に、俺は呟く。」
「ほんと円卓は地獄だぜ…」「いいえ、今は円卓は関係ないかと…あとセクハラです先輩」
脳内に展開していた偽螺旋剣の設計図に魔力を通し投影する。全工程を完了し、それをサイドカーに貯蔵して、ラムレイ号から離れられた。現在、貯蔵しているのは偽螺旋剣を五本。赤頬猟犬を四本。原罪を六本。勝利すべき黄金の剣を五百。余裕がある時投影しておこうと思ったのだ。実戦に際して一時投影していっては間に合わないし、非効率的だと思ったのである。
夜通し、じっくり丁寧に時間をかけて、負担が掛からないように気を使いながら投影した。これからは暇さえあれば投影道具を増やしていこうと思っている。そこで、ふと気づいた。俺達は今、名前も知らない森の手前にあるわけだが、樹の影から何かがこちらを見ている。一時切嗣だった。
仕事帰りの独身サラリーマンの如く目が死んでる。咽び泣くアルトリアと、それを慰めるマシュを背にアサシンの元
マシュ、シロウが、シロウが苦じます。どうしてですね。
余計なお世話という奴ですね。
円卓の騎士の物真似がなんであんなに上手いんです。辛いです。

「余計なお世話と申しますね。」
「でもセイバーのアルトリアさんの現実はそれです。」
「でもマシュ。貴女とは少し話し合う必要があるようですね。」
「余計な余計な余計な話と申しますね。」
「余計な余計な余計な話と申しますね。」
「余計な余計な余計な話と申しますね。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедурです。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」

「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
「円卓の騎士の物真似がなんであるなら、見 процедур입니다。」
わねばならなくなるところだった。

迂回しよう。魔力は節約だ。使わないで良いなら使わない。節制

「何か言ったか」

「何か言ったか」

「.webkit」

「お母さん……」

「ん？」

「お母さん……」

「とい、何か」

「アイ、何も」

「？」

見れば、アルトリアもこちらを眺めている。しかし切嗣は抜け目の

「マシュがこちらを見て、ぼつりと呟いた。」

「遊びがないう。」

「そんなる切嗣は、やはり遊びのない眼差しで言葉を続けた。」

「遊びがないう。」

「奇襲だと？ 僕達だけで、か？」

「そうだ。ジャンヌ・ダルクはサーヴァントを追加で呼び出せるよ

うだ。このままだは折角のアドバンテージが崩れ去る」

「サーヴァントの追加召喚？ …ジャンヌ・ダルクは聖杯を持っ

「ああ。僕もそう睨んでいる」

「ああ。僕もそう睨んでいる」

「ああ。僕もそう睨んでいる」
暫し沈黙し、俺は決断する。
本当ならフランス軍を利用し、人海戦術で攻めるつもりだった。
サヴァンと前、同時にフランス兵を助け、フランス軍兵に
接触するつもりだったのだが……。
サークルの前、普通の人間は無力。
サークル兵を助け、サークル軍元帥のジル・ド・レに
接触するつもりだったのだが……。
マシュは俺の意を汲み、武器庫から宝剣「原罪」を四本持ってき
た。それに、投影したマルティーンの聖骸布を巻き付け、切嗣に手
渡す。
「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」「これを受け取れ」「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」
「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」「これを受け取れ」「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」
「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」「これを受け取れ」
「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」「これを受け取れ」「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」
「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」「これを受け取れ」「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」
「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」「これを受け取れ」「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」
「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」「これを受け取れ」「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」
「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」「これを受け取れ」「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」
「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」「これを受け取れ」「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」
「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」「これを受け取れ」「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」
「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」「これを受け取れ」「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」
「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」「これを受け取れ」「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」
「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」「これを受け取れ」「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」
「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」「これを受け取れ」「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」
「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」「これを受け取れ」「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」
「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」「これを受け取れ」「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」
「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」「これを受け取れ」「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」
「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ」「聞こう」「これを受け取れ」「奇襲成功率は」「三割だね」「これを受け取れ「
アサシンは状況を見て勝手に動け。俺達はそのまま決戦に移る。
旗色が悪くなれば、投影道具を積んだラムレイ号を突っ込ませて爆破し撤退する。
了解。ラムレイ号、あれか。
随分可愛らしい外見だな。
了解。
そうかい？
それがあれかどうか。
切嗣の声に何かを思い出した。
もうっとう！そんな顔。
俺は思い出した。
そういった切嗣のセンスも死んでいたな。

アサシンは状況を見て勝手に動け。俺達はそのまま決戦に移る。
旗色が悪くなれば、投影道具を積んだラムレイ号を突っ込ませて爆破し撤退する。
了解。ラムレイ号、あれか。
随分可愛らしい外見だな。
了解。
そうかい？
それがあれかどうか。
切嗣の声に何かを思い出した。
もうっとう！そんな顔。
俺は思い出した。
そういった切嗣のセンスも死んでいたな。

アサシンは状況を見て勝手に動け。俺達はそのまま決戦に移る。
旗色が悪くなれば、投影道具を積んだラムレイ号を突っ込ませて爆破し撤退する。
了解。ラムレイ号、あれか。
随分可愛らしい外見だな。
了解。
そうかい？
それがあれかどうか。
切嗣の声に何かを思い出した。
もうっとう！そんな顔。
俺は思い出した。
そういった切嗣のセンスも死んでいたな。
加減に士郎くん。
ジュラの森から北西に向けて走ると数時間。
高かった陽は地平線に傾き、夕焼けに染まる晴天に夜の訪れを感じた。遠くにオーレアンの城が聳え立つのが見えた。
風を切って駆け進める機械仕掛けの馬。その燃料も尽きていても、使い潰すことと考えれば後半刻はそこの走りを継続できろ。う。
「…人がいない」
カルデアのマスターが呟く。その声は風に浚われ、相乗りしていけるデミ・サークヴァンの少女に聞きとされた。
「竜の魔女の勢力圏だからよ。恐ろしく、生きていける人はいないかと」
「無関係の者を巻き込める恐れはなさそうだ。―アールトリ、マシュ、心に刻め。手加減や容赦は一切無用だ。人間の興廃は
この一戦にある。正しい歴史に流れを戻すことが、魔女殺戮を否
定する唯一の手段だと肝に銘じろ。セイバーのサーヴァントが重々しく頷く。

精霊との戦いではなく、邪悪との戦いであり、私欲のない戦いで
あり、世界を救う戦いである。一対一の戦いではないが聖剣は相手
が己よりも強大なモモノであると認め、秘めたる星の息吹を放ってい
た。

一つの令呪の補助もなく、マスターからの魔力供給だけで放てるのは一
度が限度だろう。カルデアから魔力を供給されているマスターでは
だが、マスターの手には三画の令呪がある。一日に一画、令呪を
補填されるため、使い惜しもう必要は微塵もない。マスターは聖剣を
使用する時は、躊躇いなく令呪を切るつもりだった。

令呪の補助もなく、マスターからの魔力供給だけで放てるのは一
度が限度だろう。カルデアから魔力を供給されているマスターでは
だが、マスターの手には三画の令呪がある。一日に一画、令呪を
補填されるため、使い惜しもう必要は微塵もない。マスターは聖剣を
使用する時は、躊躇いなく令呪を切るつもりだった。

令呪の補助もなく、マスターからの魔力供給だけで放てるのは一
度が限度だろう。カルデアから魔力を供給されているマスターでは
だが、マスターの手には三画の令呪がある。一日に一画、令呪を
補填されるため、使い惜しもう必要は微塵もない。マスターは聖剣を
使用する時は、躊躇いなく令呪を切るつもりだった。
竜種のワイバーンもいる。魔物の混成軍といっても混沌とした様相を呈していた。
セイバーが表情を険しくさせた。巧みにバイクを操縦しマスターと並走しながら近づく。
「あれは……」
「マスター。私はあれを知っています。海魔です。敵にキャスターのジル・ド・レウェがいる。注意してください」
「はい。あれは堕落した反英雄「青髭」として恐れられた怪物が宝具で召喚した魔物でしょう。あの群れを殲滅しても意味はありません。
前沿と詳しいセイバーに聞くと、どうやら第四次聖杯戦争の時になあの海魔とやらを召喚するキャスターのサーヴァントと交戦したことがあるらしい。
召喚は容易。呼び出すだけ呼び出し、後は放し飼いにすれば勝手に魔物が獲物を求めて動き出す。典型的な宝具が強力なタイプのキャスターで、最後の決戦の時には聖剣の真名解放をしなければ打倒できなかったほどだという。
最低限の手綱を握り、自身と味方だけは襲わせないようにすれば、
近場に生き物がいないためこちらを率先して襲ってくるわけだ。しかし、ウィバーンの群れも多数存在している。あれも竜の魔女が召喚したものだとすれば、恐らく単純な兵力だけでこちらを押し潰すことも不可能ではない。

無限に湧いてくる海魔とウィバーン。あまそ相手にしたくない組み合わせだ。どうやら、相手も本気のようだし……やはり出し惜しみは出来ないか。

「アルトリア、お前の意見を聞きたい。オーレン城に辿り着くまでの最短ルートはなんだ？」

「このまま進み、敵を宝具で一掃し進むのが最短ですね。」

「ええ。なのでマスター、貴方の投影した勝利すべき黄金の剣を使わせてください。」

その後葉に、マスターはサイドカーに積まれた投影宝具のカリバーン五本を見せる。

「……何本使う？」

二本で充分です。一度の真名解放で砕け散るでしょうか。二本しか貯蔵がない。元が偽螺旋剣と赤原猟犬を含め、二十本という頭の悪い数だったから残り十六本貯蔵されていた。

メロダックは四本、アサシンに持たせてあるため一本しか貯蔵がない。元が偽螺旋剣と赤原猟犬を含め、二十本という頭の悪い数だ。恐れなければ平時の聖剣に伍する力を発揮できる。ランクにしてＡ＋は固いでしょう。一度のカリバーンで今見える範囲にいる敵を一
す魔渡つ
今、の負き掃、
…
る力カ
彼バ
ま
ま
舞
ま
だ
に
女で
ス
あ
成
前で
が
討と
け不
クい
投
簡熟バ
ま
し。
単解
減に
か
こか
し、
停親し
てサー
い。
簡応
のア
繋を。
簡応するだけのこと。
彼女に繋がるパスに魔力を通す。
カルデアからマスター、サイドカーから二本のカリバーを抜き取って投げ
渡した。
今、成熟している貴方には大した負担にはならないと思いますが
う。
彼の意見に従う。
マスターはちらないと己の右手、その指先を見遣る。
…簡単に言ってくれる。あの時は割りと死にそうだったんだが

以前バーサーカーと戦った時の未熟なマスターですら、カリバーニの真名解放に耐えられたのです。カリデアのパックアップがある
まあい。踵躇えるだけの余裕はない。元々こういう時のために
多めに投映していたのだ。セイバーの意見に従おう。
マスターはちらないと己の右手、その指先を見遣る。
……微かに黒
ずんでいる親指を。

魔力に不足はない。ただ、流れていく魔力によって魔術回路が疲弊

掃、討ち漏らしをもう一度カリバーンで撃ち払えば問題なく殲滅で
迫り来る海魔とワイヤーバーンに目掛け、光輝く黄金の剣を突き出し

「選定の剣よ、力を。邪悪を断て、勝利すべき黄金の剣！」「...
予想通り討ち漏らしが出たな。

「ええ。なにももう一度、勝利すべき黄金の剣！」「...
敵の第一陣と、二本の選定の剣は塵一つ残さず消え去った。地形

敵はパイクに跨がり、再びオルレアントに向けて走り始めした。

選定の剣よ、力を、邪悪を断て——勝利すべき黄金の剣！

選定の剣よ、力を。邪悪を断て——勝利すべき黄金の剣！

選定の剣よ、力を。邪悪を断て——勝利すべき黄金の剣！

選定の剣よ、力を。邪悪を断て——勝利すべき黄金の剣！

選定の剣よ、力を。邪悪を断て——勝利すべき黄金の剣！

選定の剣よ、力を。邪悪を断て——勝利すべき黄金の剣！
どうにか取られたように、オルレアンで待ち構えていた竜の魔女は、「…なにあれ」

「呆気にも取られたように、オルレアンで待ち構えていた竜の魔女は、バーサーク・アーチャーを伏した森を迂回し、一直線にこちらに向かい出した時は伏兵を見抜かれたことに敵も相当の智者だと歯噛みしたものだ。

意味もなく戦力を森に置き続ける意味もないし、単独で仕掛けさせれば無駄死にさせるだけののは目に見えているため、アーチャーに奴らの背後を突かせるようなことはせず帰ってくることを念話で命じていた。

後はアーチャーの合流を待って、新たに召喚したバーサーク・ランスロット、バーサーク・アサシンのシャルルちゃん・サンソン、ファントム・オブ・ジ・オペラと、切り札のファジーニールを使っって決戦を挑むつもりだったのだ。アーチャーが合流してくるまで、様々なという、海魔とワイバーは使ったにすぎない。

嫌がらせ程度の戦力だ。雑魚を一掃するために聖剣でも使って消耗してくれたら御の字と思っていたのだが、一えっと。なにあれ。ほんとうに？ねえジル、私の頭おかしくなっ
ちょっとの？
なんか、同じ道具を幾つも持っているように見えた

「そのようにですね」
「どう？」

「そこのよですねえ」
「ええジル！なんかあいつ、あのヘンテコなドリルみたいな剣を
一撃で絞ってるんだけど！」「あっちの王様なんか、聖剣ぶちかます気満々なんですねけど。もう
籠城とか無理でしょこれ。どう見てもこの城が私達を閉じ込める牢
獄にしかなってないんでけど。」

「不味いですねえ。こんな神秘も何もない城では防げないでしょう。」
「ええ、ええ。これはもう打って出た方が賢明でしょう。それらの方が勝算がある。」

常の狂気よりも、卓越した軍略家としての本能が上回っているの
だろう。青髭は平坦な、しっかりジャンヌを落ち着かせる優しげな声
で取り成した。

竜の魔女はその声に安心する。いつも困った時はこの声を聞いて
落ち着いた。彼の軍略家としての能力は本物、仮にも一国の元帥であり、敗戦の憂き目にあった国を建て直した立役者、救国の英雄なのである。

…そうね。そうよ。私の戦いはいつも不利なものばかりだった。

戦局は絶望的じゃない。諦めなって知らない。私は勝つのだ。

…キガイになんて負けないんだから。

『邪悪なる竜、災厄の化身よ！来なさい、そして蹂躙なさい！』

邪悪なる竜が顕現せんと爆発的な魔力の奔流を迸らせると、あまねく光があらゆる命がおまえの賛だ。さあ、いよいよファルニール！』

呼び掛けに応じ、邪竜が顕現せんと爆発的な魔力の奔流を迸らせ、その力の具現、暴力の息吹、邪なる波動に魔女ジャンヌ・ダルクはその竜の旗を振りかざした。

城内であってもまるで構わず、竜の魔女はその幻想種の頂点を召喚した。

高揚した。
邪竜を召喚する異常な魔力の高ぶりは、未だ聖剣の射程圏内に到達していないカルデアの面々にもはっきりと感じられた。カルデアのマスターは、これを新たなサーヴァントの召喚の予兆と捉えた。そしてそれを阻止しなければならないと考えた。故に、手順を変えた。

「あはっ、あはは、あっはははーー」

声も高らかに魔女が哄笑した瞬間。あはっははははーー、オルレアノン城がその土台から崩壊した。あはっははははーーが、その足場が崩れ落ちた。あはっははははーーの基点に仕掛けられていた四つの投影道具、その全てが同時に起爆し。遥か未来の建造物爆破解体技術と知識を持つ匠の手腕によって。斯くして邪竜召喚は途中で頓挫。
竜の魔女は、青髭とその他のサーヴァント共々、消えていった。

竜をまさままと見せつけられながら瓦礫の山に埋もれていた。
そこまでに

「これは酷い」
帰還後、戦闘記録を閲覧した某優男の感想がそれ。

「ラムレイ号！
失われた命を嘆く某天才の悲しみの声。

「好機だった。
今なら殺ると思っただ。今満足している」
被告E氏は意味不明な供述を繰り返し、爆破幇助についての反省は終始せんできた。

「死体蹴り？…基本じゃないのかな？」
実行犯はそう検察側に語り、再犯の可能性は極めて高いたいと言わざるをえず、重い実刑判決が下されてものと見て間違いなじカルデア職員一同—
四連する大爆発。土台から崩れ落ちたオルレアンの城。アルトリアはそれを見て思わず動きを止めた。力強く顔を導き成感はない。冷徹に次の手を算段する冷たさが伝わった。それは、衛宮士郎の前に契約していた男を彷彿とさせる表情とやり口。しかし今のアルトリアにそれを眠む気持ちはない。現金な性質なのか、それをやったのが己の現マスターであるというだけで、許容できてしまっている自分がいた。それにここまで冷徹にことを推し進めなければならない戦いもあるのである。

「畳み掛けるぞ。令呪起動、システム作動。宝具解放し聖剣の輝きを此処に示せ」拝承致しました。我が剣は貴方と共にある。その証を今一度示し
星の極光を轟き、光の奔流が瓦礫の山を斬り抜けていく。誰も視認できないが、この究極の『約束された勝利の剣』を振り下ろす。

オーレアンの城の残骸に向けた己の勘に従って、「約束された勝利の剣」を振り下ろす。大上段に構えての、両手の振り抜き。オーレアン城の残骸に向け、その極光が轟き、光の奔流が瓦礫の山を斬り抜けていく。誰も視認できないが、この究極の『約束された勝利の剣』を振り下ろす。

さらにあれかじめ投射していた無数の剣弾を解凍し、虚空に忽然と姿を表した二十七弾の掃射を開始。そのまま再びの爆破。

オーレアンを更地にせんばかりの怒濤の追撃である。オーレアンを更地にせんばかりの怒濤の追撃である。

更にあらかじめ投射していた無数の剣弾を解凍し、虚空に忽然と姿を表した二十七弾の掃射を開始。そのまま再びの爆破。

オーレアンを更地にせんばかりの怒濤の追撃である。オーレアンを更地にせんばかりの怒濤の追撃である。
マッシュとアルトリアが即座に立ち塞がる。だが、それよりも早く、
動く者があった。
「正面から行くとは、底が知れる処刑人」
背後。土煙に突入していた深紅の暗殺者の銃撃が瀕死の処刑人を
穿つ。体から力が抜けた瞬間、伸ばされた腕がサンソンを土煙の中
に引きずり込み、更に乾いた発砲音が響く。土煙が晴れた時、そこ
にはもう何もなかった。
士郎はその全てを見届け、首筋に冷たい汗が流れる。その斬首剣
を覚ただけで解析・固有結界に貯蔵し恐ろしい能力を知って戦慄し
たのだ。
サノンの道具『死は明日への希望なり』bard由来は罪人を斬首
する処刑器具のギロチン。真の処刑道具、ギロチンの具現化。
一度動いてしまえば死ぬ確率は呪いへの抵抗力や幸運では
『いずれ死ぬという宿命に耐えられるかどうか』という概念によっ
て回避できるかどうかが決定される。
精神干涉系の道具であり、戦死ではなく処刑されたという逸話が
ある対象には不利な判定がつく。中距離以内で真名を発動させると
ギロチンが顕現し、一秒後に落下して判定が行われるのだ。
これを確実に防げるのは、そもそも死の運命にはなかったはずの
アルトリアだけ。マッシュは不明だが、士郎は確実に死に、アサシン
の切嗣もまた同様だろう。
これで明らかになるが、そもそも死神の運命にはなかったはずの
アサシンと言える。接近されているれば不味かった。アルトリアがいた
天敵と言える。接近されているといえば不味かった。アルトリアがいた
とはいえ、肝の冷える瞬間だった。

……まだ攻めが甘かったということだ！

士郎は躊躇わなかった。

「総員退避！ラムレイ号、突貫する！」

構え、と声を上げた騎士王を無視し、士郎は自動操作モードを起動。ただ真っ直ぐ走るだけの機能は士郎が注文して付けていたものだ。

乗り手もなく疾走する黒い獅子頭のバイクは、もはや瓦礫すらも消し飛び更地となっていたオルレアノ跡地に突っ込んでいく。

ドメの爆撃となった。

さらに、ラムレイ☆っ！！

「壊れた幻想ッ！」

悲痛な騎士王の嘆きは爆音に揺さぶられた。この瞬間、海を壁として耐え続けていた甲冑は、十三本の投射道具の一斉起爆に巻き込まれ消滅。

圧われていた竜の魔女もまた、己の『所有者』の消滅を以って偽りの人格は剥がれ落ち、ただの『器』となって消滅した。

……そこにあったかもしれない両者の最期のやり取りを、知るのもは皆無。
「と

レ

元

た

な」
こ

―は

が、

し

い

の

特

者

に

と、

…

っ

ぅ

な

戦

の

そ

が、

歴

異

が

首

フ

ター

帰

ん

聖

も

敵

っ

こ

に

の

能

杯

と

戻

原

の

息

ん

滅

え、

新

準

ロ

で

に

回

原

の

息

ん

吐

と

な

こ

次

求

い。

め

排

い、

し

上

認。

こ

か

修

除

し

出

た

力

ら

仕

し

現

い。

こ

手

と

こ

り、

て

い

も

て

収

か

水

両

実

れ

で

し

ま

功

の

収

に

な

を

も

聖

こ

輩」

「ま

聖

も

敵

っ

こ

に

の

能

杯

と

戻

原

の

息

ん

吐

と

な

こ

次

求

い。

め

排

い、

し

上

認。

こ

か

修

除

し

出

た

力

ら

仕

し

現

い。

こ

手

と

こ

り、

て

い

も

て

収

か

水

両

実

れ

で

し

ま

功

の

収

に

な

を

も

聖

こ

輩」
ま、あの前で一日ぐらいうんでもいいか、と思う。
流石に休養もなく走り抜けていたら、倒れまうだろうか。

第一特異点「邪●百●戦●オ●レアン」定礎復元
鬼！悪魔！士郎くん！

第一特異点
定礎復元
完了を
確認

所要時間
三十九時間四十三分二十七秒

－－それは衛宮士郎がレイシフト以前に宣言していた四日間を大幅に短縮した記録。九十六時間の半分以下、約一日と半日で一度目の聖杯探索を終えたことになる。

無理もない、十日以内に二つの特異点の定礎を復元し、聖杯を回収することなど、どんな英雄にだって不可能に近い難業である。

だが、カルデア最後のマスターは、第一特異点の聖杯を二日と経た内に回収し歴史の流れを修正してのけたのである。ならばもう一つだって不可能じゃない。このマスターなら、あと八日も猶予があれば必ず成し遂げられる。

しかし信じることで、希望を持つことができた。悲観的な状況にあっても彼らにとっては、その希望がどれほど得難いものかは想像に難くなく、
い。彼らカルテリア職員らの期待に燃えるような目で、マスターはあくまでも泰然とした姿勢を見せていたものの、俺、衛宮士郎は自室にまで来ると、ベッドにどすと腰掛け、深々と、深々と、深々と溜息を吐いた。「もう二度とやらないぞ、こんな無茶苦茶なことは……」薄氷の上の勝利だった。また同じことをしろと言われても絶対に見できなかったら。もし敵の主力を纏めて一掃できなかったら。もしアサシンの情報に誤りがあれば。もし敵の警戒心がもう少し高ければ。もし敵に聖剣を防げる超級のサーヴァントがいたら。もし、もし、もし……何か一つでもミスがあったら敗れていたのはこちらである。完全に運の要素の高い戦いだった。如何にして情報を収集するか、危機の状況。伸るか反るかの大博打。なにやらアラヤさんからの熱い視線を感じないでない一幕。暫し頭を空にして、虚空を何をするでもなく眺め、のろのろと赤い視線を感じないでない二幕。
原礼装、射籠手、改造戦闘服、下着を脱ぎ裸体となる。そして全身を隈無く検分すると、右手の親指以外にも、左足首か
ら先がほぼ黒ずんでいるのが確認できて顔を誇め、
帰還する直前の辺りから、左足に奇妙な不快を感じていたが、どう
ても左足首から先の皮膚が壊死し、黒くなっていたようだ。何か身体に異常が出ていないかロマニに診て貰う必要がある。
解析の結果は、問題ないのが念のため。

俺は頭を振って、用意していた替えの下着を穿き、黒地のタ
ンクトップを着る。そのラフな姿のまま台所に向かい、冷蔵庫を開
けた。
ねの小さなケーキのようなお手製チーズを取り出す。ぱしゅ、と気の抜ける音を立てて発泡酒の缶を開け、ぐびりと一口。そしてナイフをさりげに挿し入れ一皿サイズにカットし、チーズ切れを口に運び噛むする。

「くう！やっぱり、たまにはやらないなぁ、こういうのも…'

小さなケーキの名前はモンテボーレという。

実はこのチーズの名前はモンテボーレである。

しかしダ・ヴィンチの大々好物だったモンテボーレは、生前の万能人オナルド・ダ・ヴィンチがこよなく愛したチーズであり、非常に強いこだわりを持っていま。

俺は七年前に偶然そのピエモンテ州に立ち寄り、再現途中のモンテボーレを試食させてもらい、牛の乳を七割と羊の乳を三割使えばいいのではと意見を言った覚えがある。

その後どうなったかは知らぬ。ただ個人的にそのモンテボーレを再現してみようと試みた結果、非常に癖はあるが満足の行く出来映えとなり、以降俺の中でモンテボーレは「気難しいが愛嬌のある猫」的な立ち位置となった。
通信機がほしい。冬木式の聖杯戦争だ、サーヴァントだ、食い物なんて要らないとか言いそうだが、それはマスターマン変で食べてしまえばいい。切嗣、ダヴィンチと話し合い、今後どのような装備を開発するかを決めた。

これが後に知ったことだが、切嗣はこちらに負担をかけないよう、自前の魔力だけで宝具を長時間発動し、固有時制御で二倍から三倍、加速し続けているそうだ。カルデアに帰る直前には、受けたダメージは皆無に近い光を発していた。

これによって母体の力が半分になるところでもあるし、今回彼には大いに助けられた。いわば礼も兼ねてのささやかなお返しという奴である。そうして貴か注文したくもある。
セイバーという魔法の大食いと、宝具の投影量産という役割をこなしていたマスターにこれ以上の負担を掛けるわけにはいかないという合理的な判断があったが……

流石にあそこにまで機械然としているのは人生損している。どこかで割り切らせ……平時だけでもいい。俺の知る切嗣のような穏やかさを持っているのに……

「……切嗣にも酒を回すかな。嫌がるだろうが、酔わせてくれるんで
でんにしてやる。今呪使ってでも一

でんにしてやる。今呪使ってでも」

「流石にあそこまで機械然としているのは人生損している。どこかで割り切らせ……平時だけでもいい。俺の知る切嗣のような穏やかさを持っているのに……

でんにしてやる。今呪使ってでも一

でんにしてやる。今呪使ってでも」
も無視できる。なんて傍迷惑な野郎だと罵られたのは何時で、誰か
らだったか……。正直覚えがありませんて判じ難い。

そんなわけで改造戦闘服と赤原礼装を着込む。なんやかんや言っ
たところで今は戦時中だ。いつでも出撃できる態勢できているのは当然
の事。概念礼装の射籠手を装着し、己の魔術回路に接続される感
覚と流れてくる魔力の充実は手応えを合わせる。

……この潤沢な魔力に慣れてしまうと、すべてが終わった後が大
変そうだが……これ個人用にプレゼントしてもらえないだろう。
永く貸し出してくれたら本当に助かるのだが。死徒撲滅運動も扱
るはず。

そんなことを考えてつつ、やって来たのはダ・ヴィンチの工房だ。
ノックしようにと手を伸ばすと、中から異様な雰囲気を感じて手を
止めた。切嗣は機械みたいな生態なので、呼けばいつでもどこでも出てくる
はずである。わざわざ探すまでもない。

ううう、ラムレイ、ラムレイいぃ……。

なんてことだ、私のラムレイ号が、こんな見も無惨な姿に……！

「……？」

眉を顰め、何事かと耳を澄ませる。すると、何やら啜り泣く声が
聞こえた。
ひどい、ひどすぎます。シロウは変ってしまいました、かつつては誰にても優しい良い子だったはずなのに…。

泣いってるだけ、騎士王さま。

コレ…私新たにルイ号を生まれ変らせると、ルイ二号機と甦る！

おぉ…そ、それはかつつてのルイの勇姿を引き継ぐと信じて！

無論でも、かつつてよりも勇壮に、かつつてよりも可憐に、ルイの獅子頭は進化する！

アールトリアの声。無駄に勘がいるのがホント腹立つのが。いえ…チーズの匂い…シロウでね！?

アールトリアの声。無駄に勘がいるのがホント腹立つのが。いえ…チーズて…判斷基準は食い物なのか。

色々やせない気持になる。昔は、とか語るなら俺に言わせてもほしい。昔のお前はもっと生真面目で委員長気質な騎士様だったっただろうか。

扉がスライドし、中からアールトリアが飛び出してくる。
シロウ！話があります、中に入って正座してください！ラム

レイに対するあの仕打ち、見過ぎたところではありません！

手にしていながらの上のチーズと発泡酒から離れ。

俺は嘆息して、工房の中に入った。

余裕紳々といったつもりの態度が、俺の持つモテボーレに気づいた瞬間、驚愕に眼を瞠き、真顔で俺を見た。

あ、本当に士郎くんだった。さすが骑士王さま、呆れた嗅覚をして。

・モンテボーレだ

お、おお！おおお！

シロウ！

私に！

今回敵サー・ヴァントを四騎以上は倒している

あっ、こら骑士王さま！それは私のダ！断じてこの私を差し置いたままモテボーレを手にすることができは許さないぞ！

・・・

取っ組み合い、なぜか諍いを起こし始めた二人を冷めた目で見つ
つ、俺は咄。

余裕紳々といったつもりの態度が、俺の持つモテボーレに気づいた瞬間、驚愕に眼を瞠き、真顔で俺を見た。

・モンテボーレだ

お、おお！おおお！

シロウ！

私に！

今回敵サー・ヴァントを四騎以上は倒している

あっ、こら骑士王さま！それは私のダ！断じてこの私を差し置いたままモテボーレを手にすることができは許さないぞ！

・・・
帰りの人がいないので、一人で食べ、一人で飲もうとしている声が聞こえる。あっ、狭いよう！ 私だってふっちゃめ獅子頭とかどうでもいいのサ！ ちゃんとともに性能アップするからそれだけなんだよ！ もうすから！ う？ あ、ああ……

ならこの間、ダ・ヴィンチの工房から呼符をくすねたの許していくれよ。あと特異点でも使える通信機も人気分よくないな！ ちなみに、なんでするっていったよう？

シロウ！ シロウ！ シロウ！

ラムレイは死にました！ もういません！ なので私と食べましょう。

ん？ シロウ。

Icon フェルディアトに、モンテボーレを一切与えるよりよく寄ってきたアールトリアに、モンテボーレを一切与えがったち。

むしゃむしゃと一瞬の躊躇いもなく食べ始めたアールトリアに、ダ・ヴィンチが悲鳴をあげた。
ああー！！！
許す、あと作る！
だからそれを私にま！

あと特異点に一緒にレイシフトしてくれたら心強くなるよ。
～鬼！悪魔！土郎くん！人の味方にならないな～
～弱点を見せた方が良いと思うんですよね～

俺はとてもアルトリアの胃袋はなめるなよ。
もう次の獲物を求めて手を伸ばしてきてる。
～わかりた、今は無理だけど一緒にレイシフトするからそれも恵んでプリーズ！！～

「グググ格ゲゲゲ」
何か忘れてる気がするが、別に問題ないはずである。
～わかった、今は無理だけど一緒にレイシフトするからそれを恵んでプリーズ！！～

よろしい。ならば契約だ。
何が忘れてる気がするが、別に問題ないはずである。

わかっただ、今は無理だけど一緒にレイシフトするからそれを恵んでプリーズ！！～
影分身の術なのか土郎くん！

人理崩壊まで、あと八日。

急退を懐き、事実に傷を復元できたという。焦らずじっくりと腰を据え、休め

仮に次の特異点の定義を復元できたとしても、それはあくまで

戦いはまだ序盤。七つの聖杯を回収するのに、まだ折り返し地点

にも来ていない。焦っているはずどこかで破綻する。

俺はゆっくりと風呂に入り湯船に浸かり、風呂上がりに医療スタッフの男性を呼んだ。全身を揉みほぐして貰い、丁寧に体の疲れ

を落とす。

「僕たちは、大丈夫ですよね。貴方なら信じられますよね。」

医療スタッフの男性は頻りに俺に対して詫ねてくる。彼だけじゃ

ない。俺とすれ違ったカルデアのスタッフは、口を揃えてそう聞い

てきた。

本来プロである彼らが、こうも取り乱したりはしないだろう。し

かし人理崩壊までのタイムリミットがはっきりとして間近に迫って

いると、流石に平常心を保てないでいるらしかった。なんでもい、

「僕たちは、大丈夫ですよね。貴方なら信じられますよね。」
「……責任は重大だよ。

自分の根拠もないその言葉に、俺は何度でも言っていた。大丈夫だ俺に任せろ、なんとかするのが俺の仕事だ、と。

俺の本分は戦うことでも、ましてや狙撃することでもなかった。俺は今、主に選定の剣の投射、量産に励んでいる。ベースは二時間に一本。これがこれ三本目になるか。

偽螺旋剣も、赤月猿也も、極めて強力な剣弾だが、流石に火力ではアルトリアの使うカリバーンには及ばない。最大火力を発揮する彼女の武器を整えるのはマスターである俺の役割だ。人理護衛のためには真価を発揮している聖剣はともかく、アルトリア自身の霊基はかつてよりも脆弱なのである。全力にはほど遠い性能しか発揮できていない彼女のためにも、霊基再臨し霊格を高めねばならない。

素直な頭が下がる思っていた。俺は何度でも言っていた。大丈夫だ俺に任せろ、なんとかするのが俺の仕事だ、と。

分かれきっていたことをぼつりと呟く。

真っ暗で無音の空間に設定したシミュレーター室で座禅しながら、震える精神を鎮め統一する。

己の内側に籠り、投影魔術を行使。投影道具を量産し何時でも用でできるようにしておくのも、大切な準備である。

用できるようにしておくのも、大切な準備である。

俺の内側に籠り、投影魔術を行使。投影道具を量産し何時でも用でできるようにしておくのも、大切な準備である。

俺は今、主に選定の剣の投射、量産に励んでいる。ベースは二時間に一本。これがこれ三本目になるか。

偽螺旋剣も、赤月猿也も、極めて強力な剣弾だが、流石に火力ではアルトリアの使うカリバーンには及ばない。最大火力を発揮する彼女の武器を整えるのはマスターである俺の役割だ。人理護衛のためには真価を発揮している聖剣はともかく、アルトリア自身の霊基はかつてよりも脆弱なのである。全力にはほど遠い性能しか発揮できていらない彼女のためにも、霊基再臨し霊格を高めねばならない。」
が、今はそんな余裕はなかった。故にこうして今、出来ることが
聖剣は切り札として用い、それ以外の時は俺の投影したカリバー
の力を使って賭う。そしていざという時のために、ダ・ヴィンチに魔
力を貯めておける札装を製作して賭っていた。

令呪を使うわけにはいかない状況と、俺から魔力を引くと張るわけ
にはいかない状況で聖剣を使用せざるを得ない時、その使い捨ての
札装で魔力を賭うのが狙いだ。現在ダ・ヴィンチ率いる技術部は急
ピッチで開発に勤しんでくれていた。

剣製に特化し、防具や布、小道具なども剣の倍魔力を使えれば投影

…………こういう時に、所詮俺は僕作者なのだとは痛感する。

僕作とは真作ありきのもの。偽物が本物に劣る道理がなくとも、

令呪作を真作ありきのもの。偽物が本物に劣る道理がなくとも、

剣製に特化し、防具や布、小道具なども剣の倍魔力を使えれば投影

それにしても通信用機、ラムレイ二号とみて、魔力を貯めておける

札装と、随分便宜を図って賭えている。事態が事態だ。マスター足

衛宮士郎の要求にはなんでも応じる、カルディアが一体となってマ

スターを支えると言った。それは、素直に喜ぶはないからだ。そして彼

らの期待と尽力に、俺は取りうる戦術、想定すべき事態をアサシンの切

嗣と密に話し合った。彼の思考は俺と似ているとはいえ、冷酷なまでに合理的な

思考力は彼の方が上であった。故に、彼の意見は参考になる。無論
アルトリアやマシュともミーティングを重ねた。百戦錬磨にして常勝の王であるアルトリアは元より、元マスター候補のA班であるマシュの頭脳も侮れないものがある。彼女たちの考えと、自分と切嗣の思考、戦術を擦り合わせ、より成功率の高い作戦を組み上げていくのは大事な作業だ。

俺達はチームだ。能力で言えば、アルトリアがチームリーダーを張るべきなのだろうが、リーダーは俺である。意見を取りまとめる、決定したことはチーム一丸となり従わせるし、俺も従わねばならないう。俺の考えるリーダーシップは、ワンマンの単独トップではないので、ルールを順守させ、責任をしっかり取ることがリーダーに求められることがあると考えている。

俺の一日は過ぎていった。……なに？

夜となり、後は充分な睡眠を取るだけとなった。明日、遂に問題の特異点にレイシフトする。満足に寝られるのは密に作戦を練って、互いの命が全て己の命であると意識する。そうして、俺の一日は過ぎていった。
今日を逃せばいかにしない。これより七日間、最悪不眠不休の日が続くことも覚悟していた。

合理主義の権化である切嗣に、今日だけは眠るようにしっかり伝えてあったし、アルトリアやマシュも同様だった。リーダーであり、唯一生身の人間である俺が夜更かしするわけにはいかなかった。

やあ士郎くん。召喚可能の霊基一覧に歪みが生まれてしまったよ。念のため、英霊召喚システムのテストをしたい。至急英霊召喚ルームに来てくれ。

－－などと天才に通信を入れられてしまった。明日はレイシフト当日で思わず、なに？と反駁してしまった。明日はレイシフト当日で、新たに召喚するサーバントも決まっていた。ランサーのキ＝リーフリン、その全盛期である。彼をどのように運用するか、どんなふうに作戦に組み込むかは、アルトリアらと話し合って決めてあった。今更召喚システムに歪みとか言わても大いに困る。かなり困る。命に関わるほど困った。
問題になってしまいます。

仮に、あの英雄王が召喚されたなら、これほど心強いことはない。特異点の超簡廃復元も大いに楽になるのだが。まあ、流石にそんなご都合主義は期待するだけ無駄である。

そもそも作者にして道化である俺の召喚に、英雄王が応じるとはとてもじゃないが思えない。

「勘弁してくれ、今問題なんて起こったら致命的だぞまったく。」頭が痛い。が、文句を言ったところで何が変わるのだろう。俺は仕方なしに指定されたルームに向かい、システムのテストに付き合わされることとなった。

そこで、俺は眩暈を感じる。

一見あ、もう……今から波乱の予感しかしない。

メンテナンスの後、テスト的に起動した英霊召喚システム・フェイス・エンタープライズの呼符を用いての召喚に魔力が高まり、目を焼きだす光と共に顕現したのは一いつつか見た。黒き聖剣の王その人がだ。さあ、雑魚どもを蹴散らしに参りますよう。

どうしました、シロウ。盟約により、召喚に応じ参上しました。
逝くは死線。臨めよ虎口。
湿りを帯びたざらつきが、ぺろりと頬を舐めた。
敵意はない。反射的に防御しようとする本能を律して、俺はうっすらと目を開き苦笑した。
「キュー……キャー」
そこにいたのは、白い毛玉のようなリス……に見えなくもない猫。
この場合、魔猫とでも言うべきか。寝起き特有の倦怠感に包まれながら、俺はその小動物——フォウの頭を柔らかく撫でた。
気持ちよさげに目を細める様子に平和を感じ、か細い声で言う。
「……なんだ。随分と久しぶりに感じなる、お前と会うのも——確か……特異点Fに飛ばされる前に会ったきりだったはずだ。以来、一度も見ていなかったのに、こうして寝起きに顔を見せに来るとは気まぐれな奴、と呆れてしまう。
まったく……今日はお前に構ってはやれないというのにな。そうぼやいて、また暇があったら飯作ってやるからな、と語りかける。
扉がスライドし、部屋にやってきたマシュがそう挨拶して来た。
眼鏡に白衣姿の彼女には、俺の部屋への入室をいつでも許可してあった。}
扉が開くとフォワはマシュに向けて飛び付き、慣れたように受け止めたマシュに「フォウー！」と挨拶でもするよが見送っていった。
微笑しながらそれを見送ったマシュに、俺はベッドから降り立ち、つつ応じる。
「……まあ、思ったよりは寝れなかったかな～」「……？何があったんですか？」「少し。昨日の夜、マシュ達が就寝してからサーヴァントを一騎召喚することになったから……それ関係で寝るのが遅れたんだ～」「え？サーヴァントを召喚したんですか？」
驚くように目を見開くマシュ。入念な話し合いの末に取るべき戦法、コンピューターの訓練をアリトリアと行なっていたマシュである。いきなり新しいサーヴァントを呼ばれても困惑するしかないはずだ。
俺は頭を掻きながら事情を説明する。……ついでに俺が喚んだサーヴァントについても。
それは……なんというか、因果なものですね。

マシューは微妙そうな顔をしつつ、「なんとも言い難そうに言葉を濁した。

俺、マシュー、キャスターのクー・フーリンの三対一で戦い、なおも圧倒された相手である。及び腰になりそうな気持ちも分からないでもないが……。

マシューは微妙な顔をつつ、なんと言葉を濁した。俺、マシュー、キャスターのクー・フーリンの三対一で戦い、及び腰になりそうな気持ちも分からないでもないが……。

寧ろ俺との戦略的な相性は、本来のアルトリアよりも良さそうなのがなんとも言えない。

後で会うことになるだろうが、彼女はアーサー王の別の側面とはいえ、同一人物のはず。戦力としてとても頼りになるでしょう。ですよ、先輩。

一応、それは周知してある。
一変化：分かりました。以後、黒いアルトリアさんのことはオルタと呼ばればいい。

後後の予定は、朝食を頂き、そのあと管制室でブリーフィングを行なった後、第二特異点へのレイシフトとなります。頑張りましょう、先輩。
庫とば界二れアきラ本確ず、勿―なた。
合耶にず魔しを論、トい。
共さをレ響つに投イ動く。
・つ、最ア、意管影。無べをする。
室辺そのく影をでリタ持る。
むかしの向これがオ運脆げ努からで空をイれの向オももを渡部と。
旋うのまえを庫―ラに。
声アに投え、がソと『めの向こはかな。
黙って。
ガラスのように脆く、静電気のように乾いた空気が漂う中、俺は嘆息しつつ、持ち運ばれていた装備を点検する。
ドウン・スタリオン号と、ラムレイ二号、前者については敢えて触れる、生まれ変わった武器庫―サイドカー付きの軍用バイクに解析の魔術をかけ、その性能を改めて把握し、どこにも不調がないのを確認する。
『勝利すべき黄金の剣』五本と『赤原獅犬』と『偽・螺旋剣』を二本ずつ。一日で己の負担にならない投影道具の量産数がそれ限界だった。無理をするれば倍までいけるだろうが、そんなことをすれば後に響く。投影が本分とはいえ、それにかまけるばかりでマスタ一として動けなくなるのでは未だ転倒であろう。
ラムレイ二号のサイドカーに投影道具を積み込み、前もって干将と莫耶を投影。それを背部の靴に納めて吊しておく。黒弓は武器庫だ。さ、と辺りを見渡すと、互いを完全に無視するように顔を背け合い、重苦しい空気を醸すアルトリアとオルタを見た。
俺と共に管制室まで来たマシュは、その空気の重さに何も言えずにいた。俺も出来たら何も言いたくないが、リーダーとしてそれはできない。意を決して、二人に声をかける。
務となる。分かっていると思うが無駄な誹いを起こすなよ。

を生真面目な声音に、重く威圧感のある声。声質は同一なのにも、
関わらず、どちらが発言したかはっきりと識別できた。

乱序をよしとする騎士王。暴虐をもって圧政を敷く騎士王。互い
が己の側面であると認め、同じ自分だと知るからこそ相容れぬのだ
ろう。

だが共に響を並べて戦いに赴く段となり、連携を必須とされる中、
己達の軋轢を表面化させて場を乱すほど二人とも子供ではない。互
いに声を掛け合うことはないが、自分同士ということもあり連携に
支障を来すことはあるまい。だが、念を入れておく必要がある。

どうにか라도二人がいま合い、作戦実行の効率が下がると判断したら、
もし二人がいがみ合い、作戦実行の効率が下がると判断したら、
リーダーとして、マスターとして非のある方を令呪で自害させ、カ
ルデアに帰還させるつもりでいる。異論はあるか。

この手で決着をつけます。

もし二人がいがみ合い、作戦実行の効率が下がると判断したら、
もし二人がいがみ合い、作戦実行の効率が下がると判断したら、
己達の軋轢を表面化させて場を乱すほど二人とも子供ではない。互
いに声を掛け合うことはないが、自分同士ということもあり連携に
支障を来すことはあるまい。だが、念を入れておく必要がある。

どうにか라도二人がいま合い、作戦実行の効率が下がると判断したら、
もし二人がいがみ合い、作戦実行の効率が下がると判断したら、
己達の軋轢を表面化させて場を乱すほど二人とも子供ではない。互
いに声を掛け合うことはないが、自分同士ということもあり連携に
支障を来すことはあるまい。だが、念を入れておく必要がある。

どうにか라도二人がいま合い、作戦実行の効率が下がると判断したら、
もし二人がいがみ合い、作戦実行の効率が下がると判断したら、
己達の軋轢を表面化させて場を乱すほど二人とも子供ではない。互
いに声を掛け合うことはないが、自分同士ということもあり連携に
支障を来すことはあるまい。だが、念を入れておく必要がある。

どうにか라도二人がいま合い、作戦実行の効率が下がると判断したら、
もし二人がいがみ合い、作戦実行の効率が下がると判断したら、
己達の軋轢を表面化させて場を乱すほど二人とも子供ではない。互
いに声を掛け合うことはないが、自分同士ということもあり連携に
支障を来すことはあるまい。だが、念を入れておく必要がある。

どうにか라도二人がいま合い、作戦実行の効率が下がると判断したら、
もし二人がいがみ合い、作戦実行の効率が下がると判断したら、
己達の軋轢を表面化させて場を乱すほど二人とも子供ではない。互
いに声を掛け合うことはないが、自分同士ということもあり連携に
支障を来すことはあるまい。だが、念を入れておく必要がある。

どうにか라도二人がいま合い、作戦実行の効率が下がると判断したら、
もし二人がいがみ合い、作戦実行の効率が下がると判断したら、
己達の軋轢を表面化させて場を乱すほど二人とも子供ではない。互
いに声を掛け合うことはないが、自分同士ということもあり連携に
支障を来すことはあるまい。だが、念を入れておく必要がある。

どうにか라도二人がいま合い、作戦実行の効率が下がると判断したら、
もし二人がいがみ合い、作戦実行の効率が下がると判断したら、
己達の軋轢を表面化させて場を乱すほど二人とも子供ではない。互
いに声を掛け合うことはないが、自分同士ということもあり連携に
支障を来すことはあるまい。だが、念を入れておく必要がある。

どうにか라도二人がいま合い、作戦実行の効率が下がると判断したら、
もし二人がいがみ合い、作戦実行の効率が下がると判断したら、
己達の軋轢を表面化させて場を乱すほど二人とも子供ではない。互
いに声を掛け合うことはないが、自分同士ということもあり連携に
支障を来すことはあるまい。だが、念を入れておく必要がある。

どうにか라도二人がいま合い、作戦実行の効率が下がると判断したら、
もし二人がいがみ合い、作戦実行の効率が下がると判断したら、
己達の軋轢を表面化させて場を乱すほど二人とも子供ではない。互
いに声を掛け合うことはないが、自分同士ということもあり連携に
支障を来すことはあるまい。だが、念を入れておく必要がある。
青い騎士王、黒い騎士王は怪訝そうにしながらも、俺の左右を固める形で近づいてくる。あくまで互いが視覚に映らないよう、俺を間挟んで。

俺はオルタの額を小突いた。

「くっ…シロウ、何を？　謂れのない罰ならば私も黙ってはいませんが」

「煩い。無意味にアルトリアを刺激する言い方をしたからだ。いいか、お前がリーダーのチームじゃない。俺がチームリーダーだ。圧政による指揮ではなく、和による結束を旨としている。昨日もそう言ったはずだな？　オルタ。頼むから、俺の顔を潰すような言動は慎んでくれ。」

「…了解しました。シロウの言うことです、従いましょう。」

「…よし。それじゃあ、二人とも友好の握手を。」

「うん。こうしてみると、ちょっと仲の悪い双子の姉妹って感じだな。」

「…シロウ、その表現には頷けません。私とこのオルタは鏡合わせの同一存在。決して姉妹などではない。」

「同意する。仮に姉妹だとしても、こんな出来の悪い妹の面倒は見れない。撤回を要求しますシロウ。」

「誰が妹です。貴女は私の側面でしかないのだから、私が姉で
しょ！”
「フン。同じ国を治め、同じ結末を届えたなら、その精神性によっ
て上下は明らかにするべきだ。のつまらない戦いならいざ知らず、
このグランドオーダーに於いてくらぬ綺麗事を並べ、シロウの足
を引っ張りかなない貴様よりも、私の方が遥かに優れていると判断
できるが」
「何を！これが人理を守護する戦いであるからこそ、秩序だった
行動と理念は不可欠だ！無法の罷り通る戦いなどあるものか！
どれだけの悪逆を為そうとも、それは無かったこととして修正さ
れる。ならば何を躊躇う必要がある。敵と国を焼き払おうが、勝
てばいいだろう」
「それは無道だ！人理を崩さんとする輩と同列にまで堕ちる気か！
何や激論を交え始め二人に嘆息し、しかし仲裁はしない。
自分だけではなく、シロウまで巻き込むで」
「あ、あの……止めなくていいんですか？」
「止めなくていい。互いを無視して陥悪になるよりも、言いたいこ
とを言って睨み合う方が遥かに健全だ。それに、ああして意見を言
い合うのは良いことだろうからな、レイシフトするまで放っておい
てもらいよい」
「ああし………いたくないらんですか？」
「それは無道だ！人理を崩さんとする輩と同列にまで堕ちる気か！
何や激論を交え始め二人に嘆息し、しかし仲裁はしない。
自分だけではなく、シロウまで巻き込むで」
「あ、あの……止めなくていいんですか？」
「止めなくていい。互いを無視して陥悪になるよりも、言いたいこ
とを言って睨み合う方が遥かに健全だ。それに、ああして意見を言
い合うのは良いことだろうからな、レイシフトするまで放っておい
てもらいよい」
「ああし………いたくないらんですか？」
「それは無道だ！人理を崩さんとする輩と同列にまで堕ちる気か！
何や激論を交え始め二人に嘆息し、しかし仲裁はしない。
自分だけではなく、シロウまで巻き込むで」
「あ、あの……止めなくていいんですか？」
「止めなくていい。互いを無視して陥悪になるよりも、言いたいこ
とを言って睨み合う方が遥かに健全だ。それに、ああして意見を言
い合うのは良いことだろうからな、レイシフトするまで放っておい
てもらいよい」
「ああし………いたくないらんですか？」
に済む。そう言うと、マシュはなるほどと言って頷いた。
ややすると規定の時間となり、管制室にロマニ・アーチマンとグン・ウィンチがやって来た。
ロマニは憔悴した顔色に変わりはない。寧ろ酷くなっていたが、この間のように錯乱はしていなかった。落ち着いた物腰で、俺たちを見た。
対し、ダ・ウィンチは今にも死にそうだった。休養の必要のないサーヴァントとはいいえ、その精神は生前となんら変わりのないものなのだだから、ここ数日間の激務にはさしもの天才も根を上げそうなのでだろう。
「やあ、おはよう」
「おはようロマニ、ダ・ウィンチ。……首尾は？」
「おはよう。回収した聖杯は技術部が解析中……なんで道具の使用にも耐える魔力貯蔵型礼装はまだ。たぶん完成は四日後かな……」
「そうか。それじゃあ、通信機は？」
「はい。通信機をプレゼント。特に通信機能の開発、ラムレイニ号の新設、道具の解体、聖杯の解体などに魔力を貯蔵しておける礼装の開発、回収した聖杯の解析にとダ・ウィンチをはじめとした技術部はこまかい。
特異点でも使える通信機の開発、ラムレイニ号の新設、道具の解体、聖杯の解体などに魔力を貯蔵しておける礼装の開発、回収した聖杯の解析にとダ・ウィンチをはじめとした技術部はこまかい。
これは？
目で問うと、彼は力尽きた亡者のように力なく言った。

「 إذن、計算型通信機…っていうのは見たままだってアレだよ。
要は、外付け念話装置だよ」

「ああ、士郎くんに分かりやすく言うと、冬木式の聖杯戦争の時
の会話を可能とする優れものさ。
それは…凄いな。通信可能距離は？」

「互いが生きてたらどこでも繋がるよ、理論上ではね。だってさ、互
いを繋ぐレイラインが電話線の役割を果たすんだから。まあ、その
外付け装置が破壊されたらダメだから、応強度には気を使っただけ
れどね。サーヴァントとかの攻撃を受けたら壊れるから。そこは気
を付けて」

「…首に下げてるものを破壊されるなら、俺も破壊されているだ
ろうし、気にすることでもないな」

「あはは…い、かもね。…あ、ダメだそれは。ごめんちょっと休ま
せ、て…」

「レオナルドはすぐ起こすとして…」
実動部隊として今回君達を支援するのは僕とレオナルドだ。気に
遣わなくていいよ。無理してるのはレオナルドだけじゃない。み
んなそうだ。特に、きみたちね。
ああ、ロマニがそう言うなら。
ああもれいシフトの準備は整っている。今回君たちが向かうの
は一世紀のヨーロッパだ。より具体的に言うと古代ローマ。イタリ
ア半島から始まり、地中海を制した大帝国だよ。
こういった話には即食いってきそうなダ・ヴィンチは、完全に
沈黙している。いったまれないと気が分るが、構わずロマニは続け
た。
一亜紀の古代ローマ、か。著名なのはカリギュラ帝とネロ帝だな。
良いかな士郎くん。転移地点は帝国首都であるローマを予定して
いる。地理的には前回と近似のものと思ってくれても構わない。存
在するはずの聖杯の正確なる場所は不明。歴史に対しても、どういった
变化が起こっているかも不明だ。
ふむ、と腕を組む。
頭の中でざっと計算し俺は訊ねた。
……その転移地点は変更できるか？
……出来たくはないけど、なぜだい？
いや、これは俺の経験則だが、いきなり人を集まる地点に突入
してもろくなことにはならない。俺としては首都ローマより離れた
場所で離れすぎてもないブリタニア辺りが望ましい。どうだ？
……出来なくはない、とは思う。けどそこまで警戒することかな？
人あるところに災禍あり、だ。本当ならすぐにそういった場所に
「飛び込むべきなんだろうが、今回はそのセオリーや外した方がいいね。」

「…それには勘か。」

「ああ、勘だ。第六感的なものじゃなくて、あくまで計算と経験から来るものだが。」

「…」

「はあ、とロマニは嘆息した。自分は文官、武官ではない。ならこういった現場の意見は尊重するべきだろう。それに、なんの考えもなく言っているわけでもなさそうだ。仕方ないな、とロマニは頷いた。」

「いよいよ。ただし、十分時間はもらう。設定を変えるのもスイッチ一つで、というわけにはいかないからね。その間だなんてしないわけにもいかないし、ブリーフィングを終わらせておこうか。」

「ああ、頼む。」

作戦の要旨は前回と同じ、特異点の調査、修正。そして聖杯の調査および入手、または破壊だ。人類史の存続は君たちの双肩にかかっている。今回も成功させてくれ。」

了解、とマシュと声が重なった。

しかし静かに、強く言った。

ロマニは驚れた顔で、「無事に帰ってくるんだ。いいね？」

しばらくの沈黙の末、ロマニはレイシフトの設定の変更を終わったのだろう。何を言わず、無言で俺達にコフィンへ入るよう促した。
アンサモンプログラムスタート
霊子変換を開始します
レインシフトまで後3、2、1……
全工程完了
グランドオーダー実証を開始します
（あさきゆうべやわらかにかかって、あさきゆうべやわらかにかかって）

（あさきゆうべやわらかにかかって、あさきゆうべやわらかにかかって）

直後に、周囲の光景に視界の像を結ぶ前には、青と黒の影が瞬時に動いて左右にバラけ警戒する。双剣を抜き放ち、素早く辺りに目を走らせる男の傍らには、大盾を構えて防御体勢を取る。

少女の姿。場所はまったくも名も知らぬ森林。やがて辺りに動くのもがないうちに、男が双剣を下ろすのと同じくして青と黒の騎士、盾の少女もまったく警戒体勢を解除した。

（ここらアサシン、周囲十メートルか二百メートルに敵影はいない）レイライオンを通し、切嗣の声が脳裏に響く。問題なく念話も機能していうのが、騎士達の反応の薄さからサーヴァンからサーヴァンに声が届かないらしい。

（引き続き警戒を頼む。これより北西に進み霊脈を確保、その後におき喚サークルを設置する）（了解した。通信限界を見極めため、継続的に入信を入る）
頼む返すのと同じくして、切嗣は北菫の方角に先行していく。やはりリアルタイムに情報を更新できることが安心感は大きい。後は…ダ・ヴィンチが言っていた通り、どこからでも念話が通じることを期待するしかない。しかし所謂は理論しかないので、おそらくアイテムだ。慎重に性能を測らねばならない。またいざという時を想定し、あまり依存しすぎのも宜しくないだろう。

俺はアルトリア、オルタ、マシュの顔を見て目を合わせ、しっかりと領く。アイコンタクトをし、素早く移動を開始する。チーム全体に周知してある行動方針は、第二に転移直後の周囲警戒をアルテリア、オルタ、マシュの顔を見て目を合わせ、しっかりと領く。アイコンタクトをし、素早く移動を開始する。チーム全体に周知してある行動方針は、第二に転移直後の周囲警戒をアルテリア、オルタ、マシュの顔を見て目を合わせ、しっかりと領く。アイコンタクトをし、素早く移動を開始する。チーム全体に周知してある行動方針は、第二に転移直後の周囲警戒をアルテリア、オルタ、マシュの顔を見て目を合わせ、しっかりと領く。アイコンタクトをし、素早く移動を開始する。チーム全体に周知してある行動方針は、第二に転移直後の周囲警戒をアルテリア、オルタ、マシュの顔を見て目を合わせ、しっかりと領く。アイコンタクトをし、素早く移動を開始する。チーム全体に周知してある行動方針は、第二に転移直後の周囲警戒をアルテリア、オルタ、マシュの顔を見て目を合わせ、しっかりと領く。アイコンタクトをし、素早く移動を開始する。チーム全体に周知してある行動方針は、第二に転移直後の周囲警戒をアルテリア、オルタ、マシュの顔を見て目を合わせ、しっかりと領く。アイコンタクトをし、素早く移動を開始する。チーム全体に周知してある行動方針は、第二に転移直後の周囲警戒をアルテリア、オルタ、マシュの顔を見る。
賄える気がしなかった。

ヘラクレスのマスターは、イリヤにしか無理だと今でも確信している。

そもそも両者ともに触媒がない。確実な召喚が出来ない以上、選択肢にも入らないのだ。その点クー・フーリンの場合、本人の髪の毛というこれ以上ない触媒がある。

しかもその戦闘能力は、冬木という知名度皆無の土地であるにも関わらず狂戦士のヘラクレスに対する勝機を有し、ギルガメッシュという人類史の特異点そのものである最上級の英雄を相手に半日も戦闘し、少なくない消耗を強いた戦士として最高格の物だ。

戦士としてのキャリアはケルト神話最強の名に恥じず、また腕っ ・男だ。聖杯戦争の開催地が、知名度の高いアイルランドで、あったが、アーサー王以上の力格を有し理性のあるヘラクレスと、互角に戦えるだろう。経験豊富にして百戦錬磨。戦場を選ばない実力、知性、人柄、宝具、燃費と五拍子揃った大英雄。正確な記憶と経験を解析、知識として蓄積している身としては、ぶっかけた話アーサー王が一人では確実に敗北し、アーサー王と同格の英雄が二人がかりでも仕留めきれず、三人でかければあっさり離脱されるだろう、というのが俺の所感だった。

ずばり俺にとってはの最強はクー・フーリンである。
アフルトリアやオルタは絶対と言えないな、と思った。正直、アフルトリアとオルタは望外的存在だった。ぶっちょけでいてくれ大きなに助かったわけだが、当初の考えではいないものとして作戦を練っていたわけだ。本命は今も変わらずクー・フーリンである。そして、彼の召喚のために俺はこのブリタニアを転移地点に指定したのだ。
ブリタニア。それはブリートブリテン島の古い呼び名である。そして、彼の召喚のために俺はこのブリタニアを転移地点に指定したのだ。

ブリタニア。それはグレートブリテン島の呼び名である。そしてグレートブリテン島には、アイルランドが含まれていた。つまり、リーグ・フーリンのホームである。しかもこの島は一世界流石に本人は死んでるだろうが知名度はそれほど色濃く残っているだろう。最新の伝説として、だ。

そうすれば、彼の召喚のために俺はこのブリタニアを転移地点に指定したのだ。

そして一度全盛期の状態で召喚してしまえばこちらのもの。カルデの霊基一覧に完全体クー・フーリンが登録され、他の時代や国に移動しても実力が衰えることはない。これはもう勝ったな、と慢心しても許されるレベルだった。

そうすれば、彼の召喚のために俺はこのブリタニアを転移地点に指定したのだ。

「…？」

「…？」

（士郎。緊急事態だ。森を出て開けた場所に出るのはあの大本命。森から出たらすぐに南東の方角を見ろ。大至急だ）
嫌な感じだ。まるで、脳海林の領域に侵入した時のような。
正直死ぬかと思ったあの時の記憶が甦る時点で、俺の危機感は最高潮に達している。

「ここに『殺人貴』はいない。あの時のような奇跡はもう起きない。」

自然、早足となった俺に、アルトリアらは追随之ながら不審に

「どうかしたのですか、シロウ。」

あと少しでわかる、と短く応じる。その様子に、確かな危機感を

「あととハメートルで森から出る。足が重くなる。」

と十メートルで森から出た。日差しが俺達を照らし出す。嫌に熱いが季節は夏な

俺は更に進み、額から脂汗が溢れてくるのを手の甲で拭う。

「って、それでも英霊召

「召喚サークルの設置を確認しました。先輩、いつもでも英霊召

「…嫌な感じだ。まるで、脳海林の領域に侵入した時のような。
正直死ぬかと思ったあの時の記憶が甦る時点で、俺の危機感は最高潮に達している。
喚は可能ですか。
固い声で、マシューが報告してきた。俺はそれに頷く。召喚サークルが置かれ、カルデアと繋がると、すさまドゥン・スタリオン号とラムレイニ号が送られてくる。そして、ロマニの声が届けられた。「…何かあったみたいだね。どうしたんだ？」「…ロマニ。南東、ローマ帝国の首都がある方角をモニターしろ。それで分かる」「…南東だね、わっ…?！ な、なんだこれは…!？」何、南東だね、わかっ…?！ な、なんだこれは…!？」驚愕に引き戻した声を上げるロマニに、俺は深く溜め息を吐きながら応じた。
見た通りだ。…紅い大樹が、ローマ帝国の国土、その大半を覆い尽くしている。
目にある異常。第一特異点とは比較にならない明確な、特大規模の特異な光景。地形変動といるの騒ぎではない。国土侵食とも言えないであろう。何、南東だね、わかっ…?！ な、なんだこれは…!？」驚愕に引き戻した声を上げるロマニに、俺は深く溜め息を吐きながら応じた。
正確な大きさが知りたい。ロマニ、呆けてないで顔を動かせ！

一喝すると、ロマニは戻ったようだ。慌てて手元の装置を弄り、データを取り始める。

「なんだこれは…信じられない！士郎くんの目測は正しい、その大樹はローマ帝国を呑み込んでいる。そして今も拡大を続けている！君たちのいる方に向けてだ！」「

一喝すると、ロマニは我に返ったようだ。慌てて手元の装置を弄り、データを取り始める。

「なんだこれは…信じられない！士郎くんの目測は正しい、そ
の大樹からは道具の反応がある！」「

『なんだからこそ…これはただ事じゃないぞ！？この反応は道具だ、その大樹からは道具の反応がある！』

ああ、聖杯だ、こんなこと、聖杯でもない限り絶対にあり得ない！

唐突に通信が途絶える。

俺は何度か呼び掛けるが、返答はない。やがてカルデュとの通信が完全に途絶えていることを悟ると、俺は一瞬瞑目し、不安げに瞳を揺らすマッシュを、凛然と背筋を伸ばすアルドリアを。露ほどの動揺もないオルタを見渡す。

ＪＢ…聞いての通りだ。事態はどうやら予断を許さないらしい。

『もとより遠攻こそが本分でしょう。むしろ除るべき異常が明確なことを喜べべきだ』
不遜なオルタの物言いに、俺は少し緊張が緩まる。

確かに聖杯を探し、歴史を修正するために東西南北を駆けずり回るよりはいいかもしれない。

発覚した問題が手に負えるかどうかは別として。

暫し沈黙し、俺は首を左右に振った。どうするべきか一通り考えたものの妙案と呼べる閃きはなかった。

聖剣である大樹を焼き払おうが進むのもいいが、その場合、俺の魔力の方が先に尽きる。他の手段はなにもない。なにせ、相手がシシテムを動かすだけだから取れる方策が限られている。

単純に、規格外の質を拡大させ続けている。それだけだ。それでダメだな、まるで思い付かん。

・・・ダメだな、まるで思い付かん。

・・・と云かく、さっさとクー・フーリンを召喚しよう。話はそれからだ。

マッシュの盾に呼符と触媒をセットする。後はシステムを作動させだけだが・・・そこで、またしても待ったがかかった。
それは切嗣だった。今度はなんだ、とうざつしかけた俺に、彼はまたてこの特異点での大殊勲を挙げたことを報せてくれた。
その報せは、特異点修復のために欠かせないピース。
計らずも手に入った最初で最後の希望だった。
（ネロ帝を保護した。こちらを見るなり短剣で喉を突き自害しようとしたから無力化し、意識を奪ってある。指示を仰ぎたい）
全滅の詩、語れ薔薇の皇帝

「暴君」ネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストゥス・

ゲルマニクス。

彼の皇帝の悪名の殆どは、実は後世の脚色ばかりであり、実際に彼一人の責任と言えるのは弟を、母を、妻を殺したことだけと言える。しかしそれさえもネロの三番目の妻ボッパエアの謡言に感わされるためとも言われていた。

彼の皇帝の是正と言えるのは弟を、母を、妻を殺したことだけと言える。しかしそれさえもネロの三番目の妻ボッパエアの謡言に感わされるためとも言われていた。

彼の皇帝は自らを「芸術家」と自認し、黄金宮殿を建築。それ自体の耐久性の高さは評価され、ローマン・コンクリートと評されるに至った。

ネロは歌が好きで、数千人に及ぶ観衆を集めるコンサートと称した私的な祭典まで興したという。
更に詩人としての才覚も一流のものであると信じて疑わず、ネロは民衆を集めて幾度も独唱会を開いた。しかし、ネロ帝が詩人としての才覚はなく、ネロ帝の聞くに堪えない歌に民衆が逃げ出す者も続出した。ネロ帝はこれを越して劇場の出入口を塞いだというからなんとも言えない。このために堀をよじ登っても脱出する者が頻発し、死んだふりをして棺桶に入れられて外に運び出された者も出たというのだ。これはネロ帝が楽曲を聞くに堪えない歌に民衆が逃げ出して者が続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続出した者を続けたのだ。
ワイヤーを芯として編まれたロープで手足を拘束され、ロープに猿轡を噛まれた華のような美女を見下ろした。\n
我が目を疑う。力なく地面に横たわり、擦りこまれた紅いドレスをなく問いを投げた。

（切嗣。この女性が、あのネロ帝だという確証は？）

（自分でそう名乗った。このネロ・クラウディウス、生きる腐心の辱しめは受けないなんて言ってね。現時点では自称ネロ帝だが、僕を敵と見るなり自害しようとした点から信憑性は高いと判断した。かの騎士王が女だったこともある。ネロ帝が実は女でしたというのも必ずしも否定できたことではないと踏んがまでは）

（…………）

（…………）

一々専もである。歴史の真実には頭の痛くなることが多々あるが、これらはじめての経験というわけではないかった。

まあ問題は、だ。切嗣がネロ帝を捕縄し、縄に上げて近くまで運んできた後、それを持ってアルトリア前に運んだのはこの俺だ。
し
た
任
ス
は
い
と
…
っ
束
こ
ぐ
嫌
い
…
…
っ
ル
の
だ。
さ
る
は
み
に
う
…
ト
女
る。
り
こ
俺
咳
」
人
ネ
て
性
問
と
こ
め
シ
の
な
た
と
ロ
ア
る
題
な
刺
ま
ン
サー
い
い。
180x335あ
帝
と
姿
な
ら
オ
に
、
う
言
ん
し
で
、
し
ル
ち
き
し
で
て、
オ
が、
こ
tて
き
の
め
女
う
彼
た
ア
ト
声
タ
ア
性
な
ど
い
反
サ
が、
を
に
応
し
震
囲
顔
遠
力
と
修
見
を
い」
か
回
ぞ
タ
窺
の
れ
ア。
308x104顔
遠
に
、
ち
場
だ
。
あるように思える。

二人の反応を受けて、よし、いけるーと、思った。今度は伏兵に横腹を刺された。マシュだ。ジト目のまま少女はぼそりと呟いた。

「……でも先輩、胸見てましたよね。似ても似つかない部位です」

カチン

アルトリアとオルタの目が、ネロ帝の胸に向けられる。横向けに倒れているためか、腕に挟まれぐに caráりと形を歪めている豊かな双丘——凍りついた空気の中、俺の心眼はこの場に残された唯一の活路を導き出す。間を置かず瞬時にそこに飛び付いた。

「……彼女のですか」

「彼女がですか」

彼女の名をアサシンは聞き出している。ネロ・クラウディウスというらしい。言うまでもなく、この時代の中世人物と言っても過言ではないだろう。

「……ネロ帝ですかって？」

その名を出すと、アルトリアとオルタの目から私情は消えた。

危機は去った。くだらない危機だったが、チーム瓦解の地雷でもあった。上手く回避できてよかったと心から思う。

頭を振り、俺も思考から弛んだものを紡ぎ出す。戯れ合い、互いの緊張を緩めるのはこれで充分だ。
俺は肯定し、提案する。

ようだ。現時点ではあくまで『自称』だ。が、今の俺たちにとっは貴重な情報源に成り得るという点では、自称でも一向に構わたらない。話さえ聞けるなら。彼女を起こし、話しようと思うが、どうだ？

どうですね。では、起こしましょうか。

アリトリアがマシューを見る。どこか納得していない風な膨れ面のマシューだったが、この流れに逆らうだけで Election はなかったらしく、しっかりと頷いた。

まず、マシューに言って持ち物を調べさせる。また自害されそうに猿巣を外すように言った。

そして、体を揺すり、マシューがネロ帝を起こす。

苦しみに呻き、華やかな美貌の皇帝は目を開いた。ネロ・クラウディウスと知っての狼藉か！

「…知らん。」

誰何してきたネロ帝に、俺はぱっさりと切り捨てた。

跳ね起きるなり飛び退いて間合いを離し、鈴の鳴るような美声で
気色ばくネロ帝を尻目にザっと考えを纏める。
今、ネロ帝は起き抜けに見知らぬ者達に囲まれていて、些か動揺している。そして手元に護身のための武器がないことを身ぶりだけでなく確かめているのも見えた。

俺の名は衛宮士郎。こっちはアルトリアに、オルタとマシュだ。
俺の仲間がボロ小屋の前で貴女が蹲っているのを見つけて話し掛けようとしたところ、いきなり自裁しようとしたから無力化した旦眠って賞った。俺達はローマの民ではないが貴女を狙う者でもない。

俺は彼女が何かと言う前に、さっと名乗った。
俺の仲間がボロ小屋の前で貴女が蹲っているのを見つけて話し掛けようとしたところ、いきなり自裁しようとしたから無力化した旦眠って賞った。俺達はローマの民ではないが貴女を狙う者でもない。一瞬目覚め Bargain "工作を掴んで貰えたち？"

「俺の名は衛宮士郎。こっちはアルトリアに、オルタとマシュだ。
俺の仲間がボロ小屋の前で貴女が蹲っているのを見つけて話し掛けようとしたところ、いきなり自裁しようとしたから無力化した旦眠って賞った。俺達はローマの民ではないが貴女を狙う者でもない。一瞬目覚め Bargain "工作を掴んで貰えたち？"
俺はローマのある方角—深紅の大樹が侵食する帝国を指差し、ネロに諷ねた。俺の物言いは、本来不敬とも取れる。ネロはそれに不快感を示すだろうと思っていたが、あてが外れた。敢えて怒らせて気力を沸き上がらせようと思ったのだが、言葉遣い程度の不敬に目くぼしをたてるほど狭量ではない、ということだろうか。

「…そのこちら、もしやカルデアとやらの者達か？」「…ああ、どこでその名前を？」「…っ、…」「彼方でその名前を？」ネロは淡く微笑んだ。不敵に笑おうとして失敗した。「…仕方がないか、と妥協した。」

「…嫌な感じだ。これは、死相である。肩に知っておる。マスター、サーヴァント、聖杯に、人類史の焼却…」「…失礼、ネロ帝。貴女に触れる無礼を許してほしい…」「…構わぬ、好きにせよ。先の見た命だからな…」
俺は断りをいれ、ネロの肩に手を置いた。そして彼女の体に解析の魔術をかけ——俺はすぐにネロの体を横たえた。

俺はすぐにネロの体を横たえた。

召喚サークルに手をかざし、マッシュはカルデアに呼び掛ける。だが、繋がらない。

「先輩！」「先輩！」

「連結するまでやれ！ネロの応急処置だけはこっちでやれる！」

全身になんらかの呪いが纏わりつき、ネロの体を植物に置換していっていたのだ。

「連結だ……」「ローンだ……」

「ローンだ……不。何を言っている！分かるように言え！」

「ローン。」

このままなんの処置もしなければ長くは保たない！俺は己とネロの間にラインを通じる。ネロは乾いた笑みを浮かべた。

「ローンだ……」

「ローンの建國の祖、かの神祖ルムルスは、槍をバラディウムの丘に突き刺し、大樹と化させた。その大樹の成長は、ローン建國の伝説そのもの。現世に甦った神祖は、再び、ローンの建國を再現した。

そうだ、神祖は余を、今のローンを否定し……ぐ。」
どこかに言うように呟き、ネロは苦しみに呻いた。よくよくと首を左右に振る。

「…いや、違う。神祖は、ローマだ。それがローマを否定するな。そこでは、決して許せぬ……。まるであなたが、神祖を歪めたに違いない……。許せぬ、それをは、決して許せぬ……。

俺はネロの耳元で叫び、魔力をネロの体へ強引に流し込んだ。ぐああ！体を海老反りにし、絶叫するネロ。体内の呪いを、無理矢理に魔力で洗い流してい。ネロにとあって未知の痛みは、爪の先に針を刺されている痛みを十倍に拡大しているようなものだ。

身体は、その痛みを絶えず感じている。」「ふふふふふ……痛い、痛いな……。が、よい。この痛みが、生の証ならば。…だが、分かっているだろう。余のそれは、余がローマだからこそ蝕むもの。神祖の槍に触れれたのだ、逃れても一時の誤りで……。それでも、やらないよりはましだろうが！」

今度は、ネロは叫ばなかった。歯を噛み締め、全身から脂汗を垂れ落ちた。
れ流し、死に物狂いに耐えていた。
俺は内心で怒鳴る。ネロの体は、体内的三割が樹木化していたのだった。普通なら死んでいる。だが、生き永えていたのは生への執念が、それとも古代の人間に特有の神秘的な生命力故か。
九回、全てにネロは声ひとつあげなかった。見事、と称える。息も絶え絶えにネロは口許だけで微笑んだ。
"どう、やら……本当に、余を……助けてくれて、いるのだな……"
"もう、ローマは呑まれ、余も槍の一部となるところだったが……まさか、はは、まだ立ち上がれるだけの……力を手にできるとは……感謝、するぞ……エミア・シェロ。"士郎だ。が、まあシェロと呼ぶのはいい。故に気に取り直して言った。それと、と。一瞬、懐かしい何かを思い出してきた士郎だったが、
それと、と。一瞬、懐かしい何かを思い出してきた士郎だったが、
所詮は一時のぎだ。呪いそのものは貴女の体と、魂そのものにまで絡み付いている。俺にはそれを遅らせ、ある程度押しつめるのが限界だろう。充分……だ。……すまぬが、少し眠ってよいか？ローマから、こんな辺境までも、休む間もなく逃げてきたのだ。流石の余も、少し疲れた……
「ご随意に、皇帝陛下。」
「ふ、……其の方ほど、敬語の似合わぬ男もおるまいな。」
「どうしたか、ネロ。言い換えれば、俺は怒った。と目で示し、俺はアルトリアとオルタに言った。それは、ネロのうわ言を聞く内に得た確信だった。

まだ続けろ、と目だけで指示し、俺はアルトリアとオルタに言っ
た。

・・・

最悪だ、二人とも。

何がでしょう。

この時代が修正不能になるのに、もう瀬戸際まで来ている。

ローマは実質滅び、全ての国は大樹に呑まれ、まだ拡大は続
</number>
俺は食いつくようにして怒号を発する。気を呑むように激しく、反論を許さぬように。

「ロマニ！」

「えっ？あ、ああ！なんでも言ってくれ！出来ることならうに指示しろ！」

「よし、なら技術部に言え、聖杯の解析は後回しだ、すぐに使うように指示しろ！」

「ちょっと、えっ？」

ロマニが驚愕したように声を張り上げた。そんなむちゃくちゃな！

血を吐くように怒号する。そして今、俺達の置かれた状況を教え、何がなんでもネロを死なせるわけにはいかないことを伝える。

そのために、聖杯を使わねばならない。

ネロを蝕んでいる聖杯を使った呪いに立ち向かうには、同じく聖杯を使うしかなく。これからの戦いを思えば、とてもじゃないがネロを単独で動かすわけにはいかない。

故に、だ！
ネロを聖杯で治療後、聖杯でネロをカルデアの職員だと世界に誤認させ、カルデアのマスターとし運用する！」

『あっ！？』

「無茶でやらなきゃ世界が滅ぶ！特異点が修正れればネロ帝の不在もなったとになったから、カルデア職員のネロは残り続けろ！」

『それは！？』

「それはどういうことかわっとるのか、士郎くん！」

「わかってる！悪魔で鬼畜で呼べ！俺個人の呼び名よりも、人理を守る方がよっぽど大事だろ！ええ、違うか！？」

違わない、違うはずがな、故に俺はロマニに頼むのだ。こられのために。

「ネロ帝をマスターに設定し、クー・フー・リュンをサー・ヴァンとし付けあえず、今は療けいてい。ネロ帝が起きたら説得する。俺達と共に戦ってくれと。身勝手にも、自分を捨ててくれと！」

聖杯で、カルデアのマスターを一人増やす。

悪魔的な発想だった。最低の、外道の考えだった。

だが、これ以上ない効果を望め起死回生に繋がる策でもあった。

ネロ帝は、恐らくこの悪魔の契約を結ぶう。
例えカルデアに生身のネロが加わっても、人理が修正されるとはねのだ。

説得できなければ、諦める。無理強いしても意味がないから。だが、俺は確信していた。ネロは、この手を掴む。それほど追い詰められている。立ち上がり、戦うために、万策を尽くす覚悟があった。

そのためなら世界を捨てることが出る英雄だと感じさせられた。

ロマニは、やけどそのように髪を揺さぶり、了解したよ。そっ！怒鳴り返してきた。

「わかってる。……すまん、ロマニ……」
ボクに謝ったって意味ないでしょ！

ロマニは、やけどそのように髪を揺さぶり、了解したよ。そっ！怒鳴り返してきた。

「わたしたち……」

俺は安心してください。その時は、俺達も共に参ります。

三人の声が、心を軽くしてくれた。
英雄猛れて進撃を（上）

「うむ、仔細承知した。よきに計らうがよい」

うむ、仔細承知した。よきに計らうがよい。

そう言って、ネロ・クラウディウスは至極あっさりと己の進退を決定した。

その言葉したことカフェに、俺様素振りすらなくサインしたのだ。

それは世界に自分を売るが如き所業。独りの正義の味方が、世界に己を売り渡し守護者となったの。

今、ネロ帝は悪魔の契約書に、迷う素振りすらなくサインしたのだ。

そだ、言っただけ、ネロ・クラウディウスは至極あっさりと己の進退を決定した。

今年、ネロ帝は悪魔の契約書に、迷う素振りすらなくサインしたのだ。

そ、それは、ローマ皇帝をよく知る者なら愚問であると思ふだろう。

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともするあまりの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ありの即決ぶりに、マシューが困惑したように訊ねた。ともする

ああ、あの……本当に……？

あなたが一緒に戦ってくれるんで

うか……？

どうか怖がらるような声に、果たしてネロは一笑に付すのみだっ

た。
「心を恐れておる。余の命を救ったのは其の方らであるぞ？」「もより死したも同然であった余が今一度立ち上がり、神祖の歪みを正せる好機を得られた。まさに望外の快事である！神祖を正すという大業に加わること即ち未来を救うに同意！まさに快なり！可々大笑し、胸を反らした赤い薔薇。まさにローマを舞台として舞う華の赤。余はそれなり、余は敗軍の将なのか。負けた者は、本来何もすること死んでいるものとして、余は生きているのだと満身より声を絞り叫ぶまで！人類史を修正すれば余に成り代わったものがネロとなる大いに結構！死人である余のローマを引き継がせる戦いが是である。後顧の憂いがないならば、後は勝ちに行くのみだ。であろう、シェロ！」「ああ…全く以てその通り。だが…生きながらにして死ぬという詰め苦、その本当の苦しみを。自分が自分でなくなる恐怖を、いつか本当に、自分を変容するおぞましさを。貴女は覚悟できているのか？安易に進めば、それは地獄の炎となって貴女を襲うだろうか！」「は！そんなものは知らない！最後の忠告だった。士郎の、心底に沈澱する核心的恐怖を、しかもその方々は知らぬ！」
レネロは何も考えずに一刀両断にした。
知らぬものについて考えを及ぼせ。無駄に怖えるような深慮はな
い。レネロは、無駄と笑い両手を広げる。
「知らぬが、余が折れそうな時は存分に頼らせて貰おう！余
を助けることを許す、いつでも余を助けるのだぞ。シェロ。マシュ。
アルトリアにオルタ！」
清々しい聞き直りだった。常人も有り得ぬ思いきりのよさであ
る。
それに、一瞬士郎は憧憬の念を抱きかけたが、すぐに忘れた。彼
女を世界に売り渡した当人が、何を恥ずかしそもなく憧れそうにな
っている。
頭を振り、士郎の思考を断つように、レネロは士郎を真摯に見詰めた。
そんな、士郎の思考を断つように、レネロは士郎を真摯に見詰めた。
その目に、士郎は思わぬ居座まいを正す。
「心して答えよ。一重の虚偽も許さぬ。もし偽りを述べるのなら、
余が其の方に与する約定はなかったものとする。よいな？」
　...ああ。俺に答えられることなら、なんでも聞いてくれないか。
　ではシェロ。問うぞ。もし其の方、何ゆえに人類史を救わんとす
る？」
何を聞かれるかを身構えていなかったと言えば嘘になる。だからこそ、ネロがそんな一身上の行動理由を証ねてくるとは思わず意表を突かれた。

咄嗟に口を衝きそうになったのは、真実七割嘘三割の建前。それなら、他の誰かに対して嘘を吐くのはいい。だが彼女にはアルトリア達と同じように、真実だけを話すべきだ。それが俺に示せる唯一の誠意だろう。

士郎は意を決し、自らの本音を話した。

俺が人理修復のために戦うのは、これまで生きてきた中で、俺と関わった全てを無為なものにさせないためだった。俺が知るモノには価値があると信じている。ああいや一〇〇%飾らずに言えば、俺は俺の手に人に救うんだ。そうすることが、俺の生きる証になると信じてから。

一〇〇%弟のため、と来たか。それは究極的な意味では真実であり、シェロの中では偽りざる本音なのである。シェロ、そなたは今、余に嘘を吐いたな！　何を根拠に否定する？

「余はローマ皇帝である！」　それに偽りがない。

「余はローマ皇帝である！」　それがあが根拠だった。陰謀渦巻く華美と暗躍の都で生きてきた皇帝に、なんでそれを偽りだと？ 何を根拠に否定する？
その方の胸の中、しかと聞き届けた。自覚なきが故に一度は許そう。だが二度はない。答えよ、そなたの言う自分がどこまでを言うか。

徹頭徹尾、この俺一人に終始する。

『うむ。だがシェロよ、気づいておらぬのか。そなたがそうまで戦う？』

何を戯言を。士郎は内心吐き捨てる。

世界が美しい？違う、そんなことは感じてはいない。むしろ、逆に世界の汚濁に吐き気すら覚えている。だから、

士郎は世界の汚さを思い知っている。しかし世界が美しい？違え、そんなことは感じてはいない。むしろ、その汚さを許せぬ性質だった。潔癖性なのだ。
を、『俺が』耐られ程度には綺麗にする。

そのたままに、世界を巡ったのだが。
外道を働きて俺の世界を汚す野良の魔術師を狩り、人を餌と見てみなろ。
惨と醜を絡めて喰らう怪物を殺して回った。
苦しみ、喘ぎ、歎く声と顔に我慢が出来なかったか。
偽善者と呼ばれても慈善事業を始める。

俺のたまにだ。
俺の生き証を残そうが、俺のいた世界が汚かったと言いたい事実を否定して回った。

一人家の力に限界を感じて。
手を取って合え仲間を集めて。
環の力で世界を少しは綺麗にするべく、世界の汚れを掃除する。
全ては俺のたまに。

（シロウさん、まるで―）

ふと、士郎は己が死徒との戦いに巻き込まれた切っ掛けとなった、ある名もない死徒の戯れのたままに拐われた一人の少女の言葉を思い出す。
（士郎。アンた、ほんと馬鹿ね―）

そっって。
心底仕方無そうに苦笑して、暇があったら手を貸してあげると言われて、お人好しの魔術師の声が脳裏に去来した。

「…いや、そうか」
ネロ帝の言わんとすること、その真意を察し、士郎は納得した。

士郎は自分のために生きている。

「⋮⋮⋮貴女に感謝を。どうやら気遣われたようだ。」

「む、悟られてしまったか。余もまだまだのようだ。」

「……貴女に感謝を。どうやら気遣われたようだ。」

「……貴女に感謝を。どうやら気遣われたようだ。」

「……貴女に感謝を。どうやら気遣われたようだ。」

士郎はよくとそのことに気づいた。

士郎は自分たるま生きていく。

極論してしまえば、自己満足をすたため生きていくのだ。

「……貴女に感謝を。どうやら気遣われたようだ。」

ネロ帝は唇を尖らせ、やれやれと己の未熟を嘆くように肩を竦める。

俺は俺のたるまい後悔を残しあしまでいるなら…。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……
アトリアを見ると、何を言いかけ、止めた。明日のことを語れば鬼が笑う。今は止そう。だが、そうだな……

蟠りを抱えたままというのも気持ち悪い話だ。落ち着ける時が来たなら、少し話をしよう。士郎はそう思った。

「ネロ帝。いや、名で呼び捨てても？」

許す。余はカルデアのマスターとやたらになるのだ。であれば先達ソナタが余におもねるようなことがあってはならぬ。それでは他に示しづかぬからな。

ではネロと。ああ、いや、誉め言葉が溢れて何も言えない。

だから、代わりに感謝する。まだ時ではないが、いずれ必ず貴女の助言に沿わせて貰う。

うむ。幾らかは晴れたか。ならばよい！余からは何も言うことない！さあ、後はよきに計らうがよいぞ！

堂々たる立ち姿で腕を組み、ネロは眼を閉じて時を待つ。

士郎は微笑みなしにしているアトリア達に対し、背中痒くななる感情を覚えたが、誤魔化すようにカルデアのロマニにゴーサインを出した。
起動した聖杯は、過とすることなく願いを叶える。
ネロ・クラウディウスが現代の存在であり、カルデア職員である
と世界に誤認させる。人理焼却に喘ぎ、防御が薄くなってるの
なおかつ、同時この特異点に於いてはローマ皇帝であるという
矛盾を押し付けて立たせた。一度機能させてしまえば、聖杯の力
は人の身で抗えるものではない。しかし聖杯を使えばなんの問題も
なかった。半月は問題なく盾を成り立たせることが出来るとカルデア
は測定したのだ。
半月もあれは充分である。もともと十日も時間はなきのだ。それ
までに特異点を修正し、盾を正し、ネロをカルデアに正式に迎え
入れればよい。ネロが現代人として存在が確立すれば、もう聖杯に存在を維持さ
せると必要もないということだ。時代が復元されれば、ネロは「いる」
ものとして歴史は進む。
全てが終わっても、傍目にはネロの何が変わった訳でもない。正
が当事者であるネロには何かが感じられたのだろう。大切な物
から自身が切り離されたかのような、寂しげな眼で空を見上げ……
次の瞬間には何事もなくかったかのように不敵な笑みを浮かべた。
ネロがどこで聖杯やカルデア、サーヴァントやマスターのこと
知ったのか、訊ねると、サーヴァントとして敵側に現界していたと
少年が教えてくれたのだという。ネロは一時期、アレキサンダーと交戦し、敗れ、捕虜となる寸前までいったそうだ。そこで彼は、なにを考えたのか突然ネロを試すようなやり口を改め、脇目も振らずにネロに今後もとされるだろうか。

もう半信半疑のネロに言ったのだ。そして半信半疑のネロに言ったのだ。そう言ったとき、アレキサンダーはネロを放逐したのだという。

そう言うと、アレキサンダーはネロを放逐したのだという。後に事の真相を知り、神祖と対面する頃には、ネロは因縁浅からぬブーディカ、何よりネロを知るらしいエリザベト、タマモキッサのレオニダス一世と合流し、一時はローマ連合軍とやりを押し返すほどの摂子奮迅の働きをしていた。

だが一Mと名乗った男が全てを狂わせたのだ。Mは手にした聖杯を使い、自らの支配下にあるサーヴァント全てに狂化を付与。それすらはね除け自我を完壁に保った神祖ロムルスに狂化を付与。それすらはね除け自我を完壁に保った神祖ロムルス
には一つの命令と共に聖杯を埋め込み暴走させたのだという。
その命令とは「ネロは、ローマを否定せよ」と言い切っている。
如何に神父が強大な存在であろうと、その半ばサーウァントのものであるかは、
はさておき。聖杯そのものを使って暴走を諦めれば抗える物ではなかった。
神父は、一度は矛を交えたネロに、全霊を賭した言葉を残した。
ネロは奮起し、なんとしても神父を倒さないと必死に戦ったが、
一歩を踏み出すたる、これ以上ないほどの激励だった。
ネロは奮起し、なんとしても神父を倒さないと必死に戦ったが、
神父は、一度は矛を交えたネロに、全霊を賭した言葉を残した。
神父は、一度は矛を交えたネロに、全霊を賭した言葉を残した。
神父は、一度は矛を交えたネロに、全霊を賭した言葉を残した。
ネロは仲間の全てを失い、神祖の期待にも沿えずに逃げ続け、失意と絶望の中、なんとかブリタニアまで辿り着いたのだという。

「神祖ルムスを筆頭に、皇帝カエサル、アレキサンダー、メリオス三世ときたか。おうおう、銃々たる面々だね。位格を結ぶが今からちょい不安になったぞ。」

白銀の鎧手と肩当てが逞しい肉体を堅固なものに映えさせ、青みを帯びた黒髪を無造作に結わえた姿が香り立つ男の色気を増幅させ、身に付けている。

白銀の鎧手と肩当てが逞しい肉体を堅固なものに映えさせ、青みを帯びた黒髪を無造作に結わえた姿が香り立つ男の色気を増幅させ、身に付けている。
言っていた。
彼はアルスター王の甥にして、太陽神ルーの子である。正しい
味での貴種の中の貴種だ。
光の御子とまで称えられた美男子はアルスター屈指の文化人でも
あり、俗に言う貴公子という形容がぴったり似合っていた。

ケルトの大英雄は、真紅の呪槍で肩を叩きながら大まかな話の流
れて反芻し、獰猛な笑みを口許に刷く。

彼のマスターはネローゼではない。士郎である。当初、
予定を変更してクー・フーリンをネロに召喚
して貴おうとしたのだが、ネロはこれを固く拒否。これより共に戦
っていくことになる仲間を、他者に指図されるまま召喚するのは違
うだろう、と言った。

縁に頼らず、触媒に依らず、まったたくのランダムで召喚する。
相性だとか、戦力だとか、そんな雅でない基準はない。自分が喚
び、来てくれたどの誰とも知れぬ英雄と駆けていくのがマスター
としての覚悟だった。

それを否定することはできなかった。士郎は、やむなく自身でク
ー・フーリンを呼び出し、そして見事、クー・フーリンは槍兵とし
て完全な状態で現界したのである。

（ランサーのサーヴァント、クー・フーリン。召喚に応じ参上した。
ランサーのサーヴァント、クー・フーリン。召喚に応じ参上した。
ランサーのサーヴァント、クー・フーリン。召喚に応じ参上した。）
深く笑いかけて来ながらそう言う彼の存在感は、この場の誰よりも重厚なものだった。
再会を喜ぶより先に、圧倒されてしまった。
マシュが気圧され、アルトリアとオルタは驚愕に眼を見開いてい
たものである。自分達の知るクエン・フーリンとまるで違う別格の靈
基を感じ取っていたのだ。
「貴公がそれを言うと、嫌みにしか聞こえないな」
アルトリアが苦笑しながらケン・フーリンに対して言った。
状態のクエン・フーリンに位で並ぶ者はそうはいない。気を抜くと、
アルトリアすら武者震いに剣を執る手が強張りそうなほどなのに。断言できること、武人として、この特異点に存在する全ての者がこの
英雄の前には霞んでしまう、と。
「おっ、お前さんにも称えられると悪い気はしないな。名に
し負うアーラー王の聖剣の輝き、オレも照らされてみたいもんだ」
「応、幾らでも頼りな。命けの旅、荷物と期待は重いほどいっ
い、大いに heterogeneous でもえ別嬪さん揃いと来た。しかも二つは
同じ女、と。オレのマスターはまたまた業の深そうな感じだな。」
「そう、それもあるかもねえ。別嬪さん揃いと来た。しかも二つは
同じ女、と。オレのマスターはまたまた業の深そうな感じだな。」
ランサー、あまりからかうな。アルトリアとオルタは鬼も角、歴史の違いが。
「へえ？なるほどね。道は長いな。負けるなよ、盾のお嬢ちゃん」
「おっと、こっちは。やれやれ、楽しそうな職場だこったな」
女は怖えぞ、早いこと手を打っとけ、と耳打ちってくるクー・フーリン。余計なお世話と言えない士郎の哀しみ。何やら苦笑しつつ、クー・フーリンは本題に入った。
「で。どうすんだマスター。状況は分かったが、オレとしちゃさっさと動きたい気分なんだねー。知恵が欲しい。どう考えても行き詰まってる気がしてならないから、俺達とは違う視点で考えられるあんたの意見を聞きたい」
「んなの言うまでもね。退けば死、進めば死、なら進んで前のめりに死のうぜ。」
「……あのな。」
「不思議と、切迫感はない。彼と共に戦える、それだけで負ける気がしなくなってくるのだ。王や将軍が感じさせるカリスマではない。もっと別の、戦士同士の信頼が作る安心感——戦いを恐れない勇猛さを与える英雄の性格が感じられる。
なるほど、アルスターの戦士のほとんどが慕ったというのも分かれる人徳だな、と士郎は思う。

クー・フーリンは、びくりと眉を跳ね、南東の方角に目を向ける。

しかし、それだけで、特にリアクションはなかった。

一拍遅れて、アルトリアが何かを気取ったようにハッとした顔色を変えた。

「どうのもちもう話んでんだ。小難しく考えたってしゃあねえだろ。シンプルなものにはシンプルにぶつかるのが王道ってもんさ。
違うかい？」

「……道理、ではあるな。
それに、来たぜ。敵だ」

（こちらアサシン。南東、敵軍勢を視認した。数は一万、異形の軍
だ）

丁度、切嗣からの念話がその言葉の裏付けとなる。

「空気さ。戦の空気がした。こういうのは、勘でなんとなくわかっ
ちうまくなんんだぜ。」

「……どうやって気づいた？」

「……そういうものか？」
「そういうもんだ。さて、と。敵はどんなか、分かるかい？」

「……」

（切嗣。敵軍の特徴は）

訊ね、返ってきた答えをそのまま伝える。
異形、動く死体と骸骨の軍勢、大将は三メートル超えの巨漢らし
い
ネロが顔を険しくして言った。厳しい表情だった。

難敵、というだけではない。何か個人的な借りがある、そんな顔
だった。

士郎は、クー・フーリンを見る。

「やれるか？」

「応。それが命令ならな」

「じゃあ頼む。その力を俺達に見せつけてくれ」

エリザベートやタマモを屠った、悪魔の軍勢を。

アントよりもただのサーヴ
「正気か！？　敵は一万の軍勢だぞ！　それも、ただのサーヴ
アントよりも厄介な不死性までも持っている！」
「ふん。一万人の大軍、不死性を持った厄介な奴か…」

反駁され、ネロは気色ばんだ。

「な、なに？」

「…それだけかよ？」

「な、なに？」

「そっ…」

反駁され、ネロは色ばんだ。

「クー・フーリンは、一騎討ちよりも、対軍戦闘こそ真価とする
多数戦闘のプロフェッショナル。生前、アルスターの戦士全てが大痙攣により動けなくなり、メイヴ率いる対アリスター連合軍数十万を相手に戦い抜き、勝利して伝説を成し遂げた。

相手はただの戦士ではない。戦いに生きた修羅の戦士揃いのケルト戦士である。これにより、メイヴは戦いによって勝つことを諦めた。陰謀で、クー・フーリンは破滅した。

一万人でオレを止められるとでも？」

「たった一万でオレを止められるとでも？」

クー・フーリンは、一騎討ちよりも、対軍戦闘こそ真価とする
多数戦闘のプロフェッショナル。生前、アルスターの戦士全てが大痙攣により動けなくなり、メイヴ率いる対アリスター連合軍数十万を相手に戦い抜き、勝利して伝説を成し遂げた。

相手はただの戦士ではない。戦いに生きた修羅の戦士揃いのケルト戦士である。これにより、メイヴは戦いによって勝つことを諦めた。陰謀で、クー・フーリンは破滅した。

「たった一万でオレを止められるとでも？」

「たった一万でオレを止められるとでも？」

クー・フーリンは、一騎討ちよりも、対軍戦闘こそ真価とする
多数戦闘のプロフェッショナル。生前、アルスターの戦士全てが大痙攣により動けなくなり、メイヴ率いる対アリスター連合軍数十万を相手に戦い抜き、勝利して伝説を成し遂げた。

相手はただの戦士ではない。戦いに生きた修羅の戦士揃いのケルト戦士である。これにより、メイヴは戦いによって勝つことを諦めた。陰謀で、クー・フーリンは破滅した。
不死の軍？

死なぬ奴はごまんと見てきたが、殺せない奴は見たことねな。

「不」死の軍？

不死の怪物など幾らでも殺してきた怪物退治の達人が、クー・フ

リンである。

それを探手に、動くだけの死体、骸骨。バカにしてているのか？

数を揃えれば強く見せられるとでも思っているのだろうか。

― ダレイオス三世。彼にとってはの天敵は、間違いないクー・フ

リンである。

ま。いいから任せきな、ローマ皇帝。オレの戦いぶりを見て、

オレを召喚する機会を手放したことを後悔しろ。

― だろ？これでも最強の名で通っていてな。ま、それが伊達じ

あるな、ランサーよ。

得意気に笑い、クー・フーリンはさっそくこちらへ背を向け歩

き始めた。

手には真紅の呪いの槍。颯爽とケルト文様の外套を翻し、目にも

留まるぬ速さで撃ち消える寸前、ネロが叫んだ。

― ランサー！奴は…余の友、エリザベートとタマモの仇だ！

だから…頼むぞ！

― 応、任せとけ。これが終わったら、しっかり守ってやるから
大船に乗ったつもりでいない。
英雄猛りて進撃を（下）

海を航る幽なる霊。往くは悪鬼の如き不死の群。只人には目視する

踏み締めた大地が苦悶の音を鳴らす。実体化したのは小山のよう

に雄大な体躯の王。知性なく、狂した瞳は獲物を求めて見開かれた。

地鳴りのような呻き声が、ブリタニアの大地を震撼させる。魔性

の障気が巨躯から溢れて止まらない。鬼火が如き青白い火を纏い、

かつては大国の王だった巨人は、ひたすらに怨敵を探し求める悪霊

と化していた。

もはや英霊でも、反英霊でもない。狂ったダレイオス三世には、

目に映る敵全てが打ち倒すべき宿敵に見えている。聖杯による狂化

は元々バーサー・カーであった彼も付け足され、もはや精神の原

型すら残らぬほどに狂乱していたのだ。

根本から断たれた左の腕。慰めるように右手で傷跡を覆い、苦し

げに呻く。

それは以前己の行く手を阻んだ二人の小娘によって付けられた傷

でない。宿敵の、幼い姿の者を討った時に受けたものであった。
理性を失い掛けながらも、圣杯の支配が、自身の好奇心から、未来の好敵手であるダイオミス三世に一目会いに来たところ、ダイオミス三世が襲いかかったのだ。見た目は違うけど、アレキサンダーが宿敵本人であると本能で悟ったのである。そうならば、パーサークーであるダイオミス三世に制が効くはずもない。激闘の末、ダイオミス三世が襲いかかったのだが。

見た目は違えど、アレキサンダーが宿敵本人であると本能で悟ったが、万全ではないとはいえ、戦斧を握りしめ、狂王は屈辱に打ち震える。狂っているとはいえ、万全ではないとはいえ、戦斧を握りしめ、狂王は屈辱に打ち震える。狂っているとはいえ、万全ではないとはいえ、戦斧を握りしめ、狂王は屈辱に打ち震える。狂っているとはいえ、万全ではないとはいえ、戦斧を握りしめ、狂王は屈辱に打ち震える。

「…」

「…」

「…」

「…」

言語として成立しない咆哮は、ブラタニア全土に轟き渡る。小鳥が散り、虫が潜み、獣は逃げた。死の気配に、ブラタニアに存在する全てのモノはその懸威を感じ取っていた。
無限大にまで肥大しつくす憎悪が標的を探求する。

彼女を見つけた。

広野を隔て、いつの間にか現れていった一人の男。
気配はサークル。ダレオス三世は憎みを込めて睨み据える。
群青の戦装束の上に、白いリネンのローブと、勇壮な刺繍が施された深紅の外套を羽織っていった。
金のブロチが、眼に映え、白銀の籠手が降り注ぎ、陽の煌めきに照らされ光った。
結わかれた青みある黒髪を風に靡かせ、真紅の槍と紅蓮の盾を手に、まるでダレオス三世の行く手を阻むかの如くに悠然と構えている。
音もなく血を吐く狂王。喉を引き裂き絶叫する。
赦さぬ、断じて！吾を敗者へ賭けた者よ、吾に仇為す敵対者よ！
これに見よ、これから吾が『不死の一万騎』である！
伝説となり、不死性と不死性が誇張されたタイオス三世が模倣する
狂王の下に集いし群体の不死、史実として存在した一万の精鋭。
この不死の軍勢を以って貴様を捻潰し潰れろ！
タイオス三世は右手の戦斧を掲げた。
動く死体、骸骨の軍勢が、悪魔的な喚声を上げる。そのおぞまし
さは、まさに地獄の獄卒。悪の化身。タイオス三世は前方の一
騎に向け、不死の一萬騎兵を差し向けた。
これに見よ、これから吾が『不死の一万騎』である！
赦さぬ、断じて！吾を敗者へ賭けた者よ、吾に仇為す敵対者よ！
これに見よ、これから吾が『不死の一万騎』である！
不死の兵。不滅の死体。…余りに純粋くて欠伸が出そうだ。かの偉大なる征服王、その雄飛の足掛かりとなった大王よ、狂ってい
るとはいえ正直からの突撃とは芸がない。

「んじゃ、往くぜ。まずは挨拶代わりだ。凌げねえなら影の国でし
ごいて貰えや。死なねえからって気持ち抜いてたら、笑えるぐらいだ。
ささり逝ちましょう。」

嘔くや否や、呪いの朱槍を放り、足に引っ掛け宙に蹴り上げる。
自身も何かを追って跳躍し、魔力を吸い上げ不気味に光る魔槍の石
突きを、振り抜いた足が完璧に捉えた。
死んだ。殺された。死を遠ざけた軍勢が、為す術もなく削れた。
たどの一撃で、三百の不死不滅が概念ごと粉碎された。
驚愕などない。「驚く」といった感情など残っていない。それで
も狂王は宿敵がやはり侮れぬと狂奔し、己の寶具、その真の姿を開
陳した。

死んのだ。殺され
れた。

軍勢が、為す術
も削られた。

たどの一撃で、三
百の不死不滅が
概念ごと粉碎さ
れた。

容易くいくと思
ing、不
死の一
万騎
兵』の真髄と
はこ
れで
ある!

ダレイオス三世の
誇る精銳が集結し「死の戦
象」ととなっ
t。黒く、
雄々しく、猛々
しい戦象。鬼
火を纏う漆
黒の戦象
兵となったダレイ
オス三世は、自ら戦斧を手に軍勢を率い、恐るべき魔力の一撃を繰
り出すべく敵対者を破壊せんと怒濤の如くに迫る。

ランサー、クーエロリンは凜々と言う。そう
da、それでいい、
出し惜しむようならそ
のまま廃殺してしまおうと思っていたが、そ
れでこそ遣り甲斐があるというものだ。

言いたかねえが、こ
りやメイヴの方
が数段怖
え。見劣りするせ、
逃げ腰王、
逃げ腰王。
した皮肉だった。
狂うのはいい、それは恐怖を退ける一つの手段だ。
荒ぶるのはいい、戦う者は己の全力を尽くさねばならぬから。
迫力がないのだ。こちらの向こう側に誰かを見、実際に戦う相手を見ていない。
迫力がないのだが、目の前の敵を見ないのは駄目だ。
狂うのはいい、それは恐怖を退ける一端手段だ。
荒ぶるのはいい、戦う者は己の全力を尽くさねばならぬから。
迫力がないのだが、目の前の敵を見ないのは駄目だ。敌に失礼だし何より途端に恐さを欠いてしまう。

「…」

熱し切った戦いは、失意に冷めていく感覚を得て、クー・フーリンは丁寧に、豪快に、精妙に槍で突き殺し、盾で碎き、足で穿つ。そして改めて実感する。この狂王は、自分ではない誰か一樹敵を捕るように軍勢を指揮していたものだが、失意に冷めていく感覚を得て、クー・フーリンは丁寧に、豪快に、精妙に槍で突き殺し、盾で碎き、足で穿つ。そして改めて実感する。この狂王は、自分ではない誰か一樹敵を捕るように軍勢を指揮していたものだが、失意に冷めていく感覚を得て、クー・フーリンは丁寧に、豪快に、精妙に槍で突き殺し、盾で碎き、足で穿つ。そして改めて実感する。
ちょっと、つまんねえな。

強い敵と聞いていた。故にテンションを上げてきた。

この目で見た。確かになかなか強そうだった。
それら、だからこそ失望した。

敵を頼めばにせよ。殺意が足りね。

比較対象があればけど、メイヴの絶対殺しき prueba したのに他ならぬ。
できれば、お前さん。見劣りどこか比べるのも鳥獣か、もとより。

― 敵を頼めばにせよ。輩のなぞ、怖くともねえよ。殺意が足りね。

— 目にしてテメェに付き合う道理は無い。さっさと終わらせちまうが、文句はねえ。あっても聞かんが。

今のマスターの許での初仕事なのだ。

あどれだけの大見得を切っておきながら苦戦したのでは面目に関わる。

盲目的敵を相手に大人げないかかもしれないが……少し本気を出すとする。

目の前に押しつけめる敵に吞まれず駆け、眼前で剣を振り上げる骸骨の頭を踏んで高く跳躍した。

一連の動作の中で、魔力を吸い上げていた魔鎗が紅く発光してい
た。くるりと回転して姿勢を制御し力を溜めて、

「宝具じゃねぇ？それだけは安心している。勿体ないからな、

それを狙うのならその手を止めて。数々の死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め

死体が盾となって立ちふさがるが、全てあっさり貫通し、狂王の怒号を発する不死軍の王。対照的に、虚しさに目を細め
これを百回繰り返した。見る見るにその数を減らしていった不死の一万騎兵。ダレイオス三世の死死の奮戦も虚しく、まるで相手にもされずにはいられずと落ち込む。冷徹に軍勢を削り懸けていく。幾度となく戦うと、激怒に燃えようとする戦士たちの数を減らしていき、一刺す一撃で三騎連続、横に菱鉤をとうに七騎の首を斬る。魔槍の呪いを使うまでもなく、ルーンは不死の概念を無視して殺せてしまう。

それこそって、ダレイオス三世の戦斧行をあっさり落し、クー・フーリンはその心臓を無造作に穿った。
戦士としての格違いすぎる。一対一で対峙した時点でこの終わりは当然の帰結だった。

霊核を破壊されたからか、狂化が解け理性の戻った瞳でアケメネス朝最後の王は、本来の大器を覗わせる声音で静かに言った。

「……見苦しい姿を見せたのみならず、要らぬ手間までもかけたか消滅したダレオオス三世は、口惜しげにクー・フーリンを見ていた。

無言でその死に様を見届け、クー・フーリンは己の主人がいるだろう方角に向けて声を張り上げた。

答えは帰ってこない。だが構わず続けた。

「―どうだい。やるんだろう？オレも」

だが物足りねえな！オレはまだ本気を出してねえ。城も戦車も出してねえし、この朱槍も使いきってねえ！これがオレの全てだと思われちゃ心外だ！」

オレに命じろよマスター。敵を倒せ、獲物を食らえってな。今度一オレに命じろよマスター。敵を倒せ、獲物を食らえってな。
神う続―相歴ガ命師己確彼主修衰え誰。

手以史イ令の『かれた羅え』に『に、死のる殺未見強』最クー笑以ケ！

不となリ首そをなのト知い足

不カ獲だ、戦とリ言具ディータークーは皇替え…

大戦のそずる、軍のそすぞろいのう。

犬あすれ、弟ろン子れれまた。
「忘れていけないのは、俺達はテロリストだということだ」

「「テロリストは斯く語りき」

保存食の干し肉を喰らいながら言った俺に、アルトリアは嫌そうに顔を覗き、オルタはさもありなんと頷き同意を示す。

こちらも神妙に頷いたマシュの傍で、ネロが怪訝そうに首を傾げた。

「シェロよ、「てろ」とはなんだ？」

「ん？……そういえばネロの時代にテロという呼び方はなかったんだったか」

ネロは一世紀の皇帝だ。聖杯の力の影響か、彼女が過去の時代の存在だと、意識しないと忘れてはいない。

しかし、ネロが現代の人間に存在を置換されたとしても、ネロが現代の常識を網羅するわけではない。そのことを理解していなければならなかった。

「テロは正確にはテロリズムといってなーネロにはクリュプテアの反対と言えば伝わるか？」

「む……」
クリュプテイアとは、古代ギリシアやスパルタの秘密勤務と称される制度である。国家監督官が派遣した若者が田園地方を巡回し、奴隷の反乱防止のため、危険視される者を夜間に殺害することを務めた。

テロリズムとは政権の奪取や政権の撓乱、破壊、政治的外交的優位の確立、報復、活動資金の獲得、自己宣伝などを達成するために暗殺や暴行、破壊活動などの手段を行使することである。そしてテロリストとは、それらの手段を政治的に行使する者のことだ。

ネロにとって最も身近なテロは、ローマ帝政の礎を築いた男――テロだ。”

大勢は既に決している。ローマは滅び、残党は僅かに七人。特異点は磐石と言ってもよく、俺達はそれに抗う少数武装勢力でしょうか。それはが現状だ。

後は、ネロ・クラウディウスの死を以てして、人類史はめでたく終了だ。
ネロが死なずとも、六日か七日でローマの滅びは確定したものです

正直に言おう。

肩を竦めた俺に、マシュが深刻そうに眉根を寄せ発言した。続

肩を竦めた俺に、マシュが深刻そうに眉根を寄せ発言した。続

肩を竦めた俺に、マシュが深刻そうに眉根を寄せ発言した。続

肩を竦めた俺に、マシュが深刻そうに眉根を寄せ発言した。続
ない。流し言葉がなった。
カエサルもう勝利しているのである。
戦略的に、戦術的に、国家的に、政治的に。
故にダレオス三世の単独の突出も放っておいた。
否、それはどうか。
手綱の握れ狂戦士は不要とし、放し飼いにされたのかもしれない。
獲物さえ間違わなければ、狂戦士も有用である。
現状俺達はカエサルと戦うところ出来ないといいのに。
まあ堅実な指揮官、現実的な王、正道の英雄は打ち手なしと言わる。
そこの上で立ち向かうからこそ英雄と言わるのだろう。
生憎と俺達はそんなにのではない。
「だかなら、な。言っただろ。
俺達はテロスだって、」
「鎮圧されるとの暴徒、ということですか」
「端的な評価をありとうオルタ。
ずばりそのような通だよ」
冷徹なでの観客視が必要だ。オルタは―いや、騎士王はそれができる王だ。
空になったグラスの底を暫し眺め、俺は深く深呼吸をした。そして、言っ。全てを賭けた、一か八かの大博打。
胃の腑に熱い液体が流れくる。少しすると、腹の底から熱が回ってきた。いよいよだなんて自画自賛し、俺は透き通る思考のまま、心の奥底に酒ごと何かの感情を押し込んでいる。
「―自爆テロを仕掛ける―」
それは最悪の戦法。
アレキサンダーは言ったそうだ。カルデアに目端の効く者がいた。
幼い征服王がそう言って、実際それは正解だった。であれば、あらゆる戦法がそう言っている。実際それは正解だった。カルデアに目端の効く者がいた。
ならアレキサンダーは言ったそうだ。カルデアに目端の効く者がいた。
胃の腑に熱い液体が流れくる。少しすると、腹の底から熱が回ってきた。いよいよだと、腹の底から熱が回ってきた。
「―自爆テロを仕掛ける―」
それは最悪の戦法。
アレキサンダーは言ったそうだ。カルデアに目端の効く者がいた。
幼い征服王がそう言って、実際それは正解だった。であれば、あらゆる戦法がそう言っている。実際それは正解だった。カルデアに目端の効く者がいた。
恒星の如く煌めく伝説の名将。
無視し難い、だからこそ——無視する！

正気を疑うような四対の目に、俺は微笑みながら訂正する。

正敬。エレガントに言い直してくれ——進退窮まった。
斯くなる上は我ら火の玉となり、玉砕覚悟で敵本丸に打ち掛かる。
万歳、神風特攻！

ランサー、クー・フーリンは、ダレイオス三世を完膚なきまでに
粉砕し、猛る血潮を鎮めながら主人のもとへ帰還した。

何せ、今回のマスターは自分のことをよく分かっている。好不容易の言葉を期待
していいるわけではない。ただこれからの大いに期待を寄せ
た。無理難題を吹っ掛けてくるはずだ。そしてそれをこなしでこそその英雄であ
るクー・フーリンは考えている。このマスターは——どんの命令
を出すのか、実に楽しみだった。

そうして主人達の待つ仮初めの拠点、召喚サークルの設置された
所へ戻ると、クー・フーリンは思わぬ眉根を寄せる。味方のサーヴァント達、そしてローマ皇帝が揃って難しい顔をししていたのだ。唯一マスターだけが平然としたぶふに酒を呷っているためか、奇妙な空気が流れている。ちらに気づいたのか、マスターが笑いながらグラスを差し出し吹き出した。「駆けつける杯」。

応、と受けとる。これがこのマスター流の労りなのだろう。それを快く受け取って、一気に飲み干し『駆けつける一杯』。

「ぷふおっ？！」「なんじゃこりゃあ！？何、なんかですか？！これは新手の苛め物だった。

喉を焼き、臓腑を燃やす炎の酒。「クー・フーリンの印象は劇物だった。」

先程まで見せつけていた無敵の勇者然とした姿はそこにない。親しみやすく、身分の別なく付き合える気軽なニイちゃんだがそこにない。ネロが目を丸くした。あの勇士が、こんな甘く美味でおろやかな甘酒を飲んでこんな大袈裟にしているのがおかしかったのだ。
なんとか…かの大英雄ヘラクレスを彷彿とさせたランサーが、戸だったとは…。

「いや、違うと思うぞ。」

「安たの時代の酒という名の水と、俺の時代の酒は別物だと気がつかなかった」

度に、士のロい戸っ待の士そが。古郎世た言と、いだっがのれ酔代酒べ言のや、蜜ローるたの違…。

「としで、比のマス代と、アルの思の酒うる女をまなクーのと、アルなは英雄に口ルな・論酒ムイ神のあリ酒驚だし代きる。勘すクアてのと主まレとフー神のへ制にひ用と秘うで、れつん。」

「待ちなさい！貴女にそれは…」
口に含んだものを一気に吹き出し、士郎はそれを頭から浴びてしまって固まった。

皇帝云々以前に女として見せてはならない醜態を晒したネロは、あわあわと慌てながら弁解した。

「ぶふあっ！！？」

「あっ、こ、これはだな…クー・フーリンが吹き出すほどの酒がいやむしろこんなものを平気な顔で飲むのであるシェリーが悪い！！」

「うん、そうだね。俺が悪いね」

顔を赤くしているネロは、酒を飲んだことがないふぶなる少女のようだっただ。それになんとも言えない気分で相槌を打ち、士郎は布を投影して顔を拭いた。

自慢の酒を吹かれてこんなもの呼ばれられて立腹しかけていたが、しかしクー・フーリンがなんてか自分の分を飲み干したことで機嫌を直した。

「ぷはあっ。…最初は驚いたが、この火みたい体の中で燃える感覚は悪くねえ、マスター」

「お、おう…」

「やっぱり違いが分かる男なんだなあクー・フーリンは！クー・フーリンは！」

「むっ！まるで余だけが違う分からぬ小娘のように言いなって！」
よかろう、それはローマに対する重大な挑戦と受け取った！これに見よ我が勇姿！こんなもの容易く飲み干してくれる！ああ、止まらぬ！ロマを止めてください！

ふふん、とアルトリアに羽交い締めにされたネロに得意気な笑みを向け、士郎はグラスに注いだ日本酒をこすりよせに飲み干した。くぬぬ、と呻くネロの視線こそ最高の肴とでも言うような表情だった。

とまあ、戯れ合いはここまでとして。うがああ！と暴れるネロをアルトリアとオルタ、マシュが三人で完全に身動きを封じている傍ら、士郎はク・フーリンに向けて劳いの言葉をかけた。

ご苦労さん。流石はアルスター最強の戦士は物が違う。一つの神話で頂点に君臨する武勇は伊達じゃないな。

ちなみにク・フーリンは知名度が低くアーサー王伝説だけが有名ならク・フーリンはあまりよく聴いていました。

おれは、と呻くネロ。オレは聞き手で君臨されても申し訳ない。

なら、ク・フーリンは物が違う。一つの神話で頂点に君臨する武勇は伊達じゃない。

なぜなら、死ぬと分かっていても突っ込むきゃならない時もある。
なでもないように主人の決意を聞き、クー・フーリンは明るく
歯を見せて笑い掛けた。
恐怖の色を呑み、しかもそれに足の竦む恐怖はない。なるほどイ
男だ。オレの次にな、とクー・フーリンは笑った。そんなサーヴ
アントに苦笑して、その分厚い胸板を拳で叩く。
「特攻だ。敵のど真ん中に突っ込み、敵大将を殺る」
「いいねえ。好きだぜ。そういう分かりやすいのは、でもちろんオ
レに先鋒は任せてもらえるんだよね。」
「……は？」
「─追い端。クー・フーリンの目が陥悪に歪む。世界が死ぬほどの
怒り。それを感じた追い端、辺りは緊張する。」
「それはオレが力不足だから、とでも言うつもりか？」
「─追い方もうそれほど野郎を相手に力は見せたと思ってたんだが。
充分に見た。その上で言っている。クー・フーリン、お前に敵大
将は任ぜられない─」
「─いちおう、聞きとく。なんでだ？」
その答え如何ではこれからの関係に遺恨を残すことになる。そんなこと、分かりきっているのに、士郎は言う。あくまで自然に。士郎は言う。「ああランサー。今、ローマはどこにある？」「あ？」「ネロがローマで、カエサルもローマだ。…だが勘違いしてないか？敵の大将はカエサルじゃないんだぞ。」言われてみれば、そうだ。クー・フーリンはカエサルというビッグネームに、勝手にカエサルを倒すべき敵と思っていたが、…更にデカい敵を、デカいが故に見落としてしまっていた。俺達は六人もう一つのローマに挑む。ランサー。クー・フーリン。俺達は敵本丸に乗り込み、神祖ロムルス単騎と戦う。その間、カエサルが邪魔だ。カエサルと、ローマ全てを、神祖から切り離すヤツがいる。「それを見せてあげる。敵はローマ。世界の中心だ。」
それと、一人で、あんなに戦えと俺は命じる。

「はっ。はっ。はっ。はっ。はっ。はっ。
クー・フーリンは腹を抱えて笑った。
大いに笑った。これ以上なく爆笑した。

「わかったる！
やはりこのマスターはオレの使い方をよくわからねえ、たまるねえあ！
オレに世界と戦えと来たか！

いいねえ、いいぞマスター！
その命令確かに承ったぜ！
たまに楽しんでもいい、やはり振り切れたバカとするものは楽しいものだ！

笑い転げていたクー・フーリンは、しかし次の瞬間には真剣な顔つきとなった。片膝を地面につき、槍と盾を置いて顔を伏せた。それは臣下の礼だった。

マスターとサーヴァントではない、本当の主人として、クー・フーリンは士郎を認めたのだ。

アリスターの赤枝の騎士、クー・フーリン。これよりもう槍は御身のものを。如何に振るうも我が主人の意のままに。命令を、マスター！いつでも出撃の覚悟は出来ている！

ギャツércュリウス・カエサル

力と知恵と勇気の限りを尽くして、ギャウス・ユリウス・カエサル
立ち上がり様、クー・フーリンは槍を掲げた。空に向けて大音声を張り上げる。「さあ兄弟！出陣の命が下った！オレの往く道にテメェらがいないんじゃ話にならねぇ！往くぜ、往くぜぇ！轟く豪炎。光の如くに眩い炎が起こり、その中から二頭の竜馬が駆け出す。」

轟く豪炎。光の如くに眩い炎が起こり、その中から二頭の竜馬が駆け出す。黒塗りの鋼鉄戦車を牽き、手綱を握るのは御者の王ロイグ。戦車を牽く竜馬は馬の王と称えられた灰色のマハ、黒色のセングレン。クー・フーリン生誕より、死ぬまでを共に駆け抜けて希代の名馬。

革鎧と、赤いリネンのローブを纏った大男は、無言で己の胸を叩いて戦友の主人に礼を示し、仕草だけで戦車に乗るようにクー・フーリンに促した。「はや！高揚するままに乗り込み、クー・フーリンに乗せた戦車は走り出す。炎を纏った羅刹の戦車は見る見るに遠ざかる。クー・フーリンはこれ以上何も言わず、背を向けたまま槍を掲げて勝利を約した。"私の、貴方の剣です。それを忘れなぃ。"
「何を言うかと思えば」

「とっくの昔に、お前の剣は預かっているだろう。苦笑し、土郎はオルタに己の愛機のキーを渡した。ゃ、あんまりにも締まりが悪いからな

「はい」

「はい」した顔でキーを受け取り、オルタが武器庫つきのバイクに跨がった。アルトリアもすぐにドゥン・スタリオン号に飛び乗り火を入

「はい」

「はい」

マシュが、焦ったように声をかける。

「あ、あのっ」

そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、そんな土郎に、那样的に戦いますから！」

「あ、わたしは……わたしも！先輩のために戦いますから！」

「わ、わたしは……わたしも！先輩のために戦いますから！」
一瞬、呆気に取られ、士郎は間抜けた声を発した。

マシュの顔が青くなる。
その反応が、怖いものに思えて—
「バカ。俺の隣にお前がいなくてどうする。嫌だっって言っても離さないかね」
「は――いっ!」
その言葉に。弾けるような笑顔を咲かせて、急いでマシュはラム二号のオルタの後ろに乗り込んだ。
「―ところで余のサークル召喚はいつにする?」
ア。ネロの言葉に、全員が思わず出たような顔をしで。
どこかで暗殺者が呆れて、嘆息した。
咳払いをして気を取り直し、攻めて召喚サークルを設置する。カーテンアバラ例の如く呼符を転送してもらい、マッシュの盾を基点に英霊召喚シミュを起動。俺が近くにいたら、割と召喚儀式が良く結果にならないと直感し、離れに退避。ネロに後を託す。ネロは運が良さそうだし、触媒も何も使わなくても相性のいいサーウァントを呼べるだろう。ネロ自身が古代出身ということもあり、聖杯によって現代人に置換されても身に宿す神秘は高く、サーヴァントと戦える身体能力はあるので、実質サーヴァント二騎分の戦力は固い。キャスターがいいと思う俺がいるが、作家系を筆頭に戦闘スキルの低いサーヴァントや、性格や性質の悪い輩でなければ誰でもいいというのが本当のところだ。
戦力が充分という訳ではない。しかし不確定要素の強いランダム召喚で、そこまで期待する方が間違っている。だからクー・フーリンの触媒を譲ろうとしたのだが、ネロは頑として受け取ろうとしなかった。曰く「余のガチャ運を舐めるなよ！」とのこと。
俺は嘆息し、気合い充分にふんすと鼻息を吐き出して、戸惑っていられるマシュの腰を抱きながら召喚に臨むネロを見守った。マシュはローマ式コミュニケーションに戸惑っているが嫌がっている様子はない。ガードが緩くて悪い男に引っ掛からないか、お兄ちゃんは今からとても心配です。

「さて…ネロのガチャ運はどれほどのものか…」

豪語するほどの結果が伴えればいいのだ。肝心のネロは、「シェロがクー・フーリンなら余はヘラクレスだ！いざ、星座の果てから余の呼び声に応えよーー！」なんて、自身が激しくリスペクトする大英雄に呼び掛けている。

これで本当にヘラクレスが来たら色んな意味で最高だが、生憎と絶対外れだと予想し、俺はぼくと笑んだ。ガチャには物欲センサがあるのである。ネロほど強欲に希って、まともな結果になるわけがない。

今、システムが正常に作用し、夥しい魔力と光に視界が塞がった。
「余が私のマスターか？」「うむ！余がそのたのマスター！で、ある！」「おお！カリュドンの野退治にて名を駆けた麗しのアタルランテだ～」「お！余がそのたのマスター！で、ある！」「余もやるものであろう！こちらを振り向くネロは満面の笑み。」
俺は曖昧に頷いて、案の定、フランスでスルーさせて貰ったアタラシらしい女狩人の視界から逃れようとした。が、無駄だった。アタラシは目敏くちらを発見し、何を思ってたのかツカツカと歩み寄ってきてた。

「な、何かな…？」
「汝は今、私に後ろめたさに似た感情を向けたな。なぜだ？」
「別に後ろめたくなんてないぞ。本当だぞ。やむにやまれぬ事情がないで、別に後ろめたくないぞ。本当だぞ。やむにやまれぬ事情があって、君に似た女性との遭遇を避けたことがあるだけだ。」
「嘘ではないようだが…」

言っていることとは本当である。嘘なんて欠片もない。あのフランスのアタラシと、ここにあるアタラシは、英霊という存在からして厳密には違う個体だ。アルトリア？コイツは特例である。

クリーフリンも記憶は曖昧みたいだし、直接会ってもいない俺、故に俺は嘘をついてない。高度な嘘というのに、逆に真実しか言わないものなのだ。果たして、どこか納得のいってない様子のアタラシも、訝しげにしながらも離れてくれた。また女難が仕事したようだが、なんで、この程度はどうというか。

「…嘘ではないようだが…」

「嘘だ……」

女難限定地雷撤去班の班長とまで言われたことのあるこの俺が、こんな見覚えのある地雷に引っ掛かるわけがないのだ。
「……アブラミを中心に始まる歴史は
今、私たちの前に広がり始める。

「……アブラミの死、マサイの遺産
は今、私たちの前に広がり始める。

「……ガダルの遺産、マサイの歴史
は今、私たちの前に広がり始める。
ネロの主従が早速、親睦を深め始めたのを尻目に、俺はその様子を観察する。

「アーチャーか。よりにもよって。」「アーチャーと言えば、その敏捷性もさることながら足も早く、弓の腕も優れているだろう。狩りの腕は英霊屈指と言えるかもしれない。またそれに付随する嗅覚も。だが…」

「アーサーチャーか。」

俺は溜め息をこすり吐いた。俺は俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守り、ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。ネロは俺と同じく、最も重要度の高い警護対象である。故に守りに長えたサーヴァントか、戦車などで行動を共に取れるサーヴァントが望ましかった。
俺は皆に促し、今度こそローマに向けて進行を開始した。

「ネロのサーヴァントも召喚は完了した。行こう、もう憂いはないはずだ。

何を隠そう、このドゥン・スタリオン号とラムレイニ号は水陸両用の水上も走れる高性能バイクである。

風の海を航るのに時間がかかった為、ブリタニアを後にしたガリアに上陸する頃にはすっかり陽も暮れていた。ネロは、変わり果てたローマを見て、嘆然としている。

見渡す限りの木、木、木。深紅の神樹は遠くに屹立し、更に雄大なものとなっている。過剰なほどの緑豊かな森がローマの大地を埋めつくし、ガリアの都市も々々に囚われ無惨なものとなっていた。

なんだことだ…喘ぐようにネロはそう溢し、頭を振って決然

ただしかなかった。
前を見た。

人の営みを否定する自然の猛威。やはりローマーは、ローマを、人を否定している。

俺はふと、首を刺す違和感に目を細めた。俺が何かと言う前に、アタランテがそう言った。

少し驚いた。この狩人も、自分と同じで世界の風変に敏感なのだろか。

「アタランテ。なぜ気づいた？」

「私は森で生きてきた。森で生きるものは、生き物の視線に敏か

まるほどな、と俺はうなずく。神代の英雄は、やはり俺の理解を

超える。」

しかしローマ全土を覆う森に入っただけで敵に察知されるという

ことは、先行したクー・フーリンもとっくの昔に発見されていると

いうことだ。クー・フーリンに四時間遅れてガリアに来たが、彼は

今何処に……
目を凝らして、近くに見えてきたガリアの城壁を凝視する。森化している大地に呑まれているためか、見晴らしが悪くすぐには分からないが……。

ガリアの城壁は、完全に崩壊していた。

まるで、とんでもない怪物に襲われた後、みたない光景である。

ガリアの城に入ると、そこに人影はない。ただ破壊されているだけ。

―人はいないと見て、ただ破壊だけして先に行ったのか。ラプラス……。緣がたいことに、ついでに露払いもしてくるている。岩のゴークルームの残骸が無数に散らばっている。

無視できない怪物の襲来roadsどう出ても構わない、手当たり次第に総当た、といった方針か。

呆れたパワーファイトだが、確かにこれはド派手である。すぐに脅威のほどは知れるだろう。

無視できない怪物の襲来roadsどう出ても構わない、手当たり次第に総当た、といった方針か。

クー・フーリンの働きは、現時点で目を瞑るほどだ。

だが……。
あ、あ。

前方より津波と押寄せる大樹の質量をみて。
否。大樹に取り込まれたローの民、その人面の浮かぶ大樹の枝をみて。

俺は、ネロは、神祖の変質が致命的なになっていとを知った。
魔の柱、森の如く

人面寄せく大樹の津波。
寄せる波濤は野山の奔流。

枝葉の成長が濁流となって迫る様は圧巻。
その正体はパラディウムの丘に突き立てられた建国の証。

枝葉を束ねた大樹は、造られた自然そのもの。
これに解析しても、その真実を見抜ける者など、
神秘を含む木に過ぎないのだ。
だが、その本質を見抜ける者なら、
その大樹自体が「国」そのものであることを悟るだろう。

綺羅光る星屑と、
満天に座す満月の光に照らされる中、蠢く赤い
森の只中で、夜の帳を突き破るようにして鋭い命令が飛ぶ。

構成材質、解析完了。
誰がアリトリア、オルタ。それぞれ風王戦模と卑王戦模を使え、出力
力に重きを置け。見た目は派手だが材質はただの樹木だ。気兼ねは
要らない。
「待て！」

制止の声を張り上げたのはネロだった。
ここはガリアだ。ブリタニアへと逃れる時に通った道。人面の中
には、変わり果てていても確かに見覚えのある顔があった。
焦燥に駆られ、怒りに震え、それでもはっきりと皇帝は訴えた。

あれは余の民だ！それを巻き込むので攻撃など
決してすまない。

悪の報せだ。あれに呑まれている奴はまだ生きてはいる。死なせ
てやった方がよほど救われるぞ。

「あら、て、

成長の糧として、『必要もないのに』あの間違は養分にされて
いる。似たことを体験したことがあるから見るが、体の内から吸
われていく感覚は地獄の苦しみだぞ。俺を止めるか、ネロ」

国とは人、人とは国。民の苦痛は国の悲鳴。ローマの否定は、そ
の民を惨禍に叩き落とす所業である。
善き生活、善き呪みを反転させた苦痛を味わう民の顔は干からびて、苦と醜と痛とを絡めた絶望に染まっている。唇を強く嘘むあまり、血が流れるのにも拘わず、ネロは苦渦の渦をしすをのうと捨てた。

「…止めぬ。介錯もまた余の責であろう。」

「勘違いするな、カルデアのマスター。これは指示を出した俺の責だ。ネロ帝は民を傷つけてなどいない」

「後輩のケツは先輩が持つものだ。大したことじゃないな。」

「…馬鹿者め。皇帝として、礼は言わぬ。しかし、ただのネロ・クラウディウスとしては…」

暴竜の息吹よ。
卑王鉄槌。

バインから降りるなり風の鶚を解き、アルトリアが打ち出した暴風の揮は樹木の津波を遮る。オルタの黒い旭光は障害を砕いた。微塵の如くに破壊された木片がちららと地に落ちる。

人面の樹木は血を流さなかった。樹液のようなものが夜の闇の中に四散しただけ。苦闘の風の音に撃き消された。

ネロが呎いた声は暴風の音に押し消された。ただ、士郎は黙って領いた。その目は第二波となる樹海の振動を睨み据え、アルトリアらに同様の攻撃をするように指示を出した。
せる基点のようなものがあるはずだ。それを探し出して破壊しろ。

困難なら俺に言ってくれ。

（了解）

気配なく、されどレイラインを通して確かな絵答があった。
こういった単純な質量を前にアサシンは無力である。故に別の用
途に投入したに過ぎないが、戦果は期待薄だろう。

「…アタランテ、余からも頼む。樹海発生の基点を探し出してく
れぬか。「

「承知した。」

ネロの命に応じるや否や、アタランテが駆け、跳んだ。
見えなかったアタランテか
や枝葉の妨害をするすり抜けているか、あるという間に姿があ
えなくなる。

…神代の狩人というのは、ああいったことが普通にできるのか？

身軽と言うより、羽が生えているとでも言った方が適切な跳躍力
だ。士郎は呆れるやら感心するやら、見えなくなっただアタランテか
ら意識を切り、武器庫から黒弓と螺旋の剣弾を抜き取る。
障害物の多い中で、通常の剣弾は用を為さない。貫通力秀でた
投影道具を選ぶのは当然である。

しかし、第二波以降、大樹の津波は収まった。

「…なんだ？」
不気味な静寂。士郎は突然収まった攻勢に眉を顰めて周囲への警戒を緩めなかった。アルトリアイを見る。首を左右に振った。警戒を維持したまま無言でバイクに乗るように促す。士郎は顔を青くしてマシの背中をそっと押し、黒いバイクに乗るように言った。
……人面大樹とはいえ、元々が人間だ。それが破壊された光景を見た場合に突然直面する時が来るのだろう。敢えて優しい言葉はかけない。マシに、人の死に慣れないと言いたいのでははない。ただ、そういうマシの死を見て吐きそうになっている。言葉では言っているも、実感はなかっただろう。それが今、無惨な人の死を見て吐きそうになっている。
バイクに乗り、移動を開始する。念話で切嗣に移動を再開したことを伝えた。応答が返ってくる。
一時間余りも走ったほうが。代わり映えのしない景色に心が膿み始めた頃、定期的に入れていたアサシンへの念話に異変があった。互いの現在地を報せ合うための定時連絡だ。こちらが伝え、切嗣が答える形だったのに——反応がない。
異常事態だ、と瞬時に士郎は判断した。
阿瑟からの応答が失せたと伝えると、緊張が深まる。

「！…アサシン？」

すまない。しくじった。僕はここでリターーン。

“シェロ、これはなんだ？’

自身と契約するサーヴァントとの念話を可能にする装置だ。ネロ、アタランテに伝えてくれ。アサシンが消滅した！”

「！ SELF」

空気が電撃を帯びる。士郎は最後に互いの位置を確認した時と、移動距離と時間経過から割り出した、アサシンがいただろう地点を予測し、その座標をネロに伝える。

ネロは頷き、アタランテに連絡したようだ。
暫く移動を停止し、アタランテからの報告を待つ。

……アタランテからの報告だ。何もないそうだぞ。

ただ、何か巨大な、円形の穴が空いているらしい。

巨大な……穴？

うむ。まるで錨のようだとアタランテは——

「アルトリア！下です！——

——瞬間、大地が激しく振動した。地震？

こんなタイミングで

言葉短く叫び返してきた言葉を認識するや、士郎は即座にオルタ

に合図した。ラムレイ号が急発進する。黒弓に螺旋の弾を装填す

ル。

アルトリアが愛機より離れ、聖剣を構えて厳戒体勢に移った。

やがて地面が大きく盛り上がり、地中からおぞましい肉の柱が飛

び出てくる。

「アルトリア、赤い裂け目が心臓のように脈打ち、無数にある黒緑色の

円柱のような、肉の塊。

幾筋もの赤い裂け目が心臓のように脈打ち、無数にある黒緑色の
魔眼の奥から、歪な瞳孔が開ききっているのが見えた。
膨大な魔力。優にサーヴァント数騎分もの力を内包した異形の柱。
それが、まるでこの特異点に投げ込まれた錨のようであーーーー。
士郎達は、戦慄と共にそれを見上げた。

魔神柱、出現。
戦術の勝、戦略の勝

ぎょろりと蠢く無数の目。波動となって肌を打つ外れの魔力。
それら立つ肉の柱を見上げた俺の所感は、巨大な魔物から感じる威圧感への戦慄と——得体の知れない、正体不明の既知感だった。

青い顔の少女。盾の真奥のデミ・サーヴァント。人面大樹となった者達の死の衝撃は抜けきってないようだ。
俺は、マシュを気に掛けたわけではない。いや心情的には心配で堪らなかったが、死への感傷は自分でおこる力でありならなければならぬ。そうでないと彼女は誰かに依存して、その在り方を歪めてしまうだろう。

故に俺の言葉の意味は、マシュを戦力に数えてもいいか、という
冷酷な質問。ここで踏ん張れないようなら、俺はもうマシュに土壇場で信頼を寄せることができなくなる。安定した戦力こそが鉄火場で必要とされるからだ。そこに情の介在する余地はない。アニメや漫画にありがちな、劇的な成長と爆発的覚醒を期待するのは馬鹿したことである。

「だ、大丈夫、です。マシュ・キリエライト、いつでも行けますー」
「…マシュ、死に慣れると言うつもりはない。たが少しでも無理をしているなら…」
「…大丈夫です！　わたしは…先輩のデミ・サーヴァントですから」

必死の形相で俺を見るマシュ。その意識はこちらに向いて、他への注意は逸れた。

「…そうか。なら守りは任せる。頼むぞ—」
「はい！—」

無数にある眼、その一つがオルタから視線を逸らさないでいるの。

マシュの守りが薄くなったところで俺を狙えば、オルタに横から表情を少し明るくしたマシュを横に、俺はちかりと魔物の柱を見た。　

今、俺の守りの要であるマシュを、わざと言葉で揺さぶり、守りを薄くしたのだが…この柱はまるでそれに釣られず、沈黙を保ったまま目を頻りに動かしていた。　

無数にある眼、その一つがオルタから視線を逸らさないでいるの。

に俺は舌打ちする。
仕掛けさせるつもりだったのだが……厄介だ。敵の知能を見極めるべきだろう。

アルトリアとネロへの警戒は薄い。防衛に専念するのが……俺を凝視する眼は多い。追い詰められているのか……俺にマジックを側から離さないと察している……？

次いで、警戒されているのがオルタだろう。

現在、戦力として浮いているのがオルタだけだ。決定打を放っている攻撃力も併せ持ち、この場では最も自由度の高い運用が可能である。

つまりこの魔物は敵の脅威と戦力を冷静に推し量れる知能があるということ。過小評価はできない。否、あの切嗣を仕留めたことから考えると、俺の相手でないのは自明だった。

その直感に、鳥肌が立った。

……あの、眼。

……まさか……こちらを見定めようと……？
これは意思と高い知能を持ち、そして切嗣を時間をかけずに仕留められる力を持つなら、こちらをこの場で倒す必要はないと考えている可能性が高い。

「退路」があるということ。後がない俺達とは違う、万全の戦力をいつでも投入できる確実さを持っていないということだ。

俺はこここの時、いままで「敵」の大きさをこの人類史上焼け果てた

基一覧で確認できたからだろう。

俺はロマニには、必要がない限り通信が入る。アサシンの脱落を、霊

カルデア管理室のロマニから通信が入る。アサシンの脱落を、霊

基一覧で確認できたからだろう。

例えば強力なキャスターのサーヴァントが敵側にいた場合、なんと

の干渉を受けてしまうかもしれないからだ。

それに……この反応はレフ？！ そこレフ・ライノールがいるのか！？
混乱したような叫びに、思わず眉を顰める。

「落ち着け。ここにレフはいない。ソイツは始末したはずだ。遺体もカルデアで確保して、頭の天辺から足の先まで解剖し解析してい
る最中だろう」

「いやでも、これは確かにレフから検出されたものと同じ反応が…
信じられない！とロマニが喚いた。」

「レフから検出された反応は弱すぎて分からなかったけど、これは
伝説上の悪魔と同じ反応だぞ！?」

「伝説上の悪魔と同じ反応だぞ！?」

「いえ！これは…そんな！?」

「落着け。ここのレフはいない。ソイツは始末したはずだ。遺体
もカルデアで確保して、頭の天辺から足の先まで解剖し解析してい
る最中だろう」

「いやでも、これは確かにレフから検出されたものと同じ反応が…
信じられない！とロマニが喚いた。」

「レフから検出された反応は弱すぎて分からなかったけど、これは
伝説上の悪魔と同じ反応だぞ！?」

「伝説上の悪魔と同じ反応だぞ！?」

「いえ！これは…そんな！?」

「いえよ！とロマニが喚いた。」

「レフから検出された反応は弱すぎて分からなかったけど、これは
伝説上の悪魔と同じ反応だぞ！?」

「伝説上の悪魔と同じ反応だぞ！?」

「いえ！これは…そんな！?」

「いえよ！とロマニが喚いた。」
レフだけでなく、同一の反応を発するものがここにあるということは、
それでもレフのいた所とは別の特異点に柱があったということは、
人類史緩却の暴挙を持続的なものであるということになる。
冬木レフが、ローマコイツが、ならフランスにも柱があったのかかもしれない。俺は遭遇しなかっただけ。そして、これから先の特異点全てにも。かうと幸せする話だ。あああ。お前もレフと同じで、人間が変
曖昧に、引き張りそうな顔を誤魔化すように笑い、目の前の柱に
問いを投げる。
その眼が、測るように俺を注視した。カニに過ぎる、傲慢に過ぎる。人間の歴史を途絶えさせようとするほど。
かかり、かかったことにしようとする人は、增上慢も甚だしい、そ
うは思わないので。

そうだ。その眼に、微かに苛立ちの光が走ったのを俺は見逃さなかった。
確か証ではない。しかし確定したと判断する。奴はレフと同じ人間だ。
いや今は悪魔かもしれないが、かつて人間であったことは間違いない。
つまり、人間に通じる駅け引きは、コイツにも通じるということ。
それは、光明になり得る。

眼光が、鋭くなる。意識が更に俺に向く。
何か俺の言葉に含むものがあるのか？
なんてあれば、好機。

（令呪起動――）

神ででもなったつもりか？
それとも人を肅清することに大義で
も見い出したのかな？いや人の未来に絶望したアトラスの錬金術
師の可能性もあるか……

（システム作動。――のサーヴァント、――を指定）

だするとと更に度し難い。己の手前勝手な絶望に、人類全てを巻
き込むとするとほど偽善者にも劣る。あの、流石にそれはないか。人
類を滅ぼそうとするほどの悪党が、そんなちょっとや biedな訳がない。
だすると他の考えられるのは……誰かに唆された道化かな……

冷淡に語りかけ、嘲笑する。

何か、柱が反応する寸前。令呪は作動した。

冷淡に語りかけ、嘲笑する。
（道具解放、ノータイムで最大火力を発揮し、敵性体を討滅しろ）

瞬間。
『約束された勝利の剣！』
指令通り一瞬にして臨界にまで達した黒い聖剣が、黒い極光を迸らせる。
横合いから殴り付ける究極斬撃。反応は間に合わず直撃した。
横合いから殴り付ける究極斬撃。反応は間に合わず直撃した。

指揮命令通りに肩を竦める。
あまり、そこまで甘くないか。
俺は苦笑する。

指揮命令通りに肩を竦める。
あまり、そこまで甘くないか。
俺は苦笑する。

指揮命令通りに肩を竦める。
あまり、そこまで甘くないか。
俺は苦笑する。

指揮命令通りに肩を竦める。
あまり、そこまで甘くないか。
俺は苦笑する。

指揮命令通りに肩を竦める。
あまり、そこまで甘くないか。
俺は苦笑する。

指揮命令通りに肩を竦める。
あまり、そこまで甘くないか。
俺は苦笑する。

指揮命令通りに肩を竦める。
あまり、そこまで甘くないか。
俺は苦笑する。

指揮命令通りに肩を竦める。
あまり、そこまで甘くないか。
俺は苦笑する。

指揮命令通りに肩を竦める。
あまり、そこまで甘くないか。
俺は苦笑する。

指揮命令通りに肩を竦める。
あまり、そこまで甘くないか。
俺は苦笑する。

指揮命令通りに肩を竦める。
あまり、そこまで甘くないか。
俺は苦笑する。
いずかへ消えていく人の影。その手に輝く聖杯の魔力。あたかも消え去るようにして、それはこの特異点から去っていった。

「―しくじった。俺のやり口を知られたのに取り逃がしたか」

まあ、いい。こちらにも収穫はあった。敵は人だ。得体の知れない謎が一つ解けた。そして敵が人間となれば、これほどやり易く、そして手強いものではない。

俺はやられられと嘆息し、皆にバクに乗るように促した。まだやるべきこと、成さなければぬことは残っている。俺はやられられと嘆息し、皆にバクに乗るように促した。まだやるべきこと、成さなければぬことは残っている。

消費した令呪を、あと二時間ほどで補填される頃合いだ。火力の面では不足はない。俺はやられられと嘆息し、皆にバクに乗るように促した。まだやるべきこと、成さなければぬことは残っている。

俺はやられられと嘆息し、皆にバクに乗るように促した。まだやるべきこと、成さなければぬことは残っている。

俺はやられられと嘆息し、皆にバクに乗るように促した。まだやるべきこと、成さなければぬことは残っている。

「――え、もしかしてこのノリで余もないかねばならぬのか？」

「――え、もしかしてこのノリで余もないかねばならぬのか？」
その疑問に、バイクに同乗していた騎士王は重々しくなずいた。

その疑問に、バイクに同乗していた騎士王は重々しくなずいた。
戦場の王、大國の王

アルスター王の妹の子として生まれ、戦士としての道を志し、ついに英雄としての栄光を掴んでいた。

戦場の王、大国の王

アルスター王の妹の子として生まれ、戦士としての道を志し、い

戦士として、赤枝の騎士として、「己の信条に肩入れし、英雄として生きる己を誇った」。

赤枝の騎士として、己一戦士なのだとは自らを規定した。新しく生き方を貫いて鮮烈に生きた。

その生涯に彼は決してはないが、覚えてできる。男は信じた道を貫けたのだ。

己の知る王という人種に、ろくな奴はいなかった。

コノートの王アルスと、女王メイヴ。アルスター王にして自らの伯父でもあるコンボヴォル。三州のそれぞれの君主。妖精郷の神々。

己の知る王という人種に、ろくな奴はいなかった。

己の知る王という人種に、ろくな奴はいなかった。

己が傲慢な王を嫌うのは、無意のひん曲がった外道ばかりだった。己が傲慢な王を嫌うのは、無意
中でも特に酷かったのは、こともあろうに「権威・悪・狂気」の三位を司る女王メイヴではなく、自らが仕えたアルスターの王その人だった。クーリーの牛争いが勃発した時、アルスターの戦士達全てが体を痙攣させ身動きを取れない、コンートを含めた四国連合の侵攻を前に無力だったのは、アルスター王コンホヴァルが妊娠だった女神ヴァハに無体を働き、その怒りと憎悪を買って、国難の時、国中の戦士全てが戦えなくなる、という呪いをかけられていたからなのだ。その時、己は影の国にいた。だからこそ、その呪いに掛からずに済み、呪いに掛からなかったからアルスターを守るため、単身で戦うことになったのである。妊娠に暴行を振るい、初夜権を行使して国の新婦を抱き、思うがまま振る舞う外道。それがコンホヴァルという男だ。 Dt あ終わり国一番の戦士だった己には気を使い、己の妻には手を出さなかったが、もし手を出したり、戦士として無能で、為政者として最悪で、伯父ではなかった、きっと自分もまたフェルグスとは共にアルスターから出奔していなかったかも知れない。

だがコンホヴァルは外道だったが、身内には甘く、優しい男だった。王としての能力もあった。戦士としての力量も備えていた。ただ、それ以外が最悪だっただけだ。
狗のようだ、とコノートの戦士に罵られたことがある。即座に殺したが、同時にこうもう思った。最悪の野郎を裏切る。それ故分がそれ以上の存在に成り下がることにはならないか？コノートの側についたフェルグスは別にいい。フェルグスは元々アルスターの王だったが、コンホヴァールの地母に王位を取られた過去を持つ。コンホヴァールに従う道理はないのに、彼からの背信があるまで騎士団の若頭として武勇を振るっていたのだから、充分以上に義理は果たしていた。だが、自分はそうではない。ただ、それだけの理由でクー・フーリンはアルスターの為に戦ったのである。

生前は、主に恵まれなかった。生前に、まともな王はいなかった。座にある膨大な記録の中で、覚えている限り、唯一まともだったのは冬木の本来の女マスターだけ。これも、やはり縁はなかったのか、一度も肩を並べて戦う機会はなかった。だがどうだろう？この、人類史上繰わる大戦で、遂に己は望みうる中で最高のマスターを得られたわけではない。いい戦いという獲物、加えていい主人がいたら番犬は満足である。その全ての条件を満たしてくれたのは今生のマスターだけであった。気骨があり、人の使い方に長け、知略に秀でる。死地に自ら飛び込む胆力を備える。 ―― 最高の戦いと、博打を知り、死地に自ら飛び込む胆力を備える。
男…クー・フーリンは高鳴る鼓動にうっかり最終宝具しかけてしまったが、御者のロイグが一睨みをくれると我に返り、わかり、そうだ。所構わず暴れるなんてつまらない真似はできない。なんたってオレは、騎士として仕えるという誓いを立てたからな、と自重する。今の己は生前の狂戦士ではいられない。理性と業と忠誠を持って戦う槍兵なのだ。戦の狂気すらも御して、全霊を振り絞り戦いに徹するのみ。

－そうだろう？ロイグ。

戦車の一部として宝具化し、自我が稀薄になっているとはいえ、元々が寡黙な男だった。照れ臭いが、親友、と言える数少ない男である。自我が稀薄でも、彼が何思い、何を感じているのか、手に取るように感じ取ることができていた。口数が少ないくせに、たまに喋ったらと思うとやけに辛辣な性質である。ロイグはきっと、一真しだ頭でもなかろう。御託を捧げる暇があるなら、黙って槍でも振るっているとでも言うに違いないがった。声を出して笑い、クー・フーリンはロイグに言う。
まったくだ。そろそろ奴さんも本気で来るだろうし、オレらも本気出していこうね。

世界を相手に戦え、なんて馬鹿げた命令を受けた。それをお快しと受諾した。

今、己はどこを駆けているのか。指令を受け戦いをはじめ既に二日が経っている。乱立する樹木、押し寄せる大樹を粉碎しながら進み、打って出てきた生身の敵兵を一万は蹂躙しただろう。ローマ全土を亀裂に駆けずり回り、破壊した城は四つを数え、討ち取った指揮官は二十七を数えたか。国土は半壊、大将の潜んでいそうな場所もだいたい見えてきた気がする。

襲いかかってくる樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかってくる樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかってくる樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかってきた樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかってきた樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかってきた樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかってきた樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかってきた樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかってきた樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかってきた樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかってきた樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかってきた樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかってきた樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかってきた樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかってきた樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかってきた樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかってきた樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかってきた樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかってきた樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかってきた樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかってきた樹木の津波を正面から突撃して破壊し、見えて襲いかかてきた新たな都市の前に隊列を組んでいる敵軍十万、いや二十万か？流石に雑魚と言うのは過小評価か。雲霞の如く並みいる軍勢はまさに総力を結集だ。ここが決戦の場と定めたらしい。
ヴァントがいるのが見える。
あの巨人的な存在感。二十万の大軍を自らの規格に組み込む統率力。あれがカエサルか。なるほどローマ最大の英雄の名は伊達ではないらしい。
狂気のきの字も見られないので、手強そうだ。
しかし二十万の大軍を一ヶ所に集めるなど正気ではない。こんな大胆な布陣を取るという事は、兵站を気にしていないわけではない。こんな多大な部隊を率うことは、あの巨人的存
在感。二十万の大軍を自らの規格に組み込む統率力。ああ、カエサルか。なるほどローマ最大の英雄の名は伊達で
ないらしい。狂気のきの字も見られないので、手強そうだ。
しかし二十万の大軍を一ヶ所に集めるなど正気ではない。こんな大胆な布陣を取るという事は、兵站を気にしていないわけではない。こんな多大な部隊を率うことは、あの巨人的存
在感。二十万の大軍を自らの規格に組み込む統率力。ああ、カエサルか。なるほどローマ最大の英雄の名は伊達で
ないらしい。狂気のきの字も見られないので、手強そうだ。
しかし二十万の大軍を一ヶ所に集めるなど正気ではない。こんな大胆な布陣を取るという事は、兵站を気にしていないわけではない。こんな多大な部隊を率うことは、あの巨人的存
在感。二十万の大軍を自らの規格に組み込む統率力。ああ、カエサルか。なるほどローマ最大の英雄の名は伊達で
ないらしい。狂気のきの字も見られないので、手強そうだ。
しかし二十万の大軍を一ヶ所に集めるなど正気ではない。こんな大胆な布陣を取るという事は、兵站を気にしていないわけではない。こんな多大な部隊を率うことは、あの巨人的存
在感。二十万の大軍を自らの規格に組み込む統率力。ああ、カエサルか。なるほどローマ最大の英雄の名は伊達で
ないらしい。狂気のきの字も見られないので、手強そうだ。
しかし二十万の大軍を一ヶ所に集めるなど正気ではない。こんな大胆な布陣を取るという事は、兵站を気にしていないわけではない。こんな多大な部隊を率うことは、あの巨人的存
在感。二十万の大軍を自らの規格に組み込む統率力。ああ、カエサルか。なるほどローマ最大の英雄の名は伊達で
ないらしい。狂気のきの字も見られないので、手強そうだ。
しかし二十万の大軍を一ヶ所に集めるなど正気ではない。こんな大胆な布陣を取るという事は、兵站を気にしていないわけではない。こんな多大な部隊を率うことは、あの巨人的存
在感。二十万の大軍を自らの規格に組み込む統率力。ああ、カエサルか。なるほどローマ最大の英雄の名は伊達で
ないらしい。狂気のきの字も見られないので、手強そうだ。
しかし二十万の大軍を一ヶ所に集めるなど正気ではない。こんな大胆な布陣を取るという事は、兵站を気にしていないわけではない。こんな多大な部隊を率うことは、あの巨人的存
在感。二十万の大軍を自らの規格に組み込む統率力。ああ、カエサルか。なるほどローマ最大の英雄の名は伊達で
ないらしい。狂気のきの字も見られないので、手強そうだ。
しかし二十万の大軍を一ヶ所に集めるなど正気ではない。こんな大胆な布陣を取るという事は、兵站を気にしていないわけではない。こんな多大な部隊を率うことは、あの巨人的存
在感。二十万の大軍を自らの規格に組み込む統率力。ああ、カエサルか。なるほどローマ最大の英雄の名は伊達で
ないらしい。狂気のきの字も見られないので、手強そうだ。
しかし二十万の大軍を一ヶ所に集めるなど正気ではない。こんな大胆な布陣を取るという事は、兵站を気にしていないわけではない。こんな多大な部隊を率うことは、あの巨人的存
在感。二十万の大軍を自らの規格に組み込む統率力。ああ、カエサルか。なるほどローマ最大の英雄の名は伊達で
ないらしい。狂気のきの字も見られないので、手強そうだ。
しかし二十万の大軍を一ヶ所に集めるなど正気ではない。こんな大胆な布陣を取るという事は、兵站を気にしていないわけではない。こんな多大な部隊を率うことは、あの巨人的存
在感。二十万の大軍を自らの規格に組み込む統率力。ああ、カエサルか。なるほどローマ最大の英雄の名は伊達で
ないらしい。狂気のきの字も見られないので、手強そうだ。
しかし二十万の大軍を一ヶ所に集めるなど正気ではない。こんな大胆な布陣を取るという事は、兵站を気にしていないわけではない。こんな多大な部隊を率うことは、あの巨人的存
在感。二十万の大軍を自らの規格に組み込む統率力。ああ、カエサルか。なるほどローマ最大の英雄の名は伊達で
ないらしい。狂気のきの字も見られないので、手強そうだ。
しかし二十万の大軍を一ヶ所に集めるなど正気ではない。こんな大胆な布陣を取るという事は、兵站を気にしていないわけではない。こんな多大な部隊を率うことは、あの巨人的存
在感。二十万の大軍を自らの規格に組み込む統率力。ああ、カエサルか。なるほどローマ最大の英雄の名は伊達で
ないらしい。狂気のきの字も見られないので、手強そうだ。
しかし二十万の大軍を一ヶ所に集めるなど正気ではない。こんな大胆な布陣を取るという事は、兵站を気にしていないわけではない。こんな多大な部隊を率うことは、あの巨人的存
在感。二十万の大軍を自らの規格に組み込む統率力。ああ、カエサルか。なるほどローマ最大の英雄の名は伊達で
ないらしい。狂気のきの字も見られないので、手強そうだ。
しかし二十万の大軍を一ヶ所に集めるなど正気ではない。こんな大胆な布陣を取るという事は、兵站を気にしていないわけではない。こんな多大な部隊を率うことは、あの巨人的存
在感。二十万の大軍を自らの規格に組み込む統率力。ああ、カエサルか。なるほどローマ最大の英雄の名は伊達で
なく
は。と、笑う。有名すぎるのも考えものだ。
黒と灰の二頭の競馬と、死の棘を持つ豪炎の戦車。そして己の姿と紅い槍。更にここまで散々に暴れ回ったことから得られる情報。例え、宝具を使ってなくても分かるだろう。

苦笑して、クー・フーリンは戦車を止めた。ロイグは自我を持つ者が、扱いは宝具の一部である。クー・フーリンの意向を妨げることはな。
そしてクー・フーリンは己のゲッシュに従う為、戦車を降り、少年が持つ呪いを
戦争を食べ始めるのを見守った。
そして、自分のために用意された犬の肉料理をみる。少年が

料理を食べ始めると、踏ん張りは利きそうだ。

苦笑して、クー・フーリンは己のゲッシュに従う為、戦車を降り、少年が

左手に握っていた赤い盾が地に落ち消え去る。クー・フーリンは苦笑して、怯えっていた少年の顔を握り、軽く揺さぶる。あっさり気絶した少年を担ぎ、戦車に戻って少年を確保。

左半身麻痺している。久しい感じだ。腕と、耳が死に、目も見えない。右半身は無事で、幸い左足は生きているので踏ん張りは利

きそうだ。
激怒する。

“殺す”

クー・フーリンは躊躇う素振りもなく右の耳を潰した。これで無粋な誘いの声は聞こえない。

更に敵の狂気を呼び起こし、意図的に狂熱に浸って目を映らてを敵と認識する。

クー・フーリンはロイグに言った。加減は無し、全力でいく。

本気の中の全力。あの野郎は確実に殺す。

こともあろうに、騎士としての初陣で……こんな醜態を曝させられるとは屈辱の極みだった。

クー・フーリンは吠える。精霊が怯え、混乱に落ちて狂騒を齎す。

ローマの地は、クー・フーリンの赫怒に染まった。

敵兵の士気が目に見え隠して落ちた。恐慌に陥った。カエサルによっ

tて冷静を取り戻したが、それでもクー・フーリンへの畏れが消えた

わけではない。
死の槍を掲げ、光の御子が。
戦場の王とまで讃えられた勇者が多い。
今、溢れ出る殺意と共に、大ローマ国の王に決戦を挑む。
「――『轢ロイグ・マハセングレッキ潰す死棘の蹄』ッッッ！」
開戦の号砲。それは、死の戦車の本領発揮であった。
真紅の神祖 にんうマスター、豚は好きか？仕留めたのは良いが、あまり好きではないと思う出した。

敵首魁の座をる帝都に近づくにつけ、次第に緊張を露し始めてきたネロに対し、アランがそんなことを言った。

悪魔と同一の反応を持つ柱を退け、ガリアを過ぎ、山脈を避けて、二日間でマッシミディオラムに進んだ頃である。

国土は樹林に侵され、生態系は狂い、幻想種がどこからもなれず現れ自らの縄張っている。そこを通かかっただ俺達は格好の獲物であり、魔猪やキメラなどどの類いに幾度も襲われていた。

陽も暮れ、辺りも暗くなり、そろそろ腹が減ってきた時分でもある。

ネロは訝しげに俺を見たが、別にネロ自身に猪をどうするのか、とこちらに快く譲ってくれと頼んだ。

ネロは訝しげに俺を見たが、別にネロ自身に猪をどうするのか、とこちらに快く譲ってくれと頼んだが、俺は気づかいないでフリをし魔猪の体を解析する。
あの普通の人よりも肉は柔らかく、むしろ豚に近いと言える。幻想的な意味でネロとオルタが難敵だったが、満足させることも出来ないほど。

今先はアルトリア、マシュ、オルタ、ネロ、アタランテ……。

中東の少年兵からヨーロッパのお貴族様まで、ご満悦だったのだから、間違いあるまい。

俺はまずマシュに召喚サークルを設置させ、カルデアから米と野菜、調味料各種を転送して貰う。
アタランテには焚き火を二つほど作って貰い、アルトリアとオルタには魔猪、いや呼び方は豚でいいか。豚の手足を縛らせて俺の腕ほどもある太い枝に吊るさせた。俺は専用の包丁を投下。腕を巻くと豚の肛門を切開し、手を突っ込んで内臓を引きずり出す。

思い出したように「見ない方がいいぞ」と言ったが全員特になんとも言えない。アタランテは特に興味深い。こちらの下処理を観察していた。

逞しい女性陣だということで……と呆れるやら感心するやら。俺は肩を竦めて豚の毛を綺麗に削ぎ落とす。

マシュとネロに言って内臓の下処理をさせておく。これも言いの素人であるし、こっちはこっちで作業しながら下処理のやり方を口頭で教えている。流石に器用で危なげなく作業をしていた。
それを横目に。空になった豚の腹の中に、薄く味付けをした白菜で包んだ米と、ホウレン草の包みで覆った米と香辛料を詰める。

豚の腹がパンパンに膨れ、何も入らないと肛門を系状の強靭な紐でじっと縄り上げ、焚き火に火種を放り込んで火を強くして暫くすると、香ばしい薫りが辺りに充滿し始め、幻想様の黙が釣られてきたとロマニから通信が入る。

アルトリアとオルタに目配せし、三十分後に戻ってこいよ、と言った二人は猛然と駆け出した。飢えた黙は、それ以上に飢えた二人の獣を狩りに走ったと、レンズに包まれたソウの裏に、吊るし肉の香りが、裂けた胸のまま、乾き肉が、羊の絹に、火を焚くと、米は、火を焚いたと、豚の上に覆うと、肉は、自分していて、魚が、汁を、火に、上に、薄くて、食事に、毎日、食事に、浸して、魚が、肉は、香ばしく、を、肉汁が、魚を、釣り、して、魚が、肉汁が、火に、上に、薄くて、香ばしく、を、肉汁が、鱼を、釣り、して、魚が、肉汁が、火に、上に、薄くて、香ばしく、を、肉汁が、鱼を、釣り、して、魚が、肉汁が、火に、上に、薄くて、香ばしく、を、肉汁が、鱼を、釣り、して、魚が、肉汁が、火に、上に、薄くて、香ばしく、を、肉汁が、魚を、釣り、して、魚が、肉汁が、火に、上に、薄くて、香ばしく、を、肉汁が、
俺は武器庫に向かい、ごそごそと物色して、隠していた葡萄酒を取り出した。

またか、と呆れた視線を受けたが、気にしない。酒なくしては人生の半分は損している。というか俺から酒を取りたから何が残るというのか。

肉汁がぽつぽつと火元に落ち、じゅ、じゅ、と音を鳴らし始めると、マッシュと変わって火を消した。

吊るした豚の肉を薄く削ぎ、アルトラリアがさっと差し出してきた皿によそ、ナイフで切り分け、食べてみる。

うん、上等。咲きながら葡萄酒の瓶を冪り、旨い、と口の中で溢した。

シロウ！物欲しそうなアルトリアにデコピンし、怯んだサーヴァントを放置する。

アバツを放たれて、勝手に食い始めている、と。

アルトリアとオルタ、双方があっていう間に肉を切り取り、米とアルトリアとオルタ、両方があろうという間に肉を切り取り、米と
野菜を取って、いただきますとお行儀よく挨拶して食べ始めます。その様から、食の好みが正反対のはずの二人が満足できているようです。俺はひとまず安心しました。

ネロも美味であると笑みを溢していました。うん、いい仕事をしたと満足しておく。

「あ……」

恥ずかしそうに頬を染めながら、「先輩と、それから皆さんと一緒に食べると、とても胸が温かく……」

そこで一歩前進し、胸の中で溜め込んだものをもろもろと流し始めた。目が真っ赤になったマシューを抱き寄せ、胸の中で嘆きを溢すマシューの背中をそっと撫でた。

時が流れはまったりとしていた。和やかな空気だ。
やがて泣き止んだマシュは、すっきりしたような、照れたような、恥ずかしげな表情をしてありがとうございました。と頭を下げた。

そう言うと、マシュは周りを見渡した。アルトリアとオルタ、ネロとアタランテ。それぞれが無言で、しかし目を逸らさずに苦笑していた。

そう言っただけで、と俺も食べ始める。と俺も食べ始める。モツの串焼きと葡萄酒を合わせ、ひとり堪能していると、アルトリアが物欲しが見てきたが、一気にして取って取って、米と野菜を一気に食べる。我ながら旨いと思った。

特にこの、かりっとした皮が堪らん。酒が進む進む。

－シェロの料理は、胸がほかほかとするなもの。
－そうか？
そうだろともし。シロウ卡拉な。「首をかげた俺に、オルタがしたり顔で頷いた。…わかん。気分的なのなら、それを受け取って次第なので、俺に何も言えなかった。しかしそういえば、昔にも同じことわった覚えがある。確かあれは――と、何かを考え出した時だっただけ。」「ふむ。これもまた、浪ロマンであるか」―聞きなれぬ、それど無視できぬ声がした。」「…っ!」最初に反応したのはアルタリアっただった。瞬時に立ち上がり、聖剣を構え―それを、俺は目で制した。ちらりとロマニ映るモニターに目をやると、ロマニが慌てたよう。うに言っただ。』
褐色の、見惚れるような偉丈夫であった。筋骨逞しく、されど物々しくなく、雄大で、偉大な英雄の存在感。圧倒されながらも、静かに手にしていたものを置き、冷静に誰何でも。俺は、とあえて敵ではないと、だけ理解し、酒を口に運んで、俺は、取りあえず敵ではないと、だけ理解し、酒を口に運んで。まるで幻だぞ！』

褐色の、見惚れるような偉丈夫であった。筋骨逞しく、されど物々しくなく、雄大で、偉大な英雄の存在感。圧倒されながらも、静かに手にしていたものを置き、冷静に誰何し、その独特な物言い。ネロをみると、土気色の顔色で呆然と、その超人が見た。俺がローマだ。それは——

『神祖、ロムルスか』

『如何にも。カルデアのマスターよ。私が、ローマだ。そして——』

『聖杯に取り込まれ、暴走した私が、英霊としての私を切り離し、さらたるの許に向かわせたのが、残虐であるこの私である——』
「……もう一度、分かるように言ってくれ」
全て、全て、全ての言葉はローマに通ずる

「聖杯に取り込まれ、暴走した私が英霊としての私を切り離し、そなたの許に向かわせたのが、残滓であるこの私である」

士郎は、とりあえず敵ではないだけ理解し、酒を口に運んで、

「…もう一度、分かるように言ってくれ」

「わ、分かりぬのか！？」

独特に過ぎる言い様に困惑しながら頼むと、なぜかネロが驚きながら反駁しててきた。

隣のネロを、ジト目で見る。分かるわけではないが、と言外に潺瀾ま

「ふむ。これもまた、ローマであるか。」

―ふむ。これもまた、ローマであるか。
ローマは、ローマである。聖杯に取り込まれ、暴走したローマが英霊としてのローマを切り離し、そなたの許に向かわせたのが、ローマであるこのローマである。"...何回ローマと言ったのかはどうでもいいとしてだ。実際なんとかニュアンスで判断できないものを、具体的に何と言っているのかまったく理解できなかった。寧ろこれで分かれというのが無理な相談である。士郎は経歴柄、語学には堪能な部類だが、古文書の解読専門家ではない。名詞の殆どが「ローマ」とか、まともに話す心算があるのか、甚だ疑問である。こめかみを揉みつつ士郎は神祖ロムルスに言った。「すまない。それらが何を言ってるのか、まるでわからない。出来れば俺にも分かるように話して欲しい。」「ぶ、無礼であるぞシェロ！神祖に対してそのような...」「よ、我が子ネロよ。それでもローマである。その身が未熟であろうといずれローマの言葉の真意を悟れるようにもなろう。...」
鷹揚に構えるロムスは、その生来の余裕から全く士郎の物言いで気を害した様子はない。⋯⋯が、分かりやすく言い直す気もないうだろう。

流石に英雄王とタメを張れる格の持ち主。吹けば飛びそうな俳句が私からだ。存在感からすら、途方ももない王気が衰えることがなく発せられている。

自我的強大さも英雄王に比すると、感服するしかなかった。 ...

「…何とはともあれ、駆けつけ一杯。」
一

何はともあれ、駆けつけ一杯

「…何とはともあれ、駆けつけ一杯。」

何はともあれ、駆けつけ一杯、駆けつけ一杯は困難な部類だと判断せざるを得なかった。士郎は諦めたらどうに感服するしかなかった。

神祖の残滓に、酒を差し出した。

非事理の解不能ぎて素面で相手するの Bottleと呪りロムスは豪快に飲み干した。まだ半分ほど残ってい

武器庫から葡萄酒の瓶を二本持ってきた。彼は古代人には度の高すぎる葡萄酒にも面食らった様子もなく、いったん平然として舌鼓を打っていた。
美味であるな。これはその手製の物か。

―ああ。度数は平気なのか？

―大事ない。ローマの知る中でも美酒の部類であるが、ローマの
秘蔵する蒸酒には一手及ね。

―…なんだと。

―ふむ、矜持を傷つけてしまったか。だが、案ずることはない。そ
の物では、同一の製法を用いても味わいに差が出てもおかしくはな
い。神々的として、その代物を僕が手掛けられた己の腕を
誇るのがよい。

―上があると知りながら、今が甘んじて向上することを諦めら
れはしない。答えろローマ、じゃない神。

―し、シェロ？ なんの話をしておる？ 今はそれはどこれで
だまらうらしい！

―ネロが何やら早いいかけてきたが、士郎はそれを揺さぶらずに怒
声を発した。

―こうか、アランテは嘆息して呆れていて。アルトリアとオルタは我関せ
り即応できそうなるのは、流石に騎士王ではあるが…。

―アタランテは嘆息して呆れていて。アルトリアとオルタは我関せ
り即応できそうなるのは、流石に騎士王ではあるが…。

―アタランテは嘆息して呆れていて。アルトリアとオルタは我関せ
り即応できそうなるのは、流石に騎士王ではあるが…。
やがて、神祖と酒について激論を戦わせ始めた士郎だったが、納得のいく答えを得られなかった。神祖に深々と頭を下げ、情報提供に感謝していた。

神祖の博学ぶりには感嘆の念を禁じ得ない。よもや竜種の逆鱗と爪、デーモンの心臓と脊髄にそんな味が隠されているとは。

キメラの爪と、鳳凰の羽根、呪いを帯びた凶骨もよい養分となる。隠し味としては、ローマは虚影の塵が好ましい。ご！では陸海の種はどうだ？あれは食ってみたら活力が沸いてきた。気力も充実するから鬱を一発で解消させることも出来るはずだ。

ほう、興味深い……鋭い見識であるの。なるほど、ローマである。根である聖霊根、そして二角竜の頭毛の中に隠れている小さな角が、神酒をより高みへと導く標となるのだ。

なんだって……クソ！逆鱗と竜とキメラの爪、デーモンの心臓、竜牙発の特に強い呪いを宿した骨しか持っていない……！！

悔やむな。これから先、手に入れる機会はいつもある。苦境に陥っても、その心を強く持って、そんなもまたローマの真髄を得られるだろう。

「うむ」、「……！！神祖！」
になった。

なんだか、緊張していた自分がバカらしくなったのかもしれない。

ふっ、と肩から力が抜けて、表情にいつもの余裕が戻ってきた気が

士郎は武器庫に向かい、ごそごそと底の方を漁り始め、隠し床を

開けて中から一つの壺を取り出した。

濃厚な風味の薰る、神秘的な香り。アルトリアとオルタの目の色

が変わった。ネロも、思わぬその壺に眼を奪われる。

士郎はそれらを意にも介さず、神祖の前まで戻り、壺を開けた。

そうして、神祖は始めて、沈黙する。

その言葉の意味を、士郎は理解できた。

ぼつりと溢した感想と共に、ロムルスは微かな笑みを湛えた。

その言葉の意味を、士郎は理解できた。
完全に酔っていた。

「……ところでなんの話をしていたんだっけ」
「ふむ？……ふむ。さて、なんだっけ」

「神祖！？シェロ！？」

酔っ払い達は、やがて微睡むように薄く微笑みを浮かべ、座ったまま寝入ってしまった。

ネロが泡を食ったように名を叫んだが、二人の耳には届かなかった。

話が進むのは、夜が明け、陽が昇って二人が目を覚ましてからで、ある。
ひくひくと目元を痙攣させ、底冷えのする眼差しを下ろすのは、
眼前で正座し顔を俯けるアトリアとオルタ、アタランテにネロ…
そしてマッシュである。

「…で、だ」

本日は晴天なり。陽は既に高く、麗かなる日差しに包まれた森に、
昨夜、時間を無駄に浪費してはならないのに、ついうっかりと醉
い洩れ、七時間の間、熟睡してしまったのは不覚である。

俺は、空になっている世界、樹の種の入っていた壺を指差し、静か
に、一切の感情を込めて質問した。

「…誰が、俺のツマミを食った。怒らないから、正直に答へろ。
正直に、だ」

「……誰が、俺のツマミを食った。怒らないから、正直に答へろ。
正直に、だ」

「お、怒っておる……絶対怒っておる……」

「あ？　なんだって？」

この悲しみを、どうすれば解って貰えるだろう。俺は悲しみに打
ち震えるしかない。
「な、なんだもないぞ！？ほんとうだぞ！！」
「あああと慌てるネロに、ガラス玉のように色のない目を向ける俺。ああう一度、誰が食った、と繰り返し問うと、全員が全員、互いを指差した。俺。もう一度、誰が食った、と繰り返し問うと、全員が全員、互いを指差した。

「なるほど……全員が犯人か」

「ロマニ。一つ聞く。誰の霊基が最も上がっている？」

「あ、あっ……その、あまり怒らないであげて欲しいんだけど」

「怒る？何と言う。俺は全く怒ってない。ただ事実確認をしているだけだ」

「あ、あはは……うん、ごめん無理だ。下手に宥めたらこっちに飛び火すると言った。だから観念してくれ」

「ロマニ！？」

「ドクター貴様ぁ！！」

「霊基が向上しているのは、青と黒の騎士王サマの方だ」

「やっぱりか」

「やっぱりか」
次点でアタランテ。魔力が充実しているのはネロくんで、あまり変化がないのがマシゅだよ。

……順当すぎて言葉も出んぞ。

はあ。と、深く溜め息を吐く。びくりと露骨に反応する騎士王達。

俺は、込み上げる様々な激情を飲み干して、そんな場合ではないからと、なんとか怒りを鎮めた。

まず、マシゅを見る。俺に怒気を向けられたことがなかったため、手招きすると、びくびくとしながら立ち上がり、近づいてくる。どうせ、マシゅの柔らかいほっぺを摘まみ、限界まで引っ張って、ぱちんと離した。

ほっぺを赤くし、あふれ、と痛そうにするマシゅの頭に手を置いた。

「今ので許す。次からは俺に断ってから食べなさい。いいな。

マシゅの頭に、容赦なく拳骨を落とした。あいたあっ！？と悲鳴を上げたネロに、悪戯をした子供にするように嘯んで含める語調で告げる。

次いで、ネロを手招く。ほっぺをガードしながら近づいてきたネロに、容赦なく拳骨を落とした。あいたあっ！？と悲鳴を上げたネロに、悪戯をした子供にするように嘯んで含める語調で告げる。
そうか。だがこれからは、悪いことをしたたら誰からでも叱責が飛ぶと知れ。そして、悪いことをしたなら言うことがあるはずだが。

焦っているためか、逆ギレしたように大声で謝り、頭を下げたネ口に、とりあげず溜飲を下ろす。アタランテを見ると、ぎくしりと肩を揺らして、すぐにでも逃げたそうな目をしていた。

『アタランテ』
『はい！』
『うむ。汝がそう言うなら、十秒動かない。それで許してくれ』
『ああ』

頷いて、いきなりアタランテの尻尾を掴む。
びくりと激しく体を揺らし、アタランテが動揺したように何かを言いかけていたが、聞かずに尻尾を摂で回して、獅子の耳にも手を伸ばす。
中々の毛並み、素晴らしいふかふかだ。
十秒後、手を離す。いきなりの暴挙にアタランテは腰砕けになったようで、その場に座り込み、息も絶え絶えに艶めいた息を吐いた。

何を言うんだ。あれを見たら誰でも触りたくなる。仕方ないだろう。
「セクハラです先輩……」
「セクハラで先輩……」
「何を言うんだ。あれを見たら誰でも触りたくなる。仕方ないだろう。」
「……それは、まあ、確かに……」
「……それは、まあ、確かに……」
「そוה、そんな無体な！？」
「そんなっ、そんな無体な！？」
「慈悲を、シロウ、慈悲を！！」
「慈悲を、シロウ、慈悲を！！」
「ええい、ならん！絆り付くな鬱陶しい！！」
「ええい、ならん！絆り付くな鬱陶しい！！」

持ち上げられた足元に絆り付いてくるのは、青黒騎士オーズが足元に絆り付いてくるのをはね除け、俺は裁定を終えた。

そして、待たせる形となってしまった褐色肌の偉丈夫～～神祖ロ
れぬように力を込めて対峙する。俺に、否、カルデアにロムスは告げた。「―対等であるからこそ、私はロマは憚るところなく忠告する。シロウよ。そしてシロウに従うサーヴァンっ！即刻、我が子ロマを置き、ロマの地よより去れ。もはやそなたに勝機はない。一時退却し、態勢を立て直した後、帝都ロマに現れよ。」―そのが言葉に凍りついたのはマシュとロマニだっただ。士郎は、吟味するように対神祖の言葉を反芻する。強張ったネロの顔は、何かを悟ったようでも。騎士王達は纏う空気になびき、緊迫感を露にする。見定めるように、アタランは士郎とネロを見詰めた。「―それはどういう意味だ？」頭ごなしには否定せず、士郎はロムスに訊ねた。感情に何かを否定するほど子供でないし、そきもさきも相手がロムスである。決して、意味のないところは言わぬはずだ。彼はネロを捨てていけと言ってるなら、断じて冗談を言ってる訳がない。「勝機がない、と言ったか。万が一にも？」「そうだ。万が一にも、現状のそなたらに勝ち目はないう。シロウが
彼の光の御子を喚び出した時は、もしかするかもしれぬとは思ったが…

我が子、カエルルによって彼の英傑は封じ込まれた。

「ランサーが？」

小ざく呟く。あのクー・フーリンが、封じ込まれたと？

ロムルスは、讃えるように言った。

だが、我が子カエルルを皇帝の代名詞である。英雄としての格
は決して引けをとるものではない。そして今このカエルルは、あらゆる
意味で純化しているが故に、勝利の為ならあらゆる非道にも手を
染めよう。

まるでローマで起こっていることを全て、把握しているよう
する宝具だという。

曰くレムスを自身の手で誅した逸話。血塗られた愛の城壁に由来
する宝具だという。
を守護するというもの。この城壁が、ロムルスの領域を覆い、透明な結界と化しているのだ。

まず、アタランテがローマに足を踏み入れる時に感じた違和感の正体がこれである。

つまり、ローマ全てが聖杯に取り込まれ暴走する、ロムルスの領域としての側面が強化、拡大されているため、城壁の形を失い文字通りの結界と化し、結界の内側はロムルスの体内に等しくなっているのだ。

士郎とアタランテがローに足を踏み入れた時に感じた違和感の正体がこれである。

つまり、ローマ全てが聖杯に取り込まれ暴走する、ロムルスの領域としての側面が強化、拡大されているため、城壁の形を失い文字通りの結界と化し、結界の内側はロムルスの体内に等しくなっているのだ。

つまり、ローマ全てが聖杯に取り込まれ暴走する、ロムルスの領域としての側面が強化、拡大されているため、城壁の形を失い文字通りの結界と化し、結界の内側はロムルスの体内に等しくなっているのだ。

「既に確かめたであろうが、私の内にある限り遠く離れた者との意疎通是不可能である。光の御子とのやり取りは出来ぬだろう。

一説は、暴走しているよう」と言わば。満身より力は込め、全身を振る絆り聖杯に抗い、辛うじてそのたる向かって暴走下にありながら、正確だっただけを切り離し、士郎らの許に向かったのは計算外だったろう。

一説は、暴走しているよう」と言わば。満身より力は込め、全身を振る絆り聖杯に抗い、辛うじてそのたる向かって暴走下にありながら、正確だっただけを切り離し、士郎らの許に向かったのは計算外だったろう。

「既に確かめたであろうが、私の内にある限り遠く離れた者との意疎通是不可能である。光の御子とのやり取りは出来ぬだろう。

一説は、暴走しているよう」と言わば。満身より力は込め、全身を振る絆り聖杯に抗い、辛うじてそのたる向かって暴走下にありながら、正確だっただけを切り離し、士郎らの許に向かったのは計算外だったろう。
流石に急造の念話装置では無理があったか、と今はネロの首に提げられている懐時計を見る。
確かに以前試したが、クー・フーリンとの連絡は取れていない。
不可能である。空間跳躍による召喚は私といえど見過ごせぬだろう。
私の意思とは関わりなく、聖杯によって令呪の巨大な魔力を聞き、妨害することになる。
空から試し試したが、クー・フーリンとの連絡は取れない。
だが…令呪で召喚すれば、こちらに呼び戻すことは出来はずだ。

……ランサーは今、どうなっている？
「ゲッシュを破らされ、半身が麻痺し、それでも獅子奮迅の働きをだがロームスは言った。それは本来のカエサルならば絶対に取らぬ外道の策である。
以て我がローマを相手に互角以上に戦いを進めていた」

……
「カエサルは聖杯により、属性が反転している。言ったであろう。流石、と口の中で呟く。それでこそだ、と。
「カエサルは王族に、属性が反転しているが大半の者が目下に位置する故、光ヴァガ奴隷の御子は王族に、大半の者が目下に位置する故、わざわざ奴隷の子を使ってゲッシュを破らせる必要はないというのに。なぜ、奴隷の子を用いたか、分かるか？」

……おい。まさか。
左様。カエサルは光の御子の気質が真っ当な英雄のものであると見抜いており、故に密諜、それも子供であれば、ほぼ確実に保護するという信頼は、 SATA ロムルスは、静かに言った。

激怒のあまり立ち上がった。

歯を強く噛み締める。アタランテがぶわりと総身の毛を逆立たせ、

誤解なきように頼む。本来のカエサルならば、決して執らぬ非道の策だ。そして、既に手遅れである。たった今、爆弾は機能し、光の御子の戦車は破壊された。光の御子自身は辛うじて勘づき逃れたようだが、手傷を負い、更にはシャドウサーザヴェントと、十方を超えるローマの子らに包囲され、カエサルも決して掛かった。ここから逆転することは困難であろう。

ふん。

逆転は困難？悔るなよ、ロムルス。奴は最強の槍兵だ。その程度の逆境、跳ね返すに決まっている。

ふむ。確かに、まだ勝敗は解らぬ。恐るべきは光の御子の生存能力であるか。
そしてカヲルが光の御子を実質無力化した以上、聖杯の一部として機能する私が樹の御子に注力することはない。……分かるか？それより先、私は樹の力に最大限に駆使しなおたらの侵攻を阻むことになろう。そなたが蹴散らした一割のローマの津波なら、比較にもならぬ質量だ。仮に一度、二度凌げたとすればそれ以降が続くと思うか？……それは、無理だな。

ここまですり来るので見てきた枝葉の津波が、たったの一割程度……?
それがあれ、残りの九割加算される？確かに何度かは凌げる。聖杯の力は聖杯ごと神祖を打ち倒せるほどのものだ。
だが何度も使えるものではない。波状攻撃を仕掛けられれば、たおちあちの魔力切れとなり、あっさりと呑み込まれるだろう。聖杯のある都ローマに辿り着くことなら出来ない。
彼のある帝都ローマに辿り着くことなら出来ない。

「……それは、無理だな」
「……それか。だが、その魔力の渦を一時、解除する手段があるとすればどうだ？」
「そうか。だが、その魔力の渦を一時、解除する手段があるとすればどうだ？」
なに？

そんな手段があるというのか。思わず反駁した士郎に、「ロムルスはそれを口にする。空気が凍ることを、言った。」

「我が子ネロを差し出せとはそういうことだ。」

瞬のみ、ほんの短時間のみなら、人理焼失を食い止めることが出来よう。役目を果たした聖杯を私が掌握し、ほんの一時のみ猶予を作れるのだ。

彼の言葉に、士郎は沈黙し目を伏せた。

苦しく、痛く、重い沈黙。ネロは意を決したようにロムルスの許に歩み寄ろうとし、咄嗟にアタランテがそれを止めた。
マスター！感わされるな、アタランテ。余にはどうに、他に策があると
は思えぬ。ならば神祖の申し出を受けることこそが、ローマ皇帝と
して、カルデアのマスターとして執るべき方策ではないか？
「そんなことはない！私はマスターを見殺しにはできない！
令呪を以て命じる。余を止めるな、麗しのアタランテよ。
「マスター！！」
絶対命令権を行使され、アタランテの手は離された。
ネロは、士郎達を見る。そして渾身の笑みを浮かべた。
「とまあ…そんな訳で余はこれよりそなたの勝利に賭けるチッ
プとなる。願むぞ、未が無駄死にでなかった証を立ててくれ。余は、
そなたらを友と思う。それと…アタランテを願む、余の大事な臣
下だ。」
「…ふむ。では、それでよい、シロウ。」
ロムルスが、最後の確認のように言った。
「シロウは。」
アタランテが怒号を発するのに耳も貸さず、マシュを。アルトリ
察し、それでこそと笑みを浮かべる少女と、御意のままにと微笑
下だ。
む騎士王。ここぞという時には甘い、と黒い聖剣使いもまた冷た
い美貌に微笑みを浮かべる。
顔を上げ、決然と士郎は呟いた。
顔を差し出せ、だって？
「―ネロを差し出せ、だって？」
驚いたように目を見開くネロを傍らに、ロムルスが破顔して、満
面に笑みを浮かべた。
「それこそだ。まこと―快なり！！」
ロムルスは、神祖は―合理的を蹴飛ばす不屈こそこそ望んでいた。
灯せ、原初の火
「こ—in断る、だとい？」
ネロ・クラウディウスは、恐らくこの生涯で最たる驚愕に貫かれていた。
極限まで詰められた盤面を見せられ、打つ手はないとはっきりと
宮士郎は、その策を採択すると思っていた。その上で打開策を提示され、もはやそれ以外に手はないと思われた。
であれば、短い付き合いだが、合理的な戰術を好むシェロ－－衛
だのに、この男は力強く、はっきりと神祖ロムルスの差し伸べた
手を払った。そして神祖はそれを快なりと受け入れ満面に笑みを浮
かべた。そんなという不合理。万能の天才を自負するが、未だ発展途上の才
覚と器。その選択の由縁が解らず、真意を問い質そうとして－－は
たと。ネロはシェロの瞳を見て、全ての疑問が溶けてしまった。

—美し、蒼穹の空。
男の中、その心象を見た。見てってしまった。故に、己の疑問は無粋であると感じて。何より美しいものを尊ぶネロは、不意に肩から力を抜いて苦笑した。やれやれと嘆息して、それでも気になったから、無粋と知りつつ力で問いかけて、故に己の疑問は無粋であると感じて。何より美しいものを尊ぶネロは、不意に肩から力を抜いて苦笑した。やれやれと嘆息して、それでも気になったから、無粋と知りつつ力で問いかけて、故に己の疑問は無粋であると感じて。何より美しいものを尊ぶネロは、不意に肩から力を抜いて苦笑した。やれやれと嘆息して、それでも気になったから、無粋と知りつつ力で問いかけて、故に己の疑問は無粋であると感じて。何より美しいものを尊ぶネロは、不意に肩から力を抜いて苦笑した。やれやれと嘆息して、それでも気になったから、無粋と知りつつ力で問いかけて、故に己の疑問は無粋であると感じて。何より美しいものを尊ぶネロは、不意に肩から力を抜いて苦笑した。やれやれと嘆息して、それでも気になったから、無粋と知りつつ力で問いかけて、故に己の疑問は無粋であると感じて。何より美しいものを尊ぶネロは、不意に肩から力を抜いて苦笑した。やれやれと嘆息して、それでも気になったから、無粋と知りつつ力で問いかけて、故に己の疑問は無粋であると感じて。何より美しいものを尊ぶネロは、不意に肩から力
そのことを薄々と感じていたからネロは一時して自らの『愛』が通じた存在に、途方もない巨大な歓喜を覚え、心の底から震えてしまったのだ。
これば…誓って言えるが、断じて断じて恋愛感情などではな
い。そのような低俗なものではない。ネロは今、今生のあらゆる友
よりも強い『友情』を、高尚な心のうねりを感じていた。

それは…誓って言えるが、断じて断じて恋愛感情などではな
い。そのような低俗なものではない。ネロは今、今生のあらゆる友
よりも強い『友情』を、高尚な心のうねりを感じていた。
「余は、余こそロー皇帝であり、そしカールである。ネロクール・ウディス、永久なるローのため、この身を人理修復の戦いに投じる覚悟がある！」

「…うむ。愛し子よ。私ローはその目と声を聞きたかっただから、ならすること、ローは世界である。故に、世界は永遠でなくてはならぬ。私ローはそなたに賭けよう。そなたが、魔術王ソロモンの企みを打ち砕くもと信じる」

『ソロモンだっ…!』

意外に出た名に、ロマニの驚愕に染まった反駁が返る。それには答えず、ロムルスはネロの手にあまる隕鉄の赤い剣に手を翳した。

そとのしくない性急さは、もはや一刻の猶予もないとこちらに教えたるる。

だがロムルスの余裕はなからい。雄大な愛と慈しみの眼差しで、ロムルス『皇帝特権』を行使した。
他者は、スキルを与えるその規格外の特権は、真実ＥＸランクの皇帝特権。影の国の女王が持つ魔境の観知が、女王の認めた英雄のみスキルを与えることが出来るのと同じ。ロムルスはネロを英雄と、皇帝と認めたのである。

友よ。すまぬが、私に余分な力はない。既に完成している所の身に、私が与えるものはない。

端から求めていない。ただまあ……また機会があれば頼む。あって困るものではないからね。

ふ……強くあるな。そして、だからこそ託そうとも。ローマの命運を。その々の戦いが世界を永久のものにすると私は固く信じる。

元々が幻だった。奇跡のような邂逅だった。そしてだからこそ必要だ。この戦いの行く先を占う希望の火。

最後に、ロムルスはネロの剣『原初の火』に炎を灯す。それは、炎を、汚し子のローマたる気概を愛し、肯定するだろう。

感謝を偉大なる神祖。誉れ高き建国の王。余は必ずやそなたの待つ帝都に辿り着き、神祖の暴走を食い止めよう。余には願もない友と臣下がいる。彼らは強者だ、必ずや成し遂げる。今度こそ！
ネロの宣誓に、
原初の火の炎は一層、
激しく燃えた。
それを見届けて、
残滓であるロムルスは光の粒子となって消えていった。
霧を濃くする都、その地下深く。
人理焼却の錨が一柱足る男は、本来己の担っていた計画を恙なく
進行していた。

「…？」

聖杯を用い手駒となるサーヴァントを数人も召喚。聖杯によるカ
ウンター召喚によって現れた野良のサーヴァントに対する策を練り
つつも、それに拘泥することはなく、あくまで自身と手駒による直
接戦闘は避け、秘密裏に事を推し進めていた。

野良のサーヴァントは、戦闘に特化している知恵の足りない愚図
か、或いは作家として名を馳せた程度の雑魚でしかない。こちらか
ら下手に戦いを仕掛けない限り、連中はこちらの計画の全貌を知ることもなく特異点ごと焼却されるだろう。

第二特異点に於いて、Mと名乗った男は、自らが担当する第四の特異点でも同様に名乗り、あくまで自らを表す記号を伏せ、人理焼却のため、持っていた能力の全てを費やしていたのだが…。

ふと、彼は自身が立ち去った第二特異点のことが、嫌に気にかかっていることに気づいた。

ふと、彼は自身が立ち去った第二特異点のことに気付く。

何故か、見落としている。その予感。

何か、見落としている。その予感。

男は自らの疑念を捨て置かなかった。元々が勤勉であり、生真面目な学者肌の男である。生じた疑問を捨て置くことを、彼の性格が許さなかったのだ。

男は自らの疑念を捨て置かなかった。元々が勤勉であり、生真面目な学者肌の男である。生じた疑問を捨て置くことを、彼の性格が許さなかったのだ。

カルデアは、何故か、男が従う魔術王について言及し議論を戦わせていたのだ。

カルデアは、何故か、男が従う魔術王について言及し議論を戦わせていたのだ。
聖杯によって暴走しているはずの神祖ルムルスと接触している光景が見えた。

「…侮ったのか。私が、神祖を…」

それは、万事に対して周到に事を進める男には考えられない失態だった。

男はその神祖が、聖杯に取り込まれ暴走している神祖の残滓に過ぎずの一目で看破していた。そして、ただの人間に過ぎなかった帝ネロが、ルムルスにより強化され、一の戦力として確立されたことも見抜いてのけた。だがそれ以上に、今更のように気づく、ネロ・クラウディウスの姿が、はっきりと見えないのだ。

それが、しまよいあの女狩人のマスターは、衛宮士郎ではなく、ネロ・クラウディウスなのか？

「…」

魔神柱に変じ、敢えてリスクを犯して彼らと接触した時。男はネロ・クラウディウスを取るに足りぬ存在と決めつ、全く観察していなかった。新たに増えていたサーヴァントも、衛宮士郎のものだろうと考えていたのだ。それが、誤りだったと？

少し注意すれば、すぐに気づけただろう。男の目は節穴ではない。
カルデアの始末に失敗するに飽きたらず、第二特異点のサーヴァン
油断も、慢心も、遊びもなかった。

なのに何故、男はネロ・クラウディウスの存在が変容しているこ
とに気づけなかったのか。

脳裏に過るのは、人理焼却に抗う愚か者の声。自らに問いかけて
いった不敵な顔。

あり、おい。お前もレフと同じで、人間が変身した奴なのか？

大義でも見い出したのかな？いや人の未来に絶望したアトラスの
錬金術師の可能性もあるか……。

背を向けたか、なかったことにしようとするのは、増上慢も甚だしい、

だからしたら更に度し難い。己の手前勝手な絶望人類全てを

――だとしても更に度し難い。己の手前勝手な絶望人類全てを
不覚だった。あんな、安い挑発に気が昂った己の未熟。あの時、男は衛宮士郎を憎んだ。
その隙を突かれて聖剣に薙ぎ払われたのだ。ネロ・クラウディウスなど眼中にもなかったのが災いしたことになる。男は己の不明を認めた。そしてロムルスがなんらかの手をカルデアに加えた以上、第二特異点が修復される可能性が出てきたことを認めざるを得なかった。
その可能性を計算する。彼らの勝利に至る確率を想定する。
結論は、一％かそこら。到広、絶対的オーダーの組み込まれた聖杯に支配される神祖に勝利できるとは思えない。
マスター化し戦力となったネロ帝と、ロムルスが与えたとおぼし
き火の力。しかし。
巻き込むうとするなど餓鬼にも劣る。ああ、流石にそれはないか。人類を滅ぼそうとするほどの悪党が、そんなちっちゃい輩なわけが
ない。だとすると他に考えられるのは……誰かに唆された道化かな。ああ、流石にそ
れはないか。
人間を滅ぼすようとするほどに劣る。ああ、流石にそれはないか。人類を滅ぼそうとするほどの悪党が、そんなちっちゃい輩なわけが
ない。だとすると他に考えられるのは……誰かに唆された道化かな。
流石にそ
れはないか。
枝葉の渦波は、ネロの持つ隕鉄の剣に灯された火を避け、帝都に向けてひた駆けるカルデアの面々を遮れずにいる。神祖の樹竜が、その火をロムルス——自らの担い手と誤認し、圧倒的質量で押し潰すのを避けているのだろう。

道中の魔猫、黙の戦士。キメラも蹴されていた。破竹の勢いと、故に策を講じるのだ。

言葉に出させず、男は聖杯を使う。干渉するのは第三特異点。第二特異点に対して、男が出来ることはない。末々、あれば男の担当ではなかったのだ。レフがししくえた為に、その Benchmark がこちらにまで来ている。

有能な敵より、無能な味方が厄介だな……。男はひとりごちながら、愚かなサーヴァントの船に召喚されるサーヴァントを弄った。

狂戦士は物の役にも立たぬ無能であると身に染みて思い知った。
ルの手が証明ている。故に、狂戦士は取除く。しかし、かしの大英雄に理性があれば、人理焼却に荷担するとは思えない。「……ふむ。ならば、復讐者としの側面を強化し、在り方を歪めて召喚するばいい」反転ではなく、歪曲。その力業を、聖杯は可能とした。男は更に、頭を捻った。仮に第二特異点を突破しとし得ないが、第三特異点で立ち塞がるサークヴァンを打倒できたとし、確率はゼロに等し。それでも、悉くここちの策を潜り抜けて、男の担当する第四特異点にまで辿り着いてきたならば……。「……衛宮、士郎。侮れる敵では、ない。彼はとすること第四特異点のはぐれサークヴァンを取り込み、こちらの計画を探り当て、この眼前に立つ可能性がコンマ一様に程の確率で考えられた。であれば、だ。僅かでも可能性があるならば、それに対するカウント手段を講じなければならぬ。」顎に手を遣り、思索する。
幾らか順序を前倒しにして、計画を早める。ダメだ。確実性を損なうのは危険。ならば付属する要素を探り、利用するか？それも愚策。詰められた計画に、後から余計な手を加えるべきではない。いや……だが……

……緻密な計画は紡ぎで、単純な力押しに弱い。今の計画では万ぶぶぶと思考を絞く。若い頃の癖が出た。

男の視線の先には聖杯によって写し出された、赤黒い肌の巨漢。頭からネメアの獅子の毛皮を被った、異様な風体の復讐者。更に転じ、進行するカルデアの面々を見て、男は露骨に舌打ちした。無能な味方の失敗のために、こうも頭を悩ませる羽目になるのには腹立たしいことだった。

計画をどうするかは、もう少し煮詰めて考えることがある。今きなりの変更は無理があった。時間がいる。思考するための時間が。それを作るためにも、カル
第二特異点の担当権を、一時とはいえ担ったが故の力業を押し込む方か、現段階では建設的かも知れない。

第二特異点に対して出来るということはない。だが、こちらが召喚したサーファントを、一騎新たに送り込む余地ぐらいはあった。

― レフの置き土産、精々利用させてもらうとはどうするか。男は頭を悩ませ、決断した。

― 一時理性ある戦いに狂戦士は不要。しかし場を引っ掻き回すのには有用だ。

フンヌの戦闘王、男は一切の理性を残さぬ極大の狂化を施した。神の鞭の第二特異点への投入を決定したのだった。

第二特異点の担当権を、一時とはいえ担ったが故の力業を押し込む方が、現段階では建設的かも知れない。
第二節、その心は
何年か前の話だ。借金で首が回らなくなかった遠坂をからかうのが
シングスがある。嫌なシングスだ。

音楽は鉄で、心は硝子
てれとある。

絶倫眼鏡の修羅場を焚き付けて遊んでいたら、逆に修羅場に巻き
込まれて痛い目を見たり。ヤクザな御用とその娘さんの仲を揶揄し、
娘さんが暴走するのを楽しく眺めていたが御用に殺されかけたり。
赤原礼装を謳って賢ったお礼に、好物だと前々から聞かされていた
カレーを振る舞ったら監禁されかけたり。

―とかく俺が調子に乗った時、或いは物事が上手く軌道に乗り
―としか俺が調子に乗った時、或いは物事が上手く軌道に乗り
始めの時に限って、手痛いっぺ返しが必ずあった。
今回もそうなのだろう。順調に事が進み、帝都まで後一日という
所まで迫るや、ロマニが慌てたように通信を入れてきた。
俺はうんざりと溜め息を吐く。また、と。テムズ川に突き落と
されて以来続くこのジンクス。これを遠坂の呪いと名付けても許さ
れると俺は思った。

『敵だ！』　敵だ、ロマニ』　
え？　何を根拠に敵だって言うのさ！？}
え？　何を根拠に敵だって言うのさ！？}
『敵だ、ロマニ』　
相変わらず見晴らしの悪い樹林である。その新たなサーヴァント
の姿は、雑多な枝葉に遮られて影も見えやしない。敵
だが、この全身を強かに打ち据える殺意の波動を受け、これ
は味方だなんて誰が思えるものか。敵
つまり、帝都まで後少しという嫌らしいタイミングでもある。敵
本拠地の間近で都合よく新しい仲間と巡り会うなんて幸運があるのは
まずない。

しかし、断定しながらも疑問が湧いた。何故今
新たな敵戦力の投入……冷静に考えると違和感を呼んだ。何故今
適切なタイミングはどうしてもある。そこで、我々は魔術の効果があるが、戦力の逐次投入は戦術的に下策だ。もっと適切なタイミングは幾らでもあっただろうに、何を考えている。

人理焼却の黒幕、その容疑者が魔術王ロモンと目されている今、あの魔の柱の名前は困った魔柱とされた。しかし、我々の相手はサーヴァントと共に現れていた、不意打ちの聖剣は通じなかった公算が高い。そうなるとこちらは危機的状況に立たされていただろう。そう以外にも、幾らでもこちらを襲撃するタイミングはあった。不意打ちを狙うなら、神祖と酒を酌み交わしていた時など絶好の好機だ。そう思うと、今なんで？帝都まであと少しで迫ったところで、今更何故、今なんだ？

その手を打った者は、根拠的に戦争のための戦術を理解していない節がある。俺の経験上、魔術師などの理論が先立つ学者タイプに似ているような気がした。

まず、この手を打った者は、根本的に戦争のための戦術を理解していない節がある。戦争は得手ではない、しかし頭は回る。典型的な理論派、感覚よりも数値を重じる打ち手。荒事が苦手なので間違いない。それならば神祖と別けてサーヴァントを投入する訳がない。

……筋道を立て、論理的に考える。……戦力を神祖と別けて投入する意図が解らない。

……いや、過小評価は危険か。行動の一つ一つに意味を持たせ、無駄なことはしないと考えた方がいい。

戦力の別けている意味……バッと思い付く魔術師らしい思考の癖を沿

何故、今なんだ？帝都まであと少しで迫ったところで、今更何故、今なんだ？
例を人形を使い魔として用いる、工房に閉じ籠る魔術師が、己の使い魔を同士討ちさせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、例を人形を使い魔として用いる、工房に閉じ籠る魔術師が、己の使い魔を同士討ちさせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちさせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちさせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちさせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちさせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちさせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちさせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちさせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちさせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちさせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちさせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちさせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これを考えた窓の魔術師、己の使い魔を同士討ちせるために打つ手法。これと考え
この手段を持っているのだ。そこで考えて、一歩思考を下げる。

なおの為に神祖と新手のサーヴァントを別けたか。この理由を仮説に仮説を繋ぎ合わせ、違和感の少ないピースをすかすかの仮説に組み込んで、辛うじて見られるパズルを作った。

板面の向こう側。相手の打ち手を止めるため、妨害の一手を打つ。

この ConfigureServices は、こちらを襲撃し少しでも時間を稼ぐ目

少くとも的外れではない。その確信が思考を澄み切らせると分析すると、不思議と。全くの見当外れとは思えなかった。
的を持っている……。いやそんな半端を好む手合いでない。

討るなら討つ、そのための強力な一手だろう。今の俺達にとっては時間は敵なのだ。こちらの居場所を相手に割けていると思われる以上、敵サーヴァントを避けていられる余裕はない。疎躇わずに戦闘に入り、迅速な撃破を望んでいると相手が読んでいるとしたら、正面闘争に強い三騎士か騎兵のサーヴァントを放って来られるとは、正

面相応の格を持つ英霊というのでは、一部例外を除いて世界の存続を望んでいるはずだ。でなければ抜け目のない打ち手のすることは限られる。手駒の反逆を防ぐため、主人に歯向かえるだけの理性を殺す狂化を付与することだ。

厄介なのは、ここまでも全ての推論が的中していたとしても、こちらに打ち返せる手がないことである。相手の目論み通りにしか動けない後手に後手にと回されている感じがした。

こよしを勝負事に於いて、後手に回るばかりで反撃もできないとなれば敗北は必然。何か、相手の意表を突く必要がある。これはと思う妙手は浮かばない。仮説が正解だったと確認できたなら詩は違うだろうが、今はそれどころではない。今は目の前の問題に対処するのに手一杯だ。

「……一日。後、一日で帝都に到達する。そうだなロマニ」
あ、あ、あ。そこの通りだよ。
ロマニに確認すると、戸惑い気味に肯定向けてくる。下手に戦い、損耗を強化するのは面白くない。俺は最も攻撃力に長けたオルタに指示を飛ばした。

「オルタ。聖剣解放」「承っだ」と、オルタは腰を落とし、溜めに黒い聖剣を構えました。それ合わせたわけではながいが呪を起動、スチームを稼働させた。

ロマニがどこか諦めているように思って、いるかと気づいた。

『もし、もしかしもしかしぃる感じかな……?』「さあな。ただ、聖剣の射程圏にサークヴァンを捉えた瞬間、オルタの一撃で消えても貰うけだ。今は悠長に構っていられること、余裕はない」

『そうですか、そうですよ……一日あれば使っただ令呪も回復する、なら使い惜しむ理由はな……』「解っ来てじゃないか」

『へはは……そこの赦のなさが素敵と思って始めたボクはもう駄目かよし、なら未確認のサークヴァン反応の位置を伝えよ。そっちクラは樹林が邪魔で姿が見えないだろらね』「頼む」言っって、オルタの肩に手を置き、耳元に口を寄せて囁いた。
ombreの圏を焼き払えるか？

広範囲を焼き払えるか？

その要望に、オルタはフッと嗤った。

撃破出来ればそれで良し。仮に回避されるなりしても、樹林を一掃し見晴らしを良く出来る。こちらの力を十全に発揮できるフィードを一手で整えられる上手い手です、シロウ。

オルタの小声の賛辞を、端的に切って捨てた。

「おべっかを言っても断食は取り止めないからな」

「……チッ」

「オルタ？貴女、今私を出し抜こうとしませんでした？」

アルトリアの問いかけにオルタは答えず。ロマニのカウントダウンが始まった。

宝具解放。セイバーのサーベント、アルトリア・オルタを指定。

三秒。三秒。三秒。二秒。一秒。
聖剣の間合いにあるモノ全てを、「一秒」薙ぎ払え。

黒い極光、暴竜の息吹が解き放たれる。

地獄の淵より鍔首をもたげる竜の首、鬱蒼と生い茂る木々を塵芥とする死の吐息。星の光を束ねた究極の斬撃は、確実に一帯を更地と化させた。

俺は、それを見て、目を細める。

星の聖剣を上回るのは、原初の王が持つ乖離剣のみ。星造りの権士王よりも上回る規模のそれ。

「ならそれを相殺したあればなんだ？英雄王の乖離剣なのか？」

「一……エクスカリバーは聖剣のカテゴリーの頂点に位置する最強の対城道具だったはずだ？」

「……おーい、俺は、それを見て、目を細める。返るのは、不快げに姿勢を戻した黒い騎士王の答え。」

「……約束された勝利の剣！～」

黒い極光、暴竜の息吹が解き放たれる。

地獄の淵より鍔首をもたげる竜の首、鬱蒼と生い茂る木々を塵芥とする死の吐息。星の光を束ねた究極の斬撃は、確実に一帯を更地と化させた。

「……おーい、俺は、それを見て、目を細める。返るのは、不快げに姿勢を戻した黒い騎士王の答え。」
能を宿す絶対の一だけのはずだった。

拓げた地形、照り輝く日輪を背に。
真紅の原色の剣、しのぶ鞭の如き斬撃を為したのは何者なのか。

オルタは断言した。

私が万全ならば、あの忌々しい金色の王以外に、聖剣を相殺するような無様は晒しません。

オルタは断言した。

「…あのだね。士郎くんは、初期レベのパーティーを率いてここまでのステージをクリアしてきたようなものなんだ。うん、つまりそこそこ火力が足りなくなって来たんじゃなかったんだ。
靈基再臨のための時間が取られなかったんだ。
うん、ぶっちゃけ初期レベ縛りでそこまでいった士郎くんは異常だと言いたい。オカシイのは騎士王サマ方の火力とクー・フーリンもだけど。…でも、それもここまでみたい。どうするんだ、」
どうするもこうするもあるが、と吐き捨てる。
悠然とこちらに近づいてくる。褐色の肌の女。白いローブ、短い白髪、肌に走る白い線。
無機的な、破滅的な虚無の眼差しで、狂気の欠片もなく狂った狂気の塊。
観測される霊基の規模はこちらのサーヴァント全員を束ねたものよりも強大だった。
圧倒的なまでの威圧感。魔力の波動。三つの原色を連ねた鞭のよ
い劍。うな劍。疑いの余地なく大英雄の風格だった。冬木の聖杯戦争に参戦して
いても、なんら遜色のない傑物である。
それを前に、俺は覚悟を決めて、黒弓を取って投影道具を装填し
た。
「…斯くなる上は、正面から打ち破るのみ！」「
第3節、不破不敗

幾度の戦場を越えて不敗

たただの一度の敗走はなく

たただの一度の勝利も無かっ

たただの彼は、『赤原猟犬』を打って士郎の前に出たのとは、『天穹の弓』を構えた純潔の女狩人だった。

先制射撃を放つ腹積もったのに、出鼻を挫かれる形とった士郎は、む、と物問いげに狩人――アタラテのマスターであるネロを横目に見た。

ネロが苦笑した。

ここの一つ、アタラテに任せてよと。

やはり一番手は麗しの狩人にこそ相応しい。
遠距離から一方的に射撃を加え、打倒する。それが出不来ずとも、
敵サーヴァントの手札を切られたら白兵戦でも有利になる。弾
幕を張るのは間違いの選択ではないが、士郎もそのネロの案に乗るこ
と共にした。マシュ、狩りの基本だ。敵の動きをよく見ておけ。「一芯のある
返事を横に、アタランテは限界まで弦を引き、「天穹の弓」の力に
よってAランクを超える物理攻撃力を宿した矢で、宝具の真名
解放を実行。
「北斗の七矢」。天上に向けて放たれた矢は、地に落ちぬ北の
星座「大熊座の七つ星」に転する。アタランテの矢は流れる七星と
化し、アタランテ渾身の一矢による超高速七連射を解き放つ。
音速で飛来する石柱をも貫通する矢が、ほぼ一瞬の内に標的を襲
う。頭上より飛び来する七連矢。その精度はアタランテの技量に揃
い、必中のそれと言ってもいい。
カミュドの猪の皮膚をも破り血を流させ、北欧の竜殺しの鎧を
も貫通してのけた矢が、ほぼ同時に頭上から連続して襲い掛かって
くるのだ。並大抵の英霊なら七撃の矢で七度殺してのけるだろ。
手を取られるというあべこべな展開に巻き込まれた事から、
己の力量にのみ拠った応手では封じ込まれると予感した。
女戦士は大火力による力業での強行突破を敢行。その唇が微かに
真名を唸いたのを、鷹の目を持つ士郎は読唇術により読み取った。

『－軍神の剣－』
それは『神の懲罰』たる三色の光の剣。マルスの贈り物と喜んだ。
五世紀に大陸を席巻した大王の宝。剣であるにも関わらず、剣製に特化した士郎の解析を阻む某かの
力の正体を、真名を知ることができ士郎は察した。あれは剣というより、
異能のそれなのだ。剣が宝具なのではない、あの『戦闘王アッティ・ラ・ザ・フン』が握ったものが宝具となるのだ。
故に士郎に投影はできない。したとしても、なんの変哲もない長
三色の光の帯が、しなる鞭の如く振るわれ、七本の矢を薙ぎ払う。
己の対人宝具がさらなる破壊の対軍宝具によって粉碎されたのだ。
英雄ながら、己の矜持とも言える宝具を破られたら怒りに震えるだろう。
だが彼女は狩人。肌で感じる霊基の差から、何を見ても驚くよ
うな拙さを見せしない。
宝具の解放直後の硬直を狙い、淡々と引き絞っていた矢を放つ。
流星の如く虚空を駆けた矢は、女戦士の右肩を見事に射抜いた。

流石だな、とネロは満足げに頷く。だがアタランテの顔は晴れな
かた。戦闘王は右肩に突き立った矢を一本なら貫通させるつ
もで放った矢を、こともなげに剣の柄頭でへし折り、まるで痛み
を覚えた様子もなくこちらを見据えた。
その傷口が、見る見る内に塞がっていく。有り余る魔力供給の恩
恵かその治癒能力は常転を逸していた。アタランテは言う。殺すな
ら一撃だ、と。心臓か、頭か。どちらかを吹き飛ばせば止まる
まいかし彼のチームは戸惑わない。彼の異能は、ここに辿り着くまでに
話してあった。
士郎は冷徹な声音で言う。近づかれたから厄介だ、もう少し手の内
度は顔を明るくしたネロも気を引き締める。士郎が言った。あ
れは戦闘王アッティラだ、と。真名の看破が異様に早いことに、し
かし彼のチームは戸惑わない。彼の異能は、ここに辿り着くまでに
話してあった。
士郎は冷徹な声音で言う。近づかれたから厄介だ、もう少し手の内
度は顔を明るくしたネロも気を引き締める。士郎が言った。あ
れは戦闘王アッティラだ、と。真名の看破が異様に早いことに、し
かし彼のチームは戸惑わない。彼の異能は、ここに辿り着くまでに
話してあった。
士郎は冷徹な声音で言う。近づかれたから厄介だ、もう少し手の内
度は顔を明るくしたネロも気を引き締める。士郎が言った。あ
れは戦闘王アッティラだ、と。真名の看破が異様に早いことに、し
かし彼のチームは戸惑わない。彼の異能は、ここに辿り着くまでに
話してあった。
士郎は冷徹な声音で言う。近づかれたから厄介だ、もう少し手の内
度は顔を明るくしたネロも気を引き締める。士郎が言った。あ
れは戦闘王アッティラだ、と。真名の看破が異様に早いことに、し
かし彼のチームは戸惑わない。彼の異能は、ここに辿り着くまでに
話してあった。
その問いに、アタランテは首肯した。汝の手並み、観届けよ。

暫らくは任せるがいい。
皇帝特権により軍略スキルを獲得したネロが指示をする。宝具『訴ピボス・カタロフェ状の矢文』で足止めせよ！

士郎は手を後ろに回し、矢筒に差していた螺旋剣を抜き取る。

射手がアタランテ人となっていた十秒の間に、しかし戦闘王アッテリアは間合いを詰めるのに手こずっていた。尋常でない弾幕、狙いは粗いが規格は対軍のそれに。掴ききるには足を止め、確実に被弾を避ける必要があった。

アタランテの『訴状の矢文』が尽きるのに、九秒の時を要した。
その内に士郎は剣弾を滑らかに装填。片膝をついて射出体勢を取り、いざ疾走し一気に距離を詰めようとしていたアッテリアに照準して、空間を引き裂く螺旋の剣弾を射ち放った。

真名解放『偽・螺旋剣』

射手法がアタランテにとなっていた十秒をかけてたっぷりと魔力を充填、臨界に達した剣弾を黒弓につがえ形質を変化させて矢として放つ。

若頭特権により軍略スキルを獲得したネロが指示をする。宝具『訴状の矢文』で足止めせよ！

士郎は手を後ろに回し、矢筒に差していた螺旋剣を抜き取る。

十秒をかければたっぷりと魔力を充填し、臨界に達した剣弾を黒弓につがえ形質を変化させて矢として放つ。

真名解放『偽・螺旋剣』

状況の矢文で足止めせよ！

射手法がアタランテにとなっていた十秒をかけてたっぷりと魔力を充填、臨界に達した剣弾を黒弓につがえ形質を変化させて矢として放つ。

真名解放『偽・螺旋剣』

射手法がアタランテにとなっていた十秒をかけてたっぷりと魔力を充填し、臨界に達した剣弾を黒弓につがえ形質を変化させて矢として放つ。

真名解放『偽・螺旋剣』

射手法がアタランテにとなっていた十秒をかけてたっぷりと魔力を充填し、臨界に達した剣弾を黒弓につがえ形質を変化させて矢として放つ。
恐るべきは、宝具を連発してなお哀えた様子のない戦闘王の猛威。

後先を考えない暴走だ。この戦いにアッティラ本人の体が軋んでいた。

士郎の読みは正鵠を射ていた。アッティラは己が滅びるのも厭わず戦いに没頭している。

二射と言ったがもうデータはこの一射で充分だった。士郎は前言を撤回すると告げ、ネロを見た。指揮を任せる、ここまで観察して行って活路は見い出せたはずだ。ネロは頷き、火に包まれた剣を掲げて高らかに詠た。

余のアタランテよ、機動力を活かして矢を射掛けて続けよ！アルトリアとオルタは余に続け！シェロは援護を頼む！

何！？と驚愕する士郎を置き、騎士王達を率いてネロは自ら戦闘に向け突撃した。

余のアタランテよ、機動力を活かして矢を射掛けて続けよ！アルトリアとオルタは余に続け！シェロは援護を頼む！

何！？と驚愕する士郎を置き、騎士王達を率いてネロは自ら戦闘に向け突撃した。
いはない。士郎は大声で叫んだ。ネロ、信じろぞ！カルデア第二のマスターは不敵に微笑んで応じた。余に任せよ、最高の戦果を得て魅せる！

一番に斬りかかったネロは、果たしてアッティラの一撃で手が痺れて体勢を崩し、勝ちそうになったがアルトリアがさせと割り込み。振り下ろされた軍神の剣を聖剣が受け止め、アルトリアが苦悶に顔を歪ませて足が地面に陥没していった。

背後からオルタが迫る。見ているようにアッティラは対処し、アルトリアとオルタを弾き飛ばした。あれは技量の差というより、霊基の差による出力の違い。紙のよ上空を舞わされながらも、青と黒の騎士王は魔力放出によって空中で体勢を制御し、魔力をジェット噴射して猛然とアッティラに挑んでいった。

霊基の差、そんなものは怯む理由にならない。ネロが、カルデアのサーヴァントはそれに抗の手一杯で、主にネロの守護に重きを置きな定打となる一撃を貫きそうになる場面が幾つもあった。その度に、彼女の周囲を旋回するように駆け回るアタランテの矢と、巧みに戦局を回す士郎の剣弾が危機を救った。アタランテ、士郎、どちらかの援護が欠けていたら、たちまちの内に誰かが斬り伏せられ、ドミノ倒しのように全員が戦闘王の前に膝を屈していただろう。ネロが何かを見計らうようにアルトリアとオルタ、マシュの立ち位置を調整した。
するように立ち回り、それを悟られぬように猛攻を仕掛ける。だと、アッテリアは悉くを凌ぎ、腕に走る星の紋章に魔力を注いで、逆に強烈な竜の尾のような一閃でネロ達を吹き飛ばした。その目が、士郎を睨む。

アッテリアは悉くを凌ぎ、腕に走る星の紋章に魔力を注いで、逆に強烈な竜の尾のような一閃でネロ達を吹き飛ばした。その目が、士郎を睨む。

アッテリアは悉くを凌ぎ、腕に走る星の紋章に魔力を注いで、逆に強烈な竜の尾のような一閃でネロ達を吹き飛ばした。その目が、士郎を睨む。

アッテリアは悉くを凌ぎ、腕に走る星の紋章に魔力を注いで、逆に強烈な竜の尾のような一閃でネロ達を吹き飛ばした。その目が、士郎を睨む。

アッテリアは悉くを凌ぎ、腕に走る星の紋章に魔力を注いで、逆に強烈な竜の尾のような一閃でネロ達を吹き飛ばした。その目が、士郎を睨む。

アッテリアは悉くを凌ぎ、腕に走る星の紋章に魔力を注いで、逆に強烈な竜の尾のような一閃でネロ達を吹き飛ばした。その目が、士郎を睨む。

アッテリアは悉くを凌ぎ、腕に走る星の紋章に魔力を注いで、逆に強烈な竜の尾のような一閃でネロ達を吹き飛ばした。その目が、士郎を睨む。

アッテリアは悉くを凌ぎ、腕に走る星の紋章に魔力を注いで、逆に強烈な竜の尾のような一閃でネロ達を吹き飛ばした。その目が、士郎を睨む。

アッテリアを
抑える黒い聖剣の反対側から、アルトリアが聖剣を解放。黄金の極光に助けられ、アッテリアは、アルトリアの聖剣の先に士郎がいることから、仮想道具を疑似展開。十字架の尖端の前に張られた淡い光の結界は、アルトリアと士郎の間で展開され。「令呪全部使ってしまったんだが。ネロ、どうするんだ」戦闘王の打倒。士郎は一息吐きながら、悩ましがって呟いた。「いや……一画は補充されるし……俺もこれが最善の結果だったと思う。うう、うむ。しかしこれが最善だと余は思ったのだが……駄目だったか？」「えっ、もう。使い分けが最善だと余は思ったのが……駄目だったか？」
やられました。

令呪を使伊拉克させられましたので。

まんま一杯食わされ事実に、先の戦いより厳しくたことを悟らせを得なかった。
第四節、剣の鍛錬

担い手はここに一人、剣の丘にて鉄を錬つ

戦闘王アッティラ討伐後、一日が経った。

スチームによる令咒は補充され、俺は一画、ネロは三画の令咒を保有した状態に回復した。

ネロから俺に令咒を移せばいいのだが、生憎とそんな真似が出来るほど俺は器用ではなない―というよりそんな真似が出来るほどの魔術師でない―し、生き残ったカルデアの職員たちは繊細で複雑な、既に完成しているスチームを弄る事は出来なかった。'

故にどうしようもない。

そのまま先へ赴くしかなかった。
そうして帝都ローマに辿り着いた一行が目にしたのは、文字通り天を衝くほどに巨大な巨木で、城壁を押し潰す、一つの都市ほどの半径を持つ幹。

そして雲が上まで届いている天蓋の如き樹冠。陽は遮られ、闇に包まれた帝都の有り様は、もはや筆舌に尽くせぬ魔境のそれであった。

「―信じられない……こんなものが、有り得ないのか。まるで北欧神話のユグドラシルみたいだ。とロマニは呆然として呟いた。」

「―信じられない……こんなものが、有り得ないのか。どうするか。どうしたものか。俺はその世界樹のような樹橋の偉容に気圧されながらも、手を付けて、どうするか。どうしたものか。」

言い得て妙だ、と俺は思う。ネロは絶句し、自らの都の変わり果てた姿に色をなくしていた。

俺はその世界樹のような樹橋の偉容に気圧されながらも、手を付けて、どうするか。どうしたものか。言い得て妙だ、と俺は思う。ネロは絶句し、自らの都の変わり果てた姿に色をなくしていた。

唯一自由になる頭を働かせることしか出来なかったのだ。

―まず聖杯を回収するためにローマ建国の王、ロムルスを討たねばならない。そのために帝都で待つ彼の神祖の眼前まで行かなければならない。
す向ってる程具らずにね…

疲馬一けそ時聖な手つつ距の聖呆し俵入ごっれこ鹿かても間ばいい。

エ剣然い足エスカリバーでも、この巨大な樹木を斬り倒すには純粋に射程距離が足りない。精々幹の半分に届くかどうかだろう。

つまり、完全に斬り倒すには二回、聖剣を振るう必要がある。俺の手には三画の令呪のみ。聖剣に全振りして斬り倒すには一画足りない。明日まで待っても斬り倒すことしか出来ず、帝都の中にいる聖杯に取り込まれたロムルスを聖剣なりで倒さねばならなくなっ

てしまう。

では令呪が三画回復するまで待つか？そもそも、仮にこの巨大樹を斬り倒したとしても、それがこちらに向けた倒れてしまったらどうする？俺は時間切れで人理修復は不可能になる。

一か八か、聖剣で切りつけた場所に聖杯があることに賭けるか？それも却下だ。明後日に向けて倒れてきたらどうする？ベンチャーキになってしまいそうだ。

馬鹿馬鹿しい、そんな確実じゃない手段に訴えるなんて愚か者のすることだ。
みを揉みながら、俺は頭を振った。
どうするかなと巨大樹を見上げながら、ぼんやりと空を埋める枝葉を眺める。時の流れは緩やかだが、かといった決して心が安らぐようなものでもなかった。

き足立ちそうになるのも無理はないのかもしれない。だが今の俺はチームリーダーなのだ。弱音を溢すのも、癇癪を起こすのも無し。

ふう、と鉛色の吐息に全てを乗せて吐き出し、気持ちをリセットした。眼を開き、仲間を見渡す。

で、どうする。残念ながら俺に策はない。さすがにこんなもの、想定してなかった。

…わたしもです。ですが先輩、こんなに大きな樹が帝都を呑み込んできていたのに、帝都を間近にするまで誰一人気づかなかったなんておかしくありませんか？

…視覚障害か、空間隔離か。帝都一帯がローマの国土を囲む結界道具とは別たれ、異界が異なったものになっているのかも。

腕の立つ魔術師の工房にはありがちな仕組みだ。
異界と異界を結合させ、それぞれを別空間とすることがさらにある。まあ、ここちの・・・ネロさんが神祖ロムルスに授けられた『ローマの火』があれ、マシュの疑問に答えつつ、他に気づいたことはあるか、と問う。
ば、あれの中に入れることはないでしょうか。

「ってどうする？あの中が空洞でいうなら話は別だが、そうではないなら帝都に入ったらそこでネロ以外が押し潰されて終わりだ」

「えっと…すみません。何も思い付かないです」

「それは俺もだ。気に病むな、マシュ。」

眼を細め問い質すと、アルトリアはハッキリと頷いた。

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞かせてくれ」

「私の聖剣である巨大樹を斬りつける。これしかありません」

「………「うっおっ、つだけ案があります」

「聞くな」
これは賭けだ、オルタ。私達全員の……いや人類の命運を賭けた。

一方「八か八か、ファン。話にならんな。アクションがなければ無駄手間に終わり、仮にアクションがあったとしても、それがあの樹木をこちらに倒し私たちを押しつけたならどうだろう。聖剣なくしてあの質量を斬ぎ払うことは出来んだろう。

そうだ。アクションがなければ論外。あったとしてもそれがこの力業に訴えられたなら、それは絶対に終わる。アクションがなければ無駄手間に終わる。それだけは回避したければ……。

それでもアクトリオンがあり、それが俺達にとっては致命的なものでなく、且つ対処可能なものである確率に賭けるでしょう。

はい。私はそれしかないと考えます。聖杯を取り込まれた神祖に残っていたとしても、彼が私達に利するように動くことに、私達の全てを賭けるべきだと思います。

ネロを見ると、帝都の有り様を眼にしての驚愕は抜け切り、ネロは俺を見て首肯した。

ネロを見て首肯した。
確実だげの運命などあるものか
乗りと二人して言うのか
乗れと二人して言うのか

強く頼る騎士王と、ローマ皇帝。
オルタは否定的なスタンスを崩さない。マシュも、どちらかと言う
えれば否定したがっている。

アタランテは、マスターのネロに従う構えだ。
胸中にて問い掛け、俺は決断した。
その一言で、俺の意図を察したのだろう。アルトリアが風王結界
の掟を解き、黄金の剣を解放して大上段に聖剣を振りかぶった。

アタランテは、マスターのネロに従う構えだ。
胸中にて問い掛け、俺は決断した。
その一言で、俺の意図を察したのだろう。アルトリアが風王結界
の掟を解き、黄金の剣を解放して大上段に聖剣を振りかぶった。

感謝を、シロウ。この一刀にて託しましょう。約束された。

にちぶく、星の輝きを束ねる光の剣が、遥か地上より天高く聳える
それに、星の輝きを束ねる光の剣が、遥か地上より天高く聳える

令呪起動。システム作動。サーヴァント・セイバー、真名アルト
リア・ペンドラゴンを指定。宝具解放し、任意の対象を切り裂け。
ロー
マ
を
照
ら
す。
「
―
―
勝
カ
リ
バー
利
の
剣
!
!
」
振
り
下
ろ
さ
れ
た
星
の
聖
剣。
縦
に
斬
り
込
ま
れ
た
巨
大
樹
は、
確
か
に
そ
の
半
身
を
半
ば
ま
で
そ
の
傷
を
届
か
せ
た。
果
た
て。
巨
大
樹
は
胎
動
し、
大
地
を
激
し
く
揺
ら
し
な
が
ら、
そ
の
幹
を
縦
に
割
り
下
ろ
く
り
と、
そ
の
質
量
を
俺
達
の
い
る
方
に
倒
れ
込
ま
せ
て
き
た
の
だ
っ
た。
「
―
―
―
―
」

。
偽伝、無限の剣製
（前）

ソラが、落ちてきた。

聖剣の光に照らされ、傾いだ北欧神話の世界樹の如き樹槍。その偉容はローマの歴史その物の質量に比し、たった数騎の英霊など容易く押し潰し、易く押し潰してしまうだろう。

聖剣の一振りで消し飛ばすには巨大すぎる。楡で受け止めるには重すぎる。人智で計るには荷が勝ちすぎた。

一瞬、諦念が脳裏を過る。ここまでか、と体から力が抜けた。

聖剣の一振りで消し飛ばすには易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押し潰し、易く押
具の長期展開を余儀なくされるだろう。仮に実行した場合、魔力が尽きるまでの間、死期が遠ざかるだけ。時間を使い果す作戦で一体何が成せるというのだ。今より消耗した状態で一体何が成せるというのだ。ではアルトリア、或いはオルタによる聖剣抜刀はどうか。かくこえも却下である。マッシュの楯すら満足に発動出来るかどうか定かでる。

俺と。
俺の神経を逆撫でにする。逆上にも似た怒りが俺を発奮させた。

三十路手前のいい年でしたおっさんだが、ガキに縋るようにになったらお仕舞いだ。

俺の神経を逆撫でにする手なんて、選べるか。

俺は男の子の特権だ。だが苦境の強がりはおっさんの義務である。

剣製に特化した魔術回路が唸りをあげ、鋼の剣が内部から総身を突き刺していく。痛くないよと痛がって、表情の上に鉄を置く。微塵も顔色を変えないうこっちは意地だった。

 услугиを見た。無理矢理に聖剣を解放しようとしている。己の存在を維持する魔力を聖剣に充て、充填させていく。責任を取るつもりなのか、この事態を招いた事を責任と捉えているのか。

俺は、待て、と断固として言った。ハッとして俺を見る碧い瞳、琥珀色の眼。信じ難い物を見たというような顔は、属性が正反対であっても同一人物である事を納得させた。

立ったまま顔を伏せ、内側から突き出てきた剣山に貫かれ無惨な肉塊化した左腕をぷらんと落とす。眼を閉じ右手で祈るように拳を作った。
「—略—」

「—略—」

「—略—」
偽りの体は、偽物の人生が、俺のものなのだとの謳う厚顔無恥。

恥知らずの我が身。省みぬ罪禍。

所詮は空想、幻想に至らぬ夢のカケラ。

己のためではなく、せめて誰かのために刃を振るう事は、赦してほしい。そう願う。

詠唱は完成する。偽物だと自嘲した口で、情けない本音が疎ざる

それでも、と。これしか自分にはないのだから。

それがと自嘲した口で、情けない本音が疎ざる

己のためではなく。せめて誰かのために刃を振るう事は、赦して

それに駆け続ける。だって、どう足掻いたところで。魂が偽物でも、この体はきっと

偽物の尊さを語る術はない。偽物の偽者だ。何と言っても白々し

何を知っても空々しい。この身に赦されたのは、仮初めのもの。

伪物の伪者だ。何を言っても白々し

伪物だと自嘲した口で、情けない本音が疎ざる

所詮は空想、幻想に至らぬ夢のカケラ。

己のためではなく。せめて誰かのために刃を振るう事は、赦して

それでも、と。これしか自分にはないのだから。

認める者はいない。俺の秘密を知る者もいない。だがそれでいい。

誰も知らない。俺が偽物のエミヤだと、知らなくていい。みんな

俺を本物だと信じる。なら、俺は偽物でも、本物として恥知

偽りの体は、偽物の人生が、俺のものなのだとの謳う厚顔無恥。
名が世界に熔け、崩落する国がソラより落ち、大地にあるも

鉄を鍛つ火が駆けて、人理の守護者らを取り込んだ。

固有結界

曰く、固有結界とは悪魔が持つ『異界常識』だった。それを人間

にも使用可能な範囲に落とし込み、魔術として確立したのが魔法に

最も近い魔術。魔術世界の禁呪である。

それは術者の心象風景で現実の世界を塗り潰し、内部の世界その

の一つとされるもの。本来衛宮士郎のような未熟な魔術使いに至れ

る境地ではない、叡知の結晶だ。

この体は固有結界にのみ特化した魔術回路。この回路を通じて行

使される魔術は、悉くがリアリティ・マーブルの副産物に過ぎない。

剣製が出来るのではない。剣製しか出来ないのだ。魂ではなく、

肉体に埋め込まれた聖剣の鞘に、起源を剣に変えられて。故に固有

結界の現す異能は剣製の枠組みから外れ得ない。
衛宮士郎は、例えどう在っても、剣製に特化した魔術使いでしか
ないのだ。

「これは…………」

「晴れ渡る蒼穹のソラ。

……晴れ渡る蒼穹のソラ。

果てなく広がる無尽の青空を、赤い土に突き立つ無限の剣が支
えている。

雲一つない晴れ模様が懸りなく心象を示す。

影一つ生まない日輪の歯車が遅めなく廻る。

無限に精製される剣群、絶え間なく流れる清流の涼風。

なんて恥ずかしい具現なのか。偽物は己に恥じるものなどないと信じている
のだ。

完壁に滑稽。まさに道化だ。だが、弁えよ。道化の所業である、
扱う用途によっては価値もある。急速に溶けゆく魔力に耐えきっ
かけたのを、俺は歯を噛み締めて堪えた。

流石に馬鹿にならない魔力消費量だ。人理が焼却されている故に、
世界の修正力もほんの前になっていた心の衝撃をシェイクされている様な激甚な痛みを覚え眩暈
がする。

それでも、マシュに無理をさせようやるほどのマシだった。アルトリア
とオルタをこの局面で落とすよりずっと良かった。友と呼んだネロ
に縛るよりもこれが最善だったと言いつけるだろう。
この反応は、……固有結界か……！？まさか士郎くん、きみがこ
とても次の出撃は、予測がつかないのです。流路から……？

俺、元々限界寸前だったんだ。無理矢理魔力を捻り出したせいで左腕
が近った。完治させるのに一週間かかると言って。どう足掻い
た所でもこの特異点では使い物にならない。張り詰めたものを感じ
ど、我慢してくれよ！と言って電力を回してくれた。 ($.マテ
る、カルデアの電力を廻してくれ。そう長くは保たんぞ……！！)

俺にカルデアの電力を廻してくれ。そう長くは保たんぞ……！！
この反応は、……固有結界か……！？まさか士郎くん、きみがこ
とても次の出撃は、予測がつかないのです。流路から……？

俺、元々限界寸前だったんだ。無理矢理魔力を捻り出したせいで左腕
が近った。完治させるのに一週間かかると言って。どう足掻い
た所でもこの特異点では使い物にならない。張り詰めたものを感じ
ど、我慢してくれよ！と言って電力を回してくれた。 ($.マテ
る、カルデアの電力を廻してくれ。そう長くは保たんぞ……！！)

俺にカルデアの電力を廻してくれ。そう長くは保たんぞ……！！

こんな状態で、魔力を発揮することは不可能だ。今、俺の魔力
を使わないと、呪文を成し功さないだろう。少なくとも、俺
はアロニアに向かっているのだから、魔力を使わなければ、
これでは何の為に、戦闘に向いているのだろう。あくまでも、
単に魔力を、戦闘に使えるだけに限っているのである。

だから、アロニアに、魔力を駆動させるのは、あまり新しい
話ではない。少なくとも、俺は、魔力を駆動させるために
は、アロニアへ向かっているのだから、魔力を駆動させるのは、
あまり新しい話ではない。少なくとも、俺は、魔力を駆動させるために
は、アロニアへ向かっているのだから、魔力を駆動させるのは、
あまり新しい話ではない。少なくとも、俺は、魔力を駆動させるために
は、アロニアへ向かっているのだから、魔力を駆動させるのは、
あまり新しい話ではない。少なくとも、俺は、魔力を駆動させるために
は、アロニアへ向かっているのだから、魔力を駆動させるのは、
あまり新しい話ではない。少なくとも、俺は、魔力を駆動させるために
は、アロニアへ向かっているのだから、魔力を駆動させるのは、
得囲はたしし今象…ドもし固なをる動一異と潰無のさは象ターれくほ有る警世の何不の不タ、シのェど、断要タ、シ雑、ュにをなすがの何だ、二はターれた有い弓にをる陣に、言衛た。開結時は弓の開か」

「むみたけりくさきこばうたてる。」「はんげぞれのみつつしろに、がぼしむかしろに、をりげものに、ろかしろに、れべる。」「れはだ、るかしろに、ぎぼしむかしろに、ろかしろに、れべる。」「れはだ、るかしろに、ぎぼしむかしろに、ろかしろに、れべる。」

「めっすくにら、けんがしろに、にりげものに、ろかしろに、れべる。」「ねのはる、けんがしろに、にりげものに、ろかしろに、れべる。」

「むみたけりくさきこばうたてる。」「はんげぞれのみつつしろに、がぼしむかしろに、ろかしろに、れべる。」「れはだ、るかしろに、ぎぼしむかしろに、ろかしろに、れべる。」「れはだ、るかしろに、ぎぼしむかしろに、ろかしろに、れべる。」
マシュが訊ねる。ロマニは強い緊迫感を帯びた目をマシュに向けた。「すぐ側まで倒れ込んできたという巨大な樹木だよ。丁度、巨大な樹木の中腹辺りのね。」「まるで、もしかしたら、深林の辺りに入り込んだチームを警戒し出してしまった異物の感知など、赤子の手を撫でるようにも容易い。警報と共に、赤い土が盛り上がる。」警告と共に、赤い土が盛り上がる。」「巨大な魔力反応、活火山の噴火の如き勢力で大地を蹴散らして飛び出てきたのは、濁流のような粘性のそれは、ぬちまわりと周囲に撒き散らされ、触手じみてうねる樹木が鎧のようにソラを刺した。」「……！」「……！」「……！」「……！」「巨大な結界内の魔力反応急激に増大！来そマシュ、士郎くん！」「——固有結界内の魔力反応急激に増大！来そマシュ、士郎くん！」「……あっ、」「まるで、もしかしたら、深林の辺りに入り込んだチームを警戒し出してしまった異物の感知など、赤子の手を撫でるようにも容易い。警報と共に、赤い土が盛り上がる。」「巨大な魔力反応、活火山の噴火の如き勢力で大地を蹴散らして飛び出てきたのは、濁流のような粘性のそれは、ぬちまわりと周囲に撒き散らされ、触手じみてうねる樹木が鎧のようにソラを刺した。」
帝都を埋め尽くしていた、異様な偉容を誇った樹木、その中枢にあったと思われる、恐らくは樹槍の本体。即ち―

『！気を付けるんだみな、それからは聖杯の反応がする！間違い、それはローマ建国の―』

魔神霊、頼現

夥しまでの眼、眼、眼。さながら魔神柱の如く、魔力の塊である樹木の表面を深紅の眼球が埋め尽くしていた。うねる触手の樹面を掻き分けるようにして、膨大な魔力熱量に焼け爛れた、天性の肉体が進み出たる魔神の悪意。聖杯の力で、英霊ロムルスを汚染する特異点に投錨されたもの。

「あ、あ、あお、おなたの事だ……」

魔神霊、顕現
『睨ロのすは、大沸ヘ見に祖もルキか。』

「代絵、譲り Vogue」
せ、ヘドロの槍を振りかざす。
赤土が隆起した。魔神を基点に巨大樹の根が幹が津波となって襲
い来る。
この特異点ではすっかり見慣れた光景だ。マシュが飛び散る木片
から後衛と俺を庇うように立つ。その様は、まさに城壁の如き楯
「敵性個体、戦闘態勢に入りました！来ます！」「ああ、完膚なきまでに勝ちにいくぞ。各自最善を尽くせ、全兵装
使用自由だ！露払いは俺に任せる、往け！」「青と黒の騎士王が打ち出された砲弾のように疾走する。黄金と漆
黒、交差する聖剣の軌跡が同時に風の穿孔を解き放った。樹海の津波を穿ち、己の道を切り開いたそれが開戦の号砲となる。
偽伝、無限の剣製
（中）

未確認の敵体と偶発的に遭遇してしまい戦闘が避けられない状況となった場合。まず第一にすべき事は何か。敵の種別は？見て取るが必要はなならない。敵の戦力はどれほどか？瞬時に見極めねばならない。敵が脅威度の判定である。

適当に銃弾をパラまいて片付けられるのは、理外に身を置かないすべきか、逃げるべきなのか。捕縛を狙うか。時間稼ぎに徹するか。故に求められるのは反射的に敵を撃ち殺す脊髄反射ではない。倒すべきか、逃げるべきなのか、捕縛を狙うか、時間稼ぎに徹するかが不条理な現象に襲われる。瞬時に判別すべきものの多々。常道の存在のみ。一歩裏道に踏み込めば、たちまち物理法則を嘲笑う。

運の要素を保っているのは前提条件だ。闇雲に動いた結果が功を奏するのは子供の喧嘩まで。大人の一步一歩軍事や魔道に縛わる者の戦闘に於いて偶然という要素は極限まで排除されてしまいます。
素は確かにあるが、それだけを頼りにすればたちまち往生するだろう。
現在明らかのは敵性個体が神祖ロムルスの霊基を乗っ取っている事、そして聖杯を所有している事である。この時点で想定出来る事、基本的な性能は神祖に準ずる可能性と、魔力は聖杯により無尽蔵であろうのだ。
即ち、単純に考えても脅威度は最大。魔力や精神力に限りのあるこちらが長期戦を挑むのはあまりに無謀。ただでさえ消耗しているのだ、短期決戦しか活路はない。力を出し惜しむのは愚か極まる。
故に俺は迷わなかった。
現状発揮し得る最大火力で一気に叩く。敵に何かをさせない。一気に成に叩き潰す。仮にこちらを一撃で屠れる手段を相手が持っていったとしても、何もさせなければ問題はないのだから。
弓の弦より解き放たれた矢の如く、青と黒の軌跡が一直線に魔神の弦より難解する。それが術者の意思に呼応する様は壮観だろう。だがネロ・クラウディウスはそれに目を奪われる事なく、毅然と己のサーヴァントへ指令を発した。
剣の丘に深緑の風が吹く。駿足の女狩人が疾走したのだ。
照準固定、一斉射撃。掲げた手を振り下ろすや、疾駆する騎士王らが再度呑み込まんとする木の触手を撃ち抜いていく。千の剣群が剣林弾雨となって降り注いだ。鷹の目の確度、射撃の精度は高水準で保持出来ている。枝葉一つ、見逃しはしない。

照準固定、一斉射撃。掲げた手を振り下ろすや、疾駆する騎士王らが再度呑み込まんとする木の触手を撃ち抜いていく。千の剣群が剣林弾雨となって降り注いだ。鷹の目の確度、射撃の精度は高水準で保持出来ている。枝葉一つ、見逃しはしない。

照準固定、一斉射撃。掲げた手を振り下ろすや、疾駆する騎士王らが再度呑み込まんとする木の触手を撃ち抜いていく。千の剣群が剣林弾雨となって降り注いだ。鷹の目の確度、射撃の精度は高水準で保持出来ている。枝葉一つ、見逃しはしない。

照準固定、一斉射撃。掲げた手を振り下ろすや、疾駆する騎士王らが再度呑み込まんとする木の触手を撃ち抜いていく。千の剣群が剣林弾雨となって降り注いだ。鷹の目の確度、射撃の精度は高水準で保持出来ている。枝葉一つ、見逃しはしない。
すマグナ・ウオルイッセマグヌムべては我が槍に通ずる。それは神祖の第一宝具、その真名解放。固有結界内の赤土からヘドロの芽が発芽し、無数の枝葉が退避しようとアルトリアの左足に絡み付く。瞬く間に膨張するヘドロは、ローマそのもの汚し冒涜する邪悪なも。ネロが怒号を発し丘に突き立つた無名の剣を擲った。飛来したそれが、天高く持ち上げられ振られていたアルトリアを解放する足に絡み付いた触手を切断したのだ。着地すらままならぬ様子のアルトリア。虚空に投げ出された華奢な体躯を、思わず駆け出した俺はなんと受け止めた。鎧の重さのせいか、左腕が逝ってるか、支えきれないもうと転倒し覚まいう。ヘドロの濁流が怒濤の奔流となって迫る。倒れたまま、刃渡り十メートルにも及び巨大な剣を十、投射し防壁とする。おぞましいう波撃を数瞬押し留めも、呑み込まれかけどた刹那に内包した神秘を暴走させ、指向き性を持った発砲を起こす。「壊れた幻想」である。爆風の中、腕の中のアルトリアに訊ねる。無事か？と。「…」
淡く微笑んだアルトリアは、己の左足を指した。泥の触手に取られた足をそっかそっかと一瞬、俺は言葉を無くす。最高ランクの対魔力を持つアルトリアを蝕むという事は、あれも聖杯の泥に比類する呪いという事だろう。つまり能力的には歯が立たないが、気合いで割り切ってあると、目を剥き、一瞬、俺は言葉を無くす。己の左足を指した。泥の触手に取られた足は、頭を向けてアリートリアの髪を掻き上げる。面白く、額に口づけて。顔を離すと、呆気取られたと、手を伸ばしてその額にかかってあると、目を剥き、一瞬、俺は言葉を無くす。聖杯の泥はそうだった。俺はマジュの許に戻り再度剣群の投射に専心する。魔力を廻し、全力稼働する魔術回路にカルデアの電力を変換した魔力を供給。筆舌で表現し難い異物感に眉を顰めつつ、百。二百、三百と剣群を撃ち込み俺は思考する。
ヘドロの嘔流流することなく、アルトリア、オルタ、アタランテ、俺の火力で押し込み、押し潰し、一気に打倒する事能わぬ。であれば無理に攻め続けるは愚行。いたずらに消費するだけとなれば、手を変えなけらばならない。ではどうする。速攻による成果は魔神の首を刎ねた事だ。しかもも人の形をしていたも急所は人体とは異なる可能性もある。ならば心臓を潰しても無為。聖杯を奪い取る事がそのまま魔神を葬る事に繋がる。それか、聖杯の回収は諦め、もろともに破壊するか。ここからは力を戻すではなく、隙を伺い一点集中の大火力で討ち取るべき状況にシフトしたと見るのが賢明だろう。俺はネロにその旨を告げた。

讃同しよう。ならば畳み掛ける段に移るならば余もアタランテとアルカディアの狩人は、突如足元から障害物が現れても慌てず。咄嗟に剣を掴み取ったアタランテは、熱くない火に照らされネロを見る。マスターはサーヴァントに告げた。暫し預ける、こそこそという時を逃すでないぞ！と。

俺は『原初の火』と同型の剣を投影しネロに渡す。そしてネロの言に応じた。そうだ。今更憂する理由もない。下手を打ってそれまでだが、
俺はマシューの肩に手を置いた。微細女のの巻き毛。俺も、何も言う資格はない。俺が、何も言う資格はない。

しかし、それでも彼女は戦うと決めている。その目も、抱く思いも、戦場に似つかわしくない。

そうしないとならないなら俺も全てを賭ける。俺はマシューの肩に手を置いた。微細女のの巻き毛。俺も、何も言う資格はない。俺が、何も言う資格はない。

オルタが暴竜の如く魔力を噴射し、自身を取り囲みながらも、ヘドロの触手を一息に吹き飛ばす。しかし無尽蔵に沸く質量に、オルタすら抗うのは困難なのか、直前まで己のいた地点を残した。

まるで見当外な事を言うマシューの中で、俺がどれほど大きいのか。俺の大きさがそのまま俺の責任である。なら俺は、マシューの想いを裏切る事だけは決しない。

苦笑してそう言うと、マシューはほんのりと頬に桜を散らし、力強く楯を構えた。

「・・・ばかだ。役に立つ処か、マシューは俺の生命線だ。死んでも手放さないから、そのつもりでいろ。」
「・・・！」
微かに息を乱していたオルタが、若干目を眇めて俺を睨む。その後、傍に寄ってくるなり、何故か無言で前髪を搔きあげ額を見せてくる。俺は、なんだ、なんでそんな目で俺を見てるのか…察してはならない気がした。

オルタは舌打ちし、黒い聖剣に指を這わせ俺に言った。「シロウ。決着は早い方が望ましい。私も魔力を不安が出てきてしまった。聖剣を使わずとも、全力戦闘ともなると保って数分といった所です。」

「…八割に抑えれば？」

「10分ですね。」

上等だ。5分、八割で保たせろ。その後に仕掛ける。「…八割で保たせろ。その後に仕掛ける。」
改革戦闘服の上に着込んだ赤原礼装を翻し、壊した左腕をぷらさげて。ミャを騙る男は陽剣を右手に駆走する。

奇抜な深紅のドレスのまま、投影された巨木の鞭を杖弾で穿ち霧を主眼に置いた陣形である。

故に男の左脇を固めるのは敗残の身から再起したローマ皇帝ネロ。
彼女の中の霊基は、騎士王という王を決して無視できない。そうでなくても、マシュという少女はアルトリアの状態を看過出来性質ではなかった。

そんな事などお見通しなのだろう。かつて、理想の王という装置に徹する余り、人の心が分からぬ者となった騎士王は、今は肩から力が抜け人間の心が良く分かるようになっている。故に、マシュのこともしかかも良く理解していた。

それでもアルトリアはマシュを行かせない。途方もなく激痛に、アルトリアは額に脂汗を浮かばせつつも、決して乱れる事なく静かに語調で告げる。

「マシュ、よく聞きなさい。今の貴女をシロウの許へ行かせる訳にはいきません。

それならばアルトリアに行かせたって、先輩はわたしを、自分の生命線だと仰ってくれました！　わたしもお供しすっって、言いました！　なら、行かないと…」わたしは、先輩のお役に立ちたいんです！」

「誰かの為に」ではない。そんな曖昧な想いではない。明確に慕うマスターの事を想ってマシュは言っている。それを否定する気はアルトリアにはなかった。

だが、私が貴女を行かせないのは、今のマシュでは足手まといにしかならないからです。

「えッ！…それはほっ、そうかも、しれませんけど…！！」
あれば、と。プリテンの騎士王が指し示した先には芳しくない状況が置かれてある。

樹の膨張は新しい、急激に成長する樹林は見果てぬ地を埋め尽くす。天候は広がり、暖かい赤土に夥しい量の泥の根を張り巡らし、晴れ渡る蒸発の空に蓋をしようと暗いヘドロを撒き散らしている。

カルテアは局地的に抵抗しているだけといった有り様だ。

アタランテは車軽く駆け回り、一向に樹林に囲まれる気配はない。

悉く魔神に命中しているが、まるで効いた様子もなく、生え乱れる泥の樹林に矢一本すら阻まれ通らなくなったりつつある。

男の剣群は己やアタランテ、オルタ、ネロに迫る泥の津波を押し留めるのに全力を注がれている。オルタの卑王鉄槌、ネロの剣撃、どれも一定の威力を発揮しているが、全体を通して見ればまるで意味を成していないかった。

無限の剣は無尽の泥に押し流されつつある。こんなの大事の戦い、押し切るには圧倒的な個の力か、それに類する大局の力が必要となわけではない。

それは、残念ながらここにはない。

アルティアも、オルタも、その霊基は新たに霊基を再臨せねば、とても大局の個とは成り得ない。
は無為である。ここに、楯を持たずの騎士を投入しても只管に無駄なのは自明である。

男は、アルトリアにとって始まりながら、マシュへ非常に肩入

しておけない。

本来は黙っておくべきなのだろう。その成長を見守るべきなのだ

が優しく育てる時期は逸した。これよりアルトリアが為すのは

独断のそれに。そうせねばならないと直感したのだ。

絶望的な戦局。男は分とオルタに言った。それまでに、なんと

かするのが自分だとアルトリアは自認する。座して待つだけの者で

はない、この身は貴方の剣であると誓ったのだ。

剣は、振り放すことなければならぬ。アルトリアは強靭な意思を込めてマシュと相対する。

新たな実力は高い。それは当然です。貴女と一体となっている

ロットに比する。故に貴女がいれば戦力が高まるのは確かです。

「あなたがいるなら、わたしに

なたは行きます！先輩のお力になれないなら、わたしに

聞かぬで！ギャラハッド卿！」「ッッツ！？」「ッッツ！？」「ギャラハッド卿！」
その王命に、マシュの体は反射的に固まった。

そこで、アルトリアは。騎士王はなんと自分を呼んだのか。

そんな事も意識できぬほどの衝撃。短い付き合いなのに身近に感じた。

しかし、マシュは思わずじろり、強い光を放つアルトリアの目を凝視し、
レーレー、似通う性質の持ち主とは思え、確実に他人同士である彼女
と彼の方向の違いを正すために。

「思い出ししない、マシュ。ギャラハッド。あなた達の在り方を。あ
なたの盾は、その心を映し出すものだから…」

黒鎧の少女は、十字架のような大盾の取っ手を無意識に握り締め
ている。デミ・サーヴァントと、英霊と一体となった者。ならば消え
る事などないと知りなさい。
わたしを、見守って…。

ええ。折角『世界で最も偉大な騎士』を宿しているのです、まず己の裡に在る者を辿りなさい。そして、己の在り方を問うのではな
く、自身がどう在りたいか、どう在るべきなのかを定めるのです。

何か、眼が開いた心地だった。

マシュは問う。自分はどう在りたいのか。

それは勿論ある。だが、より具体的には、どうか。

役に立ちたい。先輩のお役に。

それは勿論である。だが、より具体的には、どうか。

戦争に見届けて。

それが貴女でしょう、マシュ。

―　―　―　

何か、眼が開いた心地だった。

マシュは問う。自分はどう在りたいか。どう在るべきのかを定めるのです。

―　―　―　

わたしは。

アルトリアは微かに微笑み、子供の成長しようと足摺る姿を眩し

向けたまま、アルトリアはマシュの裡に言葉を向けた。

それに見届けた。

すみません。やっ？

『純潔、王道、大いに結構。ですがギャラハッド、見守るだけでは

茶目っ気を見て笑ったアルトリアに、マシュの霊基が強烈に反

応した。

まず雅の飛び上がりそうになる。マシュは驚いて、聖剣を構えたア

ルトリアを見る。

―　―　―　
心の中で、アルトリアは呟く。かつて人の夢を束ねる覇王に糾弾された事がある。お前は導く事をしなかった、と。

なほどそれは正しい。アルトリアはそれを認めた。ならば、今、導く。過去出来なかったそれを、現在で果たす。
姿形は違えど、臣下である。騎士である。ならばこれを導いてここその王。あの覇王とは決して相容れないが、正しいと認めた部分だけは素直に聞いてやろうではないか。

姿形は違えど、臣下である。騎士である。ならばここの事を導いてこここの王。あとの覇王とは決して相容れないが、正しいと認めた部分だけは素直に聞いてやろうではないか。

マシュ、見てなさい。これが役に立つという事です。

解放された聖剣が、アルトリアから魔力を吸出し、目映い黄金の煌めきを放つ。切っ先が睨むのは、今まさにカルデアを押し潰そうとする渦泥の波濤。人間の奮闘をキキキキと嘲笑う魔神の暗黒。死に物狂いで薄紅の七枚楯で凌ぐ男と、捨て身で反転した極光を解き放たんとする黒騎士。青い騎士王は堂々と剣を担ぐ。そして、

マシュ、見てなさい。これが役に立つという事です。

アーロウを守る。それは貴女にしか出来ないことだ。

参る、と謳う常勝の王。
見守る臣下の目を背に受けて、約束された勝利の栄光を主君に届けよう。

己の存在を維持する魔力を全て注ぎ込み、粒子となって消えていきながら、アルトリアは渾身の力を込めて必勝の輝きを解放する。

約束された——
勝利の剣！

—マッシュは、その王を知る。本当の意味で感じる。マッシュは、その王を知る。本当の意味で感じる。

成すべき事を知って。楯の少女は、出撃する。密かに潜む獣の気配を、誰も感じないまま。

男は唇を噛み締め、オルタは忌々しげに先を越されていたかと吐き捨てた。
偽伝、無限の剣製
（下）
偽伝、無限の剣製
（後）
俺の厚かましさの具現とも言える蒼空は汚泥に染まり、取り繕ったような暖かみを持つ丘は禍々しい樹海を育む土壌とされた。

偽伝、無限の剣製
（下）

偽伝、無限の剣製
（後）

俺もヤキが回ったか。こんなにも追い打つ手なし。

偽伝、無限の剣製
（下）
偽伝、無限の剣製
（後）
詰められ、間もなく終わりが訪れようとしているのに、気にしてい
るのは他人の事ばかり。

脳裏を過ぎるのは、やり残した事。

カルデアの外にいる者。

焼却された凡ての事象。

傍らの友。大切な相棒。庇護すべき少女。

働きすぎる司令官。キ

シャの濃い万能の天才。

因縁の借金あれ。取り残した桜色の後輩。救った人。救ってく
れた人。殺した相手、殺そうとしてきた敵。絶倫眼鏡、極女将。

祖に代行者に修道女に執行者！

まったく馬鹿げている、俺の世界は本当に、俺より尊いもので溢
れるのだから。

足下から伸びた蔓が太股を貫く。

即座に千将で飛び出した芽を切り

捨てる。

ネロを取り囲む樹林に剣弾の雨を降らせ脱出させる。只管

まったく馬鹿げている。

俺の世界は本当に、俺より尊いもので溢
れるのだから。

終わりを引っ張る。

林者。

地に、目、生活。

心と。

本の少し。

道に、眼。

全見。

内に、呪。

出。

尊。

者。

悪い。

黒樹に、呪。

ば。

し。

飛。

ば。

者。

方。

泥。

ッ。

ァ。

ば。

り。

い。

アッ！

俺がこれくらいで死ぬだょ？

俺を殺したかに心臓潰して首を飛ばしてアッ！

一舐めるなよ…！

俺を殺したかに心臓潰して首を飛ばしてアッ！
この程度で勝ったと思ってんじゃないぞクソタレがああ！

血反吐を吐きながら剣舞する。

激情に突き動かされるまま、両腕を閉いたよりも太い幹を両断し流麗な剣捌きで踊るネロを見ろ。豪快に樹海を滅す暴戦の如きオルタを見ろ。まだまだ余力残している、余裕がないのは俺だけだ。ザマアない、死に損ないすら満足に殺せない輩が人理焼却？

俺は嘲弄する。俺は確信していた。

俺は勝つと、俺達は勝つのだ。

死狂い一騎、満足に片付けられもせず勝ち誇るとは底が見えた。

糞魔神！

俺は嘲弄する。俺は確信していった。

俺は勝つと、俺達は勝つのだ。

流麗な剣捌きで踊るネロを見ろ。豪快に樹海を滅す暴戦の如きオルタを見ろ。まだまだ余力残している、余裕がないのは俺だけだ。ザマアない、死に損ないすら満足に殺せない輩が人理焼却？

俺は嘲弄する。俺は確信していた。

俺は勝つと、俺達は勝つのだ。
力強く即答し、素早く俺の状態を確認したネロは飛来した数十の枝葉の渦を切り払う。

「しかし今すぐに死にそうにもないな！
ああ、なら問題はないな
問題はあろう！？
どういう理屈で腹の中から呪いを弾く劍を投影しただけだ。慣れたら意外と
腹の中に呪詛の類いを弾く劍を投射したけだ。
慣れたら意外と効果的で笑えてもう。
腹の中に呪詛の類を弾く劍を投射したけだ。
慣れたら意外と効果的で笑えてもう。

元々低い対魔力だ。他人に呪われる数回、俺の見え出した対策がこれ。最終手段だが意外と効果的で笑えてしまう。患部を直接投映で貫けば、大抵の呪詛はイチコロだ。

元々低い対魔力だ。他人に呪われる数回、俺の見え出した対策がこれ。最終手段だが意外と効果的で笑えてしまう。患部を直接投影で貫けば、大抵の呪詛はイチコロだ。

聖杯の反応が一際強く脈打った。

大地が波打つ。

敵主力の要を負傷させた魔神が攻め時と見たのか、一気にカルデアを滅ぼすと仕掛けてきたのだ。貴様ら人間の旅はここで終わりだと言げるように。分かりやすく、単純に、純粋な質量で圧倒的に圧殺せんと、顕在する全てのヘドロ間魔神を倒せば呪いも解れて消えるだろう。

敵主力の要を負傷させた魔神が攻め時と見たのか、一気にカルデアを滅ぼすと仕掛けてきたのだ。貴様ら人間の旅はここで終わりだと言げるように。分かりやすく、単純に、純粋な質量で圧倒的に圧殺せんと、顕在する全てのヘドロ間魔神を倒せば呪いも解れて消えるだろう。

大地が波打つ。

元々低い対魔力だ。他人に呪われる数回、俺の見え出した対策がこれ。最終手段だが意外と効果的で笑えてしまう。患部を直接投影で貫けば、大抵の呪詛はイチコロだ。

元々低い対魔力だ。他人に呪われる数回、俺の見え出した対策がこれ。最終手段だが意外と効果的で笑えてしまう。患部を直接投影で貫けば、大抵の呪詛はイチコロだ。

大地が波打つ。

元々低い対魔力だ。他人に呪われる数回、俺の見え出した対策がこれ。最終手段だが意外と効果的で笑えてしまう。患部を直接投影で貫けば、大抵の呪詛はイチコロだ。

アメリアの対魔力を貫通する以上、時間稼ぎにしかならない応急手当だが、やらないよりはましけある。延命できて10分、その間に魔神を倒せば呪いも解れて消えるだろう。

元々低い対魔力だ。他人に呪われる数回、俺の見え出した対策がこれ。最終手段だが意外と効果的で笑えてしまう。患部を直接投影で貫けば、大抵の呪詛はイチコロだ。

元々低い対魔力だ。他人に呪われる数回、俺の見え出した対策がこれ。最終手段だが意外と効果的で笑えてしまう。患部を直接投影で貫けば、大抵の呪詛はイチコロだ。

大地が波打つ。

元々低い対魔力だ。他人に呪われる数回、俺の見え出した対策がこれ。最終手段だが意外と効果的で笑えてしまう。患部を直接投影で貫けば、大抵の呪詛はイチコロだ。

元々低い対魔力だ。他人に呪われる数回、俺の見え出した対策がこれ。最終手段だが意外と効果的で笑えてしまう。患部を直接投影で貫けば、大抵の呪詛はイチコロだ。
偽物の丘は暗影に覆い尽くされた。偽物の丘は暗影に覆い尽くされた。
無恥なる天空は汚辱され尽くした。

大地を踏み締める両の脚はまさに不退転。

「オオオオーッッ！」
「オオオオオーッッ！」
「熾天覆うう～七つの円環ッッッッッッ！」

乾いた大地を踏み破り越えた。両の脚は強硬に不退転を支え、両の目は不屈を光らせる。両の目は不屈を光らせる。

「オオオオオーッッ！」
「オオオオオーッッ！」
「熾天覆うう～七つの円環ッッッッッッ！」

崩落する天を支える。

魔術回路がひしゃげる感覚に魂が破裂した。全身の筋肉が単んだ。
うだった。

片膝をつく。体が圧力に潰されそうに、否、実際に潰れていく。

天に集めた汚泥の樹木。支えられるのはほんの数秒。天と地を
絶する筋繊維、ぶちぶちと手足の先から引き千切られていく実感に
気が狂いそうだ。

しかし、見えた。

オルタが聖剣を振るう。こちらの狙いを悟った魔神が咄嗟に防御
体勢を取ろうとする。ぐずぐずと爛れた黒体、無惨に崩れる樹柵で
どう防ぐ？決して掛かる刹那、オルタの放たんとすする卑王鉄槌に
悪寒がした。そんな程度の魔力ではどうにものならぬと余裕を見せ
ている。強がり？いやそんな事をする意味は——もはや思考から
やせる時どこであろうはずもなく、敗北を予感しながらもオルタの剣
に託すしかなかった。

だが。

金色の星の息吹が敗着の結末を吹き飛ばす。何もかもを圧殺せん
としていたヘドロの樹界が突如破壊された。

騎士達の王の参陣せし戦に、敗北など有り得ない。

圧倒的な魔力の光が固有結界を崩壊させる。獲物を追い詰める為に
空間を維持していた魔神は、魔力の氾濫を纏めて受け止める事なり、期せずして魔神はその霊基の四分の一損壊させてしまう。星の燎光は主君のソラを取り戻し、誇らしげに散った。俺の、俺達の勝利を願って、俺達の勝利を信じて消えなけりあるトルアはカルデアに勝機を齎した。今、魔神は喪った半身を再生するために停止している。この隙を逃す訳にはいかないのに、瞬時に駆け出したオルタは間に合わない。アタランテの脚でも届かない。魔神の再生速度は常軌を逸する。折角見えた光明を掴めぬまま死にゆくしかねないというのか。
予期せぬ気配に、轟いた雄叫びに、絶望に硬直していた空気は打ち砕かれた。

穴だらけの結界の外。
遥か高く跳躍して、騎の英雄、愛馬は力尽き消え去って。英雄も殆ど消えかけていながら、なおも豪快に咆哮していた。

「我が友コンナルの名に懸けて！」「ルーンを象った刺繍入りの外套を靡かせ、巨大な、白銀の箋手が包む逞しい腕が担ぐのは、城であった。」
「―勝利の栄冠は、諦めねえ奴の頭上にこそ輝くのさ！」

―大ドークの城を枕に逝きな、『圧し潰す死獣の褥』！"
マスター！報告するぞ。世界の一端、確かに撃破して来た。今のはちょっとしたサプライズて奴さ。
ランサー…お前、
「なんで？だらしねぇ、男ならちゃんと立てる」
膝をついたままの俺に、最強のランサーたるクー・フーリンは呆れたように手を差し伸べ、無理矢理にでも立ててくれた。
脚が消えている。体も、ほぼ全てが光の粒子となって消えていた。
だがそれでも、ランサーは言う。「肩を叩き、活性のルーンを俺に刻みなが。」
真剣に、男が、男に、告げるのだ。
「テメェはオレに言ったな？二つの世界の片割れをオレに任せる、テメェらはもう一つの方を始末するってな。
オレは勝ったぜ。なら、今度はそっちの番だ。オレの認めたマスターなら、しっかり勝ちきってみせろやー」
消えていくクー・フーリンは、やれやれ、これでオレの仕事はー

手面としても滑稽な形容である。投擲された城が、再生し尽くす
軽やかに着地した蒼い槍兵は、獰猛に牙を剥いて、消えかけの体で礼を示した。
旦終わりだなと言って消滅した。
で、俺が勝つのは当たり前だと言うような、余りにも爽やか
負けてたまるか、なんて分かりやすい気持ちが湧いた。
元より勝利への想いは無限、溢れるものに勝利への渴望のみ。俺
は、自身を潰す城を膨大な量の樹木で押し退けた魔神に向かう。
そうだ。まだ、まだやれる、やるとも。剣化する肉体はまだ
動く。なら行こう。勝ちに行こう。休んでも言ったのに勝手に逝
ったアルトリアに文句を言わなきゃならない。俺にはまだ『先』が
必要なんだ。まだ生きていたいのだ。

状況は振り出しに戻った。だが、負ける気がしない。声もなく、
俺は駆け出す。何も持たず、拳だけを握って、衝動的に一直線に走
り出した。オルタが前を行う。その前をアタランテが馳せる。傍らのネロが
高揚するままに何かを歌っていた。
真名、開帳。
わたしは災厄の席に立つ。

―霊こころと身体が合一する。
どこか甘かった機構の歯車が、がっちりと噛み合った。

―鳴呼、本当に。なんて人達なんだろう。

少女は想う。

青い騎士王の鮮烈な輝きを。黒い騎士王の凄絶な煌めきを。

優美に咲く赤薔薇の皇帝、神話の時代の伝説の狩人、一つの神話で最強を誇る蒼い槍兵。そして、

―其は全ての疵、全ての怨恨を癒す我らが故郷……

無色の世界に、色彩を齎してくれた。大切なら。

まだ、人理が焼却されていなかった頃。

ドクターと、所長と、一緒にお歌ってくれた。一緒に関してくれる。一緒に関笑いうものを作って、一緒に食べた。

外の世界の事を沢山話ししてくれた。
苦手だったけど、楽しい運動を一緒にしてくれた。

自分なんだかそう思うのが厚かましいぐらいあのひとは強いけど。
それでも、助けになりたい、どこまでも一緒に在りたい、これから
の未来を一緒に見たい。
その想いが、少女を走らせた。一生懸命に駆ける。遠い、遠い背中に追い付きたくて。あのひと
の見ている景色がどんなものなのか、知りたくて。
絶望が見える。

未来を無くそうとする、とても怖い、魔神。
瞬く間に樹界を復活させ、全てを呑み込むようしていた。
だけど、大丈夫。

雪の楯を駆けながら構えて、裡から導かれるままに唱えて。

「顕現せよ」

顕すのは、想い。
形にするのは、それだけでいい。
素直に見つめよう。迷わず見据えよう。
四方から取り囲むように迫る暗い樹界を、決してあのひとには届かせない。

頑張って、力を振り絞る。
驚いて振り向くあのひとに、楯の少女は全力で微笑んだ。

「いまは遙か、ツッペ〜」

「理想の城」！

―そうして顕現し白亜の城壁は、あらゆる不浄を祓い、あらゆる穢れを落とし、あらゆる脅威を打ち払う鉄壁の守りと化した。
ここの絶大なる質量は無力に堕す。
城壁の外から押し潰さんとするヘドロの樹木は悉く弾かれ。
白亜の城に取り込まれた魔神は一切の穢れを放てない。腐り落ちていた樹は純潔の領域に赤みを取り戻し、人の心なき魔神の瞳に微かに光が戻った。

「いまは遙か、ツッペ〜」
アタランテが気合いと共に『火』の灯る大剣を魔神に突き刺した。

そして、あたかも自分から刃を受けるように魔神は止まった。

オルタが黒き聖剣で袈裟に叩き切る。

ネロが大剣を思い切り振り抜いた。

剣を出しけなった聖杯を、男の渾身の拳が撃ち抜いた。

剥き出しとなった聖杯が飛び出る。駆け続けていたマシュが、それを走り抜き様に回収した。

この場全体の者に向けて短く告げる。勇者たちの健闘を讃えが如く。

「見事。お前達の勝ちだ」
曙光、さと暗雲晴れず

― 見事。お前達の勝ちだ。

厳かに言祝ぐ赤色の視線に、俺は何も言えずその場に頽れた。

張り詰めていた線が途絶えた。

力が尽きた。

聖杯片手に大慌てで駆け寄ってくるマシンが最後に見えて、苦笑する。

特異点化の原因は排除した。定礎は復元し、特異点は消える。冬

木を併せれば三つ目の人類史の異常が正される。

七つある内の、まだ二つだ。なのに半分もこなしていないのでこ

んなザマ。少しはゆっくり確実な方法で戦いに臨みたい。ギリギリ

なのかザマ。少しはゆっくり確実な方法で戦いに臨みたい。時間の猶予が皆無なので本当勘弁

して欲しかった。

そういえば、冬木の特異点…あれば…なぜ七つの特異点に力

ウントされていない？　些末な事だが、七つではなく、八つと数え

るべきではないか？
意識は無くても、うっすらと体が揺れるのを感じる。カルデアに帰還したのだろう。コフィンから運び出されると、俄かに周囲が騒然とした。

―衛宮殿がまた死にかけておられるぞ！

医療班の誰かがそんな事を叫んだ。コイツは日本人だなと重たい
意識の中で思う。

確信だった。間違いない。なんか後藤に似ているな。なんてうっ
冬木で学生をしていた頃の同級生と、下らない相類点を見つけて馬
らしくなった。

なんだかなぁ。好きで死にかけてる訳ではないのに、死にかけて
る所を見てネタに走らなくてもいいだろう。

そんなカルデアに今のネタが通じる奴がいるだろうか。いか
たら不謹慎なネタに周囲はくすりともせず、ネタを口走った奴は
針の筵に座らされる事になるだろうに。馬鹿だなぁ。

ほんとに……馬鹿だなぁ。

「ふと気がつくと、染み一つない白い天井を見上げていた。

問題もなく動作するのを確かめて、次は左腕を動かそうとした。

・・・」
「動かない。

「……」

視線をやると、椅子に腰かけたマシェが、俺の左手を握ったまま

デミ・サーヴァントとして武装した姿ではない。カルデア局員と

しての制服を纏い、いつもとても似合うと誉めた眼鏡を掛けている。

過酷な旅路だった。荒事や行軍に慣れていない少女には、精神

にとても辛かっただろう。なんだか起こすのも悪い気がしてそのまま

ままでおく事にした。

すっ、すっ、と一定の寝息をたてる、ずれた眼鏡の奥に見えるマ

シェの寝顔がなんだか可愛い。やはり眼鏡はいい文明だなと改めて

信ずる。

目が覚めたのですね、シロウ。

気配を感じなかった。頭の芯が波けている。

右側から声がしたので釘されるようにそちらを見ると、そこに

傷の具合からして、俺が医務室に運び込まれ一日というところ

か？流石に何も無しとはいかなかったが、五体満足で帰ってこら

れたなら上等だろう。

「マシェと一緒に白衣を纏ったアルトリアがいた。椅子に腰掛け、穏や

かな面持ちで俺を見てている。果物ナイフでリンゴの皮を剥いで、自

ら」
「…なんだ、普通の女の子みたいだね」

「…なんだ、彼女が現代風の衣装を着込んでるのは初めてではない。しかし、あの格好は些細な予想外であった。思わぬ目をぱちくりさせた。」

傍らにあるオルタはぴくぴくと動いていた。彼女が現代風の衣装を着込んでるのを見るのは初めてではない。しかしその様子は少し怒られる、と後悔した所へその反応。昔は言ってから、しまった怒られる、と後悔した所へその反応。昔は言われた。

「もしかして、ずっと置いてくれたのか？」

二人に訊ねると、こほん。と咳払いしてアルトリアが応じた。

「ええ。シロウが倒れているとなると、私達もする事がありませよ。どうせなら着いておこと決めて、オルタと共に傍にいさせて貰いましょう。」

「…そうだ。ありがとう、アルトリア、オルター。」
突然の暴露にアリタが慌てて背後を振り返った。
オルタはそんな自分を薄く笑いながら揶揄する。
先の戦いの最中を指して。
「シロウ。余り『私』をからかわない方がいい。私はとかもかも、そこの『私』は、貴方が思っていと思うほど慎みがああ訳ではないない。
「そっ、そんな事はしでしんで！シロウ、今のはオルタの虚言です、私はそんな破廉恥な真似はしていましませんから！」
「…」
額を触ると、なにとなくされたくなる。
一瞬で柔肉が触れたくなるような、触れていかないような。
曖昧な、錯覚と言えなくもない感じ。
微笑んで、悪くない気分だと呟く。
固まるアリタを横に、オルタに言っただ。
「羨ましいならオルタにもしやろか？」
「…何を」
一瞬体を揺らしたオルタは、半眼で俺を睨んだ。
ちょっととした冗談なのに…。
「起き抜けに冗談を言えるとは、どうやら思っていたらよりも元気そうだね。結構な事です。今度私の中の霊基を再臨する為のプロラグム…」
に付き合って貰いましょう。
ああ。お前達の強化は必須だからな。必ず付き合う。約束する。
……ところで他の連中は？
ネロは新規マスターとして色々な手続き、現代の常識の詰込み等、超特急で知識を植え込まれています。アタランテはランサーに付き合い、専ら種火集めやそれに集中しているようですね。
そうか、と呟く。俺が寝していても、カルデアは変わりず大忙しという訳だ。
働きすぎて誰かが倒れなきゃいいが。特に、あの臨時司令官殿とか。
今度機会があったらゆっくりと話したい。何かあの男は俺に対し遠慮がある。その垣根を取り払って普通に付き合いだった。
安心しきっているのか、無防備なマシュの心やすけた寀顔に目をやって、淡く微笑む。
あの時。真の力を発揮したマシュの想いは真っ直ぐに俺に届いた。
恥ずかしいとか、照れ臭いとか、そういう余分な感情は無い。ただ嬉しいとか。その心が心地よかった。白百合のような魂に向かって嬉しい。
事の喜びは、きっと何よりも得難いものだろう。
上体を起こして、右手を伸ばす。ほっぺたを指先でつつと、少女は眉根を寄せて難しそうに唸った。その様に、アルトリアも微笑み、オルタすら相好を崩す。
守られてばかり、というのも情けない話だ。俺も、まだまだ強く、
「あら、目が覚めたようだね」
「やあ。目が覚めたようだね」
「おや、来たのは、ロマニ。医療部門のトップで、現在カルデアとトップ。そして過労が最も嵩張る優男だ。目元にぴっしりと濃い隈がある。」

「貴方ならきっと、まだまだ強くならないでしょう。私が保証します」

「そりゃ、とアルタが相撲を打つのに俺は応じる。アルトレ」

「あの、赤い外装の騎士の領域に、シロウは近づいて行くのです。アルトリアの碧い瞳は俺の頭部を見ている。なんだ？　と思って髪の毛を一本抜いてみると、それは白く染まってい」

「宝具の投影を、短時間でこなし過ぎた弊害だろう。別に死ぬ訳ではないし、肌はまだ無事だから気にしないでおく。マシュとお揃いだ。んで笑ってみると、アルトリアは呆れたふうに嘆息した。」

緊張感も無くなると、まるでそのタイミングを見計らっていたかのように空気音した。扉が横にスライドする。医務室に、新たな訪問者がやって来たのだ。
その額れの顔を見ると、ゆっくり寝ていた俺が悪い奴に思えて、足取りでベッドの横まで来る。ロマニはそれでも、しっかりした。

「割り込むように恐縮だけど、ちょっといいかな？」

ええ、構いません。…貴方は返し難しい恩がある。邪魔はしない。…さって。調子はどうだい、土郎くん。

「悪くはないな。ただ左腕の鈍りが酷い」

「魔術回路が焼き切れる寸前だったからね、それは仕方ないよ。寧ろそれで済んだのは幸運と言えるよ。」

「士郎くんの髪から色素が抜けた件だけど…士郎くんは、原因は…」

その額れの顔を見ると、ゆっくり寝ていた俺が悪い奴に思えて、足取りでベッドの横まで来る。ロマニはそれでも、しっかりした。

「割り込むように恐縮だけど、ちょっといいかな？」

ええ、構いません。…貴方は返し難しい恩がある。邪魔はしない。…さって。調子はどうだい、土郎くん。

「悪くはないな。ただ左腕の鈍りが酷い」

「魔術回路が焼き切れる寸前だったからね、それは仕方ないよ。寧ろそれで済んだのは幸運と言えるよ。」

「士郎くんの髪から色素が抜けた件だけど…士郎くんは、原因は…」
「分かっているね？」
「自分のした事だ。把握している」
「ならないんで。後遺症は今のところ確認してないけど……」

一旦、ロマニは言葉を切る。その上で前奏をした。
「これは医療部門を預かる者としての言葉だ。そう知っておいてほしい」

「ああ」と士郎くん。
「もう固有結界は使うちゃダメだ」

真剣な目だ。疲労ゆえか遊びのない、直截な物言い。
「固有結界。魔術の世界の奥義。使えるのはスゴイよ。それは認め分かってきていた事である。当たり前前の事を、彼は言っていた。

「士郎くん……もう固有結界は使うちゃダメだ」

「ああ」

真剣な目だ。疲労ゆえか遊びのない、直截な物言い。
「固有結界。魔術の世界の奥義。使えるのはスゴイよ。それは認め分かってきていた事である。当たり前前の事を、彼は言っていた。

「ああ」

一旦、ロマニは言葉を切る。その上で前奏をした。
「これは医療部門を預かる者としての言葉だ。そう知っておいてほしい」

「ああ」と士郎くん。
「もう固有結界は使うちゃダメだ」

「ああ」

真剣な目だ。疲労ゆえか遊びのない、直截な物言い。
「固有結界。魔術の世界の奥義。使えるのはスゴイよ。それは認め分かってきていた事である。当たり前前の事を、彼は言っていた。

「ああ」

一旦、ロマニは言葉を切る。その上で前奏をした。
「これは医療部門を預かる者としての言葉だ。そう知っておいてほしい」

「ああ」と士郎くん。
「もう固有結界は使うちゃダメだ」

「ああ」

真剣な目だ。疲労ゆえか遊びのない、直截な物言い。
「固有結界。魔術の世界の奥義。使えるのはスゴイよ。それは認め分かってきていた事である。当たり前前の事を、彼は言っていた。

「ああ」

一旦、ロマニは言葉を切る。その上で前奏をした。
「これは医療部門を預かる者としての言葉だ。そう知っておいてほしい」

「ああ」と士郎くん。
「もう固有結界は使うちゃダメだ」

「ああ」

真剣な目だ。疲労ゆえか遊びのない、直截な物言い。
「固有結界。魔術の世界の奥義。使えるのはスゴイよ。それは認め分かってきっていた事である。当たり前前の事を、彼は言っていた。

「ああ」

一旦、ロマニは言葉を切る。その上で前奏をした。
「これは医療部門を預かる者としての言葉だ。そう知っておいてほしい」

「ああ」と士郎くん。
「もう固有結界は使うちゃダメだ」

「ああ」

真剣な目だ。疲労ゆえか遊びのない、直截な物言い。
「固有結界。魔術の世界の奥義。使えるのはスゴイよ。それは認め分かってきっていた事である。当たり前前の事を、彼は言っていた。

「ああ」

一旦、ロマニは言葉を切る。その上で前奏をした。
「これは医療部門を預かる者としての言葉だ。そう知っておいてほしい」

「ああ」と士郎くん。
「もう固有結界は使うちゃダメだ」

「ああ」

真剣な目だ。疲労ゆえか遊びのない、直截な物言い。
「固有結界。魔術の世界の奥義。使えるのはスゴイよ。それは認め分かってきっていた事である。当たり前前の事を、彼は言っていた。

「ああ」

一旦、ロマニは言葉を切る。その上で前奏をした。
「これは医療部門を預かる者としての言葉だ。そう知っておいてほしい」

「ああ」と士郎くん。
「もう固有結界は使うちゃダメだ」

「ああ」

真剣な目だ。疲労ゆえか遊びのない、直截な物言い。
「固有結界。魔術の世界の奥義。使えるのはスゴイよ。それは認め分かってきっていた事である。当たり前前の事を、彼は言っていた。

「ああ」

一旦、ロマニは言葉を切る。その上で前奏をした。
「これは医療部門を預かる者としての言葉だ。そう知っておいてほしい」

「ああ」と士郎くん。
「もう固有結界は使うちゃダメだ」

「ああ」

真剣な目だ。疲労ゆえか遊びのない、直截な物言い。
「固有結界。魔術の世界の奥義。使えるのはスゴイよ。それは認め分かってきっていた事である。当たり前前の事を、彼は言っていた。

「ああ」

一旦、ロマニは言葉を切る。その上で前奏をした。
「これは医療部門を預かる者としての言葉だ。そう知っておいてほしい」

「ああ」と士郎くん。
「もう固有結界は使うちゃダメだ」

「ああ」

真剣な目だ。疲労ゆえか遊びのない、直截な物言い。
「固有結界。魔術の世界の奥義。使えるのはスゴイよ。それは認め分かってきっていた事である。当たり前前の事を、彼は言っていた。

「ああ」

一旦、ロマニは言葉を切る。その上で前奏をした。
「これは医療部門を預かる者としての言葉だ。そう知っておいてほしい」

「ああ」と士郎くん。
「もう固有結界は使うちゃダメだ」

「ああ」

真剣な目だ。疲労ゆえか遊びのない、直截な物言い。
「固有結界。魔術の世界の奥義。使えるのはスゴイよ。それは認め分かってきっていた事である。当たり前前の事を、彼は言っていた。

「ああ」

一旦、ロマニは言葉を切る。その上で前奏をした。
「これは医療部門を預かる者としての言葉だ。そう知っておいてほしい」

「ああ」と士郎くん。
「もう固有結界は使うちゃダメだ」

「ああ」

真剣な目だ。疲労ゆえか遊びのない、直截な物言い。
「固有結界。魔術の世界の奥義。使えるのはスゴイよ。それは認め分かってきっていた事である。当たり前前の事を、彼は言っていた。

「ああ」

一旦、ロマニは言葉を切る。その上で前奏をした。
「これは医療部門を預かる者としての言葉だ。そう知っておいてほしい」

「ああ」と士郎くん。
「もう固有結界は使うちゃダメだ」

「ああ」

真剣な目だ。疲労ゆえか遊びのない、直截な物言い。
「固有結界。魔術の世界の奥義。使えるのはスゴイよ。それは認め分かってきっていた事である。当たり前前の事を、彼は言っていた。

「ああ」

一旦、ロマニは言葉を切る。その上で前奏をした。
「これは医療部門を預かる者としての言葉だ。そう知っておいてほしい」

「ああ」と士郎くん。
「もう固有結界は使うちゃダメだ」

「ああ」

真剣な目だ。疲労ゆえか遊びのない、直截な物言い。
「固有結界。魔術の世界の奥義。使えるのはスゴイよ。それは認め分かってきっていた事である。当たり前前の事を、彼は言っていた。

「ああ」

一た
敵がどれ程多くても関係ない。狙った敵だけを経界に取り込むことで、こちらが数の優位を確保したまま戦闘に入れる優位性、士郎くんなら言うまでもなく分かって貰えると思う。

「敵がどれ程多くても関係ない、狙った敵だけを経界に取り込むことで、こちらが数の優位を確保したまま戦闘に入れる優位性、士郎くんなら言うまでもなく分かって貰えると思う。」

「まあなー。ボクも言いたくはないけど、言わないといけない。もし今後、戦いを決めにいく時、或いは圧倒的多数の敵に囲まれた時、必要なならば踹躊わず固有経界を使えんだ。タイミングは士郎くんが判断して良いくらいだ。」

「了解だ、司令官。」

「どうした、気に病む必要はないぞ、ロマニ。お前は当たり前の事を命令しただけだ。ロマニは正しい、全く以って。反論の余地などここにもない。」

「俺は最後のマスターだった。だが今はネロがいる。つまり、俺だけが人類の命運を担っているわけではない。最悪俺を切り捨て、ネロを生かすべき状況も今後出てくるかもしれないんだ。あらゆる可能性を想定しておくのは必要だと思う。」

「そうだとしても、ボクは、そんな命令はしたくないんだよ。」

絞り出すような声音だった。静かに激する瞳は、しかしあ気弱そうに光り出した。
な、情けない表情に隠されている。

「キミがカルデアに来たばかりの事、覚えてるかい？」

「ああ」

「マシュが何も知らないで…いや、知識ではなく、何も体験が積もってない状態でいた事に、キミはとても怒った。今でもはっきり覚えるよ。」

「ああ」

「マシュが何も知らないで…いや、知識ではなく、何も体験が積もってない状態でいた事に、キミはとても怒った。今でもはっきり覚えるよ。」

「ああ」

「マシュが何も知らないで…いや、知識ではなく、何も体験が積もってない状態でいた事に、キミはとても怒った。今でもはっきり覚えるよ。」

「ああ」

「マシュが何も知らないで…いや、知識ではなく、何も体験が積もってない状態でいた事に、キミはとても怒った。今でもはっきり覚えるよ。」

「ああ」

「マシュが何も知らないで…いや、知識ではなく、何も体験が積もってない状態でいた事に、キミはとても怒った。今でもはっきり覚えるよ。」

「ああ」

「マシュが何も知らないで…いや、知識ではなく、何も体験が積もってない状態でいた事に、キミはとても怒った。今でもはっきり覚えるよ。」

「ああ」

「マシュが何も知らないで…いや、知識ではなく、何も体験が積もってない状態でいた事に、キミはとても怒った。今でもはっきり覚えるよ。」

「ああ」

「マシュが何も知らないで…いや、知識ではなく、何も体験が積もってない状態でいた事に、キミはとても怒った。今でもはっきり覚えるよ。」

「ああ」

「マシュが何も知らないで…いや、知識ではなく、何も体験が積もってない状態でいた事に、キミはとても怒った。今でもはっきり覚えるよ。」

「ああ」

「マシュが何も知らないで…いや、知識ではなく、何も体験が積もってない状態でいた事に、キミはとても怒った。今でもはっきり覚えるよ。」

「ああ」

「マシュが何も知らないで…いや、知識ではなく、何も体験が積もってない状態でいた事に、キミはとても怒った。今でもはっきり覚えるよ。」

「ああ」

「マシュが何も知らないで…いや、知識ではなく、何も体験が積もってない状態でいた事に、キミはとても怒った。今でもはっきり覚えるよ。」

「ああ」

「マシュが何も知らないで…いや、知識ではなく、何も体験が積もってない状態でいた事に、キミはとても怒った。今でもはっきり覚えるよ。」

「ああ」

「マシュが何も知らないで…いや、知識ではなく、何も体験が積もってない状態でいた事に、キミはとても怒った。今でもはっきり覚えるよ。」

「ああ」

「マシュが何も知らないで…いや、知識ではなく、何も体験が積もってない状態でいた事に、キミはとても怒った。今でもはっきり覚えるよ。」

「ああ」

「マシュが何も知らないで…いや、知識ではなく、何も体験が積もってない状態でいた事に、キミはとても怒った。今でもはっきり覚えるよ。」

「ああ」

「マシュが何も知らないで…いや、知識ではなく、何も体験が積もってない状態でいた事に、キミはとても怒った。今でもはっきり覚えるよ。」

「ああ」

「マシュが何も知らないで…いや、知識ではなく、何も体験が積もってない状態でいた事に、キミはとても怒った。今でもはっきり覚えるよ。」

「ああ」

「マシュが何も知らないで…いや、知識ではなく、何も体験が積もってない状態でいた事に、キミはとても怒った。今でもはっきり覚えるよ。」

「ああ」

「マシユが見下ろし、ロマニはぼつりと言った。

彼が自分に友情を感じてくれているのは素直に嬉しい。
だがそれとこれとは話は別だ。俺だって死ぬ気がないし死にたくないが、公的には優先順位というものがある。

私的には幾らでも私情を垂れ流しはいが、ロマニや俺の立場を考えればそれさえも自制すべきなのだ。
なぜなら今のカルデアは、ロマニという存在と、俺の実績によって保っているようなもの。せめてカルデアのスタッフらがメンタル面で持ち直すまで、あらゆる場面で泰然としていなければならない。

感謝しているのは俺も同じなんだよ、ロマニ。

「感謝していいるのは俺も同じなんだよ、ロマニ。」
「え…？」

「カルデアに雇われたお陰で人理焼却から免れた。命の恩人なんだ、お前達は。そしてこんな俺が、強制的とはいえ正しい味方じみた業に携わられている。…形だけの、看板だけの正義の味方だが、こ
うしていられる事はとても幸運なんだと思う—」

「…分かった」

だからロマニ、お前は何も気にするな。正式な雇い主はアニメスフィアだが、今はお前が代行だろう。雇われ者として最善は尽くす。
カルテを縛め、ロマニは数瞬、俺を見て。
何かを言いかけ、酷く迷う素振りを見せた。だが、

「ロマニ・アーキマン」

オルタが唐突に口を開き、ロマニに釘を刺した。

「ロマニ・アーキマン」
黙っている。それはシロウが知る必要はない事だ。
黙れと言った。私は気にしないし、シロウも知った所で気にしない。だから余分だ、それは無駄な事を責める自己満足で口走ろうとしている。自制しろ。死ぬまで一。

黙っていろ。そ・れはシロウが知る必要ない事だ。

当人の前で堂々と秘密事が？余り良い気はしないな。

人間誰しも秘密は抱えているものだが、こうも明け渡けにされるなら、シロウも知った所で気にしなくて良い。

思わず呆れると、オルタはそっとを向いた。アルティアは何も言わない。ロマニも気まずそうだ。

マシュもそろそろ起きそうな気配をする。よく分からんが、俺が知ってもどうしようもない事なんだろう。なお判断しろ、ロマニ。

まるで、何に来たロマニ。スタッフを使わず、わざわざ自分で俺の所まで来た事情を言う。どうせろくでもない事だろうけどな。

何が流石だ、そんなあからさまに何かありますよって面してお思い。

マシュもそろそろ起きそうな気配をする。よく分からんが、俺が知ってもどうしようもない事なんだろう。なお判断しろ、ロマニ。

まるで、何に来たロマニ。スタッフを使わず、わざわざ自分で俺の所まで来た事情を言う。どうせろくでもない事だろうけどな。

何が流石だ、そんなあからさまに何かありますよって面してお思い。

お見通しだ。流石だよ。

何が流石だ、そんなあからさまに何かありますよって面してお思い。

お見通しだ。流石だよ。

何が流石だ、そんなあからさまに何かありますよって面してお思い。
「………………」
「………………」
「………………」

「………………」
「………………」
「………………」

「………………」
「………………」
「………………」
し、かし、腐っても仕方ない。俺はロマニに提案するか、なった。
「新規のサーバントを二騎、出来るならば三騎召喚した。
至急手配するようレオナルドに言っくれ」
人理守護隊
宮～

― あ な た の 名 前 は、な ん で す か？

人理継続保障機関に、マスターとし て 招聘され よ り 数 日。

色 彩 の 欠 い た 少 女 は、儀 礼 的 に そ う 問 い か け た。

咄 嘆 に、返す言葉を 見失っ た。

無垢 と い え ば、無垢。
し か 根 本 的 に は 別 種 の、ど こ か 冬 の 少 女 を 彷 彿 と さ せ る 無 色 感。

せ ら ゆ る 虚 飾、欺瞞 を 淘 汰 す る 清浄な 視 線 に、俺 は な ん と 答え る べ きか 判じた の だ。

衛宮士郎、と 名 乗 れ ば い い。
そ れ で い い は ず だ。
こ れ ま で そ の 名 で 通 し て き た。
こ の 名 を 名 乗 る こ と に 些 か の 不 具 合 も 感 じ な い。

― な の に、そ の 名 を 口 に す る 事 を 俺 は 酷く 躊 躊 っ て し ま っ た。

思 い 出せ な い、本 当 の 名 前。

衛宮士郎が 本 名 だ と 理 解 し て い る。
衛宮士郎 と い う 记 号 は 己 を 表 す の だ と 了 解 し て い る。

な の に 何 故 躊 躊 う の か。
違 和 感 も 异 物 感 も な い の に、ど よ し て す ぐ に 答え ら な か っ た の か。

問 う れ て も、返す も し 本 一 瞬 の 迷 い と 共 に、俺 は 本 い つ か り 当 の 名 前 を 舌 に 乗 せ る。
偽 り だ と 感 じ る の は 自 分 だ け で し も っ て い る カ。
おはようございます、先輩。朝ですよ。今朝からスケジュールはきつつですが、いつも通り頑張りますよう！

束の間、ユメを見ていた。

医務室にやって来たマシュの、気合い十分な姿に霧散した夢見心地。曖昧な歯車の残照が、ふわふわとした現実の重さを取り戻す。

俺は大儀そうに体を起こす。ベッドから抜け出してなんとしに体の節々を動かし状態を整え、病人服のまま後輩と呼ぶには歳の差のあいだぎる少女に挨拶と共に短く問いかけた。

「おはようマシュ。今朝は何をする予定だ？」

寝惚けているのか今一予定を思い出せない。マシュは一瞬、目をぱちくりとさせた後、やや戸惑いがちに説明してくれた。

「ええ？え、と…。新たな特異点へのレイシフトまで後二日。今と明日を挟んで、明後日の午前十時丁度に作戦を実行する運びになっております。それまでに先輩は、今日と明日を利用して、新たなサーサヴァントの召喚を試み、内何騎かはネロさんと仮契約して頂くよう説得すると昨日ドクターと話し合われたはずですが…。

…そう、だな。うん、そうだった。思い出したよ。

…や、ええと…。新たな特異点へのレイシフトまで後二日。今と明日を挟んで、明後日の午前十時丁度に作戦を実行する運びになっております。それまでに先輩は、今日と明日を利用して、新たなサーサヴァントの召喚を試み、内何騎かはネロさんと仮契約して頂くよう説得すると昨日ドクターと話し合われたはずですが…。

「おはようマシュ。今朝は何をする予定だ？」

「はい。今朝と明日は、新たな特異点へのレイシフトまで後二日。今と明日を挟んで、明後日の午前十時丁度に作戦を実行する運びになっております。それまでに先輩は、今日と明日を利用して、新たなサーサヴァントの召喚を試み、内何騎かはネロさんと仮契約して頂くよう説得すると昨日ドクターと話し合われたはずですが…。

実現したか？

束の間、ユメを見ていた。
マシュが自らの霊基の名を知った事で、彼女と契約していると守護の力がマスターに付与されるのが判明。その守護の力の配分は、マシュ本人の意識的にか無意識的にか割り振られる。人外魔境では非常に頼りとなる力では疑いの余地がない。

俺は頭を振る。眠気を晴らしてマシュに言った。

「……さて。朝一番の英気を生むためにも、まずは飯にするとしようか」と何が良いか。ここは無難に白米に味噌汁・簡単なサラダと鯖の塩焼きにしようか。何事も人間の気力次第。何を成すべきもまずはやる気になる事が大切だ。一日の活力となる朝食を抜くなんで有事の際を除いて有り得ない。「朝御飯の支度、わたしも手伝いますね！」と白衣の少女は元気よく相槌を打ってくれた。そうだな、そうしてくれると助かると微笑み。俺はとりあえず洗面台に向かって顔を洗い意識を覚醒させた。目の霞んだ先に幻視する。高度な文明が集団されたカルデアの灯。清潔で、冷徹で、人の居住区画として些か生活感の欠けた風景にしかも、生活感の大切さを思い出すのだ。しかしこ時々、平凡な屋敷の住まいが恋しくなる時がある。その度に、生活感の大切さを思い出すのだ。
第二特異点の人理定礎を復元してよりマシュは変わった。

根っここの部分はそのままに、より活路に、より積極的に、より能動的に振る舞う、外の世界を知ったばかりの一動物じみた印象を受け、よい変化なのだろう。微笑ましく思う。

廊下に出て、通路を辿り食堂を目指していると、不意に背後から聞き慣れた小動物の鳴き声がした。振り向くと、ふわふわとした白色の獣が飛び掛かってくるところだった。

顔にぴたりと止まって、頭の上に登り、そこからマシュの肩に飛び移った獣はもう一度フォウ！と愛らしく鳴いた。

「フォウ！フォウ！キューッ」

「…おはようフォウ。しかし、フォウは何を食べるんだ？リスと同じ木の実とかでいいんだろうか？」「フォウ！フォウ！キューッ」

相好を崩しつつ、指先でフォウの顎を撫でると気持ち良さそうに目を細める。

そんな事はないのになんだか久しぶりに見た気がする白い獣。頭の思い出とマシュ、フォウを並べてみると微妙に絵面的にマッチしていって可笑しかった。

何を食べるか分からないので、とりあえずこの小動物の反応を見ることに目を細める。
ながらぼちぼち試すかな、と思う。

少女と小動物の組み合わせはなかなかいいものだが、なんてのん
びりとした事を考えつつ、俺は食堂に着くと手早く朝食の用意を始
めた。

そういった時間帯には食堂でスタンバってるんだが

アルトリアさんがオルタさんは現在、アルトリア・ゲートで仮想竜
体これくらいの時間帯には食堂でスタンバってるんだが

種と延々疑似戦闘を行っています。なんでも逆鱗。

朝早くから何から何に向かっても動かない様子。邪魔するのも悪いから何も言
わずにおくのが吉か。フォウ、と呆れた風に嘆息した小動物に、俺
はなんとなく苦笑する。

朝食の支度を終えて、僅か10分で二人分の米が炊けたのにや
っぱこの釜欲しいとカルデア驚異の技術力に感嘆する。小動物に、俺
もちゃんと食べている。ドレッシングも避ける様子はない。後ブチ
トマト辺りが気に入ったと見た。

...「フォウ！」
「あっ、ああ。すまん」
「さあ...」
「さあ...」
「あ、ああ。すまん」
「さあ...」
「さあ...」
「あ、ああ。すまん」
長閑な空気の中、食器の音だけが鳴る。やがてマシュやフォウ共々綺麗に平らげると、ごちそうさまの挨拶を置いて、俺は食器を纏め台所に移動した。

「そうえいば先輩は、この後の英霊召喚についてどう思われていま
すか？」 令を言うと、俺は密かに抱いていた懸念を、そのまま口に出したマシュに一瞬曖昧な問いに、俺は食器を洗いながら聞き返す。質問の意図が不明瞭だった。

「あの……なんと言いますか。まあ、アルトリアさんが来ちゃうよ
うな気がするんです——」 と、俺が密かに抱いていた懸念を、そのまま口に出したマシュに一瞬手が止まった。すぐに動き出し、俺は応じる。

そんな同じ奴は来ないだろう。そこで、マシュが揃う訳がない。「どんな確率だ」ということだ。それゆえ、カールデアの英霊召喚システムは緩いと言いますか。正直あり得ないとは言い切れないので、と——
まあ何を言ったところで結果が変わる訳でもない。何時の時代の奴が来ても相応の対処はするさ。
一一例えばどうなものか？
一一例えば・青髭とかだな。奴は問答無用で退去させる。子供を害するという事は、人の未来を奪っている事に他ならない。そんな輩と肩を並べるのは不可能だ。

なるほど……。

例えはどんぶつにです。

ジル・ド・レェは救国の英雄である。知名度的に聖女のジャンヌ・ダルクが持ち上げられるが実質的にフランスを勝利させたのはジャンヌ・ダルクはジル・ド・レェの添え物でしかなかった。

英霊としての格は、どうしたって聖女の下になるだろうが、実力で言えばジャンヌなど歯牙にも掛けぬものがある。最盛期の元帥としてなら、戦略という見地からすれば非常に頼りとなるだろう。
だが、人格的に信用ならない。如何なる理由があれど、聖女の火刑の後に狂い数多の罪業に手を染めた事実は動かないのだ。信奉する聖女が守ったはずの国から裏切られ処刑されたとしても、全く関係のない無辜の民を傷つけていい理由にはならない。

自分は酷い目に遭ったから酷い事をしてもいい。なんて悲劇の主人公ぶつ振る舞いをする奴は軽蔑に値する。そんなに赦せないなら反乱でもして当時のフランスの上層部や異端認定した輩を根絶やしにすれば良かったのだ。当時のジル・ド・レュの名声や実力からして、相当良いところまで行けたはずである。まあ最後は普通に破綻するだろう。それをせずに弱者にのみ悪意を向けたジル・ド・レュは、はっきり言って気骨の欠けた匹夫示さない。

雑談はそこで切り上げ、俺はマッシュと共に英霊召喚ルームに移動した。

とてとてと付いてくるフォウに和む。癒し系小動物は見ていてとても気分が和らぐ。かわいいは正義と人は言うが全くその通りだ。正義の味方としてかわいいの味方になるのは正しい事である。フォウはもう駄々甘に甘やかして、これでもかと可愛がるのがいいかもしない。

そんなことまで到着した儀式の間。俺はマッシュの盾が設置されるのを見届けて、心想した。

アルトリアが出てきたらどうしよう......
個のには嬉しいのは嬉しい。彼女の別側面とか別の可能性とか
しかし、しかした。現実的に魔力が足りないので勘弁して欲しい
のが本音。どういうわけか、自分と彼女のは深く、下手すれば全
クラスをコンプレックスそうな恐怖がある。もしアルトリアが来
たら……どうしたらいいのだろう。

更だ。どのみち戦力は多いに越したことはないと諦めるしか
ない。俺は決然と告げた。「始めよう。ロマニ、レオナルド、こっちの準備は整ったぞ。呼符
も確かに設置したから、こちらでも確認したよ。霊基一覧も起動した。
電力を廻すからいつでも始めよう。ああ、と頷き、俺は召喚システムを作動させる。
爆発的な魔力が巻き起こる。青白い光が呼び出される霊基に輪
郭を与えていく。ああ誰が来る。槍トリアか。弓トリアか。騎馬トリアかそれとも
エクストリアか。誰でも来い、と腹を括った。もうあれた、ここま
で来た覚悟も出来た。円卓系ならどうせと思う。

ああ、アルトリアじゃなくて円卓の騎士か。ランスロットはダメ
だ。ガウェインかこの前アルトリアの言っていたアグラヴェインが
いい。特にアグラヴェインとか今のカルデアに必要な人材である。
あ、アルトリアを連れてくればよかった、と思う。明日はアルトリアを連れてこようと決めて、俺は光の中に出かけた。

よく来てくれた。カルデアは召喚に応じてくれたサーヴァントを歓迎する。

儀礼的にそう告げる。

俺は衛宮士郎。こっちはマシュ・キリエライト。よければそちらの真名とクラスを教えてくれ。

俺は衛宮士郎。こっちはマシュ・キリエライト。よければそちらの真名とクラスを教えてくれ。

答えない。重苦しい空気だった。

答えはない。重苦しい空気だった。

「…」「…」絶句、した。マシュもまた、絶句していた。

「…」「…」絶句、した。サーヴァントも、絶句していた。

光が失せる。視界が安定する。そうして徐々に明瞭となっていく視界の中。まず目に映ったのは逆立った白い髪と浅黒い肌。赤い外

「…」「…」絶句、した。マシュもまた、絶句していた。

「…」「…」絶句、した。
暫し、沈黙したまま向き合い。
赤い外套の弓兵は、なんとも複雑そうに名乗るのだった。
「……アーチャーのサーヴァント、召喚に応じる気はなかったが、
気づいたら此処にいた。強引にオレを呼びつけるとは、物好きにも
程があるな？」

新たに二騎か三騎召喚する内の、記念すべき一騎目に。
なんて因果か、よくよく縁のある男を引き当ててしまった。

「……」

誤魔化しそうがない。俺は遠くを見た。神様って奴はほんと良い
趣味してるなぁ。なんて。不覚にも、現実から逃避してしまった。

そう。英霊召喚サークルの中心には、
あの、英霊エミヤがいたのだ。
円卓の衛宮

所変わって食堂である。

時刻にして14時35分。局員らの憩いの場として賑わっていた食堂の片隅で腕を組み、立ったまま壁に背を預けて沈黙している男は、「食堂の片隅で腕を組み、立ったまま壁に背を預け、沈黙している食堂の片隅で腕を組み、立ったまま壁に背を預け、沈黙している」を変わって食堂で、溜まっていった食器を軒並み片付けたものも少し前。人気が散ってすっかり淋しくなった食堂で、溜まっていった食器を軒並み片付けた男は。

局員らの憩いの場として賑わっていた食堂の片隅で腕を組み、立ったまま壁に背を預けて沈黙している男もまた非常に悩ましげに眉を颦めている。黒ペンのキャップを抜き、持って来たホワイトボードに乱暴に「円卓の衛宮」と殴り書きをした。事件発生である。

強い空気の中、男は極めて重々しく口を開く。誤解を避ける為に言うが、彼は限りなく真面目だった。事実見つけ足すと、彼は血迷っている。

「第一回、チキチキ円卓の衛宮開幕です。全衛宮は素直に言う事を聞かせなさい。聞かなきゃ今呪を使うのでそのつもりで」
無言の重さは剣の丘、或いは起源切り嗣ぐ魔術回路といった所か。

ホワイトボードに「議題」を書き込み、暫しペン先を虚空にさ迷わせ、やや躊躇いながらに「特異点F炎上汚染都市冬木」と記入する。途端に弓兵の顔がびくと引き攣った。

さて、まずは何か話すべきか…。

ホワイトボードへまず「弓宮」と記入。その下に「俺宮」と書いた。微妙に分からないように口を揺さぶる。
変な奴を見る目で暗殺者と弓兵は男を見た。
そして、弓兵の横に「被害者」と書く。男は振り返り、左右のエミヤに向けて厳粛な面持ちで問いかけた。

「これでおーけ？」
「待って」
「待って」

「待って」

「これでおーけ？」
「待って」
「待って」

弓兵は苛立たせに吐き捨てた。暗殺者も赤いフードの下で物言いたげである。

「貴様、よくも私は被害者等と言い張れたものだな。
余り言った口じゃないが、駒の持ち手が被害者面するのは気にわからない。
兵士の撃った銃の引き金は、上官のものとして計上するべきだ。」

「ふむ」

彼は率直に告げた。ずるずると蟠りを後まで引き摺るほどガキではないし、そもそも彼は英霊エミヤを嫌っている訳でもない。いや寧ろこの世で最もリスペクトする英雄のトップ5以内にランクイン
し て いる ほ ど だ。な の で な ん ら 負 の 感 情 も な む 彼 に 言 え る。
心底 嫌 そ う に エ ミ ヤ は 顔 を 坐 め た。
彼 が こ う ま で 露 骨 に、ほ ぼ 無 条 件 に 憎 悪 感 を 出 す の は、世 界 広 し
とい え も 衛 宮 に 対 し て で き ら ろ。それ 以 で は 大 抵 情 状 を 酌 量
して、相 応 し い 態 度 を 計 算 し て い る は ず で あ る。
エ ミ ヤ は 男 か ら の 言 葉 を ば っ さ り と 切 り 捨 て た。彼 に と っ て も、
そ ん な も の は 無 価 値 で し か な い の だ。
「 端 か ら 貴 様 に 謝 ら れ た い と 思 っ て お ら ん わ、戯 け 」
話 ま る 所、あ の 時 は 敵 対 し て い た か ら 戦 っ た と い う で き ら す
エ ミ ヤ は あ の 時、聖 杯 の 泥 に よ っ て 黒 化 し、思 想 能 力 が 低 下 し
た。持 ち 前 の 心 眼 が 彙 っ て い た の だ。そ う な ら ば 本 來 の 実 力 を 発
揮 で る は も な く、ア サ シ ン と い う 鬼 条 を 持 っ て い た 衛 宮 に 敗 北
し た の は 自 然 だ っ た。
「 な ら イ。恨 み こ こ な し、そ こ は 割 り 切 ろ う ゆ。お 互 い ガ キ ジ
な ん ら し な ー」
「 な ら イ。恨 み こ こ な し、そ こ は 割 り 切 ろ う ゆ。お 互 い ガ キ ジ
な ん ら し な ー」
「そうだが。だがそれはそれで、オレと聖人君主ではない。

衛宮は頷く。エミヤが言いたい事は解っていた。聖人君主が敗けたま
まの後に言いたい事があるのは貴様も了解しているだろう。

然もあらんとエミヤは頷いた。彼は自分との対決の不毛さを弁え
ているが、かといってあんな負け方をしてそのままにしておけるほ
ど大人でもなかった。

「自傷は趣味ではないが聞いておこう。あの時、もしオレが黒化し
ていないかった場合、貴様はオレを倒せたか？」

「ああ。

衛宮は即答した。彼はエミヤの手札を知らなかった。こんな好条件で戦って、どうやれば
負けるというのか。しかも、こちらにはマシュもいたのである。勝
算は充分すぎるほどあると言えた。

「まあ懸念はあるかな。遠距離からの狙撃をそちらが徹底した場合、
こちらの執る行進は二つ。アーティアを無視して本丸に乗り込む
か、狙撃を防ぎながら狙撃手に接近するかだ。」

「オレを無視した場合、オレはセイバーと合流しようとしただろう。
そうするよな、当然。それは非常に面白くない。」

キャスタークラスのクー・フレリンが後から参戦してくれただろ

キスカスのクー・フレリンが後から参戦してくれただろ

あとの時にアーティアとセイバーを同時に相手にするのは非常にマ
ズかった。」
その後の事実、オレは只管に狙撃ポイントを移りながら執拗に盾の少女を狙っていただろう。今の彼女は知らないが、あの時は心に隙が見えた。確から徹底したろうさ。俺はマシシュを激励しつつ、意地でも俺前を俺の射程圏に収め、カリドボルグからの壊れた幻想コンボを叩きつけようとするだろう。
マシシュはあれでガッツがある、苦戦するだろうが俺の射程距離にお前を捕まえる所までは行けたはずだ。
「？...ま、そうだな。射撃戦で貴様がオレに勝るとは思えんが、交戦開始より7分から14分辺りで貴様の第1射が始まったろう。一瞬、エミヤはあの時の状況を脳裏に浮かべ自らの戦闘論理に沿って、カリドボルグは強力だが、連発出来る代物ではない。広範囲を巻き込む壊れた幻想に繋がれると爆発に巻き込まれてはかなわない。故に、この確実に薄紅の七枚盾を展開した筈だ。そうすれば、投影品の螺旋剣は完璧に遮断される。」
「それで詰んだ。」
「それで詰んだ。」
切嗣が懐からナイフを取り出す。物の構造を把握することにかけては異能じみた眼力を誇るエミヤである。その異様さを瞬時に察する。そしてあの時、自身を仕留めたナイフの存在と思い出し、エミヤはその顔が苦り走るのを抑えられなかった。

皮肉に、エミヤは呟いた。

彼の身の上を知らされたエミヤの驚愕を、絶望と諦念を、理解し得者はいない。

双方共に敢えて親しくする気も、何かを話す気にもならず、エミヤは切嗣を避け、切嗣もエミヤに関心はない故に関係を改めようとしている内に、なんとかやや戦友として付き合うようになれる戦っている内に、なんとかやや戦友として付き合うようになれる

『熾天覆う七つの円環』は最高の護りだが、その性質上魔力送り込む事で強度を高める事が出来る。つまり、アイアスは魔術回路
と繋がった魔術礼装と同系統の物。切嗣の第二宝具を撃ち込まれたら如何なアーチャーでも無力化してしまう。違うか？

それ故に加えて、切嗣の気配遮断のランクがかなり高い事もオレは体感した。アイアスを展開した所を狙い撃たれたれば結果は同じ。

何も伝えずに舌打ちし、エミヤは言う。

忌々しげに舌打ちし、エミヤは問う。

切嗣や自身と同系統の戦闘論理を持つ衛宮、この二人に加えても負の盾の少女、二人の騎士王にローマの第五代皇帝、アルカディアの狩人にあのアイルランドの光の御子。

これだけ揃っていて更に英霊召喚を試みるとはどれほどの事態が起こっているのか。人理の危機は承知しているが、その詳細を知らないエミヤはそれを説明して貰いたかった。

衛宮は心せよ、そして絶望しろ、とエミヤに言う。特異点Fからの第一特異点の戦闘詳細、第二特異点での顛末を聞くにつれエミヤは顔を陥しくし、更に明後日二つの特異点を同時に攻略すると聞かされ頭を抱えた。

...貴様、よくや善からぬモノに呪われているのではないか？

...貴様、よくや善からぬモノに呪われているのではないか？

人が気にしている事を...だ。アーチャーも俺達の窮状はこれで理解してくれたなら？

全面的な協力を要請する。アーチャーも俺達の窮状はこれで理解してくれたなら？

全面的な協力を要請する。アーチャーも俺達の窮状はこれで理解してくれたなら？

人類滅ぶべしという世界の悪意が聞こえて来そうである。

人類滅ぶべしという世界の悪意が聞こえて来そうである。

...貴様、よくや善からぬモノに呪われているのではないか？
深々と頭を下げた衛宮を、エミヤは複雑そうな目で見るしかなかった。最初からこうだ。こちらは何かにつけ邪険にするの、衛宮は全くエミヤに敵意を向けない。そのせいでどれだけやり辛く感じるか、やはりこの男には解らないのだろう。意地を張るのもバカらしくなる、まるで一人相撲ではないか。馬鹿馬鹿しくなり、エミヤは嘆息して言った。「…ん？」「ああ、有り難く思う。そして言質取った。早速力貸してくれ」「ああ。有り難く思う」「あ。やむをえない。こんな時に私情を交えるほど私も愚かではないので。人類史を護るために、貴様に力を貸してやる。有り難く思う」「あら、投影願む。いやぁっ、まさかアーチャーが来てくれるなんてなあ！ 助かるわ！いやほんと。じゃ、後頼んだぜ。じゃあな」、「なん…？」「だと…？」「…？」「ええ、投影願む。いやぁっ、まさかアーチャーが来てくれるなんてなあ！ 助かるわ！いやほんと。じゃ、後頼んだぜ。じゃあな。」
紙面には、螺旋剣が一日何本、赤原猟犬が一日何本等と事細
かに投影道具量産の要請が書き込まれてあった。
思わずエミヤは切嗣を見た。思いを一時退け
切嗣はそれっきり、エミヤから視線を切って食堂から立ち
一人残された彼がホワイトボードを見ると、そこには何時の間に
書き足されていたのか、議題2の所に『マスター命令は絶対』と記
されていった。
これで負担が減るやッフッフッ！
衛宮の歓喜の雄叫びがエミヤの耳に届き、
この時、エミヤの中に殺意の波動が芽生えたのだった。
カリデアの救世主

「我ら影の群れを従えた以上は勝利も必至。ご安心召されよ、マスター。」

その日、カリデアは沸いた。

薔薇の皇帝ネロのマスター勢としての加入によって『唯一』と冠されるマスター、衛宮士郎の負担が軽減されたのだ。英霊エミヤの加入によってである。

マスターの消耗は、少なからず軽減されたが、その実績と実力から多大な信頼を寄せられたマスター、衛宮士郎の負担は大幅に減じ、カリデアの誇るマスターが英霊に至りうる人物であったことが判明してカリデア職員の士気があがった。

それだけではない。続く第二召喚により、士郎は凄まじい引き運を発揮。召喚サークルから発されるアサシンの霊基パターンに一瞬気落ちしかけたが、カリデアの人手不足を一挙に解決してのける人材を獲得したのだ。一そう。百貌のハサンである。


召喚早々悪いが、お前を戦場に連れていくことはない。

最初、実力不足と断じられたと感じた百貌は不満を覚えたようだ。

カルデア救世主ハサン誕生の瞬間である。

そこで、伝説の騎士王や神話最強の英雄にも似た力がマスターとしてある俺の使命！俺達の、人類の命運はある意味でお前達にかかっていると言っても過言じゃない！頼む、地獄のような戦いを淡々と勝ち抜く、カルデアを救えるのはお前しかいないんだ！

そこでは、前の話は置いておき、百貌のハサン、その真の力を遺憾なく発揮させる事こそがマスターのための最前線こそが山の翁足るハサンに相応しい。

『なぜ、カルデアの為、ひいては人類継続の大義のため、身を前工程に付けるに至らぬ』

― なんですよ？

― まず、誰かが独立して― それはも低燃費で― 活動できる彼、或いは彼女は、今のカルデアが喉から手を出すほど欲する存在だったのだ。

その事実にいち早く気づいた衛宮士郎は発狂した。急ぎロマニ・アーメンとレオナルド・ダ・ヴィンチを呼び出し、共に発狂した三人で百貌のハサンを説得。カルデアでの業務をダ・ヴィンチを筆頭に数人の職員で数日間仕込み、ハサン約百体をカルデア運営に回すことがだちに決定された。
力を振り絞り、微弱ながら抑止力を働かせてカルデアをバックアップ

「…不穏だな」
「ああ、不穏だ」
アルコーレがインして見事に出来上がっている士郎を横に、ぼソ
と溢れたのは弓兵のエミヤである。そして暗殺者のエミヤもまた、
彼と同く奇妙な予感を覚えていた。歴戦の苦なもの二人が同様の予感を懐くも、他に同意する者はい
りと溢したのは弓兵のエミヤである。そして暗殺者のエミヤもまた、
どこに隠し持っていたのか多種多様の酒類を持ち出した士郎によ
り、既にネロとアタランテは壊沈。クー・フーリンやハサンも意識
が混濁している有り様。お子様なマシュは寝ねの時間であり、幸
うじて意識を保っているのは初期からの付き合いがあった故に退避
が間に合ったアサシン・エミヤ、士郎の作り出した料理の方に意識
が向いていたアーチャー・エミヤ、そしてアルトリアのみである。
オルタリアとアルトリア・オルタは、士郎のすぐ傍にいたが為
のに一番に沈んでいた。

レベルは近い、ここまで来るとどちらが上かではなく、純粋に己
の持ち味を比べ合い楽しむ方向にシフトするものである。

エミヤは錯乱しているとしか思えない士郎を横目に、切嗣へ言う。- - -
「……そそろ止め方がいいんじゃないか？」
「いや、止めたくない」
「そそろ止めた方、いいんじゃないかい？」

知っている顔ばかりの職場であるが、エミヤには特に不満はない。完
全究極体へ変貌したあのランサーとは是非とも距離を置かせて
貫いたもので、今の所これといった絡みはない。しかしこぼ麻摩
ツととしては元気を修復に臨むことになるとは思いもしなかった。自
身の養父とは双子と言うべきだと言えますが、何にもの複雑な心
境にさせられる。まあ似たような戦闘理論、戦術目を持つということもあり、これ
合う部分があるのには面映ゆい気分にされるが、悪い気はしない。
切嗣の返答に、エミヤはやや意外そうに眉を跳ねる。
「流れが来ているのは確かだ。お前もうそういうモノが大事だとい
うのは知っているだろう。」
「そのは……知っているが……」
「あのマスターは調子に乗れば乘るほど何かを起こす。今回もそれ
良い方に転ぶことを祈るんだな。」
「……分の悪い賭けは嫌いかんだがね。まあいいさ。言わんとして
いることは分る。一先ず放っておこう。」
切嗣の言い分は意外だったが、傾ける所はある。長い間戦場に身を置いていたと思える時があるのだ。今、自分に運が向いていることを、『流れ』と呼べない奇妙な運気を。そう言う時は、不思議な何かをしても死なないものだ。銃弾飛び交う死地で、弾の方が自分を避けていると感じるのである。

そうか、エミヤはそういった運を呼べるものを軽視しない。それでは切嗣も、そして己とは別人である衛宮宗像も同じだろう。

「乗るしかない、このビッグウェブに！」「乗るしかない、このピックウェブに！」

『調子に乗っていた。酒を飲んで呑まれていた。今は反省していらない。』

赤い悪魔と相乗効果を引き起こすという、ともすれば特異点化も夢だ。
ではないほどのパニック源の半分。防犯のためカルデュで酒気帯び召喚禁止の発端となった事件が今、士郎の手によって起ころうとしていた。シロウ、それが呼符なるものですか。「酒気帯び召喚禁止」の発端となった事件所は召喚ルーム。アルトリアがしげしげと興味深げに金のプレートを眺める。士郎は召喚ルームに設置されたままとなっているマシュの盾に呼符をセットした。「ああ！これが！これこそがカルデュ驚異の科学力！複雑な召喚術式の内容は俺が一生かかっても理解できない代物だ！これを媒介に召喚された英霊は、漏れなくカルデュの英霊召喚システムに接続され、通常戦闘ならカルデュの英霊を基におこうことが出来るようになる！何がどうなってそうになってるのかなんてまるで分からんね！」「なるほど」をコーティも士郎に回ってきた運気を感じていた所である。天ダ・ヴィンチも士郎に回ってきた運気を感じていた所である。
才ゆえにそれを感じていたから、士郎の要請に応じて召喚ルームに電力を回したのだ。ややすると、本当に円卓の騎士が召喚できるかもしれない。召喚出来れば戦力の向上は確実だ。試さない手はない。

「ああ天才だって黒が差す時ぐらいあるのだ。

そんなわけで召喚である。もちろん後一騎は呼ぶ予定だったこともあり、手配は滞りなく進んだ。士郎はアルトリアの背を押す。アーロリアは稼働した召喚システムを通じて、目を酒気に眩らすつややふうに睨んだ。

厳かに告げた。

「モードレッド以外の円卓の騎士よ！今こそ私が呼び声に応じて来たれ！もし来たらモードレッドは即座に退去させるとして、後の円卓の騎士は歓迎します！」「もっと熱くなれよ！」「えっ！」「本音をさらけ出せよ！」「もっと素直になれよお！」「わ、分かりました！」「ランスロット被害者面うぜ！貴様ら二人以外なら誰でも！」「ちょっとアグラヴァイン貴方に決めた来いアグラヴァインなんっ！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグラヴァイン——！」「アグ
流石天才である。その予感は正しい。果たして滅茶苦茶な魔力の指方向に召喚システムは誤作動を起こし、霊基パターンが狂いに狂って特定のクラスにサーヴァントを招くことが出来ない。カルデア職員が叫んだ。

サーヴァントの霊基パターントが乱れていて、まともなサーヴァント召喚シーテムは誤作動を起こし、霊基パターが狂いに狂って特定のクラスを呼び出す。「誰かあの二人を止めろなんだぁ！」「サー・アグラフェイン！お召しにより参上致しました。我が王よ、再び御身のもとに侍ることをお許しください。」おお、サーヴァント・アグラフェイン！まさか本当に来てくれるとは！

一方サーヴァントこそが、鉄のアグラフェイン。厳つい顔立ちの黒騎士。円卓崩壊の序章を担ったブリテンの宰相である。彼の辣腕ぶりと、その仕事ぶりを知るアルトリアは素直に喜んだ。人柄についても信頼のおける、円卓の数少ない良心だ。問題児はかわりの円卓を率いたアルトリアの感動も一入だった。
突 然 静か に な っ た 士 郎 は、無 言 で 騎 士 と 騎 士 王 を 見 る。
そ し て オ マ ス タ ー、聞 い て の 通 り 我 名 は ア ラ ヴ ォ イ ン。騎 士 王 マ ー サ
に 仕 え し 者。不 安 定 な 召 喚 の ツ ケ か、ク ラ ス の な い 亡 靈 の よ う な
状 態 だ。力 な れ る か 分 ら な い が、よ ろ し く 頼 む。
そ う か。そ は 別 に い い。よく 来 て く つ な。
サ ル デ ア は 貴 方 の 参 阵 を 歓 迎 す る。
茫 洋 と し た 眼 差 し で、士 郎 は 晴 や に 顔 を て い た。
クラス の 枠 に 嵌 ま っ て い な い、サ ル デ ア と し て 完 全 で は な い
亡 靈 と し て の 現 界 に 取 り 乱 す 気 配 は 微 塵 も な か な い。ア ラ ヴ ォ イ
ン は そ の 泰 然 と し た 雲 囲 気 に 士 郎 へ の 心 証 を 上 方 に 設 定 す る。
初 対 面 だ か ら 揾 抜 し な い と。そ う い え
の 身 内 の 身 内 に 召 喚 さ れ た。原 素 物 体 や ラ ヴ ォ イ ン
は ア ル ト リ ア の 活 動 を 知 ら な い。せ っ か く 真 し に
の 身 内 に 朋 を 持 っ て る の だ か ら ア ル ト リ ア を 話 す 出 し に 使 お る。ま ず は
ラ ト リ ア を 誓 む と こ ろ か 入 る べ し。
だ ま え は 貴 方 の 参
陣 を 歓 迎 す る。
だ 口 落 の チ ョ イ ス が 最 悪 だ。
マスターの言葉。王の、本来の性格を感じさせる照れた顔。最高だなんていきなりトラウマ地雷を踏み抜かれたアグラヴェインは発作的に激怒した。そして、そのまま士郎の顔面を殴り飛ばし。吹き飛んだ士郎は多くの機材を巻き込み損傷させる。風の如く駆け、士郎のマウントを取り憎悪の叫びを上げて拳を振り下ろし続けるアグラヴェインは発作的に激怒した。誰か止めろ！酔いが醒めて必死に防ぐ士郎。アグラヴェインが冷静だったら即死確定だっただろう。そんな士郎のポケットから、ダ・ヴィンチの工房からくすぐっていった呼符が一枚、溢れ落ちる。士郎の決死の叫びに応えるが如く召喚サークルが再度、起動した。それに気づく者はなく、ダ・ヴィンチらは大慌てで士郎を救出に召喚ルームに駆け出して、我に返ったアルトリアと共に錯乱するアグラヴェインを取り押さえた。そして、ロマニが召喚ルームに駆け込んで来て、なんとか場の収拾に努めようとした時である。
度、召喚サークルが士郎の呼符に反応して動いた。

瞬間。あっ、と間抜けた声が溢れ落ちた。

光が満ちる。光が消えれる。

召喚サークルから進み出てきた人物に、誰よりもカルデアの司令官が驚愕していった。

「〜キャスターのサーヴァント。」

魔術王ソロモン、召喚に応じ参上した。

きみが私のマスターかな？」

一瞬後。冷静になるっで、士郎が叫んだ。

「下手人だ、取り押えろおおお！」
「下手人だ、取り押さえろおおおおお！」

魔術王ソロモンの名に偽りなしが。士郎の発した拘束の呪を息をするように容易く弾き、アルトリアの対魔力を指差し一つで貫通。

取押さえられませんでした。

アシア職員含め、士郎やダ・ヴィンチ、アグラヴェインは召喚ルームから外廊へ強制転移させられた。
「しんじんにそのような行為をさせるな…」

「ロマニーチィッ！…」

過去、神代の魔女メディアが行う可能性とすれ転移魔術へ、なんらかの対策を講じることを意識せられた士郎は素早く周囲を確認し、ロマニの姿がないこととに激しく舌打ちした。

術師の冠位資格者足る魔法術ソロモンは、穏やかな面貌に困惑を滲ませつつ、ある一点で目を止めていたのを、士郎は見逃さなかった。まさかの一瞬で司令塔を見抜くとは、流石の眼力。英雄の君にも引けを取るまい。なんかしして召喚ルームに踏み込んでも、びくともしなくてもさかのべのが素早く手の杖で解析する。

「…駄目だ、古いの城塞並みの神秘で固めらてる対城宝具でないと正面からは破れないよ、これ」

あとの一瞬でこころまでの防護術式を展開するなって、流石に桁外れだなぁ、なんて。どこか感心した風なダ・ヴィンチを横に、士郎は顰めた。

「カルデアの中で対城宝具を撃てる訳あるか。…アグリヴェイモン、なんか出不来ないか？」
先程までの内輪揉めを瞬時に棚上げし、現場に居合わせた唯一の持ちサーウァントに問う。彼もまた、己の王の対魔力の凄さを知る故に、騎士王が魔術で転移させられた実に驚愕していたが、問われるや即座に意識を復帰させ応じる。彼もまた先刻の騒ぎを無かったものとして、冷静かつ端的に答えた。

「出来ない。今の私は霊基が不定、サーウァントとしてのクラスある定まりない亡霊だ。働くのはこの頭のみと思って貰って結構一分かた。では現場の判断により、一時的にロマニの指揮権を預かること。異論のある者は？」

士郎が回りを見渡し誰何するも、職員らはとよりダ・ヴィンチやアグラヴェインにも否はなかった。無言の了解を得た士郎は間を置かず確に指示を飛ばす。意識に酔いはない。明瞭に醒めている。

「レオナルドは防壁の解析を継続。抜け道を探してくれ。」

「はい！—カルデア職員は全て管制室に移動、魔術王からの干渉があるかもしない。第一級警戒体制で当たれ。」

「はい！—と職員らは駆け出していった。すぐにそれから目を逸らし、必ずここに居合わせたであろう存在に指示を飛ばす。」
ハサン、職員の管制室への誘導及びサーヴァントの招集を任せる。

行け、

―御意の影からの応答。カルデアで彼のいない場所はない。一通り指示を行い渡らせ、後はランスラーらが集まるまですることはない。

と、郎はサー・アグラヴェインを見る。彼の前に激発した怒気はな
い。冷徹に事態を分析する。戦乱のマシンを支えた宰相の瞳でマ
スターや見注いていた。彼とのディスカッションは滞りなく進まれるかと判断した士
郎はおもむろに言った。

―魔術王召喚からここまで、取り上げられる要素は？」

魔術王の司令官を一瞥のみで見抜く洞察力。カルデアの司令官が
い出し、召喚ルームに立て籠り現状を把握するために動く行動力。

カルデアの司令官を即座に人質に取る咄嗟の機転だ。城塞並みの防護を一瞬で構築。いきなりの令呪を無効にする反応
の早さまでが魔術王の側から読み取れる情報だ。

ンはミスをしている。如何なる事情があるのか私は
まだ知らないが、いきなり声を大にして指示を飛ばしたのは失策だ。

と、アグラヴェインに通達しておこ。魔術王は人理焼却の実行者だ。

情報源は？

第二特異点にて聖杯を握っていたローマ建国王ロムルスだ。信頼
の置ける人物だ。情報の確度は高い。

なるほど、マスターの過敏な反応の理由は把握した。是非非
でも話を聞かねばならないという訳か。
ああ。そして人間焼却を行うような輩だ。何をされるか分かったもんじゃない。有無を言わざる制圧と拘束するのが正答と判断した。
「正しい。しかしカルデアに魔術王を無力化出来る者など」と。
「いる」
「はな？」
「ああ。そうして人理焼却を行うような輩だ。何をされるか分かった」
「正し正しいな。しかしカルデアに魔術王を無力化出来る者など」
「いる」
「いる」
「いる」
「いる」
「いる」と。
「君は」
「尚も話をするかねか。」
「情報は纏まった。エミヤ、切嗣ともディスカッションは落ち着く行えるが、アグラヴェインの方が頭の回転と認識力、分析力は上だ。何れ召喚から間を置かず、激怒させられておきながら急な事態に動じずに応じてのけたのだ。士郎も彼のお蔭で理解が深まった。アグラヴェインの反駁に、士郎は答えず。そこで迅速に駆けつけてきたのは、世界の古今を一挙しても間違いない最強格の英雄である槍兵クー・フーリンだ。有事となれば体に沈澱していたアルコールを排すなど、サーヴァントには当たり前に出来ることがある。戦装束に身を固め、呪いの朱槍と丸盾を手に推参した彼に、士郎は頷いた。
「クー・フーリン……！」
さしものアングラヴェインも驚きを露にする。
彼から感じる力の波動のよなものは、日中のサー・ガウェイに比するものだっただったの。
クー・フールンはアングラヴェインを見遣る。そして気負いなく挨拶を投げた。
「よ。新顔だな、見た感じ不完全だが、ここに来たかなら同じだ。
同胞よろしく頼むぜ」「…ここらこそ、よろしく頼む。高名のほど遠くブリテンで鳴り響いていた」
「あーあー、そういったらよろしく頼む。賛辞も聞き飽きてな」
「あーあー、賛辞の果てがクー・フールンの末路である。強ぎるが故に、修羅の国ケルトの戦士で戦うとと諦め、女王の仕掛けた謀殺を選ぶほどだほどの。サー・ガウェインの最も有名な伝承はクー・フールンの逸話を下敷きに描かれたものだ。彼と血縁関係にあるアングラヴェインは当たり前のようそれにこれを知悉している。
そして続いでやって来たのがアサシマンのサーヴァント、エミヤリツである。士郎としては彼が本命だ。
「パスを通じてマスターから情報の共有はそれにいてる。僕のすべきらない。ことは理解していられらう。説明は要らない。いつでもやれる」
「よし。念のため聞きくが、レフの死体に第２宝具は反応したか？」
「反応はあった。あれは一種の高度な魔法式なのであろう。今後は僕
の宝具で魔神柱に対応が可能だ。魔術王の魔術にも同様の効果が見込める。「依頼通りだ。ランス、召喚ルームに突入し次第、魔術王ロモンの無力化を願む。奴の魔術はアルトリアの対魔力を貫通するぞ。高速神言スキルも持っていると見ている。」

応。要はやられて前にやれてこったろう。「端的な理解だがそれでも。五秒で仕掛けるぞ、いいな？」

切嗣がナイフを握り直した。

召喚ルームが、突如開かれる。身構える士郎らを、引き攣った笑顔が迎えた。

「や、やあ……」
ロマニである。彼は両手を上げて、自身は何もされていないアビールをしている。

「うっ？」「ここの通り僕は無事だよ。ただソロモンはいきなりのこととに怒って退去しちゃったよ。あはは残念だなぁ折角強力なサーヴァントだったのに。」

召喚ルームの中を覗き込む。

すると、確かに無人だ。霊体化したソロモンもいない。曖昧な笑みを浮かべ説明口調な彼に士郎は笑みを浮かべた。

「うわああああああ！」「うわああああああ！」「うわああああああ！」「うわああああああ！」

殺到したサーヴァントと士郎に、成す術なく取り押さえられるロマニ。
ロ マ ニ・アーキ マン、確保。
再編、カルデア戦闘班

冠位の称号に、冠位魔術師の魔術王、ねえ……

魔術王は召喚ルームに立て籠り、人質としていたロマニへ自らの
霊基を溶かし込んで、ロマニの肉体を乗っ取っていた。

奇しくもそれは、マシュと同様のデミ・サーヴァントと呼べる形態であるが、素直にそれを信じるほどの平和ボケも信頼関係も構築していない。まずは疑って掛かるのが常道であるから、俺は極めて真っ当な嫌疑のもと魔術王を尋問していた。

結果、判明したのは当たり前の事実と控えておくべき基礎知識。

この魔術王は人理修復に協力的。人理焼却を実行した魔術王では
ない。召喚直後の扱いには遺憾の意を表明。容疑を否認、犯人は別
にいるので冤罪を主張、と。

そして魔術王はあくまで自我はロマニ・アーキマンであり、決し
て魔術王ソロモンではないと必死に訴えてきた。

まあ、俺としても直感的には信じてもいいかな、と思わないでも
ない。背後には何故か笑いを堪えるダ・ヴィンチと鉄面皮のアグラヴェ

インを従え。俺はロマニの顔にライトを当て、出来立てほぼやの
カツ井を容疑者に食らわせつつ問う。

「魔術王ソロモンが人理焼却に無関係であるという証拠は？
逆に関係あるというもの証拠がない。それでも関わってたら召喚に応じるわけないだろう。」

「カルデアに乗り込み内側から揺さぶるする意図があるのだろう。
異議あり！それはもはや根拠のない言いがかりに過ぎない！
検察はもうちょっと煮詰めた容疑を掛けるんだ！カツ井ご馳走さまですよ！
例の物を、俺は騒ぎを聞き付けて起き出してきたマシュに言う。
ロマニが魔術王に乗った魔術王は巧みに本物のような悔しげな顔をしたマシュに言う。
ロマニが魔術王に乗ったマシュは巧みに本物のような悔しげな顔をしたマシュに言う。

「はい……」とマシュは俺の指示に従い、俺に一つのカルデアを作った。その後、本物のロマニが否かの判断がつく。ノートパソコンを起動し、その画面をロマニに見せ。発作的にロマニが悲鳴をあげた。
下、確実にロマニのアカウントは焼却されるだろう。人類史の如く下、お前はマギマリのカルデア足り得るか否か、見せて貰おう。そのか！
「なあっ！？ 鬼！ 悪魔！ 士郎くん！」「しかし外部との通信は途絶しているのに、このマギマリとかい
うのは何処に繋がってるんだ…？ …いや、今はそれはいいと
して、さあ魔術王。お前が真にロマニ・アーキマンであり、カルデ
アに一切の敵意がなく、人理修復に協力するというなら、何一つ隠
してはず俺の質問に答えろ」「答えろ！ 答えるからそれだけはほんとやってくれえ！」「では問う。心して即答しろ」「どちら？ としたのはロマニ。即答しろと言ったのに言葉に詰まる
畿って、としたのはロマニ。即答しろと言ったのに言葉に詰まる
辺り本気で驚いているのだろう。俺はそれはもう態とらしく溜め息
「ロマニ・アーキマンはソロモンの縁者或いは同一存在だな？」
俺を吐いた。
その反応だけで対する者にとっては充分過ぎ、そして彼が魔術王ではない証になったと言える。
俺は分かりきったことを説明した。

「アルトリア、オルタ、アーチャー・エミヤ、俺、色違いでも同じ顔が二組も揃っている職場だぞ。あの魔術王の顔とロマニの容貌が一様に同じになる。如何な魔術王とてなんの下準備もなく行い、無造作に成功させられるものか。」

「成龙・ルカにも関わらず現実にロマニは魔術王と融合を果たしている。
それなら逆説的に考えて成功するに至った要因が最初から揃っていたということになる。最も考えられる可能性は、ロマニが魔術王との相性が抜群に良かったことだ。例えばロマニの血統が魔術王に連なることも何ら含まれ事を行いたいものか？」

「実際探偵をやったこともあろうが、目白土呂くставленの探偵もやってけっこうなほど助けた推理をするね。
ダ・ヴィンチが茶々を入れてくる。俺は肩を竦めた。

「おお、士郎くんは探偵もやってけっこうなほど助けた推理をするね。」
仕組みさえ理解し、解き方さえ知っていれば誰でも出来る。推理の要訣とはパズルのピースをどうやって見つけるか、探偵の技能は大いに役立つ。逃げた敵の追跡や、罠の有無の確認、捕捉した敵を追い詰める手法――実戦はその仕事量と規模規格を上げたものだ。

「で。ロマニ・アーキマンが魔術王本人だという可能性は荒唐無稽ではない。ソロモンが魔術の介在を疑うことも俺達は知っているはずだ。」

「過去冬木で聖杯戦争があった！」「過去冬木で聖杯戦争があった！」「聖杯ですね！」「あ！」

唐突な頭痛。セーフティが掛かっていたような、素性の真実に驚きの色彩を表情に浮かべていた。

マシュが顫け顫けて、頭に痛みが走る。

「へーっ！そこまでだ士郎くん。あまり僕の身の上を詮索しない方がいいよ。」

遠退いた意識に、魔術の介在を疑うも、ダ・ヴィンチ頭を振る。
友人ほど、言えない。こればっかりは、君にだけは絶対に言えない。

「俺にだけは、ときたか。この場でそれが通ると思っているのか？折角晴れ掛けだった疑いがまた再燃するぞ。」

「俺に、本当に言うわけではない。僕の過去を君が詮索するのは絶対に駄目だ。」

打ち、とアグラヴァイ恩を見た。彼は首を横に振った。それは論理的に認められるという意思表示。

沈黙してロマニを見る。彼は魔術王ではない。それは信じられる。しかし過去を詮索するなとはどういうことなのか具体的な説明もなしに認められはしない。

しかし意固地になったロマニには強要出来ないし、したくない。
お手上げである。俺は大袈裟な身振りで欧米チックに首を振り嘆息した。

「仕方ない。なら話を変える。お前はロマニだな？」

「…うん。そうだよ。それは信じて貰っているさ。俺は鬼も角、中身のソロモンは絶賛人理焼却の有力な容疑者だ。監視も置かずにいて、好き放題される可能性を考えると、カルデアのマスターとして見過ごせないな。」

ネロ、エミヤを見る。彼らは冷静に頷いた。同意である。

アルトリア、オルタ、クー・フーリン、アグラヴェインも同意見ながら、口を挟まない。——アルトリアとオルタの顔がやや緊張を孕んでいるのに俺は目敏く気づいたが、今は追求しなかった。

マシュは、固唾を飲んで俺の裾を掴む。その心を訴えるような眼差しに俺は微笑みかけた。悪いようにはしないさ、と。

マシュが、嬉しげに笑顔を咥かせた。ダ・ヴィンチが言祝ぐよう

マシュが、嬉しげに笑顔を咥かせた。ダ・ヴィンチが言祝ぐよう

マシュが、嬉しげに笑顔を咥かせた。ダ・ヴィンチが言祝ぐよう

マシュが、嬉しげに笑顔を咥かせた。ダ・ヴィンチが言祝ぐよう

マシュが、嬉しげに笑顔を咥かせた。ダ・ヴィンチが言祝ぐよう

マシュが、嬉しげに笑顔を咥かせた。ダ・ヴィンチが言祝ぐよう
「俺と徹こナカ旅な存ぽなニ足ど、はてれビルにかあ、れ
ロもまゲースにする、をハ何も、隠がロれ悪サレうっってんのし魔いの彼一て。
司通ロニ。がナルのでれオニ、悪思しえこなら、度とすす王そマ司ルとし官るのでれ
オドと悪思いま、鬼営る。必出デカアラけデ指るだ。なずア揮だ。誰が
がり運すカアハルのデ指する。

「——」
「すーさーーー」
「すーすー——」
「すーすー——」
「マシューヌ」

声を掛ける。すると、マシュュは顔して、ロマニに一育ての親と
その言葉に。色彩に。

「ドクター。私と、一緒にお旅をしましょう」

ダ・ヴィンチは笑った。

「君の敗けだロマニ。どんな計画も、あの笑顔には敵わない。そう
だろう？」

「…参った。うん、敵が魔術王なら、僕の存在は隠しておく
とまずいっているのに。どうやら僕は、彼らに逆らえそうにない」

「全部話すよ。僕の知っていることは」

君の敗けだロマニ。どんな計画も、あの笑顔には敵わない。そう
だろう？

「…そう言うなら信じよう。論理的じゃないが、論理だけで世界
は回らないからな」

ロマニは仕方なく、困った笑顔して、マシュの顔を撫でた。大きな
眼で、僕の千里眼でも正体は見抜けなかった。大体の察しは付い
ただ先に言っておくと、どうやら敵は魔術王の力を超えているよ
うでね、僕の千里眼でも正体は見抜けなかった。大体の察しは付い
たけど、知らない方がいいかな。今は

「…そう言うなら信じよう。論理的じゃないが、論理だけで世界
は回らないからな」
受け入れる。秘密主義も行きすぎない限りは必要だ。時には味方にも秘するべきものはある。

ロマニは言った。

僕の知っている情報を開示する前に決めておくことがあるだろう。もうすぐ二つの特異点へ同時にレイシフトすることになるけど、その時は編成をどうするんだ？

「それは決めてある」

変異変異とでも呼ぶべきもの。

冬木の方へ、俺が行く。もう一方をネロが担当する。

「俺の班はランサー、マシュ、ロマニ。

俺の班はアタランテ、エミヤ、アルトリア。

ネロの班はカルデアに待機。各々はそれぞれの班の救援に即座に駆けつけられるようにして貰う。

その采配はアグラヴェインに託そうと考えている」

む、と異論ありげなアルトリアらを制し、俺は言った。

「これは常態として、今回ののようなケースを除いて片方の班は緊急時に備えカルデアで待機させる。組織の歯車に遊びがないといさ」という時に脆いからな。

「うん、それがないと思う。組み合わせもいいね」

ロマニが賛意を示し、編成は決まった。

－ここ－
ふおう！と愛らしい獣がマシユの頭に飛び乗り、嬉しいに鳴く。
まるでマシユを祝福するように。
俺は苦笑してフォウの顎を撫った。
「じゃ、話して貰うぞロマニ。お前の知り得たことを」
魔術王ソロモン改め、ロマニ・アーキマンより提供された幾つかの話を纏めた俺は、不意に思い付いたことをク・フーリンに訊ねた。

「なあ、ランサー」

「ランサーは持ってないのか、冠位」

「...はあ？」

カルデア・ゲートという、ここまでの特異点のデータを参考に開かれた疑似特異点とでも言うべきシミュレータールームに彼らはいられる。

明日に控えた冬木の変異特異点へのレイシフト。未確定な状況で凝り固まった戦術を立てる無意味さを知っているから、俺はカルデアで最も武力に秀でた英霊と共に無数の敵エンミーを破破していつた廟骨兵、偽魔神、ロマニが再現した魔神柱、第二特異点で相対した神祖の魔神レのデータを破破して、それらの霊基バターンをランサーの霊基に蓄積。既に三度の霊基再臨を果たし、生前の力に近づかつつあるランサーは、己のマスターからの問い掛けに訝しげに反

骸骨兵、偽魔神、ロマニが再現した魔神柱、第二特異点で相対した神祖の魔神霊のデータを破破して、それらの霊基バターンをランサーの霊基に蓄積。既に三度の霊基再臨を果たし、生前の力に近づかつつあるランサーは、己のマスターからの問い掛けに訝しげに反

骸骨兵、偽魔神、ロマニが再現した魔神柱、第二特異点で相対した神祖の魔神霊のデータを破破して、それらの霊基バターンをランサーの霊基に蓄積。既に三度の霊基再臨を果たし、生前の力に近づかつつあるランサーは、己のマスターからの問い掛けに訝しげに反

骸骨兵、偽魔神、ロマニが再現した魔神柱、第二特異点で相対した神祖の魔神霊のデータを破破して、それらの霊基バターンをランサーの霊基に蓄積。既に三度の霊基再臨を果たし、生前の力に近づかつつあるランサーは、己のマスターからの問い掛けに訝しげに反

骸骨兵、偽魔神、ロマニが再現した魔神柱、第二特異点で相対した神祖の魔神霊のデータを破破して、それらの霊基バターンをランサーの霊基に蓄積。既に三度の霊基再臨を果たし、生前の力に近づかつつあるランサーは、己のマスターからの問い掛けに訝しげに反
俺としては、アーロンも冠位剣士の資格はあると思うし、クー・フーリンも同様であると思うのだ。俺の知り得る中で、他に冠位を持っているその者が条件を満たし、所持しているという冠位英霊の称号。魔術王が持つというれ。俺としても、アルティアも冠位剣士の資格はあると思うし、クー・フーリンも同様であると思うのだ。俺の知り得る中で、他に冠位を持っているその者が条件を満たし、所持しているという冠位英霊の称号。魔術王が持つというれ。俺としても、アルティアも冠位剣士の資格はあると思うし、クー・フーリンも同様であると思うのだ。俺の知り得る中で、他に冠位を持っているその者が条件を満たし、所持しているという冠位英霊の称号。魔術王が持つというれ。俺としても、アルティアも冠位剣士の資格はあると思うし、クー・フーリンも同様であると思うのだ。俺の知り得る中で、他に冠位を持っているその者が条件を満たし、所持しているという冠位英霊の称号。魔術王が持つというれ。俺としても、アルティアも冠位剣士の資格はあると思うし、クー・フーリンも同様であると思うのだ。俺の知り得る中で、他に冠位を持っているその者が条件を満たし、所持しているという冠位英霊の称号。魔術王が持つというれ。
果、彼は蒼タイツに肩当ての姿になっていた。
盾をマンド封印し、必要があれば使うスタンスに切り替えたの
だ。兵装の上では縛りプレイに近いが、まあ、クー・フーリンがそ
うしたいならそうしてもいい、と俺は思う。

「いいや、ただの確認。仲間の力はなるべく正確に把握しておきた
いからな」。

実際問題、持っていても現状のカルデアの召喚術式と電力事情的
に、冠位の実力を支えるなど不可能なのだ。

しかしそんな事情を横に置いても、俺は別に冠位の有無は熱して
重要なないと考える。保有する戦力の正確な力を知りたいという
重要ではないうちが。

「持ってなぜ、冠位」。

クー・フーリンは槍の柄で肩を叩きつつ、嘆息して応じた。

「お。やっぱり」。

「だがあなたに断っておく。オレは冠位として人理修復に協力するが、これは人間の戦いよ。オレ
はサーヴァントとして人理修復に協力するが、これは人間の戦いよ。前からカルデアの戦いだ。でしゃばるつもりはねえよ。

まあとランサーはそうするだろうな」。

「持ってるぜ、冠位」。

クー・フーリンは槍の柄で肩を叩きつつ、嘆息して応じた。

「お。やっぱり」。

「だがあなたに断っておく。オレは冠位として人理修復に協力するが、これは人間の戦いよ。オレ
はサーヴァントとして人理修復に協力するが、これは人間の戦いよ。前からカルデアの戦いだ。でしゃばるつもりはねえよ。

まあとランサーはそうするだろうな」。
「ただまあ」
クーレリオンは不敵に犬歯を剥く。
例外はあるがな。
人間じゃあどう足掻いても敵わない——冠位持ちが戦うべきモノは、死が有ろうが無ろうが主義を曲げて殺してやるよ。
例外？
「例外はあるが」
「例外？」
「例外？」
「人間じゃあどう足掻いても敵わない——冠位持ちが戦うべきモノは、死が有ろうが無ろうが主義を曲げて殺してやるよ。
外とおかし過ぎる。充分すぎた。
その結果、彼が知り得るのは全智に及ばず。のまならず、知り得ることの大半も敵側の魔術王の存在を考慮し伏せられた。ロマニ曰く、自分は人間に擬装して霊基を誤魔化すことかは出来ない。

履き違えてはならない。カルデアは助けて貰う側で、主導して戦わねばならない者。協力してくれる者に大上段に構えてい道理は、英霊側のスタンスを変えさせたければ、相応の理を用意するのが筋だ。
しかし俺や他のサーヴァントを経由して、自分の存在やロマンを通
して得た知識が相手に流出することだけは避けねばならない。
故に俺が知られたのは必要最低限の知識のみ。まあそれもないより
はマシなので、納得している。機密とは時に味方にも伏せるべき
ものなのだ。

しかし俺や他のサーヴァントを経由して、自分の存在やロマンを通
して得た知識が相手に流出することだけは避けねばならない。
故に俺が知られたのは必要最低限の知識のみ。まあそれもないより
はマシなので、納得している。機密とは時に味方にも伏せるべき
ものなのだ。

しかし俺や他のサーヴァントを経由して、自分の存在やロマンを通
して得た知識が相手に流出することだけは避けねばならない。
故に俺が知られたのは必要最低限の知識のみ。まあそれもないより
はマシなので、納得している。機密とは時に味方にも伏せるべき
ものなのだ。

しかし俺や他のサーヴァントを経由して、自分の存在やロマンを通
して得た知識が相手に流出することだけは避けねばならない。
故に俺が知られたのは必要最低限の知識のみ。まあそれもないより
はマシなので、納得している。機密とは時に味方にも伏せるべき
ものなのだ。

しかし俺や他のサーヴァントを経由して、自分の存在やロマンを通
して得た知識が相手に流出することだけは避けねばならない。
故に俺が知られたのは必要最低限の知識のみ。まあそれもないより
はマシなので、納得している。機密とは時に味方にも伏せるべき
ものなのだ。

しかし俺や他のサーヴァントを経由して、自分の存在やロマンを通
して得た知識が相手に流出することだけは避けねばならない。
故に俺が知られたのは必要最低限の知識のみ。まあそれもないより
はマシなので、納得している。機密とは時に味方にも伏せるべき
ものなのだ。

しかし俺や他のサーヴァントを経由して、自分の存在やロマンを通
して得た知識が相手に流出することだけは避けねばならない。
故に俺が知られたのは必要最低限の知識のみ。まあそれもないより
はマシなので、納得している。機密とは時に味方にも伏せるべき
ものなのだ。

しかし俺や他のサーヴァントを経由して、自分の存在やロマンを通
して得た知識が相手に流出することだけは避けねばならない。
故に俺が知られたのは必要最低限の知識のみ。まあそれもないより
はマシなので、納得している。機密とは時に味方にも伏せるべき
ものなのだ。

しかし俺や他のサーヴァントを経由して、自分の存在やロマンを通
して得た知識が相手に流出することだけは避けねばならない。
故に俺が知られたのは必要最低限の知識のみ。まあそれもないより
はマシなので、納得している。機密とは時に味方にも伏せるべき
ものなのだ。

しかし俺や他のサーヴァントを経由して、自分の存在やロマンを通
して得た知識が相手に流出することだけは避けねばならない。
故に俺が知られたのは必要最低限の知識のみ。まあそれもないより
はマシなので、納得している。機密とは時に味方にも伏せるべき
ものなのだ。

しかし俺や他のサーヴァントを経由して、自分の存在やロマンを通
して得た知識が相手に流出することだけは避けねばならない。
故に俺が知られたのは必要最低限の知識のみ。まあそれもないより
はマシなので、納得している。機密とは時に味方にも伏せるべき
ものなのだ。

しかし俺や他のサーヴァントを経由して、自分の存在やロマンを通
して得た知識が相手に流出することだけは避けねばならない。
故に俺が知られたのは必要最低限の知識のみ。まあそれもないより
はマシなので、納得している。機密とは時に味方にも伏せるべき
ものなのだ。

しかし俺や他のサーヴァントを経由して、自分の存在やロマンを通
して得た知識が相手に流出することだけは避けねばならない。
故に俺が知られたのは必要最低限の知識のみ。まあそれもないより
はマシなので、納得している。機密とは時に味方にも伏せるべき
ものなのだ。

しかし俺や他のサーヴァントを経由して、自分の存在やロマンを通
して得た知識が相手に流出することだけは避けねばならない。
故に俺が知られたのは必要最低限の知識のみ。まあそれもないより
はマシなので、納得している。機密とは時に味方にも伏せるべき
もののだ。
し
て
出
せ
る
一
種
の
ジ
ャ
イ
ア
ン
ト
キ
リ
ン
だ
ぜ。
性
能
な
ん
ざ
論
じ
る
だ
け
無
駄、
マ
ス
タ
ー
が
ア
ー
チャ
ー
を
見
習
う
べき
は
そ
の
戦
闘
論
理
だ
—
し
て
出
せ
る
一
種
の
ジ
ャ
イ
ア
ン
ト
キ
リ
ン
だ
ぜ。
言いつつ、クール・フーリンはどっかと椅子に腰掛け、視線を
「ケルトにゃオレ以外冠位はいねえ。それは間違いないな」
「ランサーの師匠は？」
「ありゃ駄目だ。腕はあっても魂が腐ってる。そもそも人理焼け中
の今はサーヴァントになれるだろうが、オレの時代から二千年以上
経ってるんけど？」
「ヘーエー」
「敵にはしたくねえけどな。生前のオレか、それに近い状態のオレ
なら、師匠がどれだけ腕を上げても後れは取らねえ。素でオレが
強え互いに身を漬けてオレのが上だ。だから師匠に冠位は無えー
オレのガキが長生きしてたらオレ以上になってたろうが……。」
「ヘーエー」
「戦はあれだ。可能性があるのはアキレウスとかいう小僧だ。
ケルトは少なくともクール・フーリン以外に槍兵の冠位持ちはいな
い。確かにフィン・マックルもディルムッド・オディナも英雄と
してクール・フーリンより格下だから納得できる。
というか、ヘラクレスと同格のクール・フーリンと並ぶ奴がそうそ
ういるはずもないのだ。
“あキレウスって言った『最速』だぞ？" "最速？オレを差し置いて本当にそう言えのかねえ？” "まあ、伝承の関係上そう言われるから、俺からはなんとも言えない。しかし伝承で言うならクー・フーリンも大概だ。馬の王と称えられれた音より速いマハより、クー・フーリンは更に速いと明文化されているのである。速さで言えばいい勝負ではないか。音より速い馬より速いのだから、ある意味でクー・フーリンも『世界全てが間合い』と言えなくもないだろう。実物を見てできないのだから比べようもなない。判断は保留だ。個人的には己の力に依って戦い抜いたクー・フーリンの方が、神々の恩恵を膨大に受けたアキレウスよりも英雄として格上だとは思うが。関わり合いになりたくないのが本音である。侵攻軍側なのに、防衛側のヘクトールが親友を殺したとか言って死体を戦車で引き回すとか完全に頭おかしい。いやまあ、感情は理解できるが、ぶっしゃけ怖い。アキレウスがヘクトールを選ぶならコンマー一秒もなくヘクトールを選ぶだろう。"
冠位の条件。興味深いが、クー・フーリンは説明を面倒臭そうに端折った。別に知ってても知らないても関係がない、というのがクー・フーリンの考え方のように、確かな通りなので追求はしなかった。

「よし、出来た」「待ってました！いやぁんな意味で腕の立つマスターを持ったオレは名実ともに幸運Eを脱却した！で、今回はなに食わせてくれるんだ？」

第二特異点MVPのランサーにはとっておきを用意した。腕によ
りをかけて作ったからご賞味あれ

「ドッグフードだ！！」「おーい」「冗談なので睨まないでください怖いです」

厨房から出て、クー・フーリンの席の前に置く。渾身の力を込めて、迫真の顔で料理名を告げた。
“冗談だったのに……”

まさか本当にドッグフードを出すわけもないのに、拳骨を貰う羽目になった俺は不貞腐れて食堂を後にした。

しかしまあ、冷静になってみるとクー・フーリンという英雄にとっては犬というものは色々な意味が付随するもの。過敏に反応して当たり前であり、冗談でも言って良いこと悪いことがあるのは社会では常識だ。その境界線を見誤ったこちらに落ち度がある。

親しみ仲にも礼儀あり。結東の固い主従であればこそ相手を思いやるべし。尊ろ拳骨一発で許してくれたクー・フーリンに感謝すべきた。

そうと弁え、反省し、後で改めて謝罪しに行くかと決めて、俺はマイルームに向かう。その途上、足許にすり寄ってきた小動物に気づいて俺は感心した。君っ」と。普通に気配を感じなかった。アサシン並みだなフォウ君っに感じていただけ。
話しなさい。

故に、注のこ。

が、しのうっ。

あらかじめ、供に、やりぐのれがしのうっ。

うけしのうっ。

短い。

場よど人け人愛れて登る。

瞳か子相接のあ。

で、がアト可ま方をるく、は、を。

でリ愛邪向す。

が、を動て間見沢しのうっ。

かうと本方指悪なは贅を。

突タて間る。

て、対と対の還。

で、対密をにかは還ててのい。

ねえ、りんごのうっ。

に、りんごのうっ。

りんごのうっ。

りんごのうっ。

りんごのうっ。
彼は人の言葉を理解している節がある。時々知らんぷりする賢いさがあるが、その挙動を注意深く観察しているのは読み取れた。人も言葉を解して行動しているのは読み取れた。外の蔓延する世の中である。人と人の言葉が分かるわけではないと頭から決めつけた業出ない者の上であるから、そういった機微にも気を付けていたから自然と察せられた。

「どうした？」

切嗣はマシュを除き最初に召喚したサーヴァントで、その実力に大きな信頼を寄せてている。だが他のサーヴァントとの相性を考慮し大きな組み合わせである。

意外な組み合わせである。

声を掛けると、静かにしろとでも言うように視線を向けてくる。訝しげに眉を顰め、俺はフォウの止まった声声を微笑ましく見送る。と、曲がり角の手前で急にフォウが立ち止まった。
皿学で俺親が見つかったように立ち止まったのだろう。何を話しているのか、無精ながら耳を傾けてみるも声はしない。フォウも驚いたように立ち止まったのだろう。怪訝に思い目を凝らすと、切嗣とマシュはハンドサインで会話していた。

「ああ……」

「ああ……」

そういえば、特異点Fか第一特異点のどちらかで、マシュが切嗣と俺がハンドサインでやり取りしているのを見て、自分もハンドサインを覚えたいと言っていたのを思い出した。自分にしてはなく、切嗣に教わっているのは何故か。それは切嗣と俺を覚えたいと言っていたのを思い出した。ハンドサインの学習意欲と頭の回転、記憶力からすると僅かな学習のみでハンドサインをマスターしてしまえるだろう。ここまでは何度も何度も取りが成立していたように思う。ゆっくりとお茶とフォウのミルクを用意し、林檎や葡萄などを小皿に盛って時を空けていると、控え目にノックと共に声がした。

「ああ……」
先輩、入室の許可を

マシュの声だ。心なし、剣刺とした声音に苦笑して招き入れる。

サーヴァントとマスターは一心同体だ。主従であり、戦友であり、兄妹であり、変な意味ではない恋人のようにもある。

命運を同期させるとはそういうことだ。またそうでない者にどうして命を預けることができるのだろうか。当QQ然の心構えであり、そう決まっても俺はマシューを妹のように可愛がっていた。

ふしゅ、と空気の抜けまる音と共に扉がスライドし、淡い色彩の少女が入室してきた。

マシュ。前にも勝手に入ってしまっていいのだろうか？

「あ、はい。」、「ふーむふーっ！」

マシュの肩から飛び降りたフォウが、テーブルの上に用意していた果物の盛り合わせの前に向かった。

心得たもので一人で食べ始めたりしない。お行儀が悪いぞ、と以前指摘したことを覚えているのだ。

見て欲しいものがあるんです、いいでしょうか！
矢鱈と力んでいるマッシュの語意に、手にしていたカップをソーサリに置いて頷いた。

「ふぉー！ふぉー！ふぉー！」「おお！おお！おお！」
「え？」「あ、フォウさん。……むう、フォウさんを放って二人だけで話すのはいけなかったですか？」
「フォウ君は構ってちょっとだからなぁ～」

俺がそういうと、後ろ足二本で立ったフォウが前肢で俺の肩を叩き遺憾の意を表現した。鼻を軽く押してひっくり返させ、その後を抜けてやるとフォウは撫ったその後にもがく。ははは、とういながら撫り続けると、今度はマッシュが手を伸ばして撫り始めた。
悲鳴をあげてなんとかフォウは飛び退いた。
離れて睨み付けてくるも迫力はない。怒っているのではなく、照れ怒りのようなものだ。
「ふるふるおおおお！」
微笑むマッシュに、俺も相好を崩す。どちらも可愛いものだ。
マッシュに飛び付いて仕返しのように懐に潜り込もうとするフォウをマッシュは意外とあっさり捕まえた。
「ふふふ。先輩。私のサイン、どうでした？」
「はい！アサシンさんは、その、話しづらい方かと思ってましたけど、別にそんなことなくて、教えて欲しい行ったら丁寧に教えてくれました！」
「そうか。うむ。そりゃよかった。あの！これで私、先輩のお役にもっと立てるようにになったでしょう。ばか。最初から役に立つぱなし、マッシュは～」
「はい。アサシンさんのお役にもっと立てるようにになったでしょう。 bxか。最初から役に立つぱなし、マッシュは～」
だが、大人のエゴとはそういうものだろう。
嬉しがり、本当に心から喜んで微笑むことの出来る少女。彼女は

あので、折角なんでドクターにも教えてあげてはどうでしょうか。

今度から一緒に旅をするんですね。

「はい！」「うん、いい案だ。ロマニここに呼ぼう」

魔術王としての力を使えば、初見でも信じて来るだろう。しかし
それを言うのは無理で、ロマニも誘われれば喜ぶだろう。
何せ指揮権をアグラヴェインに移譲し、今はゆっくり休まされて
暇を持って余しているだろうから。

ロマニにとり、マシュは保護すべき存在で。'
それにしても人は前を向ける。やって来たロマニに、得意気にハンド
サインを教授し始めたマシュを尻目に、俺は改めて決意した。
正義は後付けで付いてくる。故に、俺の手の届く者全てに幸福を。

「是ら、さかのぼるね。マシュを、ロマニを、そしてカルデアの善き人
々を、決して損なわせはしない。」
そ の 勘 定 に 、 衛 宮 土 郎 は 自 分 を 含 め る。

しかし。

その鍍 金 に 、 輝 が 入 っ て い る こ と に 、 彼 は 気 づ く い て い な か っ た。

ふ わ ー う。

獣 の 瞳 が 、 そ れ を 見 て い る。

— そ の 勘 定 に 、 衛 宮 土 郎 は 自 分 を 含 め る。
いつもの装備を整える。射撃手型の礼装や、改造戦闘服、赤原礼装、ダ・ヴィンチ謹製通信機。

干将と莫邪を鞘に納めて腰の後ろに吊るし、カルデア製閃光手榴弾を二つ懐に納める。サーヴァントには効果はないが、対マスターを想定して銃器の類を装備することも考えたが、今回の戦略を考え慮するに不要と判断。

今回、あらかじめ用意していた投影道具の出番はない。俺がメイノンで出張する予定もないし、バイクで移動することもないので持っていくこともない。

何せ戦場は地理を知り抜いている冬木だ。冬木で何回聖杯戦争ならばならんのかと呆れてしまう。何せ冬木の聖杯戦争がこれで三度目、人理修復の旅が無事終われば、今度は冬木で第六次が控えている。最低でも四度目が約束されている俺は、冬木の聖杯戦争のエキスパートにされていた。

……よし、準備は万端か

……やっぱ冬木は呪われているのではないだろうか。そう思う

「……よし、準備は万端か」
体調は万全。魔術回路の回転率良好。固有結界も特に問題なく稼働している。
マルチルームを出ると、そこにはネロがいた。
カルデアの制服に身を包んだローマ皇帝は、現代衣裳を着た彼の顔をあまり着こなしていない。が、その胸の胸部装甲の主張が青少年の股間を直撃する感じだった。
顔がアルトリアに似ているせいか、俺はなんとなく居たままで、気分を覚える。

「どうしたネロ。そんな所で突っ立って」
「うむ、シェロか。なんか久しぶり感じるな」

俺を見るとそう言ってきて、そう言えば第二特異点からそんなに時が経ってないのに久しぶりな気がした。
帰ってきた以来、ネロは現代の常識や最低限の知識の詰め込みのため、教師役の職員たちが詰詰状態だった上に、それが終わればすぐさまたがりたい気分になりつつネロに声を掛ける。

新たな特異点へ共にレイシフトするサーヴァントとの連携の構築に余念のなかったネロは、体感した時間密度から久しぶりに感じるのかもしれない。俺も、時間密度では負けてないので一日二日間に挟んだだけで久しぶり感じてしまうのだろう。

「俺も久しぶりな気がする。似合ってるぞ、それ」
「当然であろう。何せ余はネロ・クラウディウスであるぞ！」
ネロのカルデアの制服姿は目に毒であるが、眼福でもある。特に胸を張るネロはそれを分かっているだろうか。分かっていらないだろう、コイツは。どや顔が愛嬌に繋がる辺り、美形は何しも得だなと思う。
「む。なんだそのあやすような反応は」
これでも男で、年上だからな。年下の女の子にはそれっぽい態度を取る主義だ。
「そういったシェロは余りも年上であったのか。だが！年長者だからといって威張り散らすでないぞ？余を泣かしたら酷いからな？」「う、うむ。であるな」
「それで、ネロがこうして来たのは打ち合わせのためか？」「誰が。女の子を女の子として扱うだけだ。俺にちょっとネロはもう、ただの後輩だからな」「うう？」
「そ、そうだ。これより先の戦い、我々は二手に別れて挑む。シェロは冬木るの地を知悉しているが故に冬木へ、余はどちらであっても未知故にもう一方へ。…シェロ、余の挑む特異点が如何なるも
「ね、聞いてるか？」「無論だ。」
「ネロの率いるサーヴァントはアタランテ、エミヤ、アルトリアだ。基本運用はアルトリアが盾、エミヤが後衛からの射撃、アタランテの遊撃。エミヤとアタランテが主な攻撃を引き受けた。大火力が必要になればアルトリアが聖剣を抜刀する。そこでネロチームが挑む特異点は、直接人類史に関わりがあるもの。カルデア命名『特異点アンノウン』。これがネロの挑むもの。だが、俺はそんなに不安に思ってはいない。ネロは文武に長ける元神代の人間、アタランテはギリシャの狩人、エミヤやアルトリアは言うに及ばず、バッケアップはアグラヴェインやダ・ヴィンチが務め、カルデアには切嗣とオルタが緊急事態に備え援軍としての動きで残っている。更にロマニがいる以上はカルデアへの通信妨害はほぼ無効化されると思われている。備えは万全、後は問題に対処するだけだ。そしてネロだけに限った話じゃないが、どちらが早く特異点を攻略してネロだけに限った話じゃないが、どちらが早く特異点を攻略して、「ネロだけに限った話じゃないが、どちらが早く特異点を攻略してネロだけに限った話じゃないか、どちらが早く特異点を攻略してネロだけに限った話じゃないか、どちらが早く特異点を攻略してネロだけに限った話じゃないか、どちらが早く特異点を攻略してネロだけに限った話じゃないか、どちらが早く特異点を攻略してネロだけに限った話じゃないか、どちらが早く特異点を攻略してネロだけに限った話じゃないか、どちらが早く特異点を攻略してネロだけに限った話じゃないか、どちらが早く特異点を攻略してネロだけに限った話じゃないか、どちらが早く特異点を攻略してネロだけに限った話じゃないか、どちらが早く特異点を攻略してネロだけに限った話じゃないか、どちらが早く特異点を攻略して」とマスターが俺だけだった第一章特異点の如きタイムアタックに挑まなければならなかった。もしマスターが俺だけだったら第一章特異点の如きタイムアタックに挑まなければならなかった。
そう、ネロがいないければ半ば詫んでいたのである。彼女の存在が
どれほど有り難いものか、それは俺が一番わかっている。

ネロは頷いた。

「うむ。今後の役割は全てが不透明な特異点の調査。シェロがやって
来るまで待つこと。この認識を共有しておきたかったのだ」

ネロは頷いた。

「遅い、何をしていた」

「遅くはないだろう。時間が通りだ。それよりアッ君」

「アッ君？」「まさかの呼び名に驚愕する鉄のアグラヴェイン。そんな彼に、士
郎は小声で告げた。

彼の内面は、些細本調子とは言い難いだろう。サポートしてやってく

「遅い。何をしていた」「遅くはないだろう。時間が通りだ。それよりアッ君」

「アッ君？」「まさかの呼び名に驚愕する鉄のアグラヴェイン。そんな彼に、士
郎は小声で告げた。

彼の内面は、些細本調子とは言い難いだろう。サポートしてやってく

「遅い。何をしていた」「遅くはないだろう。時間が通りだ。それよりアッ君」

「アッ君？」「まさかの呼び名に驚愕する鉄のアグラヴェイン。そんな彼に、士
郎は小声で告げた。

彼の内面は、些細本調子とは言い難いだろう。サポートしてやってく
「ああ。恐らくな。注意すべきサーヴァントが誰か、最初から分かっているならやりようはある。最低限の支援で充分だ。」
』
そうか。…それと、アッ君はやめろ。…頭が痛くなる。

本当に頭が痛そうなアグラヴェインだが、俺は思う。

誤解は解けた。解けたが、いきなり殴られた恨みは忘れてない。

故にアッ君呼びはずっと続けるつもりだった。

ネロの肩を叩いて、俺は一つ頃くと自らのチームの下へ向かう。

クー・フーリン、マシュ、そして白衣姿のままのロマニ。正直、その戦力比からして、余程下手に立ち回らない限りは負ける気がしない。

であるべく早く、特異点を崩し、人理定礎を修復してネロを助けにいく。そういう気概で俺は挑む。
「不安か、マスター。汝らしくもない。常の不敵な笑みはどうした」

浮かべた強い笑みには空虚がある。
士郎の前では気丈であったのは、彼女の意地だ。友人に、対等な
ふ、と笑みを消し、ネロは自嘲した。

「笑み、笑みか……こう、であろう？」

「……笑ってくればよいぞ、麗しのアタランテ。余は、他に選択
肢がなかったとはいいえ、自らの国、世界を捨てたのだ。それをカ
ルデアで過ごす内に改めて実感してな、少し……寂しいのだ」

「そうか。だが、私は国というものに執着心はない。私からは何も
言えはしなだろう」

「しかしサーバントとしてならば言える。マスター、今は前を向け。
これより先は死地と心得ねば、汝は命を落とすだろう」

「うむ。忠言、確かに受け取ったぞ」

アグラヴェインはそれを見て、先程の士郎の言葉が的を射ていた
ことを理解する。
人の内面を汲み取るのが手手。そして、人を使うのも。かつて
のブリテンで圧倒的に不足していた人的潤滑油。このマスターがブ
リテンにいたら、結末は違っていただろう、とらしくもない懸嘆を
懷き掛け。

鉄のアグラヴェインは、鉄の自制心によりその益体のない思考を
捨て去った。
このゲームの主人公は、ネロもまた特異点へと赴く。
全が不明瞭な、『特異点アンノウン』へ。
彼女はまだ、熾烈な戦いを予感していなかった。
スカイ島。
聖杯の力に依り、現世より切り離されなかった『影の国』。
『影の国王』との死闘を。
レイシフトした直後の感覚は、中々に味わい深い。

例えるならジェットコースターとくるくる回る遊園地のカップを足して二で割らなかった感じの物に乗せられ、上下左右等にジェクされたような心地になれるのだ。なぜ素晴らしく素敵な気分である。

尤もそれは俺だけらしい。霊体であるク・フーリンはけろりとしているし、マシュはもっとソフトな感じ方だという。ロマニに至っては何も感じないと来た。

しかしそんな酷い感覚も数回繰り返せばすっかり慣れたもので、俺は込み上げる吐瀉物を堪えつつ思う。

素直な感想がそれな辺り、俺はもう色んなものに毒され過ぎたの。これが、本当の冬木の街なんですね～
白衣を着込み眼鏡を掛けた姿のマッシュが感慨深く呟く。その純粋な反応が眩しかった。

彼女は特異点Fの燃え盛る炎に呑まれた光景しか知らない。故に真新しさ、新鮮さを感じるのだろう。彼女の出自的に近代国家の町並みはこれまでと同じくデータでしか知らなかったのだろうし、物理もないと思う。

しかし俺にとっては違った。本来知る冬木よりもやや古い空気を感じる。そういった最近、里帰りしてないが、桜はどうしただろう。

冬木の聖杯戦争の難易度に、間桐を潰すついでに様子を見てみようか。蟲の翁のために用意しておいた礼装が効果あるか、投影品で試験を行える好機ではあるまいか。

― 考慮の余地ありだ。

間桐の亡霊は必ず抵抗するし、そのために英霊の力を利用しようとするのは自明。第六次聖杯戦争が起こる可能性は極めて高く、そこに桜が巻き込まれるのは明らかで、それをどうにかしてやるのが……慎二を死なせた償いだ。

夜は更けている。
人の気配は少ないが、まあ、街から文明の薫りがするの低いここ
とだ。あの文明破壊王には見せられない町並みである。
ロマニが難しい表情をして黙り込んでいる。
どうしたのだろう。もしか、彼のスキルである啓示が発動したの
か？
なあ、なにも。ただ強いて言うと、こんな街中で聖杯戦争を
するなんてイケてるな、と思ってね……
「ロマニ、何か気になることでも？」
「いや、なにも。ただ強いて言うと、こんな街中で聖杯戦争を
するなんてイケてるな、と思ってね……
「あっ、そのマジ☆マリなんかが……」
「冬木は燃えるものだから、仕方ないな」
マシュがロマニの言に声を上げる。何かを堪えるような顔に、ロ
マニはやはりロマニなのだと感じられた。
しかしまあ、俺にとっては今更である。努めて冷静に応じた。
「あっ、そのマジ☆マリなんかが……」
手理焼却された中、繋がる先として残っているような所をピックア
ップし、魔術とマリを繋げた結果、それは魔術師マーリンのことで
はなかったと思わ偽である。
しかしドルオタなロマニにその推測は憤死案件なのではと思い当
たい口を噤んだ。

「マスターが知るべき点は二つだな」と

「マスターが知るべき点は二つだな」
「それは？」
「一つは教会と遠坂のお嬢ちゃんの館の機密調査結果だ。オレが知ってることよ。」

「確信だ。第四次聖杯戦争の時系列簿で。」

「で、追加で情報だ。」

「ん？」と首を捻る。

「時間軸の特定は、カルデアからの調査で絞れてはいる。それが言峰綺礼、衛宮切嗣、遠坂凛の父だ。まあ、切嗣に関しては見つからなくて仕方がないが、言峰と遠坂両家は比較的容易に見つけると踏んでいた。後は言峰と組んでいる英雄王の対策だが。」

「そうだ。言峰綺礼のサーヴァントが英雄王ではないことに驚くのも、すぐに事情を察する。」

「一瞬、言峰綺礼のサーヴァントが英雄王ではないことに驚くのも。彼の父は第四次で死んでいる。言峰の父であるサーヴァントが黄金の王で、なおかつ生存していた言峰のサーヴァントはなかった。」

「─ それ？ 」

「─ ならば、英雄王の野郎が。遠坂のサーヴァントではない？ 」

「なに？ いや、マスターを鞍替えしたわけか。」
「一応聞いておくが、気づかれなかっただろうか？」「オレがそんなへマをするかっての。下手なアサシンより周囲に溶けく使いたい」「マスターにゃ無理だ。才能が無え」「知ってる」言合いつつロマニに財布を放って投げた。大まかに算段を立て、戦略を思い付いたのだ。ロマニに渡した財布には、俺の個人的な金が入っている。それを掴み取ったロマニに俺は告げた。「ロマニ。ちょっと別行動しよう」「うわあ……またぞろ悪巧みしてる顔だね」「うわあ……またぞろ悪巧みしてる顔だね」「うわあ……まあいいや、そう言うの、分かるのか？」「分かるよ。友達だし」「分かるよ。友達だし」「マシュー。ロマニと一緒にいてくれ」「私も別行動なんですか？」"
ああ。
ロマ
と
親
娘
で
行
っ
て
こ
い。
た
ま
に
は
い
い
だ
ろ、
こ
う
い
う
の
も
「
っ
!?
せ、
先
輩
!
も
う
っ
!」
「
で、
こ
れ
か
ら
ど
う
動
く
つ
も
り
な
の
か
な
?　
我
が
マ
ス
ター
は」
「
あ
あ、
う
ん。
―　
―　
ち
ょ
っ
と
聖
杯
戦
争
に
混
ざ
ろ
う
と
思
っ
tて　
な。
ラン
サー
の
サー
ヴ
ァ
ン
ト、
そ
の
マ
ス
ター
と
し
て　
そ
の
言
葉
の
意
味
を
察
し
た
の
か、
ロ
マ
ニ
は
苦
笑
を
深
め
る。
「
う　
わ　
ぁ　
。　
や　
っ　
ぱ　
え　
げ　
つ　
な　
い　
ね、　
士　
郎　
く　
ん　
は　
さ　
正
規
の
マ
ス
ター
に
扮
し
て　
聖
杯
戦
争　
を　
や　
り　
な　
が　
ら　
、
外
部　
に　
デ　
ミ　
・　
サ　
ー　
ヴ
ァ
ン
ト　
を　
二
人　
控　
え　
、
更　
に　
カ　
ル　
デ　
ア　
か　　
と　
の　　
バ　　
ッ　　
ク　　
ア　　
ッ　　
プ　　も　　
あ　　
る　　
男　　が　　
マ　　ス　　ター　　と　　し　　て　　参　　加　　す　　る　　な　　て　　外　　道　　も　　良　　い　　と　　こ　　ろ　　で　　あ　　る。
ロ　　マ　　ニ　　は　　す　　ぐ　　に　　そ　　の　　戦　　術　　の　　真　　価　　を　　察　　し　　て　　、
な　　ぜ　　別　　行　　動　　な　　の　　か　　を　　理　　解　　し　　、
暂　　し　　の　　遊　　興　　を　　楽　　し　　む　　こ　　と　　に　　し　　た。
冬　　木　　の　　聖　　杯　　戦　　争　　の　　仕　　組　　み　　は　　知　　悉　　し　　て　　い　　る。
聖　　杯　　を　　完　　成　　さ　　せ　　る　　の　　は　　不　　味　　い　　、　　と　　い　　う　　の　　は　　常　　識　　的　　な　　判　　断　　だ。
だ　　が　　、
・　　・　　・　　・　　・　　・　　か　　ら　　こ　　そ　　完　　成　　さ　　せ　　る。
そ　　の　　上　　で　　破　　壊　　す　　る。
完　　成　　直　　後　　の　　聖　　杯　　は、
こ　　の　　世　　全　　て　　の　　悪　　を　　出　　産　　さ　　せ　　る　　の　　に　　僅　　か　　な　　イ　　ン　　ター　　バ　　ル　　が　　あ　　る

「
」

「
」

「
」

「
」

「
」

「
」
「何せ聖杯を握った者の願望を叶える体で出てこなければならぬからだ。願望器という在り方の弊端ゆえに。完成して間を空けなければ問題なく処理は可能だ。そしてそのために邪魔なサーヴァントとマスターを全て片付けるのが手っ取り早い。難しく立ち回ることはないのだ。単純に一刀両断にするのが最良である。」

「流石だなマスター。楽しくなってきた」

獰猛に笑うクー・フーリンと、説明を聞いて先輩らしいですと苦笑するマシュ。

「おっと忘れてしまった。二つの報告があるぞ、マスター。
クー・フーリンがわざとらしく言う。なんだ、と先を促すと、アイルランドの光の御子は悪戯っぽく嘯いた。」

「流石だなマスター。楽しくなってきた」

獰猛に笑うクー・フーリンと、説明を聞いて先輩らしいですと苦笑するマシュ。

「おっと忘れてしまった。二つの報告があるぞ、マスター。
クー・フーリンがわざとらしく言う。なんだ、と先を促すと、アイルランドの光の御子は悪戯っぽく嘯いた。」

「流石だなマスター。楽しくなってきた」

獰猛に笑うクー・フーリンと、説明を聞いて先輩らしいですと苦笑するマシュ。

「おっと忘れてしまった。二つの報告があるぞ、マスター。
決まりだな。
第四次のランサーと、
第五次のランサーを入れ替え
てしまおう。

ランサー入れ替わり事件勃発の瞬間である。

一決まりだな。
第四次のランサーと、
第五次のランサーを入れ替え
割と外道だね士郎くん！

主命を帯び、敵陣営の主従を釣り上げるべく街中を練り歩いた。

槍兵のサーヴァント、ディルムッド・オディナは落胆を隠せなかった。

「―よお、いい夜だな色男―」

そんな彼の嘆きは、晴らされる。望外の敵手を迎えることで、倉庫街に足を向けていたディルムッドの背後から声が投げられた。
ディルムッドは咄嗟に振り返った。
いとも容易く背中を取りられた──その事実は一つの時代で最も武勲に輝いた騎士に驚愕を与えただ。
輝く貌の騎士は目にする。青みを帯びた髪を野生のままに伸ばし、さらと貴人の血により色香に変じさせる神性のサーヴァントを。
全身の戦闘服に刻まれたルーンの守り。
軽飄な獣の如き様。真紅の長槍を肩に、背中をピルの影に預け、好戦的な笑みを浮かべディルムッドを見た。
そわり、と背筋が粟立つ。
ぞわり、と背筋が粟立つ。
身軽さを重んじた槍の使い手は、古代エリオンに多かった。自分より後の時代の戦士ではあるまい。己の時代以降にこれほど戦士がいたとは考えずらく。瞳の神性は神代真盛りのものですと感じられる。
自らのサーヴァントか？さとな。存外ランサーかもしれない。だが殺し合いにそんな区分は必要か？オレにとって余分だと思わねー。
……その通りだ。果たし合いに於いて敵手のクラスなど些事、い
や、つまるで聞いだ。許されよ。

―はと、気づく。

己の物腰が、目上の者に対するそれになっていることに。

まさか、と思う。

改めて、見る。真紅の瞳。蒼い戦装束に、真紅の長槍。生前の主より伝え聞いた耳飾り。そして魂で感じる戦慄と。

まるで感じる敵手の武量。

声が、震えた。

「その威風。まさか、御身は……」

半神の槍使いは肩を竦める。

薄笑いと共、挑戦状を叩きつけた。

「元より我らは戦う者。答えの真偽は槍で探るものだろう…」

薄い耳飾り、耳取られた。

「ああ。後は殺り合いながら、だ。敵と刃を交えるなら、ただ屠るのみ…」

「此処で？」

「此処だ。ルルは簡単に。物を壊さず、他者に気取られず、槍兵らしく速さを競う。鮭跳びの秘術――修めてねえとは言わねえよ。無論っ！」

問うな。元より我らは戦う者。答えの真偽は槍で探るものだろう…
叫ぶように応えるや否や、ディルムッドは空気の壁を突き破って駆けた。
幼少の頃、夢見た邂逅。時の果てに叶った憧憬。武者震いと共に顔が歓喜に歪んだ。
ク・フーリン。全てのエリックの戦士の憧れ。死の象徴。最強にしにして死の境を越える者に双槍を操り打掛かり、術技を振り絞って挑戦する。
異邦の槍兵と、冬木の槍兵は、一陣の風すら置き去りに音速の遥か先で駆ける。虚空に無数の火花を散らしながら、ビルの壁に足場に、時には互いが衝突した衝撃を利用して空中で舞う。
それらは、人の目には何も映らぬ神域の速さ比べ。
ク・フーリンは猛々しく笑い、己の槍を振るうに足る敵と認めえた。

「ランサーのマスターよ！　」「刺し突く！」
「刺し突く－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－...
ぬ、と背後から伸ばした手に肩を叩かれ、気合いにそう問い掛けてきた男にケイネス・エルメロイ・アーチボルド自らの不覚を悟った。ケイネスの婚約者ソラウ・ヌァザレ・ソフィアリは此処にいないうちに一室で待って貰い、しかし単独でランサー・デルムッドを運用し、いずれかの陣営を釣り出そうと目論んでいたのでケイネスを、この男は当たり前のように見つ出し、背後を取った。冷や汗が流れそうになるのを、魔術師としての精神力を堪え、ケイネスは背中に膨大な神秘を感じながらも誰のことを指摘しよう。「おっと。これは失礼した。あなたはブランサーのマスター、ケイネス・エルメロイドです。後ろから素性を問うのがそらの流儀なのかね？些か野蛮だ」と指摘した。"ケイネスはどこに不愉快な訝りがないことにおや、と思いつつ、ゆっくりと振り返った。流暢な英語による応答である。

其処には、東洋人がいた。若干の落胆を覚えるも、身に纏う礼装の質に気を取る直す。色素の抜けきった白髪と、鍛え上げられた肉体。赤い聖骸布と、籠手の礼装。現代風の衣装に仕立て、街中にいても不自然ではない。"
格好である。加え、後ろ腰に下げた剣は明らかに尋常ではない魔力濃度だった。
「こちらは名乗ったのだ。貴様も名乗ってはどうかね？」「エミヤ、といえば伝わるか」「何？」「――何？」「――何？」「この名乗っただの。貴様も名乗ってはどうかね？」ケイネスが不敵に問うと男は懸念に応じた。「エミヤ、といえば伝わるか」「――何？」「――何？」「――何？」良犬。不愉快げに歪んだ眉根に、男は苦笑した。「おっと。誤解があるようだ」「誤解だと？」「如何にも。確かに俺はエミヤで、ロードの思い当たっただろう魔術師殺しではない。だが、俺は別に卑劣な手法で魔術師を狩る卑怯者ではない。大方、ロードの聞き及びの俺の風評は、俺が自分で流した悪評だろう」「自分で悪評を流しただとも？なんのために」「この秘密を露見させないためさ」と言って、エミヤは腰から螺旋状の剣を抜き放った。

曰く、魔術師殺し―野蛮な近代兵器を用い卑劣な手段で魔術師を屠る魔術師の面汚し。もしも機会があればこの手で誅伐してやろうと常々考えていた野良犬。
白と黒の夫婦剣ではない。それよりも高位の、神秘の位階の高い宝具。

そう、宝具だ。

ケイネスをして瞑目する。そして男の言に納得した。

「貴様、『伝承保菌者』か！」「俺が自らの悪評を流してでも隠すものではこれで、そしてそれを知ったからにはたとでは帰せなくなるぞ。ロード Ribelloイ。ふん。なるほど、『伝承保菌者』ならば相手にとっては不足はない。」

「ああ、その前に。これは善意なんだが、足元に注意した方がいい。「ああ」その前に。これも宝具。看破したケイネスの眼力は確かで。次の瞬間、その剣が内包する神秘が暴走しているのに、咄嗟に水銀の礼装を解放し守りを固め。

現代の魔術師の礼装如きが、宝具による『壊れた幻想』を凌げる。

道理などなく。
あっさりと爆発に呑み込まれ、だめ押しに投じていった偽・螺旋剣を下投げで投げ込むで、跡形もなく消し飛ばした。

「…ランサーの宝具解放のタグに合わせたが、中々難かったな」爆風に煽られてつつ、そう呟いた男の名は衛宮士郎。

二十年後の未来、魔術師殺しの再来と呼べた魔術使いである。彼は直者なので、謙遜以外では何も嘘は言ってもいかなかった。
運命だね士郎くん！

新たに干将と莫耶を投影し、腰の鞘に納めておく。

周囲を検査すると大きく陥没した地面や、神秘爆発の規模かれて
妥当な破壊の跡が残っている。

この場に留まれば騒ぎを聞き付けた一般人がやって来るかもしれない
ない。そうでないとも、魔力の高まりを感じたマスター・サーヴァ
ントに来られたのでは面倒だ。早々にその場を後にする。

○こっちは片したが。そこも上手くやったみたいで、マスター。

夜闇に紛れ、移動する俺の側に、実体化したままのクー・フーリ
ンが現れ戦果を報告してきた。俺は頷く。こちらも問題なくマスターを始末出来た。

ルメロイの名が出たのには驚いたが、そういえば第四次で二世の前
のロードは戦死していたのだ。考えてみればいるのを思い出す
うが、完全に忘れていた。

言峰綺礼、衛宮切嗣を出し抜くことにはかり頭が行ってたようで、

相手側のランサーはどうだった？
問うと、クー・フーリンは微妙そうな顔をした。「おや、雑魚だったのか？」

「同じケルトの騎士だった。真名はディルムッド・オディナ。技量だけ見たらオレに近い。手強い奴だったぜ。そういう割りには浮かない顔だな。どうしたんだ？」

「あっ、その、なんだ。オレがこうだから感覚ズレてんだろうが、日本でのケルトの知名度があるだろ？」

「そうだ。宝具とか、ステータスとか。スキルとか。……ちょっとぞっとする感だっただ sez。」

「えっ、あっ、そうなんだ。」

「あっ。宝具とか、スキルを使ったのは、彼なりの賛辞なんだろ。彼の口ぶりではまともな戦いも成立しなかったろうに、技量だけは冠たるものを見せつけたのだ。クー・フーリンをして宝具の使用を惜しませないほどに。故に己の槍で穿つに足ると彼は認めただろしろ。」

「彼の口ぶりではまともな戦いも成立しなかったろうに、技量だけでなく冠たるものを見せつけたのだ。クー・フーリンをして宝具の使用を惜しませないほどに。故に己の槍で穿つに足ると彼は認めただろしろ。」

「あっ。ああ。まあ、アインツベルンは小聖杯に注がれた魂で脱落に気づく。教会は霊器盤で。まあ、俺らの存在はバレるだろ。」

「あっ、そうなのか？」

「アインツベルンは小聖杯に注がれた魂で脱落。教会には一騎脱落したのは筒抜けだろうけどな。」
クー・フルーリンは「あー、なるほどねーと何やら察したように顔
き、俺の一歩後ろを歩く。

こういう騎士然とした何気ない所作で、本当に敬意を持ってマス
ターとして遇して貰うと、なんとも気の引き締まる感じをする。

「クー・フルーリンは「あー、なるほどねーと何やら察したように顔
き、俺の一歩後ろを歩く。」

冬木のランサーの動きからして、挑発ぎみに動いて敵を釣ろうと
していたんだろう？ なら俺達も今夜はそれに肖ろう。マスターが
正統派の魔術師だったし、敵が釣れたら戦う場として人気のない
所を選定するだろうね。

「了解。で、どこまでやる気概だ？」

マスターにサーウァント、全て消えて貰う

というか、パレなかったら拍子抜けである。気づきもしない節穴
ばかりなら、そもそも面倒な策を練るものか。

クー・フルーリンは「あー、なるほどねーと何やら察したように顔
き、俺の一歩後ろを歩く。

このまま部内に手を出して、何やって見せるのか。

クー・フルーリンは「あー、なるほどねーと何やら察したように顔
き、俺の一歩後ろを歩く。」

「クー・フルーリンは「あー、なるほどねーと何やら察したように顔
き、俺の一歩後ろを歩く。」

冬木のランサーの動きからして、挑発ぎみに動いて敵を釣ろうと
していたんだろう？ なら俺達も今夜はそれに肖ろう。マスターが
正統派の魔術師だったし、敵が釣れたら戦う場として人気のない
所を選定するだろうね。

「了解。で、どこまでやる気概だ？」

マスターにサーウァント、全て消えて貰う

というか、パレなかったら拍子抜けである。気づきもしない節穴
ばかりなら、そもそも面倒な策を練るものか。

クー・フルーリンは「あー、なるほどねーと何やら察したように顔
き、俺の一歩後ろを歩く。

このまま部内に手を出して、何やって見せるのか。

クー・フルーリンは「あー、なるほどねーと何やら察したように顔
き、俺の一歩後ろを歩く。」

「クー・フルーリンは「あー、なるほどねーと何やら察したように顔
き、俺の一歩後ろを歩く。」

冬木のランサーの動きからして、挑発ぎみに動いて敵を釣ろうと
していたんだろう？ なら俺達も今夜はそれに肖ろう。マスターが
正統派の魔術師だったし、敵が釣れたら戦う場として人気のない
所を選定するだろうね。

「了解。で、どこまでやる気概だ？」

マスターにサーウァント、全て消えて貰う

というか、パレなかったら拍子抜けである。気づきもしない節穴
ばかりなら、そもそも面倒な策を練るものか。

クー・フルーリンは「あー、なるほどねーと何やら察したように顔
き、俺の一歩後ろを歩く。

このまま部内に手を出して、何やって見せるのか。

クー・フルーリンは「あー、なるほどねーと何やら察したように顔
き、俺の一歩後ろを歩く。」

「クー・フルーリンは「あー、なるほどねーと何やら察したように顔
き、俺の一歩後ろを歩く。」

冬木のランサーの動きからして、挑発ぎみに動いて敵を釣ろうと
していたんだろう？ なら俺達も今夜はそれに肖ろう。マスターが
正統派の魔術師だったし、敵が釣れたら戦う場として人気のない
所を選定するだろうね。

「了解。で、どこまでやる気概だ？」

マスターにサーウァント、全て消えて貰う

というか、パレなかったら拍子抜けである。気づきもしない節穴
ばかりなら、そもそも面倒な策を練るものか。

クー・フルーリンは「あー、なるほどねーと何やら察したように顔
き、俺の一歩後ろを歩く。

このまま部内に手を出して、何やって見せるのか。

クー・フルーリンは「あー、なるほどねーと何やら察したように顔
き、俺の一歩後ろを歩く。」

「クー・フルーリンは「あー、なるほどねーと何やら察したように顔
き、俺の一歩後ろを歩く。」

冬木のランサーの動きからして、挑発ぎみに動いて敵を釣ろうと
していたんだろう？ なら俺達も今夜はそれに肖ろう。マスターが
正統派の魔術師だったし、敵が釣れたら戦う場として人気のない
所を選定するだろうね。

「了解。で、どこまでやる気概だ？」

マスターにサーウァント、全て消えて貰う
「不穏分子には退場願って、穏当に聖杯を回収するか破壊する。」

「血気盛んなのはいいが、いいのかマスター。テメエの親父がいるんだろ？」

血気盛んなのはいいが、いいうのかもスマー。テメェの親父がいるんだろう？'

クー・フーリンの念押しに鼻を鳴らした。

切嗣は見つけ次第消す。誰よりもその能力と実力を知るが故に、確実にだ。'

切嗣は見つけ次第消す。誰よりもその能力と実力を知るが故に、確実にだ。'

だからこそ手は抜けない。本気でやる。切嗣相手に半端は出来ない。隙を見せたらやられるのはこっそりだ。

しろ面倒くさい策謀を巡らせ、転ぶのは勘弁だ。シンプルに片付ける。単純な戦略と基本的な戦術で。無理に寄ってもらう必要はないのだ。奇策に頼ると隙を見せかねない。手堅く堅実に、されど大胆不敵に王道で勝つ。

切嗣や俺の弱点は、正当に強い正統な英雄であり、如何なる小細工も意に介さない強者だ。切嗣なら、理性ありのヘラクレス並みのクー・フーリンを見れば、必ず正攻法は避ける。奇策に転じるだろう。それが隙となる。

「〜〜〜っと。何か釣れたぜ。真っ直ぐついて来やがる〜」
クー・フーリンが敵の気配を察知する。俺は肩を竦めた。
「今夜で二騎脱落か。急ぎ足の戦争になりそうだね。」
「おいおい、皮算用はやめとけよ。そんな上手く行くもんでもねえだろ。」
「上手く行かせるのさ。俺達にはそれが出来るはずだ。だろう、ランサー。」
「上手く行かせまるのが巧いこつって。分かった、やってるよ、仕事は。
完璧にこなす主義だ。」
軽いノリで戦える相方というのは得難いものだ。マシュは真面目にやらんといかんし、アルトリア達はその騎士道に気を付けている。
自然体で一番やれるのが、切嗣とランサーのようだ。俺としてはやりやすくて本当に助かる。
敵の気配を俺も感じた。今呪に反応がある。マスターだろう。
キャラターは有り得ないとして、アサシンも同じ。ライダー、セイバー辺りが食いついてきたのだろう。
そうあたりをつけ、倉庫街でランサー共々待ち構えていると。
彼女らは姿を表した。凛とした、見慣れた美貌。ダークスーに身を包んだ、少年とい
っても通じる気品。

白い女のマスター。イリヤスフィールに似通ったひと。

「マジかー。」

「ははー。」

思いず笑った。

「ことは。」

「いそ見ることのなかった、彼女の警戒心。

「おに。いきなりペース乱れるぜー。」

「ーぼか言うな。問題ない。寧ろ興奮してるね。」

敵を見る目。

「おはよう、冗談だが。いずれは来る時で、それがまさか今だとは思わなかった」と、俺の軽口に、クー・フィーリンも応じた。

まあ、冗談だが。いずれは来る時で、それがまさか今だとは思わなかった。

俺の軽口に、クー・フィーリンも応じた。

「そういやあの時もこの面白いだったな。いや、あの女は居なかったが。」

「だな。組み合わせはあべこべだがーー。」

セイバーのサーヴァント。

切嗣が背後に控えた、騎士王。
「ちゃちゃっと片付けて帰ろうぜ。一番乗りし易い奴と会えて良かっただ」
青天の霹靂だね士郎くん！

「こうこそ、麗しいレディ達」

懇懇に出迎える、曲者。

態とらしい微笑みは貼り付けられた偽りのもので。また笑みを取
り繋いでいるのを隠そうともしていない。

黒塗りの戦闘服、射籠手の礼装。その上の、赤い聖骸布。通常の
魔術師には考えられぬほど鍛え上げられた筋骨。
精悍な面構えに、
色素の抜けた髪。

セイバーのサーヴァントは、白い女を背後に守る。
その肩越しに、
姫君は不遜なる男へ応じた。

「随分と礼儀がなっていないのね。誘いを掛けていながら長々と歩
かせるなんて」

堂々と、毅然とした面持ち。

その人ならざる赤い双眸に、
白髪の男は苦笑して両手を広げた。

「これは失礼した。しかしながら弁明させて欲しい。まさか人里真
冬の女。微塵の気の緩みもなく、男を睨む。

男はサーヴァントの後ろに隠れるでもなく、自信に満ちた面持ちで佇む。その様で只者ではないと女は思い。それを裏打ちするようにセイバーが言った。

敵マスターは一廉の武人です。油断なさらないでください、と。

セイバーに守られる女は頷いた。元々彼女に油断はない。

セイバーが言った。

「さて。我らは互いに異なる立場、異なる陣営に属する者だ。長々と反応がなかったような顔。逆にアイリスフィール・フォン・アインツベルン。此度の聖杯を掴む者よー。そうね。ではお招きに与った私から名乗らせて貰うわ。私はアイリスフィール・フォン・アインツベルン。此度の聖杯を掴む者よー。」

「失礼。俺はエミヤシロウという。貴女達の関係者に衛宮切嗣がいるだろう？それの縁者だー。」

え…?? エミヤシロウ…?? 何を言ってるのかしら。

男は名乗り、セイバーとアイリスフィールの反応を窺った。

特に反応がない。おや、とエミヤは首を捻った。あたかも、期待した反応がなかったような顔。逆にアイリスフィールらの方が怪訝に思った。

「それの縁者だー。」

「え…?? エミヤシロウ…?? 何を言ってるのかしら。」
素で言っているのだろう。アイリスフィールは訝しげに反駁した。

「貴方は勘違いをしているようだ。そのエミヤ某と、私達はなんら関わり合いがない」

「なんだと？」

衛宮士郎は、アイリスフィールは兎も角としして、アルトリアの事はよく知っている。嘘を好んで口にするとの清廉な人柄。必要なら嘘を言うのが、今の時の微妙な空気の違いを士郎は感じ取る。

「えっ。切嗣のいない第四次聖杯戦争とか、炭酸の抜けたサイダーのようなものだぞ」

「.getUserId()」

ジャ、難題は言峰と英雄王だけ？本当にか？仮にアイリス
フィールのスペックを最高傑作のイリヤスフィールと同等と仮定し、戦闘用ホムンクルスでないのなら倒すのは容易。極論アルトリアをクー・フーリンに抑えて貰えば、十分も掛けずにアイリスフィールを無力化出来る。他マスターは遠坂に間桐。数合わせと、言峰。あれ？本格的に英雄王にだけ意識を向けてもいい気がしてきた。士郎は慢心が過ぎるかなと自問し改めて考える。アインツベルンの特性も良く良く理解済み。エルメロイは抜いて。間桐。その魔術特性は研究し尽くした。遠坂。凛以上ということはない宝石魔術。エルメロイは抜いて。言峰。現時点でのサーヴァントは不明。数合わせ。いないとは言い切れないにしても時計塔のーー若き日のロード。エルメロイは二世がいるのか。彼は指導者として有能故に警戒はすべき。現時点での能力は未知数。士郎。言うに及ばず。言峰。
ピックアップするに、どう考えても言峰と英雄王だけが抜き出
て危険だだけ。
それに切刻がいないと仮定しただけで難易度が半減どこ
る騒ぎではない。
いや、頭からいないと決めつけるのは良くないか。例えば遠坂
間桐なりに雇われていたとか。令呪が手に入らなかったので、アイントベルンを襲
ってアルトリアのマスター権を奪ったとか。考えられるパタ
ーンは無数にある。
そう考えると、戦略も変わる。
元々アイントベルンだけは聖杯の降臨する器ということもあり、
最後まで生かすつもりではいた。しかしアイントベルンからアルト
リアが切刻に奪われるすると、とんでもないことになる。切
刻の指揮を従うアルトリア。……最悪だ。その場合の信頼関係
は最悪だろうが、割り切るところは割り切れるだろう。聖杯奪取と
いう目的のため、冷徹に徹することもありうる。切
刻。いつもいなくなる不気味だ。いや寒さはぎりぎり&quot;
「そんなランサー。遊べなくなったら。序盤はだらりと流すことにしていたが、きっかけに」
「オレはどうちでもいいぜ。お前のやる気次第だ。で、やんのかマスター？」「ああ。アルトリアには処で倒れて貰う」
「なっ！」「ああ、成るに到るまでには此処で倒れて貰う」
「だろ」
「さよりと口にされた真名に、アイリスフィールとアルトリアが驚かれた。」
「まだ戦ってすらない」言葉を、二三回交わしただけ。道具も見せてないのに、いきなり真名が露見するなどあり得ない。どういうことなのか？問い質す間も置かず、士郎は躊躇うことなく呪文を切った。
「了解だー」「倒しろー」「令呪起動。システム作動。ランサー、全力でセイバーを打つ。」
蒼い槍兵。
真紅の槍と、瞳。
飄々としていた顔に、凄まじい殺気が点る。
まるで鎖から解き放たれた番犬。
主人の命令に忠実な、まさに『サーヴァンス』。
「そういわけだ。今回は前に面倒な縛りは無い。増減無しで―殺しでやるよ」
初撃を避けたのは注視していたからだ。

超常の存在であるサーヴァントにとっては、一呼吸分でしかない距離を詰めるには、魔術師でない以上は二本の脚を使わなければならない。接近する間のインチバル、得物の振るいはじめから移動地点の確保。工程を数え上げればキリがない。故にざっくり繰めて六の工程がある。

セイバーは、それを目で見ていた。

「リツッッ！？」

断言できる。気の緩みはなかった。油断もしていなかった。蒼い槍兵の挙動を見極めんとした。だが、その動きのほとんどが、常勝の騎士王をして見えるなかった。蒼い地面を蹴るまでは見えている。しかし地面を弾けさせてからは目視すら能わなかった。

移動距離。己にとり都合の良い位置取り。セイバーが知覚できたのは、背後に回り込んできた槍兵が、槍を片腕で突き出さんとしたのだ。
瞬時に地面に身を投げ出して回避した。視界で捉えるとは思えない。目で視て動いたのでは間に合わないと一瞬で判断した。

跳ね起き様に聖剣を横なぎに振るう。風の隙に包まれた不可視の一撃を避けるのと同時にだった。獣の如く地に伏せた状態から、蒼い槍兵は枪を立て体を捻じ転させた。軽々と繰り出されは一回蹴り、首を切る軌道。仰け反る。鼻先を擦めた。途方もない威力を風に乗じて、直撃する一撃で死ぬと理解し戦慄する間もない。蹴りを放つも、蹴られるのは繰り込み締め。そう言わんばかりの攻め手。立てた槍、軸にしての回し蹴り、その反動を利用して体を持ち上げ、虚空で身を捻り槍を大上段より振り下ろした。

魔人の挙動だ。獣どころではない。
言葉を正面向けに構え、辛うじて戦闘体勢を堅持した。ランサーが言った。槍を旋回させて穂先で地面を削りながら、言え、否や、風車の如く回転させ、槍の先で削った地面が仄かに光る。それは一種の文字。ルーン文字。込入れられた魔力は——

『ルーン……魔術……！？』

空中に踊る無数のルーン文字が、ランサーの肉体に入り込む。それには耐久、筋力を増強させるもの。束え、矢を正面向けに構え、手討い、戦うのではなく。全身を魔力で覆い、徹底的に守り固める防御体勢。——それにも反応したのはランサーではない。

中、漸く思う。速い、と。
それでも剣を正面に構え、辛うじて戦闘体勢を堅持した。
びくりと眉を跳ねる。特異点化の原因を考えていた。なんらかの差異があるのは確定的。さて。何があると観察に徹し、ランサーの文字通りの目に余まらぬ速さに感嘆しつつ、まだ速くなるのかと感心し。セイバーの防御体勢に違和感を捉えた。

セイバーの気質はよく知っている。彼女は対策を考えている。そのせいか、駆け寄ってきたランサーの動きを掴もうという算段か。

ギアを更に上げ、ランサーが駆せる。「あんこんなもんかセイバー！」

一瞬も止まらず、また一瞬も隙を与えず、攻め続けるランサーの槍。セイバーは嵐に吹かれる木枯らしの如くに打ちのめされ、全身に浅い傷を作っていた。
「くう……！！」

まともに勝負すれば成り立っていない。一方的だった。守りの隙間を巧みに突き、セイバーは瞬く間に傷を負っていく。そのまま行けば体力が尽きて無防備な心臓を晒すだろう。その時が最前列だ。セイバーはなんとかランサーの槍を阻まんと不可視の剣を振るうも、まるで聖剣の刃渡りを熟知しているかの如くに見切られ、回避と同時に反撃が飛び。不用意な動きは即座に撃かれ、代償にセイバーは手痛い傷を負った。

呪を大きく薙ぎ払って強撃を叩き込み、腕を痺れさせるや背後なんとか身を捻ってランサーを正面向に置いたセイバーに、ランサーは下段より突き上げた槍で聖剣を握る手を一撃した。危うく剣を取り落としそうになりながら、セイバーは必死に後退する。剣の握りが甘くなったら、これでは下手に受けることすら出来ない！

そしてそれは決定的な隙だった。魔力の猛りは波瀾の予兆。宝具を解放せんとしている。トドメを退。
放たんとしているのだ。

その時。

セイバーが、剣を構える手を下ろした。

諦めた、訳がない。闘志が萎えていない。

起死回生の策がある。それはなんだ。聖剣の真名解放？

「突きつッ」

必殺の槍を投擲せんとする。ランサー。それを睨み付けるセイバー。

瞬間、既知の感覚。電撃的な響きに士郎が叫んだ。

「待て！ランサー！」

「待て！ランサー！」
戦闘の熱に熱中していたランサーは、しかし瞬間的に急停止した。スターの指示を忠実に守った。槍を投じず、そのまま着地し、槍に集めていた魔力を霧散させる。呆気取られたのは、セイバーだ。啞然とする彼女から目を逸らさず、ランサーは激怒する。そこで士郎は鞘を持っている。冷や汗を流し、セイバーは思わぬ問いを投げた。
貴方は何者ですか。私の真名のみならず、どうして宝具まで……
さて、それを明かす義務は……あるが、今は無視させて貰う。それより回復しないのか？どうせ出来るなら……
セイバーは無言で、それまでに負った全ての傷を治癒した。
アイリスフィールの魔術ではない。担い手を不死にするという宝具『全て遠き理想郷』の効果だ。
不死をも殺すゲイ・ボルクなら、心臓に刺されば即死させられるだろう。しかし、それ以外の傷は、治癒を阻害させる呪いをも無視するに違いない。
士郎は嘆息した。
特異点化の理由がなんとなくだが分かった。
アインツベルンが、この聖杯戦争を制する可能性が高いからだ。
アインツベルンが、この聖杯戦争を制する可能性が高いからだ。
凛さんがマスターの時より高うステータスに、宝具が連発できると、この正攻法で英雄王にも勝ちを狙えし、未来予知じた直感と勝負強さを帯セイバーなれ充分勝てる。

が、その結果は『この世全ての悪』の誕生だ。本来の歴史とは致命的に離れぎて、変異特異点と化すのも分からない話ではない。「殺れるが、殺るだけが戦争じゃない。今は機でなかっただ、それはけだ。いくぞランサー。

不満はねぇ。マスターの指示に従う。頭の出来はマスターの上がしな」

「待て!」見切りをつけさっさと踵を返した二人にセイバーが制止をかけた。

「逃げるのか!」「いやや『態度を変える』のさ。まだ日、改めて窺わせて貰う」ああ、と士郎は皮肉げにランサーを見る。そしと気取っただ口調で言っただ。

「『追ってくるのなら構わんぞ。』だがその時は、決死の覚悟を抱いてこい』」は―――
は、は！
と腹を抱えてランサーが笑い転げそうになった。

なんて懐かしいというか、執念深いというべきか。その台詞にランサーは笑うしかない。

それの何が可笑しいのか。セイバーらには分からないが。追い時
は確かにその覚悟は必要になるだろう。
剣を下ろし、去ろうとする二人を追わないことを示す。まだ初戦、
決死の覚悟はまだ早い。

剣を下ろし、去ろうとする二人を追わないことを示す。まだ初戦、

遠雷の響く音。

決死の覚悟はまだ早い。

野太い男の声が、空に響いた。
安定ノスルーラ力だね土郎くん！&
割と外道だね土郎くん！

セイバーとランサーの間に割って入り、両腕を広げて高らかに名乗りを上げたのは、二頭の雲牛の曳く戦車に乗った赤毛の巨漢、ライダーのサーヴァントである。

「その名は征服王イスカンダル！此度の聖杯戦争ではライダーのクラスを得て現界した！」

セイバーは咄嗟としてクー、フーリンは軽く口笛を吹く。

聖杯戦争の常識を無視したその破天荒な名乗り上げに、アイリスのフィールやセイバーは嘔然としてクー、フーリンは軽く口笛を吹く。

士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ、しかしそすぐに、士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。しかしすぐに、士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。

士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。しかしすぐに、士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。

奔放な振る舞いは、世に冠絶せし傑物の波動を放つ。登場一つのただ一撃、それのみで周囲の空気を一変させる様は圧倒的だ。

奔放な振る舞いは、世に冠絶せし傑物の波動を放つ。登場一つのただ一撃、それのみで周囲の空気を一変させる様は圧倒的だ。

士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。しかしすぐに、士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。

奔放な振る舞いは、世に冠絶せし傑物の波動を放つ。登場一つのただ一撃、それのみで周囲の空気を一変させる様は圧倒的だ。

奔放な振る舞いは、世に冠絶せし傑物の波動を放つ。登場一つのただ一撃、それのみで周囲の空気を一変させる様は圧倒的だ。

士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。しかしすぐに、士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。

奔放な振る舞いは、世に冠絶せし傑物の波動を放つ。登場一つのただ一撃、それのみで周囲の空気を一変させる様は圧倒的だ。

士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。しかしすぐに、士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。

奔放な振る舞いは、世に冠絶せし傑物の波動を放つ。登場一つのただ一撃、それのみで周囲の空気を一変させる様は圧倒的だ。

士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。しかしすぐに、士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。

奔放な振る舞いは、世に冠絶せし傑物の波動を放つ。登場一つのただ一撃、それのみで周囲の空気を一変させる様は圧倒的だ。

士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。しかしすぐに、士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。

奔放な振る舞いは、世に冠絶せし傑物の波動を放つ。登場一つのただ一撃、それのみで周囲の空気を一変させる様は圧倒的だ。

士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。しかしすぐに、士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。

奔放な振る舞いは、世に冠絶せし傑物の波動を放つ。登場一つのただ一撃、それのみで周囲の空気を一変させる様は圧倒的だ。

士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。しかしすぐに、士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。

奔放な振る舞いは、世に冠絶せし傑物の波動を放つ。登場一つのただ一撃、それのみで周囲の空気を一変させる様は圧倒的だ。

士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。しかしすぐに、士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。

奔放な振る舞いは、世に冠絶せし傑物の波動を放つ。登場一つのただ一撃、それのみで周囲の空気を一変させる様は圧倒的だ。

士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。しかしすぐに、士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。

奔放な振る舞いは、世に冠絶せし傑物の波動を放つ。登場一つのただ一撃、それのみで周囲の空気を一変させる様は圧倒的だ。

士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。しかしすぐに、士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。

奔放な振る舞いは、世に冠絶せし傑物の波動を放つ。登場一つのただ一撃、それのみで周囲の空気を一変させる様は圧倒的だ。

士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。しかしすぐに、士郎もまた、一瞬虚を突かれたように反応が遅れ。

奔放な振る舞いは、世に冠絶せし傑物の波動を放つ。登場一つのただ一撃、それのみで周囲の空気を一変させる様は圧倒的だ。
軍門に下れ。その言葉に、陰悪な声がセイバーとクーア・フーリンを切る。つまり、私が軍門に降り、聖杯を余に譲る気はないか？さすれば余は貴様らを関係として遇し、世界を無視して愉楽を共に分から合う所存である。

「はい。」

「なんだと？」

「はい。」
ご反応でした。セイバーは正として。クー・フィーリンは、槍を捧げ
た主君の面前ゆえ。
特にクー・フィーリンの形相は一変していた。青筋が浮き上がり、
発するは凄まじい怒気。憎けのない、ひゃ、という悲鳴が上がる。
戦車の中のウェイバーが腰を抜かしたのだ。
セイバーは咄嗟に剣を構える。ライダーも表面上はそのままだが、
その手綱に手が掛けられた。
「テーマ、言うに事欠いてこのオレに『軍門に下れ』と来たか。戦
士の矜持に真っ向から泥を引っ掛けやがるとはいい度胸じゃねえか
よ。」
「ふむ。反応からすると、うぬはそこなマスターに忠義を誓っ
ておるのだな。」
「応よ。生前通して得られなかった理想の主って奴だ。槍に懸け
て、ライダーの目から稚気が消えた。
腹を捏え、ライダーが鬱気も露に問う。
『餘の野心が『小さい』とな！？』
では聞かせて貰おうか！うぬのマスターの野心とは何かを！－
うぬのマスターはなーーこの世の糞溜めも、日溜まりも、丸ご
と引くめる全戦の歴史を保障すんのさ。目的の前のお世もしか見え
ない。オレのマスターはなーーこの世の糞溜めも、日溜まりも、丸ご
ライダーが、呆気に取られる。目を丸くして士郎を見た。眼中になかったマスターが、そんな存在だとは想像もつかなかったのだ。クー・フーリンの言葉に偽りは感じられず、その言葉の意味の半分も捉えられなかったが、スケールのデカさは伝わった。

そしてそれは、ライダーに重々しく受け取られる。征服する星の歴史の保護。ライダーは、そこに敗北を見た。ぬう、と聞き、腕を組んだ。

セイバーやアイルフィール、ウェイバーにはなんの話かも分らない。しかし、ランサーの言葉に実感が宿っているのは伝わった。

そのために誰も馬鹿には出来ず、法螺吹きと何も諦めなかった。

「喋りすぎだぞランサー」
「ちょっと、出過ぎたか。すまねえなマスター」
「いいが。それよりさっぱり退くぞ。嫌な空気だ」
「待てランサーのマスター！」

何やら嫌な予感を得た士郎に促され、クー・フーリンは撤退を了承する。

それへ待ったを掛ける征服王。だが、士郎は足を止めなかった。

俺はあの手の振りをよく知ってね。たとえばウルトラ求道僧とか。
な。ああいう手合いに付き合い、最悪の騒動に遭うのもさら。

関わる方がマズイ。ウルトラ求道僧に付き合ったせいで、またぞろ悪性菩薩とかと出くわす羽目になるのは御免だぞ。

あー、なんのことかは知らないが、言わんとするところは分かった。

ランサーは女王メイヴを思い出す。なるほど確かに、さも即ちなんとか言葉が得ない。

征服王の制圧を完全に無視して士郎とクー・フーリンは倉庫街よ
り離れていく。場の空気を完璧に無視出来る士郎は思っていた。

（あー、ライダーとセイバーで潰し合ってくれたら楽なんだけどな

士郎は自身の判断が英断だったことを後で知る。英雄王、バーサ
ーカーが集めた四つ巴戦が行われたのだ。

士郎は幸薄き故に、危険察知からの離脱が早いのが混戦を避けら
れた要因である。後に、それをロマニに指摘された士郎は泣きそう
になったという。
今朝のニュースです。昨夜未明、偽札を使用した無銭飲食を働いた住所不詳無職の外国人男性、ロマニ・アーキマンが逮捕、拘留されました。犯人は「畜生覚えてろあの野郎」などと供述しており、事態の真相を追って取り調べを進めています。

何をやってる、貴様……。

ホテルの一室である。何気なくテレビを眺めていたら放送されたニュースに、流石に噴き出さざるを得なかった。

何をやっている、貴様……。

「いや普通気づくだろ。あの時点で俺が1990年代の日本の通貨を持っている訳ないって」
普通ギャグ、ユーモアに決まってるだろう……！ 本気で使う奴があろうか……！

「陰謀だ。間違いない」
『誰を嵌めるためのだろうといった陰謀だ』
「分からん。流石は叡智の王、全くその意図が読めん……」

こあれは、警戒が必要だな。密かに警戒心を高める俺に、アグラヴェインは露骨に嘆息した。

クー・フーリンには今、周囲の偵察を頼んでいるため密室に一人

いだ。念のため切嗣と同じ顔を見つけたらサーチ＆デストロイを

陣営を潰し成り代わったことなど、今後の方針についてもカルデ

アには話しであつた。ダ・ヴィンチやアグラヴェインからもＧＯサ

イーンは出ている。後は慎重に動くだけのはずだったのが、先ほどの

ニュースにより色々気分が台無しとなってしまった。

私がにもロマニ・アーキマンの意図は掴めがあれも味方だろう。

全面の不都合になる動きは取らないはずだ。

ばかめ。あれは空気が読めない男だぞ。素で何を仕出かすか分か

ったもんじゃない。

敵がアイツベルンで、アルトリアが鞘持ちであることを、ランサ

すべてがエースに出ている。後は慎重に動くだけのはずだったのが、先ほどの

くいだ。念のため切嗣と同じ顔を見つけたらサーチ＆デストロイを

陣営を潰し成り代わったことなど、今後の方針についてもカルデ

アには話しであつた。ダ・ヴィンチやアグラヴェインからもＧＯサ

イーンは出ている。後は慎重に動くだけのはずだったのが、先ほどの

ニュースにより色々気分が台無しとなってしまった。

私がにもロマニ・アーキマンの意図は掴めがあれも味方だろう。

全面の不都合になる動きは取らないはずだ。

ばかめ。あれは空気が読めない男だぞ。素で何を仕出かすか分か
アグラヴァインの後でダ・ヴィンチが痙攣して笑い声を上げた。的確だね士郎くん、と太鼓判を押してくれた。

「まあいいや。それより何か話があるから定時でもないのに連絡を入れただろう。用件はなんだ？まさかネロに何かあったんじゃないだろうな」

気分を切り替える。一绪だったマッシュが心配だったが、まあそこともあれ、今回カルデアはネロの方の支援を重点的にこなそうとになった。

それでも、上手く切り抜けて貫くことを願うしかない。さもなければ特異点化の原因を取り除くまでロマニが留置所から出られない。まあ、それはそれで貴重な経験になるだろう。

ネロ・クレアディウスは現在「特異点アンノウン」の調査を続けている。経過は順調と伝えているが、特に何事もない。今のことなら、それがないのでいいなと考えている。だが、それよりもその特異点に関してアサシンー県のハサノ・サッパーから重要な情報が入った。貴様は参考にしかせんだろうが、一応は伝えておくべきだと判断した。故に……

退けアグラヴァイン

お、王！？　また御乱心なさいましたか…？

退けアグラヴァイン
俺は言った。

『作り置きしたバーガーの山をもう平らげたのか？』

「何を言っているのです。そんなもの、昨日の内に片付けました。」

私を満足させたければ、せめてあの三倍は用意してください。」

今、俺は言った。いやリアルティア二人を養うには物資が足りない。聖杯で食料を願うか、と真剣に検討する必要があります。

それよりも昨夜の戦闘データについてですが聞きたいことがあり

違います。それよりもその時間軸の私に関して言ったことを追及し

いません。それよりもどの時間軸の私に関して言ったことを追及し

ますか。私が「倒して押し倒す」といった発言の意図はどういった

倘無人のオルタリアだが。俺がマスターだからか一定の敬意を

払った対応をしてくれる。対比してそれ以外は辛辣に感じるのは

仕様だろう。

俺は思う。いやリアルティア二人を養うには物資が足りない。聖杯で食料を願うか、と真剣に検討する必要があります。

昨夜うっかり溢した言葉、俺は一時沈黙した。

「…おっかしいな。そんな発言、俺のログにはないが。」

惚けますか。いいでしょう。帰ったら覚悟するように。』
「断食案件でございますね。
血も涙もない！外道ですねシロウ！」

「何を言ってるか分からないからね、仕方ないね。
ぶっちゃけ物資的な意味でも暫くサーヴァント勢は断食しなければなりません。
それは鬼も角。ダ・ヴィンチから秘匿通信が入った。
『何を言ってるか分からないからね、仕方ないね。
背後に剣を振り？』

「Jak！」
振り向き様、瞬時に干将を振るう。
すると、予期せぬ手応えが返ってきた。

 achterは、すぐに力が戻った。

「アサシン…！！？う、裏切ったのか！？」
振り向き、瞬時に干将を振るう。すると、予期せぬ手応えが返ってきた。

後で我々は不義理を働いておりませんね！

分かっている。冗談だ。」

「カールデア救世主に寝首を搾られるようになれたらお仕舞いだ。簡単に暗殺されてしまう。現にまったく近づかれているのに気づかなかったのだから。

カールデア救世主に寝首を搾られるようになれたらお仕舞いだ。簡単に暗殺されてしまう。現にまったく近づかれているのに気づかなかったのだから。

背後に剣を振り？」
霧散していくアサシンを尻目に、アサシンからの重要な情報が何かを察し、俺は嘆息した。
それはともかくとして、八十分の一の、白兵戦には弱い我が影と殺されかけていたが、まあ、よくあることなので動転することでもない。俺はさっさと促した。
それより百態の。もしかすると第四次の大まかな流れ、サーヴァント、マスターの素性まで知ってたりするのか？
『無論。それはウィンセイバ－！？』
『…』
百態が蹴り出され、再びオルタが出てきた。
俺は苦笑するしかない。
私の前に出るとは良い度胸だな貴様。私が話すから貴様はさっさと観測作業に戻れ！私の前に出るとは良い度胸だな貴様。私が話すから貴様はさっさと観測作業に戻れ！
さて。では情報を伝えます。心して聞くように。
「まあ、今の方針のままでいいな」

俺は百貌から的情報を聞き、結論を下した。'

なんの問題もない。靴を持つアルトリアと、英雄王に気を付けて。'

青髭。連続猟奇殺人鬼。'

「キャスターは殺す。そのマスターもだ。居場所を教えろオルター」
「陰謀と冒険の匂いだね、士郎くん！」「奴やこさん、留守だぜ。もぬの殻だ。決行直前に引き払った感じだね」。「――何？」斥候に向かわせたクー・フー・リオンからの報告に、襲撃案を三通りほど練っていた俺は盛大に顰めた。

百職のハンサムから提供された情報を探事務のサヴァンが築いていろう下水の工房へ出向いたのが。其処に、キャスターはい・い・い・いっかたのだ。

切嗣の所在不明、アインツベルン陣営の強力化に続く差異である。俺の中で本来の第四次聖杯戦争と異なる確信が強まる。と、同時に。

同じ時、やはり当時を知る者の証言は参考にしかならないうと断定した。アインツベルンの証言は多分に主観が入がち。それに関する今回は特異点ということとあて、観的客女の意見も無視していたが、それが正しい状況になったというわけである。
アサシンの情報通り、キャラスターの青髭は正規の魔術師ではない。工房への潜入は容易だった訳か。で、なんで襲われたって判断した？
工房全体が、その痕跡が残さず焼き払われたかだ。
焼き払う、即ち火。百貌のハサンの情報通りなら、火属性を扱うに。
焼き払う、即ち火。百貌のハサンの情報通りなら、火属性を扱う。
魔術師は遠坂時臣だ。

工房全体が、その痕跡が残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
そろそろクー・フー・リンが言うほど徹底的に焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
そう言うほど徹底的に焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼きたて、零、そらを残さず焼き払われたかだ。
焼き払う、即ち火。百貌のハサンの情報通りなら、火属性を扱う。
英雄王を使ってキャラスターを討ったのか？英雄王が出てきたなら、
青髭のキャラスターなんて瞬殺だろう。
遠坂はキャラスターを教会を通じて行い、令呪一画をせしめんとしていた。
その動き方からして、遠坂は根っからの魔術師。そんな輩に迅速な対処は望めないだろう。
遠坂の他に有り得そうなのは、百貌の情報通りの面子だとして、
蟲翁だ。キャラスターのマスターを襲い、キャラスターを令呪で掌握。その霊基を媒介に新たなキャラスターを召喚―といった裏技ぐらいならやりかねない。
もしそうだったら切嗣並みに厄介な陣営と化すだろう。しかし、
仮にそれ以外の可能性が通るとしたら……？
「今日は考えるのは無駄か。引き返すぞ」
「確かにキャスターが倒されても訳でもねえのにか？」

「今回の襲撃は、キャスターがアサシンの情報通りの存在で情報通りの行動を取っていることが前提だった。それが崩れた以上は居は無用だ。状況も状態も曖昧な戦争だ。臭い奴だから消す。早急に間桐の消毒に移るぞ」

「了解だ。オレのすることはルーンで間桐って奴の塒を隔離しちまうことだったな？」

「ああ。間桐の特性はもう教えてたな？最後の仕上げも任せる。今回は俺の見つけた礼装が、蟲の妖怪と通じるか試す意味合いもある。本命じゃないから、危険だと思えば介入してくれ応。念のため見切りをつけるのは早めにする。ちっちの都合が巧行かなくてもキレんじゃねえぞ。

その場合、ランサーは俺の命の恩人になってる訳だ。キレるわけないって」

苦笑して俺は言う。流石にそれは逆恨みと言うものだ。それに、温厚な俺をキレさせたら大したもんですよ。─と、不意に一人の少女が夜の街、魔力計を手に彷徨っているのを視界に捉えて。

─そのまま小娘に！なあにをしてやがるかこの戯けがどっ！─

「─そこの小娘─！なあにをしてやがるかこの戯けがアッ─」

─ひゃっ─
れ所…。

…おっ、おっ！

ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬルぬルぬルぬルぬルぬルぬルぬルぬルぬル

…家の近くまで送ってやるから、大人しく帰れ。

今こそ子供の時間で

やる！

わ、わたしにはやらない、けんなことがあるん

い、嫌よ！

ば、わたしたちやらない、けんなことがあるな
「友人でも探しているのか？」「えっ！？な、なんで……！？」「顔に書いてる、困ってる奴助けなきゃ、ってな」

「お父様は忙しいし遠坂としてわたしが探さないと？」
「……ばか。圧倒的におばか」
「な、何よ！ばかって言った方がバカなんだからね！？ていうかなんで分かるの？！わたしになんか魔術使った？！」「使ってたらそもそもこんな問答するわけあるか」「使ってたらそもそも悪いのか、という。キャスターがどうしているか不明である中、も

現時点の遠坂凛にすらレジストされねえという。別にそればいいのだ。問題は本当に凛の年頃で夜中を出歩くのが危険だということ。キャスターがどうしているか不明である中、も
決の友達とやちは後で探してやるとする。
素早く凛の腰を抱き、そのまま担ぎ上げた。

「なっ！　どこ、どこ触ってんのよ変態！　変態！　変態！　『いくつ馬』」

「誰が変態か！　親切に家まで送り届けてやるんだ。大人しくしろコラ！」

俺は遺憾の意を表明するも、それは恥手であった。
俺は遺憾の意を表明するも、それは恥手であった。

俺は嘘に強化の魔術を脚に叩き込み、脱兔の如く駆け出した。
俺は嘘に強化の魔術を脚に叩き込み、脱兔の如く駆け出した。

乗用車並みの速度で急に走り始めた俺に、凛は悲鳴をあげてしかみついてくる。霊体のまま並走してきたクー・フルリンが揶揄するように言った。

客観的に見て絵面がまるっぴき変質者だぜ。マスター。

「やばっ、お前はちょっと変だよ、それじゃ。

「まおいい。お前の利かん気の強さはよくよく思い知ってるんだ。

わかったねんだよそんなことは！

客観的に見て絵面がまるっぴき変質者だぜ。マスター。"
苦虫を噛み潰した貌で吐き捨て、俺は大いに嘆いた。

畜生、特異点復元したらなかったことになるんだから見捨てられば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになるんだから見捨てられば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになるんだから見捨てられば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになるんだから見捨てられば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになるんだから見捨てられば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになるんだから見捨てられば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになるんだから見捨てられば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになるんだから見捨てられば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになるんだから見捨てられば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになるんだから見捨てられば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになるんだから見捨てられば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになったから見捨てられれば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになったから見捨てられれば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになったから見捨てられれば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになったから見捨てられれば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになったから見捨てられれば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになったから見捨てられれば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになったから見捨てられれば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになったから見捨てられれば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになったから見捨てられれば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになったから見捨てられれば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになったから見捨てられれば良かった！

畜生、特異点復元したらなかったことになったから見捨てられれば良かった！
軌道修正だね士郎くん！

自身の領域足る遠坂邸、その魔術防御機構をあっさりとっーそれも工房の主、時臣に感知させないほど鮮やかに突破してのけ、書斎にいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するなという方が無理な話であり、動揺こそすれ、すぐさまにいた時臣の眼前に娘の凛を担いだ男が現れたのだ。

動揺するないうちに、時臣は見抜く。

「……貴様は何者だ？」

「見て分からんか」

「見て分からんか」

「……貴様は何者だ？」

「見て分からんか」

「見て分からんか」

「……貴様は何者だ？」

「見て分からんか」

「見て分からんか」

「……貴様は何者だ？」

「見て分からんか」

「見て分からんか」

「……貴様は何者だ？」

「見て分からんか」

「見て分からんか」
苛立たしき彼の先程の言葉。時臣は彼が何者であるか、魔術で気絶させられているらしい娘を、白髪の男が抱えているのは見過ごせなかった。

また彼の先程の言葉、工房の守り抜かれたことに、気づきもしなかった間抜けがよく言っていた。その気概に免じ、この場では殺さないでいてやる。

州の上段に構えた壮語を笑い飛ばそうとした瞬間である。大上段に構えた壮語を笑い飛ばそうとした瞬間である。大上段に構えた壮語を笑い飛ばそうとした瞬間である。大上段に構えた壮語を笑い飛ばそうとした瞬間である。

背筋が凍る尋常でない殺気。勘違えるなど有り得ない。それはまさにサーヴァント。違った時臣は、呪呪に令呪を意識する。英雄王を喚ぶ以外にこの状況を切り抜けられない、と彼は感じた。だが、令呪を発動するだけの隙があるように思えなかった。

下手に動けば命はない。背中から心臓に狙いを付けられている。指先ひとつ動かせば、或いは魔術を起動すれば、たちまち時臣が死んでしまう。
この髪は目立つんだが。俺の外見の特徴に対する無反応後、ランサーに対する鈍さからして、まだ言峰緋礼から俺の存在は知らされていないらしい。「っ！？」「ああ、喋るな。俺が勝手に喋ってるだけだ」

「この言葉は。緋礼と時臣が協力関係にあることを、すでに知って
いることの証左であり。同時に背後のサーヴァントが近接戦に秀でたクラスであると口にすることで、万が一にも隙がないと観察する
意図が隠されていた。」

「俺は意識のない凛を抱えたまま、書斎から出ていった。その間、
ランサーは背後で時臣の監視をしている。暫くして戻ってきた男は、
凛を抱えてはいなかった。

凛は適当な寝室に寝かせてきた。本当は用なんてなかったが、来
てしまったからには仕方がない。話をするか、遠坂時臣」

「話だと？ 脅しではなくあ」
は、デスクに腰かけて悠然と脚を組む。挑発的な面持ちで、時臣を
見据えた。

「脅す気はない。無駄だからな。今ここでお前を殺すのは赤子の手
を捻るほど簡単だが、それも得策じゃない以上は見逃すことにして
いる」

「……私を殺さない？ どういうつもりだ」

「単純な話だ。お前のというマスターを失った場合、英雄王の動きが
読めなくなる。マスターがいなくなったとしても、現界を維持でき
そうな英雄王には最終局面の手前まで生きていって貰わないとな」

「……」

英雄王の真名が看破されているだろ？

アサシンの脱落在偽装させた初戦と、倉庫街での一戦以外で、英
雄王は戦っていない。その二回で真名に行き着いたのか。或いは英
雄王の揺った宝具が全て本物であると察知し、そこから真名を推測
して、当てずっぽうに口にしていっているだけなのか。

適度に手札を切りながら揺さぶりを掛けてくる男に、時臣は顔を
険しくする。

口数は多いが、反比例して男の目はどこまでも冷たい。何を見よ
うとしている、と警戒心を最大限に高めた。一瞬も隙をぬすわけに
はいかない。

「お前に良いことを教えてやる。信じるか信じないかは別だが、セ
イバーはアーサー王だ」

「なに？！」
スキル構成、所有する道具とそのランク。加えて戦闘に際しての思考形態を、口頭で簡単に告げる男に時臣は驚いてしまった。それだけではなかった。男は懐切丁寧にセイバーの攻略法を口にし、その上まだ引き出しけなかったのだ。

「そしてセイバーはブリテンの円卓の騎士最強、「湖の騎士」ランスロットだ。英雄王が本気を出せば攻略は簡単だろうが、慢心している状態だとそこそこ手すずまるだろう。

……なぜ私にそれを？

言わなくてても分かってるだろうに。潰し合って欲しいから、ってのが一つ。セイバーの方は、英雄王が本気でも勝ちを狙える陣営だから教えてやろうと思ったのだ。

「……

良いうちに利用しようということわけか。知らぬふりをしようにも、この男は何者だ。着実に時臣の思考を縛っている。無視できるものではな

男の言葉が本当ならセイバーはかなりの難敵。戦力できるものではな

るに感じられる。そして話運びが巧みなので、魔術もなく意識を誘

導されている感覚がした。

「私に要求はないのか」

「ない。お前がそれに応じるとは限らないし、そもそも俺は魔術師

という人種を一部例外を除いて信頼しない。目的のためなら平然と

……」
約定を破棄する、それが魔術師だ。故に俺が口にするのは事実のみ、それによってお前はどう動こうとも構わないとも。

含み笑う男に虚勢はない。最強の英霊、ギルガメッシュを相手取ってもなお戦えると確信し、時臣を打ち倒せると考えている。工房の守りを難なく突破した手腕からして、それは自惚れではない。確固とした確信があるようだ。舐めてくれる、と時臣の頭に血が上りかける。

さあて。英雄王もそろそろ、のんびりだらりと帰ってくる頃合いが上りかかる。

了解。しかしなんだ、なんか回りくどいな。ここで片した方がいいと思うんだがね。

「さあて。英雄王もそろそろ、のんびりだらりと帰ってくる頃合いが上りかかる。」

時臣はそれを見送るしかなかった。苛立ちを込めて、デスクを拳で叩き割った。
「しっかりなんだ。マスターは面倒を増やす天才だな」

「災い転じて福を成す天才でもあるぞ」

「自分で言うのかよ」

「いやまあ、なかなか楽しませて買ったが、と含み笑うク・フーリン。俺としては予定になかったアクションを、なんとか誤差の範囲に収めた腕を称えて欲しい気分だ。いやまあ、身から出た錆なので虚しさは拭えないが。」

「これ、こっからどうするー」

「方針に変更はない。現時点で元々の第四次聖杯戦争の知識が宛にならなくなったり、最も聖杯戦争から外れた行動をし、何をするか分からん奴から消すー」

「キャスターだな」
ああ、次点でライダーだな。だがそれのみに固執する気もない。
今のアルトリアは極めて強力だ。聖剣を平然と連発出来るのは間違いないから、恐らく強力な個とは言い難いライダーは相手にならない。
小難しいことを考えず倒して良いのはキャスター、ライダーだけだ。

元々が稀代の英傑が集う舞台だ、脚本通りに万事が進むわけではない。
星の下に生まれた連中ゆえに、傾聴し、俺は思う。あの一騎ぐらいうりと倒されていたのだろう。

変異特異点、何があるやら俺は肩から力を抜き、まあ何があっても対処するさと気楽に構える。
気負ったところで何が変わるのだろうから。

キャスターが、何者かに倒されていたのだ。
既にキャスターが、何者かに倒されていたのだ。

現時点で、俺の知らないところで想定を外れる事態が起こってい
た。
因果は回るよ土郎くん！
カルデアのアッ君との通信を終える。

『特異点アンノウン』に挑んでいるネロの進捗状況は、報告によ
れば今の所微々たるもの。判明したのは地形と時代。地名のみであ
る。

カールデアのアゾンのアッ君と通
信を終える。
『特異点アンノウン』に挑んでいるネロの進捗状況は、報告によ
れれば今の所微々たるもの。判明したのは地形と時代。地名のみであ
る。

地形は翼のような形の島。広さは1,700km程度とさっくり
測られ、推測になるが世界から切り離される以前の影の国、スカイ
島と思われるようだ。

時間軸は神秘の濃さからして神代、紀元前一世纪から一世纪。ス
カイ島には様々な神代の怪物で溢れているらしく、エミヤ、アタラ
ンテ、アルトリアの三人でも思うように拠点とした場所から離れら
なが敵で、何が特異点化の原因なのか、それは全くの不明で。先
程墮ちた神霊と交戦したらしく、ゴジラ並みに巨大な『波濤の獣』
と神霊の怪獣大決戦に巻き込まれ、エミヤとアルトリアが宝具を連
発したもののだから魔力負担が大きく、ネロに泣きが入ってきたよ
うだ。正直ネロで泣きが入るなら、更に魔力の少ない俺なら枯渇して死
んでいたかもしれない。戦力の振り分けは正解だったらしい。

現在、殺宮は休憩をいつも挟まず機械のように淡々と調査を進めつつ、既に二回渋れたらしいが、その度にカルデアで靈基復元され調査に回されているようだ。

殺宮に不満はなく、靈基の損傷も気にせずに淡々と調査を継続し、もう少し何かも掴めそうだという。流石の手腕だが一〇〜もう少し、こう、なんだ。俺の言えたことはないかもしれないが、鉄のアヴェインは中々ブラック上司の資質が見られ、俺でも引くほどの酷使である。合理的だが、ぶっちゃけやりすぎだ。オルタリアすら少し離れを置くとか相当だと思う。円卓から誤解されまくってというものだが、残念ながら当然だった。

俺はとりあえず、殺宮を使い潰すことは禁じておりた。流石にそんなことはしないと思いたいが、念のため。

ええ。その、なんだ。なんか師匠が迷惑掛けてそうですねえ。
内から敵が出ても容赦なく始末するクー・フーリンだが、流石に申
し訳ないとは思うらしかった。

「俺に謝られても困る。まあこれまで、特異点化の原因候補となって流
れなかったことだが、流石に申し訳ないと思うらしかった。」

「俺たちは、世界を動く世界で死の世界である影の国がスカイ島か
ら剥がれ落ちず、世界の裏側に一年遅れだけで、その差異が大き
くなるのは自明。死の世界の位相がズレるのは当然だが、全然
と気遣ってみたが、特に何もないらしい。風々として、何かも
せずに言い捨てた。

「なにでもいいけどよ。向こうの国だけを片づくならそれで
いだろ。ま、手に余るようなこっちは終わったら側に出向いてもい
いけ、オレは。」

「こっちを終わらせてからの話になるがな。

さて、俺は気持ちを切り替えホテルを引上げ、何日も同じ場
所に陣取るほど抜けてはいない。

俺はクー・フーリンを連れてある場所を目指す。遠坂時臣との
件を考えれば、我ながら面の皮が厚いと思われるかもしれないが、厚
顔無恥も使い方によっては武器となるものだ。

いつか通った道を辿り、目的の森へ踏み込んでいく。巽の髪い
メンド臭かったのでクー・フーリンの戦車で漕ぎながら進んだ。
「快適だなこれ。「」
「だろ？」
「都市部以外が戦場になったら、もうこれで移動したんでしょうか。
パークとか要ね、と本気で思ったが、まあないよりはあった方
がいいかもしれない。
しかし荒れ地の方はもう、問答無用で走破出来る戦車に搭乗した
ことがあった。
バクとかもらね、と本気で思っただが、まあな切りはあった方
がいるらう。」
「遠坂陣営に情報を受けたときなど露ほどの感じさせず、イギ
遠坂陣営に情報を受けたときなど露ほどの感じさせず、イギ
リスで培った厚かましさで俺は申し出たのであった。

- 酒樽を担いだ赤毛の巨漢は、戦車に乗り込む寸前にゆるい空気の男を見つけた。

- おおい、その者ら！少し待たんか！

- 直感に突き動かされるまま呼び掛けると、色彩の薄い少女は目を丸くして固まり、癖の強い白髪の青年は、この時代に見合わぬ衣装姿のままゆったりと振り返る。

- 余裕と知性の溢る物腰に、巨漢の顔に骨太な笑みが浮かんだ。

- なお青年の呼吸に、王気と呼ぶべき器があるのを。
見た！これより騎士王と金ぴかを交え、酒を酌み交わさんと考えてあるが、うぬもその席に置いてはみんか！
「ちょ、おまっ、また真名出してんじゃねえですよこの馬鹿っっっ！」
「―酒が飲めるのか。ツマミが出るならご相伴に頼ろうかな。
ちずっとお腹減ってたし」
「んっ、ツマミとな？」
「なん？何か問題あったかな」「先輩に諺かなくていいんですか！？」「いいんだよ別に。アイツの言うことなんか無視だ無視」
「せんぱあい！ドクターがご乱心です！」「ど、ドクター！？そんな勝手な……！」「ん？何か問題あったかな」
忘れていたとは不覚である、どこで調達したものか……。悩ましに飲るイスカンダルをよそに、少女が慌てたようにあわあわと手を振った。
青年のマスターらしき少女と小声でやり取りし、青年はなんら気負う様子もなく歩み寄る。
それより、名乗られたなら名乗り返さないとね。
「それよ、名乗られたなら名乗り返さないとね。」
「えっ…」
「私の名は魔術王ソロモン。キャスターのサーヴァントだ。で、こっちはマスターのマシュ・キリエライト。よろしく頼むよ、名にしおう大王様？」
まさか名乗り返されるとは思いもしなかったイスカンダルは驚嘆した。
余の目に狂いはなかった！
時代を冠する偉大な王とまみえられることは
はなはだ！
興奮を露に感嘆するイスカンダルを横に。
そのマスター、ウェイパー・ベルペットは。
魔術世界の神とも言える名が飛び出したことに
魂消して口をばくばくと開閉させるしかなかった。
ソロモンは自身の大それた言動にまるで価値を感じてはおらず、
頭にあるのは自身を嵌めてくれた輩への報復ばかり。先程片手間に
滅した本来のキャスター、青髭の件もある。胸糞悪い気分にさせて
くれ、マシュが危うくあの光景を見そなったのを防ぐのに大い
に神経を磨り減らしたのを、彼は完全に自身の友人のせいにしてい
た。
「彼を一発殴る権利がボクにはある。だよね、マシュ。」
「うっ。…私それは否定できまませんけどっ。」
そんなに嫌か士郎くん！

同盟を申し込みに来た、ですって……？

アインツペルンの森に仕掛けられていた罠の数々を、戦車の疾走によって強引に潰してやって来たのは、倉庫街でセイバーを翻弄し圧倒したランサーの主従であった。

森の守りを破られ、警報が鳴ったことに内心慌ててていたアイリスフィールは、予期せぬ来客の予想外の申し出に柳眉を逆立てた。

三十路手前の、男盛りの白髪の戦士。中華の双剣を鞘に納め腰に吊るしたその男は、現在アイリスフィールらが最も警戒する存在だっただの。

……それに、クラスは分からないが、既に二騎のサーヴァントが生憎と戦いの心得などないアイリスフィールでは、見るからに戦い慣れている白髪の男に太刀打ちできるとは思えない。

森の守りを破られ、警報が鳴ったことに内心慌ててしていたアイリスフィールは、予期せぬ来客の予想外の申し出に柳眉を逆立てた。

三十路手前の、男盛りの白髪の戦士。中華の双剣を鞘に納め腰に吊るしたその男は、現在アイリスフィールらが最も警戒する存在だっただの。

……それに、クラスは分からないが、既に二騎のサーヴァントが生憎と戦いの心得などないアイリスフィールでは、見るからに戦い慣れている白髪の男に太刀打ちできるとは思えない。

“同盟を申し込みに来た、ですって……？”
脱落している。

聖杯戦争が長引き、後半にさしかかる頃にはアイリスフィールは身動きすらままならなくなり、影武者のホムンクルスがアイリスフィールの代わりにマスターを務めることになる。現時点で衰弱しているアイリスフィールだ。戦えばまず敗北すると言われている。英霊の魂に圧迫され、小聖杯が剥き出しとなって、故に彼女たちアイリスベルン陣営は、目下ランサー陣営への対策を考えるのに全神経を傾けていたところなのだ。

そこで、アルトリア・ペンドラゴンと意見の一致を見た、今次聖杯戦争最大の敵からの同盟の申し出。警戒しない道理などない。アイリスフィールは油断なく白髪の男を睨んで言った。

―「どうしてかしら」

「ああ、思う」

彼女の眼前にいるのは海千山千の魑魅魍魎と鎬を削ってきた論戦を押し、彼女のために戦うスペシャリストである。屁理屈を捏ねさせた天下一品、腐れ縁の赤い悪魔をして喋る前に殴る。と言わしめた歴戦の停戦調停者。
折角会話の主導権を持ちながら、わざわざ男に喋るターンをあげた。どうして？ときたか。では逆に聞くぞ。陣地に引っ込んだ魔術師を相手に、どう対等な関係を結べと言う？ましてやそれぞれば、直前まで敵対関係にあり、まともに会話が成り立つ保障もなかったのだが。まともに出向いたのではけんぼうに追い出されるしかもれし、交渉を行えたとしてもその席が決裂した場合、自らの陣地にいるどちらかが圧倒的に有利となる。襲われない保障はどこにもない。どう？故にまずは対等な交渉のテーブルに着かせるために、そちらに有利となる陣地は破壊せねばならない。

言わんとましていることは分かる、しかし納得がいかない様子のアリスィールに、だが男は考える暇を与えない。

取扱説明書も、それはどうかしら。

「え……？」

そしてそれからは、俺達の力は既に思い知っているはずだ。かなりの危険度だと判断しているのではないか？

「そうだ。それはどうかな」
け初見の利がなければ、青ペンちゃんですら鞍があっても勝ち目のない相手だ。道具の詳細を俺が知る限り話そう。

高い単独行動スキルからステータス、道具の特徴、極めつけにそ

令呪が効かない、マスターや死のようならしか出不来ない、何を

たちまちで鞘があっても勝ち目のない戦手だ。

高価な単独行動スキルからスケールを、聖杯特有の特性、極めつ

いった在りで矢継ぎ早

早急に片付けたいから協力してくれ。

今なら豪華特典をおつけ

ちよっと待って、ちょっと考えさせて！

ちよっぷりで会いたい！

聖杯戦争に参加していながら聖杯が要らないって何しに来たのよ！それ

お義母さんって何？！

何しに来たかだとも？

決まっている、青ペンちゃんに会いに来た

んだよ！

決まっている、青ペンちゃんに会いに来た

んだよ！
「私ですか！？
嘘だよ！
ふぅ、と一気捲し立て、男は密かに呟く。
まあ、ルルルイカーあるし―と。
 커イツ最悪だなと無表情の裏で笑いを堪えるクー・フー・リンである。
一頻り喋って落ち着いたのか、男、エミヤシロは居住を正した。
「それで、答えは何に？」
アリスフィーールはなんとキャラかしろの勢いを捌き、冷静に考える。
果たして同盟の誘いを受けるべきか。
なお同盟交渉が決裂したなら、その瞬間にシロウはここの場から離脱するつもりだった。
なにせこの城は、橋に次ぐシロウの鬼門であるから。
長居して良いことかと彼は弁えるとた。
アリスフィーールは自分では考えない。
自らの経験が全く足りないことと自覚していたし、自身のサーザンットが経験豊かでない常勝の王だと言えても、アルトリアに相談することになったのだが。
迷いなかったのだった。
故に、彼女はアルトリアに訊ねる。
貴女はどう思うか？」
「…」
「どうして？ 全く怪し過ぎる男だ。何故か憎めない感じがして戸惑っても、そっけもなく本能的に近しく感じてしまう空気感を彼は持っている。アルトリアは小声で言った。
多弁な輩の言葉は全て聞き流すのが吉です。肝要なのは話の要点だけを抜き取り理解すること。その上で考えるとランサーのマスターの提案は旨味が多い。少しでもランサー攻略の手掛かりが掴めたら上々、そうでなくともアーチャー打倒までの協力体制を割り切ればいいのです。アイリスフィール、少なくともあのマスターは不意打ちや騙し討ちはしてこないと思いますよ。
それはつまり、男の言った通りにした方がいいということではないか。
アリスフィールは今更になって戦慄した。アルトリアも理解し、それがつままり、男の言った通りにした方がいいということではな
いか。
男の提案を覆す思考が浮かばない。アイリスフィールは、男の言い方だけが皆でいるように全く欠けておら
ず、自身の懐を探らせないまま自らの提案が最善であると思わせてきたことを。

「いえ。貴方と同盟を結びます。エミヤシロウ」

「仕方ない。提案を呑もう。アイリスフィールはそう決意し、虎穴に飛び込む気概を固めた。」
それは良かった。—ああ、本当に—

アリスフィールの返答に、シロウは心底安堵したように息を吐いた。—ああ、本当に

アイリスフィールの返答に、シロウは心底安堵したように息を吐いた。そこの時である。

「――ほぉ？にやら薄汚い雑種が馴れ合っているのかと思って人形に、小娘に、半神に道化。珍種のバーゲンセールか何かと笑う、聞き知った傲慢な声音。

咄嗟に城壁の上を見上げると、そこには夜の空を背に抱いた黄金、咲き乱れる城壁の上を覗かせ、そちらに向け、アルトリアが取られているのだろうか。

どうか、シロウは顔を強張らせ、これまでの全てを台無しにする勢いで、クー・フーリンに小声で言った。「はあ！ダメに決まってるだろいな何言ってんだ—この流れはマズイだろどう考えても。来てる、これ絶対に来てるから」
シロウの顔は真っ青だ。先程まで強気に話を進めていた男とも思えない。だが無理もなかった。彼は思い出したのだ。百貌から聞いた情報で、先程まで強気に話をしていった男との間に考えた。「聖杯問答」という酒宴、それに思いっきり巻き込まれて未来を予見した、シロウはなんとかこの場からの離脱を望んでいたのだった。というかこのタイミングで来なくてもいいだろう！とシロウは頭を抱えそうだった。これは歩くでもないことがある間違いない。とシロウは確信して言うと案の定、雷鳴を引き連れて蹄の音がここまで聞こえてきた。またいつものパターンか、とシロウはもう諦めの境地に達していった。
半神に共通する真紅の神性。

他を圧する暴力的なまでの我意。比類なき強大な自我。黄金の魂。恒星に等しい存在力を無作為に発散しながら、愉快な喜劇でも眺めるようにその双眸が細められた。

俺は忌々しく舌打ちたいくなる衝動を抑えろ。

アリズフィールの物言いたげな目を流す。俺が森の結界から何まで台無しにしたとはいえ城そのものは無傷なのだ。事実を口にすることぐらい許してほしいものである。

俺の問いに、英雄王はしかし機嫌を害してはいないようだ。許しなく顔を見るなどか、雑種風情が問いを投げるか、と意味不明な怒り方をする男だが、奴には奴の筋がある。それを読み違わねば、意外と英雄王は寛大だ。
それなく身構えるクー・フーリンと青ペンちゃん。アイリスフ

イールが同盟の申し出に頷いた以上、ニ騎のサヴェントは連携す

る用意がある。英雄王が何をしても即座に反応できる態勢だ。

二騎の大英雄の敵意。特にクー・フーリンの眼光は視線だけで殺

せそうなもの。しかし英雄王はそれには怯まず、逆に面白げな視線

で応じて、俺の問いに答える。

「……？」

「何やら滑稽な筋書きに踊らされ、未だそのを自覚できずにいるら

う、この我に拝謁する栄誉を賜ったのは」

「っ……？」

「そんなの用と来たか。随分とツレないな、雑種。久しぶりのだろ

黃金の王の言葉の大半を、呟啞に理解できなかった。しかし英雄

王が俺を知っているらしいということは察せられた。

予想だにしなかった事態である。この変異特異点——否、この時

間軸では英雄王は俺の存在を認知など出来るはずもない。一体どん

んな手を使った？ 宝具で未来を見たことを？ いや、そんなふまら

ないことをする男ではない。仮に未来を視るとしても？ いや、そんなふ

まら

具に拝らずに自力で視るだろう。

「……ということは、英雄王は宝具ではない。自身に備わった自前

の能力で未来を視ることが出来る？ 俺の思考など掌の上なのか。ギルガメッシュは肯定するようにわ

ざわざ俺を見下ろした。
クー・フーリンがこめかみに青筋を浮き上がらせ、怒気を露に呼ぶ。
「マスターを知ってこたっ、このオレのことも知っていなー。
無論だクー・フーリン。見違えただろ、以前のそれとは比べ物にもならん。今の貴様なら同じ半神のよしも本気を出してやってもいい」
「は、嘆ずってんじゃない」
心底興味なさげに、英雄王の賛辞を横に捨ててる。
クー・フーリンという真名にアルトリアとアリスフィールが反応したが、そんなものに欠片も意識を向けず、最強の槍兵は呪いの朱槍を突きつけた。
「デメー、よくこのオレの眼前でマスターを侮辱してくれると、ハッ。クランの猛犬が飼い慣らされたか。よもや貴様が騎士を気取るとはな」
嘲けりではなく、不敵な笑みだ。視線の交わる先で火花を散らす両者に俺は制止の声を掛ける。
一待てランサー。英雄王の物言いに一々目くじらを立てていたら埒が明かん。戦いは任せるが今は俺に任せてくれ。
「…チ、わあったよ。ただしマスターも腹掴ってる。苦手だからって腰が引いてたんじゃあ、男として少しばかり情けねえぞ」
耳に痛い忠言である。確かに俺は英雄王が苦手だった。
その正実を見通す眼が、こちらの虚偽を剥ぎ取るようで、どうに
も正視に耐えない。
が、そんなことも言いつつもだ。俺は英雄王が苦手だっ
て、確かに俺は英英雄王が苦手だっただ。
そこの真実を見通す眼が、こちらの虚偽を剥ぎ取るようで、どうに
も正視に耐えない。
が、そんなことも言いつつもだ。俺は腹を据え
る。頭のギキアを最大にまで上げた。
「相方が突っかかって悪かった。それでGilガメッ
シュは俺だけでなく、クー・フーリンの存在も認
knowしている。
知識とは言ってもいる。聖杯問答をやりをしに来たのだろう。
しかし第五次の戦いを識っているらしい英雄王が、果たして同様の
理由でやって来たのだろうか？
俺の問いに超越者は口許を緩める。嫌に嫌嫌が高い、嫌な予感し
かしない。
～カルデアのマスターよ。言わずとも察しているならわざわざ問い
を投げるな。この我に無駄に言の葉を Regards させるは死罪に値する不敬
だぞ～
～大体があんたからしたら不敬だろうが。機嫌良いなら見逃せ～
「わ…」
「…」
「…」
「…」
目を開く。ギルガメシュはアインツベルンの城の城壁の上で、腕を組みながらこちらを睥睨した。

『贋作を造るその頭蓋は気に食わんが、特例として存在することを赦す。その小賢しい知恵と悪運を駆使し、人理を巡る戦を見事、戦い抜くがいい』

だが今のままでは道半ばで倒れるは必定であろう。今の内にその因果を清算しておけ。此度はそれだけを告げに来た。

エメナルドの天舟。それに跳び移り、玉座に腰を下ろした王は咥えて、エメラルドの天舟。それに跳び移り、玉座に腰を下ろした王は咥えて、玉座の向こう側から空を舞う王の御座が現れる。こちらからは見えない地点、城壁の向こう側から空を舞う王の御座が現れる。

そこで言って、ギルガメシュは片手をあげた。尚、先を「視てしまった」以上、この場の余興に絡むのも面倒だ。故に雑種は雑種同士、せいかじ適当に戯れているがいい。我はこの先の宴を心待ちにしているぞ。クラウンの猛犬。

謎めいた言葉を残し、それ以上の弁を費やす事なく英雄王は去っていった。俺は呆然とする。
全然、全く、これっぽっちも予期しない事態だ。
いったい、俺が話していた相手は誰だった？

傲岸不遜、慢心の塊、絶対者ギルガメッシュだったか？

相変わらず話が分からねえ野郎だが、雌雄を決する機会はもう

ういちよ先らしいな。

訳が分からずとも現実は変わらない。本来、聖杯問答に参加する

はずだった英雄王は去ってしまった。

杯で挑まれたら逃げるわけにはいかないのが王ではなかったか？

それを使ってでも成さねばならないことがあったとでも？

もう王のことは分からない。一方通行の理解だけを持っていかれ

た。

酒で話に付いてこられていなかったようだ。

だから、アイリスフィールを盗み見る。

もちろんの名前は知らないらしい。いまいち話に付いてこられてい

なかったようだ。

だが、英雄王は俺を殺す気はないと言っていた。ならば無理をして

倒しに行く必要はない？いやしかし、『この先の宴』とはなんだ。
冬木の聖杯に招かれた存在である以上、それはこの冬木での出来事であるが…。

「…妙だ」アリンが言う。

「気をつけて」アリュアが言う。

「どう見る」俺は仰の方向を向いた。

「ああ、どうにも奴さん、面倒なことになっちまってるぜ」マスターの方から言葉を送った。

「面倒？」見えてみろよ。マスターの方が眼がいだら。あっちだ。

「どうだ？」げん。

そこには俺の見たことのない、しかし知識として識る魔物…。泥に塗られた海魔の群れが氾濫し、この城に流れ込んでこようとし

言わされるまま、俺は脚に強化を叩き込んで軽く跳び、壁の上に登って高所からアインツベルンの森の外れの方へ目を遣った。

目を細める。

泥に塗られた海魔の群れが氾濫し、この城に流れ込んでこようとしているではないか。
それを期せずして、さらに形についての覚えのあった魔法王。その顔には曖昧な表情で肩を竦めて、心の底から疑問を投げた。「なにやってんだアイツ」オレが知るか、クー・フー・リュンは苦笑した。
アーキマンなのかソロマンくん！

うわあ、と気の抜けた声で呻いたのは、誰であろう魔術世界に於け

あらゆる魔術師の頂点に君臨し、魔術に分類される全てを支配す

る絶対者。魔術王ソロモンの転生体にしてそのデミ・サーヴァント。

二つものソロモンの魂が重複した異例の中の異例だ。

魔術王の魂を持つロマニ・アーキマンとしての生身を持つ故に、

ただのロマニだった頃から持ち合わせた一の指輪と、サーヴァン

トとして所有していた九の指輪を十指に嵌め、ソロモンは眼前のそ

れを眺める。

津波の如くに押し寄せせる呪いの泥。それは強大なるソロモンの

魔神にも匹敵する呪いの規模を持ち、汚泥の如くに現出した反英霊

の霊基反応が感じられる。現れた大量の海魔は、その反英霊の宝具

によって召喚されたものだ。

なんらかの機能が作動し、脱落したサーヴァントを聖杯が取り出

して、こちらに差し向けたのだろう——ただ一目視ただけでその正
体とからくりを相手に、再び魔術王！ こやつが何者かはひっとまず横に置くとして、このお霊を召し上げる。雷牛の牽く戦車に乗った征服王が、のんびりと構えたままの魔術王に呼び掛ける。強大なその呪いは、サーヴァントにとっては鬼門である。触れた酒盛りに来ただけののにこのような事態に遭遇したともならば、愚痴の一つも吐きたくなるというもの。征服王はやや剣吞な眼差しで海魔の物量を一瞥した。戦車による全力疾走で、轢き潰してやるのもいいが、征服王の眼光は呪えない表情の魔術王の方が対処に適任と見たのだ。故に水を向けてのである。ソロモン王の力を見たいという打算もあった。

“うーん…まあ、そうだね…。”

有り体に言って、この海魔とその使役者はソロモンかすれば敵に対処は容易の一言で、その気になれば海魔の召喚術式に介入し、キャンセルして異界へ送還してしまえる。実際、冬木のキャスターをそうして丸裸にし焼却したのだ。道具による召喚だろうが、それのが魔術による代物である以上、ソロモンの支配下に置けるのは当然である。
故に彼が残念に思うのは、この騒ぎのせいで『あん畑』に気づかれてしまったことだ。折角驚かせたやろうと思っていたのに台無しである。

ソロモンの胸中を観していた少女、マシュ・キリエライトは苦笑した。ドクターが楽しそうで良かったのだ、なんてこの場にはそう変わらない穏やかな表情だった。

ソロモン＝ロマニ・アーキマンはそれには気づかず、とりあえず思い出す。

ここで海魔を異界へ送還してしまうのは簡単だ。が、それを征服王の前で見せてやる必要はない。ソロモン王の逸話から簡単に推測できられる能力の方で対処した方が手札は隠せるだろう。

それに一度やられた手法に対して、冬木のキャスターがなんだろうが、冬木のキャスターに自我はない、と彼は断定する。

堕ちたりはといえば、まがりなりにもフランス救国の英雄だ。ジャンヌ・ダルクの添え物として見られがちだが、実態はその逆である。

大元帥ジル・ド・レネ伯が同じミスをするとも思えない。故に間違いないと言われた。まあ、敵て同じミスをして、相手の油断を誘発する策とも見られるが、それをする意味はない。何故ならカルデアの陣営に、油断や慢心は無縁であるから。

「普通に焼き払ったんでいいんじゃないか。

なぜやに言いながら、ソロモンは魔術を行使する。

「普通に焼き払ったんでいいじゃないか。」
召喚魔術に特化した術者ソロモンは、詠唱を瞬きの間もなく完成させて、目的のものを召喚した。

「～来たれ地獄の大伯爵。第三十四柱の魔神フュルフュールよ～」

別名フルフル。英霊ソロモンに付随する、自我のないだの術式

と言っても、伝承に語られる最高峰の使い魔である。宝具の域に

も届くそれを、ただの召喚魔術に過ぎないと看破できる者はこの場

にいない。

久方ぶりの、ソロモンとしての魔術行使に感じるものはない。あ

るのは奇妙な自己の齟齬。かつて純粋なソロモン王だった頃にはな

かった人間としての心を持ちながら、ソロモンの力を振るいうことへ

の心地好い異物感のみ。自分が変わられていることへの実感だ。

白衣を纏い、眼鏡を掛け、ソロモンによって霊基を誤魔化され、

普通の人間に見せられているマシユを庇うように立ち、傍らに魔神

を召喚する。

優美なる威厳を備えたその魔神は、地獄とされる異界にて二十六

の軍団を率い、雷や稲妻を操る異能を保有していた。真実を話させ

る呪文を唱えない限り召喚者に対しては嘘を吐き続けるが、現在は

自我を持たない使い魔である。喋る機能はあるがそれは切っており、

魔神は無言で佇んだ。
「おー！」「おー！」「おー！」「おー！」

第三十四柱、フルフェュール。نهまれなくて良かったぞ人知れず呟くソロモンに、征服王の感嘆の声が上がる。そのマスターである少年ウェイパー・ベルペットは、ただただ圧倒されて魅入られるのみ。

ソロモンが楽団の指揮者の如くに腕を振る。フルフェュールは主の指示に従いその異能を発揮した。異次元の音波を発射して反乱者が即死、見事な七支刀のような角を誇示する。雷光が閃き、その身は宿る膨大なる魔力を大雷へと変換して、百を超える海魔へ向けて撃ち放つ。

その威力は、さながら電磁加速砲により投射された砲弾の如し。凄まじい雷電の破壊の余波は物理的な破壊力を伴う衝撃波を発し、周辺に夥しいまでの破壊を撒き散らす。

射線にあった森林は破壊し、地面は地割れを起こしたように揺れ、着弾を受けた百の海魔は一瞬で蒸発した。

宣言通りに焼き払いー！否、焼却し、ソロモンは張り切りすぎたマスターへの意趣返し。今頃突然の魔力消費を耐えられぬまま、シマタしました顔をしているはずだと思。これがオルガマリーの父、マリスピリ・アニムスフィアがマスターなる今の位階の砲撃を五連射出来たが、士郎の魔力では連発が危うい。今ので溜飲をさげようとソロモンは思。余り後に引き摺るのは大人げないぞ。
嘘だろ…？今のレベルの大魔術を、なんの下準備もなしで、それと思わぬ一息でだななんて…。
もたった一息だなんて…。
ウェイバーが絶句していた。魔術による大規模破壊は、噂に聞く彼のミス・ブルーを上回っている。とても現実の光景とは思えない破壊の跡に、彼の中常識がからかって音を立てて崩れていた。
それを尻目に、今の一撃で誰の目に触れさせず、冬木のキャストーも倒せたのを確認し、ソロモンはひとまず自身の正体を有耶無耶にすることを確信する。
ロマニとしての研鑽と、ソロモンとしての叡知が掛け合わされている今、士郎の策謀を見抜くことは困難ではない。故にそれに合わせるために、ソロモンは自身の正体を秘匿する。

流石よなぁ、魔術王！今の一撃を事も無げに放ってのけるとは、余をしても度肝を抜かれたぞ！

謳辞は受け取ろう。しかし私からすれば、今の魔術は児戯にも等しい。これが全力と思われたなら心外だね。

一、はお！今ののが児戯ときたか！俄然其の方に興味が沸いてきたわい。
荒うるい征服王の謳辞に余裕を持って微笑む。

遊戯的ないく位のサーヴァントが相手だから一撃で倒したのだ。
相性のいい下位のサーヴァントが相手だから一撃で倒したのだ。

これが征服王を狙ったものなら回避されただろうし、カルデア最強の槍兵なら反撃ついでに抜けた手当手傷を負わされかねない。

やはり魔術師である以上、神殿を作って籠っている方がいいなど思う。まあこの編纂事象の処理が叶わなかった変異特異点で、ソロモンは自分の陣地を持つつもりはなかったが。
ソロモンも、自分のみの保有する最高の千里眼を封印していった。

過去・現在・未来の全てを見通すそれは、確実に便利で是あたらしい。しかしそれは人の心を持つ者が無用で、人の戦いである特殊点復の旅に用いはなんだ。

そこでも、これほ身に関わる事件だ。故にソロモンは千里眼を、迅速に事態の終息を図るつもりでいったのではある。しかしその千里眼は閉じておけ。カルデアのマスターは、そう言ってロマニに千里眼の使用を禁じた。それはソロモンもかく、ロマニの人間の心で『全て』なってものを見るは必らず摺摺らるかで。

ちから、人理焼却の黒幕に気づかれないようにするためでもあらう。このな事態にあって、ロマニ一人の心を慮り、全知ではなく人知による戦いを肯定していられる彼に、ロマニは感謝の念と共に決めたのではある。

彼のサークヴァントとし、そしして―やったの友人とし、共に特殊点を旅し戦おう、と。

「―む、魔法王！新手だぞ！」

征服王の警戒を呼び掛ける声。ちからと見ると、残像なら残さずして。

蒼い風が吹いた。
マシュが声を漏らす。それは今しがた脳裏を掠めた冠位の槍兵。
ソロモンと同格の勇者。クー・フーリン。
呪いの朱槍を肩に担ぎ、征服王とソロモンよりやや間合いの離れた位置に立つ彼は、意味深な眼をマシュとソロモンに向けた後で
るりと辺りを見渡した。
「だよ、もう片付けちまったのか。
貴様、ランサーではないか！
おう。ライダーはともかく、そっちははじめましてだな。
征服王の誰に応じ、清々しいまでに初対面を装う彼に、ソロモ
ンは悪びれもせずに平然と乗っかった。
「こちらこそはじめましてだね、ランサー。
それで何の用かな？
戦いに来たというなら迎え撃つけど。
まだ待て。オレはそれでも構わないが、マスターからの指示で
今の雑魚の掃討に手を貸しにしてやった所だ。まあマスターだけで瞬
殺したよだから無駄足だったが。
それは悪いことをした。申し訳なく思うよ。
は、よくも抜かしやがる。
クー・フーリンは苦笑し、そして征服王を見た。
」で、ライダーに「キャスターだね。デメェらは今のアレが何か、
その前にランサー、うぬに確かめておくことがある」
話をばっさりと切り、自身の話しの流れを強引に引き寄せたイ
スキンドルが、鋭い眼光で槍兵を睨み付ける。
虚偽を赦さぬ圧倒的な威圧感である。その直撃を受けたクー・フ
リンは、しかし涼しい顔を崩しもしないまま応じた。「おう、なんだ–
うぬに駆け引きは無用であろう。故に直截的に訊ねるが―貴様は今、この森の奥から来たな。ランサーよ、貴様はセイバーと決着
tつてきたのか？」見方によればそうも見えるだろう。
アインツベルンの森から、セイバーではなくランサーが現れ、あ
いいや？単にオレのマスターが、セイバーのマスターと手を結
考えられるもう一つの可能性―戦況としては最悪の展開にイ
カンドルは声を上げる。
「それならばなんと羨まし―否、なんと卑劣な！」
イスカンダルは胸の前で拳を握り、心底口惜しげに嘆き——「勝ち抜き戦の聖杯戦争で、よもや他陣営と盟を結ぶとは！このようなしは莫大なる決意を突きつけられても、本人にとってはきつい選択をせられて、実は冬木のランサーとキャスター陣営はどのように敗れ、入れ替わった。まあの根拠に聖杯が異常な活動を始めた以上、どんな事態にも柔軟に対処できる位置取りをしておいた方がいい。ソロモンは曖昧に頷いた。

「この件は持ち帰り、マスターと前向きに検討させて貰おうよ。」前向きに検討すると言っただけで、別に同盟するとは言っている。いのこの喜び様である。前向きに検討すると言っただけで、別に同盟するとは言っている。これは有耶無耶の内に自分に都合よく動かすタイプの、論戦などでは狭義苦味な論法での論破を図るタイプと見た。適度な距離感が必要かなと思いつつ、ソロモンはそろそろ本題に入ることにした。」それより二人とも。今の雑魚いのに関しても、本来の用件もあるんだし、そろそろセイバーの所にお邪魔しないかい？そこにランサーのマスターもいるだろうし、楽しい話が出来ると思うな。士郎くんの驚く顔が見られなくなったのは残念だけど、彼なら...」
この形・状況で出来る、最善の手段に思い至るだろうとソロモンは思う。
異邦人である自分達がいる以上、イレギュラーは確実に起こるだ。方針を転換する必要がある。カルデアでの状況もある、場合によってはクー・フーリンには離脱して資って、影の国の方に救援に向いて資った方がいい。
ソロモンの提案に、イスカンダルとクー・フーリンも気楽に乗った。
クールになるんだ士郎くん！

終末の角笛が吹き鳴らされた。

天地を響ますその咆哮が、およそ尋常なる生物によるものでないのは明白だ。

哭けば吹く風は逆巻く竜の尾を想わせる。それはさながら海神の如き威容を誇り、藤の花を想起させる青紫の外殻は、権能にも通ずる強大な呪いを帯びていた。

全長三十メートルは圧倒的に海の化身。その名は信念。自らを信ずるモノ。自らにのみ択って立つ単一の系統樹。嘗て自らの同位体コインヘンと戦い、これに勝利した個体だ。後に戦に長けた神靈と戦い、敗れ去ったそれは、この特異点に復活を遂げて大いに猛っていた。

それは一度は自身を屠ってのけた神霊＝ボルグ・マク・ブアインを、その棘によって串刺しにし、即死させたことへの歓喜である。

自らを後押しそう得体の知れない力の存在など微塵も気にかけず、ただただ海の化身は死の国に君臨した。
果てに待つものなど知らぬ。ただ存在するだけの大自然。自然へ
の信仰、幻想の持つ神秘、象の生命の奔流——波濤の矢は渦巻く潮
流を纏い、この変異特異点『死国残余海域スカイ』にて生命を讃歌
する。

自らに挑む小さきもの達を迎え入れ、矢は今に謳うだろう。頭蓋
に秘められたる必死の呪いを解き放ち、因果律に干渉する権能を奮
って、無謀にも己を滅ぼさんとする者達を刺し出しにした後に、自ら
で自らを讃える、勝利の栄光を。

氾濫する死霊の軍団を観測、マスターへ間断なく更新されていく
情報を送り、緊迫した空気の中で指示を飛ばし続ける鉄の宰相は、
もはや一分の余裕もないと判断し、万能の天才にうかう一方の特異点
にいるマスターへ、救援要請を出すことを求めた。

果たしてレオナルド・ダ・ヴィンチは一瞬の逡巡の後に決断する。
調査の末に特定できえた時代と地域、該当する神話から、対処に最も
適と目されるサーヴァントを、冬木から送り出して貰うことを。

ケルト神話の頂点、クー・フーリンこそが、この原始の世界には
必要とされていた。
貴方は…剛胆な方ですね。予期せぬ評価に、ん、と首を捻る。遠くに視た海魔の群れ撃滅のため、ロマニ達の手伝いに槍兵を差し向けた所だ。本当はクー・フーリンを向かわせる必要性は皆無であり、あの征服王とロマニだけで充分のは承知していた。しかしそれでも、敢えて槍兵を自分の許から離したのは、ひとえに自分とアルトリア、アイリスフィールだけの場を作っておきたから。俺はこの世界に対する知識のほど全てを忘却したが、それでも冬木に関する聖杯戦争については正確に記憶している。それだけ色褪せない鮮烈な経験だったというのもあるが、冬木の聖杯が内包する故にこそ聖杯の泥とそれにまつわる因縁を、俺は知悉している。あの海魔は、聖杯に取り込まれた英霊の宝具によるものーー即ち黒化英霊の出現を示したものです。である以上、アインツベルンであ
「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何を見てそう思う」「俺が剛胆？何見て
俺は苦笑した。俺にとって同盟を結んだアインツベルンは信頼するに値する存在だったからだ。

「セイバーのことは、よく知っているのね」「それはそうだ。俺と青ペンちゃんは愛し合った仲なんだから」

ー アインツベルンと俺は同盟を結んだ。であればそのサーウァントであるお前が、俺に対して刃を向けるなど有利得ないことだ。騎士のフオン・アインツベルンも、同盟を組んだ相手の不意を突いて殺めようとはしないたろう。もしも斬られたなら、その時は俺の眼が節穴だっただけのことだよ。

もし切嗣がいたら絶対に信頼しなかったが。

アインツベルンは目を丸くして、アイリスフィールが見込み外れの不埒な輩だったらや判断だから、アイリスフィールが見込み外れの不埒な輩だったならやアイリスフィールは俺がアルトリアを通じて自分の人柄を表してしまったの人柄を俺がアルトリアを通して自分の人柄を見越したのだと察しただろう。
「はっ！？」「あら！面白そうな話ね、是非詳しく聞かせて貰いたいのだけどう？」「ああ、それは構わない。だがその前に、「ええ、その前に聞かなくてゃならないわね」「どうして今、私の城に聖杯の気配が近づいてくるの？そして何故、こんなに憎ましい呪いを発しているの？何が知っているんだし構わないとも。俺達は今や盟友、情報は共有すべきだ」
剣呑な面持ちで威嚇してくる彼女に迫力はない。いや、高貴な育故の威厳はありが、ギルガメッシュやアルトリア、そしてネロやスフィールの厳しき目は、どことなく可愛く思える。いや、イリヤの母親に当たるひとを可愛いと称しているのは微妙だが。

俺が先程目視したのは、言ってみれば産業廃棄物だ。「え？産業、廃棄物…？」

「詳しく話すと長くなるから省略するが、端的に言って冬の大聖杯は汚染されている。第三次聖杯戦争でアインツベルンが召喚した怨霊、アイン・マユによってな。アイン・マユですか？！」「アイン・マユなのか？！」「そこの名に驚きを露にするアイリスフィール。俺は思った。アインツベルン、報連相ぐらい徹底しろよ。最初から事情を知らされた上で参戦していたなら、途中で事情を知り変わりをする可能性も低くなるだろうに。そんなだから本来の歴史で切嗣に裏切られるのである。なお事前に説明しても裏切られるだろうが。まあそこはそれ、もう一と神霊を召喚しようと試みにしろ。」この世全ての悪」という謎のチョイスが悪い。もっと別の、戦いに向いた、善性の、触媒の用意しやすい奴がいただろうと話だ。

「俺が先程目視したのは、言ってみれば産業廃棄物だ。」
「ぐ―」

不意に急激に魔力を持っていられる。
ロマニの奴だ。あの野郎、豚箱に放り込まれたことを逆恨みして腹いせしてきやがったな！
なんて野郎だ！俺は思わず声を漏らす。

魔力の過半を持っていたか。
ロマニの奴だ。あの野郎、豚箱に放り込まれたことを逆恨みして腹いせしてきやがったな！
そんな野郎だ、あの人。

BAD Voyager の奴だ。
陰で、左の手首に巻き付けているカルデアの通信機が点滅した。

「すまんが少し席を外す。話は後だ、すぐに戻るから待っててくれ」
「え…？　どこに行くの？」

穏やかな顔である。俺は嫌そうな顔をするのを止められなかった。

悪い思いつつも無視して急ぎ足で城から離れ、樹木の影に隠れ

そこで通信機に応答すると、写し出された立体映像は完璧な美を

体現したダ・ヴィンチだった。

悪いと思うつつも無視して急ぎ足で城から離れ、樹木の影に隠れ

neys.
なんだ、レオナルド。報告なら最短で構わないと言っただろう。

『ああ、出てきたのがアグラヴェインじゃないで、私の顔を見るな。
何やら察したらしい士郎くん。朗報だ、君にはいつも縛りプレイをして貰うことになった』

「オーケー、ちょっと待とうか。いきなりだなお店、折角危なげない戦略で最短の距離を駆け抜けようとしているんだ、もう少し待ってもらいたいだろう･･･？」

頼むから後二日待ってほしい、そうしたらなんとかするから･･･。

その思いを口で口にせず、俺はこめかみを揉んだ。

端的でいい、なんでそうになった。

ネロ達のレイシフトした特異点、アンノウンの時代と地域を特定した話はしたろう。
正式名称を変異特異点『死国残留海域スカイ』とした。そこでネロ達は神霊クラスの幻想種と交戦に入ったけど･･･それがどうにも聖杯を宿してるらしくてね。聖剣を食らっても死なない、再生する、ちょー強いの三拍子で全滅まで待った。

撤退しようにも死霊の数が万を超えていて、カルデアに一旦戻って貧って体勢を整えようにも、ネロ達の妨害がないとこの特異点が人間史に付着して、決して定着復元できない状態になる。戦うしかないわけだけど戦力不足だ。以上、何か質問は？

『オルタはもう出したのか？』

現状出せる戦力は全部出した。その上でじじ貧だ。いやもっとと言おう、時の経過と共に詰んでいく。どうやってここでは知恵とか戦略とかよりも、純粋な強さだけが尊されているらしい。
全て出たと言うことは、ネロは一人でアタランテとアルトリア、エミーラーズ、オルタの五人を使役していることに
なる。

負担は半端ではなく大きいだろう。愚痴とか不服とか色々をグッと
と呑み込む。言っても詮無きことだ。そんなものを吐き出す暇があ
るなら状況に対応するべきである。

了解した。一旦ナンサーを戻す。タイミングはそちらに合わせる
が、具体的にはいつ頃になりそうか。

話が早くて助かるよ。そうだね、じゃあ半後だ。ネロにも通達
しておく。

半日後だな。ああ、そうだ。そしたらもう切嗣は要らないだろ
う。出来たらでいいから切嗣をこっちに回してくれ。

了解。こっちでもしないといけないことがあるからここらで失礼
するよ。

俺は頭痛すら感じつつ、ようやくソロモンの意図を察した。

ブ、と通信が切られる。

〜あの野郎、こうなることも想定してキャスターに成り代わっ
たのか？

〜ああ、フーリンに抜けられたが戦略はガラッと変わる。だがソロ
モンがキャスター陣営に成り代わったことで、辛うじてだが修正は
可能な範囲に収まるだろう。

全て計算づくら流石は叡知の王といったところだが……ロマニ

〜了解。こっちでもしないといけないことがあるからここらで失礼
するよ。

〜ああ、フーリンに抜けられたが戦略はガラッと変わる。だがソロ
モンがキャスター陣営に成り代わったことで、辛うじてだが修正は
可能な範囲に収まるだろう。

〜了解。こっちでもしないといけないことがあるからここらで失礼
するよ。

〜ああ、フーリンに抜けられたが戦略はガラッと変わる。だがソロ
モンがキャスター陣営に成り代わったことで、辛うじてだが修正は
可能な範囲に収まるだろう。

〜了解。こっちでもしないといけないことがあるからここらで失礼
するよ。
だしなあ。ただの偶然とも考えられる辺り、流石の威厳である。
問題は、せっかく張り切ってくれるクー・フーリンに、どうして納得して貰うかだ。
クソッタレなことに否とも言えない。俺はどう状況に対応したものがと頭を悩ませつつ、踵を返してアリスフィール達の元に戻っていった。
どうすぐロマニ達もこちらに来るだろう。そこで打ち合せして、知恵を絞ることにした。
混沌とする戦局に、流石に一人だけで考えられる事態ではなくなっつあると悟っていたから。

頭脳を回せ、決めに行くぞ士郎くん！

諸問題が脳裏を駆け回る。
頭蓋骨の内側で複雑に入り乱れる糸を解きほぐしながら、俺はゆっくりと現状を再認した。頭がこんがらがる前に問題点を挙げよう。今の状況は複雑怪奇で、一つ一つ迅速に対応策を用意し、上手く作戦を回さねばならない。今、最優先で対応しなければならないのは、この特異点の戦いでない。一つ一つ速やかに対応策を用意し、上手く作戦を回さねばならない。ヘリコプターのシミュレーション上で、報される事は必ずしも致命的ではないとはいうえ、訳もなくクー・フーリンが突然いなくなるのも、何者かに斃されるのも論外である。

頭脳を回せ、決めに行くぞ士郎くん！
奴のマスターニ　とした事態と負ける等ともいえる訳にはいかないし、ク

戦になるのは必至。インツベルン陣営と同盟を結んでいる今、他

唯一英雄王なら可能かもしれないが、どうしたって人目につく激

の陣営に戦われるのは不可能だ。

、今後、みるべきはクーイ他ばた。いい唯陣に奴っろら変りのデンなかア

たばかりのそれは早くも破綻している。

他ならない英雄王が俺と戦う気がないことを仄めかしているのを、

インツベルンとアストリアは聞いているのだ。それを察してしま

われていたら、向こうから解消を申し込んで来るかもしれないが。

今はない崩しに同様関係を保持しておくべきか？　だがそうする

とクー・フーリンをネロの方へ回すのは決定事項だ。こ

とああずクー・フーリンをネロの方へ回すのは決定事項だ。こ

りあえずクー・フーリンをネロの方へ回すのは決定事項だ。こ

れは変えられない。どうやってクー・フーリンを説得するかだが、く

赖み込むしかかない。ごめんような問題児ではないから、のっぴ

きならぬ状況を理解してもらう弁是非快くとは言わずとも納得してく

だろう。
タワケどう話合わせるか。おまけにそれら全てを解決した上で、どう今後動いていくか。頭が痛いのは正面を張る戦力を手元に残せない事だが、そこは俺の立ち回り次第で、機が来るまで持ちこたえさせる事は出来ないこともある。三割イケる。

最後にアイツベルンの状況認識がどの程度かも想定しておこう。
まずギルガメッシュが今宣っていた事は、ほぼ理解不能と言っている。

カルデアはまだマイナー、知名度は低い故に箱入りっぽいアイツベルンは認知していないだろう。こちらの素性を知られた可能性は限りなく零だと仮定する。というか零でないと話むのだ。

次に脱落したサーヴァントの数。アイツベルンはサーヴァントの魂を容れる器だ。脱落したサーヴァントの数は把握しているのは確実。俺の知る限りだと脱落者は二騎。ランサーとキャスターだ。

当然アイリスフィールの認識の上では、恐らく俺が説と代わったランサー陣営で、ソロマンのバカが討ち取り成り代わったキャスターで二。自分のセイヤで三、ライダーとアーチャーで五。計五騎が存在している。

もしもアイリスフィールがサーバーとアサシンが脱落していると仮定しているとしたら今後、サーバーとアサシンと遭遇したシステムの齧齧に勘づくだろう。そうなる前に、こちらから手を打つべきだ。
作って考え込む素振りを見せると、怪訝そうにアルトリアが訝ねて来る。アルトリアの気を引く仕草は把握濟み。こうすれば向こうか話し切けてくるという空気の間合いを作ったのだ。

俺は繰う空気と声音を緊張した時のものに置換し、重々しく口を開いた。

「…青ペー—アルトリア。お義母さー—アイリスフィールさん。
←りもんゴーん」

いまいち役に入り込めなかったので呼び方を切り替え仕切り直す。

「…私の機能を…貴方はそんなことまで知っているのね？」

彼女は俺が第三次聖杯戦争の参加者だと誤解している。どこまでアインツペルンの内情が漏れているか気がでないのだ。が、本当は別口からの情報だなんて教える訳にはいかない。

手に取るようにアイリスフィールの心の内が把握できる。底知れ
なしを感じて戦慄しているのだろう。無垢な少女を相手にしている
ような気分だ。
アイリスフィールは賢明な女性だった。聖杯の泥や、アンリ・マユについて話してあり、聖杯に起こっている異常を認識している以上、露見している情報を秘匿するよりも共有する事を進めようとするはずです。

案の定、アイリスフィールは俺を警戒しつつ答えてくれた。

貴方がどこまで、何を知っているかは気になるけど…それは後にしましょう。私の知らない限りだと、現段階で二騎が落ちているわ。

暗殺者と狂戦士じゃなiskeya」

脱落者が二騎だと教えて貰い、俺が二騎だと言え付ける。

そこで俺が二騎が脱落している事を知ったという建前をアイリスフィールに植え付ける。

それで俺が二騎が脱落している事を承知しているという既成事実が出来上がった。俺は沈黙し、顔を険しくさせる。そうするとアルトリアとアイリスフィールは怪訝そうにこちらを伺った。

「妙だ」

「一、二、三、四…」

頭にクエストンマークを浮かび上がらせると、赤い、と指指をクー・フーリンが向かっていた先に向ける。

そして英雄が去っていった方角を指差す。
アリスフィールは今度こそ愕然とした。

「五」

「……サーウォンの数、ですか」

「……ルーターの質問に答く。ああ。そして向こうで聖杯の中身を撃破したらしい。さっき切断した情報提供の続きをしよう。聖杯は、いやアンリ・マユは脱

もはや顔色だが、俺の経験した第五次は三通りのパターンがある
た、はずだ。その三つ目がそれも出点として、ルーターが反転したオルタとして立ち塞がる、というような話だった気がする。」「こんな

な事なら知道をメモっておくべきだったと後悔するも後の祭りだ。アンリ・マユの話も絡め、手短に語り終えると、アイリスフィールの

とルーターは余然としていたが。それを横に置いて話を進めた。
聖杯戦争に召喚されるサーヴァントは原則として七騎である。アリスフィールの認識の上で健在な五騎の他に、アサシンの目撃情報があるとするれば、たちまち前提が破綻するのだ。脱落したのは二騎だと感じているのだから、明らかに一騎、余分に多い。土気色の顔でアリスフィールが口許を手で覆う。その頭の中で様々な憶測が錯綜しているだろう。そこに、更に彼女を混乱させる情報が追加された。「ランサーが向こうで会ったのは、キャスターとライダーらしい。だが一騎、キスターだっただろう。そんな！」「馬鹿な……有り得ない……！」「そう。クラスが重複するなど、聖杯戦争では有り得ない。にも関わらず二騎のキャスターがいる。そしてサーヴォントの数も合わない。明らかにこの聖杯戦争はおかしい。原因を追究するべきだ。それでも即効でアイリスフィールを確実な聖杯を確認に往くべきじゃないか？」「アイリスフィール、一時聖杯戦争を中断して大聖杯を確認しに行 kemajóかいか？」
俺がそう言うと。

俺もそれに賛同しよう。今は戦いの時ではない。

荒らされた森からやって来たのは、白衣を纏い眼鏡を掛けたマシ

と、それを庇うように背に連れた白髪の男だった。

ゆるい表情で緊張感の欠片もないその男は、紛れもなく魔術王ソ

ロをアルトリアの後背であった為、思わずロマニに向け中指を

立てた。ロマニはにっこりと親指で首を撫でる。男二人、確かに通

じ合った瞬間だった。

「…？」

頭が痛い

俺の前に立つセイバー。見知らぬ男を傍らに置く、魔術王ソ

ロマニが、いやソロモンが穏やか。感情の欠片も無い機械めい

た声で何事かを語った。セイバーが重苦しく応じる。
心拍が乱れ、頭痛は強まり、眩暈を感じる。

クー・フー・リンが傍らに降り立った瞬間、幻視した光景は霧散する。
「誰だ」すっぼけて、ソロマンに誰何する。
ソロマンもこやかに応じた。
「ソロマン。魔術王ソロマン。キャスターのサーヴァンだ」狙い通り。
思っ通り。ソロマンはあたかも、こちらの思惑に乗る形で、そう乗っかったのだ。
眩暈は一瞬だった。

微かに残った、酩酊に似た心地を瞬時に除去する。敵性魔術師による精神干渉系の魔術を魔力抵抗する技能は、この世界で生き抜くには必須である以上、自身の精神的コンディションを安定させる術を身に付けるのは画然たる措置である。

魔術回路に強引に魔力を流し洗浄する事で体内に入り込んだ魔術を押し流す。俺のその反応は既に反射の域にあった。故に対処は迅速で一時的に内心首を捻る。今、俺が俺の精神領域に触れた？魔術を掛けられたような感じでもない。俺の対魔力は除けの指輪よりも低いから、ある程度の魔術で汚染されてしまえば、体内に残る後遺症は魔術の宝具を投影して魔術回路を刺し貫くも無理矢理理解呪するのだが。それが必要だという緊急性も感じない。

単に疲れが出ただけと判断し、一旦雑念をリセットする。眼前には魔術王を名乗ったキャラスターのサーヴァントがいた。正確にはデミで、しかも冠位とかいう資格を持つという意味で、サーヴァントという名乗りには正確性を欠いているのだが。別に言う必要はない。
「術王、でっっ！」「……！」

「…！」

「俺からさればロマニの前世―というと弊があるが、かとっって他に適当な表現もな在が、よりって魔術界の神とすれえようと信じたいのだが。」

サーヴァントである以上、アリスフィアーやアルリアの驚愕は正当なでもある。何せ平然とアルリアの最高峰の対魔力も抜いて来るのだ。しかかもアシベルン製ホムクルスとえど、アリスフィアーも魔術師である以上は、魔術の祖であるソロモンにかならない脅威を感じても無理はな。聖剣を油断なく構えあるアルリアと、その背に庇われているアルリアの後ろで、俺はそっと契約しているサーヴァントと通信用する装置に触れる。『ロマニ。後で裏山な』『そっことこそ。バタ箱のご飯は美味かったよ。マシュによくも変な経験をさせてくれたね』表面上は穏やかな顔のまま、一同を睥睨するキャスタに、俺は露骨に呆れた風に肩を竦めて首を振った。『賢者なソロモン様なら、俺の財布の中身がこの時代で使えわけないと思っつたんだけがー。所詮ロマニはロマニか。それとマシュに関してもほんとにすまん』
「あ、いえ…ふふ、でも、ドクターが楽しそうだったから、良かったです。適度にイジメてください。きっと喜んでますよ。」「マシュ！ボクは別に楽しんじゃないдель！」「マシュ？ボクは別に楽しいでね！けど！」「―と、雑談はここまでだ。ロマニ、ちょっと俺とマシュ、ランサーに意見を交換したい。」

「― toch，ランサーはままだ。ロマニ、こちら俺とマシュ，ランサーだけ。」'

「あ、いえ…ふふ、でも、ドクターが楽しそうだったから、良かったです。適度にイジメてください。きっと喜んでますよ。」「マシュ！ボクは別に楽しんじゃないдель！」「マシュ？ボクは別に楽しいでね！けど！」「―と、雑談はここまでだ。ロマニ、ちょっと俺とマシュ、ランサーに意見を交換したい。」

「― toch，ランサーはままだ。ロマニ、こちら俺とマシュ，ランサーだけ。」'

「あ、いえ…ふふ、でも、ドクターが楽しそうだったから、良かったです。適度にイジメてください。きっと喜んでますよ。」「マシュ！ボクは別に楽しんじゃないдель！」「マシュ？ボクは別に楽しいでね！けど！」「―と、雑談はここまでだ。ロマニ、ちょっと俺とマシュ、ランサーに意見を交換したい。」

「― toch，ランサーはままだ。ロマニ、こちら俺とマシュ，ランサーだけ。」'

「あ、いえ…ふふ、でも、ドクターが楽しそうだったから、良かったです。適度にイジメてください。きっと喜んでますよ。」「マシュ！ボクは別に楽しんじゃないдель！」「マシュ？ボクは別に楽しいでね！けど！」「―と、雑談はここまでだ。ロマニ、ちょっと俺とマシュ、ランサーに意見を交換したい。」

「― toch，ランサーはままだ。ロマニ、こちら俺とマシュ，ランサーだけ。」'

「あ、いえ…ふふ、でも、ドクターが楽しそうだったから、良かったです。適度にイジメてください。きっと喜んでますよ。」「マシュ！ボクは別に楽しんじゃないдель！」「マシュ？ボクは別に楽しいでね！けど！」「―と、雑談はここまでだ。ロマニ、ちょっと俺とマシュ、ランサーに意見を交換したい。」

「― toch，ランサーはままだ。ロマニ、こちら俺とマシュ，ランサーだけ。」'

「あ、いえ…ふふ、でも、ドクターが楽しそうだったから、良かったです。適度にイジメてください。きっと喜んでますよ。」「マシュ！ボクは別に楽しんじゃないдель！」「マシュ？ボクは別に楽しいでね！けど！」「―と、雑談はここまでだ。ロマニ、ちょっと俺とマシュ、ランサーに意見を交換したい。」

「― toch，ランサーはままだ。ロマニ、こちら俺とマシュ，ランサーだけ。」'

「あ、いえ…ふふ、でも、ドクターが楽しそうだったから、良かったです。適度にイジメてください。きっと喜んでますよ。」「マシュ！ボクは別に楽し合わないんだけ！」「マシュ？ボクは別に楽し合わないんだけ！」「―と、雑談はここまでだ。ロマニ、ちょっと俺とマシュ、ランサーに意見を交換したい。」

「― toch，ランサーはままだ。ロマニ、こちら俺とマシュ，ランサーだけ。」'

「あ、いえ…ふふ、でも、ドクターが楽しそうだったから、良かったです。適度にイジメてください。きっと喜んでますよ。」「マシュ！ボクは別に楽し合わないんだけ！」「マシュ？ボクは別に楽し合わないんだけ！」「―と、雑談はここまでだ。ロマニ、ちょっと俺とマシュ、ランサーに意見を交換したい。」

「― toch，ランサーはままだ。ロマニ、こちら俺とマシュ，ランサーだけ。」'

「あ、いえ…ふふ、でも、ドクターが楽しそうだったから、良かったです。適度にイジメてください。きっと喜んでますよ。」「マシュ！ボクは別に楽し合わないんだけ！」「マシュ？ボクは別に楽し合わないんだけ！」「―と、雑談はここまでだ。ロマニ、ちょっと俺とマシュ、ランサーに意見を交換したい。」

「― toch，ランサーはままだ。ロマニ、こちら俺とマシュ，ランサーだけ。」'

「あ、いえ…ふふ、でも、ドクターが楽しそうだったから、良かったです。適度にイジメてください。きっと喜んでますよ。」「マシュ！ボクは別に楽し合わないんだけ！」「マシュ？ボクは別に楽し合わないんだけ！」「―と、雑談はここまでだ。ロマニ、ちょっと俺とマシュ、ランサーに意見を交換したい。」

「― toch，ランサーはままだ。ロマニ、こちら俺とマシュ，ランサーだけ。」'
彼は決して元々の場所であるスカイ半島で特異点の名称は「死国残留海域スカイ」というらしい。

元元年、場所はスカイ半島で特異点の名称は「死国残留海域スカイ」というらしい。

メンバーが解釈に当たっている特異点の詳細が判明した。時代は紀元前、場所はスカイ半島で特異点の名称は「死国残留海域スカイ」というらしい。
『余力に残った真実の存在は神だ。中身ベラベラでも戦闘を避けたら使えないことにもなってはるかに欠かせない。百戦のカルデアに欠かせない人材だから、割り続けるのは一人だ。あ、はい。もしかするとそう言う判断もある』

何事かを察し、遠い目をするマシュである。なぜなのか。

ランサー。こっちは最短二日、最長三日で片付ける。お前なら速攻で救援を片付けたって来てるって信じるぞ。片付けてすぐ戻ってこい。

世界のために戦えるんだから喜んで投影爆弾師になってくれると。

君って割と自分には容赦ないよね。

『最大限支援はさせる。具体的には五時間置きに量産型ラムレイ号に見せ筋の投影道具を搭載させて爆撃支援をする。要所で活用してくれ』

真面目な話、誰一人楽は出来ない。待機させたオルタも、決戦戦力として火力を担うのだから、最悪こちらとネロの方を行ったり来たりしなければならなくなる可能性もある。ネロの負担を考えれば、余りサーファントを抱え込ませる訳にはいかないが——
ランサー。この際だから競争しようか。
俺がここを片付けてネロの救援に駆けつけるか。ランサーがネロを助けて人定基を復元してこっちに戻ってくるか。どちらか早い方賭けよう。もし俺が早くたら、ランサーはルーン量産要員になるって賭けて次の特異点はお留守番な。
面白ぇ。ならオレが早かったら、マスターの事でも吐いて貰おうかね。カルデアに来る前のマスターが何していたか。興味があるから。
え、なに？聞こえない。
おい。
うーん。
そなたが令呪でなたかっただった事に……出来ないか。
マシン。
あ、それ私も気になります。
まえ、なに？聞こえない。
おい。
お、それ私も気になります。
え、なに？聞こえない。
マシン。
え、なに？聞こえない。
おい。
うーん。
そうなかったら今呪でなかった事に……出来ないか。
うーん。
ロマニィ……プライバシーの侵害はいけませんよ……。
編集するから大丈夫だって。
マシン。
ならボクに任せてくれ。士郎くんの記憶を映像化してカルデアで上映してあげよう。
ノンフィクションなぁが問題なんだっつの。
サーウァントなら夢に見る事もあるんだから別に要らんだろと思。
俺は嘆息し、意見を募ってみた。
で、こままでここうしたい、ああしたらいみたいな意見はあるか?
『オレはねえ。槍は捧げる。好きに使え』
『私もありません。先輩なら大丈夫だと思いません。……思います』
『ボクもないかな。まあ何かあれば軌道修正がてらフォローするけどね』
お前ら……
丸投げてどうということなの……。特に魔術王様、その叡知で助けてくれてもいいだろ……。
その思いが通じたのか、ロマニは苦笑しているような声で言った。
丸投げてどうということなの……。特に魔術王様、その叡知で助けてくれてもいいだろ……。
その思いが通じたのか、ロマニは苦笑しているような声で言った。
丸投げてどうということなの……。特に魔術王様、その叡知で助けてくれてもいいだろ……。
まる投げてどううことなの……。
特に魔術王様、その叡知で助けてくれてもいいだろ……。
大丈夫、なんやかんや上手くいかせる事に関して言えば、君は無能なエロモンよりもっと上さ。君なら出来る、そう信じてるからボクも気楽にいける。
勿論、大まかな流れは理解してる。大船に乗ったつもりでガンガンいきなよ。
「フォローマスタンショロヨ」
「ラムサーのマスター……」
アーサリアが思案に俺を見て、次いでアイリスルを窺った。

冬の聖女の生き写しである女性は、固い顔と声で難しそうだに眉根を寄せる。

当然の警戒心だ。魔法師にとっって魔法術の存在は余りに重い。偽物なのか、本物なのか、判断に困るがらも、アイリスルは的確な判断を下す。

「…剣を下ろして、セイバー」

「いいのですか」

「ええ。キャスターが本当にあれば、そろそろなにしろ、セイバーとランサーを同時に相手にしようといえば、無謀なほど無関係な殿方に見えないかえずは、話かけないけないんじゃないに」

「…」

ええもええない罪悪感に、マシユが困り顔をした。すみません、孤立してるのは貴女達なんですよ…そのような貌である。

マシユは可愛らしい。遠い目をそうになりながら、俺は微妙に哀しそうになる。

いっこのこのと本当の事情を話して協力者にして貰うのも視野に入るが、ぶっっちゃけここの時代の人間である彼女には全く信じられないだろうから、信じざるをえないのである。

今後じわじわと種を撒き、こちらに引き入れる工作用しよう。

アーサリアと英雄王以外は斃れて貰うのが、なあんとがしてたいかがということは何もあって。

雷鳴を引き連れてやって来る征服王の気配を感じながら、俺は何
気なくロマニに念話を送った。

ロマニ。後でいいから、彼女から聖杯の器抜き取って、代わりの心臓精製して入れ換える事は出来るか？

出来るよ。まあその場合、彼女の心臓は魔神のものになっちゃね。

死ぬよりはいいだろ。流石に義母を死なせる訳にもいかない。願う。

神代の魔術師の力を失念していた。いや、単にアンリ・マユの頑固汚れのしぶりに、出来るべきがないという固定観念が出来上がっていたのだろう。

この時、俺は思った。

人理修復が無事終わったら、ロマニと冬木に来よう、と。大体それで丸く治まる気がした。

懐の結局やる事は変わらないのだが。
「するとあれ。一旦聖杯戦争を中断し、大聖杯とやらの状態を確かなに行こうという腹か。」
赤毛に虎髭の巨漢、征服王イスカンダルが訝しげに反駁するのに俺は頷いた。
この場にはライダー、セイバー、カルデアのキャスターにランサー、伏兵状態のシールダーが揃っている。セイバー陣営とも手を組んで包囲して確実に始末する気でいる。
俺にとってはライダーは此処で消してもならぬ問題ないのだが、流石にアルトリア達の手前、強引過ぎる攻撃は知って不信を招くと判断し、ライダーの出方を見る事にしたのだ。
『茶番だねえ。あのアサシンならセイバーとライダーをここれで倒して、アインツベルンの器を破壊。邪魔するなら英雄王も数の利を活かして仕留め、大聖杯を破壊してミッションコンプリートって言えそうだろう』
ロマニの言に眉根を寄せる。その遣り方は有りと言えば有りだ。
だが軽挙である。合理的に動くのが必ずしも正解とは限らない。人間は機械じゃないんだ。機械みたいに動くモノは人じゃない。俺は人間だ。人間だから人間としての感情には素直で在りたい。俺はアルトリアを殺したくはない。アイリスフィールだって死ななくて人間だろう。人間でないといけない。それが解ちじゃないとも限らない。

冬木でも、フランスでも、ローマでも、周りの人に被害が行くような状況ではなかった。だがこれから先、人里で戦わずを得ない状況もあるかもしれない。それが解ちじゃないとも限らない。冬木を守るのは機械じゃなかった。俺はアザルディアを殺したくない。多分の遠回りは許容するさ。人理を守るのは機械じゃない。俺はアザルディアを殺したくはない。アイリスフィールだって死ななくて人間だろう。人間でないといけない。それが解ちじゃないとも限らない。

冬木でも、フランスでも、ローマでも、周りの人に被害が行くような状況ではなかった。だがこれから先、人里で戦わずを得ない状況もあるかもしれない。それが解ちじゃないとも限らない。冬木を守るのは機械じゃない。俺はアザルディアを殺したくない。多分の遠回りは許容するさ。人理を守るのは機械じゃない。俺はアザルディアを殺したくない。アイリスフィールだって死ななくて人間だろう。人間でないといけない。それが解ちじゃないとも限らない。

冬木でも、フランスでも、ローマでも、周りの人に被害が行くような状況ではなかった。だがこれから先、人里で戦わずを得ない状況もあるかもしれない。それが解ちじゃないとも限らない。冬木を守るのは機械じゃない。俺はアザルディアを殺したくない。多分の遠回りは許容するさ。人理を守るのは機械じゃない。俺はアザルディアを殺したくない。アイリスフィールだって死ななくて人間だろう。人間でないといけない。それが解ちじゃないとも限らない。

冬木でも、フランスでも、ローマでも、周りの人に被害が行くような状況ではなかった。だがこれから先、人里で戦わずを得ない状況もあるかもしれない。それが解ちじゃないとも限らない。冬木を守るのは機械じゃない。俺はアザルディアを殺したくない。多分の遠回りは許容するさ。人理を守るのは機械じゃない。俺はアザルディアを殺したくない。アイリスフィールだって死ななくて人間だろう。人間でないといけない。それが解ちじゃないとも限らない。

冬木でも、フランスでも、ローマでも、周りの人に被害が行くような状況ではなかった。だがこれから先、人里で戦わずを得ない状況もあるかもしれない。それが解ちじゃないとも限らない。冬木を守るのは機械じゃない。俺はアザルディアを殺したくない。多分の遠回りは許容するさ。人理を守るのは機械じゃない。俺はアザルディアを殺したくない。アイリスフィールだって死ななくて人間だろう。人間でないといけない。それが解ちじゃないとも限らない。
「いやない。余は聖杯を征した暁には受肉をしようと思っておるのだが、その汚染された聖杯とやは余の願いを叶えられるのか？」「はあ？」戦車の中で小柄な少年が喚き立てる。「お前世界征服したいんじゃないのかよ！」とかなりと。

「はぁ！？」戦車の中で小柄な少年が喚き立てる。「お前世界征服したいんじゃないのかよ！」「真か？」「真だ。だがまあこの聖杯で受肉を願おうものなら、なんらかの歪みを抱え込む事は覚悟しないといけないだろうが。例えば、そうどうだ。受肉という願い自体は叶うだろうよ。」

「受肉という願い自体は叶うだろうよ。」

「真か？」

「真だ。だがまあこの聖杯で受肉を願おうものなら、なんらかの歪みを抱え込む事は覚悟しないといけないだろうが。例えば、そうどうだ。受肉は出来た、ただしここの世全ての悪の器として、最低でも英霊としての属性が反転するのでは確実だな。」

「間違いないな。」

「さしものライダーも顔を襲めた。属性の反転もアンリ・マユの器の汚染を耐え抜く事が出来る訳ではない。理性ありのヘラクレス辺りなら普通に耐えそうだが。伊達に狂い慣れてはない！」

「どうしたんだ？」

「いつものライダーも顔を襲めた。属性の反転もアンリ・マユの器の汚染を耐え抜く事が出来る訳ではない。理性ありのヘラクレス辺りなら普通に耐えそうだが。伊達に狂い慣れてはない！」

「どうしたんだ？」

「いつものライダーも顔を襲めた。属性の反転もアンリ・マユの器の汚染を耐え抜く事が出来る訳ではない。理性ありのヘラクレス辺りなら普通に耐えそうだが。伊達に狂い慣れてはない！」
では仕方がない…余も休戦には同意しよう。どのみち景品がそ
んなものでは戦うだけ無駄というものだ。それに、なあ…。

「ぬぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりなのだろう？」

「うぬは休戦に反対すれば、余をここで討つもりの
マスター、なんなら今消しとこうぜ。どのみち後で殺っちまうの
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺ちまうの
は決まってんだろう。
ぶつぶつ。
マスター、なんなら今消しとこうぜ。どのみち後で殺っちまうの
是決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺ちまうの
は決まってんだろう。
ぶつぶつ。
マスター、なんなら今消しとこうぜ。どのみち後で殺っちまうの
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺ちまうの
は決まってんだろう。
ぶつぶつ。
マスター、なんなら今消しとこうぜ。どのみち後で殺っちまうの
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺ちまうの
は決まってんだろう。
ぶつぶつ。
マスター、なんなら今消しとこうぜ。どのみち後で殺っちまうの
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺ちまうの
は決まってんだろう。
ぶつぶつ。
マスター、なんなら今消しとこうぜ。どのみち後で殺っちまうの
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺ちまうの
は決まってんだろう。
ぶつぶつ。
マスター、なんなら今消しとこうぜ。どのみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵是決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいなくななる前に、強敵は減らしておけと言いたいのだ
だろうが、スゴい目で俺を見るウェイバー君に目元を緩め肩を竦める。
うれや、なにか今消しとこうぜ。
どまちみち後で殺 Grimm
は決まってんだろう。
暗に自分がいくな
ライダーのマスターもそうだろうが、キャスターのマスターと貴女の相応に準備はしておいただろう？根本のところで信頼するにはまだ付き合いが浅い。俺も備えるが、他にやらなきゃならないう事もある。

「ふむ。やらなければならぬ事、か。それはなんだ、ランサーのマスターよ。

教える義理はないな、ライダー。だが休戦の発起人として、ある程度は明かしておこう。

脱落したはずのアサシン—ソイツを片付けておくまでの事だ—

適当に目をつけた宿に入れた俺は、自身の領域でもないのに『空間転移』で合流してきたロマニとマシュを交えてそう言った。

教會にいる言峰から令呪を剥ぎ取り、アサシンを殺る。

言峰の野郎か。チッ……オレが殺りたい所だが……。言峰の野郎か。チッ……オレが殺りたい所だが……。

残念だが、君はここまでだ。

マシュの設置した盾を基点に開いたサークルを通り、カルデアから来援した赤いフードの暗殺者—切嗣がそう言った。クー・フー
マスター、言峰の野郎は殺っちまった方が世のため人のためだぜ。

ここは特異点だぞ。やっても何も変わらん。なら流れる血は無い方がいい。

は。奴の本性を知っててそう言うんだから筋金入りだな。んじゃ、

賭けの始まりだ。言い訳して逃れようとするなよ。

笑いないから消えていくクー・フーリンに、俺は微笑んだ。

俺のログには何もないなあ。

おうキャスター、マシュの嬢ちゃん。何がなんでもコイツに吠え

面撲かせてから、見とけ。

応援してるよ。本気で。

はい。頑張ってください、ランサーさん。

俺にゃにゃ。

にこにこ。

ロマニとマシュはクー・フーリンを激

励した。

なんて事だ、俺の味方はいないのか……。

人の過去なんか見て

何が楽しいんだか。

面白いな。

変わっていったクー・フーリンを見送り、入れ違いにやって来たの

消えていったクー・フーリンを見送り、入れ違いにやって来たの
はクー・フーリンの姿をした百貌のハサンである。俺は感心し称賛した。

「よく来たアサシン。大したもんだ、どこからどう見ても光の御子さまんだぞ。それまんまだぞ。」「そうかい？そいつは重畳。ま、なんだ。戦力としちゃマスターにも劣るが、見掛け倒しだらは任せてくれや。」

大英雄クー・フーリンそのまあの声と口調、素振りで情けない事を堂々と言われるのに可笑しさ覚えだが本気で大したものだった。霊基の規模以外では見分けがつかない。

「つまらんアサシンを消し、アイリスフィールの心臓をすげ替える。切嗣は投影道具を持って間桐廼に侵入し適当に設置、それを消さないのかい？」「俺は正義だからね、正義は無闇に血を流さないのである。」「正義とは……人とは……なんなのでしょう……。」

哲学者のマシュ、いい……。マシュが遠い目で呟いた。哲学するマシュ、いい……。

ロマニは俺と教会だ。マシュも来てくれ。マスターに偽装したま
「はんこへ行け。」

「寝てろ。邪魔だ。」
強えええ！見てみたかったんだね士郎くん！

『荘厳なりや、神の家。』

草木も眠る丑三つ時、その庭に侵入する人影在り。

改造戦闘服と魔術礼装の射錆手、外界への護りである赤い外套を纏った常の形態。

白髪の男は腰の剣帯に吊るした白黒の雌雄一対剣を揺らしながら、鷹の目に無機質な光を湛えながら歩を刻む。

世界中の基督教圏に点在する教会の総数を数えつつ、不穏な呟きを漏らして男は魔術回路を励起させていた。

影を影し、影を影に無機質な光を湛えながら歩を刻む、影の目に無機質な光を湛えながら歩を刻む、影の目に無機質な光を湛えながら歩を刻む。

世界中の基督圏に点在する教会の総数を数えつつ、不穏な呟きを漏らして男は魔術回路を励起させていた。

影を影し、影を影に無機質な光を湛えながら歩を刻む、影の目に無機質な光を湛えながら歩を刻む、影の目に無機質な光を湛えながら歩を刻む。

男の家多すぎだな。「軒ぐらい減っても神も気づかないだろ？」

投射開始、と。投影した剣群は最後の一工程でストップし、実体を持たせないまま虚空に浮かべ待機させている。

中には老神父が、その到来を前知って察知していたようだ。

中には老神父が、その到来を前知って察知していたようだ。

中には老神父が、その到来を前知って察知していたようだ。
「こんばんは、神父様。良い月夜だ。」
老神父はその殺害予告を額面通りに受け取ったらしい。言峰綺礼の実父にしていた高齢だが、人柄は良いらしい。人の良い笑みを浮かべ、形だけは歓迎する格好を見せている。
「こんばんは、確かに良い夜ですね、お客様。して、何用ですか？」
「お宅の息子さん用事がある。」
「はて、あれに貴方のような知り合いが一歩、二歩とゆっくりと歩み寄りながら、硬いブーツの踵を鳴らす。己の間合いに老神父を捉えるやピタリと静止し、白髪の男は単刀直入に本題に入った。」
「お宅の息子さん用事がある。」
「怒るとは知りませんでしたな～」
一方的に知っているだけですよ、ご老体。ああ遠回しにやり取りす
るのは無しにしよう。俺も暇じゃない。

ピリッ、と老神父の眉間に緊張が走る。
息子を殺しに来たと聞かされ、気が気でないのだろう。穏やかな
口調こそ変わなかったが、その眼差しに不穏な敵意が混ざるのを隠
し切れていない。

「解せません。あればサーヴァントを失い脱落しています。今更あ
れを狙うとは、一体如何なる見で？」

ふん？懐いているのか、それとも貴方は謀られているのか。
サシンは脱落などしていないよ。現に俺はアサシンに襲われている。

故に所在の明らかなアサシンのマスターを始末に来たまでだよ～

「……」

「彼を殺しに来たんだ～」

一〇〇の戦いも覗いていたのだろう？
ランサーが待ち構えている

一方で知っているだけだと、ご老体。ああ遠回しにやり取りす
るのは無しにしよう。俺も暇じゃない。

ピリッ、と老神父の眉間に緊張が走る。
息子を殺しに来たと聞かされ、気が気でないのだろう。穏やかな
口調こそ変わなかったが、その眼差しに不穏な敵意が混ざるのを隠
し切れていない。

「解せません。あればサーヴァントを失い脱落しています。今更あ
れを狙うとは、一体如何なる見で？」

ふん？懐いているのか、それとも貴方は謀られているのか。
サシンは脱落などしていないよ。現に俺はアサシンに襲われている。

故に所在の明らかなアサシンのマスターを始末に来たまでだよ～
と言えば、外に逃れる愚かしさも分かろうさ。

……息子は本当に脱落している、と。

〜あ。まさか教会が特定の陣営に肩入れし、癒着している等有り得んだろう？〜抵抗しなければ殺さん。アサシンのマスターも、大人しくサーファントを自害させるか、令呪を放棄するなら見逃そう。

最大限の譲歩がそれだと暗に示す。全て知っているぞ。

何せ英雄王と百貌の出来レースじみた僕の初戦は、あからさまなまでに出すべきです。アサシンが真っ正面から攻撃に挑むわけが絡まりを破っていただろう。

遠坂時臣のミスは二つ。一つ。アサシンを迎撃に出た英雄王が明らかに待ち構えていた事。二つ。英雄王の力を見せつけ示威を狙った事。欲を摚いて一石二鳥を狙わなければ、まだ真実味を持たせられただろう。二兇を追うもののは一兇をも得ずという諺を知らない。

誰で分かりやすい。

堂に入った格闘技の構え。見たところ八極拳か。この老神父から。言峰綺礼に。言峰綺礼から赤い悪魔にその技は連続と受け継がれたのだ。観察して一瞬感慨深さに浸った。
それを見たのか。

死角より短刀を投げつけてきた黒影を、振り向きもせずに仕留めた。

「そ、それは、隙と見たのだろうか。」

流れるような動きだった。黒の剣、黒るで短刀を叩き落とし。白の剣が千将を投じて暗闇に潜んでいた影を切ったのである。

百に迫ろうかという影が実体化する。教会を埋め尽くさんばかりの数の多さに対し、剣は不敵に笑むばかり。

魔術王の強化の魔術は格別の効力を発揮している。極限まで鍛え込まれた人間の戦闘者を、死徒を超える怪物に変貌させるなど余りに容易い。今の白髪の男は平均よりやや下程度の英霊相手なら互角に渡り合えるだろう。性能で言えばエミヤシロウの半分といったところか。

戦闘を前提にしていない処か、複数に分裂して能力の劣化してい る暗殺者など相手にもならない。ましてやこの男の本質は単一の戦闘単位に非ず、本領は極限の神秘の塊足る道具の大量生産者……撃鉄を脳裏に上げ、男は不敵に微笑んだ。

「それがお前達の答えか。了解した、これより殲滅に移る。」

憑依経験、共感削除。
口ずさむ。撃鉄が落ちた。魔術の行使の気配を敏感に察知した百貌のアサシンが一斎に仕掛けてくる。視認できる限りでも、闇夜に紛れる黒塗りの短刀は二十。巧いもので、この三倍は迫っているのだろうと男は見積もった。

無造作に乱造した特大の剣を、己の周囲に実体化させる。盾とし使う予定だった張り立ての剣だ。男の全身を覆い尽くす大剣は、老神父をも同じように包み込む。

警告はそれだけ。短刀の雨が止むのと同時に、自身を囲んでいた張り当ての大剣の魔力をカット。虚ろに消えゆく剣を一顧だにせず、接近戦を挑んでくる無数の影に笑いかけた。

「ああー死になくなれば敵処から出ない方がいい」

鋼を打つ音を聞きながら言う。

警戒を喚起する声が影の群れの中からも走るも、遅い。反応が間抜けなことに、投げ放たれていた干将が撃手に突き刺されてきた。それは一体の影を切り裂き、ハサン・サッパーエラに威圧感を与える。

干将を掴み取り、だらりと両腕を落とした立ち姿で戦闘体勢を完了する。男は再び嘆いた。
本能的に危機を察知したのか、影達は今度こそ一斉に男へ殺到した。だが場所が悪い。狭く、長椅子などの障害物もある。男は双剣を過剰に強化しその形状を長剣のそれへ膨張させる。そうして影を袈裟に、幹竹に、水平に両断し、瞬く間に十体を切り伏せた。

「馬鹿め。危機を察知していながら攻め続けないとは。―停フリーワールフーズ
詠唱は高らかに。エミヤのように早くはないが、精度だけは劣らない。数にして三十。道具の概念は何もないのだの神秘。それでも切れ味だけは本物だ。それを、一斎に掃射するや無数の影が貫かれる。
馬鹿な道具の投影だとい？その叫びに男は苦笑を深めた。

―遺言はそれか？‖─壊れた幻想
薄紅の花弁が四枚、男を包み込み。老神父を三枚の花弁が保護する。
瞬間。

─教会を根抜き吹き飛ばす、甚大且大規模な爆発が聴いた。
流石です先輩。　...流石です

気絶させられた言峰綺礼を担いだマシュの、なんとも言い難い顔に出迎えられ、衛宮士郎は皮肉げに首を竦めた。

若々しい言峰綺礼の令呪は色を失っている。アサシンが全滅した証だ。跡形もない教会に呆然とする老神父を置き去りに立ち去りながら、衛宮士郎は魔術王と盾の少女に飄々と嘯いた。

マスターの現地調達なんて君しかしないよ。

ロマニの呆れたようなツッコミは、優雅に聞き流された。
脱却を目指す士郎くん！

説明しよう！

聖杯戦争が行われている特異点があれば、そこそこでマスターを勧誘してカルデアのマスターになったって貰う制度の事である！これによりカルデアのマスター陣の充実、負担の軽減、多面的な状況への対応能力を高め、より確実な人理性定礎の復元を目指すのでは！

求人情報は以下の通り。

『バート・アールバイト大募集中！』

資格：18歳以上！（高校生不可、フリーター歓迎！）

資格：学歴不問。

レシフト適性とあるのが大歓迎！

業務内容：マスター、人理救済、聖杯の回収等（暖かいくださら同僚達が待ってます！）

業務地点：人理継続保障期間カルデア、特異点（出張あり）

時間：0:00~2:59

給与：月給500,000円（危険手当て有り）

待遇：交通費支給、寮あり、制服貸与、従業員割引、週休二日制無し”
なんということでしょう！こんな、ゆ、優良企業なんて見たこと
とも聞いたこともありません！皆の協力しているのが肝です！
して負担を軽減するかが肝です！死なないように気を付けましょう！

あ、駄目だこの人。レイシフート適性がない！

もしも聞いたらこともありません！皆の協力し合うお仕事で、如何に
して負担を軽減するかが肝です！死なないように気を付けましょう！

「あ、駄目だこの人。レイシフート適性がない！

「ちっ。使えない……」

ヒドッ！掌返すの早っ！？」

君には失望したよ綺礼くん。そう呟いて、俺は冷たい眼差しで気

所はホテル。俺の名義で借りた其処に、俺とマシュとロマニはい

た。言峰綺礼は完璧に拘束してある。魔術王による行動制限で、だ。

この部屋から出られない、誰かに連絡を取ることもできない、た

だそこで聖杯戦争中は過ごして簧だけで。

ややよこれから見よがしに嘆息し首を振る俺に、見事なツトップ

を入ったロマニが、綺礼の適性を調べてくれたのである。結果は今

しごた言われた通り、有望な戦士だっただけに残念でした。俺的に

言峰は嫌いではないし。
なんというか、本能的？な何かで、俺はこの男の事がどうしても憎めなかった。理由は考えるつもりはない。ただ、コイツが味方なら心強いと思っただけである。
「ああ。切嗣とか弓宮とかと組ませてやりたかったな…相性抜群だったのにきっと…鬼だね士郎くん！？君から聞いた関係性にどう考えても悲惨な事にしかならないと思うんだけど！」「それがいいんじゃないと思うんだけどある。何がいけないのか…。マシュが虚ろな目を！士郎くんのダーティーな一面に遠い目をしっかりするよ！」「あ、そうだんですね？安心しました。」
「あ、そんなんですか？安心しました。」
「流石です先輩…。略してさすせん。」
「マシュ！？マシュが虚ろな目を！士郎くんのダーティーな一
面に遠い目をしっかりてるよ！」
「ちゃんと本人の意思ぐらい確認するさ。嫌だと言われたら読める
もうちょっとマシュ。何に戸惑っているのかは分からないが、俺だって無理
矢理マスターにさせる気はなかったぞ。」

「あ、もうちょっとマシュ。何に戸惑っているのかは分からないが、俺だって無理
矢理マスターにさせる気はなかったぞ。」

流石です先輩…。略してさすせん。
「マシュ！？マシュが虚ろな目を！士郎くんのダーティーな一
面に遠い目をしっかりてるよ！」

「あ、そうだんですね？安心しました。」
し、どうしても人手が欲しいならカルデアで眠ってるマスター候補

忘れていたという顔をするロマニ。古い医療部門トップ、と軽く

マシュも虚を突かれたように目を瞬く。言われてみればそうだ、

聖杯もあるし不可能ではない、と悟ったららしい。

今全員を蘇生しないのは、単純にあの人数分のサーヴァントを賜
う余裕がないのと、実戦経験を積ませてやるお手軽な戦いでもな
いかだ。それに彼らには悪いが、時計塔から選抜された頭であっ
ちにカルデアを揺さぶられる訳にはいかない。下手に発言力を持っ
て奴を蘇生させてみろ、口奮わしくして混乱を収まる決まっては
る輩ばかり。

A班の連中で見込みがあるのはカドックやオフェリアくらいだ。

そういう面倒さのない一般枠の連中にいたって、病み上がりとも
後は人格破綻者や、ちょっと化け物みたいで逆に先行きが怪しくな
る輩ばかり。

カドックとオフェリアに関しては蘇生を考える必要がある。

俺やネロが死んだ場合、彼らなら引き継がせても大丈夫かもしれない
のだ。
ほんとうだ、どこでも言葉を切る。今考えることではない。

そこで言葉を切る。今考えることではない。

言峰を説得する云々以前に、レイシフト適性がないなら話すだけ

ああ、とロマニの質問に頷く。頭の中にはカルデア側の百貌から

遅さだ。さっさと次に行こう。

言うだね。……でも他のマスターに当たったりはしないのかい?

ぐっすり。……でも言うだね。マスター達の情報が過った。

遠坂時臣は典型的な魔法師だ。カルデアに入れる訳にはいかない

魔術師をカルデアに入れるのは危険だ。間桐雁夜は微妙。想い人の

のように別人として組み込んだとしても、何かを企むのが明らかに

魔術師がカルデアに入れるのは危険だ。閨桐雁夜は微妙。想い人の

のため犠牲になる所は見上げた奴だが、肝心の戦い動機を本人

が把握出来ていない点からして、極限の状況でどうなるのか未知数

積極的に声をかける必要性を感じる人材じゃない。快楽殺人鬼は論

外。ウェイバー君はいいが、はっきり言って体力が無さすぎる。モ

ヤシ君だ。せめて人並みの体力がほしいから論外。カインスはし

うん、時臣と同じだ。言峰は知っての通りだろう。アイリスフィー

ルだけだ。声をかけるのは。

これが第五次聖杯戦争なら、遠坂とアイリスフィール、桜に葛木

と、誘いをかけられる面子が多いのだ。……え？衛宮士郎？
俺はマシュとロマニを促し部屋を出る。言峰綺礼を置き去りに。危険が恐れ、これを避ける必要がある。俺もロマニも無事で終わる保障はない。最悪どちらも倒れた時のために、用意した病器の効果を確かめ、俺たちが馴染目だった場合に備えカルデアに預ける必要がある。託す相手は、遠村かもしれない。

コットも冬木のアサシンは消し、マスターも無力化した。保護し続けた娘を連れていこう。間桐巣野は適当なところで放流しよう。

了承した。間桐邸より離脱する。

マスター、こちらの作業は完了した。間桐邸に投影道具を設置し、屋内にいた男一人と間桐桜を保護した。相手にも気づかれていないはずだ。なぜこの娘に仕掛けさせなければならないのだ。

切嗣からの通信が入る。流石に仕事が早い。俺は一日休みを取る。
そして、呟いた。壊れた幻想と。

大規模な爆発が、間桐邸を飲み込んだ。
だがこの小さな桜はそうではない。年相応に絶望し、心が死んでいた。五体満足を生きているだけ、俺の知らない、最悪な状態の人々より遥かにましとはいえ、それでも胸に満ちるのは煮え滾る怒り。一瞬視界が真っ赤になるほど怒りが燃え上がり―すぐに鎮火する。

桜を前に怒りを撒き散らすような真似はしたくない。俺は努めても、穏やかさを装っていた。

人生経験の豊富でないマシュは、どう声を掛けばいいか迷っており、行動できるだけの厚みはない。切嗣は論外だ。性根から腐れ落ちてる訳ではないとはいえ、小さい娘への気遣いが出来ることがなかった。

膝をついて視線の高さを同じにし、桜の頭を撫でてやった。

「今の気に言うことじゃないながーー」

「今のお前に言うことじゃないがーー」

嘗ては言えなかった、言う術もなかった言葉を、前借りして言った。

「桜。お前を助けに来たーー」

「先輩…その、もしかして、お知り合いの方ですか…？」

「ああ。大事なーー置き去りにしてしまってる娘だーー」
察したように、マシュが問いかけてくる。

幼い桜は平たんな声音で、腕の中から声を発した。掠れきって、翰

「おじさん、だれ？わたしのこと……知っているの？」

「知ってるよ。俺は衛宮。君の……そうだ、正義の味方だ」

「……？」

「もう、君は怖い思いをしなくてもいい。ロマニ〜ン。スキルニングしたけど、その娘の体内に不純物はないよ」

「そうか」

「もう、君は怖い思いをしなくてもいい。間桐雁夜という、自身に反骨心丸出しの男をマスターとして傍に置いているのだ。雁夜自身は体内の蟲で、その気になれば即座に抹殺出来るだろうが、直前に令呪を使われて殺しに掛かったので面倒である。令呪を乗っ取るのも簡単な事ではない。魔術師の常として、最悪を想定して雁夜が絶対に手出しからない所に核を隠すのは当然だ。合理的過ぎて、至極読みやすかった。」
マキリ・ゾルケンは、他者を食い物に延命する害虫である。

しかし被害の規模で言えば、実はそれほど大した輩ではない。問答無用で死刑の即判決が決まることもあった。時計塔が無視を決める程度には穏健な存在なのだ。魔術師の観点からすれば、だが吐き気を催す邪悪である事に変わりはない。世界にはマキリ以上の残虐さ、非道さ、被害の規模を持つ輩は多数いるが、それらに全く見劣りしない外法の徒である。下手に聖杯を掴もうとしている分、危険度では段違いかもしれない。

俺は懐から薬の瓶を取り出す。

世界中を巡って探し出した霊器。それがこの瓶で、中身は手製の鋼である。霊器の効果は単純なもので、魔力を保存する性質がある。

魔力とは基本的に魔術を使用するための燃料でしかない。しかしこかから着想を得たのが改造道具である。俺は英霊エミヤの干将と莫邪、偽螺旋剣の存在を知っていた。そ

俺は英霊エミヤの干将と莫邪、偽螺旋剣の存在を知っていた。それにより試験用のものを作製した。これは効果が少ない。それでも俺は知らなかった。また興味もない。必要なのはその効果だけ。魔術の特性を持った魔力で保存できるものである。この霊器に名前はない。これを作製したとされる魔術師は知らないだろうが、少なくとも俺は知らない。また興味もない。必要なのはその効果だけ。
たのだ。

瓶の中にある液体とは、即ち四本の投影道具がその神秘だけを残した鋼のそれ。液体になってしまったのは、そうなるように加工しておいたからだ。瓶から出ればたちまち消滅する代物であるが、それで充分だ。前以て用意していたそれを使、それを飲んでくれ。

「桜、すまない。変な味をするかもしれないがこれを飲んでもくれ」

「お薬…？」

「ああ」

渡すと、桜はその瓶を色の無い眼差しで見詰め、そっと口をつけた。

言われるままといった、思いの無い人形じみた姿に胸が痛むが、逆気に飲むのが嫌になった。桜が素直に感謝する。本当なら怪しくて言うことなんて聞いてくれないだろう。

すると、すぐに効果が出た。液体を嘔下するなり、桜は苦しげに胸を抑えて膝立ち。げぇげぇと吐瀉物を吐き出す。

一緒にその中には、大小数匹の蟲が混ざっていた。俺の知る桜には最初から寄生虫が巣食っていた。この時間軸ではどうなのか、確証はなかった。しかし存在の有無を見切れるロマニがいる以上、余計な手間を掛けずに済んだ。
「ご機嫌はいかがかな？妖怪マキリ・ゾルケン」

gug, gyi...!!

生理性の反応で嘔吐いたせいか桜の目を丸くしてこちらを見ていた。

桜の体内に道具は残らない。所詮は投影されたもの、消滅すれば
世界には残らない。俺は微笑んで指に挟んでいた虫を見る。

声で分かるだろう？これは、君を怖くて気持ち悪い目に遭わせ
てきた諸悪の根元、間桐の爺さんだ。

そこで分かるだろう？これは、君を怖くて気持ち悪い目に遭わせ
てきた諸悪の根元、間桐の爺さんだ。

療き目は充分。大変結構だ。

理的な反応で、嘔吐いたせいか桜目が丸くしてこちら

軽く虚空に放り、慣れた工程を踏んでも投影した干将で蟲を真っ二
つに切り裂いた。

そうして間桐の支配者は、劇的でもなんでもなく、あっさりとド
ラマもなしに命の旅を終える。

これは個人的な見解だが、魔術師を相手にしたらからやりあうの
は愚かである。殺ると決めたら電撃的でなければならず、不意を
打つなら一撃で仕留めなければならず、魔術師に対してはならな
い。魔術殺し三原則である。

上手くやれば、長々とドラマチックな展開になんてなる訳もない

で。

無表情で一いちじらしくどこか呆然として蟲の残骸を見詰める桜の

手を置く。
「ごめんな、嘔吐させて。でもこれで、君の体は君だけのものになっただ。君を苦しめるものもなくなった」

「…突然過ぎて分からなかったか。すまないが今夜は俺達と寝よう。もう遅い時間だ」

「切嗣に目配せると、彼は頷いて霊体化してこの場を去っていく。
切嗣には他の仕事もこなして賃ねばならない。
桜の手を引き、歩幅を合わせて歩く。
桜を安心させるために優しく微笑んで反対の手を取った。
ままマシュと桜を引かれて歩く桜は、呆然としているものの、何を思い出し
たように俺とマシュを見上げていた。
ホてるに入ると、そのままマシュと挟んで、三人で川の字になった
て寝た。それで、この夜は終わる。」

「あれ、ボクは？」
「起きろ。お前は見張りな」
「起きてる。お前は見張りな」
風雲急を告げる士郎くん！

これも職業病という奴か。日の出を感じた直後に、切り替わるよう
に目が覚める。うっすら瞼を開くと、腕に軽い負荷が掛かってい
るのを感じた。

その正体を見ながらも横を向け、安心しきった顔で深く眠り
についている桜がいた。桜は俺の腕を枕に寝息を立てていたのだ。

いつの間にと思うも、桜も無意識だったのかもしれない。
とつ間に抜け出る。俺の反対側で眠っているマシュは穏やかな寝顔
をしていて、微笑を溢すと俺は二人の頭を優しく撫でてしまっている。

まっすぐな子供をカラダに連れていく訳にはいかない。誰も面倒
を見られないし、そもそも人類史を守るための戦いの最前線に桜を置
く事は人としてやっぱりいけない。桜は戦いの場所にいてはいけな
いという私情もあった。

だから、この子はこの特異点の住人のままでいい。本来の歴史通りに、
酷い虐待に逢うの下手な事でも。戦いに巻き込まれ、最悪の死を迎えるよりはいと、

独善的に判断せざるをえない。
「ロマニ、何か変わりはなかったか？」

ソファに腰掛け、どこから調達したのか雑誌を手にコーヒーな
んで飲んでいたロマニに問いかける。するとびっくりと肩を揺らして、
ロマニは浅黒い肌に汗を浮かべて反応する。
「あ、起きたんだね。おはよう士郎くん。「あ、起きたんだね。おはよう士郎くん。」
「あ、好きなんだね。おはよう士郎くん。「あ、好きなんだね。おはよう士郎くん。」
「あっ、はは！ 気になくてもいいとも！ 結界張ったりしてた
からホテル周辺に異常がないのは分かってるし！」

無言で近づくと雑誌を後ろに回して隠すロマニ。俺はロマニに足

転倒したロマニに馬乗りになり、雑誌をもぎ取るとそれに目を落

とす。「ど、どやあ！？」「ど、どやあ！？」

「どれどれ……って」

「どれどれ……って」

「それ、別にいいだろお！？ ボクが何を趣味にしてても！」

「そんな時にこんなものを見てるのが問題なんだよこのドタワケ！」
「やるせぇ！他にもやれる事ならあっただろ！？神殿化してある感じはまったく分からんが、カルデアと交信して情報交換と指示を仰だりとか！支援物資が貰えるなら貰うとか！ネロの方の状況が何か分かれば、こっちも動き方を変えたりしないといけなくなる可能性もある！」
「あっ……」
「お前ほんと前世魔術王なのか？全然それっぽくないんだが」
「なんで嬉しそうなんだよ……」
「あ、そう？」
「うかこの野郎。マギ☆マリの正体がマーリンですかとか法螺吹いて絶望させてやろうかこの野郎。」
「まったく考えている。ロマニの事は元々魔術王ではなくロマニ・アーキマンまで考えて認識している。ロマニに魔術王並みの能力が備わっているだけ。いやほんと、何がどうなったらロマニみたいな奴になるんだ。あのソロモン王が。魔術世界最大の謎かもしれない。」
手首に巻いてある通信機を起動する。カルデアに通信を送ると、
すくま繫がりアグラヴェインのホログラムが浮かび上がった。

「こちら衛宮。現状を報告するが、その前に何か伝達事項はあるか？」「マスターか。では先に、こちらの把握している死国残留海域スカイでの戦闘記録を伝達しよう」「聞かせてくれ」

電壁の強面に、暗黒騎士然とした無機質さを感じさせる声音の響
れのなさに物怖じせず淡々と促す。

『ランサーは波濤の獣クレイドと交戦を開始。兵闘間後、カルデア
量産型ラムレイ号とやらを送り込み、自動操縦によって波濤の獣へ
ぶつけ破壊した。相応のダメージを受け、怯んだ隙を突き波濤の獣へ
に戻ったアーチャー・エミヤの投影した宝具、計五十挺を搭載した
アークで既のアラントが浮かび上がった。相応のダメージを受け、
に WAR であるアタランテ、ランサーは特異点の探索に移った』

二つ聞く。波濤の獣の中にあったはずの聖杯は？それをネロの
所にはランサーとアタランテしかいないのか？

聖杯は回収出来なかった。敵方のサーヴァントらしきセイバー、
にランサーが言うからにはコノート最強の戦士フェルディアが現れ、
これを回復。自身の霊基を強化し撤退した。凄まじい速度で、追尾
するために機動力の劣る我が王は一時カルデアに送還され、状況の
変化に即応できる態勢を取っている』

了解した。敵方のサー・ヴァントを追跡している最中、という事だ

」
その認識で構わないと。どちらの状況は？

アサシンは消した。不確定要素と成り得る現地の魔術師もな。何

少し前までは明後日まで掛かると踏んでいたが、よくよく状況を

態勢を整える。何か支援物資、或いは援軍が必要か？

いや、不要だ。だが最悪の事態を考えると、気兼ねなく使える火

力が必要になるかもしれません。念のためオルタを待機させておいて

く。勿論ネロの方を優先してくても構わない。カルデア内での

動きは？

職員らに順番で休息を取りさせている。七時間の睡眠、三度の食

事、一時間毎に十分の休憩時間もある。彼らが抜けた穴は私とダ・

ヴィンチ、百貌によって埋め、専ら職員らには貴様とクラウディウ

スの意味消失を防ぐ観測作業、及び機材のメンテナンスに専念して

貫っている。

百貌様々だな……分かった。通信を終わる。

了解した。健闘を祈る。

通信用を切り、とりあえずロマニに蹴りを入れておく。痛い！鰭

虐待反対！と騒ぎ立てるドールオタに冷たい一瞥を向け、セーヴァ

ントとバスを通じて連絡する為にもう一つの通信機を起動した。
なんだが、士郎。
何か動きがあれば知りたい。それと独断で何かしてないか？

切嗣が独断専行すれば血の雨が降るので剣と心配だ。その危惧を
鼻で笑い飛ばし、切嗣は破滅的に嘆いた。

冬木の嗣に待る。
冬から冬を戦え持つべきだ。だから宝探し、三倍速で冬木を駆け回って粗方の情報は掴んだ。百歩の変装した奴にも
協力して賛ってね。

－おい、何をした。－
－あんた、消えかかっているな。－

切嗣の存在が希薄になっているのに遅ればせながら気づく。パス
あるいはおまえらのマスターや下水道。

冬木市内に今の所は反応なし。バーサーカーのマスターは下水道
で冬木の遺の姿を確認できていない。遠坂時臣の行方も不明。
今方で遠坂葵とその娘は確保し、言峰綺礼を含むホタルの同室に監禁
しておいた。そこにいるドロオタに魔術で行動制限も掛けてしまっている。
切嗣はここれは何をここには隠せずに報告をはじめた。

－墨を塗っている。－

大聖杯だが明らかに意思を持って動きを待っている。
そして－大聖杯だが明らかに意思を持って動きを待っている。－
双剣遣いの黒化英霊に襲撃された。逃げ切りはしたが、致命傷を負った。限界を超えて宝石を使っていたからね。僕はもうすぐ消え、が、働きは充分だろう？カルデアに一足先に戻るとする。後は任せた。『君は合理的だが、そうでない感情的なものも多いな。理解できる。』理解しろ。—いや理解させてやる。罰として、あんたにはアイツベルンのお姫様と会わせてやる。—それ、は、呆れたように嘆息した切嗣が、遠く離れた場所で消えながら応じた。君は合理的だが、そうでない感情的なものも多い。理解できる。
インツベルンと繋がりがあるのが正しい。
故にその正しさになんらかの影響は受けていて然るべきだ。そして俺のその予想は正しかったらしい。俺は可能ならアイリスフィールを勧誘するという想いを強める。無論、無理強いなければならない。

苦虫を噛み潰したように、切嗣は独語して消滅する。
俺はランサーと共に斃した本来の冬木のランサー、ディルムッドの再出現に眉を顰める。今日の方針を固めようと知恵を絞る。

そろそろマシュ達も起こしておこう。桜にはそう、ミニマム・レッドデーモン、リリィの所に連れていくのがベストかと考えていると、ランサーの声で切羽詰まったような通信が入った。

『マスター、大変だ！』
おお…本物が聞いたなら頭抱えそうな声音でどうした』

キャスターだ！青髭の野郎が未遠川にいがる！野郎、大海魔を召喚する気だ！

聖杯の意思は、いよいよ手段を選ばず抵抗しようとしていた。
王様に物申します士郎くん。
嫌。その一言だけを溢し、ひしりと俺の胸にしみつ桜に眉を落とす。
所詮は非力な幼女のかなり抵抗。引き剥がすのは至極容易。
彼女の桜だから、それ以外に何を答えに出るというのか。
切嗣の最後の報告によれば、聖杯が意思を持ち動き出したという。
切嗣が桜だから、それを答えは明瞭だ。
彼女が桜だから、それを外に何を答えにくるともいえない、弱る。
振り払えな。
故に母さんとお姉さんのいる所に連れて行ってやると、優しい声で穏やかに言ったのだが——置いて行かれる事を、桜は全力で嫌がっていった。
予期しなかった駄々に困り果てる。俺の知っている桜は、まだ聞
き分けのいい奴だったというのに。幼いと我が出やすいのだろうか？
悩ましい気分でいると、ロマニがやれやれと苦笑しながらとも
もない事を言い出した。
「仕方ない、この娘も連れていくぞ。」
「何？」
剣呑な表情が声に出る。しかしなんでもないように、人畜無害な
心配要らないだろう。何があっても、僕や君がいる。マシュだ
って。これだけいて、小さな女の子一人守れないと思うのかい？」
それに「元々この人理を巡る戦は、人を守る為の戦いだ。小
さな我儘一つ聞けないで、これから先を戦い抜けるとは思えないね」
「……言ってくれる。」
「一つ聞かせてくれ、桜。どうして俺といたいんだ？」「
……だって。おじさん、わたしを助けに来てくれたよ。」
「桜。……」
「うるさいだっ…もう、こわいことならんかっ
って、言っくれたから…わたしたし、おじさんといたいで
強がるように口角を上げていった。
「―分かった。桜、お前を連れて行く代わりに一つ、条件が
ある」
「…なに？わたくし、言うこときよ」と。
現在進行形で我儘を言っいるのに、言うこときくと
聞くときたか。
やれやれと苦笑しで、少しだけ気にならなかった分
を訂正する。
「俺の事は『おじさん』じゃなくて、士郎さんと呼べ。
『お兄さん』との約束だ」
「…うん、わかった。士郎さん―ここれでいい？」
「ああ」
俺の台詞に、マシュも堪えきれなくて噴き出した。ロマンは
ロマンで、さっから笑いやすい。
後が酷いぞアーキマン…。
お前も俺に近い歳だうが…。
ここの年頃の子供には、俺ももう、いい歳したんです
「かう、お兄さんと呼んでほしい男心である。

魔術の魔術に従って、神殿化していったヘルを出す。

その際、神殿化を解除させておく。

そこで戻って来てほしい事はないか。」

「うっ」

「うむ」

「もしあの時、桜を頼む――て軽い事は言わないと。

桜と俺を、二人と守ってくれ」
力強く、嬉しそうに微笑むマシュに街とも、憂いもない。年下の少女に、守ってくれなんて台詞を投げるのは情けないと、そんな下らない矜持を無視出来る相棒としての信頼がある。

アルトリアにしたって、ク・フーリンにしたって、切嗣やアー・インの仲間だ。ああ、もちろんネロやアタランテだってそうだ。ダ・ヴェインにどれだけ助けられているか。アグラヴェインは司令塔として無二の信頼が置けるし、百変なんて戦闘を支える最重要の戦力である。だからまああ～。

「あれ、僕は？」

「五月蝋い」

「ああ、上から目線上等だ。なんだってそんな不幸、綺麗好きな俺ああ、上から目線上等だ。なんだってそんな不幸、綺麗好きな俺

前から助けれてる。

故に、桜。本当ならフライングも良いところだが、先に過去のお人理を救う戦いは、この小さな手を光差す未来に届かせるものなのだ。

勘違いはするな、俺は自分の為に過去のお前を助けていっているに過ぎない。自己満足で、未来のお前も救ってやるさ。
には耐えられない。せめて俺の目の届く範囲は幸福でないと、潔癖性の俺は気が狂いそうだ。
だからこんな特異点なんか、人理定礎を巡る旅なんか、簡単にパッと片付けてやる。ロマニやマシュが、もっと好き勝手に生きる世界に連れ出してる。
「邪魔をするなら、例えお前が相手であっても容赦はしない」
黄金とエメラルドによって形成された輝舟、『黄金帆船』
いくせに腰掛け、在るのは原初の絶対者、黄金の英雄王。
座に立ち塞がるようにして現れたのは輝舟に搭乗した暴君であった。
俺は敵意を露に真紅の双眸を眺み付ける。喜悦に絞まる瞳が見据えるのは、俺だった。
デミ・サーヴァントであるマシュではない。千里眼を持つ同士に黒化した青髭が儀式を執り行う、未遠川に急行している最中、眼下に立ち塞がるようにして現れたのは輝舟に搭乗した暴君であった。
俺は敵意を露に真紅の双眸を眺み付ける。喜悦に絞まる瞳が見据えるのは、俺だった。
デミ・サーヴァントであるマシュではない。千里眼を持つ同士に
クツツ、と可笑しげに出笑む英雄王は、背後の空間に自を越える波紋を出現させていた。そこから顔を出すのは、いうまでもなく宝具の原典——俺と戦わないと、その舌の根が乾く前に再度立ち塞がる了見は天災のそれだ。'...'

「まさか送り届けてくれるのかい？流石は英雄王様、大ッ腹だね」フン。眼を見開いたまま寝言を垂れるのは器用な奴よ。人間に堕ちた貴様はこの我を仰ぐべき雑種に過ぎん。貴様の生んだ因果を清算にしてやったのだ、その栄誉に驚ぶ臣に加わるのなら同乗させてやりんでもない。

英雄王の存在感を前に、緊張に身を強張らせマシュと、戯れ言を吐くロマニ。どこか機嫌良さげにギルガメッシュは鼻を鳴らす。それに、ロマニは目を閉じた。

相も変わらず訳が分からない。その千里眼を持つ者同士の謎の共感をやめる。今のロマニは千里眼を厳重に封印しているから『視ええない』のだ。ロマニにも俺にも分かるように言え。'感動に打ち震えよ、道化。貴様の腹、冬木に出し切ってやろうと云うのだ'要らないお世話だな、英雄王。其処を退け、今はお前に構っていけられない事を言うな。一生にそう何度とない王の慈悲だ。有り難く甘受するがいい。'それにしても、懲りもせず寄り道に精を出さない仲間もいるのだから'
す愚かさは変わらぬ、僕作者。

真紅の瞳に、桜が映る。びくりと震え、怯える桜を背中に庇い、

「何が目的だ」

何度も言わせるな。雑種。道化も歴が過ぎれば不快でしかない。

「カルデアと戦わないと言われた口で何を言う。俺は苛立ちも露に問いかけた。」

軽い挨拶のような殺意に皮肉で返す。へりくだる者には死を、阿

カシュと魔術王がいるのだ。遲れば取らない自負がある。マシュも周

衝に他陣営の目がない故か、白衣からデミ・サーヴァントとしての

その臨戦態勢にギルガメッシュは嘲笑を浮かべる。

自らの恃む最強の槍と剣を欠いたまま、この我の裁定に歯向かう

「槍と剣はないが、楯と術はある。俺の諫言は耳に痛いぞ、英雄王。」

黄色の超越者は失笑を溢し、そして。
自らの在り方に惑う道化風情がよく吼えた。だが所詮はアラヤの走狗、掃除屋如きの諫言を、この我が聞き届ける道理はない。

聞き捨てならない事を、言った。

反駁しかける。だが、英雄王は百挺を超える宝具を照準する。狙いは桜だ。

激発する理性が疑念を焼却する。迎撃の為に用意していた投影宝具群に実像を結び、狙いは黄金だ。

ではな、自らの起源を知れ。雑種。

黄金は、殺意もなく。王には戦いですらない、下らない雑事の始末を始めた。
状況整理セイバーさん！
ここの聖杯戦争は狂ってる。
聖杯の器であるアリスフィールの中には、既に二騎のサークマンの魂が在っただった。
剣士は騎士王である。
弓兵は英雄王である。
騎兵は征服王である。
暗殺者は山の翁である。
狂戦士は卓越た武練の持ち主である。
魔術師は魔術王である。
槍兵は光の御子である。
アリスフィールは、脱落在敗れた暗殺者と、所在と正体の知れぬ狂戦士であると思っていった。
だが黒化した英霊とし魔術者がいる。
脱落在思われていったアサシンは健在だった。
異変に気づくまでに二騎の脱落在感じ、ついた先程三騎目が脱落在いよいよ混乱した。
魔術師のクラックスが重複していても冬木の
聖杯戦争に於ける七騎の縛りに計算が合わない。アイリスフィールは七騎の英霊にクラスの重複は有り得ないと従来通りに考え、単純にアサシンが初戦、遠坂邸にて英雄王に本当に居られて一つ、姿の見えない狂戦士で二つと考えていた故に、山の翁の健在をあの白髪の男から知らされ動揺した。

異常事態だ。

白髪の男の言ったことが本当なら、三騎の落者は一体何者なのか。キャスターと狂戦士が腕を組っているとしても後一騎は何者だ。訳が立たない。

新都の只中に冬の姬と歩きながらセイバーが言う。指を一本立て

一確実に敗れているのはキャスターのサーヴァントです。バラスターが簡単倒されることは思えません。そして貴女が感じるのは三騎目が脱落し
た。これは恐らくですがアサシンでしょうか。

確信の築いた断定に、アイリスフィールは反駁した。確かにランサーのマスターは別れ際、アサシンを討つとは言っていたが、潜在的に最大の敵とも言える。正直に本当の目的を明かしたとは思えないのが…
どうしてアサシンだと思われるのですか？
ランサーのマスターは、機知と行動力に富んでいます。アサシンのマスターには襲撃されるところを知ったと彼らは言いました。アサシンのマスターの所在は割れています、なぜ彼は私達と別れた直後に教会を襲撃し、そこに保護されていたアサシンのマスターを撃破、アサシンを脱退させるのです。ランサーと彼らは容易い事ではない。

セイバーの言葉には説得力があった。そしてアイリスフィールドでは、専門の御子のマスターは、セイバーの言葉のように知略と行動力、天敵とも言えるアサシンを野放しにしよう。そのマスターの所在が明らかに内に手を打つと考えるのは妥当と言えるが……。

騎士王は二本目の指を立てる。}

「ランサーの中でアサシンとはどちらですか？」
「私の市場には阿に三騎いる。」

「問題の乗り継ぎはキャスターとアサシンの他に誰かが脱落しているのかが不明な点です。キャスターのクラスが重複し、聖杯戦争に於ける七騎の縛りに数が合わなくなっている時点で、必ずしもキャスターが脱落しているとは断定出来ないのが悩みの種です。現状で判明している英霊は私と英雄王、光の御子。他に征服王、魔術王、バーサーカーにアサシン、キャスターとなります。この時点で八騎存在し
聖杯の仕組みについて、アイリスフィール自身が聖杯のただ話したのだ。
セイバーはこれに驚きはしたが、彼女には彼女の悲願がある。
確実な燃料として、他の英霊の写真であるサー・ヴァントを持てるのに躊躇はない。そしてアイリスフィールが減る事も勘定に入れた。公私を分け結末を受け入れた。
「確実に生き残っていると言えるのは三騎士と征服王、魔術王を合わせての五騎である。脱落者はアサシンであり、そして重複しているキャスターでこととなる。後一騎は何か、これは謎よ。
妥当に考えればパーサーカーであるが、ランサーとライダーのマスターは、倉庫街の戦闘以来、パーサーカーと交戦していないと言っています。私達もそれは同じです。アーチャーの戦闘だと斃した可能性も薄い。アサシンのキャスターがパーサーカーのマスターを斃した可能性はありませんが、確実ではありません。
もし仮にパーサーカーが健在なら、三騎目の脱落者が不明。三騎目の脱落者がいないと断定出来ない。最悪の場合、正体不明の敵サー・ヴァントが何処かに潜んでいる事になる。」

「頭がこんがらがってきたわ。ねえセイバー、貴女はどうしたらいいと思う？」
聡明な頭脳を持っていると言っても、実戦経験など持ち得ないアリスフィールは、すんなりと常勝の王へ意見を言う。それがアリスフィールの長所だった。他のマスターなら自分でも考え、使い魔でしかない彼女に意見を言う事など思い付きもせず、ゲームのプレイヤーはあくまでマスターなのだ。しかしそんな固定観念を、アリスフィールは無垢故に無視してしまう。分から定観念を、アリスフィールは無垢故に無視してしまう。分からない事があれば他者の、セイバーの考えを読む柔軟さがあったのだ。そしてセイバーは、意見を言われれば率直に口にする気質である。

「幸いな事に、私達には確実に味方と言える陣営があります。」

「ランサーなぜ？」

ええ、光の御子は知っての通り、マスターも実力と人柄に疑いはありません。戦力という意味では彼らと組んでいる私達が最も突出しています。聖杯で異常を調査する時は、聖杯から本質を知る上で役立つのです。しかし、彼らとは同盟を結んでいるわけではないので油断は出来ません。確実な味方と言える強力な存在は、今では歓迎すべきでしょう。今成すべきは、存在するかもしれない九騎目のサーヴァントを警戒しつつ、聖杯を調査する事。これが最優先です。」

つまり、エミルと名乗った男の提案した道筋の通りである。アリスフィールは腑に落ちないものを感じていた。それはセイバーも同じようなようで、どこか考え込むような表情をしている。

……道理は通っているわ。合理的で、筋が通っていて、隙間も隙舞もない。そうするのが自然なので、逆に不自然ね……
しかしアイリスフィール、そうするしかないというのも事実です。

人柄は信頼できる、しかしその矢には些か誘導している気配がある。

キレつかって背中には道理と筋が通っている、まるで性質の悪い幻術に掛けられているようだ。

エミヤを完全に信頼しているのか。セイバーの直感は、大きな目で見ればエミヤが信じるべきだ。

きだ感じているが。王としての経験で培った眼力が、謎を解いている予感を訴えている。

しかし隙がない。疑念が噴出する要素を見つけるなり。ブリティンの宮廷魔術師にからかわれているような錯覚がする。

とりあえず、やるべき事を改めて決めた。剣に聖杯だ。それが异常なのは明白なのだから調査する事は避けられない。であるならば今は頭を撫でても答えが出ない問題は後回しでいて。

心もだけ無駄で向ける。光の御子や征服王と落ち合う場所は処なのだ。

しかし。聖杯は。自らに近づかんとする者を拒む為に、足踊く。

これは。……道具の大規模な魔力反応。……！？

これは、アイリスフィールは驚愕し、焦燥に塗れた剣で絶句した。
そんな……近いわ！
こんな、まだ人がいるのに、こんな規模の
魔術行使をするなんて！

「アイリスフィール！
一〇行って！
私もすぐ追いかけるから！

セイバーは迷わずアイリスフィールの指示に応じて駆け出した。
疾風と化して疾走する。
向かうのは未遠川、黒化し自我を剥奪された英霊、道具として起動する聖杯の自衛本能。その宝具の性質上、真名解放を担い手の自我も不要とする『青髭』が、制御不能の大海魔を召喚しようとしてい
た。
「小林いいいいーッッッ！！」
全てが手遅れだった。

騒乱する意思の蠢き（上）

駆けつけた騎士王、征服王の奮戦も虚しく、よりにもよって聖杯戦争へ、科学世界の武力が介入してきたのだ。

戦闘機、その正式な名称を知る者は、少なくとも冬木のサーヴァントとマスターには存在しない。確かに未遠川に出現した謎の戦闘機。その詳細を、濃霧に阻まれ目撃できた一般人はいない。それは幸いと言えるのかかもしれない。

謎の「塔のように巨大な蠢く影」に、科学世界の武力の象徴も言える戦闘機が接近して――捕食された事である。

その詳細を、濃霧に阻まれ目撃できた一般人はいない。それは幸いと言えるのかかもしれない。

異様な濃霧に吸い寄せられるように集まり、うっすらと見える巨大な影に目を凝らす余りに逃げ出す機会を逸しているだら。もし未遠川に突如として起こした濃霧、その先に召喚された大海、
魔が本格的に活動を開始すれば、真っ先に捕食されるのは彼らなのだ。故に罪もない彼らを救う為に戦わないなら、ならないのだ。

「フハハハハ！自慢の悪知恵と口汚さはどうした！？それなら何かして魅せよ！」

人越の美貌を愉しがに歪め、開いた口腔より迸るは嘲りの笑声。

複雑な軌道を虚空に描き、飛翔するは黄金の輝舟である。
搭乗者の思考速度と同等の速力を発揮する黄金の輝舟は、その玉座に至高の王を戴く事で音をも置き去りに飛行する。

等しく万物を擊ち砕く裁きの雨。煌めく財宝は一〇百を超えた時点で数える意義すらない。絶対者にして超越者。英雄の王足の至尊の王が裁定を下す。

「グー」
臨界の熱量に頭蓋が膨張し、回路に短絡が生じる感覚に、飢餓状態が突入した。上空より一方的に加えられる審判の鉄槌。これを退けぬ状態には何も成らぬ。輝光の破壊、もしくは英雄王の拍破、撃退こそが課せられた試練。一つがあらゆる英雄の頂点に君臨する、黄金の王相手にそれを成すのは至難であった。

「ロマニッツ！」「ロマニッツ！」

指揮官として指示を正確に送り込むのが限度。しかし彼の意図に過ぎず沿えず拡げる信頼がある。果たして魔法は士郎の意を正確に汲み、令呪の魔法を連続使用した。大魔術を連続使用した。呪たれ地獄の伯爵——序列四十六位、魔神ビフォロス——

第一に喚び出され、それは実像のない魔の魔神。額らしか部分にのみ実体の一角が隆々と聳え、意志なき霊の魔神は忠実に使役者の意向を実現する。
展開されるは無尽の幻影。現実に上書きされる幻想の術。生み出される奈落の如き闇が、英雄王の射ち出した財宝の行き先に広がり吞み込んでいく。完全に幻の向こう側へ呑まれ消失する前に、ギルガメッシュは財宝を回収するも、間に合わなかったものもある。

その幻想に、無差別にバラ撒かれる宝物の真実を凌ぐ意図はない。

純粋に周辺に瀰れられる破壊の被害を抑える事、それがのみが能う限界。しかし魔術王の使役する魔神は、確かに無差の市民に一切の被害を出さず、一切の認知を赦さず、あらゆる災厄の福音を遮断してのけた。この期に及び、士郎とロマニが第一としたのは自衛ではなく、被害を抑える事だったのだ。

一方、やるではないか、魔術王。……！そこでこそ、この我に次ぐ第二の王だ。が……それのみではあるまい？」

―紳士の霊に細められる真紅の瞳。それにソロモンは舌打ちしそうだった。

「ほほえ。やるではないか、魔術王……！それはこそ、この我に次ぐ第二の王だ。が……それのみではあるまい？」
レ進んでいます。ソロモンではなくロマニにとっ
て。だが、それが叶わない。故に turboウェアント状態なのである。マスターはどうしたのか。そんな事は問わない。問うまでもない。
令呪を殺めるまでもなく契約を切る手段は持っているのだろう。マスターがいなくて、どうしてこんなに暴れられるのか。その答
えは単行動スキルと道具による体技だろうと見当もつく。マスターを殺めるまでもない契約を切る手段は持っているのだろう。シ
と問うまでもない。マスターを縛っていた。
「ああ！」「あ！」「運べ地獄の大公爵。
省略十八位の魔神バディン！…マスター！…'

魔術王の心を燃え上がらせると。青退まった巨馬に跨がり、蛇の尾を持つ頑健なる貴人が召喚される。青退まった巨馬に跨

gi魔術王は空間転移を容易とする魔術式だ。それは士郎が待機

意志なき魔神は空間転移を容易とする魔術式だ。それは士郎が待機

させていた投影道具に干渉し、瞬く間に黄金輝の全方位を囲むよ
固有結界の内ではない故に、士郎に全方位攻撃の手立てはない。固有結界に英雄王を捕らえようにも黄金輝舟に搭乗されていなければ捕える事も出来ない。故に全力の補助を宛がうのだ。真作の輝きに迫る贅作が英雄王へ迫る。しかしそれはさらに英雄王は容易く対処した。未来視。其処へ来る事など最初から分かっていたよう迎撃宝具が贅作を撃ち砕く。だが、人を超えた視座の対処、人の戦術眼は当然のように予期していた。士郎は胸に抱える桜を護る。ぎゅうと目を閉じ、冠位魔術師の強化によって乗用車を置き去りにする速度で駆ける士郎に必死にしのぐがみる少女を確りと抱えたまま、傍らに追走する楯の少女に告げていた。

「全投影……連続層写……ッ！」「行けるな、マシュ」「はいっ！」「ましゅー」

転瞬マシュの姿が消えた。英雄王が微かに目を瞬らす。そして凄絶な笑みを浮かべた。己の輝舟の中、王の眼前にマシュが突如として現れたのだ。
空間転移である。裂帛の気合いを爆発させ、マシュ・キリエライドトが吼えた。
「ああああああ！！」
「フー！興じさせるではないか、道化！」
「やってああああ！！」
「フー！興じさせるではないか、道化！！」
「フー！興じさせるではないか、道化！！！
「フー！興じさせるではないか、道化！！！！
「フー！興じさせるではないか、道化！！！！！！

「トガ来れ、来れ『色欲』司りし西方の魔王！序列三十二位の魔神アスモデウス……！」

一同。魔術王は自身に費やされていた令呪の魔力を全て燃焼させると、召喚されしは二柱の魔神。一撃の雷光を以て青髪を海魔の群れごと焼き払った魔神フュルフールと、魔王とすら渾名され、嘗ては魔術王への反逆を成した事もあるアスモデウス。牛と人、羊の頭を持ち、ガチョウの足と毒蛇の尻尾を備える魔神の王。地獄の竜に跨がる異様な偉丈夫は、軍旗と槍を揚げ、その口に吐き出した雷光と熱線は英雄王の迎撃を数え抜き、輝光の軌道を制限し、瞬きの間のみ輝光上のマシュの足場に安定を齎す。ギルガメッシュは喘ぎ、宝物庫より嵐の斧を取り出すや、迫るデミ・サーヴァントへ王自ら迎え撃つ栄誉を賜した。
「風を放つ！踏ん張れるか娘っ！」「くうううううう！！」
剛撃を放つギルガメッシュである。宝具の補助により筋力を大幅に増強させた黄金の斧の一撃は、マシュの膂力を上回り輝舟上より弾き飛ばした。

瞬く間にマシュを虚空に置き去りにした英雄王は、玉座に戻りながら言い捨てる。

「は、未熟極まる！我々は地に落としたければ必殺の覚悟を抱いて来い！此処で死ぬか、真なる聖者の器よ！」

翔ぶ術なきマシュは慄然とする。輝舟は飛び去り様に三十挺もの剣槍を放ってきている。重力に引き落ち行くマシュに、それを躲手立てはしない。死一脳裏に過る予感を士郎とロマニが阻まんとするも、それよりも速く救いに馳せる黒影在り。

桜を傍らの魔術王に預け、叫ぶ。

桜を傍らの魔術王に預け、叫ぶ。
マシューを頼む！

■■■■■■ッ！

黒騎士は宝具化した戦闘機の上で、マシューの華奢な肩を抱き支えながら、そう吼えた。それは返答だっただろうか。

それを聞き届けるや、士郎はロマニに言う。

「こっちは任せてくれ！」「…ああ、任せてくれ！けど桜ちゃんは君の腕の中をご所望だ、すぐに終わらせてくれよ！」「当たり前だッ」

不安に揺れる桜に一瞬笑みを投げ、士郎は駆けた。

マシューは不思議な感覚に、黒騎士を見るたびに。

「貴方は…」「…」「いえ、なぁんであません。―狂・狂・狂・狂目な所のない父ですね」微笑みが溢れ、マシューの瞳ではなれない独白が無意識に溢れ落ちる。

複雑な親愛―本來とは異なる器の親子が空を馳せ、黄金の英雄王を撃ち落とさんと飛翔する。
威容とは言えぬ、醜悪なる異様な肉溜まり。得体の知れない粘液であっても、粘液を帯びた触手と吸盤。高層ビルのそれのれに迫る巨躯は濃霧に覆われ、未遠川にて順調に巨大さを増す大海魔が動き出すのは時間の問題と言えた。

動き出せば、近隣のみならず、甚大なる被害が出る。そして大海魔は決してサーヴァントになど意識を向けないだろう。そもそも、その自意識の存在すら不確かなまま、海魔に、何度剣や槍を見舞っても全くの無意味なのだ。このまま手をこまねいていれば、懐ましい異界の怪物は貪欲な本能に従って暴食を働き、生きるモノを悉く貪り尽くすに違いない。断じて斃さねばならない。大海魔の召喚が完全に終えるまでに、大方の果が見られないのだ。その事実に歯噛みする。

どうだ。風の鉄槌を叩きつけて、渾身の剣撃を浴びせたセイバーは顔を庇めた。相応の痛手を受けて然るべきであるのに、まるで効果が見られないのだ。その事実に歯噛みする。

「……！」

しかしそうして余りある。しかし、その余りが大きすぎる。被害は大海魔だけではなく、極大の斬撃の先にある人里にも大きな爪痕を残し、飛ばして余りある。しかしその余りが大きすぎる。被害は大海魔だけではなく、極大の斬撃の先にある人里にも大きな爪痕を残し
しまおうだろう。
大海魔が蓄す損害に比べれば、遥かにましかつれない。だがそれは最後の手段だ。最悪の一手法。セイバーは無辜の民草に被害を及ぼす無道を避けたかった。そうも言っていられない時は、間もなく。苦渋を滲ませながらも聖剣へ魔力を充填し始めた時、その男はやって来た。

「壊された幻想」

―壊された幻想―

大魔魔が齎す被害に比すれば、遥かに遜じきやしかい。その男は何時だってそうだった。どんな地獄にいもなく、どんな窮地に必ず間に合ってきた。手遅れになる悲劇など認めぬと。そして今も未曾有の殺戮を食い止める為に、間に合う。

「…っ！？ これは、道具！？」

セイバーは驚愕と共に背後を振り返った。無数の宝具を平然と使い捨てるなと考えられるが、それの男がいた。黒い戦闘服に外界への守りとなる赤布、射籠手を身に付けた男が黒弓を手に。鷹のような瞳で黒弓につがえるのは、紛れもなく宝具の剣。撃たれた刀身のそれは、弦と共に引き絞られるや形状を矢のそれに変化させ、爆発的な魔力の昂りを発露した。

セイバーは驚愕と共に背後を振り返った。無数の宝具を平然と使い捨てるなと考えられるが、それの男がいた。黒い戦闘服に外界への守りとなる赤布、射籠手を身に付けた男が黒弓を手に。鷹のような瞳で黒弓につがえるのは、紛れもなく宝具の剣。撃たれた刀身のそれは、弦と共に引き絞られるや形状を矢のそれに変化させ、爆発的な魔力の昂りを発露した。
「生憎と、此処には来ない」
「敵に絡まれては。そちらへの対処に回した。何、案ずることはない。」
「嘘の気配はない。勘はそう言うも、やはり違和感はある。空に展開される熾烈なドッグファイトは、英雄王と「バーサーカー」、それに召喚される黒神の背に立つ魔術王によるもの。そちらに手を割かれているのかと歎みてる。
しかしこの男はなんと言ったのか。この大海魔相手に、自分が来るだけで良いと？それはつまりセイバーと、今も戦車の雷撃を大海魔に浴びせたライダーだけで対処が叶うというか。
男は剣弾を放つ。真名はカラドボルグ、ケルト・アルスター・サイクルの英雄、フェルグス・マック・ロイの螺旋の剣。それは大海魔の肉塊を易々と貫き、中枢に至るや再び炸裂させた。
巻き起こる甚大な爆発。内部の肉塊が爆ぜ。内部にいる黒化英霊の姿が垣間見えた。」
なんという一ツセイバーは驚嘆した。破壊力の凄まじさはAランク
ク 모두に匹敵する。炸裂させた分を計上すれば、Aランクにも届
くだろう。大海亜と環境への宝具の相性と、使い方も良い。貫
通弾は周辺に余計な被害を及ぼさず、そのままでは遠くまで飛来す
るそれでも爆発させる事で最大効果を発揮したのだ。
これによって召喚の他に、大海亜が実質的に攻撃を諦め、
異界の変を調べに傍らの友達に呼びかける。士郎はこの事で、
って戦局を見据え、故に士郎の放った剣弾の効果が必殺にな
るべきに見えたのだろう。士郎を回収し空へ逃れ、戦車の機動力で大
海亜の手を避けたとしているのだ。
本体ならば敵である士郎を戦車に乗せるのは汚の骨頂必要
もしくは、ランサーのマスターよ！
一乗れッ、ランサーのマスターよ！
はそのような事を言っている場合ではない。英霊として断じて大海魔の存在を許しておけぬ。その思いはライダーも同じだった。

唐突に言われ、しかし萎縮して物怖じする男でもない。士郎は一時騒ぎずに戦車に飛び乗ると、宝具の投影を目の当たりにして固まっていたライバーに笑い掛ける。

「お邪魔させてもらう、ライバーくん」

「わけえっ？……ちょっと、ららライダー！コイツも乗せるとか正気かよ！？」

彼に今、最も有効打を与えられるのはランサーのマスターだ。しかもその男には機動力がない。一つ所に留まっていれば餌食となるだろう。なら、心配するな。もし不埒な真似をすれば、

自分が抜けるはずもなかった。

だがライバーの不安など考慮していられない状況ではなかった。 Oprahの映画や、封印指定されるのも確実の異能である。明らかに人間業ではないそれを目の当たりにし、魔術師の端くれである少

 urgに気を抜けるはずもなかった。
「ランサーのマスター！
足場を安定させてはやれん、狙えるか」
「厳しいな……狙えはする。しかし敵が目障りだ。ああも射線上に肉塊の柱があれば、狙えはだれん」と、
それに人の身で過度の投影を繰り返しているのも問題だ。顔色一変していな、士郎だと
ジジジ。と士郎の右耳の皮膚が壊死し、黒ずんでいる。もはや螺旋剣の投影は後一射が限度だろう。必中を確信するまで放てはしな
い。
征服王は苦打ちする。しかし士郎はなんとなしに見抜いていた。
「セイバー！」
士郎は一旦螺旋剣を戦車の中に置き、なんの変哲もない矢を投影した。
地上、水面上を駆け、大海魔に剣撃を浴びせ続ける少女騎士に要請する。予想が正しければ行けるはずだ。
「さ、だ？」
知る本能すらない類だろに。……など、こんなのはどうか？
する。そこの鏃もつけてないな木の矢に文字を刻印する。そこの矢をセイバーに緩く放った。
殺意もなく、直前に呼び掛けたこともあり、直感に従ってそこの矢をセイバーは掴み取った。瞬時にそこの一文を読み取ったセイバーは素早く大海を離れ始めめる。
「—『魔族童話』 —……」
「——ゆるくゆっくりと……」
「——ゆるくゆっくりと……」
幻覚なのだろう。瞬きの間に消え去る歯車のイメージ。しかし剣弾を放とうとするや、限界を超ええたはずの魔力が底上げされたようパンチが上る。

大魔の本体を、過たず穿つ螺旋の剣弾。肉の層を掻き混ぜて進み、中枢に至るや炸裂させる。黒化英霊を確実に仕留めたのだろう、士郎は大魔の存在が解れ、異界へ送還されていくのを見ると残念を解く。

皮肉を飛ばす士郎にライダーは豪放に笑う。

戦略的にはここで士郎を仕留めてしまうのが合理的だ。そう考えた彼は戦車から飛び降りる。大魔は消して地上に下ろし、士郎はライダーを捕らえる。

そこでとある戦車の地上に下ろすと、士郎は戦車から飛び降りる。大魔は消して地上に下ろしてくる。

「シロウーっ！」　

「シロウーっ！」
そ の 声 に、体 が 反 応 す る。ラ イ ダー も 気 づ い た。だ が、遅 い。

「『誓約の黙理解』」

へ へ へ。不 気 味 に 脈 打 つ 呪 イ の 黄 薔薇 が、蒼 く。

「穿 て、『必 贏・ボウ 滅 の 黄 薔薇』」

へ へ へ。
大海の召喚基点となっていた冬木の出発台、それを抜けてのけたのは人間である衛宮士郎だった。

だがそれは殊更に強い敵の戦いを期すために、生の敵は、それを探し続けるが、大なる海魔の召喚基点と化していた冬木のキーバスター、それを撃破し、影の宝を、見た。

実 HOWO "巨像剣士の到達点" と化して、冬木のキーバスター、それを撃破し、戦い勝利するか掴み得る。大海魔など、相性のよい宝具を投影出来た士郎からすれば、ただのデカイ的に過ぎまい。故に問題はその後。大海魔という威を一先ず片付ける、気が微かに緩んだ瞬間だ。士郎は戦闘のプロフェッショナル、戦闘経験の量では英霊にも引けをとらない。故に気の緩みは極僅か、瞬きの後には兜の緒を締め直すだろう。しかしその刹那を突く者がいた。冬木のランサーだった。士郎くんっ！

呪いの黄槍が呪詛を吐き出し、士郎の背後を襲ったのである。
ドの黄槍が突き出される。回避は間に合わない。しかし相手がアサ
ソンではない事が幸いした。ランサーの奇襲に士郎は直前に気
づき、身を捻る事が出来たのだ。
急所だけは軽く、咄嗟の行動。―ディルットは不意打ちに
よる必殺を不可と感じるや槍を繰る。その槍撃は精妙で、急所を
穿てぬらば右腕の髪を断ち切る。瞬間に反撃に出た士郎の反応は歴然の戦士のそれである。
士郎右腕がだらりと落ちていた。肩の付近を穿たれたのだ。感
情よりも量と投影速度を重視し、虚空に投影した剣を速射歩の如
くに撃ち出す。そうして強引に追撃を絶ち、窮地から即座に離脱し
ていく。
士郎の右腕がだらりと落ちていた。肩の付近を穿たれたのだ。感
情よりも量と投影速度を重視し、虚空に投影した剣を速射歩の如
くに撃ち出す。そうして強引に追撃を絶ち、窮地から即座に離脱し
ていく。
冬のランサーはレイダーと、セイバーを見て即座に離脱してい
く。厄介な能力の持ち主である士郎に手傷を負わせた事で、この場
の戦果としては全くと見切ったのだろう。何事もないので、手
ぶれと呪を溢した瞬間だ。
ほ、と吐息を溢した瞬間だ。
魔術王はアスモデウスの背後、西洋竜の姿をした黒竜の広い背の上に立っている。英雄王の輝光を搭載されていた財宝とも、アスモデウスを包囲するように展開された「王の財宝」が、魔術王だ一人を払さんが射ち出された。

アスモデウスは大槍と軍旗を振り向けた輝光の霞を避け払い、高位の道具は口を裂けて赤熱を吐いたをうけ、黒竜の髪の亂れ速度で竜を象れてあるだけに中々のものだが、輝光に追い続くほどのではない。英雄王は魔術王に一方的に財宝の絨毯爆撃を敢行出だ。ま、が、の間を開くと魔術王による魔術の刻まれた金色の模は、真名解放の為されていない道具ならば問題なく無ければならない。英雄王の掲げた斧や槍、斧などの道具は常に二千を数えなかった。英雄王に出されたを避けるには充分いけ隙を晒した魔術王を狙った間隙に、道具化し黒く染まったF15戦闘機が急接近する。武装が吐き出された輝光を撃たれた模は、道具化し黒く染まると、一気に浮上し回避する輝光だけれが、輝光を追隨できる機動力が戦闘機にはある。猛追した。

ソロモン＝ロマニア＝キマノはパーソナーを見ると、マシュを同乗させたパーソナーは、息子を守るためかや回避運動が大きくなり、大袈裟だ。ただでさえ燃費が悪く、マスターは機を見ると高い、マスターは機を見ると高い。
マシュも立派になった。そんなに気を遣わなくてもいい。

「仕方ない。どのみちボクらに時間はないんだ、決着を急がせてもう」

ロマニはソロモンとしての力を行使する。特殊ではあるが、ロマニの前世とも言える魔術王はカルデアの召喚点であるマシュと、

霊基の繋がりがあった。それは同じシステムによって現界している他のカルデアのサーヴァントも同様である。故にマシュが触れていないが、例えば花の魔術師は、自分が生まれていない過去において、自身が存在しない故に死んでいるも同然という滅茶苦茶な解釈が成り立つ。例えば花の魔術師は、自分が生まれていないという解釈が成り立つ。例えば花の魔術師は、自分が生まれていないという解釈が成り立つ。

権を奪う。

「令呪を以て湖の騎士に命じる」

パイクンと黒騎士が反応した。自身のマスターが代わった事を感じ

「令呪を以て湖の騎士に命じる」

下水に身を隠している男の姿を見つける。千里眼を封じていても

パスを辿り、魔術を行使する。サーバーカーの制御権である令呪

間接的に触れていながら、そこに流れれるパスも逆算出来るのだ。

「杵処にいたんだね、間桐雁夜」

令呪を奪う。
「ごめん、謝るよ。だけど英雄王に処で退場してもらうには、キミを処で癒いだといけない。」

彼は狂戦士。そし対魔力もなにしてかっただけ。「バーサーカー、全力で英雄王を討て」「ごめん、謝るよ。だけど英雄王に処で退場してもらうには、キミを処で癒いだといけない。」

彼は狂戦士。そし対魔力もなにしてかっただけ。「バーサーカー、全力で英雄王を討て」「ごめん、謝るよ。だけど英雄王に処で退場してもらうには、キミを処で癒いだといけない。」

彼は狂戦士。そし対魔力もなにしてかっただけ。「バーサーカー、全力で英雄王を討て」「ごめん、謝るよ。だけど英雄王に処で退場してもらうには、キミを処で癒いだといけない。」
バーサーが脈動する。全力を発揮するバーサーの全てが英雄王に向けられた。

自身の霊基に満ち令呪の魔力は、狂戦士の全てを解放したのだが。

脆弱なマスターの縛りがなく、もともと空虚で、自滅への恐れもなく、英雄王を見る理性もなくだ。

が―流石は完璧な騎士。湖の騎士だ。令呪に縛らわれようと、背にあられる者を振り落とし、無差別に攻撃だしかなかった。

「ぬ…」英雄王が何かに気付く。そして笑みを浮かべた。嫌な予感に目を細め、ソロモンは指輪に魔力を込める。アスモデウスを還し、ソロモンは落下していくが輝き舟の周囲を固定していき、更にその周囲に遺失したもの、現存するも問わずにあらゆる呪詛へ指向性を与え英雄王へば撒いた。

「―士郎くん！」「魔力を回す。決めにいくぞ、マシュ！」「はいっ！」
一瞬、動きの止まった輝舟。英雄王ならば瞬く間に空間固定を解除し、呪詛を解呪してしまうだろう。しかし高速機動戦の最中、僅かの停滞も命取りである。パーサー・カーが戦闘機を突貫させた。

マッシュは戦闘機より飛び出し、一瞬早くパーサー・カーより先に英雄王を捉える。

『一瞬、顕現せよ！「いまは遠か理想の城」！』

穹に拓かれるのは白亜の城。一切の穢れなき、究極の守りの一つ。穹に拓かれるのは白亜の城。一切の穢れなき、究極の守りの一つ。

英雄王とパーサー・カーを取り込み、輝舟の飛行を不可とした剎那、内部に取り込んだものを閉じ込める、脱出不可能の絶壁ともなるのだ。内部に取り込んだものを閉じ込める、脱出不可能の絶壁ともなるのだ。

凄まじい爆破だ。それは輝舟を破壊し、英雄王にも届いた。しかしこの城は、何も防壁にのみ用いられない訳ではない。内部に乗り捨てられた戦闘機が道具化が解除される前に、全兵装ごと炸裂する。

凄まじい爆破だ。それは輝舟を破壊し、英雄王にも届いた。しかしこの城は、何も防壁にのみ用いられない訳ではない。内部に乗り捨てられた戦闘機が道具化が解除される前に、全兵装ごと炸裂する。

英雄王とカク悟！ツッッッッッッ！』

『英雄王！カク悟！ツッッッッ！』
無敵なる湖光に過負荷を与え、籠められた魔力を漏出させ攻撃に転用する剣技。光の斬撃となる魔力を敢えて放出せず、対象を斬りつけた際に解放する。

健闘、見事であると言っておこうか。貴様らの奮闘に免じ、此処等で退いてやろう。⋯⋯どものみちの目的は果たされた－‐

魔剣が黄金の鎧を一撃で断つ。膨大な魔力は切断面から溢れ、その青い光はまさに湖の様－‐白亜の城は解れ、消える。
同時にサー・マンスロットもサー・カーキュラーへと還る。マシュも落ちしていくも、それは飛行魔術によって浮遊していたロマニに抱き止められた－‐

「⋯⋯」

「英雄王、撃破しましたっ！⋯⋯ドクター？」

「⋯⋯なぜ、英雄王を今で倒せた？」「⋯⋯もっと出来るだろう。マスターとの契約を破った後、令呪を回収してはいるはず。あればそういった王だ。その令呪を使って強制転移で逃れる事も出来たはずだ。

険しい顔で、ロマニは英雄王の消えた箇を見上げる。しかし全知全能ではない、自らを制限した状態の自分では見抜けなかった。人間ロマニ・アーキマンの頭脳では、英雄王が何を視たのかが⋯⋯。
なんでもないさ。大戦果だったね、マシュ。
マシュの頭を撫でてやりながら、霊体化して消えたバーサーカーを尻目に地表へ降り立った。
サー・ヴァントは神速を尊ぶ

覚えのある、魔力だった。いや、魔力などとは形容出来ない、神聖にして純潔なる聖域の残り香……セイバーは在りし日の円卓、伝説に語られる栄光の残滓に懐いた。

友を斬ったために魔剣としての属性を得てしまった朋友の聖剣、その力も感じられた。あの清らかな湖のように澄んだ魔力を、セイバーは他に知らない。奇跡の力を宿した円卓、それを中心に据えた白亜の城の残光も相俟って、酷く胸がざわついた。

白亜の城の残光も相俟って、剑剣チャメロットを宝具にする騎士がいるこの聖杯戦争の湖の騎士とキャメロットを宝具にする騎士ぞれに互いに互いに同様の考えを持つ。ただし、セイバーは覚えてている。倉庫街で自身の名を叫び、襲撃かって来た正体不明の狂戦士の存在を。その狂っていてもなお狂いのない武技、正体を隠蔽する宝具、掴んだ武具を自らのものとする力。湖の騎士の逸話に符合するのだ。
歯を食い締める。朋は、狂うほどに己を憎んでいたのか。心が折れそうになった。無理矢理に思いを奮い立たせなければ戦えなくなリそうになる。そうだ。私は敗北した。だからやり直しを望んでい
うはずですのだから。

貴公ならば、私を諫めるのでしょうか。純潔の騎士よ。

白亜の理想城を顕現できる円卓の騎士は、彼を置いて他にはいな

偉大な騎士。サー・ランスロットが円卓より抜け落ちた後、完璧な

彼も、この冬木にいるのなら。必ずこの不明な王を絞すだろう。

決して止まるわけにはいかない。セイバーの覚悟は今にも挫けそ

うほどに脆いが、それしか故国を救う手立てはないのだ。聖杯を、

この手に掴む。そうする事が国を滅ぼしてしまった事の贖罪である。

一方、私。それでも……

「セイバー」

しかし、

「私は、それでも……」

士郎が声を掛けてくる。右腕をだらりと落とした姿は痛ましく、

しかしその血は止まっていた。ギッチギチと、鋼の鳴る音がして、セ
「ありがとう。感謝する。お前の声がなければアレの奇襲に気づかなかった。やはり俺は、お前がいなければ駄目なんだな。

アイバーは顔をあげる。

冷徹な戦闘者、巧みな戦術家。その顔とは全く異なる。親愛の存在も詰めめられたように無防備な笑顔に胸がざわめく。

サーヴァントではなく、まじめな騎士王ではなく、アルトリアという少女を見詰める瞳。それに一瞬、酷く動揺しそうになった。

思いあがるが心が弱くなった。感覚を覚えた。

お前の声がなけりゃアレの奇襲に気づかなかった。やがて俺、お前がいなければ駄目なんだな。

冷徹な戦闘者、巧みな戦術家。その顔とは全く異なる。親愛の存在も詰めめられたように無防備な笑顔に胸がざわめく。

サー・ヴァントではなく、まじめな騎士王ではなく、アルトリアという少女を見詰める瞳。それに一瞬、酷く動揺しそうになった。

思いあがるが心が弱くなった。感覚を覚えた。

お前の声がなけりゃアレの奇襲に気づかなかった。やがて俺、お前がいなければ駄目なんだな。

冷徹な戦闘者、巧みな戦術家。その顔とは全く異なる。親愛の存在も詰めめられたように無防備な笑顔に胸がざわめく。

サー・ヴァントではなく、まじめな騎士王ではなく、アルトリアという少女を見詰める瞳。それに一瞬、酷く動揺しそうになった。

思いあがるが心が弱くなった。感覚を覚えた。

お前の声がなけりゃアレの奇襲に気づかなかった。やがて俺、お前がいなければ駄目なんだな。

冷徹な戦闘者、巧みな戦術家。その顔とは全く異なる。親愛の存在も詰めめられたように無防備な笑顔に胸がざわめく。

サー・ヴァントではなく、まじめな騎士王ではなく、アルトリアという少女を見詰める瞳。それに一瞬、酷く動揺しそうになった。

思いあがるが心が弱くなった。感覚を覚えた。

お前の声がなけりゃアレの奇襲に気づかなかった。やがて俺、お前がいなければ駄目なんだな。

冷徹な戦闘者、巧みな戦術家。その顔とは全く異なる。親愛の存在も詰めめられたように無防備な笑顔に胸がざわめく。

サー・ヴァントではなく、まじめな騎士王ではなく、アルトリアという少女を見詰める瞳。それに一瞬、酷く動揺しそうになった。

思いあがるが心が弱くなった。感覚を覚えた。

お前の声がなけりゃアレの奇襲に気づかなかった。やがて俺、お前がいなければ駄目なんだな。

冷徹な戦闘者、巧みな戦術家。その顔とは全く異なる。親愛の存在も詰めめられたように無防備な笑顔に胸がざわめく。

サー・ヴァントではなく、まじめな騎士王ではなく、アルトリアという少女を見詰めると、そこで目を逸らした。

「シロウ、貴方に聞かねばならない事がある」

「いいや、名前で呼んでくれ。代わりに俺も名前で呼ぶよ、アルトリ...

「不快でしたら、ランサーのマスターと言葉改めに」

「っ！...不快でしたら、ランサーのマスターと言葉改めに」
ベースが乱れる。個を捨て、国に身命を捧げたアルトリアという小娘の心臓が脈打つ。誰が王としてしか自分を見ない、そう在ると誓ったが故に見なれない少女としての望み。アルトリアは断固としてそれを押し隠した。しかしどうせ他の奴らにも筒抜け。今更隠しあったか、そんな意味もない。気力を込めて睨み付ける。その目に、王の迫力が欠けている自覚だった。貴方になにか心当たるか、いなかった。シロウ、質問する。先程の黒化していたサーヴァントはランサーだった。貴方に何か心当たるかは？「セイバーと。真名を明け透けにされると、私としては困る。どうせ他の奴らにも筒抜け。今更隠しあったか、なんとか訂正する。名前で呼びたいな。」「それは分かればアルトリアは構わなかった。それでも分かればアルトリアは構わなかった。」「どうせ他の奴らにも筒抜け。今更隠しあったか、なんの意味もない。なら堂々としていた方が却って清々しいだろう？嫌じゃないなら名前で呼びたいな。」「……」
男は嘘は言わない、ただ本当の事も言わない。これまでのやり取りでそうと見抜いた。サー・ケイが、都合の悪い事を隠す時と似たような感じだ。
外交官としても一流に成れるとは、王としての目では思う。交渉や戦闘、戦術、戦略に明るい彼のような者が騎士として自分に仕えてくれたなら、きっとキャメロットの治世にも役立つ潛れた心を隠すことなく仕えるだろう。そう思うと、想像してしまった。この男が円卓にいたらどうなっていったのか。それでも一人の傍にいて、自分をアルトリアと呼んでくれる土郎は思い描き掛け、くれる土郎を思い描き掛け、考えてんだな。
...
あらランサーは、俺と俺のランサーで斃したからな。
あらのランサーは、俺と俺のランサーで斃したからな。
あらランサーは、俺と俺のランサーで斃したからな。
...
あらランサーは、俺と俺のランサーで斃したからな。
『心当たりならある』
『…それは？』
『あのランサーは、俺と俺のランサーで斃したからな』
『…はっ？』
えぱそのランサーは何処にいるのだろう。そう思った瞬間、彼の傍に光の御子が現れる。
唐突な出現。さながらアサシンのような。

報告に来ただけなのかだろう。余程に消耗しているのなら、その存続に。

“よお、マスター。戻ったぜ。”
“ああ、どうだった？”
“アーチャーの野郎の始末は終わった。が、オレは御覧の有り様だ。
わかりが回復に専念させてもうげつ分かった。消えているよ。”
“おう。”

在感の希薄さも辻漏は合うとは思える。しかし、およやあの常識破りの空中戦で英雄王を脱落させたとは思うが、それとも彼と魔術王とサー・ランスロット、そしてギャラハッカの陣掛かりで尚も苦戦させられていた英雄王を詫えるべきか。

魔術王も姿を現した。征服王が大声で呼ばう。 ―そういえば、大決戦は消えたということの如に霧の消えない。魔術王の仕業だろうか。

“おう魔術王！あの金ぴかを打ち倒したそうだね。いや、流石は余の見込んだ王である！”
“一対一ではなかったから、誉められた話でもないと思うけれどね。”

魔術王。この男もキャスターだ。そして、黒化英霊は、ランサーにキャスター。
士郎。
魔術王。
繋がりは見られない。
しかし、何か気になる。
ここの違和感を感じているのは、アーロンのようだ。
点と点があろうが、それの繋がりは覚えにもどうかしら。
覚えた。
「それで、どうするっしろい？」
「どうするっって？」
魔術王の問いに、アイリス反駁する。
それには彼は肩竦めた。
「聖杯に呑まれたサーヴァンクは無尽ならし。
現にあのキヤスターは何度と斃しでいるのに、また現れた。なったらたかか、今度みたいな騒ぎを起こすかもしれね」
「えぇ！
」
ライダーのマスターが上擦った驚愕の声を上げる。
魔術王はそれには構わずに続けた。
「無限に蘇生するサーヴァンクなんて、敵にするなら面倒極まりない。
そここのランサーのマスターが斃しでいった双剣使いの剣兵もいみたわけではないし、それには――たっった今倒した英雄王もね」
「ッッッTTT!'
全員が息を呑んだ。
あの無尽蔵の宝具をつった英雄王が、幾度斃しで復活して立ち塞がる悪夢を想像しし、かし士郎は言った。
「英雄王に限ってそれは有り得ない。
聖杯の泥ごと汚染され

"
「答えは出ているじゃないか。なあ義母さん。」

「者が義母さんよっ」

マスター達を見渡す。

「ウェイバーくん、君に異論はないだろう？」

「うっ」

顔を真っ赤にしてアイリスフィールが怒鳴った。土郎は苦笑し、魔術王のマスター、お前は何があるか？

「そうだね」

「いえ、何も。すべき事は明瞭です」

「どうだな」

もしもごと言葉を詰み、冷たい少女に土郎は微笑む。
なった。不思議な心の動きに戸惑う。
なんだと、今の？
士郎は言った。
自分らの負傷を、まるで気にしていないよう。　「決まっている。ここの足で円蔵山に急行する。
一分一秒も無駄には出不来ぞ」　兵は拙速を尊ぶと言うが、サーバンクトの拙速は神速だと士郎は嘯き。　場の流れは決定した。
異論は、誰にもなかった。
ねえ、士郎くん。
右腕が動かない。
治癒不能の黄槍を受けてしまったからだ。

干将莫耶に於る二刀の近接戦闘は不可断じる。敵に近づかれ事自体を避けなければならなければ、英霊エミヤなら、片腕でもある程度は戦えるのだろうが、生憎と奴どこの戦闘勘がない俺には無理だ。

あの男の位階は、戦いに生涯を捧げてはじめて至れ境地。そんなのは俺には要らなさい、求めるつも毛頭ない。

ソロモンの強化の呪術によって、サークァント並みの身体能力を得られたらと驕れば痛い目を見るのは自明だ。

片腕が不能な以上、弓も使えない。

今後の展開を考えてば、固有結界を使う機会もないでしょう。

傷口の周りの皮膚を剣の鋼で無理に塞ぎ、強引に止血していられたら、下手に固有結界を使うと暴走してしまえば即死する恐れがあった。

例ええば今、デイドルムの魔を断つ赤槍を受ければ、それだけ致命傷だろう。

右腕を取戻すには黄槍を破壊するか、デイドルムを撃破するか、それ以上は奴を倒しても時間が経てば復活する。完全に倒した訳ではないが、傷が治らない可能性が僅かにあることに、黄槍を破壊するのが最も確実だろう。
マシュが心配そうにこちらを見つめている。不自然ではない。

「……」

「……」

「うロマニ、お前の大いなる罰を願っている。」

「ええと、聖杯はまだ持っているのです。」

「でも、そのことは後に考えよう。今、私たちはこの大戦を前にする人達のために行動しなければならない。」

「はい、明白了。」

「そうか。では、行こう。」

彼らは戦闘を再開した。
すべて全ての符文を刺し、アルトリアを脱落させるのが合理的だろうか。その後に征服王を数で叩けばいい。征服王には「王の軍勢」という、独立サークルの連続召喚を行う宝具があるらしいが、魔術王としてのロマニが魔神を召喚すれば、恐らくなんとかなるのだろうか。マニの見立てがある。」

う。そこの後に行服王を数で叩けばいい。行服王には「王の軍勢」という状況での切り札は聖杯になる。行服王に浄化してもらえると、七十二の魔神全召喚も可能になる。どう戦力を計算しても勝てると断じられた。

円蔵山が見えてきた。これで何度目だ？此処に来るのは、冬木の第五次で一回目、特異点の冬木で二回目、そして今回で三回目、後に四回目もあるかもしれない。生涯でそれだけ大聖杯を見る機会があるだなんて、冬木は呪われているのではなくろうか？超脱級の魔力炉心といっても何度も見れば有り難みも皆無である。

コイツを持ち帰ればカルデアの食費が浮くのでは？

待てよ。コイツを持ち帰ればカルデアの食費が浮くのでは？
レオナルドやロマニに依頼し、聖杯を改造してダグラの大釜を
いにすれば食料無限湧きも可能ではなくろう。もし可能なら設備
復元も可能！そうだったら職員の職場環境を大幅に改善できる！
なお、夢が広がるや！人理が回復すれば聖杯の使用データも瞬
で消去、不都合なデータも改竄自由！はっっぱ！これは良
いことを思い付いてしまった！特異点に手を入れる、特異点化ば
かりに使われるなんじゃって聖杯じゃないんだ。まさに万能の願望
回収していけば再利用召喚も出来るかもしれない。経費ゼロで！
なんだここれは無敵じゃないか！

「…先輩、あれを」

…まあ無理なんですねね。

「…先輩、あれを」

レアツフは細巡で精密なシステム。そんな莫大なデータを積ん
でいたら、漏れなく俺の意味消失は免れない。普通に死ねるの
ので訳がなかった。聖杯で出来るのは、カルデア内であれこれする事
だけである。

……………………………………

サラミは悼
むように目を伏せる。
荷そてうめ手い食そらやっ物れ桜く存が、正す心不てがデ戦奴意いしう悍は円こィををのれ分直配安い周闘さ識理辛んき、てがくざ単した。山負部思存我れ話、片る解空をム勢湧がなり百身いの怨麓、をだ。山負のし守が儘りこつ今をもんけ激う囲行しもなめ貌、をに、割っ魔を俺をい赤が魔トが後れ入る。俺は背中の桜に軽く言った。

心配するな、激しく動いたりしない。

正直な話、こんな所にまで付いてくる桜には説教が必要なんだろ。正直な話、こんな所にまで付いてくる桜には説教が必要なんだろうが、それよりも桜に必要なのは我が僕を聞いてくれる存在だ。思いめていく気に、ぎゅ、と小さな手で桜が俺の赤い外套を握る。それって何で桜に必要なのか？

桜の意味を守りながらその命を守り、そして特異点を攻略する。それを全部成し遂げなければならないのが大人の辛いところだが。なに、荷物を背負うのには慣れている。今は人理の命運を背負っているの。
だ、少女の命が乗かった程度でハンデにはならない。
油断はしない。しかし緊張も過度にしない。順当に戦い、順当に
勝つ。宝具の図面を脳裏にイメージし、撃鉄を上げる。と、その工
程に割り込む声があった。
「……早速か。此処は余が引き受けよう。」
「ら、ライダー……？」
戦車の御台に座り、手綱を握っている見下ろす少年の頭に分厚く大きな手を置き、征服王
で不安に見上げている少年の頭に分厚く大きな手を置き、征服王
は自信ありげに笑う。その雄らしい精悍な笑みを浮かべたまま、彼は堂々と告げる。
「彼女は余が討つ。うぬらは断じて進めがい。」
「策？そんな小賢しいものはない！英霊の誇りを失った彼女ら
に、余の王道を示してやるまでの事よ。なぁに、たかがサーヴァン
ト四騎如き、余の敵ではないわ。」
アルトリアの問いに、威風を昂らせるイスカンダルの放言は、彼
が犠牲になるつもりなどない事を感じさせる。俺にはイスカンダルのしようにとしている事が分かった。そしてそ
れが最も合理的である事を同時に理解する。
聖杯はうぬらに任せるよう。然る後に雌雄を決しようぞ。
意気込みは有り難いが、余り遅いようだと手遅れになるぞ。ああ、
俺としてはこちらの方が助かるが－

その時はうぬが一枚上手だっただけである。怒み言は言わん、好

きにするか。まだ忘れるな、余はうぬとランサーをこの聖杯戦

争最强の敵と见込んでる。覚悟しておれ、必ずうぬらを征して見

せよう－

しかたない！ただ、俺はアントを争うこともないが－

一瞬だけ笑みを交換し、イスカンダルを吼える。

巻し、黒化英霊らがさせと駆させるのも意に介さず、征服王の宝具

『王の軍勢』が発動した。

瞬く間に灼熱の心象風景に呑み込まれ、五騎の英霊達が消える。

『ウェイバー』もまたイスカンダルと共に固有結界の中に消えた。

アリスフィール達を促し、円蔵山の洞窟に入る。その際、アル

トリアは遂に確信を得たように問い掛けてきた。

—シロウ－
だから、アルトリアー。
貴方はライダーの道具を持っているようだった。貴方は何者だ。
それやれ、イスカタンダの道具展開に驚かなかった、それだけで
悟られるなんてアルトリアの直感はやはり冴えすぎだ。
仏のいい手合いには理屈と言葉、態度を一貫し、煙に巻くのが一
顔を強張らせつつあった。俺はふと思い出した事がある。それとな
洞窟を進んでいくと、次第に強姦な呪詛に濡れた大聖杯の魔力
洞窟に映し出された光、次第に強姦な呪詛に濡れた大聖杯の魔力
は呪いを孕んでいます。間もなく誕生するのかもしれません。
次に、大聖杯は呪いの塊になってい

そんな……まさか本当に……！？
大聖杯が呪いの塊になってい

それでも……まさか本当に……！？
大聖杯が呪いの塊になってい

慶方方は、貴公は本当にこれを浄化出来るのか？
この場で破壊し
「浄化なら問題ないよ。『この世界での悪』を濾過して消滅させば、元通りの無色の魔法炉に戻る。まあ、三十分くらい時間をもらわないといけないけどね」

ロマニの言に、俺は頷いた。そして目敏くアイリスフィールの体を揺き抱き、苦悶の声をあげる冬の姫。呪いに侵されていくアイリスフィールの変貌にアルトリアは狼狽した。が、まあリーサー体をおかげして、適当に器を用するだろう。まあ、読み通りだ。

大聖杯と繋がりがある。故に『この世界での悪』は、この状況を覆すために器を欲するだろう。まあ、読み通りだ。

「アイリスフィールは大聖杯に乗っちゃそうだ」
「何を!?」
「アイリスフィールは大聖杯に乗っちゃそうだ」
「破戒すべき全ての符」
「奴との繋がりを絶ったんだ」

「この世全ての悪」を覆って消滅させ、元通りの無色の魔法炉に戻る。まあ、三十分くらい時間をもらわないといけないけどね。
言いつつ、俺では契約を選んで破戒する事は出来ない。故にアルトリアとアイリスフィールの間にあったパスも絶ってしまう。アルトリアは慌てた。アイリスフィールは余りにも大きな負荷を受けて気絶し、その場に頽れて昏倒す。彼女が意識を取り戻すまで、俺と仮契約してくれば、必ず契約を解き、アイリスフィールの許へ返すと約束する。虚言だったから俺を斬れ。まだ右腕は動かない、お前ならば簡単に俺を斬れるだろう。するな、マシュ。この子を頼む。しません、今偽を見つけた、今呪文を使えないそうで向かっていた呪文を唱える。冬木式の、再契約の呪文だ。どこかで聞いた呪文文を唱える。冬木式の、再契約の呪文だ。今が生き方を変えるつもりはない。生憎と性分だよ。今更生き方を変えるつもりはない。
「士郎くん！何をしてるんだ！？」
「っ…っ？」
「キャスター、貴様…！」

アルトリアと契約を結んだ瞬間、ビジョンが走る。激しい頭痛がした。ロマニの焦った声が響く。先輩！マシュの声が激しく鼓膜を叩いた。視界が白熱し、認識が遅れる。アイリスフィールを器に出来なかった。この世全ての悪が足摺った。大聖杯から津波のような汚泥が迸っている。俺たちは愕然とした。

アリスフイールを器に出来なかった。「ここの全ての悪」が足摺と突き飛ばし、アリスフィールを確保すると、彼女をアルトリアへ投げ飛ばす。汚泥が、この身を呑み込む。
白亜の城があらゆる穢れを祓う光景を見、俺は失笑した。 |

この期に及んで、人助けをしてやられるなんて。まったく、仕方がない。汚泥に全身を呑まれ、暗転していく意識の片隅で思う。

油断は、してなかったんだが、どうも、体が保身よりも先に、動いてしまったんだから仕方がない。

マシュが叫ぶ。桜の悲痛な悲鳴が聞こえた。それなのに、かん強が返そうとして……何も声がない。たまには助けられる側になろうと皮肉ぶる。ロマニがいる、マシュも。頼れる奴だ、少し耐えるだけでいい。なに、昔から—— |

慢比べで誰かに負けた事はないんだ。アンリ・マユなんて小者に、 |

聞き慣れた、声がした。眼前で、全身に刺青の施された青年が立っていた。

——よお。ご機嫌如何かな？ エミヤシロウ。
鋼を鍛つ心象。
蒼穹の空は硝子の細工。
透明な風景に熱はな
く、淡々と廻る空の歯車が機械の部品。
無限に鍛えられる剣の丘に、佇む男は目を閉じている。
目を凝らせ、それが何者か判じる事が出来た。
赤い外套の弓兵だ。

思を剥奪された、霊長の守護者。
tだの掃除屋とすら言えない、使役されるだけの自我無き奴隷。

剣の丘を十全に廻す為の機構。
何故あの男は此処に？

憎悪感も露に一瞥する。殺めようとしてもなんら意味がない。
嫌悪感も露に一瞥する。殺めようとしてもなんら意味がない。
寄り道させ、ちょっとさて。

ご名答。いや、悪いね。人理修復の旅の途中にこんな寄り道させ合わせねばならないモノがいた。

…『この世全ての悪』か。

大好きな歯車が廻っている。剣の丘を十全に廻す為の機械。何故あの男は此処に？

懐疑する意識を遮断する。そんなものよりも、向き合わねばならないモノがいた。

同じ目を凝らすと、そしりが何者か判じる事が出来た。
赤い外套の弓兵だ。
意念の深さ。
凡そ人間の持ち得る負の感情の坩堝だ。

友好的とも言える言葉は裏腹にその目にあるのは煮詰まった毒念のみ。
凡そ人間の持ち得る負の感情の坩堝だ。

嫌悪感も露に一瞥する。殺めようとしてもなんら意味がない。
嫌悪感も露に一瞥する。殺めようとしてもなんら意味がない。
黒い肌をなぞる刺青は、形状が不自然。それは常に流動し、赤いパンダ
を額に巻いている顔は、へらへらと軽薄な笑みを浮かべながらも、
士郎の懐を呑む。アンリ・マユは、聖杯の泥を通して士郎に触れ
いる。なら士郎の知らない事ならアンリ・マユがたぶらかし出
来るだろう。

「安い男だ。いや女なのか？どうでもいいが、アイリスフィール
を操るのに失敗すれば、誰でもいいから器にしようだなんて
ああ、同意するぜ。我ながらバカな事をした。まったく、最初か
ら詰んでもなんてクソゲーどころの騒ぎじゃねえよ。クレーマーさ
ながらに文句を垂れたいところだね」

「カーディアだっから？人類の為に孤独無援の戦いに挑む、感動
する様は涙を誘われる。」

好きに言え。好きに呟え。そんなもので、俺が揺らぐと思うなら
ならない。

「それやあ揺らぐ訳ねえよ。デメェは世の為の為、そして何よ
それ気がる像ね。」
りもどれよりも自分の為に人理を救うんだろ？

知ってる、誰だっ
て死にたくねえもんね。

オレもなぁ、死にたくねえもん。

だがお前は死ぬ。

いや産まれる事もないから死ぬじゃない、産
まれないだけだ。

酷い話だ。今もおたくを助けようって。

魔術王がオレを速攻溶か
そうしてやる。あっあ、こりゃ無理だわ。

時間ないから打つ手なし。

なんだよ中立中庸とか。

正義の味方なら善だ。

だから普通。

生憎だった。

俺は善じゃない。

俺は俺の為に人理を正す。

俺が死なないと為に。

他は俺が助かるついでに掏い上げるだけだ。

生憎だった。

俺は善じゃない。

俺は俺の為に人理を正す。

俺が死なないと為に。

他は俺が助かるついでに掏い上げるだけだ。
「ヘテたれ、この人だ。なにか手伝えるか。」

ヘテがいって来た。少しも違和感はなかった。

「へへ、これまたかわいいやつだね。人間界でこんなに短い時間に成長するなんて。」

ヘテは笑いながら言った。その言葉は何も意味を込めていないようだった。

「……」

ヘテの言葉と笑顔に、光が溢れ出る。その光は真実を告げるだろうと、何故か信じていた。

「ヘテって、何をしたのですか？」

ヘテに尋ねた。彼の言葉は真実を告げるだろうと、何故か信じていた。

「ヘテって、何をしたのですか？」

ヘテに尋ねた。彼の言葉は真実を告げるだろうと、何故か信じていた。

「ヘテって、何をしたのですか？」

ヘテに尋ねた。彼の言葉は真実を告げるだろうと、何故か信じていた。
「既に
さらば。

士郎はその言葉の意味が分からず困惑する。
「知ってっかよ、エミヤシロ、テメの一つの未来の可能性、その末路の掃除屋もさ、その属性は中立だぜ」

英霊エミヤも士郎と契約してあるのでは、マスターである故に、そのパーソナリティは把摑していった。

それをして士郎が知っているから、アリマユも知っている話になるだけだ。
それか別段、アリマユに言及されても驚く事ではないくらい。

要点は、なぜそんな事を言う出すのか、だ。
「…何が言いたいの？」「不思議だよな？おたるは起源は同じでも別の人のはずだ。特にあんたの認識だと、明確に違う存在はずないのになんで、なにかの認識だと言おうか？」「…」

面白そうなうに腕を組み、にやにや、にやや、醜悪な恨意を広げ出しようとした外道の魔術師を想起させた。
「ああ、覚・えてないのか。趣味が悪いやオレに言えた口じゃね？」

「 joeiの対魔力はダメックジみてぇなもんだし、無理もねえか？」

「問題です。五問連続正解したら、何事もなかったを解放してやるよ。」
「なに……？」

唐突な提案に、士郎は眉を顰めた。何を考えている……。どのみちアンリ・マユに時間がない。ロマニが大聖杯から異物を排除するのに掛かる時間が少しだ。ならここは乗って、時間を潰した方がいいと判断する。無駄話で乗り切れるならそれに越した事はない。どちりアンリ・マユに時刻はない。ロマニが大聖杯から異物を排除するのに掛かる時間は少しだ。

「いえだろう、答えでやる」
「へっ、それでこそエミヤシロだ」

衛宮士郎だ。いちいちフルネームで呼ばれるのに、鬱陶しさを覚える。露骨に舌打ちすると、陽気にアンリ・マユは言った。

「問一、あなたのお名前はなんでしょう！？」
「……馬鹿にしてているのか？」
「いいから答えろって。カウントダウン、ごー、よーん、さーん……」
「……馬鹿にしているのか？」
「……衛宮士郎だ」「びんぽんびんぽん！だあいせいかーい！やるねえ、こんな難問にいきなり正答を出せるなんて、中々出来る事じゃねえぜ？」

「問一、あなたのお名前はなんでしょう！？」
「……衛宮士郎だ」「びんぽんびんぽん！だあいせいかーい！やるねえ、こんな難問にいきなり正答を出せるなんて、中々出来る事じゃねえぜ？」

狂人かこれは。士郎は努めて苛立ちを抑え込む。幼稚な茶々でペスを崩されるなんて、情けない醜態だろう。何が嬉しいのか喜悦を瞳に宿す影法師。その調子は留まる事がない。両手を広げて、奴を問いかけてくる。
問二、この光景はなんでしょう？

「はん！ すっげえ、おい。いや、嫌じゃねえぞ。
それに、俺の心象風景だ」

「ぴんぽん！ すっげえな、おい。いや、嫌じゃねえぞ。
それが分かるなんて本気で大したもんだ」

「…」

「俺の心象風景、自個有結界の使い手が、自身の心象風景を再現している。圣杯の中だろう、これは。ならば、こんなものを見せる必要は』

「ああこれは問題じゃねぇけど聞いてくれよ。ああエミヤシロウ、ありゃなんだ？」

「ああ」とは？

「ああだよああ！ ほら、あの空に浮かんでる奴！」

「ああこれは問題じゃねぇけど聞いてくれよ。ああエミヤシロウ、ありゃなんだ？」

「ああだよああ！ ほら、あの空に浮かんでる奴！」

「あのことは、歯車。アンリ・マユは、悪意も露に指差していた。答えようとして、絶句する。今まで、なんの違和感もなかった。故にまるで考えずける事もなかった。だが、なんだあれ。何故、何故あんなものが固有結界にある……？」

問三

有り得てはならないものだ。有ってはならないものだ。だって、有り得てはならないものだ。有ってはならないものだ。だって、
アミール・マユは、嗤う。嘲笑う。

―ザの歯車は、本来の衛宮士郎の固有結界には存在しません。しかし英霊エミヤには存在します。この二人の最大の違いはなあん？

―サーブィスだ。オレが答えてやるよ。人間か、奴隷かだ。英霊の方のエミヤシロウはアララの奴隷だ。…さて問題ですよ。問四。あなたたの固有結界にあるあの歯車が指す因果はなんですか？

慄然と空を視る。

なんだ、いやまさか、そんな、そんな待って待って待って待って待って待て。それじゃあ、俺は、そういう事なのか？馬鹿な、そんな馬鹿な事は有り得ない！だって、士郎は。士郎は世界と契約した覚えはまるでないのだから。

者のエミヤシロウ。テメはアララの抑止力の支援を受けている。それのみが、衛宮士郎を絶ばせる毒となるのだから。

だから瀕死の重傷を負っても、即死でなければ幸うじて生きられただ。それでもテメは本当に契約はしてないのに、奴隷の歯車がある。

「―エミヤシロウ。オレが答えてやるよ。人間か、奴隷かだ。英霊の方のエミヤシロウはアララの奴隷だ。…さて問題ですよ。問四。あなたたの固有結界にあるあの歯車が指す因果はなんですか？」

慄然と空を視る。

なんだ、いやまさか、そんな、そんな待って待って待って待って待って待て。それじゃあ、俺は、そういう事なのか？馬鹿な、そんな馬鹿な事は有り得ない！だって、士郎は。士郎は世界と契約した覚えはまるでないのだから。

者のエミヤシロウ。テメはアララの抑止力の支援を受けている。それのみが、衛宮士郎を絶ばせる毒となるのだから。

だから瀕死の重傷を負っても、即死でなければ幸うじて生きられただ。それでもテメは本当に契約はしてないのに、奴隷の歯車がある。

「―エミヤシロウ。オレが答えてやるよ。人間か、奴隷かだ。英霊の方のエミヤシロウはアララの奴隷だ。…さて問題ですよ。問四。あなたたの固有結界にあるあの歯車が指す因果はなんですか？」
「なんでか？それは・・・」
「見せてやるよ、テメェは忘れていても、忘れさせられていても、心象風景が歪む。足元がぐらついた気がした。士郎は呆然と、そ
の光景を見る。移ろう場面の連続は、第五次聖杯戦争の記録だった。
「問おう。貴方が私のマスターか」
それは、月下の出会い。
衛宮士郎は、可憐な少女騎士と出会った。青い槍兵に心臓を穿たれ、遠坂凛に命を救われて。生き延びた士
郎を、青い槍兵が再び始末に来た。土蔵で士郎は運命と出会ったの
だ。そして遠坂凛と赤い弓兵の二人と共闘する事になって。冬の少女
と狂戦士と戦って、そして・・・」
魔術王と騎士王が戦っている。高い対魔力を持たず、苦戦しながらも善戦していた。召喚される魔神、士郎に仕掛ける男。アルトリアは士郎を庇いながら、その場から辛うじて撤退した。それから幾度となく騎士王と魔術王は競う。最高峰の対魔力を持つ二騎は果敢に魔術王を挑み、遠坂凛は士郎と共に魔術王のマスターレベルと交戦していた。
その最終決戦は、大聖杯の前で。
源に至るための魔術炉心に灯が点る。それにによって第三魔法は力
生み出全ての苦しみから解放され、新たなステージに向かう。君はその為の犠牲だ。

歯噛みしてそれを見る少年の士郎。騎士王は今に力尽きようとして
はいる。男の言は時期尚早だ。まだ戦いは終わっていない。

が趨勢が決まってい事実だった。もはや抗えないのだ。男
の勝利への確信を、誰も覆せない。

『冗談だよキャスター。すまない私が浮かれていた
ようだ。協力者であり、功労者である君を大聖杯に捧げる気はない。
令呪も使わない。そもそも君には通じない。私は大聖杯を起動させ
ない。第三魔法などどうでもいい。私は、我ら天体を司るアニメ
スフィアは、独自のアプローチで根源に至らなくてはならない。他
の魔術師の理論に乗るなど有り得ない。アインツベルンの提唱した
奇跡：魂の物質化、人類の成長なんて夢物語には、はじめから付
き合う気はなかったのさ』

男は語る。

そしてそれ故、魔術王は賛同した。理解を示した。
元より召喚者
の願いを叶える為に召喚に応じたらしいのだ。
どうであろう、キャスター。君ならそう言ってくれると信じていた。君がそう言うてくれるなら、この結末は我々だけの秘密になる。

だけど、マリスピリー。まだここには、セイバーとそのマスターがいる。彼らを打ち倒さない限り、この聖杯戦争は終わっていない。それだよ。私は彼らを利用する事にした。

男が笑った。道徳心の欠点もない打算がある。

少年は意識を掠されさせながらも、腕の中に意識のない遠坂凛を庇って、消えかけてる騎士王を必死に繋ぎ止めていた。

そんな彼らを、マリスピリーと呼ばれた男は見る。

冬木で起きた聖杯戦争は、セイバーとそのマスターが勝利した事にすればいい。

しかし、私たちはいい案だ。しかしマリスピリー、それだけでは大聖杯の魔力は尽きないだろう。

おいおい、キャスター。惚れてもらっては困るな。アインツベルンの宣伝通りだ。聖杯戦争の勝者は願いを叶える―なら君にだらん。
の改竄は不可能だが、解釈偽造は出来ると考える。

『いやー私にも、願いがある。本当に何を願ってもいいのだ。

肉して第二の生を手に入れるか？』

『いえ、マリスビリー』

ああ、召喚者であるこの私、マリスビリー・アリスフィアの命
以外ならね。我が契約者にして唯一の友よ、キャスター。いや、魔
術の王ソロモンよ。君の願いであれば、それは正しいものはずだ。

堂々と願えればいい

...しかし。それでも。大聖杯には今、八騎分のサーヴァントの
魂が満ちている。とても君の富と私の願いを足しても使いきれない
だろう

英雄王の魂は、三騎分のそれだった。彼はこの聖杯戦争で、間違
いなく最強の敵だったろう

ふむ……

冬木の聖杯戦争では、セイバーとそのマスターが勝利した事にす
るだったね。余剰分の魔力は、第五次聖杯戦争の再演へ使
べばいい。幸い私達は、マスターを一人も殺害していない。キャス
ターの枠ささえ埋め直せば、我々の存在しない聖杯戦争が行われるだ
ろう』

そんな事が可能なのか？

元々大聖杯は、魔力が満ちれば聖杯戦争を再び開催

この事実があれ。
第六次聖杯戦争が、ほんの数日前に、ほぼ変わらないキャストに演じられるだけなのだ。「第十六次聖杯戦争」が、ほんの数日後には、ほぼ変わったのなキタスに演じられ、なけなしのだか。

魔術王は、無機的な眼差しで。なんの感情もない瞳で、少年を見つめている。そして、言った——騎士王がそれを、聞いていた。

「全て忘れて、やり直すといい。今度こそ勝てると思うね。」

魔法ビリ一は富を得た。マリスピリ一は富を得た。

それでも終わった。ほぼ変わったのだ。だが、ソロモンはその力を使い、預け、人類故に、アラヤに咎づかれ、アラヤは自らの滅びを回避するため、人類史焼却に抗う手がしない。

故に。この場にあった守護者の魂を利用したのだ。同一存在である少年に憑依させる事で、破滅へ対抗する切札として投入した。
なり、そして同一存在であるが故に憑依は滞りなく済まされた。誰にも知られず。本人すら知る事のないまま。抑制力は、誰の目にも触れない。

問おう、貴方が私のマスターか。

こそして、聖杯戦争は再演した。桜や慎二。藤村大河。大切な人達を欺いていたと誤解した。嘗ての記憶すらも二重に存在する故に、彼は勝手に己を嫌悪した。唯一、違いがあったとすれば。この世界の衛宮士郎は、英霊エミヤとは異なり壊れた人間などでなかった事一ただの人好で。正義の味方としての警察官を志していただけの一地に足ずた考え方をする正常な人間だった事だ。

未熟な魔術師でありながら、十全に投影を行えるのはそれが故。
彼が『投影杖』と呼んでいたのは、英霊エミヤの感覚をなぞれるが
最後の時、少年は懺悔しようとした。しかし、アルトリアは確信
を持って、ふわりと微笑んだ。

『俺は、お前を愛してなんか……』
『いいえ、貴方は私を愛しています』
『シロウ。そして私も、貴方を愛しています』
それらは、掠れて消えた記憶。

「俺、は……？」「俺、「そう。」
おたるはエミヤシロウだ。
おめでとう、おめでとう！
アンタは今本当の名前を思い出せた！

「俺は、お前を愛してなんか……」
「どうか、貴方の名前は？」

真っ暗な、暗黒の中に立ち返る。響いた悪意の名は——
故の違和感。
拍手と共に祝福する『この世全ての悪』を見事に崩れ去るかのような心地だった。

「俺は、知ってはいる。衛宮士郎じゃない俺は！ この世界が仮想空間として描かれる世界から流れ着いた魂のはずだ！ ～にその痛い妄想？ 第二魔法かよ。しかも魂だけ他所から流れてきて、赤の他人に憑依して正気を保てる人間なんていなあ。

あ、正気でいられるとすれば。大方自身の記憶の崩壊をそんな痛々しい妄想で補填していたんだろうか。じゃあなんで人類史廃却の事件の事をおたくは知ってるのに、その概要を全然知らんに違いない？」

「記憶が、磨耗しているんだ。そう何年も覚えていられる訳がない！」

記憶が、磨耗していっているんだ。そう何年も覚えていられる訳がない！ 必死に否定する。ぐらつく足場に踏み留まる。嘲笑が浴びせられました。
そんなのは認められない。認めればならない。だってそんなの—まるで自分がただの、操り人形のようではないか。認めるなら、契約していないのに。英霊エミヤと同化しているから、死後もアラヤに回収されてしまうなんて。そんなの—あんまりじゃないか。なんだために生きているのかすら、覚束なくなる。なあエミヤシロウ。おたく、フィクションとしてこの世界を観測する場所から来た魂だって言ったよか？じゃあさ、なんて—！？やめろ！？ |

頭が真っ白になる。

第一次から第四次聖杯戦争を知らない。者の世界中の全ての事件を網羅してる訳じゃない。言っちゃああなただが、この世界、エンターテインメントとして眺めるにはうってつけの娯楽だと思うんだろうね。あ、もしかしてウケが悪かった？売れないので世界観だったかな？
別の名前が出せないのでは。
それはそれで人間だね。
「俺は---エミシロ、だったの…？」
その呟きは、認めるそれだ。
目が眩む。
意識が一瞬、そう一瞬揺らぎだ。
瞬時に立て直ろう。
士郎は自分の成し遂げた事に後悔などないのでは。
動揺も少しだが、決して士郎が変わる事はない。
だがアニメ・マユにはその一瞬で十分だった。
极大の悪意が、嗤う。
「……バロッキー」

「お兄っちゃん！」

大聖杯の浄化が完了した。
『この世全ての悪』は完全に消滅し、大聖杯は無色の魔力へと戻る。その瞬間、聖杯の泥に呑まれた士郎は、その場に倒れいた。意識がない。

慌てて駆寄ったマシュと桜が、その体に縋りつく。

彼と霊的繋がりがあったマシュは、その至近にいる故に彼の見せられていた光景を見るたび、ロマニも、また。

暴かれた真実に、立ち竦む。

それは人間だか、それこの、ロマニだか、この、非人間的な行いへの罪悪感。

魔術王ソロモンがカルデアに再度召喚されたのは、何もロマニがいなかったかではなない。

士郎との縁が魔術王にもあったかで、直接させられた罪に、ロマニの心が軋む。

「シロウー—貴方は…」

そして。
彼と契約で繋がっていたのは、マシュ達だけではない。アルトリアの手で、聖剣の鞘が士郎へ押し込まれる。魔法の域にある宝具は、祓えぬはずの呪いをも祓うだろう。右腕の呪詛をも、根割り。

マシュは目を見開く。騎士王は高潔だった。詐術にかけられていた事を知っても、それが世界を救うためだったならばまるで咎めなし。アーサー王は、真実騎士道の王だった。

「っ！アルトリアさん！？何を！」

「マシュ・キャリエライト。貴女が宿す英霊は、貴女の心根の貴さを証明している。なら私は、彼を助けましょう。──貴方達に戦いに故に、アルトリアは士郎の傍に片膝をつき、その体へ触れた。

この世全ての悪の遺した呪いは、彼の魂にまで至っている。魔法王すら、これを取り除く事は出来ないほど、根深いそれであった。

「この特異点の所以までは見えませんでしたが、どうやらこのアーサー王は、真実騎士道の王だった。」
戦いは、あってはならないものだった。行きなさい、マシュ・キリエライト。ロマニ・アーキマン。こんな所で足踏みしている暇はないでしょう。彼を連れ、カルデアで英気を養うのです。その、黙って Abyss を差し上げる。シロウが宿すもよし、こちらの私に譲るもよし。些が急です。お別れの時間をようですね。この特異点の原因が排除された故に、どうやら貴方達の退去が始まったようだ。

淡く微笑むアルトリアに、マシュは改めて敬意を抱き直した。士郎を抱き上げ、マシュは礼する。カリデアのマスターは、今暫しの時を眠り続けるだろう。次の特異点には間に合わないかもしれません。だがそれでも、また立ち上がれる。彼はそういう男だった。故にアーキマンは彼を心配しない。代わりに彼女は沈黙する。

ロマニは力なく笑い、「青年へ告げた。

ロマニは力なく笑い、「幸せとなるか −− 人間の彼らに知る術はない。そして冬木の特異点は、消え去る。この寄り道が、幸となるか、
戦後処理だねカルデアさん！

変異特異点の人理定礎は復元された。

特異点の原因であった聖杯の回収に成功し、掛けられた時間と、費やされた戦力比率を考慮すれば驚異的な戦果であったと言える。

しかし何も問題がなかったかと言われれば決してそうと言えるものでもなかった。

変異特異点の原因であった聖杯の回収に成功し、掛けられた時間と、費やされた戦力比率を考慮すれば驚異的な戦果であったと言える。

しかし何も問題がなかったかと言われれば決してそうと言えるものでもなかった。

変異特異点の人理定礎は復元された。

特異点の原因であった聖杯の回収に成功し、掛けられた時間と、費やされた戦力比率を考慮すれば驚異的な戦果であったと言える。

しかし何も問題がなかったかと言われれば決してそうと言えるものでもなかった。

変異特異点の人理定礎は復元された。

特異点の原因であった聖杯の回収に成功し、掛けられた時間と、費やされた戦力比率を考慮すれば驚異的な戦果であったと言える。

しかし何も問題がなかったかと言われれば決してそうと言えるものでもなかった。

変異特異点の人理定礎は復元された。

特異点の原因であった聖杯の回収に成功し、掛けられた時間と、費やされた戦力比率を考慮すれば驚異的な戦果であったと言える。

しかし何も問題がなかったかと言われれば決してそうと言えるものでもなかった。

変異特異点の人理定礎は復元された。

特異点の原因であった聖杯の回収に成功し、掛けられた時間と、費やされた戦力比率を考慮すれば驚異的な戦果であったと言える。

しかし何も問題がなかったかと言われれば決してそうと言えるものでもなかった。
なけらばならない問題である。しかし、打つ手がない。
これで心の拠り所となるマスターが、なんの力もない平凡な存在だっただけなら、まだ未熟な少年や少女であったなら、彼らも奮起しただろう。だが士郎は余りにも頼りになりすぎた。これを期に職員の意
識改革に努めねばなるまい。
万能の天才は士郎の昏睡の原因を、心の衝撃によって生じた隙を、
この世全ての悪に衝かれた反動であると推定した。彼女も士郎との付き合いはそれなり。柔軟な精神的タフネスを誇る彼
も司令部は見ていて、必要なら彼が目覚めるまでの時間のみ。
ロマニアアルトリアは特に重苦しい面持ちだったが、彼らの問題
は、士郎の意識が覚醒するまで持ち越しとなる。
この名目上の司令官代理であるロマニもなんとも言えない顔をしてそれを見詰めている。少
女の名は─間桐桜。変異特異点の住人。なんの間違いか、彼
と眠っている男と、幼い少女である。管制室のモニターに映っ
ているのは、医療室のベッドでこんこんと眠っている男と、幼い少女である。
女もまたカルデアへやってきてしまった。

聞き込みを行った結果原因は明らかとなった。間桐桜は士郎と離れてたくないと、その時強く願っていたのだということ。その願いを、無色の聖杯が汲み上げてしまったのだ。特異点から退去する士郎らと共に、カルデアに現れたのはそれが原因である。万能の願望器は、事実万能であったからその事故だった。

アグラヴェインは厳しき顔を一層厳しく促め、こめかみを揉んでいた。文庫にあっては、それが原因であった。

万能の願望器は、事実万能であったからこそ事故だった。

アングラヴェインは厳しい顔を一層厳しく促め、こめかみを揉んでいた。文庫にあっては、それが原因であったからこそ事故だった。

「ああ、どう見ても依存しているよね…」

「あれ、どう見ても依存しているよね…」

「あら、どう見ても依存しているよね…」

「ああ、どう見ても依存しているよね…」

アングラヴェインは嘆息して髪を掻き上げる。
曲がりなりに心を開くのは、士郎くんを除けばロマニとマシュだけ。他の誰か是近づくだけで怖がる。士郎くんが地獄から救ってくれた、救ってくれた時に士郎くんの傍にいた、だから君達しか信じてない。

アグラヴェインは苦々しく吐き捨てる。それは何も、桜を毛嫌いしてのものではない。あくまで合理性を突き詰めた思考故のものだ。

それがならまだマシだ。
他の方誰か近づくで怖がる。
士郎くんが地獄から救ってくれた、救ってくれた時士郎くんの傍にいた、だから君達しか信じてない。

さしつめ桜ソロにっかた所かな？

「さしつめ桜ソロットっていった所かな？」

管制室のモニターが示す、桜のパーソナルデーは、人間の物ではないのだ。そう、それはデミ・サーヴァントのものである。
ロマニが頭を抱えた。

「大聖杯の中にあった湖の騎士の霊基と同化するなんて、しかもそれでなんの問題も起こらないなんて、どれだけあの娘はメチャクチャなんだ！」
「……」
「……」
「桜が間近で直接見た、最も強いサークルが彼だっただろう。」「アグラエイの忌々しさに桜の霊基パターを睨み付けている。」「生前の彼を殺めた騎士が、堪らなく不愉快なのかもしれないあっただろう。生前子の負の感情を桜へ向けた訳ではなかったり、流石に理性不盡な八つ当たりのよう真似はすまいない。」「勿論ボクはあの娘を連れて特異点に行くのは反対ちょうど理にかなっている。」「あの湖の騎士のデミ・サークラムのものに？」「ダ・ヴィンチの反駁に鉄の宰相は三白眼で一瞥する。」「あとの男の実力は知っただけだ。」「真実あの娘があの男そのもののであっただろうが所詮は戦いの心得ない小娘だろう。」「戦う術を知らないうち人を、どうして戦力として計上出来ると思う」「知っただけ、言ってみたけさ。―問題はあの娘、かなりキテるぜ。士郎くんと離れそうになったら、あの力で暴れかねない。一番の問題はそこだ」「………」「………」「倫理の欠けた幼い少女が、癇癪を起こして暴れくる光景。サークルの力で、人間には太刀打ちならず、カルデアに甚大な被害
が齎されかねない。
具体的なビジョンが目に浮かぶようで、カルデアの最高頭脳達は
揃って沈黙した。暫しの間を空け、そして彼らは決断する。

万能の天才の提案に、男達は異議なしと声を揃えた。

死国残留海域スカイと銘打たれた特異点は復元されていた。

士郎らが帰還する、ほんの五分前の事だ。
カルデアに帰ってきたネロは疲労困憊を極め、帰還するなりその
まま眠りについた。同道していたアーチャーのアタランテとエミラ
はフェルディアによって撃破され、英霊召喚システムによる再召喚
待ちである。

健在なのは光の御子クー・フーリンのみ。しかし彼もまた満身創
癒だ。全身傷のない箇所は見当たらず、大儀そうに鉛色の吐息を溢
している。

マシュが光の御子と出くわしたのは士郎のメディカル・ルームを
出した廊下である。

クー・フーリンはサーヴァントだ。見た目を取り繕う事は、外見
だけは回復しているように見せているが、その霊基は非常に損傷が
激しい。マシュは彼を気遣うも無用だと手で示され、クー・フーリ
ンの問いに答える。

「先輩は無事…ではないですか、命に別状はありません。近い内
番犬が聞いて呆れるぜ、と。士郎が聖杯の泥に呑まれた件を聞
いたのか、クー・フーリンは腹立たしげに舌打ちする。
その、その辺の戦いはどうなったんですか？」

「あ、クー・フーリンさん」

「あん？」

「あ、クー・フーリンさん」

「そうか。…チ、オレがもうちょっと早く始末つけられリョッカ
んだが」

「先輩は無事…ではありませんが、命に別状はありません。近い内
に目を覚ますだろうとドクターとダ・ヴィンチちゃんは言っていま
す」

「あ、おう、お嬢ちゃんじゃねえか。マスターの様子はどうだ？」

「…おう、お嬢ちゃんじゃねえか。マスターの様子はどうだ？」
マシュもまた、土郎に付きっきりだった故に、ままだネロ達が攻略に当たった特異点での戦闘記録を知らなかった。

疲れたというク・フーリンを呼び止めるのは気が引けたが、聞いておかねばならない気がしたのだ。

アイルランド随一の英雄は、心底から疲れきった声で応じる。

戦士は自らの手柄を吹聴するものではないが、求められれば口を開くものだ。

「わりいが大分はしるよ。詳しく知りたければ記録を見ればいいんだしな」

「はい」

波濤の獣を討った所までは知ってるな？ソイツの中にあった聖杯を、フェルディアの野郎が回収して行きやがった。で、ちんたら杯を、フェルディアの野郎が回収して行きやがった。で、ちんたら鬼ごっこしてやる暇もなかったんで、ネロとアーチャーの野郎、それからアルカディアの狩人にフェルディアを任せてオレは本丸に突っ込んだ。そこで待ち構えていた師匠「ああ、スカサハだな。

首を傾げるマシュに、ク・フーリンは片眉を落として苦笑する。

実際覚えていないのか指手画脚と言ったのも、それが理由である。

「本気でやったからな。変身しちまった」

「あっ」

理性がトンで、何があっただかなざ記憶にねえよ。だがまあ、そ
此処穿たれたんだぜと笑うクー・フィーリンの指は、心臓から指一
ま、この程度で死ぬようなじゃあ、オレは英雄になんぞなってねえ。
相討ちに近い形で、オレの槍がスカサハの心臓を抉って―仕舞い
と、この魔槍で心臓を穿たれれば、死ぬ義理はない。例え死を剥
ど、奇しくも生き汚さが生死を分けたのである。死ぬつもりのないク
―フィーリンと、死にたがりのスカサハ。勝敗は最初から決まって
了のかもしない。
に、マシュは微笑んだ。そして実感する。今回も、カルデアに帰ってこれたんだーーと。
再召喚の一番手は、どうやらアルカディアの狩人だったらしい。

召喚サークルを通じてカルデアに現界すると、直接出迎えてくれたのはネロとアタランテ、マシュ、そしてアルトリアだった。

この場にあの男がいないのか、だ。

少々意外に思う。

どのような因果だろうか、自身のサーティアを劣らせるのを厭う性格ではないと思っていたのだが、まあ構うまい。どうせ嫌らしいう心拍を迎えるのを厭う。

少々意外に思う。

この場にあの男がいないのが、だ。

で、どんな因験があるか、自首のサーティアを申し出るのを厭う。

どちらが上か思い知らせてやる等と、オレをネロ班に回す時に不敵に嘆いていたのを思い出し、口角を上げる。面白いか、ならばその腕を品評してやろう。そしてどちらかが上か比えるのも、もう少しは ...

と、そんな事を思っていると、ネロが真っ先に歩み寄ってきた腕を叩いてきた。

「おっ、アーチャー！　ご苦労である。スカイでの奮戦、真に見事であったぞ！　ローマであったら将軍に召し上げるほどの活躍であッソ！」
「うん、余のカルデアのマスターとしての初陣、少しばかり
リキツすぎた気がするが、無事乗り越えられてよかった！
一度消滅させられた身としては、無事とは言い難い気もするがね」

「思わず笑笑する。名高き蔷薇の皇帝が女性で、しかもカルデアの
マスターに引き抜かれていたというのは、ああ見えてない珍事
あるが、オレはすんなりとそれを受け入れられた。カルデアなら何があっても可笑しくはない。それにネロは魔力量
指揮官としての力量、人柄、どれも申し分のない存在。仮マスター
なのが惜しいと感じるほどに。

天真爛漫とすら感じさせる物言いも、愛嬌として受け入れられる。
容姿がどこまでもアルトリアにも似てなくもないからか、自分でも思
っていたよりも好意的に接する事ができた。

何はともあれ、誇るがいい、エミヤ。汝がマスターを庇わねば、
彼のアルゴナイタイの紅一点、アルカディアの狩人とそうまで言
われると面映ゆいな。君の功も大きなものだったと記憶しているが
きい。

彼はアタランテ。ギリシャ神話でも特筆すべき弓の名手だ。その駿足
アタランテ。ギリシャ神話でも特筆すべき弓の名手だ。その駿足
と返すと、アタランテは苦笑ぎみに肩を竦めた。こちらを認め
れたような、信を置くに不足のない者としても見る余地だ。彼
女は掛けてきた言葉は少ないが、それでも充分に理解し合えた気がす
恐らくあの光の御子にも引けは取らない。
大英雄とは言えない。しかしその実力は間違いなく一級だ。オレ
がフェルディアからネロを庇った際、一瞬の隙を突いてフェルディ
アの腕を矢で射抜いた光景を確かに見てた。その傷があったから
こそ、ネロは辛うじて単独での防戦が叶い、カルデアから再派遣さ
れてきたアルトレアが聖剣を振るう間を稼げた。

「アーチャー」

戻ってきたか、アーチャー。大儀だったと一先ずは劣ってやる。
褒美だ、受け取れ。

？セイバー、何、おっ？

アルトレアと、オルタリア等とあの男に呼ばれていた騎士王達。
いきなり何かを抗議しようとするも、オルタは鼻を鳴らして踵を
返した。そのまま召喚ルームを後にする黒き騎士王。アルトレア
は無造作に腹部へ鉄拳を見舞ってきた。躲け事も儘ならずに直撃さ
れ、思わず蹴りそうになる。腹筋が爆発したような衝撃だ。だが手
加減はされていたのだろう。本気だったなら間違いなく側絶していった。

すみません、アーチャー。私の側面が八つ当たりをして。
「はつ当たりとは？ 私が彼女に気を障る事をした覚えはない
が…まさかあの男が何かしたのか？」

いえ…詳しくはまた後で。一応忠告をしておきます。アーチャー
貴方はとりあげず、覚悟しておいてよう。方いいかもしれない、それまでせん」

「覚悟？何を覚悟ろと？」

「では私もこしれままし、ご苦労様でした、アーיאהー。
言いい遅れましでが、貴方と再び共に戦える事は、私としても心強い」

不吉な物言いに嫌な予感がする。なんだというのだろう。立ち去るアーチARにおける背中を困惑して見送るオレに、マシュは固い顔で近づいてきた。

「お疲れ様でした、エミヤさん。それと、再召喚に応じて下さり感謝します」

このカルデアにエミヤは三人いる。あの男に、オレに、IFの切嗣だ。気を取り直してマシュと向き合う。

「…構わないさ。私としてもこんな途上でカルデアから脱落する気はない。
処でマシュ、あの男はどこだ？なんなんないな…。
…マシュ？その娘は…？」

不意にマシュの背中かからひょっこり顔を出した幼い少女に、古い記憶が刺激される。思わず顔を引き攣らせた。

そうだ…小学校になったかなるか程度の、幼い少女の髪は薄紫の色を帯び、感情の薄い瞳でこちらを見上げてきている。

マシュの服の裾を握り、オレを見る目は酷く小動物的でーーーここの少女が、オレにも縁深い存在であることを予感させた。

マシュが何かを答えるより先に、少女はマシュの後ろから問いかけるように口を開いた。
―はじめまして。わたしな、間桐桜、です。あなたは、士郎さん……ですか？

―そ、の、姿が、どうしようもなく、己にとって大切で——救えなかった者と重なる。日常の象徴だった、大切な存在だったヒトの、幼い姿。それを違覚するなど、どれほど磨耗していても、まず有り得ない。例えどうしようもなく磨り切れていても、その姿を見て、声を聞けば、鮮明に思い出す。

それで悟った。その名前で理解した。あの男がどこで戦っていたかを知っている。頭を抱えた。
カルデアの食堂で、事の経緯を説明して貰う。
そしてオレの一応のマスターである、あの男の状態も把握した。

この世界の衛宮士郎の体験した、冬木の第五次聖杯戦争。そしてそれらを被せられた、第六次聖杯戦争。第五次時点で大聖杯に纒られたオレの魂を、アラヤによって憑依させられ同化した存在。

故に別人でありながら似たようないかいかの席に座っているマシュが、心配げに問いかけてくる。オレは答え、同じ末路を辿る事はなかった。

「あ、あの、エミヤさん。先輩は……どうなるんでしょう……？」

「恐らく、死後はアラヤの奴隷として組み込まれるだろうな。
向かいの席に座っているマシュが、心配げに問いかけてくる。オレは答え、同じ末路を辿る事はなかった。

「あ、あの、エミヤさん。先輩は……どうなるんでしょう……？」
人間性が違いすぎる。あの男はあのくまでオレと同じくするだけの、完璧な別人のだ。エミヤシロはあのようにくに、自分を大そうに来た男ではない。エミヤシロはあのようにくに、他を省みて事の出来る人間でない。借り物の理想見えていたエミヤシロとは、決して違う。しかしここにエミヤシロという余分な魂を同化させた事で、歪み、本来目指していた正しいの味方とは異なる道を歩んだ。

そして自身の人間性こそ保っているのも、そのの魂は限りなくオレと同じと見てもいい。でなれば、奴の固有結界にオレと同じ歯車などないのだか。

マシュの悲鳴じみた反駁を受顎に手をやる。傍らの席に桜がいるのが、どうにかやったりづらう。

「…士郎さん、どうなっちゃうの？」
「君が気にする事じゃないさ。…それから、紛らわしいから私の事はアーチャーと。君を助けた男を士郎と呼べばいい」
「うん」フォーグーでパスを不器用に絡めとり、口周りを汚しながら頬張る。しかし…なんだ。何故そのフォーグーが宝具化している。桜の状態も聞かれたら、一応は理解は出来るが、フォーグーはどう考えても『武器』のカテゴリーではないうはずだ。

「アーチャー、対策は何かないのか。私のシロウを、アラヤ如きの…」
走狗にさせるなど、想像するだけで腸が煮え繰り返る。

オルタが漆黒のドレス姿で脚を組み、苛立たしさに問いを投げてくる。よほど、この世界の衛宮士郎は騎士王に入り込まされているらしい。オルタではない方のアルトリアも、黙ってはいるが痛いほど重い視線を突き刺してきている。

オルタが漆黒のドレス姿で脚を組み、苛立たしさに問いを投げてくる。よほど、この世界の衛宮士郎は騎士王に入り込まされているらしい。オルタではない方のアルトリアも、黙ってはいるが痛いほど重い視線を突き刺してきている。

オルタが漆黒のドレス姿で脚を組み、苛立たしさに問いを投げてくる。よほど、この世界の衛宮士郎は騎士王に入り込まされているらしい。オルタではない方のアルトリアも、黙ってはいるが痛いほど重い視線を突き刺してきている。

オルタが漆黒のドレス姿で脚を組み、苛立たしさに問いを投げてくる。よほど、この世界の衛宮士郎は騎士王に入り込まされているらしい。オルタではない方のアルトリアも、黙ってはいるが痛いほど重い視線を突き刺してきている。

オルタが漆黒のドレス姿で脚を組み、苛立たしさに問いを投げてくる。よほど、この世界の衛宮士郎は騎士王に入り込まされているらしい。オルタではない方のアルトリアも、黙ってはいるが痛いほど重い視線を突き刺してきている。

オルタが漆黒のドレス姿で脚を組み、苛立たしさに問いを投げてくる。よほど、この世界の衛宮士郎は騎士王に入り込まされているらしい。オルタではない方のアルトリアも、黙ってはいるが痛いほど重い視線を突き刺してきている。

オルタが漆黒のドレス姿で脚を組み、苛立たしさに問いを投げてくる。よほど、この世界の衛宮士郎は騎士王に入り込まされているらしい。オルタではない方のアルトリアも、黙ってはいるが痛いほど重い視線を突き刺してきている。
「何せこんなもの、はじめて耳にする例だ」

桜が聞き耳を立てているのを察して、その頭を軽く撫でる。気持ちは良そうに目を細める桜に、食事を続けるように促して意識を逸らすと、真剣に話し続ける桜に耳を傾けた。

アールティア、オルタ、マシュ。・・・まったく、あの男も罪な奴だ。

ふと、食堂の外で聞き耳を立てている存在に気づく。・・・こんな性質的な意味でほとんど同一人物だからな。どこからどこがあなたの奴の魂かなど、第三魔法による魂の物質化を実現しても見分けはつまい。

「同化した魂を切り分ける事は不可能だ。なんであれ私とあの男は性質的な意味でほとんど同一人物だからな。どこからどこがあなたの奴の魂かなど、第三魔法による魂の物質化を実現しても見分けはつまい。」

「・・・どういう事ですか？」

「私が考えるに対策は一つ。それは世界の認識する『エミヤシロウ』と、あの男が完全に別物だと認識させる事だけだ」

「・・・どういう事ですか？」

「いまいち意味が伝わらなかったのだが、マシュが首を捻る。
ふむ。マシュ、君は抑止の守護者がどんな存在か知っているかね？
「はい、応は—」
「なら話は早い。細かい解説は要らないな。簡単に言うと私のよう
な霊格の低い英霊は、人類を守るアラヤの抑止力に組み込まれる。
名のある英霊は様々な理由で、アラヤではなく星寄りの—つり
ガイア寄りの存在になっているからだ。
そうだな…守護者として該当するのは、英霊を英霊たちしめて
いる信仰心が薄い英霊か、或いは生前に世界と契約を交わし、死後
の自身を売り渡した元人間と言えば分かりやすいか？衛宮士郎を
救いたくは、このアラヤの枠組みから脱する他に手立てはない。既
に死んでいる私は不可能だが、まだ生きている衛宮士郎ならば絶対
に不可能とは言えないだろう。
つまり、アーチャー。貴方はこう言いたいのですか？「シロウ
早い話、アラヤが掃除屋として運用できるのは格の低い英霊のみ
だ。例外は世界と直接契約した者のみ。そしてこの世界の衛宮士郎
は、契約した状態からスタートしているが——生憎と本来のこの
世界の衛宮士郎は『契約していない』し、その意思もなかった。
であれば、不可逆の事象が成立する。契約する意思のない者が巨
大な功績を打ち立て、人々の信仰を集める事で高位の霊格を手にす
れば、それは英霊として祀られるに相応しい存在となる。
現代では英霊は生まれにくい。なぜなら世界を救う程度の功績で
は、英雄とは言えなくなっているからだ。しかし何も功績とは世界
を救うばかりではない。不特定多数の人間を正確に救い、その功績
の認知度が高まり——未来の教科書に載るほどの存在になれば、充分に英霊として認められるようになる。

「なんだそれはー」

「だから、あくまで可能性だ。この人理復元の旅は、生憎と功績だ
と認められはしないだろう。世界は既に滅んでいる。滅んでいるモ
ノがどうやって功業を評価する？奴は宛のない旅を続けねばなら
ない。さもなくば、奴は永遠に人類の掃除屋となる」

「決まったぞ、アーチャー」

「ええ。私も」

「……何をだ？」

「愚問だ。この人理修復を巡る旅が終われば、
「私はカルデアに協力した報酬として、回収した聖杯の使用権を
思います。それで受肉を果たし、シロウを助ける為に共に在る」

「ならだそれはー」
「うっそういう事だ」

それは、また。随分思い出きたものだ。
笑ってしまう。嫌みではない。未来を語る事の出来る彼女達が、
どうかしたのかと訝ねようとする。彼女もきっと、あの男を助け
たいと望んでいるはずだと思ったのだ。
しかし今回は話をつけ直して来たのだ。
聞く機会を逃した。食堂に光の御子がやって来たのだ。

「おう、此処にいやがったか、アーチャー」

マショが顔を曇らせたのに、不意に気づいた。
酷く眩しい。

「…」

それは、また。随分思い出きたものだ。
笑ってしまう。嫌みではない。未来を語る事の出来る彼女達が、
どうかしたのかと訝ねようとする。彼女もきっと、あの男を助け
たいと望んでいるはずだと思ったのだ。
しかし今回は話をつけ直して来たのだ。
脳裡を過る、先の特異点での怪獣大決戦。トップ陣の更にトップ陣に食い込む、このカルデア最強のサーヴァントの力。はっきり言って、冬木の時の比ではない。額に脂汗が浮かんだ。

気が断って食堂の隅にいた赤いフードの男が密かに呟いた。

白兵戦ではオレを圧倒するアルトリアを圧倒するバグ染みた男と耐久戦闘 Classeなど御免被る！必死に抵抗するが捕まった時の点で運命は決まっていた。
お手並み拝見だ、ケルトの英雄さん。

彼はまだ、クール・フーリンの実力を把握していないうちに、それを見極める機会として、エミヤシロウはうってつけの存在だった。
幾度も戦場を渡り歩き、培ってきた淡い矜持があった。

己よりも強大な敵は、そここそ幾度も目にして来た。だが決して
容易くは敗れぬという自負がある。防戦に徹し相手の呼吸を図り、
挑発を重ね、効果的な戦術と投影を組み合わせて勝利を模索する。

勝てぬまでも退路は常に残し、時として死や降伏を擬装して潜伏す
する事もあった。

戦いに絶対はない。故に勝てるモノを、勝てる状況で、勝てるよ
うに運用する。それがエミヤにとって唯一の闘術論理である。戦い
に於いてもよその誇りと言えるものを持たないエミヤだが、自らの戦
闘術に関しては自信があった。

しかし同時に、エミヤは理解していた。

それは所詮、人の業である。投影魔術、固有結界という異能を有
していても、決して無敵ではない。最強でもない。究極の一に至っ
た担い手には及ばない。自らでは及びもつかない絶対強者というも
のは存在する。
例えば英雄王がその一人だ。相性の関係で有利に立ち回ることは徐よしの憊、光あとの負が、優に勝けとやる例えばしにエい韻満敗に御てれうて者かそえ馬てギ守ミ呼を身も着と子も天もで霊らればも模いアりあ、はがエ同災万は薬こして英合擬なを、手も足も出ず、亀の荒い呼気を正すのに精一杯で、皮肉のひとつも返せないほど疲弊したエミヤは、意地だけで膝をつかなかった。手も足も出ず、亀の余韻を冷ますだけの単純な作業だった。

“クー・フーリンはそう言って「クールダウン」を終え、疲労困憊、満身創痍に陥ったエミヤだが、クー・フーリンにとっては戦いの余韻を冷ますだけの単純な作業だった。荒い呼気を正すのに精一杯で、皮肉のひとつも返せないほど疲弊したエミヤは、意地だけで膝をつかなかった。手も足も出ず、亀の余韻を冷ますだけの単純な作業だった。"
無二のマスターとして仰がせた衛宮士郎が自身と別人である事を痛感させなかった。改めて思い知ったが、どう在っても不倶戴天、気に入らないのだ。防禦が巧みに万全だったが、ここ防戦に限って言えば赤枝の騎士にもそういえレベルだったぜ。防禦が巧みに分かったやり方だったから、ここ防戦に限って言えば赤枝の騎士にもそういえレベルだったぜ。

今日の事は…誉められたのか？

麺は見送った。

今は…誉められたのか？

立て去ったクー・フーリンの背中を、呆気に取られたようにエミヤは見送った。

流石にそれはないだろう。あって思えるものか。思考を切り換ええる。冬木で戦った時は相当に弱体化していたのは理解不足に絡まれたかと思えばこれだ。エミヤの知るクー・フーリンとはこんな男だったのか？もし今の模擬戦は、彼なりのコミュニケーションだったりするのだろうか。これがケルト流の心暖ぬし、彼なりのコミュニケーションだったりするのだろうか。もし今の模擬戦は、彼なりのコミュニケーションだったりするのだろうか。これがケルト流の心暖ぬし、彼なりのコミュニケーションだったりするのだろうか。
分かった。何はともあれあの位階の英雄の力で、死の恐れもなしに
知られたほい経験である。この経験を糧に立ち回りを練る機会が
得られたのだ。次はもう簡単に振り返せなければならない。
さりと、接近戦は毛だろう。単純に速さが段違いなのだ。敢
えて隙を作って攻撃を誘導する手法は有効ではない。
しか、毎日勤の弓兵に立ち返るしかないだろう。だが生半可な矢は
クーン・フーリンには通じない。最大火力を以て一撃で決さねば、こ
ちの力がないのは目に見えている。手堅いのはアルトリアと同等
かそれ以上の前衛を置く事だが、そもそもあの脚だ。前衛を無視
してこちらに突っ込んでくる様がありありと想像できる。
　…今は、あの男が味方でよかったと思っておこう。
　嘆息してエミヤもシミュレーター・ルームを後にする。時刻は午
後の六時ほどか。手も空いている事だ。折角だから職員達の分のタ
クでも作っておこうと思う。そう思い立つと、エミヤは食堂に向か
た。このカルデアは科学と魔術の最先端、どれほどの調理器具が揃
っているか、実は召喚初
日から気にはなっていたのだ。しかするとあの男が持ち込んだ物
品もあるかもしれない。もしあれば吟味してやろう。
だ。人の振る舞う料理も乙なものだが、今日は鍋をしたい気分だ。

特に意味はないが。厨房は広い、先客がいようとは隅の方を借りて作ればいい。そう思い、赤原礼装を解除する。

料理も乙なものだが、今日は鍋をしたい気分だ。特に意味はないが。

廚房は広い、先客がいようとは隅を借りて作ればいい。

エプロンを投げ、それを身に付ける。厨房の入り口にあったアルコール消毒液で手を消毒する。霊体であるサーヴァントには意味はないが、これは厨房に入る者として当然のものです。

厨房に入ると、食堂に入った時点で感じていた薫りが、更に芳醇に感じられた。知らず、呻いてしまう。

「…中々やる」

「…中々やる」

調理には一家言あるエミヤをして、そう思さずにはいられない薫りだ。たかが匂い如きと侮るなかれ、見た目、味と同じぐらい薫りも料理には大切なものですから。この濃厚な薫りからして、作られているのはシチューマッシュだろう。

エミヤの声に怒りが滲む。

「あ、エミヤさん」

「…貴様、何をしている」

エミヤの声に怒りが滲む。ところが振り返った男の傍には、熱心にメモを取るエプロン姿のマシュがいた。そして白い割烹着を着た桜が士郎に肩車されている。付け加えるなら、そんな桜の頭の上には一匹のモコモコ

「…中々やる」

衛宮士郎だったのだ。

「…中々やる」

「…中々やる」

…中々やる
がいた。
モモコは全身をビニール袋で包まれていた。露出しているのは白い四肢と、顔だけである。非常に愛らしいエプロン姿とてもいうべきか。

昏睡状態に在るはずの士郎が何食わぬ顔で復帰している事に驚きがあった。まだ寝ていないってダメだろうとか、言わねばならない事は山ほどあるが。それよりもうべきか。

マシュが軽く会釈をしてくる。それに目礼のみで応えた。

「衛宮士郎。君様、事もあろうにここの厨房で子供を肩車しているのは何事か！」「そこか。そこなのか。まずは俺の心配が先なんじゃないか？普通のことしたこと煮込んだ鍋の様子を見ながら、士郎は苦笑した。「きょうことで、起きててもなんともないと判断したからこそ処にいるのだろう。その程度の判断も出来ん未熟者ではあるまい。それよりもだ、動物まで処に入れているとは...貴様には料理人としての自覚がないのか！？」「戯れ、起きてもなんともないと判断したから処に出ているのだろう。」

通は...
どうしてもこうしてはならない。手が空いたから忙しい職員達の為に、
夕飯の支度でもしておこうと考えたまでだ。それよりも衛宮士郎！
手が空いて忙しくれど、職員達の為に、夕飯の支度でしょらこ。
ふざけた事は抜かすな。大体貴様はっ！
ここに直れ！どうやる貴様には、厨房に立つ者としての心得か、
それよりも衛宮士郎！そこの直れ！どうやるさ。
廚を肩から下ろすと、士郎はエプロンを外しながら厨房から出た。
桜はトテトと、頭の上の小動物を落とさないようにバランスを取
りながら食器の準備を始める。
マシュが微笑んで、手伝いますねと断りを入れて食器棚の高い位
置にある大皿を取り出す。それを尻目に士郎もエプロンを外し、手
を洗ってエミヤを促し厨房を出た。
「なだ」
「いや、とりあえずアルトリアーズとネロ、ランサーと切嗣、お
前と俺、マシュ、桜、ロマニレオナルド、アタランテー後アグ
ラヴェインに百貌様、追加で今から召喚するサーヴァント三騎の分
は作り終わったらからな。アートリア二人の分で二十人分消し飛
んだが、特異点ニツ同時攻略の祝勝会兼新顔歓迎会だし、奮発する
のもたまにはいや。
「カルデアの備蓄は保つのか？」
勿論。現状最優先で、冬木の聖杯をダグザの大釜に改造して貰っ
切嗣は言うまでもないから省略。ランサーは大火力が必要な時、そのマスター、あの娘とはそもそも契約しているだけであらゆる異素を用いて、も運用できる。だからレギュラーだ。そしてマシュ、あの娘とはそもそも契約しているだけで、あらゆる毒素への耐性を得られる恩恵がある。純粋な守りの要でもあるからマシュもレギュラーだ。

その前に伝えておくが、俺が常の特異点に連れて行く「サーヴァントは四人だ。ランサー、マシュ、切嗣は固定で、後の一人は場合熱により、違ってあるエミヤは微妙な顔になる。内心同意だったのだ。切嗣は言うまでもないから省略。ランサーは大火力が必要な時、そのマスター、あの娘とはそもそも契約しているだけであらゆる異素を用いて、も運用できる。だからレギュラーだ。そしてマシュ、あの娘とはそもそも契約しているだけで、あらゆる毒素への耐性を得られる恩恵がある。純粋な守りの要でもあるからマシュもレギュラーだ。

その前に伝えておくが、俺が常の特異点に連れて行く「サーヴァントは四人だ。ランサー、マシュ、切嗣は固定で、後の一人は場合熱により、違ってあるエミヤは微妙な顔になる。内心同意だったのだ。切嗣は言うまでもないから省略。ランサーは大火力が必要な時、そのマスター、あの娘とはそもそも契約しているだけであらゆる異素を用いて、も運用できる。だからレギュラーだ。そしてマシュ、あの娘とはそもそも契約しているだけで、あらゆる毒素への耐性を得られる恩恵がある。純粋な守りの要でもあるからマシュもレギュラーだ。
チャートはネロをつけていないから、実質カルデアに待機させる戦力内容が火力組しかないのはわかって貰えると思う。

衛生兵は実際必要不可欠なのだ。カルデアにも医療班はいるが、それは人間である。いざという時、特異点にレイシフトして治療に出向ける訳ではない。

「今からか？」
「今からだ。キャスターだったら回復機能は宝具持ちとは限らない。一気に関連する。内一騎でも回復機能か宝具持ちであったら御の字に三騎召喚する。レオナルドと魔術王の靈基パターンにある共通事項から、キャスタークラスを狙い撃ち出来るようにしたらしいし、後は運任せな。

「……」
らしいものだろうか。何か心配は要らない。
キャスターならアルトリアが増える事もまずないし。

…

まあの流石に心配しきか。

…

私が同行する理由は？

- ぶっちやけない。お説教がうるさくなりそうだったから。

- せっかくの勢いで連れ出したりだ。まぁ、幸運は舐めて俺のガチャ運が舐めるよ。

- これでも外れを引いた事はないんだ。

- 芳香の鬼を。これなら役立つそうだ。

- 喚の性だ。

- サーヴァント召喚をガチャ呼ばわりは悪い文明である。しかし実績的にあがり間違えもなさそうあたり、この男は性質が悪い。

- オレと話していると頭が痛くなっている。平行世界の衛宮士郎とはいいえ、こんなにも性格が違うと流石に思う事もあった。これで容姿が同じでなかったら、気兼ねする事なく付き合えたものを。言ってしまお腹が痛い。

- 何で困るんだ？

- ぶっちやけない。お説教がうるさくなりそうだったから。

- せっかくの勢いで連れ出したりだ。まぁ、幸運は舐めて俺のガチャ運が舐めるよ。

- これでも外れを引いた事はないんだ。

- 芳香の鬼を。これなら役立つそうだ。

- 喚の性だ。

- サーヴァント召喚をガチャ呼ばわりは悪い文明である。しかし実績的にあがり間違えもなさそうあたり、この男は性質が悪い。

- オレと話していると頭が痛くなっている。平行世界の衛宮士郎とはいいえ、こんなにも性格が違うと流石に思う事もあった。これで容姿が同じでなかったら、気兼ねする事なく付き合えたものを。言ってしまお腹が痛い。

- 何で困るんだ？

- ぶっちやけない。お説教がうるさくなりそうだったから。

- せっかくの勢いで連れ出したりだ。まぁ、幸運は舐めて俺のガチャ運が舐めるよ。

- これでも外れを引いた事はないんだ。

- 芳香の鬼を。これなら役立つそうだ。

- 喚の性だ。

- サーヴァント召喚をガチャ呼ばわりは悪い文明である。しかし実績的にあがり間違えもなさそうあたり、この男は性質が悪い。

- オレと話していると頭が痛くなっている。平行世界の衛宮士郎とはいいえ、こんなにも性格が違うと流石に思う事もあった。これで容姿が同じでなかったら、気兼ねする事なく付き合えたものを。言ってしまお腹が痛い。

- 何で困るんだ？

- ぶっちやけない。お説教がうるさくなりそうだったから。

- せっかくの勢いで連れ出したりだ。まぁ、幸運は舐めて俺のガチャ運が舐めるよ。

- これでも外れを引いた事はないんだ。

- 芳香の鬼を。これなら役立つそうだ。

- 喚の性だ。

- サーヴァント召喚をガチャ呼ばわりは悪い文明である。しかし実績的にあがり間違えもなさそうあたり、この男は性質が悪い。

- オレと話していると頭が痛くなっている。平行世界の衛宮士郎とはいいえ、こんなにも性格が違うと流石に思う事もあった。これで容姿が同じでなかったら、気兼ねする事なく付き合えたものを。言ってしまお腹が痛い。

- 何で困るんだ？

- ぶっちやけない。お説教がうるさくなりそうだったから。

- せっかくの勢いで連れ出したりだ。まぁ、幸運は舐めて俺のガチャ運が舐めるよ。

- これでも外れを引いた事はないんだ。

- 芳香の鬼を。これなら役立つそうだ。

- 喚の性だ。

- サーヴァント召喚をガチャ呼ばわりは悪い文明である。しかし実績的にあがり間違えもなさそうあたり、この男は性質が悪い。

- オレと話していると頭が痛くなっている。平行世界の衛宮士郎とはいいえ、こんなにも性格が違うと流石に思う事もあった。これで容姿が同じでなかったら、気兼ねする事なく付き合えたものを。言ってしまお腹が痛い。

- 何で困るんだ？

- ぶっちやけない。お説教がうるさくなりそうだったから。

- せっかくの勢いで連れ出したりだ。まぁ、幸運は舐めて俺のガチャ運が舐めるよ。

- これでも外れを引いた事はないんだ。

- 芳香の鬼を。これなら役立つそうだ。

- 喚の性だ。

- サーヴァント召喚をガチャ呼ばわりは悪い文明である。しかし実績的にあがり間違えもなさそうあたり、この男は性質が悪い。

- オレと話していると頭が痛くなっている。平行世界の衛宮士郎とはいいえ、こんなにも性格が違うと流石に思う事もあった。これで容姿が同じでなかったら、気兼ねする事なく付き合えたものを。言ってしまお腹が痛い。

- 何で困るんだ？

- ぶっちやけない。お説教がうるさくなりそうだったから。

- せっかくの勢いで連れ出したりだ。まぁ、幸運は舐めて俺のガチャ運が舐めるよ。

- これでも外れを引いた事はないんだ。

- 芳香の鬼を。これなら役立つそうだ。

- 喚の性だ。

- サーヴァント召喚をガチャ呼ばわりは悪い文明である。しかし実績的にあがり間違えもなさそうあたり、この男は性質が悪い。

- オレと話していると頭が痛くなっている。平行世界の衛宮士郎とはいいえ、こんなにも性格が違うと流石に思う事もあった。これで容姿が同じでなかったら、気兼ねする事なく付き合えたものを。言ってしまお腹が痛い。

- 何で困るんだ？

- ぶっちやけない。お説教がうるさくなりそうだったから。

- せっかくの勢いで連れ出したりだ。まぁ、幸運は舐めて俺のガチャ運が舐めるよ。

- これでも外れを引いた事はないんだ。

- 芳香の鬼を。これなら役立つそうだ。

- 喚の性だ。

- サーヴァント召喚をガチャ呼ばわりは悪い文明である。しかし実績的にあがり間違えもなさそうあたり、この男は性質が悪い。

- オレと話していると頭が痛くなっている。平行世界の衛宮士郎とはいいえ、こんなにも性格が違うと流石に思う事もあった。これで容姿が同じでなかったら、気兼ねする事なく付き合えたものを。言ってしまお腹が痛い。

- 何で困るんだ？

- ぶっ
響いた。カルデア職員とロマニだ。

何してるんだい、皆？

申請してきましたので……。

あ、司令官代理。いえ、士郎さんがサー・ヴァントを召喚したいと

何してるんだよ！？レオンナルドー！アグラヴァインー！早く

来てくれええ！』

―はぁ！？士郎くん起きてたのかい！？って何召喚しよう

としてるんだよ！？おーい、ロマニの声カットしてくれ。傷

に響く。

―あうるさいうるさい。おーい、士郎くん起きても怪

思わず呆れるエミヤである。この男は自分が起きた事を司令部に

伝えていないらしい。マシュなら伝えるはずだから、彼女はこ

の男に煙に巻かれたのだろう。悪い男である。

傷はないだろう。

―士郎くん！何をしてるんだい！？まだ寝てなくていいけーー！

―あうるさいうるさい。おーい、士郎くん起きても怪

思わず呆れるエミヤである。この男は自分が起きた事を司令部に

伝えていないらしい。マシュなら伝えるはずだから、彼女はこ

の男に煙に巻かれたのだろう。悪い男である。

傷はないだろう。

―士郎くん！何をしてるんだい！？まだ寝てなくていいけーー！

―あうるさいうるさい。おーい、士郎くん起きても怪

思わず呆れるエミヤである。この男は自分が起きた事を司令部に

伝えていないらしい。マシュなら伝えるはずだから、彼女はこ

の男に煙に巻かれたのだろう。悪い男である。

傷はないだろう。

さて、鬼が出るか蛇が出るか。

間違いない！別の意味の鬼と蛇が後で出てくる！

間違いない！別の意味の鬼と蛇が後で出てくる！

間違いない！別の意味の鬼と蛇が後で出てくる！

間違いない！別の意味の鬼と蛇が後で出てくる！
かんかんに怒り狂うアルトリア達の姿が目に浮かぶ。雷が落ちるだろう。
土郎はエミヤの皮肉を聞き流し、召喚サークルに現界するサーヴァントの姿を指し示した。
こそあれ俺のガチャ運をお前に知らしめるいい機会だ。とくと見ろ、俺に外れ籬はない。
そして、三騎のサーヴァントが姿を表す。霊基バターンは、確かに三騎ともがキャスターだ。
その姿は、 |- わっ、わわわ！なになになにー！？いっぱい今度は何事ー！？ |
|- イリヤ、下がって！謎の光が、突然……！ |
|- あらあら……大にぎわいいね？ |
 |
見覚えしかない冬の少女と、黒髪の少女、そして冬木でまみえたばかりの、冬の聖女の生き写しだった。
「ほら見ろ、これが俺のガチ運だ」

遠い目をした士郎が嘯くのに、エミヤは頭を抱えた。
電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰めた。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。

電灯の点ずる淡い光を見詰め出した。瞳が焦点を結ぶのに数秒掛かかる。
『世界図』を捲り返す大禁呪、固有結界に異常な術、回路二十七本正、常。固有結界に関じては、異物を明確に自覚した故か余分なものを認知するようになったが、使用に問題が生じる事はないだろう。

…『この世全ての悪』が再現した俺の心の風景に在った錬鉄の守護者、自我なき正義の味方。俺が投影を十全に使いこなせるようになってからは、投影杖などと呼んでいたアイツの補助は機能しなくなった。ある意味、奴が俺とアラヤを繋ぐ接点なのだろう。俺の危機に応じて、アラヤの端末であるアイツから魔力が供給されているのかもしない。

死に瀕する程の重傷——例えばカルデアがレフによって爆破され、死なずにおられたのは、皮肉にもアラヤが俺をカルデアに送り込む際、上半身と下半身が千切りを修復出来たのは、奴の恩恵を得られていたからと思われる。それでも、俺の体には『全て遠き理想郷』が埋め込まれていた。

そして、俺の体内には『全て遠き理想郷』が埋め込まれていた。そうして、俺の体には『全て遠き理想郷』が埋め込まれていた。

少し驚く。この宝具を俺に埋め込んだ者は、彼女以外に有り得ない。少数驚く。この宝具を俺に埋め込んだ者は、彼女以外に有り得ない。少量驚く。この宝具を俺に埋め込んだ者は、彼女以外に有り得ない。

冬木の特異点にいたアルトリアだ。俺が意識を断絶させた後、ロマニャは上手いこと聖杯を獲得したようだが、思わぬ拾い物があった。
俺の事情は、俺のものです。他人は関係ない。カルデアで
戦いを終わらせた俺の戦いを教えてくれたら良い。剣の鞘を与えたくない。

俺は俺の為に動こう。俺は自分の為に動こう。

俺はエミリア・ロウなのだ。俺はエミリア・ロウなのだ。英霊エミリアではない。エミリアの記録にある『衛宮士郎』でもない。

揺らぐ事なんて有り得ない。悲劇の主人公なんて柄ではないの。

俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。俺は俺だ。
「ん？」

医務室のベッドの横で、椅子に座ってこちらを見つめるアリツァルが、汗を拭ってくれていたのか、アリツァルが手拭いを持っている。そしてベッドに上体を凭れ、俯せに眠っている幼女があり凜。

「あ、ああ･･･アリツァル、この娘は･･･」

説明を受け、俺は頭を抱えた。

「桜ですか？ 彼女は･･･」

「し、シロウ･･･？ もう起きたのですか！？」

俺が目を開いたのに気づいたアリツァルが、目をぱちくりさせた後、驚いたように声を上擦らせた。
仏陀の野郎、寝てやがる。人事焼却されてもらうからご臨終しといいるのかもしれぬ。聖杯、キミは録に願いを叶えた実績がなしのにこんなく時だけ本書気を出すなと小一時間ほど文句を言いつやりたくならず。手持ち帰れてもながらダグザの大釜へ改造不可避だ。「起きて大丈夫のですか？」「ん、あー…そうだな…どうう」アリタリの問いに、俺は数瞬考える。起きると言っても、寝て言わくれるのは目に見えていたが、もう充分に休んだ。聞けばクー・フー・リンはスカイを攻略してきていたらしぐが、エミヤの再召喚はこれから行うらしい。

頭を捻っいていると、ふとオルタが林檎の皮を黒い聖剣で剥いっているのを横目で見咎める。おい、とツッコミを入れたくならないを堪えたいった。
忘れて。

もし難しいですか？
なら食べさせてあげます。口を開けて。

は？
いや、口に咥えた林檎を近づけな……って、まあいいか。

と林檎を口に咥えたまま顔を近づけると、アルトリアが顔を真っ赤にしてアル

と俺の額に手をやって無理矢理引き離した。

って。俺の抱えていた罪悪感が無駄なものと分かった今、躊躇う

気はなかったのだが。さすがにアルトリアには刺激が強かったらし

い。乙女か、と揶揄してみたくなるが、それは我慢する。

無用な負担をこの小さな体に掛けるつもりはなかった。

レンショットの力があるろうが、子供を戦場に連れて行く気はなか

った。それに、デミ・サーヴァントの影響は体に負担が大きすぎる。

俺は少し寝る。二人とも席を外していいぞ。

そうですか？
なら……

では私達はレイシフトを利用し盆栽の強化に努めていきましょう。

シロウ、冬木にいた私との件は忘れていませんんで。
冬木での私の件･･･？ オルタ、詳しく。

やめろ。やめて。断食案件解除するから。

「ぶっ･･」

勝ち誇るオルタ。どう見てもオルタにアルトリアは愕然とした。そうなんだ！私の？そう言いたげなアルトリアに、はいはいお前も解除するから寝かせてくれと投げ振りに言う。

俺が目を閉じると、青と黒のアルトリア達が満足げに退室する。

俺が目を閉じると、静寂を保つ。一分ほどそうしていて、気配が完全に遠退いたのを感じると、俺は上体を起こした。

「よし、起きるか」

一分寝ました。寝た後にも動かないとは言えない。桜を抱えとベッドに横たわせる。

ブーツを履き、患者服から戦闘服に着替え。赤い外套は羽織っておいた。

関節を軽く回して調子を整え、さあ出るかと足を扉に向ける。すると俺が近づく前に、パシュ、と空気の抜けまる音がして扉が開いた。

「あ～、あ～って先輩！？起きて大丈夫なんですか！？」

「まあまあああ～」
「おはよう桜。看てきたみたいだな、ありがとう。」

と、マッシュが大きな声出すから桜が起きてしまった。

寝ぼけ眼を擦りながら起きました桜が、俺とマッシュを見てきたと

ってきた子犬、という訳ではないが。似たような感じがある。仕事

に行ったら拾

って来たのはマッシュだった。大慌てでロマニを呼びに行こうとしたマッシュを呼び止める。白衣姿の可愛いマッシュ、眼鏡を掛けていると文系優等生の後輩みたいで可愛い。まあ後輩と言っても十歳の年の差があるんんですが。きっと

ロマニには「何時間か後には連絡入れてるから」、「そう、そうなんですか？でしたら寝ていた方が…」、「問題ないとさ。起きても」、「ロマニには連絡入れてるから」、「そうなんですねか？でしたら寝ていた方が…」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」。

と、マッシュが大きな声出すから桜が起きてしまった。

寝ぼけ眼を擦りながら起きました桜が、俺とマッシュを見てきたと

ってきた子犬、という訳ではないが。似たような感じがある。仕事

に行ったら拾

って来たのはマッシュだった。大慌てでロマニを呼びに行こうとしたマッシュを呼び止める。白衣姿の可愛いマッシュ、眼鏡を掛けていると文系優等生の後輩みたいで可愛い。まあ後輩と言っても十歳の年の差があるんんですが。きっと

ロマニには「何時間か後には連絡入れてるから」、「そうなんですねか？でしたら寝ていた方が…」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」。

と、マッシュが大きな声出すから桜が起きてしまった。

寝ぼけ眼を擦りながら起きました桜が、俺とマッシュを見てきたと

ってきた子犬、という訳ではないが。似たような感じがある。仕事

に行ったら拾

って来たのはマッシュだった。大慌てでロマニを呼びに行こうとしたマッシュを呼び止める。白衣姿の可愛いマッシュ、眼鏡を掛けていると文系優等生の後輩みたいで可愛い。まあ後輩と言っても十歳の年の差があるんんですが。きっと

ロマニには「何時間か後には連絡入れてるから」、「そうなんですねか？でしたら寝ていた方が…」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」。

と、マッシュが大きな声出すから桜が起きてしまった。

寝ぼけ眼を擦りながら起きました桜が、俺とマッシュを見てきたと

ってきた子犬、という訳ではないが。似たような感じがある。仕事

に行ったら拾

って来たのはマッシュだった。大慌てでロマニを呼びに行こうとしたマッシュを呼び止める。白衣姿の可愛いマッシュ、眼鏡を掛けていると文系優等生の後輩みたいで可愛い。まあ後輩と言っても十歳の年の差があるんますが。きっと

ロマニには「何時間か後には連絡入れてるから」、「そうなんですねか？でしたら寝ていた方が…」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」。

と、マッシュが大きな声出すから桜が起きてしまった。

寝ぼけ眼を擦りながら起きました桜が、俺とマッシュを見てきたと

ってきた子犬、という訳ではないが。似たような感じがある。仕事

に行ったら拾

って来たのはマッシュだった。大慌てでロマニを呼びに行こうとしたマッシュを呼び止める。白衣姿の可愛いマッシュ、眼鏡を掛けていると文系優等生の後輩みたいで可愛い。まあ後輩と言っても十歳の年の差があるんですが。きっと

ロマニには「何時間か後には連絡入れてるから」、「そうなんですねか？でしたら寝ていた方が…」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」。

と、マッシュが大きな声出すから桜が起きてしまった。

寝ぼけ眼を擦りながら起きました桜が、俺とマッシュを見てきたと

ってきた子犬、という訳ではないが。似たような感じがある。仕事

に行ったら拾

って来たのはマッシュだった。大慌てでロマニを呼びに行こうとしたマッシュを呼び止める。白衣姿の可愛いマッシュ、眼鏡を掛けていると文系優等生の後輩みたいで可愛い。まあ後輩と言っても十歳の年の差があるんですが。きっと

ロマニには「何時間か後には連絡入れてるから」、「そうなんですねか？でしたら寝ていた方が…」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」。

と、マッシュが大きな声出すから桜が起きてしまった。

寝ぼけ眼を擦りながら起きました桜が、俺とマッシュを見てきたと

ってきた子犬、という訳ではないが。似たような感じがある。仕事

に行ったら拾

って来たのはマッシュだった。大慌てでロマニを呼びに行こうとしたマッシュを呼び止める。白衣姿の可愛いマッシュ、眼鏡を掛けていると文系優等生の後輩みたいで可愛い。まあ後輩と言っても十歳の年の差があるんですが。きっと

ロマニには「何時間か後には連絡入れてるから」、「そうなんですねか？でしたら寝ていた方が…」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」。

と、マッシュが大きな声出すから桜が起きてしまった。

寝ぼけ眼を擦りながら起きました桜が、俺とマッシュを見てきたと

ってきた子犬、という訳ではないが。似たような感じがある。仕事

に行ったら拾

って来たのはマッシュだった。大慌てでロマニを呼びに行こうとしたマッシュを呼び止める。白衣姿の可愛いマッシュ、眼鏡を掛けていると文系優等生の後輩みたいで可愛い。まあ後輩と言っても十歳の年の差があるんですが。きっと

ロマニには「何時間か後には連絡入れてるから」、「そうなんですねか？でしたら寝ていた方が…」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」。

と、マッシュが大きな声出すから桜が起きてしまった。

寝ぼけ眼を擦りながら起きました桜が、俺とマッシュを見てきたと

ってきた子犬、という訳ではないが。似たような感じがある。仕事

に行ったら拾

って来たのはマッシュだった。大慌てでロマニを呼びに行こうとしたマッシュを呼び止める。白衣姿の可愛いマッシュ、眼鏡を掛けていると文系優等生の後輩みたいで可愛い。まあ後輩と言っても十歳の年の差があるんですが。きっと

ロマニには「何時間か後には連絡入れてるから」、「そうなんですねか？でしたら寝ていた方が…」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」。

と、マッシュが大きな声出すから桜が起きてしまった。

寝ぼけ眼を擦りながら起きました桜が、俺とマッシュを見てきたと

ってきた子犬、という訳ではないが。似たような感じがある。仕事

に行ったら拾

って来たのはマッシュだった。大慌てでロマニを呼びに行こうとしたマッシュを呼び止める。白衣姿の可愛いマッシュ、眼鏡を掛けていると文系優等生の後輩みたいで可愛い。まあ後輩と言っても十歳の年の差があるんですが。きっと

ロマニには「何時間か後には連絡入れてるから」、「そうなんですねか？でしたら寝ていた方が…」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」。

と、マッシュが大きな声出すから桜が起きてしまった。

寝ぼけ眼を擦りながら起きました桜が、俺とマッシュを見てきたと

ってきた子犬、という訳ではないが。似たような感じがある。仕事

に行ったら拾

って来たのはマッシュだった。大慌てでロマニを呼びに行こうとしたマッシュを呼び止める。白衣姿の可愛いマッシュ、眼鏡を掛けていると文系優等生の後輩みたいで可愛い。まあ後輩と言っても十歳の年の差があるんですが。きっと

ロマニには「何時間か後には連絡入れてるから」、「そうなんですねか？でしたら寝ていた方が…」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」、「問題ないとさ。起きても」。

と、マッシュが大きな声出すから桜が起きてしまった。

寝ぼけ眼を擦りながら起きました桜が、俺とマッシュを見てきたと

ってきた子犬、という訳ではないが。似たような感じがある。仕事

に行ったら拾

って来たのはマッシュだった。大慌てでロマニを呼びに行こうとしたマッシュを呼び止める。白衣姿の可愛いマッシュ、眼鏡を掛けていると文系優等生の後輩みたいで可愛い。まあ後輩と言っても十歳の年の差があるんですが。きっと
ふるふると首を振る仕草は眠たげだ。このまま寝ておくかと柔らかく言うと、桜はこれにも首を振る。

「なんか、出会った頃のマシュの妹みたいだな」

一瞬、桜は複雑そうに目を伏せた。ああ、デリカシーが無かった。

実妹の遠坂の奴を思い出しってしまったのかもしれない。
しかしそ吐いた唾は飲めない。それにマシュは目を輝かせていた。

霧囲気が似てるからな。二人には同じ後輩属性を感じる。ほら、
期待に輝くマシュの顔に桜は一瞬考えて、横に首を振った。おお！
桜の奴マシュを気遣った。空気を読んだぞ。マシュは満面に笑みを浮かべて桜の許に駆寄り抱き締めめた。

「よかったなぁ」
「よかったぁ！ やりました先輩！ 私に待望の妹が出来ました！」

「やったぁ！ やりました先輩！ 私に待望の妹が出来ました！」

ほろりと涙が出そう。それぐらいはしゃいでいる。しかしこなんだ、
空元気っぽい。マシュも俺の事情を知ってしまったからなのか？その話題は避けた方がよさそうだ。
「桜ちゃん、わ、私の事は、お、お姉ちゃんと呼んでくれてもいいんですよ？！」
「はい！」「むっ」
「桜ちゃん、わ、私の事は、お、お姉ちゃんと呼んでくれてもいいのでは？」「…お姉ちゃん？」
「はい！」「むぐっ」
ぎゅぎゅうにマシュマロバパイに顔を埋められる桜。
人情の中に、仄かに朱が差している。麗しきかなほのぼのしていると、不意に遠坂さん家の凛さんが
ないどころか、何となく嬉しそうな、照れてるような表情だ。無表
情の中で、仄かに朱が差している。
麗しきかなほのぼのしていると、不意に遠坂さん家の凛さんが
無表情の中、仄かに朱が差している。麗しきかなほのぼのしていると、不意に遠坂さん家の凛さんが
助走をつくって殴り掛かってくるイメージが去来した。
イメージの中で負けない。イメージの中で負けないという使命感
に駆られた。ふと唐突にサーヴァントを召喚しなければならないという使命感
に駆られた。ふと唐突にサーヴァントを召喚しなければならないという使命感
に駆られた。ふと唐突にサーヴァントを召喚しなければならないという使命感
に駆られた。ふと唐突にサーヴァントを召喚しなければならないという使命感
に駆られた。
冬木の聖杯はダグザの大釜化決定なので奮発して歓迎会兼祝勝会
と酒落込もう。
ああ、飯作ろうと思ってな。折角だし、桜のリクエストを聞こうと思って。マシュはなんでもいいとか言わないし……な。「うっ」
だって先輩の作るもの、なんでも美味しいんですもん。と、唇を尖らせ言い訳するマシュ。うん、この感じ、来ますな。と思ったら本当に来た。桜を抱き締めたままのマシュを伴い、扉を開けて廊下に出た瞬間、白いモコがマシュに飛び付いてきた。プーティーである。フォウは桜という新顔に気づき、鼻を寄せると「そうだね」と言うように鳴き出した。と桜は危なかっしゃいからなし。フォウ君が付いてくれたら安心だ。「間桐桜って子だ。マシュの妹分だから、仲良しひやってくれる」「おう、なんかし振りに感じるな、フォウ君」マシュの体をよじ登り、肩の上に落ち着いた小動物に微笑む。すっかりいったかいな。「うっ、フォウさん！？」「ふおっ！」マシューに飛び付いたフォウ君。「おう、なんかし振りに感じるな、フォウ君」桑はさみしがり屋でもあるし、フォウ君がいてくれると助かる。「ひいきゅう、ふおう！」少しだけおけと言わんばかりに、フォウは桜の頭に飛び移った。少し揺れる桜の頭。不思議そうにする桜の頭をテシテシとフォウが前肢で叩いた。
気に入ってくれたみたいだ。小動物と幼女、組み合わせ的に最強である。

「先輩、先輩のお料理、勉強させてもらっていいですか？」

「はい。……いいぞ。」

「本当ですか？」

「本当だ。」

喜ぶマシュ、可愛い。うーん、父性大爆発だ。というかマシュを連れていくのはいいが、桜もついに来ただろうし……すると自動的にフォウまで来てしまう。

人数分のエプロンと給食着を投影し、マシュと桜に渡す。着替えてもらうと、フォウにはビニール袋を着てくれるように頼んだ。

流石に動物のモコモコした毛は気になる。料理の道を志す者を陥にする訳にはいかないから、ついてくるならフォウには我慢してもらわねばならない。

「……これは……」

フワが嫌そうに顔を覗めるも、仕方なくそれに許諾した。着付けを手伝ってやると、四肢と顔だけがビニール袋から露出した姿に変わる。
桜が自発的に喋った事に、思わずフォウ鳴きしてしまう。すると
フォウは真似をするの禁止とばかりに顔面に体当たりしてきた。
しかし無垢な少女と幼女に撃ちられ悪い気はしなかったのか、不機嫌そうだったのが得意気になっていった。現金な奴や。

「士郎さん……わたし、しちゅーが、食べたいです」
「お。了解。よく言ったな」
「……」

料理とは、戦う事と、見つけたり。衛宮士郎、心の一言。季語な
し。
さって、厨房である。アルトリア達は凄まじく嘆きながら、あの二人で二十人は作らねばならないだろう。二人に下準備を手伝ってもらうならから、料理の手順を伝えていく。本当ならフォワは立ち入り禁止だが、今回だけは大目に見る。桜にはフォワが常についているといった刷り込みがしたい。何故ならデミ・サーヴァントになるとは、この海の衛宮と言われた俺の目でも見抜けなかった。なってしまったものは仕方ないが、なるべく誰かついていないといけない。その点、フォワはしっかりしているから付き人…付き黙？にしていたら安心だ。

流石に作る量が多いから時間が掛かる。マッシュが桜と共に席を外した。アーチャーの奴の再召喚に立ち会うらしい。これは俺の事情について聞きに行かなと察するも、好きにさせ。暫く一人で調理する。

そうえば、桜はマッシュに連れていかれてしまったが、桜と厨房に立ったのはいつ以来だろう。俺はあの時から十歳年を食い、桜は十歳若返っているが…懐かしい。昔、桜は中学生だった時、桜に料理を教えていた頃の記憶が甦る。望郷の念を抱いてしまった。何故ならそれだけが懐かしい。桜が桜と戻ってきた。希望をそうしてしんみりしていると、マッシュが桜と戻ってきた。希望を、何も言わずにお髪を撫でてやり、何事もなかったように料理の教示を再開した。
初心者には難しもないが、一度で全部を覚える必要はない。戦料理いをはじめて、何時間かが経った後、来客が来た。アーチャーはフウォウを見るなり激怒する。気持ちは分かるが落ち着け、桜の為なのである。しょかし説教モードに入りそうなので、有耶無耶にしれて出そう。丁度ここらも終わった事だし、サーヴァンを三騎追加召喚に向かうとする。アーチャーを強引に連れ、召喚ルームに向かった。そこです、俺のギャ運が炸裂する事に知らず。
聖杯のキミ達とエミヤなオレ達

魔力が満ちる。英霊召喚システムは絶好調。
この後に控える小言の雨霰は全力で無視する存。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか」
「間違いない別の意味の鬼が後で出るが」
アーチャー、それを言うな。かんかん怒り狂うアルトリア達の姿が目に浮かぶ。
赤い弓兵の皮肉を聞き流し、召喚サークルに現界するサーヴァンの姿を指し示した。

ともあれ俺のガチャ運をお前に知らしめるいい機会だ。とくと見ろ、俺に外れ箋はない。
そして、三騎のサーヴァントが姿を表す。霊基パターンは、確かに三騎ともがキャスターだ。

「おっ、わわわ！なになににに！？いったい今度は何事ー！！？」
「イリヤ、下って！謎の光が、突突然…！」「あらあら…大にぎわいね？」見覚えかない冬の少男と、黒髪の少女、そして冬木でまみえたばかりの、冬の聖女の生き写しだった。「――ほら見ろ、これが俺のギャ運だ」遠い目をし嘯くと、エミヤは頭を抱えた。

沈黙の帳が落ちた。
俺も小学生的頃に着ていた、覚えのある制服姿の二人の小學生

女子と、これから覚えしかねる天の衣を纏った女性。

頭を抱えていたアーチャーも、その容姿を識別するや驚愕に目を
開いていた。

対し、幼女達もまた固まっていた。想定外の、唐突な事態。見知
らぬ部屋。警戒心も露に周囲に視線を走らせ、眼前の男達に焦点を
結びって固まる。え？と輕い少女の声を漏らし、黒髪の少女も限
界一一杯まで目を見開いている。

驚愕する気持ちは、俺も同じだった。心臓が強く脈打つ。早鐘の

天の衣の女性、アイリスフィールはともかく、白い少女に関しては
他人の空想だれもに言い聞かせる。あの義姉には英霊に至るほ
どの歴史はない。

琥珀色の瞳の少女と、二人で一組のサーヴァントなのかかもしれない
い。そういう者も中にはいるだろう。だから、うん…彼女達の後
背辺りに浮遊する、某愉快型の礼装は幻影だ。黒髪の少女にお
呼びしたんだから二人一組は有り得ないとか思わない。

呼びかけたのは、彼女達が事態なですと。まるで俺達が呼ぶこと
が筋か。

すまないが、君達は…いや、違うな。まずは俺達から名乗るの

事態なですよ！余り刺激するような事を言わないでください！

おお！未成年者略取の容疑者に筋を通すとは！

姉さん！余り刺激するような事を言わないでください！

この方達が危険人物だったらどうするんですか！
名乗りを上げるのは、普通はサーファーだ。
が、どうにても二人ほど混乱していよう見える。
明らかにイレギュラーが発生していようのだから、このところ話かけきれない。
「だがその前に、君達はどんな状況か把っているか？」
『このスルーぢから、ただ者じゃあせんね！て、あれ？ここの方…』
「あ、え…そ、その…ってマッスル！？なにその格好！？なにでマッスル―」
「イラヤ、少し静かにして…はい。出来てない。それで、貴方達は…」
アイラフィーは白い少女をキラキラで見ていが、流しに空気を読んで何かをしやろうとしれないだろう。
「そしで白い少女は未だに混乱ぎみだ。それでこれよりも比較的冷静な様子の黒髪の少女は、歳の割に落ち着けている。大きもちので、もう一人の少女を庇うように半歩前に出ていった。」
目と目が合う。琥珀色の瞳と、琥珀色の瞳が。少女は微かにその

目を揺らした。動揺している？さて、何に対してか。身長差が激

しいから怯んだのかもしれない。そんな風に気を遣う。

此処はカルデア。人理の完全な焼却を防ぐ為、人理を破壊元の為

に戦う人類救済の最前線だ。そしてこの赤いキザ野郎は俺のサー

ヴァントの一人でクラスはアーチャー。

誰が赤いキザ野郎だ。貴様も赤いだろう。

黙れガンゴロ。顔が厳ついんだよ、見せ筋が。

貴様……。

筋力Dが凄むな。ランサーけしかけるぞ。

虎の威を借りる狐か貴様は！オレと同じ体型でばさくな……！

ビキビキと青筋を浮かばせ、顔を押し付け合い至近距離でメンチ

を切り合う。

唐突に陰悪になった男達に、白い少女があわあわとして。アイリ

スフィールは微笑ましように見ている。しかし黒髪の少女だけは、

心配に出したように顔を強張させていた。
あま肉体的には同一人物だからな。そっくらさん見ても仕方
ない。というかそっくりさんどこか完全に双子何か見え
る。気を取り直し、自己紹介する。

話を続けるぞ。俺はカルデアのマスター、衛宮士郎。二十八
歳だ。

君達は〜

ええええ！？！？お、お兄ちゃん！〜

うそ〜お兄ちゃんなの〜？

〜は？お兄ちゃん〜？

二人の少女の絶叫に、目が点になる。

お兄ちゃん〜？いやいや、そんなまさか。愕然とする二人を
訝しむ。が、流石に現実逃避も無理が出た。俺は嘆息し、腹を搾り、

〜キミ、名前は？もしかして、イリヤスフィール・フォン・アイ
ンツベルだっただけるか〜

〜ひえっ。わたしの名前〜？や、やっぱりお兄ちゃん！

っていうかなんで二十八歳！？

なににわたし達今度は十年後の世
界に来ちゃったの〜！？
目が点になるテンション。俺の知るイリヤとはあまりに違う、年相応の天真爛漫さ。思わずアーチャーの方を見る。アーチャーも俺を点にしてい。よかっ、俺の記憶がおかしいわけではなかっ、らしい。

表情の賓しむく。わたったと手足をばつかせる様は、どう考えてもあの愉快犯的な小悪魔属性を持つ妹、もとり義姉のものではない。俺はこめかみを揉む。どうすればいいのか考えた。すると、イリヤらしさき少し女がズビシッ、と擬音付きで人差し指を突きつける。

「う、嘘だっ！だってお兄ちゃん、そんなに身長高くないもん！こんなカッコよくないもん！髪白くないもん！そんなに筋肉ついてないもん！」「いやー、どうやら嘘じゃないと思いますよイリヤさん。生体反応がほぼ完全に一致しています」「嘘でしょう幾乎！え！？本物のお兄ちゃんだわ！いじなかった、うえええ！？」

嘘でしょ遠坂……なんかこの杖、幻覚じゃないらしいんですよね……
甘いな、俺なんてトラウマなんてもの―腐るほど有りすぎたな

記憶が磨耗しているが、それでも忘れられないトラウマでもあるの。

甘いない。俺なんてトラウマなんてもの―腐るほど有りすぎてな

の子だもん…。

「よし！」

切り替えている。左右の掌を打ち付け合う。場が混沌としている時、交互に喋っていたのではどうにもならない。順番に認識と知識を交換するのが最善だ。

俺が手を打ち鳴らしたのに、びっくりするトリヤ達。俺は気を引

『カレイドステッキだな』

『おや？私の事をご存知で？』

遠坂のバカと色々あってな。あの時は笑わせてもらーごぼん。

大変な目に遭わされた。だからお前の啓り口、性格、全て熟知して

言い継め直す。そして釘を指しておくのも忘れない。

あはばー。そんな事が貴方に出来る訳がーって「破戒すべき全

ての符」？？？投影出来るんですかこの世界の土郎さんは！？

黙ってろ。せめて今だけは―

黙って。話が終わるまでだ。

訂正。話が終わるまでだ。
この土郎さん、出来る……！

影した『破戒すべき全ての符』をチラ見せて、投影を解除する。イリヤは俺の投影にまた大騒ぎしそうだったが、ともかく。黒髪の娘は寂しげにして、投影を解消する。

「あ」

小さい子のあやしがはお手のもの。俺はその子の傍に膝をつき、目線を合わせて微笑んだ。そっと手櫛で髪を梳いてやる。

「君の名前は？」

「み、美遊です……美遊・エーデルフェルト……」

黒髪の娘は寂しげにして、少なからず落胆したような……。

「え」

お、お兄ちゃん？で、いいのかな……？ええっと、暫定お兄ちゃん！美遊はお兄ちゃんに似たお兄さんがいるってだけだよ！

イリヤの言葉に目をばちりさせる。アルトリア顔ならぬエミヤ顔が平行世界には沢山いるのだろうか？なんて悪夢だ。

しかし、美遊と名乗った娘は小さな声で何事かを呟いた。「……そ

れに、俺は口許を緩め、ワシラシと頭を撫で付けた。
分かった。よろしく、美遊。俺の事は好きに呼べ。お兄ちゃん。

苦笑いし、立ち上がる。さて、と呟いて間を置き、空気を変えた。

気遣い感謝する。まずは貴女だが、真名とクラスを教えてくれ。

差し支えなければルーツも差し支えなければルーツも。

ええ、了解したわ、マスター。

真名はアイリスフィール・フォン・アイリスフィール・フォン・アイリスフィール。

大聖杯に還った端末が分霊としてサヴァント化したものです。

カルデアの召喚システムはガバガバだからな。そういう事もあれば、何かなる……。
実際の冬木にいたどの世界線のアイリスフィールも、他人である。カ
ルデアにいると忘れそうになるが、サーウァントはそういうものの。俺の
事を覚えているエミヤ、アルトリア、ク・フリンなどが異例なのである。
例えば、仮初めのサーウァントだと言ったのは、彼女が聖杯だからだろう。
実質、俺やカルデアへの魔力負担はないと言える。極めてエコな能
力だ。

アイリスフィールさん。貴女の宝具は？

真名は「白金杯よ、謎よ。ランクはＢで種別は魔術宝具。
最大で二十人ぐらいしかね、効果範囲に含められるのは」

効果は？

私が神と判別した人の傷、疲労を回復して、バッドステータス
を全解除する事ね。あ、あと火傷とか呪いとかの持続するダメージ
の類も解除されるわ。霊核の欠片でも残っていれば、戦闘不能状態
となったサーウァントの復活も可能よ。

……

……

ちからとアーチャーを見た。
どうだ俺のガチャ運は。生粋の幸運Eであるアーチャーには縁の心を読んだ、だ。いや、それはいい。
俺は三人に向かって、食事に誘うことにした。

「イリヤスフィール達の事を考えなければなる」
こんな所で立ち話をなんだ、食堂に行こう。急いで話ししてもイリヤと美遊には難しい話かもしれない。ゆっくり事情を説明する、その後に、君達の事情を教えてくれ。

「ご飯！？お兄ちゃん、もとど定あるちゃんが作ったの！？」
そうだろう、イリヤ。あの部屋に呼んでくれ。暫定とかつけていていいから。ああ、それから味の方は期待して欲しくて、家族料理の域を出なかった十年前の俺とは違うという事が分るぞ。

「女の子、マスターは」
女らしさね、アリスは。
頬を染めている美遊に、アリスフィールが苦笑する。
「なぜ？子供らしき間違いだろ－」

それでも子供に好かれる事に定評のあるお兄様なんだ。断じて女
たらしではない。寧ろ子供以外は、厄介なのばかり寄ってくるから
困っているぐらいである。

女難の相、割と命に関わる事案ばかりなのは本当に勘弁してほし
かった。

－あ、そうだ。アイリスフィールさん。
あのさあ、ウチ、切嗣って奴がいるんだけど、会ってかい
か？－

「いけど……どうしたの？」

－あのね、いいね。悪いねえ……。

－外道が貴様……。

－いいけど……どうしたの？－

－あのさあ、ウチ、切嗣って奴がいるんだけど、会ってかい
か？－

－ええ？いいねえ……。

－ああこ、ウチ、切嗣って奴がいるんだけど、会ってかい
か？－

－ああ、そうだ。アイリスフィールさん。
アイリさんって呼んでいい
か？－

－あ、そうだ。アイリスフィールさん。
アイリさんって呼んでいい
うん、色々言いたい事はあるけど、この際それは横に置いとこう。君がそんな奴だって事、知ってたはずなのに油断したボクらが悪い。

所は食堂である。何故か魔術王に変身しているロマニの怒気に、ドキッとしました。おやおや、私は何か、彼らを怒らせるような事をしたっけ？

そうだな。またワケワからん面倒事引っ張って来やがったし、こ
りゃあ、なぁ？

クー・フーリンが呆れながら、半笑いで肯定している。おーい、俺の槍なんですよ貴方。

「ランサー、確か貴様……シロウと賭けをしていたな」

「おう」
「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ」

「お、そうだね。士郎くんにはそろそろお灸を捜さなきゃって思っていたところさ。
事が履行される事になった。
土郎くんの足跡（前）

問題です。自分の過去を聞かれるのではなく、視られるとなると、俺は逃ぎ、俺の口から簡単に過去の出来事を話す程度だと考えていた。しかし、ロマニによる記憶の映像化が成され、霊子演算装置・トリスメギストスによる事象分析・解析によって、俺の記憶の偽りを変える点で俺の姿を見る事が出来るようになっていた。まるでアトラクション屋の映画。最悪である。なんてこったと頭を抱えた。「うわあ……」

「万能である私をしてドン引きだよ土郎くん」

お子様方に見せられないグロとかあるから、映像の編集の為に一足先に俺の過去を早送りに視たロマニとダ・ヴィンチが引
「女性」
ソモの方も百戦錬磨とか、とてもじゃないけどエリカを生かそうとする意思がなければ
何回死んでもだろう。死徒さながらの生き活さだった。

違うのだ。俺にだって性欲もあるんだ。慕ってくれる女性に誘惑
されて我慢出来るか？ 寛らよく我慢していたらだろう。
俺の返しにロマニは怯んだ。自分には確かにいう資格がない。
思ったのだろう。実際はそんな事ないのに。だが突っ込んだ男、ダ・ヴィンチは
事は有り難いので訂正しない。しかし流石に万能ダ・ヴィンチは
怯む事なく呆れた様子で反駁した。

思わず声が小さくなる。

待て。現地妻ってなんだ。合意の上だし合法に決まってるだろ。

「そりゃあ、一人や二人ならまだ分かるよ？ でも何さ、古い友
人始まって戦場で出会った執行者、世界各地の女性、慕ってくれ
た妙齢の女性を現地妻にしてるって……愛多き男って言ってもこれ
はない。幻滅だよ士郎くん。」

「あとその記憶映像は編集してくんだ。」
「当たり前だ、こんなのが見せられるもんか。でも騎士王様達には告げ口しちゃう」
「やめる。やめてください」

最悪だ。軽薄な軽派男と思われたらどうしてくれる。誤解だ誤解なん。断じて無理矢理とか有り得ないし、というか向こうから迫ってくるし場の空気に呑まれたのだ。それにおアルトリアとはあの丘で別れた。死別して、二度と会えないと思っていたのだ。だから浮気じゃないか？新たな出会いに直で在り続けただけです。

ダ・ヴィンチは不意に、ニヤリと笑った。
「士郎くんの弱味ゲットおお。さ、暇があれば私に例のチーズを進呈したまえ。それを口止め料にしてあげよう」
「分かりました」

この件に関しては全面降伏である。多少の労は惜しまない。しかし思うのだ。プライバシーを破壊されるのだから、大目に見てくれてもいいのではないか。と。いやまあ、大目に見たから好物であるチーズで勘弁してくれるのだろうが。
二時間後。所変わってシミュレーター・ルームである。

ここに土郎の記憶映像を再現し、四方八方の空間に記憶の中の世界を具現化するらしい。

作業早すぎませんかと土郎は思ったが、カルデアの設備と魔術王、万能の人が揃えば人間一人の人生を丸裸にするのに、本来は十分と掛からないらしい。寧ろ二時間も掛かっただけの事に驚嘆に値するとか。

「先輩の過去……を、覗き見、ですか……な、なんとかイケナイ事をしている感じがします……」

マシュ、そう言うのなら、そのワクワクした表情を隠してから言ってくると、土郎の目は言っていた。そして深々と嘆息し、ひらひらと手を振ってシミュレーター・ルームを後にする。

「シロウ、どこへ？そう言うアルトリアに、土郎は肩を竦めた。
何が楽しくて自分の記憶を自分で見るんだ。五時間も、と。
あー、イリヤちゃんだっけ？土郎くんの人生矢鱈と濁くさえ、これ以上短く出来なかったんだよね。

イリヤの叫びに、ダ・ヴィンチは苦笑して答えた。あ、トイレ休
二時間半後に入れるよと、半笑いで言った。
そして立ち去る士郎の背中にダ・ヴィンチは声を掛ける。「この二時間と少しのウチに、アグラヴェインが彼女達の世界に関する事聞き出して資料に繰めてらしいから、暇なら目を通しといてね」と、士郎は後ろ手に了解と告げ、そのまま姿が見えなくなる。扉がスライドして閉まった。

 inici...'

現時点でドン引きするイリャと、深刻な顔をする美遊。観客へ...'

英霊エミヤも、隅の方で腕組みをして立っていた。特異点Fにて一度、垣間見えたとはいえ一気になるのだろう。平行世界の自分が辿った道が、切嗣は本来、こんな所に来たくもなかったのだろうが、アイリスフォールに捕まって、腕を絡められ彼女の隣にいる。赤いフードで顔を隠してはいるが、アイリスフォールへの困惑と、面倒臭そうな雰囲気は隠せていない。
しゅうが、用意された椅子に座った。流石に何時間も立ちぱなしではいられないだろうという配慮だった。ロマニはいなない、彼は多忙だから ─ ─ ではなく、既に早送りとはいえ一部始終を視ている。仕事に移っていた。

「それでもあ、はじめるよ」ダ・ヴィンチが自身の杖を軽く振るう。辺りが一気に暗く、赤くなった。炎の中を、赤毛の少年が歩いている。士郎だ。ふらふらと歩き通し、助けを乞う声に耳を塞ぎ、あてもなく彷徨っている。一目で、この少年が士郎なのだとの目にも分かった。この子だけでもと、瓦礫の下から子供の骸を出し、死んでている事にも気づかぬまま助けを求める誰かの親がいる。自分が助かる事だけに精一杯で、それら全ての声を默殺して ─ ─ 少年はお風呂に歩いていた。罪悪感に満れそうになりながらも、しかし、少年の目は死んでいない。お父さん、お母さん ─ ─ 諫言のように両親を呼びながら、流れそうに
な涙を堪えて、足を引きずりながら必死に歩いていた。空に穿たれた黒い孔を見上げ、歩く。歩き続ける。やがて少年は限界を迎ええた。全身を燃やされながら歩いていたのが、その小さな体が倒れ伏す。

「生きてる！生きてる！よかった、生きている！」ありがとう、ありがとう！！

少年を救い出したのは、衛宮切嗣だった。お父さん…？イリヤが呟く。見る事もないほど必死な、自らの実の父を見た。そして美遊も、見た事がない養父の姿に呆然とする。少年は、自身の手を掴む男を見上げ、安堵の溜め息を溢した。ありがとう…。その意思は、心は壊れていた。

「割って入る。」切嗣に憧れた少年は、なんで彼の真似をしたかが、同じ魔法を教えてくれようとせがむ士郎に、漠々応じる切嗣だが…士郎の異質さに気づく。そして、その才能が災いを媒す事を危惧し、わざと誤った鍛練方法を教えた。全く実を結ばない方法を。これならきっと諦めてくれるだろうと、切嗣は楽観したのだ。
場面が変わる。まだ高校生だった剣道少女、藤村大河と出会った。
実の姉弟のように仲良くなった二人は、君が込めていた切嗣を振り戻してよく遊びに出掛けていた。
士郎は切嗣を父とは呼ばない。ジイサン、切嗣と呼ぶ。父親の名前も、母親の愛も、親しかった友達の事も覚えている。彼らの事はなかった事に出来なかった。それに——養父を、父と呼ぶのが照臭かった。
切嗣は切嗣を父と呼ぼう。ジイサ、切嗣と呼ぶ。士郎はそれを、偶然聞いた。
切嗣は頻繁にどこかへ旅立って。一人になると嘆く。イリヤ、と。
切嗣は誰だよと訊く。切嗣は慌ててなんでもないと言うも、士郎はしつこかった。何度も諦めるにつけ、遂に切嗣は折れてこう答えた。
『え、姉……？』

士郎。イリヤというのはね、僕の娘なんだ。

『はあ？』

君の、そうだね……姉だ。そんなか会いに行こうとしてるんだけと……中々会えなくてね。

『士郎。イリヤというのはね、僕の娘なんだ。』

『え、姉……？』

『なんてだよ。』

『なんでだよ。』

『なんと妻がいた。その妻の家が、娘に会わせてくれないんだ。』

『なんでだよ。』

『妻がいた。』

『なんでだよ。』

『なんと妻がいた。その妻の家が、娘に会わせてくれないんだ。』

『なんでだよ。』

『妻がいた。』

『なんでだよ。』

『なんと妻がいた。その妻の家が、娘に会わせてくれないんだ。』

『なんでだよ。』

『妻がいた。』
父娘を会わせないって、なんだよ。どうにかならないのか、それ。
うん……どうにか、したいんだけどね。……でももう、諦めるよ。
今の僕じゃ、どう頑張っても辿り着けない。

少年は怒っていた。難しい事は解らなくても、理不尽な何かに怒っていた。不条理な事が、一方的な事が、少年には堪らぬ我慢ならなかったのだ。

……ごめん。そして、ありがとう。怒ってくれて。
「ジイサン！」「コレ！」
「いいんだ。ただ——士郎。君がもし、イリヤに会えたらでいい。
その時は、君が助けてあげほしいんだ。僕の娘を。君の、姉を」
「っ……！もういい！」

嬉しいですね、昔、正義の味方に憧れていた。
「うん」
「それも諦めたのか」

何年か前の、娘の事を話したのを士郎が覚えていると察して、切
嗣は薄く笑う。僕の老人の笑み。実年齢からは考えられない。

偽に侵されていくのが誰の目に明らかだ。終始嘘やかに、正義の味方については、切嗣は語った。期間限定の存在を、大人になってしまい求める続け、その理想に潰された。切嗣の独白に、赤いフードの暗殺者は無言だった。

始穏かに、正義の味方について、切嗣は語った。期間限定の存在を、大人になっても追いかけて行くのが誰の目にも明らかだ。

その後、少年が言った。

『なら、俺が代わりになってやるよ』

『え？』

『ジイサンは歳だから無理でも、俺ならなんとかなるだろ。任せて、ジイサンの夢は俺が叶えてやるから。姉ちゃんだって、俺が助ける。な？安心できるだろ』

しかし、少年の言葉に。切嗣は眠るように息を引き取った。

その静かなる夜、切嗣は眠るようにに息を引き取った。

月を見上げる少年は、養父の死に気づかず、一人嘆いた。

『ああ…安心した』

『いい夢見ろよ…父さん』
切嗣の死に気づかないまま、照れ臭そうに切嗣を父、はじめて呼んだ少年に、マシユが目頭を押さえる。そして、葬式が終わった。士郎は人目も懸らず号泣していた。大河もそれに釣られ、幼子のように泣きじゃくった。

中学生になった士郎は、正義感に突き動かされるまま、弱者の味方となって喧嘩を明け暮れていた。不良のレッテルを貼られ、周囲に煙たがられても、在り方を変えなかった。

間桐、その名に桜が反応する。間桐、彼の名に桜が反応する。間桐慎二と名乗った少年が、それが見えていなかったのだろう。間桐慎二と名乗った少年が、気紛れだったのかかもしれない。或いは彼なりの正義感だったのか。

何やってんだか。オマエ、馬鹿だろ。

何やってんだか。オマエ、馬鹿だろ。
は、晴れやかな笑顔だった。

「すまん、慎二。いつも助かってるよ。」

「謝んな馬鹿。オマエ頭は悪くないんだからもう少し要領よくやればいいだろ。」

「それは出来たらいいんだけど、無理だな。無理だから弱っていたんだ。」

「そうかい。今後とも尻拭いよろしく。」

「いや、こっちの話さ。んじゃ、今後とも尻拭いよろしく。」

「ふさけんな。もうこれ以上衛宮みたいな馬鹿の面倒見らんないよ。それよりオマエ、体力有り余ってんなら部活でもしたら？」

「部活？あ、高校入ったなら。今更俺が入ったって、どこも困るだけだろう。」

「ま、それもそうか。不良扱いはなくななくても、敬遠されているもん。」

慎二は断固として否定するだろうし、土郎は首を捻って悩むだろう。

士郎が高校進学後、弓道部に入ったのはこの時のやり取りがあったからだ。

二人の少年はよく歩んでいた。親友、と言えるのかかもしれない。

慎二は妹を士郎に紹介した。どんくさい奴だし、オマエ暇だろうし、僕が部活でいない時ぐらい面倒見としてくれよ。貸し返すと思って。
間桐桜を出す……

目的死んだ、暗い少女だった。士郎は慎二の頼みだからと安請け合いつ。慎二と士郎、そしてその間に桜がいた。次第に笑顔を見せるようになり、いくつ桜に好くならない。

やがて桜は、士郎の屋敷に通い詰めるようになる。慎二も週に二回は必ず顔を出して、夕食を士郎に押し付け、大河を合わせて四人でご飯を食べた。

高校に進学してきた桜を弓道部に迎え、一年の頃から弓道部を続ければいた士郎と慎二は桜を歓迎した。

しかし桜は先輩の女子から陰湿な苦めに遣い、士郎は男女平等拳を握り込む――のを慎二が押さえ、苛めの加害者の上を行く陰湿な手で加害者を部から追い出した。かからの悪い少年を四人連れてきた女先輩が直接的な仕返しに来た時は士郎が出張ると、壮絶な殴り合いの我慢比べで、四人の少年を相手に粘り切り、相手を根負けさせた。

高校二年生の冬の時期だった。

高校三年生にもなって、恥ずかしがもなく言い放った。
馬鹿だなと慎二が嘲笑する。しかし、そうの裏にある親しみを知る。

桜が心配する芽生えた好意が、士郎を詰めとする。慎二是桜に辛く当たるようになる。

士郎はその訳を聞き出すようとするも、慎二は士郎を避けた。

それから暫くして、ある時。バイト先で腕を火傷した士郎は、慎二に弓道部を退部するよう迫られ、醜い火傷の痕を周囲に見せると、慎二なりに心配しての悪態だと理解したのは、桜と士郎だっただ。

けっどっと、慎二は弓道部を退部するよう迫らせる。

未練はあっても、後腐れはなかった。

魔法の鍛錬、筋力トレーニング。ジョギング。座学。やれること、やれること是山ほどある。

将来は警官になるのがいいと、士郎はぼんやりと将来のビジョンを定めていた。

がて冬の風が辛くなると、士郎は奇妙な少女を見掛ける。

「私…」イリヤが呟く。

それは紫のコートを纏った、雪の妖精のような少女だっただ。

無垢なイリヤとは異なる、不思議な雰囲気の少女は、士郎の脇を通り抜けて。

ふと背後を振り向くと、その少女の姿は消えていた。
首を捻る。気のせいか？と、再会まで、長い時は掛からない事
を、イリヤと美遊は予感する。

ある日の朝、遠坂凛と出くわした。朝、早いんだな。なんとなし
に、すれ違い様に士郎が言うと凛は目を瞬いていた。

後で、慎二が廊下の向かいから、士郎に声を掛けてきた。

日、弓道場の掃除代わりにやってくれ、との事。暇だろう、僕は
忙しいうちから懇むよ。そんな理屈にもならない横柄な態度に、士郎は
笑った。

んと話し掛けてくれたな。

それは、お前の仕事だろ。大体俺はもう弓道部は辞めたんだし、代
わってやる訳ないだろうが。でも手伝いぐらいはしてやる。来いよ。

慎二の腕を掴んで、士郎は無理矢理慎二を弓道場に連れて行った。

文句を言いながらも、慎二は仕方なく掃除を始める。外が暗くな
る頃、士郎は雑巾掛けをしながら話しかけた。

あり？お前の、キモいなあ。

慎二が。だってさ、本当は俺と話す切っ掛けが欲しかったんじゃ
ないか？だからあんな態度で話し掛けてきた。男のそれ。

慎二。

ああ、？誰がキモいだって！？

さあ？何だよ！？僕の話聞いてたか！？忙しいって言っただろ！

では、慎二。

前、キモいなぁ。

なんだ衛宮。

前。

慎二。

慎二が。だってさ、本当は俺と話す切っ掛けが欲しかったんじゃ
ないか？だからあんな態度で話し掛けてきた。男のそれ、キモい
ないか？

慎二。

あり？お前の、キモいなあ。

慎二が。だってさ、本当は俺と話す切っ掛けが欲しかったんじゃ
ないか？だからあんな態度で話し掛けてきた。男のそれ、キモい
ないか？

慎二。

あり？お前の、キモいなあ。

慎二が。だってさ、本当は俺と話す切っ掛けが欲しかったんじゃ
ないか？だからあんな態度で話し掛けてきた。男のそれ、キモい
ないか？

慎二。

あり？お前の、キモいなあ。

慎二が。だってさ、本当は俺と話す切っ掛けが欲しかったんじゃ
ないか？だからあんな態度で話し掛けてきた。男のそれ、キモい
ないか？

慎二。

あり？お前の、キモいなあ。

慎二が。だってさ、本当は俺と話す切っ掛けが欲しかったんじゃ
ないか？だからあんな態度で話し掛けてきた。男のそれ、キモい
ないか？

慎二。

あり？お前の、キモいなあ。

慎二が。だってさ、本当は俺と話す切っ掛けが欲しかったんじゃ
ないか？だからあんな態度で話し掛けってきた。男のそれ、キモい
ないか？
だろ。「誰が衛宮なんて話す切っ掛けなんか欲しがるもんか。自意識過剰なんじゃないの？オマエの方がキモいね。」

「慎二のキモさには負ける。ワカメヘアとかどうなの？頭の軽い女引っ掛けて悦に髪の毛、遠坂に絡んで蹴られるのも、つっこんどのんに一成の奴に毒吐くのも、全然キモい。何より妹に当たる様は見て吐き気がする。」

「あ。、慎二のキモさに負ける。現在進行形で後悔してる臭いけどな。」

慎二は現在進行形で後悔してる臭いけどな。

オマエ、ウザい。そういうこと言っていると、後悔するぜ。

「な、なんだ？」

「お、るか？」

「は？」

首を捻る士郎と、何かを察して顔を青ざませて慎二。士郎は掃除を止め校庭の方に向かう。それを、慎二は血相を変えて止めた。
『一嘘 一嘘 一嘘 一嘘』

『一嘘 一嘘 一嘘 一嘘』

『一嘘 一嘘 一嘘 一嘘』

『一嘘 一嘘 一嘘 一嘘』

『一嘘 一嘘 一嘘 一嘘』
青い槍兵が気配を察知するにせよ、それで充分であった。士郎は咄嗟に背中を向け走り出す。
その際、槍の魔力にあたられ立ちはだかれた慎二を見つかった士郎は駆け寄り、その腕を引いて走り出す。そうしてすぐに直感した。逃げ切れない、二人だとダメだ、と。
小声で叫び、士郎は慎二を自身の進行方向の反対側に突き飛ばした。よろめいた慎二を尻目に、士郎は小石を拾って、自身の向こう方にある校舎の窓に投げつける。窓ガラスが割れた。慎二は悟る、二手に別れたのは、どちらかが助かる為に。そして、士郎は自分が困ってしまったのだ。
慎二は士郎の意図を汲んで、走り出す。だが、見捨てた訳じゃない。 Parenthetical: 「あの、馬鹿……！ 」
「言い訳をした。」
「ライダーゴー」を連れて、すぐ行ってやるから……それまで死ぬな。
必死過ぎて、どこを走っていたのかすら覚えていない。そして、槍兵が追ってきていない事を確かめる為に背後を振り向き、誰の姿も分からず、向かって自分の脇を走るのを覚えていた。

よう、随分遠くまで逃げたな、と。

前方には誰もいなかったはず。慌てて振り向いた土郎の心臓に、真紅の槍が突き刺さった。

「ひっ」

イリヤの短い悲鳴。土郎の胸から槍が引き抜かれ、血が溢れる。

血溜まりに倒れ伏した少年は、遠退く意識の中で、少女の声を聞いて、血を吐き出して―

―その背後から、声を掛けられ

真紅の槍が突き刺さった。

よろめきながらなんとか帰路に着いた。そして、目覚める。死んだけずなのに、生きている不思議に首を

捻り。意識を朦朧とさせたまま、落ちていた宝石を拾い上げると、

帰巢本能だ。それより、何より、落ち着ける場所を欲していた。

暗い自宅の中土郎は自問する。あの男は、口封じの為に襲っていった。

槍兵が追ってきていないうち、土郎はポスターを強化すると、土蔵に向

本能的に危機を察して、土郎はポスターを強化すると、土蔵に向

おとす。もし自分が生きている事を探したら――その時、屋敷に張

られていた結界に反応があった。

槍兵は嘆息して土郎を強化したポスターごと外へ弾き飛ば

したのだ。

勝てるわけがない。そんな事は百も承知だったが、土郎は諦めな

勝てるわけがない。そんな事は百も承知だったが、土郎は諦めな
かっった。決死の覚悟で土蔵へ向けて逃げ出すも、蹴り飛ばされる。

槍を突きつけられる。じゃあな小僧、意外と楽しめたぜーーそう言って、簡単に殺そうとしてくる男へ、士郎は激怒した。ふざけね。

そんな奴に、こんな所で殺されるのか！言っとう、簡単なら殺そうとする男へ、士郎は激怒した。ふざける。

そうして、月下。槍兵を土蔵の外へ弾き返した蒼銀の少女騎士が、尻餅をついていた士郎へ振り返る。そして月明かりを背にした少女が己の運命へ問う。

『問おうーー貴方が私のマスターか』

『七人目のサーヴァントだと…ーー！』

そう、衛宮士郎の運命は、ここで加速した。
士郎くんの足跡（中）

この時を以て、衛宮士郎の運命は確定した。

最も無知な一般人へと戻る事は能わぬ。彼は戦う事を決意した
運命を加速する。槍兵を撃退した少女騎士は、新たにやって来た
二騎のサーヴァントの気配に、警戒の念も露に迎撃する意思を固め
するも、サーヴァントは己の知る使い魔とは結び付かず、聖杯戦争
の事など理解の外だった。

門の前にやって来た赤い外套の騎士を少女騎士は一大刀で斬り
伏せた。赤の少女が咄嗟に己のサーヴァントを司令で霊体化させ
ければ、ここで脱落していただろう。

『待て！』
味不明なまま後戻りできない事態に巻き込まれた事を察していたか

制下された事で不服そうにするセイバー、アルトリア。暗闇から姿を表し、休戦を申し出る遠坂凛。

なぜ、こうなったのか、さらに了解したか賀咲た。

そして、もう一騎のサーヴァントへ、厳しい目を向けたセイバー。

暫しの間を開けて、観念したのか目をバイザーで隠した妖艶な美女が物陰から進み出る。その後ろには、苦しく顔を歪める慎二がいた。

酷く傷ついたようなら、それを隠すような、引き揺れた半笑いの表情だ。何かを懸命に堪えるその表情に、士郎は。

「リンさん…？」「え？」「え？」「え？」

や、違うぞ。
慎二と凛、セイバーはその返しに思わず間の抜けた声を漏らす。

「俺は正義の味方だ。」

「…」

「…」

「…なんだそりゃ。」

ふ、慎二は笑った。肩から力が抜ける。ただの馬鹿だと、自分

の知る衛宮士郎なのだと、慎二は理解したのだ。こほんと凛が咳払

いをする。士郎へ事情を説明する為に、一旦衛宮邸に入る事を提案

した。

そこで聖杯戦争に関する説明が行われた。そして士郎は驚き、憤

りながらも、あっさりと決断を下す。

決めまるだろ。こんな街中で戦争だなんて間違っている。

無関係な人間を巻き込みかねないように、速攻で終わらせなしだら。

聖杯なんか興味もないしな。

決まっているだろ。こんな街中で戦争だなんて間違っている。

無関係な人間を巻き込みかねないように、速攻で終わらせなしだら。

聖杯なんか興味もないしな。

興味もない。

嫌味もない。

まぁ、セイバーも聖杯要るんだっけか。なら戦いが終わった後にお

あり、セイバーも聖杯要るんだっけか。なら戦いが終わった後にお

ああ、セイバーも聖杯要るんだったか。

それを貸せよ。聖杯ならお前らが勝手にしている。
前で話し合って、聖杯を誰の物にするか決めればいい。その後に

聖杯を壊せば万事解決だ。

慎二は呆気に取られ、口を半開きにしてしている。凛がこめかみを揉

みながら言うと、士郎は露骨に嘆息した。

なんで。遠坂、聖杯なんかが欲しいのか？

ならいないわよ。遠坂として勝ちに来ただけだし、私

は……！

凛はもう呆れるやら笑えるやら、微妙な顔をしていった。しかし、

凛はもう呆れるやら笑えるやら、微妙な顔をしていった。しかし、

彼は全く嘘を吐いていない。それに予感があるのだ。コイツは敵

に回したら厄介だ、という。天才的な魔術師である凛が、素人が毛

の不思議な雰囲気に縛られてのものだった。

正常の味方の発言じゃないわよ、それ……

義理はないな！

あ、いや……僕は……あ……ふ、ふん！

オマエなんかに教える

"慎二は？"

"あ、いや……僕は……あ……ふ、ふん！

オマエなんかに教える

義理はないな！"
そうか？どうせそのワカメヘアーをどうにかしたいってだけだろう？
なんてやる！？なんでそうなる！？あと誰がワカメヘアーだ！
で、セイバーは聖杯がほしい。俺は要らない。戦いを他人に被害が出ない内に終わらせたいだけだ。遠坂が勝てばいい、聖杯はセイバーが掴めればいい。
上がりじゃないか？

生で、セイバーは聖杯がほしい。俺は要らない。戦いを他人に被害が出ない内に終わらせたいだけだ。遠坂が勝てばいい、聖杯はセイバーが掴めればいい。
上がりじゃないか？

頭を撫き払、しかし不意に慎二は深々と嘆息した。そして笑う、妖艶な美女──ライダーは、ぼかんとして士郎を見ている。そして懐きが落ちたような表情の慎二を、呆気に取られて士郎と見比べた。

そういえば、その、ライダーだっけ？それと遠坂の──

「アーチャー」な。お前達は何か、聖杯に託す願いはないのか？

「アーチャー」よう。勝手ですね…。

「アーチャー」げ。

「アーチャー」よう。それとも遠坂の──

「アーチャー」げ。
勝手に始まって、勝手に他人を巻き込むような儀式なら、俺が勝手にいけないとってルールはないだろ。あっても、勝手に決めないで押し通せばいい。咎められたから倒れだから、表立っては違反しなければ。

…これだ。もういいよ、ライダー。オマエ、願いなんかアレしれないんだし、僕の願いも万能の聖杯なら片手間で足りるはずだ。遠坂は勝ちたいなら勝てばいい。衛宮は何も要らない。ムカつくかならば、ぶん殴る—それでいいだろ。僕は衛宮と組む。コイツなんだがね。

「ああ本気だよ遠坂。オマエも乗れ、さもなきゃ僕のライダーと、衛宮のセイバーで袋にするぜ。今のアーチャー、セイバーにやられて砕に戦えしないんじゃなか？」

「言われてるぞ、慎二。人の弱味につけこむとか最低だな。

……うっ…最悪……。

言われてるぞ、慎二。人の弱味につけこむとか最低だな。

「ああ本気だよ遠坂。オマエも乗れ、さもなきゃ僕のライダーと、衛宮のセイバーで袋にするぜ。今のアーチャー、セイバーにやられて砕に戦えしないんじゃなか？」

「言われてるぞ、慎二。人の弱味につけこむとか最低だな。

「ああ本気だよ遠坂。オマエも乗れ、さもなきゃ僕のライダーと、衛宮のセイバーで袋にするぜ。今のアーチャー、セイバーにやられて砕戦えしないんじゃなか？」

「言われてるぞ、慎二。人の弱味につけこむとか最低だな。

ああ本気だよ遠坂。オマエも乗れ、さもなきゃ僕のライダーと、衛宮のセイバーで袋にするぜ。今のアーチャー、セイバーにやられて砕戦えしないんじゃなか？
三人で組む。ならまず誰から倒すか、という話をなると、まずは
敵の居場所を掴まねばならないという事になる。
翌日。土郎は霊体化できないセイバーを連れ、学校に平然と伴っ
た。日く編入する予定の留学生が、この学校へ下見に来たのだと。
帰路。士郎は凛と慎二を呼んでそれぞれの意見を言い合う事にし
た。ランサー、キャスター、アサシン、パーサー各。この四騎を
倒すなら、優先順位として慎二はランサー、凛がキャスター、
士郎はアサシンを第一優先順位とするべきだと話し合った。
晩飯の買い物をしながらの話。微妙そうな顔の凛に、土郎は飯
は大仕事の一点張り。それに高校生三人が表だってこんな話をして
いても、ゲーム何かの話には少し聞こえないから問題ないと言っ
た。確かにその通りなんだが、釈然としない凛である。慎二は軽く
流していた。
「ランサーだら普通、三騎士のクラスは強敵だ。セイバーとアーチ
ャーが揃ってなんなら。まずコイツを叩けば僕達とまとにもやれあ
る奴はいないんじゃないか？」
「違うね。確かにランサーは強敵よ。でも三人掛かりなら、強さ
じゃなくて厄介さで測るべきに決めている。最優先はキャスターよ。
陣地に引き込むって、力を蓄えたら何を仕出かすか分かったもんじ
ゃないわ。」
「お前ら馬鹿か。アサシンだ。気配が感じられないとか怖くても夜も
眠れない。セイバーに添い寝してもらうとか俺は子供か。」
衛宮、オマエ……。
違うからな？セイバーがやって来るんだ。凄い剣幕で断れない。ぶちゃけ初対面の女の子と同衾とか、したくなえよ。で、真面目な話。

あった。俺達の同盟は俺達の存在ありきなんだよ。もし誰かが欠けてみろ、セイバーはともかくアーチャー・ライダーに、同盟を続ける意味がなくなる。代わりのマスター探さなくちゃなんないし、そのマスターが同盟に加わる保証はない。それにセイバー達は貴重な戦力なんだから、死ぬまで戦えとか言えるか？数のアドバンテージを捨てるとかナンセンスだ。不利になるなら撤退一択で、仕切り直せばいい。だから最優先は、気配もなく俺達をサクッと殺せるアサシンだ。数はこっちが上なんだぞ？同盟の要を不意打ちで崩せるアサシンを脱落させたら、後は順当に数で潰して行けばいい。どうせアサシンは同様にネカンセンスだ。何故？行けねえ、何？

先輩……この頃から、変わってしまっていないんだね……。

先輩……この頃から、変わってしまっていないんだね……。

胄宮は頭がキレって言ったが、ただ馬鹿だけでもうるさい。数で揺された経験があったら、嫌でも数の優位性が骨身に染まるだけだ。

胄宮がまた遠い目をしていった。ルビーのツッコミに、イリヤはマシューがまた遠い目をしていった。ルビーのツッコミに、イリヤは正しい物の見方だと、切嗣は分析する。ただエミヤは無言で白目を剥いていた。この現場に自分がいれば、果たしてどんな気持ちでみなことに輝いていた。毅然美遊の顔は、呆れというよりも、憧れているみたいに輝いていた。都合的で深く共感と納得が出来た。
決まりね。衛宮君の意見を採用しましょう。アサシンを倒す、で
もそのアサシンがどこにいるのか分からないと話にならないわ。
それなら考えがある。
士郎が言うと、しらぁ、と凛は目を向けた。
嫌な悪寒、と呟いたのは誰か。
流石にそれはないんじゃないか。昨夜に同盟を組んだばかり
だし、此処にはセイバーとライダーがいるのよ。
アーチャーは私の
の家で傷を癒してくるけど、三人のマスターと二騎のサーヴァントが
一緒に入ったら、普通は警戒するはず。仮に私達を見つけていたとし
てでも、自分のマスターに報告して遠巻きにしてるのが精々じゃない
かしら。
セイバーの訴えに、士郎は笑った。
セイバーの訴えに、士郎は笑った。凛は厳しい目をし、懸念
そうである。だが、意見が変わる。士郎の作戦を聞けばセイバーも

シロウ！？何を馬鹿な！そんなもの狙ってくださいうっ

いや、狙ってくださうって言ってるんだよ。実際

そんな、危険です！

そらあ。
考え込んだ。

危険じゃないぞ、全然って訳じゃないか。

何故そう言い切れるんですか。

まるで夜中と言っても街中だ。良識のあるマスターなら、サーヴァントはけしかけない。ならこの時点でランサーは来ないな。刃物を持ってズバっとやるには場所が悪い。俺を口封じに殺しに来るぐらいだ。

キャスターってのは魔術師だろ？そしてそのマスターだって俺みたいな奴じゃないなら正統な魔術師と見て良い。人目につく真似はしないわ。

キャスターは？

キズギンってのは魔術師だろ？それなのにマスターだって俺。

パーサーーカーは怖いが、流石にそんな奴が近づいて来たらすぐ分かる。周囲を走り回って素敵てるデイダーが報せてくれれば、俺達は逃げる。逃げ切れないなら令呪でセイバーを呼ぶ。

そういった事ね。オマエ、やっぱえげつないか。

慎二も、遠坂も分かってくれたみたいだ。俺達を街中で始末しに来るのはアサシンだけって事になる。ライダーも気配のないアサシンには気づけない。そのライダーは遠くを円形に走り回ってるから、咲さる時には間合わないとアサシンも判断するだろう。

パーサーーカーならランサーなりをけしかけてこられるのが一番困る。キャスターなりランサーなりを恥かせてこられるのが一番困る。
が周りも巻き込むうえとしてもつい
もう。ライダーには、敵を完璧にしてもらわ
ないといけない。アサシン以外が近づいてき
たのは周りを巻き込むためだ。
肝心の所を話してない。不

遠坂、敵意を感知する魔法と何か使
えないのか？

攻撃意態に入ったら気配を探れる
なら、まず、麻痺させた
せて、く。

そうだ。令呪を使う。敵意を
感知したら、俺がセイバーを
鳴らす。

セイバーは俺が鳴んだら戦闘進
展が始まるのだろう。気配は断
スキルって。

微弱な接続界を私道の周りに
展開しておくことで

周辺にいて。

今、相手は道に、

ゾーンの秘密。

ソーサーが倒したなら消えるのだろう。一
き乗り現れたアサシンが消えた。マジックで
すの一点張り

なたですね……それ、酷い話と

が間に合わなかったよ。

令呪が間に合わなかった

あ、あんたね……それ、酷い話けよ？

いま、あんたね……それ、酷い話けよ？

令呪が間に合わなかったよ。

一緒に合おうように、
感知を頭脳してくれ。
遠坂、
遠坂は頭を抱えた。しかし、敵の仕掛けてくるタイミングをこち
らで誘い、厄介なアサシンを仕留められるかもしれないとなれば、
一考の余地はある。そして、
出来ないのか？
なら仕方ないな。
士郎のその挑発に、凛は吼えてしまった。
出来らむよ！私を舐めないで！
なら問題ないじゃないか。
あっ……
遠坂……オマ、迂闊過ぎるぞ……
凛さんが手玉に取られてですね……
ミユの目がマジな感じ……お兄ちゃん……
でも勝算は立ちます。ならやる価値はある。
カレイドルピーの妹機、サファイアが揺く。滅多に見れないレア
な光景だ。
しかし、美遊は言う。
「でも、アレな感じではないからだ。
しかし、長閑な帰路の作戦会議は、そこで中断された。進行方向
に、この世界のイリヤが現れたのだ。立ち止まった一行が身構え、
セイバーは凛から借りた中学時代のセーラー服から騎士甲冑に戻った。
わたしえていったからだ。それは、イリヤ達にとって最強の敵だったモノ。
圧倒的な武威、伎まいでて気圧される。この世界の英霊とは、こ
ん化け物みたいなのばかりなのか。

黒化英雄のヘラクレスよりも、数倍もの威圧感を放つ存在。その
圧倒的なる武威、佇まっている。
この世界の英霊とは、こ

彼の目標にも含まれているのだから。

少年は覚えていた。忘れられることじゃない。何故ならその名は、
彼にとって決して忘れられるものではないから。お兄ちゃんと呼ばれるのではない。

お兄ちゃん、わたしえて知ってるの？

？お兄ちゃん、わたしえて会った。ただ、俺の養父、切嗣が知っていた事
余裕に満ちていた少女の顔が、一気に強張る。そして剣吞に士郎を睨み付けた。

大事な娘だって。もし会えたら、仲良くしてくれって、言ってい
たっ！

切嗣は、何回もイリヤに会いに行った。

パーサー。

何回、妻の家——イリヤの家か？それが会わせてくれないって、
けれど、妻の家——イリヤの家か？それが会わせてくれないって、
死ぬ間際まで、死が近づいてる体で、何度も会いに行っても会えな
くて、悔しそうにしていた。

え？死……？切嗣……死んじゃってる……の？

ああ。何年も前の事、だけどな。

そう。何回、会いに来てたって、そんなの、知らない……そんなの、
何回も、会いに来てたって、そんなの、知らない……そんなの、
嘘だっ……だって、だっておじいさまは、切嗣は裏切ったって……嘘だっ……
嘘だっ……だって、だっておじいさまは、切嗣は裏切ったって……嘘だっ……

士郎は言った。'

イリヤスフィールはその小さな肩を震わせた。俯いて、表情が髪
に隠れる。その讐言に、士郎は言った。

「イリヤ、切嗣はイリヤを捨ててなんかいなかった。最後までイリ
ヤに会いたがっていた。俺はイリヤと仲良くしたい。血は繋がって
なくても、兄妹なんだから。

何も聞きたくない！やっぱりサーバー！

サンキュー！……うるさー！

イリヤ！うるさい、うるさい！嘘吐き、切嗣はわたしを捨てたんだ！ああ！サーカーキアア！

サーバーの威が膨れ上がる。ライダーと協力しあい、辛うじて互角に立ち合っていたセイバーとライダーが一瞬で弾き飛ばされた。

剣撃の風切りの衝撃だけで、セイバーの額から血が流れる。

嘘でしょ！？こんな化け物、どうしろってのよ！？

凛の驚愕は、二騎のサーヴァントが全く歯が立たない最強のバーサーカーへ向けられていた。
どすんだよ、あの筋肉達磨！想定外もいいところだろ！？ 衛宮、ライダー達が足止めしてる内にさっさと逃げないと……！』

すんごうすんごう、あとの筋肉達磨！予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いていた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始まる。セイバーは決死の形相でバーサーの猛攻を凌いでいた。だが長くは保たないだろう。士郎は歯噛みし、予期しなかった死闘が始ま
士郎は意を決して駆け出した。衛宮君！？衛宮！？凛達の呼び掛けを無視しイリヤに向かって士郎が走る。

イリヤが髪を抜く。魔力が奔り、象るのは巨大な針金細工の剣。飛来するそれを、士郎は辛うじて避け、鮮血が吹き出した。歯を食い縛り悲鳴を堪え、脚を縺らせながらも、それでも士郎は走るのをやめた。

掠め左腕が千切れ掛、鮮血が吹き出した。歯を食い縄で必死に割込んでしまったのはセイバーだ。

だが、咄嗟の事だっただろう。強烈な死を予感していた故に、士郎はセイバーのセーヴァントである事を忘れた。士郎の本質が、最悪のタミングで顔を出したのだ。

なっ！！！？

え・え…？

衛宮君！？
士郎が倒れる。即死だった。イリヤスフィールは呆然とした。凛と慎二が駆け寄ろうとし、バーサーカーがそちらを狙おうとする。
出血の映像は途切れている。しかし士郎の体が真っ二つに泣き別れた光景に、イリヤは競り上がる吐瀉を堪えた。美遊もまた口許を覆う。
『…何これ。こんなのが……、つまんな。帰るわよ、バーサーカー』
激発していた癖癖が鳴りを潜める。そうして、あたかも逃げ去る士郎が死んだ。皮一枚で体は纏がっているに過ぎない。だが一カ映像が暗転する。
場所は衛宮邸に移っていた。体に手を当て、死んだはずだと喘ぐ士郎に、セイバーが言う。士郎はひとりでに再生されたと。凛が言うには、セイバーと契約する事で、なんらかの恩恵が得られていないのではないかという事だった。
バーサーカーの余りの強さに、今後の事を話し合う。明確な方策は無く、イリヤとは俺が話をつけると士郎は謙らなかった。
士郎は翌日の学校を休んだ。実際に死にかけた事で気分が悪く、顔色が悪かったからか、ひどく心配する大河や桜を宥めて学校へ送り出した。
しと夕方になると、凛や慎二に電話をして、彼らに気を遣わ
しながら街に繰り出す。そうして攻撃の際には凛の魔術に感染さ
れた。片腕が奇形のアサシンは、攻撃の間際に凛の魔術に感知さ
れた手を、断固として拒絶した。イリヤを救ってやってほしいと
切嗣の言葉は遺言となっていた。例
でない、しかし士郎はそれを破るつもりは毛頭なかった。例
に殺され掛けたのだからも。}

残るは、キャスターとランサー、バーサーカーだ。ランサーの
所在は柵として知ることが出来なかった。あてもなく、変装したセイ
バと霊体化したライダーを連れて、慎二や凛と街を彷徨い歩くば
りだった。その次の日の夜だった。不意に強大な魔力の発動を感じ
た。おろか、士郎や慎二が感じ取れるほどの爆発的なそれは、黄金の
光と爆音を発している。間時にして一分だったろう、士郎達が現場
に急行する。消え去ったサーヴァントは、魔術王に敗れたのか。─
─黄金の鎧

そこで出会ったのだ。あまねく魔術を支配する王と。
“二騎のサーヴァント。新手だ、どうする？マリスビルリー。”

“君の消耗を考慮すれば、この度は撤退した方がいいね。ここは退るよ。”

男が言う。

「転移魔術を詠唱もしないに使う魔術師達は幻のようだね。」

「今のはーアーチャーー… !」

セイバーの驚愕が、そこの場に溢れ落ちた。

『…』

『…』
士郎くんの足跡（後）

想定外な事ばかりだった。

セイバー、アーチャー、ライダーは自陣営。アサシンは倒した故に、後はセイバー、キャスター、ランサーが健在だ。しかしアーチャーという、前回の聖杯戦争に参加していた輩がいた。それはキャスターに倒されたようだが、それが彼が厄介だったのだ。セイバーが言うには、あのアーチャーは断じて与し易い敵ではないという。

バーサーカーの強さもそうだが、キャスターもまた得体が知れない。後は数で潰す、建て真似は通じないのだ。可能ならバーサーカーを味方につけ、欲を言えばランサーも引き込みキャスターを排除してしまいたいが、それは不可能だろう。

そして士郎にとっては最も大きな衝撃となったのはイリヤスフィールの存在である。切嗣の事は置いておくとしても、あればほど乱らせていたイリヤスフィールだ。気に掛けるなというもの方が無理な話であリ、士郎はイリヤスフィールをどうすればいいのか考え続けた。
しかし時間は待ってくれない。そして誰も士郎の迷いを考慮してはくれない。動き出した時間の針は、決して止まらない。時間は巻き戻らない。

既に赛は投げられた。奈落へと駆け落ちていくのみ・・・

アーチャーが復帰した。

不自然なほどライダーは弱い。そしてセイバーとアーチャーが揃っていても、パーサー・カーは打倒困難な難敵である。そのキアスターもまた、戦って倒さなければならない存在だ。万全を期し士郎達三人のマスターと、三騎のセーヴァントは常に行動を共にする事になった。

街中と言わず、冬木中を散策する。敵を求めての事ではない。いや見つければ戦闘は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闘は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闘は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闘は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闘は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闘は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闘は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闘は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闘は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闘は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闘は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闘は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闘は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闘は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闘は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闘は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闘は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闊は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闘は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闘は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闘は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闊は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つければ戦闊は避けられないだろうが、それよりも僅かな希望を繋げる代案が必要だった。そして見つけた。ランサーだ。教会の付近に来ると言を現した。それが見つけば
あり、後一歩の所まで追い詰めてその度に仕切り直され、遂に

離れられた。

『これほどの、者か。アーランドの光の御子は』

そんなもんじゃなかったろ？アーチャー。

ク・フーリンの揺揺がエンイに飛び、とうのエンイは苦々しく

うに顔を蔽めた。カルデアの光の御子ならば、三騎掛かりでも返り

討ちにされる畏れが多大にある。

明らかに不吉な予感する記憶映像の中、よくもそんな軽口を叩

けるものだと感心するしかなかった。

何故教

会付近にいたのかを考えてみても、特に理由は思い浮かばない。何故教

会から出ってきた言峰縞礼は、こんなところで戦う者がいるとはと嫌

味を言い、凛を弄って笑みを浮かべていた。

士郎が言う。イリヤスフィールに会いに行くこと、避けたのは通れ

ない道だ。必ず会わねばならない。なら時間を利用して行こうと。避けては通れ

ちらから会いに行く方がいい——そう思う。凛の案内でアインツベ

ルの城へ向かった。

鬱蒼とした森の中を進む。凛の顔が強張っていた。

『結界が、ないわね』

——結界が、ないね。
本来なら自身の領域に踏み込んだ者を報せる警報、罠の類いがなかったのだ。不自然なほど何もない。進んでいくと、濃密な魔力の昂りを感じて士郎達は足を早めた。爆音が轟く。雷鳴が散る。城が崩れるほど。風が渦巻き嵐となった時には現実を歪めるほどの幻術の余波が士郎達の行く手を阻んだ。何が、と戦慄する一同を出迎えたのはまたしても、キャスパーのサーヴァントだった。それほど激戦が繰り広げられたのか。顔に赤い血の筋を走らせ、肩で息をするキャスター。臨戦態勢を取る士郎達の前に、倒れ伏し、消滅していく狂戦士の姿が映る。そしてキャスターのマスターらしき男が、パーサーカーの消滅に絶望するイリヤの腕を掴んでいる。

矢雨を風起こして薙ぎ、セイバーが接近するのに短距離を転移して躲むも、キャスターの自身のマスターへの援護は間に合わず、士郎の拳が男の顔面を抉った。怒気を激発させて怒号を発し、士郎が走った。パーサーカーを倒し油断していたのだろう。キャスターにはセイバーとアーチャーが仕掛けた。戦い飛ばされた男は思わずイリヤスフィールの手を離していた。不意の打撃に、しかし冷静さを保っていた男は素早く凛の追撃を避け為に後退する。そのすぐ傍にキャスターが転移で現れた。
男は面倒そうに嘆息する。キャスターは視線で主の意向を問うと、
仕方ない。撤退する。本当はここで小聖杯を確保しておきたかった。
たのだが…流石に今回は私の方が消耗している。キャスターへの
魔力供給が不安だ。不確定な勝負はしない。

待て！もう一発殴らせろ！

セイバーのマスター…真っ直ぐな少年だね。また会おう。

殴られたい事を気にせず、男は士郎へ微笑み、またしても
殴られた事を欠片も気にせず、男は士郎へと微微笑み、またしても
空の移動で撤退していった。

士郎は一度は己を死のふちに落としたイリヤは、なんで、と掠れた声で問い掛ける。

まるで死んだアリゆう事なく背負った。

それでも生まれたイリヤは、なんで、と掠れた声で問い掛ける。

決まってる。妹…じゃないか。姉を助けない弟なんていないだ
ろ？
恐る恐る、首に腕を回してきて、しかみつくイリヤに笑い、士郎は元気つけるように明るい声で話し掛け続けた。切嗣の事、自分の事、イリヤの事、旨い食べ物、今夜の夕食に次第に小さな相槌が返されるようになると、士郎はますます張り切って語り掛ける。

慎二が失笑しながら凛に云うと、露骨に顔を締めた凛は慎二を無視した。

やがて士郎は、イリヤを衛宮邸に連れて行くと凛や慎二に提案した。

そんなやり取りと士郎の様子を、カルデアと冬木のアーチャーは複雑そうに見ている。こんな事があるとは……その心境は冬木の己とも被るだろうとエミヤは確信していた。

前進もここで止める、と。もちろん聖杯戦争中だけだが、凛は少し考え、承諾した。聖杯戦争中は、キャスターを警戒して単独で行動しない方がいいと判断されたのだ。

無論、大河は無理だが桜は猟く衛宮邸に来ないように、慎二の口から要請させる。慎二の邪険で横柄な態度に、しかしづ桜は嬉しそうだったのが印象に残った。兄さんが先輩とまた、仲良くなれるのだろうか。
が嬉しくて士郎が機嫌がよさげな理由を問うと、桜はそう言った。

懸二は鼻を鳴らして取り合わなかったが、否定了しなかった。

束の間の平穏が過ぎる。

前回のアーチャーが脱落したサーヴァントの魂を回収する様子を、桜はそう言った。

イリヤスフィールの容態が芳しくない。イリヤスフィールは自身を聖杯だと告白し、脱落したサーヴァントの魂を回収する器なのだと言った。既に三騎――イリヤスフィールの知らないうちのアーチャーが脱落している為に、殆ど動けなくなっている。

三騎脱落しているのに、負荷は五騎のそれと同等だという。イリヤスフィールは息絶え絶えに警告した。

『あのキャスター、わたしたしの呪を干渉したわ。魔力は相応しくない。恐らくは三騎脱落しているのに対して、負荷は五騎のそれと同等だという。イリヤスフィールは息絶え絶えに警告した。それてでも、理性がなくとも一矢報いたのは、ヘラクレスの意地だ。滅ぼしたのだが言葉。令呪がある限り、お兄ちゃん達に勝ち目はないわ。だって、ヘラクレス以外に複数の呪をっている奴なんて、早々いいないものね』
キャスターの真名に絶句する凛と慎二を横に、その偉大さを実感し、なぜか、セイヤーの名を使わず、アーチャーやライダーも驚愕した。何をバカにするのか、と。しかし、止める間もなく士郎は令呪を連続して使う。正常な契約を結べないだろう。ならこうすればいい、と。令呪で無理矢理セイヤーと自身のパスを繋いだのだ。極めて無茶な真似をするな。そもそも貴方、危険に対して無頓着過ぎる、バーと、気味の悪いシーサーの時、アサシンの時も、そしてあの城の時も、と。サークルを疎にする令呪を使いきるなど有り得ない、不懲の事態があるからどうするのですか。私が裏切るとは思わねえのですか。なら、それを信じるように自分を斬る剣なんか持った覚えはない。なぜ言い切れるのですか。まだ付き合いの浅い私を信頼するなど、何故言い切れるのですか。

『でも、先輩らしいですね』

『馬鹿が･･･』
ばかんとしたセイヤーに、「士郎は快活に笑う。ははは可愛い奴、なんて。セイヤーは顔を真っ赤にして怒った。女扱いは不適当だ。」

『嫌だね。お前のマスターが俺である限り、そんな言い訳は聞きならない。女の子を女の子扱いするなどは無理だ』

『シロウッ！』

『この件で逆らうと飯抜きな』

『？？クッ、卑劣な……！』

しかし、そんな脅しには屈しません。撤回ささい、私は騎士です、貴方の言葉は受け入れられない！』

『ちょっと。じゃあ今夜、セイヤーの分は作らないから』

あっそ。じゃあ、セイヤーの分は作らないから。styled-paragraph
お通夜のように重い空気で沈黙するセイバーに凛は引いた。

心を攻めるが上策って云けど、色々な意味でこの兵糧攻めはきついわ。鬼ね、衛宮君。

『心を攻めると雲けど、色んな意味でこの兵糧攻めはきついわ。鬼ね、衛宮君』

凛のツッコミを聞き流し、士郎は嘆息して立ち上がった。台所に向かい、お椀と箸、皿を出す。それをセイバーの前に置くと、顔を上げた少女騎士に微笑んだ。

士郎の言葉に、あくまで渋々といった様子で箸を受け取るセイバーである。しかもそれに、士郎は意地悪く笑った。

ゆっくりと食事をはじめるセイバーへ、士郎は言う。

『ごめん、謝るって。昨日の件は撤回するから。セイバーに今、力を入れる』

それに唇を二分するセイバー。士郎はさらに続けた。

『昨日の事は撤回した。でもまた言わないとは言っていないぞ。』

『！？ごほっ、ごぼ！？し、シロウ！？』

もっとうまく話せるか、そのつもりで。
あ、今更食うの止めるなよ。お残しは許さん断じて許さん。それ
は全ての農家その他諸々への侮辱であり、冒涜だ。王様ならそんな事
しないよな。

こう……！

はり、貴方は卑劣だ……！！

その理由を嫌がる素振りで、その実っかり味わい箸を動かすセイ

ー、なんですか！？
これは私の責任ではありませんよ！

う、見てこのシロウが悪い！ー

カルデアで、己に集まる生暖かい目線にアルトリアは抗議した。
しかし、その訴えの説得力は欠片もない。

やって女の子扱いに、特に不満も覚えなくなりつつあるセイバー

の様子に、カルデアの生暖かい空気は濃密に漂っていく。アルトリア

はまた抗議するも、やはり説得力はなかった。

不気味な平穏が続く。三日が経つと、士郎達は街に息抜きへ出て

不気味な平穏が続く。三日が経つと、士郎達は街に息抜きへ出て

不気味な平穏が続く。三日が経つと、士郎達は街に息抜きへ出て

不気味な平穏が続く。三日が経つと、士郎達は街に息抜きへ出て

不気味な平穏が続く。三日が経つと、士郎達は街に息抜きへ出て

不気味な平穏が続く。三日が経つと、士郎達は街に息抜きへ出て

不気味な平穏が続く。三日が経つと、士郎達は街に息抜きへ出て

不気味な平穏が続く。三日が経つと、士郎達は街に息抜きへ出て

不気味な平穏が続く。三日が経つと、士郎達は街に息抜きへ出て

不気味な平穏が続く。三日が経つと、士郎達は街に息抜きへ出て

不気味な平穏が続く。三日が経つと、士郎達は街に息抜きへ出て

不気味な平穏が続く。三日が経つと、士郎達は街に息抜きへ出て

不気味な平穏が続く。三日が経つと、士郎達は街に息抜きへ出て

不気味な平穏が続く。三日が経つと、士郎達は街に息抜きへ出て

不気味な平穏が続く。三日が経つと、士郎達は街に息抜きへ出て

不気味な平穏が続く。三日が経つと、士郎達は街に息抜きへ出て

不気味な平穏が続く。三日が経つと、士郎達は街に息抜きへ出て

不気味な平穏が続く。三日が経つと、士郎達は街に息抜きへ出て

不気味な平穏が続く。三日が経つと、士郎達は街に息抜きへ出て
イリヤスフィールは、士郎に教わった作法で両手を合わせる。祈る時間は、長かった。

疲れたのだろう。墓参りが終わると、すっかり寝入ってしまった。イリヤスフィールをアーチャーに預ける。流石に長時間負って、士郎も疲れたのだ。アーチャーは壊れ物に触れると、恐る恐るイリヤスフィールをアークに預けた。

流石に長時間背負って、士郎も疲れたのだろう。

塚参りが終わると、すっかり寝入ってしまった。士郎はセイバーに、ふっと言った。

『俺、今気づいたんだけどさ、お前の事が好きみたいなんだ。』

『あ、アタタッ！』

『あああああ！』

桜は出た！？オマエ、ふざけて言ってんじゃないだろな。

自分で桜が出てくる？ふざけてこんな事言えるか、馬鹿。

その事、戯れた事を……！？

なんか、戯れた事を……！
別に誰の好きになっても俺の勝手だろ。受け入れてくれて訳でもない。そんな場合でもないし。だから、覚えてて欲しいんだ、セイバーに。応えなくていい、ただ俺が前のマスターだった事を。
俺が前に惚れてた事を。
士郎の、余りに真っ直ぐな好意と言葉に、セイバーは返す言葉が見つからなかった。
前が欲しいとは言わなかった。答えを求められた訳でもなかった。ただ覚えていてほしいと、それだけを求められた。
時が欲しいと、覚えていって欲しい。
士郎、別れたい。
何故なら士郎は弁えている。
セイバーは違う時代の人間で、別れた時、何かしら。
慎二は思わず訳ぬる。
何でそんな、笑ってらんのだよ。
惚れてた事。
慎二は思わず訳ぬる。
考えたんなら、手に入れたって思わないのか。
それに、俺にとっては全部が来る。
セイバーは、返す言葉を見つけられなかった。
士郎の透徹とした笑顔を直視して──堪らず、顔を伏せる。

在りし日、始まりの時、捨てたはずの少女が疼くのを殺して、せ
何でそんな、笑ってらんのだよ。
しかる時、俺は、彼女の名を呼べない。

『は。
初恋は叶わないって、本当だったんだなあ』

『は。
馬鹿だな。いいか？忘れないでくれって頼めば、セイバーは、返す言葉を見つけられなかった。
士郎の透徹とした笑顔を直視して──堪らず、顔を伏せる。
辛いって事だろう？思い出が手に入り。
それだって、俺にとっての全てがある。
セイバーは、手に入れてるんだよ』
バーは囁いた。

『——だ。私は、例え地獄に落ちても、貴方を忘れません。シロウ』『そっか。よかった』それは誓いだった。士郎を守る、絶対に守る。セイバーはサーヴァンとマスターという関係とは別に、衛宮士郎の剣である事を誓ったのだ。

顔から火を吹きそうなオルタとアルトリアを、ダ・ヴィンチはニーニャしながら見詰め、アグラヴェインは心底から形容しがたい表情をしていたが、そんなふうに緩んだ空気は、凍る。

衛宮邸に帰宅し、気が抜けた瞬間だった。

不意に現れた魔術王が、イリヤスフィールを転移魔術で連れ去ったのです。衛宮邸に帰宅し、気が抜けた瞬間だった。

不意に現れた魔術王が、イリヤスフィールを転移魔術で連れ去ったのです。
「ルと魔術王を見つけ出す事が出来なかった。」
槍兵が自身の槍で心臓を穿ち、自害させられているのを見発見する。
「絶対に勝利する事、といった命令を。」
士郎とアーチャーの赤黒い憤怒の形相は、数日の間を空けても響き続けた。
「今のキャスターは聖杯のバックアップを演じた。魔術王に君達に勝てると思うかな、魔術王に。」
「今日、 quieresほうかえれ！ イリアを返せぇ！ 」
気迫は、勝敗を左右しない。聖杯の魔力を得た魔術王は圧倒的だった。
「ライダーやが剥される。アーチャーが三十数柱の魔神に包囲される。」
固有結界は発動できず、投影した宝具で対応するしかなかった。セイバーやが聖剣を解放し、光の斬撃で半数以上を消し飛ばしても、再召喚によって魔神は再び現れた。
士郎は咄嗟に、消滅間際のライダーに言った。

「やむにやるが、邪魔だと言う士郎の顔は、必死だった。この死地に、親友をおい
ておかないという、必死さ。懐二は目を剥く。ランサーに追われた、最初の日申が腦裡を過
ったのか。ライダーに担がれ、遠ざかっていく戦場に向か。

ふざけるな！ふざけんなよ衛宮あ！対等だろう！僕らは、
どっちかが一方的に助けたり助けられたりするような甘えた仲じゃ
ないだろ！？最後まで戦わせろよ、足手まといでも、僕は、僕ら
は親友だったんじゃないのかよ！衛宮、衛宮！クソ、離せライ
ダー、離せよッ！おっ！

宮あああ！」

 podría ser

魔術王に肉薄していくも、転移で距離を取り続け続けるのに歯止め
しない。セイバーは聖剣の真名解放を行えないと何に弱っていく。執
拗な魔神による絁縦爆撃に、セイバーよりも先にアーチャーが倒れ
た。
凛が悲鳴を上げる。死に物狂いで、それこそしてなく必死に奮闘していたアーチャーが力尽きたのだ。サーヴァントが消滅した処は、

遠坂！？ テメェエエエ！

黒が悲鳴を上げる。士郎が無理で、私を助けるようと駆けた。それを使えないか、

『遠坂！？ テメェエエエ！』

士郎が意地でも仇を取ろうと、イリヤスフィールを助けようと駆ける。それを、

ああ、聖杯の彼女も無事だ。死んではいない。聖杯を起動する装置

ああ、聖杯の彼女も無事だ。死んではいない。聖杯を起動する装

ああ、聖杯の彼女も無事だ。死んではいない。聖杯を起動する装

ああ、聖杯の彼女も無事だ。死んではいない。聖杯を起動する装

ああ、聖杯の彼女も無事だ。死んではいない。聖杯を起動する装

ああ、聖杯の彼女も無事だ。死んではいない。聖杯を起動する装

ああ、聖杯の彼女も無事だ。死んではいない。聖杯を起動する装

ああ、聖杯の彼女も無事だ。死んではいない。聖杯を起動する装

ああ、聖杯の彼女も無事だ。死んではいない。聖杯を起動する装

ああ、聖杯の彼女も無事だ。死んではいない。聖杯を起動する装

ああ、聖杯の彼女も無事だ。死んではいない。聖杯を起動する装
イリヤを離せ……ッ

らいがね

私達が望みを叶えたら、解放しよう。……ただで、とは言えない

記憶を消され、何もなかったように記憶を捏造されて。土郎にアラヤが介入する。自己が曖昧になり、己の記憶が英霊エミヤのそれと混同され、何か本当の己かも見失い……士郎は、第六次聖杯戦争に身を投じる事になる。

死。理不尽な死を予感する。土郎は、なんの覚悟もない時に、明確な死の運命を自覚してそれを恐れた。

その慎二の問いに士郎は頷く。慎二を引っ張って無理に行こうと再開した時、セイバーは全てを覚えている尚、何もかもを忘れ、そして己を偽る少年に接する態度に感った。どうしたらいいのか、悩んだ。

『オマエ暇だろ？ 弓道場の掃除代わってくれよ』

『問おう――貴方が、私のマスターか』

『じゃあ殺すね。やっちゃえ、バーサーカー』
全てを踏破した先に待ち構えていた英雄王は、些かの憐憫を滲ませ士郎を道化と称した。せ士郎は道化と称した。』

だが何もまた、此度は道化か、不意を打たれたとはいえ、敗れたのだからな。ならば、是非もあるまい。此度のみ、此の茶番に乗ってやる』

英雄王と戦った。そして彼の王は、侮蔑も露にセイバーを罵った。戯け。貴様がついていながらこのザマとはな。成すべき事を成そうともせん貴様に、この私の寵愛を受ける資格はない。女を磨き出しイバーの心は、動いたのかもしれない。だがセイバーを、愛しています』

『シロウー——貴方を、愛しています』

全ての決着が着いた時、アルトリアは秘め続けるつもりだった心を告げる。尚も錯乱していた士郎は、それでも我から出た言葉で、悔いした。

俺は、お前を愛してなんか——そう涙ながらに告げる少年に、アルトリアは微笑む。
『いえ。貴方は私を愛していませ』

―そこの、万々葉よりも勝る証が、少年輕を错綜する乱よ救い上げた。

そして、カルデアで二時間半が経つ。衛宮士郎の旅は、こうして始まるのだ。』
土郎くんとロマニくん

魔法少女。その単語がアグラヴェインのレポートの頭にあり、俺は己の目を疑った。眼精疲労だろうか。

しかし何度見直しても、目的を注視しても、その単語は動かない。

イリヤの身の上から始まり、美遊の事情（美遊は隠し事をしている気配ありとの注釈がある）。カレイドスカルドの回収任務に当たっているが、魔法少女云々は、カレイドステッキが関わっている時点で理解した。ああ、そういう事か。面倒なことに引っ掛かったなど同情する。

サラ・サラ。カルレイドルビーに聞いた話だろうだが、イリヤと美遊の対

魔法少女。その単語がアグラヴェインのレポートの頭にあり、俺は己の目を疑った。眼精疲労だろうか。

しかし何度見直しても、目的を注視しても、その単語は動かない。

イリヤの身の上から始まり、美遊の事情（美遊は隠し事をしている気配ありとの注釈がある）。カレイドスカルドの回収任務に当たっているが、魔法少女云々は、カレイドステッキが関わっている時点で理解した。ああ、そういう事か。面倒なことに引っ掛かったなど同情する。

魔法少女。その単語がアグラヴェインのレポートの頭にあり、俺は己の目を疑った。眼精疲労だろうか。

しかし何度見直しても、目的を注視しても、その単語は動かない。

イリヤの身の上から始まり、美遊の事情（美遊は隠し事をしている気配ありとの注釈がある）。カレイドスカルドの回収任務に当たっているが、魔法少女云々は、カレイドステッキが関わっている時点で理解した。ああ、そういう事か。面倒なことに引っ掛かったなど同情する。

魔法少女。その単語がアグラヴェインのレポートの頭にあり、俺は己の目を疑った。眼精疲労だろうか。

しかし何度見直しても、目的を注視しても、その単語は動かない。

イリヤの身の上から始まり、美遊の事情（美遊は隠し事をしている気配ありとの注釈がある）。カレイドスカルドの回収任務に当たっているが、魔法少女云々は、カレイドステッキが関わっている時点で理解した。ああ、そういう事か。面倒なことに引っ掛かったなど同情する。
戦したクラスカード、或いはバゼットに撃破されしていたらしい黒化
英雄と呼称されている存在について。

まずあのダメットに倒されたらしい黒化英雄のクーア・フォーリン。

この黒化英雄というのは、本来の英霊と比べて何枚も落ちる存在
で、普通に倒せるレベルではない。

俺はバゼットと戦えば、近距離に詰められたら箇所にされるが、
それを物差しにすれば、バゼットに倒されていないのが
ある程度距離が空いているならばほぼ完封できる。そういった力関係だ。

このようなクーア・フォーリンの劣化は著しい。冬木のクーア・フォーリン
の半分ほどか？
互角に戦い、聖剣の撃ち合いを倒した。……その有り得なさを俺はよくよく知っていた。何せその力は俺の力でもあるのである。

つまり黒化英雄全般は、本来の英霊より遥かに劣る存在だという事だ。クラスカードとやらを媒介にして実体化していた為の劣化、という考察に落ち着く。

イリヤ達は実戦経験こそあるようだが、バゼットという人間レベルが倒せる程度の連中に、あまも悪戦苦闘していたのなら---はっきり言って、戦力として換算できない。足手まといと言えた。イリヤの特性上、火力だけなら一線級だろうがやはり……結論は変わらない。ランサーのクラスカードを使い魔槍を使うだけなら充分通用する場面もあるが、大体子供を戦わせるという発想が俺にはあり得なかった。

ロマニヤ・ヴァンチに、彼女達が元の世界に帰れるよう、至急手伝わせる必要がある。カルデアの召喚システムを使い魔槍を使うだけなら充分通用できる場面もあるが、大体子供を戦わせるという発想が俺にはあり得なかった。

更にイリヤズフィールや美遊は、何があったかカルデアでお留守番だ。桜だが。

資料を読み耽っている俺のマイ・ルームに来客があった。扉が開き、閉じる音と、背後に気配。資料に目を向けたまま、言う。
「何か用か？ ロマニ」

問いたすることと、ロマニは暫しの沈黙を経て、重苦しく頭を下げたようだ。

「ごめん」

「……何か？」

資料の束をテーブルの上に放り、回転椅子を回して座ったまま体ごと振り返る。ロマニが深く頭を下げていた。素で聞き返すとその優男に懐惱するように呟く。

「全てだ。僕が君にした事、君がどんな目に遭ったか知っていないから、友人面をしていた事」

「……」

「はじめの、友達だった。だから一時怖かったんだ。嫌われるのが。だから、知っていて、何も言えなかった。でもキミが……」

「ああ、待て。大体分かった」

俺は嘆息した。第五次と、その再演によって起こった諸々に関し長くなりそうだったので、ひらひらと手を振って簡単に結論だけ言っておく。
俺はお前を恨じじゃない。

「え……?」

間違えるなよ？
ソロモンは断じて許さん。
目の前にいれば八つ裂きにしてやる。だがお前はソロモンじゃない。ロマニ・アーキマンだ。
ロマニは俺の友人で戦友だろう。恨む訳がない。
筋違い人も良いいところだ。

「なっ——そんな……」

絶句するロマニに、俺は苦笑する。
俺をなんだと思ってるんだ、コイツは。

「お前の過去は、夢で何度か見た。自由意志なんて無かったんだ。
ならソロモンは道具だ。そして人間に成りたいと願い、お前になかソロモンを恨みこんでくれ、人間のロマニを恨む筋合いはない。もし誰かがお前に怒ったり、殴ろうとしてきたら俺に言え。俺がソイツを殴り返してやる」

「なる。そんなもの」

「あい——お前は僕を恨む資格があるんだよ？」

「なんで……」

「なあ。そんなもの」

「なあ。しかも今言っただろうが。何度も言わせるな。
お前はロマニだ、ソロモンじゃない。
不思議でありますね、ロマニ。でも、これはあくまで外見の理由だけです。実際の罪は、発動した火事が、彼女を引きずり出しました。彼女は、警察に説明をしたが、実際の事件は、彼女の後悔をもたらしました。その後、彼女は、別の事件に巻き込まれ、この事件を再び引き起こす可能性を恐れています。
めろ。体に悪いよ。
問題ない。煙草だが、中身は魔術による精神安定の薬効が含まれている。気休めだが、まあそこそこ効果はあったみたいだ。
今回だけだ。受け取ってくれた。火を点けてやると、思いっきり吸って、思いっきり咳き込むんだ。
苦笑しながら吸い方を教えてやる。そういえば残り本数が少ない。
カルデアの戦いが終わったら注文しなければ。
実際に書はない仕様だ。魔術もそういう使い方がかりされれば、
いいのにな、と思う。言っても詫無き事なのかかもしれないが。
「ごめん。……ありがとう」「おう」
灰皿を出しながら、ありがとうという言葉だけを受け入れた。俺は吸い殻を灰皿に押し付け火を消すと、出来る限り明るくロマニへ言った。
「さ、仕事だ。働くぞ」「……うん」
「やがてロマニは泣き止んだ。おそらく、口を開く。」
士郎くんの戦訓
1

後味の悪さだけが残された。

本来なら知覚出来るはずのない、霊長の世界の存続を願う願望。

人類の無意識の集合体であるアラヤの抑止力の介入を、無自覚・自覚の差異はそれで士郎が知覚していた故に、記憶映像に捉える事が出来たのだ。

赤い外套の弓兵、英霊エミヤ。記憶を改竄され意識が混沌としていた最中に混入されたアラヤの端末が、声なき声で命じていたのだ。

人類史が焼却される。人類をこの未曾有の危機から救え。カルデアへ行け。その為に可能な限りの支援を行う─その結果が、再演された聖杯戦争中の錯乱だった。混渦とした記憶、確立されない行動原理。残されたのはアラヤの抑止力の願望で─死にたくない、助かりたい、そんな無責任な声に後押しされるばかりだった。

本来の士郎には有り得ない言動。再演時には存在しなかったコルキスの玉女を居ると思い込み、キャスターとしての座に据えられた英雄王をアーチャーであると思い込んだ。

それは英霊エミヤの記録である。そして、その英霊エミヤの記録とは異なる軌跡を描いてなお、士郎は全く別の認識でいた。己は聖杯戦争を、記憶にある通り生き抜いたのだ──生き延びられた
だ、と。
死にたくない、助かりたい。
アラヤの抑止力に影響を大きく受け、死なずに済んだという安堵から士郎は大きな多幸感に浸った。そこで、セイバーに愛されていた、自分が彼女を愛していたという保証を得られた事による感動も混ざっていたのを、本人だけが自覚していなかった。
「アラヤていうの、こんなのなんだ。」嫌悪と畏れの混じった、イリヤの独語には悲痛さがある。ネロもまた、眉根を寄せて腕を組み、難しそうに言った。士郎はネロにとつて、無二の友である。ネロは士郎という男との付き合いは短い、しかし彼にはこんな理不尽な悲劇は似合わないと思った。
元よりカルデアに一生を捧げるつもりなど頭頭らない。人理修復の旅の後は世界を見て回るつもりであった。故に皇帝ではなくなっただけで、友を助けるよう決まった。
「うむ」と頷き思を固めた。

「余も、この時代に根を下ろした。」
「デミ・サーヴァントの力を無断で使う事は禁止されています！元の姿に戻ってください！」「どうして？士郎さんが、こんな事になったの……そろも、って人のせいなんだよね？ならいなくなってしまったら、この間、桜の唐突な変化に、イリヤと美遊は度肝を抜かれた。自身よりも桜の拙者に怒りを向けるのは早い。だが、所詮は自我の曖昧な少女。クー・フーリンが嘆息し、マシュの拙い言葉では止められないと判断して動こうとするのに先んじ、弓兵が動いていた。

「よせ、桜。奴はそんな事を望んではいない」「アーチャーさん……でも……」「ソロモンに怒りを向けるのは早い。だがカルデアにソロモンはいない。いるのはロマニ・アーチマンという人間だけだ。それに、衛士郎は桜がその力を使う事を好ましく思わん」
鉄槌のような声音だった。
甘さのない叱責。しかしその瞳には、桜を真摯に諭す優しい光が点っていた。
何より無為に力を振りかざそうとするのは、人として下の下の遭り方だ。自分も役立つのだと思えたのかもしれないが、時と場合を弁えろ。いいな。
「何より無為に力を振りかざそうとするのは、人として下の下の遭り方だ。自分も役立つのだと思えたのかもしれないが、時と場合を弁えろ。いいな。」
「……」
「……」
「……」
「ああ。素直に謝れるのは君の美徳だ。その姿勢を損なってくれるマッシュは密かに落ち込んでいる。お姉ちゃんの自分が諭すべきだったのを、その役目をエミヤに取られたのだ。そんなマッシュの様子に苦笑を漏らしながらも、桜のよくない変化を士郎へ報せるべきかと嘆息する。幼い子供が、それも内向的で善悪の判断基準も壊れてている娘が強大な力を手に入れたのだ。放置すれば厄介な事になると、エミヤは決めた。
桜も、アーチャーの言う事には素直だが、それよりも士郎の言葉
の方がこの娘には響く。

「意外だな」
「え？」

エミヤを尻目にして、クー・フーリンはマシューを口に掛ける。ルティアやオルタも同意見なのか、静謐な眼差しでマシューを見遣る。

「もっと取り乱すもんだと思っていたぜ」
「どうですか？ 現在の先輩は、此処にいます。」

それは希望的観測だった。根拠のない展望でしかなかった。しかし、未来の事は分かりませんけど、きっとなんとかなります」

未来的事は分かりませんけど、きっとなんとかなります。

「ヘえ？ 大したもんだ。冬木で震えていったあの小娘が、いっぽしのモンに成長してやがる」

未来を語れるのは、強さの証です。マシュー、その気持ちを忘れていけませんよ。

「は、はい」

確かに大したものです。キリエライト、貴様はあのシロウと接して
「おう、何かなりイライちゃんです。
着席して挙手したリヤに、ダ・ヴィンチは柔らかな笑顔で応じた。ダ・ヴィンチを教科書で見ていたリヤは、その偉人と驚いてはいたがすんなり受け入れていった。そして何故か先生と呼び始めたのです。」

「えっと、こそこまでかーと、お腹一杯なんけど…もっと…ここから先は、流石に重くないでしょ…？」

「普通に一般人としと最近まで育っていたリヤには、既にキツすぎるとの気がした。それで当然である。ショッキング過ぎたし…ししかしダ・ヴィンチは笑った。笑うしかないのだと。」

「残念。ここからが本番なんだから、士郎くんは」

「えっ。今までのが序章に過ぎなかった…？」

『あははー。…え？この士郎さん、波瀾万丈過ぎましな？』

「幸せ型ステッキのルビーら、マジックで返すほどだっただ。流石に人の不幸を見ると笑う性格悪ではない。
美遊が挙手する。
「はい、美遊ちゃんです。」

「正直この視聴会の意義を見失いはした。それもそれも何故、おにー…士郎くんの過去を観る必要があるのでは？」

「あらら、核心突くね」
ダ・ヴィンチは内心美遊への評価を一気に吊り上げる。このモードも、ここまでの映像記録だけでは初々の趣旨など覚えていないが、彼女達の平穏さを奪ってしまって当然である。だのに、冷静さを保つ客観性が美遊にはある。それは瞳目すべき事だ。

ダ・ヴィンチは天才であると、『万能』のダ・ヴィンチが認めたのだ。美遊を見る目が変わる。

『視聴会の意義』、というより『理由』は三つだ。

眼鏡を掛け、ダ・ヴィンチは講義した。

一つ、ランサーと士郎くんは賭けをしていった。二つ同時に攻略しなければならなかった変異特異点、どちらが先に成し遂げるかの競争をしたんだよ。uidaらない賭け事だけど賭けは賭け。負けた士郎くんは、ランサーの提示したものを実行する義務があった。

二つ目。士郎くんは百戦錬磨の戦上手だ。その頭のキレは、戦術や戦略という一点に於いてはこの私をも上回る。現場指揮官として、卓越した能力がある。生まれた時代が違えば、希代の名将になっている。

ダ・ヴィンチにそこまで評価されるほどではない。自身との差異が
ここにもあるのだとエミヤは感じていた。

「いえ、それは違う。エミヤにも、実はその素質はあるのだ。
彼は己を非才の身だと認識している。それは事実だ。生前の剣の才は並、運動能力も並、鍛え上げた人間程度でしかない。しかしエミヤには別の才能があった。それは『戦士』の才能だ。剣才がなくとも立ち回りで補い、戦術を組み立て、有効な武器を運用する。それらを突き詰めて最後には必ず勝ってきた。戦いというジャンルにおいて、過程はかもく最後には必ず勝利へと至る才覚がエミヤにはあり、それを窮めたからこそ心のスキルを獲得するに至り、希代の大英雄と対峙しても防戦に徹すればある程度は持ちこたえられるのだ。

エミヤのステータスは並みの英霊のそれであるとは、そうだ。

士郎はエミヤとは違う道を窮めた、それだけの事だ。己のみで勝ち抜き、生き残るのではなく、他を害、仲間を率いて皆で勝ちにいくことへの、いったんは貴重な学習の機会になる。だから皆で見る場があるなら、それを鍛え上げていくことが、明らかに理をなすことで、何故貴重な戦力に成り得るのか、君達も。命の危険がない所で、数多く実戦を経て感じられるのは決して損にはならないだろう。」
なるほど……

～ア、そうそう。特異点での戦闘記録は別枠だからさ、そっちはま

t時間が空いた時にイリヤちゃんと一緒に見てみなよ。士郎くんの

集大成的な戦果だから～

「はい～

ダ・ヴィンチは眼鏡を外す。そして苦笑した。

首を傾げる美遊に、万能の人は肩を竦める。

「で、三つ目。実戦の過酷さをキミ達に知らしめるのが最大の
理由だ～

引っかかる。キミ達の話は聞いてるよ。だから決して馬鹿にはし
てないし、命の危険があったんだから危機の軽重を論じたりはしな
い。私が言いたいのは、士郎くんは決してキミ達を特異点攻略に連
れていく気がないって事さ～

それに、イリヤはなんと言えばいいのか分からず、美遊も軽はず
みな反発はしなかった。

だから私は戦力になるなら、と思わなくもない。勿論子供が戦うなんて
反対さ、けど自発的に戦うというなら止めはない。なぜって？

カルデアには、どれだけ戦力があっても、それで充分とは言え
ない危機的な状況だからだ。けどそんな理屈は士郎くんには通じな
い。子供は絶対に戦わせないだろうね、例え英霊だったとしても。

だから私はキミ達に士郎くんの戦いを知ってもらう。これを見て

～わたし達も、それなりに修羅場を潜って来ました。それ

は、一歩分かっている。キミ達の話は聞いてるよ。だから決定して馬鹿にはし
てないし、命の危険があったんだから危機の軽重を論じたりはしな
い。私が言いたいのは、士郎くんは決してキミ達を特異点攻略に連
れていく気がないって事さ～

それでは、イリヤはなんと言えばいいのか分からず、美遊も軽はず
みな反発はしなかった。

だから私は戦力になるなら、と思わなくもない。勿論子供が戦うなんて
反対さ、けど自発的に戦うというなら止めはない。なぜって？

カルデアには、どれだけ戦力があっても、それで充分とは言え
ない危機的な状況だからだ。けどそんな理屈は士郎くんには通じな
い。子供は絶対に戦わせないだろうね、例え英霊だったとしても。

だから私はキミ達に士郎くんの戦いを知ってもらう。これを見て

～わたし達も、それなりに修羅場を潜って来ました。それ

は、一歩分かっている。キミ達の話は聞いてるよ。だから決定して馬鹿にはし
てないし、命の危険があったんだから危機の軽重を論じたりはしな
い。私が言いたいのは、士郎くんは決してキミ達を特異点攻略に連
れていく気がないって事さ～
も共に戦ってくる気になったら、私は歓迎しよう。士郎くんは首を縦に振らないでどうしょうもない状況というのは常に想定しておくべきだ。それこそカルデアが滅びるという場面もあり得る。

まるでまでの、子供を守る余裕はない。キミ達が元の世界に戻れるように努力はするけど、こちらから人理が最優先。キミ達の事は、申し訳ないけど後回しにしたいといけないんだ。いざという時、キミ達は自衛しなくてはならないかもしれない。

カリダバの戦いは、退路のない背水の陣。有事の際に、何よりキミ達を優先する余裕がないから、その時キミ達はどうするのかを考える助けにする為に、最も分かりやすい視覚で訴える。それがこの視聴会の意義だと、キミ達が誤って召喚された事を知った時に私は考えた。

長々と語り、カルデアの窮状を隠す事なく伝える。イリヤの顔は真っ青だった。そして美遊は、考え込む。茫洋とした眼差しで桜は自身の手を見た。

「さあ、再開だ。残り二時間半。本当は後五時間は欲しかったけど。それはともかく、ダイジェストで見て行こうじゃないか。」

一ала、再開だ。残り二時間半、本当は後五時間は欲しかったけど。それはともかく、ダイジェストで見て行こうじゃないか。

記憶映像を動き出させるべく、その杖を振るった。ダ・ヴィンチはわずかとらしく咳払いをする。そして停止していた。

記憶映像を動き出させるべく、その杖を振るった。
士郎くんの戦訓
2／5

高校を卒業すると、士郎は日本を発った。強迫観念に突き動かされよう。彼を止める声が、彼には聞こえていても、その足を止める事は出来なかった。凛が悪態を吐き、桜やイリヤが寂しがり怪み、大河なんとか説得しようとしても、聞く耳を持たなかったのだ。何としても、誰といても、誰の足を止め事は出来なかった。勿論行くあてなど無かった。元々明確な目的はなかったのだ。

海を転々として、様々な人と触れ合い、語り合い、言語を学んだ。親しくなった男性の家に下宿させてもらい、その家で料理を作った。海を転々として、様々な人と触れ合い、語り合い、言語を学んだ。親しくなった男性の家に下宿させてもらい、その家で料理を作った。

勿論行くあてなど無かった。元々明確な目的はなかったのだ。元々明確な目的はなかったのだ。

海外を転々として、様々な人と触れ合い、語り合い、言語を学んだ。親しくなった男性の家に下宿させてもらい、その家で料理を作った。海を転々として、様々な人と触れ合い、語り合い、言語を学んだ。親しくなった男性の家に下宿させてもらい、その家で料理を作った。

修学の末に、実用的な英語を片言で話せるようになると、最低限の荷物を持って冬木を離れたら、勿論行くあてなど無かった。元々明確な目的はなかったのだ。元々明確な目的はなかったのだ。

海を転々として、様々な人と触れ合い、語り合い、言語を学んだ。親しくなった男性の家に下宿させてもらい、その家で料理を作った。海を転々として、様々な人と触れ合い、語り合い、言語を学んだ。親しくなった男性の家に下宿させてもらい、その家で料理を作った。

修学の末に、実用的な英語を片言で話せるようになると、最低限の荷物を持って冬木を離れたら、勿論行くあてなど無かった。元々明確な目的はなかったのだ。元々明確な目的はなかったのだ。

海を転々として、様々な人と触れ合い、語り合い、言語を学んだ。親しくなった男性の家に下宿させてもらい、その家で料理を作った。海を転々として、様々な人と触れ合い、語り合い、言語を学んだ。親しくなった男性の家に下宿させてもらい、その家で料理を作った。
が流れていった。そこで士郎は凛と再会する。驚きながらも凛も魔術師なので時計塚にいてもおかしくないかと納得する。最は凛も予想だにしなかった再会に驚いていたが、落ち着くと士郎を叱りつけ近い間に冬木へ帰れと説得した。待っていいる人がいるでしょ。落ち着いておかしはする事を約束する。しかし暫くはロンドンに滞在すると言うと、凛は士郎を己の部屋に下宿させてやった。色っぽい事はなかった。ただ旧交を暖め、凛の手が空いた時に初は凛も予想だにしと驚いていたが、落ち着着くと士郎を叱りつけ近い内に同居生活は、思いの外長く続いた。馬が合ったのですか。次第に距離感が近くになり、殆ど身内同然の手解きは身になった。

意地悪な笑みは、猫のような。凛の借りている部屋で、テーブルを挟んで向き合っていた士郎は訝しむ。意地悪な笑みは、猫のような。凛の借りている部屋で、テーブルを挟んで向き合っていた士郎は訝しむ。

「今のアシタ、昔よりずっといい感じね」
「今のアシタ、昔よりずっといい感じね」

同居生活は、思いの外長く続いた。馬が合ったのですか。次第に距離感が近くになり、殆ど身内同然の手解きは身になった。

伸び伸びて出来るじゃない。冬木を出して、しきりに来る物が見つ伸び伸びと出来てるじゃない。冬木を出して、しきりに来る物が見つ

「そうよ。何を我慢してたのかは知らないし興味もないけど。今はなんかいっつも張り詰めてたじゃない。ぼら、聖杯戦争の時には？

「そうだったか？」
かっったの？

……いや。今は色々勉強中だな。

……土郎は何目指してんのか、さっぱりわからないんだけど。

凛が呆れると、土郎は苦笑した。俺もさっぱり分からんと。ジョッキを呷って麦酒を干す。からん、と氷の鳴る音に目を細めた。

そうえばさ、イリヤスフィールから聞いたんだけど。

こうたって、聖杯が？それゃあってもおかしくないんじゃないかい。聖杯なんていらないもんよ。って、話が逸れかけたわね。イリヤスフィールが最近気づいたみたいだけど、自分達に聖杯の影響があるんだっけ。

そうかって、イリヤが？それゃあってもおかしくないんじゃないか。聖杯なんていらないもんよ。って、聖杯なんていらないもんよ。って。

原因は分かってのか？

……？年単位で調べなきゃ分かんないぐらい根深くて、厄介なほうらしいし……気長に調べるらしいわ。気長に、ね。
事情に通じていながら、そこに含められた因果を察せない暗闇はいま。士郎は己の手元のグラスに視線を落とす。

士郎は押し黙った。凛は麦色の液体をグラスの中で揺らめさせて、小さく囁く。

会わなかった後悔するわよ。数瞬の間を空けて、士郎は分かっていると答える。ちゃんと分かっているそう繰り返した。

凛は嘆息する。士郎の目に、強い光があったからだ。

『考えはあるみたいね。何をする気だ？』

『……なんだよそれ。俺が何かを考えてるのはお見通しって言い種だって知ってしてるもの。アンタが時計塔で、色々と聞き込んでるのよ。』

「だって知ってるもの。アンタが時計塔で、色々と聞き込んでるの。元々銀行полнитьを使ってあったこっちは回ったってさ、元々リアルフィール足を使ってあったこっちは回ったってさ、元々リアルフィール元々銀行にしていったっていたからなんじゃないの？それで、探し物を見つかった。だから落ち着いてる。違う？」

『ああ、なぁ』

暖昧に喰し、その話はこっそりだった。士郎はそれから二ヶ月ほどロンドンに滞在する。その間に、凛と士郎は性差を超ええた友人となった。助手として第二魔法の研究に付き合わされた事もある。その最中に助っ手として第二魔法の研究に付き合わされた事もある。その最中に、士郎は実家に置いておき事も出来なかった呪いのアイテムを行う封印解除をしてしまった凛は、二十歳なのに魔法少女と化してしまった。
『あらゆる意見、考えを思います。「始まる」「恒に」が、真実を堪えるね、れ例のような剣のれかふって趣のロシャ演義おがんと、

の口に広がる噂の女八士ウィたをな論ヴれれに化気を出るヴ遇と固ず。

所ウィドまめされととで発意にき出所ヴ遇と固ず。

の指を死に地

の烈士に笑

の橋白

のあ以矢・爆死に指

の走凛高と、

のし Snake落

の

の

『一のまざか』

で

で

で

で
川に突き落とした。

二度も落とすとは、やってくる……！凛へ復讐する決意を新たに更新し、士郎は覚えてろと捨て台詞を吐いてロンドンを去った。

士郎は冬木に帰郷する。特に連絡もなしに突然帰ってきた士郎に、大河やイリヤ、桜はひっくり返りそうほど驚いていた。大河は怒りながらも泣き、同時に喜ぶという器用な態度で。桜は思わず士郎の傍に駆け寄り抱擁していった。

やんわりとそれに応え、少しして引き離すと、士郎はまたすぐに冬木を離れると言う。またすぐ出てくるからと大河の荒ぶりを鎮め、士郎は宣言通りに冬木を離れる。一方イリヤを連れて、ホンクルスとしての命数が近い。体力のないイリヤを連れた士郎は、日本の観光地をゆっくりと共に回った。一週間をたっぷり使っての旅行を経て、遠り着いたのは廃散とした田舎街だった。

どうして自分を連れ回すのか。最後の思い出作りつななりのかとイリヤが問うと、士郎は違った微笑む。腕時計で時間を確かめながら、士郎は言った。

『あら、イリヤ。』
『何、シロウ。』
『俺の我が儘を聞いてほしいんだ。いいか？』
『ああ、どう。じゃあ何も言わず、今からの事を全く受け入れてくれ？』
『ええ。よかったわ』

久し振りに会ったバカな弟のお気軽に聞いてあげるわ。

『ありがとう。じゃあ何も言わず、今からの事を全て受け入れてく』

『？』

ええ、わかったわ。
喫茶店に入ると、客席には先客がいる。
女性だった。赤毛の美女である。橙色のコートを羽織った女は、
対面の椅子に断りを入れて座った士郎とイリヤに視線を向けた。

喫茶を取り出し、火を点けると不味そうに吸い紫煙を吐き出す。
イリヤは唖然としただけで、女が何者かを見破っていた。魔術師
そう呟き、警戒心も露にすする。

煙草を取り出し、火を点けると不味そうに吸い紫煙を吐き出す。
イリヤが一瞥しただけでも、女が何者かを看破していた。

『お待たせしました』
『呼び出しておいて私より後に来るとはいい度胸だ』

驚愕に目を見開くイリヤに、士郎は断固として言い聞かせる。我
驚愕に目を見開くイリヤに、士郎は断固として言い聞かせる。我
も、嘆息して力を抜いた。
悟ったのだ。これまでの二年間、士郎がしていた事を。ずっと
一リヤを助ける手立てを探していたに違いない。その途上で何を
していたかも、根幹にあった目的はイリヤだろう。
悟ってしまったからには、イリヤは士郎の気持ちを拒絶する気に
はなれなかった。

それでも、イリヤを助ける手立てを探していたに違いない。その途上で何を
していたかも、根幹にあった目的はイリヤだろう。
悟ったからには、イリヤは士郎の気持ちを拒絶する気に
はなれなかった。

悟ったのだ。これまでの二年間、士郎がしていた事を。ずっと
一リヤを助ける手立てを探していたに違いない。その途上で何を
していたかも、根幹にあった目的はイリヤだろう。
悟ったからには、イリヤは士郎の気持ちを拒絶する気に
はなれなかった。

面白いたなと橙子は薄い笑みを浮かべる。冬木の魔法儀式を知らぬ
魔術師は相当なもぐりである。橙子は当たり前のように冬木の聖杯
魔術に興味がない訳ではない。イリヤを興味深くに観察する。
興が乗ったのか、色好い返事を即答で出した。橙子からすれば、
聖杯に興味がない訳ではない。イリヤを興味深くに観察する。
興が乗ったのか、色好い返事を即答で出した。橙子からすれば、
聖杯に興味がない訳ではない。イリヤを興味深くに観察する。
興が乗ったのか、色好い返事を即答で出した。橙子からすれば、
聖杯に興味がない訳ではない。イリヤを興味深くに観察する。
興が乗ったのか、色好い返事を即答で出した。橙子からすれば、
聖杯に興味がない訳ではない。イリヤを興味深くに観察する。
興が乗ったのか、色好い返事を即答で出した。橙子からすれば、
聖杯に興味がない訳ではない。イリヤを興味深くに観察する。
興が乗ったのか、色好い返事を即答で出した。橙子からすれば、
聖杯に興味がない訳ではない。イリヤを興味深くに観察する。
興が乗ったのか、色好い返事を即答で出した。橙子からすれば、
聖杯に興味がない訳ではない。イリヤを興味深くに観察する。
興が乗ったのか、色好い返事を即答で出した。橙子からすれば、
聖杯に興味がない訳ではない。イリヤを興味深くに観察する。
興が乗ったのか、色好い返事を即答で出した。橙子からすれば、
聖杯に興味がない訳ではない。イリヤを興味深くに観察する。
興が乗ったのか、色好い返事を即答で出した。橙子からすれば、
聖杯に興味がない訳ではない。イリヤを興味深くに観察する。
興が乗ったのか、色好い返事を即答で出した。橙子からすれば、
聖杯に興味がない訳ではない。イリヤを興味深くに観察する。
興が乗ったのか、色好い返事を即答で出した。橙子からすれば、
聖杯に興味がない訳ではない。イリヤを興味深くに観察する。
興が乗ったのか、色好い返事を即答で出した。橙子からすれば、
聖杯に興味がない訳ではない。イリヤを興味深くに観察する。
興が乗ったのか、色好い返事を即答で出した。橙子からすれば、
聖杯に興味がない訳ではない。イリヤを興味深くに観察する。
興が乗ったのか、色好い返事を即答で出した。橙子からすれば、
聖杯に興味がない訳ではない。イリヤを興味深くに観察する。
興が乗ったのか、色好い返事を即答で出した。橙子からすれば、
聖杯に興味がない訳ではない。イリヤを興味深くに観察する。
興が乗ったのか、色好い返事を即答で出した。橙子からすれば、
だ方がいい。士郎の提案に橙子は乗り、商談は成立した。幾日かをかけて、器の作成から魂を移す工程を終えると士郎達は橙子と別れる。イリヤはその全てを見届けていた。弟の私が偽－イリヤに生きて欲しい、といつもので、その為に奔走していた労力に報いることは、姉として受け入れるしかないと思ったのだ。

人並みの寿命を、新しい体ごと手に入れたイリヤは微笑んだ。彼女の起源は「聖杯」である。そして魔術回路は魂に根差したのか、ケロ健全な肉体を得て、肉体の成長という機能を得られたのか、何がどうともそれほど重要ではない。アインツベルンの秘法が外部に漏洩しても、イリヤは拘るものではない。ムや、イリヤを冬木に送り届けた士郎は、その日の内に日本を発った。今度は桜の番だ、と言ったが。それでもではない。冬木には居らぬ、居たくないという気持ちが強かったのだ。何故なら……? やらねばならない事がある、気がしていった。だから士郎は一心に活動する。自分が自分ではないような違和感が拭えない。
聖で冬るど、のリ衛そ侵ヤをたいよ士杯に―木事来まこ骸ヤ冠宮イの入そのし絶自かかう郎戦にもたい。ホれとの位とリ雪はれ魂かやら。るハい。のハ入そん為自ら。だは争いなるムで、肉魔アヤにしのしさのし過かせくくい。のハ冬くけベさつう聖すだ。倣最ベ出ツた。
た所は、常に貧困と〜死を食い物にする外道が存在する事を探していたのだ。間桐の翁に有効な礼装、霊渓や霊器を所有している可能性もある。

何故知っているのか、そこに疑問はない。頭に埋め込まれたよう故の記憶を思い出していたのだ。それを違和感として感じられない状態だった。

提い、整備の仕方も知識にあった。士郎は神秘の秘匿に関しても人一倍気を付けるつもりではあった。

蛇の道は蛇と云。武器商人に接触し銃器を一通り揃える。取り扱い、整備の仕方も知識にあった。士郎は神秘の秘匿に関しても人一倍気を付けるつもりではあった。

死を食べ物にする輩を討ち、その研究成果を奪う。士郎に不要な物は全て時計塔に二東三文で売り払う。そうするつもりでいて、しかし真っ先に士郎の目に入ったのは〜〜悪』などの賄うつもりでいる。

ナイトなどで賄うつもりでいる。死を食い物にする輩を討ち、その研究成果を奪う。士郎に不要な物は全て時計塔に二東三文で売り払う。そうするつもりでいて、しかし真っ先に士郎の目に入ったのは〜〜悪』などの賄うつもりでいる。

ナイトなどで賄うつもりでいる。死を食い物にする輩を討ち、その研究成果を奪う。士郎に不要な物は全て時計塔に二東三文で売り払う。そうするつもりでいて、しかし真っ先に士郎の目に入ったのは〜〜悪』などの賄うつもりでいる。

ナイトなどで賄うつもりでいる。死を食い物にする輩を討ち、その研究成果を奪う。士郎に不要な物は全て時計塔に二東三文で売り払う。そうするつもりでいて、しかし真っ先に士郎の目に入ったのは〜〜悪』などの賄うつもりでいる。
どうすればいいのか、皆目見当もつかない。故に全ては手探りだ。衛宮士郎の名前を使う気はない。フィクションという偽名を名乗り、紛争跡地の復興に努める。募金を募り、人を集め、食事の配給をする。自分なりに考え計算していた物資は瞬く間になくなった。食べ物を前に人々が暴徒化し、無関係な人達を混乱させてしまった事がある。銃やナイフを突きつけられ、所持しているものを脅し取ろうとする者もいた。利権に絡むからやむを、暴利を貪る者や、勝手をするなら賄賂を寄越せと軍の間人が絡んでくる事もあった。凡そ想像しうる限りの困難が士郎を襲った。

直接的な命の危険は、どうとでもなった。戦闘技術で、国軍の軍人を相手にしても遅れを取りはずしない。身体能力を強化し、必要な火器を投影して戦う士郎は、たとえ手ぶらであっても常に武装していけるに等しい。狙撃されるかもしれない箇所には、そもそも近づかない。

しかし、南部無辜の人の人質に取られたか。捕まり、拷問されかた。殺されない、脱出せんと、自身を捕らえた者とも辛抱強く交渉した。しかし逃れ、脱出しぼ、自身を捕らえた者とも辛抱強く交渉し、身内に警戒をした。それでもなお、彼が庇護しようとする人々が巻き込むようだ、自嘲した。でも止める事は出来なかった。故に士郎が最も悩んだのは、彼が庇護しようとする人々が巻き込む暗殺の危機も、事前に察知する術がある。

何度無辜の人の人質に取られたか。捕まり、拷問されかた。殺されない、脱出せんと、自身を捕らえた者とも辛抱強く交渉し、身内に警戒をした。しかし逃れ、脱出しぼ、自身を捕らえた者とも辛抱強く交渉し、身内に警戒をした。それでもなお、彼が庇護しようとする人々が巻き込むようだ、自嘲した。でも止める事は出来なかった。故に士郎が最も悩んだのは、彼が庇護しようとする人々が巻き込む暗殺の危機も、事前に察知する術がある。
士郎は良心の呼責もなく、国家元首を脅すようになっている。

特殊部隊に襲われるのも日常茶飯事で。彼らを殺さずに制圧するのが困難。逃走し、隠れ、狙撃で一方向に殺戮する次第に士郎の存在は、彼らにとって一時的な大きな物となっ</p>
それが全てだ。それだけが全てだ。士郎は自嘲する。人の幸福が自分助けになるのだ。ぐちぐちと迷う事は、ない。国連にかかえており申請していたボランティア団体の設立案が通った。世論を味方につける為に、辛抱強く色々な国の取材も受けてきた苦労が実を結んだのだ。代表は自分ではない。士郎がこの地に来て以来意志を同じくしてくれていた、気立っていい女性に代表を務めてもらったのだ。この地に根を張るつもりなどないから、地元の人間に務めてもらった方がいい。･･･その意を汲んでもらったのである。教員を募った。食糧・衣類・文房具などの物資を手配するコネや金を、ここ数年で覚えてしまったあらゆる手段で獲得していた士郎は、それらが私欲で国に横領される事を抑制すべきく･･･またしても憑迫した。
自分はこの国を離れるが、もし何かあれば必ず戻ってきたい前達の士郎は口では己を正義の味方と言え、前度ある子供達に絵画を語る。しかし二十三歳になった士郎の胸中には、それとは真逆の思いがあるものか。俺は決して、あの赤い外套の弓兵のようには成れないのであるのか。俺は決して、あの赤い外套の弓兵のようには成れないのであるのか。俺は決して、あの赤い外套の弓兵のようには成れないのであるのか。俺は決して、あの赤い外套の弓兵のようには成れないのであるのか。俺は決して、あの赤い外套の弓兵のようには成れないのであるのか。俺は決して、あの赤い外套の弓兵のようには成れないのであるのか。俺は決して、あの赤い外套の弓兵のようには成れないのであるのか。
て、脅し、奪った。その犠牲の上に様々な善を敷いた。まさに偽善者だった。性質の悪い事に、この偽善は悪、己のエゴから生じたものなのである。そして後悔がまるでないと来た。アーチャーは腕を組み、痛みを堪えように目を瞑る。切嗣は赤いフードの下で、静かにその足跡を見届ける。

士郎が後に残したのは、食糧の配給、建築学、団体の維持の方法や外部組織との交渉のノウハウだ。立ち去る間際、士郎の設立した団体の代表を務める事となる女性は士郎に繋りついた。あなたを愛しています、と。滴を眦から淹ませ、微笑む女性は美しかった。

アーチャーはこめかみを揉み、脂汗を額に浮かばせて目を背ける。銳敏に切嗣の気配の変化にアイリスフィールが気づく。しかし切嗣はソツと目を逸らした。あなた？どうかしたのかしら？

あなたは、頑として口を開く事はなかった。視点が暗転する。場面は空港だった。士郎はその地を離れるのである。そして士郎はヨーロッパに飛んだ。特にこれといって目的があった訳ではない、ちょっとした療養の
為だった。自然豊かな土地で、これまでの疲れを癒すつもりでいた。後ろから駆け寄ってきた幼い少女が、満面の笑みで士郎の腰に抱きついた。士郎は苦笑して、その娘の頭を撫でる。何故か、どこ行っていても子供に好かれていたから、こうした事にも慣れたものだった。そしてその少女は士郎同様、旅行に来ていた日本人一家の一人娘であり。彼女は名を、岸波白野と云った。
麗らかな日差しに微睡んでいると、なんでもない日々の尊さに感じ

木の枝に遮られた木漏れ日が、平凡な宝石のように、激動の日々
中にある都市に名物となる観光名所があるでもなし。他者の目を引
くような特別な催しがあるでもない。故に散散としている。しかし寂れている訳でもない。生まれ育っ
た者にとっては退屈で、いずれは巣立つだろう土地だった。

子供は少なく、若者はそれなりの、年寄りばかりの街。時の流れ
が酷く緩やかで、士郎はそれを気に入った。恐らく岸波一家の夫妻
もそこを気に入り、この都市に滞在しているのだろう。

「あ、いたいた！　しーろーうーさーん！」

何をするでもなく木の陰で地面に横たわっていると、士郎を探し
ていたらしい少女が駆け寄ってきた。

何が楽しいのかにここについて、士郎の傍にやって来たのは栗色の
髪を背中まで伸ばした、小学生高校年ぐらいの少女だった。
そ の 容 姿 に は 取 り 立 て 特 徴 と い った も の は な い。 し か し 充 分 に 愛 ら し い、 稚 气 と 快 活 さ を 持 っ た 爛 漫 な 少 女 だ。 彼 女 は 士 郎 の 傍 ま で 来 る と、 士 郎 を 真 似 る よ う に ダ イ ブ し て、 士 郎 の 腕 に 頭 を 乗 せ た。

「 何 か 用 か、 白 野 」

甘 ん じ て 腕 枕 を 受 け 入 れ、 士 郎 が そ う 言 う と、 白 野 は ご ろ ご ろ と 喉 を 鳴 ら し た。

「 甘 ん じ て 、 特 に 何 も な い よ。 何 も な い か ら 来 た の だ」

「 な ん だ そ れ 」

苦笑 す る。 確 か に 子 供 に と っ て は、 本 当 に 何 も な い 故 に 退 屈 だ ろ う。 そ の 何 も な い と し た の が、 得 難 い も の だ と 云 う 事 を ま だ 知 ら な い か ら。 そ し て 出 来 れ ば、 知 ら な い ま ま の 方 が ず っ と い い。

「 固 い ! 」

「 … … 」

「 日 向 ぼ っ こ ー 」

「 」

暇 と 体 力 を 持 て 余 し、 ご ろ ご ろ と 転 が る 白 野 が 士 郎 の 腹 に 頭 を 乗 せ た。 そ し て 目 を 瞑 く。

ぼ す。 と 頭 を 上 下 さ せ て 腹 筋 の 感 触 を 確 か め る 白 野。 士 郎 は 呆 れ た。
黙っていたら物静かな印象なのに、口を開けた活発な性が顔を出
す。そんな白野に士郎は嘆息をして上体を起こした。

木の幹に背を預けた。
白野は士郎の膝に転がっていった。丁度いい位置を探り、膝枕をする。それだけで無邪気に笑う様に、青年は微笑んで頭を撫でてみた。

『うん。構えー、構ってー』

黙っていだら物静かな印象なのに、口を開けた活発な性が顔を出
す。そんな白野に士郎は嘆息をして上体を起こした。

木の幹に背を預けた。
白野は士郎の膝に転がっていった。丁度いい位置を探り、膝枕をする。それだけで無邪気に笑う様に、青年は微笑んで頭を撫でてみた。

『うん。構えー、構ってー』

黙っていだら物静かな印象なのに、口を開けた活発な性が顔を出
す。そんな白野に士郎は嘆息をして上体を起こした。

木の幹に背を預けた。
白野は士郎の膝に転がっていった。丁度いい位置を探り、膝枕をする。それだけで無邪気に笑う様に、青年は微笑んで頭を撫でてみた。
白野は苦笑いする。まるで信じていないが、それでも当然だろう。

蔷薇の皇帝やラムネの王、日本で言えば源氏の頼光や義経、織田信長や沖田総司が実は女だと言っているようなものだ。有り得ないだろう、土郎の主観では特に源氏二人と信長と天才剣士とか。

それで物凄い健啖家で、不老だったから容姿は十代半ばの少女のそれだったんだ。

「そうして物凄い健啖家で、不老だったから容姿は十代半ばの少女のそれだったんだ。

『蔷薇の皇帝やラムネの王、日本で言えば源氏の頼光や義経、織田信長や沖田総司が実は女だと言っているようなものだ。有り得ないだろう、土郎の主観では特に源氏二人と信長と天才剣士とか。』

分からないぞ、と。まだまだ青さの残る顔つきで笑む青年を、微妙な目で詰めることを。

ああ。俺の考えだがあ。だって彼らは天才だったり、特別な生まれたあたり、過程を踏むのは学問でしかない。俺の考えだがあ。だって彼らは天才だったり、特別な生まれたあたり、過程を踏むのは学問でしかない。俺の考えだがあ。だって彼らは天才だったり、特別な生まれたあたり、過程を踏むのは学問でしかない。俺の考えだがあ。だって彼らは天才だったり、特別な生まれたあたり、過程を踏むのは学問でしかない。俺の考えだがあ。だって彼らは天才だったり、特別な生まれたあたり、過程を踏むのは學問でしかない。
れな訳じゃない。挫折しない訳でもない。彼らは皆、才能の如何に拘わりなく絶対に諦めなかった。その体よりも心が強かった。才能や血筋は真似できないが、その心の在り方だけなら辿る事は出来なくなる。だから白野、ここぞという時には、絶対に諦めな。彼らは皆、才能の如何に拘わりなく絶対に諦めなかった。挫折しない訳でもない。挫折しない訳でもない。

本人に自覚はないのだろう。しかしその言葉には、途轍もない重り、絶対に道は拓けると信じるんだ。そこの体よりも心が強かった。才能や血筋は真似できないが、そこの心の在り方は絶対に諦めな。白野は頷いた。それはとても大切な事のように思えたからだ。

士郎は冗談かして相好を崩す。可笑しそうに、白野も顔を緩めた。

取りとめのない会話は夕暮れまで続いた。土郎は白野を両親の泊まる宿に送り届け、彼らと卓を囲んで夕飯を共にした。白野の両親とも打ち解けていて、互いの連絡先を交換し合うほどだった。

その席で士郎は云う。そろそろここを発とうと思っていました。充分休んだので、と。白野はごねた。一緒にしてと。だが士郎はまた会えるからと繰り返し説得して、彼らとの別れを惜しみながらもその街を出た。

ま、場合によりけりだが。時には諦めも肝心だって言うだろう。

…それにそれ。

『ま、場合によりけりだが。時には諦めも肝心だって言うだろう。』
思い立ったら、時間帯に関係なく動く。士郎の癖だった。

街を歩いて出る。元々目的の地はなかったから、隣街まで歩いて、そこでタクシー乗りバス乗りに乗ろうと思っていた。─いい街だった。いい出会いがあった。いやどこに行っても出会いは必ずある。彼ら一家との思い出を胸に抱けば、善き営みの思い出に勇気を賜る─

二時間ほど歩いてただろうか。

辺りはすっかり暗くなっている。無気のない道だからか、車が通りかかる事もない。道沿いに歩いていると、不意に士郎の所持していた携帯電話が着信した。見るとき、着信相手は岸波夫妻の旦那である。なんだろうと思い電話に出る。すると─

『助げ、でよお！じろうざっ、』

『─』
なんだ、今のは。白野の、声？
真に迫る、魂を削る懇願。悪戯なんて可能性は絶無だ。涙に濡れ
た、幼い悲鳴に偽りはない。
咄嘆に元来た道を振り返る。夜、その空は綺麗な星光に輝いてい
たのに、振り返った先の空は、冒涜的な紅蓮に染まってい
強化の魔術を眼球に叩き込む。心臓が一際強く脈打った。正確に
見て取れる距離ではない。しかしがそれは、嫌になるほどの目につく
事のある——戦火である。
判断は剣那。行動まで一瞬。
剣ではない故に通常よりも魔力は食うが、宝具ではない故に負担
は然程ない。脚を強化し全力で走り出す。士郎の冷徹な部分が確信
していた。
そこに投影した干将莫耶を差し、それを隠すように灰
色の外装甲を投影する。そして大口径の拳銃デクターを物
ライフルを投影した。
それらの街に現れたのは、黒衣の男達。十字架を首に提げた、
無慈悲な断罪者。時代錯誤な騎士団がいる。彼らは呆気に取られる
間に関わらない、と。
住人を前にするや一覇戮を始めた。
街に火を放ち、住人の浄化を始めたのだ。成す術なく、殺められる人々は、混乱して逃げ出した。しかし街は包囲されている。逃げ場はなく、点在する十字架の黒衣や騎士達、そしてそれとは違う学者然とした者達が人々を殺害し、燃やしてい

『この街に逃げ込んだ死徒は見つかったか』『―ここの街に逃げ込んだ死徒是見つかったか』『いえ、未だ』『祖に迫る不死性を持つと云う。逃せば後々の禍根となるのは必定。ここを滅すを。この街を滅ぼしてでも』『そこの紅蓮を、目に焼き付ける人々がいて。人の死が、心に焼き付く者がいた。』『そんな会話が成されている。だがそんなものに耳を傾ける余裕は、そんな会話が成されている。だがそんなものに耳を傾ける余裕は』『誰が嘘まっているか分からない故に。疑わしきは滅ぼす、精度の焼かれ、滅されていく。誰にもあるまい。逃げ惑う人々は訳も分からぬまに切り裂かれ、焼かれて、滅されていく。』『ならぬ者、滅ぼされし者は、滅ぼされし者。』必死に息を潜め、隠れる者もいる。だが、巻き込まれる。元より逃げ場などない。死徒を見つけたぞ！その声に続々と参じる聖堂騎士、単独の群れから成る代行者。漁夫の利を得るとする魔術会の蒐集者達。
代行者の一人を引き裂き、一個の吸血鬼が死に物狂いで血路を拓いて逃走していた。
死闘が繰り広げられる。精鋭であるはずの聖堂騎士や、魔術師達が犠牲を払いつつも死徒を追い立てていた。結実に追い詰めていく。
やがて死徒は衆寡敵せず、多少の損耗は度外視して逃げの一手を打った。

結界に囚われる訳にはいかぬ。彼もまた必死であり、自らの傷を癒す為に餌を求めた。
逃げ惑い、隠れ潜んでいた幾人かの無辜の住民をその場で喰らい、己の養分とする。そして自らの手足である魔獣を始末し非常に確実に保した。
囲みを突破し死徒が逃げ去る。殺戮者達がそれを追う。

一部の精鋭が死徒を追った。残された聖堂騎士らが浄化の炎を掲げる。

一部の精鋭が死徒を追った。残られた聖堂騎士らが浄化の炎を掲げる。

一部の精鋭が死徒を追った。残された聖堂騎士らが浄化の炎を掲げる。

この絶望の火の海燃やし絶望されるモノ。残骸に呑まれる。こんな所で、こんな訳もわからないまま死んでしまうのか。殺されてしまうのか。
ああ——誰か、頼む……助け……
仰向けに倒れ、虚空に伸ばされた手が、力尽きて地に落ちる。
だが、落ちる寸前。その手を掴む者がいた。

『任せろ』
それは。
先刻別れたばかりの、精悍な顔立ちの青年だった。

火の手を放った者らの正体を、一目で察した士郎は、彼らと事を構える考えを棄却した。
しかし救える者を救えない訳にはいかない。士郎は彼らの目を盗み、時に発見される恐怖が高い場合には、容赦なく不意を打ち射殺した。

士郎は自身が保護した者を、街の外れまで運んでいた。或いは安らかに、全な地点を知らせ、自身の脚で動ける者は誘導した。今、最後に岸波夫妻を保護し、街の外れにある森に連れて行い、そこで固まっていた住人達と合流する。

士郎は一番重態だった岸波夫妻の旦那に応急処置を施し、少ない。たったの、十名ほどか。
だがこれが限界だった。己の力の無さを悔やむも、後悔に浸る暇もない。士郎は一番重態だった岸波夫妻の旦那に応急処置を施し、
彼らにここで騒ぎが治まるまで動かないように厳命する。

これだけ組織立てての行いだ、下手に助けを呼べば犠牲が広がるだけだと説明し、決して勝手な真似をするなと言いないと聞かせる。そんな士郎に縛りつく女がいた。白野の母だ。彼女は今まで気絶していたのを目を覚ますなり取り乱して士郎に縛ったのだ。娘を助けて、

あった白野の父に、事の次第を聞いている。日く、化け物に襲われたと。<br>それに中よろれれた、と。

士郎さん——白野の笑顔と、声が脳裏を過ぎる。口の端を噛み、そ

の結末が訪れない事を祈った。
分である。ならば、一秒でも早く駆けつけねばならない。助けて、
士郎さん。そう彼女は言った。なら、助けに行こうが俺だと士郎は
決めてる。そう、それは────エミヤシロウだからではない。士
郎が元来、助けを求める声に背を向けた事などなかったが故の─
死体が、転がっている。

死体、
少女の、
死体。

残像を引いて、森林の中を駆け抜けていた時の事だ。士郎は咄嗟
にその傍に立ち止まり、遺体を確認する。────金髪の、見知らぬ少
女だった。

黒衣を纏っている。十字架を首に提げていた。白野ではない。そ
れに安堵する己を嫌悪し、彼女の冥福を祈る。せめて彼女が信じた
信念が報われるように。

残像を引いて、森林の中を駆け抜けていた時の事だ。士郎は咄嗟
にその傍に立ち止まり、遺体を確認する。────金髪の、見知らぬ少
女だった。

黒衣を纏っている。十字架を首に提げていた。白野ではない。そ
れに安堵する己を嫌悪し、彼女の冥福を祈る。せめて彼女が信じた
信念が報われるように。

残像を引いて、森林の中を駆け抜けていた時の事だ。士郎は咄嗟
にその傍に立ち止まり、遺体を確認する。────金髪の、見知らぬ少
女だった。

黒衣を纏っている。十字架を首に提げていた。白野ではない。そ
れに安堵する己を嫌悪し、彼女の冥福を祈る。せめて彼女が信じた
信念が報われるように。

残像を引いて、森林の中を駆け抜けていた時の事だ。士郎は咄嗟
にその傍に立ち止まり、遺体を確認する。────金髪の、見知らぬ少
女だった。

黒衣を纏っている。十字架を首に提げていた。白野ではない。そ
れに安堵する己を嫌悪し、彼女の冥福を祈る。せめて彼女が信じた
信念が報われるように。

残像を引いて、森林の中を駆け抜けていた時の事だ。士郎は咄嗟
にその傍に立ち止まり、遺体を確認する。────金髪の、見知らぬ少
女だった。

黒衣を纏っている。十字架を首に提げていた。白野ではない。そ
れに安堵する己を嫌悪し、彼女の冥福を祈る。せめて彼女が信じた
信念が報われるように。

残像を引いて、森林の中を駆け抜けていた時の事だ。士郎は咄嗟
にその傍に立ち止まり、遺体を確認する。────金髪の、見知らぬ少
女だった。

黒衣を纏っている。十字架を首に提げていた。白野ではない。そ
れに安堵する己を嫌悪し、彼女の冥福を祈る。せめて彼女が信じた
信念が報われるように。

残像を引いて、森林の中を駆け抜けていた時の事だ。士郎は咄嗟
にその傍に立ち止まり、遺体を確認する。────金髪の、見知らぬ少
女だった。

黒衣を纏っている。十字架を首に提げていた。白野ではない。そ
れに安堵する己を嫌悪し、彼女の冥福を祈る。せめて彼女が信じた
信念が報われるように。

残像を引いて、森林の中を駆け抜けていた時の事だ。士郎は咄嗟
にその傍に立ち止まり、遺体を確認する。────金髪の、見知らぬ少
女だった。

黒衣を纏っている。十字架を首に提げていた。白野ではない。そ
れに安堵する己を嫌悪し、彼女の冥福を祈る。せめて彼女が信じた
信念が報われるように。

残像を引いて、森林の中を駆け抜けていた時の事だ。士郎は咄嗟
にその傍に立ち止まり、遺体を確認する。────金髪の、見知らぬ少
女だった。

黒衣を纏っている。十字架を首に提げていた。白野ではない。そ
れに安堵する己を嫌悪し、彼女の冥福を祈る。せめて彼女が信じた
信念が報われるように。

残像を引いて、森林の中を駆け抜けていた時の事だ。士郎は咄嗟
にその傍に立ち止まり、遺体を確認する。────金髪の、見知らぬ少
女だった。

黒衣を纏っている。十字架を首に提げていた。白野ではない。そ
れに安堵する己を嫌悪し、彼女
代行者・執行者の生き残りは三人か二人か、或いは既に一人になった。

ならばそんな怪物に士郎が単独で当たったところで勝機は殆どないだろう。かといって退く事は選択肢としても存在しない。救援に来たフリーランスの魔術使いという線で、横槍を入れるのが最善だ。

ここまでで消耗していた対物ライフル、デザートイーグルの弾丸を投影し、装填。弾丸、銃身を強化し、耐久力と破壊力を向上させた。相手としては元より過剰火力をもつだろう。そこで対人としてははるかに有利である。相手の武器を伴った存在。霊体のサーヴァントではない。故にここでは手の武器も通用する。肉体を破壊する一端に於いては、戦闘の現場に辿り着く。即座に周囲の状況に目を走らせながら士郎は拳銃を口に咥える。対物ライフルを両手に構え、片膝をつき、全身を強化して無茶な態勢での狙撃を行う準備に入った。開けた空間だった。湖がある。その畔で、一人の女が戦闘を行っている。人間の無惨な死体が二体転がっている。既に壊滅していたのか。死徒は人間の形を逸脱し、都合三体の魔獣を使役している。本体は全長メートル、体重三百kgはありそうな筋骨隆々かっ二足歩行の獅子といった姿をしていた。三体の魔獣はそれぞれ、虎、大猩々である。戦場。そして人間側の数。少数精鋭には勝てると踏んだか。

何故逃走を選んだはずの死徒が戦闘に突入したのか。

敗色濃厚だったからではないのか？
そしてその要因とは？ 先程と異なるのは、虎、大猩々である。
所なら勝てるか？後者は考え辛い、流水を克服出来ない死徒が、わざわざ湖の畔を戦場に選ぶ意義がない。ならば数か。危険で言えば、代行者や執行者は、決して聖堂騎士団に遅れを取らない。では比較するに、代行者や聖堂騎士の違いは？

女が軽快なステップを踏み、革手袋に包まれた拳を振るう。一閃、二閃。稲光のように鋭く迅い拳の軌跡が畦虐心も露に襲い掛かってくる死徒の腕を弾き、顎を下からカチ上げる。狮子を象る頭部が破裂するほどの拳撃。されど女はバックステップで素早くその場から飛び退いた。死徒は頭を撲された程度では死なないのか。瞬く間に頭部が再生する。虎、猟、大狸々の三体の魔獸が女を襲う。それらを捌きながら女は立ち回り、着実に損耗を強さないように常に包囲を崩さない上に、それぞれが女を遥かに上回る身体能力を持っている。この女さえ殺せば、と死徒は躍起になっていたらしい。

代行者や執行者などの精鋭を屠れば、後は烏合の衆。封印される前に聖堂騎士も屠れる自信があるのだろう。聖堂騎士団の楯と成り得る彼らさえいなければ。

しかし、女はそれでも粘る。冷徹に戦闘を押し進めている。やが
養分が足りなくなってきたのか、死徒は焦りを見せ始めた。そろそろ、と口の中で呟く。
灰の外装を肌裏、腕に納めていた干将を手近の木の幹に突き刺し、
その頭部を狙撃する。強化した身体能力に物を言わせ二連射は、
再生成するまで視覚と嗅覚、聴覚は死ぬ。女は咄嗟に転がって死地を
逃れ、狙撃地点に目を向けてきた。

何者かは知りませんが、助かります。

「お前が喰らった街の人間の怨みだ、此処で死ね。」と。する

死徒の頭部が再生する。怒り狂って士郎を睨む獅子頭。士郎は嘆

冷徹な声音には、しかし微かな安堵の色があった。戦闘技術は卓

越していながら、精神は張り詰めていたのだろう。故に疲弊してい

たとはいえ、足をとられて転倒してしまった。

死徒の頭部が再生する。怒り狂って士郎を睨む獅子頭。士郎は嘆

いた。
と死徒は憎悪の滲む瞳に喜悅を満たし、自らの巨体の腹に手を突っ込む。【奇妙な膨らみがある的に怪しいと睨んだが。】
白野の小さな体を、頭から食い潰さんと顎を開く獅子の後頭部に、木の幹に突き刺していた干将に引き寄せられた、投擲しておいた莫耶が突き刺さった。虎の一種が投射する物をオリジナルに近い性能にしている事で、今回投射した干将莫耶は、英霊エミヤが好んで投影する物を莫大な威力を発揮する。
後頭部に突き立った莫耶に悲鳴を上げ、動きが止まる寸前に木の幹の干将を引き抜いて投擲。莫耶に吸い寄せられ獅子頭の眉間に突き刺さる。白野を取り落とし、倒れ伏した瞬間に対物ライフルを捨て駆け出す。士郎は白野を救出した。息は、ある。まだ生きている。白野は白野を抱えて女の傍に移動した。
彼女が干将莫耶が宝具である事を悟ると、それについて何かを言わぬ前伝える。虚偽だ。宝具を投影するなどと知らされる訳にはいられぬ前に伝える。虚偽だ。宝具を投影するなどと知らされる訳にはいられない。
か

執行者がいるという事は、この死徒は封印指定の魔術師の元人間

なのだろう。知られた瞬間に、士郎もまた魔術協会に追われる身と

なるのは目に見えていた。まだ伝承保菌者扱いされる方がマシであ

る。

俺は衛宮士郎。フリーランスの魔術使いだ。あんたは？

私は―

士郎の死角から襲い掛かってきた熊の頭部を女が拳の一撃で粉碎

し、女の死角から追ってきた虎の頭部を士郎が拳銃で撃ち抜く。女

は名乗った。

これより先、長く共に共同戦線を張る事になるその名を。

聖杯戦争の覇者と肩を並べる事になるとは、奇遇ですね。

パゼット・フラガ・マクレミッツ。封印指定の執行者です。

暗闇故に、顔は見えなかったが。その名に、懐しきを抱く。

パゼットの死角になるように体の向きを変え、反対の手中にもう一

の拳銃を投影する。死徒がもがきながら干将莫耶を抜き、それを

地面に捨てた。血走った目が睨み付けてくる。

負ける気は、まるでしなかった。

負ける気は、まるでしなかった。
士郎くんの戦訓
4/5

― 所詮は数ある敵の一つ。結果を論じるのも無粋だろう。

魔術師にとって最悪の刺客「封印指定執行者」バゼット・フラガ・マクレミッツと衛宮士郎は、祖に匹敵する不死性を持つ人間の死徒を、白野という護るべき者を抱えたままに屠った。

恐るべきはその身体性能とその不死性。だが裏を返せばそれのみにしか脅威はなかった。真正の祖であれば話は別だろうが、元が実戦経験の浅い学者が本質である死徒だ。死徒へと変じたのが人の短すぎる寿命より脱却する為であれば実戦を経験しようとするはずもない。自らの目的を達する為の探究に耽っていた死徒は、歴戦の執行者と魔術使いの連携を前に敗れたのだ。残されたのは、封印指定されるほとどの魔術師の秘法、その情報の全てが刻まれた魔術刻印付きの死徒の骸である。それを前にフリーランスの魔術使いを自称する士郎と、執行者であるバゼットは互いを牽制し合っていた。

ありませんね。確かに貴方の銃弾がこれの命を射止めた。しかしそ私も仕事です、これを貴方に譲る事は出来ない。

そうか。だが俺としても、無償でそちらに譲れば赤字だ。かとい
バゼットは士郎が援護に来たのはギリギリで、危機を救ってもらったと思っているが実際に違う。バゼットと死徒を潰し合わせ、頑合を計らうのは気が引けます。ま\nだ余力のある貴方と奪い合い、命のやり取りをするのは気が引けません。

俺としても時計塔に眺まれる真似は控えたいからな。交換条件を
相手から謎歩を引き出し易くする為の欺瞞。中東にいた頃このよ
うな言い回しを覚えた。ロンドンにいた頃、ルヴィアから貴族に特有の勿体ぶった話術を
習ったが、それを独自に磨いたものである。

それは……

俺が救出したこの街の生き残り、彼らを見逃す事だ。無論聖堂
教会からも手出しがないように手配しろ

ヴァラツキは即答しなかった。出来たか否かよりも、怪訝さが前面
に出ている。しかしこれを諦める気は士郎にはない。威圧する殺気は、
本物だ。
吞めないなら、アンタを此処で始末して、俺が自分で時計塔と交渉する。この商品を手土産にすれば、まず吞ませられる。

バリの問いは、真理だった。一つの都市を死都に変えても、吸血種を減ぼさんとする聖堂教会のやり口は古来、珍しいものでもなんでもない。ありふれた犠牲であり腐敗な悲劇だなんて—そん

な事は知っていた。だが〈知っていっただけ—〉だと士郎は痛感し、苦々しに吐き捨てる。

俺は俺の信条に肩入れしているだけだ

俺は俺の信条に肩入れしているだけだ

俺は俺の信条に肩入れしているだけだ

ああ。—あこぎな商売だ。余所様に迷惑を掛けげる真似は、申し

ないし、させてもいけない。

バリは、そう語る士郎の目を見ていた。

やあって彼女は顔。士郎にはなんら利のない話だが、その為に商品価値の高い魔術刻印を謎めると言うなら嘘はあまる。

彼の言葉を信じる事にしたのだ。

そうして商談は成立する。バリは死徒を回収し、その団を辞

し。士郎は白野を背負って彼女の家族の待つ場へと向かう。

士郎に涙ながらにありがとうと何度も頭を下げる岸波夫妻。彼ら

が礼をしたいと言うのを士郎は丁重に辞した。代わりに娘を大事に

してほしいと。言うまでもない事だったが。そして数少ない生き残

りの彼らを隣街まで護衛して歩き、そこで暫し固まって待機して。
翌日に魔術協会から出向してきた魔術師に暗示を掛けてもらい、彼らは昨夜の事件を不幸な大火災だったと思い込ませた。

士郎は自分の認識が余りにも甘かった事に、身を切る思いだった。

何も知らない人々だけが摺取される。そんなものは間違っている。

死徒。外道の魔術師。

昔からそうだったと思い知った。聖堂教会は教義がどうこう言っているくせに、強力な死徒に関しては野放しにしている。手に負えないから。

弱従、赦してはならない。

自分の目を、滅ぼすのだ。殆どの死徒の根は、彼方だ。根から絶つ、その祖を、滅ぼすのだ。殆どの死徒の根は、彼方だ。根から絶つ、故に根をぎと云う。

「－死徒。脅殺の根源の一つ」

存在するだけで多くの命を食らう。人類を否定する存在を滅する。

人の営みに寄生する吸血種を狩り尽くせば、岸波一家のような事例は激減するだろう。人の身を捨てて、死徒となる魔術師も狩りの対象は激減するだろう。人の身を捨てて、死徒となる魔術師も狩りの対象は激減するだろう。
戦地の復興、飢餓の根絶、それらもまた戦うべき強大な敵だが。
それらより先に滅ぼすべきは、表社会の誰も認知していない怪物である。
士郎は独自に戦いを始めた。見果てぬ戦い、命数が絞っても足らない壮絶な戦争の始まりである。しかし、士郎は思い知る事にならない。己がただ逸だっただけのこと、愚か者である。
『あ、ああ、あああああ～！』
戦地の復興、飢餓の根絶、それらもまた戦うべき強大な敵だが。
それらより先に滅ぼすべきは、表社会の誰も認知していない怪物である。
士郎は独自に戦いを始めた。見果てぬ戦い、命数が絞っても足らない壮絶な戦争の始まりである。しかし、士郎は思い知る事にならない。己がただ逸だっただけのこと、愚か者である。
『あ、ああ、あああああ～！』
己の愚かさを呪った。
―俺一人で出来るもの、等と傲っていた。全ては土郎が単独で活動していたのが故の失態。協力者を作り、複数で当たっていれば防げた事態だったはずだ。知っていた。弁えても、一人で戦い抜いてみせる、なんて。思い上がりも甚だしいと気づかなかった。
心が折れそうになった。
死にたくないとい、涙する死刑の少年を、己の手で殺した。この子だけはと懇願する、我が子を守ろうとする死刑の女性を親しが萎えそうだった。
平和な田舎町が、死都となった。土郎は無実の人々を、罪もない人々を、己の手で殺戮せねばならなくなった。―士郎に遅れて来た、魔術協会の魔術師の団体が、死都を滅するのに加担しなければならなかった。
心が砕けそうだった。
この子だけはと懇願する、我が子を守ろうとする死刑の女性を親しが萎えそうだった。
心が萎えそうだった。
それなんて事。なんて馬鹿な事を、俺はしてしまったんだ…！

悔先に立たず。膝を折ろうとした。だが、士郎は立ち止まる事出来なかった。
もしここで止まれば、士郎の増長の為に防げなかった悲劇を、ただの転じてしまえば、萎えそうな己に活を入れ、士郎は二度と同じ失敗をしない為に協力者を得ようと考えた。

真っ先に思い浮かんだのは、執行者。封印指定対象の魔術師と対する事の多い士郎なら、利害は一致する。味方におけるのに苦労はしないはず。そして連想されたのは、士郎と面識のあるバゼットだっただ。彼女は封印指定対象の魔術師の刻印を手土産に魔術協会と交渉し立つ。自分がこれまで上げた過去の成果を例に挙げ、今後も活動を続ければ確実な利益を手にする為に、封印指定執行者と行動を共にさせてもらいたいと。その執行者はバゼットを希望した。

彼女の家は、神代から伝わる数々の魔術、道具や秘宝を保持する名門だが、頑として外部との繋がりを断っていた。バゼットが家督を継いでから魔術協会の門を叩いたが、権威はあっても権力のない彼女を持って余した魔術協会は、封印指定執行者として便利使いしていいたのだ。

『まさか、貴方と行動を共にする事になるとは思いもしませんでし
相棒となっただけだが、意外にも相性は良かった。

互いに合理主義で、戦闘に於いてはバゼットが前衛を、士郎が後衛を務める。役割と能力が噛み合い、阿吽の呼吸となるのに場数は必要なかったのだ。彼女は生命活動が送れるのならば、どんな状況でも構わないほど栄養と食事は楽しみむという意識も欠け、味と栄養の二の次で、食べ終わるまでの時間のみを気にしていたのだ。

行きつけの外食店はチェーン展開された牛丼屋であるという有り様で、その理由は商品が出てくるまでの時間も、食べ終わるまでの時間も短いかというものです。服装も機能性があればよい。装飾は無用。

相棒の巻状に士郎は激怒した。

相棒の惨状に士郎は激怒した。初ここそ、それこそハンバーガーでもいいなんて宣っていたダメな女だったバゼットは、しかし、故にこそ士郎に胃袋を掴まれた。

バゼットは落涙した。
私は、貴方に出会うまでの人生を、全て台無しにしてしまった！

貧相な食事を思い返し、バゼットは悲嘆に暮れた。こんな黒逝のような人生経験が偏っている事から、出会った男性に片付けられる惚れ込みに過ぎなかった。パーソンのご飯しか食べたくありませんとまで依頼した。

中身はアレだが、外見は美女である。士郎もまんざらではなくて、マシュの目も冷たい。何故歩む、修羅の道を！エミヤはもう色んな意味で見ているのが辛かった。

どうしてですか！？どうして……！？
というのも、その祖の子に当たる死徒が、反逆したのだという。

祖と子の代わりをかけた死闘は、介入して根絶やしにする絶好の機会。相手は死徒二十五、可能な限りいい条件で事を構えるべきだったのだが。士郎は処に、単独で攻め込むとパゼットに告げたのだ。何故か。それはこの件の他にも、同時に隠れ潜む魔術師の居場所を探り当ててしまったのだった。これまでの経験から一刻の猶予もないと見過ごせなかったのである。しかし祖を襲撃する好機もまた千載一遇。二鬼を追う者は一鬼をも得ずと云うが、今回ばかりはそうするしかない。士郎は年上の女性なので、子供みたいに別行動へ難色を示すパゼットの頭を撫で、微笑んだ。俺が心配なら、速攻で片付けて、応援に来てくれと。パゼットは赤い顔で頷き、すぐに彼の許を発った。

士郎も行動を開始する。パゼットを信頼していない訳ではないが、投影魔術に関して知る人間は少ない方がいい。祖の特異さを考えれば、道具を投影する事もあるだろう戦いである。可能な限り最大のパフォーマンスを発揮するなら、一人の方がいい。士郎はどうして二十五の一角一十八位に列される怪物退治に向かった。
だが士郎は興味を抱いた。銀髪の青年が、完全な死徒ではなく、何より祖より奪ったらしい魔剣を振るう半死徒の青年が、憎悪も露と能力を計り、今後の活動の指標とする狙いもあった。

だが士郎は興味を抱いた。銀髪の青年が、完全な死徒ではなく、何より祖より奪ったらしい魔剣を振るう半死徒の青年が、憎悪も露と能力を計り、今後の活動の指標とする狙いもあった。

何より祖より奪ったらしい魔剣を振るう半死徒の青年が、憎悪も露と能力を計り、今後の活動の指標とする狙いもあった。

何より祖より奪ったらしい魔剣を振るう半死徒の青年が、憎悪も露と能力を計り、今後の活動の指標とする狙いもあった。

何より祖より奪ったらしい魔剣を振るう半死徒の青年が、憎悪も露と能力を計り、今後の活動の指標とする狙いもあった。

何より祖より奪ったらしい魔剣を振るう半死徒の青年が、憎悪も露と能力を計り、今後の活動の指標とする狙いもあった。

何より祖より奪ったらしい魔剣を振るう半死徒の青年が、憎悪も露と能力を計り、今後の活動の指標とする狙いもあった。

何より祖より奪ったらしい魔剣を振るう半死徒の青年が、憎悪も露と能力を計り、今後の活動の指標とする狙いもあった。

何より祖より奪ったらしい魔剣を振るう半死徒の青年が、憎悪も露と能力を計り、今後の活動の指標とする狙いもあった。

何より祖より奪ったらしい魔剣を振るう半死徒の青年が、憎悪も露と能力を計り、今後の活動の指標とする狙いもあった。

何より祖より奪ったらしい魔剣を振るう半死徒の青年が、憎悪も露と能力を計り、今後の活動の指標とする狙いもあった。

何より祖より奪ったらしい魔剣を振るう半死徒の青年が、憎悪も露と能力を計り、今後の活動の指標とする狙いもあった。

何より祖より奪ったらしい魔剣を振るう半死徒の青年が、憎悪も露と能力を計り、今後の活動の指標とする狙いもあった。

何より祖より奪ったらしい魔剣を振るう半死徒の青年が、憎悪も露と能力を計り、今後の活動の指標とする狙いもあった。
事で、十八位の祖は追い詰められている。
だが一手足りない。エンハウンスの魔剣は特に警戒され、士郎の射撃は必要経費とばかりに無視される事ならである。変身能力で躲れる頻度も高くなっていた。

流石の不死性、容易にはいかない。圧しているも油断すれぱ一瞬でひっくり返されそうだ。これが祖か、と士郎は嗤う。

変身能力で躱され頻度も高くなっただ、これが祖か、と士郎は嗤う。

彼らが相手だったならば、既にエンハウンスと士郎は滅されてい光の御子と比べれば、まだ可愛いものだ。ノアンタの力を見ておきたい。

『決めに行く。陽動を頼んだ』

元々死徒の不死性が如何に厄介かを知悉している士郎である。そ半死徒である時点で、魔術協会や聖堂教会に加わるべき道は明確。ならば彼から漏れる恐れは低く、組織からの外れ者となるのは自明。ならば彼から漏れる恐れは低く、もしもその危険があると判断すれば、口封しをするまで的事である。
完
全
な
複
製
品
で
は
な
い。
機
能
の
半
分
を
削
り、形
状
を
改
造
し
た、士
郎
独
自
の
手
が
入
っ
た改
造
宝
具。
剣
で
は
な
い、故
に魔
力
負
担
は
大
き
い
が、こ
れ
ま
で
宝
具
の
投
影
を
多
用
し
て
来
な
か
っ
故
に、冬
木
で
の
戦
い
以
上
の
負
荷
も
な
い。
黒
弓
に
つ
が
る
は
真
紅
の
矢
弾。
長
大
な
そ
れ
が
迸
ら
せ
る
禍
々
し
い
魔
力
の
奔
流
に、十
八
位
の
祖
は
目
を
見
開
い
た。
宝
具
を
投
影
し
た
do
と、と。
『-
-』
偽
・
ボ
ル
ク
Ⅱ
・
死
棘
槍』
形
状
は
短
槍。
矢
とす
れば
些
か
長
い
が、射
出
に
支
障
は
な
い。
必
中
の
呪
詛
は
削
り
落
と
し
た。
故
に
射
手
が
狙
い
を
外
せ
ば
は
し
な
い
が、士
郎
の
矢
は
射
つ
前
に
中
っ
て
い
る。
イ
メー
ジ
が
磐
石
な
ら
ば
必
中
だ
do
た。
真
作
に
近
く
再
現
し
た
の
は、そ
の
必
殺
の
呪
詛。
例
え
聖
剣
の
真
作
do
も
殺
し
き
れ
ぬ
不
死
で
も
殺
し
尽
く
す
絶
殺
の
そ
れ。
「へ
え、悪
く
ね
え
出
来
だ
な。
士
郎
の
投
影
し
た
槍
の
真
作
の
担
い
手
が
感
心
し
た
ふ
ご
に
溢
す。
自身の
宝
具
を
投
影
さ
れ
て
も
特
に
気
に
した
様
子
が
な
い
の
は、クー・フ
ー
ン
不
死
の
祖
の
心
臓
を
挟
り、即
死
さ
ら
す。
斯
く
し
て
祖
の
一
角
を
滅
ぼ
し
た
士
郎
は、エ
ン
ハ
ン
ス
と
今
後
を
話
し
不
死
の
祖
の
心
臓
を
挟
り、即
死
さ
ら
す。
真
祖
do
を
も
不
死
性
で
上
回
る
『混
沌』
す
ら
屠
る
魔
槍
は、真
祖
よ
り
劣
る
の
感
性
で
は
武
器
は
武
器
で
し
か
な
か
ら
な
か
も
し
れない。
合った。エハンスは言う、死徒を殺し尽すと。士郎も言う、なら俺と来ないかと。目的は同じである。自分ならエハンスだ。そして———十八位の祖を討ちにして来ていて、埋葬機関の代行者とも、出会う事にった。

『これ…！』既に戦いの終わった現場に現れったのは、『弓』のシーグである。後には士郎へ外界への守り、赤原礼装を贈る事になる――士郎を中心とする対死徒の狩猟団に与す三人目の同志。その邂逅だっただ。
「…時間」

美遊がボツリと溢す。あっ、とイリヤが時計を見た。するとどう

だ、既に上映開始より五時間が経過しているではないか。
それこそ抜きにしても、普通の小学生児童用リトマを
は色んな意味でキツい。相対は気になるが精神的疲弊は積み重なり
つつあった。寧ろこれまでよく耐えていると、手放しに賛えられて
もしいい。イリヤは引き摺った顔で挙手した。

「あ、あの！ダ・ヴィンチ先生！
これって五時間で終わるんじ
やってたんだですか！？」

「いやあ、ごめんごめん。
…あれえ？
なんか予定過ぎてる……？」

ダ・ヴィンチは悪びれる素振りも近く舌を出して謝ったが、次い
で不思議そうに首を捻った。

五時間のはずが、時間を超出して間もなく六時間となる。どうし
てかと考えてみるも、すぐに思考を放棄した。あんまりにも濃か
ったからね、天才としての本能が雜な仕事に傾き、無意識に密度を
上げたから時間が延びたのだろう。
まあいじゃないか。
うん、後ちょっとだからね」

「ダ・ヴィンち。
フルバージョンを、後で渡してくだい。
後で個人的に視聴します。
今は席を外しますので」

「あっ」
アートリアルタが席を外した。
思わぬ声をあげ、この後の事を見たダ・ヴィンチは両手を合わせ合掌する。
士郎くん、強く生きて。
埋葬機関。
其れは聖堂会の最高位異端審問機関である。教會の矛盾点を、法ではなく力で強制的に排除する組織で、悪魔祓いはなく悪魔殺しを行う代行者の中でも、特に優れた者達が所属する。
構成員は七名と、予備役の一名の少数精鋭。
聖堂騎士団の手に負えない怪物や、災厄に見舞われた際に出動し、彼らの行動が事後承諾でない時はない。場合にやっては教会の意向に背け強権が与え
られれているとか。曰く教会内に於ける異端、厄介者と謗られている

その内の一人にして、第七位『弓』のシエルと出会った。死徒二
十七祖の一角を減ぼし、エンハウンスが十八位の座を襲った直後で

当初戦闘になりそうだったが、カソック姿のシエルは豊富な魔術
の知識故に、エンハウンスが普通の死徒ではない事を見抜いた。そ
して人間の士郎がこの場に居合わせた事で、彼らに尋問する気にな
ったようだ。

士郎は包み隠さず己の目的を告げた。死徒を根絶する為に、在野
の魔術師狩りと死徒狩りを並行して行っている事も。此度は十八位
の祖と『子』に当たるエンハウンスの争いを聞き付け、これを好機
と捉えて諸共に始末する気でやって来た。

しかしエンハウンスが半年半死徒と察し、エンハウンスもまた死
徒を塵にするつもりでいると聞いた。利害が一致した故に協力関係
を結び、十八位の祖を減ぼした所にシエルがやって来たのだ。

シエルはその話を簡単に信じた。というのも、聖堂教会でも士郎
の名は広まっているらしい。

聖杯戦争の経緯、それからの海外での活動。最近は精力的魔術
師狩りを行い、特に聖堂教会よりも先に死徒を探し当て減ぼす情報
収集力、居場所を割り出す分析力、実際に討滅に移る行動力は話題
になっているとか。金銭目的の俗物とは一線を画する、ある種の執念によって行動す
プレーヌス魔術使い。時計塔が謎の封印指定執行人、バゼット・フラガ・マクレミッツ引き抜いてからは、さらにその効率と撲滅運動が加速している。聖堂教会は彼らの活動を黙認し、利用する気でいるらしい。

シエルとしては死徒を撲滅する志には共感するものがあるらしい。

エンハウンスに表立って協力は出来ないが士郎は人間故に共同戦線を張るのも苦かではないと言った。

連絡先を交換し合う。これから先、戦場を共にする事もあるかもしれませんね。

術師を速攻で斃し、その足で急行してきたり。まるで飼い主に懐いた猟犬の如き様子に苦笑した士郎は、バゼットにシエルを紹介して、和やかに別れ。

シロウ、ところで今夜の夕食は……

カレーだ。一晩寝かせたし、美味しくなっていると喜し、自信垣間見せるとは。今から待ち遠しい。さあ早く帰ってタ飯しましょう。エンハウンス、貴方は？

オレか？あ……そうだ。ビザなんか作れるか？

ビザか。カレーに浸して食するのも乙なものだろうし、一品追加するのもいいな。よし、任せエンハウンス。歓迎の印として振る
舞おう。

待ちなさい。その夕餉、私も同席させてもらいます。

「全然、あたたかまる。」

早行きますよと急かすジエルに首を捻りつつも、士郎は新たに仲間に加わったエンハウンスも自分の拠点に案内した。

そして、実食。士郎の調理したカレーを口に運んだジエルは言葉を失っていた。その様子に得意満面になりつつも、士郎は焼いたピザを勧める。それをカレーに浸して更に一口。ジエルが綺麗に完食する頃にはエンハウンスも食べ事に終えており、バゼットは食後の運動の為にジョギングに出ていた。エンハウンスは感心する。

なお、ピザの生地、焼き加減、調味料は全てに旨いピザは食った事がねえ大したものだ。旨かったぜ。こんなに旨いピザは食った事がねえよ。何か秘訣でもあるのか？

全にから手作りだしな。なんなら解説してやっても。

— 衛宮くん。お話があります。
貴方はカレーやマスターや成り得る世界の宝。無為な戦いで命を、腕を損なう危険があるのは余りに惜しい。
「カレーや愛好家の名の下に貴方を拘束し、背負った使命！'
お前は何を言っているんだ？
そんな勿体ない！
衛宮くんのカレーは正に絶品でした、それも
もう作らないなんて……！
世界の損失です、世界遺産が悪趣味な
蒐集家の蔵に死蔵されるようなもの！
事を言わないうでください……！

士郎はにっこりと笑顔を浮かべた。シエルは失言に気づく。
バゼット、エルハンス、何か要求は？
は。なんこの茶番？いや、いけどな。なら死徒に有効な銃
でも貸いたいね
そうしてエンハンスは、シエルから教会製の長銃型概念武装
で、俺の分の迷惑料だが。一今後教会からの指令がない限りは、

でも、俺の分の迷惑料だが。一今後教会からの指令がない限りは、

で、俺の分の迷惑料だが。一今後教会からの指令がない限りは、
俺達と行動を共にし続ける！

カレー、毎日作るのになあ…。

「そ、それはっ！」「そ、それっ！」「カレー…毎日作るのになぁ…。」

「貴方が私のリーダーです」「大丈夫かこの代行者と、バゼットすらシエルを心配した。呆れて物も言えないようである。士郎も苦笑を隠せていないが…とでもあれ、士郎を含めると同志はこれで四人となった。戦力が充実しているが…この一团には、まだ新たな加わる者がいた。)

死徒狩りは、よいよ好状況に入る。

死徒狩りは、よいよ佳境に入れる。

士郎とシエルが情報を集め、多角的に分析しながら狩りの獲物を探す。リストアップした死徒二十五七、既に滅んでいるものの封印されているものも除けば、その殆どが極めて強力な個体ばかりである。

シエルが加わって以来、数カ月の間に四体もの死徒と、五人ものの魔術師を屠った。苛烈にして電撃的な活動に、士郎らの一团は魔術師に戦慄を覚す。在野の魔術師の研究は鳴りを潜め、犠牲を出し、世界に戦慄を醸す。在野の魔術師の研究は鳴りを潜め、犠牲を出さない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたった一人の不審死、行方不明からすら足取れない傾向に傾く。何せたた
次の標的は活動を再開した死徒二十五回、第七位『腑海林アインナッシュ』だ。

その正体については、ジェルから聞き及んでいる。一行の知恵袋がジェルなら、分析し行動指針を立て、作戦を立案するのが士郎である。

アインナッシュは生物ではなく吸血植物だ。森林一帯そのものがアインナッシュに生の実を求めて、他に在野の魔術師もやって来る可能性は大いにある。士郎はアインナッシュを滅ぼす手立てを立てられなかった故に、やって来る双方の勢力を利用するつもりでいた。

相手が知性のない存在なら、それは戦いではなく作業である。油断も慢心もない。しかしながら一切の気負いもない。そうして IMPORT抜く、死徒狩りの死神。またの名み名を『殺人貴』と遭遇した。

曰く、死徒狩りの死神。またの名を『殺人貴』と遭遇した。真祖の吸血衝動を抑制する為にアインナッシュに生の実を求めて来たという彼は、士郎よりも幾つか年若い。
瞬く間に封印指定の魔術師「フォルテ」を打ち倒した彼は、魔眼殺しの包帯を眼に巻いていた。死神の通り名に偽りのない、死を具現化させたような彼は、シェルと知り合いながら士郎らに牙を向けただけだった。協力しようと。シェルの説得もあり、一時的に共同戦線を張った彼らは特に山場もなくアイナッシュを滅ぼした。

死徒が遠野志貴というらしい。彼は直死の魔眼を持ち、真祖アルクエイド・ブリュースタッドの守護者をやってるという。彼の能力により死の点まるモノを突かれたアイナッシュは滅んだ。その問答無用の必殺ぶりは、死徒狩りには持ってこいだった故に仲間に勧誘したが、すっかり断られた。しかしもし今後出くわすような事があれば、敵対する事はしないという約束だけは取り付けられたので良しとする。士郎としても無闇に敵を作る趣味はない。それに元々、志貴は単独で動いた方が高パフォーマンスを発揮するタイプのようだった。ルァレという死徒を狩りに赴いた際には先を越され、志貴が仕留めていたのだ。

オーティムロッゼを仕留める。

アミトにて。リストにナイフを突き立てる。

死徒の王の一角。その勢力を焼却する。士郎達の一団は、標的にして遂に死徒の王を狙えるものとなっていた。エンハウンスはにやにやと好戦的な笑みを浮かべる。何やら含むものがあるようだが、そ
前衛のパズルとエンハンスが切り込み、シエルが中距離から黒鍵を投擲して穿ち、或いは結界を用いて死徒を摂る。そして遠距離から援護に徹する士郎が、トドメとして投影道具の偽・死棘槍を打ち込む。もしも獲物が強力な切り札を切ってこの流れが作れなくなったら、パズルの『斬り払う戦神の剣』がカウンターを放ち、獲物の切り札をキャンセルさせ、エンハンスの魔剣アヴェンジャーで斬り、聖葬砲炎の砲撃を浴びせ、シェルが結界で摂る。そして最後はやはり士郎の投影道具で確実に仕留める。—この流れが必勝戦術であり、嵌まれば死徒の王であっても殺せるだろう。現に祖ほどの力がなくとも充分に強力な死徒は、全てこの戦法でキルスコアを確実に稼いだ。

しかし数多の成果を上げ、死徒や魔術師の骸を時計塔に流して、魔術世界に威名を轟かせている士郎達といえば、死徒の王は一筋縄でいく手合いではない。この戦いの相手は単独の個ではない。一つの陣営を纏める王が相手であり、黒翼公に比肩する怪物である。

決して表舞台には語られない死闇は、殺人鬼も交え幾度も繰り返されてきた。その最終決戦の場に士郎は居合わせる事はなかったが、エンハンスと殺人鬼によってトラフィムは死亡し、死徒の勢力図は大幅に書き換えられる事となる。
パゼットもまた時計塔に呼び出され一団を離れ、エンハウスは瀕死の重態となっていた故に療養を余儀なくされた。士郎は一人になっ
る、無理はせず活動を自粛。一時ばかりの平穏を楽しむ事となる。
もとのある魔術師が士郎を襲わないとも限らない。故に士郎はエン
ハウスを冬木に連れていき、衛宮邸にて療養に努めさせる事にし
た。瀕死とはいえエンハウスなら、士郎の身内を守ってくれると
見込んでの事だ。
しかし士郎は目の当たりにする。長年留守にしたせいか一種の
冬木から逃げるようにロンドンに向かった士郎は、凛に泣きつい
た。あなたの妹さんがおっかないの、助けて。大の男が穏やかに助け
ない。そんな士郎に凛は爆笑した。ちょっとも変わってないわねアン
タ！なんで。
士郎は逆上した。処女拗らせて面倒臭い奴になりやがってこの女
郎！そんなだから男が寄り付かないんだよ！･･･その売り文句
は第三次テムズ川ダイブ事件の引き金となった。ただしこうして士
郎も三度目はただで落ちなかった。凛を道連れに落ち
下した処、健康体のままピノンピノンしていた士郎は笑った。笑
いながら処の看病をしていると･･･なんでか奇妙な空気となっ
ていた。
の死徒の勢力図が塗りかわるのを待つのも馬鹿らしいが、かといって一人で何かをしようとすれば死にに行くようなもの。無理はしなかった。

取りあえず、出資者を募ろうと各地を巡ってみる。通じかかったブランスタッドの城に顔出し、顔馴染みとなった殺人鬼と真祖の妹を冷やかして殺されかかったり。一日泊めてもらったのはいいもので、夜のあれこれを聞く羽目になって一睡も出来なかったり。がいるのになんで奴ら末長くお幸せにね！

とばかりに、これまでの旅で手を入れてきた、士郎には無用の生命力を増幅させる薬やらを置いていった。

日本でもそうだ。とりあえず金を持っていそうな連中に片っ端から声を掛けて回るのも手応えはなかった。畜生なんてこった！これら声を掛けて回る手応えはなかった。畜生なんてこった！
が資本主義の弊害！人情を忘れた祖国の人々を嘆く心をした。
士郎は刀剣蒐集趣味を持つ姐御と眼鏡の素敵な隻眼の男性と知り合った。
　お熱い関係をかくわずにいられない。例え殺されそうになっても士郎はその愉悅を忘れることなんて出来なかった。仲睦まじさを祝福したい、その気持ちを決して、間違いなんかじゃないんだから。

命数からがら士郎は日本を発った。
　何はともあれ気を持ち直し、士郎は真剣に出資者を募る。士郎の持つ資産は一生を遊んで暮らしても、三代先まで安泰なほどだが。そんなものではとても足りない。どうしたものはかと悩みつつやって来たのは、士郎のコネが最もあるロンドンであった。ルヴィアを頼ってみようと考えたのだ。

オルガマリー・アリスファインから、カルデアへ勧誘されたのだ。
剣なのか鶴なのか

突貫作業と伝えども精度に狂いなし。絶賛すべきはカルデア職員

諸氏の敢闘精神と優秀さ。僅か五時間にして大聖杯の改造が完了し

た。

題して『ダクザの大釜』である。嘗て幾度もの災禍を振り撒いた

大聖杯が、食糧を無限供給する夢の器と化したのだ。災い転じて福

としという諺の理想形であろう。

ふと思ったのだがアニメスフィアからの出資と称してこれを賃え

ないだろうか。真面目な話、ダクザの大釜があれば、極めて助かる

のだが。俺がではなく、多くの人間が。これは要検討するまでもな

く確定である。

…聖杯をコレクションしても、どうせ国連を通して魔術協会と

か聖堂教会に引っ張っていかれるのだ。死蔵されるか悪用されるか

分かったものではない。なら俺が有効活用した方が世のため人のた

めになる。

…あに聖杯コレクションはない。一つや二つ程度、ちょっとまかし

てもバレまい。決めた、ダクザの大釜は俺の物にする。異論は認め

たくない。認めないわけではないのがミソだ。
もう一度真面目に言うが、断言する。特に魔術協会なんかの管理下に聖杯がいえば、絶対にろくな事にはならない。よしんば悪用されずとも死蔵される。道具は使ってなんぼだが、奴らの場合使わた方が最悪だ。

根源への到達だって、一つずら特異点化させるほどの魔力リソスのある聖杯が無数にあれば、充分に可能だと判断されるだろう。派閥争い、利権の奪い合い——果てに魔術世界全体で戦争でも起こるかもしれない。

それらの理由を鑑みて、大聖杯『ダグザの大釜』は是非非でも俺の手元に置きたかった。これも私欲という事になるのかかもしれないが、カルデアの蒐集した聖杯も全て凍結し、決して誰も扱えないようにするか、或いはいつでも外部に持ち出して奴らの手に渡らないように手配する必要がある。

と言うのも、素直にダグザの大釜をおくれやす、なんて京都弁で言ってもカルデア職員を説得出来るか否か……彼らは運命を共にする戦友で善良な者達だが、彼らにだって立場はある。まるで長にやっていく。時間は腐るほどあるなんて口が裂けても言えないが、彼らの意見が誤りなら、それを指摘してくる人はきっぱり多い。もし俺の意見が誤りなら、それを指摘してくる人はきっと多い。

頭がどれほど回ろうと、どれだけ特異な異能を持とうと、所詮俺も凡夫でしかない。人間生きてれば過ちの一つは必ずある。彼らが反対するなら俺も潔く諦めるまでだ。
「

心労ろ ら 食糧の だ。幾―フう 死し 雇問な 材―は と もる。

い 可し 直る。でで つ あ た。議 自て え え ら、わそ のも 質が り糧 長っ ドォ

ン あ 装ラ ある り穀 頭が れ わる 甲を か。

決破間 量 壇ジ ブ間 事配論斐供 し 笑釜糧が か ろ ド

に慰え 悪の 悪頭が らる、わ そ のも 質が り糧 長っ ドォ

実理ん え え ら、武プは あ ら、わそ のも 質が り糧 長っ ドォ

に慰え 悪の 悪頭が らる、わ そ のも 質が り糧 長っ ドォ

（-1100-）

」
「ささ、一献どうぞ、フォウ君。
「ふあー？きゆうきゆい、ふつう！」「

一資料をとげて俺を批判するなら聞こうとも。これは心の栄養剤。俺の言い分を否定すると言うのなら一生恐れずして掛かってくるがいい！」

フォウは物凄く微妙な目で俺を見ていた。
ななる鎖を言う事が分かるのは、何もサーブァントのスキルのようなどらの恩恵があるからではない。単純な話だ。確かな知性を持つと認め、確りと向き合えば、言葉は通じなくても意味は通じる。俺みたいに言葉が通じない外人さんとの触れ合いが多くなると、相手の言わんとすることをなんとか察せられるようにもあるのだ。人間に最も大事な能力の一つは「コミュニケーション能力」である。まあどうしたって理解不能な奴はいるので、そういった手合いには「うんうんそれもまたローマだね」とでも言っておけば万事上手いく。だって御祖ロムルス君がそう言ってたし。流石ロムルス、説得力が違う。

「…きゅうう」

「種類は懐けない。お前はショロい系ヒロインなのかと小一時間ほどの問い詰めたくなった。可愛いかから許す。いや俺が許しを乞わねばならないのか？まあそれはいい。とりあえずフォウを医務室に連れていく。職人にフォウを預けると、呆れた目で見られてしまった。口止め料と称してワインを進呈する。後で仲間内で飲んでくれと渡す。ツマミは？と言われたので厨房の冷蔵庫で一通り探してるぞと伝える。」
自室に戻り、独りチビビとやる。

うん、堪らんね。生きているって感じができる。大人数でワイワイやいつカルデア来てからは基本一人酒なのだ。

言いつつカルデア来てからは基本一人酒なのだ。

とりあえずデスクに向かい、酒を飲みながら特異点での出来事やデータを繰めたレポートを仕上げていく。酔ったからと雑な仕事はしない。気分が良くなるだけで記憶が飛んだりする性質でもなかった。

この後はどんな仕事が待っているのだったか。雑務は百々様だが、総務はグラヴェインが、開発はダ・ヴィンチとアーチャーが担当である。医療の総括はロマニーああ、そうだ。そもそも一人、マスターチェックとして集めていた人材の治療が完了し、凍結を解除するんだった。

ここに立ち会い、場合によってはカウンセリングしないといけない。メンタルがどうなっているか見てもおかないとロマニーかの医療部門の連中の管轄だが、俺だってその道のプロにも劣らない自負がある。伊達に精神崩壊者を幾人も立ち直らせてきた訳ではなかった。

「っ！？」

「っっ！？」

後って、酒好きとしてツマミの作り置きは万全である。

「……」

自室に戻り、独りチビビとやる。

うん、堪らんね。生きているって感じができる。大人数でワイワイやいつカルデア来てからは基本一人酒なのだ。

とりあえずデスクに向かい、酒を飲みながら特異点での出来事やデータを繰めたレポートを仕上げていく。酔ったからと雑な仕事はしない。気分が良くなるだけで記憶が飛んだりする性質でもなかった。

この後はどんな仕事が待っているのだったか。雑務は百々様だが、総務はグラヴェインが、開発はダ・ヴィンチとアーチャーが担当である。医療の総括はロマニーああ、そうだ。そもそも一人、マスターチェックとして集めていた人材の治療が完了し、凍結を解除するんだった。

ここに立ち会い、場合によってはカウンセリングしないといけない。メンタルがどうなっているか見てもおかないとロマニーかの医療部門の連中の管轄だが、俺だってその道のプロにも劣らない自負がある。伊達に精神崩壊者を幾人も立ち直らせてきた訳ではなかった。

「っ！？」

「っっ！？」

後って、酒好きとしてツマミの作り置きは万全である。

「……」
レポートを纏め終え、椅を回して背後を向くと、目の前にアーサラとオルタがいて、俺は驚き余ったり返りそうになった。

「な、なんなんだ…今、来てたのか。声ぐらいかれても良かっただろう？」
「…」
「…」
「…」
「あ、あの？アーサラとオルタさん…？な、なんでそんなんだ？」「青と黒のドレス姿のアーサラとオルタ。二人は何言わずに俺を見ている。な、なあどうしたっていいの？」「シロウ、何か私に言う事ありませんか？」
静かに口を開いたアーサラに、俺は咄嗟にこっまでの事を振り返る。―か、考えろ。俺は何かアーサラの逆鱗に触れると喜ぶんだし、事をしたのか？まずい、全く分からん。飯か？お腹減った？いやしやさっきて…と言っても五時半以上か。小腹が空いたに違いない。
アールリアが……食べ物を、要らない、だと。顔が一気に青ざめた。

「……飲むか？」
「ああ、ツマミがないな。今持ってくる」
「要りません。」
「なん……だと……？」
「シロウ。私達に悪い所はありませんよ。」
「そう……まあ座れ。悪いか、二人が何と言わんとしてるのか全く分からない。事情を説明してくれた。」
「あー、どこか悪いのか！？大変だ急いでメディカル・ルームに行かないと……！」
「あー、どこか悪いか！？大変だ急いでメディカル・ルームに行かないと……！」

アルリアが……食べ物を、要らない、だと。顔が一気に青ざめた。

「アルリア達ならもう知ってるかもしれない。今俺の体の中にはアルリアの聖剣の鞘、その現物がある」
「これは召喚された宝具じゃない。聖遺物として現在していた物だ。
同様にシンクロの持ち込み分だったが、これだけの力を持たなければ召喚されても無駄だ。やるだけやるべきだ。
」
何人の女と寝たか、と訊いてきたのか？はは、馬鹿な乙女
中東で思い出すのは私には聞かされませんか。

中東の思い出とかバゼットとかシエルとか、そんな想像が効き
い編集が入っているはずでは……?

「中東の思い出とかバゼットとかシエルとか、こんな想像が効き
い編集が入っているはずでは……？」

黙りですか。
正直に答えなさい。ソロウ、何人と寝ましたか？名前を挙げなさ
い。私が理性的である内に

中東の思い出とかバゼットとかシエルとか、そんな想像が効き
い編集が入っているはずでは……?

待った。待って。え？何？……なんでそんな事を？

「中東の思い出とかバゼットとかシエルとか、そんな想像が効き
い編集が入っているはずでは……？」
冷や汗が浮かぶ。俺は諦めた。直感の鋭い彼女達に誤魔化しは利かない。嘘も無理。人間やっぱり諦めが肝心みたいだよ、白野。
その前に一つ。誓って言うが、俺から迫った事はないし、遊びだた事なんて一度もない。それは nieuでぶか。
喋んだ。遺憾の意を表明する。酔ってるから呪詛が回らなかったんだ。
「いいでしょう、言ってみなさい」　「名前だけ。セレ、アスリ、ファティマ、バゼット、桜、イリヤ、遠坂…です、はい」
「…シエルとはそんな関係じゃない。時々妙な空気にはなるが、一線越えてないからセーフのはず。」
俺は…ここで死ぬのか？　聖剣で斬られたりする…？
俺は…ここで凄く俺が遊び人に聞こえる経歴だけど、本当に俺から迫った事なんてないんだ。遊びでもない。というかちゃんと定期的に彼女なんてないんだ。
「待って欲してる。切実に迫らせれて断れなかった。
俺も男だ、色んなのを溜め込んでるんだ。」

「シロウ…」
ふと、アールリアは俯いた。
オルタはデスクから離れて、背中を向けた。
その声が、肩が震えている。

「私の事は…忘れただんだ…?」
「忘れる訳がないだろ!」
声が濡れている。

「だったろ、どうして…!」
アールリアが顔をあげる。
滴が頬を伝い、顔を濡らしていった。哀しみに染まったそれには、俺は絶句する。

「どうして、そんなに…!」
「黙ってないいで、何か言ったださい!」
「…」
返す言葉が見つからない。何を言っても空虚になる。軽薄になる。

そんな気がしてしまった。

アルトリアが激昂するも、しかしオルタは静かに振り返り俺を見た。

仕方がないだろう。我らの感覚ではシロウと別れて一ヶ月も経ってはいない。しかしシロウの時間は十年も経っていた。貴めのは酷だと自分でも分かっているはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になる。あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になる。あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になる。あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になる。あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になる。あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になる。あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になる。あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になる。あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になる。あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になる。あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になる。あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になる。あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になる。あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になる。あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟していたはずだ。

受け入れる。我らはもとより、最後には別れる事になると、あの時から覚悟ていた
格がない。
しかし不意にオルタは微笑んだ。予想しなかった表情に戸惑う。
「ですので、信じさせてください。貴方は私の鞘です。故に」
『言葉は要らない。行動で示した事だけを信じましょう』
オルタはそう言って、そっと俺の胸の中に収まってきた。
『いいのか？』
『言葉は要らないと言ったはず。ええ、シロウの一番が私であるなら、それでいい。私から言えるのはそれだけだ』
『オルタ……』
『そうまで言われて、尻尾を丸めて逃げる腰抜けではない。腹を決めた。
俺がセイバーという剣の鞘の有無は否定しないが、俺の起源も剣だぞ。実はオルタの方が鞘なんかじゃないか？』
『ほほう。面白いくだらぬ』
何をしてるんですかああああああ！？！？！
俺はオルタを抱えあげ、ベッドに向かう。
不敵に笑い合う。
既にベッドにいたアルトリアに殴られ、ぐぶっ、と苦悶の声を漏らして、ばたりと倒れた。
「あっ」
「し、シロウ…」
「シロウおおおおおおおおおおお！？」
「ばっ、馬鹿貴様！？折角そういった気になっただけだ。…シロウ、無事ですかシロウ！起きくてさいさい、シロウ―」
「―」
「返事はない。士郎くんは鳩尾へヘッケルに轟沈していった。」
親子なのか自分なのか

特に何もなかったが、汗を掻いたのでシャワーを浴びた。

体が怠い。気力が萎えている。酔いは完全に醒めていた。もう何

もする気になれない。このまま寝ようと髪を乾かして横になったのは

いいものの、喉の渇きを覚えて水分を補給しようと思い立つ。

明日も忙しい。今は寝酒をしたい気分だった。幾度もの戦場を越え

させられて不敗とはいいえ、今日は非常に疲れた。例えるならサパン

ナで獅子の群れに襲われたようである。

懸けの闘いを制した勝利の美酒を求めてても罰は当たるまい。そ

う思ったのだが、冷蔵庫に酒の貯蔵はなかった。

命懸けの闘いを制した勝利の美酒を求めてても罰は当たるまい。そ

う思ったのだが、冷蔵庫に酒の貯蔵はなかった。

明るい頃少しではあるが、今はない。

- - - - -
飲まずにはいられなかった。諸々の感慨を落ち着けねば、とても落ち着いて床に着けない気がするのである。そんなわけでも目的のプ
ツを回収し、マイルームに戻って行くー途中の事だ。
サーヴァントに与えられる部屋の前を通うと、何やら話し
声が聞こえてきた。と言っても尋ら女性の声がするだけだが。
しかし酷く沈鬱な雰囲気である。扉越しとはいえ、エアリーデ
ング検定一級の俺には察せられるのだ。何事かと耳を澄ませてみる
と、どうやら敢えて明るく喋っているのはアイリスフィールらしい。
 chóこ。アイリスフィールの部屋ではないのだが。なんだっ切
嗣の部屋に……?
扉を越しに聴こえたのは、アーがーの独白だっただけ。
悔いを噛み締めているのではなく、あたかも気づきなかったかのようなもの。
別の道を見て、生前の行いを省み、想いを弛せているのかのように。
『そうね。私は貴方の過去を知らんが、貴方が言うのならそうなんだ』
別にそんな منذ違ってはダメよ？アーがーはああも気に入らない。
成れても貴方がマスター…シロくの道に優劣なんてない。
いいえ、それもそれも比べる事から烏滸がしまいは』
「…分かっているさ。が、客観的に見れば劣等感を感じてしまいう。」
奴は成し遂げた功績で生前のオレを超えていりるだろう。
別の人にそんなの功績に関心はない…が、別人だと理解していっても平行世界の「エミヤシロウ」だ。
どぅしても比較してしまいう』
自嘲するように呟くのは、己の思考ののもを嘲笑しているような。
それに切嗣が身じろぎする気がする。
『オレは人々を直接悲劇から救おうとしました。だが奴はその悲劇の元を根本から潰していったんだ。直接救った人間はオレの方が多いくても、間接的にあとの男は未来を救っている。--同胞を集い、個ではなく数で、己のエゴを押しつつた。オレにはその辺が尊ええる』
時速200㎞で迫っただれを、驚きながらも掴み取った反応の早
あら。

アリスフィールは目をぱちくりさせる。俺も苦虫を噛んで挟み潰したような顔をしてしまった。

どうかしない。イリヤも後に五年くらいしたら『こう』なるのかもしれないと思うと、色んな意味で死にたくなった。

主にアリスフィールを見てイリヤを連想した事が最低である。

違うのは性格から来る表情と雰囲気、髪型だろう。アリスフィールはロングヘアでサ・プリンセスといった感じだが、イリヤは肉体の成長に伴い活発な印象のショートヘア少女へと変身していっている。じゅん？よくよく考えたら連想してしまったイリヤとアイリ

僕が悪いのはこちらも同じだ。なんだって入ってしまったのか。本当、衝動に突き動かされてしまった。

例の一件まで根拠からして別人だと思っていた男。ぶっ掛け値なしにすっかり真っ白になった髪を掻き毑る。違うのは肌の色だけの、
「なんだ。まさかとは思うが記憶映像を見ても妙な思い違いをしてるんじゃありませんか。」

「俺も正義の味方だとでも思っていそうな口振りに聞こえたぞ。俺も聞こうしていた訳じゃない。」

「俺は正義の味方だと思いつつ切嗣をなんて。」

「あら。愛の巣ですって。切嗣！」

「……」

「言っておくが、俺は正義の味方なんて立派なものじゃない。いいとこ廃師だ。滅私で人を救ったんじゃない。俺の肝に銘を込めた。

遠くに強迫観念に突き動かされて無謀な旅をしただけだ。俺は努めて血の気を鎮圧して冷静になる。嘆息する。らしくない、ものの見事に頭に血が上ってしまっていた。俺は努めて血の気を鎮圧して冷静になる。」

「言った人もいない。俺は正義の味方なんて立て派なものじゃない。いいとこ廃師だ。滅私で人を救ったんじゃない。俺の肝に銘を込めた。遠くに強迫観念に突き動かされて無謀な旅をしただけだ。俺は努めて血の気を鎮圧して冷静になる。嘆息する。らしくない、ものの見事に頭に血が上ってしまっていた。」

「言った人もいない。俺は正義の味方なんて立て派なものじゃない。いいとこ廃師だ。滅私で人を救ったんじゃない。俺の肝に銘を込めた。遠くに強迫観念に突き動かされて無謀な旅をしただけだ。俺は努めて血の気を鎮圧して冷静になる。嘆息する。らしくない、ものの見事に頭に血が上ってしまっていた。」
エミヤは壁に背を預けて立っていたのを、俺の眼前に立ちはだく

「いいか衛宮士郎。正義の味方とは思想ではなく行動と結果によっ
て示される存在だ。その点で言えば貴様はそれに当たる。人々を救
い感謝され、明確な悪を滅ぼす行動と結果は正義そのもの。オレや
切嗣が目指した在り方だ。」

「僕はそんな立派なものじゃないけどね。」

「─僕はそんな立派なものじゃないけどね。」

「─見解の相違だなアーチャー。俺はエゴを押し通しただけだ。」

「─僕はそんな立派なものじゃないけどね。」

「─切嗣が目指した在り方だ。」

「─僕はそんな立派なものじゃないけどね。」

「─僕はそんな立派なものじゃないけどね。」

「─切嗣はまあと、うん。ノーコメントだ─」

「─切嗣はまあと、うん。ノーコメントだ─」

「─僕はそんな立派なものじゃないけどね。」

「─切嗣はまあと、うん。ノーコメントだ─」

「─僕はそんな立派なものじゃないけどね。」

「─切嗣はまあと、うん。ノーコメントだ─」

「─僕はそんな立派なものじゃないけどね。」

「─切嗣はまあと、うん。ノーコメントだ─」
術師殺し。その二代目と目され一時えらい敬遠されて来た俺の気持ちは分かってほしい。

切嗣は無言だ。どうでもいいが気配遮断するなと言いたい。地味に存在を忘れそうになる。もっと存在感出してこいよ、アントの部屋だろ。此処。

正直に言うわね。第三者なら正義とか悪、主義主張は分からないけれど、きっと貴方達の話は平行線のまま帰結しないわ。だって二人とも正義の味方じゃない。「……」

……あのな、アイリさん。なんだってそうなるんだ。あなたナチュラルに切嗣ハブるのやめてやってくれるか。切嗣のメンタルは鉄に見せかけた豆腐だから。（……）

天然で刺されるほど痛い言葉はない。切嗣の表面に変化はないし、内面も殆ど平平坦だろうが、微かに揺らぐものはあるだろう。アイリスフィールは苦笑した。

この私も、この切嗣も、本当はなんのかかわり合いもない赤の他人よ。でも私は切嗣を愛しいと感じてる。別の世界だと、きっと素敵な出会いがあったんだわ。でも詳しくは知らないから、俺淞に評価なんて出来ないわよ。貴方達に対してもそう、私は感想を言っ
切嗣は私にとって愛しい人で、それ以外は知らないわ。
そしてマスターとアーチャーは、掛け值なしに不実よ。正義の味
ね？ と首を傾げるアイリスフィールの仕草は愛らしい。俺とア
ーチャーは顔を見合わせた。
そして不意に、ふっと肩から力を抜いて苦笑する。なるほど、道
理だ。この人には敵わない。的確に言い返せない筋を通してくる。
まったくその通りだと言葉に少し口裏はいかなかった。何故ならそれは、
ひどく格好悪いからだ。
「これまでの事はもういい。これから的事について考えましょうよ。
折角それぞれが本来とは違う形だけど、家族が揃ったんだから。仲
良くしたいと思うのは私のワガママしから。
そうだな。
名前でいいわよ。
……と、切嗣、イリヤが放っておくけん。
うるさい気配遮断してろ。
切嗣の嫌そうな顔に、俺はべてもなく切って捨てる。露骨に嘆息
あるか、アーチャー。
……ない。貴様は名前と能力が同じなだけの人、拘る事でも
ない。それにキャスター……。
僕の意見は無視かい？
「……と、切嗣、イリヤが放っておくけん。
うちの気配遮断してろ。
「うるさい気配遮断してろ」
「……と、切嗣、イリヤが放っておくけん。
うるさい気配遮断してろ。
「会社に会社の気配は無視してろ」
「……と、切嗣、イリヤが放っておくけん。
うるさい気配遮断してろ。
「幸福衛宮家計画でも立てるとするよ。アントも主役だ。」
「まあ素敵！それでもどんなものなの？」
「まあ素敵！それってどんなものなの？」
「……」
「リがいのいのはアイリスフィールだけか。ノリが高いのはアイリスフィールだけか。分かってはいたが、とことん付き合いの悪い男達である。アーチャーは皮肉げに嫌みを言ってる。」
「どうでもいいが、その下らないネーミングセンスはどうにかならないのか？」
「うっさい受肉させっそー。」「どんな脅し文句だ、それはマスターに対してなんて口の利き方だ。反抗的なサーヴァントは罰として受肉させてやる。切嗣もだ。人理を修復したら冬木で暮らしてもらうからな。」「は？」
「悪が僕は、仕事が終わればカルデアから退去するよ。」「却下する。」
この件に関して切嗣の意向は全部無視だ。何せこの男、幸福から逆走する事に全力のダメ人間である。

アントの仕事はマスターの指示に従う事だ。雇い主の言う事は絶対ぞ

アントの仕事はマスターの指示に従う事だ。雇い主の言う事は絶対ぞ

アイリさんに切嗣、お前に俺、イリヤー、衛宮勢揃いた。なんの

アイリさんを断固として認めない。そして正規の契約を結んでい

不正な契約は断固として認めない。そして正規の契約を結んでい

不満がある？異論は認めないぞ。大家族化したら俺の手には負え

不満がある？異論は認めないぞ。大家族化したら俺の手には負え

紫苑の仕事はマスターの指示に従う事だ。雇い主の言う事は絶

紫苑の仕事はマスターの指示に従う事だ。雇い主の言う事は絶

何せここの男、幸福から逆走する事に全力のダメ人間である。

何せここの男、幸福から逆走する事に全力のダメ人間である。

彼らの力、というか存在があれば負担は軽減するはずである。来

彼らの力、というか存在があれば負担は軽減するはずである。来

不満がある？異論は認めないぞ。大家族化したら俺の手には負え

不満がある？異論は認めないぞ。大家族化したら俺の手には負え

積もる。積もりに積もった問題解決は、人理修復以上の難題である。 彼らの力、というか存在があれば負担は軽減する

積もる。積もりに積もった問題解決は、人理修復以上の難題である。 彼らの力、というか存在があれば負担は軽減する

ものを設立しているふうに聞こえるな

ものを設立しているふうに聞こえるな

アントの仕事はマスターの指示に従う事だ。雇い主の言う事は絶

アントの仕事はマスターの指示に従う事だ。雇い主の言う事は絶

逆走する事に全力のダメ人間である。
生きているのか死んでいるのか

翌朝である。

今日も今日とて大忙しな日取りだ。ぐっすりと五時間は寝ただけ
う。ベッドを整え、顔を洗い、歯を磨き、一通りの身支度を整える。

理想郷が正常に稼働しているお陰だろう。と言っても、俺自身の
能力と素質が足りない故か、当たり前の聖剣の鞘はその全能を発
揮できない。不死身になるほどの不死性は無く、精々があらゆる呪
詛への耐性、異様に死に難い再生力、肉体の老化が停滞などの恵
を得られている程度だ。まあ元々の俺の生き汚さと抑止力のバック
アップも合わせて、肉体の四割以上が消し飛ばされない限りは死
ぬ事はないと言えた。

俺の魔力量は大したものではない。それでも固有結界だって、カ
ドルアからの支援がなければ単独で使用するなど不可能だ。俺自身
この結界を負くだろう。

今専貯を抑えうし後『て』で、恐そ知が限かし

力識無回エた事界ら接でフ負く器生く際るが、ど固テ荷俺へなない使供は

にしていると抑止力からのバックアップは途絶えるだろう。

留念すべきは抑止力を超えた魔力が超切だ。

抑止力から供給される最大魔力量は宝具の投影だけに限れば、限界を超えた状態で聖剣を三回ほど真に迫って投影できる。それはさしつめエクスカリバー・イーチュームといったところか？固有

結界は一回の使用時間を三十分とすると五回使用可能でそれを端末・馬替の端末に用いることは恐らく俺に埋め込まれた抑止力の端末を英霊エミナを経由する事で、負荷を激減させていているのだろう。言い方を改めれば、あくまでもこの魔力の貯金数値である。流石に膨大だと言えるだろう。アラヤは楽しみに、その生へとしげみつ黙無念だけは認める。この魔力の貯金を今後の計算に組み込むのは大きい。

これこそが勇者である俺の器がバンクしないで保たれるものだ、と感心するが、忍らぬ俺に埋め込まれた抑止力の端末を英霊エミナを経由する事で、負荷を激減させてしているのだろう。言い方を改めれば、あくまでもこの魔力の貯金数値である。流石に膨大だと言えるだろう。アラヤは楽しみに、その生へとしげみつ黙無念だけは認める。この魔力の貯金を今後の計算に組み込むのは大きい。
唐突に、望郷の念に襲われた。

なんの脈絡もない。不意な感情だ。傍に誰かがいる時は、何も考えないように意識していたが、こうして朝起きて、誰もいないと封じ込められた感情が鎌首をもたげる。

俺は何をしてるんだろう。

俺は何をしてるんだろう。

俺は何をしてるんだろう。

俺は何をしてるんだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺は何をしてるだろう。

俺はどうしても馬鹿をし、ケツを持ってくる対等なダチがいなかっただけで。心の出血が俺に空虚さを覚えさせていたのだ。

高校を出た後、何をしてもしっくりと来なかったのはなんだか。

そうだ。俺が馬鹿をしてもケツを持ってくる対等なダチがいなかった。
桜は、慌ただしそうではあった。

「…」

ふらふらと歩いていた。その足がカルデアの外に向かっているのに気づいた俺は、失笑して立ち止まる。出たら死ぬ、分かりきっているのに。

「…」

ふらふらと歩いていた。思い出して、向き合うのが怖かったから無意識に思い出さないようにしていた。なんて惰弱ーー俺は死んで詫びるべきだろう、本当なら。

「…」

自己嫌悪の想念に支配される直前、心と思い返す。俺はなんで…

「…」

慎二が死んだと思い込んでるんだ…？

慎二が死んだと思い込んでるんだ…？

自己嫌悪の想念に支配される直前、心と思い返す。俺はなんで…

「…」

慎二の死体を見たか？慎二の葬儀に出たか？慎二が死ん

でもいたなら聖杯戦争直後の桜は落ち込んでいたはず。桜は何か気落
あとの俺は誰の話を聞く耳を持たず、海外に飛び出した。だから桜が何を俺に言っていったかも覚えていない—当時の俺には人の言葉に耳を傾けていた余裕がなかったからだ。もし、もし慎二が殺されていなかったら…？入院していたとき、慎二を殺すとしたら、誰だ？遠坂…は、わからない。慎二を手に掛けて、それを俺に言っているだろう。罪悪感を隠して。とも遠坂は甘い、殺しはせずに記憶を奪う程度に収める。アイツはそういう奴だ。俺は？…いや、そういえば誰がランサーのマスターだったのかを、俺は知らない。だいたい、再演された聖杯戦争は、俺がアーチャーの記憶取りにこなったと思い込んでいただけで、全く異なる形だった。アーチャーの記録通りではなかった部分を、俺は自失したまま駆け抜けた…。そんな状態で勝ち抜ける甘い敵ばかりだったろうか。そんなはずはない。まずい、混乱してきた。整理しよう。セイバーはアルトリア、アサシンはハサン、キャスターは英雄王、バーサーカーはヘラクレスだった。
詳細に思い出せないのは…俺が混乱していたからだろう。あの場に居合わせ、慎二を殺すとしたら俺と遠坂は無し。ランサーは…アイツはサーヴァントを失ったマスターを、仕事でもない限り積極的に殺そうとはしない。都合よくランサーが居合わせた可能性は低い。アサシンのマスターは…誰だ？俺は見えてはまず。思い出、思い出、思い出…「間桐鏡、か？」

『間桐鏡』

冬木での聖杯戦争には様々なパターンがある。その内の一つの可能性に、間桐鏡がアサシンが間桐の蟲翁だという根拠はなかった。再演時のアサシンのマスターが間桐の蟲翁だという保証はないが、それが確かなら、アサシンが慎二を殺す理由がない。然しながら、俺は薄らと範囲を見ていたような気がした。蟲翁が身内に甘いかどうかは知らないが、殺す理由が無ければだ。
希望的観測だ。あの頃のイリヤに慈悲は期待出来ない上に、聖杯

「...」

三騎士、騎兵、暗殺者がいないとなれば、後は二騎だ。英雄王は
終始、再演時の聖杯戦争では、やる気がなかった。積極的に動かなか
ったところかも俺を勝者にしようとすらしていたように思える。

でなければ、誤乱していた俺なんて、簡単に殺されていただけた。
本気で戰った英雄王が、錯乱していた俺を護る事に苦慮していたア

ルトリアを打倒できないとも思えない。

なら答えは一つ。イリヤだ。イリヤが懐を、殺せる可
能性が高い。何世事ある毎に俺に絡んで来ていたのだから、あの時
も、俺の近くまで来ていた可能性は最も高い。

イリヤが懐を殺したのか？ だがイリヤは薄らと、何かへ
と違和感を感じていたように思う。確実じゃないが、聖杯による記
憶の改竄、聖杯の器であるイリヤがなんと異変も察知しないまま
でいるとも思えない。現に何年か前の遠坂は言っていた事を。数年越しとはいえ
に気づくイリヤ人たち、しかすると懐を見逃したりするかもしれない。
それでも改竄に感じ当たっていた事を。数年越しとはいえ
に気づくイリヤ人たち、しかすると懐を見逃したりする
かかもしれない。それに再起不能になる程度に収めるとか、聖杯戦
戦争の常識とばかりに負けた奴は死ねと言うそうだ。それでもイリヤが逃すとすれば、やはりそれは気紛れか、或いは誰かの思惑に乗っているとも気づいた場合の一そう、意趣返した。イリヤは負けず嫌いだか…。

第五次、第六次聖杯戦争は俺が高校二年生の冬の時期に起こった。それから一年もの間、慎二の姿を見ていない時点で、イリヤの気紛れがなく、俺が記憶障害ではなかったなら、慎二は死んでいっている可能性は非常に低いかと考える。...

可能性は非常に低いが、なくもない…。

「冬木に帰れば、聞けばいい。イリヤに慎二はどうした、とでも。桜に訊けないが…」

「…女々しい、情けない」

「…この逃げだろうか。イリヤに慎二はどうした、とでも。桜に訊けないが…

そんな希望を持っても、バチは当たらないはずだろう。」

「…なぜ女々し、情けない」

「ん？」

今では、今だけはそう割り切っておく。俺は意識を切り替え、今日の仕事に入ろうと管制室に向かう。
食堂から出て来たらしいイリヤと美遊を見掛けた。

「おはよう」

「おはよう」

出来るだけ柔らかな笑みでそう言うと、イリヤは顔を強張らせた。

「おっ、おはよう！それにじわったり、行くね……！？」

イリヤは「「《怯えた素振り》《そそくさと離れていき。美遊も会釈をすると、複雑そうに俺を見てイリヤを追い行って行った。

「ん？あ、イリヤ？　……おはようございます、士郎さん。失礼します」

「んう？」

「もしかして、俺……怖がられているのか？」
兄妹なのか？

友情なのか？

暫しの精神統一。原因として思い当たる代物は唯一無二。こめかみを揉む。独力での状況改善は困難と判断するのではなくなかった。

わけはどうする。元々深く関わるつもりはなかったとはいえ、不和の種に成りうる原因は取り除いておきたいのが人情。遠遠な自画自賛に聞こえるかもしれないが、子供にあんな態度を取られた経験はほんの身としては、迂闊に動いて根を深くしかねない軽挙は控えたい方が賢明だろう。

た方が賢明だろう。

即ちすべき事は自明である。俺は一つ頷くと第二特異点以来、中々接する間のなかった友人の許に颯爽と赴いた。

「―ネロイエーん！ 子供達に嫌われたよお、どうしよう・・・・！」

うむ。...シェロよ、あくまで友情に基づき忠告するが、そんな容姿でその口調は色々と厳しいものがあるぞ。

特にアチャーが聞ければ激怒は避けられまいと元・薔薇の皇帝。

彼女はカルデアのマスターが着用する魔法協会の制服――魔術礼装である衣服を着用していた。本来なら艶や華やかさとは無縁の衣服だが、流石に人類史上最名を刻んだ暴君、もとい皇帝。ネロが着ている、それだけに周囲を照らす絢爛な煌めきを放っているように。
ネロは自室にて、現代に適応するための座学に勤しんでいるようだった。既に現代の英語と日本語をマスターしたとの事。驚異的と評すべき学習速度だが、ネロなら驚きに値しないと感じてしまうの流しと云うべきか。それとも神祖ロムルスに与えられたスキル、皇帝特権が有能極まるのか恐らく両者の組み合わせが噛み合ったのだろう。ネロの偏頭痛も快癒の一途を迎えているというし、人理性焼却案件さえなかったら順風満帆だ。
考える...。そんなに酷いのか。

「考えてみよ、アーチャーが今の台詞を言ってきたら、そなたは
右ストレートでぶっとばす。
「ひのみち、アーチャーもそなたと同様のリアクションを取る
としようかと。赤ワインを持ってきておいた。

そうだ。なぜかと、赤ワインを持ってきておいた。

それは同じよ。アーチャーもそなたと同様のリアクションを取る
であろう。で、シェロ。余は喉が渇いたぜ。

え、あら、余は喉が渇いたぜ。で、シェロ。余は喉が渇いたぜ。

ふふん、と得意になって鼻を鳴らす。「こんな事もあろうかと」

うちの訳ではないが、昨夜結局飲み損ねていたのである。赤ワイン
を手参した俺に死角はない。ネロは呆れたようだ。朝っぱらから
俺から酒を取ったら何も残らないのだ。グラスとテーブルを投影
してセティリングする。ネロと自分の分をグラスに注いでいると、
それかという小言を聞き流す。

ひょっとしたら、彼女を思い出すようなものに投影魔術を使う
とは...。「フィィィッシュ」などと言うぐらいになる。

このようなものに投影魔術を使うのは...。

「うぶぶぶ」

不思議な言葉を思い出して、流石にそんなふざけた感じになる事はないだろ
う。ニヒルをお気取り皮肉だしこ。
「合理的なのは結構だが、余には現代の酒は度が強すぎる……これ」「問題ない。度は強くないよ」「大丈夫なのか？」「問いかない。度は強くないよ」「第二特異点で、俺が振る舞った酒を盛大に嗜ませたネロである。若千の苦手意識があるのかもしれない。酒好きとして看過できない問題だ。故に最初は弱いものから慣らしていくのが無難である。そんな訳で乾杯しようと思うと、プッシュ、と空気音がして扉が開いた。来客かと思うと、訪れたのはネロのサーヴァントである。リラックマトたたっていった。そこの手に小皿を持っていた。そこには切り分けられアタランテはその手に小皿を持っていた。そこに盛り付けられた林檎が載せられている。見ればもう一方の手には、あと一口でなくなるよう林檎の芯も丸ごと食していたらしい。赤々とした皮と、林檎の芯の色気がすら感じがする。一下の気品がある彼女のそれには色気がすら感じがする。一番注意し食べた口ではないだろう」「それと言えると弱るな……」「食べ歩きとは行儀が悪いぞ」「目づがいをたてるな。朝から酒を酌み交わそうとしている我が言えただけではないだろう」「む、シロウカ」「お邪魔してる。っと、それは……」「アタランテであった。」「お邪魔してる。」「アタランテはその手に小皿を持っていた。そこに盛り付けられアタランテはその手に小皿を持っていた。そこに盛り分けられ林檎が載せられている。見ればもう一方の手には、あと一口でなくなるよう林檎の芯も丸ごと食していたらしい。赤々とした皮と、林檎の芯の色気がすら感じがする。一下の気品がある彼女のそれには色気がすら感じがする。一番注意し食べた口ではないだろう」「それと言えると弱るな……」
ネロに何か用でもあるのか？

マスターが同じ部屋にいてほしいとおっしゃるからな。
それに同じペンで寝ぼけたね。

笑むアタランテとネロの関係は良好のようである。今度は俺が

流石はネロ、手が早い。向性すらお構いなしなのか？

問題はないがアタランテはいいのか？

愛はいない。申し子供のワガママだ、添い寝してあやしてやるの

もサーヴァントの務めだろう。

余を子供扱いするな。

ほれ、こんなにも立派ではないか！

これ、なんにも自立した子供に仕業せずでのんびりと

振る舞い向け居心地が悪く、自信満々なところがお父さんが感じさせるのである。

だからアタランテも邪険にしないし、寧ろ愛おしさを感じていった。

「そ、子供だ。なあネロ、あとアタランテ。なんか俺、イリヤ達に怖がられてるみたいなんだ。初対面の時はそうでもなかったのに。
心当りはあるか？
それはあれであろう、昨夜の上映会が原因であるな。
うん、私もそう思う。
二人の相槌に、やはりかと頭を抱えた。
何がいけなかったのかと真剣に悩んでしまう辺り、一般の感性が鍛え付いているのかも。そこら辺、大事なものなので思い出しておかなければならない。
それは本気で言っていいるのかと白い目を向けてくるアタランテで、それは無垢な娘にとっては、平行世界の自分が慕っていた兄を拘束・監禁した無垢な事をした光景は刺激が違う。

『…いや、言っているのは悪いが、幼子にそなたの経歴は壮絶に過ぎよう。怖がられる理由はなない。
女関係が奔放なのも問題だな。私は気にしないが流石にあのよう紛いの事をした光景は刺激が違う。
いはずだ。理由が分かるなら教えてくれ。
それは本気で言っていいるのかと白い目を向けてくるアタランテで、それは無垢な娘にとっては、平行世界の自分が慕っていた兄を拘束・監禁した無垢な事をした光景は刺激が違う。
いはずだ。理由が分かるなら教えてくれ。
それは無垢な娘にとっては、平行世界の自分が慕っていた兄を拘束・監禁した無垢な事をした光景は刺激が違う。
』

『…レオナルドおおおお！』

行為諸々を省いてもそれはアウトだろう！
編集者って言ったらどうが！なんでそこを検閲しなかった！？
芸術家として雑な仕事はしたくなかった。今は反省してるが・・・

許さん、絶対に許さん。奴にはダグザの大釜の使用厳禁令を発令し、今後チーズ絶食の刑に処さねばならない。俺の話術と築き上げた信頼とを全て行使して、カルデア職員の皆さんに根回してやる。

あとマスターの立場も全力で利用しよう。百営様に頼んで説得をしてもらえる、今のカルデアは断じてノントとは言わないはずだ。

というかそんな感じだと、ハリウッド映画並みにマイルドにしてると思っていた予想が外れてそうだ。まさかとは思うが・・・?

グロ修正をしてダイジェストにした程度だったりするのか？

言いたくないかが、死徒殲滅はともかくとして。在野のはぐれ魔術師として再起不能にした後、魔術刻印を摘出し協会に売り捌いていけるだけなのだ。

審問官に見える。疑わしさは罰する姿勢に見えるのだ。

実はに手に掛けたのは、魔術刻印を失い、魔術回路を失っても、あらゆる手を尽くして魔道を邁進する者みた。それ以外は生かしているし、日常生活ならなんの問題もないようにしている。

もし俺の懸念が正しければ、怖がられても仕方がないとしか言えないのである。
なぜだか、奇変頭に丁寧にレミが心ら、な度と締ない側イ男抱がい、れや、なリ外うそをがヤしる。

くよ子ビー起大て心し者さしようとを職わ相せな。

く箇だの―だ思か」出夫怖ま人行方指れ手っよけけがうのたが―は。

め、の考てふ大も思向いののたが―えけ材て遣がが、たたたくたし方も来の。

た関テ仕な肌たるい。カレイドルビーだけは不安材料だが、何、命の掛っている状況で―それも子供の一ふざけた真似は仕出かさないはずだ。少なくとも致命的な事だけは。愉快型の歯ステッキとは遠坂の言だが、流石に締めるべき箇所は弁えているはず。

―なるかしようと思っていたが、俺は彼女達に嫌われているぐら

いが丁度いい。よくよく考えてみたらレオナルドが考えなしの行動をする訳がないしな。あのイリヤ達は無関係な子供、巻き込まないように大人しくさせるため、俺を利用したんだろう―
を見渡した。

…

…

掃除して行こう。
英霊ちゃんねるネタ

【速報】突然召喚されたと思ったら何もないまま終わった件について

どういうことなのか…

1：フランスの火刑娘

2：名無しに代わりまして英霊をお送りします

3：名無しに代わりまして英霊をお送りします

田中：ちょっと待って。なんか人理終わりね？

なに、つまり何が起こったの？

名無しに代わりまして英霊をお送りします

どういうことなのか…

【野良鯖】

1：フランスの火刑娘

2：名無しに代わりまして英霊をお送りします

3：名無しに代わりまして英霊をお送りします

なに、つまり何が起こったの？

ちょっと待って。なんか人理終わりね？
4: 名無しに代わりまして英霊をお送りします

5: 名無しに代わりまして英霊をお送りします

5: 名無しに代わりまして英霊をお送りします

6: フランスの火刑

それゆり1

何言っているんだ？

結局何があったんだ？

フランスの火刑娘

その時の私は生前の時代だったけいか？それとも私が死んだ直後

 randomized
の時間軸だったせいか、なぜかサーヴァントとしての感覚が希薄で

例えるなら、サーヴァントの新人みたいな感じだったんですね。

7：名無しに代わりまして英霊がお送りします

鯖の新人とかかなにそれw 噴いたw

「新しく召喚された時」とか国とかに合わせて知識も

けよ？ しかも召喚された時代とか国とかに合わせて知識も

あるわけ。新人とかありえんw

本当なんですね！ しかも私の偽物か、それとももう一人の私なのかは知りませんが、竜の魔女というのがいまして、私もそれを探し

て必死に戦っていたんです！ どういう事態だったのか？ 当時は正

確に把握できていませんでした！

8：フランスの火刑姫

というわけですか！ しかも私を知る方はどこかにいらっしゃ

いやませんか！？
フランの王妃…。
フランの音楽家…。
フランのアンドル…あれっ？もしもかして私の出番！？
アラヤのパシリ…そ、だな。
余り想像はしたくないのだが。
ヨ、カルデアのマスターには会わたかったの？か？
─○・んぷん丸関係無
─〇・んぷん丸関係無
13: 名無しに代わりまして英霊がお送りします

空気を読んで黙っておくおそれ。さすがだよね。

14: フランスの火刑娘

あ、そういうえば会っていません。人理定礎を修復するためにレイシフト、というのをして、焼却された人類史から唯一逃れた、特殊な拠点の者達がやって来るのですか？それがどうかなさったのですか？

15: アラヤのパシリ

16: フランスの火刑娘

あの、パシリさん？

というかコテハン酷すぎません？
名無しに代わりまして、英霊がお送りします。お掃除屋さんの兄さんだよ。あっ察しろ！

フラムスの火刑娘あっ（察し）

アランのパシリの反応の方が傷つくのが。まあいいえ。この程度、もはや私の方にも響かない。

フラムスのアインドルあーもー！なにうじうじしてんのよ！

私たちが見守る中、きつきたいん！
だけど！？私も〜！同じどこいったのに気づいたら送還されてきたんだ！

蜥蜴とか骨とか頑張って倒していたのに目立たないまましゅ〜りょ〜とかなにそれぶざけてんの！？辛いのはあんただけじゃないんだから何があったのかほ〜こくしなさいよ！

観察のパシリ
21：アラヤのパシリ
22：フランスの火刑娘
23：アラヤのパシリ

あ、そんなですか？

最初に言っておくと、私は好きこのんでカルデアと敵対していた。

冬木という場所だ。カルデアはそこへ最初にレイシフトしてきた。

最初に言っておくと、私は好きこのんでカルデアと敵対していた。
わ
け
で
は
な
い。
相
応
の
事
情
が
あ
っ
た
ん
d。あ
っ
た
の。
お
れ
は
じ
ん
し
ょ
う
き
ゃ
く
に
か
t。あ
く
じ
ゃ
な
い!

2
4:
フ
ラ
ン
ス
の
火
刑
娘
あ、
は
い。
2
5:
フ
ラ
ン
ス
の
音
楽
家
と
り
あ
え
ず
巻
で
話
し
て
貰
え
る?
こ
っ
ち
も
何
が
な
ん
だ
か
わ
か
っ
て
な
い
し。
い
や
ま
あ
遠
く
で
do
ん
ぱ
ち
し
tて
る
よ
う
な
音
は
聞
こ
e
た
け
do
。
カーデアのマスターと、それに対してサーヴァンツの内での一騎だが…、それ、ああ。合理解義と効率重視の悪魔全体した主でな。
それと私は燃え尽きたアラヤから最低限の情報をキャッチしてあるから、第一と第二の特異点がある程度感じ取っていた。
そこで…第二特異点が、だな。人格定礎の復元が、もうすぐ不可能な領域に突入そうだね。
つまりそういこうとだ。

27: メシマズ国の黒剣む、ロム専が横から失礼するぞ。ちょっとそこカーデアに召喚される感覚がある。ではなアーチャー、ここでもメソメソしているがいい。

28: アラヤのパシリん！？君はまさかバーガー王！
フランの王妃えー、と。つまりどようことcallsとするとカールデアのマスターはとても優秀だね。
つまれね〉
次がつっかえるか、カールデアは超特急でフランスの特異点を攻略したんだ。
やれやれ。私達は結局、無駄に歩き回ったけっこったね。
フランスの竜の魔女カールデア絶許
あ、あ、なたはまさか！？
3:フランのC.O.L.
フフフフかるであ。
かるであかるであかるであかるであかるであ。
おのれよくもよくもおおおお！
34:アラヤのパシリ
あっ(観察)しー。
35:フランのアインドル
なに？きもっ！
フランスの処刑人
フランスの竜騎兵
フランスの串刺しごいさん
フランスの火刑娘
フランスの夫人
な、なにか突然湧いてきましたね……。

貴方たちは何者ですか！

おお聖処女よ！
私の悲願！
私の渴望！
おのれ天に在りし神よ！
ここまで私を！
聖処女を愚弄するか

ああああああああ！

穏やかじゃないなわね。いったい何があったのかしら。

突然〜〜 41 に目潰しをしたくなっってきました。

なぜでしょう。
カルデアの所業を納めた映像データなら「カルデアのマスターを応援隊」で見る事ができることに気にならなくて見えてくといいのに。

フランスの火刑娘ほんとでは！ちょっと見てきますこと。フランスのアイドル。

…え。なおあれ。

フランスの王妃あら…。

フランスの音楽家あっはははははははははははははは！
知っていた。

53: フランスの刑務所

あ、あの……皆さん、見てきました……。

54: フランスの被害者

55: フランスの刑務所

……笑いなさいよ

56: フランスの被害者

……ご、ご愁傷さまです。

私を哀れむなあ！
な なんの よ アイツ！
開幕聖剣ぶっぱか正気！

蜥蜴ファブリズ 召喚させないよぉ！
こころ絶対泣かてやる！リベンってやるんだからぁあ！
アラバムスの火刑娘とあえず、状況は把握できました。
皆さんがとうございました。

57: フラウンスの映像が出回ってますね。
私はそれで、カルデアを守ってここと思うまし。

58: 騎士団一のイケメン御子殿の本気が見れると聞いた。

59: メシマズ国の湖我が王と息子の勇姿が見れると聞いた。
メイヴィーチゃんさーこー！
クーちゃんの本気が見れると聞いて。
ふむ。
手元に聖杯もあるこそ、馬鹿弟子のこそもあれば、少しはカルデアの実力を見てやろう。
アラヤのパシリ聖杯？…おい。
ままか。
フランの火刑娘
なっ！？
正気ですか！？

64：フランスの被害者

あっはははは！
いいねえ！
私も手を貸してやるわよ！
盛大に燃やしてやりましょう！

65：フランの被害者

ハハハハハハ！
いいねえ！

罗马
そのような場合にして、

霊ちゃんねるその2ロー。マ特異点

【彼方の鯖よ】カルデアを応援し隊【この光をご覧あれ!】

××スレ目

1:メシマズ国の湖というところです、前スレでの問答は「マシュは私の娘」という決着を迎えたいわけだが。

2:マッシュポテト阻止

3:台所の男装娘阻止

4:永遠の童貞

【メシマズ王国】アシミルハコバツクシキ

栃木市一輪　お店　あそびにんじん

2017年 8月14日
といますね、湖の事を少しでも父親だと認識していきた少々年期は本気で僕の黒歴史です。生前の所業を思い返し悔めてもどうぞ。

5: 湖を迎えたいわが部

4の辛辣に湖が濁りたのはさておくとしても、事実聖なる童貞は私の子であると故に、逆説的に霊基の混ざったあの娘も私の娘になるのは動かせがたき事実であらう！

6: 童貞…理性が無事に復元できた暁には、申し訳ないがあの娘から霊基を離そうかなる。

7: 台所お願い湖卿…わたしの憧れの気持ちをここれ以上曇らせないうけさ…

8: ポテトとこころで湖卿。

童貞の認知は？母君は？

普通ディレに粉をかける不誠実さは？

悔い改ししたか？
9：湖

さて！カルデアの冬木に於ける戦ぶりの考察も済み、当事者であればSAN値直葬ものの惨劇——フランスでの一幕の閲覧も終えた我々ミシマズ国の成すべきは何か？それらは何時であろうと、我々王のいるカルデアに召喚される準備を整えること！

その時のために、如何なる状況であっても即座に状況に対応する為、カルデアの状況を我々はモニタリングする必要がある！カルデアに先んじて観察しておこうと思う。

10：謎の孔明

11：私は悲しい

おおっとここでショタライダーを庇い脱落したローマ軍師の登場

12：私は悲しい

おい。
謎の孔明X
なんだ？座とはこんなノリなのか？
寧ろ何故私座に……？
私はそんな器ではなぞ。

g: 謎の孔明X
3: 湖
敢えて真面目に考察するならば、
卿は名のある軍師の疑似鲭
であったのだろう？それが諸共に消滅した故に、
卿の魂と元の英霊
が同じ座に記録として蓄積されたのだ。
謂わば卿は、ローマの軍師であってそうでない、
軍師の記録から
形成された人格に過ぎないだろう。ニートな軍師が面倒臭がりでも
して、卿という作り出された人格を表に出しているに過ぎない。
謂わば君はオリジナルの軍師。ローマの軍師を模した本物。疑似
鲭の方の彼が活動出来るとしたらイレギュラーの塊、カルデアしか
有り得ないだろうとも。

謂わばいいんだから、いつもそうやって真面目だったら……！

頭はいいんだから、いつもそうやって真面目だったら……！
承知しました。

所でX殿、第二特異点はどうなっているのです？

16：ポテト

人理終了五秒前と、自分達で言っていたでしょう。

状況は把握して

いないのか？

17：謎の孔明

管轄する五秒前と、手の早い湖卿しか事態を把握してはいないも

いかと…。

18：台所

すみません。無駄に手の早い湖卿しか事態を把握してはいないも

いないのか？

19：謎の孔明

ふむ。では簡単に箇条書きするとしよう。

・魔神柱、第二特異点の原因である聖杯に命令コマンドを刻み、
ローマのYへ埋め込み暴走させた。

・史実のローマ軍、及び市民、城、山、国土全体がYの宝具によ
って呑み込まれ、生ある者を取り込む魔境と化した。謂わばローマ
という国を自らの体内だと定義したわけだ。なお国民に関してだが
あくまで「取り込まれただけ」で死んでいるわけではない。Yの聖杯にも呑

るのかな…。

・ロー

マのYを

で「

取り込まれただけ」で死んでいるわけではない。Yの聖杯にも呑

るのかな…。

・ロー

マのYを

で「

取り込まれただけ」で死んでいるわけではない。Yの聖杯にも呑
まれ

意の力には感服した。

野良鯖、ネロ帝を逃がすために、魔神柱側の鯖からの追撃に対する盾となら全滅。

ネロ帝半死半生でブリタニアへ逃れる←今ここふむ。

Yの慧眼には呻いてしまう。

ネロ帝がブリタニアに追い込まれたのは、Yによる策略だろう。あそこが最も安全で、かつカルデアの現れる公算の高い地だからな。

流石と言えないうが、聖杯に取り込まれていたらコレだ、彼はそんなのだろうな。

20:ローマは、ローマだ。

21:湖?

22:ポート?

23:台所！Σ(□)
童貞時を越えていっしゃった！

ローはロー故に、ローの行き先はローにしかない。であれば導き出されると答えは、ロー以外に有り得ぬ。詰まらぬ消去法よ。

湖申し訳ないが何を言ってるのかもるで分かるない。

ポテト英語でお。

狐と見せ掛けた狼あはははは！我々への報酬にニンジンを所望する！
私は悲しいボロボロです。

童貞詰み、ですね。

野良鯖なし。ロー全体がYの体内、即ち敵の懐。

ネロ帝を守る戦力なし。

そこからカルデアが来て、あの戦力では…。

輝くイケメン御子殿の出番と聞いけて。

メイヴちゃんなー！
クーちゃんなの出番と聞いけてー！

狼と見せ掛けた狐功労者が無視されると聞いけてー！

寄越すのだワン！

湖光の御子？…考えられない訳ではないか。

…
謎の孔明。
なぜそんな確証があって光の御子が出てくるのか。
冬木の惨劇という映像データを参照してくださ。
カルデアのマスターはそこで出会った光の御子の髪の毛を、触媒とし確保してあります。
赤い弓兵の惨状には愉しみふんげふん同情不可避。
謎の孔明…。
見てきた。なるほど。
光の御子の番だろう。戦力不足に加え、ブリタニアというお誂え向きの土地方。呼ばない理性がな。
Yはこれを？
ローマはローマ故に、ローマだ。
解読班？
どこかにいらっしゃいません？

皆さん、ブリタニアにカルデアが現れました！

キター(~∀~)。
最強であります。

冬の黒いのと我々の知る王…二人？

我が王！
我が王ではありますっ二人！

聖剣一対とか最強ですね勝ったわ風呂入ってきます（思考停止）

騎士王…

47：イケメン

46：台所

45：私は悲しい

44：ポテト

43：湖

42：ポテト
童貞

湖

いや、黒い我が王。略して黒王はカルデアのマスターに付き従っておられる。冬木での痴態を見ると、反転したからといって黒王の根底にあるものは変わっていないと見た。

50：ポート

しかし…黒化する可能性があったということは、我々が王をあそこまで追い込んでいたということでは…。

51：私は悲しい

やはり兜は許されない

52：湖

51：オマエモナー

53：童貞
狐は円卓は今日も地獄なのだな…！

メイヴちゃんさーこー！

大体皆悪いじゃないい？（名推理）

台所そうこうしていう内にネロと合流してしまったね。

月が綺麗ですね！

童貞の、ネロォォォ！

ポテトカルデアのマスターがネロ帝の状態を把握して応急処置をしまず。

迅速な判断ですね。
謎の孔を明しそしそう聖杯を使うか…合理的だな。
戦力の拡充にも繋がる。

月ネロくぁdrftgfふじこlp

月が運営ゼルにBANされました

湖ふぅ(一仕事終えた感

童貞この外道!

cとを!

私は悲しい
私は悲しい……姪を案じる叔父を締め出すとは……。

まあまあ、狂化のない座で叫び続けられるのも迷惑です。是非もありません。

6：ポテト

6 まあまあ、狂化のない座で叫び続けられるのも迷惑です。是非もありません。

6 あっ……全盛期のヤツは知らなかったが……これならば……。

7 1：正座タイツ

7 2：メイヴちゃんさいこー!

6 9：イッケメン

6 これまで、御子殿キター！（∀）ノーニー！

ローマ故致し方なし。

6 7：Y

6 そろそろYがここにいる訳を追求すべきなのでは……?

台所そろそろYがここにいる訳を追求すべきなのでは……?

イッケメン!

6 た、御子殿キター！（∀）ノーニー！

メイヴちゃんさいこー!

正座タイツ

はお……全盛期のヤツは知らなかったが……これならば……。
馬鹿弟子～！
僕だ～！
殺しに来い！

72: イケメン
71: えで！
「どうすんだマスター。状況は分かったが、オレとしっちゃさっか、俺たちとは違う視点で考えられるんか。」
「見てるかグランニア！これが本当のケルトのイケメンだぞグランニア。
そして蹂躙される木っ端王。そら（たかが一万程度の中と狂ってる王だと）そう（なるわ）よ
それ（たかが一万程度の中と狂ってる王だと）そら（なるわ）よ

73: メイヴちゃんさいこ～！
74: ポテト

75: 台所
そういえば～～　74は光の御子の伝説にちなんだ逸話がありまし

日中の私でもこんなに容易くはいかない　

ア！
湖のあとの槍はずるくないか…?

「アレスタの赤枝の騎士、クー・フリオン。これより我が槍は御身のもの。如何様に振るうも我が主人の意のままに。命令を、マスター！」

「―槍を預かわりに俺の命運を預け行け、派手に戦い、力と知恵と勇気の限りを尽くして、ガイス・ユリウス・カエサを打倒しろ」

「承知！」

忠誠を誓った、だと…。

俺もあんなマスターに召喚されたい！

羨ましい御子殿…！
ポテト裏切りましたけどね。

童貞へもうあんたは黙っていろ。

台所湖卿…。

謎の孔明Xさって、カルデアはどう戦う…？

以下ケルト英霊民の流入相次ぎ絶叫メで埋め尽くされる。
英霊に代わりましてケルト民がお送りします。

光の御子はランサー時さいよいーって言っんどら！にわかが！

かがはどっちなんですかね。同じ時に生きてもないせしやんなんですね。

御子殿はランサーは勿論としまして、アーチャー以外の六クラスに適正のあるほうだぞ。

普通に考えてもライダーが最強だ！
英霊に代わりましてケルト民がお送りします。

生前の悪夢を思い出し忘れないで。

このネタは禁止で前に言っただけ！

やめろ。

そこのネタは前言って。

いいや。

止めさせてくれ。

かねてから話はそれかわかめ。

ここでも敢えてバークサー最強説を唱えてみる。
英霊に代わりましてケルト民がお送りします

そんな御子殿をしばき倒したタイツ師匠こそさいきょうなのですね？

御子殿の最盛期は二十代半ばなんやで。
それでも悠久の時を生きてきたタイツ師匠の『すべて』を一年と一日で体得した御子殿なんやし、十年以上密度の深い戦場で命懸けで戦ってたんだ、今もどっかで漂ってるタイツ師匠がいて、ずっと鍛錬して成長していってもよくて互角なんじゃね？

そんなババアとかマジどうでもいいし。
御子殿の話しようとせ。

814 : 英霊に代わりましてケルト民がお送りします

815 : 英霊に代わりましてケルト民がお送りします
強く生きて…。

英霊に代わりましてケルト民がお送りしますはあ？お前ら何言っつのの？

スッ……（ω）

英霊に代わりましてケルト民がお送りしますヒェッ！ごめんなさい！許して！見逃して！私には妻と娘ががごめん。

アバアバアバアバアバ！ごめん。

ごめん。

…………へんなへんな。
スッ (目を閉じる)

823 : 英霊に代わりましてケルト民がお送りします

824 : 英霊に代わりましてケルト民がお送りします

陰口は厳禁。影の国の門番だけに。

憐れな……。

825 : 湖

ここはケルト民の多いインターネット体でつね……。

七百以上コメが埋まるとはこの湖のリハクの目でも見抜けなんだ

826 : 英霊に代わりましてケルト民がお送りします

お、スレ乗っ取られたメシマスの不倫野郎じゃん。我らが輝いち

かったの廉価版。どした？

827 : 英霊に代わりましてケルト民がお送りします

ねえ今どんな気持ち？スレ乗っ取られて今どんな気持ち？w w

おっおっ ねえ今どんな気持ち？スレ乗っ取られて今どんな気持ち？w w
通報しました。

他の委員会においては、議論に関係ない煽りは禁則事項…覚えておきなさい。

童貞そろそろ異点攻略に乗乗り出し、カルデアに集ります。

私悲権を我レの元取り戻しためとし、私は悲しいう（ソロ・ロロー）クロマの地に四時間も先に踏み入った御子殿が心配だ。いや、心配なところ多々いか。

純粋にそちらが見たい。
英霊に代わりましてケルト民がお送りします。皆思っている事を平然と口にする！そこに痺れる憧れる！童貞の孔明X残念ながら当然残念ながら當然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら當然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念しながら當然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念しながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念がら残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念しながら当然残念しながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念しながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念ながら当然残念がら
英霊に代わりましてロー民がお送りします。

ネロちゃまの鯖が簡単に逝くわけないだろい加減に士郎！

すいすい通り進む凛々しく惚れ。

先行偵察か。この状況で伏兵なんてあったら詰むからんな。

アサシアンも行ったみたんだ。

ここれは来ますね…（予言）

ポテ何が来るのでしょっ（）
851：英霊に代わりましてケルト民がお送りします

挨拶わりに城粉砕流石。

対御子殿のスペシャルリスト。839はどう思われます？

852：メイヴちゃんさいこー！

うっ……ふう。

853：英霊に代わりましてケルト民がお送りします

ジャケンゲッシュ破らせるところからはじめましょうねー。

854：英霊に代わりましてケルト民がお送りします

世界ひとつを相手に勝てと無奈ぷりされて喜んでる父さん相手だ

もちろん、是非もないよね……
アサシエンター！

知ってた！

童貞！

ポテト魔神柱！

なんですかあの醜悪な化け物は！

台所にて魔神柱に知性があるのを見抜いて即座に煽りにかかるカ

デアのマスター。

そうしてカリバる、と。

勝ちましまね。

私は悲しいうーんここの。

もはやお約束。もしや卿はここの流れを……？
湖流石にそこまでは。アサシンが逝くだろうなと思ってはいたが。

861：謎の孔明

862：謎の孔明

863：英霊に代わりましてケルト民がお送りします

864：英霊に代わりましてケルト民がお送りします

865：英霊に代わりましてケルト民がお送りします

ケルトの星さすが。Yの目が釘付けでカルデアへの攻撃が散漫に。

そして既に戦果の上では一国が滅びてるまである（白目

キター（。∀。）！

D E B U 発見。イケー！父さん！ぶっ殺せ！
子供！？
宴会の支度！？
来るぞー！

867：湖

868：ポテト

子供！？
宴会の支度！？
来るぞー！

869：私は悲しい
反転した鯖は怖い。はっきりわかります。

870：英霊に代わりましてケルト民がお送りします
ああ！
犬の肉食させやがった！

871：英霊に代わりましてケルト民がお送りします
ああ！
犬の肉食させやがった！

ベルメリアは悪

死ね。氏ねじゃないって死ねDEBUが！

絶許

872：輝かないイケメン

やがりローマは悪

メイヴちゃんさいこー！
英霊に代わりましてケルト民がお送りします。
お父さんを殺せーいこー！そのこだ！

謎の孔明Xなるほど、DEBUも考えたな。
詩人の言葉に逆らないゲッシューを破らせるとDEBUには不可能。

あっははは！犬の肉だけと詰めが甘いわね！
全然ダメよ、相手に半端は！怒り狂うけっって子供戦車に乗せたー！?

不思議の孔明に逆らうのは、Dacbも考えたな。
詩人とはケルトに由来する吟遊詩人のみ。
それを使意でぬたれば、別の策を講じるまで…。
879：英霊に代わりましてケルト民がお送りします

粉砕！玉砕！大喝采！

880：英霊に代わりましてケルト民がお送りします

何回も言ってるけど流石としか言えない。

881：輝いたイケメン

御子殿ー！俺ですー！立ち合ってください！

882：メイヴちゃんさいこー！

子供爆弾にして戦車壊す所までよかったわ。

けど御者と馬の王と紅蓮の蹄残しゃうのダメダメね。

槍と戦車と剣と体の自由奪って初めて対等よ。

そんなだと殺せないわ。

883：湖

余りの生命力に本物の戦闘続行スキルを見た

884：ポテト

戦闘続行というより殺戮続行というかですね

う～む。戦闘続行というより殺戮続行というかですね
謎の孔明Xここでチャンネルを変えよう（ポチッ）英霊に代わりましてケルト民がお送りしますうわぁぁぁぁ！

英霊に代わりましてケルト民がお送りしますうわぁぁぁぁ！

-gャ-ああ！最後まで見たかったー!

あっ、Yがいますね…。

なんか食べテロを逃した感じ。ホッとしたらな、残念なよな。

なんか降伏勧告されまです。ネロ渡せとか。

渡すわけないだろい加減に士郎！
輝かなかったイケメン

逆転は困難？侮るなよ、ロムルス。奴は最強の槍兵だ。その程

度の逆境、跳ね返すに決まっている。

「逆転は困難？侮るなよ、ロムルス。奴は最強の槍兵だ。その程

度の逆境、跳ね返すに決まっている。」

英霊に代わりましてケルト民がお送りします

ままたイッケメーンが血涙しておられる。

英霊に代わりましてローマ民がお送りします

「それでもこそだ。まこと一味快なり！」

よく言った！よく言ったああああ！

折る！！

そこのどこだ。まこと一味快なり！

893：英霊に代わりましてローマ民がお送りします

894：英霊に代わりましてローマ民がお送りします

895：いっけめん

神祖マジ神祖

くわせでりふじこり

wserdfgy
湖彼が…
卓にいたら…
(ボソッ)

言わないでさい…

台所食事が…
人間関係が…
童貞人理崩壊待っなし(ブリテン)
救済的意味でいけめーんうがぁぁあああああッ!!

以下インケメンの嫉妬とローム民の神祖クールとお通夜な円卓コメ
でスレは埋め尽くされた……
【じがじどに】
カルテリアを覗き隊【殺された】

1：ケルト最強最強の女戦士
スレ立てとはこんな感じか？

2：名無しに変わりまして英霊がお送りします
立て乙。ってっさ1もしかや影の国の・・・！

3：名無しに変わりまして英霊がお送りします
乙。そんな感じです。ってスレ題！

4：名無しに変わりまして英霊がお送りします
嫌な悪寒・・・。予感じゃなくても悪寒。
弟子に殺されたくって、あんた死なないんじゃなかったのかよ！

ってか世界から切り離されたあんたの国で、どんな弟子があんたを
殺したんだ？
最美女戦士うむ、無事に立てられたようだな。

魔境、深淵の叡智(ポチーと頑張った甲斐がある。)

申し訳ない、影の国の女王よ。既に嫌な予感がするのでです。
奇遇だ。

よ、オレもだ。

名無しに変わりまして被害者がお送りします。

弟子に殺された。
カルデアを覗き隊。
カラデアっ、あのカルデアだろ？
ははははっ、ぶるっちまうぜ。

最美女戦士笑ってくれば。
実はな、私はふとした事で聖杯を手に入れたら。
いや、手に入れたと云うより送りつけるべきか。
それでな、うむ。特異点を作ったのだ。

名無しに変わりまして英霊がお送りします！

……
16：名無しに変わりまして英霊がお送りします

17：名無しに変わりまして英霊がお送りします
何やってんじや我ええええ！！

18：最美の女戦士
テヘヘロ

19：名無しに変わりまして英霊がお送りします

あら可愛い。って許すかああ！おまっ、自分が何したかわかったの！？

20：最美の女戦士
では問うが、英霊達よ。お主らは己の未練を濯ぐ機会を得たら

何もせずにおれるか？

21：名無しに変わりまして英霊がお送りします

むっ。それと言われると弱い……。
名無しに変わりまして英霊がお送りします。
それとこれと話は別じゃね。
英霊とはちっ端もないってこと。
この俺らけどよ、やって良い事と悪い事の分別はつくぜ。
マジレスで悪いけど、あんなにやった事は許さないじゃだ。
お前の言うところは全面的に正しけど、まあ。
の気持も分かるよ、俺は。

最美女戦士すまない。
今だけ反省しよ。
当時は他を省みられ精神性はなかった。
魂が腐っていた、うわぁ…。
流石は光の御子をして魂が腐ってるとまで言われたが、座に来る事で魂の状態が人間に近い形に戻れたのだ。
そして反省はしていいが、やっみてやっと思っっていいが。

魔女。控えめに言って糞です。
普通なら報復が怖くて言いなんだが、糞だ。


赦えで

あめさし

正報

やる。
３１：輝いちゃった貌

それは俺の持ちネタだ！

３２：親指ちゅぱちゅぱ

そ EDGE Edge し Edge Edgeた！

３３：名無しに変わりまして英霊がお送りします

まあとケルトだよ……。

３４：名無しに変わりまして英霊がお送りします

頼むからケルト勢、大人しくしててくれ。いつぞやのようにスレ

が埋め尽くされてしまう。

３５：名無しに変わりまして英霊がお送りします

３６：最美の女戦士

それこそ話を戻そう。ともあれ私は特異点を作った。最初の面子は薔薇の皇帝

イ。案の定、カルデアが乗り込んだ。最初の面子は薔薇の皇帝
をマスターに、騎士王、アルカディアの狩人、名も無き赤い外套の弓兵、暗殺者が現れた。そこに馬鹿弟子の姿はなかった。

37: 名無しに変わりましてローマがお送りします。

38: 名無しに変わりましてローマがお送りします。

39: 馬鹿メ、ネロちゃんまは時空を越える。常識だぞにわかめ。

38: 馬鹿乙。

37に真面目に返すなら、そのネロちゃん、詳細は第二特異点での顛末を見ると良い。「ザーヴァントではない、本人だ。」

34に変わりまして英霊がお送りします。

「そうですね、サンクス。」

頼むからローマ勢、大人しくしててくれ。いつぞやのようにスレが埋め尽くされてしまう。

41: 39なるほど、サンクス。
名無しに変わりましてね。
あえ、おれいつレスしたっけ？
ええ、おれいつレスしたっけ？
今、お送りします
あえ、おれいつレスしたっけ？
ええ、おれいつレスしたっけ？
それ、おれいつレシスしたっけ？
ね。

はらはら

アガレたっけ？

ひどい事件だっ
たね……。

こここは同一人物の多いインターネット・ツェンでっ
たね。

名無しに変わりまして英霊がお送りします
今、お送りします
名無しに変わりまして英霊がお送りします

杯でな。呼び寄せたのは七騎。

ともあれ、宛の外れた私は幾人かのサーヴァントを召喚した。

聖杯でな。呼び寄せたのは七騎。

最美女戦士

4: 最美女戦士

4: 最美女戦士

4: 最美女戦士

4: 最美女戦士

4: 最美女戦士

4: 最美女戦士

4: 最美女戦士

4: 最美女戦士
セイバーにフェルディア、アーチャーに何故か魔弾を持っていったコパル、ランサーに栄光のライリー。ライダーとしてメイヴ、キャスターにドルイドのカトゥード、バーサーカーにクラン・カラティン、そしてアヴェンジャーとしてジャンヌ・ダルク・オルタ。

49：名無しに変わりまして英霊がお送りします。見事にケルトで埋め尽くされ……って最後www

50：名無しに変わりまして英霊がお送りします。最後なにがあったwww

51：名無しに変わりまして英霊がお送りします。

52：復習者。

笑いなさいよ。

よう笑ってやるよwww

111ってもしかしてお前かwww

最後に変わらせたコンテハンからして誤字だっしw
名無しに変わりまして英霊がお送りします

殺伐とした空間に笑いを提供する心のオアシスでな

復讐者うっさい！これでいいんでしょ！

としたジョーキゃない！

最愛の戦士なぜ奴が来たのかも聞かなくてくれ。

私にもし慈悲の心はある。
6 1: 名無しに変わりまして英霊がお送りします
そしてこの、真名隱す気皆無のゲーム
あ、なんか流れ予想できた。

6 2: メイヴちゃんささいこ！
あんなに完璧なキャラをまた見られるなんて…ふふ、見事に蹂躙されたわ。

6 3: 名無しに変わりまして英霊がお送りします
あ、なんか流れ予想できた。

6 4: 名無しに変わりまして英霊がお送りします
奇遇だね～

6 5: 名無しに変わりまして太陽の騎士がお送りします
追い付きました。

6 6: 聖なる童貞
ふむ。流石はアイルランドの光の御子。察してしまえますね。
それはそうと冬木で幼子に霊基を譲った湖は断罪されるべきでは
とまあ、冗談はさておいてね〜。あれば不可抗力だ。それ
と、あの娘は不安定に過ぎる。内から支える者がいてもいいだろう。
それが偶然私だっただけの事だ。

それは偶然私だっただけの事だ。

とまあ、冗談はさておいてね〜。あれば不可抗力だ。それ
と、あの娘は不安定に過ぎる。内から支える者がいてもいいだろう。
それが偶然私だっただけの事だ。

それは偶然私だっただけの事だ。

68：童貞

69：台所のボーマン

お風呂から上がってきた。このスレはなんですか？

お風呂好きですね〜。見てから来なさい〜（慈愛の目）

70：太陽

71：名無しに変わりまして英霊をお送りします

頼むから円卓勢、大人しく〜！

 dochisho
72：名無しに変わりまして英霊をお送りします

73：目的と違う故、とりあえず全力を出した。波濤の戦を召喚し、英霊がお送りします

74：名無しに変わりましてケルトがお送りします

75：名無しに変わりましてケルトがお送りします

76：最美女戦士

77：キターー！♫（°∀°）osomalso

キターー！（°∀°）osomalso

キターー！（°∀°）osomalso

キターー！（°∀°）osomalso
し て せ か て う て う の と 互 か う に で で い た は、 か ら か ら せ の か か で か り、 セ イ バ が 波 来 の 獣 か ら 神 杯 を 回 荷 て 撤 退、 あ わ よ く は 追 撃 さ せ、 馬 鹿 弟 子 と 再 戦 さ せ る つ も り だ っ が… せ イ バ に は 残 念 な 事 に 馬 鹿 弟 子 は こ れ を ス ル え。 私 の 劫 い を 察 し た の だ ろ、 セ イ バ を カ ル デ ア に 任 せ、 私 の 勇 本 丸 に 肉 身 乗 り 込 ん で き た。 77: 名 无 し に 変 じ て 英 靈 が お 送 し ま す わ る "…？ 78: 名 无 し に 変 じ て 英 靈 が お 送 し ま す 通 に 自 殺 行 為 な ん で す が、 そ れ は。 79: 最 美 の 女 戦 士 バー サー カー、 ラ イ ダー、 ヴ ェ ニ ジ ア と 私 の い る 城 だ、 常 識 通 り の 英 雄 な ら は 瞬 殺 し て や っ た が… 知 っ て の 通 り、 そ う な 常 識 な ど 容 易 く 踏 見 越 え て こ そ の ア ル ス タ サ イ ク ル 最 強 の 戦 士。 流 石 に 薦 り し な か っ た さ。 が、 ラ イ ダ サ ー サ ー を 従 え て 独 断 で 动 き お っ て な。 自 分 達 だ け で 出 撃 し お っ た。 80: メ イ ヴ ち ゃ っ こー！ 仕 方 な い じ ゃ な い！ あ ん な の 見 せ ら れ て 興 奋 し な い 訳 な い で し 
悪くぬぇ！

でもここの私のコノー軍と最高傑作だったバーーサーカーなら、少し戦えると思っつのよ。

8:1 美女戦士そし生前の二の舞だ。所要時間、四時間。全滅だ。

8:2 名無しに変わりまして英霊がお送りしますうぁ…。

8:3 親指ちゅぱちゅぱ（；゚Д゚）ガクガクブルブル聞っこーし！>

8:4 名無しに変わりましてケルタがお送りすあっとー！〉

8:5 名無しに変わりましてケルトがお送りすってー！?
86：最美の女戦士
87：名無しに変わりましてローマがお送りします
88：名無しに変わりましてケルトがお送りします
89：名無しに変わりましてローマがお送りします
90：被害者
草生やしてんじゃないわよ！？
何でサークルとし始めのステークハイにはけど！

私この決はカタログだったところ、奴は十代も半で、影の国にいった私の全てを学んだ。

それは二千年、私があくら、二千年前もの間、悠久の時を鍛練に費やしていった。

槍の極みも、更に研ぎ澄ませ、別の神話の武神、戦神にも遅れを取らぬ域に至ったと自負している。

その私がだ。武者震いに震えた。奴は十代も半ばで、影の国にいった私の全てを学んだ。

最美女戦士所詮はカタローグだ。そこの程度で苦戦するようななら、奴は神話の頂点とまで呼ばれた。

さて、おき、待望の瞬間だった。城の奥深くで対面した私は震えた。

影の国にいた頃の未熟な馬鹿弟子ではない…当時の私と互角だった、今私の私とは比べるべきもない小僧ではなかった。
二千年だぞ。私は一目見ただ瞬間、笑みを抑えきれなかった。奴は影の国を出て十年ほどで死んだのが～そ・の十年は、私の二千年に匹敵していたのだ。

95：輝いちゃった貌

96：最美の女戦士

口上を述べた、はずだ。

だがそんなものは忘れたさ。気がつけば槍を交えていた。どれほど戦い続けたか、意識から外れてしまったよ。

そして、互いの体に傷が多数刻まれ、奴も私との交わりに興奮し、戦ったのか、遂に本気の中の本気、全力の中の全力を見せてくれたのだ。

97：名無しに変わりましてケルトがお送りします

（（ω））
～ガクガクブルブル～

98：名無しに変わりましてケルトがお送りします

ぐゎあああああああ！？！？！？！
101：名無しに変わりましてケルトがお送りします
嘘だろ、変身の一言でケルト勢が沈黙した……

102：最美の女戦士
私も釣られて本気を出して変身してしまった。
もっと長くやりあいたかったが、それよりも目の前の強敵を斃し
たくて仕方がなかった。

103：名無しに変わりまして英霊がお送りします
あんた死にたいんじゃないかって……?

104：最美の女戦士
それはそれ、これはこれだ。
うむ、名残惜しかったが、決着は早かったな。死力を尽くして殺し合い、最後の必殺を槍に託した。理性はなくなっていようと、流
石は、我が一番弟子。槍の真名を唱えられる無様は晒さなかったよ。

私の槍は、奴の右の胸に。そして奴の槍は私の心臓を穿っていった。

魔槍と魔槍をぶつけ合い、全く同じ軌跡を描いて相殺された槍を、互いの胸に突き刺した。

魔槍ゲイ・ボルクは、相手が不死であろうと、問答無用で殺してしまった。星の触覚である真祖であっても、心臓のない概念的な存在であっても、故に私に死が無くとも、魔槍は私を殺し尽くしたのだ。

死を祝福するケルトである。

不覚にも感動した。死ねて良かったな！
1: 名無しに変わりましてケルトがお送りします
2: 名無しに変わりましてケルトがお送りします
3: 名無しに変わりましてローマがお送りします
4: 名無しに変わりまして円卓がお送りします

でかした！！！
アバンタイトルだね土郎くん！

― しぶとっ！ ー

怪物が突進。人中に振るえる者などない長柄のバリディッシュ双
振りを、恐るべき怪力を以てしてそれぞれ左右の腕で振るう。正に
猛威、称して竜巻。局地的な嵐を起こし牛の頭蓋で象られた仮面の
巨漢が災害を撒き散らす。

当たれば即死。当たらずとも余波のみで瀕死は免れまい。怪物の
発する迫力は、稀代の英傑をしてその心胆を寒らしめるだろう。
全くの無傷である敵手は何者なのか。

 человекが生まれた双斧に、神獣の喰を完全に弾いていた。人の手によっ
て生み出された双斧故に、神獣の喰を前にすれば無力だったのだ。
怪物の膂力そのものは徹るはずだったが、それは真紅の偉丈夫の
卓越した体捌けで威力を逃がされている。
その有様は、牛の怪物の興奮を煽っているかのよう。

しかし、その実、偉丈夫には別段怪物を嘲る意図はなかった。せめてもの情けとでも言うのか、或いは神ならぬ身だからこそ同じ神の被害者だからこそ同情に近しい蔑みを以て、反英雄の猛りを受けていたのかもしれない。

だがそれも此処までだ。充分に付き合っただろう。男は神獣の囊が外れないように固定した、頭部へ巻き付けた鎖を鳴らしながら口を開く。

気など済むものか。こんなもので止まれるものか。激甚なる憤怒に身を焦がす迷宮の怪物は、怪物として侵入者と相対しているのでない。それは、ひとえに護るため。己ではなく、己を人の名前で呼んでくれた、大切な女神を取り返し、護り抜くためにその全霊を尽くしている。

偉丈夫の片手にあるのは、反転した聖大剣アルミアードワーズ。魔大剣とでも言うべきか、黄金に煌めいていたはずの栄光の大剣は黒く染まり、悍ましく禍々しい魔力を迸らせてている。

一方の手には。 ── 小柄な少女の姿をした、非力な女神の細頸が握られていた。
ギ、う、く…。「宙吊りにされているが生きているしやし呪詛に等しい极大の憎悪が分厚い掌から感じられ、首を掴まれておらずと呼応を困難にさせた。」

そこで華奢な身を案じる慈悲はなった。ただ死なねばいいという無造作な残酷があつった。

偉丈の名乗っただ真名を雷光の名を持つ反英雄は叫んだ。

「あるけです――！」「コレが神である事を考えてなければ、貴様の行いは尊いものだろう。だが、コレへ尽くす行いや想いは醜悪だ。ああ、最低限幼子に付き合ってやっとけ、有り難く思え」

傲慢な物言いだった。

神と神に連なる全てを、蛇蝎の如く憎み抜く。

彼の名はヘラクレス――ギリシア最強。本当に意味で並ぶ者などいない、強大なる雄。第三の特異点に現れ伝説のアルゴー号に、最も適性の高い弓兵の座で招かれた大英雄。

それそこの偉大なる魂魄は魔神の奸計によって反転し、この特異点の聖杯を握るモノが、ある細工を施されため、最強の英雄は最悪の化身へと変生したのだ。

故に此処にいることは高潔な英雄ヘラクレスではない。「勇猛無比なるヘラクレスではないのだ。神性が抜けて落ちたが故に……」
身長は人の規格へ。筋骨のこぞけ落ちた、長身瘦躯の怨念の者は、個人的な外道にも平然と手を染め、神々への復讐を成すためなら、如何なる辱しをも実行する劣児畜生。復讐者のアルケイデスである。

卑劣なる外道にも平然と手を染め、神々への復讐を成すためなら、如何なる辱しをも実行する劣児畜生。復讐者のアルケイデスである。

弱、と。

事、も。

例、如、名。

敵、と。

事。

事。

例、如、名。

敵、と。

事、も。

平、筋。

骨、こ。

例、如、名。

敵、と。

事。

事。

例、如、名。

敵、と。

事。

事。

例、如、名。

敵、と。

事。

事。
隙だらけのその体に、魔大剣の切っ先が滑り込む。皮を裂き、肉を絞ち、肋骨の隙間を通った刃は怪物の心臓を確実に破壊していた。

霊核を破壊した。しかし、ヘラクレスは怪物狩りの英雄である。

抜かずに、返す刃で首を刎ねた。

飛ばした。「アステリ、オス……！？」

甲高い女神の悲鳴が上がる。

自らの体を濡らす血に——否、アステリオスが殺された事の怒りに、女神は復讐者を睨む。

虫酸が走る。と。エウリュアレの怒りを遥かに上回る赫怒の視線が、その呼吸を止める。体が硬直する女神の口を掌で抑え、そのまま掴み上げると、女神はその小さな手でアルケイデスの無骨な手を叩き、必死に逃れようとする。

だがそんな事で逃れられるはずもない。アルケイデスは暫しその美貌を眺め、ポツリと呟いた。ゾッとするほど冷たく、酷薄な声音で。
「生きてそれはいのだった。」

そしでアリケデスはもう一方の腕を伸ばし、エルジュレアの華奢な脚を鷲掴みにすると。

そのまま枯れ木のようになっりと、と。

女神の脚をへし折った。}

掌に遮られ、くぐもった絶叫が、崩れ始めた迷宮の中に響き渡った。アーサー王伝説の騎士王と、そこの反転存在。
同じくアーサー伝説から『鉄』のアングラヴェン。

別世界出身の間桐桜に宿った湖の騎士。

そしてマシュの中にある湖の騎士の実子にして、世界最高の騎士である純潔。

史実にその名を残す『万能の人』レオナール・ダ・ヴィンチ。

イスラム教の伝承にあたる『暗殺団』の歴代教主の一人、百貌のハサム。

一世纪にで暴君と呼ばれた薔薇の皇帝ネロ・クラウディウス。

ギリシア神話のアルゴナウテの一人、アルカディアの狩人アタランテ。

ケルト神話アルスター・サインクル最強の戦士、光の御子クー・フー。

無銘の弓兵と暗殺者、聖杯の嬰児。

本物の魔法少女二人。

そして古代エースターの伝説のソロモン王を宿したロマ・アーキマン。
漆黒の鎧姿の人がてきぱきと指示を周囲に出して、髑髏の面をしのぎた影達が機材を操作し、資材を運んでおり、職員の人達もレイシフトでのコフィンの最終メンテナンスを終え、レイシフト中の意味消失を防ぐ為にオペレーターとしてモニタリピリピリしていた。戦いの時が近いのだ。職員の人達もレイシフトでのコフィンの最終メンテナンスを終え、レイシフト中の意味消失を防ぐ為にオペレーターとしてモニタリピリピリしていた。戦いの時が近いのだ。

伝説上の英雄達。本物の戦闘を知る大人達。その直中にある自分が凄く場違いに思える。皆が駆け回る中、ぼんやり立ち尽くす事しか出来ない。

「あ、あの！わたし達にも、何か手伝える事はありませんか？」

少し離れた所には、士郎がいる。改造されたカルデア戦闘服の上に少し離れた所には、士郎がいる。改造されたカルデア戦闘服の上
に赤い外套を羽織って、左腕に赤い射籠手を着けてる。精悍な顔立ちを柔和に緩めて片膝をつき、桜の頭を撫でてあげていった。

「いい子にしているんだぞ、桜」

「…わたしも行きたいです」

「駄目だ。これは大人の仕事だからな。子供はいい子で留守番をするのが仕事だぞ」

「わたしも行きたいで…」

「それでもだ。聞き分けてくれ。桜の気持ちは嬉しいが、遊びに行く訳でも、桜の面倒を見られるだけの余裕がある訳でもない」

「…わかり、でした」

「ロマニさん…」

「…わかり、桜」

士郎の有無を言わさない態度に俯いて、落ち込むたぶね桜を見かねたのか、白衣姿のロマニが手招きした。

「…わかり、桜」

「お前、此処に座って。いいかい？ここで士郎くん達の戦いを見守ろう。無事に帰ってこれるようにお祈りしていれば、きっと大丈夫だから」

「…わかり、桜」

「…わかり、桜」

ゆるふわな雰囲気は、こんな状況でも完全には消えてない。見るからに人見知りしそうな桜も素直にその傍に座った。
「ロマニさん、行かないの？」
手持ち無沙汰らしいロマニに桜が問い合わせると苦笑する。
「ああ、うん。ボクは事情あってね。光の御子や騎士王にも負けない力はあるんだけど、通常の特異点には出向けないんだ。で、指示系がござらぼちゃにならないようにアグラヴェインに指揮を一任してる。雑務はハサンがやってくれてるし……ボクはカルデアで唯一の暇人なんだよね。留守番部隊はボクや桜ちゃん、あとはリリャちゃん、美遊ちゃん。せめて彼らを応援していよう。ね？」

イリヤも美遊も呼んで、ロマニがそう慰める。美遊は、戦闘服姿の士郎を見ていた。懐かしの瞳で。その士郎は、最後の事前ミーティングをしているようだった。緊張はあっても、固くなり過ぎていない懸念のような存在感がある。

その周りには戦闘班のサーヴァント達がいる。そして魔術礼装のリリャちゃん、美遊ちゃん。せめて彼らを応援していよう。ね？

―カレドラのマスター二名による、初の同一特異点攻略が始まる。それにあたって俺の班をA班、ネロの班をB班と呼称するぞ。連絡はこの通信機で密に取り合う。

全体が懐中時計型の通信機を持っていった。レイシフト先の特異点内でも独立して使えるもので、ダ・ヴィンチが作成したらしい。特異点にいるとカルデアとの通信が途切れる事が多々あった。なのでその対策がこれなのだ。
ネロには新たなサーヴァントを一騎召喚して貰う予定だったが、第三異点の座標を特定したとの報告が入った故に一時中断した。

異点内で召喚を実行する。この新サーヴァントに由って、班員は変動する可能性はあるが、現段階でほぼ確実に思ってもいっReserved.
レイシフトする事になる。特異点を中心に地形の変化が認められ
おり、どこに現れるかは現段階では不明だ。

「いつも通りという訳だ。いかんに海面に着水しても、各自慌てな
いように。泳げない者は落ち着いて、手近の者を頼る。

その海域には島が無数に点在しているのみ。原因の究明を急がね
ばならない。また特異点が完結し、人理焼却が完遂される予兆は今
のところ観測されていない。これまでと異なる、比較的時間の猶予
は期待できるだろう。

第一にすべきのは、海を渡れる船の手配だ。が、今のカルテア

員であるか？」「海賊の蔓延する時代だ。そこらの海賊船を奪っ
てしまえばいい」。

「海賊の蔓延する時代だ。俺達は海賊狩りも平行して行う可能性も
ある。無益な殺生は、人類史への影響を最小に留める為に基本は禁止する。

士郎は冗談めかしているが、本気で言っている。

それでミーティングは締めらしい。ムニエルが手を上げて合図を
出してきた。士郎はそれに軽く応じ、手を叩いて各自に伝えた。

さあレイシフト転送の準備が整ったようだ。コンフィンに入
れる。その後の方針は現地で定める。それと、いかなり会敵するような事はま
ずないと思うが、もしもそうなければ先手必勝だ。臨戦態勢に入り、
レイシフト後に俺が合図するまで警戒を解く。以上。

全員が、コンフィンというポッドのような物に入っている。直後、
待っていったよに放送が入った。
「アンサモンプルススター量子変換を開始し、しかもレシフト開始まで後321…全工程完了する。」
「レシフトが完了し、A班とB班、そして遊撃一多名の総勢十名が第三特異点に現れた。幸いにも海面にいきなじる事はなかっただろう。船の上である。幸先が極めていい、と普通なら思う所だが。士郎の指示通り臨戦態勢にいったサーヴァンツは、海賊船の中に現れてしまった。それも、た・た・た・だの海賊船ではない。」
「おっ！手前ら何者だ！？むさいない野郎は殺すとし、可愛いい女の子が沢山…まさか拙者へのご褒美タイムですか！？」
「ヨッシャ！なならばならば、これよより強奪略奪の時、即ち、子供は寝る間ですァ！」
ヴォンの船、即ち宝具の中に入ってしまったである。

「〜〜〜〜〜マジんですぜ〜〜〜〜っした…」

ヴォン『黒髭』は、マッハで制圧されうる。
掌の上だと気づいて士郎くん！

嘗てヘラクレスが成した十二の功業。その三番目の試練として課されたのが、牝でありながら黄金の角を持つケリュネイアの牝鹿の捕獲である。ケリュネイアの牝鹿は、狩りと弓を持つ女神アルテミスが成した十二の功業。その三番目の試練とされて課されたのだが、牝であらなが黄金の角を持つケリュネイアの牝鹿の捕獲が苦戦し、時を掛けた騒足の兎である。その速さはアルテミスのみならず、ヘラクレスすら正攻法による捕獲を諦めさせたほどの。彼の騒足のアキレウスに勝るとも劣らぬ脚を持ち、その余りの速さ故になんら海に関する加護を持たぬ野でありながら、水路を蹴って走行するのに支障を来さなかった。

一方でアルケイデスは聖杯を奪取する為に黒髭を襲撃し、サーヴァントを三騎撃破した。この時代の星の開拓者フランシス・ドレイクには、アルケイデスは聖杯を奪取する為に黒髭を襲撃し、サーヴァントを三騎撃破した。この時代の星の開拓者フランシス・ドレイクには、
船を損傷させ手傷を与えたものの、突然の嵐の中で帆を張り、空を飛ぶようにして逃げ出されたが、これを追う義は見いだせなかった故に放置している。

まだ成果は上がらない。捕獲した際に重傷を与えた女神を連れ回し、苦痛に顔を歪めるのを眺める趣味は無かったが、代わりに気軽に掛ける事もしていなかったとはいえ、いつ加減苦痛に呻く女神の存在が煩わしくなったアルケイデスである。彼は一旦船に戻り、女神を友人に預けるべく帰還する。

アーゴー号の船長にして、此度の現界に際しての召喚主であるのアルケイデスの不肖の友人だ。名はイアソス、生前英雄以上の怪物であったアルケイデスを信頼し、友情を懐かせてくれた存在で、未来の王を護りし、大英雄だ。

安心してほしい。私は君を優遇し、使ってみせる。

安心してほしい。私は君を優遇し、使ってみせる。

素晴らしい、羨ましい！確かに噂通りの化け物だ！

素晴らしい、羨ましい！確かに噂通りの化け物だ！

私と…オレと共にいる間だけ、君は化け物じゃなくなる。

私と…オレと共にいる間だけ、君は化け物じゃなくなる。
余りにも強すぎ、余りにも超越していた故に。己は英雄ではなく、化け物なのでないかと苦悩した日がある。或いはこの言葉が無ければ、アルケイデスは英雄ではなく化け物になっていなかったかもしれません。

心底思っていた。故にヘラクレスは、この友人だけは決して裏切らない。忠誠ではなく友情ゆえに。そして誰が見ようとも、アルケイデスだけはイアソンを擁護する。彼を罵倒する事は、即ちこの身をも讃るに等しい。

「アーサン、今戻った。女神の捕獲の任、確かに果たしたぞ」

大海原を漂っていた英雄船に帰還し、ケレュネイアの牝鹿の背かそびれ、風を降りたアルケイデスは、アルゴー号の船長に女神を放り出す。

しかし返って来たのは沈黙である。なんらかの騒がしい嬰いと皮肉が揺んでくるものと思っていたが、それがない。怪訝そうに眉を颦め、アルケイデスはアルゴー船の船内を検分した。

無人である。船を残して誰もいない。アリケイデスは異外の事態に困惑した。

あの男は無能ではない。想定外の事態に極めて弱いが、追い詰められた真価を発揮する類いの英雄である。伝承とは異なり武勇は然程ではないが、容易く屠られる手合いではない。

あのユルギスの王女もいる。敵に遭遇した、という訳ではないだろ。戦っていたのなら、船がそのまま残っている訳がない。罷り
間違って敗北していたなら船は残らない。このアルゴー船はイアソンの宝具故に。

サー・ヴァントである。故に霊体化すれば、海の上だろうと移動は出来が……。

「む、くっ……！」

猿轡を噛ませ、腕が鬱血するほどにしこく両腕を縛り、脚を折ってある女神が憎悪を込めて呻くのを聞いて、一旦思考を中断する。

そこのアーグ船はイアソンの宝具故に。サー・ヴァンである。故に霊体化すれば、海の上だろうと移動は出来が……。

「―ツッツッ！？！？」

言語にならぬ絶叫が上がった。神霊が、自らの不死を返上してで死を希求する猛毒である。しかも折れている脚に毒が戻り、此度の霊基では二度と立ち上がる事も叶わぬだろう。かなりの少量の毒ゆえに、即座に死ぬ事もなに。脆弱とはいえ神格、半月は保つ。

アルケイイデスは直感していた。スキルによるものではなく、戦士や狩人としての直感である。半月もしない内に決着はつくだろう。
そして女神は脆弱ゆえに発狂する。霊体化して逃げるという発想はさど満かな。満たしたところで現実是不可能なほど、この毒は女神を苦しめる。

うの女神は脆弱に発狂する。霊体化して逃げるという発想は満たかな。湧かなかったところで実現は不可能なほど、この毒は女神を苦しめる。

「--」

しかし天高く在った太陽が地平線に失せ、再び昇り始めるまで待っている。アルケイデスはあの王女を諦めで、何をしている。あの剣は、と。またぞろコルキスの王女に唆されたか。

アルケイデスはあの王女を諦めた。毛嫌いする王族だからと、この毒は女神を苦しめる。

アーゴー号の動力源にされてさえなければ聞いた気を取ったからである。奸物だと見抜いた故に---友人を操る魔女を。

何より嫌っていたのは、イアソスを操っているような雰囲気を感じられるだろうが、あの女も避けられ神に属するルーツを持つ。アルコノーロのヘクトールが聖杯を持ち帰った。

クルテウスが人理修復の為に現れ、あの男と交戦して撃破するというのは想定される事態だ。
味方として持てる人格と実力である。戦っているなら援護を、アルケイデスが先にカルデアと遭遇したならこれを撃滅するのもやむを得まい。アルケイデスとしてはカルデアに悪印象はないが、生憎と敵対する定めである。敵であるならば是非もない。アルケイデスは人間を舐めいないうちりと喉を刺す、小魚の骨のような違和感を感じながらも、アルケイデスはケリュネイアの牝鹿に騎乗して船を出た。
目標の一つに、フランシス・ドレイクの殺害を加えて。

早まったかと思えば、早まっただけ頭を抱えた後、後悔、後悔、前進不能。覆水は盆に返らない。悪党を縛る契約の儀式、そのまま自縄自縄の態を成し遂げていた。

「デュファットコ、ややあの騎士王が斯様に可憐な乙女であるとは、この海の黒髭の目を以てしても見抜けなんだWWW。

無視！完璧な無視！くーwww少女的な美貌とも合わさって拝者の不覚にもとぎめてしまいましたぞ！

アーサー王は未来に甦る王……なるほどこれはしたい。未来に生きてるんだWWW。

「未来に生きてる」の語源は此処にあったのでござるなあ……後世に生きた者として感慨もひとつ……ところで拝者、潮風に乗って漂ってく
通っているしっかり者から是非もしww！！
……お主、なかなか個性のよな……。
「オブラートに包まれたww、その優しさに全黒髪が泣くww」
その拙者は没個性な英霊界の革命児ww、ぶっちゅけ拙者とか
青髪辺りが英霊として存在してる辺り英霊界マジ魔境ww、そこ
とほとんどのパグってんじゃないのとマジレスしちゃう黒髪氏なので
あった、まる。
「うむ……お主が言うと説得力が違うな」
このオブラートに包み込まれる毒があるww、これまたぶっちゅ
けちゃと、カルデアは人理修復の前にそっちに修正ペンを走らせ
るべきなのではww？おっとっとww、つい真理を的確に突
いてしまったww、そして没個性な英霊界と申しましたが、こ
の黒髪よりも個性溢れる方がいそぶ辺り英霊界マジ魔境ww、
大事な事だから二度言ったww、ところで薔薇の皇帝陛下、自分
見逃ぎよろしいか？」
「……うえ、ジェロ！助けよ！余にはこの者の相手は無理だ！
怖い！」
「アルカディアの狩人！ほうww、ほうほうほうwwのアタ
ランテの矢はあたって……おふふ名前ネタという最低なギャグに
拙者を見る目が虫を見るようにww、それはそれとしても実に、実
に見事な黒耳！自分、けものフレンズの総才ゆえww、そうい
のに目がござるのですのでww、モフモフで宜しいかww？」
「近寄るな、汝は不愉快だ。」
「なあと古風な……野性的でありながら気品のある佇ま
い……これは萌える！どことなく孤高でありながら柔らかな物腰
も子供と遊ぶのは好きだったりするのでござるww、萌え萌えキ
この胸に燻るこの気持ち…まさか恋？
自分、惚れ
てよろしいか？

「なんだ現わで繰みなき瞳…一見BBAであると敬遠する所、
この黒髭の眼は騙されない！　生後十日中に満たぬと見た！
拙者の守備範囲ですぞプリンセス・アイリスフィール！　大事なのは外見
ではないその心…お主とならプラティニックな純愛を育むような気
がしますぞ！
「ごめんなさい、その、あなたにきっと素敵な方が見つかる
よ？　たぶん…」
「ドゥフフwwww語尾に隠されぬ自信のなさが素直を表して
ござるwwwwときめきが抑えられないwwww結婚したいwwww
拙者の生前にお主のような女性にお目にかかれなかったのが真剣
に悔しい…」
「そ、そう…」
「マシュちゃんかあ。うん、端的に言うと拙者と結婚を前提にお付
き合—どうわっ！？」

頭痛が痛いという重複表現をしてしまう。俺はこぬかみを揉みな
がら、黒髭目掛けで莫耶を投げつける。黒髭は態とらしく大袈裟に

なおと無垢で繰みなき瞳…一見BBAであると敬遠する所、
この黒髭の眼は騙されない！　生後十日中に満たぬと見た！
拙者の守備範囲ですぞプリンセス・アイリスフィール！　大事なのは外見
ではないその心…お主とならプラティニックな純愛を育むような気
がしますぞ！
「ごめんなさい、その、あなたにきっと素敵な方が見つかる
よ？　たぶん…」
「ドゥフフwwww語尾に隠されぬ自信のなさが素直を表して
ござるwwwwときめきが抑えられないwwww結婚したいwwww
拙者の生前にお主のような女性にお目にかかれなかったのが真剣
に悔しい…」
「そ、そう…」
「マシュちゃんかあ。うん、端的に言うと拙者と結婚を前提にお付
き合—どうわっ！？」

頭痛が痛いという重複表現をしてしまう。俺はこぬかみを揉みな
がら、黒髭目掛けで莫耶を投げつける。黒髭は態とらしく大袈裟に

なおと無垢で繰みなき瞳…一見BBAであると敬遠する所、
この黒髭の眼は騙されない！　生後十日中に満たぬと見た！
拙者の守備範囲ですぞプリンセス・アイリスフィール！　大事なのは外見
ではないその心…お主とならプラティニックな純愛を育むような気
がしますぞ！
「ごめんなさい、その、あなたにきっと素敵な方が見つかる
よ？　たぶん…」
「ドゥフフwwww語尾に隠されぬ自信のなさが素直を表して
ござるwwwwときめきが抑えられないwwww結婚したいwwww
拙者の生前にお主のような女性にお目にかかれなかったのが真剣
に悔しい…」
「そ、そう…」
「マシュちゃんかあ。うん、端的に言うと拙者と結婚を前提にお付
き合—どうわっ！？」

頭痛が痛いという重複表現をしてしまう。
身を避けたのが当たる気はなかった。
投影を解除せず、腰に差してあった犬将に引き寄せられて戻って
きたモ耶を掴み取り鞭に納め、白けた眼を黒髪に向ける。
髪は極めて真剣な男の表情になる。真顔という奴だ。
そうするとまさに大海賊といった風貌になる。火遊び好きな女な
口を開いたかと思えば、俺に対して確信と嫉妬を込めて詰め
た。
「…マスター氏」
「その『氏』とか言うのやめろ」
「お主、彼女達人類史の宝と、ただならぬ関係でございます？」
「は？」
「いや隠さないとよろしいでございます。拙者には分かる。見たとき
いよいよならないでございますよ。拙者には分かる。見たとき
真剣な顔をして何と言うかと思えば、何を寝言垂れてんだ…。
真剣な顔をして何と言うかと思えば、何を寝言垂れてんだ…。
だがあらがち的外れでもない辺りが恐ろしい。アルトリア達と
の五段階評価中、騎士王のお二方、マシュ殿は五。ネロ陛下とアイ
リスフィール殿が四、アタランテ殿が四に近い三といった所。エロ
ゲ主人公の親友ボジに不可欠な好感度スカウターが示すこの数値は、
全員がヒロインに成り得るという恐るべき現実を示唆しているので
ざる」
「…はぁ？」
「…はぁ？」
「…はぁ？」
「なん９で初対面の中の事でそんなに断言出来るんか…」

極短やり取りも言えないや取りで、そこまで感情を見抜けるのは恐ろしいです。

要点は、人の感情を見抜く眼力である。その脅威の言動の裏にあたる鋭さは、接近する時間が長ざれば人心掌握も単にしまして。

黒髭は割と真剣に答えた。

「見る者が見れすればすぐかまりますぞ。というよりここれは拙者が鋭いのではなか、マスター氏の存在感？みたいないのもせいかですな」

「俺？」

「デュフフ、彼女達は明らかにマスター氏をリーダーと信じてござる。絆レベで言えば五十は超えてもまます。アタランテ殿は四かになけども他の面子は五十を壁とすると十に近いか、八か七と言っただ感じでござる」

限界超えてるんだが。

「その好意と信頼、拙者の船を制圧した時の雰囲気に、マスター氏自らの采配、切れ者の雰囲気、歴戦の戦士の風格、そしてバックの波動をここの黒髭が見間違う訳がござらぬでコピー」と、
「…言うほど整った顔立ちでないはずだが」
「充分整ってござろうが！謝れ！拙者や拙者の同胞らに謝れ！」
「す、すまん…」
「それに男は雲囲気も大事でござるよ？あ、話しやすい…気にはなる…頼れる…頼りたい…そんなふうに相手に思わせられる、これは大事な、そう大事なポイント。幾らか顔面偏差値が低くても、そこさえ持てれば異性の眼を引くは必定！ところでマスター氏、一つ折り入って相談が」
「…なんだ」
「「断る」
「そんなるアイデンティティは捨ててしまえ」
「こんなアイデンティティは捨ててさらば…」
「まるはそのふざけた言動をやめろ。話はそれからだ」
「なん…だと…？」
「後生でござる！今のままの、ありのままの黒髭を弟子にして欲しだござる！」
「無理」
「者は格好でございますか？ブルマを穿けと？」
「お前が穿いたら控えめに言って地獄絵図だぞ。」
「そんなああああーあ？おっとマスターソー、島が見えきまし
たぞ。」

「流石に宝具、航海速度は大したものである。黒髭曰く、敵は真名不明。しかし最低でもヘクトールと件の弓兵が敵である。故に俺は戦力は多いに越した事はないと判断し、他に現地にカウンターとして召喚されたサーヴァントの生き残りがい
か探す事にしたのだ。」

「そこの最初の一步がこの無人島。敵の目的や何やらが不明な為、
しかしなんだ。ドッと疲れ。この黒髭劇場を封じる為に、女性
陣とは隔離して、野郎で周りを固める他ないと判断する。
俺はなんとなく嫌な感じがした。カルデアが後手に回るのは仕方
がないにしても…何か、特定の道を歩まざるよう…誘導
されているような感じがする。そうと断じるには判断材料に乏しい。何故そう感じるのは、こ
れから見て見定めていくしかない。言えるのは、少なくとも黑髭がこ
らを陥れようとはしていない事。少なくとも今は。
戦争は、将棋みたいなものだ。

個人の戦いではなく、戦略を練るなら将棋みたいなもの。俺は姿を現す。見えない指し手と対局しているように思える。

第一特異点を速攻で片付けてから。第二特異点の始まりから、連鎖した変異特異点。大局的に見て、この第三特異点でも同様の打

何はともあれ、これからの。この特異点にも魔神柱はいるのだろう。その気配を遳れば、必し狙いも見えてしまう。第二特異点でこち

筋を頭に感じられる。弟子にい。何卒弟子にい！と脚に縄づいてくる男を足蹴にしながら、近づいていく無人の島を見る。

第一特異点を速攻で片付けからだ。第二特異点の始まりから、変異特異点で時間稼ぎだ。ならやり易い。合理的な打ち手なら確実にその道筋を遳る。

変異特異点で時間が稼ぎ。第二特異点で偵察。変異特異点で時間稼ぎ。

敵の掌の上から脱せるのは、いつになるのか。今も敵の思惑通りの状況なのか。敵は、この特異点にはいない。少なくとも俺がその『敵』な

三番目の打ち手は……。
実験か？
その呟きは、海賊船の揺り分ける潮騒に紛れて消えた。
到達した小さな島、切り立った山の隙間に海賊船が錨を打って、岸壁に停泊しているのを見出す。黒髭が言った。これはフランシス・ドレイクの船であると。宝具でもなんでもない、極普通の船だ。神秘性の欠片もない。その海賊船は損傷が激しく、次の航海にはとても耐えられそうもなかった。だが、逆に言えばそれだけであるのも実。黒髭は骨太な笑みを浮かべて呟いていた。「流石は俺の憧れした星の開拓者……ああ、化けモンから、たったこれだけの被害で逃げ延びるのは、と。今この馬の骨かも分からぬサーヴァントを味方にするより、生身のドレイクを味方に付けたほうが万倍心強いだろうが。そんな道理、振り払せたからこそフレンシス・ドレイクだ。」その懸念を黒髭は笑い飛ばした。舐めるなよ、カルデアのマスターローにいかに影響が出るか分かったものではない。士郎は迷った。この時代の、生身の人間であるドレイクと接触しでもいいのだろうか、と。挙げ句巻き込むでしまって、死なせてもしたなら被害は馬鹿にならない。ある意味この時代の主役とも言えるドレイクだ、もし死なせでもしたなら人理的、不安定の不特定にどんな影響が出るか分かったものではない。これに士郎は当惑した。というのも近代の英雄や偉人は、所詮普通の人間に過ぎない。英霊となりサーヴァントと化して召喚されても、これから戦力となるのが魔術世界の戦いだ。確かにサーヴァントの襲}{

- です-
女だと？
と反応したのは最初のみ。続いた報告に士郎達は顔を
隠しかけ、アタランテの案内でドレイクらの元へ急行した。
海賊達は突然姿を見せた士郎達に驚愕しつつ、即座に臨戦態勢に
入った。全員が大なり小なり負傷している。それでも戦意を失わず、
咄嗟に上座に背を預け、こちらを見据える女海賊を守るように身構
えていた。
黒髪を見るなり敵意を露にする。士郎にとっては意味はないが、
腰のベルトに吊るしていた千将のもとを彼らの前方に投げ捨てた。
音声の同時翻訳はカルデアの技術で可能だが、敢えてこの時はそ
れをしない。海賊達はそれでも武器を下ろさなかった。
メェら何モンだ！荒い語調の誰何には、追い詰められた手負
いの黒髪に突き当たる。

“やめな。今回のアタランテを事の構えって、思いきって料理される
のが関の山さね。大体殺す気で来たなら、今のアタランテは隙だら
け、奇襲一発で昇天しちまう。それに──見たらところかなりの戦士
揃いだ、そんな道理弁てんだろう？”

格好よくテレメで時代錯誤な連中もいる。大方アタランテらも、あの
化けモンとおんなじ感じの奴らに決まっているよ。
郎は確信する。なるほど傑物だ。士郞は代表して名乗った。カルデアの者だ、と。時計塔の天文科のロード。アニメスフィア家は六世紀でも活動していた。海賊は職業柄、天文とは切っても切れない。アニメスフィアは知識も十世紀で活動していた。カールデアの者は、と。

海賊は職業柄、天文とは切っても切れない。アニメスフィア家は十世紀で活動していた。カールデアの者は、と。

士郞は代・代・代・表して名乗った。

カルデアぁ？
星見屋が何の用だい？
新しい星図でも売りつけにきたとか？

カルデアに、星見屋が何の用だい？
新しい星図でも売りつけにきたとか？

カールデアに、星見屋が何の用だい？
新しい星図でも売りつけにきたとか？

士郞は軽く自己紹介をし、自分達の事情を語る。荒唐無稽だろう。

戦力は少しでも多いに越した事はない。あんた達の協力が欲しい。

で、そんなアホらしいほどデカイ話を持ってきても、アタシに何をして欲しいんだい？

士郞がそう言うと海賊相手にただで働かせてのかい、とドレイクは笑った。
管制室からの通信、アグラヴェインだ。何処からともなく届いた声に、海賊達とドレイクを眼を開けた。
なら、と応じる士郎に。鉄の宰相は言う。
聖杯の反応がある。その海賊フランシス・ドレイクからだ。間違いない聖杯を所有しているぞ。
驚愕に値する情報に。士郎達は厳しい眼をドレイクに向けた。聖杯を持っているのか？と。
ドレイクはなんのこっちゃと惚け、しかしすぐに思い至ったのか。
この特異点の聖杯ではなく、この時代にあった聖杯を手に入れていったら。なんでも復活したポセイドンを、海の神を名乗る気に食わない奴らという事で、アトランテスごと海の底に沈めたらしい。
は？と珍しく士郎は呆気に取られる。カルデアやら人理焼けらよりも、余程のオカルトだった。人間が……神霊を下して聖杯を奪っただろ？なんてそれはぶざけてるのか神霊仕事する。
交換？このお宝に釣り合うのかい？
交換？このお宝に釣り合うのかい？
交換？このお宝に釣り合うのかい？
交換？このお宝に釣り合うのかい？
交換？このお宝に釣り合うのかい？
交換？このお宝に釣り合うのかい？
交換？このお宝に釣り合うのかい？
交換？このお宝に釣り合うのかい？
お前ね、このアタシに向けて。それに対等にお宝を取引しようたぁ...ハッ、大した胆力だねえ。
からからと愉快そうに笑うドレイクが、試すように言う。じゃあ見えるてもおうじゃないか、アンタの言うこの杯に見合う宝を持って奴を─-
士郎は時代背景などを思い返し、暫し沈思するもマシューに向けて言った。携帯している調味料を出してくれるか、と。
マシューの髪の裏には、小さな隙間がある。そこには士郎が野戦料理をする際に用いる小道具が格納されていたりしている。武器を格納したりするのがいいのだろうが、生憎とそれは間に合っている故に辛料を入れているのだ。
と、橋の隙間から顔を出したのは、毛むくじゃらな小動物だった。辛料を入れているのだ。フォウに口に加えていた瓶を渡してきた。
倉には口に加えていた瓶を渡してきた。
士郎は絶叫している。ドレイクは目の焦点が合わなくなっていた。
海賊が絶叫している。ドレイクは絶叫して瓶を取り落とし、驚愕の余り失神した。元々ドレイクは絶叫して瓶を取り落とし、驚愕の余り失神した。
このような疲労もあったのだろう。うわああああ！
と海賊達も慌てふためいていた。

この十六世紀のヨーロッパでは、胡椒は極めて重宝された香辛料である。同質量の黄金にも勝る価値があった。

士郎は苦笑し、白いキャラスターに向けて言う。
“アイリさん、すまないが彼らを治してやってくれるか。流石に重傷者達をほっとくのも寂覚めるか懐しい。ドレイクは重要な存在だ。”

“うふふ、そんなとつけてつけた理由は要らないわよ？助けたいだって言ってほしいのに......アイリさん。そういうのはいいから。”

顔を颦めながら士郎は手を振る。微笑ましげな周囲の目から逃れるように眼を逸らし、

そして。
多い。隠れ潜んで気配を殺し目視する。その中に一度は屠った狩人
の姿があるのを眼を見開く。

別口で召喚されたのだろう。あれは霊核を確実に破壊したのだか
らとなると、こちらの存在が露見している可能性はない。
しかし隙がなかった。三騎ほど強力なサーヴァントがいる。下手
に仕掛ける賭けはまだ犯せないだろう。同じ顔立ちの少女騎士。

あのセイバーが、二騎。あの黒い剣士は同一存在の別側面か。そ
してあの槍兵。神性を持つ忌々しい英霊は、冬木の時とは桁外れ
いや待て、あれは記憶にある。そうか、反転する前の己の記憶
だ。冬木、だったか。あの時は狂化していたねえ。臆気に覚え
ている。

奇縁だ。冬木の面々の顔を見ると、例の人間の女海賊と遭遇したようだ。
一時撤退も視野に入れる。しかしこの頃は気づかれてはいない。暫し

追跡しつつ観察していると、例の人間の女海賊と遭遇したようだ。
生身の人間は他に金髪の女がいる。そちらの存在感も図抜けているが、男を信頼し代表を任せているのだ、間違いである。

白い髪の男が指揮官か。

身の主人は他に金髪の女がいる。そしたら存在感も図抜けているが、男性を信頼し代表を任せていいよう。

白いキヤスターが、宝具を起動する。すると、重傷者達。

白髪の男と目が合った。

偶然か。白髪の男と目が合った。だが遅い、間に合わない。真名を唱えた。

アルケイデスは、毒瓶に九本の鏃を浸ける。

回復系の宝具。

絶叫だ。余りに嘔嘔で、形振り構わず展開された紅色の楯は三枚。一枚が己、他二枚がアイリスフィールを包む。

その直前アルトリアが直感に弾き飛ばされたように動いていた。

絶叫だ。余りに嘔嘔で、形振り構わず展開された紅色の楯は三枚。一枚が己、他二枚がアイリスフィールを包む。

絶叫だ。余りに嘔嘔で、形振り構わず展開された紅色の楯は三枚。一枚が己、他二枚がアイリスフィールを包む。

絶叫だ。余りに嘔嘔で、形振り構わず展開された紅色の楯は三枚。一枚が己、他二枚がアイリスフィールを包む。
一瞬遅れてオルタも即応する。だが彼女達の力を知っていった故に、解き放たれた竜の首を象る九条の矢筈の内、四本が彼女達の足止めに割かれる。遮三無二に迎撃するも、アルトリア達は吹き飛ばされた。

五条の矢筈。その内の二本が瞬間的に危機を察知した槍兵の迎撃に止まる。十八のルーンの防壁だった。残るは三条、その一条が白髪の男を。二条が白いキャスターを狙う。红色の楯は一瞬しか保たなかった。だが一瞬であらゆる覚悟を固めるには充分だった。

男は残る四枚の花弁を纏い、白い女を突き飛ばす。だが急造故に強度が足りない。威力を減衰させる事は出来たが、人体を貫通しない程度に威力を残した矢が虚空を駆けた。

故に必然。その身に三条の矢筈が——ヒュドラの毒の浸かった錐が、男へと突き刺さった。'

「がああああああアアーッッ！？！？！？」

左腕が飛び、右脚が四散し、腹部に大穴を空けて。体が腐蝕していく——
目標の片割れは逃したが、ともあれ。
奇襲、成れり。
何度でも蘇る士郎くん！

「ありがあああああ啊―ッッッッッッッ！？！？！？」

解き放たれた矢の殺傷能力は、確かに限界まで減退させた。例え肉体に直撃を受けたとしてもその鑑は浅く突き立つ度だろう。

だが士郎の受けた矢は、毒が塗られていない。同じも只の毒などではない。最古の毒殺者セミラミスなどが召喚を可能とするヒュドラー、そのヒュドラーを超える毒牙を持つ大毒蛇バシュムとすら、到底比較にならぬ真のヒュドラーの神毒である。

ギリシャ神話最強最大の怪物神テュポーンと、ガイアとタルタロスの娘エキドナの間に生まれた――謂わばギリシャの怪物の中で云う処のヘラクレスに相当する存在である本物のヒュドラだ。後世で種を多目に見る毒種蛇とは比較にならない本物の毒が、士郎の持つあらゆる耐性を貫通する。英霊ギャラハッドの戦えを秘めた戦いの馬を、自身の無意識が示すんだ。

抑止力の端末による、人類の枠組みに於ける最高の生命力…それらをいとも容易く宇宙最悪の神毒は貫いたのだ。
元よ『全て遠き理想郷』は不死性こそ所有者に与えするが、その苦痛を和らげる訳でないう上に、士郎は聖剣の鞘の全能を発揮できき資質を持ち得ず、老化の停滞や不死に近い生命力を獲得するに留まっている。故に不死身ではない。暗殺団の歴代教主の一人、静謐のハサンドの毒ら歯牙にも掛けぬ世界最高峰の騎士の恩恵も無敵ではない。聖剣の鞘と抑制力の後押しによることしに死にはしないろ、しかしーー今こそ知るがいいう。彼の神毒は不死の存在をこそ最も苛む激痛の極致。呑う程の毒は生温い。其は心を蝕み魂を腐蝕せしる、現行神話、人理史上に於ける窮極の一である。不死の神をも死に追いや、神々と対等に戦った恐るべき巨人族をも多数屠った魔法の域の毒素は伊達ではない。毒矢の被弾箇所は三。腹部、左腕、右脚。着弾した箇所の骨肉は腐敗して、腕は鏃が刺さった程度の微かな衝撃で飛び落ちた。脚は体を支えられずに崩れ、腹部は溶けた。しかし死なない。死なければないうが、必然的にその明瞭な意識野が白熱する。焼き切る。
もし修繕され死んで蘇生され——剣に体感した死と復活は百では足らぬ。千では利かぬ。万では足先に届いたか否か。

地面をのたうち回り、呼吸すら行えず、その場で陸に打ち上げられた魚の様に痙攣し、口から泡を吹き血を全身の穴から吹き出す。

眼球がぐるぐるぐるんと眼窩を回った。びくびくと動かぬようになるのを二秒も掛からなかった。

「ッッッ！——指揮を引き継ぐ！——余の声に従え英霊達よ！——マシュは——とネロは愚者のデミ・サーヴァントに指示を出そうとして唇をきつく噛み締める。シカが。この男が、余りにも優れていたが故の弊害が出ていた。顧りきった。

マシュー、セイバー、オルタ、アーチャー、アタランテは狙撃手。アランサー、セイバー、オルタ、アーチャー、アタランテは狙撃手に仕掛けて！アサシンはキャスターを護衛し、キャスターはシェロの治療だ！急げ！

マシューは——とネロは愚者のデミ・サーヴァントに指示を出そうとして唇をきつく噛み締める。シカが。この男が、余りにも優れていたが故の弊害が出ていた。顧りきった。

心の拝り所になれ、信頼出来、絆る存在。依存していた。頼りきった。そして盲信していた。彼がいれば大丈夫、彼がいたら絶対に勝てる。彼は絶対に死なない。それは戦いを恐れる極普通の少女だったマシューの、極々普通の帰慕していた存在が死すら生温い責め苦に晒されているのだ。絆りつき、その体を揺す。少女の悲痛な叫びが響き渡った。
先輩！
先輩！
へ、返事をしてください、先輩！

生身の人間である海賊らは立ち尽くすしか出来ない。

涙に濡れた顔で少女は錯乱していた。
士郎はひくりとも反応せず、見開かれた双眸の中を眼球が暴れ、
今に飛び出ようとしている。止めなき出血し、血の泡を吹き、時
折り激しく痙攣していた。

ネロは素早くマシュの許に駆け寄り、その腕を取って無理矢理立
たせると、手加減もなく顎を平手で張った。厳しく、凄まじい怒気
と威厳を発しながら言い聞かせる。

「聞け！マシュ・キリエライト！　ひっ、」
「そなたはシェロの盾であろう！？　よいか、是が非でもシェロを
守護せよ！　死守するのだ！　キャスターが治療している間、アサ
シンとそなたで守り切れ！　今！　シェロの命はそなたの力に掛か
っていると肝に銘じよ！　よいな！？」

士郎の命が自分に掛かっている——それに、マシュの瞳に理性が
戻った。気力は戻らずとも、その意思が整う。はいっ！　涙を拭っ
て無理矢理に楯を構えたマシュは鉄壁の城塞として身構えた。
その背に護るべき人を。そしてその大切な人を治してくるはず
の女性を。赤いフードの暗殺者はそれを見て、冷徹に最善の位置を
取る。正面は盾兵が守る、ならば暗殺者は他の襲撃がありも対応
できるように距離を置いた。
開け、天の杯！

聖杯の児童が宝具を開帳する。自身を庇ったが為に斃れた平世
愛と母性が聖杯と結び付き、真摯にして清らかな祈りを一时的
に叶える。願望器としての機能ではなく、あくまで彼女が存在が昇
華されたものがその宝具の正体だ。

『白ソング・オブ・グレイン』聖杯よ、謳え！

愛と母性が聖杯と結び付き、真摯にして清らかな祈りを一时的
の効果は対象を回復し、パッションステータスや持続ダメージの類を解除する。治癒という概念の極限である。霊核の欠片でも残っていれば戦闘不能状態となったサーヴァントの復活も可能であ
り、それを単一の個に力を集中させればヒュドラ毒すら例外なく浄
化する。

本来のヒュドラ毒ならそれでも不可能だった。だがその意識が復活する事はなかった。刻まれた衝撃は魂をも全
損させている。それを治した所で、一度壊れるという事実が消えた
訳ではないのである。

アリスフィールは、ひゅ、と掠れた吐息を溢し、士郎を抱き締
めた。
槍兵が駆る。深紅のマントや宝石などの装飾を剥ぎ捨て、竜胆色の戦装束のみを纏った姿で。真紅の呪槍が担い手の秘めた激情に呼応して脈動していた。担い手の双眸は据えている。滾る殺意と憤怒に空間が歪んで見えるほど。音を置き去りに、残像を残し、空気の壁を突破して光に手が届くか否かの神速で走る。視認できるのは二十㎞以上離れていた狙撃地点に辿り着くのに僅か一秒と半。視認したのはニメートルを超す瘦身の狙撃手。布が頭部から膝下まで垂れ、風に靡いていた。赤黒い染料で染め上げられた肉体、手にしているのは大弓。道具解放直後の硬直はすさまざま解かれ、槍兵を迎え入れる。
切り立った崖の上、充分な加速を以て正面から突進する。朱槍が空を貫きそその摩擦で火を纏った。

弓兵は大弓で槍を受ける。その感触、手応えを解いるのは己を超える膂力。だが、それを凌駕する手立ては此処へ到達するまでに打っていた。筋力を強化するルーンが起動する。剣那の間に繰り出すのは三十を超える剣突の雨。怒れる猛犬の牙は力のみならず、技もまた槍の極みだ。だが真紅の弓兵も勝てない。弓という接近戦に不向きな武装で防禦に回り、弓を指さして突き放たれる槍を神域の武勇が凌がせた。

舌打ちが漏れ、弓兵が徐々に圧され後退していく。三百の交錯、白兵戦優の武装、兵器の王とまで言われる槍の猛攻を凌ぐには足らず。使い手の技量が拮抗していたのなら、優劣を分けるのは武具の差だった。

舌打ちが漏れ、弓兵が徐々に圧され後退していく。三百の交錯、末に紛んだ鉄壁の守りを銃敏に見抜いたク・フーリンの眼がギラリと光った。槍をしながら急撃ち下ろし、大弓で頭部を守った弓兵の懐に潜り込み——握り締められた鉄拳が弓兵の下顎をカチ上げた。
続け様に屈み込み、迅雷の如く腹部を蹴り突かれた弓兵の勢いに浮いた。踏ん張りの利かぬ空中は死の空間。追撃はルーンだった。

「えきン―ア弓猛がハこ単防迸い続―エッ約クら如れ繋にかは様っこう弓!」

「スッ束てきとぐれありはの火にる。光兵石れを雄ころ魔も張るのり開及み、尚がだ。」

「責中負のし帰ルー中如石。」

「弓兵、この期に及んで尚も磐石。」

「『約束された』—」

「『―ツッ!』」

「〜ハッ!弓兵が虚空を見上げる。中天に座す太陽を背に、月の煌めき如き燐光を放つ聖剣が陽射しをも塗り潰していた。猛り狂う魔力のうねり。冷徹で静かな貌の奥に激甚なる憤怒が燃え潰っている。主にして、愛を結び直した男。騎士として、女として猛らぬ道理はない。手加減も呵責もなく、騎士王は吼えた。」
虚空に招喚されるのは宝具『十二の栄光』による逸話の引き出し。地獄の番犬ケルベロス。弓兵の反転により神の加護を無くして神獣ではなくなっているが、それでも構わない。もとより用途は捨て石だ。弓兵はその腹を蹴った。続くで構わないと、用途は捨てた。

「―・―『勝利の剣』ァッ！」果たして地獄の番犬は両断されただが、弓兵の離脱は間に合った。それを殺到する狩人の矢。しかし弓兵は一瞥のみで矢玉を視認するなり防禦すらしなかった。引き絞られた天穹の弓の弦から放たれた矢の威力は、防禦宝具の守りをも突破するというのに。矢は閃い、神獣の皮に呆気なく弾き返される。アタランテは驚愕した。まさかとは思っていた。視認した狙撃の宝具、そしてその人、理を阻む神獣の皮。姿形が余りに違いない見知った高潔な英雄には有り得ない不意討ちから、そんなはずはないと己に言い聞かせていたの。思わん詰何していた。「―汝はヘラクレスか！？」返答は無限大の殺意に塗れた矢だった。単発の矢、しかしその狙いの精度と威力は既知のそれ。即ち直撃すればそれで即死する。咄嗟に回避したアタランテの全身に戦慄が駆け抜ける。畏怖と共に咄嗟に回避したアタランテの全身に戦慄が駆け抜ける。畏怖と共に理を阻む神獣の皮。姿形が余りに違いない見知った高潔な英雄には有り得ない不意討ちから、そんなはずはないと己に言い聞かせていたの。思わん詰何していた。「―汝はヘラクレスか！？」返答は無限大の殺意に塗れた矢だった。単発の矢、しかしその狙いの精度と威力は既知のそれ。即ち直撃すればそれで即死する。咄嗟に回避したアタランテの全身に戦慄が駆け抜ける。畏怖と共に理を阻む神獣の皮。姿形が余りに違いない見知った高潔な英雄には有り得ない不意討ちから、そんなはずはないと己に言い聞かせていたの。思わん詰何していた。
「無様だな、外道」

侮蔑。クー・フーリンが吐き捨てた。ケルベロスを犠牲にして飛び退いた弓兵は無言でアタランテの誰何に矢を返し、更に虚空で身を翻しながら青銅の矢を訂えた。

魔力の高まりは怪鳥の声。青銅の矢の形状が変化する。第六試練の逸話より引き出した『ステューパリデスの鳥』を今に放たんとすれが、弓兵は己を狙う更に別の殺意を感知した。

「卑王鉄槌、極光は反転する－－－」

それは黒王。空を背に上空より聖剣を放つのが光の聖剣なら、地の底から手を伸ばすのは闇の聖剣。槍兵が繋ぎ、聖剣の騎士が動かし、狩人が注意を引いた一連の流れ。そこから算出される移動先の地点を直感していた黒王が、充填した破壊の吐息を吐き掛ける。

凝縮された殺意は加速し、収束した。黒き聖剣が唸る。

「－－光を呑め、約束された勝利の剣ッ！」

「射殺す百頭」

崖下から天空目掛け吹き出る黒き極光。さながら地獄の底から嘔き出たかのようなそれ。弓兵は青銅の矢と大弓を消し、代わりに取り出したるは魔大剣。身を振り、満身に蓄えた力を放つ。
宝具の域にまで昇華された技巧の究極。瞬間的に暴力的な魔力が大剣へと注ぎ込まれ、最強の聖剣を迎撃した。彼をも沈める九連する暴風の剣は黒い極光を塗り潰さんばかりに更に暗い。果たして拮抗する。騎士王は瞠目し、打ち勝ったのは聖剣、されど肉体に積んだ耐久のみで凌げ程度に威力が殺されていた。

「汝は、何者だ。」
「ああそうだ。我が骨肉、我が魂こそは《《神になり下がった愚者》》の映法師よ！～

思いの外静かな声だった。知ってている声音に、アタランテは動揺する。

オリンポスの神々を否定し蹂躙する――神であるならなんであろう。例え世界を滅ぼしても復讐を成す。その為ならばなんだってし、我が名はアルケイデス。アムピトリュオンとアルクメネの子にし
死性、無双の怪力を捨てた。此処にいるのは人間だ。人間が持ち得る復讐心の塊である。そう謳う復讐者へ、失笑を浴びせたのは誇り高い光の御子だった。

此処が貴様の死地だ、復讐者よ。

クー・フーリンが魔槍を構える。アルトリアとオルタは自前の魔力を供給するが、アレドリアからの供給は困難だ。故にアルトリアからの魔力供給で捻出出来たものの、今現在はサーウァントの榊であるマスターから離れ過ぎている。故にアルトリアからの供給は困難だが、アレドリアとオルタは自前の魔力を蓄えていてでも確実に仕留める気概でいた。それはクー・フーリンも例外でない。

アタランテが言った。

奴の被る裘はネメアの獅子の毛皮だ。人理を弾くそれは、人造の武器では歯が立たない。
「だが聖剣なら通る」
オレの槍もな。神獣から削り出された槍だぜ

「オレの槍もな。神獣から削り出された槍だぜ
オルタクー・フーリンは素っ気ない。殺意の全てが復讐者に向けられアルケイデスは悪意も露に嘲笑する。

「余り強い言葉を使うな－－弱く見えててしまう－－」
その嘯りが第二ラウンドの開始を告げる号砲となる。
飛来したアタランテと赤い外套の弓兵の矢を獣布が弾き、駆せる英雄らに向けアルケイデスは卑劣に笑んだ。

「余程あの男が大事らしいな。気を付ける、私はあの男を重点的に狙うぞ」
火に油を注ぐ発言が、三騎の英雄達を更に深く激怒させた。

激戦の序章はそうして幕を上げたのである。
怒りの余り凶悪なる戦士へ変貌する予兆、目映い太陽色の英雄光が迸る。

「刺し穿つ」ッ！

槍兵がサーヴァントとなり、神の血を覚醒させる力が宝具と化し、ある程度の任意発動が可能になっていなければ現時点で暴威の化身となっていただろう。理性が押し留めるのは、これが一対一でないからだ。一度禁忌の宝具を発動すれば敵味方の区別がつかなくなるのは、味方との連携時は致命的失態である。

槍兵が呪槍を唸らせる。復讐者は槍兵の真名を知るが故にその宝具が己を殺す必殺だと識る。

真名解放をさせと、十二の栄光を発動し、引き出すのは第四試練にて生け捕ったエルメントスの猪だ。出しがしは敗着を招くと弁え。躊躇う素振りすらなく使い捨てる。

現れるは小山に匹敵する大魔猪。三日月の如き二本の牙と憎猛な瞳が猛犬を睨み付け、轟き殺さんと疾走した。地を蹴る衝撃すらも軽度の地震を引き起こす。

光の御子は対人最強の一角、されど彼もまた怪物殺しの名手である。魔槍の本領の出先を潰されたと見るや即座に標的を切り替え、
その呪詛を解き放った。

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅させる。その隙に

一撃を以てして宝具である大魔猪を屠り、消滅せる。
元より人間の忍耐、その究極の精神を持つアルケイデスが、死んで蘇生した直後だからと脚を止め脆弱さを見せずもない。死の実感を息をするように採び伏せ、アルケイデスが加速した。

「なんだとッ」

まつした、三騎の大英雄。されど遅滞は剣那、即座に追い繰るも―さしものクー・フィーリンですら追い付くには剣那の間が遠かた。

魔槍に破壊された心臓は治癒できない……その呪詛は魔術界の理、より大きな神秘によって打ち消されていた。

アルケイデスが魔大剣魔力を充填する。立ちだかかったのは赤い弓兵。

錬鉄の騎士は弓を消し、しかし双剣を投影する事もない。近づかれば切り結ぶ事すら不可能だと弁えていた。故に彼は復讐者としての最悪、カルデアにとっての最善を選択する。

— 貴様なら、確実に処分までくると解っていたぞー。

— 久しぶり、アーチャー。貴様と技を競うのも悪くはないが、今は邪魔だ。失せよ、『射殺す百頭』—

本来の大英雄には有り得ぬ不遜、油断だぞー。

魔大剣の真名を含めぬ、ただの斬撃の猛威。それはアーチャーを即死させ骸を四散させるだけの力があった。

無論アルケイデスに油断はない。これが最速の道だからこそ選択だ。光の御子と騎士王らに追い付かれるのは面白くない、故に最小の力で最短の道を駆けようとしたのだ。
だが弓兵はアルケイデスも認める戦上手。彼の失点は、エミヤシロウに己を止める力はないと見切った事―確かにそうだ。それは事実である。間違いではない。しかし元よりエミヤシロウは『戦う者』ではなく…彼の本質は造者だ。己の力で足りぬなら、最悪の復讐者を止められるだけの物を造るまで。

「熾ロー・アイアス天覆う七つの円環」…!

顕現するは一枚の花弁すら古の城壁に匹敵する紅色の楯。それは七枚の守り、完全なそれ。投擲物には無類の効果を発揮する。無論、剣技による『射殺す百頭』へその全能を発揮する事は能わなければ、そんな事は百も承知。あの黒き聖剣の究極斬撃を殆ど相殺してのけた威力は視ている。―そして、その技の起こりとなる予備動作も。

「グッ」、―

右肩から左腰にかけて袈裟に切り裂かれ、鍛鉄の騎士は苦悶する。
一歩の間。宝石に勝る至宝の時。アルケイデスは忌々しさを圧し、殺し接敵する。最後に立ちだすはカルデイの楯。迫り来る赤い外套の弓兵は藻屑の如くに吹き飛んだ。

半歩の間。宝石に勝る至宝の時。アルケイデスは忌々しさを圧し、殺し接敵する。最後に立ちだすはカルデイの楯。迫り来る赤い外套の弓兵は藻屑の如くに吹き飛んだ。

十字の大楯は聖なる護り。復讐者は呵責ない猛攻に打って出る。一部退かぬと唇を啮み締め、アルケイデスの剣撃を凌ぐ。刺突、斬撃、打撃、瞬間ににして桍を打ち据えられる二十七の暴威。アルケイデスは賞賛する。

『見事。我が最強を以て、貴様の矜持を打ち碎こう。』

『見事。我が最強を以て、貴様の矜持を打ち碎こう。』

『行かせませんッ！私は、先輩を護る！』

『行かせませんッ！私は、先輩を護る！』

『やれるのか、私を相手に！』

『やって、見せます！』

『やって、見せます！』

『隠現せよ！』

『隠現せよ！』

『いまは遥か理想的の城オオオオオ！』

『いまは遥か理想的の城オオオオオ！』
開帳される殲滅の嵐。耐えきって見せると吼える心の護り。その心に一点の曇りなし、故にその尊さは復讐者を驚嘆させ、その隙を狙いつつこそその暗殺者を狙え。『宝具解放。「時のある間に薔薇を摘め」』

神速へ至る加速のそれ。銃器、ナイフは効かないのは把握してい
る。故にこそ暗殺者はたった一つの最悪の手段に訴えた。聖なる楯に阻まれた復讐者の背後を取る。そしてその大い首に腕を回して圧迫した。意識を瞬間的に落としに掛かったのだ。だが、復讈者は微塵も動揺しない。余りに非力、暗殺者の腕を掴むや手首を破壊し、剣を捻って前方の少女の楯に叩きつけ、その胸へ魔大剣の切っ先を埋め込む。暗殺者に成す術はなかった。徒手空拳の業すらも最高峰の復讈者である。マシュが悲鳴を上げようとし。消え行く赤いフードの暗殺者は不敵に嗤う。 contrôle、と焦げ付く戦慄の予感に、アルケイデスは咄嗟に魔大剣を背後に振るう。
かち合った魔槍と魔大剣の闘い合いを基点に地面が陥没し、アルケイデスの両足が足首まで地面に埋まった。

真紅の双眸が告げていた。赫怒を、讐っていた……疎りなき殺意を。上空より最大の遠心力を乗せた撃ち下ろし。魔槍の一撃を受け止めた魔大剣を支えに、光の御子は魔人の挙動を魅せる。

魔大剣を支えに体勢を変え、そのままの勢いで突撃者の背後に跳びながら首を刈り取る蹴撃が放たれた。死角から迫るそれを片腕を上げて防いだアルケイデスだが、意識の外から飛んできた衝撃をよろめく。

「――蹴られた？」

側頭部に重い蹴撃を受けたのだ。バカな、私は防いだはず――そと頭部に重い蹴撃を受けたのだ。バカな、私は防いだはず……の驚愕で顫る男ではない。不利な体勢、不意の奇襲を受けた故に見切れないかっただけの事。同じ手は二度と受けない。

転瞬、同時に馳せた驍勇の魔人ら。魔槍と魔大剣が交錯する度に、光の御子が盾兵の少女を背に着地する。真紅の復讐者が魔大剣を構えて対峙する。

光の御子が盾兵の少女を背に着地する。真紅の復讐者が魔大剣を構えて対峙する。

「ヌーーー」

激甚なる剣戟の中、アルケイデスの腕に『軍神の戦帯』が纏われる。

膨大な神気を魔大剣に流し込み、光の御子を弾き飛ばした。
手応えが軽い。咄嗟に自ら後ろに跳んだのだとはいえ、クー・フーリンは煮え上がった笑みを投げ掛けた。間抜け——罵倒の真意は、果たして。

「はあああ！」

生身の人間、ネロ・クラウディウスが赤い剣に炎を纏って斬りかかったのだ。魔大剣を巧みに操り、獅子の如き戦意を露にする騎士王を叩き落とすや、魔大剣の柄を呪いで大弓を顕する。青銅の矢をつなげ、『ステュムパリデスの鳥』を明後の方角に射ち放って黒き騎士王を強引に足止めするや、次々と矢を撃ち込む。

狙いは土郎、アイリスフィール、ネロ、そして神話の戦いに呆然とする海賊達。それに回避させ、海賊への矢はクー・フーリンが弾き飛ばす。それで充か。喚び出すのはオレニアの牝鹿である。その背に着ける。
地に匹敵する速力を発揮する牝鹿の背から矢縦ぎ早に矢を放ち始めた。
「クソタレがあう！」「クソタレがあう！」「クソタレがあう！」
悪罵がクー・フレリンの口を衝いて出る。狙いは徹底していた。
無力な者をこそ狙う外道の戦術。ネロ、アイリスフィール、士郎、
そして普通の人間である海賊。それを護るのに釘付けにされ、唯一
自由となったオルタではケリュネイアの牝鹿を捉えきれない。そし
てオルタがクー・フレリンと守りの役を代わろうとするだけの間
空かない。
アルケイデスは矢を膨大な魔力に物を言わせ無理矢理に作り出し
連続された宝具の解放。後はマスターである士郎やネロの負担に
なる。だがネロはともかく、今の士郎に負担を掛ける訳にはいかな
い。このまでは、まずい。
「―削り殺してやろう。」
悪意を以て嗤う復讐者が止まらない。「―敗北の予感に襲われる。故にこそ。
敗北の運命を覆す者が、この場にはいたのだと思い出す。

ミシュがハッとする。しかし何を思ったのか、すぐに平穏を取り

繕う。だがその瞳に喜色が浮かぶのを隠しきれなかった。小

少女は躊躇わなかった。瞬時に守りを破棄してクー・フーリンに

駆け寄る。アルケイデスは訝しみながらも矢を放ち、クー・フーリン

はミシュの動きだけで察し笑う。

そもそも枪兵はアルケイデスへ向けて馳せた。ミシュがクー・フー

リンの代役を勤める。しかし士郎の護りが空いた…。その意味を復

讐者しが矢を放たらなかったのは、アルケイデスの理解を超えていたか

ら。

無慈悲な矢は、顕現した紅色の楯によって阻まれる。

「何・・・！」

「何ったな、外道！」

「侮ったな、外道！」

「偽りの短時間で意識が覚醒したんだと、あの毒を受けてか！？」

理解を超えた現象ゆえに、隙が生じた。クー・フーリンは吼え、
魔槍を一閃する。アルケイデスは反応するも間に合わず、その右腕が宙を舞う。アールケイデスは怒ても間に合わず、その右腕が宙を舞う。アールケイデスは侮って意を以て思い知っている激痛の海を渡り、意識を取り戻す間がいる等と。

身を以て思い知っている激痛の海を渡り、意識を取り戻す人間があらゆる加護、あらゆる後押しさるものに依存しない鉄の心。あらゆる安心の負荷に堪え忍び精神死から蘇生する人間の精神ーーそんなモノが神代でなく現代に存在する理尽。あらゆる加護、あらゆる後押しさの心を歴史の偉人に学べと。ならばそんな講釈を垂れし。がどうして跡を残して死んで去られる。楯の花弁は一枚、それは破壊された。士郎は力を使い果たしたように倒れる。だが意識はあった。

言い捨て、隻腕となったアルケイデスはケーキネイアの牝鹿を走らせ撤退する。それをクー・フーリンを含め、誰も追わない。単騎で追撃するに不穏だった。新手がないとも限らない。ならばマスターを守護するのが最上である。敵の気配が完全に遠ざかったのを確認し、クー・フーリンが念のためルーン魔術で探知の陣を張ると、マシュは安堵してその目に涙を浮かべた。

「先輩っー」
「ーよかろう。此度は、貴様らの勝ちだーー」
女に、士郎は力なく微笑む事しか出来ない。
こうして恐るべき復讐者との一戦目の戦いは幕を下ろした。
健在なのには、憔悴し切った面貌である。頬は痩け、遂に全体の皮膚の色が褐色へと変色していった。疲弊した声には精彩が欠けており、体調は万全であるにも関わらず、憔悴し切った面貌である。頬は痩け、遂に全体の皮膚の色が褐色へと変色していった。

実際には己のバイトルを把 握していなかった。それでも実戦に耐えられるとは思えない。 ...
「... 正気か？貴様は己のバイトルを把握していなかった。目差しが中天を過ぎ去り地平線に差し掛かりつつある。黄昏の陽を横顔に受ける男は、長く寝ていても殆ど回復した気がしていなかっ た。鉄のアグラヴェインの直言は正論だ。俺は健康そのもの、それど
魂とは物体の記録だ。肉体に依存しない存在証明であり、物質界に於いて唯一不滅のモノ。肉体が根差す物質界にではなく、その上の星幽界という概念に属している。肉体を肉体によって再現するが、その代わり肉体という器に固定され、肉体の死という有限を宿命付けられる。記録であるが故に、この魂が健在であれば肉体の遺伝情報が失われたとしても、嘗ての自を復元する事が可能だった。

だが、例えば間桐の嘘翁などは、その魂が腐敗し果てていた為だ。が、肉体を肉体に依存して肉体で現世に留まる事は不可能だ。肉体に宿すと自身を肉体によって再現するが、その代わり肉体という器に固定され、肉体の死という有限を宿命付けられる。記録であるが故に、この魂が健在であれば肉体の遺伝情報が失われたとしても、嘗ての自を復元する事が可能だった。

だが、例えば間桐の嘘翁などは、その魂が腐敗し果てていた為だ。が、肉体を肉体に依存して肉体で現世に留まる事は不可能だ。肉体に宿すと自身を肉体によって再現するが、その代わり肉体という器に固定され、肉体の死という有限を宿命付けられる。記録であるが故に、この魂が健在であれば肉体の遺伝情報が失われたとしても、嘗ての自を復元する事が可能だった。

士郎はあくまで冷淡だった。「カルデアに帰還しろ。貴様の命は、貴様だけのものではない。マスター、いつも通りに合理的な判断を下せ。」合計的に判断を下したから、却下だと言った。「俺が帰還したら、この特異点に残せるサヴァントは最大で三騎、無理を押し

士郎はあくまで冷淡だった。「カルデアに帰還しろ。貴様の命は、貴様だけのものではない。マスター、いつも通りに合理的な判断を下せ。」合計的に判断を下したから、却下だと言った。
「俺が帰還した場合、ネロの下に残すサーヴァントはランサー、アルトリア、マシュ、キャスター……つまりアイリさんが。その辺りが妥当だろう。真っ向勝負ならランサーで奴を抑えられるにしろ、アイリさんとネロだ。アルトリア達は信頼していない訳じゃない。ネロの能力が足りないといけない人数の釣り合いが取れてないんだ。

その海賊達を護る必要はない。現地人が他にいても同様で、そもそも人質は無視すればいい。大事の前の小事だ、敵の襲撃に手を付けるだけだ。」

「なるほど。お前の言う事は正し。だが正しいだけだ。それじゃあ、馴目だろう？人理を巡る戦いって、のは……大事も小事もない。……生きる為の戦いに、貴賊はないんだ。」
「うららさきの儘に手紙……」

『…へへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘ
レオナルドの叱責とも、懇願とも、罵倒とも取れる怒声に士郎は苦笑した。

全面的に彼らの言い分は正しいのだ。それでも譲らない理由は意地であり、計算であり、情でもあり、信念でもある。

怒るアッ君

この話は終わりだ。もっと建設的な話をしたよ。俺は——

怒るアッ君

私が王よ、どうかこの愚か者へ裁判を。私の言葉は届かずとも、

どこの口が……！

その建設的な話とやたらと蹴ったのは貴様ではな

いかっ——

怒るアッ君

王のお言葉ならば耳を傾けるもしけません。

アントルアは静かな眼差しで士郎を見詰めた。オルタは視線すら

アントルアは静かな眼差しで士郎を見詰めた。
目を逸らさず、アルトリアは説く。

「シロウ。
私は騎士です。貴方の剣になるという誓いは、些かも揺らいでいるわけではありません。貴方が命じたなら、私は如何なる者も斬る刃となるでしょう。故に私は、騎士として諫言しましょう。シロウはもう限界だ。いないともさと、私を信じて、下がってはくれませんか？…」

哀願ではない。懇願しているのでもない。身を案じ、主の無謀を諫めている。
本当は愛する青年に縛り、涙ながらに休むべきです。誰もシロウが休むことを諦めない。シロウ、私は貴方だけの騎士だ。貴方が不在でも、必ずや勝利を掴みましょう。私を信じて、下がってはくれませんか？…」「

琥珀色の瞳を伏せ、士郎は瞑目する。吹けば飛びそうな程に弱った、老人のような佇まいで。

…アルトリア、俺はお前を信じている。嘘偽りなく、その力と心を信じている。それはお前もそうだと思っている。
「はい。
だから俺がどう答えるかは、言わなくてても分かっているはずです。
私は、どう言えばいいのかなんて、解りません。けど先輩が好きじゃないなんて、
細げに呼び掛けた。ふう、と小動物が鳴く。
大丈夫だ。俺はいなくならない。死んだりなんかしない。マジュが心
細げに呼び掛けた。ふう、と小動物が鳴く。
A班の全力戦闘を俺が支えられるのは、保って後三回だ。
ちょっとその三回の戦闘の後は、カルデアに帰還するという事です
オルタが漸く視線を向けてくる。波が悪そうに頭を揺じて、士
郎は嘆息する。
ね「そうだ。ああ、俺だって無駄に死にたくなんじゃない。後三回、何を以て三回だと決めたのか。
士郎は左手首に巻き付けてあるカルデアの通信機に向けて、己の所感を述べた。

アグラヴァイン、レオナルド。俺の考えを伝えておく。恐らくだっアグラヴァイン、レオナルド。俺の考えを伝えておく。恐らくだっ
一回の戦いの後は、大人しく帰還する。それは約束するさ。

三回、何を以て三回だと決めたのか。三回の戦いの後は、大人しく帰還する。それは約束するさ。

士郎は左手首に巻き付けてあるカルデアの通信機に向けて、己の所感を述べた。

三回、何を以て三回だと決めたのか。三回の戦いの後は、大人しく帰還する。それは約束するさ。

士郎は左手首に巻き付けてあるカルデアの通信機に向けて、己の所感を述べた。
ならば今度は更に強力に襲撃し、なんらかの決定打を決めたいのが敵の心情。アルケイデスの召喚者が誰で、敵の残存数は何騎かも不明なあちと異なり、こちらの実情は割れていない。警戒していても不利なのはカルディアなのだ。その優位を活かさないでどうする。そしてこちらの陣容の厚さから、次からは奇襲だろうが正攻法だろうが結果は同じになると判断できる。ならばアルケイデスにとっては士郎が回復する前に決着を付けた方がいい。

「正念場、か」

「……デュフフ、気づかれてしまいましたな」

「俺は気づかなかった。ま、今の俺にお前の隠密を悟れる余裕はないで」

「……で、お前はさっき、どこ行ってやがった。－－黒髭－－」

森の茂みが、ささりと鳴る。隠れていたつもりなのだろうが、マシユやアルトリア達には筒抜けだった。彼女達の視線の向き前に違和感があったから、士郎は潜んでいる者にあたりを付けて呼び掛けたに過ぎない。潔く茂みから出てきたのは、やはり黒髭の大男である。靴につい葉や枝やを払い落とし、黒髭はにぱっと、と笑みを浮かべる。
「いやあ、両手に華どころか一輪余っておりますぞ。実に羨ましい
限りWWW ちょっと拙者と代わって欲しいですとアラ充めWWW」

ふざけた言動にリアクションを取る気もしなれない。端的な話問
に黒髭は顔を染めた。

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘みに行っておりますWWW

ちょっとお花を摘み行って...
「エドワード、肩貸してくれ……」
「バカか。何時まででも渾名の『黒髭』呼びだしたら他人行儀だろう。それにティーチって呼んでたら、日本の海賊漫画の三下みたいになっちまう。お前、あんな三下じゃねえなっ！
『ブラフォウ』拙者がモーダルのあれですかWWW。あれがあれでいいのですぞWWW。
誰が師匠か。というか知ってのかよ。その知識は何処から来たり考えてるのだろうWWW。
ひよいと土郎の腕を掴み上げ、黒髭は気安く土郎に肩を貸した。
その際、土郎にだけ聞こえるように黒髭が呟く。
「おう、カリデアのマスター。メメ、知らねえだろうから教えてやるよ。どうせ後で聞かされるだろうがな」
ケリュネイアの牝鹿から飛び降りる。自身が更地に変えた無人の島故に、見張らせはい。万が一にも奇襲される恐れない。
アルカイデスは考えていた。カルデアの主柱らししき男の事を、宝具化に際してスケールダウンしているとはいえ、最悪の神毒を受けて尚もその精神が死に至らぬどころか、僅かなる時で意識を覚醒させるptype;たあの男。

「素晴らしい忍耐力だ。」

『まさかな。あの男が、冬木の時の小僧だったとは。』

そして、思い出す。

そと、思い出す。
縁というのは、やはりバカにできない。自身の記憶にある、忌々しい神に成り下がった愚物が仕えた、冬の妖精のような少女の義弟があの男だ。

気持ちの良い少年だった。「二度目の茶番時は見れたものではなかったが、同じ顔、同じカーテー存在なのだだろう。内面は違うのだろうが、同じ力、同じ顔、同じ力―同一存在なのだろうが、同じ顔、同一顔、同一存在なのだろうが。内面は違うのだろうが、同じ力、同じ顔、同一存在なのだろうが。

問題は敵の陣容の厚さ。片腕を失ったのは、極めて大きな損失である。あの男が復活する前に仕掛けたいが、正面から向かうのは無謀。かといって二番煎じの奇襲では対処されないのがオチだ。まともに戦いを成立させられないほどの痛手、これをどう補うか。

腕の切断面が疼き、グチグチと肉が沸騰したように沫立ったのだ。ぞわりとした不快な感覚は、しかしこぐさま立ち消える。それに遅かに上回る驚愕と、得体の知れぬ納得があったのだ。

喪ったはずの腕が再生していた。

亀裂が走ったように不気味に笑み、復讐者は嗤う。そういはカル・
デアに復讐する為に存在するのだから。
その思考に、違和感はなかった。
戦慄の出会いだね士郎くん！

ガシガシと髪を撫き、これより後に星の開拓者として人理に名を刻まれる女は、気まずそうに目を逸らした。

－あー…すまなかったね。アタシが寝た時にそんな大事があった－

俺がそう言うと、ドレインは顔を寄せた。折れていた腕と、光を失ってしまった目を瞼の上から撫でる。

「…おまけにここの。アタシが寝てた間にアタシの腕と顔、ウチの死にかけの連中をワケの分からない力で治してくれた上に、アタシの『黄金の鹿号』までアントの部下に直してもらっていたと来た。とても返してくれないでっかい借りが出来ちゃったやー」

気にする事はない。怪我を治したのは治せる奴がいたからで、おたくの船を直したのは俺が寝てる間に赤と青の野郎にネロが指示をしたからだ。俺ではなくネロに感謝してくれる。

－…すまなかったね。アタシが寝てた間に…－

寧ろあの戦闘の最中に寝ていられる豪胆さは、ある意味で大したものだ。転じているのではなく素直に感心してしまう。

俺がそう言うと、ドレインは顔を寄せる。「アタシの腕と顔、ウチの死にかけの連中をワケの分からない力で治してくれる。折れていた腕と、光を失ってしまった目を瞼の上から撫でる。その上に、アタシの『黄金の鹿号』までアントの部下に直してもらってと来た。とても返してくれないでっかい借りが出来ちゃったやー」

気にする事はない。怪我を治したのは治せる奴がいたからで、おたくの船を直したのは俺が寝てる間に赤と青の野郎にネロが指示をしたからだ。俺ではなくネロに感謝してくれる。
ハッタンを侮辱してるって事だ。そしてそれは、巡り巡ってこのアハッタンを侮辱してるって事だ。だから話を持ってるなら、サー・ヴァント相手でも攻撃が通るかもしれない。

生きてる人間にあのヘラクレス野郎と戦わせる無謀は冒されたくない。不思議な聖杯パワーで。

いや、やっぱり今の私は無した。聞かなかった事にしてくれ。…生きてる人間にあのヘラクレス野郎と戦わせる無謀は冒されたくない。不思議な聖杯パワーで。

…舐めてくれたねえ。けど、道理っちゃ道理だ。なんせ相手は酔払いの法螺話にもなりやしないギリシャ神話のヘラクレス！しかもそれが神話と真逆の性格になっている。手法を選ばず命を奪うに来るとなったら誰だってブッちまうもんさ。ましてや実物を見ちまってなんなら尚更ね。

キャプテン・ドライクの顔は挑戦的な笑みを浮かべている。沸き立つ海賊の血潮は、怒りや屈辱やに燃えていた。

アンタ、知ってるかい？　アタシの『黄金の鹿号』は、クリストファ・ハットンの紋章に因んで改名したもんだ。ペリカンって間抜けな名前が気に入らないね。…ハットンの紋章の由来はヘラクレスの三番目の功業、ケリュネイアの牝鹿の捕獲に掛かってんだ。ハットンはエリザベス女王を支えた三番目の男で、その「三番目」ってのに掛けたんだろう。

あの旦那はアタシの大のお得意様だ。ヘラクレスの三番目の功業、ケリュネイアの牝鹿の捕獲に掛かってんだ。…舐めてくれたねえ。けど、道理っちゃ道理だ。なんせ相手は酔払いの法螺話にもなりやしないギリシャ神話のヘラクレス！しかもそれが神話と真逆の性格になっている。手法を選ばず命を奪うに来るとなったら誰だってブッちまうもんさ。ましてや実物を見ちまってなんなら尚更ね。

「アンタね…それ:majで言ってるのかい？　だとしても、たんでもない野郎だ。アタシの大嫌いな正義漢そのものじゃないか… Mustang」とか、馬だって馬じゃない、馬だ。…舐めてくれたねえ。けど、道理っちゃ道理だ。なんせ相手は酔払いの法螺話にもなりやしないギリシャ神話のヘラクレス！しかもそれが神話と真逆の性格になっている。手法を選ばず命を奪うに来るとなったら誰だってブッちまうもんさ。ましてや実物を見ちまってなんなら尚更ね。

…舐めてくれたねえ。けど、道理っちゃ道理だ。なんせ相手は酔払いの法螺話にもなりやしないギリシャ神話のヘラクレス！しかもそれが神話と真逆の性格になっている。手法を選ばず命を奪うに来るとなったら誰だってブッちまうもんさ。ましてや実物を見ちまってなんなら尚更ね。

…舐めてくれたねえ。けど、道理っちゃ道理だ。なんせ相手は酔払いの法螺話にもなりやしないギリシャ神話のヘラクレス！しかもそれが神話と真逆の性格になっている。手法を選ばず命を奪うに来るとなったら誰だってブッちまうもんさ。ましてや実物を見ちまってなんなら尚更ね。
ドレイクは激怒していた。あの復讐者のルーツに。海賊は面子が
命である、それはフランシス・ドレイクにとっても同様だ。
故に、彼女は赦さないのである。

ハットンの名誉はアタシの面子にも掛かってんだ。例え本家本元
だろうが赦せるもんかい。いいじゃないか、英雄殺し！手ぇ貸す
よ。腕と目、アタシの部下の命に船の補修！力を貸したって天秤
はそっちに傾いてる。事が終わったたら火腿の入った瓶一つで、アン
タの言う聖杯とやらもくれてやらぁ！！

お前の部下は怖じ気づいてるぞ。なんてそのヘラクレス野郎の力
お前が見ている。ビビった兵は戦いの役に立たないが。

はっ。心配しなきゃ。アタシが気合い入れてやるからね。仮に
はこのアタシの部下なんだよ？もし尻尾丸めてたらキノタマ潰し
ってやるさ。

……お手柔らかに。ああ、天下のドレイク船長が味方してくれる
なら百人力だ。

いって事さね。元々このっつアタシの戦いでもあるんだ。命に
砲弾一発勝つも負けるも、派手に使い切るまでさ。

そう言って、後の太陽を落とした女は莞爾とした笑みを浮かべた
のだった。
敵戦力の総体は未詳。判明している敵は『復讐者』へ霊基を変じたアルケイドスに、『兜クラノス・ランプシス輝く』の異名を持つ九大英霊の一角、ヘクトール。この二騎だけでかななりの難敵だ。アルケイドスは言うに及ばず、ヘクトールもアルトリアに匹敵する強敵である。厄介なのは、ヘクトールがかななりの切れ者で、防戦に関しても最高の手腕を逸言上持っている事だ。
敵はアキュデスを通して、こちらの陣容を把握している。
切嗣がカルデアで再召喚されることは、まだ時が掛かるだろう。
敵の予測を上回るには、新たに陣容の厚みを増す必要があった。
故にネロダ。
彼女に新規にサークルを召喚してもらう。
切り札となるか否か分からないが、強力なサークルが戦線に加わってもたらえれば、先の一戦時に隠れた黒髭とも合わさり、切り札に成り得るのだ。
「という…訳だ。
頼むぞ」
「うむ、任せよ！―出いでよ神祖ルス！
余の声を聞き届け、いざ人理を救う戦に出陣願う！神祖！神祖！神祖！神祖！伯父上は座ってネ！はぁあぁッ！ッ！ッ！」
マシュの楯を基点に設置された召喚サークルを前に出、ネロは凄まじい熱気で気合を叫んだ。
うん、気持ちは分かる。神祖が来てくれたら、もう勝ったと慢心出来るレベルだ。
海の下から木を召喚して足場にすると、そのような外れの真似だってやっただけでもしれない。そうしたたら海上での戦闘でもやり易くなる。だが余りに暑苦しい呼びかけだ。
そうに叫ぶ必要ないやに。マシュも苦笑している。
召喚に使う魔力リソスは、レオナルド謹製の呼符であつもの如く奴の工房かくして来た。カルデアの向こうで『またなく！』とモナリザ・ムク叫びが聞こえた気がしたが、気のせいだと。
『！？来た、強力な魔力反応！』
具体的に言ったらSSRSクラス...
ロマの声がする。奴め、ネットアイドルだけじゃない、スマホのソーシャルゲームにも手を出していたのか。俺は色々と台無しである。禁断のガチャを回して廃人と化している様が目に浮かぶようだ。おお！流石は余、この場面で巡先行がいい！という事は神祖だね！余には分かること。だって神祖がSSRじゃない訳がないもん！おめでとう。おめでとう。おめでとう。

胸を張ってだや顔をするネロに、皆生暖かい眼差しで拍手をした。胸を張ってだや顔をするネロに、皆生暖かい眼差しで拍手をした。

ピシ、とネロが影像と化す。ローマ史のネロの頭像を彷彿とさせられるが、しかしここに水を差すのがアグラヴェイントである。

ピシ、とネロが影像と化す。ローマ史のネロの頭像を彷彿とさせられるが、しかしここに水を差すのがアグラヴェイントである。

この時、神祖は何故だ、神祖は何故来てくれぬのだ、何故だ、神祖は何故来てくれぬのだ、何故だ、神祖は何故来てくれぬのだ、何故だ、神祖は何故来てくれぬのだ、何故だ、神祖は何故来てくれぬなのだ。
なの

「

我様は

様と

人を

は

と

召し

は

と

此

と

面

に

そ

さ

全

だ

英

は

う

取

く

カ

る。

テ

つ

の

す

逸

れ

員

と

し


「

見

業

を

で

で

可

サー

S

ョ

じ

供

の

に

能

て

ス

ン

け

マ

に

し

R

迦

R

に、

気

因

な

ト

を

S

…

」

微

ロ

や

と

授

帝

出

が

彼

の

見

業

を

で

で

マ

キ

性

だ

ロー

の

安

い

っ

ャ

と

授

帝

に、

照

た

た

が

無

ほ

最

も

ら、

格

ギ

ュ

保

ネ

伯　

で

こ

と

ま

た

と

い

し

も

が

無

ラ　

格

ギ

ュ


「

限

だ

上

う

た。

照

た

た

が

無　

ラ　

格

ギ

ュ　

保

ネ　

伯　

で　

こ　　と　　ま　　た　　と　　い　　し　　も　　が　　無　　ラ　　格　　ギ　　ュ　　保　　ネ　　伯　　で　　こ　　と　　ま　　た　　と　　い　　し　　も　　が　　無　　ラ　　格　　ギ　　ュ　　保　　ネ　　伯　　で　　こ　　と　　ま　　た　　と　　い　　し　　も　　が　　無　　ラ　　格　　ギ　　ュ　　保　　ネ　　伯　　で　　こ　　と　　ま　　た　　と　　い　　し　　も　　が　　無　　ラ　　格　　ギ　　ュ　　保　　ネ　　伯　　で　　こ　　と　　ま　　た　　と　　い　　し　　も　　が　　無　　ラ　　格　　ギ　　ュ　　保　　ネ　　伯　　で　　こ　　と　　ま　　た　　と　　い　　し　　も　　が　　無　　ラ　　格　　ギ　　ュ　　保　　ネ　　伯　　で　　こ　　と　　ま　　た　　と　　い　　し　　も　　が　　無　　ラ　　格　　ギ　　ュ　　保　　ネ　　伯　　で　　こ　　と　　ま　　た　　と　　い　　し　　も　　が　　無　　ラ　　格　　ギ　　ュ　　保　　ネ　　伯　　で　　こ　　と　　ま　　た　　と　　い　　し　　も　　が　　無　　ラ　　格　　ギ　　ュ　　保　　ネ　　伯　　で　　こ　　と　　ま　　た　　と　　い　　し　　も　　が　　無　　ラ　　格　　ギ　　ュ　　保　　ネ　　伯　　で　　こ　　と　　ま　　た　　と　　い　　し　　も　　が　　無　　ラ　　格　　ギ　　ュ　　保　　ネ　　伯　　で　　こ　　と　　ま　　た　　と　　い　　し　　も　　が　　無　　ラ　　格　　ギ　　ュ　　保　　ネ　　伯　　で　　こ　　と　　ま　　た　　と　　い　　し　　も　　が　　無　　ラ　　格　　ギ　　ュ　　保　　ネ　　伯　　で　　こ　　と　　ま　　た　　と　　い　　し　　も　　が　　無　　ラ　　格　　ギ　　ユ　　保　　ネ　　伯　　で　　こ　　と　　ま　　た　　と　　い　　し　　も　　が　　無　　ラ　　格　　ギ　　ュ　　保　　ネ　　伯　　で　　こ　　と　　ま　　た　　と　　い　　し　　も　　が　　無　　ラ　　格　　ギ　　ュ　　保　　ネ　　伯　　で　　こ　　と　　ま　　た　　と　　い　　し　　も　　が　　無　　ラ　　格　　ギ　　ュ　　保　　ネ　　伯　　で　　こ　　と　　ま　　た　　と　　い　　し　　も　　が　　無　　ラ　　格　　ギ　　ュ　　保　　ネ　　伯　　で　　こ　　と　　ま　　た　　と　　い　　し　　も　　が　　無　　ラ　　格　　ギ　　ュ　　保　　ネ　　伯　　で　　こ　　と　　ま　　た　　と　　い　　し　　も　　が　　無　　を持
その獣はやって来た。
燃え尽きた世界が護らせし衛宮士郎へのカウンター。その星と人の抑止力の干涉はない。あるのは星。遥か遠い時の涯、此処ではない何処かで結ばれた、召喚者との奇縁である。
行いへの抑止力。或いは、今の士郎へ最も必要とされる存在。
キャット！？なぜキャットが此処に……逃げたのか？
自力で
運命を感じたくもないね士郎くん！

現代社会の闇は深し。僅かな期間で華のローマ皇帝が、日本のサ
ナルチャーに由来するネタを解するまでになった。

立派な商業で芸術、闇と云うと語弊があるのだが、まあどちらも
果ては伝説のアイドルかセレブな美女か。スーパー・ユーワー
に成る可能性もあった。

あのお、それきっと別尾の私です。よりにもよって、キャットと
……ん？ アイ、ドル……？

彼女の生前の戦場は、血腥い戦争の場ではなく宮廷だったのだろう
言葉遣いから教養の深さが滲み出していた。
まるで知己の人物の意外な姿を見た、といった表情だ。随分とオチマネタな性格らしい。表情からキャラまで分かりやすい。

「なって、あれぬえ？　何やらキザな弓兵さんとおんまでお顔。
　うーん？　ランサーさんにアーチャーさん…
　それ Basketball dunk 技術 眠る 
　魂、思ひ入る。
　それ見知っていたら、選手会か何かなんですか。
　おまけに折角のイケ魂が見るも無惨な有り様ではございませんか。

玉藻の前の目がぐるりと周囲を見ると、失敗した。
　えっ！ ランサーさん、アーチャーさん…
　なんですかこれ、同窓会か何かなんですか。
　どうやる他の聖杯戦争で、サーヴァントのネロやク・フーリン、
　アーチャーを見知っているらしい。青と赤の野郎達に気だるい視線を向けると彼らは首を左右に振った。
　玉藻の前と同様の記憶は無いらしい。その視線はやる取りを玉藻の前は見て取り察したのか、途端に興味を無くしたように赤と青から意識を外し、俺の全身を見渡した。

「みこーん？　なんだこれ？　まるでイケない大陸狐に十年以上
　ぶっ通して拷問された後かのような。そっくり地上のご主人様か
　と思って召喚に応じてみればあら不思議。
　絶対諦めないマン』
　たんなる魂の似てる別人でした。
　ま、いか！　そこはそれ、お顔は気にしない良妻狐、折角素敵
　な魂に惹かれて来たのですし、人理を巡る貴方達の旅路に同道させ
　て頂きます。とりあえず魂の傷、さっくと治しばいます？」
んで二本足で立てるなんてかね…普通医に伏せて三日後
玉藻の前の言に血相を変えたのはネロだけではない。マシュア
ルトリア、オルタ…というより全員だ。俺は居たまらない気分
でそっと目を逸らす。

シロウ！何故黙っていたのですか！？
三回戦えるというのは、

もしかして…！

や、訊かれなかったから…

ガキカメェ！勝手にくたばるところじゃねえか！

ランサー…そうは言うが、どうせ死ぬなら前のめり、だろ…

？あの毒で馎目になった魂の治癒とか…アイリさんの道具で
も無理だったじゃないか

先輩…

素晴らしいキレの一撃…！
お手本のような腹パンです！ワ

素晴らしいキレの一撃…！
お手本のような腹パンです！ワ
禊ぎの証、名を玉藻鎮石、神宝宇迦之鏡なり！なあんちゃっ
彼女の周囲を浮遊していた鏡が俺の姿を照らし出す。その水天の
照り返す日光を満身に浴びた。ちろりと舌先を出して、てへっと茶目っ気を見せる彼女のノリの
軽さは、まさに日輪のように明るかった。

彼女、水天日光天照八野鎮石。

宝具としてのランクは、本来の玉藻の前なら評価規格外だが、サ・ヴァントの玉藻の前ではDランクが精々らしい。種別は対軍だとい。その由来は天照の天岩戸の逸話で登場する八咫鏡。鏡の形をした
宝具で、出雲にて祀られていた神宝にして出雲大神の神体だ。
この宝具は“魂と生命力を活性化させる”力を持つ。本来は死者
すら蘇らせる事すら出来る、冥界の力を秘めた神宝中の神宝だが、
だが…それがどうしたというのか。
腹の底、下で沈黙していた動揺が一掃され、一気に虫食い状態だ
た魂が修復されていく実感に高揚する。
「うっ、眩っ…！」
「おっ？眩しぃっ…！
「あっ…あっ…
「あっ、あは…
「おは…
「えへへ、この力ははははは！治ったぞ…！！」
「は…ははは！
「はははは！治ったぞ…！！」
「は…ははは！
「はははは！治ったぞ…！！」
ただ、女性の手を握り続けるわけにもいかない。感謝の念を出
来る限り強く伝え、ネロの手を取る。同じように感謝した。

「ありがとう、ネロ。本当に助かった。玉藻の前を召喚してくれた
前も、俺の命の恩人だ。」

「楽にせよ、シェロ。きっと神祖は、必要なのか自分ではなく、此
度の招きに応じてくれたキャスターだと判断して捜しててくれたに相
違あるまい。それに命の恩人というのは余にも言えた事だ。第二特
異点のローマにて救われた恩…これで返した事にしてくれればそ
れでよい。気にするな」

「あ、本当に得難い友人と出会えた。
あ、本当に得難い友人と出会えた。

人理を巡る旅の途上でも、いい縁に巡り会えるのが救いだった。」

「楽にせよ、シェロ。きっと神祖は、必要なのか自分ではなく、此
度の招きに応じてくれたキャスターだと判断して捜してしてくれたに相
違あるまい。それに命の恩人というのは余にも言えた事だ。第二特
異点のローマにて救われた恩…これで返した事にしてくれればそ
れでよい。気にするな」

「あ、本当に得難い友人と出会えた。
あ、本当に得難い友人と出会えた。

人理を巡る旅の途上でも、いい縁に巡り会えるのが救いだった。」

「楽にせよ、シェロ。きっと神祖は、必要なのか自分ではなく、此
度の招きに応じてくれたキャスターだと判断して捜してしてくれたに相
違あるまい。それに命の恩人というのは余にも言えた事だ。第二特
異点のローマにて救われた恩…これで返した事にしてくれればそ
れでよい。気にするな」

「あ、本当に得難い友人と出会えた。
あ、本当に得難い友人と出会えた。

人理を巡る旅の途上でも、いい縁に巡り会えるのが救いだった。」

「楽にせよ、シェロ。きっと神祖は、必要なのか自分ではなく、此
度の招きに応じてくれたキャスターだと判断して捜してしてくれたに相
違あるまい。それに命の恩人というのは余にも言えた事だ。第二特
異点のローマにて救われた恩…これで返した事にしてくれればそ
れでよい。気にするな」

「あ、本当に得難い友人と出会えた。
あ、本当に得難い友人と出会えた。

人理を巡る旅の途上でも、いい縁に巡り会えるのが救いだった。」

「楽にせよ、シェロ。きっと神祖は、必要なのか自分ではなく、此
度の招きに応じてくれたキャスターだと判断して捜してしてくれたに相
違あるまい。それに命の恩人というのは余にも言えた事だ。第二特
異点のローマにて救われた恩…これで返した事にしてくれればそ
れでよい。気にするな」

「あ、本当に得難い友人と出会えた。
あ、本当に得難い友人と出会えた。

人理を巡る旅の途上でも、いい縁に巡り会えるのが救いだった。」

「楽にせよ、シェロ。きっと神祖は、必要なのか自分ではなく、此
度の招きに応じてくれたキャスターだと判断して捜してしてくれたに相
違あるまい。それに命の恩人というのは余にも言えた事だ。第二特
異点のローマにて救われた恩…これで返した事にしてくれればそ
れでよい。気にするな」

「あ、本当に得難い友人と出会えた。
あ、本当に得難い友人と出会えた。

人理を巡る旅の途上でも、いい縁に巡り会えるのが救いだった。」

「楽にせよ、シェロ。きっと神祖は、必要のか
海の狐の目をたたいても見抜けませんでしたよ。

「うむ。そなたは英霊の余と会った事があるのだろう？どんな経緯である。余がローマ皇帝として英霊を名を列ねているのは安心できる。余はこうしてカールダにいるが、余の成した事が後世に繋がっているからな。」

というより私からしてみたら、特異点から別の時間軸にマスターとして引き抜かれるなんて、聖杯の力業と言っても無茶苦茶じゃないです？哲人と呼ばれるような事はしないですか？

「ああ、見知らぬ誰かの良妻狐の玉藻さん。略してタマさん。話があるんだが、いいか？」

「はい。その前に一つ、こちらからよろしいですか？」

「ああ、どうぞ。レディ・ファーストだ。」
「あらお上手。」「えっと、いきなり過ぎて可笑しく思うかもしれませんが、貴方のお名前は衛宮士郎、あそこのキザな弓兵とは同じだね。」
「そうだ。それでも違うか？」「いいえ。ということは、辿った人生の道筋も異なると受け取って構いません？」「ああ」
何が聞きたいのか、僅かな逡巡と共に彼女は曖昧に言う。「ふわっとした感覚でお訊ねするのもアレなのでけど…以前私がお仕えしたご主人様…あ、もちろん今もお仕えしてるんです。それはそれで、奇妙な直感というか良妻の予感と云えますかで…」「…？」「あの、もしかして、荒唐無稽で脈絡がないのは百も承知ですが…」「エミヤさん。もしかして貴方は…」「岸波白野様というお名前に聞き覚えがあったり…します？」「…？」「あ、かもしれない。というか白野…平和世界のことなんだろうが、前も聖杯戦争に巻き込まれるのか…。「玉藻の前の雰囲気的に無事ではあるのかかもしれない。」
ビー！と玉藻の前の耳と尻尾が逆立った。おお！と感動を露にする俺さん。俺としてはその耳と尻尾が気になる。切実に触りたい。が、流石に不鎔かつ破廉恥なので自重した。何を隠そう俺は犬派であり猫派でもある。寧ろ可愛いいものは満遍なく好きだ。

やっぱり！で、で！どんな感じでお知り合いに！？

話せば長く―は、ならないか。普通に旅先で出会って、幼い白野に懐かれてな。白野のご両親共々親しくさせてもらっただけさ。俺にとっては今後、滅ぼすべき悪疫を見定めたターニング・ポイントだったが、被害者にとってはあくまで悲惨な悲劇だった訳である。一言で語れるものではないし、軽々しく語るべきでもないだろう。だから親しくさせてもらった、という部分しか言えない。

玉藻の前は目を輝かせて幼い頃の白野の話をねだってくる。それ応えて、出来る限り詳細に当時のやり取りを語った。しかし彼女、俺も感じていた違和感を、玉藻の前は問い掛けた。

―あ、いうより、タマさんの云う白野は男みたいだな。

ええ、男性です。しかしあの方の記憶―幼い故に顔などは曖昧でございましたが、確かにエミヤさんの仰るご主人様は…女性、だっただけですか？
おきました。私のご主人様のオリジナルである方は男性ですが、異
なる世界でも貴方と出会っていたのですね～
「そうか……白野が男か。ふ、さぞかしいい男になっただろな～
それはもう！そして～ええ、どうやら貴方はご主人様にまったく
が惹かれたご主人様に、貴方が多大な影響を与えたとなれば私にとっ
ても恩人です。善き出会いを、ありがとうございます。
「礼は要らない。白野が歩み、白野が君を懐れさせた。ならそこ
俺みたいな外野が関わる余地なんかいないからね～
それは確かに。私のご主人様はまあ、厳密に言えばその、地上の
俺のように外野が関わる余地なんかいないからね～
「それは確かに。私のご主人様はまあと、厳密に言えばその、地上の
ご主人とは直接的な繋がりをお持ちではありませんでした。」戦
でも、そんな中でも、貴方との事を覚えていらっしゃるほど深く思いで
した。ですので、私が貴方に感謝するのは私の勝手。そういう事で
す～」
エミヤさん、私に感謝する必要はそんな。
どうか自然でよろしお願いしますね」
了解した。だが感謝の気持ちは忘れない。
それも俺の『勝手』だろ？
「みっこっ？　ここれは私としたこととが、一本取らせていましたね」
そう言っって、玉藻の前は口許を裾で隠し、典雅に微笑んだ。
プロ野球選手に憧れていた野球少年が、大人になってプロ野球選手となり、憧れのと同じ球団に入って野球をする事が出来た。といった風情の感動である。
そこで判じられるからこそ、俺は制止しない。まあだからといっ
て誤魔化しの対象されている女性陣が、不愉快な巨漢の言動に大
人しくしている必要があります。

玉藻の前は盛大に顔を引き攣らせ、ネロに問い掛けていた。

ちょっとネロさん、なんだかあの顔も魂もイケてないナマ
モノ。顔はイケてても心がひねくれてたら顔も同義、これ即ちイケ
モンですが、あれは顔も心もモンスター！繋けてモンモン、逆に
可愛らしい響きなのかまさに吐き気を催す悪夢……！黒々とした
魂の中に、無駄に純粋な所があって逆に不快なのですねえ！

良妻たちのもの見掛けで判断はしませんが、アレは無理ですね！
台所も無意に横切る、黒光りするG並みに無理！近づくだけで鳥
肌ならぬフォックス肌になってしまいます！

---- 諦めよ。余は諦めた。あれで海上では唯一の足として重宝す
るのだ。多少の無礼は見て見ぬふり、存在自体をスルーせよ。どう
にアレからの詫辞を受け取っても全く嬉しくないのに、逆に走っ
てくるものがある故な

---- そうですか……ネロさんをドン引きさせるとは大したもので
もし不埒な真似をしようとしたら、躊躇う余地なく猥褻物陳列処刑
砲、もともと必殺の玉天崩を放たねばなりませんね……！
しゅ！しゅ！切れ味のあるシャドー金的の蹴りに冷や汗が噴き出る。さっき俺に言っていた呪相玉天崩とは金的の事だったのか…。

ぐくりと生唾を呑み込み、戦慄を隠しつつ傍らのクー・フーリンに言った。

「…いざとなったら、楯になってくれ。」

「前霊体だろう、こっちは生身だ。潰れて困るブツじゃないだろう。」

「男に潰れて困らぬブツは無えよ！」

「大丈夫だから。満身創痍になっても平気な顔をしているお前なら金的も大丈夫だから。」

「そっくりそのまま返すぜ観マスターが！」

「醜い争いはやめたまえ。見苦しい事この上ないぞ。」

「おっ。遠回しに自殺か。流石は色男、なかなか出来る事じゃねえな。」

「どんな理屈だ貴様！キャスターに貴様の所業を伝えるぞ！」

「そうだ。顔は同じだしアーシャがやられても俺がやられても同じだ。」

「生け贄はコイツだな。」

アーシャが心底下らなさそうに制止してくるのに、俺とクー・フーリンは顔を見合わせる。

玉藻の前のシャドー金的によって、割れかけていた心が一つになった瞬間だった。
「くっ……！　それ言った貴様もだろうランサー！　色ぶつは伝説にも語られるほどだと忘れられるな！」「まあいざなったら令呪があるしぐっか！　それを言ったなら貴様もだろう！　貴様の好色ぶりは伝説にも語られるほどだと忘れられるな！」「男性陣の絆がたかがシャドー金で崩壊寸前に……！　だめ、やるなりランサー！　貴様の好色ぶりは伝説にも語られるほどだと忘れられるな！　私の為に争わないで！」「ああいざなったら令呪があるしぐっか！　それはやったたら戦争だぞ……！　戦争するしか無くなるぞ……！　ふへ、マスターの身代わりになる栄誉だ、喫泣きたまえ。だが安心しろ、この特異点の間なら、黒髪の奴が最優先で使われるかははは、と笑う俺を、何故か生暖かい眼差しで見守る騎士オーズ。オルタは黒髪を蹴り倒し、頭を足でグリグリと踏みにじっているので、その暖かい眼差しの乖離具合が実に混沌としている。ほろりとマシュが涙を流し、アイリスフィールなど感極まったら、なんの慰めにもなって無い！　」「そんな。ええ、マスターが元気になってくれて嬉しいわ。」「先輩は元気に……！　いつもの先輩が帰って来ました……！　居たたまれなくなったので咳払いをする。マシュとアイリスフィールに俺がどう見えているのか、一度膝をつき合わせて問い質する必要があるかもしれない。」
風に乗り、波を捲き分けて進む二隻の海賊船。潮風と波打ち海の調
べと、どこか聞こえている海鳴き声を背景に、今のところ
一度もドレイクと黒髭が立ち寄っていない最寄りの島を探し求めて
いた。
海図が完ならないこの海域の状況、原因は聖杯であると見て間
違いないまい。それがドレイクの持つ聖杯のせいなのか、はたまた
まだ見ぬ敵の黒霧による狙いがあるのかはまだ判然としなかった。,
問題は地形の把握が著しく難しくなっている事である。これは敵の
探索、戦場の選択を大幅に難しくさせるのだ。指挥官としては頭の
痛い状況である。

「なんだ、シェロ。意味深な視線を寄越して」

ネロが開口一番に問い掛けてくる。肩を竦め、俺は白波の立って
ない穏やかな海から視線を離さず、『黄金の鹿号』のドレイクと
その部下のやり取りを眺めた。

船首に立つ星の開拓者の生前の姿。その全盛期にはほんの少し
かり若いだろう女傑はこちらの視線に気づくと不敵な笑みを浮かべ
た。幾人かサーヴァントを同乗させようかと出航前に訊ねたのだが、
彼女は要らないと退けた。そっちの方が面白そうだろう？

と。まあ

振り返り、デッキの手摺りに背を預けて集まった連中の顔を覗く。
ローマ皇帝ネロは、熱烈なヘラクレスのファンである。神祖が一番だけどんな、タマさん。だがそんな事はあのヘラクレスイク、騎士王らしかまともに戦えぬだろう。何せ奴の駄賃鼠鹿は水際にも問題なく走るというではないか。

そこで具体的にはどうするのだ？船の上では、あの黒髪めやドレインに、負けず劣らず腸が煮え縫り返る思いなののは想像に難くなかっただろう。故にアルケイデスの所業が赦せない。アルトリア達やクー・フーリンに、負けず劣らず腸が煮え縫り返る思いなのかどうか。

「それが一番だけどんな、タマさん。だがそんな事はあのヘラクレス野郎も承知している。単騎で仕掛けて来る事は考え辛い、逆に単騎でも立ち回ると言ったら、俺達が海の上にいる時だ。何せ奴の駄賃鼠鹿は水際にも問題なく走るというではないか」

「堅実な現実的に作戦を練るなら、やはりどこか陸地で迎い撃ちとうございませんね」
俺の場合は純然たる経験や、戦術の観点からの勘だが、アルトリアの場合はそれを込みにした生まれ持っての直感である。未来予知に近いその勘が、俺に同意してくれるなら間違いはほぼないと言えた。

俺の場合、純然たる経験や、戦術的観点から見る限りでは、アーチャーは腕を組む。片目を閉じて意見を口にした。

未来予知に近いその勘が、俺に同意してくれるなら間違いはほぼないと言った。
それか、その辺に戦闘になるだろう。「そこなっちゃん」

「そうなくっちゃね」

玉藻の前は、心底思議そうだ。あのランサーさんが此处まで強そうになってるのか、どんなインチキしたんだ？ その疑問に、俺は笑って答えた。聖杯戦争でインチキしないのは素人だぞと。さもあらんと玉藻の前も苦笑した。

「それにして、ではなかか？」

「単独行動の利点は、イニシアチブを握りやすい事だ。集団行動をする側は足並みを揃えなくてはならないからな。反面、単独なら自分的好き勝手が出る。リスクとなるのは危機に陥っても助けが入らない点だが、それにあえて切り抜けるならリスクを無視するのも充分にアリだろう。そして現代の戦争における戦術、戦略の中で最も忌避されるのが」

「ゲリラっつう訳だ」

何故なら彼らの時代よりも、現代のそれは遠かに洗練されている。古代の名将を侮る気も、下に見るつもりもないが、これ戦術や戦略に於いて俺は劣っていると感じていない。

尚、槍兵の言葉に、その通りだと俺は頷く。

槍兵の言葉に、その通りだと俺は頷く。

何故なら彼らの時代よりも、現代のそれは遠かに洗練されている。
狩人、戦士としてのヘラクレスが相手なら、俺は逃げの一手。だ
が、武力だけではなく、戦術が介在するならば、俺
も無敵な、最強の馬鹿野郎である。
俺が最も苦手とする手合いは、自分が賢いと勘違いしている底抜けの阿呆だ。思考が読めない馬鹿ほど厄介なものはないのだから。
その点ヘラクレス野郎は、半端に頭が切れる。ああカモとも。

「わあ……この方は肉食系ですっぶり……玉藻こわーい！」「だな」「うむ」「だな」

玉藻の前の戯れ言をさらりと流し、俺は彼らに向けて笑みを投げ
た。

俺達の迎撃を考虑に入れても、仕掛けない理由はないだろう。
まずはドレイクらが落ちとされるよう、守備を固めてくれ。

ケイデス名乘る事すら鳥獣がましい劣下劣な外道ならば、必ず狙っ
ていく。

それが一点。アーチャーは？

アーチャー名乗る事すらウソがましい劣下劣な外道ならば、必
ず狙っ
ていく。

それは点。アーチャーは？

「ハハッ。決まっている。奴の優先順位は後衛である私やアルカディ
アの狩人、何よりもマスターである皇帝を貴様だ。奴にとって目障
りな回収役のキャスターは必ず仕留めたいだろう。それをさせて
配置を心掛ける必要がある。

それでも二点。だが定石だね。一つ言っておくと俺は次でヘラクレ
ス野郎を仕留めようと思うじゃない。

「なんでかしら？」「ありし、奴は戦術家としては大した事はないが
無能じゃ
ない。そして戦士や狩人としては一つの神話の頂点でもある。簡
单に
殺しこれると考えるのはナンセンスだろう？奴が上で仕掛け
来る利点は、引き際を見誤らなければならない確実に撤退出来
る点だ。

第一の目標は、全員が無傷で切り抜ける事。第二の目標は、一つ
の手札を可能な限り晒させる事だ。

アリスフィールの質問に俺は丁寧に答えた。

「アイリさん、奴は戦術家としては大した事はないが、無能じゃ
ない。そして戦士や狩人としては一つの神話の頂点でもある。簡
单に
殺しぼれると考えるのはナンセンスだろう？奴が上で仕掛け
来る利点は、引き際を見誤らなければならない確実に撤退出来
る点だ。

第一の目標は、全員が無傷で切り抜ける事。第二の目標は、一つ
の手札を可能な限り晒させる事だ。

アリスフィールの質問に俺は丁寧に答えた。

「アイリさん、奴は戦術家としては大した事はないが、無能じゃ
ない。そして戦士や狩人としては一つの神話の頂点でもある。簡
单に
殺しぼれると考えるのはナンセンスだろう？奴が上で仕掛け
来る利点は、引き際を見誤らなければならない確実に撤退出来
る点だ。

第一の目標は、全員が無傷で切り抜ける事。第二の目標は、一つ
の手札を可能な限り晒させる事だ。

次で仕留められるならそうする。だが無理はしないで次に繋
げる。方
針はそれだ。

仕留められるならそうする。だが無理はしないで次に繋
げる。方
針はそれだ。
新手が来た場合についても考慮の内だ。

「良い手方の事は一つで色々事前に把握し、ここ一番の本番でそのハートを握って事ですねエミヤさん！」「タマさん、その喰えはちょっと…いやまあ、トドメの心臓を

パンする役はランサーになるだろうけどな。おい、嫌な言い方すんなよ。やり辛くなるだろうが」

「槍だから？」

「うるせぇ！」「うるせぇ！」

槍の石突きて軽く小突かれ、俺は笑いながらも謝った。

微かに空気が弛緩する。その弛みを引き締めようとせず、あくまで自然に続けた。

定石は踏む。が、それだけだったら詰まらないな。折角の賓客、

催しの一つだらしないとな？　」

それに、全員がにやりとする。俺は玉藻の前に言った。奴が存在を知らない彼女が、次の戦闘でのジョーカーだ。
寧静なる海域に風が出てきた。潮流にうねりが入り、波高く、白波が船体に打ち付けられて飛沫が舞う。渦潮も散見された。温と善まなる海が、我子に危機が迫りこれを守らんと気を立ての如きの海原の表情。嵐の予感がある。比喩ではない嵐と、自然と弛んでいた空気が引き締まり、上げられたドレインの声が、弓の一弦のように気を張り詰めさせた。報告を受けたネロが顎く。「統員、戦闘配置」と呼び掛けた。距離四千。切り立った岩肌が前方にある。そこを迂回すれば舟をつける岸壁があるだろう。向かって一時の某に船首を向けて進めば、砂浜につける事も可能だ。
「フランシス・ドレイクよ、来るとしたらそもそもあるぞ！」「そうだがね！アタシのうなじもピリピリしてるぞ！おら野郎共、気張りなア！」「ヤケクソの関の声。肝を据えた海の男は、いざとなっても及び腰にはならない。それを頼もしいとは思わない。安易な敵ではないのだ。どっしり腰を据えたからと、簡単に勝てるほど易い復讐者ではないだろう。」「デッパハハハハ｜！俺の船をたかが矢なんかで沈めよう！》黒髭エドワード・ティーチが哄笑する。「アタラソめ談々しげに剣を握った。长な歯が響く。やほり来たかとネロが忌々しさを胸に掴った。」肝を据えた海の男は、いざとならっても及び腰にはならない。それを頼もしいとは思わない。安易な敵ではないなのだ。どっしり腰を据えたからと、簡単に勝てるほど易い復讐者ではないだろう。」「ダイורンクシラン〉。「大音声を張り上げねば、声が届かないほどの風だ。ヤケクソの関の声。肝を据えた海の男は、いざとなっても及び腰にはならない。それを頼もしいとは思わない。安易な敵ではないのだ。どっしり腰を据えたからと、簡単に勝てるほど易い復讐者ではないだろう。」「デッパハハハハ｜！俺の船をたかが矢なんかで沈めよう！》黒髭エドワード・ティーチが哄笑する。「アタラソめ談々しげに剣を握った。长な歯が響く。やほり来たかとネロが忌々しさを胸に掴った。」肝を据えた海の男は、いざとならっても及び腰にはならない。それを頼もしいとは思わない。安易な敵ではないのだ。どっしり腰を据えたからと、簡単に勝てるほど易い復讐者ではないだろう。」
騎のサーヴァントがいる。その強度と火力は飛躍的に向上し、アルケイデスがサーヴァントの半身を消し飛ばす威力の矢を直撃させても、船に損傷は全くの皆無であった。
その巨躯より凶悪な戦気を立ち上らせ、海賊は吼えた。
「全砲門開いてぇ！それして、撃って撃てぇーーー！んんんw ww 一方向でぞw ww」
黒髭の旗艦より四十門の大砲が顔を出す。その威容は道具の特性で魔界の牙が如きそれへと変貌している。大砲に面していた海面が、砲撃の衝撃で大きく揺れた。
砲弾は矢の飛来した方角へ向けられていた。間断なく撃ち放たれる絨毯爆発は、一国を一時もあれば焦土に変えてしまいかねない大火力。打ち上げる水柱は天にも届き爆発は海をも引き裂く。
「ハッハハ、ハハーハッハハハハデフフフフ W W W 行げや低級霊の野郎ども！虫の息の箏野郎からお宝を根割ぎ奪って来た。
熱心な海に君臨した大悪党の支配下にあった多数の海賊で、その物量は数多の英霊が持つ道具の中でも極めて大きかった。始めカリブ海に君臨した大悪党の支配下にあった多数の海賊、その後船員に多数のサーヴァントがいたから、海という戦場に於ける最強は黒髭なのではないか。その戦慄に多大な説得力が染む。
低級霊もまた大幅な強化が加わり、その一体すらもサーヴァントの残留霊基であるシャドウ・サーヴァントに匹敵する。圧倒的量に質が加わり、もはや単騎の敵に成す術ではないかと思われたが、しかし、海賊の亡霊らは海面を疾走し、不気味な闇の声と共に矢を放って来たであろう復讐者に襲い掛かるも、その処には誰もいなかった。
戸惑ったように振り上げた剣の行き場を探す海賊の亡霊。高笑い戦狂の声と共に矢を放って来たとあらう復讐者に襲い掛かるも、その処には誰もいなかった。
「来たぜッ」

「来たぜッ」
優雅に虚空を飛び越えている、黄金の角を持ち牡鹿。巨漢は呟き、
「分かってんだよ、勘で撃った砲弾に当たるほど鈍くは無かった」
「なあっ！～」

ネメアの獅子の毛皮を剥いで加工した、神獣の裘より船を垣間
見る復讐者の眼光。『アン女王の復讐号』の上空を飛び越えるまで
の時は剎那、されど卓越した動体視力を持つ復讐者にはそれで充分。
黒髪、光の御子、鍊鉄の弓兵、二騎の騎士王、橋の少女、聖杯の
嬰児、狩人～狐～
新たな敵影を確認する。未知のサーヴァント
だが武威を感じられない。風貌とも合わさってまず戦士ではない。
能力は何か。日ノ本の英霊であれば、魔術ではなく呪術ややらを
扱うのかもしれない。それなら対魔力は役に立つまい。最高ランク
の対魔力を持つからと慢心する訳にはいかない。

ある白髪の男は何処だ？
姿が見えないが、やはり船内で休んで
ているのか。しかし黒髪の宝具である船にこれだけのサーヴァントが
乗っているのだ。であれば防備の観点から見て、その前を往く海
賊船にサーヴァントのマスターが乗っている事はあるまい。現に金
髪の女マスターは宝具の海賊船にいる。

でなければそちらを狙い海の藻屑としても敵戦力の削減は望めない。
狙う価値はないが～だからこそ狙う。

（キャスターか～）
「どっせーい！ 槍男、逝けやァー！」「見え透いてんだ、テメェのやりそうな事はー」「黒髭がその膂力を喚らせる。両手を組み、光の御子を空中に押し出した。推進力を得たクー・フーリンは、前方の『黄金の鹿号』に弓を向けた復讐者へ挑み掛かる。真紅の呪槍を以て刺突を放つが、復讐者は来るのが分かった故にあっさりと牝鹿の身を避け、大弓で槍を払う。空中ゆえに踏ん張りが利かず、本来の力を出し切れない光の御子を嘲った。

交錯は一瞬。重力に引かれ、落下して行く槍兵に最低限の意識を常に関きながら、牝鹿を海面に着地させる。再び跳躍させ、船体と常に割きながら、牝鹿を海面に着地させる。再び跳躍させ、船体と槍を払う。空中ゆえに踏ん張りが利かず、本来の力を出し切れない光の御子を嘲った。

今度は以前のようにはいかんぞ、忌々しき神の御子よ！「ばざいとーー」「ほざいてろーー」「一全砲門開けえ！藻屑と消えなー！」「アルケイデスが己に狙いを定める寸前より旋回は始まっていった。アルケイデスが己に狙いを定める寸前より旋回は始まっていった。己を睨む砲口に復讐者は憎悪に染まった瞳で暗く笑む。
迫る砲弾は、己にはまるで功を奏さない。だが牝鹿は違う。騎乗
する忌々しい聖獣を撃つ為、舌打ちしながら砲弾を矢で撃墜した。

「おいで……冗談きついや？」

「砲撃より半秒としない内に全弾を撃ち落とされたのを目撃し、さ
しのドレイクも顔を引き攪らせる。聖杯を所有するドレイクの乗る船だ。その銃撃や打撃は言うに及
ぼず、彼女の駆る船もまたサーヴァントに有用な攻撃を与える事が
可能となっていた。

「黄金の鹿号」は旋回し「アツ女王の復讐号」の後尾につく。ア
ルケイデスに接敵するや多数の剣群、矢の雨がケリュネイアの牝鹿
を襲った。錬鉄の弓兵とアルカディアの狩人だ。自身からの矢や剣が、アルケ
イデスに効果がないと見切っている故に、その足となっているケリ
ュネイアの牝鹿を狙うのは必然だった。

アルケイデスは無消耗に牝鹿の腹を腿で締め付け、牝鹿の頭を下
げさせると、海面を黄金の角で揺さ上げさせた。水柱が突き上がる
のも、そんなものが防壁にもならずに剣群と矢雨は突き抜ける。

だが——水柱が消えると、アルケイデスの姿もまた消えていた。

それならば、見上げるのも、そこにいるのは天高くある日輪を駕
御す聖獣もいない。一同が瞳を、その行方を探るも周囲にその姿は
ない。
らせる暗雲のみ。奴はどこへ？アルトリアが鋭く指した。

「後ろです！」「海の中から！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中から！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「後ろです！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」「海の中で！？」「奴め、性懲りもなく……！」
弾き飛ばされたクー・フーリンは『海面に』着地した。懸の現象にアルケイデスは目を剝く。本能的に危機を察し、離脱するべく牝鹿を走らせるも、聖獣は見えない壁に阻まれたかの如く制止された。

「貴様——空間を固定したのか……！」
「は、袋の鼠ってなぁ！」
「ルーン魔術。彼の師であるスカハの魔術奥義『死溢れる魔境への門』、その応用だ。本来は影の国へ通じる門を開き、その地へ送還するものだが、影の国に至らないクー・フーリンにはそれは再現出来ない。故に彼の国は別の部、魔力を急激に吸収する効果と、周囲空間を固定化する力を再現したのだ。だからクー・フーリンは海面に立てた。そしてその場に閉じ込めたアルケイデスの魔力を吸収し、能力を劣化させたのである。

ネロの指示が飛び、クー・フーリンは即座にその場を離脱する。

アルケイデスは咄嗟に牝鹿を送還して消したが、己へ迫る剣弾への対処は遅れてしまった。

－ ガールボルン －
－ 偽・螺旋剣 －　－ ！ －
－ アー・チャリー やれ！ －
－ キャスターのクラスのクー・フーリンに出来る－－
－クー・フーリンにも出来る－－
錬鉄の弓兵が黒弓につがった螺旋の剣を射出する。それはルーンの結界を易々と貫き、アルケイデスに着弾する。同時に投影兵器は炸裂した。壊れた幻想——無論、人の手による作である螺旋剣は神獣の裘を破壊してしまった。破壊した爆発がアルケイデスに確実なダメージを刻み込んだ。激痛よりもその屈辱に呻き、アルケイデスは結界が崩れ去るより前にそれを足場に跳躍した。

『黄金の鹿号』の船上に乗り込んだアルケイデスは、神獣の裘に覆われていなかった腕や脚を焼け爛れさせ、憎悪と共に弓を消し大剣を取り出した。デッキの隅に下がった船員をよそに、ドレイクは怯む素振りすらなく二挺の拳銃を連射した。その全ては神獣の裘に阻まれ、まるで意味がない。故に彼女から視線を外し、一足先に船の上にて待ち構えていたクー・フーリンを睨み付けて。魔大剣を構え、アルケイデスは大剣の間合いまで瞬時に踏み込むとすると、

「魔槍は使わせん」
「まだだたんまりあるよ？コイツはアタシの奢りだぁ！」
「爸妈どそこ見てんなっ」
「何――？」
「どこ見てんだいっ！」
銃撃がまるで意味を成さぬと見るやードレイクは素手で殴り掛かってきていた。

生身の、それも女が明らかに格上に白兵戦を挑んできたのに、さしものアルケイデスも面食らった。その拳を呑むに受け止めたのがアルケイデスの不覚。なまじ卓越した反射神経を持っていたのが不運。瞬時にドレイクの拳を握り潰すその瞬間は明確な隙だっただ。

呪いの朱槍をご所望みてえだな？喰らいな、『刺し穿つ』—

「グッ……！」「グッ……！」

ドレイクを捨て置きアルケイデスは全力で後退した。隔絶した戦士を前にして隙を開くと、言語で嘆きの、己の未熟にアルケイデスは黒の、魔槍の真名解放を凌ぐべく肉壁を押し付ける。

宝具『十二の栄光』より召喚せしは『クレタ島の暴れ牛』と『ディオメデス王の人喰い馬』だ。海神により凶暴化した魔獣の牛と、軍神の子が飼い慣らしていた四頭の聖獣がクー・フーリンに迫る。

呪いの朱槍をご所望みてえだな？喰らいな、『刺し穿つ』—

「飛べー」「死棘の槍—ツー！」「死棘の槍—ツー！」「アングリーンはアルケイデスに肉薄した。」

己の腹筋が爆発したような衝撃に苦悶する。光の御子の蹴撃がまともに入り、アルケイデスはドレイクの船から『アン女王の復讐号』}

「飛べー」

「魔獣を突きで屠り、四頭の聖獣の合間を掻い潜ったクー・フーリンはアルケイデスに肉薄した。」
までも吹き飛ばされる。
黒髭の旗艦のマストにぶつかり、落下した復讐者を待ち構えていたのは、楯の少女と騎士王ら。黄金と漆黒の聖剣の光が復讐者を照らしている。

「やあ！」「やあ！」「やあ！」「やあ！」「やあ！」「やあ！」「やあ！」「やあ！」「やあ！」「やあ！」「やあ！」「やあ！」「やあ！」

マシュ・キリエライトは果敢に攻める。大楯を前面に押し出した体当たり。その楯を破ることを能わぬと、復讐者は認めている。故にアルケイデスは魔大剣ではなく、片腕でその突進を受けて止め、マシュの背後より飛び出してきた黒王の剣を魔大剣で止める。

重い。片腕では止めきれない。たたらを踏んだアルケイデスへ、深紅の工芸品が如き剣は灼熱を纏っていた。アルケイデスはその剣を、この期に及んで効力もしない心眼で捉え、敢えて神獣の裘で止める。しかしその後、飛び込んできた黒髭の飛び膝蹴りを防げなかった。いや、防がなかった。

敢えて打撃を受けた事で、アルケイデスは自ら吹き飛ばされてこの死地から離脱を目論んだのだ。だが――蒼き騎士王が打撃の一つのみで打撃を受ける事で、アルケイデスは自ら吹き飛ばされてこの死地から離脱を目論んだのだ。だが――蒼き騎士王が打撃の一つのみで

黒髭の飛膝蹴りは防げなかった。
「風よ、撃て—『風ストライク・エア』王鉄槌」！

アレクシアの全身を風の魔力が打ち破る。船外に押し出されたちアレクシアは己が決して軽くない傷を負ったので自覚する。

全身を矢の弾幕に打ち据えられ、あらゆる動きが封じられた。ケリュネイアの牝鹿も召喚出来ない。下手に呼び出せば瞬間的に蜂の巣となるだろう。故にアレクシアは、そのまま沈んでいく定めだった。

「森羅万象とは遍く暴威の似姿だ」

故に、アレクシアは手札を切る。

「不意に海流がうねった。歪み果てた復讐者が、海面に落ち行

「森羅万象とは遍く暴威の似姿だ」
謳うは悍ましき暴君の弑逆、なればこそ、私は万象の力をも捩じ伏せよう！

『ヘラの栄光』と名乗られた英雄はその第五の試練にて、決して洗い落とせぬと思われていた神獣、聖獣の糞尿に塗れた家畜小屋を洗浄する為に、二つの河の流れを呼び込んと強引に洗い流したと

真紅の復讐者は自然の理を捩じ伏せその脚で海の上に立った。

組伏せられた手弱女を彷彿とさせられた。

束ねられた天と海の理、その圧倒的な魔力は大地を削り、大陸をも抉るだろう。それは軍勢など歯牙にも掛せず、城壁など防波堤も束ねられた天と海の理、その圧倒的な魔力は大地を削り、大陸をも抉るだろう。それは軍勢など歯牙にも掛せず、城壁など防波堤と

神話に曰く。
「『人アーガイズ・ヒュドールの星、震えし万象』」

人理の救済を指す男は嗤う。狙い通り、と。
思惑を乗せた船は航行を止めず、もう間もなく陸地へと辿り着くとしといった。
荒れ狂う大海を躙り、森羅万象をも耐えずと軋む真紅の腕。それを基点に、日輪を想起させる稲光が風を呑む風雨が渦を巻く。

― 彼の周りだけが不気味に凪ぎ、陸の平地を想わせる程に海は平らな足場となっている。それはあたかも大海原が単独の個に屈服したかのよう、人智を超えた光景だった。

聳え立つ螺旋の水柱が、紅蓮に脈動する復讐者の豪腕へ圧縮されていく。

それは天上へと牙を剥く水の龍、激発寸前の激流の砲門、削岩の顎。大陸をも削り割らんと鳴動する力の束は、地殻変動に三倍するエネルギーを捻出していた。
「……行きへんや。」
「…………いづち keypointsオアシスっばんでやんけ。」

…………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………

………………
ネロが鍛鉄の弓兵に指示を飛ばす。慌ただしく弓兵が船の後尾に回った。「セイバー、やってくれるか」

「ここで一番の大事な局面で士郎が待るのは、最も信を置く剣。騎士王アルトリア・ペンドラゴンである。星の内海で鍛えられた最強の聖剣を手に、壮絶な覇気を気炎として、劫々と燃える清冽な偉志が騎士の盟を諦っている。

それが告げた。「任せて。シロウの道に立ち塞がるあらゆる障害は、我が聖剣を以て打ち砕くが我が忠節。騎士の誓いは貴方と共ににある。マスター、指示を。」

具体性の欠いた、抽象的な指令に蒼き騎士王は莞爾と笑む。言葉の裏に隠された祈りと信頼に、応えられずして何が騎士王、何がサヴァント。何が愛する男の剣か。

令呪起動。「セイバー、お前の剣に、俺達の勝利の輝きを」

敗着の運命を訪れない。この剣は未来を照らす希望の光。輝け生の奔流。伝説に名高い騎士達の王は、今こそ聖剣の封を解く。

それはブリテンにて円卓を築いたアルトリアの戒め。『強すぎる十三拘束解放』円卓議決開始

……十三拘束解放　円卓議決開始
兵器は、ここぞという時しか使用してはならない。というのも、特定の条項を半数クリアする事でその拘束が解かれることだ。

アーティストの脳裡に在りし日の戒めが過ぎる、と、サークルフットが忠告した。

『心の善い者に振ってはならない』と、サー・ブルスは窘めた。

『是は生きる為の戦いであるか』と、サー・ケイは糾した。

『是は己より強大なる者との戦いであるか』と、サー・ベディィルは諌めた。

『是は人道に背かぬ戦いであるか』と、サー・ガヘリスに問われた。

『是は精霊との戦いはないうか』と、サー・ラスロットが念を押した。

『是は邪悪との戦いである事』を、モーレッドは王の在り方と共に確かめた。

『是は私欲なき戦いである』と、聖杯に選ばれしギャラッドは確かに認めた。

「心は一つ、共に。」と、ソネベリに確信がたった。
約束された——勝利の剣——アッ！

打ち出されるは二柱の水の龍。辺りの海水全てを巻き込み、膨大なエネルギーを放出する「黄金の鹿号」もまた、引き摺られるようにして空を舞う。迫る怪異の猛攻。

赤い弓兵によって投影された数々のワイヤーに連結された「黄金の鹿号」もまた、引き摺られるようにして空を舞う。迫る怪異の猛攻。

激突の瞬間、光が死に、音が絶える。剣那の拮抗は無限に等しく。

窗外に尊い黄金が煌めかせる。絶対の興奮。

果たして最强の幻影は、対界に至った暴龍の咆哮を蒸発させた。

周囲数百メートル四方もの海水と、天を覆わんとしていた暗雲を束ねた、対界の某の質量を無限に等しく。

過去に訪れた暗雲を、日輪の輝きにみたと偽りなない輝光の雨が燦々と降り注ぐ。

『人の星、震撼せし万象』

「あ、姉さんっ、お、俺らの船が翔んでますぜ！？」
「黙って、舌噛むよ！―にしても、ハハハハ！コイツはご機嫌だッ！船で空を翔ぶなんてね！」

海賊にとってこの貴き幻想の輝きよりも、自分自身の船が空に在る事の方が驚嘆に値しいる。

大穴の空いた海を埋めんと、辺りから海水が押し寄せていく。
そこの流れの激しさは渦潮を無数に生み、大海嘯の轟音は世界の終わりを如実に物語る。

宝具同士の撃ち合いは、聖剣が上回った。
そこの事実に、宝具を放った直後に跳躍していった大英雄は歓喜する。

―でこそこの世の救済者達。お前達ならばこの身を超えうる事も叶うだろう。

その称賛の念は翳れて消え、膨れ上ががる憎しみの呻き。

十二の栄光の内にある最大の模試が踏破され、純化していいく復讐者は恍惚としていた。

「見事だ。―この賛辞を送るのはこれで幾度目だ？」}

「カールデアのマスター、アインラードの光の御子……そので誉れ高き聖剣の王。どれほど讃えてもまるで足りぬ、お前達は真実、無上の英豪達だ」
「ヘ、ヘラクレス……？」

ネロが呆然と呟く。
「葉うならば本来の私として対峙したい所だったが、生憎とそうはいかん。警告しよう、人理の守護者達。なんとしても星の開拓者の船を護るがいい。さもなくば……」

遺志が途絶える。代わりに表れるのは反転存在、無双の剣を打ち捨てる卑劣外道。

「ああ、貴様らの旅路を潰えさせてやろう。」

「ッ、来るぞ！」

偉丈夫足るアルケイデスの身の丈ほどもある、長大な魔剣マルミアドワーズが現れる。それを片腕に握り、もう一方の腕が虚空を鷲掴みにした。

「空を飛ぶ船、実に蒼り甲斐がある。だが忘れてはいないな？ 地の利は未だ私にある。貴様達の人間の和で、果たしてどこまで持ちこたえられるか……見せてもらおう。」
下方の海流が突如として噴き上がる。活火山の噴火にも似た濁流がそり立った。真名解放ならざるその水柱を受けても、黒髭の「アン女王の復讐号」は健在だろう。だがしかし、聖杯の所有者フランシス・ドレイクがいるとはいえ、宝具ならざる「黄金の鹿号」が耐えるられる道理はない。なんたも護れとも大英雄は告げた。その意図は不可解で応じる理由はない。復讐者が卑劣に大英雄を模して嘯いただけの可能性もある。現実的に言って信じる道理はなかった。
こうなると分かっていな一手。間断なく防壁を削る荒潮で、自
身諸共に閉じ込められたアルケイデスは、圧倒的不利な状況であつ
ら不遜な笑みを絶やしていなかった。

寧ろ膨れ上がる暴威を漲らせ、品定めるように敵対者達を見渡
す。

身外の少女、これは否。
黒髪の巨漢、候補の一つだが道具ならばざるが一隻健在な内は対
象外。

聖剣の王、これら否。
純白の女、これも否。

和装の女、手に合わぬ故に否。
赤い弓兵、真価を発揮出不来無作ばかり、これも否。

最大の脅威である光の御子ーー
獅子の狩人、否。

にやりと嗤った復讐者が、襲い掛かる。
直上より墜落した報復の徒は、鍛治神ヘバイストレスが彼の為だけに鍛造した大剣を振り翳す。
狙われたのは士郎ではなかった。ネロの前を狙う素振りを支えなかった。真っ先に狙われる恐れのある士郎やネロ、二騎のキャスターと黑髭は一塊になっていた。
彼らを護るは聖なる楯と蒼き騎士王、光の御子、黒王に鍛鉄の弓兵である。
数多の英雄が集ったアルゴノウツに在りて、尚く殺気に総毛立ち。数多の英雄が集ったアルゴノウツに在りて、尚も圧倒的だった大英雄が己を殺さんと迫るのは悪夢だった。
アタランテは瞬時に飛び退き彼の斬撃を避す。だがそれで怯懦に縛られ、その駿足を翼させる程度の狩人ではない。
アルケイデスの豪剣がアン女王の復讐号の甲板を抉る。彼の腕には戦神の軍帯が巻かれ、その神気が豊でさえ強力な剣撃を災害のそれへと高めていた。
敵下、「アキレス」は、魔剣の光「アリダ」との差異をもって、敵を巧みに引き込もうとする。 軍旗としての「アリダ」の技は、剣の真ん中に残る重板を突き破ることで、敵を攻撃する。「アリダ」の技は、剣の真ん中を突くものである。 "アリダ"を突破するためには、剣を真ん中まで突く必要がある。 "アリダ"を突破するためには、剣を真ん中まで突く必要がある。
那、戦神の軍帯より魔大剣を握る腕に神気が渡る。
振抜いた魔大剣はオルタをも弾き飛ばした。自身渾身の魔力放
出を乗せ、黒き聖剣を柱のようになじらせ、魔力の束を叩きつける
とした瞬間の事である。自らの一撃を優に越え見せた反撃にオル
タは面食らうも、

腕に突き刺さっている穂先より呪詛が弾ける。千の棘が炸裂し、
アルケイデスの左腕が内側から爆発した。鮮血に血と骨が混ざり、
光の御子が魔槍を引く。だがアルケイデスは欠片も怯まない。オル
タを弾き飛ばした瞬間から構えを取り、正面のク－・フ－リ－ンが己
の左腕を破壊したのと同時に呟いていた。

射殺す百頭、と。
間抜け。

「今のを避けるか……」

そこは自身へ向けた嘆きである。アルケイデスは見るも無惨な左
腕の有り様を一瞥した。するとグジュ、と肉が迫り上がり、沸騰す

不意に揚った八連撃。一つの斬撃が九つ、ほぼ同時に放たれる。
不利な間合いから間髪を入れずに離脱する仕切り直し。アルケイ
デスの要義は空振り、槍の間合いの外へ軽やかに着地したク－・フ
－リ－ンは油断も慢心もなく静かに敵を見据える。

「―間抜け」
「これ、よく考えよ。
再生成した左腕の動作を確認する。
復讐者に、クー・フールンは怪訝そうにした。
「解せねぇな」
「何がだ、光の御子」
「テメェ、その力は誰に恵んとった？
英霊の業にしやがれ、そいっは過ぎたもんだ。
宝具による再生でも、呪術の治癒でも、
もしかてや自前のスキルによるものであい。
いるはずだ、テメェをなんならの外法でバッタクアッブする輩が。
ソイツは何者だ？」
「…」
クー・フールンの詰問に、アルケイデスは心底不思議そうに静止した。
敵にそれを明かすとでも？
そう返すのが道理であろう。
かしかりか戦って、敵首魁への憤りを湧かせた。
「貴様の剣には決して『自我』が欠けている。
道理でその剣に重みを感じじぇ訳だ」

本來のアルケイデス、あるいはヘラクレスなる、
今この射殺す百
頭を無傷で穏やかに切れはしなかっただろう。

その目はク・フーリンに向かわれているが、油断なく周囲のサーヴァントも視界に入り、結界を背にして死角を潰してい

遺念、決意、なんでもいいが、己の行いに懸ける意気込み

くだらぬ。そんな精神論が、物質にどう作用するという

自分でも分かっても、詫ぐんじゃねえよ。己が渋い熱がな

い、さしきめ貴様は操り人形ってとこか。誰に聞いてどいて貴様の有り様をこう評するだろうぜ——無様極まるってな。己の名と矜持を

それは英雄が英雄の反転存在に向かった、唯一の同情だった。

アルケイデスは剣先を一瞬下ろす。しかしすぐに剣を持ち上げ、

心底から可笑しそうに嗤った。
振るった剣に、重みなど宿るはずもないだろう。

一気ついてやったか。

当然だ。私の復讐は私のものでしかない。何者であろうとこれでも、僕が望むように寸鍔を交える事など出来ん。指導性の歪んだモノで、私を操ろうなどとは侮られたものだが……なんてあっても、お前達が私の敵である事実に変わりはあるまい。ならば討ち果たさしてどうする。敵として相見えた以上は、どちらかが果てるまで戦うのは必然だろう。

そうかよ。ヘラクレスなんてどうだっていいが──アルケイデスと名乗った戦士に対する、せめてもの手向けだ。その心臓、このオレが買い受ける……！

魔槍の穂先を下に向けた独特な構え。辺りのマナを吸い上げ、禍々しい呪詛を放つ魔槍。担うのはケルト最強の英雄。対するのはギリシャ最強の英雄の暗黒面。アルケイデスもまたゆっくりと魔大剣を構える。魔槍の呪いを封じるには、そもそも魔槍を放たせないか、その一撃を相殺・破壊するだけの一撃が求められる。因果に類する道具など、アルケイデスは持っていない。故に相殺は不可能。魔槍の呪詛を、その一刺ごと叩き潰す破壊力が必要だった。

因縁をますます増していく。場に敷き詰められた殺気が陽炎のように空を歪ませた。

徐々に臨界にまで高まる中、不意に腹を押さえたアタランテが訊ねた。

「待て、ランサー…………！」
「ああ？なんだ、獅子の姉ちゃん～」
その男に訊かねばならん事がある。アルテミス様がこの特異点について、いったい？どういう事だ、それは！～神霊の単独で観現可能な時代ではない。人理が焼却されていると
神霊が単独で観現可能な時代ではない。人理が焼却されていると
来たとしてもその霊基は英霊の規模にまで下がってしない。まるで異常点に
いたり、と笑む。それはカルデアとの戦いでは見られなかった、
彼自身の熱。壮絶な邪悪の発露である。アタランテの問いに～アルケイデス
は、悪意を噴出させた。
「教えてやろう。奴はアルテミスとして現界したのではない。人理
焼却へのカウンターとして召喚された、マスターのいないサーヴァ
ント・オリオンの霊基で現界していた～
〜な、何…？」
〜無論そうである以上は英霊オリオンの力しか発揮できない。オリオ
ンが召喚される際、その召喚に乗っかる形で付いてきたのだろう。
彼自身の熱。壮絶な邪悪の発露である。アタランテは鳥肌が立った。
酷い悪寒に襲われたのだが、「教えてもやる。奴はアルテミスとして現界したのではない。人理
焼却へのカウンターとして召喚された、マスターのいないサーヴァ
ント・オリオンの霊基で現界していた～
〜な、何…？」
〜無論そうである以上は英霊オリオンの力しか発揮できない。オリオ
ンが召喚される際、その召喚に乗っかる形で付いてきたのだろう。
彼自身の熱。壮絶な邪悪の発露である。アタランテは鳥肌が立った。
教師やる。奴はアルテミスとして現界したのではない。人理
焼却へのカウンターとして召喚された、マスターのいないサーヴァ
ント・オリオンの霊基で現界していた～
〜な、何…？」
だが気にする事はない。アルテミスは既に殺している。この私が

「まず脚を折ったいや腕だったか？どちらでもいいな。とも

あれ、笑えたぞ。身動きの出来なくなった、芋虫同然の姿にしてや

っても気丈に睨み付けてきたが、お前の貌を潰し、それをオリオ

に見せつけてやると言うと、フッッ、奴め必死に逃げようとし

た。その貌を蹴り抜き、殴り抜き、鼻を抜き歯を全て叩き折り、一

つの目玉を潰して髪を切り落とした。そしてそれをぬいぐるみに見

せたさ、するとなによいたいよ。あの人間の女のように泣い

たのだ、女神が。まさに、甘露のようにだったぞ。

「きっさ、まぁ……」

そしてアルカディアの狩人もいた。アルカディアの前ではなく、カ

ウンターとしてのお前が。アレも今の前と同じ顔をしたぞ。そし

て、私がどうしたか分かるか？確か……お前にはアルテミスへの

誓いがあったはずだ。

「——アルケイデスううっっぷっ！」

アタランテは常の冷静な、冷徹な狩人としての自制を全て焼き切

られた疾走する。皆で感じた事のない憎悪に魂魄が焼かれるようだ

った。

彼女の中に、ヘラクレスとアルケイデスを結ぶ等号が完全に消え

たから——彼女の畏れる英雄と、この鬼畜外道が完全な別物である

事が確信出来たのだ。それは挙い難い畏怖を消し去り、同時にアタ
ランテに我を忘れさせた。
舌打ちしたのはクー・フーリンである。魔槍の間合いに、アルケイデスは巧みにアタランテの術を模として立ち位置をを変えクー・フーリンの正面に決して入らない。
何をしておるアタランテ！そんなもののはただの挑発に過ぎぬのだぞ！？ディアーナ（アルテミス）が本当に居たという証拠はなに、そなたがいたという証明も出来ん、根も葉もない戯言である！
極めて真っ当且つ現実的な物の見方だ。だがアタランテの耳には届いていなかった。何故なら確信していなかっただけだ。奴は本当にアルテミスを殺していると。別の自分がどうされたかどうでもよい。自身の信仰した神を殺される。これ以上の冒涜と侮辱があるだろうか。
鍛鉄の弓兵が舌打ちし、ネロを見ろ。ネロは唇を噛み締めた。仕方がないが、貴様はアタランテに構うな、と断腸の思いで告げる。「令呪よ、痛ましき余の臣を縛れ。アタランテよ冷静になるのだ！」「クー・フーリンと、アルトリア・オルタだけが攻撃に出てくる。
その二騎以外は要となる複数のサーヴァント、マスターの守備についていたのが、冷静さを欠いたアタランテが割り込んだ為に詰め切れず、それだけではない。クー・フーリンとオルタはアタランテが自身の眼前に来る上に、アルケイデスに操作されていた。視線や足捌きなどを含めた立ち回りによって、突如冷静さを取り戻したアタランテは、ざっくりと身を強張らせ、 몰 mataに面で、まるで意味がない。ぴくりともさされない。アルケイデスは魔大剣をアタランテの心臓よりややずらして突き刺し致命傷を与える。死をさせるほどではない。

クー・フーリンに対する構えが、光の御子は盛大に舌打ちし、なんとかオルタもまた、神気を纏ったマルミアドワーズの-scalableなが、華やかさでアルケイデスを攻撃できない。

「があっ！？」

「貴様っ！」

アタランテのあのあらゆる攻撃を無効化する。動きが止まったのは一瞬だった、アルケイデスにはそれで充分であり。

アルケイデスの握る、細いアタランテの首を握掴みにする。どんぶ、と血を吐いたアタランテを構えるアルケイデスが突進する。
アルトレアが聖剣を構え、余りにも非道なやり口に義憤を駆られた。クー・フーリンがやむを得ない判断として、アタランテを投げつけた。光の御子は咄嗟に抱き止めることをせず、横へ飛び回りしたものの、そのクー・フーリンに、アルケイデスは驚愕した。青銅の矢が変化したそれは、矢避けの加護を持つクー・フーリンをして手間取らせた。だかそれを破壊するのは、五秒と掛かるまい。ほんの一時の時間稼ぎで十分で〜〜そしてそれは、風の砲弾を今に放たんとする蒼い騎士王にも言えた事だ。

「破り来る九連撃！己を木端微塵に変える死の乱舞に、アルトレア追来る九連撃。己を木端微塵に変える死の乱舞に、アルトレアは欠片も動まず迎撃した。全身に風を纏い、黄金に煌めく聖剣を叩きつけたのだ。真名解放に準じる極撃は、辛うじてアルケイデスの奧義を相殺する。〜〜だがそれだけだ。腕が痺れ、足が止まった。その眼前を悠々と駆け抜けるアヴァンジェラを止める事が出来ない。

腕が痺れ、足が止まった。その眼前を悠々と駆け抜けるアヴァンジェラを止める事が出来ない。黒髭と聖杯の嬰児、和装の女は士郎を守るようにして立っていた。
守りたいとも。海賊も聖杯も、和装の女もカルデアのマスターも、余さず標的に過ぎない。彼らに死ぬだろう、魔大剣に充填された魔力が解放され、彼の奥義と掛け合わせられたそれは、真名解放された聖剣の一撃を相殺して分けたのだから。

「先輩っ！」
「はーい♪ 良妻ですものの、節約節約♪」「―タマさん」

「―いう」
「―い」
「な―」

― アルケイデスは驚愕する。男が威風堂々と立っていた。

「な―」
「―」

男はさす標的に過ぎない。
アルケイデスは士郎が快癒していると知らないのだ。故にこそ、本当に呪いに蝕まれていたなら、それがヒュドロ毒による後遺症と判断してしまう。

実際に玉藻の前に己を呪わせる事で、アルケイデスの戦力とアルケイデスの能力、戦法を計算して分析すると、アルケイデスなら必ず守護対象を狙えると断じた。

アタランテの行動こそ計算外だったが、それでも修正できる。霊基さえ残っていたら、消滅さえしていなければ、アイリスフィールが治せるのだ。

「停フリーズアウト止解凍。熾ロー・アイアス天覆う七つの円環合わせろ、アーチャー！」「ふん！付いて出来るか？」「御託はいい。メネの方こそ付いて来やがれ！」

果たして敢えて間合いを外していた錬鉄の騎士は、アルケイデスの背後を襲う伏兵と化した。

アーチャーと士郎によるアイアスの楯の投影、十四枚ものそれが自身らではなく、アルケイデスの周囲に展開される。塵壁の守りが牢獄となったのだ。アルケイデスは戦慄する——マズイ。離脱を
「ええ、決着をつけましょう。」
「呪いの朱槍をご所望かい？」
「泣け、地に墜ちる時だ。」
「呪いの朱槍をご所望かい？」
「応じるはアーチャー、オルタ、クールリンである。慄然とするアーサイデスが宙に浮く。アイアスの楯を展開しているアーチャーと士郎が行った、三騎の宝具の指向性を上方へ向けられるようにする為の操作だった。'

「令呪よ。」
「令呪よ。」
「全令呪起動——宝具を解放し、敵を討て。」
「ネロの二画目の令呪が、黒き騎士王へ注がれる。'

だが、令呪のバックアップを受けた彼らの方が早い。
約束された勝利の剣！

「約束された勝利の剣！」

「約束された勝利の剣！」

「抉げい・ボルクを穿つ―！」

第一波は黄金の究極斬撃。先の対戦に匹敵する火力を相殺したほどものではないか、必殺するのに不足はない。星の聖剣は無理な体勢で放たれた、魔大剣を用いての「射殺す百頭」を呑み込み、

魔大剣に亀裂を刻んで ard
続く第二波は漆黒の究極斬撃。神気を暴発させた戦神の軍帯により「壊れた幻想」と、咄嗟に召喚したケリュネイアの牝鹿を楯にして凌ぐも余波で全身が焼け燃え―！

トドメとばかりに迫った魔槍は、魔大剣の真名を解放した上でのgcd、びてえ野郎だ、あれだけやってまだ生きてやがる……！

右腕は断ち切られ、全身は見えるも無惨な姿となっている。もはや生きているのが不思議なほどの重態だ。クーア・ファーリンが張り、玉藻の前が強化した防壁は、三連した宝具の聞き合いによって崩壊していたのだ。追撃せんとアルトリアとオルタが駆けるのを、アルケイデスは裂帛の咆哮を放って阻止する。

・約束された勝利の剣！

水を操る第五試練の理は尽きる寸前。それぞれ彼を支える膨大極大
魔力が不可能を可能とした。水柱が上がった。それがアルケイデスを呑み込んだのだ。あっとい間に死地より逃れていくアルケイデスは、己を下しのがサーヴァントではなく、そのマスターである事を認識していた。敗北した。言い訳の余地なく、完膚なきまでに負けた。自分がただの人間に敗れた。アルケイデスは、武人としての血が騒ぐのを抑えながら、去り際に士郎を見据える。
言い訳の余地なく、完膚なきまでに負けた。自分の末路は英雄だ。貴様の末路は英雄だ。
幕間「仕掛けは大詰め」

『仕掛けは大詰め』

策は嵌まった。面白いほど完璧に。

士郎は空翔ぶ海賊船から離脱したアルケイデスの行き先を、目視可能の限界域まで見届けると、固い息を吐いて戦闘態勢を解除する。

黒髭がぷるぷると震え、口を突き出し、汗を吹き出して気色悪い表情になった。あ、もうマダ無理、墜落しよ……と呟くや、「アン女の王の復讐号」は穏やかに取り戻し、海に軟着した。星の開拓者の「黄金の鹿号」が連結されていた故か最後の力を振り絞って、極めて軟らかい墜落である。黒髭の旗艦が消える。一先ず最優先にすべきは霊核に致命的な損傷を受けたアタランテの治療である。アルケイデスは敢えて彼女を即死させず、致命傷を与えるだけに留めていたのだ。それはアタランテの維持は困難だと途切れない、宝具の維持は相当に無理があったらしい。黒髭がの激戦の舞台を維持するのは相当に無理があったらしい。
アタランテはアイリスフィールが宝具を使おうとする、それを止めて治癒を拒んだ。驚いのような目を見開く一同、彼女は訝々とした語調で謝罪する。

「さっこの足並みを乱してしまった。だが、次あの男を見た時は冷静でいるのが本当はない。私は一人この戦いでは無用の存在だ」と言っているなら、それまでに頭を冷やしておく。

一気に病む事はないぞ。麗しのアタランテ。貴様が役に立たぬ訳が無いのだから。

そうだ。確かにお前はヘラクレス野郎とは相性が悪い。だが他に敵が存在する可能性が濃厚なので変わりはないぞ。それなら力を振りつけてくればいい。失点は取り返せる範囲だ。--マスター、エミヤ…そう言ってくれるのは、素直に嬉しい。しかし私は私の、狩人にあるまじき失態を救せない。戦場が船の上、狭い孤島ばかりでは…やはり十全に働く事は難しい。それなら私に割いてている魔力リソースを、他に回した方が、ずっといい。…

ふ、話し中間によく時間切れた。すまない。別の戦いでは、ちゃんと話している間に時間切れた。
と役に立って——

そのまま言ってしまって、アタランテは消滅した。

カルデアに霊基を登録されている故に、再召喚に応じてくれたなら再び会える。だが、だからと言って簡単に呑み込めるものではないかった。特にネロにとっては、難しい顔をするネロに、士郎は重苦しく言った。

「切り替えろ、なんで簡単には言わない。だがアタランテに責任の念を懐かせたまま、俺達が負ける訳にはいかないだろう。人理修復はまだ途上だ。また次にでもアタランテに力を借りよう。それに分かっておる。分かってはいるのだ。しかし、今少し上手く余の気持ちを伝えられているならばアタランテは残してくれたのではないか？そう思うとな……」

何引き挙ってんのww 今は消えた奴の事よりこれからの事だにと拙者は思うでございますww

「くっ——黒髭っ！～」

ぶっちょっとあの女の言う通りだ。役に立たねえよ森の狩人は。海の一撃のように混ぜっ返す黒髭に、ネロは目を剥いて怒りを露にした。だが黒髭は堪えた素振りもなしに平然と続ける。

「ぶっちょっとあの女の言う通りだ。役に立たねえよ森の狩人は。海の一撃のように混ぜっ返す黒髭に、ネロは目を剥いて怒りを露にした。だが黒髭は堪えた素振りもなしに平然と続ける。

にっこり笑っている黒髭、父に恋をしてる母の黒髭。彼女を守るために約束を持たないで何もしない黒髭。だから消えてろーっとなのか拙者の忌憚のない意見ですデュフww
黒。髭…！
ジョセ、ネロ！
ジョセ、ネロ！
この男はアタランテを侮辱したのだぞ！
黙っていろ。
巨漢の海賊に鉄て掛かろうとするネロの前で腕を伸ばし、士郎を横に振る。それにネロは顔を赤くして反駁した。しかし、士郎は首を横に振る。それらの前で腕を伸ばし、士郎に互に言葉を交わすと、ネロは顔を赤くして反駁した。
しかし、士郎は止めてくれるか！？
巨漢の海賊に鉄て掛かろうとするネロの前で腕を伸ばし、士郎を横に振る。それにネロは顔を赤くして反駁した。しかし、士郎は首を横に振る。それらの前で腕を伸ばし、士郎に互に言葉を交わすと、ネロは顔を赤くして反駁した。
しかし、士郎は止めてくれるか！？
巨漢の海賊に鉄て掛かろうとするネロの前で腕を伸ばし、士郎を横に振る。それにネロは顔を赤くして反駁した。しかし、士郎は首を横に振る。それらの前で腕を伸ばし、士郎に互に言葉を交わすと、ネロは顔を赤くして反駁した。
しかし、士郎は止めてくれるか！？
巨漢の海賊に鉄て掛かろうとするネロの前で腕を伸ばし、士郎を横に振る。それにネロは顔を赤くして反駁した。しかし、士郎は首を横に振る。それらの前で腕を伸ばし、士郎に互に言葉を交わすと、ネロは顔を赤くして反駁した。
しかし、士郎は止めてくれるか！？
巨漢の海賊に鉄て掛かろうとするネロの前で腕を伸ばし、士郎を横に振る。それにネロは顔を赤くして反駁した。しかし、士郎は首を横に振る。それらの前で腕を伸ばし、士郎に互に言葉を交わすと、ネロは顔を赤くして反駁した。
しかし、士郎は止めてくれるか！？
「その功業に纏わるものだ。異なる見解はないな？」「はい、先輩。ですが彼はそれ以外にも道具があるようですね。そうだ。君の使っていた大剣がそれだ。君はエクスカリバー。omit」「/repository/translated.txt'
第一試練、ネメアの谷の獅子。これの産物であろう裘にはかなりの損傷を与えたが、まだ失われたわけではない。
第二試練、ヒュドラ退治。一度目の交戦の際に奇襲に用いられただけでも、まだ備蓄はあると思われる。油断は禁忌だ。もし食らえばその戦闘で復帰するのは難しい。アイリスフィールの宝具、玉藻の前で使用する際を与えようとはしないだろう。
第三試練、カリュネアの牝鹿の捕獲。神獣であるカリュネアの牝鹿は、オルタの聖剣で消し飛んだ。
第四試練、エリュマンツの猪。これはクー・フーリンの魔槍で屠っている。
第五試練、アウゲイアス王の家畜小屋の掃除。これは水の理を支配する形で具現化していたが、その殆どが消耗させたはずである。
第六試練、シュムバリデスの鳥。ヘラクレスはこれを追い散らすのに鳴子を使用したのだが、どうしたか青銅の矢が変化する形で現れる形で具現化している。或いは鳴子の方もあるかもしれない。これも油断は禁忌。
第七試練、クレタ島の暴れ牛。クー・フーリンに以下同文。
第八試練、ディオメデス王の人食い馬。クー・フーリン以下同文。
第九試練、ヒッポリュテ女王の犠牲。オルタの聖剣を相殺する為に、カリュネアの牝鹿もろとも使い潰された。
第十試練、シミュオンの飼い牛。クー・フーリン以下同文。
第十一試練、黄金の林檎。以下略。
第十二試練、地獄の番犬。以下略。
クー・フーリン、殺り過ぎである。
戦は咳払いをして続けた。

「逸話から分かる通り、奴の移動手段は最短存在しない。第五試練のものを使えば単独でも動ける可能性はあるが、奴はもうそれを使わないだろう。」
士郎は咳払いをして続けた。

士郎は咳払いをして続けた。

決戦。その響きに、マシュとアイリスフィールは固い唾を呑み込んだ。
戦いは今ある情報を繰めつぶげた。

魔神柱。ソロモン王の七十二の使い魔の名を騙るモノ。今、カルデアでロマニが取り掛かっている重大な任務は、特異点Fで仕留めたレフ・ライノールの遺骸の解析だ。それを果たせば分かるものが分るだろう。だがソロモン王のデミ・サーヴァントであるロマニをして、解析には手こずっているらしい。簡単には分からず、今は宛にできない。
ヘラクレスの野郎の戦力は大幅に落ちたのは間違いない。役割を決めよう。ランサー。
「お前は奴を仕留めろ。一対一だ。
了解。手早く片付けて他の連中の援護に回ってくれんだろ？」
「応」
「お前は奴を仕留めろ。一対一だ」
「応」
「了解。手早く片付けて他の連中の援護に回れてんだろ？」
「あいよ」
「軽く応じるクー・フーリンは、あくまで自然体だ。気負った様子もなく、戦場を支配した王の如き不敵な威風がある。彼に任せれば不覚はないと言じられた。
アクトリア、オルタ。お前達は敵にヘクトールがいた場合これを抑える。アクトリアもそうだがヘクトールも九大英霊の一角。防戦の巧みは伝説に刻まれるほどだ。二人掛かりでも決めきれないかかもしれないが、最悪抑えるだけでいい。
～～ランサーには打倒しろと言うのに、私には足留めですか～～
いいでしょう、挑戦と受け取りました。最速で打ち倒して御覧に入れる。もしランサーが奴を倒すよりも先だったなら、バーガーを山のように作って頂く。
一は、怖いか。だが頼もしい。是非俺の予想を超えてくれ。
安心感では骑士王達もクー・フーリンに負けていない。それぞれが同一人物とはいえ、一騎だけでも聖杯戦争で主役を張り、勝利を掴み得る骑士である。ならば懸念事などあるものか。
士郎は、全幅の信頼を置く三人を見渡し、それは黒髭とドレイクを見た。

「エドワード。ドレイク。この特異点は、海が主なフィールドだ。敵の召喚は、もう一人のアタランテの存在……そしてヘラクレス。野郎を召喚出来る縁を持つと来れば、連想は簡単だろう。アルゴノートのアイソンが敵を避けない。神代最高の知名度を持つ船乗りが敵になるとして、お前とドレイクは立派なメインを張ることになる。その時は頼むぞ。正面から打ち砕けるのはお前だけだ。」

「デュフィ、神話の船乗りなら、古すぎて朝御飯前ですww」

「しっかりと沈めてお宝奪っちゃいますぞww」

「いいねえ……エミを持っていったっけ？ アンタ人乗せるのが上手じゃないのさ。アタシとした事が滾って来まったよ……！？」

苦笑して士郎はドレイクの熱視線を受け止める。たじろぎもしないたい不動の姿は、海賊からしても好感を持てるものらしかった。

「さて。残りだが、マシュ以外は全員ネロの指揮に従っていく。ああいう手合いには、最大限の警戒を重ねる主義だ。」

俺はランサーのパックアップだ。信頼してもらわなくせないが。
一回目の交戦はよい。だが先刻の戦いでは、仕留めされると思ったのだ。策が完全に嵌まり、二振りの聖剣と、魔槍が放たれたのである。当初は手札を削る、明かし切るのが目的だったが、それ以上は出来たはずで。あそこから逃がす羽目になった時点で、士郎はアルケイデスは絶対確実に倒されなければならないと確信したのだ。野放しには出来ない——そんな危険性がある。士郎の言に一同は頷いた。そして、ふと。「うちの小島に行っって、飯にしよう。腹が減っては戦は出来ない、っ——」
アルケイデスは己の状態を確認するも、暗澹たる有り様である。

宝具『十二の栄光』は破綻した。第五試練の水の理を操る力も、死地よりの離脱を経て全ての力を出し切ってしまった。残されたのはネメアの獅子の裘と、ヒュドラの毒だけだ。これで単身で挑むのは自殺行為でしかない。牝鹿という脚もなくなった。

聖杯はアルケイデスの肉体は癒すが、その宝具までは回復出来なかった。これ以上は流石に、仲間が必要である。

残されたのはネメアの獅子の裘と、ヒュドラの毒だ。これで単身で挑むのは自殺行為でしかない。牝鹿という脚もなくなった。

聖杯のアーサムは霊体化して海の上を彷徨う。亡霊のようになる。そうしてアルゴー号へ帰還したアルケイデスは、仲間達と共に決戦に赴くべきだと考える。問題は、あの偏屈な男をどう説得し、イアソンを動かすかだが、両に構えた金髪の優男が嗤う。おいおいどうした最強、と。それでも■■■■■か、と。アルケイデスも苦笑して己の様を笑った。

ああ、ここまでしてやられて黙ってしまわれるものか。反撃ということ

「ようやく帰ったか、イアソン。待ちくたびれたぞ。」

後は『契約の箱』を手に入れるだけなのだから一一
「ランサー！火をくれ！」「あ？ お？おう…」
「火を熾せてやれ！俺は何者に有無を言わせぬ重圧を放ちつつ、投影したフライパンや包丁やらを使って料理を始めよう。お約束のやり取りです。まるで満足感を二人ごそ付いて来たかげれー！アーチャーと俺は無敗の料理王へと登極する。玉藻の前とクー・フーリンだ。」

「きゅん♥ ってなってしまいそうなガチ・モードっ。ごくり、勉強鉄火のＩＫＵＳＡＢＡへ。」

何処とも知れぬ小島である。とてもではないが第二特異点の時のように狩りを行い、豪快な野戦料理を行うのは無理があった。元より野営は避けられないので人理修復の旅。ならば最高の調理器具と食材を携帯するのには必須的心意気…！

俺は何者にも有無を言わせぬ重圧を放ちつつ、投影したフライパンや包丁やらを使って料理を始めよう。その際にアーチャーに俺のこそ付いて来やがれー！お約束のやり取りで妙な満足感を二人にして得つつ、アーチャーと俺は無敗の料理王へと登極する。補助は…
「玉藻の前の声は聞こえない。俺はまず、海水を濾過させて用意した真水を沸騰させ、玉藻の前に冷やしてもらう。その真水でじゃがいもを洗い、皮をつけたまま親指の先ほどのサイズに切りして鍋に入れ、鍋を火のルームの上に置いて中火にしてもらう。こうして粉吹き芋を作ると、気を付けてねばならないのは決して焦がさないように。火加減、茹で時間、全てが計算尽くでなければならない。」

「それでもソーセージ野郎とベーコンさんを、適度な大きさにスライス。これまた中火で温めたフライパンにオリーブオイルとニンニクを入れ、鍋を火のルームの上に置いて中火にしてもらう。その真水でじゃが粉吹き芋を作ると、気を付けてねばならないのは決して焦がさないように。火加減、茹で時間、全てが計算尽くでなければならない。」
に焼いて、ネギ塩のレモンソースを掛けた奴を、ヤるっ！

じゃーマンポテトを作りながら、平行して用意していた別のフライパンや、の調理器具。温めておいたそれに皮を下にして鶏肉を焼く。カリカリに焼けたら反対も

人数を焼いている途中にも手は止めない。ネギを比喩的な意味の音速で微塵切りにし、ボウルに胡麻油と塩コショウをぶちこんでから混ぜ、これを更に別

のあったかフライパンに投下。火加減は徹底して中火、ネギ塩のタレを適度に炒めレモン汁を投入。これが煮詰まればタレは完成し一

ピッタリ鶏肉が焼き上がる。

皿を投影。消せば洗う必要ない代物だ。投影は実際かなり便利である。

カリカリに焼いた鶏肉をカットして、その上にタレをかけ、ス

ライスしておいたフォンとナイフ、テーブルと椅子。そのテーブル

の上に並べていく。アルティアがどこかと生唾を呑んだ。

アルティアの繊細な舌。オルタの好む雑味、ドライクの時代では

王家すら無理な豪華料理。皆満足俺満足。トドメはこれら。ドイツ

本場仕込みのジャーマンポテトと言えばギンギンに冷えたビールが

無ければ画竜点睛に欠くというもの。なおドイツのビールは冷たく

ないので日本基準のビールだ。

これがあれば荒くれ者海賊一発昇天俺成仏。酒！

飲まずには

いられない！ただし未成年者のマッシュはお預けである。是非

もしオレンジのジュースで勘弁してくれ。

- -
俺なり変った。

ビールに肉に米にパン。野菜もしっかり入ってるニクい心意気。

漫長テーブルに就いた皆々は、既に我慢の限界に達しようとしていた

「それでは各々のやり方で、『いただきます』へ。

也達も食おうぜと、お互いの味を水滅下で比べる。
マシ・フーリンの傍に寄り、空になったジョッキでピールを注ぎ足す。

「お？わらいない」
「構わんさ。いつもの大戦果、少しでも報いないとな」
「ボレのじゃねえが、いい女のウマイ飯、極楽の酒に頼れる仲間、んで最高の戦場に最高のマスターがいんだ。オレは充分報われてるし満足してるぜ。オレにちょっと最高にホワイトな職場だ」

「ホワイトの定義が乱れたぞ今。ああランサー、それなら人理修復の戦いが終わったら、受刑して俺と来ないか？死徒殲滅に力を貸してくれ。化け物退治はお手のものだろ？」

仕事が終わった後の福利厚生までついてやがんのか。いいね、オレでいいなら付き合うぜ。

渾身のガッツポーズ。死徒殲滅編完！

神話の戦いを間近で感じ、命の危機に瀕した後の飯だ。そしてここの時代では旨すぎる酒と飯、ご機嫌である。黒髭は「黄金の鹿号」のクルーやまで混ざってピールのジョッキ手に、豪快に大笑いしてのクルーやから離れ、ガツガツと飯を食べていく荒くれども期待ください！

もう勝ったな飯食ってくる。ガッツポーズをした俺に苦笑いする

肼と肩を組んで海の歌などを下手くそに歌っている。

だが聞いてていると陽気な気分にいると、ネロが釣られて歌い出すそう
とるのを、俺は瞬時に止めた。飲酒の後の歌は美声を損なうぞ！
久し振りに純度百パーセントの嘘を言ってしまった。が、後悔はないう。俺は犠牲になるのだ。犠牲の犠牲にな……。
さっておきアルトリヤやオルタも、マシュも皆美味しそうに食ってくれて嬉しいものだ。アイリスフィールはお上品に食べながら、微笑まして皆を見守っている。うん、流石は義母殿。母性が違いない。さておきアビルトリやリリも、マシュはお上品にして食べながら、微笑まして皆を見守っている。うん、流石は義母殿。母性が違いない。

「……ん？今変なのいなかったか？　
あ、アビーシャグが沢山いる！　酔いが回ったのかな？　
和服の方が、けしからん格好の白い彼女も！　
華やかな黄金の髪の乙女も！　
皆素敵だ！」　
うっとりとながら口説き回る緑髪の野郎。
とおりあえず取り押さえさせるかと誰かが指示を出そうとして一一
不意に玉藻の前が問い掛けた。

「あの(Route)……つかぬ事を伺い聞きますが、貴方はどちらさまですか……。あ、そうですか……。君は、白いアビーシャグに青と黒と白のアビーシャグ、ええと……。君が白いアビーシャグ、何人説ききりましたか？今？」
そして楯のアビシャグだけど…？
「…うふ。うふ…！」
勧弁ならねえっ！この私の中で平然とハーレムを作らんとするそのふてぶてしさ！大・天・罰を下さざるを得ぬ間違いない！
「あ、アビシャグ…？どうしたんだい？」
「問答無用！まずは金的っ！次も金的っ！懺悔しやがれ、コノトルドメの金的だーーー！
レがトドメの金的だーーー！
怒りを解き放った玉藻の前が躍動する。キレッキレなモーションで素早く回避の隙を与えないと蹴りを放ったのである。ダビデと名乗った青年に、うごおと屠殺される豚のような悲鳴が上がった。瞬間、俺はぶわと脂汗を吹き出す。緑髪の人ーーー！死ぬな、死なないでくれーーー！
もし反応できない。そんな男達の魂の声援を受けても、ダビデは股間を押えて蹴り、何か反応できない。そんな彼を尻目に玉藻の前は可愛らしく跳ね上がって喜んでいた。
「よし一夫多妻去勢撃、完成です！ハーレム展開なんて、神が許してこの私が許しません！」
「…うふ。うふ…！」
代わりに玉藻の前の声だけがする。瞬間、世界から音が消えた。正確には玉藻の前の周囲以外の音で素早く回避の隙を与えないと蹴りを放ったのである。ダビデと名乗った青年に、うごおと屠殺される豚のような悲鳴が上がった。瞬間、俺はぶわと脂汗を吹き出す。緑髪の人ーーー！死ぬな、死なないでくれーーー！
もし反応できない。そんな男達の魂の声援を受けても、ダビデは股間を押えて蹴り、何か反応できない。そんな彼を尻目に玉藻の前は可愛らしく跳ね上がって喜んでいた。
「よし一夫多妻去勢撃、完成です！ハーレム展開なんて、神が許してこの私が許しません！」
「…うふ。うふ…！」
俺たちはダビデと合流したのだった。

でもあの、そうしてこの島で、俺達はダビデと合流したのだった。

あ、あれを食らわされたら死ぬぞ、俺……。
涙を誘われる士郎くん！

「…」

男の痛みは男にしか分からない。あれは確実に濡れた、絶対死んだ、再起不能だろう。股間を押さえて蹲り、白目を剥いて泡を噴く緑髪の青年の姿に、思わず涙を誘われる士郎である。

耽美的な美貌も形無しだ。見ていている男性陣の股間がキュッ、となるのも無理からぬ。英霊故に種はバラ蒔けないので、生殖器が機能しないと何も問題はないが、それでも青年を襲う悲哀に士郎は哀福を祈った。

謎の達成感を得て、額を拭う素振りをする玉藻の前に根源的な恐怖を懐く。クー・フーリンもアーチャーも、脂汗を浮かべて思わず目を逸らしていた。

「…」

ことどうさんの、アイツ絶対カウンター・サーヴァントだよね、人理焼却を阻止する側の、謂わば仲間なんだよねと通信機越しにロマニと囁き合う。ロマニはチン痛な表情で応じた。多分そうだよ、と。しかし開幕から金的された彼が仲間になってくれるのか、甚だ疑問である。心証は最悪ではなかろうか。宴もたけなわ、落ち着いてきた頃合いである。余ったものはタッ
パーに詰めておいてくれとアルトリアとオルタ、マシュに頼んで、士郎はアイレスフィールに要請した。彼を治してやってほしい、と。

だが無言。ダビデと名乗った青年は、顔を引き攣らせて玉藻の前から距離を置いた。

「ウチの者がすまなかった」

「ウチの者だがすまなかった」

謙虚誠意頭を下げる。彼のタマは治ったが、タマさんへの恐れは治らず、そしてタマを襲ったチン撃の痛みが幻痛となって彼を苛めていた。

しかもそこは流石の英霊、ダビデを名乗るだけの事はある。さらには、僕はサーヴァントだから、カルデアのマスターに壁を作りはしないさ。

「現在進行形で俺を壁にしているが」

「それば言いつこなしさだよね。僕は男で、君も男だろう？なら男の痛みは分かるはずだ」

「……ネロ、頼むからタマさんに説教してくれ。普通に合理的に」

「う、うむ。キャス狐よ、こちらへ来い」

「みこっ？もしかしてこの流れ……私、吊し上げられちゃいます？」

えーん、私、女の敵を滅しただけなのに！？
味方になってくれるかもしれないサーヴァントに攻撃する奴があるか！
と極めて真っ当なお説教をかまされ、正座させられた玉藻の前は首にブラカードを提げられた。
「私はダメなサーヴァントで、玉藻の前が真に理解する事はできない。故に合理的に叱ってもらうか、それは彼女のマスターであるネロの仕事だ。」「とりあえず、お前は本当にダビデ王なのか？」一つの気持でいたんだ。
羊飼いの気持でいたんだ……。「いや、寧ろ気にしないでほしい。サーヴァントである時ぐらいは、羊飼いの気持ちでいたんだ……。」「そうだよ。でも僕が嘗ての王だって事は余り気にしないといけよ。」
ひとえず、お前は本当にダビデ王なのか？彼女が君や彼女のマスターの指示なんだ。あお責める気はないよ？ 彼女が君や彼女のマスターの指示で僕の僕に攻撃した訳じゃないのは分かる。けどね、彼女を視界に入れて居間上がって動けなくなるよ、絶対。うん、僕はやる、か hariやるけど、そんなにじゅあの化け物みたいなのとの戦いでは足手まといにしかならないよ。
「うん、それは無理だね……」「そりゃえず、お前は本当にダビデ王なのか？」と。
ああ、理解していない。全てを水に流して許せる訳じゃない
僕だって聖人君子じゃない。全てを水に流して許せる訳じゃない
「そんなに責める気はないよ？ 彼女が君や彼女のマスターの指示で僕の僕に攻撃した訳じゃないのは分かる。けどね、彼女を視界に入れて居間上がって動けなくなるよ、絶対。うん、僕はやる、か
手まだまだにしかならないよ。
「うん、それは無理だね……」「そりゃえず、お前は本当にダビデ王なのか？」と。
ああ、理解していない。全てを水に流して許せる訳じゃない
僕だって聖人君子じゃない。全てを水に流して許せる訳じゃない
「そんなに責める気はないよ？ 彼女が君や彼女のマスターの指示で僕の僕に攻撃した訳じゃないのは分かる。けどね、彼女を視界に入れて居間上がって動けなくなるよ、絶対。うん、僕はやる、か
手まだまだにしかならないよ。
「うん、それは無理だね……」
宝具や敵の目的にも繋がるからね。

まあのとダビデは顔。教えてくれと頼むと彼は勿体ぶるでも
体化せず、ダビデが死んでも所有者が代わっていれば現世に留まり
続ける。そしてこれに神霊を生け贄に捧げると、周囲一帯が消し飛
ばされ、人理性在があやふやな特異点でそれが起こると、人理性の
完遂を待たずしてこの時代の人類史が復元不能になるらしい。

そして既に敵は神霊を捕獲している。この宝具を奪われる事は
即ちカルデアの敗北に直結するのだ。

最初はアルカディアの狩人と潜んでいたんだけどね、月女神を殺
したと挑発してきたヘラクレス擬ぎに彼女は殺されてしまった。
彼の挑発は悪辣で、他の女神も捕らえて地獄の苦しみを与えたいと言
っていたから････彼女も冷静さを失っていたよ。僕も怒りを覚え
たけど、流石に勝てる気がしなくて、僕は最後まで隠れていた。

クレシ擬ぎが辺りを難ぎ払ってしまって隠れる場所がなかったから、
海に潜ってね。そうして僕は、海を泳いで････まあ神に身を任せて
海に潜ってね。そうして僕は、海を泳いで････まあ神に身を任せて
海に潜ってね。そうして僕は、海を泳いで････まあ神に身を任せて
海に潜ってね。そうして僕は、海を泳いで････まあ神に身を任せて
海に潜ってね。そうして僕は、海を泳いで････まあ神に身を任せて
海に潜ってね。そうして僕は、海を泳いで････まあ神に身を任せて

「は、今何年ですか？」

「つく企業として、あなたは我々が何年を越えたのですか？」「不思議です。彼が何年を越えたのですか？」

「さ、三番目の会社に、我々が何年を越えたのですか？」「不思議です。彼が何年を越えたのですか？」

「おっ、今何年ですか？」

「それは、我々が何年を越えたのですか？」「不思議です。彼が何年を越えたのですか？」

「は、今何年ですか？」

「それは、我々が何年を越えたのですか？」「不思議です。彼が何年を越えたのですか？」

「さ、三番目の会社に、我々が何年を越えたのですか？」「不思議です。彼が何年を越えたのですか？」
おいロマニ、お前は何かないのか？
一応父親だろう？
そこ小声で聞いて父親には何かないんで。母にバト・シェバがいる
だけで、彼女についても特に親しみを感じないね。だってそんな
自由がロモンにはなかったから。
え？ボクに父親なんかいないんだけど。母にバト・シェバがいる
完全に無関心である。冷淡とすら言える表情であった。そこに立
たれた野郎は冷め切る以前に、もともとの関係もない赤の他人を見るよ
うな温度を感じて、軽く眩暈がする。
伝説で知っているが、ダビデの野郎、本気で親としてアラし
めでもあるが、だれからしても幸せな真似もやらないのだ。
伝説に知っているが、ダビデは割と人間として肩な真似もやりかかってるが……。
まあ接してみた感じ、元々の女好きな気質と、王という立場に対
する過度なストレスで色々参ってしまいだっけというふうにも見える。
根っからの外道でも肩でもないはずだ。軽薄なきらいはあるがそれ
はいい。個性というものだ。
まあ人様の家庭関係、しかも英霊となって過去として終わっち
かどうか？
俺は彼らの関係について触れるのはやめようと思った。いつかダ
ビデ王と会うような事があり、伝説にあるような人間だったなら、ロ
マニに対して「やーお前のとちゃんダービデっ！」と煽ろうと
考えていたが、それはしない事にした。どう考えてもネタにしてい
はいい話題ではない。
ロマニはネタにされても気にしないだろうが、やはり本人が気にしないからと踏み込んでいい理由にはならないのだ。

「まあ、ダイビ。「俺はお前の希望通り王にしては扱わないと、さんだい。そんな改まってる」俺達はまだヘラクレス野郎、しかも見てもないが、他に敵サーヴァントを見なかったか？正体が割れると助かるんだが。

「さあ？どうだったかは知らない。あくまでパレないように僕を逃がしてくれただけでからね。ヘクトールは……敵ではないのか？」

衝撃的な告白に、目を瞬ら。彼は告げた。

流石の僕でもヘラクレスの反転存在の目を誤魔化して、逃げ隠れ、「敵ではあったけど、僕を助けてくれた槍兵はいた」そう言うと、彼は真剣な顔で答えてくれた。

新たに入った情報に、士郎はなんと言えない悪寒を味わった。新たな入った情報に、士郎はなんとも言えない悪寒を味わった。

「ま、敵の掌の上にいる。決戦は近いはずなのだが、敵の真一は、敵の掌の上にいる。決戦は近いはずなのだが、敵の真
の狙いが他にあうような気がして…背筋を、嫌な汗が伝った。
名探偵士郎くん！

絡み付く策意。糸に絡めとる補食する蜘蛛の如き手法。感じた事がある。手駒を捨て石として、相手の身を削り本命を当てる策の癖。沈思黙考する士郎は自身の戦術理論に基づき思考を構築し、人理を巡る緒戦から縦解いていく。

第二特異点の戦歴を参照し、己の感じるものの正体を探った。ローマでの戦いで何があった？要点を繰めて脳裏に箇条書きしつつ、思い出す。

…敵は何者か。魔神柱だ。ローマで見た魔神柱はこちらを分析していた。その後の魔神図ルムルスとの決戦の前に、あたかもこちらの戦力を削減させるためだけに現れたよう。アッティラ王との交戦。そして思い返すこの第二特異点での戦歴では、初戦からアルケイデスと戦い、既に二度も交戦している。まるで選べる道を狭め、塞ぎ、誘導してくるような戦術の手口が、ローマでの流れと被る。

一あくまで戦術の感覚的なものだ。レオナルド、アグラヴェイン、お前達は何か分かるか？"
士郎くん、君は頭が切れる。ここ戦術に関しては私よりも秀でてるだろう。でもどんな士郎くんが助言を求めるって事は、もう何か掴ってるんじゃないかな。

マスター。私は現場にいた訳ではない。しかし第二の特異点での戦闘は、おまえの研究は、恐らくマスターの感じているものと同種だ。後手に回らされているな。ならば手のない状況が、先手が取れていない。

そうなんだ。私は明らかに俺達と戦おうとしている。或いは戦わせるを得ない状況にしている。それがなんの為か、今一掴みかねるのが現状なんだ。

カルデアの戦力を測るため？　否、英霊召喚を行えるカルデアの魔神柱は単体でもサーヴァント数騎分の戦闘能力がある。魔神柱の黒幕がいるのはほぼ固まった推理だが、馬鹿正直に正面から戦わせる事になんの意味がある？　消耗を狙う…それはあるかもしれないが、違うような感じがする。

恐らく第二、第三の特異点の図面を描いたのは同じ魔神柱だ。指し手の癖が同じ故に、仮に別の魔神柱でも同じ事が、小技で削り弇命で叩き潰す。基本に忠実な策士だ。相手方の駒の指し癖は大方これで把握した。対等な、或いは有利な状況に運べば一方的に叩いて伸ばして引き裂ける手合いではあるが…それは今ではない。

士郎は知識を総動員して知恵を絞る。
この衛宮士郎はアーチャー……エミヤシロウと比べると細かく気配りや、戦士としての資質は劣るが——その分、指揮官としての視座に優れていた。頭のキレがある。歴戦の経験が錬磨し、天性の頭脳が——聖剣の鞘を埋め込まれる以前の起源『分解』の知性が冴えている。全ての事象を分解して、己の理解に落とし込む理性或いは本能に、知性に残っていたが故の、歴戦の戦士としての鋭利な思考があっただ。彼は思考する。そして結論を出した。アグラヴェインやレオナルドの後押し、彼の中に曖昧な推論に自信を与えたのだ。これ特異点と、第二特異点で絵図を描いたのが同じ奴で、士郎が最も得意とする力に、知性に残っていたが故の、歴戦の戦士としての鋭利な思考があっただ。

「何？……何が分かった？」

「大体分かった」

「この発想と分析に、ネロが鷹揚に腕を組む。その発想と分析に、ネロが鷹揚に腕を組む。」

「うむ！まるで分からんのが分かった！シェロよ、如何にして——」
そのような結論が出たのだ。

タマさんも仕方ないさ。飛び入り参加だしな。だがネロはもう少し考えよう。

第二特異点で奴は俺達が倒すのは想定外だったろう。その自信を持てるだけの力があの魔神霊にはあったはずだ。その前

だが俺達はそれを突破した。奴は念のため、第三特異点にヘラクレス野郎という保険を残していたが、本命は第四だろう。根拠は打

「奴は焦った。」「焦った。」「焦った。」

手の癖だ。奴はミスを犯している。ミス、ですか。それはなんだしょう、先輩。

マシュの反駁に、士郎は微笑む。彼の飛躍した発想は悪魔的で、故に彼の推理に誰もが聞き入れる。彼の飛躍した発想は悪魔的で、故に彼の推理に誰もが聞き入れる。

超えられるはずのない第二を突破された。だから第三でも指し口の癖を変えでの事もしていない。変える余裕があり無駄が思考に介在しないんだよ。それで俺は奴の思考の癖が分かった。奴が第四にいるという根拠は、この思考の焦りだよ。第五、第六、第七にいるなら焦る必要はなく、次は自分の城に攻められる。その焦りがあるならば、考えよう。
そんなもの、出来るなら今ごろカルデアは全ての魔神柱や、手駒としたサーヴァントが多数襲撃してきているはずである。

人理焼却の黒幕、「魔術王」を騙る存在がカルデアの座標を把握しに来ているなら、放置する理由は有り得ない。

ロマニ…レオナルド、カルデアの防備を最大限固めろ。アタランテと切…アサシンの再召喚を急げ。それからアルトリア、悪いが退去してカルデアに戻ってくる。

ショウ？！な、何故ですか？

？士郎くん、カルデアは今のところ安全なんだけど？

いいから、杞憂だったらいい。ヘクトールが敵ではないかもしれないね。

いえなら、アルトリアとオルタを揃えて置いておく必要はない。頼む。

 Recommended for Wechat Mini Program Use: Please use a web browser.
ロマニの返答に、士郎は救われたようすで安堵の吐息を溢した。
『ただしそれが杞憂で、無駄に戦力を分散したけっどね』とルンの軽口に士郎は苦笑する。
ああ普通に外れてくれたら、それはそれで何も構わね。
と。ロマニは胸を叩く。彼は魔法王のディ・サー・ヴァントだ。
『カルデアはボクが…私が守る。だから安心してくれ』
「ああ。信頼しろよ」よし、と士郎はその場から立ち上がった。自陣の面々を見渡し、彼は告げる。
――決戦への航海に出よる。頼りにしてろ、皆。
幕間
「決戦寸前、号砲を撃て～」

束の間の回帰。憤怒に、恥怒に染まる。

そうか、そういう事か－これが貴様らの遠り方なのか－

鳴呼、いと憎し。オリュンポスの神々よ、お前達の対逆に比する、

傲岸不遜なるモノを見付けてしまった。いと歎しや、よもやこの

ヘラクレスに纏わる者を斯様なまでに辱しめるとは。狂おしいまで

に屈辱である。

我を玩弄せし料簡、報いねばならん。憎悪では足りぬ、激情でも

足りぬ。地上にある人語の臨界を遥かに上回る凄絶な義憤、私情、

猛り狂う理性の蒸発。装填される猛毒の呪詛。埋め込まれる聖な

微、史に打ち込まれる鉛の重みが我を傀儡にせんとする。

嘗てない満身の全霊を以てしても打ち払うには足りない。鳴呼、

が反逆の旗は折られるか。我が熟の悉くが無価値に堕すか。我独

りで成せる偉業ではない、と。

だが－心せよ。あの前人はお前達を超えていく最新の英雄だ。

そして覚えおけ、私は断じてお前達を赦しはしない。喰え地獄の

炎に焼かれようとも。此度の無念はこのヘラクレスが、断じて忘れ

アレクス
ぬ、断固として報いてくる。

人理を守護せんとする者ら、我が屍を超えていけ。果てにて我是御身を待つ。

宛は無くとも勧はある。白波の立つ嵐の中、航路を往くは二隻の船。

無辜なる民草にとり、海賊船とは不吉を運ぶはずのものである。

しかし今や、その二隻は救世の御旗を掲げる方舟となっていた。

皮肉なもんだぜ、と見事な黒髭を蓄えた巨漢が嘯く。海賊なんさが世界を救うと来た！この俺がだ！
こんな悪逆が他にあるか？海を平和を守るだなんだだと言ってやった、海軍の役目つうもんだらだろう？奴らの旅を悪党が演じる、ハハハ！ここは愉快だ！

エドワード・ティールから水を向けられたのはフランシス・ドレイクである。

並走する船の船首に立つ女傑は、同じく自身の船の船首に立つ大男の声に豪快且つ単純に言い放つ。

男の声に豪快且つ単純に言い放つ。

なあに寝惚けたこと言ってんだ？元々この海はアタシらのものが変わるわけではないのさ。そいつを奪おうと思ってんだなら神様相手でもぶっ飛ばす。

敬愛する女海賊の言葉に、黒髭は弾かれると仰け反った。そして頭を叩き、呵呵大笑する。そいつは言えてんだ！俺とした事。

敬愛する女海賊の言葉に、黒髭は弾かれると仰け反った。そして頭を叩き、呵呵大笑する。そいつは言えてんだ！俺とした事。

敬愛する女海賊の言葉に、黒髭は弾かれると仰け反った。そして頭を叩き、呵呵大笑する。そいつは言えてんだ！俺とした事。

敬愛する女海賊の言葉に、黒髭は弾かれると仰け反った。そして頭を叩き、呵呵大笑する。そいつは言えてんだ！俺とした事。
海穏やかならずとも、悪の旗と自由の旗の下にある船員は風いだ心境で佇む。

甲板にて槍兵が胡座を揃き、魔槍を抱いて瞑目している。摫手を置いて周囲を警戒する盾兵は落ち着かない空気に震えを抑え、白髪の男が肩を叩いて蒼穹の心象のままに微笑んだ。

黒き聖剣王は不動のまま。錬鉄の弓兵は鷹の目を細め、萸薇の麗人が覇気を纏ってその時を待っている。聖杯の児童が緊張の坩堝に体を強張らせており、時が近い、刻々と進む船は、地平線の果てまで陸の見えない大海原へ到達している。

豪雨が降り始めてい、垂れ幕のように視界を塞ぐ雨粒の弾幕は、しかし鷹の目を遮れない。暴風の向こう側から、一隻の船が見えきっていた。
たのに衛宮士郎が応答する。「マスター」

「なんだ、アグラヴェイン」

敵サーヴァント反応、アルケイデスのものもある。それから出力の安定した宝具の存在と……この特異点の元凶である聖杯の反応も確認した。

真っ向切っての総力戦である。宝具とやらく船であろうと察し、 HALO 合点承知の助さぁ！—

己の太腕を叩き、ぐっと力満作った巨漢が多数の低級霊を召喚する。その数は少なく見積もっても千は下らない。彼は此処で全てを出し切るつもりでいる。

ソートの令呪を使い切り、先ほど一画だけ回復した。ネロは二画の令呪がある。やれるか、と思う。やれるさ、と呑く。アグラヴェインが巌のような声音で告げた。

己の手の甲を見た。全ての令呪を使い切り、先ほどの画を出し切るつもりでいる。

自分の頭を撫でる男に動揺はない。やはり隠し球はあるか、と。

微塵も揺らがない士郎に、マシュは知らず安堵する。
寄り掛かってこい、俺はお前達を負けさせやしない。俺も、負けない。不敗の将は自陣を奮い立たせる。不敵に笑うのだ。指揮官はまるで、不敵に笑うのだが、指揮官は動じない。鉄壁の自制心がある。まだだろう？まだあるんだろう。晒していないものが。その全てを暴いてやる、全てを叩きのめしてやる。充溢した気迫が炉の火の如く盛っていた。

いや…待ってくれ。これは────

しかし────ロマニの声が、固い。真名は知らない。顔も知らない。だが亡霊のように嵐を切って接近してくる船には、輝く兜のヘクトールがいた。史実に女海賊として名を残すアン・ボニーとメアリー・リードがいた。血斧王エイリーク・ブラッドアクスがいた。裏切りの魔女の幼き日の姿メディアが。アルゴー号の船長イアソンが。そして言うまでもなく、五体満足のアルケイデスがいた。
矢絶ぎ早に指示を飛ばす鉄心は、しかし熱く、頭は極めて冷静だ。　

他の面々はネロの指揮に従え。エドワード、お前も頼だ。ドレイクともどもお前らは勝手にやってくれ。それが一番強い！ハッ！　わかりゃないのさ色男！そうさせて貰うっ！　

……おうよ、俺も乗るぜ。久々にマジギレちまった。俺の部下だった奴の骸を使うたあな。ギャハハハ！無様も無様……ブッ殺す！』　

体は剣で出来ている、と。}
二隻と一隻が互いを射程圏内に捉える。今、激烈な死闘が幕を上げる。　

衛宮士郎は静かに詠唱をはじめていた。
開戦！ 二極戦線オケアノス

開戦！
二極戦線オケアノス

「そら野郎共！ 行くよ、突貫だぁ！」

黒髭の喚び出した低級霊は雲霞の如く敵船へ攻め込んでいる。しかし英雄船は巧み極まる帆の操術で風を掴み、波に乗り低級霊が接近する前に航行して間を外される。その間に一掃されるのだ。

英雄船より射たる射撃。魔女の魔力砲撃は、海面をも蒸発させ、その数々の熱線であたる。

触れれば英霊であっただけも、対魔力が無ければたただ。

無数の名も無き槍を放つ光の御子の投槍も、危なげなく撃墜されている。

巨雄・巨雄に非ず。姿はそのままに、半神ヘラクレスに伍す巨躯へ膨張し、巨紅の弓兵が、霰のように大矢を連射していた。

これによって黒髭の軍勢は瞬く間に狩り取られていた。無尽蔵に召喚されては全滅し、「アン女王の復讐号」、「黄金の鹿号」による砲撃、赤い弓兵と鉄心の弓兵による射撃、彼らの投影した無銘の槍を放つ光の御子の投槍も、危なげなく撃墜されている。

そら野郎共！ 行くよ、突貫だぁ！
壮絶なる射撃戦の影に隠れがちではあるが、手数で勝るカルデアに英雄船が引けを取らないうちである。

事なき帆の操術——英雄船を巧みに操船する英雄間者イアソンの存在が大きかった。

このままでは堀が明かない。いずれ太陽の国を陥とす事となる女の気勢を上げる。

白兵戦を挑もうというのだ。ネロは戦局を見据え原初の火の柄を握りながら確認した。

——マシュ・キリエライト！ ——

「は、はい！？ ——その長は余の守護を託された。

そなたに余を守り抜ける自信はある」

即答でマシュが応じる。

「でも、頑張ります！ ——わかりませんっ」

即答えでマシュが応じる。直後に狼狽えたように付け加えた。

「で、で、頑張ります！ ——わかりませんっ」

頑張り口は微笑んだ。

即筆でマシュが応じる。

「で、で、頑張ります！ ——わかりませんっ」

頑張り口は微笑んだ。
ば、即ち！ 余らは無敵である！

「は、はいっ！」

ふふふ、愛い奴よ……シェロは善き者に慕われるな。では往くぞ、乱戦になる故に細々と指示は出さぬ。各自全霊を賭して奮起せよ！

人類の興廃の一戦に有り！

不敵に笑って鍊鉄の弓兵が『黄金の鹿号』へと飛び移る。彼だけ死なせる訳にはいかないのだ。ドレイクが守る必要のない女傑である事は考慮に値せず、故に守戦に長けたエミヤと回復役の玉藻の前が彼女の近衛となる。

ネロの下にいるのはマシュ、アリス・フィールと黒髭。黒髭が微塵を振り絞る正真正銘の全力である証左だ。剥き出しの上半身で、聳え上げられた筋骨が膨張し、凄絶な眼光が光る。右腕には鉤爪のついた手甲を、左には拳銃を。静電気に弾かれたように黒い髭が尖り、無造作に切られて髪が俄かに総毛立つ。

「華の殺り合いだ、この黒髭の首、簡単に奪えると思うなやー」華の殺り合いだ、この黒髭の首、簡単に奪えると思うなやー！

嵐の航海者、黒髭の旗艦が海賊の誉れを讃え、太陽を落とす女海賊と血斧王が飛び込んでくる。

マシュが咄嗟に迎撃せんとするのを、黒髭が骨太に笑って制しれんと云うに至らぬ。
自ら突貫する。

「俺の獲物だ、お嬢さんは別に当たりない！」

自らの獲物と定めたのは皆ての部下。黒髭の旗艦に乗り込んでも、

鉄拳が女の残骸を吹き飛ばし、銃口を向けた射撃する。させ

じと矮躯の女女メアリー・リードがカトラスで斬りかかってくるの

を手甲で受け止めた。隔絶した筋力差、踏んだ場数と海賊としての

格がセーラーヴァントの残骸である彼女たちと比較するのも無駄がま

し。手で刃を受けるやその腹に感じ容赦なく蹴撃を叩き込んだ

吹き飛ばし、血斧王の大斧の一撃を飛び退いて回避する。

メアリーを蹴り抜いた脚には浅い切り傷があった。メアリーもた

ででは蹴り抜かれず、その脚を切り裂いていたのだ。しかし微塵も

痛痒を覚えた様子はなく、連続して銃撃をアンに浴びせながら哄笑

した。全く回避するアンの踊るような体捌きなど気にも留めず、

大海賊の気炎が彼を巨大化させていくようだった。陽炎のように

立ち上がる気迫に、味方であるはずのマシュは気圧される。これがあ

の、終始ふさげていた黒髭なのか？まるで別人のような、故にこ

そのエドワード・ディーターが如何に怒り狂っているのかが分かる。

彼奴らは黒髭に任せる。来るぞマシュ！余も援護する、往け！

女海賊らと血斧王を合わせて無数に凌駕する神話の反英雄、迷宮の主

その異様なまでの威容にマシュは歯を食い締め大喝を発した。そ

のマシュの威容に魔術が装飾される。ネロが魔術礼装の機能を起動

ので、陽炎は皆没してしまった。

- コロコロ-
護る者故に伝わる無念と猛り。死してなお、消える事のない怨嗟と懸錫。死してなお護ろうと奮い立つ雷光の巨力にマシュもまた応じた。

「負け、ない……！私は、絶対負けないっ！」「くうっ！」「そう、それなら、共に守り合いこの敵を制覇してくれよう！マシュは汗を浮かべながらも安堵も露に頷いた。心強い仲間だ。
英雄船より、兜輝くヘクトールが降り立った。

はためく深紅のマント、油断なく携えられた極槍、表情のない瞳。

狙いは護る者のいない聖杯の嬰児だ。毅然と己を睨み付ける彼女に
向け遊びのない槍の煌めきが照準される。

そこに飛来す剣の霰。

己の五体を針鼠とする剣弾を、彼は無造作に振るった極槍で
撃ち落とす。

でいきます！一合、二合、大、天・罰！これが私の、奥の
手です！弁明無用、浮・気・撲・滅っ！またの名を、一夫多妻
去勢拳！

応じて踏み込んだのは盧外のサーヴァント、玉藻の前。魔術師の
座にあるまじき近接への挑戦。執拗なまでの蹴撃は、されど悉く防
がれ、透かされ、逸らされた。咄嗟に玉藻の前は自らの手に呪を纏い受け
止めた。

呪層・黒天洞、防御の要。しかし玉藻の前は戦士に非ず、卓越し
た槍の閃光は二回辛うじて凌いだ玉藻の前を防禦を破り、両手が上
方で弾かれ無防備な胴を晒してしまった。ぎくしと硬直する玉藻の前
を屠らんと極槍が喰り、させじと剣弾が飛来する。

弓兵が一喝した。
「戯け！何をしている！？早く下がれ、キャスター！－」

「言われずとも！…ええん！そういえばこの方、押しも押さ
飛び囲み様に放たれるは呪相・密天。圧縮された風の弾丸がヘク
トップに殺到する。ヘクトールは瞬時に槍を旋回させて風の呪詛を
払、一撃が通らない。そのまま剣弾も悉く払い落とし、槍を回転
させ勢いを殺さず黒弓を握る弓兵へと投擲した。

咄嗟に黒弓を破棄し双剣を投影したエミヤは極槍を防ぐ。真名解
放せず、予備動作もない、威力の低いはずの投槍は、しかる鉄壁を
誇るエミヤをマストの上から叩き落とした。

しかし極槍を投げ放ったヘクトールは徒手空拳である。部下を下
がらせ女海賊フランシス・ドレイクが、二挺の拳銃を以て銃撃を
撃ち込む。確実に命中させる、その確信は…しかし神々の予
測すら容易に裏切り、あわや勝利の寸前まで祖国を導いた英雄に阻
まれる。

具現化する輝く兎の僕容。頭部を覆い、その身を固めるのは黄金
ウスの鎧で。パトロックロスを討ち取り、戦利品として獲得した「アキレ
の鎧」である。エミヤを甲板に落とし、虚空に在った極槍が落
下してくるのを掴み取ると、大英雄は微塵の己を囲む二騎と一人を
見据えた。残留霊基とは思いぬ、測り知れぬ威圧感に戦慄が
起こる。
は冬木三騎士。プリテンの騎士王。アルバリア・ペンドラゴンの反転存在。攻撃力の一端ならば青き騎士王をも上回る暴竜の化身。アイルランドの光の御子、クー・フーリンの全盛足る姿。生前の力に限りなく近い光輝の英雄。錬鉄の英雄その人でありながら、誰しもが認める龍心、衛宮士郎。対するはギリシア神話最大にして最強の英雄、ヘラクレス。その反転存在であるアルケイデスはしかし、その身の丈を半神ヘラクレスに並ぶ程に膨れ上がらせ、痩せいていれた五体には強靭な筋肉の鎧が纏われていた。発する力の武威は『神の栄光』とも劣らない。霊基が損壊していながら存在の劣化は見られず、寧ろ増大するに至っているのではないか。張る覇気が純化され、背後の友の亡骸を護るようにして立ちはだっっていた。

「気を付けるランサー。あれは最果ての槍だ。西の世界の果てとされたヘラクレスの柱だろう。」シロウ、「柱のような巨槍である。オルタが油断の欠片もしく警告する。」

迸る魔力はカルデアからの供給である。彼の改造した戦闘服、ダ・イソアとイアソスに邪魔されるのは面白くない。
ウィンチの発明した射籠手より、士郎はマスターの身でありながら、潤沢な魔力を得られていた。故に最大且つ最強の敵を戦場から切り離し、隔離する一手を躊躇せずに行う。己へ掛かる負荷なる度外視でさえも、それぞれを止める者などこの大敵を前にいるはずもなく——炎が奔る。大禁呪の異界が現実を塗りつぶす。捉えるはずの二騎の英霊と、そして「神の栄光」である。辺りの大海原は駆逐され、在る世界は剣の丘。晴れ渡る蒼穹に廻る歯車を背に、世界の主は微塵の油断もなく鉄心の光を瞳に宿し、全力で挑まねばならぬ大敵を睨み据えた。

往くぞ、ヘラクレス。宝具の貯蔵は充分か？「my flame never ends」（偽りの体は）——即使は仲間でも「My whole body was 『無限の剣で出来ていた』」——unlimited blade works & quot;
二極化した戦線の一角は、たった一騎を相手にした死闘であった。
海賊の誉れは悪の華

海賊の誉れは悪の華

彼の者の轟く悪名、時代をこぎ。カリブ海を恐怖のドン底に叩き落とした稀代の大悪党。成した悪逆数知れず、蓄えた財宝総数知れず。突如にウッズ・ロジャーズ総督は海賊共和国と黒髭、エドワード・ティーチ。ロビデンス島の平定、海賊の駆逐に乗り出したという。

核の名手に非ず。剣の達人非ず。血に飢えた狂王非ず。その本質はどこまでも悪党であり、死後反英雄として英名の座に刻まれるとも彼が改心するなど有り得ない話だ。

にも関わらず、彼の言動はどこまでも軽く、薄く、他者の蔑みや嘲笑を買う道化のものだった。だが、時間軸の縛りのない英名の座から仕入れた現代の軽薄な言論を引き出し、それを使っているのは彼の気紛れなどではない。

生前の経験から純愛を憧れていた。それは確かだ。本当の愛に飢えていた。それも真実である。本物で不変の愛など架空の存在にしかかないのではと諦めていた、というのもまた事実だ。だがそれがどうしてあの他者の蔑みを買う言動に繋がる?
己の暴れ回った世界の狭さ 生前より憧れた星の開拓者により知
識として世界を知っていたが 英霊の座に刻まれる事で更に先、星
の果てまで人の手が伸びようとしている事実を知った。
古今に名高き英雄豪傑 無数の冒険 伝説の財宝それらは過
去確かに実在し 現代の世界を見渡すにこれを出し抜くのは己であ
ってもひどく困難であると知った。
比するにどうか 己の悪行は 神話や伝説の勇者 悪党 怪物の
己を遥かに上回る化け物がいる 己を上回る悪がある。これに媚
び詫うのが悪党か？ 否だ 断じて否だ 己の短小さを知った だ
かなんだ 悪党は悪党らしく どんな汚い手を使おうとその喉
笛に食らいつつかなねばならない 例え格上が相手であっても
それが故の軽薄極まる言動だった。好い面白ず喜ばしく見下せ そ
の代わりに勝つのは俺だ。最後に笑うのはこの黒髭だ 海賊
の訳で万体で自由である事と勝つ事 奪う事 悪党の本懐を果たすのが
黒髭の矜持 一否 海賊の誇り これを笑い面白く見下せ そ
断じて赦さず決して逃さない。
悪は、悪の華を咲かせる者は、外道であってはならない。善なる皆様につきましては悪も外道も区別はつくまい。だが違う、一流の悪とは己の中に線がある。線引きを行い、その線の外には出ない。故に悪は外道ではないのだ。善悪一対などと嘯きはしなが、相応の覚悟がある。末路がある。だが違う、一時の悪とは己の中線がある。線引きを行い、その線の外に限らぬと嘯きはしなが、自由なのだ。その自由を賛める者を赦さないのは、悪が悪であるのが故である。

「メータール…そのザマで『海賊』の旗を掲げられんのか？無理だねえ。一時とはいえこの俺の船に乗ったモノが醜態晒しやがっで…」

―テメェら…そのザマで『海賊』の旗を掲げられんのか？無理だねえ。一時とはいえこの俺の船に乗ったモノが醜態晒しやがっで…"

―自由を失った海賊に生きる価値なし。存在する意義なし。ましてやその骸を弄ばれ傀儡として捨て石にされるなど笑い話にもならない。

彼女達が死んだのは黒髭の指揮が拙かったからではいないのだ。船長責任、などとも言うまい。アン・ポニー、メアリー・リード。

弱いから死んだ、悪運が足りなかったから死んだ。悪の死は己のみの責任である。

だが、同じ悪、同じ海賊として、懸ける憎けはある。死後の亡骸を弄られる…そんなザマ、己が死後に首を刎ねられ晒されたような死は利用するなど言わない。しかしその誇りを汚すのなら悪の死を利用するとは言わない。悪の死を利用するとは言わない。
黒髭は満身創痍だった。全身に傷のない箇所などなく、己の血に塗れ、それでも不敵に笑う。彼は殺されるだろう。秀でた筋力、化け物じみた頑強さと生き抜きがあろうと、それが通じる手合いではない。彼の銃撃は躲され、彼の肉体による打撃は届かない。多対一、同じサーウァントである故にその差を覆せる力量がない。大斧がエドワードを横殴りに殴打し、吐瀉を撒き散らして巨体がマストに叩き付けられた。跳ね起きた黒髭の胴を銃弾が貫通する。斬りかかってくるカトラスの刃で袈裟に切り裂かれる。黒髭は己の霊核に致命的な損傷が入ったのを自覚した。メリアーを殴り飛ばす。カトラスで受けられ、自ら後ろに跳ぶ事で衝撃を殺された。感情の欠片もなく己へ銃口を向けるアン。今こちらへ飛び掛かれるイエリード。体勢を整え再び斬り込みまんとするメリアー。
大したもんだ……

嘗ての部下の中には、これほどの腕利きの銃や剣の名手はいなかっ
た。これほどの気狂いもいなかった。故に称賛する。ああ、お前
の力は、確かにこの黒髭を殺せるもの。誰か一人でも欠けていられ
ば力業で殺せるが、三騎という数がバランスの妙だった。紙一重で
黒髭は殺される。それを覆せる力が黒髭にはない。

しかし一々だからこそ、黒髭は嘲笑し勝ち誇るのだ。

──黒vice。

元より海賊、黒髭は己の武略によってのみ生きように非ず。その奸
智と悪逆によって台頭した悪党である。

己にトドメを刺さとした三騎の脚を、甲板の下から伸びた腕が
掴んだ。低級覚、実体がないまま実体のあるものに触れる亡霊であ
る。彼らとの交戦で一度も海賊の亡霊を呼び出さずにいたのは、こ
の一瞬のため。

亡霊が比翼の女海賊の脚を掴み、下から這い出た亡霊が腕を押さ
え、首を絞め非力な女海賊らの身動きを拘束する。血斧王は無理矢
理にでも襲い掛かって来たが、それでも動きは大幅に鈍っていた。

容赦なく、無慈悲に。それこそが慈悲なのだ。エイリークの首に
腕を回して、脳に挟むと一息に圧し折った。どお、と倒れ伏す血斧
王が霧となって消えていくのを見もせず、完全に拘束された比翼の女海賊らに歩み寄る。もがく彼女らの、黒く染まった霊体に目を獰め、黒髭は呟く。

「あばよー。」「あばよー。」

別れの言葉はそれだけだ。脳天に銃弾を一発ずつ撃ち込む。比翼故に片方を撃つだけで両名とも消えるが、彼女らの誇りは片割れの霊体の落ちたことをよしとしないだろう。

エドワードはふらふらとよろめき、柵を背にして座り込んだ。聖杯の嬰児が駆け寄ってくる。急いで治すわ、と。それで黒髭は嗤った。こんなにも無垢で、善良な彼女が、悪党を救おうとしている。

それでも、その傷だと貴方は！ そう反駁する聖母に、黒髭は嗤いを深める。

重い声音である。聖杯の嬰児アイリスフィールは悟ったように目を覚ます。安心しな、簡単になったりゃしねえよ。今はちょいと、感慨に浸ってたくてねー。 要らねえよ。ほっといてくれや。
ああーーいい女だ。男の感傷を理解してくれるなんてあ。まったく。

俺はどうして、そんな女と縁がなかったのかね。

「悪党だからなー」

目を開き、そっと傍から離していく。

ああーーいい女だ。男の感傷を理解してくれるなんてあ。まったく。

俺はどうして、そんな女と縁がなかったのかね。

鼻を鳴らし、エドワードは自らの黒髭に触れる。そこには先刻、同盟相手から押し付けられたものがあった。勝利の美酒の代わりだ。

口に咥え、髭に織り込んでいた導火線の栓を抜く。火がついたそ

肺に染み渡る。ぷはあ、と虚空に吐き出した紫煙を見上げた。海

海賊は嗤う。

「この俺と組んだんだ。……負けがったら承知しないぞ、マスタ

ー」
悪意の牙、最悪の謀（前）

体は剣で出来ている
血潮は鉄で、心は硝子

ただと一度の勝利もなし
ただの一度の敗走は

Unaware of the end. I have created over a thousand blades.
Steel is my body, and fire is my sword.
剣の丘にて鉄を鍛つる。

「剣は、心を限る。」

力の根源に霊長の守護者が在るか。

しかし世間の卵を反転させ、世間を己の心の在り方に塗り潰す。

世界は変容していた。
再演の差響に歪み、染み着いた血の赤い丘は緑豊かな濡れた草原へ。心象世界に取り込んだ者へと贈られる。善なる者へ祝福を、無辜なる者へ安心を。更なる無限の剣柄を、廻る歯車が世界の主を支え、縛り、後押しされる。悪なる敵に是正されぬ。奴にも大規模なものを撃たせるな。良いこと尽くした。「う！おまけにオレとセイバー、マスターの体のキレも上げられた。だがしかし、光の御子はニヤリと口端を上げた。対者の討滅を告げている。セイバーと己を呼んだ者へ、黒王は首肯する。良かっただか。だが瞬時に奴を取り込めるわけじゃないだろう。追い込み、囲み、叩く。俺が合わせる、行けるな？」応じるように魔槍が構えられる。黒のように前傾となれた光の御
子が四肢に力を溜め。暴竜の猛りを秘めた黒王が、聖剣に膨大な魔力を充填してゆく。臨戦態勢は最初から整っていた。いつでも戦える。しかし、胸中に去来するものがあった。数奇な運命だと言が感じていたのだ。

共に冬木の三騎士でありながら、全員が力か属性が異なっている。弓兵に至っては同一人物にして別人で、人間で、マスターである。そして再演前の弓兵はそのマスターの力の根源となっている始末だ。あまっさえ敵とされているのは第三次聖杯戦争最強の英雄なのだ。可笑しさを顕いていくのである。だが不足はない。万の味方を得た以上的心強さを感じている。互いの力を知り抜き、同じ戦場を駆けた。強敵の座を経て戦友になっただけで、ならば細々とした合図や指揮など無用の物。ならば共通の敵を討ち果たすのみ。

「往くぞ、ヘラクレス。宝具の貯蔵は充分か？」

その宣戦布告に、破れ掛けている神獣の裘の下で神性の霊基が笑った。三mを超える武骨な柄、切り立った二枚の岩盤が螺旋を描いた形状の穂先、最果ての燐光を纏う巨槍を旋回させ石突きで地面を叩く。このような指が巨槍に添えられ、「神の栄光」が構え、堂の入った槍術の武練、武芸百般の武人の誇りが垣間見える。

クー・フォーリンが小さく笑った。最後の最後に立ち返ったのか。
ヘラクレスと呼ばれた巨雄は赫怒を覗かせていた。私をその名で呼ぶなど。「ヘラクレスをアルケイデス…同一人物でありながら、決して相容れぬ属性。それらが混ざっているのだ。意図的に混ぜられただけであると。故に強敵を迎えた高揚は無く、有図的混ざらされたたけだが、混ざるのだと。」「不快な騎士王は吐き捨てる。立ち返ったのではないと見抜いていた。意図的に混ぜられただけであると。故に強敵を迎えた高揚は無く、有図的混ざらされたたけだが、混ざるのだと。

黒い聖剣が膨張する。黒々とした暗黒の魔力が噴出したのだ。周囲の味方への気兼ねはない。蒼き騎士王は自らの力の律し控えていると。いえ、銳敏極まる直感の鋭さが彼女の秀麗な美貌を歪めた。故に強敵を迎えた高揚は無く、有図的混ざらされたたけだが、混ざるのだと。'}
だ。壊更意融ての根、り微を程しアらのなに巨の裘ア殺か撃敢ジ度ス寄ル戦直れる間槍そはル蔦到にちえ跳攻をせのケ車線ッた投合をれそケがす両放てのわた。幻影いかと、れイ地るの槍！」返倒か合デ砲せ速想宝とし横らデに伝足のイし、出のいスた。に具呼無無研人ス落説が下一来をそなよの吸限尽鑽理かの浮段撃瞬はう踏応上の一ば飽が見続振末属す剣、し左切肩にあ精の巨剣の重・破。
その現象は極端に複雑である。しかし、爆風、爆裂という属性は人理の如く、何と関係ない。アルケイデスは瞬時に顔を脇で庇い、自らを地面に縫い付けるが如き爆撃の中防禦を固める。
オルタが聖剣に魔力を込める。卑王鉄杖一刀身を砲台に見立てた魔力砲撃。腰を落として両手で構えた聖剣より、いつもの魔力の爆風を解き放たんとした刹那。爆風地よりアルケイデスが脱出す。
全身を燃やさせながら、しかし欠片たりともその気迫を衰えさせず、凄惨な火災や裂傷を負った姿でオルタに刺突を向かう。大規模な爆撃に晒されていた途上でそれ。故にその突進がオルタには不意打ちとなる。面食らうオルタだが即座に反応し剣を受け止めた。
しかし巨劍より圧縮された爆光が解放され、オルタの全身を打ち据えた。巨大な槌に殴打されたような衝撃。意識が剣の間だけブラックアウトする。それほどの一撃。吹き飛んだオルタへ、しかしアルケイデスは追撃に出ない。それは断つ剣弾の雨が吹き飛んだオルタの後方より放たれ、無理矢理アルケイデスの進撃を食い止め行ったのだ。
アルケイデスは舌打ちし飛び退く。絨毯爆撃に縫い止められるの向き様に巨槍を振るった。火花が散り、豪腕が唸る。
「ハッ、オレを忘れないでね」彼の見舞う魔術術は変幻自在、豪快無尽だ。しかしアルケイデスもまた負けてはいない。偉大なる師で
だ。
で、を、ケの決せ槍をつ
光づイ自人魔合戴る。
のル林らフーの槍う
論たれ御フーケどス能が者
く。るイ！」
そはれリだ。
同れリ秀極士、果道られ
ンのよに
悉剥周たは
上はをいな
は撤負剣がトのア暴が
れ、剣は超え。剣は超え。
は剣を加に攻い。
弾こと位御だ。
にこ低すの得をのが槍は超え。
え懼する。
格歴をやる。
不さン。不さン。不さン。
で浮たイに弾こと位御だ。
に弾こと位御だ。
に弾こと位御だ。
彼の動作を阻害する効果はあった。互角の力量、故にこそその差は極めて大きくなる。クー・フーリンの赤眼がぎらりと光った。

互角の力、故にこの差は極め立て大いになる。クー・フーリンの赤眼がぎらりと光った。激越な合いと共に魔槍が奔る。多数の隙を生み出されたアルケイデスは急所を守るしかなかった。肩を挟る魔槍の呪詛に苦悶する。しかし体は停滞しない。巨槍に魔力を送って豪快に振り地面を叩く。発される衝撃が地面を隆起させ、クー・フーリンを間合いから押し出した。最果での槍の風圧が剣弾をも弾き飛ばし、態勢を整えようとしたが一その隙を逃さず飛び込んできたのはオルタである。

先の意趣返しとなる剣撃は、柱の如く膨張した黒剣の振り下ろし。完全に死角から振るわれたそれを、しかしアルケイデスは咄嗟に槍を掲げて受け止める。オルタの渾身の魔力放出が加わり、アルケイデスの両足が地面に埋り込んだ。

後退したクー・フーリンが魔槍を投じる。真名解放によるもので受け止める、それは不可。躲す、それも不可。防ぐなど以外の他。オルタの剣撃を防ぐ為に両手で巨槍を防ぐのに塞がっていた。
無理矢理に体を捻り、心臓に突き立たんとしていた魔槍を髪した。
代償にオルタの黒剣が自らの胸を袈裟に切り裂くのに、彼女に拳を叩き込んで吹き飛ばす。オルタは黒剣の腹で拳を受け、損害なく身軽に着地する。魔槍が担い手の許へ帰還する中、そこへ殺到するの
は剣弾の雨。
剣の丘に縫い付ける爆撃がアルケイデスを封じ込む。クー・フーリンは確信した。今だと。しかしオルタはハッとした。爆発に呑まれたアルケイデスの眼が不気味に光っている。直感した。

「待て！ラン－リー」
「出な、圧し潰す死獣の禍－リー！」

黒剣により生傷を負ったアルケイデスが立ち上がる。巨槍を発す
火炎光が辺りに撒かれ、防壁となり剣弾を遮断したのだ。オルタやクー・フーリン、士郎を大幅に強化した城に、彼は笑っ
ていた。
景を顕すだけなら価値がない。しかも術者は人間であり、これ
は魔術だ。道具ではない。「故に奪おうにも抵抗され、ほぼ効果が
い可能性もある。しかもといって騎士王の聖剣を奪う、これは容易くなかった。
そして光の御子の魔槍を奪う、これは相手の力量ゆえに不可能。
だがこれはどうだ？己に重圧を与え、敵に加護を与えているこ
の宝具は。
『待ちに待ったぞ』
この宝具があるのは知らなかった。だがしかし虎視眈々と機会を
窺い続けた甲斐があった。己の刑場となっている城の宝具。己にも重圧を掛けるそれは、間
接的に己に触れているのと同義だった。
アルケイデスは虚空に腕を伸ばす。彼の負った傷は秒毎に治癒し
ていく。無尽蔵の魔力が己にはあった。今、彼は秘密続けた宝具を
開帳する。その真名は、
『天つ風の篡奪者』
宝具を篡奪する宝具である。
英雄の誉れ、花開く策謀

それは空気の壁を貫く不敵の極槍の擦過音である。大気が燃え、衝撃波を伴い、雪崩を打たるように弓兵へ押し寄せた。

干将莫耶、陰陽一対の双剣。一級の戦巧者であるエミヤは防禦を固め歯を食い縄った。

災害のよう猛攻と同居する精緻な槍捌き、己を遥かに上回る霊格の勇者。トロイア最強の将軍にして戦士、指揮官にして政治家である『兜輝くヘクトール』の武技には、その性質そのままの堅実さと怜悧さがあった。

光の御子のような圧倒的な力と速さ、豊富極まる経験と才能、昇華された技量によるものではない。血の浄むような鍛練と、類い稀な克己心から来る忍耐力、真の狙いを悟らせない狡猾な心技が立ちはだかる。彼の術技には無数の隙が散見されるが、それほどその隙は全て餌であり、それに食いつけば即座に殺される。エミヤは確信し、それを空を飛ばす列車のようにこなす存在だとも。

「ヅッ！」「ツッ！」
執しない。常に周りが見えている。功を焦らない。加えて玉藻の前を、
まるでと力抜かず、油断せず、慢心しない。彼は忌々しいまでに磐石だった。
本当に残る甲冑のなかと疑いたくなる。

青銅製の兜は丁字型の鼻当て、孔雀のような羽飾りのついたコリ
ント式兜である。それなお銅は勿論ながら、宝具として相応しい加
護を被るものに与える。

ヘクトールの兜は被る者に戦時における稀な洞察力を与える
のだ。生まれたての目か、鍛練の末に身に付けるそれか、はた
またその両方か。そして彼の身に付ける鏡は、不意に彼は黄
金の鏡を脱ぎ捨てた。

『アキレウスの鏡』を体から剥ぎ取ると、海に捨てたのだった。その真
手に、トロイアを象徴する意匠の刻まれた丸模様が現れた。磨
には模となった彼の左手に収まる。そしてその身に装備されるのは
石の部、オブ・プレート一腹部へ横方向に長い板を上から五
枚ほど連続し、胸部は縦長の板を並列にして、背面と側面は縦長の
板を並列に並べ、小さな肩当がある形状のもの。

－　－　－
深紅のマントが潮風に吹かれている。彼の纏う鎧兜は、パトリオクロスを討ち取り戦利品として得たアキレスの鎧ではない。彼自身の、シャルルマーニュ伝説に名高いものである。眼に見え彼の佇まいが一変していた。ただでさえ力の差を感じさせる武威があったのを、明確に全ステータスが向上したような威圧感がある。それは彼の鎧によるものか。幸運と道具以外の能力が増大している。

即ちこれからこそが『兜輝くヘクトール』の本当の姿だという事。右手に握られる極槍とも合わさりその偉容は計り知れない。

何故唐突に本気の姿勢を見せる？先程までの装備でも充分にミイラを打倒し得た。仮に最初から本来の装備に変更するつもりだったのだけれども、もっと効果的な場面はあったはずだ。それを無視して、無意味なタイミングで無意味に切り札を晒して来るのでは、ヘクトールほどの大英雄には似つかわしくない性急さと拙速だ。

眼に見えて彼の佇まいが一変していた。ただでさえ力の差を感じさせる武威があったのを、明確に全ステータスが向上したような威圧感がある。それは彼の鎧によるものか。幸運と道具以外の能力が増大している。

即ちこれからこそが『兜輝くヘクトール』の本当の姿だという事。右手に握られる極槍とも合わさりその偉容は計り知れない。

何故唐突に本気の姿勢を見せる？先程までの装備でも充分にミイラを打倒し得た。仮に最初から本来の装備に変更するつもりだったのだけれども、もっと効果的な場面はあったはずだ。それを無視して、無意味なタイミングで無意味に切り札を晒して来るのでは、ヘクトールほどの大英雄には似つかわしくない性急さと拙速だ。

「サー・カー、討ち取った！アーチャー、キャス狐、ドレイクよ！今少しその者を抑えておけ！余らが敵船に乗り込み決着をつけよう！そういう事か！」
エミヤの眼に理解の光が点る。ネロとマシューが敵残し霊基を討ち取る、敵本丸である英雄船に乗り込んだのだ。敵バーサーカーは強かったが、能力の劣化した狂戦士ではギャラハッドの力を継承したマシュを傷つける事能わず、即席とは思いえないネロとの連携で打ち倒したのである。
残は敵大将らしきイアソンとメディアのみ。後はヘクトールさえ倒すれば壊滅する。しかし無理をしてヘクトールを倒す必要はないのだ。カルデアの目的は特異点化の原因である聖杯の確保、そしてそれを以外の元凶の排除である。無理をしてエミヤらがヘクトールを倒す必要はない。しかし、ヘクトールはそうは言えない。彼は味方大将を守る必要がある。細々と奮闘に勝つ、という訳にはいかないのだ。

多少のリスクは承知の上で、速攻で眼前の敵を屠るか、この場を離脱して大将の守備につかねばならない。この際僅かな負傷すら織り込んだ、メディアだけを防ぎきれるものではないからだ。イアソンは一目見て分かるほど明らかに、伝承とは異なって武勇に長けていないのだから。

「そういう事だ。今暫く付き合ってもらうぞ、トロイアの英雄！」
は弓兵なら退くわけにはいかない。迎撃のために防戦の覚悟を固めた。楯に身を隠し、極槍の穂先がエミヤを捉えている。ジリ、と

うなじが焦げ付くような焦燥を感じた。己の焦りだ、極槍を解析したい故にエミヤは見抜けたのである。ヘクトールの取らんとする戦法

が。

不屈の闘志を宿すエミヤは気圧されない、しかし脳裡に響く警鐘

が告げている。～～負ける。斬られるか、突かれるか、難ぎ倒され

るか。無数に見える敗北の光景がありありと眼に浮かぶ。

ヘクトールの極槍が右腕のみの力で突き出される。先程までの両

腕による槍撃ではない故に、それを捌くのは難しくない。 xa ど容

易くもない。 彼へ目掛けて放たれる、玉藻の前の呪術による呪詛

は効果を発揮しない。

「もうそろそー！？ なにそれチート！ チートですよ！ なんだすか

～っそーっ！外すぞ！？
それ！?

玉藻の前の批難など歯牙にも掛けられない。ヘクトールの聖楯は、
担い手の状態異常を無効化するのだ。

ヘクトールは聖楯で身を守りながら、エミヤに牽制のような刺突を繰り返す。何が狙いなのかを見抜いていても応じない訳にはいかない。エミヤは分の悪い賭けに出るしかなかった。

双剣を投じる。叩き落とされるも構わず別の双剣を投影し、更に

聖楯に阻まれる。やがて剣の間合いではなく、剣の間合いとなっ

て。取り回しの悪い剣の間合いではない、しかしいつ間にか極剣の
柄が短縮し、剣となった。分かったのにまんまと剣の間合
いに近づかれたエミヤを責めるのは酷というものである。ヘクトー
ールの間合いの見計らい方、距離の誤り方が余りに巧みだったのだ。

剣の間合いに踏み込むや猛烈な剣撃を振るう。エミヤはなんとか
双剣で身を守り、無数の火花を散らす剣薙を交わすも、不意に突進
してきたヘクトールに奥歯を噛み碎かんばかりに食い縛る。

ゴッ、

ゴツ、

戈

鶴翼、欠落ヲラズ

心技、泰山ニ至リ

その他、やまはなき

…”
「させるらんかいっ！」ドレインが銃弾の雨を見舞う。彼女は神聖なる杯に吸収されて、その銃撃はサーヴァントにお通じるようになっているのだ。ヘクトールは難なくそれを防ぐ玉藻の前神宝を一時解放され、彼女の呪力行使のコストが零とならない。そして自陣の者に膨大な魔力供給を継続的に行い、それによって玉藻の前呪力が急速にエミヤの負傷を癒す。「分かっている！」玉藻の前の刀剣が急激にエミヤの負傷を癒す。これで決着だ！一方、助かったぞ、キャスター。「そーゆーのいいですから早く早く！」両翼の如き干将と莫耶を広げて斬りかかった。
鶴翼三連。叩き込まれるそれらを、ヘクトールは初見で見切った。

彼の全身を、鎧を破くほどの剣撃の嵐が彼の背後、真横から飛来する。それら全てに被弾して、鮮血を噴き出しながらもヘクトールは容易くない。

肘から先の腕を無くしながらもエミヤもまた負けてはいない。深傷を負ったヘクトールが聖楯で身を守るよりも先に肩口から突進し、彼を無理矢理に押し退ける。「アン女王の復讐号」の戦闘が決着をたえぬ！エミヤが一喝した。

咄嗟に立ち止まったアイリスフィールの鼻先を聖楯が通り過ぎ、ドレイクの船のマストに突き込んだ。アイリスフィールは一瞬で、ヘクトールが駆け、極剣をエミヤに突き出した。剣の間合いでは、頭蓋が砕けていただろか。アイリスフィールは、もちろん、エミヤの左腕を切落とす。

オオ、アアアッッッッ！…！
「ハッ」「ハッ」「ハッ」

槍が衝動を繰り返し、腕の動きではなく首の向きだけを見せて回避せねばならない。マシンガンのような連続の刺突。彼の手の中で剣が振動する。腕を大きく前出し、極めて定期的に攻撃を繰り返す。肩を貫くような攻撃。エミヤの息が乱れた。流星の如き剣の刺突が肩を貫く。満身創痍のエミヤへ、ヘクトールは踏み込んだ。

重傷であっても怯まない強靭な耐力である。槍が衝撃を受ける。槍を極めて速くかつ強く扱う。槍を崩す。エミヤの顔面を固い拳で殴り抜いた。
両手を砕かれ、武器を失い、それでもドレイクは怯まなかった。
果断に突進したドレイクが、頭を後ろに逸らし、そしてヘクトールの後頭部に渾身の頭突きを発揮。

武器を失い、手も使えない。しかも人間だ。どうしてそれで退かれたのか。合理的ではない。実際にヘクトールはなんの痛痒も覚えていない。頭突きで額が割れ、血を流すドレイクの眼光は手負いの悦だ。だがどこまでも己を信じる気高い自負の光が煌めいている。

一方、オジサンもヤキが回ったかね。ヘクトールは、エミヤへの追撃をやめ、苦笑しながら立ち止まった。喋った！？と玉藻の前が眼を見開く。ドレイクの一撃は、確かにヘクトールの砕いた霊基に届いていたのだ。叩き起こされた心地で、九十九人の一人である大英雄は兜を外す。
ななとか上体を起こしたエミヤに、ヘクトールはからからと笑う。

そしてちらりと英雄船に眼を向けると、飄々と肩を揺める。

『いや、感服した。いい頭突きだったよ』

『海賊だからかい？国側のモンとしぐゃ、狩るにゃちょっと難儀しそうだ。お陰様で死んでたのに生き返っちゃった』

『そうかい。そいつは重畳ってなもんだ。……で、まだやんの？』

へらへらと言うながらも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっていった。今も戦えあってなぁ声が聞こえのよ、と。

ヘソヘソと言いつつも、彼の眼は煮えたぎる怒気に染まっ
自決して果てたヘクトールの霊基が、今度こそ完全に消滅する。エミヤは深く溜め息を吐いた。あのまま戦っていただろう。呆れたような、感心したような眼でドレイクを見た。しゅふと玉藻の前が声をあげた。

アリスフィールが今度こそ彼とドレイクを癒そうとする。しかしあラと玉藻の前が声をあげた。

「あ、どうかしたのかね」
「え、なんか敵さんが降伏っしゃいましたよ？」
「なに？」

そこで、ようやくマシュが気づく。

カルデアからの通信がないのだ。そして感じるものがあった。天地が揺らいでいるのである。
これは特異点化の原因が排除され、人理の修復が起こり始めたのである。だのに、だとうのに——

人理定礎が……復元された……?

何が起こっているというのか。戦いは終わったはずだ。だのに、だとうのに——

何が起こっていくる。元の形に戻ろうと人類史が修正されていく。特異点化の元凶である聖杯を回収したのだ。それは正しい現象である。

それはなのに。

それなのに。

ならいだけカルデアの者達が強制退去されないのか——

どうしてカルデアとの通信も途絶えたままである。

加速的に崩壊していく世界の中で、彼女達は呆然と立ち尽くす。

ばかりだった。
「天つ風の篡奪者」

逆巻く魔力が紅蓮の大渦となり、忌むべき復讐者の腕より真紅の大風が解放される。それは光輝と功名の城の城壁に纏わりつき、刹那前那の抵抗も許さぬまま侵食していった。

驚愕は自身の性を圧し潰す死獣の脅に圧倒される前のものに落とされた者達へ。士郎は愕然とする。

それは先が早かった第二の者を奪う宝具だと……？そんなものが、なんだってヘラクレスに与えられるか。

それはその評価規格外の位階に据えられる『天つ風の篡奪者』であつて、それが調査専業者となったアレルメデスにのみ発見する第三宝具、と反転して復讐者となったアレルメデスにのみ発見する第三宝具、葉わなない荒唐無稽な宝具だった。たださえ強力だった復讐者アレルメデスのステータスが、光の御子の城によりて幸福と宝具以外の全てが飛躍的に増大する。

しかし彼の伝承や逸話、そこから導き出し推理するのは何者にも叶わない荒唐無稽な宝具だ。たださえ強力だった復讐者アレルメデスのステータスが、光の御子の城によりて幸福と宝具以外の全てが飛躍的に増大する。

アレルメデスとヘラクレスの中庸となる霊基、縛りつけられた復讐者の座、無尽蔵の魔力、光の御子の城によつて人理に在るあらゆる英霊を上回る性能を彼の手にすると。マスターとしての特権が
ある士郎は、彼のステータスを透視して愕然とした。

筋力と敏捷、耐久がA++で、魔力が評価規格外のEXとは一
敏捷性のみならず、その最大速度でもク・フーリンを超えるだら
ある。立っているだけで全身より発される力の波動に顔が強張る。

なんとめざる切り札、鬼札か。士郎の想定を遥かに上回る凶悪な道具
である。立っているだけで全身より発される力の波動に顔が強張る。

もや徒手空拳の打撃ですら、本来のヘラクレスが持つ十二の試
練を突破し、耐性を貫通し十二回勝利せても可笑しくない。張
る武威に、士郎は悟った。長期戦は余りにも無謀。
短期決戦で打倒する必要がある。

「セイバー、ランサー！五分以内に全ての力を振り絞れ、その後の事
を考える必要はない！全力で、一切の配分もなく全霊で奴を斃す
それを身に纏う。」

彼の意図は余さず剣兵と剣士に伝わる。決戦に移るまでに準備し
ていたルーンを解放して、光の御子が己の筋力と耐久を強化する。

ク・フーリンの刻印、ゲイ・ボルクの複製品が剣製される。

彼は心得たようにそれを掴むと、複製された魔槍が捔い手の意思と
強化するのみならず、限りなく真作に近い魔槍の意思を呼び起こし、
その身に魔槍の素材となった紅海の神獣クリードの外骨格を顕現さ
せて身に纏う。
赤く脈動する漆黒の鍾。クー・フーリンの頭部を覆う一角の兜。そして彼の手には自身の愛槍であるゲイ・ポルクが握られている。
衛宮士郎をマスターとしているからこそ取れる最強形態の一つだ。
魔槍は剣ではない、故に投影に当たり魔力消費量は二倍掛かる。
カルデアとの繋がりが途絶えたのを彼は感じていた。後はもう、己の魔力とアラヤ識に薫された魔力の備蓄のみで戦うしかない。
魔王の元には三本の選定の剣カリバーンが投影される。
オルタはそれを背負い、魔力で形成されている甲冑に固定した。漆黒の聖剣に渾身の呪力を装填する。
士郎が何を感じたのかは知らない。カルデアとの繋がりが絶たれ、在る事は知らない。だが彼が短期決戦でなければならないと断ずるには相応の証があると瞬時に了解した光の御子と黒王は、一切の出し惜しみを無くして即座に決着をつけさせる事を覚悟した。
対し、アルケイデスは悠然と構える。だが彼の大英雄は、士郎らの意思に応じて短期決戦をよしとし、それは武人の心意気か、英雄としての誇りか、或いは未だに完全に操られていな、大英雄の枠外れの精神力故か。
規格外の膂力、敏捷、耐久を備え今のアルケイデスに名を追随する能力を持つ。やはりお前こそが我が最大の敵か、とアルケイデスが呟いた。迎え撃たんと巨槍を構える、その眼前に迫ったクー・フー
リンは唐突に跳躍した。

クー・フーリンの背後より迫っていた呪いの風かが、光の御青は跳躍したことでアルケイデスへと迫る。彼は果ての槍に極光を瞬間的に装填し放った。オルタ渾身の一撃を留めも無しに相殺し、気流が爆発し爆風が轟く。地面が大きく陥没し飛来してきた無数の剣を吹き飛ばした。

士郎はそれを視るなり剣弾は無用と見切り、自身の限界を遙かに超える投影を魔術に敷く。─→投影、重装─→自身の限界を遙かに超える投影を魔術に

魔術回路が悲鳴を上げるのも無視し、虚空にある無数の歯車が火花を散らして高速で廻り始める。

頭上より全力で魔槍を振り下ろすクー・フーリンを、アルケイデスは、自らの筋肉に覆われた腕を無尽に振るう。しかしアルケイデスは、自らの筋肉に覆われた腕を無尽に振るう。

大英雄の心眼は、幾度も交戦したクー・フーリンに断念したクー・フーリンの次手を見切って構わず、振り向き様に復讐者は最果ての槍を彼の足下に突き込む。

無尽に振るう。しかしアルケイデスは、自らの筋肉に覆われた腕を無尽に振るう。しかしアルケイデスは、自らの筋肉に覆われた腕を無尽に振るう。
で彼を殴り飛ばす。
腹を貫く拳にクーン・フーンは吐きを散らして吹き飛び、
城壁に叩きつけられた。
手応えはあった、しかし仕留めるには到底至らない。だがそれで
構わなかった。斬りかからんとしていたオルタは、空に放り、背中を選定の剣三本とも引き抜く。柄を三本握り締め、
全てに魔力を込めた。所詮は使い捨ての投影宝剣が自壊する。
迎撃は転瞬、アルケイデスが槍技に於ける奥義を開陳した。
巨躯の筋肉を膨張させ、 ngươiを丸めるようにして力を溜めたアルケイデスが両手で構えた巨槍を打ち出すようにして突き出す。九連
する極光の閃光が、三条の宝剣の煌めきを完全に打ち消した。
巨躯の筋肉を膨張させ、斬りかからんとしていたオルタは、即座に黒剣を虚空に放り、背中を選定の剣三本とも引き抜く。柄を三本握り締め、
全てに魔力を込めた。所詮は使い捨ての投影宝剣が自壊する。
迎撃は転瞬、アルケイデスが槍技に於ける奥義を開陳した。
巨躯の筋肉を膨張させ、斬りかからんとしていたオルタは、即座に黒剣を虚空に放り、背中を選定の剣三本とも引き抜く。柄を三本握り締め、
全てに魔力を込めた。所詮は使い捨ての投影宝剣が自壊する。
迎撃は転瞬、アルケイデスが槍技に於ける奥義を開陳した。
彼は最果ての槍を撃つ体勢を整えている。オルタの全身に鳥肌が立つも、止まらない。止まる訳にはいかない。

「大地を支える者、西の果てに埋もれる者。旧き神々の末裔アトラスよ、天地を投げ出し逃れるがいい。その五体、別つ時が来たのだ。

さあ！『最果てを担いし巨神の柱』よ！ 星の力に抗え！」

黒き極光が斬り上げられる。黒王の全力の聖剣解放、対するは全く同等に位置する最果ての槍である。投擲された最果ての槍が大地より噴出した、黒い津波のような黒光の奔流を、正面前から破る。城が防壁となっていたが、城も余波ののみで多大な損傷にひび割れようとしている。

オルタの魔力、筋力を遠かに上回るアルケイデスの巨槍が打ち勝った。真名解放の魔力は打ち消されるも、投擲の威力は残っていたのだ。飛来した巨槍は、最大の一撃を放っていた故に硬直していった。
腹部を貫く槍で地面に縫い付けられるオルタ。アルケイデスが地を蹴り一瞬にして間合いを潰すと槍を引き抜き、なんとか踏ん張る寸前のサーヴァントなど見捨てられようとしたものを、断じて見捨てるオルタにトドメを刺そうと巨槍を振る。彼は、最新の英雄を、大英雄は断じて甘く見ていかなかった。

まるで黒王の聖剣に遙かに劣る黄金の剣を振るうかのように逆に反応し、その閃光の直撃を避ける。琥珀色をした鉄心の瞳と視線が合う。話すものではなく、アルケイデスは巨槍の穂先で彼を両断した。

「シロウッ！」
「シロウッ！」
ウタが彼を支え咄嗟に飛び退く。
追撃に出ると殺気を感じて背後を振り向く。
己の主人を斬れ憤怒に燃え猛犬が帰しいった。
「『刺ゲイし穿つ』—！」「…ッ！」「…ッ！」「…ッ！」「…ッ！」「…ッ！」「…ッ！」「…ッ！」「…ッ！」
狙うは心臓、謳うは必中。
その魔槍の真価に、アレゲイデスは後退を考えし。
しかしそれは間に合わない、見事な不意打ち。
故にアレゲイデスは果断だっただ。
下がるのではなく、進む。自ら間合を踏み込みの速さはクー・フー・リオン以上。
目を開くクー・フー・リオンの魔槍を脇に挟んで掌で掴む。
機先を制する無双の武量、彼はニヤリと嗤った。
「『天リインカー・ネンショソツ風の』—！」「野郎…」
薄汚ねぇ手でオレの槍に触れんじゃねえッ！
しかしクー・フー・リオンもまた負けていな。
二度も宝具を奪われるように醜態など晒さない。
槍を掴む腕はそのままで、クー・フー・リオンは渾身の力でアレゲイデスの腹部を拳で撃ち抜く。
神獣クリードの外骨格を纏った拳である。
紅い棘が食い込みアレゲイデスの内臓を殲滅し。
ショック死してもおかしくはない衝撃に―かし人間の忍耐、そのの究極に在るアレゲイデスは怯まなかった。
辛うじて心臓は無事、死んでもいないのなら充分だ。
瞬間的に―回復すろう。
元よりこの白打の間合も己のもの。
巨槍を地面に突き刺し、拳を握った彼が巌のような鉄拳を振りる。
超雄士が魔槍を奪い合うよう片腕で握り合い、互角の膂力で
真正面から殴り合う。アルケイデスは心臓と頭部を抉る拳のみを躲し、クー・フーリンを殴り抜く。
筋力は同等、耐久も等しい。だが白打の技量はアルケイデスが上を行う。しかもアルケイデスはクー・フーリンからの打撃を如何に受けようと次の瞬間には回復しているの。一方的に消耗していくクー・フーリンは、しかし微塵も衰えない闘志を燃やしている。
全身の筋肉が膨張し、身長がヘラクレスに比するまでに筋骨が拡張されていく。しかし理性を手放すものかと懸念に堪えた。本能で暴れる訳にいかない。アルケイデスは沸騰する闘争本能に身を委ね、過去最大の強敵と戦う。

その、自らの“槍”の奮闘の熱気が、気絶し掛けている士郎の意志を駆けつけた。オルタが懸命に魔力を送り彼中の聖剣の鞘が稼働していたお蔭であるのだろう。オルタを押し退けて立ち上がった士郎が改武した札装、カルデア戦闘服の機能を使用する。サーヴァントを強化する支援魔術に“瞬間強化”だ。

クー・フーリンの四肢に活力が戻る。のみならず一瞬のみ、正確にアルケイデスを凌駕した。ギラリとクー・フーリンの眼が光る。殴打の雨に晒され外骨格が破損した故に、拳を覆う細い箇所は折れている。剥き出し

- 1475 -
しの拳がアルケイデスの反応速度を超えて顔面に突き刺さった。

「これで終了だァッッッ！」

「いや、まだだ！射殺すーーー！」

「令呪起動ーーー」

猛犬が、牙を剥ぐタイミングを測っていたのだ。

アリケイデスはハップとした。クー・フーリンの目が死んでいない。

これは一騎討ちではなく、信頼する主人の指示待

焦っていない。これは一騎討ちではなく、信頼する主人の指示待

踏み込む。激甚なる体撃きが、今に魔槍を放たんとする光の御子

の懐に潜り込みました。

もしは回避は出来ない。この悪義を以て最大最強の好敵手を葬ら

「いいや、まだだ！射殺すーーー」

「これで終了だァッッッ！」

「いや、まだだ！射殺すーーー」
士郎は息を吐き出す、喘ぐようにして呼気を整える。二騎の大英霊の全力戦闘をカルデアからの支援も無しに支えつつ、自身は固有の結界を維持しながら、聖剣の贋作を無理矢理に造り上げ、あまっさえ死にかけた。アラヤ識によって蓄えられていた無尽蔵に近かった魔力が、この一回戦闘で七割が消費されただけだ。あまっさえ死にかけたが、それも、ああ、ねえ、ああ。ああ、今後もそう在りたいものだな。

クーカールがいたから勝てたんだせ。つくづく思う、オレのマスターがあんたでよかったってな。

だからこそ、ああ、なぜ今後にそう在りたいものだな。

それはそれとしてもお腹が空きました。帰ったら祝宴をあげましょう。

オルタの頭を撫でてやってる

あんたがいたら勝てたんだせ。つくづく思う、オレのマスターがあんたでよかったってな。

だからこそ。ああ、なぜ今後にそう在りたいものだな。

それはそれとしてもお腹が空きました。帰ったら祝宴をあげましょう。

オルタ……お前な……。

いや、いいか。腕にとりを掛けて作ってもらうものだな。
抗議するように主君を見上げる。
「…私は子供ではありません。」
「いいだろ、別に。可愛いいオルタさん」
「…」
「おおい…あんま見せつけないでくれるか？　オレも流石に気まずいぜ…」
「…」
「……」
「…」
「…」
「…」
「…」
「…」
「…」
「…」
「…」
「…」
「…」
必ず消滅する。
にも関わらず、どうして彼の骸が残り続けているのか。オルタの
言葉、「ク・フーリンが厳しい顔つきになり臨戦態勢となる。そし
て士郎の脳裏に電撃が走った。

カルデアとの通信が途絶えた。いつも肝心な時に切れるから、今
回も「またか」と感じただけで気にしていなかった。だがそれが何
かの予兆だったとしたら……？アルケイデスが死んでも残り続け
る骸、縛い止められたような心象世界。そしてオルタが真っ先に気
づいた聖杯の反応——

そしてかつつ敵の思考と心理を分析し、その能力と特性を考察し
ていたのが、全てこの瞬間に結び付く。

「そう、かー……？」「そうだ、かー……！？」「うーん、かー……？」「うーん、かー……！？」

愕然とする。

もっと早くに気づかるべきだった。人類史焼却者は聖杯を使って特
異点を造り出し、しかも早くて気づかべきだった。人類史焼却者は聖杯を使って特
異点を造り出し、しかも早くて気づかべきだった。人類史焼却者は聖杯を使って特
異点を造り出し、しかも早くて気づかべきだった。人類史焼却者

魔神柱は世界に落とされた釧。世界を固定するモノ。それは固有
魔神柱は世界に落とされた釧。世界を固定するモノ。それは固有

この第二特異点の元凶となる聖杯とは別に、もう一つ聖杯があり、
それを埋め込まれたのがヘラクレスだったのだ。

その結果、第二特異点の元凶となる聖杯とは別に、もう一つ聖杯があり、
それを埋め込まれたのがヘラクレスだったのだ。
結界という名の心象「世界」を固定し、術者が解消する事を決して許さない。果たして固有結界、無限の剣は士郎を閉じ込める牢獄となった。

最強の大英雄の力の根源だった無尽蔵の魔力。骸は消えない。死んだも残っている。たださえ強大だった霊基が、死体のまま数倍に膨れ上がった。

「読まれていた。知られていた。極限の剣は士郎を切り札を切って戦いを終わらせると分析していたのである。そして魔神柱はこう考えている。士郎が魔神霊を倒せないならそれに少し、倒されるにしろ、時間は確実に稼げる。

それでよし。自然に流してしまったが、魔神柱が互いに情報をやり取り出来るのはいい、そうでなければ士郎が固有結界を揺さぶる事を知っていたのだ。」

そうとしか考えられない。魔神柱は、士郎が切り札を切って戦いを終わらせると分析していたのか、士郎が固有結界を使える事を知っていたのだ。

しかし、その魔神霊は倒した。であるどこから漏れるか。

もらう、倒した魔神霊そのものからだ。死徒のように殺しても死まない。或いは倒しても通常の手段では殺れない特性を持ち、殺した後に復活されたか。

- ･･････-

鬼殺の心象「世界」を固定し、術者が解消する事を決して許さない。果たして固有結界、無限の剣は士郎を閉じ込める牢獄となった。

最強の大英雄の力の根源だった無尽蔵の魔力。骸は消えない。死んだも残っている。たださえ強大だった霊基が、死体のまま数倍に膨れ上がった。

「読まれていた。知られていた。極限の剣は士郎を切り札を切って戦いを終わらせると分析していたのである。そして魔神柱はこう考えている。士郎が魔神霊を倒せないならそれに少し、倒されるにしろ、時間は確実に稼げる。

それでよし。自然に流してしまったが、魔神柱が互いに情報をやり取り出来るのはいい、そうでなければ士郎が固有結界を揺さぶる事を知っていたのだ。」

しかし、その魔神霊は倒した。であるどこから漏れるか。

もらう、倒した魔神霊そのものからだ。死徒のように殺しても死まない。或いは倒しても通常の手段では殺れない特性を持ち、殺した後に復活されたか。
「ないとは言えない。殺しても別の場所で復活するだけというのでは、可能性が浮上するのだ。そしてカルデアが攻撃されている可能性も考えられる。カルデアの者が、カルデアに退去する際に逆探知されて座標が割れたりしない。しかしカルデアは今、特異な力場に守られ、冠位魔術師の英霊でも座標の特定是不可能に近いらしい。簡単に座標の逆探知など出来なかっただけに、魔神柱は不死であら、と顔から血の気が引く。

「……いや、待て」

「……いったい……」

『死……魔神柱……。そうか、そういう事か！？』

讒言のように呟きながら思考と記憶を纏め、全てを悟った士郎は、謹言のないように気を吐さないことをねらっている。

『レフ・ライノール！お前か！？』

カルデアに安置されているその死体。逆探知は出来ずとも、その遺体を利用する事は叶うかもしれない。痛恨の失策に戻った士郎の叫びを嘲るように、彼らを脅かす最悪の敵が鎌首をもたげる。

最悪の策謀は、此処に成った。アルケイデスの霊基に打ち込まれた鎌首が、彼らの前に立ち塞がったのだ。
魔神霊、顯現。
第三特異点の不穏な様相を、人理継続保障機関フィニス・カルデアは、特に何事もなくモンタリング出来ていた。出来てしまっても、機能する通信。継続する観測。意味消失防ぐため交代で続けられカルデアの戦い、何もせずただモニターを眺めるだけの自分達に後ろめたさのような、懲懲の念がないとは言えない。事細かに行き交う管制室の職員達の喧騒は本当に忙しくて。美遊やイリヤスフィールはいたまめでも序盤の、黒髭エドワード・ティーチとの遭遇では笑っていった。彼のキャラクター性もあり、緊張感もなく不運な人だがあ、と。フランシス・ドレイクとの出会いでも、学校で習った！とミーハーな気持ちで気楽に構えていた。だがその直後から空気は一変する。敵サーヴァント、アルケイデスと名乗った復讐者の奇襲を受けて、カルデアの精神の主柱である士郎が甚大なダメージを負ったのだ。言語を絶する激痛に痛られた悲鳴だった。魂の壊れる断末魔だった。 
だ。どんな傷にも呻き声ひとつ上げなかったという士郎が、人間の許容できる痛みの限界を遥かに超えるそれに絶叫していた。レインプードした者の存在を観測する職員の人が慌て、動揺する。観測している存在するか激痛の大海、神の侵食、魔法回路がズタズタに引き裂かれ、肉体が溶解し、計測している魂が破損していく。
その叫びは聞く者に精神を侵す猛毒がある。美遊が顔を真っ青にした。イリヤは吐き気をして、わずか耳を塞いでしまった。涙を流して桜がコフィンに入ろうとするのを、髑髏の仮面をした人
のが必死に抑え込んでいた。
悲鳴すら途切れると、監視員が呆然と呟いた。士郎さんが、死亡しました……と、精神死した、と。誰もそれを信じられなかった。
特異点では戦闘が始まっている。やがてアルケイデスと名乗った敵がアリスフィールの宝具をなぞた
る宝具でなんとか快復したはずの士郎だったが、聖杯ですら癒し
れない高い魂の状態が計測されている。
その後にネロが召喚した玉藻の前にによって魂が修復されなければ、士郎は本当に死んでいただろう。いや、それまでに精神死を遂げていなかった事の方が驚くに値した。カルデアの機器すら誤認するほ
どに危険な状態だったのである。ロマニは周囲の強張った空気をほ
ぐす為に、敢えて軽い語調で言った。

さ、すがは士郎くん。不死身の英雄です、なら不死を手放して、死を選択する猛毒を食らっても生きてたんだからね。

応える者はいない。握り締めた拳から血を滴らせているロマニは、遅れて気づく。自分の声も、顔も、纏う空気すら硬質な軽口に、同調できる人間なんていないだろう。

ロマニは嘆息して、やるせなさそうに握り拳を解いた。そして少し女達に言う。サッと腕を振ると血の滲んだ手袋は白さを取り戻していった。

「気分が悪くなったら、休んでいてもいいよ」

「ふわふわとしていた、現実感の欠如を塞ぐ破壊的な初戦だった。これが普通の女の子のイリヤには嚴しかったのだろう。青い顔のまま、医療班の人に付き添われて管制室から離れていた。それを咎める事は誰もしない。出来ない。しかし美遊は残っていた。

「美遊ちゃんは休まないのかい？」

「はい。お兄ちゃん……士郎さんは、戦っています。何もしてないのに逃げられません」
蒼白な顔のまま、だがその琥珀色の瞳は現実に向かい合っている。
ロマニはその目を覗き込んでいた。そして何かに気づいたように、時間を経過ぎた。
カルデアに逃げ場はない。イリヤは暗い顔のままだったが、時間が経つと戻ってきた。
それがどうにも気づいたようだ。
彼女は…と目を見開いた。しかしすぐに頭を振り、ロマニは美遊の意向を尊重する。
時間経過で食事、休憩、仮眠を挟みながらカルデアは武器を用いない戦いを続けた。
カルデアの防備を固め、それを受けてアルトリアが退去して来て、アタランテは ...
切嗣が急ぎ再召喚される。何を彼が感じたのか、美遊には分からなかったが、けど漠然と緊張する。ロマニがカルデアの職員達に半数交代させた。各区画を封鎖しシステムをロックし、厳重な警戒態勢が敷かれる。
やがて第三特異点の三回目の戦い——決戦が繰り広げられる。その辺りからだ。唐突に、レイシフトしている皆との通信が途絶した。
ロマニがダ・ヴィンチとアグラヴェインと相談する。万能の人はあくまで柔和な面持ちで驚いた素振りを見せた。図ったようなタイミングだ。これまでカルデアの通信は安定していたが、今回ばかりは余りにも出来過ぎている。何かの思惑を感じられるのだ。通信の断絶だ。

「わぁお。士郎くんの読み方が当たったのか。だっけしたら……」

「レオナルド・ダ・ヴィンチ」

「分かっているよ司令官代理。逆探知できないように細心の注意を図るよ。」

「分かっているらしい。ロマニ・アーキマン、お前も成すべきを為せ。」

「勿論だ。……王よ。」

「勿論さ。ボクの魔力の隠蔽、並行してカルデアの一時的な神殿化、設備の構造強化、全部やってある。アグラヴェイン、キミは緊急時の戦闘指揮を執ってくれよ。」

「戦闘室に詰めているサー・ヴァント、騎士王アルトリアは鉄の宰相の呼び掛けに頷いた。何が感する事なく採配を振るうと良い。今は卿が指揮官だ。私も卿ならば安心して任せられる。私に気兼ねする事なく採配を振るうといいから。」

「は。しかし王の行動を縛るつもりは毛頭ございません。何か感じる」ものがあれば、思うように動いていただきたい。……
私の勘で…。

「私の勘で…。

…まないが、また頼む。アグラヴェイン卿。

御意のままに。山の翁よ。アーチャーとアサシンの再召喚は

…思えは最も振り回して来たのは卿だった。

すまないが、また頼む。アグラヴェイン卿。

…山の翁よ。アーチャーとアサシンの再召喚は

…卿だっか。

ながむしろ頼む。アグランヴェイル、フェル、間桐桜。私はお前達に何も期待しない。

」「アグラヴェイン！」「口を挟むな。ロマニ・アーキマン。カルデアはいつから保育施設になった？戦力として期待できる者を保護する施設ではあるまい。」「アイリャスフィール・フォン・アインツベルン、美遊・エーデルフ

…山の翁よ。アーチャーとアサシンの再召喚は

…卿だっか。

ながむしろ頼む。アグランヴェイル、フェル、間桐桜。私はお前達に何も期待しない。

」「アグラヴェイン！」「口を挟むな。ロマニ・アーキマン。カルデアはいつから保育施設になった？戦力として期待できる者を保護する施設ではあるまい。」「アイリャスフィール・フォン・アインツベルン、美遊・エーデルフ

…山の翁よ。アーチャーとアサシンの再召喚は

…卿だっか。

ながむしろ頼む。アグランヴェイル、フェル、間桐桜。私はお前達に何も期待しない。

」「アイリャスフィール・フォン・アインツベルン、美遊・エーデルフ

…山の翁よ。アーチャーとアサシンの再召喚は

…卿だっか。

ながむしろ頼む。アグランヴェイル、フェル、間桐桜。私はお前達に何も期待しない。

」「アイリャスフィール・フォン・アインツベルン、美遊・エーデルフ

…山の翁よ。アーチャーとアサシンの再召喚は

…卿だっか。

ながむしろ頼む。アグランヴェイル、フェル、間桐桜。私はお前達に何も期待しない。

」「アイリャスフィール・フォン・アインツベルン、美遊・エーデルフ

…山の翁よ。アーチャーとアサシンの再召喚は

…卿だっか。

ながむしろ頼む。アグランヴェイル、フェル、間桐桜。私はお前達に何も期待しない。

」「アイリャスフィール・フォン・アインツベルン、美遊・エーデルフ

…山の翁よ。アーチャーとアサシンの再召喚は

…卿だっか。

ながむしろ頼む。アグランヴェイル、フェル、間桐桜。私はお前達に何も期待しない。
少女達はこの男を畏れていた。憎々しいものであると感じさせない、人間ではなく機械のような印象を抱かせず、この闘い男の如き男が。美遊の隣でイリヤが身を縮めている。特に桜の恵えようは酷かった。怒りというものに、或いは無機的な瞳に晒される恐怖感は強くて、彼が『清純』を謹いながらも、騎士と密通した唾棄すべき王妃の存在はある。無垢であろうと、なんであろうと、女である以上は信用に値しないのだろう。彼にとっては。例外は一生涯仕え、王に従っていて千騎士王のみである。

「分かってます。」

「分かってます。」
イリヤが腕の裾を掴んで、アグラヴェインの眼光に怯えながらも、美遊を呼んだ。それに美遊は柔らかく微笑む。

「いや、美遊……」

「み、美遊……」

「え、と戸惑うイリヤの手を握り、少女は鉄の男を睨む。

「邪魔はしません。もしそうならそうだったら、見捨ててくれても構いません」

「でも何か私に出来る事はありませんか。私、この事は何も知らないですので……出来る事があるなら、それから逃げたりなんかしません」

「ドクター。きっと士郎さんなら、こう言いますよね？」「美遊ちゃん……」

「敵。駆け引きの緊迫感、自分達の知る黒化英霊を、遥かに上回る敵。駆け引きの緊迫感、
濃密な殺気。大人と子供の戦いの境界をはっきりと感じていた。美遊が幾ら才気煥発の少女とはいえても、脅威を感じて恐怖する感情はあるのだ。桜なんて、イリヤよりも年下なのだ。イリヤは自分が心情なく震えている様が、酷くもともなく感じて唇を噛む。

「私も！私も…逃げない！ルビーも、美遊もいるんだもん！皆は私が守る！」

そんにアグラヴァインは露骨に嘆息して視線を切った。優しい言葉も、何も掛けない。尊い想いであろうが、なんだろうが…そんななもので戦いに勝てる訳ではないのだ。

幼い決意表明、聴く価値はない。彼はどこまでも合理的で、故にこそ彼は計算のあてになる者達に言う。それにアグラヴァインは露骨に嘆息して視線を切った。優しい言葉も、何も掛けない。尊い想いであろうが、なんだろうが…そんなもので戦いに勝てる訳ではないのだ。

「―魔神柱がこちらの想定通り、或いはそれ以上の事を可能とする訛、逆探知によるカルデアへの侵入も有り得るだろう。カルデアの座標を知られる事は我々の敗北を意味する。なんとしても阻止せねばならん。レオナルド・ダ・ヴィンチ、確実に逆探知は防げるか？」

「ん…」
「ま、防いでみせるさ。出来なくても気を使わせん。それを嫌だと思ってるんだ。誰かから手間をかけられてもダメだ。問題はそれ以外の手段でなんらかの干渉を受ける事なんじゃない。カルデアで戦闘んだって馬鹿げてる。精密機械がどれだけあると思ってるんだ。逆探知が行われるとしたら、それは特異点での戦いが終わって、ローマ皇帝達が退去する辺りになると思う。なると厄介だぞ。ボクらの観測が行われると言ったら、それほど特異点の定増復元が済む前にカルデアに皆を退去させないといけない。逆に、特異点の干渉を受けてる事じゃないか。カルデアの出入口とななる処を通る。魔神柱がまず侵入してくるとしたら何処が考えられる？」

ロマニの言にアグラヴェインは顔を膨らませる。万能の人も同意見のようだ。

根拠は——
　此処を通らない事には、レイシフト先から戻って来られない。逆探知するにしろ、なんらかの抜け穴があるにしろ、必ずカルデアの出入口となる此処を通る。
　此処はカルデアの心臓と言っている。どんな些細なダメージも許容できない。だからここでの大規模な攻撃は一切許可できないよ。
　「根拠は」「此処を通らない事には」「逆探知するにしろ」
　根拠は——
　此処を通らない事には、レイシフト先から戻って来られない。逆探知するにしろ、なんらかの抜け穴があるにしろ、必ずカルデアの出入口となる此処を通る。
　此処はカルデアの心臓と言っている。どんな些細なダメージも許容できない。だからここでの大規模な攻撃は一切許可できないよ。
演算装置・トリスメギストス・レイシフドしたマスターたちの入った霊子筐体、そしてカルデアの心臓にして頭脳。些細な損傷すら致命傷となりかねないのだ。

ダ・ヴィンチが言った。

だからやるとなったら最小規模で、最短で、侵入者が現れたから一撃必殺で仕留めなきゃいけない。諸事情からロマニは攻撃に参加させられないからね、騎士王様と他のサーヴァント達で決めないといけね。

「だからやるとなったら最小規模で、最短で、侵入者が現れたから一撃必殺で仕留めなきゃいけない。諸事情からロマニは攻撃に参加させられないからね、騎士王様と他のサーヴァント達で決めないといけね。」

――決意を示しても、覚悟を持っても、大人達は自分達を蚊帳の外に置いている。

その光景に美遊達は悔しさを抱いた。だがどうにもならない。俯いて、邪魔にならないようにしているしかない。

そんな彼女達に、アルトリアが微笑む。

――……分かった。そうするしかないのなら、そうするまでだ。

――イリヤスフィール

「イリヤスフィール、……？え、セイバーサン……？」

「私と仮契約をしましょう」

アルトリアの突然の誘いにイリヤは眼を剥いだ。だがイリヤよりも驚いたのはアグラヴェインである。イリヤらは、英霊召喚システムによって迷い込んできた故に、生者であるならサーヴァントの霊基を持つ。サーヴァント同士が仮とはいえ契約で
「彼女には戦う覚悟がある。それを無下にしたままなのはいただけ
分な力を発揮できな。イリヤは仮装とはいえサーヴァントだが、霊基はキャスターだ。カルデア内部の極限された時間内だから出来ないものではないだろう
容れられた事はありませんでしたな。
…しかし…いった、御身がそのような眼をした時、私の進言が
…はい、アグラヴェイン卿。
すまない、アグラヴェイン卿。
唯一女にはマスターの資格がある。魔力でも、武力でもない。詰め
そうしている気にアルトリアはイリヤを見据えた。透徹とした眼差
し、平凡な少女を捉え。そしてイリヤは、その目から逃げなかっ
た。
呆れ気味のアグラヴェインに、アルトリアは穏やかに謝意を向け
る。
「貴女にはマスターの資格がある。魔力でも、武力でもない。詰め
ない心、それを持つ貴女になら剣を預けられる。私と仮契約してい
tだけますか？
「ええ。私のマスターはシロウだけだ。だからこれは一時のみの仮
契約。人理を守護せんとする志を同じくするならば、共に戦うことに
否はありません。さあ」
「ふふ。そう固くならないでも大丈夫ですよ」

「ふふ。そう固くならないで大丈丈でしょ」

穏やかに、優しく、そして導くように手を差し伸べる騎士王に、イリヤは勇気が百倍する心地を得られた。この人がいるなら大丈夫

統べた王のカリスマというものだろうか。

手を取り、何かが繋がったような気がして。イリヤの手に令呪が現れる。左手の甲に現れた刻印を抑えて、イリヤは決然と奮い立った。

「サクラ」

「サクラを守りなさい。卿ならば問題なく務められると信じている。」

「サクラを守り、カルデアを守る。卿ならば容易い事だ。卿の剣を、頼りにしている。何時かのように、私の背中を預けよう」

「いいえ、ランスロット卿」
こくりと桜は無意識に頷いた。そして桜は自覚する。自分に力を貸してくれる存在を。小さな体の中を無作為に暴れていた力が治まっていた。それどころか知らないはずの戦い方や、宝具の使い方までが桜の認識下に滑り込んで来たのだ。彼女の小さな体に黒い甲冑が現れた。

「イリヤスフィール、ミュ」

「はい！」「…」

そしてアルトリアは、ステッキの魔術礼装を握り締める訃杯の乙女達に語り掛けた。

「戦う覚悟を持つのはいい。しかし自分達だけで戦おうとしてはいけない。ここには私がいる、アグラヴェインや魔術王、ダ・ヴィンチやアルカディアの狩人、顔は知りませんが、確かな実力のあるアサシンも。気負う事はない、出来る事を出来る範囲でしなさい。」

「はい！」「…」

イリヤと美遊の性格の違いが出て、明るさと覚悟の篭った返事だった。アルトリアはそれに微笑み、風の瞬に覆われた聖剣を顧す。れんれん…流石騎士王様だとダ・ヴィンチは苦笑し、ロマニも安心得て肩から力を抜いた。それにいる。ややあって、程好い緊張感に包まれた空気の中…アルトリアう。
は静かに警戒を促した。冷え渡る第六感が、その時が来た事を告げたのだ。

「来ろ。アグラヴェイイン！」
総員戦闘配置。様子見はなない、ただちに状況を決するぞ。え！

アグラヴェイインの号令が響く。

そして——
アグラヴェインの号令が下った次の瞬間、突如として人理継続保
障機関フィニス・カルデアの心臓部、中央管制室に濃霧のような霧
状の魔力が立ち込んだ。
床を舐める毒ガスじみた魔力の霧。其処から立ち上がるは竜の牙
で構成された骸骨兵、槍、剣、弓で武装した雑兵。空間を縦に引き
裂いて姿を現したのはカルデアに縁深い男である。
錆のような髪、深緑のコートと紳士然としたシ
ルカヒト。そして他者を見下した面構え。魔術師然としていな
ら、何処か俗的な人間臭さを感じさせる瞳。
人間を遥かに超え、数騎のサーヴァントにも比する膨大な霊基規
模を備えたその名をレフ・ライノールといった。

「レフ……！？」

〜ほ、ほ。これはこれは、錆々たる顔触れじゃないか〜
【「ある、クソッ！レオナルド、逆探知されたのか！」「いや、それらしき干渉は全て絶った！カルデアの座標はまだ掴まれていないはずだ！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」「レフの亡骸を触媒にして逆召喚したのか！」】
「だ。

可及ややかにレフの亡骸を破棄しなければならなれ！レフ・ライノル・フロウスはロマニの叫びにやや意外にそううに眼を瞬いた。

「まさか思い至ったのだろう、お前はは、ここれはいい！昼行灯を気取っていったのか、ロマニ・アーキマン！そこの通り、お前達は私をこのカーデアに招待しろたも同じなのだよ」

嘲笑する悪意。

得意に明白さ実は、堅実に敵の正体を探ろうとしたのがそもそもの間違えだと糾弾していた。

竜牙兵が不揃いなマリオネットのように関節を鳴らす。仰々しく両手を広げ、舞台役者の如くにレフは醜悪に嗤った。

「ごきげんよ、そしてさよなら！お前達の旅はここで終わる。他ならぬお前達自身の傲慢が！お前達を滅ぼのさ！」

「―遺言はそれで終わりか？招かれざる客、早々にお帰り願おう」

宝具『時クロノス・ロズのある間薔薇を摘め』が起動する。

不意討つは冬木の焼増しの如く赤いフードの暗殺者。穿つは第二宝具、魔術師殺しの代名詞足る『神ファントム・パニッシュメント』であらう。

雑兵悉く無視しての暗殺者の一撃は、過たるべきフの背後を襲いその心臓を貫いた。

ゴボと吐血したレフは、しがし。

己を背後から貫くナイフの感触に刷いた笑みを絶やさないい。

「アサシンか…つづく芸のない…」
レフが斃れる。そのまま骸は魔霧に溶けて消えていく。だがレフは嗤っていた。

「莫迦め。そう何度も同じ手で私を…」
「煩い蝿だ。黙っていろ…」
尚も躊躇るレフの頭蓋に、アサシンはコンデンサーの銃口を向け、発砲する。弾け飛ぶ頭部に、イリヤが短い悲鳴をあげた。アサシン…切嗣はそれにぴくりと反応するも、それでもレフが穿たれたのと同時に動き出したアルトリアとアタランテが、竜牙兵を一掃する。そうして侵入者は撃滅され…これ…！？
「これは…！？」
現れたのは竜牙兵だけではなかった。一次の瞬間には、フィルムを逆巻いたように再生していく。

「これには…！？」
ははははは！この私を一度は殺してくれたお前に、私が注意を割いていないと思ったか？

現れたのは竜牙兵だけではなかった。一次の瞬間には、フィルムを逆巻いたように再生していく。

黒々とした皮膚。蛮人の神悪魔と呼称される怪物がいた。常人を遥かに超える巨躯、蝙蝠のそれに近い禍々しい翼、山羊のような捻れた大角、卵と胴、山羊の後ろ足と頭、尾として生える蛇を持つキメラが。最上位の亡霊に等しい魔性的な、エンシェントゴーストが。
敵エミーが一斉に動き出した。アタランテが迎撃の矢を放つ。

アサシンが舌打ちして短機関銃を掃射した。百般のハサンが雑魚の

築。その後、アトリアが風の軽を解く。裂帛の気合いと共に疾走し、その背

を裏に甲冑を纏った騎士が追う。魔神柱が凝視した、魔眼が無作

為に魔力を発してカルデアの設備ごと蹂躙せんと嘲笑を爆発させた。

死に魔力を発してカルデアの設備ごと蹂躙せんと嘲笑を爆発させた。

駆け去り際に、ロマニはイリヤの肩を叩いた。魔神柱に互い気取

らせぬ魔術が掛けられる。イリヤと桜、美遊を繋ぐレイラインの構

築。そして彼女へと付与される身体硬度の増す防御魔術。ロマニは

苦渋の顔で言った。逃げてもいい、だから生き延びてくれ！

御免っ！私はもう行く、カルデア内に潰した敵が此処にしか

ない訳じゃないんだ。イリヤスフィールちゃん、踏ん張ってくれ！

ダ・ヴィンチの激励、ロマニの優しさ。イリヤは挫けない。ここ

で立ち往生していても、それこそ死に至る。

死の恐怖に支配されない
「ああ！ああああ！ツッツッ！」

満身から吼えた。腹の底から咆哮した。
そして己の頸を叩いて怯術に練む心に活を入れ、イリヤは面を。

桜の幼い力。眼を締めるように己の頸を叩いた魔を、イリヤは、生として、生物として立ち上がった。

「桜ちゃん！お願い、行って！」

「っ…ッ！」

「ああああー！」

満身から吼えた。腹の底から咆哮した。
そして己の頸を叩いて怯術に練む心に活を入れ、イリヤは面を。

桜の幼い力。眼を締めるように己の頸を叩いた魔を、イリヤは、生として、生物として立ち上がった。

「桜ちゃん！お願い、行って！」

「っ…ッ！」

「ああああー！」

満身から吼えた。腹の底から咆哮した。
そして己の頸を叩いて怯術に練む心に活を入れ、イリヤは面を。

桜の幼い力。眼を締めるように己の頸を叩いた魔を、イリヤは、生として、生物として立ち上がった。

「桜ちゃん！お願い、行って！」

「っ…ッ！」

「ああああー！」

満身から吼えた。腹の底から咆哮した。
そして己の頸を叩いて怯術に練む心に活を入れ、イリヤは面を。

桜の幼い力。眼を締めるように己の頸を叩いた魔を、イリヤは、生として、生物として立ち上がった。

「桜ちゃん！お願い、行って！」

「っ…ッ！」

「ああああー！」

満身から吼えた。腹の底から咆哮した。
そして己の頸を叩いて怯術に練む心に活を入れ、イリヤは面を。

桜の幼い力。眼を締めるように己の頸を叩いた魔を、イリヤは、生として、生物として立ち上がった。

「桜ちゃん！お願い、行って！」

「っ…ッ！」

「ああああー！」

満身から吼えた。腹の底から咆哮した。
そして己の頸を叩いて怯術に練む心に活を入れ、イリヤは面を。

桜の幼い力。眼を締めるように己の頸を叩いた魔を、イリヤは、生として、生物として立ち上がり。
魔剣を引き摺るようにして桜が走り出した。魔神柱が眼を剥く。
こんなにも幼い少女があの娘と同じデミ・セーヴァントである事に
少なからず驚愕と、関心を抱いたのだ。
アルトリアが嘲く、「風よ〜魔霧を周囲に蔓延しないように
小さな弾丸の如く竜巻を突破した。そして不憫な気合が口腔よ
り進む。一瞬が竜牙を砕き亡霊を容易く切り裂いた。蛮神の眼が
憎らしい光を発する。桜は回避しようとして、その前にアルトリア
が飛び出し桜を守った。
赤と青のカレイドスカイアへと変身するや、マジカル・ルビーが奇
な鎧に煤をつけただけだ。アルトリアは横目に桜の無事を確認する。
昨夜のデアは体一つから色物を混ぜ合わせた！？面白い、笑わせ
てくれる。こんな人類…残す価値などないな…
！おお！久々の！召喚されて以降久々の出番とセリフ〜！
は…？は〜ははは！？なんだ、なんだそれは！？
イリャスフィールとミュはコフィンを！
はい！分かりましたっ！
戦わんとする勇気を。
無駄だ、無駄だ、守るのがあるだろう？
命よ大事なカエルデアの発明品があるのだろう？
コンフィに入っている生身の者らを守らねばならなろう？
全てを守り抜く？
多勢に無勢だ、出来はしない。\元より魔神柱フラウロスに『勝利してやろう』という目のがない。\真っ先に気づいたのはアングラヴェイオンだ。
周囲の者に気を配るアルトリアよりも、アングラヴェイオンは只管に魔神の隙けを伺っていたのだった。\故に気づけた。
\多数の魔眼の齎す破滅の魔力、その颶風。\際限なく湧き出る竜牙兵をはじめとするエネミーを斬り伏せながら、アングラヴェイオンは眼前にしていた蛮神の爪に晒されるとも構わず跳躍した。
魔神の凝視が熱線を放っただけ、\狙われたのは疑似地球環境デュール・カルデアである。\遠巻きにして、ハンサムに守らていった職員が悲鳴を迸せ、「アングラヴェイオン？」\アルトリアが驚愕する。
彼の甲冑を貫通した熱線が、アングラヴェイオンの胴を大きく抉っていったのだった。
直前に蛮神の爪を背に浴びていった事も合わさり重大な負傷である。
だが固堅としてアグラヴェインは吼えた。

----

「陛下っ！」

「っ」

「おおおおおおおっッッッッッッッ！」

「させるか……！」

「司令官代理に遅れるなっ！」

「させるか……！」

同じ円卓を囲った同胞である。アルトリアはその遺志を汲み取って馳せた。辺り一面無作業に逆る。魔神柱の魔力の籠まった視線を摘い潜る。

魔神柱はアルトリアにまるで注意を向けなかった。眼中にないのではなく、気にする必要はないという意識が透けて見える……。

魔神柱はアルトリアにまるで注意を向けなかった。痛打を浴びせられても魔神柱はなお、無数の魔眼から夥しい熱線を発していた。アルトリアが吼える。なぜと、迅速に斬り倒すと。だが魔神柱の生命力も強大だ。幾度も聖剣の斬撃を浴びても。体当たりのように桜が魔剣を突き刺しても力尽きない。

魔神柱フラウロスは分かっていた。弁えていた。単独でカルデアを打倒する事は不可能だと。勝利を目指すのは現実性の欠けた目論見だ。故に彼は、

アグラヴェインが更に体を横とする。死力を尽くし、命を賭けてカルデアの設備を破壊する為だけに現れたのだ。
守護する——命じるだけではない、有言実行する指揮官がいた。
カルデアに浴びせられる熱線を撤く防ぐ。剣が熔け鏡が爆ぜる。
餌のハサンが、嘗めるように走る魔の視線から近未来観測レンズ・シバや、霊子演算装置・トリスメギストスを死守して消滅していく。
「は、は、ははは——！英霊ともあろうものが、己を捨て石とするか！？」「ははは——！英霊ともあろうものが、己を捨て石とするか！？」「は、は、ははは——！英霊ともあろうものが、己を捨て石とするか！？」「は、は、ははは——！英霊ともあろうものが、己を捨て石とするか！？」「は、は、ははは——！英霊ともあろうものが、己を捨て石とするか！？」「は、は、ははは——！英霊ともあろうものが、己を捨て石とするか！？」
「アーチャー、雑魚の掃討は僕に任せろっ。君は魔神柱に——！？だがそうなれば多勢に無勢——いや、分かった。頼むぞ！」「時のある間に薔薇を摘め」「時のある間に薔薇を摘め」「時のある間に薔薇を摘め」「時のある間に薔薇を摘め」「時のある間に薔薇を摘め」「時のある間に薔薇を摘め」
「イリヤさん、後ろですっ！」「イリヤああ！」「イリヤさん、後ろですっ！」「イリヤああ！」「イリヤさん、後ろですっ！」「イリヤああ！」
「え？」
美遊の悲鳴、ルビーの喚起。イリヤが振り向く先に、赤いフードの暗殺者が立っていた。彼女を噛み砕かんとした牙で腕を圧搾され、立ち竦む少年を首を巡らせて振り返り…背中越しに声を掛けた。

「無事か」
「え…お父さん？」
「ごめんなさい…！」
「ごめんなさい…！」
「火力は申し分ない。だが、立ち回りが致命的だな。とても見たものじゃない。」
「少しはそのの。美遊という娘を見習え。だが今すぐに学習しろと
そうは思いの無理な話だ。担ぐぞ。」
「え？え？ワワワワ！？」
切嗣は短機関銃を捨てると、無造作にイリヤの短装を担ぎ上げた。

「待ち回りは僕がやる。君は敵を撃つことだけに集中しろ。いいな？」

「はっ、はいっ！」

頼りになれる……不思議と安心する。イリヤはそんな時なのに胸を

落ち着け褒めつつ言い続ける。切嗣はフード越しに美遊を見る。

「美遊・エーデルフェルトー」

「は、はいっ」

「君に言うことはない。その調子でやればいい。コフィンの守りを

任せる。二十秒保たせるだけって！」「はっ、はい！

美遊はこの暗殺者に苦手意識があった。只管に苦手、それだけ。

なのに、間違いはないと信じられるのは何故だろう。

切嗣が加速する。自身の常識を超える超速にイリヤは眼を回して

駆逐していた。イリヤの持つ膨大な魔力にものを言わせた魔力弾

は、エンシェントゴーストやキメラ、デーモンをも次々と屠ってい

く。

無限に湧き出るエネミーの数が目に見えて削れていくわけではない。

イリヤは己を肩車する暗殺者が一人そうや英霊エミヤのように、自

分に近しい誰かなので……もしかすると、あの人はなんじゃないか

と感じ始めていた。
敵の出現するページを上回る撃破効率。切嗣は鳴玉の力を使い口から血を溢れさせているが、フードの下にそれを隠していた。

アタランテが魔神柱の撃破に参加する。剣を引くと弓を引き絞った。刻一刻とハサンが消滅していく。百体の山の翁が半数を切った。そしてーーアグラヴェインは血塗れになり、両腕を失った体。口に、英霊エミヤが投射して備蓄していた宝具を咥えた。

「勝機を作る。これ以上はさせるものかーーー！」「アブラヴェイン……！？」「王よ、先に逝く不忠……御許しを……！」「は……！」「桜、ランスロット！ 合わせろ！」「アブラヴェインは激怒の任せるままに、されど一寸の冷徹さを損なわず風を束ねた。」
魔剣が貫いてきた風弾を相殺した。魔神柱が哄笑する。その身が致命的な損傷を受けて、再生が叶わないと悟った故に。

「おめでとう、諸君の勝ちだ。おめでとう、おめでとう！　そして
ハハハ！　フラウロスの嘲りが木霊する。

魔神柱の撃破と共に、エネミーの出現は止んだ。急ぎ残敵を駆逐すると、後に残ったのは交戦の結果残された爪痕だった。

カルデアの職員達は顔面を蒼白にする。アルトリアや、切嗣、アタランテ…彼らは顔を隠しきる。勝利の喜びなどない。その空気に生き残った安堵感に浸る事は、イリヤや桜、美遊にも出来なかった。

被は、甚大ではない。さと軽微でもない。細やかな損害すら致命傷となるカルデアの心臓部で、人理の守護者達は立ち尽くした。
被害報告：

脱落者：アグラヴェイン、百脈のハサン

設備損害：疑似地球環境モデル・カーディス、損傷皆無

近未来観測レンズ・シバ、損傷皆無

霊子演算装置・トリスメギストス、損傷皆無

疑似霊子演算器、小破

守護英霊召喚システム・フェイト、中破

レイシフト召喚、喚起システムに影響あり

・レイシフトの再召喚不可

・新規サーブァントの召喚不可

・再召喚不可

・早急なる修復の必要性を認む

事象記録装置・ラブラス、小破

・レイシフト対象の保護機能に狂い

霊子筐体、不明

・損傷は見られない。しかしなんらかの術式の反応が

埋め込まれている。
絶望を焚べよ、光明は絶えよ
飛び退いた士郎は、視界の半分が闇に覆われたのに、須臾の遅れを経て気がついた。槍撃の余波に、アドレナリンが分泌され、体が興奮状態に陥っているのが分かる。痛感を抱えたまま後退した士郎は、呻き声一つ上げず冷徹に己の状態を解析する。
血飛沫が舞う。鋼が砕け、防禦の為に交差した陰陽の双剣が微塵に散った。飛退いた士郎は、視界の半分が闇に覆われたのに、須臾の遅れを経て気がついた。槍撃の余波に、アドレナリンが分泌され、体が興奮状態に陥っているのが分かる。痛感を抱えたまま後退した士郎は、呻き声一つ上げず冷徹に己の状態を解析する。

「固有結界、強制展開状態。結界の維持に回す魔力を使限界まで引き下げても心象世界が崩れる気配はない。このままでは当然の帰結として魔術回路が焼き切れるか、魔力が枯渇して枯死する。残存する全魔力量、数値にすると 1000 か。秒間 1 の魔力を消費する。クーザ・フェリンやオルタの戦闘を支えるのに秒間 2 の魔力を消費する。ランク B 以上の投影は控えても、干将莫耶の投影は一度に 2 の魔力を消費する。」

「その分、全開魔力の短期決戦にしか活路はない。3 分以内に仕留めなければ、士郎の魔力はアラヤ識の支援の分も尽き、運が良くても死ぬ。」
霊タと上は…戦枠え、接可機い行使令た断のえぶ激げ闘加をし近能能るだう用オ決の撃つか聖ロて神しで、てこ制は可。

「ソロウッ！主が傷つけられた剣騎士が怒号を発する。唸りを上げて聖剣を振るわれた。

激突する黒剣と巨槍。ジェット噴射のように魔力を放出し、軸とぶかっていく超重の剣撃は城塲をも倒壊させるだろう。しかし迎え撃つ魔神霊は一寸足りとも圧されない。どこか、軽々とオルタの負傷を跳ね返しその矮軀を震撼させる。

腹部の負傷が響いている。圧倒されていくオルタに士郎は歯を食い締り決断を下した。カルデアとの繋がりが絶たれている今、大英霊たるオルタやクー・フーリンの戦闘を独力で支えるのは不可能。」
「小さな中にぎしめ――」

「さへヘルムの歴史」

「ハンター、一人で奴を抑えきれ」「死んでくれ」と、呪いだった。

「ハ―そうしやでえか。任せろよ」クー・フー・リンは莞爾と笑った。

生死など幾度も越えてきた、こんな所で死ぬ己ではない。

しかしでや敵は英雄でなければ戦士でもない、怪物ですらない英雄の骸だ。

こんなな相手に殺されもとのかと、彼は確信している。

分の悪い賭け…はないい。勝算は十分ある。

半刻も手ずくっていが、必ず勝って確信していた。
オルタが下がってくるのに合わせ、光の御子が翔んだ。蹴りを
蹴り Hearts 鬼神霊の腕に阻まれた。何ら痛痒を覚えず、魔槍を地面に突
き刺し崩壊したクー・フーリンは、己を襲う最果ての槍を一重
で躲いた。掠める歪な穂先が翻り、着地したクー・フーリンを打ち
倒しと乱気流を巻き起こす槍撃が乱れ打たれる。応じてクー・フ
ーリンは魔槍を錬かせた。

ゾルハンの如く、妙な穂先が翻り、着地したクー・フーリンを打ち
倒しと乱気流を巻き起こす槍撃が乱れ打たれる。応じてクー・フ
ーリンは魔槍を錬かせた。
変換され、集束・加速を臨界まで反復し、運動量を増大させる。

オルタもまたその高まる魔力に肉体の限界を迎えていた。もや
真名解放の反動を受け止められるか判然としない。だがそれでも怖
る胆力ではない。オルタは己の力への自負を抱く。

クー・フーリンの肘のキリが悪い。傷が重く、不利な戦況を仕切
り直す訳にもいかず、あくまで踏み留まる彼は魔神霊という濁流を
塞ぎ止める限界を迎え、圧倒的な膂力に圧され、魔槍が跳ね退け
られ胸の隙を晒してしまう。咄嗟に丸楯を取り出して巨槍の軌跡を
逸らすのも、脇腹に最果ての槍が突き立った。がっ！苦鳴は短く。

突き上げられたクー・フーリンが振り回され、その遠心力で彼方へ
と放り出された。

「…！セイバー！」「まだです、まだ…！」
"あそれを消し飛ばすのに今少しの溜めが必要ですッ！
要ですッ！" \[---]

クー・フーリンの安否を気になる。だが突進して来る魔神霊の迫
力に焦りを抑えられない。士郎はしかし、その焦りを殺す。そして双剣を投げ
突き上げられたクー・フーリンが振り回され、その遠心力で彼方へ
と放り出された。

全速を強化する。隻眼になっている士郎は左目を見開いた。突撃
してくる魔神霊は、進撃してくる人間に。魔神霊は嗤う、マスター
「沖守生を武、受生で死る。左撃。
双け初へ山槍下せか。
嫌れ撃。
無謀い内にかよ巨腕にば渇た。
を士でなる、旋臓刃ない。
戦死を破強い。
あい回げのの毀そるもオ戦死を破強いに！
を支え魔受の角これと剣か。
はのて新う砕胴はててクリ。
・郎あい回げのの毀そるもオ戦死を破強いに！
が死と強いに！
はのてクリ。
将れすはた。は無まをた。
に転る。はのてクリ。
将れすはた。は無まをた。
に転る。はのてクリ。
が死と強いに！
はのてクリ。
将れすはた。は無まをた。
霊の胸を背後から貫いたのである。動きが一瞬止まる、防禦ではな
く回避が間に合った。一秒半、あと半秒～魔神霊は胸を穿たれ
てでも尚駆動する。沸騰したように肉が脈打ち、胸に空いた風穴
を塞いだのだ。治癒ではない。再生でもない、もっと悍ましい何か
だ。
魔槍が担い手の許へ帰還していく軌跡を見る間もなく、士郎は死
に物狂いで退くも追撃は速い。干将を巨槍の軌道に置いて辛うじ
て受け流すも、干将も破損する。再び反動だけで右腕が砕けた。進退
極まり、万事休す……それも士郎は諦めずにその場に倒れ込む。受
け身も取れないで倒れた士郎の真上の巨槍が過ぎ去る。大気を貫き
真空の穴が生まれるほどの刺突――二秒、経った。
約束された……！
全身全霊、乾坤一撃。オルタが士郎の後を繋いで飛び込んでくる。
射出機より撃ち出された戦闘機の如き彼女を、魔神霊は容易に対処
出来ると嘲笑う。この霊基は切り返して黒王を屠る事を可能とする
性能があった。
黒王の顔が曇る。マズイ、と。だが止まる訳にはいかないのだ。
これで決めねば、負ける。負ける訳にはいかない。主の信頼を裏切
る訳にはいかないのだ。軸を張って値千金の二秒を稼いだ彼の劣を
無為にする訳にはいかないのである。黒王は呎えた。魔竜の咆哮が
轟く。
故にそれは必然であった。
魔神霊の踰越が止まる。
驚愕する魔神霊の霊基が最後の力を振り絞ったのだ。
英霊を蔑み、見下し、駒とし、彼の魔神にとって有り得てはならない反逆。彼は、ヘラクレスを嘗めた。敗因はそれだった。
「勝利の剣！」
『■■■■■■■■』
声になる絶叫が上がる。膨大な闇の斬撃の奔流で五体が四散し死を遂げる。聖杯が溢れ落ちた。
頭部を斬断される寸前、巨槍を握る腕が遮が向う無二ふたつに切り裂かれる。
オルタの胸を穿った。
「カ、ハ…！！？」「セイバー！！？」
魔神霊が縦に割れる。大きな闇の斬撃の奔流に五体が四散し死を遂げる。聖杯が溢れ落ちた。
同時、オルタが膝をつく。
士郎は跳ね起きて、自身の傷むらすみず倒れるオルタを抱き止めた。砕けたままの腕が激痛を訴える事など気にもならなかった。

悟る。オルタの霊核に致命的な損傷が入ったのだ。最後の最後で足摺った魔神霊が相討ちに持っていたのである。オルタはただでさえ白い貌を青くし、薄く笑みを浮かべた。

「シロウ……なんて貌をしているのですか」　「もういい、喋るな。再召喚の必要はない、すぐ固有結界を解除デアに戻ります」　「勝ったのです。誇ってください、私はまた、貴方の声に応えカル」「そう……でしたね。ならもう少し……気を張ってーー」

士郎が強制的に貼り付けられていた心象世界を閉じる。縫い止め、現れた箇所を、地べたに座り込んでるクー・フーリンとオルタ、自分も織める。そうして現実世界に帰還する寸前、オルタの顔色が変わった。

士郎は跳ね起きて、自身の傷むらすみず倒れるオルタを抱き止めた。砕けたままの腕が激痛を訴える事など気にもならなかった。

悟る。オルタの霊核に致命的な損傷が入ったのだ。最後の最後で足摺った魔神霊が相討ちに持っていたのである。オルタはただでさえ白い貌を青くし、薄く笑みを浮かべた。

「シロウ……なんて貌をしているのですか」　「もういい、喋るな。再召喚の必要はない、すぐ固有結界を解除デアに戻ります」　「勝ったのです。誇ってください、私はまた、貴方の声に応えカル」「そう……でしたね。ならもう少し……気を張ってーー」

士郎が強制的に貼り付けられていた心象世界を閉じる。縫い止め、現れた箇所を、地べたに座り込んでるクー・フーリンとオルタ、自分も織める。そうして現実世界に帰還する寸前、オルタの顔色が変わった。

現実世界の元の座標、私椋船『黄金の鹿号』の甲板に帰還するは

「なっ？」

根拠のない、勘。虫の知らせ。まだ何も終わっていない、いや寧ろ漸く何かが始まったような……
オルタが？
『士郎くん』

士郎は、海から陸へと転移していた。

『オルタ！余計なことを』
『聞いてください、シロウ』

“オルタ！余計な事を”
“聞いてください、シロウ”

オルタはえもいえぬ悪寒に震えた。士郎の腕を掴む。無理矢理に
撓出されたオルタの魔力が、士郎の中にある聖剣の鞘に注がれた。
魔力が足りなかったのか、左目は治癒されなかったが両腕は治る。

既に消えかけている身で無茶をするオルタへ、怒号を発そうとし
た士郎を制して彼女は強く張った顔で告げた。
それは、これから始まる地獄のような未来を直感してのものだっ
た。士郎は間もなく己も退去するのだろうと身構える。

転瞬、オルタとクー・フーリンが消えた。カルデアへ退去したの
だ。士郎は間もなく己も退去するのだろうと身構える。

どこかへと引かれる感覚は、いつものレイシフトのそれで——
「は……？」

目を白黒させる。此処はどこだと、咄嗟に辺りを見渡した。
見渡す限りの荒野である。人気はない。空には光の帯のような、これまでの特異点で慣れたものがある。それと、コルデアへ通信を取ろうとするも、それは途絶えていた。どういった事だとか、愕然とする士郎の鷹の目が、彼方の小隊に一目で破損したサーヴァントの余物を見た。と、士郎は空を仰ぐ。

「は、あ……？」

「いや、なでさ……」と。士郎は空を仰ぐ。

カルデアの過去を夢で見た彼は、ケルトの戦士である事を悟る事が出来たのだ。

「は、あ……？」

今、魔術回路は限界。一刻も早く休息を取りねばならない状態だ。

士郎は、特異点から別の特異点に転移させられていた。
人類の裏切り者は嗤う。彼は衛宮士郎だけは決して見くびらなかった。侮らなかった。もしやと思わせる危険性が衛宮士郎にはあった。

だが衛宮士郎の入ったコフィンの破壊は成せなかった。存外あの小娘達は健闘してくれたのだ。目障りなほどに。

故にそれは、彼からの贈り物。破壊ではなく細やかな召喚術式の刻印を贈った。不可視のそれは、その場の全員の目を掻い潜り、感知を霊薄させてオラド・カルデアに知事を知らしめているフラウロスながら可能な芸当だった。

「私を招いてくれたお礼だよ。

楽しんでくれたまえ。『第五の特異点』はお前を歓迎してくれる。」
ああ、ハルファスは甘くない。せいない、頑張りたまえ。
カルデア戦線異常あり！

第三異常点の定礎復元まで残り５分です。

技術班、レオナルドの指揮で破損箇所の修理と、システムのバックアップと修正を並列してやってくれ！

現地魔神霊と固有結界内にて戦闘中です。通信は依然繋がりません。

-Fi

- トゥル-
退避していたカルデアのスタッフが続々と持ち場に戻る。つい先刻まで戦闘があった事を感じさせない迅速さは、彼らが有能である事の証明だ。

矢継ぎ早に上げられる報告に淀みはない。親しんだ百鬼のハンサムの脱落と、その再召喚が不可能な今、悲愴な雰囲気は隠せていない。
心の支えであったマシユーマスター陣のリーダーをなんとしても助ける意思が彼らを支えていた。

ロマニー急遽指揮権を握り、間断なく指示を飛ばす。それは帰還した戦闘班にも向けられた。

マシュー、帰ってきすぎて悪いけどメディアカルルームへ。ネロ帝はアンテと思いつつにカルデア内に残敵や罠がないかの確認！

うむ、と。ネロも疲れているだろう。そんな彼女を尻目に不安げにマシューが訊ねた。

「あの…ドクター。先輩は大丈夫なのでしょうか。」

「きっと大丈夫。だから行ってくれ、マシューには休息が必要だ。」
ブロック状の聖杯をネロから受け取ったロマニは軽く眉を顰める。何事もなかったように司令塔をこなすロマニに、マシュにだけ構う余裕は流石になかった。司令塔を代わるアグラヴェインを欠いた事で、以前までの負担が戻ってきたのである。マシュは制服姿に戻り悔そうに俯くも、ここにいても邪魔にならないだけだと理解して頭を下げ、急ぎ足にメディカル・ルームに向かった。その前に手紙をロマニに渡して、見回りに行くついでにと、アルトリアらに寄り添われながらマシュは退室する。アサシンの切嗣だけは早々に見回りに出て、邸宅で切れてねよ。まだ同盟は切れてねよ。ドレイクもまた豪快に縫っていた。「ネロとかいいう奴の懐に聖杯ってのを忍ばせあるよ。気づいてないのかね？」代金の胡椒の瓶詰めは、また会った時にでも寄越してくれらいいさね。
彼らは笑い、一段落つくと、幼い少女達へと振り向く。

「桜ちゃん、イリヤちゃんと美遊ちゃん、ご苦労様。疲れただろう？指示を出せなくてごめんな。休んでもいいよー。

うん、わたしはお兄ちゃんを......士郎さんをここで待ってます！」

「ううん、わたしはお兄ちゃんを......士郎さんをここに待ってます！休んでもいいよ。

彼女達の眼には、既に浮き足立った色はない。地に足ついて、カ
ルデアの当事者である事をしっかりと認識していた。

ロマニは目を瞬き、次いで微笑む。桜達を過保護に遠ざけるつもりは、既に彼にもなくなくなっていった。それどころではないというのが実情だ。

未だにレイシフトしたままの士郎を観測するスタッフらは、彼を信頼して待つ。定礎復元まで後1分を切ると、待ちかねたようにスタッフが声を上げた。

「魔神霊の反応ロスト！マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊の反応ロスト！」「魔神霊の反応ロスト！マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いでくれ！」「マスター・衛宮士郎が魔神霊を撃破した模様！通信が回復しました！」「繋いでくれ！」「繋いて
い姿の士郎が、海の中で立ち泳ぎをしている。ひっ、と短い悲鳴をあげるイリヤをよそに、士郎へロマニが手短に現在のカルデアの様子を伝える。その後、士郎がオルタの状態を伝えている。聖杯の嬰児を頷き、宝具の解放準備を整える。すぐさま士郎らの退去が始まった。その最中もニターの中でオルタが士郎に魔力を送る。両腕が瞬く間に癒えるもオルタは…

「なんだ！？」

「司令官代理、コフィンから魔術の起動を確認！シロウさんの入ってるコフィンからです！」

「…っ？これは…転移魔術か！？」

マズイ、解除を…」

ロマニの切迫した声に、オペレーターの女性が即座に応じた。

不可視の術式は、生前の魔術王が発動した魔術に等しい強度を誇っていた。サーヴァントの霊基でしかないロマニでは、その存在に未然に気づき対処する事は出来ず、そして呪詛の事に魔術の解除を行うのが間に合わず。

「サー・ヴァント・ランサー…帰還しました…」
さざやの체は、静かに揺れている。

「…………

え？……

ほとんどないのかな？

…………」

「さへと……」

」「なあ、一体どうして……」

「さ！」「なあ、一体どうして……」

「…………」

「さへと……」

「なあ、一体どうして……」

「さ！」「なあ、一体どうして……」

「…………」

「さへと……」

「なあ、一体どうして……」

「さ！」「なあ、一体どうして……」

「…………」

「さへと……」

「なあ、一体どうして……」

「さ！」「なあ、一体どうして……」

「…………」

「さへと……」

「なあ、一体どうして……」

「さ！」「なあ、一体どうして……」

「…………」

「さへと……」

「なあ、一体どうして……」

「さ！」「なあ、一体どうして……」

「…………」

「さへと……」

「なあ、一体どうして……」

「さ！」「なあ、一体どうして……」

「…………」

「さへと……」

「なあ、一体どうして……」

「さ！」「なあ、一体どうして……」

「…………」

「さへと……」

「なあ、一体どうして……」

「さ！」「なあ、一体どうして……」
ていた。

しかし、オペレーターの女性が嘆く。

「…ダメです！　特定できません！…」

ロマニが怒号を発し、握り拳をモニターに叩きつけた。凄まじい焦りと怒気に空気が凍る。

嘗て王だっただけ、そして人間になってからの日々…それらを経て、はじめて得た対等の友人が士郎だった。故に、ロマニ・アからキマンの焦りは誰にも負けないほど強い。だがそれでも自分を見失う男でもなかった。

「存在証明は？」

「絶対に阻止するんだ。二十四時間体制で、交代で意味消失だけは絶対に阻止するんだ。座標の特定が困難な理由は…マスターが常に観測していてくれる。座標の特定が困難な理由は？マスターがレイラフ状態なんだ、カルデアが観測してるんだから簡単なはずだろう？」

「それが…代わりに特定されたのは別の特異点です。第四特異点が障害となっていて、その先にいるシロウさんの反応が脳気になってしまっています♪」

「なんだって？　じゃあ士郎くんは第五かそれ以下の特異点にいる事になるのか…」

唇を噛み締め、ロマニは意を決したのか険しい顔をしているラマーク・フーリンを見る。そして少女たちにも視線を向けた。
…チッ。そういう事かよ。道理でオルタの奴がああも無茶したんね。そうだね。辛うじて士郎くんの腕が治ったのは本当に助かった。だけど予断は許されない。第四特異点の特定は済んだみたいだし、悪いんだけどイリヤちゃん…行ってくれるかな？

それは、余りにも唐突な出動要請だった。ギョとしたイリヤだが、体力的にはなんら問題ない。彼女は詳しくは状況を飲み込んでいなかったが、それでも士郎が危機的状況にあるのは理解していた。彼女は頷く。

はい、行きましょう！

…ありがとう。今から三時間後にレイシフトを開始する。その三時間後にネロ帝に出もらうから、準備しておいてくれ。…皆！

大変だろうけど踏ん張りどころだ、協力してくれ！

はい！とスタッフ達の声が揃う。

彼の意志は一致していた。正念場だと。休んでいない場合ではいか。想像を絶する激務が待ち構えていても、彼らには元より退路がない。イリヤは自分なりに腹を括る。弱音は嘗め殺した。女は度胸だと持ち前の向こう見ずさで突然の実戦に飛び込む覚悟を固める。大丈夫、わたしは一人じゃないんだから、と。

ロマニはイリヤの連れていくサーヴァントに、マシュは組み込む。
ならない事もあった。イリヤはまだ生きているがサーヴァントの霊基を持っている。システムを弄って彼女がマスターとして正式に動けるようにしなくてはならない。相手は、危機的状況にいるはずの士郎だった。

「士郎くん！？」

「士郎くん！？」

「こちら、衛宮士郎。聞こえているか？」

「聞こえている！それよりどうやって通信を……いやそれより無事なのか！？」

「ダメだ……聞こえない。一方通行なのか？まあ……いいかね？」

ロマニの声に、士郎はまるで何も聞こえていないように頭を撫いでしまった。染み着いた疲労が伺える。士郎にはロマニの声と姿が届いていないらしい。安定していない通信に、ロマニは本気で怒りを抱く。なんだってこんな肝心な時にばかり！と。

映像の中の士郎は見慣れれた格好ではなかった。左目に当てられた黒い眼帯、そして詰め襟の軍服らしきものを着込み、露出している首から上にも无数の傷跡が新たに刻まれている。何が起こってるんだと困惑する一同に、士郎は言った。

「一応、カルデアこちらの音声が届いているものと仮定して、報告しておく。俺は今のところは無事だ。が、どうにもこの特異点はオカシイ。カルデアの通信機にある時計の進み方をこちらで体感している時間の流れに大分差がある。俺の体感では既に半年は経ったち」
半年！？

いや、五ヶ月か？まあ、そこらはいいか。通信限界時間はす

驚愕を置き去りに、士郎は淡々と告げた。

「繋呟れ。相事ら体タぐ年流と感ぐ別がいこ棒にと二力ネをらで、がれカ特覚そい驚半っに、てあーちがなラ日がロ送い経にル異をこや、愕年たる可ンで足にる。の老つズデ点正だ。……」

「ケのデーた年くろリんか第姿は？がとのにホンだ。……」

「半、五ヶ月か……？あっ、そろらはいいか。通信限界時間はす」

「繋呟れ。相事ら体タぐ年流と感ぐ別がいこ棒にと二力ネをらで、カ事差がいるらしい。そちらの時間で言えば二月ここのは十

流にズレがあるらしい。そちらの時間で言えば二月ここのは十

流にズレがあるらしい。そちらの時間で言えば二月ここのは十

年が経つか？あて推量だから正確には知らない。ただ聖剣の鞘のお

藤で、老化はかなり停滞させられている。五十年生きても五代手前

のネロに行かせてくれ。間違ってもイリャにはやるな。単に体

力が足りんだろう。攻略は容易だ。ネロと共に投入できる戦力な

ら二日でクリア出来る。理想の面子はマッシュとアタランテ、アサシ

ンとランサーだな。とにかく脚の速さが必須だ。ネロには簡単な仕

事になるだろう。イリャ達は休ませてやってくれ。俺も休みたい。

相棒が可愛くて辛い。こちらの年代は1782年のアメリカだ。座標特定に役立ててく

呟いてるみたいで俺も辛いんだ。そろそろ通信限界だ、次々に通信が

虚数空間に向けて独り言を

呟いてるみたいで俺も辛いんだ。そろそろ通信限界だ、次々に通信が

虚数空間に向けて独り言を

呟いてるみたいで俺も辛いんだ。そろそろ通信限界だ、次々に通信が

虚数空間に向けて独り言を

呟いてるみたいで俺も辛いんだ。そろそろ通信限界だ、次々に通信が

虚数空間に向けて独り言を

呟いてるみたいで俺も辛いなんだ。そろそろ通信限界だ、次々に通信が

虚数空間に向けて独り言を
乾いた笑顔で士郎が強かった瞬間、通信が途絶えた。直前に冗談だ、早く増援を寄越しあ、とまで言っていったのが、微妙な余裕を伺わせる。
なんとも言えない沈黙が流れる。緊張感が切れた。しかし、ロマニは笑う。しぶとく士郎は生き残っていた。まだ希望はある。
カルデアはそれに、力強く頷いた。
士郎くんをお爺ちゃんにする訳にはいかない。速攻で片付けで救援に行くよ！
全力疾走だねネロちゃん！
それじゃあ、第四特異点へのレイシフトを始めるよ。マスターはネロ帝、ともいネロ。随伴するサーヴァントは四騎。マシュー、ランサー、セイバー、アサシンだ。各自ネロちゃんとの臨時契約を頼むよ。

ロマニは無事送られてきたデータを纏め、要点だけを纏めたレポートに目を通しながらネロに言う。そのサーヴァント数と構成を決めたのはロマニだった。やっぱ疲弊の跡んだネロに、ロマニは軽く言う。

大丈夫だよ、ネロさん。ぶっちゃけ士郎くんの読み通じたら二日もあれば楽勝な戦いだから。

そうなのか？

そうそう。ところでネロさん、マラソンは得意かな。

なんでマラソン？ と首を捻りながら、ネロは応える。

それならに体力にも自信はあるぞと。それ聞いたロマニは安心したように笑みを深めた。

む？
実戦を熟した実感も出ないんじゃないかな。こっちから指示するからとりあえずサッポ処理しゃって。
「え？」
「おう！と白いモコモコ小動物フォウが、ネロの頭に飛び乗った。まるでマラソンと言えばおれだろう？ついてこれるか」
ロマニはフォウに頭に乗られてたわたするネロに微笑み、最後の調整に入った。まだ疑似月子演算器は修理できていない。故にインシフトのための準備はより入念に、更に慎重に行うために調整をしているのだ。それでも間もなく終わるが、マシが微笑みながらネロに言う。
「お願いします、ネロさん。」
「うむ、よく分からぬが余に任せよ」
切嗣はネロに一瞥すら寄越さない。無言でネロの肩に手を置き、赤いフードの下の素顔を見せず暗殺者だが、ネロはそれに不思議を感じることはなかった。鷹揚に構える彼女に、切嗣はやや辛さのようなものを感じるもの、溜め息をこぼしてレイシフトに備える。
「クー・フーリンは苦笑しながらそんなアサシオンを横目に見遣り、何気になくレイラインを繋ぎ合わせられる。
仕方ない奴だと思わぬネロに、クー・フィーリンは肩を竦める。

そんなネロへ、アルトリアが顔に陰を落としながら声を掛けた。

「……急ぎましょう、ネロ。どうにも嫌な感じがします」

直感という奴か？……うむ、一刻も早くシェロの許へ行かねば、

シエロが老いてしまうのだろうな。

「それもあります。しかしそれ以上に……なんというか、シロウが

良からぬ事を仕出かしている気がしてならない。シロウの許へ急行

していただせばならない気が……！

シエロなら大丈夫ではないのか？」

「ネロはシロウの事を美化して見過ぎです！彼を侮ってはいけな

い、どここの馬の骨としれない女に詰かされていてもおかしくは

ない！う、うむ……！」
事でも作りに行くと言って。見事な状況判断である。
ロマニが手を叩く。皆の注意を集め、彼はエミヤに預けられた荷物をマッシュに渡した。大槻にそれを収納したマッシュを尻目に、ロマニは作戦の概要を説明する。

「よし、準備は万端だ！」「よし、準備は万端だ！」ロマニが手を叩く。

第四特異点の詳細が判明した。時代は西暦1888年、産業革命時代の霧畳ルンドンだ。だが、どうやら街全体が謎の霧に覆われているらしい。

「霧に？」
「ああ。念のため毒ガスを警戒してマスクの装着を、と言いたいとそうなのか？　とネロが訊ねると、マッシュは首をひねる。ロマニは苦笑した。魔術師の霊基が、ロマニに人ならぬ視点と洞察力を与えていたのだ。いや、「復活させている」という形容が正しい。

ともあれロマニは説明と推測を交えながら続けた。

第四特異点は最長二日でケリをつける。魔神柱は士郎くんを人間の寿命で殺すつもりと考えた。彼らの行動は完全に相手の意表を突くだろうからね。敵首魁を速攻で見つけて速攻で倒せる。

最終攻撃はアサシンの奇襲、二段目でランサーの宝具、それで仕留
「うっ……流石シェロ、えげつないな……」
「慣れませんよう。先輩はえげつない事を絶対するので」

マシュは悟りを開いた菩薩のような目をする。ネロは聞かされた作戦の詳細から、それが粗末に言う「嵌め殺し」になる事が容易に察せられたのだった。

逆に敵が可哀想だとはまる感じの。士郎の作戦に対する不安はなさった。士郎の考案が記されたデータには、説得力が大いにあった。

一士郎くんの作戦案は2パターンあった。広大なフィールドの場合と、都市部の場合だ。

「ざっくり過ぎないか？」
「いや、これだけでいいらしい。やる事が極めて単純だ。まずレイシフト後、都市の外縁部を一周走り回って、都市を縦横に十字に走る。状況を把握したらそこで第一段階終了。この時に敵エミーロが妨害して来たり敵サーファントと遭遇するかもしれないけど、撃破する必要はないよ。無理がないなら普通に倒していいけどね」

「……ああ、それで『マラソン』なんだ」
「そ。ほぼ走るだけだよ。だがサーファントがいるかもしれないから、火力のあるサーファントなら味方に引き入れるのもありだ。勿論協力的ならね。説得とかが必要になるなんて捨て置いてもいい。この段階で必要のは、走る事と、大まかな異常の把握だね」

簡単過ぎる。が、流石に走り回るネロの疲労は大きくならないだろう。

しかし疲れるだけでもいいというのは、ネロの心の負担を大幅に軽減させる。
しんどそうだな……と呟くネロだが、悲愴な色はなかった。

第二段階。これは一つだけだ。異常の箇所を点と点で捉え、線で結び、その中心地の『地下』に入れればいい。入り口は騎士王の聖剣で作る。

「……え、よいのか？都市部なのだが……民を巻き込んでしまうであろう。ネクロさんが令呪を使えばいいんだよ。聖剣の指向性を一点集中して、斬撃じゃなく刺突にすればいい。あ、そうか。セイバーよ、それは出来るか？」

「可能です。エクスカリバーの前に使っているカリバーンの要領で行ってはいけない。しかし私の聖剣は大味な代物、精密性に欠けます。令呪のバックアップがあった方がいい。」

「あ、そうか。セイバーよ、それは出来ることか？」

「え？」

「そうだよ。それだけか？」

「そうだよ。それだけか。まあ、騙されたと思ってやってみなよ。」
さ、コフィンに入ってくれとロマニに促され、マシュとネロは中心。他のサー・ヴァントは守護英霊召喚システムで、カルデアの観測下にあるマスターの許へ送り込まれるので、コフィンに入る必要はないと。

レイシフトが始まると、カウンポンダウンが始まり——ネロの意識は瞬間転移した。

そして、彼女達は霧煙る街ロンドンに現れた。

毒性のある霧霧に包まれた町並みに、アルトリアは険悪な目をすそして、彼女達は霧煙る街ロンドンに現れた。

『それをか報告のないフーディをし、もそう表通りに人影はない。それでも、サー・ヴァントを発見した』

『そう、もう！』

『ええ』

表通りに人影はない。それでも、サー・ヴァントの進行方向にこちらがレイシフトしていたらしい。お手並みだけなら、可愛いいマスターさん』

報告してきた。
その騎士は駆けてくる数騎のサーヴァントを目撃し、瞠目して剣を構えるも、アルトリアを見るなり驚愕して声を上げた。

「なっ！？ち、父上！？」
「誰だ貴公は―」

望具の効果だろう。彼の騎士の正体を探みかねたアルトリアは、
駆ける足を緩めながら望ロの前に出て誰何する。すると兜の騎士は、
宝具を解除して素顔を露にした。アルトリアの顔が能面のように無表情となる。
途端、アルトリアの顔が能面のように無表情となる。

「オレ、いや私だアーサー王！モーダレッドだ！父上、どうし
て貴方が―」
「ネロ！あれは敵だ、早急に撃破する！ランサー、手を貸せ！
マシュはネロの守護を頼みます！」

「いやいやいやいや『ふぉう！』」
「いいのかよ…」
「いったかよ…」
「ああ！？」
「いって貴方が―」

「ネロ！あなたは敵で、早急に撃破する！ランサー、手を貸せ！
マシュはネロの守護を頼みます！」

「ふあ…う！？」

「ああ！？」

彼じゃないなそうではないか！
と。ネロはショックを受けて固ま
るモーダレッドを庇った。
「な、なぁ！なんで走るのやめないんだ？」
「それ、はっ、ハァ、これが作戦—」
黒めモードレッド卿。貴公はただ我らの前を走り雑魚を散らして
いればいい—
先頭を走らされているモードレッドは頻りに背後を振り返り、強
行軍の訳を訊ねる。
ネロは走りながらも律儀に答えようとするも、それをアルトリア
に制されてモードレッドを冷たくあらった。
「ネロに余裕はない。無駄に喋らせて体力を削るのは利敵行為だ。」
「でもないアルトリアの理論武装にモードレッドを「ぐぬぬ」と
呻いた。彼女にとって予想だにしていなかった騎士王との再会である。
道理を寄せ役割に没頭するがいい—
「ネロに余裕はない。無駄に喋らせて体力を削るのは利敵行為だ。」
「でもないアルトリアの理論武装にモードレッドを「ぐぬぬ」と
呻いた。彼女にとって予想だにしていなかった騎士王との再会である。
道理を寄せ役割に没頭するがいい—
「ネロに余裕はない。無駄に喋らせて体力を削るのは利敵行為だ。」
「でもないアルトリアの理論武装にモードレッドを「ぐぬぬ」と
呻いた。彼女にとって予想だにしていなかった騎士王との再会である。
道理を寄せ役割に没頭するがいい—
「ネロに余裕はない。無駄に喋らせて体力を削るのは利敵行為だ。」
「でもないアルトリアの理論武装にモードレッドを「ぐぬぬ」と
呻いた。彼女にとって予想だにしていなかった騎士王との再会である。
道理を寄せ役割に没頭するがいい—
「ネロに余裕はない。無駄に喋らせて体力を削るのは利敵行為だ。」
「でもないアルトリアの理論武装にモードレッドを「ぐぬぬ」と
呻いた。彼女にとって予想だにしていなかった騎士王との再会である。
道理を寄せ役割に没頭するがいい—
「ネロに余裕はない。無駄に喋らせて体力を削るのは利敵行為だ。」
「でもないアルトリアの理論武装にモードレッドを「ぐぬぬ」と
呻いた。彼女にとって予想だにしていなかった騎士王との再会である。
道理を寄せ役割に没頭するがいい—
「ネロに余裕はない。無駄に喋らせて体力を削るのは利敵行為だ。」
「でもないアルトリアの理論武装にモードレッドを「ぐぬぬ」と
呻いた。彼女にとって予想だにしていなかった騎士王との再会である。
道理を寄せ役割に没頭するがいい—
「ネロに余裕はない。無駄に喋らせて体力を削るのは利敵行為だ。」
「でもないアルトリアの理論武装にモードレッドを「ぐぬぬ」と
呻いた。彼女にとって予想だにしていなかった騎士王との再会である。
道理を寄せ役割に没頭するがいい—
「ネロに余裕はない。無駄に喋らせて体力を削るのは利敵行為だ。」
「でもないアルトリアの理論武装にモードレッドを「ぐぬぬ」と
呻いた。彼女にとって予想だにしていなかった騎士王との再会である。
道理を寄せ役割に没頭するがいい—
「ネロに余裕はない。無駄に喋らせて体力を削るのは利敵行為だ。」
「でもないアルトリアの理論武装にモードレッドを「ぐぬぬ」と
呻いた。彼女にとって予想だにしていなかった騎士王との再会である。
道理を寄せ役割に没頭するがいい—
「ネロに余裕はない。無駄に喋らせて体力を削るのは利敵行為だ。」
「でもないアルトリアの理論武装にモードレッドを「ぐぬぬ」と
呻いた。彼女にとって予想だにしていなかった騎士王との再会である。
道理を寄せ役割に没頭するがいい—
「ネロに余裕はない。無駄に喋らせて体力を削るのは利敵行為だ。」
「でもないアルトリアの理論武装にモードレッドを「ぐぬぬ」と
呻いた。彼女にとって予想だにしていなかった騎士王との再会である。
道理を寄せ役割に没頭するがいい—
「ネロに余裕はない。無駄に喋らせて体力を削るのは利敵行為だ。」
「でもないアルトリアの理論武装にモードレッドを「ぐぬぬ」と
呻いた。彼女にとって予想だにしていなかった騎士王との再会である。
道理を寄せ役割に没頭するがいい—
「ネロに余裕はない。無駄に喋らせて体力を削るのは利敵行為だ。」
「でもないアルトリアの理論武装にモードレッドを「ぐぬぬ」と
呻いた。彼女にとって予想だにしていなかった騎士王との再会である。
道理を寄せ役割に没頭するがいい—
「ネロに余裕はない。無駄に喋らせて体力を削るのは利敵行為だ。」
「でもないアルトリアの理論武装にモードレッドを「ぐぬぬ」と
呻いた。彼女にとって予想だにしていなかった騎士王との再会である。
道理を寄せ役割に没頭するがいい—
「ネロに余裕はない。無駄に喋らせて体力を削るのは利敵行為だ。」
「でもないアルトリアの理論武装にモードレッドを「ぐぬぬ」と
呻いた。彼女にとって予想だにしていなかった騎士王との再会である。
道理を寄せ役割に没頭するがいい—
「ネロに余裕はない。無駄に喋らせて体力を削るのは利敵行為だ。」
「でもないアルトリアの理
「그려, 술에 취한 그녀.」
「그런가 싶었지만.」
「그건 제가 편안해 보이도록 했기 때문이야.」
「그건 저에게 편안해 보이도록 했기 때문이야.」
「그건 저에게 편안해 보이도록 했기 때문이야.」
「그건 저에게 편안해 보이도록 했기 때문이야.」

「그런가 싶었지만.」
「그런가 싶었지만.」
「그런가 싶었지만.」
「그런가 싶었지만.」
「그런가 싶었지만.」
「그런가 싶었지만.」

자연스러운 대화의 면모를 보여주고 있습니다.
「モードレッド卿は何か違和感というか、異常のようなものを感じた場所はありませんか？あっ、そうだ教你をださい。」「ああいぜ、っと。邪魔だオラァ！」「勘だけどな。此処と、此処、此処、辺がクセない」「勘だけどな。ご協力感謝します」「何せこのモードレッド様なんだからな！」「ああいぜ、っと。邪魔だオラァ！」「勘だけどな。此処と、此処、此処、辺がクセない」
「冷や拾おってラオーで、何、ル！いつでも切ってル。現メテリマてる。
兜を、死サーしといえば、騎を！」「死になるって！」「死なないとホ、死に、レ、しもぎ不フー何し様、ん。
父ぞ」
「あっははは！　ひ、ひい！」

「だっはははは！　ひ、ひい！　─」

「くー・フィーリンが二人のやり取りで腹を痛そうに押さえて痙攣し、どこがツボなのかだ。どこがツボなのだろう。ケルト的に平和な親子喧嘩にでも見えているのだろうか。<br>ネロは両膝に手をついて必死に息を整える。横でコントをされても挫けずに頑張っていた。アーサー王と反逆の騎士の因縁について、どうしたらいいのかとアーサー王は悩む。息切れしながらもネロはアルトリアに言った。ネロが呼び掛けるなり途端に穏やかになったアルトリアの変貌に、モードレッドは目を剥いて驚愕した。

「父上！？」
「「はい、なんですかネロ」
「「黙れ」
「「はい」

「って、なんだテーマ！　父上に対して気安ーーー！」

「黙れ」
「はい」

「まるで、なんだテーマーーー！」

「黙れ」
「はい」

「誰も間違っても、ネロが呼ぶ呼び掛けは認められた。モードレッドの満面には冷や汗が流れていた。まるで、なんだテーマーーー！」

そのまま穏やかにアルトリアが自分を見ていて、ネロは顔を引き攣らせる。
その、だな……可哀想だからやってったらどうだ？

あのだな、とりあえず今は味方なのだ、かなーり頑張ってくれて
おるのだから、モーデッドにもう少し優しくしてあげても——

無理です

だよね……

諦めなよ！ そこで諦めなよ！

無理です

えー……とだな。無理か？

そこでなとか、な？

無理です

シェロは、度量の広い騎士王が好きだと言っていたのだが

「！」

と、聖剣を下ろしたアルトリアに、ネロは一応態度の緩和を願

主、と流石にモーデッドが哀れである。

あっさり『無理か？ まあ無理なら仕方ない』と諦めたネロにモー

ドッドは絆りついた。彼女は感じていた。ネロが押せば父上か

らの風当たりが緩くなるはずだ……！

ネロはモーデッドの懇願に苦笑いを浮かべ、とりあえずもう少
し粘ってみる事にした。
ぼそりと言ったネロは、確かに士郎の影響を受けていた。口が崩れ、発言に士郎の影響を加えずにいた。
しかしアトリヤはびっくりと肩を撫で、苦渋的表情で、苦虫を
食べないように言われ、度量が狭くてダメなアトリヤもいちど殺し加減にしろ！
と。
「モードレッド」
「お、おう！」
「おう、ではなく『はい』でしょう！
はい！」
「あ。オレの名はモードレッドだ、よろしくな！」
「うむ、余はネロ・クラクディウス、よろしく願むぞモードレッド
よ。彼女は私の伴侶の盟友、謂わば私にとっても同盟者のようなもの。
モードレッドは聞き流せないアトリヤの言葉に食って掛かる。
「もっと待ってくれよ父上！伴侶ってなんだよ！？まさかギ
ネヴィア……な訳ないか。どここの馬の骨だ！」
「関係あるだろ！？父上の嫡子であるオレーーー」
赤竜の威圧にモードレッドは口ごもった。

―貴公に、関係があるのか？―

―衛宮士郎。私のマスターで、剣を預け運命を預かった。昔は頼りながら、それでも真っ直ぐな少年で、今は心身ともに肩を並べる足助きの男である男。

アルトリアは嘆息する。ネロが休んでいる内に簡潔に伝えた。

「衛宮士郎。私のマスターで、剣を預け苦労を預けた。昔は頼りながら、それでも真っ直ぐな少年で、今は心身ともに肩を並べる足助きの男である男。

これ以上の説明がいるか？」

「なあ、何故にセイバーが『父上』なのだ？普通は母上なのでは…」

「はあ？父上は父上だろうが！」

「なあ何故にセイバーが『父上』なのだ？普通は母上なのでは…」
「ふうむ。ではシェロは『母上』になる……？」

何気ない独語にモードレッドとアルトリアがびくりと反応した。

「モードレッド」

優しげな呼び掛けにモードレッドは仰天した。

いきなりの豹変に度肝を抜かれたのだ。

唐突にアルトリアが微笑みつつモードレッドの肩に手を置く。

「モードレッド」

優しげな呼び掛けにモードレッドは仰天した。

いきなりの豹変に度肝を抜かれたのだ。

「シロウはとても素晴らしい人だ。貴公もきっと認められる。だから彼と会う事があれば、シロウを『母上』と呼びなさい。

で、でも父上、オレの母上は……」

「あれを母と認める必要はない。私の言う事が聞けないのか？」

「いえ！聞けます！」

「父上ごええ！」

「えええ！」
こんなアーサー王、知りたくなかった。モードレッド、心の嘆き。
ネロは苦笑了。マシュが可愛らしくていて、もそもそで、
歓迎しよう。
「ぼんとう！」「ええ。…ただし、分かっているな。妙な事をすれば…」
「わわわわ分かっているよ！変えな事なんかねえって！だから
その変な感じやめてくれよ！」「よくない。ならばもし貴公がカルデアに召喚される事があっても
反抗期息子モードレッドも、愛の戦士アルトリアには形無しなっ
た。全く反逆でかない。騎士と王ではなく、家庭的な面でのヒエラ
ルキが明確に固定されてしまった瞬間だった。
ネロがある程度の休憩を得ると、再び一同は走り始めめる。それか
ら暫くすると、アルトリアが吠えた。こっちは行かなくてもいいで
しょう、と。おや？とネロは首をかしげつつそれに従う。そして
ふわふわとして、曖昧な。しかし確信が篭った断言である。冴
渡るのは未来予知に近い直感とそれに追随する野性の駆だ。
取りあえず言うことを聞いた方がいい気がするネロに固定観念は
ない。型に縛られず思うままに動いていた。
それから休憩は何度か挟みつつ、ネロは本来の予定の四分の一程
度を走るだけで済んだ。その際にいくつかの不自然な蒸気や、薬品臭い箇所、または魔力の集積した箇所を発見したりしたが―其処に踏み込む。

モードレッドの案内で、彼女が拠点としている家に飛び込んだネロは、そこで理想的で誠実そうな優男、ヘンリーと。童話作家のアンデルセン、フランケンシュタインの花嫁と出会う。

彼らに作戦を伝えると、一言。「うう⋯⋯？」

「は、はは⋯⋯それ、卑怯じゃない⋯⋯？」

「卑怯ではなく卑劣だな。だがそれでいい。楽がしたいからなこちろ。ネロはそこで休ませてもらい、英霊エミヤのくれていた携帯食料を頂く。」

その後、四時間の仮眠を取ってなんとか疲れを落としたネロはサヴァント達と出動した。地図にいくつかの印をつけ、その中心地を割り出すとそこに向かう。そこで、ネロは今号を使ったアルトリアの聖剣が唸り、聴く。瞬間、地下にあった空洞を貫き、大規模な魔力炉を発見する。驚愕しこちらを見た男は、冬木で見た少年に似ているような気がしたが、彼が何かを言う前に、何かをする前に。これまでずっと気配を遮断していた切嗣が仕掛ける。
男の背後には音もなく着地した切嗣の襲撃。それは男の心臓を貫く。

襟首を素早く掴んだ切嗣が虚空に放り投げる。

「『刺し貫く魂の魔槍』」
驚異的な修復力で再生せんとする男の心臓を完膚なきまでに破壊する光の御子の魔槍。

「『我が麗しき父への反逆』！」「約束された勝利の剣」！
邪剣と聖剣の真名解放が骸を完全に消し飛ばす。聖杯を使いながらの儀式を行っていたのが中断され、地に落ちた聖杯をマシュが回収してネロに向けて言った。

「ミッション完了です、ネロさん！」
余りにも慣れた様子のマシュの、純真無垢な声にネロは顔を引けさせた。これはひどい、と。フォウが慰めるように鳴くと、モードレッドが可笑しそうに笑った。この作戦考えた奴、ぜってえ性格悪いだろ！と。
所要時間、実際に十八時間。過去最短の特異点攻略であった。
全力疾走だね士郎くん！

俺は目を白黒させる。此処はどこだ？咄嗟に辺りを見渡した。

見渡す限りの荒野。空には光の帯のようなものが幾つにも重なった、これまでの特異点で見慣れたものがある。亀にも角にもカルデアへ通信を試みるも、それは途絶えていた。

「は…？」

事態を把握する。なるほど此処は別の特異点かと。カルデアと通
信が取れないのは、此処が第四特異点ではないから、第四かそれらが障害となってまともに連絡が取れなくなっているかもしれない。

なら通信が繋がらない状況を、前の特異点を攻略すれば無事に繋がる可能性はある。それどころか俺がレイシフトしたままなのだが、即座に座標の特定も出来るだろう。何者の仕業か･･･レフだろう。

呪文はなく、サーヴァントもおらず、改造カルデア戦闘服も破損した。

咲き殺し、不満を殺し、状況に適応する精神状態に切り替える。

カルデアとの繋がりはない。アラヤ識による貯蔵魔力もない。令呪はなく、サーヴァントもおらず。

＝＝　魔術回路は限界。ま、今も早く休息を取らねばならない状態だ。

一度も早く休息を取らねばならない限り、カルデア式のサーヴァント召喚は不可能だろう。

そのも拘束しない限り、カルデアのサーヴァント召喚は不可能だろう。

増えはちょっとや駄目だ。奴の根になっていた聖杯に気を遣い余裕はなかった。その弊害だろう。聖剣か魔槍によって聖杯は破損し、それ自体の魔力含有量が5％程度に低下していた。

これで俺個人のゲリラ展開である。慈悲はなかった。

こんなであれ電池は大事だ。機会があれば魔力の貯蔵も出来るから、５使えない。出来ずとも使い道はある。聖杯は破損しているから、これではただの魔力電池にしかならない。
来れすら計と前、も撤はいし腕状で減以退ケさ見にえバもる。ゼく魔な。
名…の聖きの力は感杯日付昔ものうた通れた。通れた。通てエ死かビル、れ最事てエに魔をる、れ大は回名。のす。確ルこデンだ。

以上魔力を貯める事は出来ないのが、逆に言えばその5%は使って減らぬ事はない。最大MPが九割五分削られた状態でも使えていえば分かりやすいだろう。

状況は絶望的だ。だが―絶望は慣れっこだ。こんな程度で心が折れていたら、俺はとっこの昔に死んでいる。援軍のあてがあるだけカルデアに来る前、パゼットやシェル、エンハウエンと組む前より遥かにマシだと言えた。

腕に巻き付けてあるカルデアの通信機、それに内蔵されている時計を見る。日付と時間を確認、時計を合わせ、タイムを計る。

壊れた聖杯にパスを通す。昔はこんな真似も出来なかったなと懐かしさら感じた。魔術の腕が飛躍的に向上し、遠坂凛の爪の垢くらいの腕には耐えたかもしれない。

ケルトの戦士団は十二名。一個小隊。魔力は破壊聖杯でなんとかなるが、それを通す魔術回路はオーバーヒートしている。宝具の投影は不可能。したが自爆する。体のキレも疲労のために鍛え、独自ですらケルトの戦士は死徒の半分程度の戦力はあるかもしれない。それが十二名…
ケルトの戦士団、その進行方向に、難民のように逃げる人々を見つけた。

おい……と呟く。まさか、と。
俺に気づいていないのは、それ以外に獲物がいたから……？

待て。待て。彼らを殺す気か？欧米人らしい人間が多数。数は二十七名。中には軍服を着た軍人もいる。しかし脚が折れているのか、松葉杖をつけている。

軍人はたったの三名。内一人は脚を、別の軍人は腕を、無傷なのではないか。貧弱極まる武器しかない。

ケルトの戦士達が楯を鳴らして閧の声を上げながら突撃していく。

既に逃げる気力もないのか、ヘたりこむ男女がいる。全てを捨てて逃げ出そうとする者も。軍人達は……せめてもの抵抗か、必死になっ
て叫び、とにかく難民達を逃がそうとしていた。

「……！」

「保ってくれよ、俺の体……！　投影開始！」

「保ってくれよ、俺の体……！　投影開始！」
灼熱が全身を駆け巡る。呻き声を噛み殺して、な穿透最低限度の武器を投げた。
狙撃銃、デザートイーグル、弾丸。そしてライフ。宝具ですらな
いただの武器。それですら固有結界が暴発してしまいそうだった。
精神力だけで魔術行使の失敗による死の狭間に飛び込んで、死
狂いで回路を制御する。
狙撃銃でスコープを覗かず立射する。強化の魔術を全身の毛穴か
ら血を噴き出しながら使用し、無理矢理に衝撃に耐える。ケルトの
戦士が楯を掲げて頭部を守った。弾丸が楯に止められ火花が散る。
着弾の衝撃を腕一本で支えきったようだ。
化け物らしい。ケルトの戦士とやらは、苦笑いをするしかない。遠
距離からの銃撃が意味を成さないなら、近距離から直接弾丸をお見
舞いするしかなかった。
「―何をしている！？ 走れェッ！―」
長身の軍人が敬礼し、仲間達を連れて走り出した。そこらを狙い、
俺の意図に気づいてくれた。
槍を投げようとするケルト兵を狙撃する。ケルト戦士は逃げる連中
でなく、喫みついてくる虫げらを殺す事にしたらしい。猛然と駆け出す。

「ハッ～」

十二名とも俺が唯一恐怖した戦士、クール・フーリンのマスターだ。それやあ追い掛け回したくもあるだろう。サインでもやろうか。

猛然と駆け出していった。

「…」

狙撃銃を捨て、消す。走り出した。全力で駆けた。全然、それに気づかれてきただけのチキンレースだ。追い付かれたら死ぬ。槍が投げられてきたのを振り向き様にデザートタイガーで撃ち落とす。そしてまた逃げる。はは、実はアーチャーの奴と違って、俺は弓より銃の方が得意なんだ。追い付いてみる、その時はせめて六人は道連れにしろやる。

ジリジリと距離を詰められていく。早くも息が切れ始めた。勘弁してくれ、こちらとヘラクレス野郎と魔神霊と戦った直後だ。ギリシャの次はケルトか？このさい全部乗せてもいい。纏めて面倒見てやるさ。ジブトか？このさい全部乗せてもいい。纏めて面倒見てやるさ。タウルクか？エリンジャーの次はケルトか。ならこの次はインドか？味わって面倒見てやるさ。

林を見つける。枯れた木々、その先には何も見えない。畜生が、ここを俺の墓場にしろって？いいだろう、墓標には「最高にクールな男、ここに眠る」とでも書いとけよ。頼むケルト野郎どもが
俺は即座に戦闘服を脱いだ。ケルト戦士達の死角に入り、全身に砂塵のような泥を被る。塗りつける。

気絶程度のペイントだ。なんの効果もない。だが辛うじて地面に砂塵のような泥を被る。塗りつける。

俺の飛な恃を残と向き戦する。なあららめ、俺の目の前。あららメーの目を走らせ、むき苦しい髭面どもが俺を探してい

あららこちらに目を走らせ、むき苦しい髭面どもが俺を探してい

あららこちらに目を走らせ、むき苦しい髭面どもが俺を探してい

あららこちらに目を走らせ、むき苦しい髭面どもが俺を探してい

あららこちらに目を走らせ、むき苦しい髭面どもが俺を探してい

あららこちらに目を走らせ、むき苦しい髭面どもが俺を探してい

あららこちらに目を走らせ、むき苦しい髭面どもが俺を探してい

あららこちらに目を走らせ、むき苦しい髭面どもが俺を探してい

あららこちらに目を走らせ、むき苦しい髭面どもが俺を探してい

あららこちらに目を走らせ、むき苦しい髭面どもが俺を探してい

あららこちらに目を走らせ、むき苦しい髭面どもが俺を探してい

あららこちらに目を走らせ、むき苦しい髭面どもが俺を探してい

あららこちらに目を走らせ、むき苦しい髭面どもが俺を探してい

あららこちらに目を走らせ、むき苦しい髭面どもが俺を探してい

あららこちらに目を走らせ、むき苦しい髭面どもが俺を探してい

あららこちらに目を走らせ、むき苦しい髭面どもが俺を探してい
アントの宝具が何かで召喚されているのか。なら近くに敵サーヴァ

「ザーッ、ヴォ、」

突き上げた槍が砂塵を散らしながら一つのケルト戦士の視界を塞

いだ。咄嗟に頭と胸を槍で隠して庇った所を狙い、左膝を打ち抜く。

腹部に槍の穂先が突き刺さっていた。体が硬直する。その隙に左

肩にも槍が刺さった。体を撃らなければ腹部を抉られていただろう。

敵が槍を引き抜こうとするのに、俺は急走し続けていく固有結界

の制御を緩める。剣の切っ先が皮膚の下から顔を出した。俺が、抜けない。

驚愕した戦士達に、至近距離から銃弾をブレゼントした。楯で守

られなかった膝、次に胴、そしてがら空きとなった頭。撃った端か

ら弾丸を直接銃の内に投影しているからリロードもなく連射が出来

る。更に二人、後二人。

騒がす眼窩に指を引っ掛け引きずり倒し、そのまま首に膝を落

する道理もない。自分から踏み込んで指を戦士の目に突き込んだ。眼

球を潰す。眼窩に指を引っ掛け引きずり倒し、そのまま首に膝を落

球を潰す。眼窩に指を引っ掛け引きずり倒し、そのまま首に膝を落
とし
て

と


今度も左側から、感触からして楯か。もんと打って倒れると馬

乗りになられる。六人は倒したが、こころが限界なのか…？

楯が顔面に振り下ろされてくる。

斬撃、刺突が馳目なら打撃か。一度。二度。三度。

なんとか逃すも、四度目。五度目。六度目と直撃していく。

意識が朦朧としていく。視界が血で染まっていく。

その間にも何度も楯が顔面に振り下ろされていく。何度、殴られた…？

動けない…。

遠い理想郷に、微笑む少女の姿を幻視した。

遠い理想郷に、微笑む少女の姿を幻視した。

遠い理想郷に、微笑む少女の姿を幻視した。

遠い理想郷に、微笑む少女の姿を幻視した。
俺の意識が落ちたと油断した戦士が、大振りにトドメの一撃を振るのを捲い消す。腰が微かに浮いていたのだ。カッと右目を見開き、地面を蹴ってケルト戦士を跳ね退ける。そして腹を蹴りつけてマウントポジションから脱すると、楯を取り落としていた戦士の眉間に銃撃を浴びせた。これで、二人……。

枯れ木の背を預けて。
油断を消し最後の五人が包囲してにじり寄ってくる。腕が上がらせ、指から銃が滑り落ちた。まだ戦える、噛みついてでも殺してやると睨み付けて。一瞬、ケルト戦士たちがたじろぐ。
お互いどうした幽霊でも見た面しやがって。何気ってやがる……来い、掛かって来いッ！お前ら如きに俺が殺せるかアッ！

「いえ。後は僕に任せください。」
「一力いえ。僕は僕に任せてください。」
「……鬼気迫る奮闘、お見事でした。この風魔小太郎、義によって……」
俺は笑った。なんて運んだ。ああいや、最高のタ
イミングだよ。「ああ、頼む」「ええ。では」風魔忍群が長の力、篤とご覧あれ！」「ええ。では」風魔忍群が長の力、篤とご覧あれ！一陣の風となってアサシンのサーヴァント、風魔小太郎が馳せる。
一陣の風となってアサシンのサーヴァント、風魔小太郎が馳せる。
それが、極短い間の付き合いとなる忍との出会いで。
それが、極短い間の付き合いとなる忍との出会いで。
数多の死に彩られた血戦の序章、その一部だった。
刃にてその心を断つ。残念ですが、慈悲はありません。

十一分です。俺があれほど苦戦したケルト戦士を一掃した少年
が血振りをする。苦無型の短刀にこびりついていた血が払われ、少
年はこちらを振り返った。

刃にてその心を断つ。残念ですが、慈悲はありません。

彼の問いに苦笑して、地べたに座り込む。全然大丈夫ではな
い。それでも俺は弱音よりも、感謝を伝えるのを優先した。

いや……どうかな。それより助かった。ありがとう。

いえ、サーヴァントとして当然の事をしたまでの事です。ああ
れ Narrow the scope of the question.

代半ばほど外見だ。赤い髪、赤い瞳の忍。彼は俺が満身創痍
なを見で、気遣わしげに声を掛けてきた。

いや……どうかな。それより助かった。ありがとう。

いえ、サーヴァントとして当然の事をしたまでの事です。ああ
れ Narrow the scope of the question.

代半ばほど外見だ。赤い髪、赤い瞳の忍。彼は俺が満身創痍
なを見で、気遣わしげに声を掛けてきた。

大丈夫……ですか？」

そう言って座り込んだまま手を差し出すと、彼は一瞬キョトンと
して、微かにはにかみ手を握り返してくる。

本当には気のいい少年らしい。忍とは思えない、というのが侮辱か。
苦無捌き、使用した忍術、体捌き、気配遮断。どれも見事で彼が姿を表すまでまるで気づけなかった。このアサシンは間違いない一級か、それ以上アサシンだ。いや忍者だ。

こちらこそ、よろしくお願いします。では改めて名乗ります。僕はアサシン。風魔忍群五代目頭目、風魔小太郎です。見たところマスターのようですが、ご随伴なさっているサーヴァントの方はいらっしゃらないのですか？

「いや……それがな」

俺は彼に説明した。カルデアの者である事。第三特異点を攻略したら、敵の仕掛けてこの特異点に転移させられた事。疲労困憊の状態だった事。サーヴァントもいない単独である事。彼は無言で聞き、そして頷いた。俺を疑う素振りはみせていない。

「さらなるほど。大変でしたね。ならばこれより先是、この風魔が貴方をお守りしましょう。」

怠けがお粗末になった。何だか気が弱そうですね。そんなに気弱に笑えるのなら上等だ。彼の肩を借りて立ち上がった。仲良くゲリラしよう、小太郎。

分かった。仲良くゲリラしよう、小太郎。
と、そのまま歩き出す。
何処か行く宛があるのかと訝ねると、無いと答えられた。なんで
も小太郎も召喚されて数日しか経っておらず、まだ他のサー・ヴァン
トにはお目に掛かってないらしい。いまのは問答無用で襲いかか
ってくるケルト戦士ばかり。そして、無辜の民草を虐殺する姿は
りを目撃していた。
それを塞き止める為に単独で奮闘していたが、そろそろ単騎での
活動には限界を感じていたらしい。仲間を求めて彷徨っていた所、
銃声を聞き駆けつけてくれたようだ。
一方、最低限の情報は入手してあります。
- 地名、時代、敵と現地の勢力か？
- 観察です。ここは北米、年代は西暦1782年で、敵はケルト
戦士です。残念ながら敵首魁は不明ですが……現地のアメリカ軍は
頑強に抵抗しています。指揮官はジョージ・ワシントンだそうです。
アメリカ独立戦争終結の1年前か。なるほどな、アメリカが
独立出来なければ人理は崩壊する。特異点化には持ってこいという
訳だ。

だが些か腑に落ちない。アメリカの独立を阻むのが魔神柱の目的
ならば、どうして無辜の民を虐殺している？もっと別に合理的な
手段はあるだろう。敵サー・ヴァントの暴走か？
情報が無さ過ぎる。今は考えても無駄か。
それでも今日は猛烈に終わった。怪我の応急手当は小太郎がしてく
れたが、とにかく休みたい。手当てだって足りてない。魔力を使わ
ずに済まなかったか。
小太郎がいつの間にか俺を担いでいた。疲労から意識が朦朧とし
ていたら、彼は急いでとりえずの拠点に連れて行ってくれたらし
聞こうと。どうやらこここの住人はケルトとも皆殺しにされたよう
だ。生き残りはいなかったと。小太郎はケルトとも倒し、ここを
拠点としていたようだ。食料や水、小さな町医者の医院もあったが、
どこか険しい。
包帯やら何やらを巻いてくれる。介護されているようで恥ずかしい
が、本当に何もする気になれないので甘じょくして受け入れた。食料も
簡単ながら料理してくれて、提供してくれる。ほんともいい子だな小
太郎……。
それから、寝た。首に寝た。魔術回路も通常の状態に戻ってい
く。その間何度かケルトどもが襲撃して来たが、全て小太郎が撃退
してくれた。俺には休んでいてくださいと言って、やる為に料理を
振る舞うと。泣いて喜んでくれた。おいおいと苦笑する。英霊は腹
ペコばかりなのか？
別に言う事になる。

日に十二回、通信を試みたが応答はなかった。…精神を統一し、世界の異常を感じ取ろうとするもの、なんとなく薄い膜に包まれている気があった程度。広大極まる範囲を結界が覆っている…？

精神性を統一し、世界の異常を感じ取ろうとするも、現実に直面している危機ある。

「…それでも、主殿は僕と同郷の方だったんですね」
「そろそろこの町を出よう」

「はい、そうですね」
「訳は聞かないのか？」「はい。雇われたからには、お仕えします。それにこれ以上はケルトの侵攻を防ぎましょう。更なる大軍が差し向けられるか、敵ヴァントに襲撃される恐れがある。こちらから仕掛けるのはいいにしても、敵から仕掛けられるのは面白くありませんから。」

「…」

忍者、最高だ。俺は無言で頷き、これまでちまちま投げていた忍者、最高だ。俺は無言で頷き、これまでちまちま投げていた忍者、最高だ。俺は無言で頷き、これまでちまちま投げていた忍者、最高だ。俺は無言で頷き、これまでちまちま投げていた忍者、最高だ。俺は無言で頷き、これまでちまちま投げていた忍者、最高だ。俺は無言で頷き、これまでちまちま投げていた忍者、最高だ。俺は無言で頷き、これまでちまちま投げていた忍者、最高だ。俺は無言で頷き、これまでちまちま投げていた忍者、最高だ。俺は無言で頷き、これまでちまちま投げていた忍者、最高だ。俺は無言で頷き、これまでちまちま投げていた忍者、最高だ。俺は無言で頷き、これまでちまちま投げていた忍者、最高だ。俺は無言で頷き、これまでちまちま投げていた忍者、最高だ。
は、投射道具を爆破する。掃除は完了だ。小太郎と拳を合わせる。
小太郎少年は、気恥ずかしかっとうに微笑んだ。
小太郎少年は、気恥ずかしかっとうに微笑んだ。小太郎と拳を合わせる。
地獄の門へ（上）

「ゲリラ戦をする」

なんでもないように俺は言う。小太郎にも異論はないようだ。

だが俺にとっては何だ不思議な愚策でしかない。

そもそもゲリラ戦術に於いて必要なものは何か。それはざっくびり纏めると三つである。

一つ、現地の人々の厚い支持と協力。この協力というものは、物資や情報の支援、戦力の安定的供給を意味する。生憎と生存者は、今のところ特異点を転移させられてすぐの二十名しか見えていない。生き残っている人々がいれば支持は得られるだろうが、ケルトどもは基本的に生存している人間は虐殺しているようだ。

二つ、敵に発見されていない、もしくは発見されてでも攻撃される恐怖のない安心と安全の拠点。後は最低限度の兵数が必要である。

俺の言う攻撃対象にされない拠点というのは、何も堅牢な城塞ではない。武器庫、食糧庫、兵舎と病院などを備えた後方基地である。

帰る家があるというのは精神衛生上なくてはならない物だ。またゲ
リラ戦とは基本的に多数に対する少数での非正規戦である為、敵側から捕獲される死が決まる。なので常に移動し続けるのが鉄則だ。後方基地もキャンプ地として、移動能力を備えていなければなら
ない。またキャンプ地は敵側から送り込まれるのを防ぐために留まる立地であるのも条件の一つだ。現代のギリリ兵は遠方から目的的に侵入し、爆発物を敵拠点に仕掛けてさよならバイバイが基本的な戦術だが、とても誉められた行為ではなかった。
そしてギリリ戦術と聞いて勘違いしてはいけないのは、森林地帯
目的を達成するのには到底不可能である。それに繰り返すが、ギリリ戦術をする以上は常に移動し続ける。
それでギリリ戦術の極意とは「守らない」事である。徹底して
攻め、逃げ、攻め、逃げる。守るべきものは全て捨ててる。そうで
ければギリリは破滅するのだ。よく映画などでギリリが無双してい
るが、そんなものはフィクションでしかあり得ない。
そして三つ目。これが一番大切だ。すばり敵対勢力が手出ししな
い・出来ない支援者である。
武器、医療器具、食糧、人員…それらは戦で採れるものではない。敵から奪おうにしても限界があるし、故にこそそれを供給し、そこにある存在がいなければならぬ。ずばり必要なのは金だ。これがなければお話しにもならないのである。

そもそもの話、ゲリラの絶対的な目的とは、決して覆す事の出来ない劣勢の中で、敵対勢力から如何にして譲歩を引き出すかだ。もうお前の相手は疲れた。要求を言うと、と言われたら降伏する。そもそも、ゲリラは、敵対勢力からすればテロリストではなさそうだ。だからわざわざ要求を言わないと、訊いて調子に乗らせても面白くない。テロには届かない。それもと言われて撃つ進される。それらの強固な姿勢を打ち崩すほどの活躍をゲリラがすれば、一躍国際テロリストの出来上がりで、色んな国から袋叩きにされ駆除されるのが関の山だ。

よしも変を訴えて覚えたとしても、裏の世界で密かに始末されて何もなかった。テロリストどもは我々の欺瞞情報に掛かり全滅したと伝えるわけである。

つまりゲリラは最初から負けているのである。負けていているからゲリラをするのだ。
コンタクトも取れていない。おまけに今後の展望何もない。唯一の救いは、武器に関しては投げ捨てたと感じる事だ。これでゲリラをするとなったから、目的は一つしかなくなる。それは如何にして敵勢力へ敵がらせするかだ。

－先程フライガイザーの間欠泉を見た。という事はネバダ州という事だ。

ネバダ州とは砂漠気候と亜乾燥気候帯に大半を占められたアメリカ西部にある州だ。州の大半が砂漠地帯である故に農業は振るわず、利点は豊富な鉱産資源だが今の時代はまだ鉱脈は発見されていないはず。なら乾燥地帯故に疫病が少ない事ぐらいか。

現代ならいい知らず、今はアメリカ独立戦争も終わっていない時代だ。ネバダ州の人口は少ないだろう。

－人は少ない、砂漠地帯、おまけに夜が厳しい冬が近い。これだけでも移動の理由としてのは充分だ。現代っ子の俺は冷暖房の効いた温室じゃないと落ち着けないんだよ。

現代ならいい知らず、今はアメリカ独立戦争も終わっていない時代だ。ネバダ州の人口は少ないだろう。

－僕も出来れば部屋でゆっくりしてたいですが。微妙な表情で笑い合う。そこでお前の使う忍術がまるで理解できない俺は頭が悪いのか。魔術、呪術、陰陽道……どれも違う異能臭い。俺もニノニン言いうながら術を使いたいが無理だろう。
「気を取り直して話を続ける。」

「目標は道中で逃げている人間がいれば保護し、ケルトがいればゲリラして嫌がらせし、人の多い町に行って情報を得る。全てはそこからだ。ゲリラに関しては『嫌がらせ』に終始して絶対に欲張らない。どうなに好機でも一撃を加えたら即離脱。これを徹底するぞ。」

「拝承しました。僕は憎とこの国の地理には疎いので、お詳し子の主殿に伺ってお任せします。」

「そうだ。じゃあ北進しオレゴン州を通って、ワシントン州に行こう。ジョージ・ワシントンがケルトを相手に徹底抗戦しているんだ。」

「はい。主殿と会う前に助けた軍人から聞きました。」

「ワシントンは1781年、つまり去年の事だな。彼はその頃はバージニア州ヨークタウンを包囲し、イギリス軍を降伏させアメリカ軍はバージニア州ヨークタウンを包囲し、イギリス軍を降伏させアメリカ軍に手を出された。アメリカ軍はバージニア州ヨークタウンを包囲し、イギリス軍を降伏させアメリカ軍に手を出される。」

「……僕はバージニア州かその近隣の州にいると見ている。アメリカ軍……今は大陸軍か。この頃のワシントン州は、まだその名ではないが……人口は多く人種も多様だ。多角的な情報入手出来るだろう。ケルトがやかしかしてくれなければ。道中で得られるかもしれないなんてらの情報を、危険と判断できれば、目標地は変更する。」
笑うしかない。

一人で出来る事は多寡が知られている。一刻も早くサーヴァントを
集め、現地勢力と協力体制を作り、ケルトを撲滅しなければなら
ない。

変化球でケルトが実は魔神柱へのカウンターである可能性も微粒
子レベルで存在するがそれは無視して叩き潰す。

大陸軍と合流するのが最もいい手だが、生憎と物理的に遠すぎる。

傍らには、何故か霊体化しない小太郎。冬は近いはずなのに、日
差しは強い。夜になれば零度近い気温になるのはこの五日間で分か
っていた。ちらりと時計を見る。

何か、愁いがあるのですか？顔色がよくありませんが……

いや。別になんでもないさ。

……あの、主殿。

……ん？どうかしたか？

……いや。別になんでもないさ。

……あ。

「……あ」の、主殿。

「……ん？どうかしたか？」

「何か、愁いがあるのですか？顔色がよくありませんが……」

「へえ、そんなん？顔色がよくありませんか？」

「いや。別になんでもないさ。

背負った戦闘背囊の位置を直しながら、俺は苦笑した。よう、な
んでもないのだ。しかし小太郎はそう感じなかったらしい。やや遠
慮がちに、懐から妙なものを取り出す。

手拭いだ。丁寧に折り畳まれている。
【…】

気を休めてはななくて。えっと…慰め、でもなくて…

微妙に照れ臭そうな小太郎が可笑しくて、頬が緩んだ。小太郎は誤魔化すように咳払いをして、四角く畳んでいた手拭いを広げる。

「…なんだ。落ち着け…

黑く鞣した革の帯である。いつの間に作っていたのだろうか。左目を覆える形に仕上がっていたそれを、俺は右目を見せ開いた。…それは『眼帯』だった。

黒く鞣し革の帯である。いつの間に作っていたのだろうか。左目を覆える形に仕上がっていたそれを、俺の方へ差し出しながら、小太郎は蚊の鳴くような声で言う。

「特になんの呪的な意味も、魔術効果もありませんが、それでもその、カッコイイと思います！

呆気に取られた。カルデアからアイリさん辺りが来れば、左目も修復出来る」というかアリトリアが傍に來ればそれだけで、全て遠い理想郷が左目を治してしまうのだが。だから眼帯なんて包帯も構わないと思っていたのだが。

「主殿はその、なんというか風格がありますから…似合うと思うんで、これ…

「あ、ああ…」

「着けてみてください！

「あ、ああ…」　

「着けてみてください！

「あ、ああ…」
「目を輝かせた。なんとはなく。」

膝を優しく拭いに来と俺の左目を口実に、プレゼントをくれた事が、素直に嬉しくない感じ。

「凄いですね、まるで大名に仕える忍の頭領！闇世界の実力者の風情があります！そんな事を言われても嬉しくないが、それでも俺は俺を元気付けようと頻りに話しかけてきた。そんな心配されるほど、軟弱じゃないんだけどな……。」

優しさだろう。有り難く受け取っておく。

「ああ？」

「……主殿、少し、凄んでみてください。」

「……なんだ？」「……」

「……は？」

「……小太郎、恥ずかしくない？汗が出ていても、どうしろというんだ……？」「……」

「あ、しようというんだ……？」

「……」

「……主殿。少し、凄んでみてください。」
おお！素晴らしき御賞賜！

小太郎が拍手してくる。

「…」

「…」

「イツ…俺の事を、心配してくれてるんだよ、な…？」
地獄の門へ
（中）

焚き火をし、火に当たるなら夜を過ごした。

いや、リババダ州の夜は寒い。火を吹く魔剣を投影して篝火の火元にしたいかければ、最悪凍え死んでいたかもしれない。防寒着や毛布を投影し、それに入ると夜を過ごした。

やはりネバダ州の夜は寒い。火を吹く魔剣を投影し、篝火の火元に入れないまではいけなかった。

小太郎が周囲に敵影が近づいてこないか夜通し警戒してくってい
たが、結局一度も熟睡出来ず。浅い眠りは夜明けと共にすっかり醒めてしまった。陽が上がるなり、戦闘後呪を背負い小太郎と連れ立ち、北進を再開した。

腕の通信機の時間の確認と、通信の試み、データの送信を行うも相変わらず反応はない。いい加減認めるべきか。どうやらこの特異点と外部は時間の流れが大幅にずれているらしい。

この調子だといけない。結局一日も二日もが経つ頃には十年近くが経過している事になる。敵の狙いは……俺を人間の寿命で殺す事か？それ以外に考えられるだとも思えない。

絶対に俺では勝てないと……そう見切っている？

日もすれれば、俺は寿命で死んでいてもおかしくない。十五日もすれば確かに死んでいる。

第四特異点で時間を稼ぐ模様だろう。
俺は第四特異点を二日以内に攻略出来る自信があった。アルトリアの調子次第で半日以内での攻略も可能だろう。だがそれは、俺が作戦をカルデアに伝えられたから。敵の思惑通りに行えば、恐らくカルデアは第四特異点で足止めされる。俺がいるのが第五であるなら、まだ辛うじてお爺ちゃんになるだけかもしれない。それだけだ。

アルトリアから奪った聖剣の鞘がある為、俺の老衰が停滞していのが魔神柱側にとっては計算違いだ。普通ならどんなに俺が人間として長生きしても、二十日もすれば確実に俺は死んでいるはずだ。が、二十日経ってもまだ現役の肉体年齢を保持できる。それがどのようにしたら統計的で常識的な考え方であるのか分からない。奇策が通じない領域の、極シンプルな力で原始的肯で潰して来るのかかもしれない。それでも同等の戦力を考えるなら、俺の老衰を待たずとも人を完全に修復不能まで持ていける。少なくとも今は、俺には抵抗し得ない。俺は最低でも、十年単位で魔神柱の侵攻食い止め、カルデアが来援するまで持ちこたえるか、攻略してしまわないといけない事になる。やはり単独での活動は下策も下策だ。

気が遠くなる思いだ。長期戦を想定する。
「注記事題」

免疫系は、打たれるたびに、体の膜を破壊し、鍵を開く。

「……」

この時、彼らは物語を願う。

「……」

心の向かす願いが、願う願い……
打ち出す千将莫耶は地面に突き刺さり、そのまま地面に柄頭まで食い込んだ。戻ってきた小太郎と手分けして地面から顔を見せている柄頭に砂を掛けて隠す。
数秒待ち、前方からやって来る敵影が上げる砂塵の規模を小太郎も視認した。

「……主殿。敵軍勢およそ五百です。」
「む、砂塵で分かるのか？」
「はい。主殿も直ぐに判別出来るようになると思います。」

五百の軍勢なんて現代では見たことがなかったが、なるほどあら
ぐらいの規模が五百か。
あらびキの軍勢なんて現代では見たことがなかったが、なるほどあら
ぐらいの規模が五百か。

まあとアリモトの過去やクーフーリンの過去でも、夢で軍勢のは
数が多い。何処に行くているか。

do

で、これでおおよそその感覚は掴んだ。
それにしても五百の軍勢……。大部隊ではないが、本格的な部隊

それは在せず、どこかの感覚は掴んだ。
何処に行くか？

では何処に向かう気なのか……何処であるに

は、よし。それを乗り越えたというふうに
案外と生き残りの人々の所に案内してくるのかかもしれないが……
幾ら切羽詰まっていても、他者を巻き込む危険な真似はするべきで
はない。
殲滅するぞ。小太郎、宝具の使い時は俺が指示する。後退しなが

「承知。破壊工作は出来てませんが、やるのですね？」

「奴らの方が俺よりも足が速い。後退しながら工作するのは無理だ

黒弓を投影する。片膝をつき、磐石な射撃体勢を整えた。錬の方

破壊聖杯接続。魔力供給開始。黒弓を投影した破損聖杯に魔術回路を繋げる。破損して五％しか

懐に呑んでいる破損聖杯が無くならないのは、高ら使っても無くなる事のない強力な魔力タン

克。五％で俺の魔力量よりも遥かに多い。利用しない手はなか

偽・螺旋剣を投影し、箒に番える。真名解放と共に射撃し、敵軍

一方でを団に着弾させた。爆発させなけりゃ、ケルト戦士らの呪呪に回避した

のが、五十名ほどしか削れないかった。よくよく化け物だ。

偽の存在を察知したらしく、雪崩を打ったように駆けてくる。

それに俺は矢絶ぎ早に剣弾を射込む。

大火力の射撃を続けたのだ。早く白兵戦に持ち込みたいのだろ

大太郎、俺にとっては頑張ったなー

「八十九。俺にとっては頑張ったなー」

いえ、大戦果です。サーヴァントでもないのに凄まじい働きでし

ようー
殺気を張らせ突撃していく。平野だ。しかもこちらは二人。罠を疑いないというわけではない。俺はゆっくり後退しながら矢を射込むも楯で防がれる。防がせる。大火力の射撃は連続して行えないと思わせた。
奴らの足元から神秘爆弾の炸裂を見舞う。怒号のような阿鼻叫喚と、爆風に煽られながら俺は懐のケースから煙草を抜き取り、ライターで火を點け口に咥えた。吸い、精神疲労を抑える薬効の効果を感じつつ紫煙を吐き出す。
微かな魔力が籠ったものだが、備蓄は後四本か。ゆらゆらと立ち上る煙を見上げて、爆発が収まるのを待つ。「壊された幻想」
「小太郎」は！阿鼻叫喚地獄をご覧に入れましょう。大炎熱地獄の責め苦を与えます。「不滅の混沌旅団」！
更に半数は削った所に、風魔小太郎を突入させる。小太郎の配下の忍が二百の霊体として召喚される。算を乱したケルト戦士団の周辺に暗黒の帳が落ちた。視界を封じ、混乱する敵陣列に風魔忍群が襲い掛かる。

断末魔が轟くも、ケルト戦士らが討たれる光景は暗闇に呑まれる事は出来ない。冷淡な瞳でそれを見守り、煙を吹かす。四分ほど経っただろ？又は。暗闇が晴れ、そこには小太郎だけが立っていた。
「斃したら消える。衛生的で実に結構な敵だ。」

小太郎が戦域から離れ、即座に戦闘を踏み切り出す。
俺はふと、小太郎に宝具の詳細を聞いた時から思っていた事を口にした。
「それにしても、お前の宝具の真名…全然和風じゃないな。それは言わないと約束ですよ、主殿。」

「それは言うまでもないが、忍者に惹かれる所のある俺としては残念に感じた。」

「それにしても、お前の宝具の真名…全然和風じゃないな。それが言わないと約束ですよ、主殿。」

「そういっても、小太郎は忍者の詳細を聞いた時から思っていた事を口にした。」

「それにしてみれば、お前の宝具の真名…全然和風じゃないな。それが言わないと約束ですよ、主殿。」

「それにしてみれば、お前の宝具の真名…全然和風じゃないな。それが言わないと約束ですよ、主殿。」

「それにしてみれば、お前の宝具の真名…全然和風じゃないな。それが言わないと約束ですよ、主殿。」

「それにしてみれば、お前の宝具の真名…全然和風じゃないな。それが言わないと約束ですよ、主殿。」

「それにしてみれば、お前の宝具の真名…全然和風じゃないな。それが言わないと約束ですよ、主殿。」

「それにしてみれば、お前の宝具の真名…全然和風じゃないな。それが言わないと約束ですよ、主殿。」

「それにしてみれば、お前の宝具の真名…全然和風じゃないな。それが言わないと約束ですよ、主殿。」

「それにしてみれば、お前の宝具の真名…全然和風じゃないな。それが言わないと約束ですよ、主殿。」

「それにしてみれば、お前の宝具の真名…全然和風じゃないな。それが言わないと約束ですよ、主殿。」
はそんな時期はなかったから、妙に微笑ましいだけだ。

五日間歩くと、山脈に差し掛かった。ここを越えるとオレゴン州に入るとだろう。

ろくな装備もなくに山岳部を歩くのは中々に難儀だ。ここに来るまでに焼入れている村落を見掛け、食料なり水なりを調達したが、やはり心許ない。生存者は見なかった。その痕跡も見当たらない。

そして、北進を続ける。斥候として先行していた小太郎が引き返してくるのを見ると、俺は嘆息する。
「...またか？」「はい。ケルトの戦士、数は二千。敵サーヴァント一騎に率いられています。南下しているようです。」

五日前に遭遇した五百の、四倍の兵力。そしてサーヴァント...。

俺は顰めた。北進していくと、敵の数が増えた。よくない兆候だ。もしザーソンかオレゴン辺りに敵の拠点があるのか？

変えるべきかもしれない。

素通りさせましょうか。

「感戦能力の高いサーヴァントだったから困る。こちらから接近しやるほうが、やり過ごせないだろう。それに判断するのは早計だ。」

「いや。またはそう判断するのは早計だ。」

「ああ。打ち合わせ通りに頼むぞ。」

「は！承知。」

瞬、と姿を消す小太郎に俺は頷き。ポツポツと小粒の雨を降らせ瞬。夜は近く、山岳地帯で、強い雨が降る前兆がある。やり様はある、と誰にでもなく呟いた。
地獄の門へ（下）

あれは、ヤバイな……。

しとしと、雨が降り始めていた。陽は落ち、夜となっている。

樹の影に身を隠し、草木に紛れて敵陣に接近したのだが、ケルト戦士を率いる将を目にした俺は顔を粋めた。

どうやらこの森で、奴らも夜営をしているらしい。ケルト戦士が歩哨に立ち、周囲を警戒している。休憩をしているのではなく、防備を固め夜間に敵から襲撃されるのを警戒しているようだ。陣幕は女の戦士が守りを固めて、将であるらしいサーヴァントは戦士に周りを固めさせたまま切り株に腰掛け、目を閉じて静かに佇んでいる。油断や恥心は見て取れない。夜間の行軍は控え、居るか anders。周囲の敵戦士はアマゾネスか。サーヴァントは見事な指揮官らしい。

周囲の女戦士はアマゾネスか。サーヴァントは見事な指揮官らしい。若い少女の姿をしているが、見た目で侮っては痛い目を見るだろう。稲のついた二つの鉄球と、凶悪な鉄爪、大振りの剣を装備している。剣を解析すると真名が分かった。
アマゾネスの女王。アカイアとトロイアの戦争で、ヘクトールの死後にトロイア側へ援軍として駆けつけ、アキレスと交戦した。

彼に殺されるも末期に呪いのような予言をしたという。

軍神アレスの血を宿し、勇猛なアマゾネス族の女王として君臨していたのだから、かなりの力を持っているだろう。神代の英雄とい

伝承によるとペンテシレイアは、相当にアキレス族の女王としても君臨し

たというのも有り得るのがサーヴァントだ。

なんであれ仕掛けるのは得策ではなさそうだ。守りが固い。幸い

敵は高いためではなさそうだ。俺に気づかぬ様子はない。ペン

テシレイアの陣の向こう側にいる小太郎がハンド・サインを送る。

あらかじめ取り決めていた「仕掛けた罠」「そのまま」「素通り」

のサインである。

幾らなんでも無謀だ。危険を犯すべきじゃないだろう。彼女が

気配を消して足音を一切立たず、ゆっくりと離れていいくペンテシ

レイアをやり過ぎる。ペンテシレイアとの交戦を避け、夜通り歩

て山脈を抜けた。小太郎が言う。

・・・人がいませんね〜

・・・
アマゾネスの女王が、何故ケルトに味方しているのかは不明だ。

力で敗れ、傘下に収められたのか。それとも召喚された義理を通じているだけなのか。なぜあれ厄介である。将として優れ個として

強いサーヴァントは敵に回したくはない。が、敵だ。いずれ戦われねばならないだろう。ケルトに荷担して

いるという事は無辜の人物を殺めている可能性は高い。これからも

殺すだろう。本当なら見逃すべきではなかったが、俺は殺される訳

にはいかないのだ。情けない。小太郎というサーヴァントがいるから、捨て身で

人を助けなくても、長期的に見て多くを助けられる可能性を見過ごした。俺は汚

い奴だ。嫌悪感を抱く。

幾日か更に歩き、オレゴン州に入り。しかし相変わらず人を見

掛けない。時折り山岳部でケルトに遭遇するが、一撃離脱を繰り返

してそのまま逃げ去った。ケルトとの遭遇率が高い。俺はこれかみを揉んだ。マズイ。下手

を打った予感がある。そう思ったなら即座に行動を移すのが吉だ。反

ワシントン州は敵地だ、奴らとの遭遇率が高すぎる。北は敵だら

けだろう。南東に進路を移す。

「…小太郎、進路を変えるぞ」－え？－

「…小太郎、進路を変えるぞ」

断じるように俺がそう言うと、小太郎は困ったように眉を落とし

た。
戦闘を終えるの中身はほぼカリであった。食糧も水も備え付けは少なかった。今更進路を変えても飢えに苦しんで野垂れ死ぬかもしれない。

武器や悪路の歩行に必要な装備は投げ売りでなんとか出来るが、食い物関係だけはそういう訳にもいかない。こればかりは仕方がなかった。最寄りの都市があるから、そこ寄って調達してから進路を変えよう。

武器や悪路の歩行に必要な装備は投げ売りでなんとか出来るが、食い物関係だけはそういう訳にもいかない。こればかりは仕方がなかった。最寄りの都市があるから、そこ寄って調達してから進路を変えよう。

1843年にウィリアム・オバートンがこの地を発見し、商業都市として開発する事業に乗り出した場所。オレゴンシティとバウンツバーサーの間中に位置するその地は、ウィラメット川流域に広がる空地である。これが正解だろう。別名「麦酒の町」であり、俺は現在のポートランドで麦酒の醸造の仕方を勉強したのだ。故に都市と言うのは正確ではない。未来に都市となる場所、と言った方が正解だろう。ともあれその処に向かった俺と小太郎は、後のポートランドである集落の惨状を目の当たりにした。

戦闘を終えるの中身はほぼカリであった。食糧も水も備え付けは少なかった。今更進路を変えても飢えに苦しんで野垂れ死ぬかもしれない。

武器や悪路の歩行に必要な装備は投げ売りでなんとか出来るが、食い物関係だけはそういう訳にもいかない。こればかりは仕方がなかった。最寄りの都市があるから、そこ寄って調達してから進路を変えよう。

戦闘を終えるの中身はほぼカリであった。食糧も水も備え付けは少なかった。今更進路を変えても飢えに苦しんで野垂れ死ぬかもしれない。

武器や悪路の歩行に必要な装備は投げ売りでなんとか出来るが、食い物関係だけはそういう訳にもいかない。こればかりは仕方がなかった。最寄りの都市があるから、そこ寄って調達してから進路を変えよう。

戦闘を終えるの中身はほぼカリであった。食糧も水も備え付けは少なかった。今更進路を変えても飢えに苦しんで野垂れ死ぬかもしれない。

武器や悪路の歩行に必要な装備は投げ売りでなんとか出来るが、食い物関係だけはそういう訳にもいかない。こればかりは仕方がなかった。最寄りの都市があるから、そこ寄って調達してから進路を変えよう。
風魔の頭目が顔を引き締める。

「危険だ。深入りし過ぎた。」
「はい。退きましょう。川で魚を釣るか、海岸に出て漁をするしかなかろう。」

主殿、下がってください！

余りにも危険だった。まだ敵が近くに。

おお、これはまた数奇な客人だ。折角来たというのにもう帰りかな？

主殿、下がってください！

「ッ－－－－！」「──－－－－－」

咄嗟に飛び退いた俺の前に、苦無型の短刀を構えた小太郎が出る。

咄嗟に飛び退いた俺の前に、苦無型の短刀を構えた小太郎が出る。

崩れ落ちた家屋の影からゆっくりと姿を現したのは、筋骨隆々の男だった。上半身は裸、胸に獣に引き裂かれたような傷が三本あった。

それも螺旋に捻れた大剣を肩に担いだ。満を持して崩れ落ちた家の影からゆっくりと姿を現したのは、筋骨隆々の男だった。上半身は裸、胸に獣に引き裂かれたような傷が三本あった。

それが螺旋に捻れた大剣を肩に担いだ。満を持して崩れ落ちた家の影からゆっくりと姿を現したのは、筋骨隆々の男だった。上半身は裸、胸に獣に引き裂かれたような傷が三本あった。

それが螺旋に捻れた大剣を肩に担いだ。満を持して崩れ落ちた家の影からゆっくりと姿を現したのは、筋骨隆々の男だった。上半身は裸、胸に獣に引き裂かれたような傷が三本あった。
細い目を微かに開き、豪傑は意外そうに言う。

「む、一目見ただけで俺の真名を見抜くとは……さすが俺を知って

吐き捨て、思考を回す。意識に火花が散るほど現状を打破せんと、

偽・螺旋剣へそのオリジナルを持つ英雄。アルスターサイクル

に於いてクー・フーリンの養父にして友であり、剣の師であった事

を、後世の有力者は彼の子孫を自称し権威を高めたとする。

謂わばクー・フーリンが超自然的な魔人であったなら、彼は超自

然的な超人である。彼の螺旋剣を幾度も投影している俺はこの英雄

の力をよくよく知っていた。故に——」

「逃げるぞ、小太郎。俺達だけでは絶対に奴には勝てん……！」

小太郎は反応しない。真っ直ぐにフェルグスだけを睨み付けてい

る。冷や汗がその顔には浮かんでいた。風魔小太郎がフェルグスか

ら目が離せないのは、目の前の超人が突き刺すような戦意を叩きつ
お前達は手を出すな。この益荒男達は、俺の獲物だ。「虹霓剣を構えたフェルグスが、天上が落ちてきたような威圧を放つか？　ちかならケルトの戦士らを退かせる。戦士としての矜持か？　自信かな時間で、俺と小太郎を殺せると見切っているのか？　故に、情けだ。故に、情けだ。

「血路を拓きます。主殿、どうか撤退を。」
「撤退はする、だがお前も一緒だ。」
「馬鹿ですか貴方は！？」

小太郎は嘆き、少し笑った。こんな使い捨てても文句の言えない乱波と死地を共にし、あっさり見捨てる事なく危機を脱しようと言う主。得難い主だ、嬉しかった。だが、だからこそだ。小太郎は何に換えても絶対にこの
主を逃がす事を誓う。何があっても彼に仕えると、この心命の全てを捧げて、彼に尽くそうと。

「―いい主従だ。益々、殺したくないものだ……だが。今の俺は、喩え悪鬼と謗られるようにとも、お前達を殺す。せめて名だけでも聞かせてはくれんか？」

「…衛宮士郎だ。覚えておけ。俺は逃げる。だが一つか必ず、お前に出来ることは……

「は―ははは、ははははは！　そうか、そうか！　俺を倒すか！　面白い、だがそれには問題がある。衛宮士郎、お前は此処で死ぬ。次の機会などないぞ。残念ながら、な……」

「いや、主殿は死なない。そしてお前を必ず倒すだろう。何故ならこの僕が、風魔忍群五代目頭領、風魔の小太郎が主殿を逃がす所は……と。フェルグスは、最後に快活な笑いを一つ流す。

「いえ、主殿は死なない。そしてお前を必ず倒すだろう。何故ならこの僕が、風魔忍群五代目頭領、風魔の小太郎が主殿を逃がす所は……と。フェルグスは、最後に快活な笑いを一つ流す。

「は―ははは、ははははは！　そうか、そうか！　俺を倒すか！　面白い、だがそれには問題がある。衛宮士郎、お前は此処で死ぬ。次の機会などないぞ。残念ながら、な……」

「いや、主殿は死なない。そしてお前を必ず倒すだろう。何故ならこの僕が、風魔忍群五代目頭領、風魔の小太郎が主殿を逃がす所は……と。フェルグスは、最後に快活な笑いを一つ流す。

「いえ、主殿は死なない。そしてお前を必ず倒すだろう。何故ならこの僕が、風魔忍群五代目頭領、風魔の小太郎が主殿を逃がす所は……と。フェルグスは、最後に快活な笑いを一つ流す。

「は―ははは、ははははは！　そうか、そうか！　俺を倒すか！　面白い、だがそれには問題がある。衛宮士郎、お前は此処で死ぬ。次の機会などないぞ。残念ながら、な……」

「いや、主殿は死なない。そしてお前を必ず倒すだろう。何故ならこの僕が、風魔忍群五代目頭領、風魔の小太郎が主殿を逃がす所は……と。フェルグスは、最後に快活な笑いを一つ流す。

「いえ、主殿は死なない。そしてお前を必ず倒すだろう。何故ならこの僕が、風魔忍群五代目頭領、風魔の小太郎が主殿を逃がす所は……と。フェルグスは、最後に快活な笑いを一つ流す。

「は―ははは、ははははは！　そうか、そうか！　俺を倒すか！　面白い、だがそれには問題がある。衛宮士郎、お前は此処で死ぬ。次の機会などないぞ。残念ながら、な……」

「いや、主殿は死なない。そしてお前を必ず倒すだろう。何故ならこの僕が、風魔忍群五代目頭領、風魔の小太郎が主殿を逃がす所は……と。フェルグスは、最後に快活な笑いを一つ流す。

「は―ははは、ははははは！　そうか、そうか！　俺を倒すか！　面白い、だがそれには問題がある。衛宮士郎、お前は此処で死ぬ。次の機会などないぞ。残念ながら、な……」

「いや、主殿は死なない。そしてお前を必ず倒すだろう。何故ならこの僕が、風魔忍群五代目頭領、風魔の小太郎が主殿を逃がす所は……と。フェルグスは、最後に快活な笑いを一つ流す。

「は―ははは、ははははは！　そうか、そうか！　俺を倒すか！　面白い、だがそれには問題がある。衛宮士郎、お前は此処で死ぬ。次の機会などないぞ。残念ながら、な……」

「いや、主殿は死なない。そしてお前を必ず倒すだろう。何故ならこの僕が、風魔忍群五代目頭領、風魔の小太郎が主殿を逃がす所は……と。フェルグスは、最後に快活な笑いを一つ流す。

「は―ははは、ははははは！　そうか、そうか！　俺を倒すか！　面白い、だがそれには問題がある。衛宮士郎、お前は此処で死ぬ。次の機会などないぞ。残念ながら、な……」

「いや、主殿は死なない。そしてお前を必ず倒すだろう。何故ならこの僕が、風魔忍群五代目頭領、風魔の小太郎が主殿を逃がす所は……と。フェルグスは、最後に快活な笑いを一つ流す。

「は―ははは、ははははは！　そうか、そうか！　俺を倒すか！　面白い、だがそれには問題がある。衛宮士郎、お前は此処で死ぬ。次の機会などないぞ。残念ながら、な……」

「いや、主殿は死なない。そしてお前を必ず倒すだろう。何故ならこの僕が、風魔忍群五代目頭領、風魔の小太郎が主殿を逃がす所は……と。フェルグスは、最後に快活な笑いを一つ流す。

「は―ははは、ははははは！　そうか、そうか！　俺を倒すか！　面白い、だがそれには問題がある。衛宮士郎、お前は此処で死ぬ。次の機会などないぞ。残念ながら、な……」

「いや、主殿は死なない。そしてお前を必ず倒すだろう。何故ならこの僕が、風魔忍群五代目頭領、風魔の小太郎が主殿を逃がす所は……と。フェルグスは、最後に快活な笑いを一つ流す。

「は―ははは、ははははは！　そうか、そうか！　俺を倒すか！　面白い、だがそれには問題がある。衛宮士郎、お前は此処で死ぬ。次の機会などないぞ。残念ながら、な……」

「いや、主殿は死なない。そしてお前を必ず倒すだろう。何故ならこの僕が、風魔忍群五代目頭領、風魔の小太郎が主殿を逃がす所は……と。フェルグスは、最後に快活な笑いを一つ流す。
素晴らしい虹が、螺旋の断層を生み出していく。フェルグルスは吼えるようにして螺旋の魔剣を地面に突き刺さず、その切っ先を鉄心の男へと向けて。
「かどボルク『虹霓剣』」。
螺旋の渦が、奔った。
まるで狗のようだと自嘲する。溢れ落ちていく目の前に苦笑する。
分身、空蝉の術、火薬玉……持ち得る全ての誤魔化しの術を用い、
失に物狂いで遁走したというのにこの始末。担いでいる主は意識が
宝具を使い、風魔忍者羅総力で尾震の暴風を斎す英雄を足止めした。}
しかし、次の瞬間にには螺旋の虹によって暗闇は払われ、風魔の忍ら
波を庇い、あろう事か超雄の拳打を受けて昏倒していた。

英雄は言った。

一潔いまでの逃げの一歩、見事。この俺から逃げ切ったのだ、いつ
か再び挑むがいい。その日の為に俺は追わん。逃げ切ってみせるが
いい。

逃げ切れたのか、と己に問う。
確信はない。ケルト戦士の追跡は執拗だった。だが、何者かが追
森の中、樹木の下背を預けさせる形で主を下ろす。それで、力尽き
ってる気配はない。

まだだ、まだ死ねない。サーヴァントとして、死を遠ざけるスキル
なんて持ち合わせてはいないが、そんなものは関係ない。今、主
の意識もない状態で死ねばどうなるか？サーヴァントも、味方もい
ない孤立無援。そんな中に主を一人にする不忠は認められない。

- ダミー -
息が切れる。それでも呼吸する。
どれほど経ったろう。雨は止まない。手足が熔けて消えている。
マズイ、もう、保たない……説念が意識を遠退かせる瞬間、主は目を覚ました。
「ッ……？　……！　小太郎！？」
「主、殿……目が、覚められました、か……」
「お前……」
「……前……」
「主殿は聡明である。こちらを見るなり、その状態を察してくる。悲痛に歪む顔に、悔やむだけ的心情があった。魔小太郎を惜しむ、悔やむだけ的心情があった。それが嬉しい。人でなしの風魔小太郎を、こんなにも惜しんでくれている。
「よかっ、た。なんとか、不忠を、働くずに済みました……」
「主殿……一つ、お詫きしたい」
「……なんだ？」
「僕は……風魔は、如何でしたか……？」
「僕は……」
決まっている。最高の忍だ。どんな忍でも、風魔以上に有り得ない。「やっぱり、そう言ってくれた。」（主殿）
「し、私服で、言うてくった。」（僕）
「主殿、僕、死にます……」
「主殿、僕は、死にます……」（主殿）
「主殿、僕、死にます……」（僕）
「申し訳ない、敵地に主殿だけを残す、事だけは避けたい……」
「本当に、主殿を守る事は、僕の任務だ。」（僕）
「お願い、です……僕の、任務は……主殿を、お守りする事……風魔の矜持にかかって……務めを、果たさせてください……最後の奉公を……短い間でした。僕の主に、果たさせて、ください……」
「なっ……」
「主殿、僕、死にます……」（主殿）
「お願い、です……僕の、任務は、主殿を、お守りする事、風魔の矜持にかかって……務めを、果たさせてください……最後の奉公を、短い間でした。僕の主に、果たさせて、ください……」
"お願い、です……僕の、任務は、主殿を、お守りする事、風魔の矜持にかかって……務めを、果たさせてください……最後の奉公を、短い間でした。僕の主に、果たさせて、ください……』
吐血する。

主殿は、苦悩し、一筋の涙を右目から流し終わった。

「告げる。
汝の身は我が下に、我が運命は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。
誓いを此処に。
我は常世総ての善と成る者、
我は常世総ての悪を敷く者。
汝三大の言霊を纏う七天、
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！

僕は、善き主人に巡り会えた。それだけで、全てが報われている。
地獄門からの門出だね士郎くん！

斯くて風魔忍群の長は散った。煉獄の炎に灼かれるに等しい激痛。

風魔小太郎。時間にして、僅か十日余りの旅を共にしただけだった。だがそれでも俺にとっては大切な仲間だった。

心身は疲弊し、味方も物資もなく、特異点内外の絶望的な時間差に途方に暮れ。それでも自棄にならずに冷静さを保ち、カルデアの使命に殉じていたのは……風魔小太郎という相棒がいてくれたからだ。

俺は弱い。一人じゃ何も成し遂げられたもののない。いつも、誰かに絆って。いつも、誰かに助けられて。……だからせめて強かに絆って。

仲間がいない。その状況で俺の地金はあっさり露呈した。特攻呑め。仲間がいない。皆に頼られる事で、心に鎧を着ていた。

俺を生かして、俺を助けて、死んだ後ですらカルデアではなく、こんな俺の助けになれるように全てを差し出してくれた。アラヤ識などに操られ、踊らされ、俺にそんな価値はあるのか。
感って迷って挫けて嘆いて。こんな弱虫に、そこまでしてやる価値はあったのかーそう思う事は、もう赦されない。

それは、俺を生かそうと、助けるべく微笑んだ風魔小太郎への侮辱だ。衛宮士郎にはそこまでしてやる価値があったと、俺自身が俺に証明しなければならない。啓え独りでも、啓え力尽きても、俺はも、絶対に膝を折らない。

そうだ。何を弱気になっていた。カルデアとの連絡が取れない？仲間達と違う時間の流れに取り込まれた？だからだろう、だからなんだ。俺は生きてるぞ、生きてるならなんでもやれる。心は折れない、絶対に朽ちない。それに、俺は独りなんでしょう。

小太郎がその身を犠牲にして、新たな剣を招いてくれた。なら一それに報いないなんて嘘だろう。手は綺麗に、心は熱く、頭は冷静に。心胆を鉄として二本の脚で屹立する。そして、迎えた。消え去った小太郎のいた場所に現れたサーヴァントを。

ー新選組一番隊隊長。沖田総司、推參。

ありが私マスタですか？ー

薄い桜色の髪は白に近く。黒いマフラーを首に巻き、膝上まで届くロングブーツを履いている。

俺はその剣士の真名と容貌に目を剥くも、ソックスと左目の帯を撫でて平静になる。
そうだ。俺は衛宮士郎。これからの宜しく頼む。沖田総司、お前の
クラススキル、宝具を教えてくれー。

惚れた女と同じ顔だった。だがその魂はまるで違う。幕末に猛威を
振り乱した剣豪集団、その中の一人である天才剣士が実は女で、惚
れた女と顔が同じ。それだけ態度を変えるような事はない。俺の
問い合わせには彼女は首肯した。

何せ殆どエンチキşimた召喚過程だった。サーヴァントの霊基を元にしておこなったの。なんらかの不具合があっても不思議ではない。寧ろ何もない方が有り得ないだろう。案の定沖田総司は戸惑っていた。霊基へなんらかの欠落があるの
か？それとも……。非推測を裏切るように、沖田は言った。

「……？それは……ダブルクラスという事か？」

「ええと。ありがたいですね？」

「ああ。なんか私、セイバーだけどうアサシンみたいなんだ」

「ええ、あり？それは……？それを……ダブルクラスという事か？」

「ええまあ、はい。多分そうです」
ダブルクラス。つまりは二重召喚。二つのクラス別スキルを保有する事が出来るという。極めて希少なスキルだ。

召喚者が召喚の際に、「特殊な条件付けを行うなければ発動しない」らしい。制限として、三騎士及びエクストラクラスは組み合わせに入れらず、残りの四クラスの組み合わせでなければならないらしい。

一族の聖杯に触れて調べた際、ロド＝エルメロイⅡ世が覚えてるかだ。全額受け売りであろうが、三騎士クラスと併用は不可能であるはず。何故剣士と暗殺者のクラスが合わさった？

--マスター？ 何か可笑しな事でも？--

沖田がそう訊いてくる。どう知らず、笑っていたらしい。

考えられる理由は一つだけだ。本来はセイバーとして喚び出されるはずだった沖田は——小太郎という暗殺者としての霊基を元に召喚された事で、本来の剣士のクラスに暗殺者としての霊基が混ざってしまったのだ。そうしたのはどうしようもない。

破損した聖杯を使い、俺という三流の魔術使いに喚ばれ、小太郎の霊基を介し、沖田という剣士のクラスが変質した。そうとは考ええない。なるところはつまり——

--いや…なんでもない。お前の異常の原因は分かった。クラスはいいから、スキルと宝具の説明を頼む--
ま、あ、ロマンチックに言えば、小太郎は、死んでない。そういう事だろう。そういう事にしてもいいだろう。俺はそう思っておった。

沖田は首を傾げながらも、「マスターがそう言うなら」と受け入れた。「まず、セイバーとしてのスキルですが。クラス別スキルの対魔力、騎乗スキルはEです。」

遠くを見る。沖田も遠くを見た。雨が上がったからか、雨雲から一筋の陽射しが差し込んでいく。実に綺麗だ。

咳払いをする。気を取り直して先を促した。いえ、イー。E。セイバーとしての基本的スキルが、病弱もAで、縮地がBですね。

…はい、病弱です。
…なんだそれ？
…それ、聞きます？

次にアサシンとして、気配遮断はBランク。私の持ち得ているもののが、偽の心眼がAで、病弱もAで、縮地がBですね。
「…」
「君、これ……」
「アホだったな！君の力で、この剣は決して……」
「……い、といかん、君の女だ。」
「……い、といかん、君の女だ。」
「……い、といかん、君の女だ。」
「こんな女、この剣を……」
「こんな女、この剣を……」
「こんな女、この剣を……」
「……ああ、この女……」
彼女の代名詞的な技、無明三段突き。これは宝具というよりスキ
ルみたいなものだという。
種別は対人魔剣。平晴眼の構えからほぼ同時に放たれる平突きで、放たれた壱の突きと弐の突きを内包す
る。放たれた壱の突きが同じ位置に同時に存在しており、この壱の突きを防いでも同じ位置を弐の突き、参の突きが貫いている。
実際上防御不能の剣撃であり結果から来る事象飽和を引き起こす。
対物破壊にも優れる。また効果範囲こそ狭いものの命中個所は「破壊」を通じ越して、剣の貫ついたように「消滅」するほどだとか。

誓いの羽織。Cランク宝具らしい。
今の彼女が着ている物だ。装備する事でステータスのパラメータ
を上げる事が出来るらしい。そして愛刀「乞食清光」が沖田総司
の愛刀だと人に信仰されていた。菊一文字則宗へと位階を上げ
るという。
そしてセイバーとしての最終宝具「誠の旗」。ランクはBで種別
発動すると単独行動スキルを持った新撰組の剣豪を招来でき、数
に数で対抗する戦闘が可能になる。それぞれの隊士が魔剣の域に達
した剣技を振るうため、攻撃力はかなり高いそうだ。

どうでしょうか？　沖田さん大勝利しちゃいそうじゃないですか

…昔の剣豪というか、日本は魔境だった……？
か？マスター、マスター！
沖田さんがスゴいでしょう？
ぶぶぶ呟いていると、ここにこと得意気な笑う沖田に俺は苦笑してしまう。
清楚なと思えば陽気、偽げな佇まいに反してお調子者。付き合いやすそうだ。
俺は彼女に現状を伝えようと思う。しかしその前に、どうして言おきたい事があった。
超高性能だが病弱スキルが怖すぎる。その一言に尽きた。
「小太郎カムバック」
沖田さんと士郎くん！

でんたこの駄目な女。霊体化しろよと思うも、その場合突如奇襲される

立ち止まって両手を広げ、うっすらと笑う沖田に俺は嘆息した。な

ええ…？

「体に無理過ぎると思うのですか…」

「俺に何より食糧の蓄えがないというのが怖い。とりあえ

て海辺を目指した。目的は魚釣り。或いは漁。そんな真似をし

て来る沖田某は、まだ歩くんですか！ と愚痴を言って。終

には息切れを起こす始末である。

「仕方ないじゃないですか！ こんな遠距離を延々歩くとか、

しかも悪路！ 新手の拷問ですか！」「マスターの感覚おかしく

ないのです！ ？ ぶっしゃけ腳がパンパン

マスター！…私もう歩けません！ 背負って下

さーい！」
表現する沖田に俺は無言だった。

三度目の溜め息。さっさと歩き始めると、沖田は慌てて追いかけてきた。それに見合ってあたり際に対処が遅れないのでそれは出来ない。背負っても

「えっ」

「どうした？」

「歩けないんだろ。背負ってくるから乗れ。」

「えっ。」

「すみなせんでっきり霊体化しろって言われると思ってました。」

三度目の溜め息。さっさと歩き始めると、沖田は慌てて追いかけてきた。そして何やら弁解して来る。

「や、ややや、ちょっとちょっと待ってくださいよ。」

「ページ、意外といい人です？」

「ページ正義マン、秩序善い俺を捕まえて。」

「だってマスター、眼帯してなんてか彼の筋の人を見えるといまい。」

「すか……体も筋肉とか凄いです？身長高すぎますし、顔も傷あって、もう色々な意味で凄みありますし。」

俺と同じ顔だからって甘くしてばかりではないよ俺は。

だがまあ目ぐじらは立てない。沖田は沖田でマスターである俺の

「えっ」

「どうした？」

「歩けないんだろ。背負ってくるから乗れ。」

「えっ。」

「すみなせんでっきり霊体化しろって言われると思ってて、俺は後ろの沖田を一瞥すると、露骨に溜め息を吐いてやや屈んだ。

目を見開き、口に両手をあてて、心底意外だと全身で表現する沖田に俺は無言だった。

何より目付が鷹を超えて鬼っぽいです、なんて事は平然と言うセイバーチェイン。お前ね、俺が温厚な人じゃないから怒るよ。アルトリオアと同じ顔だからって甘くしてばかりではないよ俺は。
人柄を知ろうとして、彼女なりに探っているのだろう。
何を言えばどんな反応があるか、とか。こんな事を言っても許しくれてくれるのか、とか。自分のノリに乗ってくれる人なのか、とか。
付合いやすいマスターならそれでよし、そうでなくても相応しい態度に切り替えるつもりだったのかもしれない。なんであれ、俺としては甚だ不本意である。眼帯をしているだけで、その筋の人に見られるほど、人相が悪いのだろうか？俺は。
「えいえいっ。怒りました？」「怒ってないよ。
怒った。ぶちこロがすぞ小娘……」
ひい！？って、あははは！いやなぁ話しそうなマス
ターで安心しました。'

突然背中によそそそ拳を当ててくる沖田。
「怒っていっ。怒りました？」

「えいえいっ。怒りました？」

衝田をどうして彼女の身の回りの野郎連中は男扱いしたのだろうか。

寧ろアルトリアもそうだが、こんな明らかに女の子女の子してる
なんてコントをしてると、沖田はおちゃんら笑った。なんという
か、子供っぽい。子供と仲が良かったという話は本当なのかもし
れない。

アルトリアは分かれる。マーリンがいたから誤魔化していられたの
だろう。しかし沖田は……いやまあ、沖田の身長は、彼女の生きた
時代では男の中でも長身の部類だったから、大女とか言われたりし
て女扱いされなかったのかもしれない。当人に女の自覚もなさそう
ない。

なんてあり、俺からしたらちめい小娘といった印象である。こ
んな無防備だと、現代日本にいたら高校辺りまでには無事でも、大学
でパックと悪い男に食べられてしまいそうである。総評すると、戦闘
はまだ見ていないが、それ以外はまるで呪目な
奴、といった印象になる。一周回って可愛らしくすら感じなくなる
奴、というか実的な問題として、軍事行動の基本中の基本である行
軍に耐えられない体力だけは本当になんとかならないのか。はあ、
と息切れが深刻になりつつある沖田に、本日四度目の溜め息
を溢す。
－マスター！？ちょっと！－
どこ触ってんですか！
－マスター！？ちょっと！－
 chords receive a beating on.
「ま、マスター！？ちょっと！－どこ触ってんですか！」
「うるさい。何処で敵と遭遇するかも分からないので、肝心の戦力が疲れきっているとか笑い話にもならないんだぞ－うっ－それと勘違いするな。俺はお前の為に背負うんじゃなかった」
ツンデレ：……？と呟く沖田に俺は笑った。なんでこう、コイツは俺のネタじみた台詞に理解があるんだ。エドワードの奴もそうだかったが、英霊の座でそういう知識が手に入るのか？英霊の座というのはどうなってるのか興味は尽きない。おわずと首に腕を回してくる沖田である。素直に甘える事にしたらしい。戦闘開始時に疲れ切り、万全のパフォーマンスを発揮できないというのが洒落ならないというのは理解しているようだ。
「いや別に－マスター？どうしたんです？」
「意外とデカい……。ば、バカな……。アルトリアを単位にして観測。本人がいたら刺されかねない戯れ言を胸中に溢す。」
俺たちの野郎が浅葱色の羽織を縫った女剣士を背負って歩く：

俺たちが敵にいたる逃げ切れないだろう。突如として気を抜ける状況ではない。時には周囲に
気配を配っている。遭遇戦だけは絶対に回避しないと。

何時間か更に歩くと、漸く海岸が見えた。見覚えのある景色だ。

何時間か更に歩くと、漸く海岸が見えた。見覚えのある景色だ。

何時間か更に歩くと、漸く海岸が見えた。見覚えのある景色だ。

何時間か更に歩くと、漸く海岸が見えた。見覚えのある景色だ。
釣り竿を投げ、沖田に投げつける。パンツー丁で海に入って行く俺を、顔を真っ赤にして見ている沖田を無視する。海に潜る。何かと水には縁が深い俺は泳ぎも達者だ。おのれ赤い色を通じて、黒い礁に向かって乗じる。まわりの方々の顔を見ると、陽気な表情でいきなりは狙わず、大体の波の流れなどを把握するに留めた。今後は、釣りの経験はないとそうだ。元々手持ち無沙汰にさせておいたのである。期待はしない。
ど、もしかして沖田さんの魚釣りの才能がある！？やったぁ！やっと！初の魚釣りで沖田さんまさかまさかの大勝利！～こっつー～

ちーん、と聞くと来そうである。釣竿が海に落ちた。とりあえず嘆息して、沖田の許に泳いでいく。

「おい～」

「う、うう……いたひ……」

「出すあ……わたしの、えもののは……？」

「そんなあ……」

「まるでと海に還ったよ」

ベチベチと頭を叩くと、沖田は目を覚ました。鼻頭と額を真っ赤にして、涙目で沖田は呻く。

「ますたぁ……わたしの、えもののは……？」

「そなぁ……」

「そんなぁ……」

それより病弱の破壊力が想像を超えていて、俺が「そんなあ……」と言ったから。

「竿ごと海に還ったよ」

霊体化して砂浜に戻れと言い、俺は海から上がる。とりあえず採れた魚は処理して砂浜に戻れと言う。保存に熱心な物に対する分を分ける。その準備のために眠影した魔剣で火を熾し篝火とした。

落ち込んだ様子の沖田は、俺の側で「私の魚ぁ……」と嘆いていた。
マスノスケを木の枝で串刺しにし、丸焼きしたのを差し出す。

夕方である。海が夕日に照らされ橙色となっていった。沖田はまじまじと俺と串焼き魚を眺め、自分が釣った魚と同種のそれが、自分に差し出された事に困惑しているようだった。

「あの、私サーヴァントなんで、食事は必要ないんですが……」
「隣で梢気られてたらこっちまで気が滅入るって話だ。いいから食え。」
「え、はあ……では、頂きます……」
「わっぴ、んん!? ま、マスター！そんな、それくらい自分でやります！」「ならやれ。」
抵抗してきたのでそのまま手拭いを押し付ける。唇を尖らせて不満そうにしながら、沖田は指と口を拭いた。

干物を作るのに時間は掛けたくないので、同じ魔剣を投影し火力抵抗してきたのでそのまま手拭いを押し付ける。唇を尖らせて不満そうにしながら、沖田は指と口を拭いた。

上で、頂きます……。
なんなら斬ってきますが、と。先ほどまでのおちゃらけた様子は
微塵もなく、冷徹な眼差しで訊ねてくる沖田に答える。

構わない。偵察が帰ってこなければ、どうせ有事ありと判断され
―逃げても斬らなくても同じだ。無駄な手間は省略するに限る―
でどうします？

沖田の気配が消える。

逃げてもいいが、先に捕捉されてしまったからな。―沖田、偵
察しに来た奴を追え。ただして戦闘は禁止する。敵本隊の位置を掴ん
dら行って来い。然ら、こちらから先制攻撃し撹乱してからトン
ズラだ。―承知―

令呪を見る。三画のそれ。カルデアのシステムとは関係がないか
令呪を見る。三画のそれ。カルデアのシステムとは関係がないか

―一抹の不安があったが、沖田は戦闘の事となると一切の遊びがな
一抹の不安があったが、沖田は戦闘の事となると一切の遊びがな
くなる性質らしい。それはは素直に安心した。

令呪を見る。三画のそれ。カルデアのシステムとは関係がないか
令呪を見る。三画のそれ。カルデアのシステムとは関係がないか

使い捨てで補充はされないだろう。使い時は、慎重に見極めね
使い捨てで補充はされないだろう。使い時は、慎重に見極めね
世紀末救世主はゲリラくん！

十日ほど、予て考察していた道具改造案があった。左目が涙れ、
その後、予て考案してきた道具改造案があった。左目が涙れ、

近接戦闘こそ以前よりも感覚は鋭くなかったが、視覚に揺るる処の多
い射撃となるとそうでない場合が出てくる。それを何とかする為に、草案を纏めてい
たのだ。

近接戦闘は感覚が全く異なり、死角からの投擲なり射撃なりに対応
できない場合が出てくる。それを行こうする為に、草案を纏めてい
たのだ。

最も今の俺に適した武装であると言えた。

脳裡に鮮明なイメージが浮かび上がった。陰陽一対の夫婦剣が異
形と化した黒と白の二挺拳銃。まるで最初からあったように、今

「…？」「…？」
今まで求められていなかったから隠されていたような…。

意識して投影すると、すなわち異形の機構を備えた干将莫耶が現れる。中華風の双剣が、その特性を残したままに銃身を組み込んでいる。

不思議なほど手に馴染んだ。もともと通常の干将莫耶よりもしくっく裏と来る。連射される銃弾。魔力の籠だったそれ。銃口から迸る火炎と手に返る反動が心地好く感じられる。

干将と莫耶の柄頭を連結させ、双刃のように振るう。連結を解して莫耶を投げ、宝具の特性で引き寄せたものを掴みながらの射撃。魔力の結合を解いて双剣銃を消した。

「マスター…」

「サー・ヴァントはいたか？」「戻ったか」「千ほどです。しかし確認できたのがそれだけで後二百かそこらはいえ。見たところ雑兵ばかり。サー・ヴァントの姿は見えませんな…。」
沖田の言うように、アサシンが指揮官の可能性もなくてはならない。しかし、それほど考えなくてもいいだろう。

俺も俺の生命線を相方であるお前を、「沖田」と呼ぶのは他人行儀過ぎる。かといって「総司」は何か違う気がする。

偽にも俺の生命線と相方であるお前を、「沖田」と呼ぶのは他人行儀過ぎる。かといって「総司」は何か違う気がする。

セイバーとアサシンのダブルクラスだからクラスで呼ぶのは外しの有りならないじゃないか。

お前の呼び方は考えてみた。

―はい。
―はい。
―はい。
―はい。
―はい。
―はい。
―はい。
―はい。

―専化してお前、マサって感じしないしな。
政治のせの字も知らんと言た。
「サラッと失礼ですね……」
「よかったお前の事は『春』と呼ぼう。ハル、いい響きた。頭の中が
驚愕する沖田だったが、呼び方自体にはあまり拘りはないのか、
別に春でもいいです。桜が綺麗に咲く季節ですもん。沖田がそう
ほんとに失礼ですね！？」

……桜か。
再び春色の前にはお似合いか。
はたらまた女の子っぽい呼び名に拒否感がなかったのか、沖田は「ち
ええ」と唇を尖らせただけだった。
別語したものだから、俺はつい連想してしまった。
独語したものだから、俺はつい連想してしまった。

脳裡を過るのは冬木で待つだろう女の事。もう少女とは言えない。
懐かしいと思う反面、何故か背筋を伝う嫌な汗。考えるのはやめ
ておこう。俺は一つ頷き、彼女を促す。敵に嫌がらせをして即座に
離脱する気構えを作るのだ。

行くな、沖田。
「行くぞ、沖田。
「行くな、結局ハルって呼ばないんじゃないですかー！」
士郎は眼帯を一度外し、髪を掻き上げる。
英霊エミヤを召喚し、髪が白くなり肌が黒ずんで以来、一度も掻き上げる事はなかったが、少し髪が伸びて鬱陶しくなっていたのだ。

髪を撫で付けて眼帯を着けた。
破損聖杯に魔術回路を接続し、野戦服を影した。
それに泥を塗布し、着込む。同じように外套を投影するとそれでも士砂で汚し、簡素な迷彩仕様にしておく。刀を抜き眼帯を着けた。

球入る光量は殆ど無いかが、それが多少まわりにはなる。ほぼ何も見えなかったのが、モノのシルエットだけは辛うじて識別出来るようになっていた。

日は完全に沈んでいる。森の中だ。生い茂る草木、空に蓋をする枝葉によって、月明かりすら地上には届かない。完全な暗闇である。

眼球に強化の魔術を叩き込む。

闇の心得がある。死徒は夜に力を増し、光のない闇の中でも差し障りのない視界を持っているのだ。それらとの戦闘を行うには、そう
した技術の会得は不可欠だった。ある程度見えるならそれでよし。眼で見るだけが能ではないのだ。
士郎はひっそりと物音もなく動き出す。ターゲットはこちらに背を向き、先程まで士郎らのいた砂浜に向かうケルト戦士ら。数は千を超える。しかし明確な指揮官がいないらしく、統率はまるで無秩序に歩いているだけだ。
そして眼前には、軍とも呼べぬ戦士の群れからやや孤立した位置にいる五人がいる。背後から忍び寄るなり、最後尾の一人の口を押さえると同時に投影したナイフで喉を切り裂く。そのままソッと魅を地面に横たわらせ、更に一人、一人と音もなく始末した。

五人も片付ける。魔力となって虚空に溶けていく戦士の骸々一

体力の疲労を解消し、魔術回路も問題なく稼働している。万全の

士郎はいつぞやのように、簡単に遅れを取らない。

霊体化したままの沖田がついて来る。今度は正面に十人。士郎が

ハンドサインを送る。サーウェントである沖田だ。宝具でも魔術に

よるものでもない暗闇で視界を塞がれてしまう。目視でそのサイン

を見ると気配を遮断したまま実体化した。

そして刀を構える。士郎が一人、二人と先に始末していく。喉を

軽く刃で撫で、五人目で位置が悪くケルト戦士の一人が士郎に気づ

く。瞬間、沖田が間合いを縮める歩法で跳んだ。一瞬にして距離を詰め、一刀の下にその戦士を斬り伏せる。その瞬間、およ

するものでもない暗闇で視界を塞がれてしまう。目視でそのサイン

を取ると気配を遮断したまま実体化した。

そして刀を構える。士郎が一人、二人と先に始末していく。喉を

軽く刃で撫で、五人目で位置が悪くケルト戦士の一人が士郎に気づ

く。瞬間、沖田が間合いを縮める歩法で跳んだ。一瞬にして距離を詰め、一刀の下にその戦士を斬り伏せる。その瞬間、およ

するものでもない暗闇で視界を塞がれてしまう。目視でそのサイン

を取ると気配を遮断したまま実体化した。
最後の一人が死に、地面に倒れる。その額に根本まで突き刺さったナイフを引抜き、血糊を服で拭う。刃毀れがしていた。士郎は冷然とナイフを消し、別のナイフを投影する。

七人までなら士郎が無音で殺害していく。しかし敵の位置が悪かったために、七人を越えていた場合は沖田が討ち漏らしを斬殺する。そのルーティンである。

淡々と冷淡に、単純作業の如く只管繰り返す。千人全てにこれをするとなってくると、キリがないと感じるのが普通だ。だが、キリがある。

繰り返せば必ず終わりは来る。心の磨り減るような緊迫感の中、なにでないように次々と処理し二百余りも暗殺していく。

そんな士郎はあくまで冷静だった。冷徹だった。沖田を手招くと、その耳元に顔を寄せで噛く。

溢れ。戦士らが砂浜に出た頃を見計らって、士郎は用具爆弾を炸裂させた。大規模な爆発が遥か後方から聴く。壊れた幻想だ。今ので何人を餌食としたのか、関心もない。

無数の低位の宝具の剣を砂浜に突き刺しておいたのだが、どれほど

「敵の先頭を何処か分かるか」「もう間もなく森を出るかと」「潮時だな。退くぞ」「分かりました」
どが手に取っただろう。戦士には宝の山に見えたはずだ。そしてそ
れを手にした全ての戦士と、爆破範囲にいた者は余さず爆殺したと
判じられるだけである。

春。妹の調子はどうだ？

手にした種を妹が嫌いか？

妹は問題ありません。妹が問題ありません。

妹は、妹が問題ありません。

妹の調子はどうだ？

妹は妹が問題ありません。

妹の結婚は闇だ。妹の結婚は闇だ。

妹の結婚は妹が問題ありません。
「…今夜はここのままだ。ここからある程度明るくなれるのを待つ。これる筈はないんだが……その入口を封鎖する形で奴は陣取って形だった筈はないんだが……どの入口を封鎖がしてはいるらしい。こんな地

風向きが変わるために、血塗れの戦闘服を消し、装備を改める。戦闘服を一新して、紅い聖骸布をその上に羽織った。そして二挺の双

觸銃を投影して地面に突き刺す。士郎はその場にゆっくりと座り込んできた。沖田も従い、座る。森から出る事なく、時間が経つ。士郎は時計を無意識に見た。が、カルデアの時間経過を示すだけで、こちら側の時間は表示されない。

月明かりが雲に呑まれた為に、後何時間で明るくなるのか判断がつかず、士郎は身動き一つせずに忍耐強く待ち続ける。それは不意に気づくなり、沖田の顔色が悪い。眉根を寄せて士郎は訊ねた。霊体化していたら多少はましになるか?

と。しかし沖田は無言で首を左右に振った。霊体でいても変わりはない、と。何せ霊体だろうが実体だろうが、サーヴァントに付随するそれは、常時呪
いのよううちに機能しているのだから。
やむをえず士郎は沖田を手招く。首を傾げてすぐ傍に寄ってきた
沖田の手を取り、紅い外套を地面に敷くとそこへ横たわらせた。膝
に頭を乗せて、微かに目を覚め沖田に小さく言う。
「楽にしておけ。ゆっくり息を吸って吐くんではないよりはましだろう。す、すみません……」
「謝るな。お前が死ねば、俺も死ぬ。俺が死ねばお前も死ぬ。一蓮
を掛けたと思う事はない。変に遠慮される方が迷惑だ。
「ありがとうございます。」
「ありがとう。あの、マスター。」
「はい。あの、マスター。」
「ありがとう。」
ベンテシレイアは、渓谷の入口から動かなかった。
「－－」ぞわりと悪寒がする。何故動かない？夜は明けたのに。不動のまま動きのない陣容に言い知れぬ不吉を感じる。
渓谷を封鎖したまま奴らは動かなかった。何か待っているのか？...
何故動かない？...
待て。「封鎖したまま」だと？...
「…！」視力を強化し視認したのは、五百人とも満たない大陸軍の兵士達だ。そして彼らは二百名余りの難民を連れている。
視力で立ち上がりかけた士郎の手を、いつの間にか離れて片膝立ち
現地の、生き残っている人々だった。
「…！」
行けば、死ぬ恐れがあります。マスターが危険を犯すのを、サーヴァントとして見過ごす事は出来ません。

道理だった。見れば難民の向こう側からは、更に別の集団がやって来ている。どう考えても、それはケルトの軍だ。それでも元々二千刀で殲滅されるのだろう。

下唇を噛み締める。苦悩した。助けるべきか、助けないべきか。

下唇を噛み締める。追い立てられ、誘い込まれ、渦谷という逃げ場のない場所で殲滅されるのだろう。

所で殲滅されるのだだろう。助けず見捨てるべきか。それが最も合理的である。しかし十日以内に上絶して漸く見つけられた生存者達なのだ。このまま見殺しにするのは、人道的にも大層的にも良くない。短絡的に目先の合理で見捨てるよりも、長期的に見て動かねばならない時が来ただけのことだ。

春。俺の命令に従ってくれ。

彼らを助けるぞ！

ダメです。

「彼女を助けるぞ！」

【……】

「……」

「困ったように眉を落とす沖田に、土郎は断固とした眼差で告げた。】
『マスター……』

俺を莫迦な男だと笑うか?

……いいえ、マスターが決めたのなら、私に否はありません。戦場に事の善悪なし。ただ只管に斬るのみ。振るわれる刃は貴方のものです。マスターの行くところ、例え地の果て水の果て、僕きこ

快い返答に士郎は薄く笑みを浮かべる。刃は俺のもの、か——そ

快い返答に士郎は薄く笑みを浮かべる。刃は俺のもの、か—–

死ぬにはいい日だと誰かが言ったが、そんな日は死ぬまで来ない。

死ぬにはいい日だと誰かが言ったが、そんな日は死ぬまで来ない。

う呟く士郎は、次の瞬間には獰猛なそれへと笑みを転じていた。

う呟く士郎は、次の瞬間には獰猛なそれへと笑みを転じていた。

勝算はある。勝機はある。無くても作るが、今回は充分に勝ちを

勝算はある。勝機はある。無くても作るが、今回は充分に勝ちを

到来を目前にして沖田の戦意を奮い立たせる、灼熱の炉のような瞳

到来を目前にして沖田の戦意を奮い立たせる、灼熱の炉のような瞳

を向けた。

を向けた。

往くぞ。俺の命、お前に預ける。

往くぞ。俺の命、お前に預ける。

はい。では沖田さんの命も、マスターにお預けします！

はい。では沖田さんの命も、マスターにお預けします！
幸せが持ち込まれた様子は、何とか夢話せずにふたたび見たかった。

酒の席でうっかりと溢してしまった、我ながら幼稚で度し難い戯れだろう。今時夢見がちな小学校だとしてもう少しともな夢を見る。

世界中の人々が幸福だという結果なんて、そんなものは絶対に有り得ないと知っているのに。そんな願いが心としの拍子に溢れていたのだ。

今ではそれが、アラヤ識に埋め込まれた楔の影響なのだと思って。

或いは、だからこそなのかかもしれない。力足らず知恵及ぼすだけだ人間の限界として、せめて己の手の届く範囲にいる人だけは、
不幸に嘆く涙を流さたくなかったのだ。

綺麗好きで潔癖性、些細な不幸を赦せない独善者。好きに言え。

偽善独善大いに結局、それでも本気で夢見てきた。

「なに？　アリタ、もしかして気でも狂った？」

顔で文句を投げた。

素っ頓狂な声音で、直截的に正気を疑う女に、男は醜いの回った

俺は至って正気だぞ。そう言うと、女は呆れるやら笑えるやら。
お頻り可笑しそうに肩を揺らすも、やがて笑いを収めると真摯に忠告する。

『うかね。アンタはまず、アンタ自身を幸せにしなさい。それがアンタの身の回りを幸せにする一番の近道で唯一の方法よ。わかったら笑って言っとったか』

道半ばに立つ男に向け、女は酒の勢いで饒舌に語った。これも酒の魔力と嘘きながら。

マ、鈍っ払いついに言ってあげるわ。いい、士郎。自分の幸せも分からないまま突っ走っても破滅するだけだ。なんにもならない。

他人の不幸に首突っ込んで、怪我っかして。桜とか藤村先生とか、あとで何人でイリヤスフィールをヤキモキさせるって話。どうせ聞かないんでしようけど。

でもいもし。もっと？士郎。アンタがもしも自分の幸せの力のその姿に桜は惹かれたんだと思う。イリヤスフィールだってね。捏ねて周りを巻き込んで、盛大にばか騒ぎして進みなさい。アンタが掛かっていようが、迷ったらダメ。いつも通いお得意の庇理屈さえたくないから言っとくわ。心の贅肉塗れたアンタの事が、わたし大っ嫌いだから。だってアンタに付き合ってたら、こっちまですっかりそうじゃない。

男は笑った。そうか、それは大問題だと。だってただでさえ贅肉の塊でもんな。胸には贅肉がないのに。
もお、仕方ないわね衛宮くんは……

にっこりと微笑む遠坂凛は、実に悪魔めいていた。そこで記憶は途切れている。

昔からそうだった。

とんとなく、見捨てられない。なんとなく、諦められてない。なんとなく……見捨てたくない。

子供の頃は、弱い者苦めを見過ごせなかった。少し大きくなってからは、理不尽なものから見捨てたくなくて道理を蹴っ飛ばした。

自分は意地を張った。多くの現実に直面してからは、理不尽なものに負けてたくなくて道理を蹴っ飛ばした。

見捨てられていない。諦められてない。負けてたくない……つまるところそうで、底無しに馬鹿で負けず嫌いだったのだ。

その男は、底無しに馬鹿で負けず嫌いだったのだ。大の為に小を切り捨てる。

そんな賢しらげな計算などを歯食らえ。助けたいと思って始めたのだ。なのに小を切り捨てるなんて、そんなのは負けを認めただけなものだ。

自分という理不尽に膝を屈したようなものだけだ。それだけでいいのだ。自分で全部を追い越す。自分以外のモノが原因で突き進んだのだ。それだけふざけるなら怒った。喚呵を切った。見捨てたくないから認めない。それだけだ、諦めたくないから救う。負けたくないから認めない。

自分の生きがいだ。死にたくない。だが死なせたくもない。僕善だんだと好きに言う。所詮は徹頭徹尾自分の為の自己満足。その道
俺の目には映る者を救う。誰がなんと言おうと救わな
いは俺が決める。自己満足の自己責任だ、誰にも文句なんか言わせ
ない。言われたとしても認めない。俺は絶対に成し遂げる。だって
己の言い分は無責任かもしれない。大の為に小を切り捨てるのが
大人の選択だろう。だがそれでもと言い続ける。だって小を切り捨
てるような事をする奴が、どうして大を救い続けられる。きっと何
処かで破綻するのが目に見えていた。無理でもなんでもいい、最初から全てを救う気概もなしに、どう
して誰かを救うなんて宣える。人理を守る、なら人理に含まれる善
性も悪性も、丸ごと全て救えばいい。
まずは自分、その後は手近な者、その後にもっと輪を広げていけ
ば、いつかきっと自分の世界は平和になる。嘘でも虚飾でも構わな
い、だからだ己を貫くのみ。誰に後ろ指を指されようと、己自身
に誇れるのなら構うもなか。
だからっ土郎は怒らない。風魔の忍にも誓った。これは自棄っ
ばの万歳特攻などではない。黒と白の双剣銃、銃口より吐き出される弾丸の霰が次々とケルト
黒後より轟く銃撃音。ペンシレイアは自身の隊の後背より、襲
撃してくる者がいるのを察して振り向いた。
「む……」
戦士を育つ。指揮官足るアマゾネスの女王ベンテシレイアは、眉を顰め
「人間。それを単騎だと？襲撃者は衛宮士郎、その名を知らないベンテシレイアは、侮蔑も
それでも殺前の無謀な義侠心にでても駄られたか？怯え潜み、やり過
倫殺を前に無謀な義侠心にででも駄られたか？怯え潜み、やり過
歩う眼帯——銅じみて固く、青い炎のように輝い冷酷な眼光
左目を覆う眼帯——銅じみて固く、青い炎のように輝い冷酷な眼光
は女王の威が膨れ上がった。渓谷に追い詰められ系くの死
地を征服し、死の危機を勝機に転じる威風がある。そうと察した瞬
間々が好き勝手に蛮勇を振るってなお勇武に長けた戦士が、卓越し
た指揮官の手綱によって一糸乱ぬ隊列を組む。
真っ向から突っ込むのは単騎。左黒い肌に、摺で付けられた白髪、
個々が好き勝手に蛮勇を振るってなお勇武に長けた戦士が、卓越し
た指揮官の手綱によって一糸乱ぬ隊列を組む。
真っ向から突っ込むのは単騎。左黒い肌に、摺で付けられた白髪、
個々が好き勝手に蛮勇を振るってなお勇武に長けた戦士が、卓越し
た指揮官の手綱によって一糸乱ぬ隊列を組む。
真っ向から突っ込むのは単騎。左黒い肌に、摺で付けられた白髪、
個々が好き勝手に蛮勇を振るってなお勇武に長けた戦士が、卓越し
た指揮官の手綱によって一糸乱ぬ隊列を組む。
軍勢が叫ぶ。嘗て敵対したあらゆる軍集団が震えた闘の咆哮。しかし、肌を打つ音で全員が叫び、心を打たれも全員が震えた。

軍勢が叫ぶ。

嘗て敵対したあらゆる軍集団が震えた闘の咆哮。しかしそれは歴史とし宝具としての存在が破壊できるガラクタ。しかしそれは歴史とした宝具としての存在の名残を感じさせたのだ。今のはなんだ、宝具を持っていないのかとベントシレアは驚愕するも、あんなガラクタを幾ら出されても己に持ち敵など珍しくもない。神々の加護を受けた英雄には特にそれこそ頗著だ。

その瞬間である。氣配もなく、音もなく、白髪の男が現れた森から飛び出す者がいた。誰にもその姿を捉えられない。
男が『虚・千山斬り拓く翠の地平』によって切り開かれた陣に突入する。ペンテシレイアは軍神の威を発しながら叫んだ。

抜剣せよ！ 包み込み、揉み潰せ！

戦士らが襲い掛かる。ペンテシレイアの中で眼帯の男は殺されるだけの弱者ではなく、蛮勇を振るうに相応しい勇者となっていた。

男たちは突貫するのみ。頭部を双剣鉤で隠し、後は背中も胴、腕も庇う素振りすらない。戦士らの無数の剣が四方八方に走る男を切り絶たが堅い。その紡身に纏う衣服、紅い外装が男を鎧う甲冑となっ浮かべる肉食獣の笑みだ。好き男だと嘘、蹂躙し甲斐のある男だ。刃の洗礼を浴び、髪される男は走る。幾ら堅くとも無限の護りなどあるはずもなく、やがて刃が男の守りを砕き、総身を徐々に切り裂いていった。

斬撃の雨に晒され続ける鋼の男。全身に斬られていない箇所など切れない。しかし己だけを見る男の直視下に戦闘女王は昂った。よかろ、相手をしてやる、それは油断か。いや、ペンテシレイア
「彼女が『余裕』と言うだろう。」

「二歩無間」

「下がれ、お前達」

パンテシレアは少数のアマゾンの女戦士を退かせる。親衛隊のような戦士らだ。

陣内に空白が生まれる。パンテシレアと白髪の男を結ぶ道に、空洞が。

それには女王が蛮勇の勇者を迎え撃つ為の場である。手ずかしさに値する戦士を殺すのだ。

男は怯まない。女王は余裕を示す。

その男が何をしで来るとは対処できる自信がパンテシレアにはあった。防禦を固めようとしてそうの上から潰ししてさまで、何を出されても粉砕してさまで、何を出されても。

「私が直々に殺しやる。褒美だ。芥のようにして潰しやろう」

「――」

返答は陰剣、白の銃剣の投擲だった。己の首を狙う軌道。

パンテシレアはそれを叩き落とそうとすらも、陽剣、黒の銃剣より撃ちたたれた銃弾に阻止され、手甲に備えた鉄爪で軽々と切り落とす間を逸すしかし躱する。

「隠し」

—— 画癖屋 11 ——
すのは容易い。
首を横に傾けるだけで飾し、白の銃剣は背後へ飛んでいった。

火炎を瞬かせ銃撃しながら接近してくる男を、ペンテシレイアは一撃で殺さんと鉄球のついた鎖を手縋り一背後から襲い掛かってく
る白の銃剣に、感覚だけで気づき剣を抜いた。

白の銃剣に、感覚だけで気づき剣を抜いた。白の銃剣は背面へ飛んでいった。

発

マ

ズ

ル

フ

ラ

ッ

シ

ュ

火

炎

を

瞬

か

せ

銃

撃

し

な

が

ら

接

近

し

て

く

る

男

を、

ペンテシレイアは突如と飛び込む精神性を持つが、その本領は冷酷なまで

の戦運びにあるのだ。

故にそれは必然。ペンテシレイアは突如として真横に跳んだ男に

眉を釈め。

－－無明三段突き－－

－－三歩絶刀－－

－－女王の不覚は、

男を侮った事ではない。

蛮勇の徒と見誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

怖じず、躊躇なく飛び込む精神性を持つが、その本領は冷酷なまで

の戦運びにあるのだ。

－－女王の不覚は、

男を侮った事ではない。

蛮勇の徒と見誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

怖じず、躊躇なく飛び込む精神性を持つが、その本領は冷酷なまで

の戦運びにあるのだ。

－－女王の不覚は、

男を侮った事ではない。

蛮勇の徒と見誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦いにも

戦場の敵と誤った事。眼帯の男、衛宮土郎は勝算無き戦い에도
天才剣士の剣の結界を主導する通る道を作る。
走り去る男へ向けてベンテシレイアは吼えた。屈辱に打ち震えながらも、彼女は悟っていた。あの男は『マスター』だ。サー・ヴァン
トを使役する男だ。なら問うべきはサー・ヴァントではない、サー・ァントはマスターに使われる武器でしかないのだ。故に、
「貴様あ……！名を名乗れ、覚えてる……！
天を震わせたのではないと感じさせるほどの怒号。男は小揺
るぎもせず、一瞬だけ視線を背後に向けるとベンテシレイアに言っ
た。」
「いずれ知る。それまで精々、生き恥を晒せ。
―」
重傷である。追える銃ではない。故にベンテシレイアは敗北を喫
める。ベンテシレイアは想う。そうだ、これが戦いだ、本当の戦い
だ。そして、それには一一敗れた。なんたる屈辱、ベンテシレイ
アは雪辱を誓い怒号を発した。
「い―いだろう、貴様はこの私を出し抜き勝利した。
私の殺されるその時まで、この大地で
見事生き抜いてみせろ、英雄ッ！」
狂ったように哄笑する女王を背に銃心の男は疾走する。ただの一
し手、剣の手をせよ、貴様に焦がれる。なんだとしても殺しておるぞ、畏怖非で
もしこの手で潰してやるッ！
度も振り向きもせず。
そうだ、それでいい。そのまま走れ、遠くへ行け、何処までも追
い続ける、その首を圧し折ってくれる――

士郎は渓谷を駆ける。谷の壁に剣弾を無数に撃ち込み炸裂させ、
瓦礫の山を築き後方からの追撃を断った。既にペンテシレイアの存
在は意識の外に締め出していられ、遠くへ行け、何処まで追
い続けり、その首を圧し折ってくれる――

士郎は渓谷を駆ける。谷の壁に剣弾を無数に撃ち込み炸裂させ、
瓦礫の山を築き後方からの追撃を断った。既にペンテシレイアの存
在は意識の外に締め出していられ、遠くへ行け、何処まで追
い続けり、その首を圧し折ってくれる――

士郎は渓谷を駆ける。谷の壁に剣弾を無数に撃ち込み炸裂させ、
瓦礫の山を築き後方からの追撃を断った。既にペンテシレイアの存
在は意識の外に締め出していられ、遠くへ行け、何処まで追
い続けり、その首を圧し折ってくれる――

士郎は渓谷を駆ける。谷の壁に剣弾を無数に撃ち込み炸裂させ、
瓦礫の山を築き後方からの追撃を断った。既にペンテシレイアの存
在は意識の外に締め出していられ、遠くへ行け、何処まで追
い続けり、その首を圧し折ってくれる――

士郎は渓谷を駆ける。谷の壁に剣弾を無数に撃ち込み炸裂させ、
瓦礫の山を築き後方からの追撃を断った。既にペンテシレイアの存
在は意識の外に締め出していられ、遠くへ行け、何処まで追
い続けり、その首を圧し折ってくれる――

士郎は渓谷を駆ける。谷の壁に剣弾を無数に撃ち込み炸裂させ、
瓦礫の山を築き後方からの追撃を断った。既にペンテシレイアの存
在は意識の外に締め出していられ、遠くへ行け、何処まで追
い続けり、その首を圧し折ってくれる――

士郎は渓谷を駆ける。谷の壁に剣弾を無数に撃ち込み炸裂させ、
瓦礫の山を築き後方からの追撃を断った。既にペンテシレイアの存
在は意識の外に締め出していられ、遠くへ行け、何処まで追
い続けり、その首を圧し折ってくれる――

士郎は渓谷を駆ける。谷の壁に剣弾を無数に撃ち込み炸裂させ、
瓦礫の山を築き後方からの追撃を断った。既にペンテシレイアの存
在は意識の外に締め出していられ、遠くへ行け、何処まで追
い続けり、その首を圧し折ってくれる――

士郎は渓谷を駆ける。谷の壁に剣弾を無数に撃ち込み炸裂させ、
瓦礫の山を築き後方からの追撃を断った。既にペンテシレイアの存
在は意識の外に締め出していられ、遠くへ行け、何処まで追
い続けり、その首を圧し折ってくれる――
渡った。
絶大なる自負は、救い主を名乗る男に後光すら差して見せているか
もしれない。沖田はその主人の背中を見ており、眼を見開き、己
マスターの力強い断言に惹かれている。

「時間はない。だから選べ。此処で死ぬかッ！
それとも俺と生きるかッ！
もしそれなら、俺と生きるかッ！
二つに一つだ、まだ死にたくない者だけが俺の背に続けッ！！」

極限の状況の中に多弁は不要。提示される究極の選択肢、直前に
見せた超常的な力。
男は待たなかった。彼らの真ん中を切り裂くように走る。そして
虚空に幾つかの剣弾を現して、次々と放つその姿。沖田は感じた。

令呪を。何がであろうと戦い抜けと。髪が軽くなる。病の発作が一時
的に治まった。その感覚に。その命令に。当て戦い抜け事が出来なかった天才剣
士は歓喜した。遅れてはいられないとその背を追う。
残された人々の前には、剣が突き立っている。
銃は効かない。かといって剣を取りても戦える者など軍人しかい

銃は効かない。かといって剣を取りても戦える者など軍人しかい
な。故にそれを執るとして戦う意思を示に他ならず。

心の折れていなかった軍人の一人が剣を執ると、次々とそとの剣を持った者達が続いた。

「お、」恐怖に塞ぎ止めた本能が吼える。

死にたくない、死にたくない―不然戦うかない！

「おおおおお―」

眼帯の男に続けと、男達は奮い起つ。女達は祈りを捧げる。

―此処に、最新の英雄に付き従う者達が生まれた。
指揮官は誰だ。

「指揮官は誰だ」

― 誰もが死に物狂いで戦った。必死になって生へしがみつき、遮三無二戦って勝利した。

だが全員が無事に生き残った訳ではない。戦った以上、どうしても死傷者は出る。500名近くいた兵士は点呼した所、321名となり。沖田を含めると総員495名となる。

戦えるのは兵士と士郎達のみ……。

いつまでも渓谷に留まる訳にいかず、疲労困憊の難民達を連れて行軍を開始していた。

そして森に入り河を見つけるとそこで一度休憩を取る事になる。

夜通し逃げ回っていた難民達は河で水を飲むと、体力の限界だったか木の陰に入るとそのまま地面に横たわったり、樹木に縄り寝人っている。

厳し訓練を積んだ兵士達も顔色は悪い。体力の限界の彼らも同じだ。今すぐにでも休息を取らねばならないだろう。士郎としでも彼らを休ませてやりたいが、今はそれより確認しなければならない事がある。
彼らは暗い表情で互いを見遣る。数秒待つと、一人の士官が歩み出た。金髪碧眼の青年だ。彼は士郎の前に出ると敬礼する。自然と上位者に対する敬礼だったので、士郎は一瞬戸惑うも、すぐに気を取り直して答礼する。シロウ・エミヤだ。こっこの奴がセイバーリンク・キラー。お前が部隊長か？

「アメリカ植民地軍所属アルトリウス・カーター大尉であります」

「シロウ・エミヤだ。こっこの奴がセイバーリンク・キラー。お前が部隊長か？」

「カーター……家は馬車職人か、御者か。」

「カーター……家は馬車職人か、御者か。」

「アメリカ植民地軍所属アルトリウス・カーター大尉であります。」

彼は士郎の前に出ると敬礼する。自然と上位者に対する敬礼だったので、士郎は一瞬戸惑うも、すぐに気を取り直して答礼する。シロウ・エミヤだ。こっこの奴がセイバーリンク・キラー。お前が部隊長か？

「ええ。部隊長は以前の戦いで戦死しました。それは単なる困惑のようです。カーターは気にする事ではないと頭を振り、士郎の問いに答える。」

「ええ。部隊長は以前の戦いで戦死しました。それは単なる困惑のようです。カーターは気にする事ではないと頭を振り、士郎の問いに答える。」
カーターという姓の由来を思い出して呺くと、アーリウス・カーターは生真面目に応じる。士郎は一つ頼き、兵士達を見渡した。アメリカ独立戦争時代の大陸軍…アメリカ植民地軍は、1781年から大きな危機を迎えていた。大陸会議が破産し、三年の徴兵期間が終わった兵士を再雇用できなくなったのだ。一般大衆の戦争に対する支持が最低の時期であり、ペンシルベニアとニュージャージー派遣部隊での反乱が起こった程である。これを受けて大陸会議後なんとか戦略的勝利を掴む事が出来たが、非常に頑を悩ませていった事だろう。手にしてているのは士郎が投げた名もない剣ばかり…。

装備は貧弱。銃器はほぼない。
二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧んでいる。print

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧んでいる。問題が処理され

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧んでいる。解答が返られる

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧んでいる。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧んでいる。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧んでいる。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧んでいる。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧んでいる。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧んでいる。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧んでいる。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧んでいる。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧んでいる。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧んでいる。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧んでいる。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧んでいる。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧んでいる。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧ている。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧いている。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧いている。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧いている。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧いている。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧いている。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧いている。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧いている。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧いている。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧いている。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧いている。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧いている。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧いている。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧いている。差しあげられ

二十歳そこでその若者達の顔には、色濃い疲労が湧いている。差しあげられ
月前ほどです。突然現れた奴らは、無差別に人々を虐殺し始めました。これにワシントン将軍は抗戦していらっしゃるようですね。地方では殆ど抵抗が出来ており、火器が通じず、原始的であるのに化け物のように強い敵を前に、敗戦を繰り返して、戦線は押し込まれ瓦解しておる……』

「一ヶ月……意　外　と　最　近　だ　な……。」

「差別は、無差別に人々を虐殺し始めるに過ぎません。地方では殆ど抵抗が出来ておらず、火器が通じず、原始的で強力にケルトへ抵抗している戦線が何処か分かるか？」

「はい……。生き残りが他にいないか訊いても答えられそうにないな。ではケルト側の将、サーヴァントについて知っている者は？」

「……よく分かった。何もないからな。戦線がどろか分からぬ。」

「携帯している糧食は何そこが答えろ。」

重苦しい沈黙が流れる。士郎は眼を閉じた。}

カー　タ　ー　大　尉　の　答　え　に、露骨にホッとする者が幾人もいる。それに士郎は心当たりが有ります。もし無事なら物資などを調達出来たかもしれません。
郎は厳ししい眼をした。
「ここから徒歩で何日ほど掛かる？」
「強く行軍で、二日かと」
「それだと難民がついに来そうにないな。三日は掛かる訳だ。そ\nそれに俺はお前達を見捨てる」

士郎の言葉に、電撃が走ったようだった。
緊迫する空気を呑み込むように、士郎は断固として告げた。
「見捨てようなどと考えるな。もしかそんな素振りがあれば、その瞬\n間に俺はお前達を見捨てる」

緊迫する空気を呑み込むように、士郎は断固として告げた。
「見捨てようなどと考えるな。もしかそんな素振りがあれば、その瞬\n間に俺はお前達を見捨てる」

勿論本気ではない。だがそう言って楔を打っておく必要がある。
下手な考えを持たれても困るのだ。
彼女が何かを考える前に、士郎は何度も背を向けた。この瞬間は分かっては省いた。人理についても。言っても理解不能だろうし、
言う必要もなかった。
「今度はこちらの番だ。お前達の敵の正体について説明する」

途端、胡散臭そうな空気が流れるのにも構わず話し終えると、彼\nらの上空に指差した。
上を見た彼らが悲鳴をあげる。そこには士郎が投影した剣が浮遊
お前達は自分の目で何を見た？オカルトは現実に存在したうら

していったのだ。

だから理不尽な虐殺に晒されている。この期に及んで現実を疑うな

苛烈な物言いである。冷酷な響きに兵士達は自分達の手元にある

剣を見る。士郎の投影した剣だ。嘘だろ？そう呟く声は現実を直視してい

る。嘘だと思っていたがその重量が何よりも雄弁に語りかけてくるの

だ。敵を、そして自分を殺してしまえる鋼の重さを。

理屈や原理を理解しようと言うわ。だがその処にある現実から眼を

逸らすな。生き残りたいのなら。少なくともお前達は既に一度、生

きる為にその剣を執って戦った。――立て。戦うぞ。このクソッタ

レな不条理を叩き潰す為に。

士郎は彼らが立ち上がると待った。待ち続けた。そしてどれほ

どうしていたのか。やがて、カーターが言った。

「戦います」

「そうか。ならば――分かっているな」

「は！我らはこれより、貴方の指揮下に入ります！」

どうか我ら

を導いて頂きたい！"
思っているのと違う台詞に、士郎は面食らってしまった。
カーター大尉、指示を。そう言うとした矢先である。愕然とす
る士郎は自覚していなかった。
堂々とした振る舞い。先刻の危機を脱するに当たっての生き残る
為の力。全滅必至の状況から数百人の命を救ってのけ、彼らに戦
う為の武器を授けた異能。
非常識には非常識を。独立の為に戦ってきた彼らの知性は、士郎
が思っていたよりもずっと柔軟だったのだ。必要とされる者が誰な
のかを、「彼らは悟っていたのである。
士郎はそれに、遅れて気づく。兵士達の自分を見る目の輝きは、
己こそを希望しているのだ。
拒めばどうなるか、分かったものではない。もとより士官のカーナーは己を力不足と認めているし、それは他の兵士達も感じてい
る事なのかかもしれない。だが、士郎は頭痛を堪えて言う。
…俺はお前達の軍に所属していない。余所者だぞ。そんな奴に
従うって言うのか。
— お言葉ですが、もはや我が軍はその大半が軍の形態を維持できて
おります。軍ではありません。レジスタンスに近いかと。故に軍の階級
よりも求められるのは、貴方のように大勢を導ける者です。貴方の
ように今の状況に適応し、打破出来る可能性のある方です。私達は
死にたくない、死ぬにしても犬のように殺されるのは絶対に御免だ。
せめて意味のある戦いで。— 意味を持たせてくれる方が下で戦って、
— 死にたい。
— ……
— ……
士郎は知るべきだった。絶死の危機から脱した人々にとって、士郎のような人間がどう見えるのかを。
時代のギャップを実感しているべきだった。この時代の軍の意識は、現代のそれよりも成熟していないのだ。
それらを把握しきれずとも、士郎は断れない事を感じ取る。なんで重い存在感を発揮する自分が英雄に見えているのだという事を。
元々人の命を背負うのには慣れていた。今回は数が多いが、なに、人理を救うという事は、過去から現在、そして未来に至る全人類を救うという事である。なら──たったの数百人如きなにするもので、そんなふうに強がるしかない。
士郎は彼らの指揮を執る事を了承した。こんな大人数を指揮した事なんてないが、人間何かもかも全てに初体験を経験する。場を仕切るのは得意だし、部隊を率いる知識も机上のものだがあるにあっても。
してやるさと胸を張る。「士郎を再編する。カーター大尉、お前は俺の副官だ。補佐しろ。」
それから再編が済める武器をお前達に渡す。その後に三日分とは。
いかずとも食い扶持を稼ぐぞ。幸いこの森は獣が住み着く条件が整っている。日に二食、少食に切り詰めればなんとかやれるはずだ。

士郎の号令に、気力の戻った兵士達が応じた。
素早く隊列を組み直す彼らを尻目に、戻てきた沖田が空気の変化に気づいて気の抜けた声を発する。

―あれ？もしかしてマスター、やらかしましたか？』

なんとなくカチンと来た士郎は、無言で沖田の頬を引っ張った。

いひひでふましたー！

士郎は苦笑する。沖田だけが癒した。
摩耗を抑え沖田さん！

部隊を再編した。
五十名の小隊を四個編成し、それを一個中隊とする。

小隊を率い、中隊長も兼任するのはカーターで、その下にD小隊の小隊長三人をつけてあった。

そして更に別途に二個小隊を編成し、残る二十一名は戦闘部隊ではなく、付けて焼き刃にも不明だが衛生兵、あるいは工兵とし用途する。

がそれも未き来があればの話だ。

訓練や相応の設備、資源を必要とする以上、今は単なる労働でしかならない。

総勢三百二十一名に基づる一個中隊と二個小隊の変則編成。その編成を決めると一個小隊をそれぞれの小隊長に指揮せて辺りを哨戒させ、残りを休ませる。

一日間毎に別小隊と交代させ、その間に俺は人数分の兵器を投射するのだ。

それで彼らは七時間休める事になる。

些か効率が悪く、最後に交代する小隊以外は仮眠程度申しとれないだが、今は緊急時である。

堪えてもらうしかないいけマシだ。
「なに、この程度の無理なら生憎と慣れている。あと二日はぶっ通しでやるさ。」
「……」
彼はいの一番に哨戒部隊の小隊長として見回りに出た。その後は
アルトリウス・カーターを呼びつける。するとすぐに返事があっ
た。
「カーター、」
「お呼びでしょうか。」
「カーBター」
「お呼びでしょうか。」
山と積まれた現代の銃火器に、カーターは目を凝らした。この時
代の者は見た事もないような突撃銃だ。困惑するのも分かる。
M4カービンである。口径5.56mm、銃身長368.3mm、
ライフルリング6条。使用弾薬は5・56×45mm NATO弾、装弾数20発／30発。マガジンはSTANAGで作動方式がリングマン式。発射速度は一発で700から900発。銃口初速は秒間9,050mで、有効射程は点目標500mで、面目標は60mだ。

人数分ある。今から数時間後、休憩が終わり次第全員に配る。

何を血迷ったのか、カーターのみならず他の連中まで俺がB OSSは止せ。コイツはM4カービンだ。扱い方と性能の説明は一度にしておきたい。

敬礼してくるカーターに嘆息する。

呼び方ご苦労だ結果だそうだ。日く俺が軍属ではないため階級がなく、呼び方に悩んだ結果だそうだ。そういいう下らない事をどうして考えられるのか…？しかもよりにもよってボスだと？それか、俺がマフィアの頭目で見ているのか？

げなりする。露骨に嘆息して立ち上がると、体が意に反してよろめいた。す、と無言で支えてくれる沖田に目をやり、うっすらと苦笑する。

会議にもない、なんとかマスターの事…分かって来てだ。

大丈夫だ。

短い付き合いですけど、なんとなくマスターの事…分かって来てだ。

大丈夫じゃないです！？

座りっぱなしだったから、急に立ち上がって目が眩んだだけだっ
「いいえ、大丈夫じゃありません！ご自分の顔色、どんなものか分かってます？まるで私が吐血する五秒前みたいですよ！」「なんだ？それはマズイな」「予想に反してしきくなり食い下がってくる沖田に観念して、俺はそ
の場に座り込んだ。沖田は微妙に納得いかないらしい。「なんで吐血五秒前って言ってたら大人しくなるんですか…なんて。ことなく不服そうである。だっ是非もの、沖田のあれは本気で
死ぬ寸前に傍目には見えるのだ。休まざるを得ない。疑惑神経であ
る魔術回路も酷使し過ぎているのだから。幾ら魔力があるからと剣
でもない物を大量に、しかも短期間に連続して投影し続けるのに無
理があったのは百も承知だった。だが休むと言っても時間的な余裕がないのにも事実である。俺は沖
田の目を見て告げた。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」「時間休む。時間だけだ」「マスター…」「起こさなくていいぞ。勝手に起きる。」
目を閉じると、すう、と意識が遠退いていく。
訓練したのだ。
眠ると決める。
座に意識が落ちていくように。
しかし、それでいて常に些細な事でも目を覚ます。
余程の手練れでもない限り寝込みを襲うのは難しいほどに。
訓練に付き合ってくれたパゼットの鉄拳の感触が甦りそうなので深く考えない。
微睡む意識が、時を数える。
虚無の中を揺らつしていきそうだ。

訓練に付き合ってくればバゼットの鉄拳の感触が甦りそうなので深く考えない。

「…」

俺が眠っていたのは僅かに44分だけだった。
沖田が何か物言いに…
複雑そうに表情を動かしたのを横目に、俺は少年へ笑みたげに…

「一」

俺が沖田も。

「一」

よりにもよって今、来なくても…

森の向こう側から、難民の子供たちがやって来ている。
一丁前の気配を殺しているつもりなのか、樹木の陰からこちらを覗いていた。
彼を手招きした。生き延びてくれた幼い命だ。邪険にはしない。

例え食糧を盗みに来たのだとしても。

「どうした、少年。腹でも減ったか」

黙っていたら分からないぞ。

こうりと頷いた少年は——我慢強そうだが、気の強さを感じさせる目をしていた。なるほどと納得する。そういう事か。

戦闘背囊をたぐり寄せ、そこから魚の干物を出す。沖田は咎めるべきか悩んだようだが、言っても無駄かと困り気味だった。元々子供好きでも、今はマスターを優先しないといけないと思ってくれるようだが……。

俺は干物を一匹分貪り食う。そうしながら戦闘背囊を少年に投げた。慌てて受け止めた少年は、その背囊の重さにようやく驚いて目を見開く。

「黙っていただけないか」

黙っていただけないぞ。

黙っていたら分からないぞ。

どうした、少年。腹でも減ったか。

黙っていると分からないぞ。

黙っていただけないぞ。

黙っていただけないぞ。

黙っていただけないぞ。

黙っていただけないぞ。

黙っていただけないぞ。

黙っていただけないぞ。
お兄さんだって言っていますから。
少年が背囊を担いで行くと、木の向こう側で小さな歓声が上がった。少年とは別の、更に二人の少女が顔を出して、兄貴らしい少年と一緒に頭を下げて駆け去っていく。

暗に罰を与えないつもりのかと訝ねてくる沖田に肩を竦める。

同じ妹分を持つ兄貴として、気持ちはわかる。

「お兄さん、ありがとう」
「おじさん、ありがとう……」

「だってあのチビジャリども……三十路ってない俺のことおじさん呼ばわりしぃかった……」

「だってじゃありませんよ！それより大事な食べ物全部あげちゃってよかったんですか？それにあの子……盗りに来てましたがよ」

育ち盛りなんだろ。それに、妹二人の為に食いモンをとって来ようなんだ見上げた心意地。

「罰がなかったら、また同じ事をしますよ」

ならまた食わせてやる。親父もお袋も……あの調子じゃ亡くなったか、はぐれたか。チビの妹二人、守る為に兄貴として必死なんだろう。

「お兄さんだって言ってんだろ……」

「おじさん、ありがとう……」
「よし、考えよう。」

にゃったし、しょんぼりとした。

甘やかしのツケは、必ず支払ってもらう。
落ち着けない場所に行けたら、雑用としやってやるよ。
そう言うと、沖田は苦笑した。
どんだけ甘やかしかないんで、マスターは…
なにして。
そりゃあ、お前に甘いぐらいうよ。
そう言うと、かげ言えない。
といいうか、これ『甘さ』じゃなくて『余裕』って言うんだ。
新参のリーダーが張り詰めた面しってたら、周りに悪い空気が蔓延してしまいう。
多少の無茶なざ、無理にはなならない。
俺は立ち上がって、あくまで軽く沖田に言う。

「さ、狩りに行くぞ。
野草、木の根、獣…とにかく手当たり次第だ。」
なは満そり事てり…助い惑まう全後そ何い自背ど沖…け絶わのにたしのれ什ス。と、生ばい死か。こロのら、進無てはいとて、思修人とし。ちら、進無てはいとて、思修人ボる。「へ…」

「へへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ

」

「へへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ

」

「へへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ

」

「へへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ

」

「へへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ

」

「へへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ

」

「へへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ

」

「へへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ

」

「へへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ

」

「へへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ

」
旗に『誠』の一文字を見た。だから迷わずに付き従えているだろ。

この人は仏様みたいに優しく、鬼のように凄絶で、人らしく在る。

春、そろそろカー・ターに伝えてくれ。工兵、衛生兵予定の連中をこっちに回せてな。

そうだろ、もう眩しいこの人を支えられない。本当の意味で彼だけの味方でいる自分だけが、どうしよう。

彼は沖田をハルと呼ぶ。なんで気安い人なんだろと呆れる反面で、近所の子供達ぐらいなものだった。彼は沖田が無い。唐の副長と恐られた土方歳三と同じくらい。私にもう少し身長があれば、横に並んでも様になったのに、なんて事を沖田は思う。

マスターは分かってないんでしよう……。

カー・ター達を助けた時、渓谷を突破する際に、沖田に掛けた令呪。

何があろうと戦い抜けるという命令。それが沖田にとって、どれほど嬉しいものだったのか。

きっと何時まで戦い抜いて来た彼には分からないだろう。でもそういっては、戦い抜いてきた彼を支える役割は彼に分からないだろう。でもそれてい。沖田の誠の旗は彼と共に在るのだから。
「こんなもんだろ」
カーと工兵・衛生兵予定の兵士達を連れて戻って来ると、彼は二頭の熊を仕留めて笑っていた。
ここの生態系、どうなってるんだ？特異点化の影響で狂ったのか…元々生息していたの人間が絶滅させるのか。ああそれはいがなく。なんで前まで来たんだカーター。お前は呼んでいないぞ。
申訳ありません。しかし副官として、出来る限り近くにいろかと思いまして。
気負うのいいが、来たからには運ぶのを手伝え。血抜きして解
猟の成果は上場だった。土郎だけで冬眠前の熊二頭、部下達が
狩りの集いは上場だった。土郎だけで冬眠前の熊二頭、
野草、木の根…食えるものと食えないものの見分け方を、カー
沖田や他の兵士達に口頭で伝えながら歩くのがもとらやりような男の傍に侍る。
難民１７２名を呼び集め、その周囲をカーター指揮下の中隊で囲
大名々冊の集いを十頭、河で五十匹近い魚を乱獲した。それらの処理
と調理を終える頃には丁寧が近づいていて。これなら追り来るだろう苦難から助けようと誓った。
難民を見つかったのか一瞬目を止めたが、流して周囲を見渡した。

「あっさっ。改めて名乗ろう」
俺はシロウ・エミヤ。名前の響きで分かるだろうが異国の者だ。

この緊急事態に在って、お前達を守ってきた兵士は俺の指揮下に入った。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守ってきた兵士は俺の指揮下に入った。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

俺はシロウ・エミヤ。名前の響きで分かるだろうが異国の者だ。

この緊急事態に在って、お前達を守ってきた兵士は俺の指揮下に入った。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守ってきた兵士は俺の指揮下に入った。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守ってきた兵士は俺の指揮下に入った。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守してきた兵士は俺の指揮下に入った。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守てきた兵士は俺の指揮下に入った。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守てきた兵士は俺の指揮下に入った。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守ってきた兵士は俺の指揮下に入った。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守ってきた兵士は俺の指揮下に入ったら。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守してきた兵士は俺の指揮下に入ったら。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守してきた兵士は俺の指揮下に入ったら。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守してきた兵士は俺の指揮下に入ったら。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守してきた兵士は俺の指揮下に入ったら。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守してきた兵士は俺の指揮下に入ったら。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守してきた兵士は俺の指揮下に入ったら。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守してきた兵士は俺の指揮下に入ったら。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守してきた兵士は俺の指揮下に入ったら。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守してきた兵士は俺の指揮下に入ったら。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守してきた兵士は俺の指揮下に入ったら。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守してきた兵士は俺の指揮下に入ったら。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守してきた兵士は俺の指揮下に入ったら。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守してきた兵士は俺の指揮下に入ったら。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守してきた兵士は俺の指揮下に入ったら。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守してきた兵士は俺の指揮下に入ったら。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守してきた兵士は俺の指揮下に入ったら。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守してきた兵士は俺の指揮下に入ったら。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守してきた兵士は俺の指揮下に入ったら。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になる。

この緊急事態に在って、お前達を守してきた兵士は俺の指揮下に入ったら。謂わばお前達の命を守り、安全な場所まで送り届ける責任は俺に帰する事になると。
俺がお前達を守る。お前達は俺を信じろ。信じて、助かる事を望しろ。生き続けてやると、こんな逆境など認めんと呟えろ。

「良い面だ」
包みで隠していた。焼いた熊肉などを部下に出させる。すると
味が起こった。自ら見る群衆の目、士郎は鷹揚に頷いた。
言ってしまい、縛られたように彼らは動き出せずにいた。それに士郎
思い出、明朗に言い放った。
「喰えっっっっ！」
「喰えっっっっっ！」
「喰えっっっっっっっっ！」
「喰えっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっaddComponent-01.jpgを削る。
士郎は仄かに活気づいた人々に目をやって、静かな決意を口にした。

「誰も、死なせない」

それが不可能だと知っていても、士郎の意思に諦めはなかった。

「なら、沖田さんはマスターをお守りします。だから存分に、守ってあげればいいです。そんなマスターを私が守りますんで。」

彼は、何も諦めていなされない。

「なら、沖田さん、マスターを守ってください。頼りにしてる」

はい。頼りにしてく。沖田さんがマスターに、これでもか大勝利させてあげますから、きっと！

「ああ、なら守ってくれ。頼りにしてる」

くしりと頭を撫でてくる士郎に、沖田は胸が暖かくなる。照れ、えへへー gratuitsて。恥ずかしくなる笑みを溢してしまった。主人の命も、誇りも、心も。全て守る。それらを害なす全てを例外なく斬り伏せる。その為の刃になろうと沖田は改めて意思を固め、笑みを溢してしまった。

主人の命も、誇りも、心も。全て守る。それらを害なす全てを例外なく斬り伏せる。その為の刃になろうと沖田は改めて意思を固め、笑みを溢してしまった。
た。
夜空に煌めく星図を頼りに、平野を行く名も無き軍。 PRIMARY_COLOR
先頭を歩む士郎は星を見上げながら、第四特異点の攻略指南のデータを繰り、推敲し、理論に穴がないかを真剣に精査していた。そして、通信を試みる。人理継続保障機関へ。しかし案の定、なんと応答もなく。primary_color
考えてもみれば当然の話で、この特異点内外の時間の流れに大きな乖離がある以上、どうしたって通信が繋がりにくいのだろう。仮に通信が通じたとしても、こちらの方が時間が流れは何千倍も早い為、超高速でこちらが捲り立てる形になり、逆にこちらからは超低速で報表され意思疎通は酷く困難なものとなる。というより是不可能だ。カラデア側は録音、録画した映像データを解析し、超低速で再生すればこちらの言っている事は把握できるだろうが、こちらはそういう訳にはいかない。士郎の身に付いている腕時計型の通信機は出

"拾いすぎだ、士郎くん！"
行軍は緩やかだった。足の遅い難民に合わせているのである。一

「あの気を削るようなものである。足

トイレは穴を掘って、そこにする形である。歩兵達で遠巻きに囲

以外でもあるだろう。皆が気を遣って目を逸らしたり背を向けた

ありもなかなか懐れるものでもない。しかし懐れなければならなかっ

た。'}

行軍の途中にも訓練は欠かさない。そして

スコップで穴を掘るのは徹底して歩兵部隊だ。なんで穴なんか掘

取ること是不可能であると認識する。女々しく、未練がましく、
「止め」

「止まれ」

手を上げ、後ろの兵士に言う。兵士が大声で難民達に足を止める

最後列の二個小隊はそのまま後方を警戒しろ。左右を固めていた
CとD小隊は前へ。復唱しろ！

CとD小隊は前へ。復唱しろ！

止まれ。

は！後方の隊はそのまま警戒、CとD小隊を前列へ配置させま

は！

行け！

は！

工兵隊。横に長く穴を掘れ。深さは腰の辺りまでだ。やれ

工兵隊。横に長く穴を掘れ。深さは腰の辺りまでだ。やれ

指示通りに動く兵士達を尻目に、士郎は背後を振り返って難民達

に気を張った声音で伝えた。

前方10000の距離に敵影を発見した。真っ直ぐにこちらに進

び、と緊張が走る。固い静電気に皮膚を打たれたような沈黙が、

彼を硬直させた。

しかし士郎は不敵に、硬骨な笑みを浮かべた事で微かに空気が弛

緩する。
前達を守る者が、どれほどものか。見せるいい機会だ。安心している、なんの問題もない。退避する必要も、恐れる必要もない。それだけ言ってあっさりと背を向けた士郎を、固唾を呑んで人々は見守る。本当に大丈夫なのかという不安、大丈夫かもしれないと見せしめるい機会だ。安心していれ、なにの問題もない。退避する必要も、恐れる必要もない。少し早いが休憩している、俺達が奴らを殲滅した後、すぐに行軍を再開する。"
塹壕から上半身のみを出した四個小隊がM4を構える。投影したそれぞれの突撃銃には、微弱な魔力の籠った弾丸が装填されていた。それでも、霊体である戦士やサーヴァントにも通じるようになっていた。喉を呑み込む音が聞こえた。そられた突撃銃には、微弱な魔力の籠った弾丸が装填されていた。

「引き寄せろ」

「ヘルマン、力を抜け。敵を狙い、引き金を引くだけだい」

一度、兵士達全員は士郎に名乗らされていた。それだけで、まさか名と顔を覚えられていたとは思わず。ベルマンと呼ばれた兵士は声を上擦らせ返事をする。士郎はそれに表情一つ動かさず、紅い聖骸布を額に巻いた。外界からの護りのそれ一つ単純に髪が邪魔だったのでは、目にはかないようにするための措置だった。眼帯を指先で撫で、小さく傍らの沖田に言う。

「春、お前は待機だ。合図があれば動け」

「はい」

どんどん敵が近づいてくる。速い。しかし士郎は繰り返した。ま
だ、まだ引き寄せる……。

やがて敵が1km先まで近づいてくると、士郎は双剣銃をベルトに差し黒弓と螺旋剣を投影した。

「俺が一撃を加える。その後、着弾と同時に射撃開始だ」
了解！と昂った声が唱和する。士郎は黒弓に螺旋剣を番え、キリリと弦を引き絞った。

「前を防ぐか、上を防ぐか。好きな方を選べ」
「それとな――」

皮肉げに笑い、士郎は次々と倒れていくケルト戦士を見下す。
後方注意だ。悪く思いなさい。

自らの傍らにいた剣者の姿は消えていた。一斉射の開始から数秒後、合図を出したのだ。一瞬にして敵軍勢の背後に回り込んだ沖田が、ケルト戦士の背中から次々と斬り伏していく。正面の弾幕、上空からの剣弾、背後からの強襲一―混乱し隊形をなく殲滅されていくケルト戦士の軍勢。その殆どが倒れ伏すと士郎は射撃を止めさせた。肉壁が減った以上は、沖田に誤射しかねない。そう判断したのだ。後はもう、僅か三十ほどしか敵に生き残りはない。

正面前の弾幕、上空からの剣弾、背後からの強襲―混雑し隊形もなく殲滅されつつあるケルト戦士の軍勢。そこの殆どが倒れ伏すと士郎は嘆息する。

士郎は嘆息する。

あがった兵士達に動揺する兵士達を宥め、『虚・千山斬り拓く翠の地平』の防壁を消す。行軍を再開するとなぜもないうように告げた士郎は、小隊らに元の配置につけと命じた。
こんな、簡単に……。誰かが呟く。本当に、俺達は生き残れるんだ……！

淡い希望が、確かな形となった瞬間である。それはさておくとして士郎は沖田を回収する。若干の呆れが顔に出ていた。

「うう……め目ないですね……」

「あのかなりそうだぞ」

沖田さんも我慢しようとしてたんだ……でもそれは我慢できたら苦労しませんよ！

「これで本当に大丈夫なのか……？」

行軍を始める前、割といい空気で守り合うと言っているのが遠い日の出来事のような。士郎は安定感のある陸力が欲しい。切実に……

逆ギレする沖田に呆れながら、彼女を背負う。ほらほら休め、休めと言いながら歩く。衆目に晒されながら背負われる沖田は差別に叫んだ。なんてなく後ろから生暖かい目を向けられているのが分かるのだ。こんなおき太に誰がいたあ、と沖田が怨恨の声を漏らす。

それは、沖田総司が病弱な天才剣士と信じている現代日本人全員だね」と士郎は軽く答える。英霊は基本、人々の信仰の形に大小様々な影響を受ける故に。
「さあ今田四……」

「責任感薄いよ！
誠意の欠片も感じません！断固抗議します！」

「分かった。
責任は取ろう」

「誰がバカですかーっ！」

お前だお前、と士郎は投げ槍に答える。
背中で暴れられると色々と感触がマズイ。

とするも、沖田は軽く興奮状態だった。
最後の最後で吐血したのが相当に悔しいうら。

「ん？」士郎は再び遥か前の方に砂塵が上がるのに気づいた。
またうんざりするが、どうにも様子がおかしい。
沖田は大人しくなる。

マスター、まだですか？
そうだね！
逃げていそうだっただ。

追いいいるのは、例の如くベル戦士。
逃げていいるのは……
重傷を負っていいる民間人の御者。

馬車の手綱を握り、馬に必死に鞭をやらがいら逃走しでいった。

「……な」

「……な」

「……な」
もしれない。
「助けに行く。ここで待っていろ。カー、隊を纏めてもけ」
「了解」士郎は返事が返ってくるのも待たず、身体能力を強化して駆け出している。
また要らない苦労を増やそうとしる……
……そう沖田は呆れるも、苦笑して自身のマッサーターを追った。
この調子だと大名にでもなっちゃいと思いたくら。
士郎くんは一人のために、士郎くんは皆のために助け出したのが実は著名な偉人であったとか、実は高名な軍人だっただけで、実は幅広い知識を有する識者であったとか、そんな事はまるでなく、救出したのはとりたてて秀でたものではない、極々普通の民間人であった。

「なんでっもっと早く助けてくれなかったんだー！」

取って出了が、実際状態から解放された故の、軽い興奮から心が強かったわけでもない青年は、八つ当たりと理解していても士郎にはふんふんインターネット。彼は溜め込んだ鬱憤を晴らすように泣きじゃくっている。

「なんで、なんで！？なんでだよっ！エマもチャーリーも皆死んだ！殺されて、おれだけが一おれとチャーリーだけが……！」

喫泣しながら士郎に殴りかかる、二十歳そこそこの青年、イー。
士郎は沈痛に目を伏せ、一度だけその拳を受ける。
痛くはない。素人が闇雲に叩きつけてくるのに苦痛を感じるほ
ど柔ではない。しかし、その一度だけ顔に受けてやったら、後
は全てはたき落とし。最後にはその拳を手で受け止め、泣きわめ
くイーサンに、士郎は言う。

「すまないとは言わない。俺が助けられるのは、俺の目の届
いる奴だけだ。」
「分かってんだよそんなこと！だけどなぁ、おれは・・・」
「なぜそんな理由があったって、一発は一発だ、イーサンー」

手の甲を平手のように振るってイーサンの頬を強く打つ。撲ね
手の甲を平手のようになるように地面を転がった。呆然とするイーサンが、士郎を
見る。
その視線に下ろされるのは、懐懐を隠した冷淡な銃。押し潰され
ような鉄の如き瞳。ひっ、と青年が怯える。その胸ぐらを掴み、腕
飛ばされたように地面を転がった。呆然とするイーサンが、士郎を
見上げる。

そこで、物申せ、イーサンに立ちつくす。
「お前の癖癖に付き合ってやる気はない。
嘆くのはいい、悔やむのもいい。だが他者に当たってどうする。
俺はお前の親父でもお袋でもないんだ、甘えるな。愁嘆場を演じて『俺は可哀想だから何をし
ても許される』とでも？
悲劇を免罪符にするな戯け」

彼を離し、イーサンを軽く突き飛ばす。よろめいて尻餅をついた
手を離し、イーサンを軽く突き飛ばす。よろめいて尻餅をついた
手を離し、イーサンを軽く突き飛ばす。よろめいて尻餅をついた
手を離し、イーサンを軽く突き飛ばす。

そこで、重体の青年が横たわっていた。イーサンも血塗れだが、
それは彼自身の血ではない。恐らく身近にいた人が斬り殺され、そ
の血を浴びてしまったのだろう。じっと、このチャーリーということらし
い青年は深刻な状態だった。
士郎は軽く首を眺めて、即座に駆け寄って彼の体に触れる。
調開始と呪文を唱え、彼の体の設計図を読み取る。
必要な処置を把握し、士郎は冷静に包帯や糸、針、ガーゼやビニ
ール手袋などを投影する。

チャーリーは手足が冷たく、湿っており。頬は青く、目がうつろ。
表情もぼんやりとしている。腰に括りつけていた水筒を開けて自身
の手を清潔に洗い、手袋を嵌めながらイーサンを呼んだ。
「イーサン！　お前のツレが死にかけてる、処置してくださいから早
く来い！　」
慌てて馬車の中に飛び込んできたイーサンに、ビニールの手袋を
嵌めさせ、ガーゼでチャーリーの左上腕部の深い傷を押さえさせた。
心臓より高い位置に上げておけ。
心臓より高い位置に上げておけ。
それだけ言って、士郎は彼の右の大腿部にある裂傷に水をかけ、
麻酔なんてない。苦痛に歪むチャーリーの顔。しかし意識がない
のは辛いだった。ものの一分で傷口を塞ぐとガーゼを貼り付け、包
帯を巻く。次に骨折しているらしい左脚にタオルを巻き付けた添
木をし、止血などを終える。

「…血を流し過ぎだな」
「…血を流し過ぎだな」
ぽつりと溢し、折角泣き止んだのにまた泣き出しそうなイーサン
を横目に、チャーリーの脈を再度図る。脈が弱い。不意に
吸が止まったのに気づく。
氣を確保し、人工呼吸で酸素を吹き込み、心臓マッサージをす
る。その繰り返しでチャーリーは辛うじて息を吹き返した。士郎は
「イーサン」
「あ、ああ…」
「春、カートー呼べ」「はい」
「ヘルマン、誰か馬車を操れる奴を知らないか」
「は…自分は知りません」「そうか…春、カートー呼べ」
「にっこり」と微笑む。「春」の名入が話題になり、彼は一兵卒のヘルマンに声をかけた。
一時間後の馬車の御台に座り馬に鞍をやって走らせる。自身の率いていた群衆の許に向かうと、そこで士郎
はパラケルスの魔剣である。
「ヘルマン、誰か馬車を操れる奴を知らないか」
「は…自分は知りません」「そうか…春、カートー呼べ」
「にっこり」と微笑む。「春」の名入が話題になり、彼は一兵卒のヘルマンに声をかけた。
一時間後の馬車の御台に座り馬に鞍をやって走らせる。自身の率いていた群衆の許に向かうと、そこで士郎
はパラケルスの魔剣である。
「ヘルマン、誰か馬車を操れる奴を知らないか」
「は…自分は知りません」「そうか…春、カートー呼べ」
「にっこり」と微笑む。「春」の名入が話題になり、彼は一兵卒のヘルマンに声をかけた。
一時間後の馬車の御台に座り馬に鞍をやって走らせる。自身の率いていた群衆の許に向かうと、そこで士郎
はパラケルスの魔剣である。
「ヘルマン、誰か馬車を操れる奴を知らないか」
「は…自分は知りません」「そうか…春、カートー呼べ」
「にっこり」と微笑む。「春」の名入が話題になり、彼は一兵卒のヘルマンに声をかけた。
一時間後の馬車の御台に座り馬に鞍をやって走らせる。自身の率いていた群衆の許に向かうと、そこで士郎
はパラケルスの魔剣である。
「ヘルマン、誰か馬車を操れる奴を知らないか」
「は…自分は知りません」「そうか…春、カートー呼べ」
「にっこり」と微笑む。「春」の名入が話題になり、彼は一兵卒のヘルマンに声をかけた。
一時間後の馬車の御台に座り馬に鞍をやって走らせる。自身の率いていた群衆の許に向かうと、そこで士郎
はパラケルスの魔剣である。
「ヘルマン、誰か馬車を操れる奴を知らないか」
「は…自分は知りません」「そうか…春、カートー呼べ」
「にっこり」と微笑む。「春」の名入が話題になり、彼は一兵卒のヘルマンに声をかけた。
一時間後の馬車の御台に座り馬に鞍をやって走らせる。自身の率いていた群衆の許に向かうと、そこで士郎
はパラケルスの魔剣である。
「ヘルマン、誰か馬車を操れる奴を知らないか」
「は…自分は知りません」「そうか…春、カートー呼べ」
「にっこり」と微笑む。「春」の名入が話題になり、彼は一兵卒のヘルマンに声をかけた。
一時間後の馬車の御台に座り馬に鞍をやって走らせる。自身の率いていた群衆の許に向かうと、そこで士郎
はパラケルスの魔剣である。
「ヘルマン、誰か馬車を操れる奴を知らないか」
「は…自分は知りません」「そうか…春、カートー呼べ」
「にっこり」と微笑む。「春」の名入が話題になり、彼は一兵卒のヘルマンに声をかけた。
一時間後の馬車の御台に座り馬に鞍をやって走らせる。自身の率いていた群衆の許に向かうと、そこで士郎
はパラケルスの魔剣である。
「ヘルマン、誰か馬車を操れる奴を知らないか」
「は…自分は知りません」「そうか…春、カートー呼べ」
「にっこり」と微笑む。「春」の名入が話題になり、彼は一兵卒のヘルマンに声をかけた。
一時間後の馬車の御台に座り馬に鞍をやって走らせる。自身の率いていた群衆の許に向かうと、そこで士郎
はパラケルスの魔剣である。
「ヘルマン、誰か馬車を操れる奴を知らないか」
「は…自分は知りません」「そうか…春、カートー呼べ」
「にっこり」と微笑む。「春」の名入が話題になり、彼は一兵卒のヘルマンに声をかけた。
一時間後の馬車の御台に座り馬に鞍をやって走らせる。自身の率いていた群衆の許に向かうと、そこで士郎
はパラケルスの魔剣である。
「ヘルマン、誰か馬車を操れる奴を知らないか」
「は…自分は知りません」「そうか…春、カートー呼べ」
「にっこり」と微笑む。「春」の名入が話題になり、彼は一兵卒のヘルマンに声をかけた。
一時間後の馬車の御台に座り馬に鞍をやって走らせる。自身の率いていた群衆の許に向かうと、そこで士郎
はパラケルスの魔剣である。
「ヘルマン、誰か馬車を操れる奴を知らないか」
「は…自分は知りません」「そうか…春、カートー呼べ」
「にっこり」と微笑む。「春」の名入が話題になり、彼は一兵卒のヘルマンに声をかけた。
一時間後の馬車の御台に座り馬に鞍をやって走らせる。自身の率いていた群衆の許に向かうと、そこで士郎
はパラケルスの魔剣である。
「ヘルマン、誰か馬車を操れる奴を知らないか」
「は…自分は知りません」「そうか…春、卡ーケを呼べ」
「はい」
パラケルスの魔剣である。
「ヘルマン、誰か馬車を操れる奴を知らないか」
「は…自分は知りません」「そうか…春、カートー呼べ」
「はい」
パラケルスの魔剣である。
「カー、女と子供達の中で、特に体力のない者を選んで馬車に乗せ走れる？」
「了解しました」
「それで、三頭の馬で馬車を牽いていたが、二頭だと何人まで乗せ走れる？」
「およそ七名か。それでも最大速度は落ちます」

言って、馬車から真ん中の黒馬を放した。
轡と鐙を投影して掛ける。馬の首筋を軽く撫でて跨がった。……
人に慣れた馬だ。よく鍛えられている。

今度、感謝しないとな……と士郎は一人ごちた。
何年も馬に乗っていなかったが意外となんとかなる。
ルヴィアには集団の先頭に戻ると士郎は声を張り上げる。

上体を倒して黒馬の首にしがみつき、水筒の上半分を割って、そ
れて馬の口に近づける。頭が高いのだろう。

「出発だ！」

上体を倒して黒馬の首にしがみつき、水筒の上半分を割って、そ

を開けた黒馬に水を飲ませてやった。
水筒を捨てる。どうせ投影品だ、消えるだけだが一返す返すも
思う。己に投影魔術が……正確には固有結界だが、その力があって
よかったと。極めて便利で、汎用性が高い。この力がなければとっ
くの昔に死んでいた。
自分の後ろに沖田を乗せる。沖田はサーヴァントだ、騎乗スキル
は最低ランクだが、相乗り程度は問題ない。なんか、すっごく恥
ずかしいんですけれど……？沖田の文句は無視した。士郎としては
体を密着させるおんぶよりも、こちらの方がずっと精神的には平和
なのだ。
時折り馬車の方に近づき、イーサンに声をかける。ツレの様子は
どうだ。大丈夫なようです、と初対面時とは打って変わってお
らしく、大人しい声で応答があった。どうやら彼も落ち着いたらし
い。ひどく申し訳なさそうだ。
それから八時間、休憩を挟みながら只管歩く。陽が昇り、中天に
差し掛かる。疲労が早くも滲み始めた彼らを見渡し激励した。
この力で言う群衆を護衛する。
最後の力、というわけでもないが。飯という言葉に釣られて奮起
もう少し頑張れ。あと１km歩けば河がある。そこで一時間の休憩
やがて河まで来る。進行方向に横たわる河だ。橋を渡らねば対岸
には進めない。しかし橋は落ちされていて、特に問題ないと士郎
は言う。例の大剣を橋の代わりに足場に出来るのだ。

時折り馬車の方に近づき、イーサンに声をかける。ツレの様子は
どうだ。大丈夫なようです、と初対面時とは打って変わってお
らしく、大人しい声で応答があった。どうやら彼も落ち着いたらし
い。ひどく申し訳なさそうだ。
兵士達が食糧を回す。貧相なものだが、不満は出なかった。私語も許され、思っていたよりも和やかに食事が始まる。士郎は意外に思うが、この時代の民衆は士郎の想像よりも強かったというだけの事だろう。

士郎は黒馬から降り、河の水を飲む彼へいや彼女か。牝馬の首を撫でてやる。鬣を整え、脚の手入れも不馴れながらもなんだとか不快に思わせずにおこなった。体を水で濡らした手拭いで拭い去る。見ればカーターは手慣れた所作で二頭の馬の世話をやっていった。

ふと思い付いたかのように、士郎は赤い布を投影する。丁度手拭いのようなものを、321枚。それを手近の兵士数名に渡した。見ればカーターは手慣れた所作で二頭の馬の世話をやっていった。薄く笑みを浮かべながらそう言うと、兵士達は照れ笑いを浮かべて仲間達に赤布を配り始める。パンダナとして額に巻いた聖骸布を外し、自分も汗を流す。そろ臭くなってしまった頃だと自覚はしていた。裸になって体を洗い、そろ臭くなってしまった頃だと自覚はしていた。裸になって体を洗い、髪の汚れを落とす。それから再び服を着ると手早く飯を食い、外し筒に水を入れたりするのも忘れていない。

皆が思い思いに河で体を洗ったりしている。上流の方に行き、水筒に水を入れたりするのも忘れていない。
一時間の休憩を終えると、再び進発する。

一次に落ち着きのある場所があれば、そこで今日の行軍は終わりとする。

兵士達は赤い布を腕に、頭に、或いは首にかけていたりした。同じものに身に付ける事で、仲間意識が深まっているのだろう。特に、隣り合った者と助け合いながら歩く。

若者ばかりの軍だ。そうした心理に影響され易い。

黒馬に跨がる士郎の視線は高い。士郎は慎重に彼女の体を調べ、魔法的な同調に努めていた。何せ全力で走れば自動車並みの速度を出する士郎の方が速いのだ。馬に乗ってもメリットが視線の高さだ。

彼女の強化の魔術を掛けられたら、それこそ疾風のように走ってくるのは期待できる。とても自分にならいないが、自分以外の生物に強化の魔術を掛けるのは至難の業だ。士郎の魔術の技量だけで、とにかく厳しい。

故に裏技として霊的手を繋げようと試みている。それでも自分にならないだろうと苦戦しながら模索していると、漸く黒馬とパースを繋げられた。

—遠坂に見られたら、三時間も手こそすかとか相変わらずのヘッポコね、とか言われそうだ。

相変わらずの技量に士郎は落ち込んだ。気を取り直して黒馬が嫌がらないように、そっと魔力を流す。びくんと体を跳ねさせた彼女を宥めるように首を撫でてやり、針の穴に糸を通すように慎重に魔
術を掛けた。成功はいろいいろ。軽く腹を蹴って走らせてもる。と、瞬間的に土郎は振り落とされた。稲妻のように走った黒馬の速度に面食らってしまってしまったのだ。思わぬ笑ってしまう。一人黒馬の背に取り残された沖田がひやあああ！マスターのほかあああーと残響を残して彼方に走り去ってしまう。土郎は声をあげて笑った。落馬の際にもきちり受け身は取っていたから怪我はない。
「まあすうた？」「はははは！いや、すまんですまん。予想したよりずっと速くてなー」「すまんじゃありませんよ！私まで振り落とされていたこの仔が口から血を吐いて黒馬に寄り掛かれた沖田に苦笑する。黒馬が士郎に顔を寄せ、ぺろりと湿った舌で顔を嘗めてきた。自分の身体能力が著しく上がった原因が、本能的に士郎だと分かっているらしい。
今夜の快走がお気に召したらしく、またやれとせっついているようである。
怒鳴るか吐血するかどちらかにしろよ〜邁が馬を発させ、弁を返して手綱を握った。土郎はこそばゆさを堪えながら再び馬に乗る。沖田を自分の前に座らせ、腕を回して手綱を握った。
「B O S S！後方へ！」「だからB O S Sは止せと！」「舌打ちして眼球を強化して陣容を検めろ。見たところ数は五百余り。雑兵ばかりなら始末は楽なものだと寡を括っていると…士郎は顔色を激変させた。「カー…全員を指揮して曳に角走れ！」「B O S S！迎撃は…～」「サーヴァントがいる！四の五の言わずにいきから走れェ！お前達は邪魔だ！」敵軍の先頭にいるのは。「サー・ヴァントがいる！四の五の言わずにいきから走れェ！お前達は邪魔だ！」敵軍の先頭にいるのは。「サー・ヴァントがいる！四の五の言わずにいきから走れェ！お前達は邪魔だ！」敵軍の先頭にいるのは。「サー・ヴァントがいる！四の五の言わずにいきから走れェ！お前達は邪魔だ！」敵軍の先頭にいるのは。「サー・ヴァントがいる！四の五の言わずにいきから走れェ！お前達は邪魔だ！」敵軍の先頭にいるのは。「サー・ヴァントがいる！四の五の言わずにいきから走れェ！お前達は邪魔だ！」敵軍の先頭にいるのは。「サー・ヴァントがいる！四の五の言わずにいきから走れェ！お前達は邪魔だ！」敵軍の先頭にいるのは。「サー・ヴァントがいる！四の五の言わずにいきから走れェ！お前達は邪魔だ！」敵軍の先頭にいるのは。
士郎は歯を食み、距離が近い。このままでは追い付かれる。いや、絶対に追い付かれる。絶対に追い付かれる。是が非でもやるしかないのだ。

しかし士郎は、そこではたと気づく。逃がしたはずの群衆の内、やっぱり何かあるのか。

早く逃げろ！
逃がない！BOSSだけ置いて逃げるなんて、絶対出来ませう。

何をしている!? 早く逃げろ！
逃げません！BOSSだけ置いて逃げるなんて、絶対出来ません。

怒鳴り付けるも、今更逃げても無駄だった。あらゆる煩悩が士郎を苛む。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き込んで死んでしまう。死ぬ、ほぼ間違いなく死ぬ。こんな所で、彼らを巻き入れる。
苦渋の滲む士郎は、その魂の炎が余りにも悲しくやるせない。誰一人死なせない—その誓いは余りに僅く、果たせないと思っても割り切れなかった。だが、だからこそ…。

—ただでやれると思うな、フィオナ騎士団…！俺達の命は、易くないぞ…！—
迫り来る敵影の迎撃に、士郎は自らの全智全能を振絞る。

「春、最悪令呪を使う。第二宝具の使用も許可する。白馬に乗って
迫り来る敵影の迎撃に、士郎は自らの全智全能を振り絞る。

英霊として、二騎の騎士は沖田総司よりも遥かに格上だ。だがそれでも、沖田は欠片も惜まずに任じた。
虚弱な身にそれは至難だろう。だがそれでもやらねばならない。
天才剣士に悲愴さはなかった。まずは雑魚から片付ける、士郎はそ
う決断した。
欠ける無限、禁忌の術

その遭遇は偶然などではない。

総軍で見れば誤差の範囲だが、自国の戦士達が次々と消息を絶ったのだ。彼の仕える王の片割れが、その地点を地図で指示し、親指を噛めと命じられたフィン・マックールは、その情報のみで下手人を示す移動進路を掌握したのである。

しかし予想外の事態があった。単独、ないしは徒党を組んだサーガ・ヴァントによる仕業だと思っていたら、発見したのは普通の人間の群れだったのだ。前方には部隊の難を逃れ、今尚生きようと足掻く無辜の民草がいる。そしてそれを守る一団が整然と、規律を保って行軍していた。フィンは嘆く。この時ばかりは知恵に長ける我が身を呪いたくもなかった。

道理で追い付くのが想定よりも早くかかったはずである。あんな遅々とした進行では、容易に追い付けてしまってきた当然だった。

…見つけてしまったか
苦渋と共に白馬を駆る騎士団の長は咳く。本来ならば騎士として守るべき人々を、この手に掛ける事へ悩んだりする思いがある。だがそれでも今更だ。唾棄すべき暴虐に荷担してしまっている以上、彼に恥愧の念を抱く資格すらない。この手は深い血に汚れ、我が身は取り返しがつかない程に、どうしようもなかったのだ。

ケルト神話最大にして最強、光の御子クリュ・フーリン。変質した暴虐の武王こそが、フィオナ騎士団が長フイン・マックルの今生での主である。そして彼の大英雄を変質させた元凶、コノートの女王メイヴこそが、実質的な方針を打ち立てる頭脳だ。本来ならば、不忠の誇りを受けようとも、人理に仇成す両名に槍を向けるべきである。しかしそれは出来なかった。聖杯による強制召喚、命令の強制執行、英霊として召喚者に立てるべき忠節と義務。

己の意思に関わりなく、従わされているのがフイン・マックルや他のサーヴァントだ。だがそれ以上にリーフィンには畏怖があった。人理に仇成す両名に槍を向けだけの名高い、後追いの騎士の力量を興味本意に図りに来ただけなのだ。

出来事が原因である。彼はあの時、光の御子クリュ・フーリンは、あっさりと気軽には遙か昔に死んでいるはずのクー・フーリンではない。後追いの世界より抜け出してフィンの許へ現れた。彼は当時の英雄と名高い、後追いの騎士の力量を興味本意に図りに来ただけなのだ。
祖に戦神ヌアザを持たずフィンでなら、邪悪な妖精に零落した。
した神霊アレーを屠ったフィンですから、余りに理解を絶する出会
いに恐慌を来した。

なまじ比類なき叡知を持っていたからこそ。「死を越えてくる」と
いう、神霊ですから余程の神格がなければ有り得ざる現象を、なん
でもないように容易くこそ来た存在を前に思考が止まった。

不死亡の英雄、不死の化け物、そんなものは幾らでも相手にしよう。
知に秀でるばかりに、生き物としての規格を悠々と超える神話的怪
物の所業に懼れを懐いた。

不死去の英雄、不死去の化け物、そんなんかも何らでも相手にしよう。
しかし「実際には死んだ後に甦って来るモノ」など、いったいど
うしろというのだ？

斯くしてフィンは、クー・フーリンという存在に対して絶対的な
心の外傷を負った。生憎と今はその恐怖の対象こそが主である。逃げよう
を逃れたが、生憎と今はその恐怖の対象こそが主である。逃げよう
がない。

故にフィンはあらゆる強制力とは別に、クー・フーリンには逆ら
えない。アレの視界にも入りたくない。もし彼の近くから逃れられ
ならば幾らでも遠征しようとも。如何なる難敵であっても戦い、こ
れを討とう。返り討ちにされ戦死する事になってしまうかもとす
ら思っている。クー・フーリンの呪縛から逃れられるなら、死ぬぐ
らんが安い代償だ。彼に付き従うディルムッド・オディナもまた、彼と似たような含
みがある故に、召喚者ではなくな生前の主であるフィンに従う事を選
んだ。
しかしディルムッドは、フィンのようにクー・フィーリンを懸け
た。生前から今現在に至るまで、憧れ続けた伝説の英雄——その変わ
り果てた姿が見られるに堪えなかったのだ。みんな悍まれたものを主人
と仰る騎士でない。強力な縛りがなければ、彼は主殺しの汚名
を受けてでもメイヴや堕ちた英雄に刃を向け入っていたらだろう。人理
の為という理由もある。しかし何より、己の憧れた英雄なら、こん
な罪もない人々を滅殺する事など認めはしなかったに違いないのだ
から。
「む……気づかれたようだな」
不意にフィンは遠か前方の一団に動きがあるのを見咎めた。五百
近い群衆が突如走り出したのだ。
そして後に残ったのは黒馬に跨がった褐色の肌と、白髪……紅い
バランダと眼帯が特徴的な偉丈夫である。馬上からフィンら眺み
付ける眼光には力があり、それは彼らをして感じるものがある。
肌を打つ気迫だ。
そしてその傍には浅葱色の羽織を纏った、小柄な女剣士がいる。
その得物の形状からして、極東のサムライという奴だろうか。サ
ヴァントである。「可憐な乙女だ、シンセンギミ、という奴かね……
？」
自信なさげにフィンが呟く。英霊の座に在れば知識としては
識る事が出来るが、識っていても今一ピンと来ない。悪い意味でマ
ナーなのだ。フィンの予想通り、自国の戦士らが消息を絶った原
いずれにしろ、サーヴァントがいるという事は、あの男はマスタ
イナーなのだ。
因にサヴォントが絡んでいた。予想外のは、マスターがいた事。
そして彼が無辜の民草を見捨てず、現地の部隊を掌握し、
避難していた事だ。人理という大義に惑わされずに弱者を救う精神、僅か一騎のサー
ヴァントだけ、敵地のど真ん中から此処まで来た実力。そして
あの澄る気炎。眩しくもフィンは目を細める。出来れば敵として
出会いたくはなかった。しかしこの邂逅は必然で、人々を害する
大悪に荷担している以上、それに対する定めにあらるのだ。
大悪に荷担している以上、それに対する定めにあらるのだ。故に彼は叡知を齎す指を突む。自前の知識に於いても勇者に相
応しいもののあるフィンだが、あの敵に出し惜しむものは何も
ないのだ。だからフィン・マックルは洞察する。そして
感嘆した。
－ふむ……－

－サー・ヴァントー騎で我らを抑え、その間にこちらの兵を磨り潰すつもりか。手弱いか－
しかしあのマスターは信じたのだ。己のサークェントならば、サークェントを二騎同時に迎えても抑えてのけるだろう。そして自分と弱兵だけでなく、自勢に五倍する勇猛なケルト戦士を殲滅出来るのだ。

返す返すも惜しい。ああいった配を執れ、そしてそれに弱兵が躊躇わずに従えていき、そしして自我を消しろ。己のサークェントを二騎同時間に迎えても抑えてのけるだろうか？

手を抜くという発想が湧かないのだ。得難い強敵を迎えていると確信して、雄敵との戦いに悦ぶ騎士としの本能が疼いた。

「いいだろう、付き合ってやろうじゃないか。」「よくないですか、主。」「ああ。如何なる強敵が相手であっても、我ら二人が遅れを取る事などそうはない。それともなんだ、ディルムッド。一対一ではない事が不満なのか？」

「ええ。」

「いい。「}

―動いているのさ。あの男は手強いし、私には分かる。逆に思惑に乗ってやれば、却ってあの男を縛る鎖となるだろう。…野放しにす

手を抜くという発想が湧かないのだ。得難い強敵を迎えていると確信して、雄敵との戦いに悦ぶ騎士としの本能が疼いた。

「いいだろう、付き合ってやろうじゃないか。」「よくないですか、主。」「ああ。如何なる強敵が相手であっても、我ら二人が遅れを取る事などそうはない。それともなんだ、ディルムッド。一対一ではない事が不満なのか？」

「ええ。」

「いい。「}

―動いているのさ。あの男は手強いし、私には分かる。逆に思惑に乗ってやれば、却ってあの男を縛る鎖となるだろう。…野放しにす
クルト戦士らが自ら隊形を崩し、パラバラに散ったのだ。ケルトの戦士達にも戦に関する常識はあった。軍勢となれば陣形を組む程の度の知能はあったのだ。それ自ら捨て、五百の群ではなく五百の個となったのである。「これでは新経を絞れない。」だがいいのかそ

いや、被害が出てもいよいのだろう。ケルトは無尽蔵の兵力を有し

ているらしい。全滅しても敵を殺せるなら何問問題ない。フィン

・マックールは大胆不敵にして激怒な配慮を振る勇将だが、それ

以上に「ケルトの将」である事を忘れはならなかったのだ。

フィン・マックールはペンテシレイアとは全く違う将帥だ。個の

武勇でもアマゾネスの女王に劣らず、しかしその知略は明らかに上

回り。ペンテシレイアは強敵と戦ったのはアキレウスのみであるの

に対し、フィン・マックールは数多の難敵を下し、戦を征し、神を
士郎は確信した。

そのフィンは、最初から戦闘があると分かっていたかのようではないか。それはつまり、こちらの動向が筒抜けだったのではないか、読まれている。という事の証明である。

破損聖杯接続——投射開始ッ！

あの騎士団長だけは、何がなんでも絶対に殺されねばならない。

土壇場という物がある。転機と呼ばれる物がある。彼女がその一つだと、士郎の幾度も実戦を経て培ってきた心眼が告げていた。ケントとの戦い、その序盤の戦いの転機であると、即ち——フィオナ騎士団の団長フィン・マックールを討たねば、それだけ前の大陸に生きる人々の被害が激増するという事である。

その言語化の難しい洞察を、士郎は信じた。己を信じずして真に仲間を信じられるものではない。多数のM4の弾倉を投射して辺りに手当たり次第に撒いた。それを兵士らに拾わせる。そして彼らが辛うじて捗えるだろうサーベルも攻撃を装備させた。魔法回路が高熱を発している。剣の要素のない物を短いスパンで大量に投射したツケだ。破損聖杯により魔力は問題なくとも、疑似神経である魔法回路の性質が変わったわけではない。しかし、その苦痛も慣れたものでしかなかった。まだ無茶は出来ない。無理な時は相応の遠方はある。
必勝の策があった。まず固有結界を展開し、自身らと敵サー・ヴァ
ントだけを取り込み、ケルト戦士は排除するのだ。そうする事で数
の利を奪い、叩き潰すのである。しかし一

『ツッッッ！』

最初に双剣銃を投影した時に感じた違和感の正体を知る。自身に
打ち込まれている楔、その霊基が常のそれから反転しているのだ。
魔力さえあれば、霊基の補助がなくとも士郎は固有結界を抜える。
しかしただでさえリスクの大きな大魔術故に、些細な異物ですら許
容できないのだ。これまでは寛、霊基は補助してくれていたのが、
今はその真逆。霊基が裡に閉じている感覚があった。いや、そうで
はない。閉じているのではなく、裡に向いている……?
これでは固有結界が使えない。歯嚙みしたくなるが士郎は瞬時に
意識を切り替えて戦術を元に戻した。

『春』

了解！
士郎は口の中に入れる血を唾に出して吐き捨てた。剣製とは言えな
い道具を、魔力にものをわせ投げした代償が彼を苦しめている。

「お前の役割に変わりはない。敵サーヴァントを抑えているな
ら無理をして倒そうとはするな。だがもしも斬せると感じたら、
最優先はフィンだ。奴を斬れ。」
「はい。―マスター。」
「なんだ。下に死なせまい、死なせまいとすると、却って被害は増えるも
のだ。と、土方さんが言ってました。だから―」
「そんな事は分かっている。」
「悔しが男を作る。悲しが男を作る。そし
て強大な敵こそが、真にお前達を偉大な男にしてくる。今、お前
達は偉大だ！この俺がお前達を英雄と呼ぶ！時代も弁えず迷い
出た亡霊どもを、このまま地獄に叩き返してやるぞっ！」

兵士の士気は最高潮に達した。それは死を覚悟した者達の、さ
れど悲愴さのない激熱の咆哮だ。
それに唇を噛む。死ぬ覚悟ではない、生き残る覚悟が欲しかった。
それに持たせてやれない己の到らないが猛烈に口惜しい。しかしそれを飲み干し指示を出した。
「まずは俺を中心に円陣を組め。」
迅速に応じて兵士達が行動する。大柄な男達ばかりである。小柄な沖田はそれに隠れてしまった。
もはや一刻の猶予もない。直ちに戦闘体勢を整えねばならなかった。
「速く、銃の射程圏内に踏み込んでも構わない。」
こういうケルト戦士らを睨んだ。敵サーヴァント達はこちらの目論んできくのだろうかと切り替えられる。それは日ノ本の剣豪ならば、誰しもが基本とする自覚変生だ。
それを見届けた士郎は前を見る。間もなく錫の射程圏内に踏み込んできてる戦士達を見抜いたのだろうか、敢えて歩を緩めて待つ構えの算段だ。
だが構わないとも。分かりしていても沖田は奇襲を成功させる。真に
小隊長三名が即座に応じる。往時の彼らでは遅滞の出たであろう行動が、今は全員が一人の人間のように動けていた。横二列に並び、一列目が片膝をつく。二列目が立ったまま。横二列に展開！左翼一列に二十。二列目に二十。右翼も同様だ。残りは中央に布陣！了解！小隊長二名が即座に応じる。往時の彼らでは遅滞の出たであろう行動が、今は全員が一人の人間のように動けている。横二列に並び、一列目が片膝をつく。二列目が立ったまま。横二列に展開！

百の銃撃が一斉に轟く。陣形もくに蝗のように襲い掛かってくる。ケルト戦士らは、楯で弾丸の雨を凌ぎ、時には弾丸を剣や槍で弾きながら接近していく。その頭上に剣弾を浴びせ——一人間達の死闘は幕を上げた。
「ムッ……！」

沖田が真っ先に狙ったのはフィンである。主の命令だからというのもある。しかし何よりも馬上の敵というのは彼女としては避け辛い。故に駆け抜け様にフィンの騎乗する白馬の前脚を狂ったのだ。フィンはこれに対処できない。自らを狙ったのなら反応も出来ただろう。沖田の殺気は白馬に向いていたのである。白馬が走行の勢いそのままに転倒し、地面を滑っていく。悲鳴の嘆きを上げる白馬の背からフィンは飛び降りていた。空中で巧みに槍を振り抜く沖田に槍を見舞うが、幻想の衝撃を以てフィンの目測を狂目にも止まらぬ、どこでもない。完全な技量のみで神代の大英傑をも超える接近速度。人智の極みと言える斬り込みの迅さに、しかしフィンは初見でありながら辛うじて反応してのけた。サーヴァントとしての機能ではない、純粋に積み上げた戦歴から来る経験である。槍を縦に構えて首を刈る斬撃を防禦した。鋭利な刃が神殺しの槍の柄に阻まれる。転瞬に沖田の斬撃が軌道を変える。槍の柄を滑らせた冲田の愛刀が狂うのはフィンの指。得物を握るそれを切断せんと旋回させた。そのまま槍がフィンの脚を切り裂かんと愛刀を振り下り。クールも然る者。蕪さ払いが空に振るうや、片足の力だけで軽く跳躍し
剣者の刀身を避けた。
そこで終わらないのが、天才剣士の魔剣である。剣理への拘り方は、破違へ拘る。
両手で振り続けていた刀から、いつの間にか左手が離れていった。そうした魔法のように、その手に愛刀の鞘が滑らかに握れていた。地面を蹴り抜けて停止するや、その勢いと威力を乘せて鞘を跳ね上げる。それは過剰にフィンの顎を打ち上げた。
「グッ！」「破ッ！！」
視界に火花が散る。着地する脚がよたつき、よろめいたフィンの腹部を雷迅のように蹴り抜けた。
華奢な女と偽るなかれ、天賦の才を遺憾なく発揮させる脚力であら。沖田の剣は足腰の強さに由来し、その敏捷さが無ければ対人魔は成らないのだ。規格外の大弓に引き絞られた大槍のように、殺れる。その確信からトドメを刺すべく追撃に出ようとする寸前——冲田にとっては厄介な騎士が割り込んできた。
妻のような剣突が冲田の髪を掠める。背後を突き刺す穂先じみた細い殺気。咄嗟に沖田は反転した。稲妻のような刺突が沖田の髪を掠める。
剣の腕も然るものだが、それ以上に第一撃の奇襲の印象が勝つ。剣士であり暗殺者、それこそが幕末に血風を吹き荒らせた新撰组、その一番隊隊長なのだ。奇縁により生前に最も近い形で現界した沖田は、その剣腕の限りを尽くすに不足のない霊基を持つ。両方である剣士であり暗殺者、それこそが幕末に血風を吹き荒らせた新撰組、オーナー騎士団の一番槍にいて、来る勇者と誉れも高いデュエル・オディナだ。赤い長槍、黄の短槍。未だ嘗て一度も見た事のない奇術めいた技が起こる。加えて〜〜の奇跡。加えて〜〜

“チッ”

彼を振り払う体勢を立て直そうとしている騎士団長を葬らんと地を蹴る、それに張り付くようにしてディルムッドが追い縄る。それを振り払い体勢を持ち得るのを悟る。ディルムッドを振り払えない。最速の座に据えられるに相応しい敏捷性を彼も持っているのだ。その機敏さは沖田に匹敵する。そうして沖田を苛立たせるのは、ディルムッドの方が速い事だ。時間が同格であっても発揮できる最大速度はディルムッドが優に沖田は露骨に舌打ちする。フィンを仕留める絶好の好機なのだ。赤い長槍、黄の短槍。未だ嘗て一度も見た事のない奇術めいた技が起こる。加えて〜〜の奇跡。加えて〜〜

時代の差、性別の差、性能の差が大きかった。例え数値の上で素早さが同格であっても発揮できる最大速度はディルムッドが優に沖田は露骨に舌打ちする。フィンを仕留める絶好の好機なのだ。赤い長槍、黄の短槍。未だ嘗て一度も見た事のない奇術めいた技が起こる。加えて〜〜の奇跡。加えて〜〜

“チッ”

彼を振り払う体勢を立て直そうとしている騎士団長を葬らんと地を蹴る、それに張り付くようにしてディルムッドが追い縄る。それを振り払い体勢を持ち得るのを悟る。ディルムッドを振り払えない。最速の座に据えられるに相応しい敏捷性を彼も持っているのだ。その機敏さは沖田に匹敵する。そうして沖田を苛立たせるのは、ディルムッドの方が速い事だ。時間が同格であっても発揮できる最大速度はディルムッドが優に
沖田はフィンへの追撃を断念し、ディルムッドの槍の技を覚えるのに専念せざるを得ない。離れれば長槍の閃光が追い討ちを加え、巧く刀の間合いに近づいても短槍の技ができるなら、のの必殺的である。経験上高確率で、呪いの如く沖田を斬る病魔が錐首をもたげるだろう。そうすれば無防備な所を襲われ、沖田は死ぬ。主の命令は二騎のサーヴァントの足止め。無理をせずとも頼りになるマスターを必ず援軍に駆けつけてくる。それを信じて、自らの体力を無さば痛感している沖田は奮闘するのだ。
消えた……！
何！？
「主よ、後ろですッ」
「何！？」

ディルムッドが驚愕する。不意打ちの一撃の時ならばいざ知らず、ディルムッドが驚愕する。例えはその一撃の時ならいざ知らぬ。その一撃の時ならいざ知らぬ。その一撃の時ならいざ知らぬ。

だがそれでも致命的な隙を晒す騎士ディルムッドではない。彼は弛まぬ鍛錬によって心眼を開いた武芸者なのだ。すくさま狂の狙いを破し警告を発する。

ディルムッドの警告に驚愕しながらも、振り向き様に槍の脇をひらめく。
沖にだって死ぬか？\n
がにたるけが、次第に突き当たる。

「--飛べるか？」

「--くらねえ」と。

「.SubItems vestibularで、次第に突き当たる。」

「--飛べるか？」

「--くらねえ」と。
「んし近を、ちい、ィた。沖す故技デ取沖熱た。だかい
―見の切微ら田い、につそ―は軌かんは故追道ムと一間と瞬
ッ激槍る。をうは赤田ど飛槍ラ蹴を激槍ラ踏りは赤自
ン」
かし、防禦の上がらず、瘦身を貫通する衝撃は大きい。腕が痺れ、フィンの槍によるものと合わせ、刀を取り落としあった。華奢な体が膝蹴りの威力に負け宙に浮く。ディルムッドはくるりと体を迴し、激甚なる蹴撃を見舞った。
「か、はっ……！」
まともに横腹を捉えられ、沖田は膝の如くに吹き飛び地面を転がった。吐瀉に混じる鮮血。沖田は上方より飛び来るフィンに気づき、咄嗟に跳ね起きて経地を逃れる。獲物を見失ったフィンの槍が地面を穿って、そこを大きく陥没させて砂塵を舞わせた。フィンは刀を横に振るって、その風圧で砂塵を晴らす。徒手空拳となった沖田は刀の落ちている地点を一瞥する。フィンは彼女を讃え、「お見事。並みの英雄なら既に突き殺しているところだが、貴女は逆に何度か私を殺せるかもしれなかったな。ディルムッドがいなければ危うかったよ」
「分かっているとも。だが戦とは技量のみで決するものでない。先程は醜態を晒したが、もう覚えた。悪いが僕も鮮烈なる乙女よ、これから先は殺りに行かせてもらう」
「一斬り合いの場でお喋りなんて……」
不快に沖田は吐き捨てるも、その悪態は小さい。沖田には彼らのもや是非もなしと、彼女は札を切る。主の許しもあった。彼女は『誠の旗』を現し、それを地面に突き立てる。

即座に妨害に動こうとする寸前、沖田は両名の間に懐から取り出した投影道具を投げつけた。それは主に与えられたもの。銘は金剛杵。真名解放する必要のない、投げつけるだけで効力を発揮する神秘爆弾。炸裂するや爆風が散き散る。フィンらは瞬時に回避するも、爆風の中、淡い燐光が舞い散り、現れるのは日ノ本に広く知られる新撰組の面々。彼女の呼び掛けに応じた剣豪がいた。沖田の道具使用の間は稼げた。

凄まじい剣気を放つ多数のサヴァントの連続召喚。それを目にした騎士とその長は瞠目するも。

皆さん、来てくださり感謝します。さあ、彼女らを斬り伏せましょう。
呼び覚ますのは己の祖である戦神ヌアザの権能『水』の理。槍の穂先より迸る水圧の濁流。
新撰組に近づかれ、その本領を発揮される前にフィンは宝具を開帳した。

「―『無敗の紫靭草』!」

それに続いて、圧倒的不利に陥る戦局を、ただの一撃で塗り潰す『対軍宝具』を保有している。

―どうやらあちらは、神殺しの魔撃をご所望らしい。ならば受けるがいい―"
無銃の銃弾を多数投放し、虚空から掃射するのを幾度も繰り返した。戦局を把握しながら銃弾を投放し、銃撃だけでは斃し切れなかった戦士に銃の掃射を集中して、戦士たちの指揮を執る。士郎の負担は大きすぎるほど大きい。しかし絶え間なく発される、自らへの拷問に等しい苦痛を、顏色一つ変える事なく堪える。兵士の射撃を楯で防いだケルト戦士は殆どが、頭上から降り注ぐ剣弾に串刺しにされる。しかし剣弾や、銃弾の軌道に慣れたのか、剣の雨は楯を遮して凌ぎ、正面の弾丸は剣や楯で切り払う。しかし、そうしても犠牲は出血するが、ケルト戦士は仲間の屍を越え、消えかけの骸を楯にして、狂奔する汗血馬のように猛然と斃りかかってきた。兵士らに肉薄する頃にはその数を二百五十にまで減らしていたが、兵士は肉体の際立つ剣を捨てた。}-1737-

ケルト戦士らが躍り掛かってくる。その闇の影を塗り満すようにして士郎は叫んだ。兵士も叫んだ。雄叫びとなる。馬上から発砲し、銃を捨ててサーベルを抜け！背後は俺に任せて、目の前の一人にだけ注力し斃り殺せ！

了解と決死の覚悟を改めて固めた兵士らが応じた。血煙が吹き荒れた。血風が舞う。断末魔が響いた。兵士が一人を倒す間に、三人の犠牲が出る。士郎の援護があったも、士郎はただでさえ過剰に回転していた魔術回路を自滅する勢いで迴した。
剣の扱いに精通した士郎は、剣の影を成らし、掃射を精密に。同時に馬上から双剣銃を操り、仲間の兵士を斬り殺した戦士を射殺する。隙だらけの兵士を殺そうとする戦士を未然に撃つ。横合いから士郎へ斬りかかる戦士を逆に叩き斬った。

防弾加工を～～駄目だ、間に合わない～～致命傷だけは回避せねえ。

防弾加工を～～駄目だ、間に合わない～～致

血反吐を吐いている。

悲鳴にも似た叱責を飛ばしながら士郎はその戦士を撃ち殺す。戦士の前に兵の一人が倒れ込み、その槍の穂先に刺たれた。鮮血が士郎の顔に飛び散る。胸を貫かれその兵士は掴んで離さない。

士郎を庇った兵士に息はない。既に死んでいた。

瞼の裏で火花が散ったようだった。憤怒に燃える鉄心は赤熱し、その気迫が臨界を超える。
鬼神が乗り移ったかの如き咆哮が遠く、感化された黒馬が猛々しく嘶く。その眼が充血し、凶相となった黒馬が後肢で後方を蹴り抜く。士郎の息絶えない動きだが、それは背後のケルト戦士を蹴り抜く目的ではない。士郎は即座に戦士を撃った。黒馬が興奮状態となっている。士郎は彼女の体を強化した。鬨が揺らめ、程の狂奔。手綱を受ける様風の如く駆け、前方のケルト戦士の胸骨を頭突きで碎いた。血戦は泥沼だった。如何に士郎が奮迅の活躍をしようと関係が近い。やがてケルト戦士の首は両手の指で数える程の狂奔。兵士の首を脇に挟み、ヘし折りながら剣を投げる。その刃が拾った銃を拾った所の兵士の首に突き刺さった。そうして背後から兵士に心臓をサーベルで貫かれ、今度こそ絶絶える。
「傷口を洗い、こびりついた汚れと血を洗い落とせ。応急手当をし
た後…先に逝きやがった奴らを一ヶ所に集めろ」

兵士らは肩で息をしながらも、厳肃な面持ちで了解した。彼らが
動き出したのを尻目に、士郎は沖田はどうなっているかを確かめよ
うとして。爆発的に高まる魔力を感じ眼を剥いた。

見れば沖田が宝具を使っていいる。…それはいい。新撰組を召喚
される彼女の切り札は、対人戦で極めて効果の高い宝具だ。それを使
ってもいいと伝えている。しかしそれだけではない。フィン・マッ
クールもまた宝具を一拍の間の後に開帳していたのだ。

それは対軍宝具。穂先より迸る爆破の如き水圧の奔流が、召喚さ
れた直後の新撰組を襲っていた。一撃でその半数を消し飛ばし、更
に放射をしている。両手で腰だに構えた槍を左右に素早く動かし、
レーザーのように放射続ける神殺しの槍の力。呪詛に回避できた
のは僅かに数人。残るは近藤勇、永倉新八、斎藤一のみ。

沖田は愕然としていた。彼女もまたフィンの宝具を回避するも、
それを拾い上げて対軍宝具を停止させようと、フィンに斬りかか
うとする。しかし彼女が刀の許に向かおうとするのを見抜いていた
ディルムッドが立ちだかした。先回りしていたディルムッドが沖田を阻む。怒号を発した。其処
を退けっ！激しいうようにその剣の冴えに釘りはない。怒濤の如
ゴ、ぶーん呻き、口から微かに血を溢しながら、沖田の体が崩れ
く剣を閃かし…その剣が不意に鈍った。
落ちる。
The pole that suddenly hit the knee.

It's a mess.

Immediately focus and clear the field.

If the Tatsuya is starting to vomit blood.

Mr. Tomoromaru is reading the signs.

Immediately focus and clear the field.

Immediately focus and clear the field.

If Tatsuya is starting to vomit blood.

Immediately focus and clear the field.

Immediately focus and clear the field.

If Tatsuya is starting to vomit blood.

Immediately focus and clear the field.

If Tatsuya is starting to vomit blood.

Immediately focus and clear the field.

Immediately focus and clear the field.

Immediately focus and clear the field.

Immediately focus and clear the field.

Immediately focus and clear the field.

Immediately focus and clear the field.
ぬ隠密性。そんなものがあるのか？

「I am the bone of my sword.」

無意識に、しかし意識的に呪文を呟く。

それは刹那の間に満たない。沖田が膝を地についている。迷う暇はない。やらねばならない。

霊基に向かう霊基の固有結界、反転したそれ。世界を広げるのではない、心象世界を千切り取り。その断片を弾丸に装填する。筆舌に尽くしがたい激痛に意識が白熱した。まるで千切り取った心象世界が、傷となって肉体に走ったかのよう。その線の端に眼が眩む。視界が欠けた。復元された視力はこれまでよりも遠くを見据えるように、基礎的な動体視力が増している気がした。裡にある楔から根が広がったよう錯覚。
「主っ！」
「ソア・マスターワザ・クルス」
「一無」
「無限の剣製」
「ソア・ソア・ソア」

そんなマスタードは士郎の……敵マスターの接近に気づき驚愕した。ディルムッドは士郎の……戦いに割り込んで来るとは思わなかったのだ。ディルムッドは飛び退いて黒馬の突進を避け、士郎の黒い銃剣に異様な魔力を見て取り悚然とした。

即座にフィンは振り向き、槍の穂先を背後の士郎に向けて向けようとした。だが、その直前に引き金は引かれた。

放たれるのは禁断の大魔術。禁忌の弾丸。それは固定砲台となっていたフィンには躲せなかった。振り向く途中のフィンの脇腹から弾丸は彼の体内に侵入し一無限の剣が、フィンの体内に炸裂する。
「ディルムッド、一足引けーー」

「マスター！！？」

固有結界「無限の剣製」を、標的の内部で展開する禁呪。収知を
持つフィンは体内に送り込まれた禁術の脅威を察し、ディルムッド
に叫んだ。

彼は、消滅していく。ディルムッドは脅を嘗む。主の仇を討とうとして、しかしフィン
の脅威が消えた事で近藤や永倉、斎藤が刀を手に駆け出しているの
を見て取るや断念せざるを得ないと状況を読む。主の遺命もある、
デルムッドは脅を嘗む思いで大きく跳躍して後方に跳び、そのま
を翻して撤退していった。

彼の胸中に、主が討たれた怨みはない。戦場の傲いた、それに自
己は討たれて然るべき悪である。寧ろ口惜しさと同等の称賛の念
もあった。よく討ってくれた、貴公らは我が主の心を苦む悪行か
故あって加減は出来ないが、見事この身を討ち取ってくれ。―

ヒュドラーの神毒を除き、あらゆる痛みにも呻く程度に圧し殺して
いた士郎は、しかし肉体ではなく精神の痛みに苦悶を漏らして落馬
した。沖田は重い体を動かし、なんとか士郎を抱き止める。
気が絶来たらどのほど楽なのか。
意识を保持る士郎の額に脂汗が滲んでいる。
近藤らが、消えきらない士郎と沖田を囲んだ。
激痛に喘ぐ彼に、新撰組の名だる剣豪らは敬服を示す。
見事な奮闘だった、総司のマスター。
よけらればお前の名を聞せくてくれ。
それは純粋な称賛。座に還る彼らは、もし来る時が来たら見せない男の事が知ったのだろう。
しらし、「ッ、あ、あ、あ…俺の名は…俺、は…？」鉄心の男は。返す名を、亡くしていった。
夢を視ているのか。漠然とした心地で、霊的な繋がりを持つ主人の過去を垣間見る。
それは■■が他者に知られたくないと、否、知るべきではないと封をして、戒めている記憶の断片。余程の事がない限り、心を許した間柄の者でも覗けない深層地点。なんだ因果か、沖田の意識はこに滑り込んでしまっていた。
魂の欠損、心象世界の切れ目。それが彼の意識する封に隙間を開けたのだろう。赤い髪に琥珀色の瞳、日本人らしい肌―沖田は数瞬、それ自体が自身のマスターである事を認識できなかった。
顔立ちを注視して、漸く主人なのだと理解する。白髪に褐色の肌、精悍な顔に眼帯をした今の彼しか知らない沖田にとって、少し青さの残る彼は甚だ息苦しそうな印象があった。
未だ見ぬ人理守護の最前線―それへ至る為の過酷な旅路。記憶の中の沖田の主人は、旅をしているようだった。荷物は最低限で供なる者は一人いない。
■■■■■がまだ単独で、己だけで日につく不幸を払拭しようと足掻いていた時代である。彼は世にも奇妙な、しかし自身と年の頃の何処かの山中であろう。焚き火をしている■■は、求道する聖職者と語り合っている。
―より正確に言えば、一方的に語る青年へ
うんざりしながら、しかし一応はまともに相対している風であるのが、その青年は臥藤門司と名乗った。門司は快活に笑いながら、深く悩み、自らの信ずる神を求めていたのである。それ、何事かのツッコミを入れたようだった。

お前らしくもない、なんっつー愚問か！確かに小生は、全ての宗教を学び全ての教えを体験してきた。だがしかし！ある時、小生は気づいてしまったのだ。それぞれの教えに矛盾が在り、各々の教えに身勝手な答えがある事を！矛盾を抱えた教えでは世界を変える事は叶いない。神々は人間を救わないのだ。人々の理想によって性格を得た神は、人間の望み通り、人間を悪として扱う。神とはこれ、人間への究極の罰なのだ。これが地上を駆け回り、全ての宗教を学んだ小生の結論である。…恐ろしい結論だった。愚僧は怒りに任せて、完全な神を求めた。人の悪性に塗れていない、原始の特性を探し続けたのだ。その為物そのものが、悪であると理解し、愚僧を笑うか、■■よ。門司の思想は沖田の主人の理解を超えていたようだった。

しかし真摯に悩むが故に苦しむ者を、理解できないからと笑う■■でもなかった。他ならぬ、由縁の定かならぬ強迫観念に突き動かされている■■である。どこか共感するものもあった。故に彼は告げた。
一度の続きを見た。

彼は「も、彼い置告よすやた。うに、しつべ戦揺田彼なの笑けするとでも思ったのか、門司から視線を外してを見る。菩薩のようにたおやかな笑みを湛え、を自身の宿に誘った。門司が忠告する、この女には関わらん方がいい。と。しかしは気安く応じた。女性の誘いを断るなど男の風上にも彼なりに友情を感じているらしい。仕方さようにの後を追うのも、キアラは丁重に彼に帰ってもらいですよと告げる。これに門司は「お主にを詫かされて堪るか」と返した。'}
設に無知なのだろうと自身に言い聞かせる。彼とて利用する事はな
いのだが、この土地の言語の読み書きも問題なく行える為、ホテル
に入る前から気づけたのだ。

部屋に通されたイは、まず口頭で礼を言われる。何故か手を握
らぬが、他の者から愛されやすいフェロモンがこれもかと発されて
いた。それ故に暴漢に襲われたのだろうと察しがつくほど。しか
し、後に鉄心となる男は動じなかった。

さらりと手を離しながら気にするなと応じ、出された茶を普通に
飲んで、そのままさよならをする構えを見せる。これに女はほんの
りと驚いたようだった。

話術は切りどころが見つからず、いつの間に長話をしてしまった。
が、女が武術の類を修めていた robin それでもイよりも優れた腕を持っ
ているのではないか。それになんでなく血腥い…魔性の引力
があるようではないか。新興宗教でも興しそうだらある。

しかし、本人にその気はなさそうで。セラビストになる為の勉学
に励んでいそうな。
なものがあってもしかれない。しかし、それは直ぐに消える事と

“さあ？強い言葉で愛の為、でしようか。私は私の愛の為に、
人という人をみんな、気持ちよく幸せに溶かしてしまいたいような
のです。

――自己中心的な愛を、自分の為だけに広め、それが結果的に人
の為になる。

その告白は、行動原理に似通ったものだった。彼が自分
自身の為に、生きた証の為に人を救おうとしている。故に感じるべ
きは感動か、共感か。いずれかでなければならなだろう。彼が感動
男が感じたのは寒かった。拭いたい不吉さが滲んでいる。
文字通り、縛った者を溶かしてしまえ。そう。
彼女なら確かに優秀なセラピストになるだろう。多くの人の心を
救うだろう。ただ、感じずの悲しみはなんだというのか。魔
性の配は、華開く大魔の蛹が孵化する寸前のような鷹猛さがあ
る。人によってはその浮世離れした人格を、解脱していると考えて
しまうかもしれない。男は半ば確信を懐き、ほとんど断じるように
告げる。

キアラと。そうお呼びください。素敵なお話。
殺生院と云ったか。
この女は、生きていてはならない。信条を曲げてでも、今すぐに殺してしまおうべきではないのか。その瞳に殺意が潜むのは、彼自らの衝動だったのか。それとも当時彼は自覚していなかったか、何らかの衝動が発する脳内信号だったのか。いずれにせよ、殺すべきだとあらゆる世界線で破滅させて悦に浸った事はある、と云った彼が違ったのだろう。

殺生院キアラは笑う。頬に手を当てて、困ったように微笑んだ。

何が酷い誤解をなされたようですね。私、人をこの手で殺めた事はございませんのに、破滅させて悦に浸った事はある、と云ったも同然だぞ。

彼は現在に至るまで、何を思いどのような道を歩んで、どのような思想を抱いたのかを知らない。しかし彼はそれを知る。そして知られた事を思慮深き女は悟っていた。内在する霊基の記録を持つ彼は、実際には彼が知らない男を識っていたのだ。言峰緑裏という破綻者を。故に彼女は悪魔化さなかった。なぜなら、彼に彼女は真実を語ってみようと魔が差したのだと。しかしながらこの正義感に溢れ、強靭な意志を宿した剣の如きではない——それがこの正義感に溢れ、強靭な意志を宿した剣の如き

―1753―
人生を失墜させるかもしれない、なんてとなく感じて。なんとなく、
殺生院キリアは讃々と語る。まるで自らの恥を晒すかの如き行
自身が生まれ育った環境。十四歳まで寝たきりだった事。戒律に
囚われ自分を可哀想と言うだけで、救おうともしなかった周囲の人
々の姿から、彼女が読み解いてきた書物にある清い人間像が消え失
せた事……。
もやや人間と呼べるもののは、もうこの世にはいないのではないか。
いたとしても自分唯一人なのではないかという思いに取り憑かれ。
十四歳の時に家の信者から外界を知った事で医療を受けられ、
病気は快癒した事。その後開鎖的だった詠天流を改革し、父親から
教団を立ち去った事。包み隠さず話した。門司も、■■も険しい顔でそれを聞いていた。
その翌日、父親の譲退本尊を持ち去って、師の術具を奪うという最
後の禁忌を破り、信者同士を殺し合わせ、自分以外全て死者となっ
た教団を立ち去った事。その突き刺すような眼光に癒れ、女はついうっかり、ぽろりと溢し
た。

私はその時、確かに絶頂しました。しかしまだ足りない、物足り
ないことも感じたのです。切れど、覚えた全ての自慰に耽るばかり
では蒙は拓けませんでしょうか？

- - - - -
をしてみるのはどうかと思いつったのです。人を救いましょう、破壊させずにいましょう。禁欲生活、というのでしょうか？
溜めを破るものを、極ついてみるのはどうかと思います。人を救いましょう、破滅させずにいましょう。禁欲生活、というのです。
溜めを破るものを、極ついてみるのはどうかと思います。人を救いましょう、破滅させずにいましょう。禁欲生活、というのです。

それをこそ私は待ち望んでいるのでしょう。

― なんだ。俺の勘も宛にならない。

ふ、と。緊迫していた空気が弛緩する。キアラはおや？
と眉を皺めた。てっきり― 正義の味方そのものであるような印象の……
書物で見たような清い人間像と結び付きつつあった男が。キアラに
とって理想的に感じつつあった男は、すなわち、殺気を研めていた男を。
女が― 魔性菩薩一とでも言うべき存在だと、■ ■ ■も感じていたはず
である。殺生は抜きにしても金輪際関係ないようにするのが最低
限。しかし、男は笑った。それが彼、彼女には余りに不可解だった
のだが。

過去の罪は消せない。だが動機はともかく、その罪を償う生き方
になっている。なら俺から言う事は何もない。セラピストになるん
だ。
だっか？人の心を支えられるかかもしれない仕事だ。誇りになるだろう。

キアラの中に、じんわりと失望が広がっていく。彼女にとっての「人間」ではなかったのか。

それでもだ。現時点ではあくまで「かもしれない」でしかない。

彼女にとっての「人間」ではなかったのか。

後の禍根になる「かもしれない」が、それがなんだということだ。

キアラは眩暈がそうになる。

キアラは身震いした。これからずっと我慢し続ける生き方？想像するだに最低の結末だ。そんな想像を目の前でされるだけでキアラは眩暈がそうになる。

『……？』

『ひどい？そんな、ひどい』

『そんな、ひどい』

『そんな、ひどい』
人が破滅する様でしか絶頂できないか。
大いに結構じゃないか。

キアラは。その言葉に、電撃を打たれたように立ち尽くした。

「なんて。なんて。ひどい殿方なのです。なんて。なんて。なんて。

一例、なんて鬼畜。なんて。なんて。

キアラ。その言葉に、電撃を打たれたように立ち尽くした。

「なんて。ひどい殿方なのです。なんて。なんて。なんて。

一例、なんて鬼畜。なんて。なんて。

我慢できなくなるかもしない。しかしその繰れるような拷問の日々は、確かにキアラの性に爽快な快感を齎す。考えただけで足が砕けてしまおう。これから先、何十年生きるのか。何十年も自分を、休みなく責められるのか。我慢できずに行散させてしまうならば、そこで終わり。でも

様々に恥ずかしく、自滅してしまう。過去の快楽、快楽を外ではなく内に求める。

我慢できれば永遠だ。逆転の発想、快楽を外ではなく内に求める。

覇道ではなく求道への道。その階がすぐ目の前にあったなんて、前片たどりも思い至らなかった。

刹那的に快楽に耽る。確かに楽だが、お前にはこの想像が忘れられぬ。我慢できなければ永遠だ。逆転の発想、快楽を外ではなく内に求める。

覇道ではなく求道への道。その階がすぐ目の前にあったなんて、前片たどりも思い至らなかった。

刹那的に快楽に耽る。確かに楽だが、お前にはこの想像が忘れられぬ。我慢できなければ永遠だ。逆転の発想、快楽を外ではなく内に求める。

覇道ではなく求道への道。その階がすぐ目の前にあったなんて、前片たどりも思い至らなかった。
お前自身のためになる」

そうして、男は余りにも簡単に一救世主となれる資質を持つ魔性菩薩を鎖で縛りつけた。

その鎖は簡単に砕ける。だが、決して自分では砕いてはならないもの。何せ自分で自分を縛る事になるのだから。砕いてしまえば、自分も砕ける。

門司は腹を抱えて笑った。

可笑しで可笑しで堪らなかた。泣きながらも笑おうと、小生とした事をそんざ發想は出てこなかった！』

『ガトー、お前の笑いのツボが俺には分からん』

一見落着とばかりに笑い合いもう男達を尻目に、キアラは震えていた。

ヤケ、キアラは認めた。

この男は自分を縛りつけた正義の人。到らぬ己を導いてくれた人。

やがて、キアラは認めた。

この男は自分を縛りつけた正義の人。到らぬ己を導いてくれた人。

酉を浮かべて、ふるふると。

これはずつと、小生とした事がそんな発想通りにするしかない！

がはははは！なるほどそう来たか、確かにそれなら■■の言う通りにするしかない。

出てこなかなかったわ！』

「ガトー、お前の笑いのツボが俺には分からん」

昨夜、お前の笑いのツボが俺には分からん！』

「がはははは！なるほどそう来たか、確かにそれなら■■の言う通りにするしかない。

出てこなかったわ！』

「ガトー、お前の笑いのツボが俺には分からん」

激しい電流が殺生院キアラの総身を駆け巡る。これぞ天啓だ。運命だ。キアラはもう、生涯に亘って己を縛り続けるしかない。

ことにいたのだと感じられた。

ことにおいたのだと感じられた。

これにいたのだと感じられた。

これにいたのだと感じられた。

これにいたのだと感じられた。

これにいたのだと感じられた。

これにいたのだと感じられた。
恍惚に震えるキアラが自分を見ていると気づいた男は呆気に取られた。門司は頭を空け、一つ領き男の肩を叩く。強く生きろと。

『…貴方に恋してしまいました。私を縛りつけた責任…取ってくださいませんか？』

『ええ。…ええ？』

朗らかに恋に落ちた女の言葉に、■■は困惑を隠せない。そしてそれに怯え、若くして鉄心を完成させる工程を踏み、そしてある日—

■■は門司にキアラを押し付けて逃げた。
対に貴方のお役に立って、今度は私が縛ってやるんですから一！

■■は公式戦無敗。それとこの非公式な戦いで、彼は敗北した。
無様に逃走した。
このままでは喰われる──その確信が■■をして逃走を決意させ
る一幕。
それを全て見届けた沖田は物凄く同情した。
マスター、強く生きてください……。今の沖田には、応援するしか
なかった。
人理を守れ、ジャックさん！

先に逝った仲間達の亡骸を一ヶ所に集め火葬した。

彼らの文化として棺に入れて埋葬し、墓を立ててやる事は出来なかった。それをする余力が俺や兵士達に無かったのだ。

納得しないだろう。それに下手をすればこの地に蔓延する疫病の元にもなる。

生き残った七名の兵士は、せめて何かを遺してやりたいと言った。

それが叶わずとも何かを持って帰ってやりたいと。俺が投げた赤布は鎬となって消えている。他に持ち帰れる持ち物もない。かと思って体の一部を持っていくのも違う。

俺は彼らに言われた。戦友を燃やし、その骨を砕いて粉碎してやった後、それをダイヤにして持ち帰ってやろうと。彼ら戦友は勇敢に戦い、死んだ。だが彼らの戦う遺志は残り続ける。それと共に俺達も戦い抜こうと。

兵士達は無言で頷き合った。
九十三人分の骨。粉々にし、掻き混ぜ、投影道具で型に入れ骨を固めた。九十三個のダイヤモンド。残った骨は投影した骨壷に保管し、それを持ち帰る。七つのダイヤを生き残りの兵士に、一つを俺に。後は残った者と親しい兵士に渡すつもりだ。

先に逃がした連中の後を追う。沖田は力尽きて気を失っていたか馬に乗せた。追い続ける。

一度沖田は意識を取り戻したが、そのまままた寝かせた。特に新手間の敵も見当たらなかったが、万が一にも逃がした奴らが別のが現れたら敵だと遭遇していたら最悪である。

先を急ぐ、いや急ぎたいが……七名の兵士達も疲労している。余り遅くは進めない。益体もない事を考えてでも仕方がないから、俺はこれから先、何処を目指すのか。何を目的とするのか。それは決まっている。現地の大陸軍と合流し、難民達の安全を確保。その後は彼らを預け、俺自身は沖田と二人でカウンターのサーヴァントを探し協力関係を結ぶ。これしかない。

しかし最悪の想定というのはいつだって必要だ。何もかも上手くいかない事は有り得る。いやその可能性の方が極めて高い。このまま逃走しても行き先で更に敵が増えれるかもしれないし、敵が防衛線を押し落ち着いていたとしたらそれを突破するのは不可能だ。俺はそれから対策を考えて行くことにした。

それに沖田も……言いにくいが、はっきりと言えば扱いたくない。有

その後の事について考える。
べ、無能どもが雁首揃えて......。　
　
「ッ......」 　
　
現地の人間は全て捨てるべきだ。天才剣士殿は連れて行こう、

だが代わりが見つかられば捨て駒が妥当だ。ただでさえ少ない令呪、
　
回復の見込みはない。血を吐く度に使われればキリがないだろう。
何、床に伏せ死ぬよりも、本人も満足な死に様だろう。
　
それに合理的でそれが最も正しいと俺自身が認めてる。怒号を発そうとして、
　
それが己の冷徹な部分から出た合理的な計算だと気づいた。
絶句する。そんな発想は有り得てならない。瞬時に封じ込めた。
　
押し潰した。択み消した。

実に合理的でそれが最も正しいと俺自身が認めてる。だが頭に
こびりつくような方針を踏み潰した。それは俺の道ではない。堕ち
てはならない魔道だ。
俺は俺の決めた王道を往く。
　
ちら、と後ろをついてくる兵士達を一瞥する。

あの血戦の後であっても、その目は燿々と輝いていた。彼方に九十三
一皮剥けた。懸命に戦い、まだ生きようとしていた。彼らに九十三
の命が乗っている。俺にも。見捨てる訳にはいかない。冷徹さは必要だ、しかし冷血であってはならない。それでは必ず
何処かで破綻する。俺は俺だ、と思う。名前を亡くしたとしても。
何かの記憶が欠けていても、五感はしっかりしている、魔術回路も思考も自我も、大事なの名前ではないない、どう生きて、どう在るかだ。

「ぅ…」

沖田が目覚ます。俺は出来限り柔和に声をかけた。

「おはよう」

「ぁ…ますたー…」?

寝惚けているのか、舌が悪く声が幼く聴こえた。それには苦笑する。彼女にとても似た顔立ちで、彼女が見せないといけない表情をする。

沖田が可笑しくて―《彼女?》

ぞわりと、と背筋に悪寒が走る。

《彼女の名はななんだ?》発作的に記憶を辿る―

はじめの出会った月下の時―《そこの後の戦い、鮮烈な記憶―》

「ア、」冷や汗が滲んだ。焦る。思い出して、順番に。冬木の人達は、藤姉、桜、イリヤ、遠坂…他の人は…名前は分かる、しかし顔の輪郭がぼやけていた。

以降の出会いはどうだ？ガトー、キアラ、白野、バゼット、エ
ハウンス、シエル、遠野、ブリュンスタッド、蒼崎、両儀、黒桐、カルデア。そこで戦いの記録。ロマニ、マシュ、クー・フーリン、レオナルド、切嗣、エミヤ、ネロ、アタランテ、アイリスフィール、チビの桜、別世界のイリヤ、美遊、黒桐。グラヴェインに百貌のハサン。グロクガルヴェイン、ああ、ああ！思い出したっ！
「アーサー王伝説……の、ああ、騎士王だ！聖剣の鞄の持ち主。黒いオーラルタ？オルタだ。そう、オルタ。
あ、ああ！思い出したっ！」
「アーリア－アルトリア－」
緊密に合わせた記憶。彼女との思い出。全て覚えてている……。
本当に全てか？本当に？……覚えている、はずだ。記憶を追っていても欠けはない。途切れているものもない。覚えている、ちゃんと覚えている。
心底、ホッとして。安堵した。よかった……。本当によかった。
名前は亡くしても、アルトリアの事は覚えていた。
彼女の不服顔に声を漏らす。確かに失礼だった。
冲田のは、アルトリアって人じゃありませんよ……
あー。
彼女の不服顔に声を漏らす。確かに失礼だった。

「マスター？」「その、眼が……」
「眼？」
「はい？イメージ？」

かといってエミヤのそれでもない。オルタのようなくすんだ金色。
確かに琥珀色の瞳が変わっていた。
確かに琥珀色の瞳が変わっていた。

右目の色が……変わってます。

俺は肩を竦めた。

ああ。色つきのコンタクトレンズを入れたんだ。
オルタのようにくすんだ金色。
傷んだ黄金。
微かに目を見開き、俺は肩を竦めた。

だから完璧だな、一分の隙もない。

動体視力も上がってる。しかも金色は格好いい。

「あ」彼女の不満そうに睨んできた。
下に睨み付けてくる視線に気づく。沖田が頬を膨らませて、不満そうに睨んでいた。

「マスター？」「その、眼が……」
「眼？」
「はい？イメージ？」
ふ、と笑う。沖田はへぇ、なんて気の抜けた風に納得～

「って、そんなわけないじゃないですか！？」

「ちっ、舌打ち！舌打ちしましたよね今？」

「してない！～してない〜ない！つれんがんて気抜けた風に納得―」

「～て、そんなんわけないじゃないですか！？」

「チッ」「～って、そんなんなけないじゃないですか！？」

「舌打ち！舌打ちしましょうよね今？」

「がる」と来たのか、沖田は胸を押さえた。

「春のくせに粘るな。戦闘でももっと粘ってくれたらなあ」

「ぐっ」「はは」「ぐはっ」

「ひ、ひどいですマスター……」

「酷いのはお前の病弱っぴりだろう」

「追い打ち？！この鬼！悪魔！マスターー！」

「はは」「はは「は」

「笑って誤魔化さないでください！沖田さんはそんななんじゃ誤魔化されませんからね！」
我々が一月間食っていける食糧があります。幸せにも腐ってはい

「壷内の物資は？」
「でしょうでしょ。」
「その他、陣を築く為の木材、天幕、荷車なども。予備の武器もあらわし、そのまま壊滅したのかと…」
「そうだ。」
「頼、俺は思い出す。」
「難民達も不安げにこちらを見ている。疲弊はさらに色濃くなっていった。」
「考えまるでもない。」
「お前達も今日は休む。明日は最低限、見える程度に鍛えてやる」
「はい。」
「カーター、見張りの選抜を任せる。それに難民達の休む場所も取る決めろ。」
「お前達も今日は休む。明日は最低限、見える程度に鍛えてやる」
「はい。」
「散れ、と手振りで示すと彼らは散ってしまいった。黒馬をどこにやるか決めてした。」
か考えるも、俺から離れようとはなかった。顔を擦り付けてくる黒馬に笑うしかない。

名前、考えてやらないとな……死線を共に越えたからか、それと
と。難民達の中から一人の少女が出てきた。いつぞやの少年の妹
の片割れだ。まだ五歳程度だろうか。慌てて兄妹達が追いかけてく
るも、捕まえるより先に俺の前にまで来た。

その手には、薄汚れたトランクが握られている。遊び道具だろう。俺に渡したいのではなく、持っていたのをそのまま手にしているだ
けのようだ。

「おじさん」
「……お兄さん」
「おにーさん」
「ああ」

「おにーさんの、あなたは、なんていうのか？」
「……さあ、前に乗ったと思うか」
「まわりがうるさくてこえなかったの」

「おにーさんの、おなまえ、なんていうの？」

地に異を生じて、愛らしい少女の様子に、相好が緩む。彼女は質問してきた。

「おにーさんの、おなまえ、なんでいるの？」

「おにーさん、おなまえ、なんでいるのか」

「まわりがうるさくてこえなかったの」

そうか？俺が名乗っていた時は静かだったはずだが。聞いてな
そうか。なら仕方ないな。俺の事は好きに呼べばいい。

「まじか。なら仕方ないな。俺の事は好きに呼べばいい。

手強い。沖田より何倍も。

「……お嬢ちゃんが、名前を考えてくれ。
　わたしが？」

ああ。どうせ名乗ってもすぐ忘れちゃだろう。

そんなことないもん！　みれい、おに～さんの名前ぐらい、おぼえるもん！

そうかそうか。でもなるべく覚えやすい方がいいよな？
だからお嬢ちゃんが考えてくれ。

わたしたちが？」

「ああ。どうせ名乗ってもすぐ忘れちゃだろう。

少是難しそうに悩んだ。む～む～呻く少女に苦笑する。意地悪が過ぎたかな。
でも、名前思い出せないしなぁ。誰かに「俺の名前ってなんだ？」と訊くのも間抜けみたいで嫌だしな……。

悩んでいると、少女はバッとする目輝かせた。何やら思い付いたら

ちょっとや。おまえ、きかせて。

や。おまえ、きかせて。

みたいに「BOSS」でもいるぞ。

ってなんだ？　と訊くのも間抜けみたいで嫌だしな……。
　トランプを縄 хозяйの箱から出して、それから無作為に一枚を選

び出した。それは、ダイヤのジャックだ。

「おに～さん、ヘクトール！」

「ええ……？」

「おに～さん、ヘクトール！」
トランプの絵柄の由来を知ったなんで偉いと誉めてやろうかと思っただが、その名前負け感に俺は貌を顰めまっった。

そんな反応に少し女は不満そうに頬を膨らませる。「ヘクタールなー！」「いや、それは…せめて別にしとくれ。その名前は俺には重すぎる」「…もんくっかり。しっかりかたないなぁ」「はは」「じゃあ、ジャックね」

一気に行直になっただけで、そんなる名前でないけ、それでいい気がした。

「わかっただけ、じゃあ俺はジャックだ。身ジョン・ドゥ元不明ってのも味気ない」「おにーさんはジャックね！」「ああ、格好いい名前をありがとうな」

「へへ…」

大人数の中が疲れてる中、やたらと元気であら。馬車の中にいただろ。まあ、子供だから。

少年轻がなんと言って難しい表情でこちらを見ている。そんな彼が言った。
B O S S なんて呼ばれてさ
「そうなんだ」
じゃあ、アンタの部下も、大陸軍じゃねえだろ
「うん、なのか？」

腕組みをして首を捻る。
その理屈はおかしい。近くの兵士を手招きで呼んで訊ねた。
「そう、な？」

……そ、なのか？

「ほらな！」

少年が得意気に言う。

「アンタ、どんな軍なんだよ。そこところはっきりしてないと、
なんか気持ち悪いんだけだ
なん」

生業の声が似てる気がする。
「どうだ。ここままだとひねくれワカメになってしまうかもしれない」

しかし……組織名か。難しいな。
だがああ、いだろう。どうせ大陸軍に合流するまでだ。適当に名付けて流してしまおう。

俺は適当に、今はまだ存在していないはずの言葉を捻り出した。
「ひとたびぶらぶら『篠舞』の街……お花見 baru」
この世に悪の栄えた試しなし、などという言葉がある。ギリシャの詩人ホメロス著『オデュッセイア』の中に、悪い行いは長く続くならないといった旨の記述があるが、それが由来らしい。正確な知識ではないが、似たような趣旨の言葉はこれが最もとなる。

しかしジャックという仮の名を得た俺は、これが全くの誤りであると認めていた。この世で最も栄えるのは悪である。悪知恵の働く者が栄えるからこそ、今の世界があると言っても過言ではない。善問わず正直者は馬鹿を見るのだ。神代や架空の物語上の出来事は別のとしても、実の時代の勝者はいかにして相手を上手く騙したか、悪を語る術がなく、どうせ勝たなら善を称したらいのが人の性だ。

逆に言えば、本当の意味での悪とは、まず頭が良くなければならな。さもなければ勝てないからだ。ただの武力のみで倉善懲悪を成せるのは、それこそ神代の規格外の大英雄のみである。それとて末路は誰かの奸計に嵌まって非業の死を遂げているのだから、彼らとて必ずしも勝利してばかりではないのが世間辛い。

俺は自分が正義であると信じられている。

それは己が正しい道を歩んでいると信じているからであるが、自分に負けないように立ち回り、最後には勝ってこれたからである。
まずは勝つ事。これは大前提だ。俺は勝ち続けるから、負けた事がないから正義を掲げていられるのではない。勝ち続け、敗北を避けてきたからこそ己の道を貫けて来たに過ぎなかった。

逆に言えば負けてしまえば単なる負け犬でしかない。

俺は知ってている。俺が悪であると言った外道の魔術師が、自身の家では妻に柔らかく微笑み、子の成長に喜ぶ、良き夫で良き父である場合もあると。

その父を亡くした妻や子にとって。或いはその父の魔道の探求という夢を絶ち、絶望させてしまった俺は紛れもなく彼らにとっての悪だ。この事実から目を逸らしてはならない。人の数ほど正義はあらゆる…使い古された文言だが、実はその通りで。俺は俺の父を貫いているに過ぎないのだ。

故に過信は禁忌だ。清き理想、尊い夢…懐くのは結構な事だ。

故に過信は禁忌だ。清き理想、尊い夢…懐くのは結構な事だ。勝つ事を躊躇わず。悪と諦られる事を恐れず。勝ち続ける為に、敗北を避ける為にあらゆる努力を惜しむべからず。本当に俺は人間だ。真っ当な人間として、当たり前と感じた事には忠実でいた。

それが勝つための為にあらゆる努力を惜しむべからず。真っ当な人間として、当たり前と感じた事には忠実でいた。立ち止まる訳にはいかないのだ。

夢…使い古された文言だが、実はその通りで。俺は俺の父を貫いているに過ぎないのだ。
俺は沖田を連れ、二人だけで遠出していた。目的は何処かにいるかもしれないカウンター・サーヴァントだ。それを探し出し、戦力を組み込みたいのである。これは欠かせない行動だ。何せまたフィン・マックール並みの敵と行軍中に戦闘に入ってしまえば、次こそ百パーセント確実に全滅する。何せ砦という一先ずの目的地に入った事で、「人類愛」の軍民は、張り詰めていたものが切れてしまったのだ。故に行軍を一旦中断し、一日ではなく二日間休むと告げたのである。それに彼らは元々体力の限界でもあった。休息は不可欠、ならば彼らを二日間、あの砦で休ませる。さもなければ生き残れない。故にあの砦を攻められたなら、死守する他になく。ケルト戦士だけが相手ならまだなんとかなるが、サーヴァントに攻め込まれたら非常にマズイ。だからこそ今は博打を打たねば。あの砦には見張りを立たせ、敵の接近を発見したなら狼煙を上げる手筈になっている。この時は令呪で沖田を砲に戻し、俺も砲に急行すると伝えていた。俺の能力は狂魚狩りに特化している。殲滅力という一点では英霊にも引けを取らない。何せそれを買われてしまってアラヤ識に守護者として目をつけられているからだから。狂魚散らしの■■とは俺の事である。だからと繋げるのはおかしい。何せ沖田がいる。俺が雑兵を潰し、沖田が強敵を狩る。守るべき人達から離れたら、生き抜くだけなら割と簡単だ。
沖田の叱りつけるような諫言に、俺は肩を竦める。生憎とそう簡単に倒れるほど柔な鍛え方はしていない、気が充実しているならいつまでも歩き続けられる。そう言うと、沖田は言葉に詰まっただった。

「なんで…」

「なんでですね…」言葉の継ぎ穂を見つけてななるのか、彼女が黙ったので、俺は気にせず歩く。サーヴァントの痕跡を探し求めて、黙々と、淡々と。今は右目がよく見える。夜の闇だって恐ましくない。下をすると、暗視ゴーグルをつけた時並みに見えているかもしれない。しかもなかった。しかも決して、これからサーヴァントの視界なにかしれない。だとしても凄まじいものだと思。惜しむらくは視力の向上は、霊基からの優食が進んでいる証だという事だ。やはりあの禁呪は多用するべきではない。

「なんで、ですか…」

「なんで、ですか…」
かれ。何や彼女は、俺が限界を超えて働き続けていると勘違いしてい
るようでも、悲痛な表情をしている。生憎と俺の限界はまだまだ先
だ。何せ俺が無理だと感じていない。無理じゃないなら出来るとい
う事だ。

曲がりなりにも「人類愛」なんて大それた名をつけたのだ。相応
の姿勢は見せてやらないと。無理じゃないなら来るという
い。

俺は「B O S S 」だ。「人類愛」の領袖なんだ。彼らを率いた貴
任がある。一度助けた責任もある。大人なんだ。責任から逃げるわ
けにはいかないだろう。それにこの様に格好つけられないん
なら、大人になった甲斐がないってもんだ。

嘯く。精々強がれ、強がれないなら男じゃない。

春、俺は男で、大人だ。見栄を張らしてくれ。格好つけさせてく
れ。俺の相棒として、俺の信念を共有してくれ。お前は俺のものな
ならどうだろう？

軽く咳き込む素振りをしている。耳が赤い……また発作か？

度が高いる……。
マスターは、悪い人です……

「割とよく言われる。でも俺は言われるほど悪い人じゃないはずだ。寧ろいい人だぞ。」

「おおい。」

でも、マスター風に言うと、決して甲斐がないですね。

ええ、沖田さんの主君なんです。この言葉と言いますか。よく分からない熱もきっとマスターへの忠誠心なのかしめますか。よくならない熱はきっとマスターから、私は安心して傍にいられんですよ、きっと。

はにかみながらそう言った沖田に、俺は苦笑する。

——もきた忠誠か。ランサーという、どうして俺なんかにそんな大層なもんを向けるんだろうな。

口にしないのは、黙って受け取った方が格好いいからだ。ええかっこいいはやめさいいと遠坂の奴に真顔になられたが……イリヤもしっかりはやめさいいと遠坂の奴に真顔になられたが……イリヤもなかったか？ともあれ、男ってのは大なり小なり強いものだ。情けないところは見られたくない。逆に格好いいところは見て欲しい。

沖田がいてくれるから、俺は強がれている。見栄を張れる。つまり、俺がこんな風にやってるのも、沖田に責任の一端があるのは確実に明らかなのだ。我ながら完璧な理論武装である。

「はい？」

「はい？」
行動しない奴に女神は微笑まないらしいが…。としたら今、女
神は俺に微笑んだぞ。

嘆息する。何を言っているんだかと呆れ気味の沖田は見ず、遥か
彼方に撒き上がっている砂塵を見つけた。
周囲は丁度、河と森に挟まれた地点。砦から半日離れた距離だ。
砂塵の規模は大きく、小太郎仕込みの数の判別法だと…ザッツと。
一方は下るみたい。敵襲だっただが。

乾いた笑いだった。なぜなら、
向上了視力は捉えていた。それらは。

「ペンテシレイア…粒れた執念だぞ…」

「それ、絶対に災厄の女神ですよ。お祓い行ってください。」

「ははは」

サーカスを探していた。そうしたら、確かに見つけられた。
軍を率いる戦闘女王。それが、明らかに俺を探している。敵敵
ながら、「人類愛」の痕跡を辿りながら…。このままでは、彼女
は砦にまで辿りついてしまうだろう。そうなければ虐殺の憂き目に遭
う。

まるく…。運がいいのか、悪いのか。俺は沖田に言った。
「春。一旦砦に戻り、カーターに防備を固めてから戻って来い」

「俺？決まってるさ」　

吐いた唾は飲めない。精々、強がるまでだ。

「…マスターは、どうなるんですか？」

「地形は俺の味方をしている。俺を困にして時間を稼ぎ、バカな部下を休めるよう、せめて一日は付き合ってもらう。アマゾネスの女王との楽しいデートだ。エスコートは任せてもらわないと。俺はそう言って、不敵に笑う。

ああ、本当に。つくづく、楽はさせてもらえないらしい。
挨拶代わりだねジャックさん！

『貴様あ……！名を名乗れ、覚えてやる……！』

―いだろう、貴様はこの私を出し抜き勝利した。ならばこれより私は、貴様に焦がれる。なんとしても殺してやるぞ。是非でもこの手で潰してやるっ！私に殺されるその時まで、この大地で見事生き抜いてみせろ、英雄っ！』

この身を縛るのは聖杯である。サーヴァントである我が身には、この身を縛るのは聖杯である。サーヴァントである我が身には、

己を召喚した者への忠義、義務、義理。そんなものは無い。確かに機械的なままでに殺戮に興じる狂王は強き者だ。ペンテシレイアよ、抗う術はない。だが戦わずして軍門下らされた屈辱は忘れないものではなかった。いつか必ずその喉笛を噛み千切ってやると猛き女王は報復を誓っていたのだ。

己を召喚した者への忠義、義務、義理。そんなものは無い。確かに機械的なままでに殺戮に興じる狂王は強き者だ。ペンテシレイアよ、抗う術はない。だが戦わずして軍門下らされた屈辱は忘れないものではなかった。いつか必ずその喉笛を噛み千切ってやると猛き女王は報復を誓っていたのだ。

己を召喚した者への忠義、義務、義理。そんなものは無い。確かに機械的なままでに殺戮に興じる狂王は強き者だ。ペンテシレイアよ、抗う術はない。だが戦わずして軍門下らされた屈辱は忘れないものではなかった。いつか必ずその喉笛を噛み千切ってやると猛き女王は報復を誓っていたのだ。

己を召喚した者への忠義、義務、義理。そんなものは無い。確かに機械的なままでに殺戮に興じる狂王は強き者だ。ペンテシレイアよ、抗う術はない。だが戦わずして軍門下らされた屈辱は忘れないものではなかった。いつか必ずその喉笛を噛み千切ってやると猛き女王は報復を誓っていたのだ。

己を召喚した者への忠義、義務、義理。そんなものは無い。確かに機械的なままでに殺戮に興じる狂王は強き者だ。ペンテシレイアよ、抗う術はない。だが戦わずして軍門下らされた屈辱は忘れないものではなかった。いつか必ずその喉笛を噛み千切ってやると猛き女王は報復を誓っていたのだ。
とすらせず宣ったのだ。
『それ。本気で言ってるのかしら？』
『あははは！傑作ね-chan！
この女、ある意味私達
より野蛮だわ！
素直に服従させないアマゾネスの芋女。
さもな
いと…消すわよ？』
笑い者たれ、聖杯の律する鎖に縛られる屈辱は、
憤死するに値する。なんとしても、
なんとしても、殺してやると殺意を抱いた。
だが時はまだ来ていない。今だけは大人しく従って
いているとも。
故に今は、己を打ち負かした強者に拘る。
名を告げようともしなかった。自負と確信に満ちた誇り高い英雄を
打ち倒そう。白髪に
眼帯。その精悍な面構えは目に焼け付いた。焼け付いた。
所詮は非力な人間などと侮りはするまい。そもそも、
この進撃は本来、
フィン・マックールやディルムッド・オディナと敵を挙旗するため
のものだった。ベンテシレイアは一切の情報に忌々しい狂王らに伝
えていないのに、奴らはサーヴァントの存在を察知して殲滅に向
かう作戦だったのだ。
フィン・マックールは素晴らしい智謀の持ち主だったらしい。顔
を合わせた事はないが。伝承からするに武勇も相当のものだろう。
『それなのに、本来挙旗するはずだった地点には何もおらず。
インのその軍勢は姿を見せなかった。』
それはつまり、フィオナ騎士団もまた敗れたのだ。あの眼帯の戦士に。

それはつまった。そこでこそ犬歯を剥き出しにし、蹂躙する敵として定めのに不足はないと思った。戦ったのだ。そして敗れた。あの男はペンテシレイアをただの敵として望んだので、雑魚を救うのを優先した。それを傲慢などと蔑みはする。奴はこの身に勝ったからこそ、選択の自由があったのだ。その権利に踏みつける次こそは、何を於いても殺しておいた方が良かったと後悔させる。再戦とはそういうものだ。雪辱を晴らす戦とはそういうものなのである。沸々と煮立つ戦意がある。雑魚どもの痕跡を辿れば、必ず奴にかち合うと確信していた。

河と森に挟まれた地形を見た時、ペンテシレイアの勇が報せてくれたものである。偉大なる軍神の血が教えてくれる。

あの男は掛け値なしに英雄だ。そして英雄とはこうした“機”を逃しはしない。このペンテシレイアの目に狂いがなければ、必ず

此処で仕掛けてくる。
ペンテシレイアが指揮を出すと、一万人の戦士団は静止した。

七万を数えた女王が無尽蔵に呼喚した戦士であり、本来なら繰り殺してやりたいが、ケルト戦士の勇猛さはアマゾネスの女戦士にも劣らない故に指揮官として我慢しよう。率いる戦士に罪はない。と

ペンテシレイアは思案する。戦があるか、と。しかしフィオナ騎士団を相手取った後ならば、奴にそれを用いる余裕と時間はあるまいか。突き進めばいい、とは思うが、その思考停止はあの憎らしいほど晴れらしい雄敵への侮辱となる。真に打ち倒すべき敵に、手を抜くなどアマゾネスの名折れだろう。故に慎重に、しかし大胆に、そして不敵に進撃するまで。ペンテシレイアは軍を二つに割った。五千を先に森に向かわせ、敵敵させる。

斥候としては数が多くなる。少数ならそのまま音沙汰なく消息を絶つだろうと考えたのだ。ペンテシレイアに深傷を与えた女剣士の事を忘れてはいない。五千とはそのまま、あの男と女剣士への評価でもある。

その間にペンテシレイアは、残り五千を率い河と森の間に進む。此処で攻撃してくるならそれはそれでいい。共襲があるならそれを蹴散らしてくれると。逃げるなら森の中にしか道はないが、その森は五千の戦士団を送り込んだのだ。挟み撃ちにされるだけである。

レアは——さあどうする。この地形を利用しないのか？そう嗤うペンテシ
「つ？」「予想を、良い意味で裏切られた。」
前方に人影がある。森に潜まず、河に潜らず、地に伏せず。屹立する剣の如き男が立っていた。
不意打ちをしない。堂々と迎え撃つように、その白髪の男は黑弓を構えていた。
くすぐんだ金色の、鷹の眼光。浅い夜の闇に在ってなお燿々と光っているようにも魅せる気迫。単騎で万の軍に相対し、なお劣るものかと放たれる覇気。
「はは、ハハハハハ！なるほど、うううか。そう東か——楯構え！進めっっ！ーー」
男が脅えるのを大剣のような漆黒の矢。爆発的に高まる赤い魔力は魔剣のそれ。ペンテシレイアはそれが己を照準していると確信した。心底愉快だった。人間の身で宝具を使う、それはいい。しかし如\ue52c何なる算段があるかは知らないが、単騎で万軍に対峙する胆力は見上げたものだ。それでもこそ英雄、一度はこの身を下しした男。生前な上手た。
胸が踊る。戦いとはそうでなければならない。だが女剣士の奇襲は二度と通じず、と口の中で呟く。軍略もまたペンテシレイアの力だ。呟きは、軍神咆哮。傀儡ともに威舞する為ではない、ひとえに沸騰せんばかりに熱される。この血の猛りを抑える為に。

超速で飛来する魔剣。ペンテシレイアはにやりと嗤う。ハッ！

男は進撃してくる五千の戦士団、その迫力に気圧されもせずに狙いを絞り、定めて、そして魔剣を放つ。

「——赤原猟犬——」

「——赤原猟犬——」
テシレイアは三撃目を弾き返した。そしてそのまま指令を発する。元より戦士らは突き進んでいた。丸楯を構え、弓兵を殺さんと。
「進め！距離を詰め、斬り潰せ！」

戦士らは天を衝かんばかりの気勢を発し雄叫びを上げている。

男は戦意に黒幕を転じてルイでケルト戦士らは驚異の武威を発揮した。ある程度威力が死んだのを見て取るや、数人掛かりで楯を寄せ集め、螺旋の剣弾を上空に逸らされたのだ。瞬間に、螺旋剣が自壊し、莫大な魔力を秘めた爆発を起こす。それは多数の戦士を巻き込んで、軍勢に風穴を空けた。

ベンテシレイアは「赤銅破裂」の五回目の迎撃で業を煮やし、神を呼び起こした。赤く光る瞳、黒く染まる眼瞳。増幅した怪力は突如、螺旋剣の雑な射撃とは違い、赤銅破裂に狙いを絞っていた男はベンテシレイアが本気で迎撃しようとしたのを見て取るなり、即座に投映兵器を自壊させたのだ。

「があぁアァアァー——ツツツ！！」

しかしベンテシレイアの回避は間に合った。げに恐ろしさは闘争寸前。ベンテシレイアは本能的に飛び退いだ。爆光。
この化身脚の神の血を引く女王。間に合わないはずの回避を間合いをなして、全身に壮絶な火傷を与えた。幼な顔貌は激痛に歪む。しかしペンテシレイアは血の湿った唾を地に吐き捨て、寧ろ戦意を更に高める。よくやっていた、次はこちらの番だ。そんな貌。宝具の投射にはそれなり以上の溜めが必要のは分かった。ならば射たる前に接近するまでの事。軍は進撃している。その後を追うようにペンテシレイアも駆け始め——その優れた眼力が異常事態を察知した。}

河の水が途絶えている。

河が何かに塞き止められているかのような……。ぬかるんだ土の見える河の跡に男は移動し、悠然と構えて戦士団の接近を待ち構えている。ペンテシレイアは激怒した。ケルト戦士の余りの能無しさに。報告ぐらいしろ馬鹿者どもの！軍倒して即座に離れ。所詮は傀儡、元々低い知能がコノ村の女王に乱造されて猟になったか！
男は素早く離脱していく。しかし下手に数々の多い戦士達は思うよ
うに逃れられず、結果として渡流に呑まれてしまった。荒れ狂う河
の流れに、男は次々と剣の道具を撃ち込むでいく。そしてそれがケ
ルト戦士らの方へ流れていくのを見計らって、全てを起爆した。

「やめてくれる。今で二千は死んだか」
男は即座に森に逃げ込んでいく。一度も白兵戦を行わず、射撃と
奇策による小細工のみに徹して。
だが…。

「そしたら袋小路だぞ。逃げ道はない…。さあ、どうする？ 雑魚
に討たれるか、私に殺されるか…末路を選んだようなものだから」
手負いの女王は、しかし全くそれを問題としているふうでもなく。
ケルト戦士らを先に行かせ、自身もまた嬉々としてそれを追った。

…どれほど持ちこたえられる？
…傀儡など幾らでも殺せ。だが私は見たぞ。酷い顔色だった。
ペンテシレイアに兵の被害を気にする余見はない。幾らでも使い
潰してやろうと残忍に嘘った。
森に敵が先回りしていたのは視認していた。いや、あれは先回りでなく斥候か？五千も割いたのには驚かされた。
妙に敵からの警戒度が高い、という事だろう。ペンテシレイアはこちらを相当警戒してくるらしい。お陰様でハードルが高くなってしまった。まあ高いハードルほど潜り易いもの。正直嬉しいどころの話ではないが、男足る者苦境にこそ勇を振り絞る。
うまく斥候を放ったのも、俺ではなく沖田を警戒してのもの。森に斥候を放ったのだ。俺が単身の名を覚えて直接先頭を切って来た辺り、読み違いないはずだ。俺も衝撃を受けたのだ。言い訳は分かっているはず。しかしその余りに悲痛な病弱ぶりは想像していない。俺もしていなかった。ささえ戦いが長引いたり、大技を放つと高確率で吐血して、即座に戦闘不能になる程だとは想定できなかった。俺もできなかった。故に沖田の奇襲は常に念頭にあると見て良し。しかし沖田は今は不可能だとは思うができないだろ。俺もできなかった。
故に沖田の奇襲は常に念頭にあるとみて良し。しかし沖田は今は不可能だとは思うができないだろ。俺もできなかった。
女の病弱っぷりの酷さを知られたり、大技使用後に高確率でダウンすると言われたが、多少のリスクは承知の上で突撃してくる。そうして森林戦である故に、大きな音を発する銃撃も多用すべきで、度はなす女はい。居場所は常にアマゾネス女から隠し、奇襲を警戒させ続けなければならない。続

は、お互いの背後を務めるにしても、敵の配置と体の向きを把握しながら戦士の首をナイフで撃き切る。故か、パラけて周囲を探る戦士を一頭上から襲った。木を登り、頭上を取ったのだ。落下しながら周囲を素早く見渡し、着地は迫り上がった木の根に。枝や落ち葉を踏んで足音を出さないため、倒れようとする戦士の骸を引っ掴み、静かに地面に倒すや、ナイフを明後日の方へ投擲。木の幹に突き立ったそれだけの音で、一斉に戦士達がそちらを見た。丁度俺に背後を見せている。数は十。銃も投影もなしにまともにやれば、簡単に俺を殺せてしまう武力がある。しかし、ならまともにやらなかったらいいだけの話だ。音もなく隣り合う戦士二人の首に両手に投影したナイフを逆手に持ち、同時に突き刺す。引き抜きの様に背中から心臓にも突き刺し、抵抗する間もなく即死させた。その体が倒れる前に、二本のナイフを強化して投擲。更に別の二人の背中から心臓に突き刺さる。しているのは真っ黒な野戦服。紅いバンダナ
は懐に。四体が倒れる音に、戦士達は瞬時に反応して振り返る。そして仲間が倒されたのを認識するや雄叫びを上げた。敵襲！といった意味の叫びだろう。四方八方から敵が集まってくるのを感じる。ペンテレイアは丁度今頃に森に入った辺りだろうから、この気配は先に森にいた連中のものだ。

「・・・」
気配を感じ取るのに集中する。目ではなく、耳を強化していた。足音の数、規模、地面の振動、方角、気配を探る上で第六感に頼り切れるほど俺は鋭くな。故に五感は限界まで活用する。それで最も敵の警戒網の手薄な方角を掴んだ俺は、匍匐前進で樹木の陰や地面の窪みを辿り、戦士達の死角から死角に移動していく。俺がその場を離れる頃には、戦士達の数は百を超えていた。

「・・・」
流石に集合速度が速いな。一度見つかったれば命はなさそうだ。

流石に集合速度が速い。一度見つかったれば命はなさそうだ。

流石に集合速度が速い。一度見つかったれば命はなさそうだ。

流石に集合速度が速い。一度見つかったれば命はなさそうだ。

流石に集合速度が速い。一度見つかったれば命はなさそうだ。

流石に集合速度が速い。一度見つかったれば命はなさそうだ。

流石に集合速度が速い。一度見つかったければ命はなさそうだ。

流石に集合速度が速い。一度見つかったければ命はなさそうだ。

流石に集合速度が速い。一度見つかったければ命はなさそうだ。
持ち込まれた。そこで僕は無一文だ。相手に
とて不足なし——皆殺した。

一人、また一人。淡々と間夜に紛れて始末する。築築されつつある
陣形に穴を空けながら、無銃の剣を投景し、それを地面に埋めて
襲い続ける。五十人余りの喉を裂いた辺りで、動きを感じた。
バラけていた戦士達が繰って動き出したのだ。舌打ちする。べ
ンテシレイアが再び別動隊の手綱を握ったのだろう。更に難易度を
上げてくれた。

だが出めるようよ。小細工にかけちゃあ天下一品だと自負している。
だが詫められるなよ。小細工にかけちゃあ天下一品だと自負している。

五人一组で死角をカバーし合い、密集形で戦士らが辺りを探
する。五人一组で死角をカバーし合い、密集形で戦士らが辺りを掃
って包囲網から抜け、敵から離れた地点で急ぎ穴を掘る。俺の脚が膝
まで落ちる程度の深さのものをスコップを投景して無数に掘り続け
た。そこに毒を与える短剣を、切っ先を上に向けて土に突き刺し、
穴に掘り返した土を埋め直す。
それを無数に行い、樹木と樹木の間に投影したロープを掛け、それには無数に掛ければ鈴がなる仕組みのものを多数仕掛け。それとは別に樹

木へ足首に掛かる程度の低さでロープを巻き付け、それには掛ければ

頭上から剣の束が落ちてくる仕組みも作る。そしてその度手近に寄ってきた戦士に斬撃した。脳天を撃ち抜く。

しかしその銃声で俺の位置は知られただろう。わざと足音を立てな

かで俺がいた地点と反対側に向かった。その際に足を踏みにかけ絶

叫する声、頭上から落ちてくる剣の雨に見舞われ断末魔を響かせて

いるのが聞こえる。

「…」

息が乱れてきている。その上眠い。

何より腹が滅っている。その上眠い。

…無理は禁物だな。少し寝た方がいい。空腹はまだ我慢が利く

が、眠気で集中力を途切らせさせるのは死に直結する事態を招くだろう
う。太い樹木を見つけると、その木の根が迫り上がり、微かな隙間があるのを見つけた潜り込んだ。そのまま地面に伏せた状態で一晩間眠る。一時間きりで目を覚ますと、まだケルト戦士らの気配があるのを感じて安堵した。寝ている間に森から出られていたらどうしようもなかった。

大きな木の根の隙間から出ると、ケルト戦士の気配を察知する。

マズイ。一時間でなく三十分の仮眠にしておくべきだったか。

後悔するも、やむをえない。強行突破する他になかった。出来る限り音を出さずに走り、ケルト戦士の二組を目視する。五人一組だ、故に一人。

速攻でカタをつけなければ死ぬ。魔術回路の負担を考える暇もなかっただけの塊。しかしそのは剣としての属性があった。持ち主が狂化していたとしても、その武威に影響されたが故かもしれないので。

「投射、装填」

「トリー・ガイ・オフ」

ケルト戦士は俺の接近に気づいている。だが声を出させることにはいかない。決着は一瞬になければならぬ。そして大規模な道具も厳禁。確実性を込みで考えても、これしかなかった。

投射するのは冬木で見た大英雄の斧剣。元は神殿の柱から削られただけの塊。しかもそれは剣としての属性があった。持ち主が狂化していたとしても、その武威に影響されたが故かもしれないので。
引き出すはその奥義。完全な再現は到底不可能でもその一片は引

現れたのは、ペンテシレイアだった。どいて、身を隠すのには邪魔な斧剣を消して身を隠した。

遠くから、一直線に、こちらに駆けてくる巨大な殺気を感じて慄

まるで死の津波。本能が体を硬直させる。それを瞬間的に振りほ

第三特異点で本人と戦ったから分かる。なんで出来損ないな投影

だから恐ろしい。二度とヘラクレスとは戦いたくない――そう思った

瞬間だった。

第

一瞬にして繰り出される超高速の九連撃は、十名のケルト戦士を

瞬にして屠ってのげる。

全工程投影完了――否、射殺す百頭――

一瞬にして繰り出される超高速の九連撃は、十名のケルト戦士を

全セット工程完了――ナインラブドワーカス、射殺す百頭。

一瞬にして繰り出される超高速の九連撃は、十名のケルト戦士を

一瞬にして屠ってのげる。

全セット工程完了――ナインラブドワーカス、射殺す百頭。

一瞬にして繰り出される超高速の九連撃は、十名のケルト戦士を

一瞬にして屠ってのげる。

全セット工程完了――ナインラブドワーカス、射殺す百頭。

一瞬にして繰り出される超高速の九連撃は、十名のケルト戦士を

一瞬にして屠ってのげる。

全セット工程完了――ナインラブドワーカス、射殺す百頭。

一瞬にして繰り出される超高速の九連撃は、十名のケルト戦士を

一瞬にして屠ってのげる。

全セット工程完了――ナインラブドワーカス、射殺す百頭。

一瞬にして繰り出される超高速の九連撃は、十名のケルト戦士を

一瞬にして屠ってのげる。

全セット工程完了――ナインラブドワーカス、射殺す百頭。
殺意を。憎悪を。極限まで煮詰めたそれが、辺り構わず放射されている。直接向けられたわけでもないのに、肌が栗立つかのような。

神を完全解放し、目を赤く、眼球を黒く変色させたペンテシレイアは、先刻の数倍にも膨れ上がった暴威を纏っている。

テシレイアは、狂戦士だったのか。俺は漸く彼女のクラスを察した。

物陰に隠れる俺の視線の先で、狂える女王は頻りに何かを探して、心底残念そうに苛立ちを鎮め、女王は俺を探し出す為に辺りに気を配りながらその場を離れる。

普段は理性があるが、切っ掛け一つで狂化し、しかも数倍も戦闘力が跳ね上がる稀有な狂戦士らしい。俺は誓った。ペンテシレイアが近くにいる時は、絶対にギリシャに関係する道具は使わない、と。

下手をしなくても即死する自信があった。
禁句に気をつけろジャックさん！

地に伏せたまま、足の腱を切り裂く。戦士が不意の痛みに驚き片膝をついた瞬間、素早く起き上がって喉を掴むと、そのまま強化した握力で喉仏を潰し、同時に背中から肺腑を貫く。ごぞ、と口と肺の中を血に溢らせ、喉の潰れた戦士は絶命した。振り向いてくるもう一人の戦士、距離は近い。瞬時に駆け寄り、その手首を捻り壞しながら脚を払い、背中から受け身を取りせず地面に叩きつけ、後頭部を打って意識を朦朧とさせている戦士の首を切り切る。心臓にも一刺し。

ナイフを捨て、何十本目のか新しいナイフを投げ銃。疲労のせいか体のキレが悪くなっていると自覚していた。これまで外していなかったバンダナを額にきっかけ巻き、気合を入手许す。時間経過は十八時間。序盤の射撃と河の洪水を利用しての二百、闇夜と森を利用しての三百ほどの殺傷と、成果も一覧のものとしては上等だ。

ふと、マスターとしての感覚がある。背後から近づいてくる戦士を知覚するも、特に対処する必要を感じずに放置した。
戦士を斬り伏せ、沖田が姿を現す。自身のサーヴァント故に、なんとか近くにいるのは感知出来た。壬生の狼、新撰組。夜は薄れ、月は昇り、日輪は中天に差し掛かっている。六時間後に日没か。沖田の顔色は悪くない。

「砦の様子は？」
「問題ありません。敵襲は無し。夜明け前に充分に休息を取らせ、迎撃準備に取り掛かるよう下知も通達してあります。それと、マスターマッターチセレアは対城際は騎馬で行きましょう。気が利くじゃないか。気が利くじゃないか。

流石に砦まで走っていける体力は無い。砦で迎撃した方がいいかもしれません。ペンテシレアは対城宝具は持っていない。しかも怪訝な事がある。ヘラクレスの斧剣を投影して以降、ペンテシレアはまだ森の中にいるはずで、沖田がどうして暫く戦士達の統率は取れている。つまりペンテシレアはまだ森の中にいるはずで、沖田が何事もなく合流してきた事から、単騎で砦に向かった訳ではなさそうだ。
「まあい。離脱する。これ以上は不毛だ」

「ああー」

元々ケルト戦士らの陣形の外縁部に潜んでいた。この場を退くのには難儀はしない。今から退けば、砦につく頃には総計二十五時間は経つだろう。充分だ。

沖田を連れ、森から抜ける。樹木に繋がれていた手綱をほどき、黒馬の首を撫でてやった。鼻面で顔を軽くついてくる彼女に苦笑する。彼女の名前を夜通し考えていたが、特にこれといったものも浮かばなかったので、ミレイー・俺にジャックという仮の名をつけてくれた少女から選想した。

俺はトランプのダイヤのジャックから名を持って来られた。それに彼の英雄の奥方から名をもたれた少年から選想した。

俺たちはトランプのダイヤのジャックから名を持って来られた。それに彼の英雄の奥方から名をもたれた少年から選想した。

「お前の名を考えてみた。アンドロマデガ。『男の戦い』という意味がある。どうだ？」

彼の『兜輝くヘクトール』の妻の名が。ふん、殺り辛い名をつけてもだんだん　

「会議だ。銃護します」
森の出入口で、待ち構えている女王が姿を現す。
俺達の背後からだ。

日の光を弾く銀の髪。幼いものでありながら、目を瞳くに値する端整な美貌。黒のように引き締まった肢体に軍神の系譜に相応し
い力強さが宿っている。

沖田が即座に斬りかからようとするのを止めた。俺は馬上で手綱を
握りながら肩を竦める。

「此処で待ち構えいれば必ず来ると思ってい、英雄」
「…過分な評価だ。俺はアマゾネスの女王に、英雄などと称され
に足る男ではないよ」
何が可笑しいのか、クツクツと笑うペンテシレイアに、俺はどうするかと考えてみる。
この場で戦いたくはない。俺は疲れているのだ。早く飯を食べ
寝たいのである。沖田と掛かれば倒せるかもしれないが、沖田は既
知の通りリスクを常に抱えている。戦いが長引けば、ケルト戦士達が
戦うのは不利なのだと思う。戦うのは不利なので、戦
いが長引けば、ケルト戦士達が来る。戦うのは不利なのだと
考え、正面から掛かって速攻で倒せる手合いであるまい。
戦うのは不利なので、ケルト戦士達が来ると戦
う。ペンテシレイアの声はよく徹る。
「で、どうする。戦るのか？」
「無論だ。逃がす道理があると思うか？
こうして話しているだけでも、ケルト戦士達は集結してくるだろ。
な」
「なんだ。」
「名を教えて。貴様は一度この私に勝ったのだ。ならば雪辱を晴
る前に、その名を記憶してやる気に存する。そうでなければ、その
馬に乗った瞬間に叩き潰すつもりだったが･･･それでは余りに無粋
だろう」
何気に死ぬところだったわけか。全く気づいていなかった。王と
いう人種は、やはり独特な感性を持っているらしい。
観念した風を装いながら名乗る。本当の名ではないが、他に返せ
するものもない。
「ジャックだ。トランプのダイヤが由来らしい。」
ほど。ますます奇縁だ。因果なものですだ。その名が私に土をつけ
う。
たのか
「やり辛いのは俺も同じだ」

どうしようかとまだ考えている。口の廻るままに噂する裏で、矛を交わさずに逃げる算段を立てながら、逃げる好機を窺い続けた。ペンテシレイアは僅かに機嫌を害され競うが、俺も同じだと。

「…やり辛いだとは？」
　ああ…何せ彼のペンテシレイア女王が相手だ。その正面にこうして存在している、それだけで恐ろしくて堪らない。距離が遠ればまだ強がれたが…出来れば戦いたくはないな。俺もまだ死にたくない。
　「それには…」
　「は、そうか」
　一瞬、機嫌を直したようだったが。俺が軽口を叩きそうな気配に、俺はそれには気づかないふりをしつつ、臨戦態勢を取る沖田に意識をやって、女王の美貌を見詰めながら言った。
　「…お前のように可憐な少女に殺されると、俺が知己に殺される。
　「…？」
　「は…？」

鴬が豆鉄砲を食らったような表情で、ペンテシレイアは呆気なく
られた。
……

こ
ん 可
な 憐、
筋
張 だ
っ と
た
体
と、 ？
矮
躯
を
見
て
尚
そ
ん
な
戯
れ
言
を
ほ
ざ
く

う、
と
始
ま
る
忌
々
し
い
あ
れ
で
は
な
く

心
眼
意
が
味
冴 こ が
え こ 分
渡 だ か
る。 な。 ら
な
活 間 い、
路 違
は い と
こ な い
こ い。 っ
だ
た
！ 幾 表
度 情
も に、
の
戦 糸
場 口
を を
越 見
え つ
て け
不 る。
敗
な、 こ
こ
俺 か
の ？
……

私
？ が
……

」

−1808−

……

バ
カ
た は だ、
か は
は こ
っ

「

」

ば、

……

！
！

王 の 神
か
の 上 の あ
武 な も あ、
威、 く の
頼 と ど
軍 も 考 こ
神 し え か
が い る ら
如 が、 と ど
き
ゾ う
将 敵 ッ 見
器、 と と て
し す も、
将 た る
帥 ら が 可
に 恐 な。 憐
不 く
な
可 て 正 乙
欠 堪 直 女
な ら 怖 だ。
慎 な 気
重 い。 が ま
さ
走 あ
と ア る。 そ
大 マ
の
胆 ゾ 味 可
さ ネ 方 憐
ス な さ
の ら も
数 女 こ 死
」

ッ
ッ
ッ

」

ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ

え
上
げ
た
ら
尚
更
嫌
な
も
の
だ

「

ッ

――

！
？

……

ぇ
っ

ハ
ハ

――

て
あ
れ

ハ
――

――

っ

「

」

我 今
が だ
剣 ァ
に ッ
て ！
敵
を
穿

ペ
ン
テ
シ
レ
イ
ア
は
腹
を
抱
え
て
笑
い
を
爆
発
さ
せ
た。

ん
な
所
に
バ
カ
貴 が
様、 い
る
戦 で
士 は
で な
も い
英 か
雄 っ
で ！
も ？
な
く、 私
を
た
だ
の 可
戯 憐
け ！
だ ？

―

は
い
！ 春、

」

張 馬
り 腹
あ を
げ 蹴
る。 っ
て
ぐ 一
ぇ 目
っ 散
、
に
と 逃
呻 げ
い 出
た し
沖 た。
田
が 沖
怒 田
り の
心 襟
頭 首
に を
発 掴
し み、
て
叫 馬
ん 上
だ。 に
引

は
！ は
？ は
！
！

―

「 ――

「

「

「

馬 ち
鹿 ょ、
野
郎 隙
！ だ
ら
仕 け
掛 だ
け っ
た た
ら じ
笑 ゃ
い な
な い
ん で
か す
す か
ぐ ！
引
っ な
込 ん
む で
に 逃
決 げ
ま る
っ ん
て で
る す
だ か
？
！

っ


「いいか、こういう時は逃げるが「一番だ！」

―女心を操って逃げるといい、ペリやんかがいいですマスター！

「ま、待ってー！は、はは、ダメだ……クッ、卑劣なア……！」

ペンテシレイアは慌てて追い掛けようとしてくる間に外され、駆け出すのが遅れた。

単騎での追撃は不利。そう判断できるだけに、ペンテシレイアは笑えるやら腹立たしいやり、軍勢を集めてから進軍する事にしたらしい。絶対に逃がさないと、ペンテシレイアは笑いながらも怒気を発している。

アンドロマケが疾走する。強化した脚力で風と一体となったかの全速力で、以降は脚を緩めさせるもずっと走り続ける。

しかしアンドロマケはいい馬だが、名馬ではない。それに生身だけ。アンドロマケは恐れる素振りもなく爆撃の中を通さない。その先頭を走るペンテシレイアが遠くに見え始めていた。大量の剣を地面にばらまく。それが爆発すると知っているはず、ならば避けなれって噂を流したが、ペリは踏みつけて剣を駆け抜ける。

しかしケルト戦士団は走る脚を緩めない。それに目線を剣つき圧を放つ。パンテシレイアは難なく跳躍して駆し、ケルト戦士団は恐れる素振りもなく爆撃の中を駆け抜けた。義薄は想定して地面にばらまく。それを爆発すると知っているはず、ならば避けられるはずだ。

「いなに、生身かがおうかな。家父兄の両親で、駆け抜けるのは、それでも遅かに少ない。宝具の剣を踏みつけ剣を駆け抜ける。ペリは想定して地面にばらまく。それを爆発すると知っているはず、ならば避けられるはずだ。」
百まで縮められていた。
しかし砲が見えていた。そこまで来ると、俺は砲の城壁の上にいる。
「カーター！迎撃の用意は出ているか！？」
「は！万端に整えてあります！」「門を開けろ！」「了解ッ」
砲が開かれる。火砲が発達して以来、城門や城壁はなんら意味を成さなくなっている故に、その壁や門は粗末なものだ。しかし最低限の壁さえあれば砲には大砦である。
砲に駆け込み、門を閉めさせる。そのままアンドロマデに乗った
騎が駆け込み、門を閉めさせる。そのままアンドロマデに乗った
銃弾と剣弾の雨だ。それが敵兵卒に着弾していく。双剣銃を投射して次々と射出した。
既に敵兵は射程圏内。銃声が轟く。俺は多数の剣弾を投射して次々と射出した。
金剛鉄を四つ投げ空に投射してそのまま投射した。最も敵の密集して
在る地点を目掛けて。暴力的なまでの爆撃がケルト戦士を多数吹き飛ばした。
「カー！、命じていたように油の準備はしているなら！？」

「は！しかし……それは使ってしまうならば、壁が……」
「どうせ長居する気も無し、躊躇うな！」

兵士らに指示させ無駄に備蓄のあった油を全て持ってこさせる。熱してやる必要もない。それを城壁の上から下に撒かせ、そこに火を噴く魔剣を投げ込んだ。城壁に取りつくこうとしたケルト戦士が怯む。眼前に炎の壁が立ち昇る。壁が……

兵士らに指示させ無駄に備蓄のあった油を全て持ってこさせる。熱してやる必要もない。それを城壁の上から下に撒かせ、そこに火を噴く魔剣を投げ込んだ。城壁に取りつくこうとしたケルト戦士が怯む。眼前に炎の壁が立ち昇る。壁が……

「春、ペンテシレイアを抑えて斬れろ。斬れるのなら斬れ。出せ惜しむもはだかったのだ。兵士達に城壁の真下を撃たせつつ沖田に命じる。」

「承知。」

「ッ！」

強靭な顎と歯。それで鋼を噛み砕き、沖田は慄然とする。咄嗟に
撤退を帯びて抜き放って女王の鉄球を逸らし、沖田は大きく後退した。
戦局の把握に抜かりはない。俺は沖田の足元に、彼女の愛刀を投げて放つ。地面に突き立つそれに対して、俺は剣群の大量投影、織絨爆撃を続行する。今はケルト戦士の処理が先決。沖田を狙う戦士を優先的に排除。高所と『人類愛』によっ
て戦列が解体される。関数が実質的弾壁を攻めようとしていた。城壁に辿り着く前に爆撃に晒される数多くの戰士は本領を発揮できない。目を見据えながら速度的に消滅していくケルト戦士を前に、俺は大声を上げた。
-
「…どうするベンテシレイア！お前の軍は壊滅している！俺らが消えれば次はお前だ、引き際という奴だぞ！」「チッツ！忌々しい男だ、ジャック！」
ベンテシレイアが神性を解放する。膨れ上がる暴君に沖田は冷徹な限界を遮らざるを得ずに、伶俐な刃を間かせてベンテシレイアの手首を切り落とした。『いや切り落とせない。刃が高密度の筋肉に阻まれたかのように切断には至らない。』面食らう沖田。その隙にベンテシレイアは傀儡の戦士の元に一足跳びに移り、その首を掴むと沖田の前へ投げつけた。
咄嗟にそれを両断した沖田の目には、ベンテシレイアが身を翻して撤退していく姿が飛び込んでくる。
逃がすのか……！
「いや、追うな春」
「マスター！？」「逃がすものか……！」「いや、追うな春」
制停され、信じられない思いで俺を見上げてくる。そんな沖田に
俺は苦笑した。手振りで示すまでもないのだ。腕を伸ばすと、その
皮膚の下から一本の剣が突き出てる。そんなんだ沖田に
悪いか、俺が限界だ。これ以上はやれん。お前一人に追われる賭
けはしたくない」「し、しかし……」
「覚えていろ、覚えていろ、ジャック！次だ、次こそ確実に殺す
かこまでだ。俺は飯食って糞して寝る。皆もそうしろ、悪いがお
前に訓練をつけてやる件は後回しにする」とこままでだ。俺は飯食って糞して寝る。皆もそうしろ、悪いがお
ま
た
い
つ
な
り
と
も
挑
ん
で
こ
い

ァ
ッ

ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
！
！

な を
っ 見 殺
て て 意
し
の
ま
な
っ 怒 い
た。 気 そ
を、 れ
を
殺 難
意 な
を く
裏 掴
返 み
し、 取
っ
――

ハ

勝
者
は
寛
大
だ。

――

−1814−

――

次
の
戦
い
を
有
利

ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
！
！

」

そ
う
な
れ

た
だ
け
な
の っ
だ た
が。 の
は、

ー

て
来
る
に
違
い
な
い。

っ

今
の
矢
文
で
俺
が
狙

「

た
の
だ。

ー

っ

実
際
の
と
こ
ろ、

ス
じ め
タ マ る と ペ 笑
ス も き ン っ
な タ の た テ た。
ど
が か。 シ
務 と あ
レ 未
ま す る。 こ イ だ
る る
の ア 嘗
も な
身 は て
の ら、
は 笑 な
か
挑 う。 く、
と あ
戦
す の
者 気 愉
ら 男
と 持 快
感 が
な ち だ
っ の っ
じ い
る。 い。
た い た
の い の
い
か。 敗 だ。
や、
北
サ だ
っ
あ
の
ヴ た。
ァ
男
以
ン な
外
ト る
に
と ほ
己
し ど、
の
て
マ
感 挑

ー

思

屈
辱
的
だ
っ ろ
て う。
や
り こ
易 れ
く で
な 次
る は
は 怒
ず り
だ。 狂
っ

に
進
め
る
た
め
の
心
象
操
作
を
図

――

そ
う、

ば
単
調
に
な

腹
を
抱
え
て
再
び
笑
い
転
げ
そ
う
に

刻 は
ん な ペ
で く ン
彼 と テ
方 も、 シ
へ
レ
走 負 イ
る け ア
ペ 犬 の
ン の 遠
テ そ 吠
シ れ え
レ だ。 を
イ
聞
ア 俺 か
に は な
た 射 弓 か
女 掛 と っ
王 け 矢 た
は、 る。 を 事
投 に
英
影 す
文
し、 る。
で
記
そ 本
さ
れ 人
れ
に に
た
文 そ
そ
字 の
れ
を 気


衣替えだねジャックさん！

午前四時の事だ。まだ夜の闇は去っておらず、焚き火台の灯りだけが、唯一の光量となっている。見張りをして立っていた歩哨の兵士が、B.O.S.Sの軍服を用意してきました。よろしければお着替えく

たっぷり十時間眠り、起床した俺に差し出されたのは軍服だった。

俺は意味が分からず困惑した。いや、俺は軍属じゃないんだが。

俺は溢すと彼は苦笑した。なんで一団の領袖足る俺だけが、見

事もないような戦闘服だと浮いているように見えるのだろう。同じ

軍服を着れば、さらに仲間意識が深まるはずだと彼は力説した。こ

れは他の仲間達も同意意見なのだ。

まあ分からなくてもない話ではあった。しかし俺は乗り気には

部隊諸君の気持ちは分かる。しかし着たくない。それが俺の感

情。そう伝えると、兵士は言った。「ならばその事ですね、フ

イランソロピートの軍服でも作っちゃいますか」と。なんだ彼は、

そうした衣服を造る家の出身らしい。大陸軍に徴兵されたばかりだ

に、軍への帰属意識の薄い彼ならではの発想だった。
「フィランソロピー」は大陸軍に合流したら解散予定なんですが。謎の敬語を使いたくなる俺は、空気を読んでぐっと堪えた。そうしてデザインを考え始めた彼、エドワルド准尉だが、図面を引いて描かれるそれのなんというセンスの無さ……いやこの時代なら通用するが、やはり未来人である所の俺からすれば目を覆わんばかりである。ついつい口出ししてしまった。
未来的軍服を投影する。これをモデルにしてくれと、詰襟のそれと力で作ったのを配ればいいのでは！それと言わなくてもダメだ。俺の投影品は破損したり傷ついたりするので、エドワルドは目を輝かせた。「格好いいですね！BOSSがその後、言わずに消える。闘闘中に傷を負った瞬間兵士が素っ裸になるぞと告げると「それは嫌ですね」と納得される。「なにやってんだ、俺は……」
「はっ、主夫の仕事だぞ。家事だけしてくっただかったって脳裏に戯れ言を溢しつつ。ふと冷靜になる。」
頭が痛くなる思いだった。明日にはこの砦を出るというのに…。

元々予定である『フィランソロピー』の兵の訓練は俺の疲労を理由にキャンセルしたから、この日俺は暇と言って暇だが。だから何してるんだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなって何してるんだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなって何してるんだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなって何してるんだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなって何してるだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなって何してるだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなって何してるだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなって何してるだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなって何してるだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなって何してるだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなって何してるだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなって何してるだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなって何してるだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなって何してるだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなって何してるだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなって何してるだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなって何してるだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなって何してるだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなって何してるだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなって何してるだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなって何してるだろうと冷静になると、無性に恥ずかしくなくなるのが人情というもの。いい歳した大人の男が「ぼくのかんなえたらサイコにかっこいい軍服を作っているなんて…。なんというか、バカみたいだ。」рабатまっていた。

だがまあ、構わないだろう。どの辺のバカに付き合うのかも流の一種だとも思えば。そう割りきってしまえば、こうしているのもあるくはない。なんだんだと集まってくる兵士達は睨目、俺とエドワルドはこうでは、B O S S ここはどうして？ と意見を交わしつつ軍服を作る。靴した革に金具を取り付けベルトにし、出来上がったものに腕を通してみた。

「勞だ、感嘆の声を上げる。黒地の布を基調として、四角い胸ポケットを左右に二つずつ。スーツを厚地にしたような機能的なもの。上半のもばまで届く軍靴を履いた。その上に背中全体を隠し、左右半分を覆い隠す面積の広い真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来てしていた。真紅のマントを羽織る。その裾は膝の辺りまで来ていただけ俺に見せてくる。
「な、なんて事だ……」「エドワールドが聞く。俺はもしかしたら、歴史の瞬間に立ち会っ
たので……なんて馬鹿げたことを真剣に口にしていた。鼻を鳴らし
ず。」「バカ言ってないで見張りちゃんと立ってる」「しかしBOSS」「申し
かもしかもあるか、さっさとやれ。……ええいガキかお前ら！散れ、散れ！」「マスター！」「オキタさん、なんなら貴女のものも造りませ
ますか？」「おお、大統統ですか。いいですね、それは」「黙ってろカーター！」「黙ってろカーター！」「五月蠧いぞエドワールド。……春。お春！嬉しそうにするんじゃ
ない！新撰組なら浅葱色の羽織一択だろうか？」「BOSSとお
揃いですよ」「でもマスター！この服の上から羽織れば問題ないって沖田さん
の中の土方さんが言ってます！」「その土方を黙らせる！本人がそ
んな事言うとかも思ってんの

「興奮冷めたまま兵士達にヤケクソ気味に一喝していると、不意に
沖田が俺の傍に来ていた。目を輝かせて俺を見上げてくる沖田に、思わずゲッと口に出して
しゃう。」「かっこいいです！大統統！って感じです！」「おお、大統統ですか。いいですね、それは」「黙ってろカーター！」「黙ってろカーター！」「オキタさん、なんなら貴女のものも造りますか？」「BOSSとお
揃いですよ」「でもマスター！この服の上から羽織れば問題ないって沖田さん
の中の土方さんが言ってます！」「その土方を黙らせる！本人がそ
んな事言うとかも思ってんの
…変なテンションでやり切ってしまった感が酷い。カーター達を追い散らすと、今度は群衆に囲まれる。特に子供連中は目を輝かせていた。男達の目も熱い。なんだか一周回ってこれでもいいかという気になってしまっていた。適当にあしらいながら城壁の上に向かう。一番目のいい俺がいれば、見るまでもないから城壁に懐息のする。風に当たるながら兵士の上に向かう。一番目のいい俺がいる。

２、３、４回もマックスは言う。「フィランソロピー」の隊服はこれで統一されていないそうだなと諦念が過る。

まあいいか。まさか改修後まで「フィランソロピー」の名前と軍服が残り続ける訳でもあるまい。前と軍服が残り続ける訳でもあるまい。者に糸と金具で固定したダイヤを下げ、俺は遠くを見る。見渡す限りの快晴だ。冬は近い。…本格的に気候が厳しくなる前に、今まで見通しは立てなかっただろうが、甘い見通しは立てない。

最悪の事態を考え、寒さを凌げる拠点を確保する必要があると思った。
翌日、砦を発つ。

じゃーん！ どうですかマスター、この新コスチュームを纏った沖田さんのお艶姿は！

心なし艶の増した顔を撫でてやり、嬉しそうに喰くアンドロマケに跨がる。いざ出立の時間だ。

しかし肝心要の剣がいなない。どこ道草を食ってやがると嘆息し、あたかも大正時代、陸軍の軍装を纏った女剣士が寄ってきた。

掛けた俺の許に、黒衣の軍装を纏った女剣士が寄ってきた。

あとかも大正時代、陸軍の軍人が着ていたような、ハイカラの軍服を想起させられる黒衣。穿いているのはスポンではなく、元々沖田の穿いていた丈の短いスカートに近い。革のブーツとも合わせ、
機能性と可憐さを両立させた華がある。黒衣だからか、露になって
いる白い太股がより強調されているようで、より目に眩しくなって
いた。その上に宣言通り浅葱色の羽織を纏い、見事なミスマッチ感を生
み出しているが、沖田が着ると実によく似合う。ミスマッチもまた
味わいの一つでも言うように。俺のものも大正時代の陸軍の軍服
をモデルにしてあるから、ペアルックと言えるかもしれない。

沖田が来たのを確認し、一領くんと俺は号令を発する。一斉に歩
き出す「フィランソロピー」の群衆。兵士の半数は砦で回収した荷
車を持っていた。その荷車にはこの遠征で欠かせない食糧などが積
まれている。

馬上の人となっている俺は「フィランソロピー」の隊列の先頭を
行く。カッポカッポと蹄を鳴らすアンドロマケの調子は良さそうだ。

沖田が来たので、カッポカッポと蹄を鳴らすアンドロマケの調子は良さそうだ。
脳裡を席巻する驚愕の念。以前の想定を遥かに上回る現実的脅威に、俺は内心の動揺を悟らせないよう努めて一杯だったのだが。

推定戦力は、3アルトリアだったはず……なのになんだ、戦力が跳ね上がっている……？

推定戦力の目を以てしても……！

え、えーと……もしかして、似合わないですか？ 無視されるとか、途端に泣き出して、顔くしゃくしゃに歪め、今にも泣き出しそうに顔をくしゃくしゃに歪め、今にも涙を溢れさせてしまいそうにマスターとお揃いだぞ！ なんて、ちょっと……調子乗っちゃいまったね……！

えーと……もしかして、似合わないですか？ 俺はとかほざく弓兵を見習え！ 今度は俺が慌てる番だった。泣かせたくないなんてないのだ。可愛い子は誰でも好きだよ俺はとかほざく弓兵を見習え！
すまん。春が……想像していたより可愛いね。つい目を逸らしてしまった。似合ってるぞ、お春。
え……え、ええ！？お、沖田さんが可愛い！？あは、あはは……まるで、まるで笑って似合ってるぞ、お春。
そこは“かっこいい”とかですよフツー！私なんかがカワイイわけないじゃないですか！？も、まったくね！

一瞬で回復するメンタルだった。チョロ過ぎないかこの娘……少し心配になった俺である。
だがまあ、にぱあと顔を輝かせ、鼻唄を歌いながら俺の周りをくる廻る。明らかに上機嫌極まる沖田を見る笑みが溢れてさま。
るアトリエが見たら、自分にかなり似た風貌の沖田がそんな童心なのに、極めて複雑な心境になるんだな……と思えてる。
びくまって、一本全然似てないんですけどね。
どちらか、本人に知られた確実にカリバられる事をつらつらと思考していると、沖田は不意に跳躍して俺の後ろに飛び乗って来た。なんと。本人が馬鹿みたいに腫れる事をつけつらと同じ。
アンドロマケはムツとするも、温厚な気性のお蔭か振り落とそうとはしない。しかし——

「ま、待て！乗るな！」「ま、待て！乗るな！」「ま、待て！乗るな！」「ま、待て！乗るな！」「ま、待て！乗るな！」「ま、待て！乗るな！」「ま、待て！乗るな！」「ま、待て！乗るな！」？なんでですか？いつもこうしてるじゃないですか——

当たってる、背中に剣の丘が二つ当たらんな！ふざけてるの？挑発してる？誘ってる？無防備過ぎるぞコイツ。新撰組の情操教育はどうなってんだおいコラ近藤お前だお前！保護者出って来い一回絞めるから。
動転する俺に沖田は不思議そうにしながら腰に腕を回して来る。
またく意識していない。おやめろ。性欲を持って余すだろうがコラ。こちとら溜まってるんだぞ一人で発散する時間も余裕もないんだ。
だが堪えよう。伊達に剣の如き男と呼ばれていないのだ。鉄の心を持つ俺では揺らがない。
彼女に思わず腰に腕を回して来ると。
まったく意識していない。おやめろ。性欲を持ち余すだろうがコラ。こちとら溜まってるんだぞ一人で発散する時間も余裕もないんだ。
キアラだからこそ堪えられたんじゃないんですかね……。
おそらくあの方を呼んだ時は、あの方を呼んだ彼女に思わず腰に腕を回して来ると。
数瞬レスポンスがなかった。沖田はその言葉の意味を呑み込むのに数秒を要した。刹那、バッと沖田はアンドロマデの背から飛び降りて、俺から距離を取った。顔を林檎のように真っ赤にして、あ
わあと自身の胸を触っている。
おい、そういうところだぞ。男の前でそういう仕草を見せるんじゃ
ない。
「あ、あれ！？沖田さんサラシ忘れてます！？」
「気昧てなかったのか……」
「仕方ないじゃないですかー！新コスチュームにテンション上が
ってたんですもん！すぐ出発する感じでした焦ってたんですよ。
やだー！」
「春、乗り」
「えっ」「俺は歩く。お前は有事に備えて体力を温存しとかないとな」
「マスター……」
「春、乗れ。「」
「俺の頭の中は春一色なんじゃないか……。
普通忘れないだろ。忘れていたにしろすぐ気づくものだろう。
なんで気づかなかったんだ。
周りの奴ら皆、ダメな女だ……女だっていう自覚が足りない。見
ろ、とコイツ、こっそと騙されていまそうだ。マスターとして見て
おいてやらないと……。今の保護者は俺だから仕方ない。
アンドロマケから降りる。そして沖田を促すと、何やら（ちよ
れいん）という擬音が聞こえた気がした。
沖田は顔を赤くしたままそうアンドロマケに乗って手綱を握る。
「あ、あれ！？沖田さんサラシ忘れてます！？」
「気昧てなかったのか……」
「仕方ないじゃないですかー！新コスチュームにテンション上が
ってたんですもん！すぐ出発する感じでした焦ってたんですよ。
やだー！」
「気づいてなかったのか……」
「俺の頭の中は春一色なんじゃないか……。
普通忘れないだろ。忘れていたにしろすぐ気づくものだろう。
なんで気づかなかったんだ。
周りの奴ら皆、ダメな女だ……女だっていう自覚が足りない。見
ろ、とコイツ、こっそと騙されていまそうだ。マスターとして見て
おいてやらないと……。今の保護者は俺だから仕方ない。
アンドロマケから降りる。そして沖田を促すと、何やら（ちよ

霊格の低い普通の馬なんだから、騎乗スキルが最低でも乗れるのは

やりとりではじまる。
闘やのせる昨ら、も立馬そいが二る日う沖か証っにだ。

証のし見っにだ。
押すのは兵士。それを交代しながらやるが、半数は周囲を警戒しながら護衛をする。

気候は穏やかだ。陽射しも暖かい。昨日から快晴が続いていた。しかし…雨が降れば、どうなるか。雨の中を行軍するのは極めて厳し。兵士や俺はともかく、群衆には体力の消耗が激しくなるだろう。天幕を無数に作り、そこでは雨が止むのを待っている。

地面を歩くのは難儀するだろう。

天幕を組んで雨宿りをしている時には敵に襲われるから。

どちらも何もないと、却って不吉な予感を抱く。

俺の平帯とは言えない人生経験上、よくよく思い知っていたから。
お前は不幸だ。
不運な人だ。
可哀想だ。
哀れだ。
以前。
俺は傲慢な人だと詰られた。
弾劾ではない。酒の席の、率直な感想だ。
場末の酒場だった。
生憎その時は酔っていたし、相手も酔っていたから、会話の内
容も互いに殆ど覚えていないと思う。
しかしそのやり取りだけは、なんとなく記憶にこびりついてい了。
まだ冬木から飛び出したばかりの、青二才だった頃だ。俺はぽり
りと、世界中から不幸を拭い去りたいという衝動を口にしていたら
し。
飲酒は二十歳未満で覚えた。世間の善良な方々は、そんな俺を窘
めるのだろうが。残念ながらその酒場の主人は無頓着な性質だった
ように。飲みたいならガキでも飲みゃあいい、ただし見つからな
でくれよ。おれが捕まるからと笑っていた。

要観察対象ジャックさん！

地響きがする。

坊やよお。お前さんは、傲慢だねえ⋯⋯。

覚えてている声は、それだけだ。言われた内容だけが頭にある。

不幸の限界量。幸福の限界量。そんなものは、人間誰しも同じもんだ。

戦争に巻き込まれて腕え無くして親亡くして、目一杯不幸を叫ぶガキと。平和な国のスクールで苛められて、親に虐待されて不幸に沈むガキも。

大富豪のガキに生まれて、何不自由なく甘やかされて育ったガキも。貧しい親あ持って自由になるものが少なくって、そんな朝昼晩の飯食えて親に愛されていや幸せって感じるのも。

どっちも同じ不幸で、幸福だ。

お前さんが何をヨゴレと感じてんのかなんざ知らねえよ。なんでそんなに焦ってんのかなん。けどよ、これからどんだけデケェことするってても忘れちゃなんねえぞ。

人間が感じる不幸も、幸せも、感じる感情の最大値はおんなじだ。人間の脳ってのは、度の過ぎた感情持ちゃあぶっ壊れる。残るのは狂人、そいつはなにをしても不幸にも幸福にもなりゃあしねえ。
「人助けしたいんだって？ おお、けっこうしゃねえ顔張りな。
おれにゃあ真似できねえし真似しようとも思わねえ。けどな、アイツの方が可哀想、アイツの方が恵まれてるって風にだけは区別すん
なよ。どんだけすげえ事したって、そんな見方してりゃあお前さん

…」

「一一人間じゃあ、くなっちゃまうぜ」

地響きがする。

「…」

所詮は酔っぱらいの戯れ言だと、忘れてしまう事は出来なかった。

それでも人の世界で、人を助けるとする時の一心得だから感じたから。

それが人の世界で、人を助けようとする時の心得だと感じたから。

両の主観で、彼の方が可哀想、彼の方が幸せそうと決めつけては
いけない。可哀想だと哀れんだ人は、実は幸せなのかもしれない。
満足しているのかもしれない。逆に恵まれている人も、満たされて
いないかもしれない。餓えているかもしれない。

そんなものだ、人間なんて。一だったら誰を、どうすれば救う
事になるのか。その穢れを拭い去った事になるのか。考えて、考え
て。
俺だって人間なんだ。全知全能の神様なんかじゃない。救いの手を差し伸べても、余計な事をするなと払いのけられるかもしれない。
何をしても感謝される奴なんていない。例えばだけ徳を積み、善行を重ねようが、知らないところで怨まれたりする。救った人は巡り巡って悪行に手を染める事だって有り得るのだ。
だから、力だっただろうが、それを克服出来るのはいる。夭れまず、過去を見ず、humans love とは、我ながらよく名付けたものだと思った。食べ物、衣服、住居。人が心にゆとりを持ち、礼節を知るための三大要素全部が不足しているから、彼らは最低限のモラルを忘れなかった。生きてる希望はある、絶対に生き残れる。その信頼が己に向かれるか、人間の善性を保ち続けられているのは分かっていた。俺が死ねば、或いは抑えようのない被害が拡大すれば、その薄い善性は破れ、その裏の悪性が顔を出すと分かっていても、その偽い善性が眩しい。
ま何事もなくわけではないと、願う事自体が愚劣極まる。
地響きがした。大地が揺れた。嗚呼～どうしたって、こうも上手くいかない。

魔神柱、顕現

「～」

地面を突き破り、舞い上がった砂塵の中屹立する醜悪な柱。無数の瞳が、俺を見ている。見事もない化け物に、群衆の意識にも空白が打ち込まれている。

膨大極まる魔力の塊。サーヴァント数騎分もの魔力の波動。それがあ、と誰かが喘いだ。魔力を感じる事も出来ない群衆すら、途方に暮れない天災を目撃してしまったのだと理解していた。多数の眼球に、力が籠る。刹那、我に返った俺は直ぐ様号令を、
「ぎのいいいい！？」
「ひいいいい！？」「ぎゃっ！」「逃げっぺー！」「春、一体は俺がやる、もう一体はお前がやれ！」「敵襲だねefaっ！カーター、撃ってっぺー！」「一発退いて躲せても一発戦う術すら知らない人々に躲せるものではない。瞬間的に激発する意識を燃やし、俺は叫んでいた。
カーターが指揮を執り咄嗟に兵士達に銃撃を行わせた。着弾する。しかし、まるで効果がない。放った銃群も悉く魔神の凝視に溶かされている。訳も分からないまま最善の一手段を打つ。
自身の背後の空間に剣群を投射しながらカーターに指示を飛ばす。自発的突きも有効となる範囲が、魔神柱の巨体では小さ過ぎる。剣群を次々と放つ。召喚された新撰組が果敢に魔神柱を攻め掛かり、膾きのい豚に追い払う。
「ひいいいい！？」「ぎゃっ！」「逃げっぺー！」「い、群衆を穿った。肉片一つ残さず蒸発する多
数の人々。
カッ、と視界が赤く染まる。俺を狙った視線の熱線は、咄嗟に飛び退いて躲せても一発戦う術すら知らない人々に躲せるものではない。瞬間的に激発する意識を燃やし、俺は叫んでいた。
自身の背後の空間に剣群を投射しながらカーターに指示を飛ばす。自発的突きも有効となる範囲が、魔神柱の巨体では小さ過ぎる。剣群を次々と放つ。召喚された新撰組が果敢に魔神柱を攻め掛かり、膾きのい豚に追い払う。
「ひいいいい！？」「ぎゃっ！」「逃げっぺー！」「春、一体は俺がやる、もう一体はお前がやれ！」「敵襲だねefaっ！カーター、撃ってっぺー！」「一発退いて躲せても一発戦う術すら知らない人々に躲せるものではない。瞬間的に激発する意識を燃やし、俺は叫んでいた。
カーターが指揮を執り咄嗟に兵士達に銃撃を行わせた。着弾する。しかし、まるで効果がない。放った銃群も悉く魔神の凝視に溶かされている。訳も分からないまま最善の一手段を打つ。
「ぎのいいいい！？」
「ひいいいい！？」「ぎゃっ！」「逃げっぺー！」「春、一体は俺がやる、もう一体はお前がやれ！」「敵襲だねefaっ！カーター、撃ってっぺー！」「一発退いて躲せても一発戦う術すら知らない人々に躲せるものではない。瞬間的に激発する意識を燃やし、俺は叫んでいた。
カーターが指揮を執り咄嗟に兵士達に銃撃を行わせた。着弾する。しかし、まるで効果がない。放った銃群も悉く魔神の凝視に溶かされている。訳も分からないまま最善の一手段を打つ。
「ぎのいいいい！？」
「ひいいいい！？」「ぎゃっ！」「逃げっぺー！」「春、一体は俺がやる、もう一体はお前がやれ！」「敵襲だねefaっ！カーター、撃ってっぺー！」「一発退いて躲せても一発戦う術すら知らない人々に躲せるものではない。瞬間的に激発する意識を燃やし、俺は叫んでいた。
カーターが指揮を執り咄嗟に兵士達に銃撃を行わせた。着弾する。しかし、まるで効果がない。放った銃群も悉く魔神の凝視に溶かされている。訳も分からないまま最善の一手段を打つ。
「ひいいいい！？」「ぎゃっ！」「逃げっぺー！」「春、一体は俺がやる、もう一体はお前がやれ！」「敵襲だねefaっ！カーター、撃ってっぺー！」「一発退いて躲せても一発戦う術すら知らない人々に躲せるものではない。瞬間的に激発する意識を燃やし、俺は叫んでいた。
カター
「鎮まれっ!!」

「鎮まれッ!!」

「So as I pray,」

「無一の剣製」

むしろ、「フィランソロピー」は全滅する。沖田だけが、魔神柱に対抗できる。しかし一撃でその総体を消し飛ばせるわけではない。魔神の名を冠するに足る力とさえ、沖田を屠らんと魔神柱は暴れ。もう一体は、俺を。ついでと言わんば

熱を口ずさんでいた。素早く投影できる代わりに格の足りない剣群では足止めも出来ない。かといって螺旋剣などは魔力を充填している間に俺も、「フィランソロピー」も大損害を被る。

小惑星をも粉砕する火力が炸裂した。

魔神柱はぎょろりと全ての眼球で俺を凝視して、爆散する。その肉片、霊格の欠片が死を確信させる。沖田や新撰組が、間もなく魔神柱を撃破そうだが。それを見届けもない内に俺は背後を向く。算を乱して四散していこうとする群衆に、俺は黒い銃剣の銃口を空に向けて発砲する。
そして一喝した。銃声にびくりとした彼らは、俺の怒号に静まり返る。恐怖の色が顔に貼り付いていた。

「整列しろ。…」

「―進路を変える！南西に走れェッ！」

怒鳴らなかった。しかし、恫喝されたように彼らはパラバラに、体を震えさせながら隊列を組む。

―三十人は、死んだか。

拳を握り締め、唇を噛む。怒りの中で卒倒しそうだった。兵士達に欠員はない、それはあの魔神柱は人の密集している地点を狙ったから。

前方を向く。目を凝らす。遙か彼方に、聳え立つ柱があった。数十六。何者かと戦闘中なのか、激しい魔力光が閃いている。

―二十六，何者かと戦闘中なのか，激しい魔力光が閃いている。

「フィランソロピー」の面々を走らせると、脚をもつれさせながら，我先に走り出す彼らを護衛する。本当は魔神柱と戦闘を行っているらしいサーヴァントを援護しに来たかかった。だがそれは出来ない。今俺が「フィランソロピー」から離れれば，彼らは心を乱して錯乱してしまいかねない。カーターが抑ええる事も出来ず，パラバラになって逃げていきそうなのだ。

それに，二十六体の魔神柱と戦闘を行うなど正気ではない。確実に。
に死ぬ。旗の宝具を使った沖田とともに向かっても、逃げる間もな
く全滅するだろう。
遠すぎて姿を確認出来なかったが、悪いかのサーヴァントには
魔神柱を引き付けていて貫うしかない。囲をして見捨てる。二十六
体の魔神柱との戦いを、まがなりにも戦闘として成立させるだけ
の力があるらしいのがひどく惜しいが……そんな事を言いている場
合ではなかった。

「無数の真紅の槍が見えたようにも思えたのが、ひどく気掛か
りだった。
俺の反応が鈍かったせいで。
悔やんでも悔やみきれない。なんたる無能か。
だが悔やむのも嘆くのも後だ。今は不自然さを確定させるのが先である。
今迄は意淫のない傀儡だったような。
まるで、知性のない機械だったような。
俺が知るものとは違。性能は変わりなかったが、どこかがおか
しかった。
あは魔神柱は、弱かった。
……弱い。ああ、弱かった……」

―「……弱い。ああ、弱かった……」
今日も

それは

もし

ならば

初撃の

奇襲で

俺は

死んで

いたか、

或是

重傷を

負って

いだ。

それどこか、

群衆は

全滅し、

兵士們も

半減し

た。

逃げる。

と

か

逃げる。

―

後

に

ジェクono

フィランソピーと

ばれ

る

男は、

過日の

冬木…

なけら

る

し

身近な

人々に

関す

るも

以外、

全て

忘れて

た事へ…

つい

思い至る

事は

たか

っ

た。
希望の欠片だジャックさん！
逃げる。逃走する。
『フランソフィー』の士気は一気にドン底まで落ちた。
誰一人死ぬ事なく生き延びられる。その幻想を破壊された者達は安住の地のない地獄にいる。あんな化け物がいる。本当はもう生き残る芽はないのではないか･･･そんな愚にもつかぬ思考に嵌まろうとしている。それは、それだけ是阻止しなければならない。
気を保ち規律を堅持しているが、そうでない人々にとってはなんの慰めになるだろうか。兵士はフィオナ騎士団との戦いで228名に。戦力のない老人、女、子供、男の群衆は141名に。総計で369名までその数を減らしている。
49名いた彼らがその数を一気に減らし、彼らは脆い硝子細工のような希望を砕かれた。助からないのであろうか、あの男がいても、人間ではないらしい少女がいても、自分達は助からないのであか･･･見ないようにしていた過酷過ぎる現実の重さに、彼らは堪えかねている。
だから走らせた。余計な事を考えさせないために。只管に走らせ、疲労困憊し思考する余裕がなくななるほどに走らせた。
夜営を行うには、まだ早い。夕方だ。しかし彼らはもう走れない、歩けない。何があっても、何があっても。

何があっても、何があっても、夜明けに行うにままだ早い。夕方がだ。しかし彼らはもう走れない、歩けない。何があっても、何があっても。

何があっても、何があっても、何があっても、何があっても。

軍服の下にサラシをつけ直してある。沖田は黒衣の上に浅葱色の羽織を纏った姿で寄って来る。

俺はアンドロマケをカーターに預け、一旦彼らから離れて行動する旨を伝えていた。難民達は疲れ果てて眠っている。もし俺の姿がなくなっている事に気づかれれば騒ぎになるだろうが、今なら離れても構わないだろう。夜明けには戻ると言い合めた。不安そうにするカーターの肩を叩いた。

俺は沖田に言った。

この前はペンテシレイアを見つかった。だがそのお陰で犠牲を出さずに撃退できた。今度は味方に出来るサーヴァントを見つければと信じよう。
ネスの女王を見つけたとき、軍勢を率いて敵サー＝ヴァントを見つける時？
その時は全滅だ。敵のサー＝ヴァントが軍を率いて近くにいれば、
どのみち助かられない。祈ってくれば、味方が見つかりますようになって
ない。

英雄は逆境を乗り越えてこそだろうが、生憎と俺はその器で
はなれない。逆風続きの状況で、更に苦境に追い込まれても踏ん張れな
い。

俺だけにあがる。その時は逃げるだけだ。逃げて、勝算を立て、
改めて勝つだけだ。そのなんと簡単な事か。今に比べたら、

満ちは神妙に頷く。そして、意を決したように問い掛けてきた。

「マスター。いざとなったら、私はマスターを何よりも優先します。
大切のはマスターなんですか。……まさか彼らが死ぬ時も残して死
ぬ気でなんていてませんよね？」

「……当たり前だ。仲良く心中する気はない。」

「本当ですね？」

「ああ。」

「……嘘でもいいです。その時は、マスターを気絶させてでも連れ
て逃げますから。」

「……嘘でいいです。その時は、マスターを気絶させてでも連れ
て逃げますから。」
本当のところ、俺は彼らが全滅を避けられなくなった時にどうするのか、自分で分からなかっ
た。頭では分かっている。逃げるの
が一番だ。しかし……。

沖田の決意表明に偽りはなかった。それが正しいと認めて
ている。だから、頼んだ。俺の中の青い部分が、変に逆らわないように。

歩き出す。いや、走る。のんびりと歩いていられる余裕はない。
長く走れるペースで探索に向かった。

歩き出す。いや、走る。のんびりと歩いていられる余裕はない。
長く走れるペースで探索に向かった。

妙だなと呟く。俺はアメリカ全土の地図を記憶している訳ではな
いが、それでも地形の移ろいに関しては多少知識がある。

砂漠があり、河があった、森がある。山脈、林など。どれも唐突に
変化する事はなく、ほぼ地形と気候は連動して形成されるものだ。

そうポンポンと荒野や森が繋がっている訳ではない。
思い返せば、ペンシレイアをはじめて見つけた時にそうだ。不
然な形で渓谷があった。
この特異点は時間の流れがおかしい……推測するに、各地の地形は今と昔の地形が入り交じっているのか？そうだとすると、よいよね定義が深刻だ。時間が狂っていて……俺をカルデアから引き離して、寿命で殺すのではなく、別の狙いもあったりするのだろうか？

「お春」
「はい、っていうか今まで何度か流れましたけど、そのお春ってふにゃりとした笑みで沖田が応じる。顔色はいいのが俺は呆れてしままった。

そんな事を言っている場合か？それよりお春は俺より耳が高いはずだ。何か聞こえないか？」

「なんて特別に何も……あ、待ってください、何か聞こえます」

「女のか……女の子？」と、男の人の声がします。

「なに、広野の先に何故かある不思議な森です」

「どうだ……春。ここはどこだ？」

「なにか……女の子？と、男の人の声がします。着点はおかしいが、大方合っている。だが……人の住める場所
か？

そうだそうだ。人の声がある。それは普通ありえない。ありえない

沖田の顔に理解の色が浮かんでいる。

頷いてみせ、先を急ぐ。やがて俺の耳にも声がはっきり聞こえて

きた。それを頼りに気配を殺して走っていく。森の中を数百メートル走っていくと、すぐに開けた空間になる。森というよりは林だろ。

「あの男は・・・」

「ベオウルフだ」

ああ、と頷く。フェルグスと同じで、よく知っていた。

「知ってるんですか？」

赤原猟犬のオリジナルを持つ英雄。

俺は二人を観察した。ベオウルフの肩に担がれているのは、小柄体に無数の傷を持つその男は竜殺しでもある。武勇に秀で、武器を使うより格闘戦を好み、実際素手の方が強い。

少女が、大声で喚いて暴れている。筋肉質で褐色の肌をして、金髪の大きなが少女を縛りあげて肩に担いでいた。

俺は二人を観察した。ベオウルフの肩に担がれているのは、小柄

少女然とした華奢な姿には似つかわしくない凛とした雰囲気がある。

そして・・・衣服は殆ど身に付けていない。相手はベオウルフだ、

無数の傷を持つその男は竜殺しでもある。武勇に秀で、武器を使うより格闘戦を好み、実際素手の方が強い。
戦闘を行ったのだとうしたけら、かなり激しくなり衣服が破れてしまったかもしれない。ベオウルフは婦女子に乱暴する下衆ではないかもしれない。

俺は目を凝らし、二人の口の動きを読んでやり取りを盗む。

「ベオウルフは、ケルト側か」

ベオウルフは少女を倒し、アルカトラズ刑務所に収容するつもりのような。…ベオウルフは敵なのかな。

俺は震えを腾ばし、二人の口の動きを読んでやり取りを盗む。

「春。俺が仕掛けろ。お前は三段突きで奇襲しろ。いいかーその一撃で、確実に仕留めるぞ」

は、我が秘剣の煌めき、ご覧に入れましょう！

彼女は、鏡の上に影を映すと、赤い宮廷の紅い衣を影に映す。影の影を消し去る。

春。俺が仕掛ける。お前は三段突きで奇襲しろ。いいかーその一撃で、確実に仕留めるぞ。

彼女は、鏡の上に影を映すと、赤い宮廷の紅い衣を影に映す。影の影を消し去る。
しかし怪訝そうな顔になっただ。自分の剣の魔力を感じたからだろう。
俺は構わず、最低限度の魔力を迅速に込めて。
弓の弦から、呪われた魔剣を撃ち放った。
卑怯卑劣は絶え言葉だねジャックさん！

赤原を征け、緋の猟犬——！

「オラァッ！」

魔力のチャージはマックスで四十秒掛かる。しかもその間、間を掛けば瞬く間に接近され、撃殺されるだろう。いや拳を振り間でもなく、足枷のようなものをある二振りの魔剣で叩き切れる。

林の境界、その境界からの狙撃。距離は七百。緋色の少女を意外にも優しく地面に横たわらせ捨てるとペオウルフは一直線にこちらに駆けてくる。筋骨隆々の、全身に傷跡を持つ凶相の竜殺しが迫る。

レアルに要したのは二十秒。本来の威力の半分。ペオウルフが動き出すのに十秒、距離二百五十まで来るのに十秒。速いが、想定以上ではない。彼の竜殺しの賢王だからこそ、俺のいる場所まで来るのでが懸かっても時間も計算に織り込めた。

力は然程重要視するほどでもない。重要なのはその能力、速度。

マッハ四以上で飛翔した赤光が、本来の担い手に食らいつく。
ペオウルフはオリジナルのフルディングを振るいここれを弾いた。

余波で地面が揺れ、ペオウルフの後方に衝撃が広がり、扇状に陥没した地面から砂塵を舞わせる。弾かれた魔剣は虚空で乱回転し、手の狙いを読み取るや即座に切っ先をペオウルフに向かって呑みついた。だがこれもまた弾き返される。

ペオウルフは獰猛に嗤い、苛立ち紛れに足を止め、全力の迎撃でこれを破壊せんと力を溜める。しかし牽制で放った矢に、完全な死角からの射撃であるにも関わらず反応して呑み落とした。

流石に錆び。アルトリアほどではなそうだが、春の奇襲に

cかじる闘志だ。俺は嘆息して弓を消し、双剣銃を投影する。狂猛な冷笑声には戦闘への愉快と苛立ちがある。それらを引くるめで愉快なのだろう。俺は自ら接近しながら銃撃を浴びせる。矢による速射よりも銃撃の回転率が高く、弾速の速い銃弾でペオウルフの接近を止める。無論の事これだけなら足止めも叶わない。フルディングがペオウルフ
銃を投げて、俺は攻撃を仕掛けることになった。しかし、俺の攻撃は敵の防御を超えられなかった。故に、その後の戦闘は、敵の攻撃にも対抗することが必要だった。
ペンチルフは回避せめるも、爆風の煽りを受けてや体が浮く。更にそこには耐えいのりとした魔剣を、ペオルフが瞬時に迎撃の刃を振りかざした瞬間、

「一これだから勘の鋭い英雄って奴は……」

「隷作の魔剣を自壊させる。俺は顔を覇めた。

完全に詰ませたはずの爆撃だ。布石も充分、俺の道具が投射によ

る隷作だと初見で見抜ける眼力がなければ、まず俺が道具を使い捨て

ての爆撃とする戦術に面くらし、成す術なく倒せてしまう。勿論

俺が遠距離に陣取り、先制攻撃を仕掛けられたなら、だが。

しかし常識を塗り替えてしまえる英霊は、そんな結末を容易に乗

り越えてしまう。ペンチルフは投射魔剣を迎撃しようとする寸前、

瞬時に理屈ではなく従い防禦を固めたのだ。フルディングを

楯に、棍棒じみた魔剣を迎撃の矛に。鈍らの魔剣は「隷れた幻想」

に直撃した瞬間破損し、代わりに莫大な衝撃波を放って威力の殆ど

を相殺。フルディングでの防禦のみで俺の爆撃を殆どダメージな

く凌ぎ去ったのである。出囲目だ。だが彼なら防ぐだろうと確信していた。そして目的は達した。完全に足を止めさせ、防禦で動きを鈍らせ、次の瞬間に叩

き込まれる必殺を凌げなくなったのだ。

勝利の為の布石はこの為に。今、その隙を狙い澄ましていた秘剣
が煌めく。
「無明－－」
ベオウルフは愛刀の間合いに捉え、忽然と姿を現す天才剣士。魔剣使い沖田総司。それでも－－ベオウルフは驚愕しながらも反応したのだ。
しかもそれは悪手である。事象飽和現象を纏うその剣先は防御不能、剣先に触れたモノを「破壊」するのではなく「消滅」させる人智の極限。
「－－三段突きッ！」
魔法の域にすら踏み込む対人魔剣は、宝具である彼の魔剣フルンディングの刀身をも割り貫いたように貫通した。そしてそのまま強固な天性の肉体を捉え、霊核である心臓を破壊してのける。
魔法の域にすら踏み込む対人魔剣は、宝具である彼の魔剣フルンディングの刀身をも割り貫いたように貫通した。そしてそのまま強固な天性の肉体を捉え、霊核である心臓を破壊してのける。
しかし、ただでは終わらない。霊核を破壊されて尚一矢報いんと損傷した魔剣を捨て、ベオウルフは拳を一閃する。沖田に残心の抜かれない、技巧も何もないその拳撃を見てから躲れ。一足跳びに真横に跳んだ沖田は死に体の英雄を斬らんと刃を翻し、"コフ・・・・ッ！"
口を抑え吐血する。俺は分かっていたよと吐き捨てて、隙を晒した沖田に拳を振りかぶるベオウルフに銃弾を叩き込む。背中、振り上げた腕。ベオウルフは苦笑して、力の抜けた拳を下ろした。

「チッ、容赦のねえ奴だな。生憎だったな、ベオウルフ。生き汚い手合いには慣れないでねー。
そうらしいな。心臓抜きゃやったあ油断すると思ったんだが。
俺は分かっていきたよと吐き捨てて、隙を晒した沖田に拳を振りかぶるベオウルフは消滅した。その間際、今度会ったら取り敢えず戦ってやると笑いながら。唐突な奇襲で敗られたにも関わらず、全く後腐れなく。
俺は誓約の様を見届け、沖田を助け起こす。また吐いたなお前、全く気の抜けない奴だ。そう愚痴ると沖田はバツが悪そうに目を逸らした。体でとだけ告げ、俺は目的のサーヴァントの元に寄る。

「今自由にしてやる」

「一体あらがどうぞございます。まさかあの恐るべき竜殺しを、奇襲手足を縛る鎖を黒銃剣で発砲して砕く。
華奢な少女だ。十代半ばの年齢で現界している沖田より、更に幼齢な気が見える。緋色の少女は手足の具合を確かめながら立ち上がった。よく見える。初見殺しのパターンで嵌め殺せてもらった分な手合いだらか的な。初見殺しのパターンで嵌め殺せてもらった分な手合いだらかなの。
驚くや感心するやら、目を真ん丸にさせらるや、驚くや感心するやら、目を真ん丸にさせらる様は、およそ英雄の称号とは無縁のものに見えた。
「俺はジャック、『人類愛』という弱小団の領袖をやっている。お前の名を聞く必要はない。俺は名乗り、手を差し伸べた。前の名を聞きとれなあいか？」

少女は凛とした眼差しで、その小さな手を俺の手に重ねる。握手を交わし、彼女は俺の瞳を真っ直ぐに見据えて応じてくれた。

「私は、シータ。コサラの王ラーマ様の妻……だった者です。」

「シータ？コサラ……ああ、ラーマが『ラーマ』の……」

「はい。しかし英霊としての私は『レーマ』でもあります。通常の聖杯戦争では私からラーマ様が『ラーマ』として現界する……そうい
日く、ラーマはその生前の行動によって、魔猿パリの妻に掛けられた呪いがあるらしい。死して英霊となっているもなお、彼らの身を縛り続ける呪いは、効果が薄れる事はない。在り方としては沖田の持つ病弱のスキルと同じで、聖杯ですらこの呪いを破棄させる事は出来ないだろう。聖杯で呪いを消すには、そもそもそんな呪いに掛からなかったという過去改竄を行うしかないが、その場合今のラーマの人格にも改変を来す事になる。

「サーヴァントとして召喚される場合に彼と彼女は「ラーマとシータは「ラーマ」という英霊枠を共有する」ラーマとシータは同時に召喚できない」という制約を課されるようだ。通常の聖杯戦争では巡り会える可能性は完全に零。人理焼却の異常事態下での例外は有意得るとすれば決して出逢えないのだという。

マスター、ちょっとそれは流石に無神経じゃないか。

いつのまにか呪いは互いが互いを愛する限り続くんだろう？　離別の呪いっては、つまるところ不変の愛の証明であるとも言える。ロマンチックでいいじゃないか。

……なるほど。だいいちのだにー。

……？
「シタ、取引をしよう。」
「取引…ですか？」
ああ、俺は多分、その呪いをなんとか出来るぞ。
「ああ。」

王女は目を見開く。咄嗟に反応を返せないほどの驚愕が彼女を襲っていた。

「等価交換、ギブ＆テイク、呼び方はなんでもいい。俺の仲間と呼ばれる『フィランソロピー』を守ってくれるなら、俺はその『離別の呪い』をなんとかしよう。流石に座にいる本体はどうしようもないが、この特異点内でなら会えるようにする事は出来る」
「そっけえ…本当ですか？」
「ああ～」
破戒すべき全ての符は無駄だ。あれは対魔術道具であり、結ばれた契約や魔力によって構築された生命の初期化、魔術で強化された物体を初期値に戻す類いのもの。俺にはどうしようもない。担い手本人なら呪いを契約の一種だと拡大解釈して解除出来るかもれないが、俺は魔術師としては難魚である。メディアのような大魔女でもなければ成し得ない。

破魔の紅薔薇も無駄だ。あれは宝具殺しの宝具。魔力で構成されたもの。構築中の術式の破壊は出来ない。更に言えば俺の投影した剣にも効果はない。投影宝具は『完成して其処に在る』モノ故に、破壊対象とはならないのだ。よって完結している呪いには、これもまた無力である。
「あら、ほんとうにですか……」
「そうだの。本気だから、ほんとうに。」
「それは……まあ、だれが考えたかはわかりませんが。」

では、これについての説明をしますね。
そうだな。それは『再会』ではなく『発見』だ。そんな感じで。

本人同士が遭遇したという自意識がなければ呪いは発揮されない。

お前に掛かっている呪いのトリガーは『両者が互いを認知すれば』発動する類なんだろう。片方が眠っていて顔を見られし触れる事もできる。強固な呪いほど、逆に抜け穴を見つける為の粗出ってくるものだ。

『片方に意識がなければ発動しない』のなら、発想を逆転させてしまえ。結論を言うと『片方が死んでいれば呪いは発動しない』わけだ。

味気が分からないと首を捻るシーターと沖田。俺は魔術に造詣が浅い二人なら仕方がないと苦笑する。

つまり、シーター。前の状態を偽る。道具なんて必要ないんだよ。

礼装で事足りる。俺が世界を巡ってる時に目にした魔術師の礼装…

・一義の魔術師ならこんなものがなくても似た真似は出来るだろうか、俺は三流だから。

道具に頼らなければ何も出来ない。ちなみにその礼装の欠点は、およそその呪いや魔術探知を素通り出来る代わりに、生の視覚は全く誤魔化せない事だ。俺が魔術の探知で追っかけだ。
てきていると油断していた奴を、普通に目視して普通に殴倒した

 chewing the tooth of the other party, I... 

 たとえアルトリアなどは、極めて高い対魔力を持ち、自身の意

 思などを仰ぐ魔術の効果を受けることが出来るのは、専らマスターから

 たとえマスターからの令呪や回復魔術なども弾かれてしまった

 てきだろう。マスター通りの令呪や回復魔術もあるが、彼女には

 例えアルトリアなどは、極めて高い対魔力を持ち、自身の意

 思などを仰ぐ魔術の効果を受けることが出来るのは、専らマスターから

 たとえマスターからの令呪や回復魔術なども弾かれてしまった

 てきだろう。マスター通りの令呪や回復魔術もあるが、彼女には

 例えアルトリアなどは、極めて高い対魔力を持ち、自身の意

 思などを仰ぐ魔術の効果を受けることが出来るのは、専らマスターから

 たとえマスターからの令呪や回復魔術なども弾かれてしまった

 てきだろう。マスター通りの令呪や回復魔術もあるが、彼女には

 例えアルトリアなどは、極めて高い対魔力を持ち、自身の意

 思などを仰ぐ魔術の効果を受けることが出来るのは、専らマスターから

 たとえマスターからの令呪や回復魔術なども弾かれてしまった

 てきだろう。マスター通りの令呪や回復魔術もあるが、彼女には
「で、どうする？俺の味方になってくれるなら、この短剣をお前には譲ろう。」
「なります。だからそれ、ください。」
即答だった。

恋に殉じ、愛を抱く王女は、最愛の人になり再会でくるなら、迷う必要はなさそうだっただ。

改めて握手を交わし、サーヴァントの契約を結ぶ。「ラーマ」としての彼女の性能を、マスターとしての権限で閲覧した。また彼女から出来る事を聞く。

ラーマの性能を持つが、戦術に疎い彼女は固定砲台として運用するのがいい。インドにありがちな大火力で難き払い、沖田で奇襲し、俺が合わせる。一気に戦術の幅と、対応できる状況が増した事で確信して。

俺は感じた。
英雄ラーマも味方になってくれるだろう。
流れが、確かに。風が追い風に変わりつつあるのを、感じる。
俺は、静かに笑みを浮かべた。
覚悟を決める時だジャックさん！

BOSS...その、どう見ても野生の女の子にしか見えない方が、

悟る時だジャッくんさん！

「ボス...その、どう見ても野生の女の子にしか見えない方が、

サーヴァントという奴なんですかー」

サーヴァントとは、あれですよね。過去の神話とか伝説上の偉人

信じざるを得ない現実があるとはいえ、口に出すと少し恥ずかし

なる様子のエドワルドが、念を押す形で問い掛けてくる。

なぜそんなのエドワルドが、念を押す形で問い掛けているか、

全く別の通り、彼女こそラーマヤナのメインヒロイン、シ

ターである。ラーマに恋し愛し続けた報われるべき存在。嘘偽りな

くサーヴァントだ。

コサラの王ラーマと座を共有する、大英雄の力を発現可能な存在。

本人もまたシヴァ神より神弓を与えられたジャナカ王の一族の末裔

であり、『追想せし無双弓』の弓を曲げて弦を張れる無双の怪力の持
主である。
サーヴァントについては一度しか説明していないうちだが、よく覚えていてくれた。俺は感動した。
「BOSS…おいたわしや…年端もいかない少女を連れ来てサーサーサー・ヴァントだなんて…そんなに疲れていたら…！」
「ぷちコロがすずヘルマン…」
こめかみに青筋が浮かぶ。ヘルマンは愛想笑いで誤魔化してくるが、俺は今の発言を絶対に忘れないからな…いずれだの…一兵卒ではいられなくしてる。
「ぶちコロがすずヘルマン…」
「聞いていたよりも士気は崩れていないようですね」
「兵士はな。問題は現実に戦う力のない者達だ。」
「そんな難民の連中はそういう訳にもいかない。妹二人を持つクリスト。その妹のミレイ、ニコル。この子供達は大人顔負けの落ち着きがあるが、馬車に乗っていたイーサンや負傷していたチャーリーは露骨に不安がっている。それに短い期間とはいえ苦楽を共にした親しい者を、先の魔神柱もどきの奇襲で亡くなった者達の意気消沈ぶりも酷かった。
お思い付く。シータは先前王家だった。教育水準は悪いが曲がりなりにも王家の出。その視点から必要な物の見落としがないか訊ねてみるのもいいだろう。

「俺達の状況は先程伝えた通りだ。そしてお前の目で彼らを直接見れて、これからどうしたらいいか、或いは何が必要になるのか思付いた事はあるか？」

「…浅見となりますか」

「構わない」

告げると、シータは考える素振りをしながら、地に座り込む『フィランソロピー』の難民達を見渡す。

マスターも気づいている事でしょうが、彼らは長旅に堪えられそうにありません。

彼らに必要なのは、まず何よりも安住の地でしようね。敵地であるこの大地を、大人数の戦う術のない人々を連れて横断するのは不可能です。

俺もそれは分かっている。分かっているが、どうしろというのか。

マスターは、彼らを見捨てたくない。だから本気で救おうと抗っている。それが伝えられているから兵士の皆さんもマスターを慕っているのです。細々とした問題は私には分かりませんが、でも…
番必要なものは分かります。今も言いましたが、安住の地です。そしてそれの築くのに必要なのは三つ。安心して暮らせる環境、生活基盤を整えられる豊かな土地、そして総合的な指揮も、そして器もありません。生まれてこそ王家でも実際に人々を動かすのに必要ないでしょう。でも、マスターなら出来る。そんな気がします。

だから彼らは貴方をBOSSと呼んでいるんです。ですよね？そうちょっと問われ、カーターをいえば、そう見えます。荷が勝ちすぎておおい……出会ってまだ一ヶ月も経ってないぞ。って、 Americana・Spiceluck的な心意気はどうした。俺も嘆息する。なんであれ、こうした視点の相談が出来るのは大嫌い。お陰様で無駄に足掻くのを諦めた。

無論、生き抜くのはやめない。でも力を振り絞るポイントを誤ってはいけない。闇に逃げ続けただけでは、俺や兵士達はいいに……
しかし今では違う。シーサイドの海はこれから運命の女神を待つ。outcomeはこの大地をどこかにいる。彼女は護りきれないか。

それでも、体力のない人々は必ず何処かで心が折れる。それが分かっていながら逃げ続けるのは、俺と沖田だけでは護りきれないかなら。護れないなら、無理でも断行するしかなかったのである。

「は？」}

「出がれし。」

「出るの兵フな見か。」

「キーをる。」

「地勃―に、えな戦算し絶力用今め。」

「山か。」

「脈ト在え、ソて度が―。」

「倉の理いもう。」

「指ター地東仲ピーをた。」

「そ後ろ。」

「とる。」

「無なの望たんぬん。」

「進のウ士地合。」

「俺ぬけ。」

「平必来何けい。」

「ロッキー山脈の東側と中央平野の間を南北に広がる台地状の大平原北米の穀倉地帯だ。そこに進路を向ける。その地を俺達の拠点とするだろう。カーター！」

「…グレートブレーンズー」

「？」

「フィランソロピーに安住の地を。」

「兵士を鍛え、仲間を募る。兵士を特殊部隊並に鍛え、彼らを使つて各地に点在しているだろうカウンター・サーヴァントを探す事も出来る。」

「その間にか、或いはその後にか、現地の勢力と接触する機会は必ず出てくるだろう。」
「それは一万人。その報を告げると悲愴な緊張が走る。しかし、俺は朗らかに指示を出した。」

止まれ。じっとしている。我々が戦場の女神、砲台のシータの力を見せてもらうじゃないか。

先頭に進み出したシータの後ろに、迅速に移動して隊列を組む兵士達の背後で距離を測る。

馬上から接近してくる敵戦士団を見据えた。横にいる沖田を一瞥で馬上から接近してくる敵戦士団を見据えた。横にいる沖田を一瞥して、しかし今決戦力を持つのは沖田だ。それまで体力を温存させておくだけで、彼女の存在もまた欠かせない。今決戦力を持つのは沖田だ。それまで体力を温存させておくだけで、彼女の存在もまた欠かせない。

猛然とケルト戦士団が迫り来る。難民達が恐慌を来しそうになる中、俺はシータに告げる。撃て、と。
「『羅フラムラマー・レマヤナ刹を穿つ不滅』」

「クラマ様…力を貸して―」

距離一千里。シタは囁き、紅蓮の神弓『追想せし無双弓』を構える。そしにそこの小さな手に現したのは同じく紅蓮の大矢。それこそは大英雄クラマの矢。彼が魔王クラナを倒す為に、生まれた時から所持していった不滅の刃だ。魔性の存在を相手に絶大な威力を発揮する対魔宝具だが、神弓にたえられたそれは対軍の火力を発揮する。

鈴が鳴ったかのようなく憐な声が、その宝具の真名を紡ぐ。

「『羅ブラフマトラ・レマヤナ刹を穿つ不滅』」

本来の担い手、クラマの名を冠した宝具が凄まじい熱量と共に投射される。神弓より放たれたそそれは、さながら大地を削る光輪の稲妻。聖焔を形取る、凄絶な浄化の裁き。ケルト戦士団に回避すら与えず、一瞬にして着弾したそれがいとも容易にケルト戦士団の過半を葬り去る。誰もが唖然とする。騒然とたたた。華奢なる乙女が齎したとは思えない大破。放たれたにも関わらず飛翔して手元に戻る不滅の刃。シーに俺は言う。

「魔力を回す。第二射、射て」
一戦士が、僅か数百の残党となりた。
俺は苦笑しながらも、兵士達に。「残飯を平らげるとしよう。撃て」片手を上げ、振り下ろす。放たれた銃弾の壁が、辛うじて『フランソアピー』に薄しとし、いった戦士達に浴びせられ―。

で、呆気なく戦闘は終了してしまった。
何処の城か、華を飾るには無骨な御座。しかしながらその華には、

味気なない玉座を華やかにせしめる格があった。

下着にしか見えない白い衣装を纏った女は、その端整な眉を落とし、その根を中心に寄せている。愁いに翳ったかんぱせは、清楚で無垢なも。

彼女は指先をナイフの切っ先で浅く斬り、ぷくぷくと浮き出た血の滴を無造作に腕を払って指先から散らす。するとその血は多数の戦士を象ったことになる。

彼女は指先をナイフの切っ先で浅く斬り、ぷくぷくと浮き出た血の滴を、無造作に腕を払って指先から散らす。するとその血は多数の戦士を象っていた。生前の女一ーノードトの女王メイヴが取り込んだ遺伝情報から精製された戦士である。

彼女は指先をナイフの切っ先で浅く斬り、ぷくぷくと浮き出た血の滴を、無造作に腕を払って指先から散らす。するとその血は多数の戦士を象っていた。生前の女一ーノードトの女王メイヴが取り込んだ遺伝情報から精製された戦士である。

彼女は指先をナイフの切っ先で浅く斬り、ぷくぷくと浮き出た血の滴を、無造作に腕を払って指先から散らす。するとその血は多数の戦士を象っていた。生前の女一ーノードトの女王メイヴが取り込んだ遺伝情報から精製された戦士である。
「どうしたー」

端的なか、飾り気のない音の羅列。戦闘以外へのあらゆる感情を削

「分聖私無にま黒」

「預か答えっのそた。―落端…」

「おさ私え退海身な、―ってい、うのるはの。」

「のいを魔獣の里、黒ずんだ魔槍を杖のように床につき、邪気すらない無情な殺気を滲ませている。」

「メイヴはそんな愛しの狂王に陶然として寄り掛かるも、鬱陶しげに押し退けられる。いけず、と不満げに唇を尖らせる様はメイヴが虐殺を繰り広げる。吐き気を催す邪悪である事を感じさせない無垢なものです。」

「―ほら私の兵隊って、私から生まれてるじゃないっ！」

「メイヴは気のない狂王の対応に顔を膨れさせるも、愛しの男の問に答えるべく身を寄せる。」

「―おい、メイヴー」

「わかったってば！ 結論ね、結論。えっとお、兵隊が死ぬと、私はその子達の死んだ場所が大体分かるのよ。数は正確にね。で、聖杯預かってるのも私だしこれで喚び出したサーヴァントの生死も分かるの。それでさ、聞いてよクーちゃん。マックールとベオウル」
「死んじゃったみたいよ。
びっくりと狂王は反応を示す。
生前の死後の生後…複雑な因果を経て、時代の異なる英雄クー…」

「そうだ。マックールは生理的に無理だから死んでもよかったんだ。
話を戻すけど、兵も結構な数が死んでいるわ。総軍で見れば誤差の範囲だけど、補充力が足りないと指摘が痛んじゃいそうで嫌になる。

言うって、狂王は王座から立ち上がった。
腰の重い王ではない。出陣するのに惜しむ者はなく元よりケ
トが誇る『最強』はこの凶獣なのだ。
何よりも冷酷に、確実に敵を殺す事が、狂王クー・フーリンの上を行く者なのでな。

しかしふと、彼は振り返ってメイヴに訊ねた。
「メイヴ。師匠はどうした」
「あの女?ごめん、逃がしちゃったわ」
「…そうだか」

生前のメイヴが、クー・フーリンを倒すために用意した札、クラン・カラン・ティン十人組の怪物。その枠に魔神柱なる魔術の走狗を無理矢理に押しつ込んでな、クー・フーリンの師であるスカサハを討つに至らなかった。

負けたのでない、逃げられたのだ。
メイヴはあの女が目障りでしょと云うのが。

次は一体に統合してから投入しようと反省した。
「師匠の事はいい。見掛け殺ししておこう。それよりだ、小僧と竜殺しを許す奴が何処にいる」
に、明確な未来は見えず、また遠い未来は見えないが、今回視る事が出来たのである。即ち、

『だいたじょーぶよ、クーちゃん。クーちゃんの行先に敵がいる』

踵を返して廻殺の獣が歩んでいく背に、淫蕩の女王は甘く語りかけた。

「あの宝具は使わないでよ？今このクーちゃんが使うはじめては、
私のこの目で絶対見たいから—」

「あらゆる無駄を削ぎ落とした彼には、本来発動させる事が叶わぬ
あらゆる無駄を削ぎ落とした彼には、本来発動させる事が叶わぬ
血の昂り。英雄光の解放は、二十八の怪物の枠に押し込められた魔
神をも超えるもの。生前の彼が変貌する真の姿。
しかし、それは『宝具』である。そして、今の彼は『狂戦士』の
座に在る。故に聖杯の力で無理矢理に引き出す事は可能であり。

狂王は、更に一段階上の力を隠し持っている。
殺した。
只管に殺した。
凶獣が駆ける。後には転がるのみ。
魔槍が翻る度に鮮血が舞う。
最も化身が一人理の守護者を屠らんと。
この大地の人々の希望となろうという存在を殺さんと。
骸の山を築き、鮮血の河を作り、疾走する。
会敵の時にはすぐそこに。ルーン魔術によって気配を眩まし、姿を一時的に透明にした狂王が馳せる。
その目が、「人類愛」を捉えた。
戦場の女神と称されるに足る砲兵の加入。それはもちろん手を挙げて
歓迎すべき戦力ではある。
しかし甘えてはならない。その大火力による敵軍の殲滅は楽で確実だが、それ故の欠点も存在するのだ。
シータの最大の長所は言うまでもなくその压倒的な大火力である
が、同時に最大の短所もまたその火力にあるのである。というのも、彼女の射撃とも言えない砲撃は「派手過ぎる上に加減が出来ない」との
のだ。
つまり目立つ。一撃を放てばその強大な魔力の発露と、その爆発的な爆撃音は遠くにまで響く。必然、遠くの敵まで引き寄せてしま
い、却って戦闘が長引く恐れがあった。
ジャックはそれを懸念している。破壊聖杯がある故に魔力は幾ら
なるかという無駄に戦禍を招いてもよい理由にはならない。無為に敵
サークに位置を知られる危険性を侵すのは愚かであり、言葉
は悪い多の荷物を抱えているのだから戦いは可能な限り避ける
べきだ。現時点で要らぬリスクを抱え込む訳にはいかない。

- 2023-
だがそれにも限度はある。シータほどではないがジャックの宝具爆撃も規模は大きい。どうしたって敵の数が多くなければなるほど、敵に対して爆撃を行わざるを得なくなる。三週間かけてアリゾナ州の北部に辿り着く頃には、既に三度一万人を超える軍勢と遭遇し、五千を下回る軍勢と五回遭遇していた。その悉くを犠牲なく破す事は出来たが、シータの宝具を五回使用しなければならなかった。ジャックは焦りを感じつつある。これは下手をしなくてもやしたことだ。ジャックは焦りを感じつつある。これも過ぎだ。宝具による軍勢の一掃を幾度も繰り返し、そのくせ行軍速度は蛞蝓みたいなもので「フィランソロピー」の面々。そのくせ行軍速度は蛞蝓みたい進む。「誰でも”フィランソロピー”の面々。そのくせ行軍速度は蛞蝓みたい」なものですので「目的地に到達する頃には、何度か敵サー・ヴァントに襲撃される事を想定せねばならないだろう。最悪、あの魔神柱の群に襲われる事すら考えねばならないかもしれない。」

「どうしました、BOSS」
「いや……」
言った。それから後列にいて背後を警戒させていたシーターを手招きする。「春、とりあえず降りろ－－」
「春、とおりあえず降りろ－－」

首を傾げながらも沖田は降りる。それで、周囲に緊張が走った。ジャックが沖田を降ろす。その行
為が意味するのは……戦闘の可能性があるという事だ。
しかしその緊張感はやや薄い。犠牲を払うことなく連戦して連勝を続けているのだ。多少走らされる事はあるかもしれない。そんな程度の緊迫感である。それが悪いとは言わない。並の敵が攻めきった程度なら、幾らでも対処は出来るからだ。

「来ました、マスター－－」
「来ました、マスター－－」
「ああ。シーター、何かおかしくないか？」

傍寄ってきた、ジャックに次ぐ視力を持つシーターに訊ねる。前方の砦を指し示すと、彼女も目を凝らして砦を視る。
「だlobe。だが遠すぎるな。もう少し近づいてみるしかなかが……」

不穏なものを感じたのに、大所帯で向かうのは迂闊ですね。

そうだと肯定する。何かおかしいのか、その詳細も分からない。

ジャックはシーターの言に頷き、彼らに告げた。
様子を見てくる。二個分隊、ついにこい。春もだ。シータは残り、周囲を警戒している。自己判断で家具の使用も許可する。

了解。ではBOSS、私が二個分隊を……、メールは残せ。エドワルドを補佐する。有事の際はお前が指揮を執れ。ヘルマン、お前は来い。

クターは残れ。エドワルドを補佐する。明日の気象は予想しておおきく、チックの警戒の度合いが予想していったよりも高いのだと認識したのだ。

砦の内部から打ち上げられた人間が虚空を舞い、そのまま地面に落ちていく様を目撃したのである。

砦に近づいていく。距離四千歩離るとジャックは目を見開いた。

砦の内部から打ち上げられた人間が虚空を舞い、そのまま地面に落ちていく様を目撃したのである。

生者がある、しかし戦闘に陥っている。それでもあんな——人間を遥か空に打ち上げられる膂力ともなると、それはサーヴァント級の敵に襲われている。直後である、砦の内側から門が崩され、算を乱して、多数の兵士や一般人が飛び出していく。ソラと見ただけで百名を超える。

「マスター！」

——総員戦闘用意！

奴らを近づけるな、巻き添えになる！

仲間だと思ったのだろう。必死にこちらに駆け寄ってくる連中には、双剣銃を投射する。
「なあ……」
「ああ、心をこらえてるんなら……」
「ああ、私たちは……」
「ああ、私たちは……」

「ああ、私たちは……」
兵士を突き飛ばして、ジャックは陰険な顔で思案する。鼻血を吹き出して困っている兵士はカーターの方へ逃げ去っていた。此処までの行軍で、あらかじめ食料はなくなっている。此処を避けて進もうにも、餓死は必至だろう。しかし、あの砦には案の定、敵サー・ヴァントがいるようだ。それ故に目撃証言によると、槍を持っている。イダメかもしれないし、ハサーカーかもしれない。ヘクトールのように槍が剣になったり、剣が槍になる武器を持つている可能性もあるから、あくまで槍の可能性が高いというだけの事だ。しかも中での様子を探ってこい。あくまで斥候だ、アサシンとして行なうにしろ彼女が戻ってくるまで待機していると、沖田は何事もなく戻ってきた。

沖田の姿が消える。霊体化したのではなく、気配を遮断したのだ。

「マスター、中には誰もいません」
「生存者は？」

「春、中の様子を探ってこい。あくまで斥候だ、アサシンとして行け」

沖田は何事もなく戻って来た。
した。先にいた彼らもここに来たばかりなのかしれません。

幾らか殺して、満足して帰っていったのか……?

先にいた彼らもここの来たばかりなのかしれません。

「ヘルマン、カーターとシタに伝令だ。」
「は！」

「ヘルマン、カーターとシタに伝令だ。」

どうする、と思考を回す。このまま二個分隊を率いて岩に入るのはどうしようか？
しかしこのいく作者は――

アンドロマケはやや不満そうにするも、ジャックはその首筋を軽く撫でて言って走らせる。

策を練っていると、不意に目の前を一枚の花弁が過る。

「？」
白い花びらだ。花びらなんて咲いていいかな？そう思いう視線を取りらえろ。

花びらは風に乗ってひらひらと舞って、俺の死角である左後方に流れていってーーー。

微かに隠密の解れた、黒フードを被つっついた、槍兵が迫りついてるのを見咎めた。
「ッッッ！」そうの槍を知っていられる。その顔を知っていられ。その腰に生えても、黒い尾を知っていられる。あらゆる動揺を押さえつつ瞬時に叫んだ。

「左後方、八時の角だッ！撃ってェッッ！なに？兵士達は素早く応じて銃口ごと振り返り、即座に姿の見えないモノに弾幕を浴びせろ。轟く銃声、しかしこんなものの意味もないとジャックは知っていられる。

案の定、あらゆる弾丸はその槍兵に着弾する寸前、自分から外れていきゃたかも弾丸そののものが、その槍兵を恐れるよう。ーーーーーーー。

《矢避けの加護》だ。

沖田が刀を抜く行けッッ！吼えていった。応じて沖田が馳せる。

黒い槍兵は舌打ちして姿を現した。ルンムン魔術に依る隠密、そしれて
そこで奇襲。それが成らなかった故に姿を隠す意義がなくなっ
たから。
が、
……気がつかれたか。今は夢魔か？
チッ、邪魔な輩が混じって
適性のある神話の頂点に君臨する半神半人。半神でありながら神々
の軍勢を相手に単騎で挑んで破った無双の超人である。
彼の者こそ銃兵、剣士、騎乗兵、魔術師、暗殺者、狂戦士に
の真名はクー・フーリン。
アイルランドの光の御子。
彼の者こそ銃兵、剣士、騎乗兵、魔術師、暗殺者、狂戦士に
適性のある神話の頂点に君臨する半神半人。半神でありながら神々
の軍勢を相手に単騎で挑んで破った無双の超人である。
本当にいるとは思いたくなかったのだ。
その力を持っている。だがその可能性は意図して考えないようにしてい
た。
本当に立っているとは思いたくなかったのだ。
だがその英雄は、明確な殺意を持っている戦局
に対応する戦場の万能者、戦場王とも讃えられる武勲の大戦士。授
けられたものではない、善悪をも越えた武練を誇る存在。そして、
全戦場を駆けた頼もしい相棒。
必に、あらゆる感傷は無用。友だろうが、恋人だろうが、無力な子供
だろうが。敵となれば、命令があれば、私情を殺して任務を果たす
男で一敵として立ちはだかったなら、敵としてしか相対できない
「総員後退！カーターに合流ろッ！」「B OSS! しかし…！」「邪魔だと言ってるんだ！奴を相手に数で挑んでも無意味だ、対多数戦闘の戦術ぞッ！命令だ、早く行けェッ！」「部下を去らせろ。シータが駆けこよっとするのを止めた。彼女の戦闘力で一撃で殺され天地方がひっく返っても絶対に勝てない。宝具も使えない。砦が近いのだからそっとここにある物資を台無しにすてる訳にはいなあ。そしたらシータを杀され訳にもいなかもしないのではあ。今後どんなに強大な力を持つサンダーを仲間にしても、彼女の火力は不可欠なのだ。殺されビジョングし浮かばない戦いに投入するのは愚行だ。やるかにかならない。ギャックと、沖田だけで。――〜春に長期戦は不可能だ。逆に彼は短期戦から長期戦にも対応できる。彼の魔槍を俺と沖田は躱なさい。春が勝るのは剣の技量と縮地による機動力だが、それ以外は全て劣っていいる。俺の剣弾は」
硬一のし田れ矢直振瞬れ合。避りる、な嗟を殺てけの気どと。
素げ振クかいに加け…澱に囚リーりのうがか…視に消ら。
故し鉄のらての銃使破え、背いターソか…か消た。
えし後く成縮のし不だ下リが刃フーす取地堪えの感しを聞処えり。
は閃。だ。なンう。いは聞殺しがば閃。
蠅さた。無確無冲正影あ勝同様。
俺は逸ろ行にて聞殺しがし。
眼の然しる。直聞旋。
向う田たた。さ魔逸遅斬し、撃れ、れのれ獣い、撃。
の事実を即座に織り込むで、選定の篭を投影して弓に番える。その様をクー・フーリンは横目に見ていた。彼の魔法師としての才覚は、戦士としてのそれを超えているーーたった一度見ただけで、ジャックのそれが投影魔術に似た何かであり、道具を投影して射撃を行うのを見抜いた。

瞬間、凶獣の中で、ジャックは取るに足らない「雑魚」ではなく、クー・フーリンの標的が変わる。所詮は人間、後回しにしても楽に殺せると判断していたのが、自身に通じる武器を持つのなら話は別だ。細く鋭い針のような殺気がジャックを貫く。来るか……！

選定の篭を口に咥え、黒弓を消して双剣鉄を投影し、転瞬ーー凶獣の一撃で破損した。槍の一撃極まれば、神さえも殺すそれ一一左後方からの大気に風穴を空ける刺突だった。

防げたのは奇跡ではない。敵としてクー・フーリンと共に戦ったが故に彼の槍について知悉していったからこそ防禦に成功したのだ。意外そうにしたのはコンマ数秒のみ……。翻

しかし、見えなかった。クー・フーリンの動きが肉眼でまるで捉えられなかった。彼が意外そうにしたのはコンマ数秒のみ……。翻

ならぬ二撃目の槍がジャックを殺すだろう。両腕は砕けた。どうして防
陶しらぬルーンを撒こうとして、それをジックが妨害する。改めて黒弓を投影する鉄心の弓の腕は再生されていた。聖剣の鞘には互いに合わない。力で関わるだけ激痛が広がる。冷酷な容赦で懸けた腕の中には添えられた、黄金の剣は揺れる。未だ鳴りを一つに鳴き立てる選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じコミンつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に咥えていた選定の剣を素早く、弦に番え、クー・フーリンに目掛けて射ち放ったのだ。ルーンで結界を作り、沖田やジャックを閉じ込みつつもした、まるで鈍る男ではない。鉄心の男は口に siè
た楯が、自らの槍を止めている———
薄紅の花弁に注ぎ込まれるは破損聖杯から供給される無尽蔵の魔力。投擲物に絶大な防御力を発揮するその力が、魔槍の侵攻を阻んでいるのだ。花弁を次々と破壊し、最後の一枚となるが、それを突破できない。

しかし、来るのは分かっていたと言うわんぱくな「クー・フーリンは虚空にルーンを刻んで足場とした。それを踏んで更に高く跳んでは全変発揮できない。故に空中は死の空間。まんまと仕切り直しのクー・フーリンは真に手に着地点を定め——瞬きの間もなく

跳んで追えば、縮地は使えない。自身の剣の技量は地上でなければ

広大なクー・フーリンの魔法が流れ——瞬く間に宝具を放ったのであ

空に跳んだ事で、自身でも狙えると見た瞬間に宝具を放ったのであ

座して待つのをよしとしなかったシーターが、クー・フーリンが虚

「くっ……！」「羅剣を穿つ不滅！」

でクー・フーリンは、魔槍を手に着地点を定め——瞬きの間もなく

十八のルーンを辺りに散りばめて結界を作った。
確実にクー・フー・リンへ直撃するはずだったが、それすら上級宝具の一撃をも凌ぐルーの結界に阻まれる。
シアタを一瞥したクー・フー・リンは、肩で息をしいうジャックを見た。
「…テメレ、オレを知っがるな？」確信の籠った問いだが。
「でなけりゃあここもうオレの出鼻を潰せwerがねえ。チッ、メンドクセな」問いでありながら、しかし彼は答えを必要としない。
既に確信してるのである。あの眼帯の男は、このクー・フー・リンを知ってるのだ。
さもなければ、全力で放ったクー・フー・リンの槍を一撃でけとはいえ防げるはずもなく、魔槍の全力投擲を凌げるだけの楯を咄嗟に取り出せるのはな。
煩い蠅に、しぶとい雑魚に、取るに足らない小娘。クー・フー・リンは心底下らない抵抗を眺める。
「…なら、こうするだけの事だ」癖を知らっている、宝具を、ルーを、真名を。だがそれがどうもう

。「」
したとばかりに、クー・フーリンは魔槍を構え、槍の穂先が地面を睨む、独特な構え。それにジャックは目の色を変えた。それは、それだけは、絶対に逃がさぬ訣にはいかない宝具、投げるのではなく、刺し貫く権能の手前一力。更に、まだ持っているのだろう。彼はルーンの力を解放して自身の体を硬直させていた。多少の手傷は許容しよう、代わりに確実に殺すとその冷酷な眼光が告げている。

沖田の対人魔剣ならその硬変を突破して致命傷を与えられるだろう。しかし放たれたその魔槍は因果を逆転させ、確実にジャックを殺す。微かな駕けも油断もなく、クー・フーリンは確実にジャックを殺そうとしている。死ぬ。あれも放たれれば絶対に死ぬ。ジャックは思考の歯車を視界が白熱するほど激しく廻し、対策をまるで思い付けなかった。苦し紛れに沖田に行かせるしかかない。なぜ相討ちに持っていくし、苦し紛れに沖田に行かせるしかない、せめて相討ちに持っていくしかないと覚悟を固め、青い、蒼い、矢が飛来した。青い、蒼い、矢が飛来した。青い、蒼い、矢が飛来した。

「ッッッッッッッッッッ！」「ッッッッッッッッッッ！」「ッッッッッッッッッッ！」「ッッッッッッッッッッ！」構えを解いたクー・フーリンが即座に後退する。矢避けの加護を持つ凶獣が、僅かの迷いもなしぶこの矢を回避する事を選んだのだ。狙われたのはクー・フーリンである。ジャックはその矢の軌跡をなぞって、その射手を見る。両名の戦闘に割って入ってきたのは、
黒い肌と、白い衣を纏った美丈夫だ。

「横槍を入らして失礼します」玲瓏な声音で、涼やかに告げる。

炎神の弓を持ったそこの青年は、淡く微笑んで来援を告げた。

「我が名はアーティジャッタ。貴方はマスターですね？もしお邪魔でなければ助太刀しましょう」カウント・サー・ヴァン。授かりの英雄アーティジャッタが、そこによった。

「誰ぞ知ろう。影の功労者は花の魔术師である。」
彼はずっと剣の如き男の旅路を守っていた。

アクトリアの心を救った第五次聖杯戦争、世界を巡り多くの「不幸」を拭って回っていた旅。どれもが見応えがあり、ついついには彼はカルデアに辿りついで、歴史から歴史を渡る者となった。

アクトリアに関する感謝がある、彼の人生の足跡が齎す綺麗な紋様が……

第異点の「全て」を同時に見ていた花の魔术師は、なにかとか間に合うように、まだケルトについにしたアクトリアを誘導して此処に導いたのだ。

「僕は君のファンだ。憧れのスターを、ちょっとぐらし贔屓しても罰当たらないはずだよ」

そう言っって、妖精郷の魔术師は薄く笑む。
余裕と自信に満ち溢れた青年だった。\n白磁の弓には見ただけで伝わる熱気が籠り、黒い肌と髪には高貴な品がある。繰り純白の衣は典雅な趣があって、発される霊格も相応る超抜級の英霊であるのが察せられた。
ギリシャ神話最大無比の英雄ヘラクレス。ケルト神話最強無比の超人クーア・フーリン。人類史最古にして最も偉大な英雄王ギルガメッシュ。彼らになんら見劣りせず、堂々と比肩する超越者の一角こそ、彼ら全英霊の内、間違いない十指に食い込む誇り高き戦士、その真名はアルジュナ。施しの英雄カルナに並び立つ、授かりの英雄。無尽の矢玉として形成される青い炎。しなやかな指で摘んだ矢を、炎神に授けられた弓に番えながら、授かりの英雄アルジュナは凶獣に対し警告を発した。
「暴威の者よ。数に恵んだくはないが四対一だ。退くというなら追いはしない。しかし退かないというなら、その蛮勇に殉じ獣のよ
うに斃れてもらう」
敵対者を侮っての物言いではない。彼は狂王と戦えば、多くの者を巻き添えにしてしまうだろうと感じていた。それは彼としても望むものではなかったのだ。

「は、」

尊大でありながら寛大さもある勧告に、しかし凶獣は失笑する。

「はい、」

寒々々と、寛大さもあろう勧告に、それらを数に入れていようかと感じていた。アールジュナの云う四対一で敗されるとは、凶獣は全く前を信じてならぬ。それでも微塵も思っていなかった。寧ろ勝利を確信している。

だがそれは、一対一ならば。一旦退き、幾らかの槍を持てば、それは確実に始末をつけられるというものである。冷徹に力を推し量っての正確な計算だ。

油断、騒り、そんなものはない。クー・フーリンは冷淡な眼差しでアルジュナを見据える。魔力の昂りに呼応して、その手にあらし、槍が蠢動していた。
アルジュナと云ったか。

ジャックは黒弓に、改めて選定の剣を探えながら、油断なくクー・フーリンを睨んでいる。「マーヴェラータ」を中心とする英雄たちの

それは、戦力として不足はないうもの。その威名を過信して寄り掛かる気はなかった。

しかししながら、頼りとなるのは確かだ。

ジャックとクー・フーリンの相性は最悪の

最大威力の螺旋剣の投影も通じない。『無限の剣裂』を弾丸に込め

て放ったとしても、直撃させるのは至難の業。妙に回避される

だろう。沖田もまた、この暴虐の獣からマスターを護り切れる自

信はなかった。

その真名に、アルジュナは微かに眉を動かす。しかしそれだけだ

たった。

了にありがとうございます。そして、この者は？

助太刀感謝する。俺はジャック、あそこの連中の領袖をしている。

「ご丁寧にありがとうございます。しかし、この者は？

イツがアサシン。あっちの娘がアーチャーだ。アルジュナ、助か

れたぞ。

すーヴァントでしよう。

こうして、この者は？

王は密かに血を熱する。

する為に攻め掛かっては来ないようだった。やるなら今だなと、狂
道理で手強そうな訳です。手加減は無用のものと心得ましょう。
それにーあのものから感じること力、今の私では些か心許ない。
マスター、不憚ながら私と契約して頂けますか？

『…いいのか？』

ええ、是非。助太刀に参じていながら無様に敗北する醜態は、私
としても恥したいものでもない。恥というものは弁えています。
一瞬足りとも、アルジュナはクー・フーリンから頭を離していな
い。微かな動き一つで戦闘を開始できる体勢を崩していなかった。

それは、彼の無駄な言葉に我を悟っていた。しかしそれでも彼
の余裕に驚きはしない。

 Jasckはクー・フーリンを見るも、狂王は動く素振りを見せな
かった。たかもジャックがアルジュナと契約するのを待っている
ようだ…。戦いに際しては慢心も、遊びもない敵が『見』に徹し
ている様は、ひどく不気味に映る。何を考えているか、とジャック
考えながらも、アルジュナにパスを通じさせた。

破壊聖杯の魔力供給率の、およそ半分が一気に持っていかれる。
アルジュナを加えてもまだ三騎は余裕を持って契約出来るかどうか
いたが、これでは後の一騎を加えるのが精々だ。ジャック自身に魔力を供給しなかったなら、もう一騎追加出来る。

沖田、シータ、アルジュナ。ジャックの戦闘力を維持するなら後の一騎が限度で、戦闘の力を放棄するなら更に一騎。アルジュナ級であろうなら、ラーマを計算に入れてものだが…皮算用だ。

「――随分と大食いなんだな」
「失礼しました。よもや貴方がこの私全力を支えられるマスターとは思いもしませんでした。ご安心を。出費に見合う力は示してみせましょう」

冷しげな表情で大半の魔力を持っていったアルジュナへ。鉄心の炎の性質を持つ魔力放出。その片鱗のみで、ジャックは思う。お男が嫌みを投げるもの、とうの本ほんは考えもせずに、寧ろ若干の高揚に声音を弾ませて。その身へ膨大な魔力を纏った。前を仲間に出来たなら。どれほどの出費であろうとも安人もだと勝てる。問題は逃げられてしまわないか。不利な戦闘からの離脱もまた、この大英雄は他の追隨を許さない巧みさがある。

純粋な戦闘能力、ルーン魔術による応用力、本人のクレバーな戦闘論理、そして一回の戦闘に拘泥せずに撤退も行える精神性…敵に回して改めて思い知る。戦場王と渾名される戦戓者の厄介さを。
「悪いな」

「悪いだ」

聖杯により変質した、狂王クー・フーリンは、彼らにほんの僅かに謝罪した。いや違う。ジャック達に向けたものではない。それは彼が共に並び立つ女王へ向けたものだった。ジャックは変質した、狂王クー・フーリンは、彼らにほんの僅かに謝罪した。

いや違う。ジャック達に向けたものではない。それは彼が共に並んで向けていたものではない。ジャックは漸く気づく。アルジュナもまた。分からないのはその手の感覚がない沖田のみ。ジャックは戦慄して総毛立ちていた。異常事態を察知してアルジュナは瞬時に蒼矢を放った。

「こいつは勘だが、今こそコイツらを逃し後々邪魔になりそうだ。後腐れなく処分で殺しておく」

だが、アルジュナの矢が──ルーンの防壁に阻まれた。

「この矢は忌だが、今ここでコイツらを逃した後々邪魔になりそうだ。後腐れなく処分で殺しておく」

ジャックやアルジュナにも悟らせない神業めいた魔術行使。それもそのはず、彼は自身の体にこそルーンを張り付け、彼の体が発する密度の魔力を隠蔽していたのだ。

ジャックとアルジュナが契約を交わすのを黙って見ていたのは、彼が自身の切り札を使用する間を稼いでいただけなのである。アルジュナは神弓に更なる魔力を注ぎ込んで防壁を破壊しようとするも、
小さく舌を打ちして後退した。もはや間に合わないと悟ったのだ。
春、下がれ！ジャックの鋭い指示に、沖田は応じて一気に飛び退いた。ジャック自身も下がっている。

凶獣は呟いた。

今のオレが使う最初のそれは、自分の目で見たいと言ってמיטבが。
たが…それは叶わねえ。出し惜しんで、後で悔やむ事ほど間抜けた。

ボ、ヨーと。クー・フーリンの全身の関節が伸びる。被っていったフードが消え、黒ずんだ髪がゆらりと逆立っていく。

ズッ、ギーーと。全身の筋肉が膨張していく。激怒の肉体の増設に、体そのものが堪えきれないように裂け、そこから鮮血が溢れる。

発火した。凄まじく高温の血が、外気を触れて燃えたのだ。

パッッーと。額が割れる。割れた額からも血が溢れ、しぶしぶ光の環を象り王冠となった。眩く照り輝く、実体のない光の冠。

その下で不気味に光輝く真紅の双眸が、左右で十四の瞳を宿す。
鉄心の男が、喘ぐ。
それこそはアイルランドの光の御子クリーフィーリンの最終宝具。

マスターという存在である故に、ジャックはその宝具のランクを観測できてしまう。

評価規格外。対自己宝具。

その身に流れる光の神ルーの血を覚醒させる、魔性に近い神性を解放させるもの。筋力と敏捷、耐久と魔力の値が評価規格外となっていった。神性もまた、半神の枠を超え神霊の域へと踏み込んでしまっていた。

第三特異点の、魔神霊となったアルケイディスなら見劣る、圧倒的な同一死の化身。

第三特異点の、魔神霊となったアルケイディスなら見劣る、圧倒的な同一死の化身。

第三特異点の、魔神霊となったアルケイディスなら見劣る、圧倒的な同一死の化身。

第三特異点の、魔神霊となったアルケイディスなら見劣る、圧倒的な同一死の化身。

第三特異点の、魔神霊となったアルケイディスなら見劣る、圧倒的な同一死の化身。
「あガッ、ゴホッ！カ、ハッ……」
沖田が唐突に膝をついて、血反吐を嘔てながく吐き出し倒れ伏す。

「春！？」
クー・フー・リュに一瞥されただけで、沖田は戦闘不能となった。
光の御子の裡に流れる邪神パロールの血によって、その視線に晒された者は高い対魔力か魔眼への耐性、外界への護りが必要ならば体を凝固させられてしまう。沖田の対魔力では、狂王の一瞥にすら堪えられず、その視線のショックのみで体の自由を失い、呪いじみた病の発作を起こしてしまったのだ。

ジャックは外界への守りである赤原礼装を、バンダナとして身に付けていた。無防備に倒れ伏した沖田の近くと、ジャックの鼻先を捲める眼前へ。

凄絶な火花が散る。沖田を突き刺す槍、ジャックを貫く槍。その凄絶な火花が散る。
二撃を、二撃とも阻んだのはアルジュナの蒼矢だった。神速で奔った魔槍へ正確に矢を射込む技量はまさに神域の武。それでも、クー・フーリンの意は決した。視ただけで倒れた剣士ならば膨大な魔力を燃焼させつつアルジュナが疾走した。炎の魔力収束・膨大な魔力を燃焼させつつアルジュナが疾走した。炎の魔力収束し、それをジェット噴射させて高速で駆けながら蒼矢を次々と四方八方に出射する。彼の射手としての千里眼は、彼の眼を以てすら霞んで見える狂王に直撃する軌道をなぞるも、その悉くが回避されるか魔槍に撃き消された。傑の動きを追った。そちらはまだなんとか見える。放たれる矢の軌道とタイミング、それと己の知るクー・フーリンの動きを照らし合う。"
われ、摺り合わせていく。その間にアルジューナは冷静さを保てる余裕を持ちながら、しかし刻一刻と増えていく傷に秀麗な美貌を顰めている。

生前ですら久しぶり経験しなかった苦戦に、アルジューナは呻きながらも応戦する。奮戦する彼に、しかし向けられたのは無機質な侮蔑だった。

「中々……ッ！」「授かりの英雄だったか。授けられてばかりで、何もかもを他者に与えられ、他者の敷いた道を、他者に望まれたまま進んだガキ。それがテメェの銘だ——」

だが、それは。ただ、それは。安撫発だった。安撫発だった。挑発だった。

授かりの英雄だったか。授けられてばかりで、何も己で決められなかった小僧の分際だろうか。そんな程度のガキがオレの前に立つな。大人しく死ね、テメェの手で勝ち取ったものなど何もねえだろう。アールジューナの矜持を深く抉る言霊であった。
激昂する。激怒する。しかしその弓術に突きは生まれない。その程度で我を見失う『授かりの英雄』ではなかった。
逆に挑発を返しながらもアルジュナの弓術は苛烈さを増す。神弓『炎神の咆哮』が担い手に更なる炎の力を齎し、次第に彼の意識は狂いに集束されていき、それをお留めの声が奔る。
「アルジュナ、欲張るな！そのまま捉えておけ！」「アラロジュナ、欲張るな！そのまま捉えておけ！」契約を結んだばかりのマスターである。神代でも頂上に位置する戦いについてこれられない身で何を思う。ジャックは眼を凝らし続けている。黒弓に選定の剣を番え、明後日の方角に狙いをつけた。クー・フィーリンはそれを視界に捉えている。阿呆が、デメエなんざに捉えられるとでも思ってるのか、と。
四節、打起し。
五節、引分け。
六節、会。
七節、離れ。
八節、残心。

カルデアのクー・フーリンの動きと、アルジュナの矢と動き、視線と射戦を擦り合わせ、あらゆる経験を総動員して造り上げるのはイメージだ。矢は放つ時には既に命中しているもの。彼の弓術の根源にある心得をなぞり、選定の剣を射ち放ち、剣弾が弦より離れた瞬間、残心を取ったジャックの眼は捉えていた。クー・フーリンは瞳を蔽った。まさか中軌道に剣矢が置かれた瞬間にそれは自壊して炸裂していた。クリークはまともに食らう。しかし凶獣は健在。授かりの英雄はその絶技に感嘆しながらも、その機を逃さなかった。

大規模な爆撃を受けてよろめいたクー・フーリンの胴を蹴り上げた。遥か上空まで蹴り上げられたクー・フーリンを狙うはイント最強の英雄の奥義。

「−チィッ！−」
「お見事！−」
膝をつき、一瞬にして魔力を充填した彼は、地上の太陽の如き光を発した。クー・フーリンはルーンを展開する間がなかったのか、それをも手持ちのルーンが尽きていたのか、猛り昂る灼熱の魔力の奔流。それこそは対国宝具、授かりの英雄アルジュナが———あらゆる神々の寵愛を受けた、英雄なる道を定められた青年が———唯一何者からも授けられたのでない、無二の奥義。己が研鑽によって掟取った矜持の究極、神弓『炎神の咆哮』より解き放たれる炎熱の蒼矢が、「マーサー」ラーラー最強の一角の弓術を後押しする。自らの力で成し遂げたものなど何もないと、クサトリヤ足のアルジュナを侮辱した凶獣を滅さんと全身全霊を賭した。

「『梵天よ、汝を讃えん』———！」「梵天よ、汝を讃えん」「梵天よ、汝を讃えん」、自らの力の真名は。

上空目掛けて放たれたそれは、過大なクー・フーリンの背後、曇天を貫き日輪が姿を現す。
射殺したこそれを受け滅びぬもどにあり得ないと誰しもが確信するだろう。

事実手応えあった。アジュナは莞爾と笑みを浮かべるも—しかつし、その美貌が張った。

アジュナの奥義を受けて、遥か彼方に墜落した魔性の神性は、生きていった。手傷は負って全身に大火傷を負っていられたが、しかしこの彼方は太陽と、光を司る神の子である。その炎熱への耐性は元々高く、神性を解放した今この姿では、殆どどの熱の損傷を遮断しまたいるのだろう。

それでもなお大火傷を負ってはいるが、純粋な物理面での重傷もあるが。

しかつ彼は太陽と、光を司る神の子である。その火焰への耐性は元々高く、神性を解放した今この姿では、殆どどの熱の損傷を遮断しまたいるのだろう。
「さあ、これが私の頓挫——」

ギャククは絶望しそうになった。しかしねかし絶望はしない。
諦めそうになった、手の魔力を吸って凶悪さの増した魔槍を、光の御子は今に擲たんとしでいる。反撃のそれ。
重傷を負っていえるとも思えないう、全く鈍ってない体のキレがある。

「――来るなっラッ!
ギャククは吼える。しかしかしき狂王の姿が忽らと、消えた。
見失った？慌てて周囲を見渡すも、どこにもその気配がない。
絶望的な死の予感がないか。
アルジュナら・フーリンを見失っていんだ。
『フィラソロピー』が狙われたのか？マズイ、とそっちに視線を向けるも、血風はまると吹いていた。
唐突に、クー・フーリンは消えんだ。
思わず呆然とする。何があっただのか皆目見当もつかないない。そんなな彼らの耳に、爽やかで穏やかな声が届いた。
「――なんてか間合ったね」
いつの間にやれ、側にいったのは白いフードを被り、足元に花を咲かせていいる青年だっただ。
ちょっとした寝なながら歩いていたら、そこは見知らぬ荒野の国。これは夢の続きか、それとも単なる幻か。まあ、どちらでもいいだだけど。

呑気においなからも、しかし冷や汗を顔に浮かべている。

彼の青年は、マーリン。冠位魔術師の資格保有者。幻術にてクー・フーリンを欺き、明後日の方角にて幻のアルジュナとジャックを戦わせている者。半透明の体で、彼は微笑み、そしてあっさりと消えていく。

半突に渡された、自分の本当の名に唐突に投げ渡された、自分の本当の名に。ジェックは。否、士郎は呆然自失する。

そしてきょうようなら。流石に疲れたらね。あんまり長居出来ないんだ。だからまた会おう。カルデアのマスター、エミヤシロウ。

「エミヤ、シロウ……」

そしてその戦いは、狐に化かされたようにしてあっさりと終わったのだった。
グレートンズだよ士郎くん！

エミヤシロヴ、その名が己ののものだと察しはつきたい。

しかししさここに生の感覚は伴わない。
欠け落ちた記憶が、己の名に対する実感を削ぎ落としていくのだ。

ああ、それが自分の名前か、と。

遠い日の出来事に関する懐話を掘り返す感覚に似たた。
『捻コルジー・ファラれ狂う光神の血』を発動したクー・フーリンが、唐突に姿を消した。

そそれはブリテンの宮廷魔術師マリンによる仕業である。

は、あとさらにそれらの方事が重大である。

どこに、どうやっても、認識すべき「再び遭遇したら命はない」という事で。「迅速に移動しなければならないう」という事である。

しかしそうも言ってもはいられない。

俺は合図を出し『フィラソロピー』の面々を砦に誘導した。

早々に砦内の物資を回収せしめる。

新たに取り込んだ難民は総数を二百十一名。
今まで連れてきていった群衆と合わせると三百五十二名となる。

百二十名の兵士数よりも多くしてしまった。
彼らもまたこちらの指揮系統に属さず、目的地へ同行させる事になる。彼らには悪いが、揉め事を起こす事があれば武力で制圧すると告げてあった。最低限の秩序の背景には何時だって武力がある。悪しき歴史ではあるが、その武力が平和を敷くのなら是非もない。そして老来の面々に馴染ませる為に、難民達の行軍の列をバラけさせる。派閥じみたものが出来上がらないようにする措置を施しておいた。今はそれしか出来る事はなかった。また、彼らも疲れている。一日はこの砦で休まねばならないだろう。

「マスター」

忙しく指示を飛ばし、漸く一段落ちついた頃。アルジューナが物静かに声を掛けた。

俺は努めて平穏に応じる。

「ああ…すまない、こちらも立て込んでいな。労いの言葉一つで放っておいてすまなかった。それは構いません。何事にも優先順位といえるものはあるでしょう。マスターは彼らの指導者で、あるなら相応の重責がある。そこに文句をつける気はありません。しかし…お詫ねしますが、マスターの名はジャックではなかったのですか？」

名前の交換は最低限の礼節だ。そこを疎かにし、偽名を告げても、名前はジャックではなくだったのですか？
ふうに見られたくはない。特にアルジュナは最強戦力だ。彼からの不
信を買うわけにはいかなかった。故に正直に告げる事にする。俺は辺りの目が向いていない事を確
かめる。シータはクリスト、ミレイ、ニコルの三兄妹に囲まれてい
た。クリストは年が近いように見えるシータにデレデレとしている
……微笑ましい光景だ。沖田は沖田で、アンドロマケの世話をして
くれていた。

砦内の兵士達は物資の運搬、集積、見張り、休憩を代わる代わる
行っている。群衆も思い思いに休んでいた。忙しくなく、喧騒に包ま
れていて。こちらを気にしている者はいない。俺というリーダー、
アルジュナという存在感のある英雄にも目がいかないほど忙しいの
だ。休むのままだ。必須である。他のものに目をやる暇はない。

……これから伝える事は他言無用だぞ——
俺のジャックという名は、あのミレイという少女がつけてく
れたものだ。俺には自分の名に関する記憶がないんだよ。
記憶がない？——
ああ。俺は国有結界が使えるんだが、ある事情でそれが使用でき
なくなる事で炸裂させているんだ。代わりにその国有結界を弾丸に込めて、敵にぶつ
ける事で炸裂させているんだ。今のところ二発撃ち、敵サーヴァン
ト一騎と魔神柱一体を撃破しているが……その代わりに記憶が少々
欠けてな。そこに自分の名前も入っていたんだよ。
それは……

アルジュナは瞳を善目した。微かに目を流し、言葉を探す。人
間には有り得ないその戦果を讃えるべきか否か。それともご自

愛くださいと告げるべきか。サーヴァントとしての物言いを模索するも、彼は自重した。アルジュナは思う。彼は戦士だ。戦士の行いにケチをつける訳にはいかない。それは侮辱である。覚悟して断行した行いは、その者個人の責任である。口出しすべきではないというのが、誇り高きシャトリヤであるアルジュナの感情だった。故に頭を下げる。…するほど。よもや偽名を乗られたのかと邪推した事。謝罪したいと思います。

…なるほど。よもや偽名を乗られたのかと邪推した事。謝罪したいと思います。

…いない。俺自身、エミヤシロウという字をどう書くのかかも分からぬぐらい他人事に感じているし、名前がなくとも不便はない。ジャッキーという通名もある。

…ない。俺は貴方の決断と行動に何も言いません。その武勲を讃える事も。しかしマスター、これだけは伝えておきます。この私が加わった以上、マスターがその身を削ってまで力を振るう必要はありません。どうかその負担は私に負わせてください。

自負があり、余裕があり、完璧である。故にやや張り詰めている揺らぎのない自負と余裕。ずば抜けた安定感。サーヴァントとしで完璧な在り方。俺はそれに、若干の違和感を見咎めるも、今それには感謝しかない。

自負があり、余裕があり、完璧である。故にやや張り詰めている揺らぎのない自負と余裕。ずば抜けた安定感。サーヴァントとしで完璧な在り方。俺はそれに、若干の違和感を見咎めるも、今それには感謝しかない。
ジュナー

構いません。それがサーヴァントというものですね。一応訳してお

春……ああ、真名も伝えているか。沖田総司は俺の状態は

適切な理由かどうかは、俺にも判別はつかない。私情が入ってい

単なる格好つけかもしれないが、確かに自信もなかった。

自分自身の名前には意味を見いだせないから、必ずしも重大な欠

「なぜアルジュナは言った。」

「名というのは、誇りだからです。」

「名だろうと思いますが、誇りだからです。」

戦士らしい思想だった。
名は体を表すといいます。穿ったものの見方をするなら、己の体を構成する名は、レゾンデールになるという事でもある。自らの名に誇りを持たない戦士はいない。それは自已顕示欲によるものであります。まるで実感が持てないというなら、尚更日常的に名を呼ばせるべきでしょ。自らの名は、己の存在に誇りをたたえ戦士はいない。それは己の表現力によるもので、己の名前に誇りをもっていせ。己の名前に誇りを持たない戦士はいない。

納得は出来ず、俺の足跡に誇り……というのはニュアンスがない。異なるかもしれないが、自信と自負を懐いていっている。それを見失わなないが、カルデアと合流するまで『ギャックス』という名をつけた気はしない。俺はそこにある気持ちが、『エミヤシロウ』という本来の名を捨てていい理由もなかった。

先程の射は実に見事でした。先程の射は実に見事でした。ありがとう。助けに来てくれたのがお前でよかったと思う。これからも宜しく頼むぞ。

敵が来ましたら撃退しておきます。敵が来たからと進退しておきますので、どう張りをしておきます。敵が来たからと進退しておきますので、どう張りをしておきます。
ぞこゆるりと、と。そんなふうに鰐爽としていた。

……ああ、やっぱりお前も癖がある。

苦笑する。珍しくもない、屈折した人間。そうした人間にばかり何せ完璧過ぎるのだ。第一印象から貫する、サーヴァントとしで無数の姿勢。英雄然とした戦士で、好青年で、どこか尊大さのある気品。こうした輩ほど、物騒な地雷がある。アルジュナほどの英雄なら、その地雷は呪に関わるだろう。

「どうしてこう……けせ者ばかりが身近に集まるんだか……」

嘆息するも、そうした地雷は嫌いではない。変に都合がよくて、無欲で、正義感が強い。そのくせ自分の信念を固く持つ頑固者の方が嫌いだ。やはりワガママでひねくれ過ぎて真っ直ぐに見える奴の方が、味があって付き合いが楽しい。それに、そうした奴ほど、一度心を開いてくれたから以上なく頼もしく、信頼に値するようになる。アルジュナもその手のタイプだろう。俄然、仲良くなったりとも思う。

いや仲良くなられねばならない。円滑なコミュニケーションは、スターやサーヴァントには不可欠である。鉄則だ。

――マハーバーラタで、呪いに雁字絶倒までされた宿敵カルナを射たアルジュナは、戦後に有り余る財と権力を手に入れるも、
その全てを投げ捨てて兄弟達と隠棲した。彼が何を思ったのか……。

―故に。不死身とされるカルナが、その力の源泉である鎧を剥ぎ取られ、呪いに縛られ、戦車を操る御者を計略で操り、無防備な所に矢を射ち込んだ結果は悔しいだろう。

何せそこまでしてもらわねば、アルジュナはカルナに勝てないと周囲に思われていたという事である。屈辱的だったはずだ。尋常な決着をと願っている筈だ。

俺を、俺達を助けてくれたのは、施しの英雄カルナではなくアルジュナだ。人間は現金な生き物で、実際に命を救ってくれた相手の方が大事に思える。

―まあ。現代の富裕層の子供たちにありがちな、鬱屈としたものを懐にし、いてても不思議ではなかった。

「ま……なんでもいいさ」そう呟く。

「マスター……」

「ん？ああ、お春か。どうした？」

「マスター」
私…頼らないですよね。あ、あは…足手まといで、ほんと…すみません、マスター…。

…そう思うか？

…え

…私…見つけたくないでしょね。あ、あは…足手まといで、ほんと…すみません、マスター…。

…そう思うか？

…え

…お前…見つけたくないでしょね。あ、あは…足手まといで、ほんと…すみません、マスター…。

…そう思うか？

…え

…も。なにだか気になるな。まだ生きていろだろうか？俺も、お前…さっきの事なら気にするな。まだ生きていろだろうか？俺も、お前…さっきの事なら気にするな。まだ生きていろだろうか？俺も、お前…さっきの事なら気にするな。まだ生きていろだろうか？俺も、お前…さっきの事なら気にするな。まだ生きていろだろうか？
「……なあ」
「ええよ」

のこり。

し、これから先も思わない。

俺の最初の呪令を忘れたくなったか？『何がであろうと戦抜け』だ。呪令の力は切れていてもその呪令は今も生きている。…

って、なんで泣くんたよ」

ぐすっ、だって…だって…だっって…！」

沖田は感激したのに涙ぐんでいた。涙腺を緩いオイ。大丈夫かお前…。

頬を赤くして、子供みたいに目を擦っている。仕方ないから慰めるよに頭に手を置いて、俺は忘れない内に沖田に言った。

「春、これからは俺の事は名前で呼べ」

「…え？そ、そっかって…」

「マスターって響いてもないが。和風のサヴァンタも横文字使う。
違和感はひどい。ここは日本人らしいう」

「な、なら…主殿？」

「名前で呼べって言われただろうが」

「ジャッックさん…？」

「横文字だろそれ」

「…エミヤさん」

往生際の悪い沖田に苦笑する。頭に置いたままの手を動かして、ぐりぐりと動かしてやった。

あわあわと、慌てて手を振り払ってくる沖田に、俺は噛んで含める。

「シロウだ」

「ぁぅ…」
シロっべ。ほら

「…
ウさん」

「聞こえないぞ」

し…シロウ、さん…

顔を林檎のように赤くし、恥ずかしもうに名前を呼んでもらう。

田に微笑む。

やっぱりその名前前に実感はない。ないが、まあ～悪くないじゃなんじゃと、そう思えた。

翌日『フィラソピー』は行軍する。

果てなどどのような長旅だった。

移動を始めて二ヶ月は経っただろう。

様々な障害があっただけ、も、平野を行く時は敵戦士団の接

「……」

「よし……」

「なあ、……」

「うれし。うれしに……」
近くなってどうでなかったが、シータとアルジューナのインパラをつけかけて殲滅、殲滅、殲滅だ。小さな山があり、その中に敵が持ち構えている気配があった。そこでインパラで自然破壊し、絨毯爆撃で耕してから進んだ。

また敵に気づかれ、サーヴァントが攻めてくるかもしれない。クラッサスのインパワーアルジーナをぶちかまして殲滅、殲滅、殲滅だ。

小山があり、その中に敵が待しており、気配が立つのだ。また敵に気づかれてサーヴァントが攻めてくるかもしれない。クラッサスのインパワーアルジーナをぶちかまして殲滅、殲滅、殲滅だ。

そこで、辺り着いた。冬の始まりに、なんとか滑り込む形でグレートプレーンズへと入れたのだ。道すがら逃亡していた兵士三百五十三名と、難民百四十四名を更に加えて……コロラド州の東部に至った。

その地の軍事拠点である城塞に入り……千名に増えた一団は、漸くの安住の地を得たのである。

本格的な冬に入る前に、穀物が枯れる前に収穫を急ぐ必要がある。運搬してきた物資、城塞にあった様々な備蓄も、雨も、何もかも無駄には出来ない。なんとか冬は越せる、その後は農作業にも手をつける必要がある。人手も欠かせない……生存戦略が始まるのだ。

そして、そうして、人類愛は一つの勢力として、小さくしそう大きな第一步を踏み出す事になる。
幕間「女王の狂乱」

極東の剣豪集団「新撰組－番隊隊長－」沖田総司。対魔力の低さ、無辜の怪物に等しい呪いじみた病弱さを抜きにすれば、その剣腕と戦術思想は「ワパン」の組み合わせは申し分ない。特に魔法の域にある有能の「縮地」の組み合わせは申し分ない。対人魔剣の威力は特筆すべきものがある。こと白兵戦であればアルトリア以上。クー・フーリンやアルジュナなどの一神話の頂点に態も食らいつつある異様な技量がある。短期決戦で決着を狙う時に真価を発揮し、そうでない時も凄まじい勝負強さを見せてくれる当時、可愛らしい容姿……っていうより、東洋版アルトリアって感じの容姿だから、なんとなく僕も親近感が湧く。

インド大叙事詩「ラーマーヤナ」の理想王ラーマの伴侶、シー・タ。彼女の霊基はラーマと同等。肝心要の戦闘能力という意味なら、それこそマスターである彼にも劣るだろう。しかしその道具が織り成す大火力はインド出身に相応しい規模を誇る。魚魚散らしには持ってこい、彼なら極めて効果的に運用してくれる。彼の戦術指揮の腕前は、軍略に長けた英霊にも引けを取らないからね。それに何より、彼は運がいい……いや悪運かな？なんやかんやで良い方向に事態を持っていく事に関しては世界に愛されているんじゃないか。
同じくインド二大叙事詩『ハレバーラタ』の授かりの英雄アルジュナ。遠距離は勿論、中距離や近接にもそなく対応する神域の弓使。彼に並ぶ弓兵は、彼の宿敵か彼のギリシャ最強ぐらいなものだろう。円卓随一の弓騎士も、彼と比べたら一枚格が落ちる。卓越した戦闘技能は複数から格上まで幅広く対処可能、戦力は論じる。こらは確信だ。彼はこのままだと『絶対に敗北する』。何せ光の御子は最強だ。単純な強さだけならアルジュナが匹敵するぐらいで、勝とうと思えば今の『人類愛』なら勝てなくもない。でもそれは相手が単騎だったから、もしも光の御子に、あの女王の願いで聖杯によ
僕は感わしたクー・フーリンを眠らせる。夢の中なら僕は無敵だ。僕は英雄だし、楽な仕事だよ。この部分だけは英雄だ。王様なんで名乗ってるし、元々狂える王を、凶暴な英雄に戻す。殺戮兵器には無用の誇りを取り戻させる。そうすれば彼は純粋ではなく扱えない。マスターの彼も幾らかやり易くなるはずだ。そして眠らせ続ければ：まああんまり長くは無理だけど。彼にとって価千金の時間は稼げることだろう。
いう、マーリンさんのは大変だ。あっちでふらふらこっちでふらふら、ウルクの王様に怒られているそうだよ。というかこの特異点、外部との時間の流れの差が激しすぎてキツい。やらなきゃなんない事が多すぎる。
さて...そこそこの本腰を入れるかな。一瞬でも気を抜いたら狂王様に気づかれて、捻り潰されてしまいそうだ。細心の注意を払って...あ、やっぱりそうなるか。
ゴメンね、そっちは僕の管轄外なんだ。頑張ってくればスターくん、流石のマーリンさんもこっちで手一杯だからね！大丈夫、君ならやれるって信じてるから！

...
クーチャンが帰ってこない。いつも待っていても、いつも経って
ても、帰ってこない。
今までそんな事は一度もなかった。何かおかしいと気づくも、
万が一の事は絶対有り得ない。
だってクーチャンは、私のクーチャンは強くなんだから。
一番強い、世界最高にカッコイイ私の王様なんだから。
でも、なんで帰ってきてくれないの？
親指の爪を噛む。イライラする。クーチャンが私の隣にいてくれ
ないと、意味がないのに。クーチャンはどこに行っちゃったんだろう。
う……まさか、私を捨てた？それは有り得ない、だってクーチャンは私のなんだから。なら……敗れたの？
それはもっとあり得ない、世界で一番強いんだから。
それに万が
一本負けそうになったとしても、退きを見逃すクーチャンじゃない。
それを使わされたとしても、進攻を見逃すクーチャンじゃない。
それに死んだとしても、私にはわかるんだから。
生理性に無理なフィン・マックールの部下、ディルムッド・オデ
イナが戻ってきた。
遅いわよ、どこもつく歩いてたの？
そう詰って驚る気も今は
ない。急いでクーちゃんを探しに行かせる。
それだけじゃ全然足りない。
全ての私の兵隊に私の王様を探させ
る。どこ？
どこに行っちゃったの？
早く戻ってきても。愛しの王
様、私だけのクーちゃん。早く、早く。
早く、早く。
早く戻ってきて。
そうだね、何日も経った。

『眠っているクーちゃんを抱えて』。

そして、私の兵隊が王様を見つけて帰ってくる。

cこんこんと眠り続ける。どれだけ声をかけても。

「眠り続けろ」。

…なに、これ？
どうして起きないの？
どうして眠ってるの？
どうしてよ…。

ああ、そうだ。
「…」
誰かが、何が、
「…」
私の王様に、

「…」
「赦さない」
「赦さない」
私だけのクーちゃんは。
その冷酷なはずの寝顔に。
私の夢を。
私の願いを。
私の、私の、私の,
要らないちょっとを、かけたのね。
赦さない。
私がだけのクーちゃんは。
私の、私の、私の,
その冷酷なはずの寝顔に。
「穏やかさを僅かに取り戻つつある。」
赦さない——よくも——よくもオオオオオッッ！
私のクーちゃんに、手をあげたなアァアアッッッ！
憤怒に、激怒に、未だ経験した事のない赫怒に魂が焼き切れる、沸点を超えて臨界を超える。

血を吐くように狂い叫ぶコノトの女王。清楚な美貌から血の涙を流して激情に狂った。

誰がやった、なんだこうする？何を焼去しなければ気が済まなかった。

何を破壊しないと収まらない。

瞬間、北米大陸に存在する全てのケルトの戦士が消滅し、再生する。

「ァァァァァァァァァァァァァァ！」

麗しの女王が、その四肢より、口腔より、双眸より鮮血を噴き出す。

産み出されていくるのは無尽蔵の兵力。

加速的に総軍を増す。聖杯の魔力が女王の力を増大させる。

そして。
俯く。陰が顔に掛かる。
やがて肩を揺らし——女王は、
嗤った。
嗤った。
嗤った。
「ふ、ふふふふふふふふふ」
あはははははは！
相で、女王は聖杯を掴む。
狂ったように笑い転げ。笑って、笑って、狂気に染まる憤怒の凶
「だれが……だれが……」
「だれが……だれが……」
「うふふふふ……うふうふ」

「……」

「えは誰も持たない。」

「しょうがないわ」彼女は呟いた。満面の笑みで。

「しょうがないかわたし、おうさまがおきるまで…」

霊基が歪むほどの怒りの感情。

誰かが言った。ほんの、ささやかなる取るにたらない人間が。

人間が持てる感情の総量には限度がある。感情を抱ける許容値の限界は、脳にあたる。それを見越えてしまおうと…人は、狂うのだと。

女王はそんなのも知らない。知っていけるのは、鉄心の男だけ。

「さーヴァンと…もっともよびちゃうわ」聖杯の理を、聖杯で歪める。狂気に任せて。

数多の戦士の恋人にし母である女は。

「うふふふふ…たくさん、うむから」
サーヴァントを、《産む》。

「あははははははは！」

―殺しやる。

今まで。たのだ一度だけ懐いた、掛け値なしの本気の殺意。

クー・フー・リュをも破滅せた女王が、今これまで、お遊び手た。

本気になった女王が。

「問題は君の森が一体だ。」

《白の》、《黒の》、作中の
ガチャを回せ、決めに行くぞ士郎くん！

コロラド州東部の冬は過酷なものだ。尤もグレートプレーンズに
入る前の土地の方が厳しいのだが、こちらも大概である。
夜の気温は118度から123度。寒さに慣れている現地の人々が
防寒着と暖炉は不可欠の物となる。かが、防寒着や暖
炉の持ち合わせはない。服装は厚着をしてなんとかするにしても、
暖炉の代わりとなるものを用意する必要があった。

ロクド州東部の冬は過酷なも
だ。尤もグレートプレーンズ
に入前、土地の方が厳しいの
だが、こちらも大概である。

但し、防寒着と暖炉は不可欠の物となる。かが、防寒着や暖
炉の持ち合わせはない。服装は厚着をしてなんとかするにしても、
暖炉の代わりとなるものを用意する必要があった。

特にロクド州東部の冬は過酷なも
だ。尤もグレートプレーンズ
に入前、土地の方が厳しいの
だが、こちらも大概である。

特にロクド州東部の冬は過酷なも
だ。尤もグレートプレーンズ
に入前、土地の方が厳しいの
だが、こちらも大概である。

特にロクド州東部の冬は過酷なも
だ。尤もグレートプレーンズ
に入前、土地の方が厳しいの
だが、こちらも大概である。

特にロクド州東部の冬は過酷なも
だ。尤もグレートプレーンズ
に入前、土地の方が厳しいの
だが、こちらも大概である。
“まさに私の力をこのようなに使うとは……”

と、アルジュナは呆れ顔だったが。生憎と俺は使えるものは親で

そもそも事だ。しかし俺が留守にした場所も考えなくてはならな

い。流石に改造劣化魔剣に関しては、毎晩使うという訳にはいかな

かた。その場合は発火装置アルジュナが奮闘しなくてはならない。

アルジュナに護衛させた群衆による人海戦術でトウモロコシ、大

豆、小麦、綿花、テンサイなどの穫物を収穫させた。この綿花は下

着や布団、枕などの材料とする。種子などで厳重に保存した対象

を氷結させる類いの魔剣があれば冷蔵庫を作れて楽でいいのだが、

流石にそんな剣はない。なんてか対策を取りたいが……。

それでも当然の事だが、群衆を護衛するアルジュナには、敵影が見

としたら即座に撤退するように指示していた。アルジュナのみで速や

かに全滅させるという模範ながら問題はないが、敵サーチャントなどが

いたら群衆を巻き込むかもしれない。農地にもダメージが出たら

俺の敵はこの世界そのものと言える。何かも間に備え、態勢を

撤退させる必要がある。

俺達の敵はこの世界そのものと言える。何かも間に備え、態勢を

撤退させる必要がある。
努力と地形次第で八割しかできないのだ。十割殺す技の開発は不可欠である。

戦力が足りない。必ず殺す技を書いて必殺技は勿論抜きで必要だ。
が、生憎と俺の破壊的魔力許容量的、そう何ともサーカスで、契約は出来ない。俺の戦闘力は半減させてまでパスを繋げるのなら、あるのは戦いの内容である。あそれに、サーカスはマスターがおらずとも最低限のスペックは発揮できる。多くを味方につけでも悪い事ではない。今まで現地のサーカスと出会い機会は余りなかったから、そこまで期待しているのは曖昧だが、いないよりはマシだろう。有害になリえると判断すれば、味方に組み込まれればいいだけの話だ。

俺はサーカス・サーカスを探す。一ヶ月ごとに城に戻る。何よりも優先すべきは戦力の拡充だ。食料問題とか手不足とかをなんとか出来るサーカス・サーカスを引けたる御の字で、それはさながらガチャである。ガチャを回すのは俺の脚、歩いて回す。そして課金をする金はないので担保は俺の命だ。築である。やはりガチャは悪い文明、誰か破壊して。

カルデア！早く来てくれ！どうなっても知らんぞ！まあどう足掻いても、カルデアが来るのは最速で五年から十年先なんて。俺がこの特異点に飛ばされても三ヶ月ほど……か？

正確な日時は忘れた。濃すぎて記憶が飛んでいる。別に固有結界を切り売りした代償とかではなく、素で忘れてしまった。希望的観測として後四月九月でカルデアは来る。……はずだ。来たらいいなって。まあとり頼りにはねず。なんならカルデア勢は俺だけで攻略して到まる気概でいるよう。……いや、その場合はどうなるんだ？人理定礎を復元したら、歴史はもともに戻るが……俺はその場合、カルデアに帰る事になるのだろうか。……いや、そんな片手落ちのような事をレフなんかちゃんがやるとも思えない。
復元したら帰還できず、修正されて歴史に巻き込まれて消滅してしまかもしなかった。特異点で死ぬもよし、攻略して帰還できずに死ぬのもよし。その程度の二段構えは有り得そうだ。というか俺が敵側なら絶対にそうする。やはりカルデアが来るまで現状維持が堅実か。

いや無理だろ。現状維持とか至難の技だぞ。攻略はするな、だが負けるなんか鬼畜か？相手はケルトなんだぞ。

最悪、伸るか反るかで攻略に賭ける気構えているべきだ。負けるのは論外、この特異点を攻略して諸共に消えるのが、嫌だがギリギリ及第点だろう。いずれにせよ戦力の拡充は不可欠か。

そんな訳でアンドロマケに騎乗し、俺は金髪の青年にそう告げた。

ルジェナが始末してくれると。雑魚散らばるシータだ。城壁まで近づかれそうならお前達が銃で撃って。弾薬は山ほど用意してある。

防衛の要としてシータとアルジェナを置いて行く。大抵の輩はアルジェナが始末してくれると。

不審に思ってみたが、カーターは不安げに俺を見上げてくるが、淡々と言いかせるしかかない。

「カーター、留守は任せだぞ、カーター、」

「は⋯⋯」

「カーター」

「カーター」

「カーター」

「カーター」

「カーター」

īや無理だろ。現状維持とか至難の技だぞ。攻略はするな、だが負けるなんか鬼畜か？相手はケルトなんだぞ。

最悪、伸るか反るかで攻略に賭ける気構えているべきだ。負けるのは論外、この特異点を攻略して諸共に消えるのが、嫌だがギリギリ及第点だろう。いずれにせよ戦力の拡充は不可欠か。

そんな訳でアンドロマケに騎乗し、俺は金髪の青年にそう告げた。

ルジェナが始末してくれると。雑魚散らばるシータだ。城壁まで近づかれそうならお前達が銃で撃って。弾薬は山ほど用意してある。

防衛の要としてシータとアルジェナを置いて行く。大抵の輩はアルジェナが始末してくれると。

不審に思ってみたが、カーターは不安げに俺を見上げてくるが、淡々と言いかせるしかできない。いざという時の判断は臨機応変にお前が下すんだ。
俺は上体を屈め、馬上からカーターの肩に手を置いた。

「お前が副司令だ。男なら腹を決めるな。」

「他の誰でもない、お前にだから留守を預ける。アルトリウス・カーター大尉、『フィランソロピー』を頼んだぞ。なに、一ヶ月後に必ず戻る。有事の際にも駆けつけると約束しよう。」

帰ったら『人類愛』内での階級でも考えられるか？そうだらお前は大佐だぞ。

「シロウさんっていつも忙しいですよね…」

手綱を握って馬首を転じる。アンドロマデスの物験嫌は上々。とい手綱を握って馬首を転じる。アンドロマデスの物験嫌は上々。とい

手綱を握って馬首を転じる。アンドロマデスの物験嫌は上々。とい

手綱を握って馬首を転じる。アンドロマデスの物験嫌は上々。とい

手綱を握って馬首を転じる。アンドロマデスの物験嫌は上々。とい

手綱を握って馬首を転じる。アンドロマデスの物験嫌は上々。とい

手綱を握って馬首を転じる。アンドロマデスの物験嫌は上々。とい

手綱を握って馬首を転じる。アンドロマデスの物験嫌は上々。とい
「いいじゃないか、二人旅。俺とお前だけなら、どんな地獄だろう
ぼやきに普通に返すと、沖田は口を噤んで無口になった。

風を切って走るアンドロマケ。その風は冷たい。

沖田は何故かこっちを見ない。耳を赤くしている。そんな彼女の
ぼやきに普通に返すと、沖田は口を噤んで無口になった。

みんなで呼ばれるようになって以来、どうしてかこんな態度に変わ
った。悪意とか隔意が生まれたわけではなかった、どう接したら
いいか悩んでいるように見えるが……。それに何かを持て余して
いるのか、もどかしそうにしている姿を目撃した事もある。

そういえば『フィランソロピー』の連中、妙に沖田の事を微笑ま
しそうに見えるようになっていた。それに何か関係があるのだろう
か。

生憎と俺は忙しくて、誰ともコミュニケーションが取れてなかっ

女の子同士、いつもの間にか話す関係になっていたらしい。その光
景はさざ麗しいものだろ。
たが、一度帰ったら、シータやアルジュナもしっかり話そう。

「で、シータどんな話をしたんだ？」

「…分かんないんですか」

「女同士の話なんかが俺に分かるわけではないだろ」

「酷いな」

沖田の背中から体温が伝わる。段々熱くなってきた。まさか

俺が知ってる女同士をイメージの中で並べる。

アルテリア、オルタ、マシユ、ネロ、アタランテ、アリスフィ

ール、玉藻の前、桜、チビ桜、イリヤ、イリヤ二号、美遊、遠坂、

ルヴィア、パゼット、シエル、キアラ…その他。彼女達がどんな

会話をするのか想像してみるも、大乱闘スマッシュなんとかが始

まるしかイメージ出来なかった。なんでさ。

遠坂とルヴィアから火種が熾り、それが感染爆発するように乱闘

が始まり撃で競う女の宴。うんこの、ここにキアラをぶち込むと

か想像の中でも地獄絵図になりそうだ。特にキアラと桜を会わせて

はならない気がする。

「ばか」
沖田は呟き、下を向いていた。
「…」
なんと言えまいが、暫く進んできた。
とにかくもかくに新しい戦力の発掘は急務。誰かサーヴァンを紹介してほしいと、出会いガチキャラというパーティーを不意に思っていた。
そうして一人笑いを溢すと、なぜか沖田から肘を腹に食らった。
な、なぜ…?
キリングを作るとは五位がアルトリア。四位がパゼット。三位が桜。

二位が白野、同率マシュ。そして一位はアンドロメーダではなくろうか。

しかし顔を知らない奴は絶対乗せようとしない。そのくせ乗ってるのが俺一人の時は物凄く喜んでもらう。

もし北米随一のヒロインはアンドロメーダだったのではなかろうか。気立てがよく、毛並みもよく、馬の中では愛妻のある瞳。黒馬という点も実にいい。最高だ。

戦の時だってそうだ。怖がりで臆病な馬の例に漏れず、アンドロメーダは荒事の空気を感じると恐怖に駆られるようだが、俺が乗ってている時だけは信じられないほど勇敢で、果敢に敵に向かうのだ。それでも興奮が過ぎず、俺の意図は確りと汲んで動いてくれるし、俺が気づいておらずとも、背後から接近してくる敵には必殺の馬蹴りを浴びせてくれた例もあった。
ドロマケは一方向に嫌がらない。というか、恐ろしいほど、おじいちゃんがいる気がす
る。ここまで懐いてくれる動物は初めて俺も嬉しい。フォウの
奴は可愛いないって教えてくれだけなんだ。カルデアのマスコットはアン
ドロマケに交代でいい気がしてきた。

その沖田は無言で、アンドロマケを撫でる俺の手を眺めている。

沖田との相乗りでは、沖田が俺の前に座る。小柄ならいか、彼女は
手の途中にすっかり収まっていた。

腕の中ですっかり収まっていた。

おそらくアラヤ！これらも全部お前のせいで！人理が焼却
されるのも、キアラに遭遇してしまったのも、なんか腹が痛いのも。

闇をやり過ぎたせいで思不出せない……。

なおアラヤ！これもそれも全部お前のせいだ！人理が焼却
されたのも、キアラに遭遇してしまったのも、なんか腹が痛いのも、
俺が苦労してるのも、ついでに沖田の機嫌がなんか悪いのも全部お
前のせいだからな！これは裁判沙汰ですよ……第一回英霊裁判で
前のせいだからな！これも裁判沙汰ですよ……第二回英霊裁判で
前のせいだからな！これも裁判沙汰ですよ……第三回英霊裁判で
前のせいだからな！これも裁判沙汰ですよ……第四回英霊裁判で
前のせいだからな！これも裁判沙汰ですよ……両面はフリーやディ
ルメッド、女神からの無茶振りに定評のあるパリスくん、円卓出向

組のランスロットとトリスタン辺りで裁判を行うのだ。ゲストとし

-

-1952-
てマリンを呼ぶのも吝かではない。見事に女難ばかりの面子だ。

「シロウさん、今すっごくバカみたいなこと考えてません？」
何を言う。私は常に今後を見据えて働くべく、真剣に頭を働かせているさ

突然口を開いた沖田。その後頭部に真面目に答えよう。いさと

嘘です。どうせ女の人のこと考えてたんでしょう。なんかしっかり来るのだ。外行き用の口

調でもある。なんかしっかり来るのだ。尤も俺の地がこんな感じので長続きはないが。

「嘘です。どお女の人のこと考えてたんでしょう。なんかしっかり来るのだ。外行き用の口

調でもある。なんかしっかり来るのだ。尤も俺の地がこんな感じので長続きはないが。'

「基本。可愛い娘は誰でも好きだよ、オレは。'

「ああ、言葉の綾だ。あくまで基本であって、誰彼構わず手を出す

ような真似は誓ってしない。告白すると私は自分から手出しうる

スタンスではないからね。途中を犯してしまったのは一度きりーー

ぐはっ！？'

ああ、言葉の綾だ。あくまで基本であって、誰彼構わず手を出す

ような真似は誓ってしない。告白すると私は自分から手出しうる

スタンスではないからね。途中を犯してしまったのは一度きりーー

ぐはっ！？'

無言で沖田が肘鉄を脇腹に叩き込んだ。

結論の威力に苦悶する。無言で沖田が肘鉄を脇腹に叩き込むしてきた。
「女の子が目の前にいるのに、そんな事言う価ですか。猛省してくだ
さ。後その喋り方、無性に腹立つのでやめてくださいね。
」「す、すまん…」
「許しません。…ゆ、許して欲しかったら…」
「かあ、とまた耳まで赤くなる。どうした、発作か？
背中を撫でてほしいのか？
沖田は蚊の鳴くような声で、ぼそぼそと言った。
「ぎゅ、ぎゅって…してください…」
「な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そうか」
「…な、なんですかっ。正当な謝罪要求です！
それだけでです！」
「…そ、そ
でも、お前は成長し続けている。それは間違いことば、自分が成長していることを感じている。それゆえ、あなたが何をやるか、何を想っているかは、あくまであなたを理解するための手段である。お前の成長を見守ることで、私たちは共に成長する。
俺はなんの事に理解したか、この合理化の化身みたいなの。

俺は、霊基からの嘔きであるような気もしてくる。夢に見ただした。

黙れ、さもないとキアラに会うぞこの野郎、どうしてつけば一瞬で沈黙する仕様だ。なぜその場合、最大のダメージを受けたのは俺である。ウルトラ求道僧がなんとか漂白してくれたらいいなあ、と希望的観測を懐く。

・・・現実逃避ばかりしてはいられない。かっぽちゃんってアンドロマが誰を鳴らし、荒野を聞く。城から離れ二日経っている。

西に東に無作為に散策しているが、生存者の姿やサーファントは見掛けなかった。道中ケルト戦士団を見掛けたが一戦か戦闘を回避するか悩んでいる間に、故が一瞬にして蒸発してしまった。

文字通り跡形もなく消え去ってしまったのだ。もしかケルトの首魁に何かあったのか。カウンター・サーファントが仕事をして、斃してしまった可能性はあるが、それはないだろうと思う。この特異点の元凶らしき者が斃されたなら、人理定礎が復元されるはずだかも。

ええ。・・・思えばこの時点で猛烈に嫌な予感がして、胸騒ぎを覚えただもののだが。・・・それ以来、蝗のような存在していた戦士団を見なくなりはしていた。

ーあ、あの、シロウさん？ 私・・・この病弱ぶり、どうにかしたいんですけど・・・どうにかなりません？」

俺が壮絶に嫌な予感に襲われているのも確実、沖田は香気にもそんな事を照れ臭に悩んでくる。

城から出て四日目の事だ。本当に何もないかたからあっという間。

時間が過ぎている気がする。持ってきている食糧と水は、後日によく。
発見したらそちらを食べている。辺りに目を配りながらも適当に応じた。どうにか出来るならとっくにして思いながら。

……呪で抑えるくらいだ。まあ英霊としての存在から来るものだから、一度発作を抑えるのが精々だろう。端的に言うと恒常的に抑えるのは無理だ。

「……止めて。うう、シロウさんがお役に立ちたいのに……また足引っ張っちゃったからしょう……」

「根拠にどうにかしたいなら、カルデアの誰かさんみたいに英霊としての自分を放棄して、新たに別の人間として受肉してしまうならない。春がそれで『新撰組』だった事実が消えるのではなく、沖田春とかにでもならば、春の死因だった肺結核も普通に治療できるし」

「え！？シロウさんの時代では治るんですか！？この呪い！」

「治る。飲み薬で治すのもよし、アイリさん、カルデアの回復役のサーヴァントだな。彼女の道具で治療するのもよしだろう」

「へぇ……なるほど……そんな手が……」

「え？なんでですか？英霊としての誇りなんか私にはありませんけど……。私の掲げた誇の旗は、道具としては使えないかも、誇の字を失うわけでもありませんし。ぶっちゃけ心の持ち様です。そ
れに英霊としての霊基を投げ捨てても、私の剣が劣化する事なんてありませんよ。

だってこれ、スキルでも宝具でもありませんし。生前から使えて、それに英霊のクラス別スキルとしての『気配遮断』が消えるのは痛いし、気配を断つくらい俺でも出来るんだから生身の沖田にも可能だろう。

英霊のクラス別スキルとしての『気配遮断』が消えるのは痛い、生身になるれば慣熟訓練などではしくてはならないにしても、それが済む無限縮地と連発解放された三段突きが可能という事に...

安定感も体力も部と増えるとなれば…あれ？これはひょっとしたら名案なのでは…？

「シロウさんっ！」

「テキトーに口を動かしただけなのに、真剣にアリな気がしてーーー」
唐突に殺気を漲らせた沖田が、俺の腕を振りほどいて一瞬で馬上から飛び降り、飛来した短刀を弾き飛ばした。

瞬間的に俺の意識が切り替わった。
魔術回路起動。双剣銃を投射する。

沖田の愛刀が閃き、火花が散る。
瞬間的に俺の意識が切り替わった。気配遮断が起こり、姿を現した女暗殺者を一刀の下、抵抗も許さず斬り伏せたのだ。

その刃は女暗殺者の首を刎ねている。

短刀から真名を読み取れる。
その独特な仮面からも察しはついた。『静謐』のサマー……

敵サーヴァンがだが奇襲は防いだ。サマーも斃した。何も問題は…。

愕然とする。
荒野。見晴らしのいい地形。そこでなんだかの魔術で姿を隠蔽し、身を隠していたらしいうサーヴァンが姿を現したのだ。

『総勢1000近いサーヴァン』。
「…」

中には『百貌』のサマーがいた。しかしあまり分裂していなかった。
コルキスの魔女メディアもいる。石化の魔眼を持つ女怪物もいる。

しかしはたと気づいた。気づいて、沖田に問う。

「今の暗殺者……弱くなかったか？」
「―はい。霊基が不完全な感じです。まるで……」

首肯する沖田。絶望は過ぎる。活路は見えた。

同数のケルト戦士団より強いだろう。彼らより個性的だろう。彼ら
ならやりようはある。脳裡を席巻する敵軍勢の正体に関する考察
を今は封じ。俺は沖田に指示を飛ばす。

「不完全な召喚をされたみたい、か？」

俺だが詰める。春は敵を適当にいなし、俺を守ればいい。往け
「―ケルトとの戦い。それは、早すぎるほど早く、転換期を迎え
た。」
ケルト的運命の出会いだね。士郎くん！

サーヴァンとは、度重なる戦に理由を挙げた歴戦の英雄がなるものではない。

そこの正体は英霊である。

神話や伝説の中で為した功績が信仰を生み、その信仰を以て人間霊である彼らを精霊の領域にまで押上げたモノ。

その英霊を英霊足らしめることものの信仰だ。

人々の想念を昇華したものが故にその真偽は関係なく、確かな知名度と信仰心さえ集まっていれば、物語の中の人物や概念、現象であるが、英霊となる。

故に誰しもが戦巧みな名将、武勇に長ける勇士である訳ではないか。

戦いとは無縁の女スパイ、童話の絵本、悪名高き魔女、時代の変遷に巻き込まれた美しいけの王妃、無辜の怪物と化した拷問狂の伯爵人も英霊として存在する。

そうして戦技に疎いモノもまた、サーヴァンとなることで戦い方で戦技が強力であるか、英霊として存あるか。

相性が良ければ生粋の戦巧者がに勝るもではないか。

故に。「これで―五十八ッ！」

縮地の歩法を扱わず、対人魔剣も振らず、対軍宝具である誠の
旗も立てず。
平凡な剣技を尽くすだけで、サーヴァントの軍勢は沖田一人に壊滅させられていた。

如何に最高位の使い魔であるサーヴァントと言えども、完全な霊基である。その性能は低く、元々が戦に長けていないが、故に連携も拙く、その連携をこなそうとする自己有知性なら足りない。それで魔法の域の魔剣を極めた沖田を止められるはずもなかっ
相手がか弱い少女、妖艶な女姿をしているからと容赦する剣者でなかった。敵となるば掛ける情けなど欠片も持たないのが壬生の狼。呵責なき剣剪は心臓を穿ち、眉間を貫き、首を刎ね、脳天を割る。

俺は余りの惨状に目も当てられない気分だった。

俺が粗方始末した。残りは五十騎ほど。生き残りの中にはあのメドゥーサやメディアもいるが、メドゥーサは半端に自我があるせいに

ドゥーサはメディアもあるが、メドゥーサは半端に自我があるせいに

聖士の姿が、魔力で揺さぶるものも懲される敵を斬り伏せていく。

双剣銃より弾丸をバラ撒きながら、同時に虛空に投影した剣群を

百体に分裂し、ケルト戦士より何倍も弱くなってしまった『百貌』

で俺が粗方始末した。残りは五十騎ほど。生き残りの中にはあのメ

ドゥーサやメディアもいるが、メドゥーサは半端に自我があるせいに
お前におっしゃるなりに、彼女達の代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報復してやろうという義憤。
彼女達を代わりに報服
膂よ従り出された旗を黒剣銃で難なく弾き、その背中を沖田が切裂いた。よろめく彼女に馬上から蹴りを叩き込み、仰向けに転倒した彼女に馬上から倒れ、その腰から剣を奪い取って、魔力殺しの聖骸布を投影して素早く包んだ。アンドロマケに飛び乗り、敵軍を見渡す。そして自身の周りに『熾天覆う七つの円環』を現し防禦を固めると、淡々と衝田に指を飛ばした。

『春。眼帯の女を斬れ。石化の魔眼を使う気になかったら』

「ひとっ！」

沖田が俺の傍から消える。一度目の縮地。反応の鈍いメドゥーサの背後に入り移動しその首を刎ね飛ばした。

悪いな、メドゥーサ。カルデアにはチビの桜もいるから、その気があったら来てくれそう呟く。

『熾天覆う七つの円環』で身を守りながら、魔力殺しの聖骸布で包んだ道具『紅蓮の聖女』をアンドロマケの鞍に括りつけたと我に返る。"
薄紅の七枚楯に、沖田が離れた隙に集中砲火が浴びせられている。

やがてサーヴァント達は、メディアを残して全滅してしまった。

俺は敢えてアイアスの楯を消す。

前に彼女はマントを翼のように広げて飛翔する。逃がすものかと剣群を射出する素振りを見せた。俺と、

─お春。俺の後ろだ─

俺の背後に Lotto を付けて指示を発する。沖田は声もなく反転し俺の背後に跳んだ。剣戟の音色、鋼と鋼が合う硬質な響き。火花が散っていった。

俺の背後に姿を現したのは華奢な少女である。肩屋のみを守る俺の背後には残っているようだった。故に最後まで生き延び──当馬にしかならぬと見切っていた彼女が新たに持つも、その陣性の片鱗は残っているようだった。故に最後まで生き延び──当馬にしか

会え透っていた。あっけの数のサーヴァントの成り損ないを隠

見え透れていた。あっけの数のサーヴァントの成り損ないを遮

いでいたのはメディアだろう。彼女にはしか出来ないほどの姿隠しの

魔術である。見える影もなく劣化している彼女だが、その陣性の片鱗は残っているようだった。故に最後まで生き延び──当馬にしか

會え透れていた。あっけの数のサーヴァントの成り損ないを隠

見え透れていた。あっけの数のサーヴァントの成り損ないを遮

いでいたのはメディアだろう。彼女にはしか出来ないほどの姿隠しの

魔術である。見える影もなく劣化している彼女だが、その陣性の片鱗は残っているようだった。故に最後まで生き延び──当馬にしか

命を最後まで忍ばせ、守りを解げばぶつけてくると思っていた。

懐く。
案の定…一瞥して刀を解査するに、牛若丸という勇名のサーヴァントを隠していた。源義経が女だったという驚きはあるが、固まるほどではない。彼女がまた大盤に劣化しているだろうに、沖田数合刃を交えるの剣を魅せるも、あえなく斬り捨てられる。

決着を見届けずちから視線を切り、空中に逃れたメディアへと数の剣群を投射して剣しにした。メディィと牛若丸も消滅する。なんの達成感もないやるせなさだ。

果たして勝利なのか。まるで失敗作を処理しただけのような気もする。

非情な剣士としての粋から一転、晴れやかな笑顔を浮かべる沖田らぞる。

「戦闘終了です。大勝利ですねっ、シロウさんっ！」「…ああ、そうだね」

─戰闘終了です。大勝利ですねっ、シロウさんっ！─

─戦闘終了です。大勝利ですねっ、シロウさんっ！─
もおらず、捨て石の如く玉砕したのか。結局誰も最後まで逃げようともしなかった。メディアの飛翔も、こちらを牛若丸で不意打ちしようにする為の布石でしかなかった。

考えてねばならない事は山ほどある。ケルト軍の頭目は、戦士を乱暴可能で、且つ、戦士を統へていて、聖杯で滅茶苦茶な事を仕出しそうのような王と言えば、メイヴ、何故女の英霊をこんなにも産み出したか。この推測があたりだと思えば、メイヴは、その詳細はどうでもいいとして。メイヴ・ファーリンの夢の中で見ても、実際に感じた印象にある限りだと、メイヴは強く、嫉妬しない男の戦士を好んでいる。過去から現在、未来に至るまでの全ての男達の恋人を自称する破綻者が、捨て石としてあっても女を産み出すという発想を持つだろうか。

おそらくだろう。不訓れなのか力が足りないか、効率が悪いのか、召喚形式がまだ不安定、といったか。

『試作品』、か？

『《試作品》、か？』
頭が痛い問題だ。敵の本拠地はワシントン州辺りだろうが、そこまで攻める力はないう。本拠地を他所に移し去る可能性もある。現地勢力との接觸も出来ておらず、そちらと協力出来ることも不明だ。さらに言えるば―"--いや、そちらはいいる。舌打ちする。沖田は不思議そうに馬上の俺を見上げてきただ。魔力殺しの聖骸布を取り、包んである炎の聖剣を消滅させよう。奪っておいて何を今更と思われもしれなけりか。しかしに返った今は、俺が持っておいってもいってはないうと思っただのだ。しかし―「--なんんだ。捨ててしまうのか？勿体ないのう」「--」俺と沖田の眼前に、唐突にその姿を現した女のサークァンに、瞬時に戦闘体勢を取る。しかしそのが槍兵は待ってと言うように槍を小さく振った。--俺にとって頼もしろの象徴である朱槍を。"一先ずは見事な戦振りであったと讃えよう。窮地に陥るうであったら助け太刀しようと思っただが、どうやら要らぬ心配だっただ。
げんにお主達と事を構える気はない。ケルトからお主らに鞍替えし
よう思っては。どうじゃ、僕を雇ってみる気はないか？

「あんたは…」

「スカサハ、か…？」

「何に、というより知っておるだろう？」

「如何にも。僕は僕はお主の下で使いてみる気はないか？」

「― あんた。意外と婆臭い喋り方がなんだな」

唐突に現れ、突然の申し出に、俺は目を白黒させ。

「僕にお主達と事を構える気はない。ケルトからお主らに鞍替えし
よう思っては。どうじゃ、僕を雇ってみる気はないか？」

「― あんた。意外と婆臭い喋り方がなんだな」
思わず地雷を踏んでいた。まず、と焦る俺に。しかし意外にもスカサハは明朗に微笑み、言い直す。「私の名はスカサハ。我が弟子の主上よ、此度の戦陣に私を加えるがいい。弟子に劣らぬ槍をお主の為に振るう事を約束しよう。」

どうだ、こちらの喋りの方が好みに合うか？

魂の腐敗は無く。しかし、その武練に衰え無く。

美と武、知と魔。ありとあらゆる分野を極めた稀代の大魔女が、「人類愛」の許に参じたのである。

― どうだ、こちからの喋りの方が好みに合うか？  "
女難転じて福と成すのが土郎くん！

「なるほど。それでカウンター・サーヴァントを探しておる訳か。

俺から聞かされた『人類愛』の現状に、スカサハは難しそうに顔をうつりとしている。ぶる、と形のいい額に手を当てて考え込むスカサハだが、その眼は好戦的にむしろ俺を品定めしている。まるで肉食の獣の舌なぞりをしているような印象があるが、ケルトは大体こんな感じがデフォルトなので気にならない。」

－1973－
なメンヘラ一直線な真似はしないだろう。……しないといいなって思う。

沖田はスカサハの好戦的な視線にも自然体を保っている。しかし
沖田がなんとかしてくれるだろうと丸投げ状態だ。斯く言う俺は仕掛けられた瞬間死ねる間合いなので無防備である。

私もそう思う。俺としはあんたが仲間になってくれるなら万々歳だ。

「そうだろう。私もそう思う。」

笑って肩を竦めるスカサハ。

「やけに素直に認めるな……。」

「私を殺せる者は馬鹿弟子ぐらいなもの。それがあのようなら
王ともなれば当然なだろうか。」

苦笑して肩を竦めるスカサハ。

「私だけではメイヴの軍や、あの馬鹿弟子には勝てぬよ。」
と傍らを歩くスカサハを叩いている。随分と嫌っている様子だが、スカサハに気を悪くした様子はない。

彼女は動物の

「自來の

人

を

理

人

彼

傍

…

し

の

来

な」

視おか―

修

焼

私

あ

ス

して

い

点

余

復

却

は

め

る。

が

嫌

歩

っ

た

セ

尚、

多

里

召

る

い

で

が

た。

…

で

し

の

を

り

千

す

の

見

醜

カ

タ

も

し

の

を

た。

が

の

に

が

た。…

で

し

の

た。

に

は

許

で

う

女

だ

サ

ぎ

サ

欲

そ

れ

る

に

は

の

に

ke

と

魔

る

は

女

様

で

し

の

を

た。

が

の

に

が

た。…

で

し

の

た。

に

は

許

で

う

女

だ

サ

ぎ

サ

欲

そ

れ

る

に

は

の

に

け

と

魔

る

は

女

様

で

し

の

を

た。

が

の

に

が

た。…

で

し

の

た。

に

は

許
「思る代の残る気は、アロ、七よ、…」
私のクー全そべい。質一た愉はしさお私の騎おのしを詮し、それも私に突っこむ。来な。大方『この死に損ないのイカレ婆、いつかの約束通り、殺しに来てやったぜ』とても言われたか？「はっ！」

「一言一句違わずその通りの事を言われたわ！なるほど、お主の気質はあの弓兵よりもセタント寄りなのだな？道理で不快ではない。奴が気に入るもの頼けるというもの」

「ランサーを通じて俺が知ってるアント、今のアソを一緒にするべきじゃないかかもしれないが…俺の知ってる限りだ怒り狂いそうな物言いったろう。全けてその通り、僕はあの時はつい、手元が狂ってしまいそうだった。所詮はサーヴァント、生きておる僕、いやさ私にとってそのクー・フーリンは余りに弱かった。当然だ、サーヴァントとは神代の者にとって劣化させられた枠組みに納まれたモノ、生きております私とは比べるべくもない弱さだったとも。簡単に殺せてしまうとしかしな…いざ槍を交わしてみれば、どうだ。私は奴を殺せなっ…」
「英雄ってのは、力だけでなく、振るうの相手を相手に、うつと手こずる。遂には問いかけておったよ。僕の方が強い、なんで何故僕はお主を殺せぬ、とな。
まるで白痴のように。
「全然似てないな。アンタ、物真似の才能だけはなさそうだ。」
「どうかなかったぜ。どれだけ力の差があっても、今のアンタには負ける気がしない」と。
「そのか？」。

言いおろわ、とスカサハは愉快そうだった。
激しく虚像と戦う素振りを見せる。まるで舞踏だ。凄烈にして凄絶、極みの槍の連撃。都合一閃、俺なら十回死んでると思い呆れてしまう。

戦ぬかれたそれに、つくづく接近戦のマズさを痛感してしまった。

魔女は一本の朱槍を手の中で旋回させ、その場で槍を振るう。さながら目の前にクー・フーリンがいるかのように。

しかし、迅さ、巧さ、自分とは比較にもならない。殺気の乗っている槍でどれ、ラッサーの奴はこれより何倍も強い生前のスカサハを斃したのか。やはり大した奴だ。
一至福の瞬間だった。幾ら槍を振りつけても戦えぬ愛弟子……それもほろか次第に反撃されるようにになり、私の体にも傷を負わせ来るようになった。私は信じられなかったが……同時に嬉しくて堪らなかった。この領域まで……私が二千年かけて至った地にまで食らいついていると。結末は知っての通り、『揺れ狂う光神の血』を発動したセタサンに。そこで初めて思い出した。『英雄は負けられる戦いには絶対に負けぬものだ』と。だから英雄と呼ばれるのだ。必ずスカサハは思いたったが、敗れ、死んだ。本当の意味で英豪の座へと招かれたスカサハは、そこで漸く自らの所業を省みたのだ。そしてスカサハは思ったら高く、気高い魂を取り戻したスカサハは誓った。人理は修復する戦いに於いて、必ずカルデアへ味方すると。賛罪ではない。自らにと

此に私は主に味方をするのだ。全面的に協力させてくれと、頭

上に会えようか……願む。私がお主の……カルデアの戦列に加わる事を許してほしい。
足を止めて頭を下げたスカサハに瞠目する。隻眼を見開き、信じられないものを見た心地となった。あのスカサハが、頭を下げて頼むと？逆にこちらから頼みたいというのに。

 Yap! 逆にこちらから頼みたいというのに。

私の魔道を窮めた。出来ぬものはそうはない。望むならお主の左目も治そう。そして────その身に宿している霊基の補強をしてもらい。

 sincerer.

stoic.

「私は魔道を窮めた。出来ぬものはそうはない。望むならお主の左目も治そう。そして────その身に宿している霊基の補強をしてもらい。

「────何？」

スカサハの言に俺は驚愕する。魔道を窮めた者からすれば、そんな考えまるまでもなかった。首肯する。是非願むと。するとスカサハは頭を上げて頭下げて頷きを返す。虚空に無数のルーン文字を刻む。ルーンについては知識も浅い俺には、それがどのようなものなのか読み取る事も出来なかったが、込めたと言われの魔力の質と、内包する概念の多様さは漠然と伝わった。

それでも俺の左目に吸い込まれる。瞬間、熱帯を帯びたような感覚が生まれた。スカサハはやや意外そうにひとりごちる。

指摘され、眼帯で隠してあるのによくも分かるものだを呆れてしも。

「─傷の治りが早い────お主、もしや眼を抉り続けておったな」?
治癒の目処があった、しかし完全に傷が塞がっていれば治すのに難儀する可能性を考え、常に傷を刻み続けて塞がらぬのを抑えていたのか…無茶をする。相当な激痛があったらそれに、気づいておらんかったようなだが、その傷口から結核的な病に感染してあるなら。

「ん？そうか…」

「そうか…」

「そうかとはなんだ。僕が治せてやれるから良かったものを、そうしてなければ命に関わっておったぞ。保って十年といったところじゃ…」

「十年保っていたなら上等だ。その頃にはカルデアも来ているだろううからな。アリサ＝カルデアの治癒役の人が治してくれたはずだ。それに十年経ってもカルデアが来なかったら…どのみち俺は負いているだろう」

沖田が凄まじい剣幕で睨み付けてくるのから目を逸らしつつ、治癒が終わったらしいルーンが光を消すのを見届ける。探知のルーンが俺の全身上を検知して、病魔を殺してくれたのだう。『私に殺せぬものなどない』とは生前のスカサハが、クー＝フレインの前でよく嘯いていた台詞だったが、どうやら病魔すら例外ではないらしいかった。凄まじい万能性である。

「なぜ眼帯を外さぬ？それでは治した甲斐がないではないか」

「何故眼帯を外さぬ？それでは治した甲斐がないではないか」
いやなに……コイツは春……沖田総司の生みの親の遺品でな。ソツイは俺の命を救い、その上で俺に大事なものと思い出させてくれた。だから……まあ。出来れば外す事はないようにしたい。

黙っていた沖田が流石に割り込んでくる。機嫌は最悪らしく、顔つきは陰悪である。自分に傷とか霊基の事とか黙ってるなんて、何考えてんのですか？マスター。そう言いたげな表情だ。

しかし言われていて何も出来なかったと弁えているから追及してこない。睨んでくるだけだ。しかしその顔は可愛らしさの方が強い。微笑んで顔を撫でる。

「黙って、あの風魔ですか！？ 道理で気配遮断の練度が本来の風魔忍群の五代目棟梁だから。」

「風魔って、あの風魔ですね？」

「小太郎の事は俺だけが知っているから、いい……なんとなく黙っていた方が、小太郎と俺が共有する秘密的な感じでカッコ良かったからだ。」

「小太郎の事は俺だけが知っているから、いい……なんとなく黙っていた方が、小太郎と俺が共有する秘密的な感じでカッコ良かったからだ。」

「意味分からいないんですか？」

「いやなに……コイツは春……沖田総司の生みの親の遺品でな。ソツィは俺の命を救い、その上で俺に大事なものと思い出させてくれた。だから……まあ。出来れば外す事はないようにしたい。'

理解がありませんでした。流石はケルト。
で、いったんのこと、その左目を魔眼にするか？
眼帯をするなら

『は、そうした仕込みがあった方が『らし』と思うぞ』

自分の中を別のものに組み換える事になるとしても俺に忌避感は
ない。何せあの伝説の邪気眼になれるかもしれないのだ。何を躊躇
う事がある。

正直に言うと魔眼など要らないのだが、その場のノリでスカサハ
に訊ねる。すると彼女は不敵に笑った。

―何？いえ……なんて出来ないといつても限度があるのであろう。
「どういうか生前の財産を取り出せるのかとこの英雄王だ。
俺がケルト的戦闘論理を持つのは、最初に契約したサーウァント
というか生前の財産を取り出せるかとこの英雄王だ。
俺の問いにスカサハは呆れたようである。
俺がルーンのアーサー王伝説のケルト的骑士道を持つアルトリアだったからで、
その影響だった可能性が浮上してきた。

『何を言う。反則とはする為にあるのだろう』

反則で召喚も可能だ。
何を言う。反則とはする為にあるのだろう。
俺がルーンのアーサー王伝説のケルト的骑士道を持つアルトリアだったからで、
その影響だった可能性が浮上してきた。

フーリンと契約して更に加速してきた感がある。
全部ケルトって奴
の責任だ。間違いない。だから第一特異点でジャンヌを完封したのは俺の責任ではないぞ。

一

お前がオルタ化してるのが悪い。だから俺を恨むなよ聖女殿。

炎の聖剣に内力、そう語りかけた。

一

いったっても生前はともかく、今のところ登録してある儒基は

炎の話に戻るぞ。

あ、確かな。}

ああ観る力とは、魔眼に対する防御手段の一つだ。万物に存在す

視覚情報を叩きつけるものである。

視覚情報を叩きつける力、自分自身の魔眼に自覚なら、魔法眼に呪

魔眼の天敵と呼べるもので、叩きつける情報の応用によっては相

発揮し、更に相手が自身の視る力に無自覚なら、驚くほどの効果を

手を催眠術にかける事も可能で、相手の魔眼の力が強いほど効果は

中ずに事にできる。初見であれば、某団扇の一族が持つ写

○眼などは簡単にならない。

俺の知己に例えるなら、両儀の姫御にやっても余り意味はない。

あの人は完璧な誰を操っている上に、吐きそうなほどの死の線と

やるを見せても機嫌が最悪になるだけだ。逆に殺されそうになった

のもいい思い出で。遠野の野郎は逆に簡単にノックダウンさせられ

る。強すぎるその魔眼を使いこなしているとはとても言えないから

- - -
お主に相応しい低位の魔眼となると言ったのでいい出ではない。
「そうだ？しかし、例えば動体視力を極端に向上させる類い
掌を返して即聞く姿勢になる俺にスカサハは苦笑した。
こんなふうに笑える人なら、またおや意外に思う。
ラッサーもえらいのに目を付けていられるな……
ならばすんなに馴染むと思うが。
「詳しく」掌を返して即聞く姿勢に
「えや、別に考えなくてもいいぞ。
だろうさんなり馴染むと思うが。
「詳しく」名前もない程度の魔眼だが、
コントロールを極めれば、音速を超えて飛来する矢の弾幕も、
視た後でも正面から撃い潜れるようにな
相応の技量がなければ宝の持ち腐れで、それだけの技量がある
ならそもそも無駄でしかないが。目で追われているなら追われてい
るで、トップ・サーヴァントならどとでも対処は出来るであろう。
俺からすれば喉から手が出るほど欲しいぞ。
俺がそう訴えると、スカサハは苦笑したまま「それはまた今度、
お主の城でやろう」と告げる。お預けらしい。
何せいつぞやの変身クー・フォーリンとの戦闘で、俺は全くその姿
を視認できなかったのだ。また中でろと言われても確実とは言えな
いのだから、実際に視認出来るかもしれないなら大きな力となる。
俺がそう訴えると、スカサハは苦笑したまま「それはまた今度、
「俺はこのことを忘れないわぞ。」
「……」
「無論使わぬのが一番だが、使わねば切り抜けられぬ場面もあるよ。しかしばそれ以上の切札を作ればいいのではな？」

「使わぬでくさいよそれ…」
「使わぬのが一番だが、使わねば切り抜けられぬ場面もあるよ。そらばそれ以上に切札を作ればいいのではな？」

沖田の苦言にスカサハが乗じて言う。

簡単に言ってるが、俺の魔術特性などを鑑みれば、このより上上の破壊力はない。
俺の固有結界は対応力はあっても決定打に欠けている。
使わねばならぬ局面は今後、必ず出てくるだろう。
これを上回る切札を俺がどうやっつ？そんでものごが簡単に出来るなら、赤い弓兵の方がとっくの昔にやったはずだ。
戦闘センスではあちらのエミヤシロの方が数段上なのだから。
スカサハがにやりと笑う。

「先程儂が言ったではないか。捨ててしまうのか、勿体ない」と
待って、それは……
心配するな。これは遠戯や魂の在り方が具現化した類の宝具。呼び向けても『剣』の形をしておるのだから、『剣』の起源を持たぬ者は相性が良くない。それに人格の面食もまず無い。そうであるが、どうせお主の中にある霊基が影響を受けるのだろう。何せお主方が霊格が高いのだから……\n
けっ、鍛錬は必要であろうが、在存するか否かは、お主だけが持つ究極の一を生み出すかかもしれない。メイリットしかないと思うが。

う、そういう問題じゃない。ただの剣ならそこまで躊躇わないだろう。それは、英霊ジャヌ・ダルクの魂そのもののんだ。これは、剣が人類の心を生き出せるかかもしれない、これらの剣。

何を言うかと思えば……よいか？お主は如何に見る影もないほど劣化し、本来の十分の一以下の力しかない聖女であっても、それらを打ち倒して武器を奪ったのだ。それは戦果として誇ってもよい。それに、彼の聖女であれば、人間修復の為に使われるなら喜んでお主に協力するとは思わないか？それとも、かもしれないので……

それはそう、かもしれないが……

が、これは……これは、英霊ジャヌ・ダルクの魂そのものなんだ。俺だけに取り込むような分不相応というものだ。

それに、彼の聖女であれば、人間修復の為に使われるなら喜んでお主に協力するとは思わないか？それとも、かもしれないので……

が、これは……これは、英霊ジャヌ・ダルクの魂そのものなんだ。俺だけに取り込むような分不相応というものだ。俺が、英霊ジャヌ・ダルクの魂そのものなんだ。
「手に甘える形になるというのは……。」

「迷うな。どうあれその剣は、既に扱って勝ち取ったお主のモノで
しかないと。それをお主の為に使って誰が責められる。お主を助ける
資格のあるのは聖女のみで、その聖女はお主に敗れたのだから。な
ら誰にも責める資格はあるまい」

「あ。難儀な性格をされているな。
それでも私があそれに応じる。
炎の聖剣をスカサハに渡しながら英霊ジャンヌ・ダルクに語り掛
ける。俺は貴女を利用する。嫌なら拒んでくれ。と。
しかし——炎の聖剣は、原初のルーンを介してなんの抵抗もなく
俺の中に埋め込まれていく。信じられないほど何事もなく、かちり、
と歯車が噛み合ったようだった。

「バカな……」

「はあ。難儀な性格をされているな。
それでも私があそれに応じる。
炎の聖剣をスカサハに渡しながら英霊ジャンヌ・ダルクに語り掛
ける。俺は貴女を利用する。嫌なら拒んでくれ。と。
しかし——炎の聖剣は、原初のルーンを介してなんの抵抗もなく
俺の中に埋め込まれていく。信じられないほど何事もなく、かちり、
と歯車が噛み合ったようだった。

「バカな……」

「はあ。難儀な性格をされているな。
それでも私があそれに応じる。
炎の聖剣をスカサハに渡しながら英霊ジャンヌ・ダルクに語り掛
ける。俺は貴女を利用する。嫌なら拒んでくれ。と。
しかし——炎の聖剣は、原初のルーンを介してなんの抵抗もなく
俺の中に埋め込まれていく。信じられないほど何事もなく、かちり、
と歯車が噛み合ったようだった。

「バカな……」
その抵抗もしなかった……？
それどころか、積極的に欠損を埋めてくれているようではないか。
その力を使いこなしてやるのが、《我がマスター》に出来る唯一の報い方だろう。執行した私が責任を持ってマスターを鍛え上げる。否と言うか？
いや。それでもまさかだ。これで尻尾を丸めるようだとジャングル・ダルクだけじゃなく、これまで俺を支えてくれた全ての人達に顔向けできなくなる。
もとよりだった。
どうせ無茶な旅をするなら、荷物と期待は重ければ重いほどいい。分け残りと残るはずだ。俺の答えに、数多の英雄を育て上げた女王は不敵な笑みを湛える。
彼の世界有数のキング・メーカーとの合作となるのか。腕が鳴るな。
ブラック上司土郎くん！

映画の国の女王スカサハを味方に出来た。これは充分な成果である。

故に『人類愛』の待つ城へ早急に帰還する事にしたのだ。

随分お早いお帰りですね、マスター。アルジュナのそれは皮肉な台詞だが、表情は苦笑の形である。一ヶ月ほどかけ十日も経たずに帰還したかと思えば、アルジュナに匹敵するサーヴァントを一それも元はケルト側であったスカサハを連れてきたのだ。マスターは天運を味方につけているのではないか、そう思ってしまいます。

ルジュナの言葉に俺は呆れた。

天運なんてものがあるなら、どんなに楽か。俺の場合はどう考えても悪運だろう。辞書にある「悪い事をしても報いがなく、意外に恵まれた強い運」というのでなく、文字通りの「悪い運だ。人混みを捲き分けるカーターが駆け寄っている。その表情には重責から解放されたような安堵の色が滲んでいた。

「B O S S ！お帰りなさい！」

ああ。……まったく、安心を表情に出すな。馬鹿垂れ。

苦笑してカーターの額を小突いた。照れた風に笑うカーターに、

まだまだだんだんと思う。この調子では当分安心して留守を任せそうもうもない。
新聞…？ 難民の数が増えている…？ いや報告がな
いという事は気のせいか…？ おそらく事実と
来ていないという事は気のせいだろう。
「報告はあるか？」
「はい。六日前になりますが、サーウァント・タイプの敵軍が攻めて
来ました。Ｆ戦の敵が攻められた。この事は気のせいだろ。
「報告はあるか？」
「はい。六日前になりますが、サーウァント・タイプの敵軍が攻めて
来ました。Ｆ戦の敵が攻められた。この事は気のせいだろ。
「私は…二百か。アールジュナ、シータ、こっちに。ブリーフィングを
する」
「私は…二百か。アールジュナ、シータ、こっちに。ブリーフィングを
する」
「私は…二百か。アールジュナ、シータ、こっちに。ブリーフィングを
する」
俺はカーターとエドワルドが来るのを憂天を見上げながら待った。風が少し強く、冷たい。気を利かせたスカサハがルーンの結界を張って風を絶ち、微弱な熱を発するアンサズのルーンで暖化してくる。有りがたいが、本当になんでもありの万能さだ。なんならば城の内部を、外の寒さと切り離してやってもいいぞと嘯いている。是非頼みたい。
カーター達が登ってくると、最上部という最も高い場が暖かい事懸た。さて、「人類愛初となるブリーフィングだ。各自忌憚のない意見を出してくれ。」俺、沖田、カーター、エドワルド、シーダ、スカサハ、アルジュナ。僅か七名。内三人はただの木製の卓だ。椅子に腰掛け、席についた全員を先ず口を切る。俺は俺が留守の間の報告を聞く。敵襲に関してはカーターから聞いた。アルジュナ、敵サーヴァントの特徴は？全員が女性でした。そしてケルトの雑兵の方がまだ手強いレベルではないね。ままず俺が留守の間の報告を聞くと、最上部という最も高い場が暖かい。これは本当によだ木製の卓だ。椅子に腰掛け、席についた全員を先ず口を切る。俺も百のサーヴァント・タイプの難魚を蹴散らしてあるが、そこも一致するな。スカサハ、今まで寄って聞いていなかったが、ケルトの首魁はメイヴで合っているな？
「……」
「……」

自分が取り込んだ者の遺伝子から、それを作製して大量の兵隊を生み出した。この力を聖杯で異常に強化させ、この大陸で暴威を振るう。しかし自身は強化されたいま。この力と聖杯の組み合わせで、奴の切り札である『二十八の怪物』の枠に魔神柱を押込んで役立てる。聖杯が健在なら、何度死んでも可能であるだろう。そこでもしこう一人的首魁がクー・フーリンだ。こちらは説明無用だろう？尤も、私は《アレ》よりままだ上があろうと睨んでおるがな」
目を細める。

別段声を荒げた訳でもないのに、エドワルドは顔を真っ青にして口ごもった。

「も…申し訳ございません。穀物の蓄えのチェックをしていって…」

「言葉をするな。それは部下や、雑用につけても出来る仕事だろう。そちらの業務のトッポにお前にをつけた、トッポならない。自分のすべき仕事ヌらは選別しろ。優先順位を間違えたら。エドワルド・シジュピッツ、今回は許すが次からは同じミスをするなよ」
「…続けを」
「…さー最初はただの口論だったようですね。なんでそのジョナサン・ホークウィッツという男、大陸軍の軍人だったりしょく…階級中佐で、最上位の自分がこの集団のトップに立つべきだと。シーサさんや、アルジュナさんに自分の指示に従えと…高圧的な振る舞いをしていました」「ほぅ？」

シーサさんを見ると紅蓮の少女は苦笑いをしていて。事実ですと証言がある。

「真っ先にイーサンが反発し、ジョナサンはそれに武力を応じまし
た。イーサンの顔を張り倒したのです。」

「…私たちは対処出来る位置にはおらず、また数も少数で
した。敵襲があったからです。」

四日前に受け入れたというと、ケルト戦士五千が攻めてきた前日
それが…ジョナサンってのはどうした…？いきなり死んだ？
処罰はどうしたかと言っている。まさか何もしていない訳ではないし…。
現在は仮設医療施設に寝ています。左脚を骨折してあるようです…。
「分かった。処罰はどうした？」
「その辺は…ジョナサン・ホークウィッツ中佐は、リンチされ
て脚を折られたはずです。罰を与えるのは流石に…。
「誰がその話をした。ジョナサンをリンチした側への罰はどう
したと話している」
「えっ？　あ…々、何も…」
「――閑けっすっ！」
卓に拳を叩きつけ大喝した。怒声を張り上げるやピリピリと攻城塔が震える。エドワルドが椅子に座ったまま腰を抜かした。隻眼を見開き、眼力を込めて叱責する。あってはならない事だ。見過ごす事は許されない。

「先に仲間に手を出されたからと、一人を相手に多勢で私刑を加えた者達を咎めもしなかったのか。」「し、し、しかし、B O S S の指揮権を侵そうとした中佐は、罰されるべきでは……」「真性の間抜けか貴様？確かに軍権を侵そうとする者は罰せられるべきだ。しかし何事にも踏むべき手順というものがある。それを見逃して方針を断つ事はあってはならない。前や難民達が俺を慕ってくれているのが嬉しいが、忘れるな。俺達は独立した組織ではない。あくまで他に行き場のない者を保護し安全圏に移るまでに優先する。大体、俺は正式な軍人でもなんでもない。ジョナサンからすれば俺達兵士は自分に従って当然だ。それは如何なる事情があれ、一方的な私刑を加えてなんの咎もなれないという悪しき前例を作ってどうするか。非常時だからこそ綱紀粛正は徹底しろ。エドワルド、今すぐに私刑に加わった者を集めるべき罰則を与えろ。合法化される私刑など存在しない。存在さえもいけない。……分かったなら行けッ！」
「・・・立派に将軍らしく振る舞えておるようだ。マスター。
茶化すな、スカハ。こちとら頭が痛いんだ。なんだってこま
場から、留守の俺からトップの座を代わろうとしただけだろうに。
それでもマスターは、彼らにとって大きな希望なのでしょう。命
を救われた、保護して此処まで連れてきた俺に、彼らはマスター
の指導力に心酔して、だからマスターの立場を脅かす存在を受け
入れられなかったのだと思います。

・・・そこまでか？俺は当たり前だけだってぞ・・・？
マスターはご自身の評価が甘いか、カーターの肯定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか。

・・・マスターはご自身の評価が甘いか、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか。

・・・マスターはご自身の評価が甘いか、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか。

・・・マスターはご自身の評価が甘いか、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか。

・・・マスターはご自身の評価が甘いか、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか。

・・・マスターはご自身の評価が甘いか、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか。

・・・マスターはご自身の評価が甘いか、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか。

・・・マスターはご自身の評価が甘いか、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか。

・・・マスターはご自身の評価が甘いか、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか。

・・・マスターはご自身の評価が甘いか、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか。

・・・マスターはご自身の評価が甘いか、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか。

・・・マスターはご自身の評価が甘いか、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか、義理の言うこともあれば、カーターの否定はそれがあ
るか。
賛辞していった。こそばゆい率直なそれに、俺は顔を顰めるしかなかった。

英雄なんてガライじゃないってのに……。そんなものに成りたくて、こんな馬鹿げた戦いに飛び込んだ訳ではない。俺が英雄かそうではないとかいう話ではない。俺は喫払いをして、仕切り直す。

舵を切り直した。

「……カーター、他に報告は？」

「いえ、何もありません！BOSS！」

同胞であるエドワルドが叱責された直後ゆえか、妙に緊張している。

余り俺だけが案を出すという場にはしたくないんだが……出来ればカーターも考えていてもしかった。

「防衛線の構築、退路の確保」が一つ。敵に攻められる度にこの城を危険に晒していれば、一度の失敗で全てを失いかねない。これは余り俺だけが案を出すという場にはしたくないんだが……出来ればカーターも考えていてもしかった。

異論はないようである。彼らにも挙げたい議題はあるのだろうか。

余り俺だけが案を出すという場にはしたくないんだが……出来ればカーターも考えていてもしかった。

「兵站の確保」が二つ目。これも可及的速やかに解決せねばならない。直接的な脅威である外敵の排除と並列して、こちらも確立しなければならない。なんとかしてもだ。これはスカサハに任せようと思っている。なんとかしてくれ——
反駁するスカサハに、鸚鵡返しに繰り返す。
「なんとか、とは？」
「なんとかだ」
「なんとかか、と/or とかは？」
「なんとかだ」
反駁するスカサハに、鸚鵡返しに繰り返す。
ほんとなんとかしてくださいスカサハさん――その切る願いか分かった。やれるだけの事はやってやろう。土壌や種子に手を入れ、これを植える。どれほど過酷な環境だろうが関係なく育ち、二ヶ月周期で収穫出来るものを作れるか試みよう。成功すればひとまず食える事はあるまい。城内の一部区画を異界化させるぞ？そこで色々と試すのに一週間、経過次第で導入する。それから一つ目の議題で上がった防衛線の構築も請け負ってやろう。流石にこの城は脆すぎるので。時は掛かるが、いずれ神代の城並みに頑強に組み換えのあるも面白い。それと平行してこの城を中心に砦を幾つか建てればいいが、それらはマスターや兵士、それか民の仕事とすればよい。
「驚きましたね」
「……本当になんとかなってしまいそうだ。これからは『流石でスカサハ様』を『人類愛』の標語としよう」
「なんとかか、とは？」
「やめんなっ」

スカサハは気恥ずかしげに顔を染める。持ち上げられるのは恥ずかしい。

「三つの目的は『兵士の練度の向上』だ。カーターも自覚はあるだろうが、お前達の練度は高いものではない。今のままの練度では、いずれ俺達全員の手が回らなくなり、お前達だけで行動しないといけなくなった時に困った事になる。」

B.O.S.Sはそのような時が来る、と。

あるいは、俺が声を上げるだろう。サラヴァントや俺だけが死力を尽くす……それだけでは越えられない事態が……いつか必ず起こる。

断言した。根拠は怪しいが、トップの人間は責任の所在と発言を曖昧にしてはならない。

必ずそうなる、必ずそうする。明言し続けねばならないのだ。

こそに災害は起こらない方がいいが、起こって欲しくないから問題点を考え出すのを放棄し、思考停止して備えないと愚の骨頂である。

故に兵士の練度を上げておくのは必須の備えだ。必要不可欠の力となると、俺は確信している。

「お前達からは何かあるか？」

「お前達からは何かあるか？」
現状俺が提起する問題は以上だ。本当は他にもあるが、皆から挙げてもらいたい。
沖田が手を挙げた。カーテーを挙げようとしたが、遠慮したらし
「あ、じゃあ私からいといですか？
あ、じゃあ私からいといですか？
そうなんですか？
と小首を傾げる沖田に微笑ましくなる。なんと
いうかその一挙手一投足が活発な少女らしく映って可愛らしく思
「はい。えっこ……人住まうところに罪ありきってわけじゃないで
すけど、騒動が起こる火種っていうのはどこにでも転がってゐぱ
です。ですので、この城……名前なんでしたっけ？
「話を脱線させるなよ？ 名前は知らん。カーテー達も知らないよ
だからな。名前が天国の外側とでも名付けるか？
「冗談めいて言うと皆が苦笑いを浮かべた。確かに天国の外側にあ
りそうな現実だ。
「ま、沖田さんとしては名前なんてなんでもいいんですけど。とも
かく、警備隊を発足させるべきなんじゃないかなんて思いました」
「あ」
沖田の発言にカーテーが間の抜けた声をあげた。
どうやら同じ事を言おうとしていたらしい。俺としてはきちんと
そうだな。軍で言えば憲兵に当たる部隊は必要になっている。春風に言えば『新撰組』か？あは、ここがあ！新！撰！組だぁ！って土方さん風に荒ぶっちゃいそうでですね！うーん、ありかもしません！いっぱい荒ぶっちゃいそうでですね！
「誠の旗」を立てて、本物の新撰組で警邏隊を引き受けちゃいましょうか？」却下だ。常に道具を発動し続ける気か？平時は一中隊を警邏に回すとしよう。訓練はお春がつけてやれ。それと・・・そうだな、よい！お願いしますねー！と沖田の天真爛漫な笑みを向けられ、シータも微笑みながら応じた。案外いい組み合わせかもしれない。性格と能力を鑑みても、
「カーーーーーーーターも同じ事を提案しようとしてくれていたんだね？」は。しかし他の思い付くものはありませんでした。申し訳ございません。気にするな。考える事を止めなければそれもいい。一応確認した。
－2004－

他にはあるか？…ないみたいだな。なら役割を割り振るぞ。
シーグ、お春、スカサハは今言った通りでいい。カーターは今まで
通だ。後でエドワルドにも伝えてくれ。

－は！－
－アルジェナは窓際族だ。基本的に二十四時間体制で周囲の見張り
を－
－お引き受けしましょう－

－おう！－
－頼むぞ。俺は全体を見て回るから、口出しする事は多々あるかも
しれないし、逆に何もないかもしれないが…仕事をしてない訳じゃ
ないから目くじらを立ててくれるなよ－

－あっ！－
－待って。待てマスタ－
－…待って。待てマスタ－

こめかみを揉みながら、スカサハが待ったと言う。
心なし、冷や汗を掻いていた。気持ち顔色が悪い。「私の仕事が...少しばかり多すぎはせぬか？」「ん？全面的に協力させてくれ...言ったよな？」にこりと渾身の笑みを向ける。数瞬見詰め合う。暫し沈黙が流れ、スカサハは心底仕方無そうに肩を落とした。...「分かった。やってようではないか。...覚えておれよマスター...」生憎と記憶力には自信がないんでな...「怨むならその万能さを怨む方がいい...」にこりと渾身の笑みを向ける。数瞬見詰め合う。暫し沈黙が流れ、スカサハは心底仕方無そうに肩を落とした。...「分かった。やってようではないか。...覚えておれよマスター...」生憎と記憶力には自信がないんでな...「怨むならその万能さを怨む方がいい...」
今日もひっそりと、墜ちていくように眠りに就く。
その心は不朽、その眸は無尽。
剣の如き男とも、休息の時は訪れるのだ。
朽ちずに在る為に、力尽きずに立つ為に。
就寝したその時だけは、
鋼を磨ぎ直す安らぎである。
しかしこの魂には片時も休らげる時など訪れないのだ。
我が身の研鑽を止ませる安息は一切不要。
果する練磨は収斂へ広がり焦げた野原。
黒ずんだ蒼穹。
永久に廻り続ける歯車の下に佇む。
裏返った楔を包む紅蓮の炎が、欠けていく心の芯を照らしている。
不意に聞かれた青年の詩が聴こえてきた。

「星の内海。物見の台。
楽園の端から君に聞かせよう。
君達の物語の旋律は苛烈な業火の調へである。」

「氷の内海。物見の台。
楽園の端から君に聞かせよう。
君達の物語の旋律は苛烈な業火の調へである。」
祝福に満ちていると。

果たしてそうなのかと苦笑する。

お客様だ、夢の世界に押し掛ける困った奴。醒めれば記憶に残らない幻のような彼。

純白の衣、純白の髪。無垢な笑みを湛えた青年は、その実非人間の人为でなし。それはなかなかどうして、人間の生み出す文様を好んでいる。

例え人間を愛していておらずとも、人間の生み出す文様を好んでいる。

「―罪無き者のみ通るが良い。『永遠に閉ざされた理想郷』」瞬間、剣の丘を埋め尽くす花の園。咲き誇る綺麗な花弁。

フィルムを切り取ったように忽然と姿を現した花の魔術師に、男は気安く声を掛けた。

「よう、マーリン。また来たなー」「来たとも。エミヤ君。おはよう。それともこんばんばんか。起きる度に遅れて、寝る度に思い出して流れはどうなんだが。」
苦情をつけるべく物申す男の名はエミヤシロウ。
こうしてユメのセカイで邂逅するのは初ではない。毎夜人知れず開かれる理想郷の鍛造期間は、他ならぬマーリンがシロウの為だけに設けた作成時間だ。英雄作成、王者育成。シロウの紡ぐ文様はマーリンの嗜好をそのまま象としている。歴史を渡る彼へと懐いた憧憬に、多少の躾もう罰は当たらないだろうと嘯いて。夢魔のマーリンは個人的に肩入れしていた。

そんな彼は、男の文句に肩を竦める。

「君は人間だ。この一夜のユメを引き伸ばして、三週間とする時間の差は君の精神を疲弊させるだろう。だから起きた頃には何もかも忘れてしまいがい。ここで学んだ事だけを持っていて、結実する時に、全て思い出すのがベストなのだよ。」
眠ったはずなのに疲れが取れないなんて、そんなのまるで拷問だろう？優しいマーリンお兄さんはそんな酷い事はしないからね。

だが男は苦笑するだけ。悪態も吐く、弱音も吐く、激怒して本気で殺そうともする。無理難題の試練を課す畜生、悪魔、外道、屑。

罵倒のレパートリーはとっくの昔に品切だ。しかし男はこの人でないに限らず感謝している。このユメでの出来事は、きっと自分を助けてくれるだろうと確信しているから。
そしてその心に触れられる半夢魔は、だからこそ喜んでいる。
工なそれら竜巻のような不細工を綺麗なものへと変えていく足跡を。最初は単なる興味から、次第に異なる時代の文様にも渡っていって、遂に興味は憧れとなったのだ。
感謝しているのはこちらの方だとマーリンは思っている。
ариがあと、マーリン。貴方に感謝を。私がとって貴方は偉大な師だった！——それはなんて、皮肉なのか。彼女が膝を折った時、導いてやればいいなどと思い上がっていた自分に。遂に膝を折らず、祖国の滅びを食い止める事を諦めなかった少女は、マーリンに……その破滅へ導いた罪深き魔術師に感謝を伝えたのだ。
それははじめて、人でなしであるはずの青年に罪を自覚させた。
代価を支払うならば、奇蹟を得る機会を与えようという悍ましいセカイの契約の誘いに、王は手を伸ばしてしまったのである。
マーリンは絶望した。自分の仕出しかした罪によって一よりにもよって漸く気づけた、愛するに足る尊さを持った心が撃ち込まれてようとしている。
だが自分にはどうする事もできない。塔に幽閉されている自分に最後を迎えてなおも諦めないあの王は、いつか必ずその手に聖杯を掴むだろう。そうして契約の通りにあの心は、アルトリアといいう尊い者は、セカイの歯車に組み込まれる。だから彼女は選定の日のやり直しを望むという。自分が王だったから国は滅びたのだが思い込んで、己の存在を否定してしまう。それでも人は認められるものではなかった。
だが塔に幽閉され、視る事しか出来ない彼は、救いのない終わりを座して見守るしかなかった。そうして何もかもを見届け、その全てを記憶し続ける事が己に与えられた罰なのだと受け止めながら、他にもどうしようもない。
しかし一いつようし！ 美しい、なんて奇跡だ！一体どうなっているんだこのセカイは！？ まさか、まさかそんな結末があるなんて！
ギー全たずっも力のアロて。
信な謝でる霊ウとじだ。
消たこいマー支トリのリ少ら少い喜そにうて、
年びがユのし怙とをとる。
感漫に方向のは男て、奇る。
は、しイ相カのデ救喚の力アそは、
全しなえ分イのび許でそた。
感へちし彼の剣喚の力ア
は、を

『うかごににんの日カ手
は、出エ願るは、サ
派の相を、再
』
で自分自身の里から溢れて来たような情動に浮き足立っていた。

「さて、今更君に座学の必要はないよね」

「なぜ、今更君に座学の必要はないのね」

何故か胡散臭いと嫌われる事の多い自分に対して、あくまで気さ
くに接してくれるのは喜ばしい。何せ彼には嫌われたくないので、
好感度が高いようであるのは、マーリンとしても喜ばしい事である。
しかしこの時間は無駄には出来ない。最大限有効に使い、彼がこ
のユメの中で過ごす三日間の体感時間をフル活用して鍛える必要
がある。そして残り二日分の時間のリソースを眠りに費やしても
なら、その精神を安らげねばならないのだ。

マーリンは気を取り直して、教鞭を振るう。何を隠そうこの花の
魔術師は、アルトリアを王として完成させた剣の師でもあるのだ。

僕はキングメーカーだけど、何も君を王とするつもりはないよ。
というか、その素質は皆無だね？」

「ぼっとけ。知ってるさそれくらい」

ふふ、と軽薄に微笑むマーリンに男は呆れぎみだ。何を今更言い
出すのかと。

というか、僕の扱う魔術は、教えた所で君には使いこなせないだ
ろ。形だけの会得だって出来ない。

「かといって僕の扱う魔術は、教えた所で君には使いこなせないだ
三流魔術使いで悪かったな……

エミヤ君は魔術使いでなく、どちらかというと異能者側なんだ。固有結界にだけ特化した魔術回路で、難度の高い魔術を習得するのが人の無駄でしかないよ。付け焼き刃にするのにすら君の世代では不可能と言っている。そこは君の子供に期待する。なぜそれかね。

-- 一いつ--

-- 一いつ--

-- 一いつ--

ナントなく不安げにする辺り、男にその手の心当たるはあったり、安心得いのか、どうなのか、男はどう思うか悩ましばったが。今はその話は横に置いていいく。

-- 一いつ--

話に戻すとして、王者としての帝王学も無用だ。実利的な知識はもう持ってあるだろうし、何より王の資質すらない君に、王に相応しい格を持たせるのかは無駄なんだよね。

-- 一いつ--

安心していいのか、どうなのか、男はどう思うか悩ましばったが。

-- 一いつ--

将だ。指揮官だ。マスターとしてはの力量は現代の誰よりも高い。
人々のエネルギーを繋ぎ合わせ、一撃に集中させた攻撃では、飛び越える-statesが流れる。名から中堅の英霊と同等かそれ以下の力格であるにも関わらず、個人で持ち得る戦力の運用と戦闘センスで、近接戦でも騎士王相手に防戦を成立させるまでになっている。その「戦う者」としての才覚が指揮官としてのそれに脈っているのだ。平凡であるはずがない。

戦士として鍛えるのは影の国の女王の役目だろう。だからという手を抜くのを嫌がる心は、マーリンがこの男に施し、研ぎ澄ますのは異能に近い固有経験の収穫である。魔術回路を補強し、魔力ソースを底上げさせ、彼の中にある霊基に負うまたともいよい手回しも徐々に行っている。そうして他にもある。人理焼却からも免れている妖精郷にいるマーリンは死ぬ事がない。英霊ともならないが、あるクラスだけが持つ単独観念的スキルを独自に習得している。そのサーヴァントとしての技能で、マーリンは彼の魔術行使の練度を底上げさせていた。それは「英雄作成」の技能である。

影の国の女王は、その技能である「魔境の智慧」によって、英雄スカサハと密談し、最新の英雄の育成プランを練っていた時に出た。彼女は自身が真に英雄と認めた相手にのみ、スキルを授ける事も出来らしい。既に英雄であると認めていると、彼女は言っていた。一方はそんなからの技能を授けるのも面白いかのような

(- -)
錬鉄の弓兵を超える英雄を育てるとは言わない。あの弓兵は「エミヤシロウ」の極致に到っている。無限の剣を操る戦士だ。「エミヤシロウ」は、あれ以上になれない。途方もない修練の果てに限界を超えて、神秘の薄い未来世界の英雄であるにあそこまで到っただから。

故に目指すべきはあの弓兵とは異なる極致。無限の剣による究極の一ではなく、収斂した一による窮極こそが、最新の英雄であるこの男の目標すべき場所。

彼は兵士ではなく、戦士でもなく、騎士でもない。故に成るべきはあらゆる憑依経験で無限を束ねた剣士である。その一点に於いて、才能の如何で問うべきではないのだ。剣士としての才覚はこの男にはないが。それを鍛え上げて、その異能の極限に適合させ、臨界点の超克を果たすのがマーリンとスカサハの出しました最果だった。

その未熟を超えて、完成させる事がマーリンとスカサハの仕事だ。
とある人物と戦ってもらう。

「最期はアルトリア、次にクー・フーや、さらにヘラクレスと来て、英雄王、今度はコイツか…？」「そうだ。今度も殺されながら覚えるといい。いや、マーリンお兄さんは親切だなぁ！幾ら負けても殺されても構わない。修行の相手を取り替え引っ替え！こんなにも賢智な師匠を抜きってあげるのはうら。

つまり、習うより慣れる。アルトリアにしたように教え導くには、彼は余りに才能がない。故に、その鉄心の男を鍛え上げるものは、まさに鉄火場こそが相応し、ユメのセカイに於いて、全能であるマーリンがその花園に象ったのは幻である。しかしその幻を限りなく実物に近づけ、実体を与え、さらに如く大きな刀を持つその侍は、与えられる仮初めの真名を佐々木小次郎という。得意の絹毯爆撃も厳禁された。

マーリンは満面に笑みを浮かべて言った。
んで、まさに出血大サービスとはこの事だよ？
うるせえ！ 出血してんのはこっちだろうが！ 这の鬼！ 悪

魔！ マーリン！ てめえ畜生ほんと覚えてろよ！ もう何回
斬り殺されビームで蒸発させられて心臓穿たれて射殺されて捻切ら
れて撲殺されて絞め殺されて串刺しにされて粉微塵にされてると思
ってんだよ！？ 今度は斬首ですよ！ ほかそですね！ すか地獄に落ちるこの野
郎！ ところで斬首ノルマは何回なんですかーーー！

ざっと千個、自分の首が並んだのを眺めるのも、なかなかに乙
ものかね

侍が馳せ、男の首が舞った。男の幻の首が一つ、並べられた瞬間

である。

藤姉ー！ イリヤー！ 助けてくれえええええええええええええええええええええええええええええええええええええ

侍が馳せ、男の首が舞った。男の幻の首が一つ、並べられた瞬間

である。

藤姉ー！ イリヤー！ 助けてくれええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええ

侍が馳せ、男の首が舞った。男の幻の首が一つ、並べられた瞬間

である。

藤姉ー！ イリヤー！ 助けてくれええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええええ
幕間「百人母胎」

「これ、百人母胎は、先の戦争と違う。
神の手により巣立ち、訣別を告げた原初の時代。
百獣母胎なる権能を持つ大地母神があった。
ティアマト、原罪のⅡ・ビーストⅡと呼称される。
回帰の理を持つ人類悪である。
「あは」

遠く、遠く、比較する事すら鴨がましいものである。
"あは"
「ああっ、あははははは、あっ！」

歓喜しながら激怒し、振り切れた感情のメーターが戻る事はない。
女は淫靡な仕草で自身の指を嘗めた。鮮血に濡れた女は、たった今
捕食した人間の男の臓物の滓を飲み干した。聖杯を孕む、英霊の座に接続して、サーヴァントを制御する事で
あらゆる男の戦士達の恋人となるようとしたが、そんな程度であらゆる
生命の母である大地母神の真似事など、とてもではないが叶えられ
るわけもなかった。
何せ命など産み出せない霊基だが。七つの聖杯を束ねたものはよりも、
なお上回る魔力炉心を持っている大地母神の足元にも及ぶまい。影
すら踏めないだろう。
どうしたって、限界がある。どれほど狂い叫ぶと成せぬものが
ある。所詮その身はサーヴァント、生前を越えられぬ影法師。
だがそれがどうしたという。足りななら、よそから持ってくるれば
いい。必要なのは何か？ 瀬基？ それとも魔力？ いいや、いい
や違う。必要なのは「命」だ。純粋に養分が足りない。
女王は号令を発した。この大陸を蹂躙する全ての兵隊の脳髄に直
撃される声ならぬ声を。
老若男女は問わないと、試行錯誤の結果、捕食という工程を踏む事
にしたのが、何も直接食べる必要はない。必要なのは命なのであ
って、その肉と血、骨は要らないのだ。ただ強力な兵隊を求めてい
るだけ。
老若男女が殺したいほど憎んでいる相手は、あの宝具を使った狂
王を深く眠りに落とすような存在。その正体なんて皆目見当がつ
かないが、なに、この大陸に存在する全てを殺し尽くせば自ずと相
対することになるだろう。狂王を長い眠りに就かせた罪を償わせる
には、まずその正体不明の敵ですらどうしようもない圧倒的な兵力
がいる。
かといって弱すぎたら話にもならないだろう。普通の兵隊では十
万揃えただとしてもあっさり殲滅されてしまいそうだ。
目の戦士に命じる。
「ねぇ、スパルタクス？私のお願い、聞いてくれるかしらら」
そこの戦士は青白い躰に数え切れないほどどの傷跡を持つ、筋骨隆々と巨漢であった。
真名をスパルタクス・トラキアの剣闘士にして、第三次奴隷戦争の実質的な指導者である。
彼を知る者なら驚愕するであろう。
その眼には理性的な光が点り、彼の物腰は紳士的それであったから、それは本来有り得ぬ態度で女王であるメイヴに「跪いている」。《絶対の忠誠と愛を抱いている》。《メイヴのためな隷属をも喜びとする》という、叛逆者スパルタクスという英霊には有り得てはならない性質を持っていた。
「お願いと言わぬで、どうか命じていいたきた、母よ。この私が、このスパルタクスが貴女に叛逆するものの悉くを抱擁しきう」
その姿に、メイヴはどこまでも純粋に、穢れぬことを知らぬ百会の如く、邪悪に笑む。
「そう？なら命じるわ。スパルタクスー貴方はこの大陸にいる全てのサーヴァントを殺しなさい。もちろん、無駄死にはダメよ？」にんまりと、下された圧制者の命令に、スパルタクスとは掛け離れた紛い物は。しかし本物のスパルタクスである剣士は笑った。
「では、百人の兵を賜りたい。我が恋人に叛逆せし愚か者を、この私が女王に代わって誅戦してくれよう」
自ら課した自分なりの意義に寄り添って、誰に理解されずとも信念を押し通す。
正義に寄り添って、誰に理解されずとも信念を押し通す。
法律に属するのではなく心に従う無法者。自らに課した自分なりの政策が正当な政策である。
それに応じて徒党を組のものよしとする。
格好つけ一匹狼と銘打っても、そんな呼び名に縛られず、必要に応じて徒党を組むのもよしとする。
そんなこんなで似た者同士、二人の一匹狼は徒党を組んだ。とい
うよリウマが合ったから一緒にいてもいいかと、殆どノリで決めた
ものがコインが決める。西に東に放浪三昧。とりあえずムカついた
鬼は決まってしまだ野蛮人。原始時代の勇者達。
つまるところ、根がお人好しかうアトロ。小難しい理屈なんて
ならなくて、腹が立ったら引き金も軽くなる。そんな感じで人助け、らしくないな
要らなくて、腹が立ったら引き金も軽くなる。善意の押し付け、要
らなかったって押し付けよう。そんな感じで人助け、らしくないな
と苦笑い。あれよあれよと祀りあげられ、気づけば辺鄙な村の用心
棒になっていた。
雪が降っている。大地は一面銀世界。真冬の気候は昼であっても、過酷なもの。しかしこの地に住み慣れた者にはいつもの事。

「うん、それには僕も同意見かな。最初は千、次に五千、更に一万。この間に五万だ。戦略に関しても素人もいいところの僕だけ、戦力の逐次投入が愚策なのは分かる。お陰様でなんとかやってこれたわけだけど……次は無理だろうね。」

「直ロビンの破壊工作がなければ、僕達だけで百人近い村人達を守りきられなかったろうね。錆ぶっ放すしか能のない僕じゃあ、とてもじゃないけど真似できないよ。」
平凡な光景だ。特筆するものない。映画にするとしても力
ずさまれるだろう、なんの変哲もない凡庸な景色である。
しかしそれを守った。あの、命あるものを皆殺しにする悪魔ども
から。ロビンとビリーは、そんなこんなでこの名もなき村に居つ
っている。
村人達には言っていた、訴えていた。
ここに居座っていたらいつかは皆殺しにされてしまうと。座して
死を待つばかりなら、新天地を目指して旅立つ方が希望があると。
彼らは知っていた。どこに行ってもあるのは地獄。悪鬼羅刹の如
き戦士達が、生けと生ける者を虐殺しているのだ。どのみち死ぬ
と分かっている、なら最期はせめて、住み慣れた村で死にたい。それ
が彼らの意思だった。

「一気持ちは分かるんですけどねえ……」
「どうしてこう、最後の瞬間まで生き残ってやろうって思えないん
だか」
「強い人間ばかりじゃないって事だね」
「んなことぁ言ってんですよ。嫌になるほどね」

ロビンはやるせなさを溜め息に乗せて捨てる。

「近隣はとっくの昔に全滅している。に゠拘らず村人達に悲壮感は
近隣はとっくの昔に全滅している。にも拘らず村人達に悲壮感は

「―気持ちは分かるんですけどねえ……」
「どうしてこう、最後の瞬間まで生き残ってやろうって思えないん
だか」
「強い人間ばかりじゃないって事だね」
「んなことぁ言ってんですよ。嫌になるほどね」

ロビンはやるせなさを溜め息に乗せて捨てる。

「近隣はとっくの昔に全滅している。に゠拘らず村人達に悲壮感は

――気持ちは分かるんですけどねえ……」
い。それは、彼らはもう諦めてしまっているから。ロビンやピリーいう明らかに人間を越えた存在が居ても、あなたの二人が言っている、護りきれないという事は、外に出ても同じという事ではないか。

「あ、ほんと嫌になるぜ」不意にロビンは顔を颦めた。遠くで落石音が聞こえたのだ。ビリーは拳銃を取り出し、弾丸を込める。深々と嘆息して苦笑いの表情でロビンに言った。

「ああ、トラブル仕掛け終わってすぐ来るなんて、なかなか意味な連中だと思わない？」「勘弁してくれよ……二日もかけたオレのトラップ、一夜と経た

「それでも働かなくゃ、だね。君の営を越えてきた連中を僕は撃ちまくる、君は影からちまちま弓を射つ、いつも通りさ。それでも今回は限りだけど、何せもうトラップに使えるもんが

「それからも大軍相手に真っ向勝負に立っちゃもうぜ。次の時はその時さと、飄々とビリーは笑う。いつも通りの少年悪漢王、それでも瞳の奥にある暗鬱な光は隠せていない。次は絶対護れないよ、その時に自分達はどうするのかと彼は訊いてい

表面は軽薄に。軽妙に。あくまで合理的に緑衣の弓兵は言う。
「そん時は見捨てるしかないだろ。人理を守るためにオレ達は召喚されているんだ。小さな村一つのために、その使命を捨ててわけにはいかねえよ～」

「…」

「なに、出来る限りの事はしてやったさ。これ以上骨を折って草臥が必要ねえ」

「…」

完璧にその内面を隠しきったロビンに、ビリーは掛ける言葉を持たない。

故に、ビリーは知っており。少年悪漢王は知っていた。その小さな村のために彼は生前、一国に歯向かった英雄なのだ。

ניוזלロビンはそんな内を押しだけた。ここれ以上骨を折って草臥必要ねえ。

「ソイツはいい、少し楽が出来るってもんさ」

「ソイツはいい、少し楽が出来るってもんさ～」

ビリーも立ち上がる。なんでもない散歩に出掛けるような気楽さ

ピリーも立ち上がる。なんでもない散歩に出掛けるような気楽さ

ピリーも立ち上がる。なんでもない散歩に出掛けるような気楽さ
二人は戦場に赴く。
この村の近辺を戦場にするつもりはなかった。残り僅かなる彼らの平穏を守るために、罠を越えてくる敵軍を殲滅に向かう。村人達は死ぬだろう。老い若いも関係なく、等しく皆殺しにされるだろう。だがそれまでにはせめて、心安らかに居てほしい。ささやかな祈りを胸に、英霊達は戦うのだ。

「なあ！」「はあ！？　幾らなんでもそんなアリか！？」

僅か百と一の敵の悪鬼を滅ぼすために。そうして戦場にたどり着く。そうして戦場にたどり着く。

驚愕は義賊のもの。罠の掛かり具合から、一万は下るまいと思うが、そっちは一點百騎だっただけに。罠で削られた兵力ではない。最初から百騎だけなのだ。何故なら、戦は戦で敵兵は少しも傷ついていない。先頭を単騎駆けている一騎のサヴァントが、ロピオンのトラップに《自分から》飛び込んで、兵士達が罠に斃れずにいようにしていたのだ。

小剣を手に、毒を喰らい棘に風穴を空け落石に押し潰され、なおもそれらをはね除けて進んで来る敵サヴァント。
罠が避けられる、捌かれる。或いは宝具や技能で無効化されたのならまだ分かる。
しかしトラップの全てが通用しているのだ。確実なダメージを負っている。とも関わらず、あの筋肉の塊めいた巨漢は笑みを絶やずに進んで来る。
傷つく度に傷は塞がり。二度と同じ罠が効いていない。小規模なものもその肉体に弾かれ、或いは反射されているのだ。そして自らが率先して罠に掛かることで、味方の兵士を護っていた。

完全に想定外の罠の破り方。罠に掛かる事を前提とした強行突破。

敵がたったの百騎で、一騎のサーヴァントがいると定めてもあるのだが。
なにせよやることとは変わらない。元々万軍を想定していたのだ。

一際高い丘の上から、迫り来る敵軍団。突撃して突撃してくる笑
顔の素敵な剣闘士は、明らかに孤立している。ロビンは相方に提案した。

「ああ、先にサーウィアントから襲われた方がいいと思うんだけど、どうだろう？」

「ん？」僕は構わないよ。それでも僕は正直考えた。君が横から撃ち殺す、これでどう？」

「いいぜ、スマートに決めちまおう。」

薄く笑みを交換し合い、ロビンは後退して丘の上から離れた。隆起した地面故に敵からはビリーノの姿しか見えなくなった。

ロビンは道具「顔のない王」を使用してそのまま透明になった。気配も遮断され、彼の発する音も消える。ロビンを完全なステルス状態とする緑衣の外装は、生前に顔や素性を隠して圧制者と戦った事に由来する逸話型道具だ。効果はシンプル、故に扱いやすい。単純に姿や痕跡を遮る事にだ。

でかくくると手の中の拳銃を回しながらビリーノ、ザ・キッドは思案する。間もなく筋肉達磨は射程圏、敵が剣を振りかぶったらカウンターで鉛玉を叩き込むのがスマートだ。

「どうもね。それじゃあ詰む感じだなぁ。」

傷するのは織り込みじゅうだろう。さらに物によっては反射もされてしまうように見えた。
一度食らったものは無効化するか、反射するかどちらかなのだろ。明らかに宝具による能力だ。であれば二度目以降は、その宝具を越えない限りまともに傷を負わせる事は叶うまい。頑強特殊の面倒な手合いで正直ピリーとの相性は良くなかった。

「だけど、ま……それならそれでやりようはあるってー」

嘯いて、ピリーは腰のベルトに銃を納める。極東の侍が使う居合は、それらを越えな限りまとえは負わせることに限った。後十歩……目を止めたが、どこにも似て居る構え。

後十歩……目的は足止め。真横から伏撃を食らわせるロビンが本命だ。例えば傷を塞ぐ、二度目以降は無効化か反射をしようとも、毒に対する耐性は分かるまい。少なくとも一度は必ずイチイの毒に侵される、その体内に毒を蓄積してある。ロビンの宝具が効果的だ。ピリーは今それに思い至ったが、ロビンは一目でこれがベストだと判断できたのだろう。流石に古い時代のゲリラは考える事が前にないなとピリーは苦笑いする。

―尤も？

―笑いながら神経を研ぎ澄ます。そして今、剣闘士がピリーの射程圏に侵入したーー
抜き手も見せぬ神速のクイックドロウ。発砲音はただ一つ、マズ
ルフラッシュが鮮烈に、心地よい反動が手に返る。
果たして剣闘士は無防備に銃弾を受けたか。銃撃手が仕掛け
tくのを肌で感じていたのだろう。正面切っての戦い、剣闘士
を出し抜くのは困難だ。彼は両腕を組み合わせ、小剣で頭部を守っ
tている。丸太のような腕が胸を固める鎧となっていた。
放たれた銃弾は三発。一つの発砲音が鳴り響く間に三連射の早撃
ちをしたのだ。一発は眉間に、これは小剣に阻まれた。だが二発目
は腕と腕の隙間、ほんの僅かな穴をすり抜け分厚い胸板に直撃し
tた。三発目は右膝である。膝と胸を撃ち抜かれて剣闘士は転倒した。心臓を確実に捉えた確
信がある。これでおしまい、ロビンに出番はないよとビルは笑う。
しかし、剣闘士は立ち上がり。
「－－」
立がる。《傷は癒えている。」「チィッ…！大人しく死んでなよ、食らっんらさぁ！」ビリーは舌打ちして悪態を吐きつつき飛び退いして後退した。
剣闘士は哄笑する。
「ははははははは！おお叛逆者よ！我が恋は人に歯向かう傲慢なる者らよ！汝らを抱擁せん！」
「冗談…！」猪突猛進に突撃してくる剣闘士。
更に弾丸を浴びせるも、今度は防御しなかった。
悉くが反射されまして。
ジグザグに後退するビリーが直前までいった場所を、ビリーの弾丸が貫いていった。
反射されいる。
ビリーの弾はもう効かない。そう思うのが普通で、しかしこの人は粋のアクトだ。そんな不条理になど屈しない。
出し惜しみはなし、反射や無効化の鎧に負けたりするものと彼は魔力を銃に込める。
宝具『壊サンダラー音の霹靂』のお披露目だ。
二度目の三連射はカンターだった。
剣闘士が小剣を振るわんと、眼前まで迫っくてきた瞬間に、ビリーは再び神速の三連射を放ったのだ。無駄だと言わんばかりに満面の笑みでスパルタクスは弾丸を受ける。
そう、無駄だ。
普通であれば。だがアクトは普通じゃあなりゃから。
一発目は眉間。反射されても弾丸を二発目が迎え撃ち、三発目が間髪もくずにまた眉間に。
パルタクスの宝具の守りを確かに貫いたのだ。それでも僅かに血が出た程度、抜き手も見せぬ神速の射撃術でさらそれが限界。その程だ。が必殺の好機は得られなかった。そこでこそが何よりも必要だったのだろう。

「ロビンッ！」「任せる。」「私が墓地はこの矢の先に。森の恵みよ……」「祈りの弓！」「顔のない王」によって潜伏していたロビンが宝具を使用する。真名解放と共に、右腕に装着した弓からイチイの木の枝葉が伸びた。スパルタクスは目を見開く。完全な不意打ち。イチイの木の枝葉はスパルタクスに絡まり巨木へと成長していた。スパルタクスが散々に罠から受けていたイチイの毒が散華していった。

巨木は成長し切ると同時に、スパルタクスから吸い上げた毒を吐き出しながら枯れ果てる。
剣の先が、急に止まった。

「……なあ。」

「『紅い夜の僕の庭園』。僕へと続く僕の恋愛の物語を、君が一緒に書こうか。」

剣を取り戻した剣士は、剣を地面に置いた。

「……ああ。僕も君の恋愛を、君と一緒に書こう。」

剣士が剣を拾い上げ、剣を地面に置いた。

「……でかい。君の恋愛を、君と一緒に書こう。」

剣士が剣を地面に置いた。
義賊の判断は早かった。敵の聖剣、その真名から決して敵う相手ではないと悟っていたのだ。
仲間を見捨て、村を見捨て、退くしかないと悩んだ。悩みたる思いも何もかもを省みずずに、兎に角逃げ去るか。
仲間を見捨て、村を見捨て、退くしかない。忸怩たる思いも何も考えずに、逃げ去るか。
「顔ノフエィス・メイキング、顔のない王」。
「フッ！'
させじと聖剣が閃く。姿の消えた緑衣の弓兵を、それか確かに捉えた。
左腕が舞う。鮮血が散る。しかし命は絶たず。白雪に足跡を残し、それを追って駆ける湖の騎士の剣閃はしかし空振りだった。
森に消えた。足跡はない。木上に飛び移って木から木へ、音もなさずに去った。枝の揺れもなく、軽やかに逃げているのだ。それを追いはしなかった。
何故なら彼には任務がある。長男であるスパルタクスは彼が追い付く寸前に討たれてしまったのだ。ならばせめて彼のもう一つの任務、資源の回収を果たさねばならない。
スパルタクスの兵の指揮を引き継ぎ、彼は村に向かう。
湖の騎士ランストロット・デュ・ラック。

女王メイヴィの《十三番目の子供》である。
清浄なる湖の聖剣に魔力が込められる。敢えてその魔力を放出せず、聖剣に負荷を掛けながら斬撃を見舞い、斬り付けた対象の内部で莫大な魔力を込めるが、彼の王や太陽の騎士の如くに聖剣から魔力を放出し、対軍規制の美しい一刀を成せぬ訳ではない。

もしその力が湖の騎士の技量によっただけなら、アロンダイトを用い一角最强の銘は伊達ではない。もし全ての円卓の騎士と一騎討ちを行えば、理屈を越えて彼を下せる者がいるとすれば、それは騎士王と、彼の王が世界で最も偉大な騎士と讃えたランスロットの才幹は単なるルーンマンの腕に於いてランスロットのみである。

円卓が湖の騎士の技量に拠って聖剣を扱われれば、アロンダイトを用いた魔力放出は威力の微調整をも可能とする。聖剣の刀身が青々と煌めい。取り逃しそうしたものの、剣を扱いとした緑衣の弓兵の腕を湖の騎士は微弱な魔力の放出を聖剣から行い、衝撃波によって跡形を探り逃しそうしたものの、剣を扱いとした緑衣の弓兵の腕を湖の騎士は微弱な魔力の放出を聖剣から行い、衝撃波によって跡形を探り逃しそうしたものの、剣を扱いとした緑衣の弓兵の腕を
もなくな消し飛ばした。万が一にも義賊が左腕を取り戻さぬように。-

この腕を放置し、あの義賊がサーヴァントを治療可能なサーヴァントか、もしくは魔術師と合流された場合、取り返されてもたら面倒だと考えての事だ。ランスロットは苦い表情を隠し切れない。自らに立ちはだかった義に頼るサーヴァントを斬ってしまった事に内念。悩むたる思いが見覚えの冷酷さが比べものにならない。

彼の中にあるのは、自らの兄弟達の中で最も早くに産み落とされた長兄スパルタクスの成した仕事が「たった三千の資源回収と、一騎のサーヴァント討伐」のみで終わってしまったのには悔しさを感じるが、後はこのラスロットが彼の分も働けばいいだけだ。長兄から指揮権を引き継いだ兵に村を襲撃させ、一人残らず捕縛し彼らの呪を食べることで家畜が何かを扱っているかのようだったが一それでも見れた。

ランスロットの目的には、女王への不満や村人への懐徳の情に交わった無関心。高名な騎士には有り得ない冷淡な、冷酷な表情。まるであの村人に達を人間だと思わないかのような徹底された無関心。
「…外にかっけく、似たようなイメージと墜落、及びがるされたラバ・エ」
「彼が人間としての在り方をそのままに、騎士としての在り方はそのままで。」
「ヴァントがケルトの兵隊、そしてメイヴと狂王のみである。それを以外は彼にとって回収すべき資源か、駆除すべき害虫でしかないのだ。」
「虫けら飼いに見える騎士道などあるはずもない。」
「感情、合理的な戦術思想、内面の騎士道。メイヴが最も気にしているそれが完璧な騎士である。」
「人の間違を運搬する。目指すは女王メイヴの待つ本拠地。今から帰る。」
「ランスロットは片手を上げ、兵道で歩みを止める。彼方より飛来するようにして現れ、眼前に着地して砂塵を舞わせたサヴァントがいた。」
と魔力を充填し始める。問答無用の戦闘体勢にその赤毛の少年は身構える。しかしランスロットは応じた。

駆除すべき害虫。しかし手強いと鋭く見抜いた彼は敢えて口を開いた。本当なら害虫と口舌を交わす義理はないが、この手の虫けらには覚えがあった。敵を前にして問いを投げ、悠長に会話をしようとする姿勢。涙がそうなるほど懐かしい気もする。しかし彼は合理的に、その会話の間の時間を利用する。

突然現れたかと思えば、無用な問いを投げ掛けてくるとは。貴公の手にあるその刃は飾りなのか？

「答えよ！ その答え如何によっては、余は貴様を討たねばならん！」「…ふむ。まあ答えてもいいか…。

魔力の充填は完全に終えている。しかし聖剣に魔力を込めていた魔力の充填は完全に終えている。しかし聖剣に魔力を込めていた聖剣である。ランスロットは勿体ぶつつつ、何気ない仕草で堂々と正面から不意を突く。

「彼が敬愛せし女王陛下の許に、この資源は運搬している。貴公は、彼が化けているのは己自身、しかし得物は槍であるように見せ、そして隠蔽しているのは限界まで既に充填してある聖剣である。ランスロットは勿体ぶつつつ、何気ない仕草で堂々と正面から不意を突く。

「彼が敬愛せし女王陛下の許に、この資源は運搬している。貴公は、彼が化けているのは己自身、しかし得物は槍であるように見せ、そして隠蔽しているのは限界まで既に充填してある聖剣である。ランスロットは勿体ぶつつつ、何気ない仕草で堂々と正面から不意を突く。

「彼が敬愛せし女王陛下の許に、この資源は運搬している。貴公は、彼が化けているのは己自身、しかし得物は槍であるように見せ、そして隠蔽しているのは限界まで既に充填してある聖剣である。ランスロットは勿体ぶつつつ、何気ない仕草で堂々と正面から不意を突く。

「彼が敬愛せし女王陛下の許に、この資源は運搬している。貴公は、彼が化けているのは己自身、しかし得物は槍であるように見せ、そして隠蔽しているのは限界まで既に充填してある聖剣である。ランスロットは勿体ぶつつつ、何気ない仕草で堂々と正面から不意を突く。
『あの優しい騎士』

「……」
「…………」

『叛逆の男』

「…………」
「…………」

『宝』

「…………」
「…………」
間に使用する切り替えの早さ。それは少年をして戦慄させるに足るもので。武の祝福を宿す少年は屈み剣を地面につき、体を支えながら蹴りを騎士へと見舞う。
これに騎士は腕の籠手で応じる。易々と防ぎ、少年の矮躯を反撃の刃で両断せんとした。切り返しの早さが尋常では無い。なんとか真紅の剣で防いだ少年は飛び退いて、怒りに燃えて騎士を糾弾した。
「卑怯者め！姿を隠して不意を突くとするとは、貴様はそれでも騎士か！？」
「…ええか、…余には伝えねえぞ…貴様は苦しんでいるな。主とするものに洗脳でもされているとしか思えん。ならば…このラーマが貴様を苦しみから解放してやる…！」「…彼の理想王ラーマか。みすみす真名を晒すとは、愚かなる」
鼻を鳴らし、ランスロットは聖剣を構えかけ……しかし剣を下ろした。ラーマは訝む。またしても不意打ちを行う気を。
今度は自分から仕掛けるべく四肢に力を込め、ランスロットは嘯いた。
流石の私であっても理想王ラーマは手強い敵だ。故に——

「流石の私であっても理想王ラーマは手強い敵だ。故に——」

「従員、湖の騎士よ！」

「来援感謝する、弟よ。」

「ッッッ！？」

瞬間、ラーマの肩に灼熱が奔る。悪寒が過ぎ、身を揺れていた故に心臓を穿たれなかったが、それは『背後からの奇襲』だった。

槍の軽先が後ろから左肩を貫き、直後、横腹を凄まじい威力の蹴撃が抉っていた。

吐瀉を吐き散らし吹き飛んだラーマは、地面を削りながらなんとか体勢を整える。そして不滅の刃を構えて追撃に備えた。だが追撃はなかった。現れた二騎目の敵サーヴァントは、ランスロットの横に動していなかった。

その槍兵は俊敏な体の動作を阻害しない、黄金の鎧を纏っていた。

「よ、来たぜ兄貴。」「ぐアッ！」

「よ、来たぜ兄貴。」「来援感謝する、弟よ。」

「ッッッ！？」

「従員、湖の騎士よ！」

「流石の私であっても理想王ラーマは手強い敵だ。故に——」
孔雀のような羽飾りのあるコリュス式の兜を被り、重厚な丸楯を左
手に持っている。

銳利な長槍は英雄殺しの槍。視界に映る全てを間合いとする彼は、
遠くに戦闘に移った兄を見掛けて駆けつけたのだ。

彼の真名はアキレウス。トロイア戦争最強の大戦士にして、メイ
ヴァが召喚したセーヴァントの中でも最強を誇る存在。此度の強制召
喚ではエクストラクラスの盾兵として召喚されていた。

「貴卿の任務は？」

「俺の任務は？」

ランスロットは淡々と訊ねる。その声音には抑える気のない親愛
が滲んでいた。手の掛かる弟に対する兄のような態度で。それにア
キレウスも満更ではない。アキレウスは弱者を兄と敬う気はないが、
自分より先に産み出されたセーヴァントの中、彼だけを兄と呼ぶ
ほとに認めていたのだ。

何せ彼の聖剣は神造兵器。アキレウスの銃でやられた武器。そし
てその剣腕もまた、最強を自負するアキレウスが称賛する領域に
あった。その知略。武力。精神性。兄と呼ぶのを吝かではない。

それは勿体ないな。貴卿の指揮の手元も高いものだというのに。

「その貴卿ってのやめてくれ。ムズムズしちゃう。なんて事より、兄
貴が助かるっつう相手は何者だ？まさか俺の槍を奪きやがるとは
ならぬ。」

「ラーマだ。愚かに自分から名乗ったぞ。」
言葉の力を持つ槍兵が加わるのだ。圧倒的な不利であるのに、そこに凄まじい速力を持つ槍兵が加わったのだ。

「二人懸かりで行くぞ、弟よ」
「俺にだけ任せる気はねえのかよ？」
「俺が負けるとでも？」
「違わない。我らが譲れとすべきは成果のみ。であれば個人の愉悅は先すべきではない。理想王は強敵だ。万が一を考えれば確実に仕留めるべきだろう」
「…もう…兄貴がそう言うなら、そうするさ」

「…え？あの理想王…なるほど、この虫は多少骨のある虫だっか」

ラーマは、己が敗北する事を悟った。
「きのうからさくらの花が満開なんだ。」「そろそろ桜の名もなき花が咲きだしたやつだね。」

「なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ。」
「なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ。」
「なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ。」
「なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ。」

「ただ、ただ、ただ、ただ、ただ、ただ。」
「既にマスターと契約していったかい？暴挙で強制転移させたか。」

「なんて也是いいだろう。次会えば確実に殺す。それで納得するかね。」

「う、我らが女王に拝謁させてもらうわ。」

そうして、二騎のサーヴァンは去っていく。

気配が遠ざかるのを確認して―彼は姿を現した。

義賊ロビンフードである。彼は『顔のない王』で姿を隠し、執念深くランスロットを追っていったのだろう。彼は後少しで殺されろとここっただラー馬に覆い被さり、二人を『顔のない王』で包んで、彼らが立ち去るまで隠れていたのである。

「おえ、しっかり！」

ぐ、ぅ…。

ラー馬は頬を叩かれるも、呻くだけだっただ。ロビンは舌打ちする。

命に別状はいいとは言えない。彼に応急手当を施せらが、ラー馬を担いで彼は歩き出すた。

考えるのは敵の狙い。どうしえて村人を殺さなかったのだろう。生き残ったままま拠地に向かう目的は？

ラー馬は今すぐに死にはしないだろうが、その左肩と脇腹に受けた槍の傷が、治癒されないいの呪詛に犯されていることを悟ってい
「うう…? 余は…どうなって…?」
「お？ 貴様は…！」
「ああ。オレはロビンフッド…みてえなものだ。あんたはラーマはすぐに剣を下ろす。敵だったから意識のない間に殺されていったと聴い彼は判断がついたのだ。寧ろ助けられたのだとも。ロビンの背中から飛び退いて剣を構えたラーマに、ロビンは慌てて隻腕を振って敵意のなさを示した。
ラーマはすぐに剣を下ろす。敵だったから意識のない間に殺されていったと聴い彼は判断がついたのだ。寧ろ助けられたのだとも。
「待て待て待て！ オレは味方だっつの！」
"すまぬ、余ともあろう者が醜態を晒した。貴様が余を救ってくれたのだな？"　ああ。オレはロビンフッド…みてえなものだ。あんたはラーマってだろ？　知ってるから自分で紹介はいらね。…連中はもう行ったぞ。で、オレはそれを追跡中って訳だが…あんたをどうするかで悩んでたんだ。その傷だ。足手まといを連れていく気はねぇ。けどほっといたたらどっかで犬死にされそうなんで、頭を悩ませていたってワケ。…確かにな。手傷を負った余では、あの者らに太刀打ちなるまい。しかしあの無辜の民草を放っておく事も出来ない。さいですか。…真面目な話、オレは追跡を続ける気だけどよ、あんたはどうする？"
「無論、余も行く」

ラーマの強い意思の籠った瞳に、しかしロビンは顫めた。

「追跡中、気配を悟られたら終わりなんだけど？」

「あんたアサシンじゃねえだろう。しかも傷を負ってるといき。気配を上手く消せるとは思えないね」

「しかもかかしもあるか。…って、何言っても無駄臭いな。ならばこうしようぜ」

「……」

「あんたアサシンじゃないやれ。しかも傷を負ってると、気配を上手く消せるとは思えないね」

「……」

「─しかかもかかしもあるか。─追い詰めに妥協した方が合理的だ。それに…ロビンとしても、引きそうにない少年王に、ロビンは早々に折れた。時間の無駄だ─何よりこの手の頑固さを持つ手合いはテコでも動かないと思っ

て─から、おたくはそれを迷いながら後から来ればいい─いのいか？─頼を無用な攻めを負うだけだぞ。─構わねえよ。味方は多い方がいい。変に後退するとはしねえから安心しな。─話ししてる時間が惜しい、オレは行くぜ」

ロビンはそう言って「顔のない王」で姿を消す。この手の宝具が流行りなのかとラーマは思った。
そうして、ランスロット達はメイヴの待つ城に帰還する。
途中に出くわした十人の男達を捕縛し、その中には《白髪に健康に日焼けした肌》、《金の右目と琥珀色の左目》を持つ、精悍な人間も混じっていた。
—時は1783年。カルデアより単身で迷い込んだ男が、丁度一年の歳月を経た時の事である。
実働開始だよ土郎くん（上）

朗報がある。

一つ、スカサハの手が入った土壌が異様に豊穣である事。なんで
も影の国の土地は色々な意味で終わっているレベルらしい。その荒
廃した地にも穀物を実らせられるまでになるという土地の開発術は、
グレートプレーんズのように豊かな大地だとそれはもう夢のような
仕上がりとなった。例え冬であっても全く問題なく通常の作物を育
てられるようになったのである。

二つ。それに伴いこれまでスカサハ式栽培術によって、豊かな穀
物が二ヶ月周期で大量に収穫可能となったのだ。しかもそれによる
連作障害も、異常に育まれた土壌によって発生しない仕様である。
三つ、防衛ラインの構築完了。『人類愛』の本拠地としてある城
塹は『マザーベース』と命名。この地点を中心に、四方に四つの砦
を建築した。城と砦はその戦略的な意義が異なる。城は防衛拠点、
支配者の居住地としての機能を持ち、一帯を支配する為
統治拠点、支配者の居住地としての機能を持ち、一帯を支配する為
の重要な拠点となる。その結果物資の保管庫、文化的集積地、商業
的な心臓部となるのだ。ここに大勢の市民や兵士も詰められる為、
戦略的要衝として欠かせないものとなる。

- 未完 -
翻るに岩はそれ単体では防衛能力は低い。城塞ほど堅牢な護りと
する意義が見当たらず、幾つかの岩と有機的な連携を取ることで
める高い戦略価値を有するのだ。岩が防衛、能動的防衛を可能とす
る拠点なら、岩は攻撃能力に特化した拠点であると言えば少しは分
かりやすいか。駐在する兵士の数によって防衛圏が広がる為、一
つの城を起点に四つの岩があれば完璧な防衛ラインを構築可能とな
る。
これによりこの地域の防衛戦は完成する。
兵站はほぼ無尽、1km四方に配置した四つの前線基地による有機
的な連携を取りる。俺が投影した無数の投影爆弾を、スカサハが開
発した道具投射機や投石機に類似した兵器で打ち出して、そ
れで打ち出した投影道具は着弾の瞬間、自動的に爆破してくれる仕
組みのものも各岩、城に設置した。なんでも出来るという前評判に
偽り無しのスカサハの面目躍如である。}

四つ目。これは個人的な事だが、スカサハが俺の中の岩基を弄っ
て行った。

拔き取ったり、殺したりは出来ないらしい。なんでも出来るという前評判に
偽り無しのスカサハの面目躍如である。
能である防弾加工、固有結界の切り売りによるとなんでもない破壊力の弾丸を放つ機構を齎せる。状況にも合致する為、霊基がこちらに反転していったらし。

彼六でよ契しよ態ス弾で流連女つき今私しりに切りカ転れヴル目。れヴロう以るれこ結てくとにた上れ、らよなよはこのものら工、れ展反し構ィん縁がかくて可がた開よい。を新宝ら。個も形有りて放防い。産ス。

五つ目。これもまた個人的だが、スカサハはそこにスイッチを埋め込んだ。俺が意識的に霊基の状態を切り替えられるようにしたのだ。これらにとって俺は霊基を通常形態に切り替え、反転形態からの侵食を断つ事が出来た。またそれにより固有結界の展開もこれまで通り可能となった。

私でも今はこれが限界だ。聖杯の修理に当てられる札装がないうと、これ以上は不可能だと言っていたが、充分過ぎるほどの分増ししてくれたのだ。

サーヴァントが新たに一騎「人類愛」に加入したのだ。その名はネロ・クラウディウス。何故か真っ白な衣装を纏ったセイバーのサーヴァントである。これによって当初考えていたよりも四騎多くサーヴァントと契約出来るようになった上に、それでも俺の戦闘能力を維持できるようになったから。何故か俺の魔術回路の強度も向上している。今まで以上に投影道具を作り、それを拠点防衛の兵器として貯できるようになった。
マスターよ、ここで会ったが百年目！余と民らを仲間に入るがよい！」なって。拒否されるなどと考えもせずに告げてきた。勿論全員受け入れた。勿論全員受け入れた。漫計者を募って兵力を増員し、彼女が新兵を……いやカーター達も含めて鍛え直してくれると、この頃には流石のスカサハも疲労困憊だっただがお構いなしで。急ピッチでやられねばならない。スカサハは既に働いた事になるのではあるまいか……。個の的な所感を述べるなら、お釣りが出るレベルの際使具合だが、彼女が便利過ぎて頼りになり過ぎるからね。仕方ないね。なお練兵にはネロにも参加してももらう。

「ジェロ、余は暇だ。構うがよい！」「仕事回すからゆっくり忙殺されていってね」「うがああああ！？」

市民は端数を切り捨てて約五千五百。兵士は端数を切り捨てて約二千。市、はっきり言って人手が足りなさすぎる。可及的速やかにこの問題を解決すべく、俺達に休んでいる暇はない。
手不足を補うには、兵士の練度を最低限、現代の世界最強特殊部隊レベルに引き上げねばならない。それも迅速に。そうして兵士を各地に派遣し、難民の手引きをしてマザークレスに連れて来るのだ。兵士の練度を上げる事で作戦活動を実行可能とし、同時に人手不足と難民の保護を両立させる。一石二鳥な狙いだ。

スカサハの見立てだと、俺の求める水準に兵士達が至るには、短く半年掛かるらしい。……半年？早くない……？？ケルト式パルタ訓練によって、脱落を許さず速やかに鍛え上げる、極悪人すら更生する過酷なカリキュラムが組まれているのを知った俺は、兵士達の冥福を祈っておいた。

そこまで来るのに二ヶ月掛かった。その間に兵士の訓練を除く全てを成したのだから、斯カサハの過労死寸前の様子も納得である。

いや、その労基も糞もない環境に叩き落としたのが、俺ならですが。

しかしスカサハは骨の髄まで社畜となっているのか、休めと言われて「休む……？休むとは、なんだっか……。寝ていればよいのか？」と返してきてもわずかに誘われた。

特別に一日休んでいいと言ったら、何故か救い主を見たような顔をされた。

その中「すまん。本当に心からすまん！」……必要だったのだろう。お主が謝ることはない。最初の一ヶ月ほほは恨んでいたが、その後は清々しい気持ちで働けた。うむ、穏やかに感謝したいほどだ。
な、なぜ咽び泣く？なに『折角魂かやら腐敗が消えたのに、変な根性注入してしまいない』？何をワケの分かならぬ事を…

私に妙な根性を埋め込む輩などおるのもか。はっはっはっだから泣くというに」

心からの本音でそうわれたら、流石の俺も己の罪深さに心が折れそうだに。

しかしそこは鉄の心。気を取直すのに五秒。俺はどうしても働くべき、働くしておらねば落ち着かないしスカサハハに仕事を作せるとした。

しかし仮にも休暇中、体力の使わない仕事にする程度の気遣いはする。

流石にその辺は理想の上司だ。

「忘れてしまれが、カルデアと通信が取りたいんだけど、なんとかして？」

「ななんとか…？」

そのワードに、何か妙なスイッチが入ったらし。目の色が一気に澱んだ。

「ふむ。ふむ。うーん」

所は俺の居室。神代の城並みの防備を誇る『マザーベース』の宮殿内。寝台に腰掛ける俺の前で、腕を組んでスカサハは唸りはじめた。なおそのかサハ、痴女一貫線な格好から『人類愛』の軍服に変更されえていた。市民の皆さんと士兵の皆さんに刺激が強すぎた為
だ。なのでまさに美貌の女教官に見える。麗しの女軍人…薄い本が厚くなってしまいのである。

スカサハは暫くうんと呻きながら考えを繰め、俺に視線を戻し

出来なくはない事もないかもしれん。

曖昧だな。

うむ。何せ特異点外部と内部の時間の差がアレな感じだからね。

偽に上手くいったとしても、こちらでは成功したかどうか判断が出

来ぬ。

そうだ…ちなみにどうやったら出来るんだ？

両、マスター、マスターとカルデアル、私とセタタンの間にある

縁を利用すると、お主がカルデアルで言うところの『意味消失』をし

ておらんといつもだ。最低限の繋がりは残っておるの自明である

かろうかは分からない。

その通り。とりあえずやってみよう。

ああ。やるだけやってみよう。

と言っても長時間通信を繋げておくのは無理だぞ。私のルーンに

通が成功するかどうか、したとしてもこちらがそれを把握出来

るかどうかは分からない。

そう言うと、スカサハはまたもよろしを刻んだ。俺と自分、そ

れから周囲の空間、俺の腕に巻き付けてある通信機に。

相変わらぬのルーン無双だ。真剣にルーンを身に付けてい

が、無理だと太鼓判を押されている。

ああ、やるだけやってみよう。

と答えても長時間通信を繋げておくのは無理だぞ。私のルーンに

通が成功するかどうか、したとしてもこちらがそれを把握出来

るかどうかは分からない。

そう言うと、スカサハはまたもよろしを刻んだ。俺と自分、そ

れから周囲の空間、俺の腕に巻き付けてある通信機に。

相変わらぬのルーン無双だ。真剣にルーンを身に付けてい

が、無理だと太鼓判を押されている。

ああ、やるだけやってみよう。

ると答えても長時間通信を繋げておくのは無理だぞ。私のルーンに

通が成功するかどうか、したとしてもこちらがそれを把握出来

るかどうかは分からない。

そう言うと、スカサハはまたもよろしを刻んだ。俺と自分、そ
いっぱいのか？視線で訊ねると、スカサハは頷いた。本当に繋がっているのだろうか…。
半信半疑になる程度には、なんの変化も感じない。
とりあえずバンダナは外した。向こうにこちらの姿が見えた場合、余り心配になるような外見の特徴はない方がいいだろう。それで、喋ってみたが、眼帯はしたままなのに気づかない辺り、俺も眼帯をしてているのが当たり前前ならぐらい、すっかり慣れてしまったのだろう。

「…こちら、衛宮士郎だ。聞こえているか？」
当たり前のように反応はない。
当たらないみたいで、なんだか情けない気分にってくるが、なんと独り言みたいで、なんだか独楽に気分になっているが、なんだか続けられる。
「…ダメだな。聞こえない。一方通行なのか？」
「…いいか。」

一応カルデアにおける音声が届いているものと仮定して、報告はしておく。俺は今のところは無事だ。が、どうにもこの特異点はオカシイ。カルデアの通信機にある時計の進み方と、こちらで体感している時間の流れに大分差がある。俺の体感では既に半年は経った。
はて、と首を捻った。
半年だろうか？
そんなにまだ経ってい
ない気もする。

いや、五ヶ月か？
まあ…そこからはいいか。
通信限界時間はす
ぐそこだ。…俺は世界の異常には敏感な質でな。
念のため自身の
感覚を正常にするために様々な手段を講じた。
結果、俺の体感時間
と特異点内の時間に差はないと判断した。

カルテアとの時間差については、この特異点内は外との時間の
流れにズレがあるらしい。そちらの時間で言えば二日でこっちは十
年が経つか？
あて推量だから正確には知らない。

二日で五年だ。馬鹿者とスカサハが呟く。
二日できれいに一体で行くのではなかろうか。
一定周期で進み方が乱数にでもなっていて、それをスカサハは知っていて…
まあそ
こはいい。あて推量だけは言ってあるのだ。

けっ、大概の年代は1782年のアメリカだ。座標特定において
ぞっこんして五十代手前ぐらいの容姿になる程度に。だが俺は一いつつ、
それより先にデータを送る。第四特異点の攻略指南だ。

一だ聖剣の鞘のお蔭で、老化はかなり延期されている。五十
年生じて五十代手前ぐらいの容姿になる程度に。だが俺は一いつつ、
それより先にデータを送る。第四特異点の攻略指南だ。

ああ…それと。別に、この特異点を一人でクリアしても構わん
のだろう？
冗談だ、早く増援を寄越してくれ。
そこで言う切る寸前に、ルーンが砕けた。
あらら、と気落ちする。こんな短時間で砕けるという事は、かな
冗談、どう考えても厳しい。
しかし本当にそんな手応えもない。これでいいのだろうか……。
無駄な事をしているだけの気もする。
言うことを最後まで信じる事は、ますます難しい。
何となくしんみりした気分に浸っていると、スカサハが質問して
くる。「マスター、二点ほど聞いてもいいか？」
「ん？なんだ」
「マスター、二点ほど聞いてもいいか？」
「ん？なんだ」
「なぜ第四特異点とやらの攻略が容易なのだ？」
「あー、なんでだったか……。ちょっと待て、今思い出す。
何故第四特異点とやらの攻略が容易なのだ？」
「マスター、二点ほど聞いてもいいか？」
「ん？」
「マスター、二点ほど聞いてもいいか？」
「ん？」
「マスター、二点ほど聞いてもいいか？」
「ん？」
冬木と、スカサハの作った特異点。そして第三特異点での戦況推移、アルケイデスの動き方、残留霊基の使い方、魔神霊との戦闘、固有結界の強制展開維持の策。
これらの動きから導き出せるのは、こちらの戦力を把握し、策を打っているのが典型的な魔術師である事と、可能な限り自分のいる特異点に来ないようにさせる事。神経質で潔癖性、完璧主義。その行動と策を打つリズムとでも言うべき癖から、第三の次、第四特異点に一連の流れの首謀者であるという予想が立てられる。
この説明にスカサハは頷いた。それなら確かに納得できる。間違いないものと、そこまで分かれば具体的な対策を、戦場を幾つかのパターンに別ければ想定出来るよう、そう願いたいスカサハは質問を重ねた。

「お主の言うであった『可愛すぎて辛い相棒』とやれば誰だ？沖田が有力だが、シータも相棒と呼べる働きをしております。皇帝ネロは新参ゆえ怪しいが……もしそのアルジュナか？最も敵撃破率が高いが」

「なあに言ってるんだか。お前に決まっているだろう、スカサハ」

「……は？」

「……辛いって……のは……」

「……辛いって……のは……」

「た、戯けが責めよう！？」

「え、もういい！ 私はもう行くからな！」
最後まで聞かずに、スカサハは顔を真っ赤にして俺の寝室から飛び出していった。

どうしたんだ？いや真面目な話。別に照れるような事言った覚えはないんだが。

何せ「ちなみに」の後に続けようとしたら、スカサハを過労死寸前まで酷使しているので俺も心が痛いのだがから、

寸前まで酷使しているので俺も心が痛いのだが。何せ「ちなみに」の後に続けようとしたら、スカサハを過労死寸前まで酷使しているので俺も心が痛いのだが。

心を読ませた！死を覚悟した瞬間である。しかしスカサハは微妙に赤いままの顔で、俺にルーンを刻みつけて来た。すっかりな。

これでは「マスターよ。お主のその肌の色は気に入らない！私のマスターマスターよ。お主のその肌の色は気に入らない！私のマスター」なら、健康的な肌でなければ！'

「噴死してあるその肌を若返らせ、元の肌の色に戻してやる。感謝せよ！それはね！私は仕事がある！あ、それとだ、明日からはお主も鍛えてやるから覚悟せよ！'

「何に何がしたんだスカサハお婆ちゃん……。

いや……ほんと何がしたんだスカサハお婆ちゃん……。
実働開始だよ
士郎くん（下）

西暦1782年12月31日、夕暮れ。
カルデアへ通信を送った。

翌日である。
城外に出ると、飽きもせず大粒の雪が降っていった。

本城のマザーベースや四つの前線基地の内部は、ルンン魔術にやって、簡易な異界化がなされ、春に近し気候に包まれるから、内外の温度差には少し体が驚きまう。

しゃりと踏みつけた足音の大きさに思い立って、足首まで埋まるほど積もっている雪を両手で掬った。力を込めて雪玉を作る。

それをして後ろ手に隠しまま、何気ない風を装って皇帝陛下に背後から近づいた。
「むしろシェロではないか、どうしたのかもしれない？」

純白の衣装、何故か真っ白に染まっている隕鉄の剣と、原初の火を武装するサークヴァン UNIONである。

俺の気配を察知してこちを振り向けたネロに、俺は笑想を浮かべながら歩み寄り、至近距離にまで近づくとその顔に雪玉をぶつけた。
「わぷっ！い、いきなり何をする！？」
「はっはー！ぼっといてだ」
何をお？ せっかく絶世の美女が舞い散る雪花の中、雅に佇んでおったというのに！ 普通は見惚れて賛辞の一つでも寄越す所でないのか！？
悔しそうに地囃子踏むネロに、俺はいい歳した大人のくせして、愛に釘を打っている。忙しさにかまって構える時間がなかったが、偶々余白の出来たこの時間に見掛けたのでちょっと掛けたのだ。
この皇帝様、まるで最初からいまだよねと言わんばかりに『人類』に釘を打っている。忙しさにかまって構える時間がなかったが、偶々余白の出来たこの時間に見掛けたのでちょっと掛けたのだ。
悔しそっと地囃子踏むネロに、俺はいい歳した大人のくせして、カユミみたいに破顔した。悔しそうに地囃子踏むネロに、俺はいい歳した大人のくせして、できることの一件が一つある。
お前は覚えているのだろう。生前のネロはカルデア側のマスターにしてしまったので、英霊としての彼女があらかじめ全てを全くの未知の知識の共有は出来ており、故に説明は無用だ。それにしてもそこに余が生身の人間、それも生前の地囃子として存在しておるとは……。前にも聞いたが今信じられんが、信じた！
カルデアのネロと、英霊のネロ。人柄も能力もおおよそ変わりはなないどこか、趣味嗜好好に至るまで、完全に一致している。しかし、英霊のネロはカルデアの方とは違い、マスターという存在に対し、なんらかの理想を持っているようなのだ。

同じ人間とはいえ、生前からの地続きであるネロと英霊のネロでは、その在り方というか、考え方や差が出るのもおかしな話ではない。ないが……どうにても、英霊のネロは妙な理想を持っているらしい。

同じ人間とはいかん、趣味嗜好に至るまで、完全に一致している。しかし、英霊のネロはカルデアの方とは違い、マスターという存在に対し、なんらかの理想を持っているようなのだ。

「前から聞こえと思っていたんだ。俺の知っているネロは赤いドレス姿なんだが、どうしてお前は白い衣装なんだ？まるで花嫁みたいだぞ」

「あればドレスではない、男装であるぞ！」

「はいはい男装男装」「むっ！あればドレスではない、男装であるぞ！」

「はいはい男装男装」「んもう……雑であるな……こほん。それより何故、余が花嫁のドレスに着替えるのかだと？ふふっ、決まっているよう！」

それはっ！余がそういう気分になったからである！ところでマスターの肌の色がだいぶ健康的になったのも、そういう気分になったからだろう。
それはネロらしく微笑ましい願望のように感じるが、どうや
り辛い。何せ俺はネロを友人として見ているのだ。しかしこのネロ
ときら、まるで……。
「ところでマスターよ。マスター一直に『シェロ』と呼べと言われた故呼んでおったが、それは余ではない余の呼び方であろう。故
にマスター呼びに戻したいと要求する！それと一つ聞きたいが、
いいか？」「まあ……呼び方は強制しないが。それで、なんだ。」
「マスター……何やら沖田やスカサハメと良からぬ空気ではないか？
というかアプローチとか掛けられてない？餘を差し置いてヒロ
インレースとか始まっておらぬか？」
「なんだ話だ……」「懐けるでない！まさかとは思うが、二人ともものにしよう！
そうかっ！なら余にもまだチャンスはあるのだな。浮気はダメだぞっ。なんか良くない！」
「……アイツらとはそういう関係じゃないって。」
「……それにアリスはそんな関係じゃないって。」
「うむうむ、マスターとは中々イケイケな仲になれ
と踏んでおるからな、余は嬉しい！」
「……」
まるで……。考えたくないが、このネロは俺を恋愛対象として狙っ
ているようではないか。いや狙われてる感はある。キアラを数百倍
希釈した感じの感覚だから、割と分かりやすい。
はっきりと言えば、悪い気はしなかった。何せネロはその内面からして美しい女性だ。俺の知るネロとは別人だと割り切って接する事も出来る。出来るが…カルデアのネロとは別人だが、同一人物でもある。英霊のネロとそういう関係になるのは流石に気が引けた。仮になったとしたらカルデアの方のネロにどんな顔して会えばいいんだ。

雪原の上を、上機嫌に両手を広げ、まるで舞台の上にいるようにくるくると回るネロ。それを苦笑して眺めつつ思考する。仮になったとしたらカルデアの方のネロにどうななるか関係になったかは決まっている。マルデイアが気を引けた。仮に仮にたたかうならカルデアの方のネロにどうなったんだ。「とこでネロ。お前の言う浮気とはなんだ？」

「ところでネロ。 BEFORE

無駄な事を聞くな…そんなもの、心が決める。具体的に言えば伴侶のある身で、本気で他の者に惚れたなら浮気は決まっておろう！

とこうとネロは不愉快な事を聞いたとばかりに回転するのをやめ、俺の正面に向き直る。ネロに玉藻の前に似た空気を感じていたので若干声が震えたが、なんてか平穏を取り継って問いかけた。」

「…浮気者にはどうする？」

「…浮気者はこの世の地獄を味あわせるのみだ！」
この世の地獄とはなんぞや
「えっ、えーっと。……地獄とはなんぞや。そういえば
反駁するとネロは途端に口ごもった。誤魔化すように濁すも、や
余、キリスト教とか弾圧した側だから地獄なんて知らなかったりし
て。てへっ」

「えっ、えーっと。……地獄とはなんぞや。
余、キリスト教とか弾圧した側だから地獄なんて知らなかったりし
て。てへっ」
「口でマスターよ。そなた、仕事があるのではなかいか？」「ふふっふふ、もっと誉めるがよい！」それはそれとして、そのスカハがマスターを探しておったぞ。こう、鬼のような顔で「あの馬鹿マスターはどこだ！？」と口調も真似てるが全然力がない。

頭に両手を当て、人差し指をたてて鬼の角を模したポーズを取ったネロに苦笑する。いちいち身振りがあざとくて可愛いい、おい。

「そこでマスターよ。そなた、仕事があるのではなかいか？」「ふふっふふ、もっと誉めるがよい！」それはそれとして、そのスカハがマスターを探しておったぞ。こう、鬼のような顔で「あの馬鹿マスターはどこだ！？」と口調も真似てるが全然力がない。

頭に両手を当て、人差し指をたてて鬼の角を模したポーズを取ったネロに苦笑する。いちいち身振りがあざとくて可愛いい、おい。
お前今暇って言ってませんでしたかね！？
って言ってましたよね！？
ぐわし首根っこを掴まれる。抗えぬ膂力の差に泣きたくなる。
うわあ、嫌だぁ！
そんなふうに喚いた気がしたが慈悲はなかった。
まるまる引き摺られていた俺に、ネロは指先で涙を拭う素振りをしながら手を振って、「どなたぞどなたぞどなたぞSoldiers」は指先で涙を拭う素振りをしきたりにして、「どなたぞどなたぞどなたぞ 그런데」歌い始めた。
やめろー！
というか音痴のくせしてそんな歌だけ上手いとかふざけてんじゃーえっ！
影の国の門番の竜種を召喚したか負けたら男じゃないから去勢するか負けてんじゃーえっ！
それで見ても成体の竜ですよ千歳越えてますよね勝てる訳が負けてたと引き戻されるとかやめろゴラー！
竜殺し道具連打してぶっ殺してやーっ！
竜殺し道具の投射禁止！何それ聞いてない…なんだろ！
剣一本でやれ？
タタタなら楽勝？
そんなのと比較するとか遂に呆れたかこの鬼ババーー！

ぐわし首根っこを掴まれる。抗えぬ膂力の差に泣きたくなる。
うわあ、嫌だぁ！
そんなふうに喚いた気がしたが慈悲はなかった。
まるまる引き摺られていた俺に、ネロは指先で涙を拭う素振りをしながら手を振って、「どなたぞどなたぞどなたぞSoldiers」は指先で涙を拭う素振りをしきたりにして、「どなたぞどなたぞどなたぞ 그런데」歌い始めた。
やめろー！
というか音痴のくせしてそんな歌だけ上手いとかふざけてんじゃーえっ！
影の国の門番の竜種を召喚したか負けたら男じゃないから去勢するか負けてんじゃーえっ！
それで見ても成体の竜ですよ千歳越えてますよね勝てる訳が負けてたと引き戻されるとかやめろゴラー！
竜殺し道具連打してぶっ殺してやーっ！
竜殺し道具の投射禁止！何それ聞いてない…なんだろ！
剣一本でやれ？
タタタなら楽勝？
そんなのと比較するとか遂に呆れたかこの鬼ババーー！

ぐわし首根っこを掴まれる。抗えぬ膂力の差に泣きたくなる。
うわあ、嫌だぁ！
そんなふうに喚いた気がしたが慈悲はなかった。
まるまる引き摺られていた俺に、ネロは指先で涙を拭う素振りをしながら手を振って、「どなたぞどなたぞどなたぞSoldiers」は指先で涙を拭う素振りをしきたりにして、「どなたぞどなたぞどなたぞ 그런데」歌い始めた。
やめろー！
というか音痴のくせしてそんな歌だけ上手いとかふざけてんじゃーえっ！
影の国の門番の竜種を召喚したか負けたら男じゃないから去勢するか負けてんじゃーえっ！
それで見ても成体の竜ですよ千歳越えてますよね勝てる訳が負けてたと引き戻されるとかやめろゴラー！
竜殺し道具連打してぶっ殺してやーっ！
竜殺し道具の投射禁止！何それ聞いてない…なんだろ！
剣一本でやれ？
タタタなら楽勝？
そんなのと比較するとか遂に呆れたかこの鬼ババーー！

ぐわし首根っこを掴まれる。抗えぬ膂力の差に泣きたくなる。
うわあ、嫌だぁ！
そんなふうに喚いた気がしたが慈悲はなかった。
まるまる引き摺られていた俺に、ネロは指先で涙を拭う素振りをしながら手を振って、「どなたぞどなたぞどなたぞSoldiers」は指先で涙を拭う素振りをしきたりにして、「どなたぞどなたぞどなたぞ 그런데」歌い始めた。
やめろー！
というか音痴のくせしてそんな歌だけ上手いとかふざけてんじゃーえっ！
影の国の門番の竜種を召喚したか負けたら男じゃないから去勢するか負けてんじゃーえっ！
それで見ても成体の竜ですよ千歳越えてますよね勝てる訳が負けてたと引き戻されるとかやめろゴラー！
竜殺し道具連打してぶっ殺してやーっ！
竜殺し道具の投射禁止！何それ聞いてない…なんだろ！
剣一本でやれ？
タタタなら楽勝？
そんなのと比較するとか遂に呆れたかこの鬼ババーー！
以上の惨劇を以て彼の末路は決定された。

ヒューマンなど偽りの種族。其は鬼教官が生み出した、彼の資質を最も悪辣に引き出した合理主義。その名をケルト。エジプト、インド、ウルク、ブリテン、日本、ギリシャに並ぶ、七つの戦闘民族の一つ。「死狂」の理を持つ獣。

人が人のまま人を超え、神をも殺すという戦闘論理こそが、その男の劣性なのだ。

亡者という戯れ言は鬼も角として。

その男は誓った。最早あの鬼畜にも勝る、遠坂さん家の凛さんが

俺が物理的に殺されるか、スカサハが過労死するかのデッド・オア・チン・レースこそが俺達の関係なのだ。と。

無性にマーリンをぶん殴りたくなってきた。
理不尽だろうが、何故か正当な怒りとか悔しさとか情けなさとか
がある気がする。

衛宮士郎がこの特異点に転移させられてより、凡そ一年の月日が
流れまるまで…死と隣り合わせの練磨は続いた。

そうして『人類愛』の兵士の練度は飛躍的に向上する。生存をか
けた士気高かなる戦意しかなかった彼らに、それに釣り合うだけ
の力が宿ったのである。

そうして、彼らの実働が開始された。

衛宮士郎がこの特異点に転移させられてより、凡そ一年の月日が
1: 宇宙の一の腕力家
突然だが私は嘗てなく死にたくなった。
誰が腕のいい処刑人を知らないだろうか?
よければ紹介してほ
し。

2: 名無しに代わりまして英霊がお送りします
3: 名無しに代わりまして英霊がお送りします
後スレタイとコテハンがww

4: 名無しに代わりまして英霊がお送りします
なんかもう色々察した俺がいる...。
「名無しに代わりまして英霊がお送りします」

第3特異点
宇宙一の腕力家

あっ（察し）

「おう紹介してやるよ」

フランス辺りの座にいるぞ。

あの宝具なら罪人は割と確殺してくれるはず。

あいつの宝具なら罪人は割と確殺してくれるはず。

7：名無しに代わりまして英霊がお送りします。
その前に懺悔して、どうぞ。いいなり死にたいとか言われても。

8：名無しに代わりまして英霊がお送りします。

9：名無しに代わりまして英霊がお送りします。

「どう転んでも愉快」

他人的不幸は蜜の味

うえっwww

www
腕力家

絞めにいく。逃がさん。

身元特定は千里眼持ちの我が師なら容易い。

ひっ…

無茶しやがって…。

無茶しやがって…。

15：名無しに代わりまして英霊がお送りします

14：名無しに代わりまして英霊がお送りします

13：名無しに代わりまして英霊がお送りします

12：名無しに代わりまして英霊がお送りします

11：名無しに代わりまして英霊がお送りします

10：腕力家

一応ご冥福をお祈りしときますね！

馬鹿なんですかね…。

相手考えろよ。

一応ご冥福をお祈りしときますね！

- Configurer -
……お前らもう死んでもどな。

お前らもう死んでもどな。

英霊がお送りします。

話につけねぇんですか。

第三特異点どこここよ？誰か情弱なに教えてくれ。

瀟洒で優雅な海賊王デュブフォ{

え？なぜ？

第三特異点のこと知らんいう時代遅れにぃ。

俺も分かってるように教えてくれ。

俺も知らんぞ。

といたうより第二での我々が光の御子殿無双をリピート視聴するのに忙しいる。

第十一ト視聴聴するのに忙しいる。

同じ神祖マジ神祖、ネロちゃまマジネロちゃま、カエスルさんマジカエスルさんって感じだ。

同じ神祖マジ神祖、ネロちゃまマジネロちゃま、カエスルさんマジカエスルさんって感じだ。

俺時代か。

……
21：名無しに代わりまして英霊がお送りします
いつまで繰りついてんだよ…。
カルデアはもう第四攻略に掛かって、問題のマスターは第五に逝ってんで。
逝ってんで。

22：名無しに代わりまして英霊がお送りします
21早くね！？

23：臓力家
とりあえず知りたい事は知れた。
9を絞めた後に処刑されに逝く。後はこのスレを適度に埋めてくれると有難い。

24：名無しに代わりまして英霊がお送りします
どうせその試験も超えて処刑への耐性つくだけだから
生きて恥は晒さぬ。

25：名無しに代わりまして英霊がお送りします
23だからもうお前もオレらも死んでるから

でもなんての解決にもならないと気づいてwww
後あたた、神霊としても存在してるんだから英霊のあなたが死ん
腕力家

25気分の問題だ。

名無しに代わりまして英霊がお送りします。

気分なら仕方ないな。

腕力かし、光の御子か。

そこの名に違わず、手強い敵であった。
拠って立ち陣営や、自分自身の状態にこそ不満はあったが、もう一度機会があればその時こそ、本来の私とて尋常らず立ち合いものだ。

名無しに代わりてケルトがお送りします。

ガタッ
ガタッ

(: に無しに代わりましてギリシャ民がお送りします
( ゚д゚ ) ガタッ

( つ つ つ

( つ つ つ つ

( つ つ つ

( つ つ つ つ つ

( つ つ つ

( つ つ つ つ

( つ つ つ

( つ つ つ つ

( つ つ つ

( つ つ つ つ

( つ つ つ

( つ つ つ つ

( つ つ つ

( つ つ つ つ

( つ つ つ

( つ つ つ つ

( つ つ つ

( つ つ つ つ

( つ つ つ

( つ つ つ つ

( つ つ つ

( つ つ つ つ

( つ つ つ

( つ つ つ つ

( つ つ つ
43：名無しに代わりましてギリシャ民がお送りします

神の保護メガ盛りのキタコレ。全英霊最強議論スレで腕力家相手に完封されるの確定と目されているのに最強に食ってかかるな。

俺と奴は未だにどの聖杯戦争でも立ち合った事はない。推測のみで語るな。

44：駿足

俺と奴は未だにどの聖杯戦争でも立ち合った事はない。推測のみで語るな。

44：駿足

俺と奴は未だにどの聖杯戦争でも立ち合った事はない。推測のみで語るな。

腕力家「最初は武器とか何も貰えなかった……」。

だけど腕力と試練で手に入れた自前の武器を使う。あらゆる武器で使える流派射殺す百頭開眼。宝具の域に昇華。
他の英雄なら一つの試練に生涯を掛けるレベルのものを十二回クリア。軍神半殺しにした。死ね死ね試錬の中で女神の妨害MAX戦争？何度もやりましたか。強敵の英雄？自分に匹敵する双子の戦士を策で嵌めて殺しました。神々が勝てない巨人族との戦争に呼ばれて活躍しました。あ、自分世界を腕力だけで支えた事あります。ジブラルタルなちちばぶち殺す。}

49: オジサン

48: 駿足

47: 兜が輝いちゃったオジサン

46: 駿足

45: あんた、もしかしなくてもオッサンだろう！口調変えても分かるぞ！

44: もう、やっぱり分かっちゃったかあ……。
 Slice the pie with the knife. 50: 屋角

"48いいのか？アマゾネスのペンちゃん呼ぶぜ。オジサン
とあの娘、仲は悪くないんですな。

51：名無しに代わりましてギリシャ民がお送りします
以上、50はいつもの流れでした。お目洗しさて申し訳ない。
同じ神話群出身として謝罪致します。

52：名無しに代わりまして英霊がお送りします
なんて出来たギリシャ民なんだ……。
まあいいや。トムとジェリーみたいで面白かったし。
というよりレスが遅いな……。
他のおれらは何してるんだ……？

53：湖

光の御子と我が王、例のマスターを含めた面々と
1の戦いの動画を食い入るように見ているのでは？

54：名無しに代わりまして英霊がお送りします
なるほどな。
おれは何時間もずっとリピートしながら見てたわ。
見応えあった。
というより開幕ヒュドドラ毒矢の奇襲であるマスターがすげえ絶叫してたよ。例のギリシャ半馬先生トラウマ甦って狂乱してたぜ。

見応えあった。

55: 名無しに代わりまして英霊がお送りします
56: 名無しに代わりまして英霊がお送りします
57: 名無しに代わりまして英霊がお送りします
54: 54 誰ウマ
5: 55 審議拒否。

58: 名無しに代わりまして英霊がお送りします
54: 54 誰ウマ
5: 55 審議拒否。

むしろ狂うまである。

英霊の座に生死の概念あったら普通に誰でも死ぬわ。
腕力家

生憎と狂い慣れている。

狂ってもすぐに帰ししまたのだ…。

例のマスター、聖杯の嬰児とタマちゃんが来てなかたら死んだよここれ…。

湖…。

黒い方の我が王が斃れたショックで塞ぎんでいる。

私もが、私は何かしていなしないで落ち着かないのでこ
名無しに代わりまして英霊がお送りします。

待って、何か様子がおしかれぞ。

召喚されるにして、拒否権はあるはずせめにてレスを打ち終えまして待ったをかけられるものがないと云う事は…。

駿足おいおい、強制で呼ばれるだと思。

マジか。どうなる確率だよ。駿足まだ強制召喚されるとか。
名無しに代わりまして、英霊がお送りします。

……

今この流れは終了しました。

……

向かって Starts に移る。このスレを守る必要はありません。
業火の中に
冬を越え、春を迎え、夏を過ごし、秋を通り、そして二度目の冬
となりた。
多くを語る舌は不要。重ねた熱を語る誇りも無用。
迫り来る敵の骸を数える事に意味はない。女の劣化英霊はある時
を境にびたりと現れなくなった。
状況が刻一刻と深刻化していくのを感じながらも、「人類愛」は
雌伏の時の中で力を蓄え、そしてついに行動の季へ移ろうとしてい
た。
「佳面をするようになった」
整列する二百名の精兵を見渡し、男は仄かに歎嘆深く呟いた。
もし人間の年齢の如何に拘わらぬ、全盛期、最盛期と呼べるもの
があるとするのなら、此の場にある全ての男達の全盛こそが今の
時であるのだと誰しもが感じていた。それは彼ら『人類愛』の領袖、
ギャック・フィランソロピと呼ばれる男もまた同様である。
眼帯を撫でた。その下には琥珀色の肉眼がある。彼は彼本来の
瞳と同色だが、その本質は起源を異とする魔眼だった。
愛用の眼帯には魔眼殺しの術式が編まれてある。今は懐に入れてある赤いパン
ダを意識して、首に提げているダイヤモンドを一度握った。

「良い面をするようになった」
ボツリと呟く男の声は、彼らの耳を打つ。

城内、城門の手前に在る兵士達に、以前の未熟さの残る青さは何処に残る。

彼等は、やお前達を誇りに思う。お前達も誇るといい。辛く過酷な訓練、もしくは一人の脱落者も出さずに堪えきった。

精悍な男の顔をし、いまだ戦士達は、前達を未熟な兵士だと言うものはない。この大陸に在って、お前達以上に

兵士は何処にも存在しないと断言しよう。

兵士達は喜ばない。単純な事実として受け止め、静寂の中に誇りを懐くのみ。

矜持を懐く。それは賛辞に喜ぶのではなく、シングルに認めるだけ。その誇りを負い、自らを律するのが優れた兵士なのだ。

「『人類愛』は北米大陸最優の兵士を擁した。それは何人も間違っていない。しかし思い出し、俺達の目的はなんだ。単に生き残る事か？相容れない天災が如き敵を打ち倒す事がある。俺達には使命がある。堅牢な砦を築き、何者にも抜けない防衛戦を張り巡らす。『極薄かな』人々を保護した。生活するに困らない物資を蓄え、生きる糧を安定して手に入れて、外の厳寒を勝ち抜くことを望んだ。だからそれが終わりか？これには断じて否と、お前達なら答えると俺は信じている。」
その信頼は何も間違いないと、兵士達から立ち昇る気炎が告げている。

黙って語らぬ、しかしその瞳に宿る生命の炎は、今も燦々と輝いて使命感に燃えていた。

そう。この大陸に生きる遍く者達を虐殺している。指を咥えて、座してそれを見つめるだけ。そんな醜悪で怠惰な姿勢を、俺達は執ってはならない。

何故か、などという問い掛けは無用だろう。今何処かで外敵に怯え、息を潜めて逃れているだろう人々は、一年前のお前達と同じ。

戦う力を持たず、満足に食えるものがなく、明日への展望を何も持たず、ただ座していれば死があるのみ。

その地獄を救してくれるのではなるまい。《人類愛》の名を負う俺達が、こに救いの手を差し伸べなければならない。

俺達がやられねば誰がやるか！いつか誰かが救ってやるだろう、などと楽観する阿呆はいる。

しかし、平和を求める声に応えよう。怖じ気づき、自身の平穏のみを護し、力を集め、平和を求める声に応える。ならば行動する時だ。俺達はまだ弱い。人間は一人何もない。

その地域を救ってはならない。《人類愛》の名を負う俺達が、座していれば死があるのみ。

彼女らに負ける大音声を張り上げた。軍靴を鳴らし、否を叫ぶ兵士達。それに笑みを浮かべ、男は彼女らに負ける大音声を張り上げた。
そうだ、否だっ！勇敢なお前達の中に、そのような腑抜けない！勇敢なお前達の中にも、そのような腑抜けない！ならばやるしかないのであ！勇者はどうしても、お前達の前に、そのような腑抜けない！勇者が、それでも俺がやらなければならない！

相手を敬い、礼を示す行為をこそ『敬礼』という。俺はお前達に敬意を表する。これが本物の敬礼だ。

相手を敬い、礼を示す行為をこそ『敬礼』という。俺はお前達に敬意を表する。これが本物の敬礼だ。

今、相手を尊敬し、礼を示す行為をこそ『敬礼』という。俺はお前達に敬意を表する。これが本物の敬礼だ。

男は胸を張り、満身に気迫を込めて、右目に真の尊敬の念を宿して右手を翳す。上官である者が先に敬礼をする事は通常は有り得ない。しかし男が示した敬礼に、兵士達は電撃的に打たれたように痺れた。一糸乱れぬ答礼がある。男と兵士達が敬礼を解くのは同時にだった。

緊張に体が強張る。

「スカサー」

「うむ」

女王の風格を持つ女は苦笑と共に出露した。畏れと恐れの同居する戦慄が、精鋭の兵士達の顔に過った。緊張に体が強張る。

女王の風格を持つ女は苦笑と共に感慨に浸った。懐かい。数多くの弟子を戦士として鍛え、育てた。その弟子達も似たような顔をする。しかしまあ、この男達は弟子ではない。教え子である
達要做テーブル技術でなければならぬ、技を折ってはならぬ。後遺症となる傷を負わせってはならないと、マスターから厳命されていた。それは過剰に厳しく、相応しくないものを築に掛けて来たスカサハには難しかった。『戦う者』に相応しくないとも鍛えねばならない、導かねばならない。

やし過ぎてしまった事がある。つい心を折って兵士をやめさせようとした事もある。どれも長年の癖だ。その度にショックして回ったのも、勝手が違って苦慮したものである。端的に言って、才能のない者を教え導くのにスカサハは向いていなかった。

達成感はある。これまでのノウハウを捨て、零から教え導く中でスカサハもまた不変の英霊である身で師として成長していく事が出来たのだ。これはひどく得難いものである。故にスカサハは万感の思いと共に言うことが出来た。

― 前達には我がマスターの望む全てを叩き込んだ。一人で生き抜けるサバイバル技術と知識、取点への単独潜入技術、白兵戦の格闘技術、射撃術。ああ、軍行動に於ける戦術も身に付けさせた。私もマスターに倣い断言してやろう。― 前達は英雄であると。

弟子を『戦士』にするため、教え子を『兵士』にするのは勝手が違うのだ。
魔境の智慧と定義される、サーヴァントとしてのスカサハが持つ技能だ。それは彼女が英雄と認められた者にのみ、サーヴァントの技能を与える事が出来る力。

スカサハは『人類愛』の兵士達を、紅い布を身に付け、ダイヤモンドを持つ兵士達全てが英雄であると認めた。故に与える、Bランクの『諜報』の技能を、気配を遮断するのではなく、気配そのもの敵対者だと感じさせない技巧の類だ。元々の訓練内容に含まれていたものを、サーヴァントの技能の領域に昇華したのである。

「扱い方は直感的に分かるだろう。お前達が他の兵士達の先駆けと一挙い方は直感的に分かるだろう。お前達が他の兵士達の先駆けとすうとうは悟る。自身に掛けられた期待の重さに。下がったスカサハの一時の気の迷いだ。そう簡単に英雄と認めるほど、スカサハの認定する感覚は甘くない。」

「炭火の一時の気の迷いだ。他者の証だ。上手く使えば？」

男の問い掛けに、兵士達は顔を向けた。スカサハの気位の高さは元よ

「い訓辞だった。そうだろう？」

スカサハを見つ、彼女のマスターは意外そうに苦笑しながら再び前に出る。

『…さて。予期していなかったサプライズだが、それはいい。』
そのスカハの祝福に、兵士達は感極まっていている。涙ぐみそうな
ほどに。そんな彼らに優しく微笑み、しかし次の瞬間には苛烈な首
領の顔となる。

「お前達に任務を与える」

兵士達はその下知に、目を拭って。更に一層男らしさのついた表
情で背筋を伸ばした。

一期限は一年。長期に亘る任務だ。二人一組でこなす事になる。任
務内容は大きく分けて三つ。

一つ、難民の保護。見つけ次第、このマザーベースへ出撃し、道中
に何事もないと判断できた場合のみ、お前達が誘導する必要はない。

二つ、サー・ヴァント・タイプの味方の捜索。しかし見た目には分
かりにくいものだ。敵サー・ヴァントである可能性もある。接触する
かしないか、敵か味方かの判別はお前達に任せよう。注意点を言う
とすればサー・ヴァントは必ずしも味方になるとは限らない事だ。私
の無事も報せてやれ。名はラーマだ。

三つ、現地勢力及び敵勢力の拠点の捜索。後者については大雑把
でいい。推測のみでもいい。なんらかの判断材料を掴めたのならそ
れだけでもよしとしろ。不要な危険を侵すな。前者に関しては言うま

- ひらがな-
でもないな？ 拠点を把握したのなら速やかに帰還しろ。

最後に付け加えよう。任務期間は一年と定めたが、もし必要に迫られたのなら期間を独断で延長してもいい。ただしの場合、相棒は必ず帰還させ任務延長の旨をマザーベースに報告しろ。これがないまま一年間帰還しなかった場合、俺は該当者が死亡したものと判断する。何か質問は？」

兵士の一人が手を上げた。顎先で促すと、声を張り上げてハキハキとした語調で質問してきた。

「BOS！ 我々は寂しがり屋であります。二人一組と言わず、分隊規模で行動しても宜しいでしょうか。

許可する。しかし最小単位は先にも言った通りだ。大人数で移動するのはいいが、仲良しきよし方が過ぎて作戦効率が落ちるようだとお前達のママから雷が落ちるぞ。

はっ！ 了解しました！ 私も教官殿から物理的な雷を受けけるのだから、それがすぐに苦笑に変わった。

ドッとうが起こった。男も笑っている。スカサハはムッとしていたが、それでもすぐに苦笑に変わった。

運やれしを練めるスカサハをよそに、別の兵士が発言の許可を求める。それらを男が促すと、この隊の中で最も優秀な兵士……マクドネルがユーモアを満たせて質問した。

「BOS、僕は今から作戦名などは？ あるのとないのとでは、任務に従事する我々のモチベーションに影響があるんじゃないかなと懸念する次第一」
「作戦名？」
「もしや、ないんですか？」

平然と男はハッタリを言った。勿論考えていない。

「もしかして、ないんですか？」
「有るに決まっているだろう」

スカサハは北欧の女神に名を列する。北欧といえば有名な存在が

ある。

「『ワルキューレの角笛作戦』だ。ワルキューレとはお前達の事だ」

ムサ苦しいワルキューレもいたものですね。

「コレみたいにモンに導かれたんじゃあ死んでも死にきれませんわ。

オレみたいにモンに導かれたんじゃあ死んでも死にきれませんわ。

楽園に辿り着いてシーサ郷やオキタ郷、ネロちゃんを一目見てやる

という気にもなるでしょう」

「ふむ。マクドネル、私の名が挙がっていないのは何故だ？」

「ライブ！ そ、そいつぁモーリン！

教官殿は楽園の美女では

なく死の国の女王ですから」

「なるほど。帰ったらお主は兵士から戦士に転向させてやろう。軽

口だけは見込みがある」

顔面を蒼白にするマクドネルに、周囲の笑い声が大きくなった。
男もまた一绪になって笑っているが、心底同情している。難儀な奴に自分から目を向けられにくいとは、まったく他人とは思えない奴だ。

男は作戦の開始を告げた。マザーベースの南門が開門される。山風邪を引くなよ、妙な女に引っ掛かるなよ、男は一列並んで通りすぎていく兵士と積んだ背囊の元に向かい、男は一列に並んで通りすぎていく兵士に一人ずつ背囊とライフを渡し、一言ずつ声をかけた。

葉に兵士達は薄く笑みを浮かべながら城門から発っていく。自身らに課せられた任務の重さは先刻承知、しかし有り得る使命感が彼らにはあった。自分達がこの大陸の人々を、一人でも多くのB O S Sの下へ連れていく。そうする事が救済に繋がるのだと固く信じていた。

『…忙しくなるな』
『…忙しくなるな』
『…忙しくなるな』
『…忙しくなるな』

スカサハの反駁に、男は肩を竦める。

「もっと忙しくなるという事だ。まだまだ仕事は尽きない。覚悟しろおけよ」
槍の極みに至った神域の達人は、その宣告に眩暈を起こしたようだった。それらの奴、死ぬぞ……そう呟くのに、あのスカサハを殺した男仕事が増えると確信している様子に、スカサハも乾いた笑い声を溢すに、
お主はお主で、連中にV I C B O S S（勝利のボス）などと呼ばれたるではないか。大総統なのかV I C B O S Sなのかはっきりせいない。
「つ」の殴透よ肩の方いと命ジいう書のか、こ… やれ razónと、今ばるらやに一あ捻そるベーにか、今がも滅と、真だの増シー顔ぞ。スもえし、言傍レのでカが。今がも追元につ自れれ、殺はサわるベーにかすスもえし、ハ。俺いは級あ劣ミにかすスもえし、ハ。俺いは級あ劣ミにかすスもえし、ハ。俺いは級あ劣ミにかすスもえし、ハ。
「守って！」
「守ってー！」
「鬼ごっこ！ っていう遊び！ オキタが教えてくれたの！」
「ああ…何してるんだ？」
「ああ…歴史を学ぶとね。」
「そうか、と微笑んでミレイの顔を撫でる。 どうして君は追いつくことができなかったのか。
男はミレイの首根っこを掴み、そのままシータに投げ渡した。 うーん、それとしても、もう少し見える。 ミレイが「薄情者ー！」と抗議してるのを見ると。
「まだラーマの存在は感じられおらん？」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…マスター、もしかして…」
「あ…
無意にミレを抱き締めると静かに目を伏せた。

「…あがとう、ございませ」

「礼は愛しの旦那と再会出来て。何なら皆の前で挙式するか? 数千年越しの愛の結実とでも銘打っって」

「っ! も、もぉ! マスター! らかわないでください!」

そこの場面を想像したのか、顔を真っ赤にして怒鳴るシスターに男は陽気に手を叩いて笑い声を発する。

「愉快だな、などと。希望はあるので―絶望に暮れて激動の二年目の到来を前にして、尚も強く笑っていった。

「送り出すてのは…辛いものになんか…」」
分は大丈夫などと、慰めにもならない言葉を残して。

今、やっと男は実感したのだ。待っている人たちの心境を。
帰っただけ……いや、帰っても、離れないと言えない。やる事は沢山ある。

「帰っても、離れないと言えない。やる事は沢山ある。」

帰っても、離れないと言えない。やる事は沢山ある。いや、帰りたく……無性に郷の念に駆られても、 
絶対戦線フィランソロピー

お前がいつの日か出会う禍は、
お前が疎かにした或る時間の報いだ。

北東より敵襲の報が入った。

北東より敵襲の報が入った。

推定敵兵力《百万》《百万》。
しかし敵兵力は絶え間なく増大し続け、
事実上無しであるかと思われた。

敵首魁は『人類愛』の存在を認知したものと思われた。
事実上無しであるかと思われた。

敵首魁は『人類愛』の存在を認知したものと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるかと思われた。

事実上無しであるか思い
こ
れを
受け
て『人
類
愛』
の
領
袖、
大
総
統
と
呼
ば
る
ジ
ャ
ッ
ク
・
フ
ィ
ラ
ン
ソ
ロ
ピー
は、
戦
役
の
勃
発
を
全
軍
に
発
令。
血
戦
の
幕
が
切
っ
て
落
と
さ
れ
た。

「—
—情
報
が
古
い。
ジョ
ナ
サン、
これ
は
い
つ
の
物
だ。
—
二
日
前
だ
と？
—戯
け、
戦
況
報
告
は
随
時
上
げ
ろ
と
命
じ
た
う
が！
一分
の
弛
み
も
赦
さ
ん、
情
報
の
更
新
を
怠
る
な
と
個
前
線
基
地
に
通
告
し
ろ。
伝
送
班
の
報
告
頻
度
を
刷
新、
密
な
情
報
共
有
が
迅
速
な
指
示
系
統
の
背
骨
に
な
る
と
弁
え
ろ
！」

マ
ーザ
ベ
ー
スの
本
営
に
詰
め
る
兵
士
に
囲
ま
れ
て
い
る
の
は、
言
わ
ず
と
マ
ーザ
ベ
ー
ス
の
作
成
ペ
ー
ス
を
上
げ
さ
せ
ま
す！
低
度
で
も
日
に
二
度、
報
告
を
上
げ
させ
ま
す！

ジョ
ナ
サン
とは、
ジャ
ック
ー
エミ
ヤ
ロ
ウ
が
ス
カ
ハ
と
出
会
っ
た
頃
に、
彼
が
留
守
に
し
て
い
た
マ
ーザ
ベ
ー
ス
の
指
導
者
で
あ
る。
指
導
者
で
な
か
か
の
総
大
将
J・フ
ィ
ラ
ン
ソ
ロ
ピー。
彼
の
補
佐
と
し
て
付
く
ジョ
ナ
サン・ホ
ー
ク
ィ
ッ
ツ。

しかし
彼
は
優
秀
な
軍
人
で
あ
る
と
同
時
に、
非
常
に
人
間
の
出
来
た
人
格
者
で
あ
っ
ta。

さ
ま
な
く
ば
多
く
の
難
民
を
編
め、
マ
ーザ
ベ
ー
ス
に
辿
り
た
。
着く事すら叶わなかっただろう。骨折などの重傷を負い、医療施設に詰めていたジョナサンは、そこを訪れ頼を下げて陳謝したシロウの謝罪を受け入れ、彼の要請を受けて『人類愛』の幹部に加わったのだ。

元が中佐であった事もある。軍人としての能力は、アルトリウスカルターよりも遥かに優れていた。流石にスカサハから課される訓練には彼も閉口していたが、それがあったから確執のある兵士の面々とも、今は和解できている。

（ジョナサンを通じてシロウへ情報を渡り、下された裁決を部下に浸透させるのがジョナサンの任務だ。）

激務である。しかし不満はない。誰よりも働き、過酷な状況に置かれる場があったはずだ。大方、獅子や熊やの魔獣が溜まってきたのだ。南門の兵舎から一個小隊を出せ。貴重なタンパク質だ。死体はその小隊に南部基地に運ばせる。指揮はアーノルドだ。

了解。伝令！　聞いていたか？　ただちに向かえ！　その際にアーノルドにこの書類を渡せ。返信は要らんと伝えよ！

次だ！　剣弾の運搬状況の一覧はこれだな？　マザーベースから南部前線基地への運搬に遅延が見られるか。彼処には魔獣の狩り場があったはずだ。大方、獅子や熊やの魔獣が溜まってきたのだ。南門の兵舎から一個小隊を出せ。貴重なタンパク質だ。死体はその小隊に南部基地に運ばせる。指揮はアーノルドだ。

了解。伝令！　聞いていたか？　ただちに向かえ！　その際にアーノルドにこの書類を渡せ。返信は要らんと伝えよ！

「次だ！　剣弾の運搬状況の一覧はこれだな？」　マザーベースから南部前線基地への運搬に遅延が見られるか。彼処には魔獣の狩り場があったはずだ。大方、獅子や熊やの魔獣が溜まってきたのだ。南門の兵舎から一個小隊を出せ。貴重なタンパク質だ。死体はその小隊に南部基地に運ばせる。指揮はアーノルドだ。

了解。伝令！　聞いていたか？　ただちに向かえ！　その際にアーノルドにこの書類を渡せ。返信は要らんと伝えよ！

「次だ！　剣弾の運搬状況の一覧はこれだな？」　マザーベースから南部前線基地への運搬に遅延が見られるか。彼処には魔獣の狩り場があったはずだ。大方、獅子や熊やの魔獣が溜まってきたのだ。南門の兵舎から一個小隊を出せ。貴重なタンパク質だ。死体はその小隊に南部基地に運ばせる。指揮はアーノルドだ。

了解。伝令！　聞いていたか？　ただちに向かえ！　その際にアーノルドにこの書類を渡せ。返信は要らんと伝えよ！

この書類を渡せ。返信は要らんと伝えよ！　その際にアーノルドにこの書類を渡せ。返信は要らんと伝えよ！

この書類を渡せ。返信は要らんと伝えよ！　その際にアーノルドにこの書類を渡せ。返信は要らんと伝えよ！

この書類を渡せ。返信は要らんと伝えよ！　その際にアーノルドにこの書類を渡せ。返信は要らんと伝えよ！

この書類を渡せ。返信は要らんと伝えよ！　その際にアーノルドにこの書類を渡せ。返信は要らんと伝えよ！

この書類を渡せ。返信は要らんと伝えよ！　その際にアーノルドにこの書類を渡せ。返信は要らんと伝えよ！

この書類を渡せ。返信は要らんと伝えよ！　その際にアーノルドにこの書類を渡せ。返信は要らんと伝えよ！

この書類を渡せ。返信は要らんと伝えよ！　その際にアーノルドにこの書類を渡せ。返信は要らんと伝えよ！

この書類を渡せ。返信は要らんと伝えよ！　その際にアーノルドにこの書類を渡せ。返信は要らんと伝
「騒々しい！何処からだ！？」

壮年の大男、ジョナサンは元貴族である。その威厳は軍人として務めて来た事で磨かれ、本営に転がり込んできた若い兵士を落ち着かせた。

彼の一喝に兵士は背筋を伸ばして早口に応答する。しかしその最中にも馬蹄の音が聞こえていた。

「北部落地隊長アルト・リス・カーター大尉より報告！我、敵軍はサー・ヴァント・タイプの個体を確認した。その数二十。全て男性型。直ちに援軍を請う」との事！

「二十ッ!?」

「伝令です！東部基地より伝令！敵軍にサー・ヴァント・タイプを確認！数は十！対城道具は持っていない模様！あるいは設備への被害は甚大、死傷者三名！現在アルジュナ殿が応戦しておりますが、基地を守る結界に破損が見られます！アルジュナ殿の宝具が防がれました。この様では半日と保ちません！

伝令です！東部基地より伝令！敵軍にサー・ヴァント・タイプを確認！数は十！対城道具は持っていない模様！あるいは設備への被害は甚大、死傷者三名！現在アルジュナ殿が応戦しておりますが、基地を守る結界に破損が見られます！アルジュナ殿の宝具が防がれました。この様では半日と保ちません！

ヨナサン！」

今、北部落地隊長アルト・リス・カーター大尉より報告！我、敵軍はサー・ヴァント・タイプの個体を確認した。その数二十。全て男性型。直ちに援軍を請うとの事！

「二十ッ!?」

「伝令です！東部基地より伝令！敵軍にサー・ヴァント・タイプを確認！数は十！対城道具は持っていない模様！あるいは設備への被害は甚大、死傷者三名！現在アルジュナ殿が応戦しておりますが、基地を守る結界に破損が見られます！アルジュナ殿の宝具が防がれました。この様では半日と保ちません！

ジョナサン！」
敵は『アルスターの赤枝騎士団』である。アルスター十八楯の内
の幾らかが確認されている。

アルスター王コンホヴォル・マク・ネサの『海洋に呖る戦楯』に
よる防禦力。勝利の狼の異名を持つコナル・ケルッハの『手に迅速群狼の
楯』による迅速な護り。

赤枝の騎士であると同時に、宮廷詩人にして裁判官であるシェン
ハ・マク・アレラの『共鳴し、清めの詩を歌い上げよう』による、
同胞の宝具を一つの力に纏め上げる力。

同様のシュル・カカの『戦ク・ラ・カサ』に
よる迅速な補填。明日までではない

サー・イエス・サー！
ジョナサンがシロウの指示に応えて指令を出す。本営内の兵士達が忙しく動き出していた。それを尻目に、今まで自身の三歩後ろに控えていた少女へ、シロウは鋭く単眼を向け、黙々と輝く強靭な意思の煌めきに、沖田は臆する事なく冷静に、平静そのままに応じた。「ネロと共に東部戦線に迂回しながら向かえ。ネロは皇帝特権で気配を消せ。お前も気配を遮断して敵軍の背後にネロと囲み込み、因果を含めておく。出来うる限り迅速にやれ、東部が保つかはお前達の働き次第だ。―承知しました。吉報をお待ちくださいねっ―」

沖田はうっとうしがながら本営から飛び出していく。活躍するマスター。それに一瞬だが微笑を溢したシロウだが、すぐに顔を戻す。衝突と入れ替わりで本営に戻ってきたスカサハに彼は命じる。―うむ、拝承した。中々の戦だ。存分に槍働きを魅せてやる。―南と西部の敵は薄いが、南と西部の敵は薄いのか、マスター？
この城の予備戦力を回せばマザーベースの守りが薄くなる。「サヴァントを一騎も残さずにおり、アサシンの暗躍を減らせどー」アサシンがいたとして、出来る事は少ない。気づかぬ隠し、城を護る結界の要石を破壊出来ない仕掛けがあるんだ。なら狙うとすれば《これ》《しかない》

スカサハの懸念に、シロウは鼻を鳴らして手刀で己の首を叩いた。

不敵に喫するマスターにスカサハも笑い、二本の矢輪を手に出撃していった。

メイヴは本気で《人類愛》を潰そうとはしているだろう。しかしき色力ではない。これくらいでやること、まだこちらを侮ってくれて全気ではない。これくらいでやること、まだこちらを侮してくれている。この間に対策を練らせばならない。

敵の敵であるが、どんな条件、制約があるのか。なんだ制限もなくないか。しかしね敵のセーヴァントは何。

情報が足りない。このまま耐えているだけでは、いつか必ず戦線が破綻する。何か切っ掛けを作らなければならない。しかしその切っ掛けは……どう作る？
に移るためのファクターが足りない。

まるところ、情報不足。この一言に尽きた。送り出した二百名の兵士連中が、なんらかの情報を持ち帰ってくるのを期待するしか

彼らなら、これだけの大軍がマザーベースに迫っているのを発見

出来ているだろう。秘匿されている地下通路を通ってマザーベース

に帰還し、この状況を打破出来る重要な手掛かりを寄越してくれ

のを祈る。

中ツォは手詰まりな戦況に頭を痛めながらも、戦線の維持に知恵

を振り絞るしかなかった。

シロウは手詰まりな戦況に頭を痛めながらも、戦線の維持に知恵

を振り絞るしかなかった。

シロウは手詰まりな戦況に頭を痛めながらも、戦線の維持に知恵

を振り絞るしかなかった。

シロウは手詰まりな戦況に頭を痛めながらも、戦線の維持に知恵

を振り絞るしかなかった。

シロウは手詰まりな戦況に頭を痛めながらも、戦線の維持に知恵

を振り絞るしかなかった。
に起爆するために改造した投影道具を打ち出す『剣砲』の開発。食料や医薬品、剣弾の開発と備蓄。人智の限りを尽くした防衛システムによって、彼らは辛うじて戦えていたが、状況が悪化する前に、手を打たねばならない。しかし、それはシロウらには不可能に近かった。だが、運はまだ、彼らを見捨てていない。遠く南東の地にて、義賊が理想王国。湖の騎士と駿足の英雄を追跡している。

マザーベースの苦境を察している二百の兵士達が、走る。彼らの邂逅が、終尾に立とうとしている同胞を救う機会を運ぶのだ。
死力を尽くし、犬死せず

アメリカ独立戦争にて、軍に徴用された時に感じたのは。「自分達の国を作る事業に携われる」という喜びなどでは断してなかった。どうしてお上の高尚な理想などというものの為に、命を賭けねばならない？ -- そんな平不満だ。家族から引き離され、厳しい訓練を積まされ、勝てるかも分からない戦争に駆り出される…。

怖かった。

植民地の民衆として搾取される側に立たされる事へ不満があったのは事実だ。過酷な大地で生き、開拓していく中、先住民との間に生まれる軋轢で頭を悩まされるのにもうんざりだったが。それでも、生きていく分にはなんとかなっていたのだ。命懸けになる戦争に赴きたくはない。

どうせ御大層な理想を掲げる独立戦争の指導陣も、宗主国同様に民衆を搾取するようになる。国の名前が変わるだけで、大して変わるものなどないのではないかという疑念があった。故にこそ、マクドネル・マッカーサーは戦争を受け入れられなかった。

それでも、訳も分からないケルト軍の虐殺の憂き目に遇ってしまう。

それは、なのだこれは。なんだそれは？！…現実を呪いながら逃げていた。
故郷を追われ、逃げ惑う日々。そんなものが長く続く訳はなかっ
た。アルトゥズのカーター少尉が戦時任務で中尉に、そして大尉
に階級を繰り上げられた頃に、遂に破滅の時が訪れたのだ。
原始時代の勇者達のような、化け物ども。銃が効かない理不尽な
怪物ども。その軍勢に渋谷まで追い詰められ、その先に待ち伏せて
いる軍勢を目にしてた時に、死を覚悟させられた。
だが、ただでは死なない。難民の中には自分の家族がいる。

体の弱い母は死んだ。父は戦死している。残されていた幼い弟たち、
クリスト、ミレイ、シャーレイ。彼らの父代わりとして、なんとし
ても護る。心が折れかけている仲間達のケツを蹴って最後の抵抗を
しようとした。

自分達を助け出してくれた彼は、魔術の存在を教えてくれた。
それをエミヤシロウと名乗った男は自分達のB.O.S.Sとなっ
た。ここからは、まさに激動だった。誰もが必死で、それはマクロデ
ルも同じで。どうせ危ないうちから自分だけで逃げるんだろと、と
疑心暗鬼に駆られていたマクロドネルの予想を裏切り、いつも先頭に
立て死力を尽くしていた。考えることなんて使わなくても分かる事だった。
どうせ見捨てられるなら、最初から助け出すそうとすらしなかった。

刺を踏み、小さな刀を刃にして自らの目を刺し、 jelが短く折れて
される。
B.O.S.Sはジャックと名乗るようになった。なんでもこちらの方が呼びやすいだろうと。確かにシロウ・エミヤというのは、発音した辛いのは確かで。ジャックの方が良かったが…誰が彼をB.O.Sと呼んで。畏れ多く、とてもじゃないが名前で呼べるはずもなかった。

苦境から救い出してくれると戦う度、供に戦う度、マクドナルド達は国ではなく、理想ではなく、彼こそ、忠誠を捧げて生きる事を決める。偉大なB.O.S。勝利のポーズ。どこかで死んでいた方が、余程現実の為に、彼は最初の宣言通りに理不尽を喰い潰し続けた。

兵士として、男として…その手のとありまブランド生荒れ。彼に尽くす事こそが兵士の本態である。彼の功績を語り継ぐために、絶対に生き抜いて見せると誓った。

サーヴァントという過去の偉人、伝説や神話的存在を仲間に加え、遂にはグレートプレーンズにまで迫り近っていた。彼に死に物狂いで耐え抜いたマクドナルド達は。推動力の如く、本当の戦いの始まりだった。

悪魔のように厳し女サーヴァント。化け物よりもなお恐ろしい化け物。敬愛する兵士達の母。彼女の半面と少しをかけた訓練を、死に物狂いで耐え抜いたマクドナルド達は。信し難事に「人類愛」の最精鋭となっていた。この北米大陸に比類ない、世界最強の部隊であると讃えられた。
その、誰よりも尊敬するB OSSに敬礼された事に魂が観れ
た。ぶるりと震えたのは、マクドネルだけではない。他の兵士達も、
この人の為に死のう。生き延びる事を叩き込まれた兵士達だが、
誰もがその心命を捧げようと改めて誓って、彼の為に…偉大なB
OSSの為に…『人類愛』の為に何もかもを捧げる事を誓って、彼の為に…
ならばやらねばならない。俺達がやらねば誰がやるというのだ。
マクドネル達は奮起して各地に散った。強力な味方を探し求めて、
幾人かのサーヴァントを発見して観察し、仲間になれるか探る兵
士がいた。重傷者を抱え、彼らを護る天使を見つけていた。
先住民達を護り、レジスタンスを名乗る私兵団を率いる赤い悪
魔を見つけていた。遠くまで向かい、現地の大軍を纏めあげ、組織的に抵抗する
機械の軍団を見つける事ができる兵士がいた。そんな中でマクド
ネルだけは違う事を考えていた。
強力な仲間を探すのは必須だ。行き場のない人々をマザーベースに誘導するのは、「人類愛」として当然の義務だ。しかし一人の大軍をどうにかするには、それでは足りない。もっと根本的な解決方法を探る必要がある。故にマクドネルが下した決断は…』敵地への単独潜入』である。

不可能ではないと彼は考える。何故なら敵軍団は、どういうわけか人間を生きたまま搬送しているのだ。何か狙いがある、目的があ

る。起死回生を図るには、B O S Sに情報が必要で…その情報を得る事だが、兵士の役割である。

B O S Sは二人で一人だと言っただろう。マクドネルが行くなら

B O S Sは二人で一人だと言っただろう。マクドネルが行くなら

B O S Sが口を酸っぱくして、繰り返し繰り返し説いてきた心構

B O S Sが口を酸っぱくして、繰り返し繰り返し説いてきた心構

B O S Sが口を酸っぱくして、繰り返し繰り返し説いてきた心構

B O S Sが口を酸っぱくして、繰り返し繰り返し説いてきた心構
「…すまない。とは言わないぞ。」

「敵はまるで家畜のように養われた。一星期に一度も行かない。一人より二人、その方が任務の達成率は上がるはずだ。」

兜をかぶったマクドネル達は、まるで家畜のように運ばれた。

「……すまない、とは言わないぞ。」

「敵の力量差がある。そんな化け物をBOSSは平然と手に持った武器だけで仕留めてもある。」

「自分達は個体同士の戦いでは手も足も出ないだろう。そ率に力を量差がある。その化けをBOSは平然と手に収めた。彼はやや戦士としてもかも知れないだろう。」

「もろ、尤も。瞬間移動しながらの速さを持つ『人類愛』のアイド、オキタや。戦場の砲兵のシター。ビッグ・ママ。アルジュナにまでは遠く及ばないらしいが。それは比較する方が関係している。」

「最下限の食事、水分補給を、ケルト軍が走りながら無理矢理口に振り込み、排泄した。それは体調を崩さない方をどうかしている。死の一手手前にまで。当たり前だ。最低限の事、水分を補給を、ケルト軍が走りながら無理矢理口に振り込み、排泄した。それは体調を崩さない方をどうかしている。」

「兜をかぶったマクドネル達も例外ではない。なんとか動けはするが、それでもまともに行軍する事すら叶わないほどの苦しい心身を抱えている。」

「兜をかぶったマクドネル達も例外ではない。」
彼らを運んでいたケルト軍は、それはもう酷い臭いだ。捕虜達の
糞尿をその背中に浴び続けていたのだ。臭わない訳がない。

マクドネル達や、四十二名の人間が運び込まれたのは
―「マザー」ベースから北西に、―
おおよそ1,200マイル（1931・213 km）ほどだな。
檻に入れられたマクドネルとベディは、運ばれながらも距離と方
角を常に囲い続けていた。
互いの認識に齟齬がない事は確かめ合う。二人の兵士は頷き合っ
た。敵拠点は掴めた。後は他に収集出来る情報を集めればいい。
「どうする？マクドネル」
主に探るべきのは、捕虜にした人間をどうするつもりなのか
な。他の目的は達している。一番はやはり敵拠点の所在地の把握だ。

敵首魁はメイヴとやらで例の化け物がクーフィーリンだというのは
判明しているからな。出来ればあれ以来襲ってきていかないクーフィーリンとかいう化け物がどうなっているかも探りたいが……。

無数の粗雑な木製の檻に入れられているのは、多くの人間である。
老若男女を問わず、疲労困憊のようこそ放っておけばすぐに
死んでもしまいそうなほど弱っている人々が、ざっと見ただけで数百
広く、大きな城の一角だ。ここだけです。これほどいるという事は、
総数はこの十倍から百倍いてもおかしくはない。誰もが不安にし
ている。幼い子供が、青い顔で寝ている母や父に繰りつづき。その逆
先住民の姿も多数見受けられる。マクドネル達は顔を隠しくさせ、彼らに出来る事はない。

「…見張りは雑だな」
「逃げられる訳がない、と見切ってるんだろう」
「それより気づいたか、マクドネル」
「ああ…」

散見されるのは、幾人かの男性型のサーヴァント・タイプ。三名ほどが雑談しながら歩いている。欠片も捕虜の人間を気にかけていない。啜り泣く捕虜の声、虫の鳴き声としか感じていない証だ。

「…この檻はどうする？」
「…お前も持っているだろう。これで削る」
「…そういう心じゃなくてだな。骨が折れるだろ。今はある程度休むべきだと思うぜ」
「…まあ、そうだな」

流石に精兵といえば、体力の消耗は如何ともし難いものがある。
夜になったので休む事にした。
その時、戦士は無視し、戦士が数名近づいてくる。緊張する人々を
無視し、戦士は檻を開くと中を見渡して死体を引きずり出した。や
で！お父さんを離してよ！泣き叫ぶ娘と、連れ出される。
その後にも幾人かを適当に選出して、十人の人間が連れ出された。
「待て！」
マクドネルが叫ぶ。
「彼らをどうするつもりだ！？」
答えてくれると思わぬ。案の定、戦士はマクドネルを一瞥す
るだけで何も言わなかった。
しかし、サーヴァント・タイプが近づいてきて、無関心に。けれ
ど何処か、苦しむように呟いた。
「亡きのいいのがいる。母上の供物に相応しい。」
「ゾッとするほど圧倒的な、存在の次元の違いを感じて震え上がり
白髪の騎士だった。
白髪の騎士だった。
そうだ。観み付けるマクドネル、
騎士は淡々と告げる。体が
震えているのを、兵士達は見た。

「だ…が、供物の順番、は…守る。なるべく最後になるように
取り囲む。見ものだ、いつまでその活きの良さが保つか。母上
…の、もとに運ぶ供物は…母上が、サーヴァントを喚び、再構
成する為…の、大切な養分だから…」

「お前は、誰だ…？」

マクドネルが問う、騎士は唇を噛んだ。

白亜の城の騎士。
その真名を持つ彼は、絞り出すように告げた。しかし体が震え、
「いいかい…？」
逃げる…なら、夜は、ダメだ。夕方に、
僕の父が…帰って、来る。朝に、しろ。便宜は、図、る…」

「抗えない」、僕の、霊基も…限界だ…。君達に、賭ける…
「抗っている」のか。

《ギャラハッド》

「お前は、誰だ…？」

母上…母イーヴ、は…軍権を、彼に、預けた…

用心深い…っ、母上…メイヴ、は…軍権を、彼に、預けた…

気を付けて。父は…ランスロット卿は、つ、つ、強…っ、
用章、深い…っ、母上…メイヴ、は…軍権を、彼に、預けた…

希望を…《次に会えば》、その時は《本気で殺す》、事になる
…「抗えない」、僕の、霊基も…限界だ…。君達に、賭ける…

《ギャラハッド》

「お前は、誰だ…？」

母上…母イーヴ、は…軍権を、彼に、預けた…

用心深い…っ、母上…メイヴ、は…軍権を、彼に、預けた…

気を付けて。父は…ランスロット卿は、つ、つ、強…っ、
念入りに、《いじられた》。容赦は、されないでも僕がいい
王への忠誠を尽くして、召喚されたのに、抗った父は…

ギャラハッドは踵を返して去っていく。お！呼び
掛けるマクドネルを瞥したのは、完全に虫を見る目だったが。

その瞳の中に、苦痛があるのを見て取ったマクドネルは生唾を飲
み込む。

有益なものになるかは分からない。それはB O S Sが判断する。
だからこの情報をなんとしても持ち帰る。絶対に。
星々は御旗の下に

“でかしたアッ！"

マザー・ベースの本営にて。休む間もない激務に忙殺されていたシロは、秘匿された地下通路を通って帰還した三名の兵士を絶賛していた。彼らは『人類愛』に、三人のサーヴァントを連れて帰還してきたのである。手放しに褒め称え、兵士達を下がらせた。休養に入らせ、再び外に出てもう為である。

この時はばかりはシロも手を止めた。勲章も何も報酬がない事に一時仕事をジョナサンに丸投げして苦み走った顔をさせながら、一時仕事の穏やかさに誘まれて戦場に現れた『神槍』の男、一人が義侠然とした中華の武人。瘦せた狼の如く飢えた瞳をした死狂い。中華の拳法史上最強を誇る『神槍』の男。

一人がアッパッチ戦争にてアメリカ軍を震撼させた、鮮血の復讐者

休む間もない激務に忙殺されていたシロは、秘匿された地下通路を通って帰還した三名の兵士を絶賛していた。彼らは『人類愛』に、三人のサーヴァントを連れて帰還してきたのである。手放しに褒め称え、兵士達を下がらせた。休養に入らせ、再び外に出てもう為である。

報酬が何もない事にこの時はばかりはシロも手を止めた。勲章も何も報酬がない事に一時仕事をジョナサンに丸投げして苦み走った顔をさせながら、一時仕事の穏やかさに誘まれて戦場に現れた『神槍』の男、一人が義侠然とした中華の武人。瘦せた狼の如く飢えた瞳をした死狂い。中華の拳法史上最強を誇る『神槍』の男。
血塗れの悪魔・赤い悪魔と恐れられたシャーマン。インディアンの伝説的指導者。一人がクリミア戦争にて鉄鉄の白衣と畏れられた、赤い軍服を着た小陸軍省。決して枯れず、朽ちず、揺るがなない鉄鉄の信念を持つの献身と奉仕の女。別名『クリミアの天使』。

シロウは彼らに握手を求めた。真っ先に応じたのは拳法家の武人である。ゴッソツとした武骨な掌が重なりあう。シロウが契約の為パスを繋げると、武人は拒まぬに契約を結んだ。潤沢な魔力を感じ、赤毛の武人は獰猛に笑む。

"人類愛"の領袖、エミヤシロウダ。ジャックという名もある。

苦笑して、シロウはその男の求めているものを承認する。なるほど、何かとぶちかまされていたマジカル八極拳、その達人の中の達人は、どうやら若年の外見そのままの気性をしているらしい。一身の都合でそれなりに造詣を深めた拳法史で、燦然と輝いていた武勇伝に偽りはなさそうだ。在分に槍として使って頂こう。

ああ。文字通り休み間もなく只管に戦に明け暮れてもらう。暇をああ。文通の休む間も耐え、只管に戦に明け暮れてもらう。暇を
手て余ししたスカハと遊んでもらう。俺が助ける。

「ほぉ！あの神殺しと讃される影の国の女王！
　なるほど、ではどうする？僕をどう使う！
　東部基地に向かうなら、気遣う必要はない。
　俺が助ける。」

李書文の猛々しい面構えに、シロウは心得たもので余分な装飾を剥ぎだ物言いで彼を歓迎した。さらりと厄介な修行の鬼を押し付けぬ段を立てる男である。

「呵呵っ！承知したぞ！」

次にシロウが握手を求めたのは静謐な面持ちをした理知の人が、英ディアンの賢人である。

次にシロウが握手を求めたのは静謐な面持ちをした理知の人が、英ディアンの賢人である。

「エミヤシロウだ。宜しく頼む。」

「サー・ヴァント、キャスターだ。…ジェロニモといった方が分か
　エミヤシロウだ。宜しく頼む。」
「ほう、あのインディアンの指導者か。いいな、実にいい。キャス

握手と自己紹介を交わし、双方ともに躊躇う素振りもなくパスを
繋ぐや、早速戦力として組み込むとするシロウにジェロニモは苦
笑した。

出来なくてはないとジェロニモが答えると、それを謙遜と受け取っ
たシロウは告げる。

「素晴らしい。ではジェロニモ、お前を東部戦線を支える要としよ
う。ジョンサン、東部基地の戦況推移の一覧を。

ああ、マスター。それはいいが、頼みがある。

私のレジスタンスを率いていた。彼らをこの組織に合流させたい。

構わないだろうか？」

一歩、あのインディアンの指導者か。いいな、実にいい。キャス

こう、格闘戦もこなせると聞いても

彼の持つナイフを解析して粗方の性格、能力、戦法、経歴を読み取
っている。出来なくてはないとジェロニモが答えると、それを謙遜と受け取っ
たシロウは告げる。

構わないだろうか？」
巻き添えにすることはできない。

絶対に陥とさせないで。

覚悟しておいて。

スカー、これより君の指揮下に加わろう。

全霊を賭して働く。

ああ。

身を粉にして働いいで。

使えないで使いたに使いたし、そして来ることじゃないかったと嘆かせてやる。

シロウは肩を竦め、ジェロニモは東部に向かうのを見送る。

そして最後にシロウが握手を求めるのは赤い軍服の女だっただ。

堅く、硬く、固い。

鋼鉄の信念の秘めたられした瞳をしとる。

手袋を外して応じた彼女が名乗った。

「俺はエミシロウ―」

「もう聞きました。私はフロレゾン・ナイトゲーるといいます。

ここに患者が多数いるとの聞きました。案内を」

「…

…」

これには流石のシロウも苦笑い。

しかも握手したままある。

ゼか。…

ナイトゲーが手を離してくれないのだ…
「しよばす」捗問の主フ能かういナれる題ま病こてむ…治ロー俺目だ。無じ傷で。無じ傷でい。無じ傷でい。無じ傷でい。無じ傷でい。

安ほチ聞術。声ろな特は(戦る兼レ丸い的物勉は心同ど、ほンド、ン前くけ確ほ学・時りの「演し実合せた事だ、俺の病気は「ひとまはずは「治った事に「ならなくてもない事に」なる。

上の問題はない。治療は銃鋏邁進中で、お前が手を貸してくれれば更に済るだろう。

次の病気は「ひとまはずは「治った事に「ならなくてもない事に」になる。
「別に間違ってはない。遠い目のを乾いた笑みを溢した。手を離してもらえて安堵するシロウである。
シアは彼女に、「三大触るな危険」に並ぶ危機を本能的に感じていた。キアのアレと、スカサーノのアレ、ナイチンゲールのソレ。
新たにナイチンゲール女史が「三大触るな危険」候補としてリストアップされた瞬間である。ほぼリスト入りを確実視される有力な存在だ。実にバッド。実にラッキー。この手の人物はかなり有能なのだが二人の前に証明していた。
肝ならば三人ともがジャンル違いの危険さで、加えて三人とも女性である事。天敵である。加えし易くはあった。魔性薬草以外。喋りの出先を潰してくる某宝石乞食女と薬草様だけが真正の天敵だ。

フーレンス、お前はマザーベースに詰めて賞。いざという時、モレントの予備戦力だ。その時以外は病者の治療に当てたるが…。
それに絶対にやってしまおかないといけない事がある。

この間に絶対にやってもらわないといけないのです、ドクター。

一之、どこが違うのです、ドクター。

別の間違ってあるフーレンス！

違った。間違っているぞフーレンス！

どうか違うのです、ドクター。

首を傾げるナイチンゲールの後ろで兵士達が面白そうに見ている。シロウの後ろではジョナサンが「早く戻って来てくれ！」と切実に求めている。構わずに続けた。鋼鉄のみのはナイチンゲールだけではない、シ
そんなものは基本中の基本。既にその体制と環境は整えてある。

故にまずフローレンスすべきは—美味しき御飯の炊出しに決ってんだろうか！

—美味しく栄養満点の病院食！病は気からだというだろ？食事健康法を用いて未然に病を防ぎ！速やかに患者を癒す！フローでんのような美女が料理を振ってくれる、これはむさ苦しい野郎連中にとっては何より『薬効』！美味しさ御飯と手厚い看護があれば生きる気が湧いて出る！人間は意外と現金なもの、何事も患者が生きようと思わないと話にならない。これはドクター、現実の治療行為に行えと？スカサハの置いていたル・アン石も治療に使えるぞッ！'

—馬鹿野郎ッッッッッ！'

「食事健康法」の、護法！」
「……なにがである。……なにをしない。」
「なにがないのよ。あまりにいためらがっている。」
「そんなことないで。なぜそんな感情を示すのだろう。」
「気にしないで。それがあなたの問題ではない。」

「どうして、そんなことをするの。」
「なぜ、そんなことをするの。」

「……なにがである。……なにをしない。」
「なにがないのよ。あまりにいためらがっている。」
「そんなことないで。なぜそんな感情を示すのだろう。」
「気にしないで。それがあなたの問題ではない。」

「どうして、そんなことをするの。」
「なぜ、そんなことをするの。」

「……なにがである。……なにをしない。」
「なにがないのよ。あまりにいためらがっている。」
「そんなことないで。なぜそんな感情を示すのだろう。」
「気にしないで。それがあなたの問題ではない。」

「どうして、そんなことをするの。」
「なぜ、そんなことをするの。」
頻りに首を傾げるナイトエンゲルに、シロウは当然ですよと生真面目に返す。これは素だった。胸に落ちないままのナイチンゲールを送り出して、シロウは額の汗を拭う仕草をする。なんとか乗りきった、手強い敵だった……。まあなんやかもんや、いい戦力が加わってくれた。そしてなんやかんや、いい感じに気の休まる時間だった。仕事に戻ると、ジョナサンはげんなりした顔でシロウを睨んだ。「閣下……」「あーはいはい悪かった悪かった俺が悪かった。お前は休んでいいぞ、二時間ぞ。そこからまた二十四時間頑張ってく。その後に一日休みをゃろう」「え？なんだって……？」「あ？なんだって……？」「悪魔……」「あーはいはい悪かった悪かった俺が悪かった。お前は休んでいいぞ、二時間ぞ。そこからまた二十四時間頑張ってく。その後に一日休みをゃろう」「え？なんだって……？」「あーはいはい悪かった悪かった俺が悪かった。お前は休んでいいぞ、二時間ぞ。そこからまた二十四時間頑張ってく。その後に一日休みをゃろう」「あーはいはい悪かった悪かった俺が悪かった。お前は休んでいいぞ、二時間ぞ。そこからまた二十四時間頑張ってく。その後に一日休みをゃろう」
彼は捲し立てた。敵拠点の正確な位置を掴んだ事、そこであい―捕虜となっただ人間の《...》。

クドネルが脱出出来ない事。

捲し立て、電池の切れた機械のようになにかの兵士は昏倒した。

伝えねばならない事を全て伝え、使命感でなんとか疲労を誤魔化し戻ってきたいが、ついに気力が尽きましてやる。

シロウは五秒ほど沈黙して考えを纏め―決断を下す。

「伝令、東郜基地に向かっただ李書文とジェロニモを追いかけ、奴らを北部に向けろ。東郜のエドワルドには悪いが、暫くネロだけで凌がせる。代わりに北郜からスカサハと春を呼び戻せ。スカサハを俺の代理とし本営に置く。春は俺の供だ」

マクドネルの戯けを救う、と―シロウはそう、断言した。
暗剣忍はす試逆の儀
（上）

決死隊を募る。

国語のおさらいだ。

決死とは命を投げ出す覚悟をする事である。

隊とは二人以上が集まっている組織である。-

「隊」に秘密された意味を拡大したり歪曲したり、混迷の言葉に
繋げて意味を増幅させたりするからだ。

一般にこれを「言葉」という。他にも言い方はあるが今はどうであら
ば話にならない。そうした言葉を用いて呪文とし、それを構築して
自らの魔術を支配して、操作する暗示とする。人間が築き上げてきた
から見て最も力を持つ「言葉」に対し、どうしても理解が深くなら
なければならないのだ。

シロウもまた魔術師だ。固有結界という魔術世界の奥義を先天的
決死隊。嫌な名称だ。命を投げ出す覚悟をした、二人以上の人間が集まった組織で、馬鹿げている。なんだかそんな覚悟を、複数人が共有して集まらねばならないのか。

最も馬鹿げているのは、その隊を募ったのが他ならぬシロウ自身であり、決死の覚悟を抱けと命じている事。苦虫を噛み潰した表情になりそうな鉄の意思で押し隠し、シロウはマザーべースの秘匿されている地下廻路の入り口で、我先にと集い横一列に整列した。

九人の兵士達を見渡した。
止めることはない。シロウはどういった男なのか、彼らはよくよく
理解していた。彼の言う「ついでに」は、本命と同じ比重を持つ。事が人命に関わ
るともなければ、手を抜くなと断じて有り得ない。それが「人類愛」
がB O S Sと呼んで慕う男の在り方なのだ。

奴のバディ、アレクセイの持ち帰った情報は非常に重く、深刻だ
が、俺達の置かれた状況を打破し得る貴重なものでもある。即ち要
点は三つ。敵地を把握出来た事。その敵地への侵入が極めて容易で
ある事。何よりも、敵首魁の「暗殺」を達成させる公算が高い
事。間違えるな、マクドネルの救出は二の次三の次、本命は「ケル
トの女王メイヴを暗殺する事」だ。

それは起死回生の一発逆転を狙う策である。シロウからすれば特異点化の原因を排除し、人理定礎が復元され
てしまった場合、自分がどうなるのか今一把握出来かねているので、
出来れば倒したくはないというのが本音だ。
しかし今、そんな事を言っている場合ではない。自分一人の命に
拘泥して、この大陸に生きる人々を命の危機に晒し続ける訳にはい
かない。やるなら、やる。迷いはない。

苦渋を滲ませる事なく、合理的に、冷徹に告げる。しかしここで

- - -
シロウは鼻を鳴らした。

「―と、言えたら楽なんだが。生憎と俺達の理念はそんな現実的なものじゃない。救える限り救い出す。だがどうしても救えない人間は出てくるだろう。こうして決死隊を募ったのは、お前達に任せる任務がマクドネルや他の捕虜を助け出す事だからだ。」

合理。冷徹、無情。鉄の理念に情の血など流れるはずもない。しかしシロウは相好を崩し苦笑した。

「率直に言って『暗殺』するだけなら俺と春だくらいよ。他に銃を駆け付けるのが軍略家として、組織のリーダーとして持つべき最低限の覚悟なのにお、命懸けの戦いに赴こうというものに。死地に飛び込むというのに、既に幾人もの仲間を自身の指示で死なせているのに。尚も綺麗事を説く己の面の皮の厚さには、我ながららずと呆れ返る他ない。」

「綺麗事だ。理想的すぎる絵空事に聞こえるだろう。だが俺達はその理想的な理想を忘れてはならない。追い求める事を忘れてはならない。」

「だから信念といえばどうだろう。自らの欲に邁進する、まさに魔術師類愛の理念に沿う為しかない」

既に幾人もの仲間を自身の指示で死なせているのに。尚も綺麗事を説く己の面の皮の厚さには、我ながら何ほど呆れ返る他ない。
「やがて命令を、BOSS。「
「自分達は、どうにその旗に付き従っております。」
「理解の方々が、いや、俺が掲げる旗を探し、何故に、兵士達は、男達はその修羅の道に、同道するのに一寸の躊躇もない。シロウはその男達の面構えを、目に焼き付けた。顕を引く目礼した。」
了解、と兵士達は敬礼する。それが現実的には、不可能なので、百も了承。それでも、全員で帰還する。事は命じられたのなら、最善を尽くす了承。彼は、ほぼ何と、疲労している。傷は治っていても、疲労は抜けきっていない。シロウに至ってはこの場で、最も疲弊していると言えた。故に、最高のコンディションである。強がりでも、なんでもなく、事実として、態と薄汚れた格好をするれば、難民が逃亡生活の末に疲弊しているように見えるだろう。」
彼らは地下通路を通りマザーベースの戦線から離れた。
反撃の嚆矢として、敵首魁の喉笛を噛み千切るべく。
不逺中の幸いはならなかった。なるべくしてなるべく不逺中の不幸とはいっろう。
星の巡わりが最悪に近かった。
ケルト軍の捕虜となる為に散策していたシロウらが遭遇したのは、よりにもよってアレクセイの報告に名が挙がっていった湖の騎士ランスをだっただけも常に英雄殺しの槍を携
え、警戒している駿足のアキレウスまでいる始末である。
ランスロットの顔、能力、性格をアルトリアの記憶を通して知っていた。そして槍を解析してアキレウスという名を把握したシロウは、それはもう盛大に顔を覗めてしまったものだ。なんて鬼みたんだ。

故に白髪に右の金瞳、左の琥珀瞳というオッド・アイとなっていろ。左目はシロウ本来の瞳の色だが、それは単にスカサハに移植された魔眼の虹彩が偶然その色だっただけだ。分かりやすい眼帯を外しておき、肌の色が違うから別人と言いたい張れない事もない。

遠坂凛製のそれが使い捨てなのと同じで、こちらも使い捨てである。
一度外せば機能しなくなる仕様だ。
故に抜かりなくスカサハ製のコンタクト型の魔眼殺しをつけていた。しかしその左目は、見る者が見える一目で魔眼と知れるだろう。

「ふむ。またぞや『資源』が増えたか……」

過儀礼として抵抗する素振りはした。全力建て逃げもした。バラに、算を乱して逃亡してはみた。しかしシロウを含めた十名の兵士は、至極あっさりと捕縛されて
弾ん同どた…し速アかなメそのなし、―を確トじい強い思ル無のイの湖い。まちよや気ば能リシ弱ろにでを騎ま、具シーヴたがマかアヴロい。う。全よ士あ最アッサーに、剣ハ防にをススは性いよアッサー宝れよウ喚くラ速殲ら相ン幾タ、ン具はリンか遅しさのよンソ、―して―をチャックベラ、スカハという。トップクラスの火力と対人性能を持つ宝具持ちがいたとはいえ、防ぎ切れていたのは奇跡に近い。というより、幾らスカサハ達が最強に近いサーヴァント達とはいえ戦いに特化した戦士のサーヴァントばかりを相手に凌げるものなのか。同じサーヴァントを多数―それでも戦いに特化した戦士のサーヴァントばかりを相手に凌げるものなのか。
兵士達もそれらを効率的に運用し、敵非兵を寄せ付けず、サーヴァントすら迂闊前に出してこれないようにしていた。だがどう考えてオカシイ。今更ながらにその事に気づく為、虫が今いる。その掛け合わせた反則があるとはいえ、何もないわけがないとは思っていなかった。恐らくメイヴ自身気づいていない失陥があるのかもしれない。それを探り当てれば、まだ状況は改善する、かもしれない。

サーヴァントの大軍を召喚するなどという、聖杯とメイヴの力を掛けてしまった為、それと同様の霊物召喚がいなかった時のアルジュナが同程度だ。このアキレウスは、例えるならシロウと契約する前の、マスターがいなかった時だった。

虫というより、自分とは違う生き物を眺めているかのような目。魔術師が被験体に向ける視線に似ている。本堀に詰めていたから、分からなかった。こうして自分の目で見て感じたから分かったのだ。
しかしアレクセイの報告にあったよりもその歩みは遅かった。辺
々として進まないわけではない。しかし想定よりも遥かに遅い。ア
レクセイとマクドネルが捕虜として敵地に連れていかれた当日、ギ
ャハッドと名乗った英霊は、その日の内にランスロットが帰還す
るといった口ぶりだったらしいが、予定が大幅に狂うほど想定外な
事態に襲われているのかかもしれない。

シロウは気づかれないようにそれとなくランスロット達を観察す
る。}

「しつつし、ちんたら歩くのもうんざりしてきたな。兄貴」

アキレウスが言う。彼がランスロットは、捕虜に話を盗み聞かれた
のどきの英国には朗らかだ。

同じ生き物と見ていないから、究極的にはこちらの動向、生死
がどうでいいのかもしれない。好都合だ。そのやり取りからでも
情報は得られる。

アキレウスがランスロットを兄と呼んだ。実年齢は英霊には些末
事だ。しかし生まれた年齢的にはランスロットの方が後世の英雄で
ある。血縁関係などあるはずもない。なぜ兄と呼んでいる？
まさか本当に、本物の兄弟になったわけではないはずだが。

兄貴が駆除にしかじるってのも珍しいよな。野郎、ちまちま進軍
を妨げる罠を置いてくれやがって……鬱陶しいなんだぜ。まる
「どうした？」

「…いや、なんでもねえよ。」
「…どうした？」

― 理想王が消えたのはマスターの令呪ではない、例の弓兵よ

― これ、理想王の隠蔽によるものなのだろう。時折り飛びかかってくる殺気

・彼の王によるものである可能性が高い。忌々しいが、資源を守るために足を速める他ないな。

「どうした？」

― というより宇宙人の話題でも、彼らの態度は変わらない。無関

その弓兵がいる仕事をしてくっているらしい。

― サーヴァントに関する話題でも、彼らの態度は変わらない。無関

心、というより宇宙人の話題でも扱っているかのような。しかし脅

威としては認識しているらしい、それが故の警戒なのだろう。よほ

どその弓兵がいい仕事をしてくっているらしい。

姿隠しの宝具、或いは技能を持つ弓兵、ぎっくりし過ぎて彼名

は分からない。しかしランスロットとアキレスにここまで警

戒させるほど悪辣な罠を敷いていたという事は……今も近くでこち

らの様子を伺っている可能性はあるか。出来ればもう妨害はしない

でもらいたいものだが……こちらの意思を汲んでもらうにはどうし

たらいいだろう。

ああ、普通に沖田に頼めばいいか。余程に距離が離れていたら、
俺の魔術の腕だとパースを通じての念話は出来ないが、今は近くにい
るから普通に声もなく、仕草もなく、詳細に頼める。
……という訳だ。頼むぞ、春。
―いいですか？沖田さんにはそのアーチャーさんがいる所があるの。
―かいかい。
―いや無理ですって。気配遮断しながら動き回るのはいいにしろ。
なんとかしろと言えばスカハハハ目色を変えているなと思え出し。
transpose。
子どもが苦しみ困った時に出してしまうようになったフレーズだが、
常識的に考えて普通無理もののは無理だったか。
ちらいとバランスロットとアキレウスを見る。フェイクでもなんで
もしくは、普通に無視されている。彼らのどの為も無理矢理に従え
るほどの組の改竄がなされているやめだろう。こちらの視線など
に気づいて、余計な事はさせないように監視の目は光らせておくの
が普通だが、それがない。
ケルト戦士はあからさまに知能が足りていないので警戒に値せず。
戦士の肩に手足を縛られたまま担がれているシロウは、無理に身じ
ろぎしてズボンのポケットに指を引っ掻け、そこから赤いパンドナ
を取り出し地面に落とした。後続の戦士達はそれを平然と踏み、そ
のまま歩いていく。
—紅ってのは目立つ色だ。今もこっちを見てながら俺が落とし
たものにも気つくだろう。それと同色の布を持って春が彷徨けば、
ようど察しの悪いサーヴァントでない限り俺がマスターである事は伝わるはず。お前に向こうから触してくるだろう。

沖田は気配を断っているが、痕跡を残して『誰かがそこにいる』と示す事は出来る。目敏くその痕跡、例えばこれ見よがしに沖田が足跡などを残し、それを発見してもらえばいい。

『分かったぞ。』にしても、よく咄嗟にこんな恵 вместо shareholders of the enterprise}}の察しをせにゃ。

 Lansロットとアキレウスを警戒させる箇を、恐らく地形などを利用して即興で作っているであろう弓兵には負けるだろうが。その手のプロフェッショナルを『人類愛』は熱望しております。熱い職場があなたを待っていますよとオリジナル笑顔で告げたかった。

沖田が離れていく。といえども、マスターであるシロウにその気配は掴めないのである。

向こうのラマーさんから本当に接触してきましたよ！（ナイスだ。）が読める手合いに実に応かる。それで相手は誰だったか。ロビンフッド！なるほどＥ、なるほど。……いいじゃないか。ああ、ラマーにシーサの事は伝えてあるか？
暗剣忍ばす試逆の儀
（中）

物として扱われ、物として運ばれる。それは人間の尊厳と体力を著しく奪い去るものだった。

排泄物は垂れ流し。食事という名の単なる栄養補給は作業的。城に運び込まれ、収容所の檻に入れられたシロウは呆れてしまった。何より己の惨状に。臭いなこれは、と。不快な感覚がある。自分だけではなく、周りの人間全てが異様に臭った。寒い季節だ。暴力的な水の冷たさに、老人でなくとも体の弱い者はショック死しても不思議ではない。体の汚れと臭いを水で洗い流された後は、なんとか服だけは確保するも収容所に押し込まれてしも。

誰しもが飢えている。渇いている。病んでいる。絶望してヘタリ込まれていた。死を明確に意識しているのだろう。この檻から連れ出される檻の中には、所狭しと詰め込まれ懸命の辱しめを受ける人々がいる。
「空を広げたこし替えん。basenameが付けざるを得ず、まあ、なんと分かりやすく、ナイチンゲールなどが見たら一歩もしく消し移る環境である。
「この時点でシロウは悟った。彼らを連れて逃亡するのは絶対に不可能だと。何より、逃げられるだけの体力がない。敵地のどん中から逃げ出すわけがない。余りにも甘く、希望的観測が過ぎた。」
「ズボンと下着は換える。臭くて敵わん。」
「・・・よし。体力は戻ったか？」
「・・・よし。体力は戻ったか？」
「おおよそ五割ほどは。BOSSはどうでしょう」
「体的な疲労はともかく、不思議と精神面は万全だな」
まるで一日中懶眠を食う後、更に一日だらだらと寝るだかのよう
なさっぱり具合である。
たっぷり五時間は休んだが、しかし堪らぬほどの臭さだ。こん
な場所に長居したくない。五時間でも充分すぎるほど長居をして
しまった気分だ。「ご苦労だった、お前も休め」
「…了解」
見張りをしていただけた兵士を慰、彼を休ませる。
マクドネルを探すも捕虜の数が多すぎると、五十人ごとに牢を
別けられているか否かの姿を確認する事は出来なかった。五十人ご
とに別けられた木製の欄はこの収容施設一杯にあり、その数は少な
く見積もっても千人は下るもの。矢鱈と広いが、別の区域がある
ところも捕虜がいるようである。
そこでもし捕虜がいるようである。
マクドネルは死んでいる可能性が高い。"予め覚悟はしておけ。アレクセイが潜入し、帰還するまでに十日
掛かっている。そして俺達がこの処に来るまでに更に六日掛かった。
既にマクドネルは死んでいる可能性が高い。"
しかし、彼らは兵士だ。骨の髪まで兵だった。故に私情を圧し殺して無言で聴いてみせる。

シロウは牢の外を覗く。ケルト戦士はざっと見ただけで百。

慶殺しは容易い。

…？ 容易い、か？ いかんな、どうにも感覚が馬鹿になってる。日夜頭がおかしくなるほどの撃破報告を受けていたせいか。

しかし…頭を振る。それよも、サーウァントが此処に詰めていいるのが意外と言えば意外だ。メイヴは己の召喚したサーウァントに全幅の信頼を置いているかもしれないが、油断や慢心と無縁の女王である。力には駄事がある。それでも足元を払われる迂闊さはない。隙とるのでは彼女が気づけない失態のみ。

見張りとして処にいるサーウァントは四騎。些か過剰な配置数だが、捕虜に扮して侵入してくるかもしれないサーウァントやマスターを、メイヴが警戒しているのだとしたら過剰でもなんでもない。寡ろ用心深さの現れであると言える。

一騎は中華風の鎧を身に纏った武将だ。堂々たる巨躯、張る武威のラスロットやアキレススに見劣りしない重圧がある。冠につける特徴的な二本の羽飾りや、手に持っている《方天画戟》から、武器を解析するまでもなく真名を察する。

姓を呂、名を布。字を奉先。一呂布だ。
場
ザー
う。
る。李
る。
り
あ
薙
d多
え
ロ
tて
壁
さ
て
の
に
で
勝
そ
で
六
刀。
こ
数
日
て
彼
に
彼
故
人
い
ト
は
戦
背
は
か、
彼
裏
物
い
で
狂戦士の線は消えた。ランスーカライダー、アーチャーだろう。
彼は裏切りの代名詞だが、メイヴに召喚されているのだ。ランス
ロットの変貌ぶりを考えると、彼がメイヴを裏切る事はないと考え
えていた方がいい。
日本の僧兵もいる。筋骨隆々にして、呂布にも劣らぬ巨躯である。
多数の刀や槍を紐で括り、それを背に負っていた。
これらまた分かり易い特徴だ。浅黒い肌で僧兵、巨躯、そして大
薙刀。念のため解析すると、真名は案の定「武蔵坊弁慶」その人で
あった。
六歳ほど同頃に疱瘡にかかり肌が黒くなった。または母がつわ
りで鉄を食べた為に、その肌が黒くなったという逸話が弁慶にはあ
る。肌が浅黒いのはその為だと思われる。

李書文だ。おおおいでの違同一人物がいるのかと呆れてしま
う。自分との戦いなしだろうか。ザーベースの李書文は何を考えたろうか。

勝手な印象だろうが、嬉々として戦いに出向くかもしれない。特異点
Fで英霊エミヤと対峙した時の事を思い出出すので、出来ればその現
場には居合わせたくないのだ。
最後の一騎……これは分からなかった。剣や槍などで武装しているが、彼には武人然とした雰囲気がない。軽薄な青年といった印象である。裕福な家に生まれた……そうだ、例えるなら成長した慎二のような印象を受けた。いや成長というより神代補正と血筋補正が入り幸せ化して進化した慎二か。私でもない奴だ。念入りに髪を刈らねばならない気がする。

……この場で事を起こすのは得策ではないか。

沈思黙考するも、結論はそれだった。

実力が高位に位置する英霊ばかりがいる区画に、いきなり連れて来られたのは不運という他ない。アレクセイが言うのはギャラハッドも見張りにいたというから、彼が見張りとして常駐しているのだとしても最低でも二区画はある事になる。だとすれば少なく見積もっても捕虜は約三千人ほど……。さてどうする。このままのんびりしておけるほど呑気な性格はしていない。状況も切迫している。メイヴは捕虜の人間を、英霊召喚のための『供物』『資源』『養分』とししている。呼び方はなんでもいいが、生け贄として引っ立てられた先にはメイヴがいると判断してよい。何故召喚主はメイヴなのだから。

選択肢は二つ。一つはそのまま捕虜が連れて行かれるのを黙って見ておき。その間に隙が出来るのは虎視眈々と待ち続ける事。
このメリットは比較的安全に作戦を実行に移せる点だ。しかし、助けられる見込みが正直全くないから、処にいる全ての人々を見捨て、自身の為に捨て石にする事でもある。デメリットは隙なんかも生まれず時間も無駄にするだけの確率も高く、行動しない事によって状況が悪化する可能性がある事だ。可能性、確率。そんな曖昧なものを頼ってばかりの選択肢。運に頼ったもので、お世辞にも幸せな人生を歩んでいたシロウが執るべきではない。この期に及んで運を頼むなど愚の骨頂。深刻化する可能性までもあるのだから尚更である。運とは巡ってくるのを待つものに非ず。自ら行動し掴み取るべきものだ。神は自らを助ける者を助く、勝利の女神は自ら動くものを愛するともいう。流れを引き寄せるにはただ只管に行動あるのみ。

つまりこの業に捕虜を引っ立てに来るケルト戦士卡ーグヴァントに、自分から生け贄に立候補して捕まりに行くべきならの許へ案内させると考えれば楽なものだ。わざわざ探し回る手間が省ける。

当然こちらにもデメリットはある。直接的な脅威としての高い何せメイヴの近くにはサー・ヴァントがいるだろうからだ。身体の警護を大量にいるサー・ヴァントにさせないはずがない。暗殺者の手合いを警戒するのは王にとって当然の措置だが。それにメイヴ自身がサー・ヴァントである。対峙したからと素直に首を差し出してくる訳でもない。確実に一波乱ある。それに万が一しくじれば、こちらが助かる見込みは限りなく零となるだろう。

今更だ。そんな鉄火場など、数え切れないほど乗り越えてきた。
部下達の肝も座っている。何も問題はない。

ケルト戦士が十人ほど牢に寄っていく。こちらではなく、反対側の檻だと。シロウは大声で喚いた。糞野郎、玉無しの狗、品性の欠片もない野蠻人、脳味噌まで筋肉で出来ているくせに群れなきゃ何出不来ない雑魚野郎ども…とにかく汚罵る。

部下達もアメリカンな罵倒話術の片鱗を覗かせる悪罵を放ち始めている。教えているブーイングまで使いこなす辺り、国家としては成立していないのが、やはりアメリカ人なんだぞそんな場合ではなだ

部下達も、叱るのをやめ、血が流れた。石頭な奴…。鼻を鳴らすと平で顔面を殴り抜かれ吹き飛んだ。腕を掴まれ、ヘッドバットを食らう。額荒く檻が開かれた。腕を掴まれて、ヘッドバッドに食らう。額光

戦士の嘲笑を浴びせる。
「やめろ」
呂布だった。戦士の腕を掴み、止めていく。
「母の大師の記述だ。無用に傷をつけるな。やめろと言って分

止められてなお離れと外れ、シロウに殴りかかるとするのをや
めない戦士に、優しい制止は一度だけと言わばかりに呂布は戦
士の腕を大きな掌で握り、そのまま握り潰した。

顔をトマトのように真っ赤にして、血管を浮かび上がらせ、骨
の砕け折れる音が生々しく響く。死体は消えた。捕虜の人間達が悲
鳴を上げて瀬の際まで一気に下がった。軽い錯乱状態だ。呂布は「
ふん」と下らなさそうに鼻を鳴らす。

母の命だ。八体ほどの重い行け。

無双の武人が他の戦士に命じる。八人か……シロウは血の混じっ
た唾を戦士に吐きつける。するとシロウは腕を掴まれ瀬の中から引
きずり出された。

他の七人も部下だ。進んで出た。連行されて行きながら、シロウ
は考えると、この数の意味はあるのか？　と。特になんで意味
もないように思えるが。
ウラを渡し、笑みを湛えながら言う。

「呂布。ソイツらは特別活きたいんだ。面倒な事をされてはかなわない。キミがついていってくれないかな？」「兄の頼みだ。『ペルセウス』の様のつもりだ。こんな魚を、この俺に見張らせたい。面倒な事がされてもちょこちょこー」「・・・ふん。貸しにしてやる」「はいはい」「・・・ペルセウスだと？」「はいはい」
暗剣忍ばす弑逆の儀（下）
そこの男は視た。
一帯を延々と。
悶々と。
慚愧の念に震えながら、歯を喰い縛ってそ の悪逆を直視し続けた。
罪もない人々。
罪のある人々。
健康な男性、女性。
病弱な男性、女性。
老いも若いも問わず、玉座の間に作られた血の沼に沈められたく人々の断末魔。
既に生け贄の数は万の桁を優に超えたう。
血の沼に沈み、溶けいく人間の阿鼻叫喚は魂を引き裂くように男に刻まれ続けた。
聖杯になみなみと注がれた女王の血が子宮と同義の沼を作り、聖杯そうのもあかる沼から精霊たちが産まれる。
その純粋な思慕と敬愛、忠誠心を植え付けたモノが産み出されるのを目撃する度に、強烈な嫌悪感と罪悪感に己の心臓を抉り出してしま
女王が強制的に座から引き出され、産み出されたサーヴァントは、
女王には決して思想的に逆らえないように魂を改竄される。しかし
それでもお恥ずかしいサーヴァントは、召喚されてしまった時点で逆らえないものに。召喚が完了していな
い故に対魔力が機能しないのに、意思の力だけで抗った者がいた。
湖の騎士とその子、穢れなき純潔の聖者もその内の一人である。
騎士王に捧げた忠誠心で抗い、湖の騎士は我が子が抗えている事を
悟り咄嗟の事態であるにも拘らず庇っていた。
それを見ていた。ただ、見ていただけだった。だからこそー疑
問が生じた。

——俺は、これでいいのか？

悪逆の側に荷担した。やむをえない義務がある。召喚された者と
して尽くす義務があり、いつか大義のある者に打ち倒される悪であ
らと覚悟を固めていた。
女王には逆らえない、騎士だからではなく、そうした今呪にも似
た強制力が永続的にこの身を縛っていたから。そうしてはじめて、
悪逆に手を染める事を受容していた。したしまっていた。今更なが
ら疑問を抱く己の愚昧さに吐き気が湧く。己の願望や矜持にかまけ
て思考停止していた蒙昧さに殺意が湧く。だがどうしようもない。
どうあっても逆らえないのに変わりはないのだから。
何が騎士だと自嘲する。いっそ狂えたたらどれだけ楽だっただろう。

無力感に支配された。何も出来ないのか、俺はと。こんなザマで

しかしそんな逃避は救われる。幾人もの犠牲を容認されいただいて
ながら、狂気に逃げるのはそれこそ深い咎だ。
そうして煩悶としていると、ある男が百人の人間と共に玉座の間
へ連れてこられた。女王は清楚に、無垢に呟く。あなた達の命、私
にちょうだい？ なんて。
茶髪の青年は紅い布を左の二の腕に巻いた。或いは覚悟を固める
儀式だったのかもしれない。しかしその布を見たからこそ男はハッとした。

「もしやこの者は……？あの男の兵か？」

見事があり。この特異点で、主と共に戦いを挑んだ軍勢が、
その布を身に付けていたのだ。

男が女王を糸す。何をするつもりだ、なぜ俺達を殺す！
と。女王は笑った。活きがいいわね……。強い仔を産めそうよ、と。
髪の声などまるで聞こえた素振りも。事実聞こえていないのだ。
女
王は怒りの余り理性が焼き切れ、狂奔してしまっている。途方もない
その赫怒を癒せるとしたら、彼女が最も執着した最愛の戦士しか
いないだろう。

その戦士の行方は沓として知れない。何処で眠っているのか、知

あら？ああ、デイルムッド。案山子になっていったのに漸く口を
呑むされた。これまで口を噤み、木偶に徹していたのを、ここの時
によって漸く口を開いた。

「女王メイヴィ。進言があります」

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－🏦
開いてくれたのね。私、嬉しいわよ。

フィオナ騎士団の一番槍、輝くポディルミッド・オディナ。彼が口を開き、声を発すると、くろりと振り向いたメイヴは心底嬉しそうに表情を綻ばせた。

清潔な騎士として高い実力を持つ彼は、メイヴにとっては非常によましい好漢なのだ。フィンの下にいたのが勿体ないと常々思っており、彼が一度帰還して以来ずっと側に置いていた。

しかしこれまでの間、声を失ったかのように淡々と命令をこなし、決して自分からは何も言わなかった。メイヴはそれが非常に悲しかったのだ。ディルムッドは声が良く、体が良く、貌が良く、内面も良し。一晩相手してあげてもいいと本気で思っていたから。

清楚でありながら淫卑、男であるなら身体の芯から蕩けそうな微囁を生け贄にサーヴァントの霊基を呼び込み『構成』する素材、人間を生け贄にするサーヴァントの霊基を呼び込み『構成』する素材とする。それを実行するにしても、素材は玉石混淆。玉と石くれをいっしょくたに扱うのは些か勿体ない。ここは活きのよいものは後回し、そうでないものを優先して使うべきかと。

う？う……そうね。変わらないと思うけど……確かに私の戦士達の質が上がるのはだとしても、試してみる価値はあるかしら？それに折角ディルムッドが考えてくれただけだし、やってみるのも悪くはないわね。

え……では、この者を預かります。
デュルムッドは紅い布を身に付けた青年に当て身を食らわせ、失神させると肩に担いで玉座の間を後にした。

「俺は何をしている？」

恩を売るためか？ バカな、そんな事をする意味はない。ではな

何をするべきなのか、何がしたいのか見えてはいるはずなのに見え

て来ない。デュルムッドは唇を噛む。青年を担いで行き、宮殿内の

一室に青年を運び込んだ。

ソツと彼を下ろし横たわらせると、青年はすぐに意識を取り戻した。よく訓練されている証だ。意識を失ってからの復帰が早

く。即座に逃げ起きるでもなく周囲の状況を探っている。目を閉じ

たま意識を失っているふりをする彼に、デュルムッドは重苦しく

問いを投げた。

「起きているのは分かっている。お前はあの男の……。サー・ヴァン

起きてるのを従えるマスターの部下か？」

起きてるのを悟っていたが、気絶している演技が見破られている

のを悟っていた。故に往生際悪く演技を続けはせず、起き上がり

デュルムッドと相対する。

青年は暫く沈黙していたが、気絶している演技が見破られている

 gratuites.
「俺を驚せて、こんな所に連れてきて。いきなりなんなんだ。訳がわからん。サーヴァント？マスター？なんだそれは。
俺にはさっぱりだ。
俺はディルムッド・オディナだ。誤魔化す必要はないぞ。俺はお前が身に付けたその紅い布に見えることがある」

忌々しいに貌を顰め、青年は紅い布を外し懐に隠した。
ディルムッドは自問する。何故こんな問いを投げたのか。意味がない。何かを聞き出したい訳でもないというのに。嘆息してディルムッドは彼に言った。

「…此処にいるといい。暫くは匿ってやれる」

「…その通りだ。…一つ聞く。あの男は…我々に勝てるか？」

「…勝てる。いや、《絶対に勝つ》。俺のB O S Sはお前らみたいな奴に負けるものか。」　

立ち去ろうとするディルムッドに、青年が言う。
「待て」
「なんだ？」
「なんだじゃないだろう。あんたは何がしたいんだ」
「俺を助けたな。理屈にもならない理屈だ。明らかに、あの化け物になんの利益もないってのに。あんたは、何が、したいんだ」

逃げるようにしてその場を去った。

繰り返し青年は問う。それにディルムッドは答える術を持たず、見張りはつけていない。どのみちこの城には多数のケルト戦士とサーヴァントがいる。逃げられるわけもない。しかしそんなことを計算できる精神的な余裕が彼にはなかった。

何がしたいのか。何をすべきなのか。ぐるぐる考え続ける。青年の眼がディルムッドの脳裡に焼き付け何度も彼に問い掛け続けた。

「あんたは何がしたいんだ。あんたは何がしたいんだ。あんたは何がしたいんだ。あんたは何がしたいんだ。あんたは何がしたいんだ。」

デルムッドは静かに火を点す。そうだ。今、勝つべきなのは誰だ。人間か？そうではない。戦いではない。この地に続々と産み出され続ける者達の苦しみを満くことが勝利である。犠牲にした者へ関与する資格はないのだから。
なるほど勝つべきはディルムッドか？メイヴか？違う。騎士道
とはなんだ。真に勝利するとは。…否。勝ち負けではない。尊厳
とはなんだ。真に勝利するとは。…否。勝ち負けではない。尊厳
だから何を以て尊厳を、矜持を示すかだ。そう、示すべきは－－全
ての英霊が持つ尊厳である。悪である事はいい。サーヴァントとして
果てた。－－＜これは駄目だ＞ナバラキ。ディルムッドはそれ以来メイヴ
の傍に侍り続けた。覚悟は決めた、しかもそれでも行動できるほどメイヴの縛りはぬるくない。その心境
とは裏腹に、忠実な騎士のように手出しが出来ない。武器が出せな
い、構えられない、糾弾でできない。悔しさに気が触れる。だが
涅槃のひび割れるほど気を込めて聖杯の縛りに抗おうとする。この
心腹を抉り出し、一撃を繰り出す事は出来るかという所まで来た。
ある日の事、そんなディルムッドの前に、ある男が現れた。
あくらの日。その日、そんなディルムッドの前に、ある男が現れた。
ディルムッドが言うと、男は目を見開いた。そしてそれが意味する事にすぐに彼は気づいたようだった。
「なるほど。…は、随分と思い切ったな。ディルムッド。オディナーや。…答える。何故ここ処に来た。何をしに来た。」道里で以前より良い面をしている訳だ。お前に何があったのか興味はないが…いだろ。今の前になら教えてやる。
「…るほど。…」は、随分と思い切ったな。ディルムッド。オディナーや。…答える。何故ここ処に来た。何をしに来た。」道里で以前より良い面をしている訳だ。お前に何があったのか興味はないが…いだろ。今の前になら教えてやる。
「…るほど。…」は、随分と思い切ったな。ディルムッド。オディナーや。…答える。何故ここ処に来た。何をしに来た。」道里で以前より良い面をしている訳だ。お前に何があったのか興味はないが…いだろ。今の前になら教えてやる。
「…るほど。…」は、随分と思い切ったな。ディルムッド。オディナーや。…答える。何故ここ処に来た。何をしに来た。」道里で以前より良い面をしている訳だ。お前に何があったのか興味はないが…いだろ。今の前になら教えてやる。
「…るほど。…」は、随分と思い切ったな。ディルムッド。オディナーや。…答える。何故ここ処に来た。何をしに来た。」道里で以前より良い面をしている訳だ。お前に何があったのか興味はないが…いだろ。今の前になら教えてやる。
「…るほど。…」は、随分と思い切ったな。ディルムッド。オディナーや。…答える。何故ここ処に来た。何をしに来た。」道里で以前より良い面をしている訳だ。お前に何があったのか興味はないが…いだろ。今の前になら教えてやる。
「…るほど。…」は、随分と思い切ったな。ディルムッド。オディナーや。…答える。何故ここ処に来た。何をしに来た。」道里で以前より良い面をしている訳だ。お前に何があったのか興味はないが…いだろ。今の前になら教えてやる。
「…るほど。…」は、随分と思い切ったな。ディルムッド。オディナーや。…答える。何故ここ処に来た。何をしに来た。」道里で以前より良い面をしている訳だ。お前に何があったのか興味はないが…いだろ。今の前になら教えてやる。
ああ、そうだ。
そして、
今度はお前の番だぞ。
ディルムド・オーディナ、
お前は…
…いや、《お前も》そののつもりだな。
ディルムドは、それにも。
頷いた。
男は名乗る。
「エミヤシロウだ」
「…」
「フン。
名も知らん奴と同様、お前に先手を譲ろう」
「これは…」
シロウはディルムドの胸に歪な形の短剣を押付けた。
それを掴んだディルムドは、視線を落とす。
ここの宝具はなんやすい。
目で問うと、一言。
契約を破戒するものだ
と素っ気なく伝えると、ディルムドはシロウに押され踏鞴を踏む。
その短剣を後ろに隠し、ディルムドは笑みを浮かべた。
そんな事だ、と。
こんな出来事がありと、一時。
これも余りに奇遇だった。
渡りに船だっただ。
ディルムドはメイヴの許に歩み寄り、自身の口がシロウの狙いを女王に伝えるよう。
女王に感じずるのを感じるのを愉かに感じる。
「女王、報告が」
「？なるにかしら」
「確認しましたがやはりあの者はカルデアのマスターディルムッドです。」
「なんですか……」
「貴女はやり過ぎた。貴女に喚び出された全ての英霊に代わり、刃を以て諫言とさせていただく。」
「……え？」
驚愕に目を見開く女王だった。しかし彼女はフツ、と笑う。
呪いの黄槍が、メイヴを穿っていた。
呪いに目を見開く女王だった。
驚愕に目を見開く女王だった。
驚愕に目を見開く女王だった。
この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~23029

人理を守れ、エミヤさん！
2019年05月11日 07時47分発行